公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第251集

高槻市

成合遺跡・金龍寺旧境内跡２

―高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2014年10月

公益財団法人　大阪府文化財センター

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第251集

高槻市

成合遺跡・金龍寺旧境内跡２

―高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

公益財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

大阪府北部に位置する高槻市は、市域の南部を淀川が流れ、古代山陽道や西国街道が縦断するなど、交通の要所として古くから発展してきました。特に高度経済成長以降は、大阪と京都を結ぶ利便性もあいまって、都市部のベットタウンとして開発が進んだことから人口が急増し、大きく変貌を遂げてきました。

成合遺跡は高槻市北東部のポンポン山から南に連なる安満山の西麓に位置する弥生時代の遺跡です。昭和 20 年代に土器や石器が採取されたことから、遺跡の存在が認識されていたものの、遺跡の所在する成合地区には、これまでに開発の手がおよぶことはなかったため、遺跡の具体的な内容は長らく不明でありました。

このたび新名神高速道路の建設にともない、成合遺跡ではじめての調査が実施される運びとなりました。調査では、予想された弥生時代中期後半の集落とともに、これまで全く存在が知られていなかった、古墳や奈良・平安時代の遺構や、８世紀末から９世紀初頭頃の須恵器窯などが新たに発見さるなど、多大な成果を挙げることができました。

弥生時代中期後半の集落跡は、檜尾川下流に位置する一大集落である安満遺跡と、高地性集落として著名な古曽部・芝谷遺跡の狭間の時期に成立したもので、当地域の弥生時代集落の動態を考えるうえで極めて興味深い成果を挙げています。

奈良・平安時代の調査成果としては、軒丸瓦や緑釉陶器の唾壺など、一般の集落遺跡ではあまりみられない遺物も多数出土しており、寺院や高位階層の存在を示す資料として注目されます。また須恵器窯については、周辺の付属遺構とともに詳細な窯の構造がわかる好例で、これまでの地域の歴史を塗り替える新しい知見が数多く得られました。生産された須恵器の供給先や、窯の成立の背景など、新たな課題も生まれており、こうした貴重な文化財の調査成果が有効に活用され、地域の歴史像を豊かにするための一助となることを切に願っています。

最後になりましたが、発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、多大なご支援とご協力をいただいた地元関係各位をはじめとし、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会、西日本高速道路株式会社関西支社に対して、心から感謝申し上げる次第です。

平成 26 年 10 月

公益財団法人　大阪府文化財センター
理事長　田邉　征夫

例　　言

1．本書は、大阪府高槻市成合に所在する成合遺跡および金龍寺旧境内跡の発掘調査報告書である。調査名称はそれぞれ「成合遺跡 11 － 1 」、「金龍寺旧境内跡 12 － 2 」とした。

2．発掘調査および整理作業は、西日本高速道路株式会社 関西支社の委託を受けた公益財団法人 大阪府文化財センターが実施し、平成 26 年 10 月 31 日に本書刊行を以って一連の事業を完了した。
契約名称・契約期間等については以下のとおりである。

【発掘調査】

契約名称：高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その 2

契約期間：平成 23 年 7 月 1 日～平成 25 年 2 月 20 日

現地調査期間：平成 23 年 7 月 1 日～平成 25 年 1 月 31 日

【整理作業】

契約名称：高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査遺物整理（高槻市域）

契約期間：平成 25 年 2 月 1 日～平成 26 年 10 月 31 日

遺物整理期間：平成 25 年 2 月 1 日～平成 26 年 10 月 31 日

3．現地調査および整理作業は以下の体制で実施した。

【平成 23 年度】　調査課長 江浦 洋、調整グループ長 岡本茂史
調査グループ長 岡戸哲紀、主幹（新名神総括）金光正裕
副主査 伊藤 武、技師 笹栗 拓

【平成 24 年度】　調査部長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史
調査課長 岡戸哲紀、主幹（新名神総括）金光正裕
副主査 伊藤 武、技師 笹栗 拓

【平成 25 年度】　事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史
調査課長 岡戸哲紀、調査第一課長補佐 金光正裕
副主査 伊藤 武、技師 笹栗 拓
専門調査員 片山彰一（写真）、山口誠治（保存）

【平成 26 年度】　事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史
調査課長 岡戸哲紀、調査第二課長補佐 金光正裕、技師 笹栗 拓
専門員 片山彰一（写真）、山口誠治（保存）

4．出土金属製品のＸ線撮影およびその後の保存処理は、当センターの保存室がおこなった。

5．遺物の写真撮影については中部調査事務所写真室でおこなった。

6．発掘調査および報告書の作成にあたっては、高槻市教育委員会、高槻市立埋蔵文化財調査センター、高槻市立今城塚古代歴史館、成合自治会、大阪府教育委員会文化財保護課をはじめとし、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略・現所属）

鐘ヶ江一郎・宮崎康雄（高槻市教育委員会）、高橋公一・早川圭・橋本久和・西村恵祥（高槻市立

埋蔵文化財調査センター)、森田克行・内田真雄・今西康弘（高槻市立今城塚古代歴史館)、岡本敏行・三宅正浩（大阪府教育委員会)、網伸也（近畿大学)、伊賀高広・石井清司（公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)、一瀬和夫（京都橘大学)、梅本康広（公益財団法人向日市埋蔵文化財センター)、金田明大（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)、木村理恵（橿原考古学研究所)、高橋照彦・中久保辰夫（大阪大学)、菱田哲郎（京都府立大学)、森岡秀人（芦屋市教育委員会)、森下章司（大手前大学）

7．第４章第６節「４－１区の調査成果」および第８節「５区の調査成果」で記した古墳１～３については、高槻市教育委員会により新たに“成合西王寺山１～３号墳”という遺跡名称が与えられた。同様に第４章第８節「５区の調査成果」で記した須恵器窯についても、“成合西王寺山窯”という遺跡名称が与えられており、報文中にそれぞれ併記している。

8．第４章第８節「５区の調査成果」で記した須恵器窯における地中レーダー探査と磁気探査については、現地調査に際して独立行政法人奈良文化財研究所金田明大氏よりご協力を賜った。また、金田氏からは図 98 の提供を受け、図 99 はこの図 98 を基に作成した。

9．自然科学分析については、大型植物遺体同定をパリノ・サーヴェイ株式会社、蛍光Ｘ線胎土分析と放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボにそれぞれ委託し、その成果については第６章に掲載した。

10. 自然科学分析の蛍光Ｘ線胎土分析に用いた分析試料のうち､成合琴堂窯跡出土の須恵器については、所蔵機関である高槻市教育委員会の格別のご理解とご配慮を得て、分析試料の借用･提供を受けた。

11. 本書の執筆分担については、遺構に関する記述は、基本的に調査区ごとの担当者が執筆した。このうち第４章第 11 節「８区の調査成果」については、担当した金光が作成した終了報告書を基に伊藤が執筆した。金龍寺旧境内跡１区については、担当した金光が調査区の層序や全体の所見を執筆し、個別の遺構の詳細について伊藤が補足した。遺物に関する記述は、遺物整理を主に担当した笹栗が執筆し、最終的な編集の際に遺構と遺物の報告文をまとめ、全体の調整をはかった。執筆分担の詳細については目次およびそれぞれの本文末尾に記載している。編集については、平成 25 年度は伊藤と笹栗が、平成 26 年度は笹栗がおこない、最終的に全体の調整をはかった。

12. 本調査に関わる遺物および写真・実測図等の記録類は、公益財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。単位は全てｍである。

2．発掘調査での使用測地系は世界測地系（測地成果 2000）である。遺構図に記載した座標値の単位は全てｍである。

3．本書で用いた北はいずれも平面直角座標系第Ⅵ系の座標北を示す。ちなみに成合遺跡では座標北は磁北より東へ約６° 47′、真北は更に東へ約０° 13′振っている。

4．現地調査及び整理作業は、平成 22 年度に改訂された財団法人 大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』に準拠しておこなった。

5．土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007 年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。なお、その記載順は記号・土色・土質とした。

例：10YR5/6 黄褐 粘土質シルト

6．遺構番号は、遺構の種類や調査区に関わらず１から通しで付し、複数の遺構の集合体である掘立柱建物や竪穴建物などについては、それとは別に遺構番号を付した。

例：「１溝」・「２土坑」・「３ピット」、「掘立柱建物１」・「竪穴建物１」など

本書中の遺構番号・種類は、基本的には現地調査段階での遺構番号をそのまま使用しているが、現地調査の段階で遺漏もあったため、整理作業の段階で新たに遺構番号を振り足したものや振り直したものがある。これらについては現地で付した最終番号以降の番号、あるいは欠番となっていた番号を振っているため、たとえ一連の遺構でも番号が続かない場合もあることを断っておく。

7．遺構図における断面位置は、図面上に「⊢　⊣」形によってその位置を示した。縮尺は各図のスケールを参照されたい。

8．遺物実測図の縮尺は、土器・瓦１／３、石製品２／３、鉄製品１／２を基本としたが、大型の遺物を中心に、遺物に即して異なる縮尺としたため、必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、スケールに明示しているのでそちらを参照されたい。

9．遺物の実測図のうち、弥生土器・土師器の断面を白抜きに、須恵器・黒色土器の断面を黒塗りとし、施釉陶器・瓦・土製品（須恵質を除く）・石器・石製品の断面にはアミカケを施した。黒色土器については、内外面の黒色化している部分にアミカケを施した。

10. 写真図版中の遺物番号は挿図の遺物番号と対応する。また遺物写真のうち、俯瞰撮影を行ない縮尺率が判明するものについては、写真の左隅に縮尺率を記した。

11. 引用文献、参考文献、註は各節の末尾に記した。出土した土器の時期区分と器種分類については、主に以下の文献を参考に記述し、これ以外を参考にした場合は報文中にその旨を記している。

森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ　木耳社

田辺昭三 1983『須恵器大成』角川書店

西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社

巽淳一郎 1991「第Ⅵ章考察 ２土器」『平城宮発掘調査報告書ＸⅢ』奈良文化財研究所学報 第 40 冊　奈良国立文化財研究所

神野恵 2005「第３章出土遺物 ３－１－３土器類」『平城宮発掘調査報告ＸⅥ 兵部省地区調査』奈良文化財研究所学報 第 70 冊　独立行政法人奈良文化財研究所

小森俊寛・堀内明博・上村憲章・吉村正親・平尾政幸 1994「第２章 土器と陶磁器」(財) 古代学協会編『平安京提要』角川書店

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

目　　次

巻頭図版
序文・例言・凡例

第１章　調査に至る経緯と経過 …… （伊藤） …… 1
　第１節　調査に至る経緯と周辺調査 …… 1
　第２節　調査成果の公開 …… 3

第２章　地理的・歴史的環境 …… （伊藤） …… 6
　第１節　自然・地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　調査の方法 …… （伊藤） …… 12
　第１節　調査区 …… 12
　第２節　発掘作業の具体 …… 16
　第３節　整理作業 …… 22

第４章　成合遺跡の調査成果 …… 23
　第１節　トレンチ調査 …… （伊藤・笹栗） …… 23
　第２節　１区の調査成果 …… （遺構：伊藤、層序・遺物：笹栗） …… 32
　第３節　２区の調査成果 …… （遺構：伊藤、遺物：笹栗） …… 36
　第４節　３－１区の調査成果 …… （遺構：伊藤、遺物：笹栗） …… 64
　第５節　３－２区の調査成果 …… （遺構：伊藤、遺物：笹栗） …… 81
　第６節　４－１区の調査成果 …… （遺構：伊藤、遺物：笹栗） …… 92
　第７節　４－２区の調査成果 …… （笹栗） …… 116
　第８節　５区の調査成果 …… （笹栗） …… 134
　第９節　６区の調査成果 …… （遺構：伊藤、遺物：笹栗） …… 198
　第 10 節　７区の調査成果 …… （伊藤） …… 200
　第 11 節　８区の調査成果 …… （遺構：金光・伊藤、遺物：笹栗） …… 201
　第 12 節　９区の調査成果 …… （笹栗） …… 210
　第 13 節　10 区の調査成果 …… （笹栗） …… 215

第５章　金龍寺旧境内跡の調査成果 …… 229
第１節　１区の調査成果 …… （遺構：金光・伊藤、遺物：笹栗）…… 229
第２節　２区の調査成果 …… （遺構：伊藤、遺物：笹栗）…… 241

第６章　自然科学分析 …… 246
第１節　はじめに …… （笹栗）…… 246
第２節　出土炭化材樹種同定分析（大型植物遺体同定分析）
（パリノ・サーヴェイ株式会社）…… 247
第３節　須恵器の胎土分析（蛍光Ｘ線分析）…… （株式会社パレオ・ラボ）…… 253
第４節　放射性炭素年代測定（加速器質量分析法（ＡＭＳ法））
（株式会社パレオ・ラボ）…… 260

第７章　総　括 …… （笹栗・伊藤）…… 264

第１節　古代の遺構と遺物 …… （笹栗・伊藤）…… 264
第２節　須恵器窯（成合西王寺山窯跡）の検討 …… （笹栗）…… 274
第３節　古墳（成合西王寺山１・２・３号墳）の位置づけ …… （笹栗）…… 284
第４節　弥生時代の遺構と遺物 …… （笹栗・伊藤）…… 286
第５節　まとめ …… （笹栗）…… 296

遺物観察表 …… 301

巻頭図版目次

巻頭図版１　成合西王寺山窯跡

巻頭図版２　上：須恵器窯と周辺付属遺構の全景
　　下：窯体断ち割り断面

巻頭図版３　上：成合西王寺山窯跡出土須恵器集合
　　下：「刀」刻印・刻書須恵器

巻頭原色４　上：４－１区竪穴建物・段状遺構
　　中：２・３－１区竪穴建物
　　左下：ヒスイ製勾玉
　　右下：段状遺構４出土石鏃

表　目　次

表１　４－１区頂部ピット一覧…… 96

表２　450 溝・451 くぼみ・452 平坦面
　　断面層序対応関係…… 151

表３　成合西王寺山窯跡出土須恵器の
　　器種組成…… 157

表４　大型植物遺体同定結果…… 248

表５　分析対象一覧…… 255

表６　蛍光Ｘ線分析結果（mass%）…… 257

表７　測定試料と処理方法…… 260

表８　放射性炭素年代測定
　　および暦年較正の結果…… 261

表９　焼土坑一覧…… 269

表 10　成合西王寺山窯跡出土須恵器の
　　器種ごとの焼成比率…… 277

表 11　８世紀後半から９世紀中頃の
　　各須恵器窯の器種組成一覧…… 279

表 12　竪穴建物・段状遺構一覧 …… 291

写　真　目　次

写真１　現地説明会資料と説明会風景…… 4

写真２　調査地周辺の地形…… 7

写真３　調査地周辺の遺跡…… 10

写真４　現場作業風景…… 20

写真５　整理作業風景…… 21

写真６　炭化材（１）…… 250

写真７　炭化材（２）…… 251

写真８　蛍光Ｘ線分析遺物…… 255

写真９　岩手県御所野遺跡土屋根住居…… 292

挿　図　目　次

図１　新名神高速道路路線略図…… 1

図２　周辺調査位置図…… 2

図３　調査地周辺の遺跡分布図…… 8

図４　調査区配置図…… 13

図５　地区割り方法…… 18

図６　調査区の地区割り図…… 19

図７　11－１トレンチ出土遺物 …… 23

図８　11－１・11－７トレンチ地層断面図…… 24

図９　11－４～11－６トレンチ地層断面図 … 26

図 10　12－４トレンチ出土遺物…… 27

図 11　12－１・12－２トレンチ地層断面図 … 28

図 12　12－４トレンチ地層断面図…… 29

図 13　12－３・12－５～12－７トレンチ
　　地層断面図…… 30

図 14　1区検出遺構全体平面図 …… 32
図 15　1区地層断面図 …… 33
図 16　1区遺物包含層出土遺物 …… 34
図 17　1区遺構平面・断面図 …… 35
図 18　2区検出遺構全体平面図 …… 37
図 19　2区地層断面図 …… 38
図 20　2区1層上面出土遺物 …… 39
図 21　2区1層出土遺物 …… 40
図 22　2区1層～1層下面出土遺物 …… 41
図 23　2区2層および谷筋ほか出土遺物 …… 42
図 24　29 溝・8土坑 出土遺物
（周辺部出土も含む）…… 44
図 25　掘立柱建物1・2平面・断面図 …… 45
図 26　掘立柱建物1・2出土遺物 …… 46
図 27　2区古代の遺構平面・断面図 …… 47
図 28　2区古代の遺構出土遺物 …… 48
図 29　62 土坑出土遺物…… 49
図 30　21・22・23 土坑、29 溝平面・断面図… 51
図 31　21・22・23 土坑出土遺物 …… 52
図 32　土器集中部（6土坑）出土遺物 …… 53
図 33　竪穴建物1平面・断面図 …… 55
図 34　竪穴建物2平面・断面図 …… 56
図 35　竪穴建物3平面・断面図 …… 57
図 36　竪穴建物3埋土炭・焼土検出状況図 …… 58
図 37　2区弥生時代の遺構平面・断面図 …… 60
図 38　2区弥生時代の遺構出土遺物 …… 61
図 39　3－1区検出遺構全体平面図 …… 65
図 40　3－1・3－2区地層断面図 …… 66
図 41　3－1区1層出土遺物 …… 67
図 42　3－1区古代の遺構平面・断面図 …… 68
図 43　3－1区古代の遺構出土遺物 …… 69
図 44　竪穴建物5平面・断面図 …… 72
図 45　竪穴建物6平面・断面図 …… 73
図 46　竪穴建物7平面・断面図 …… 74
図 47　3－1区竪穴建物出土遺物 …… 75
図 48　195 土坑平面・断面図 …… 76
図 49　3－1区弥生時代の遺構
平面・断面図（1）…… 77
図 50　3－1区弥生時代の遺構
平面・断面図（2）…… 78
図 51　3－1区弥生時代の遺構
出土遺物（1）…… 79
図 52　3－1区弥生時代の遺構
出土遺物（2）…… 80
図 53　3－2区1層出土遺物 …… 81
図 54　3－2区検出遺構全体平面図 …… 82
図 55　360 石列平面・断面図 …… 83
図 56　360 石列出土遺物 …… 84
図 57　3－2区調査区南東部検出遺構
平面・断面図…… 85
図 58　3－2区調査区北半部検出遺構
平面・断面図…… 86
図 59　竪穴建物9平面・断面図 …… 87
図 60　竪穴建物 10 平面・断面図 …… 89
図 61　3－2区遺構出土遺物 …… 90
図 62　4－1区1層出土遺物 …… 92
図 63　4－1区検出遺構全体平面図 …… 93
図 64　2・3－1・4－1区地層断面図 …… 94
図 65　4－1区古代の遺構平面・断面図 …… 95
図 66　4－1区頂部ピット平面・断面図 …… 96
図 67　古墳2・3平面図 …… 97
図 68　古墳2・3、385 土坑断面図 …… 98
図 69　古墳2・3出土遺物 …… 99
図 70　竪穴建物 11 平面・断面図 …… 100
図 71　竪穴建物 11 出土遺物 …… 101
図 72　段状遺構1平面・断面図
および出土遺物…… 102
図 73　段状遺構2・3平面・断面図 …… 104
図 74　段状遺構2出土遺物 …… 105
図 75　段状遺構4平面・断面図 …… 107
図 76　段状遺構4出土遺物 …… 108
図 77　段状遺構5、409 土坑
平面・断面図および出土遺物…… 109
図 78　段状遺構6平面・断面図 …… 110
図 79　段状遺構7、403・404・407 土坑
平面・断面図…… 112

図 80　段状遺構６・７および周辺出土遺物 … 113
図 81　393 土坑平面・断面図
および出土遺物…… 114
図 82　４－２区第１面検出遺構全体平面図 … 116
図 83　４－２区地層断面図 …… 117
図 84　４－２区遺物包含層出土遺物 …… 119
図 85　４－２区第１面検出遺構
平面・断面図…… 121
図 86　４－２区第２・３面検出遺構
全体平面図…… 122
図 87　４－２区第２面検出土坑
平面・断面図…… 123
図 88　472 土坑および周辺出土遺物 …… 124
図 89　４－２区第２面検出遺構
平面・断面図…… 125
図 90　竪穴建物４平面・断面図
および出土遺物…… 126
図 91　竪穴建物 13・14・15 平面・断面図 … 127
図 92　竪穴建物 13・14・15 内ピット
断面図…… 129
図 93　竪穴建物 13・14・15 出土遺物 …… 130
図 94　474 土坑平面・断面図
および出土遺物…… 131
図 95　99・485 落ち込み断面図
および出土遺物…… 133
図 96　５区検出遺構全体平面図 …… 134
図 97　須恵器窯調査前地形測量図 …… 135
図 98　須恵器窯の探査結果 …… 136
図 99　５区検出遺構と地中レーダー探査・
磁気探査結果の合成…… 137
図 100　須恵器窯の調査グリット配置図 …… 138
図 101　須恵器窯および周辺遺構平面図 …… 139
図 102　須恵器窯三次元立体図 …… 140
図 103　窯体縦断面図 …… 141・142
図 104　窯体横断面図 …… 143
図 105　窯体内最終床面遺物出土状況図 …… 144
図 106　窯体内最終床面下層遺物
出土状況図…… 145
図 107　窯体内最終床面検出状況図 …… 146
図 108　焚口部左側壁石組側壁
平面・断面図…… 147
図 109　窯体掘方および窯体構築面の遺構
平面・断面図…… 148
図 110　窯体および 450 溝・452 平坦面
横断面図…… 149
図 111　451 くぼみ・452 平坦面
・453 平坦面縦断面図 …… 150
図 112　453 平坦面横断面図 …… 151
図 113　灰原断面図 …… 152
図 114　454・455・456 土坑、467 ピット
平面・断面図…… 153
図 115　459・460・461 ピット
平面・断面図…… 154
図 116　成合西王寺山窯跡出土須恵器の
器種一覧…… 155
図 117　窯体内出土遺物（１）　窯尻周辺 …… 159
図 118　窯体内出土遺物（２）
焼成部～焚口…… 160
図 119　窯体内出土遺物（３）
焼成部～焚口…… 161
図 120　窯体内出土遺物（４）
九輪・整地層…… 162
図 121　450 溝出土遺物 …… 163
図 122　451 くぼみ出土遺物 …… 164
図 123　452 平坦面出土遺物 …… 165
図 124　453 平坦面および 454 土坑上面
（463 灰原）出土遺物 …… 166
図 125　454 土坑出土遺物 …… 167
図 126　455・456 土坑、464 灰原
出土遺物…… 168
図 127　灰原出土遺物（１）　杯Ａ …… 169
図 128　灰原出土遺物（２）杯蓋・杯Ｂ …… 170
図 129　灰原出土遺物（３）
皿Ｃほか供膳具…… 172
図 130　灰原出土遺物（４）　壺Ｌ …… 173
図 131　灰原出土遺物（５）　壺Ｌほか …… 174

図 132　灰原出土遺物（６）　壺M …… 175
図 133　灰原出土遺物（７）　壺Nほか …… 176
図 134　灰原出土遺物（８）
短頸壺・広口壺…… 177
図 135　灰原出土遺物（９）　平瓶 …… 178
図 136　灰原出土遺物（10）　鉢類 …… 179
図 137　灰原出土遺物（11）　甕 …… 180
図 138　灰原出土遺物（12）　甕 …… 181
図 139　灰原出土遺物（13）
甕（土師器系）ほか…… 182
図 140　灰原出土遺物（14）　仏具 …… 183
図 141　灰原出土遺物（15）　硯 …… 185
図 142　灰原出土遺物（16）
「刀」刻印・刻書須恵器 …… 186
図 143　灰原出土遺物（17）　熔着須恵器 …… 187
図 144　灰原出土遺物（18）・
須恵器窯に伴わない遺物…… 188
図 145　372 土坑平面・断面図
および出土遺物…… 189
図 146　古墳１検出状況図 …… 190
図 147　古墳１横穴式石室検出状況
平面・断面図…… 191
図 148　古墳１横穴式石室 …… 192
図 149　古墳１石室掘方平面図 …… 193
図 150　古墳１石室床面遺物出土状況図 …… 194
図 151　古墳１出土遺物 …… 195
図 152　６区検出遺構全体平面図 …… 198
図 153　６区遺物包含層出土遺物 …… 199
図 154　６区検出遺構平面・断面図 …… 199
図 155　７区検出遺構全体平面図、101 土坑
平面・断面図…… 200
図 156　８区検出遺構全体平面図 …… 201
図 157　８・９区地層断面図 …… 202
図 158　８区遺物包含層出土遺物 …… 203
図 159　８区検出遺構平面・断面図 …… 205
図 160　367 土坑出土遺物 …… 206
図 161　371 土坑平面・断面図、
検出状況・断面写真および出土遺物…… 207
図 162　373 土坑、375 ピット
平面・断面図…… 209
図 163　９区検出遺構全体平面図 …… 211
図 164　９区北半緩斜面検出遺構
平面・断面図…… 212
図 165　９区尾根頂部および南半平坦面
検出遺構平面・断面図…… 213
図 166　10 区第１～３面検出遺構
全体平面図…… 216
図 167　10 区地層断面図 …… 217
図 168　10 区遺物包含層出土遺物 …… 218
図 169　10 区第２・３面検出遺構
平面・断面図（１）…… 220
図 170　10 区第２・３面検出遺構
平面・断面図（２）…… 221
図 171　281 土坑出土遺物（１）土器 …… 222
図 172　281 土坑出土遺物（２）鉄製品 …… 223
図 173　10 区第３面遺構出土遺物 …… 224
図 174　10 区第４・５面検出遺構
全体平面図…… 225
図 175　10 区第５面検出遺構平面・断面図 … 227
図 176　10 区第４・５面遺構出土遺物 …… 228
図 177　１区検出遺構全体平面図 …… 230
図 178　１区北東部平面・断面図 …… 231
図 179　１区北東部断面図 …… 232
図 180　１区南東部平面・断面図 …… 233
図 181　１区中央平面・断面図 …… 234
図 182　42 土坑、35 溝断面図 …… 235
図 183　１区検出焼土坑平面・断面図 …… 236
図 184　36・50 土坑平面・断面図 …… 237
図 185　21・22 谷平面・断面図
および遺物出土状況…… 238
図 186　１ 区遺構出土遺物 …… 239
図 187　２ 区出土遺物 …… 241
図 188　２区検出遺構全体平面図 …… 242
図 189　２区地層断面図 …… 243
図 190　２区検出遺構平面・断面図 …… 244
図 191　試料採取地点 …… 246

図 192　竪穴建物３分析試料採取位置 …… 247
図 193　蛍光Ｘ線分析遺物 …… 254
図 194　元素分布図 …… 258
図 195　暦年較正結果 …… 262
図 196　施釉陶器・仏教関連遺物・壺Ｍ …… 265
図 197　焼土坑分布図 …… 268
図 198　成合遺跡と周辺の古代
（８・９世紀）の景観 …… 273
図 199　窯体内出土須恵器の新古関係 …… 281
図 200　畿内における８世紀後半から
９世紀前半の主な須恵器窯…… 283
図 201　成合周辺の後・終末期古墳の分布 … 286
図 202　成合遺跡出土の弥生土器の新古 …… 289
図 203　前・中期の半玦状勾玉 …… 290
図 204　成合遺跡の竪穴建物と
段状遺構の配置…… 293

写真図版目次

【成合遺跡 11 － 1】
写真図版１　調査地遠景
１．調査地上空より大阪方面を望む
２．成合の集落側から遺跡が立地する丘陵を望む
〔平成 23 年夏〕
写真図版２　調査前状況
１．調査前状況（２区南半・３－１区）
〔４－１区頂部から〕
２．調査前状況（２区・３－１区・４－１区）
〔３－２区から〕
写真図版３　調査前状況
１．調査前状況（３－２区・４－１区）
〔４－１区頂部から〕
２．調査前状況（11 －１トレンチを設定した
遺跡南東側の谷筋部）〔５区裾部から〕
写真図版４　調査前状況
１．調査前状況(須恵器窯を検出した遺跡南東側斜面)
〔東から〕
２．調査前状況（４－２区）〔北東から〕
写真図版５　調査前状況
１．調査前状況（６区）〔３－２区から〕
２．調査前状況（８区・９区）〔８区から〕
写真図版６　トレンチ調査
１．11 －１トレンチ北半〔南西から〕
２．11 －１トレンチ遺構（35 土坑）検出状況
３．11 －１トレンチ南半〔北東から〕
４．11 －１トレンチ南端部
石材・五輪塔検出状況
５．11 －２トレンチ〔南東から〕
写真図版７　トレンチ調査
１．11 －４トレンチ〔北東から〕
２．11 －４トレンチ 炭・焼土検出状況
３．11 －５トレンチ〔南東から〕
４．11 －６トレンチ〔西から〕
５．11 －７トレンチ〔南西から〕
写真図版８　トレンチ調査
１．12 －４トレンチ〔南東から〕
２．12 －１トレンチ〔南西から〕
３．12 －１トレンチ遺構（101 土坑）検出状況
４．12 －２トレンチ〔北東から〕
５．12 －３トレンチ〔南西から〕
写真図版９　トレンチ調査
１．12 －６トレンチ〔東から〕
２．12 －５・12 －６トレンチ調査前状況
３．12 －５トレンチ〔北から〕
４．12 －５トレンチ 遺構（１土坑）検出状況
５．12 －７トレンチ〔西から〕
写真図版 10　１区遺構
１．１区 全景（奥にのびる調査区は 11 －７トレンチ）
〔南西から〕
２．１区 全景〔南東から〕
写真図版 11　１区遺構

1．1区 頂部先行調査箇所〔南西から〕
2．35 土坑 検出状況
3．35 土坑（奥は 106 ピット）
4．36 土坑（奥は 35 土坑）
5．102 土坑
6．103 土坑
7．104 土坑
8．105 土坑（奥は 104 土坑）
写真図版 12　2区遺構
1．2区 全景〔北から〕
2．2区 南半部全景（竪穴建物1・2）〔東から〕
写真図版 13　2区遺構
1．掘立柱建物1（手前円形の遺構は竪穴建物3）〔南から〕
2．21・22・23 土坑〔西から〕
写真図版 14　2区遺構
1．掘立柱建物2
2．81 ピット（掘立柱建物1）土器出土状況
3．31 土坑
4．32 土坑 検出状況
5．33 土坑 検出状況
6．37 土坑
7．39 土坑
8．79 土坑
写真図版 15　2区遺構
1．竪穴建物1〔南から〕
2．竪穴建物2〔東から〕
写真図版 16　2区遺構
1．竪穴建物3〔南西から〕
2．竪穴建物1 炭化材検出状況
写真図版 17　2区・3－1区遺構
1．55 土坑（竪穴建物2の中央土坑）
2．44 土坑
3．66 土坑
4．竪穴建物3 焼土・炭化材検出状況
5．3－1区 全景〔北から〕
写真図版 18　3－1区遺構
1．竪穴建物5〔南から〕
2．竪穴建物6〔南西から〕
写真図版 19　3－1区遺構
1．竪穴建物7〔東から〕
2．115 土坑 検出状況
3．116 土坑
4．117 土坑
5．122 土坑 検出状況
写真図版 20　3－1区遺構
1．123・124 土坑
2．125 土坑
3．125 土坑 土器出土状況
4．134 土坑
5．135 土坑
6．139 土坑 検出状況
7．140 土坑
8．141 土坑
写真図版 21　3－1区遺構
1．142 土坑
2．165 土坑
3．166 土坑
4．166 土坑 土器出土状況
5．175 土坑（竪穴建物5中央土坑）
6．178 土坑
7．179 土坑
8．195 土坑 焼土検出状況
写真図版 22　3－2区遺構
1．3－2区 全景〔南東から〕
2．360 石列および 350 溝〔北東から〕
写真図版 23　3－2区遺構
1．竪穴建物9〔北西から〕
2．竪穴建物 10〔南東から〕
写真図版 24　3－2区遺構
1．327 土坑
2．327 土坑 石鏃出土状況
3．328・329 土坑
4．336 土坑
5．343 土坑
6．345 土坑

7．346 土坑 土器出土状況
8．390 土坑

写真図版 25　4－1区遺構
1．4－1区 全景〔南西から〕
2．4－1区 全景（頂部背後の森は古曽部・芝谷遺跡）〔北東から〕

写真図版 26　4－1区遺構
1．段状遺構2〔北西から〕
2．竪穴建物 11〔南西から〕

写真図版 27　4－1区遺構
1．439 土坑（竪穴建物 11 の中央土坑）
2．段状遺構1
3．段状遺構2 土器出土状況
4．段状遺構3
5．段状遺構4
6．段状遺構4 石器出土状況
7．段状遺構4 石器出土状況
8．段状遺構4 石器出土状況

写真図版 28　4－1区遺構
1．段状遺構5
2．段状遺構6
3．段状遺構6 土器出土状況
4．段状遺構7・407 土坑
5．403 土坑
6．404 土坑
7．388 溝・389 土坑
8．393 土坑 土器出土状況

写真図版 29　4－1区遺構
1．古墳2（奥は古墳3）〔南西から〕
2．古墳3
3．394 土坑 検出状況
4．396 土坑 検出状況
5．428 ～ 434 ピット 検出状況

写真図版 30　4－2区遺構
1．4－2区（11－3トレンチ）第1面全景〔北北東から〕
2．4－2区 第1面全景〔北東から〕
3．85 土坑
4．88 土坑 検出状況
5．89 土坑
6．470 土坑
7．471 土坑
8．473 土坑

写真図版 31　4－2区遺構
1．4－2区 第2・3面全景〔北東から〕
2．4－2区（11－3トレンチ）第2・3面全景〔北東から〕
3．472 土坑 土器出土状況
4．ピット検出状況
5．479 土坑

写真図版 32　4－2区遺構
1．竪穴建物 13・14・15〔北東から〕
2．竪穴建物 14 土器出土状況
3．竪穴建物4
4．474 土坑 土器出土状況
5．99・485 落ち込み

写真図版 33　5区遺構
1．古墳1 石室全景〔南から〕
2．古墳1 石室全景〔奥壁側から〕
3．古墳1 遺物出土状況（奥壁側）
4．古墳1 遺物出土状況（開口部側）

写真図版 34　5区遺構
1．須恵器窯 検出状況〔南東から〕
2．須恵器窯 天井部崩落状況
3．須恵器窯 天井部崩落状況（横断面）
4．須恵器窯 天井部崩落状況（縦断面）

写真図版 35　5区遺構
1．須恵器窯 最終床面遺物出土状況〔南東から〕

写真図版 36　5区遺構
1．須恵器転用焼台検出状況（排煙口付近）
2．須恵器窯 最終床面検出状況〔南東から〕
3．窯壁に残るナデ付け痕跡（焼成部左側壁）
4．石組側壁（焚口部左側壁）

写真図版 37　5区遺構
1．須恵器窯および周辺付属遺構 完掘状況〔南東から〕

２．須恵器窯および周辺付属遺構 完掘状況
〔東から〕
写真図版 38　５区遺構
１．窯体 断ち割り横断面（D-D’ 断面）
２．窯体 断ち割り横断面（E-E’ 断面）
３．前庭部 断ち割り横断面（F-F’ 断面）
４．前庭部 断ち割り縦断面
５．須恵器窯 掘方検出状況
写真図版 39　５区遺構
１．462 灰原
２．450 溝（窯体西側）断面
３．450 溝（排煙口上方）上層遺物出土状況
４．450 溝（排煙口上方）断面
５．452 土坑平坦面
６．454 土坑
７．455・456 土坑
８．372 土坑
写真図版 40　６区遺構
１．６区 全景〔東から〕
２．１土坑
３．２土坑
４．３土坑
５．４土坑
写真図版 41　７区・８区遺構
１．７区 全景〔西から〕
２．８区 全景〔北西から〕
写真図版 42　８区遺構
１．８区 全景〔南東から〕
２．361 土坑
３．362 土坑 検出状況
４．363 土坑 検出状況
５．364 土坑 検出状況
写真図版 43　８区遺構
１．365 土坑 検出状況
２．366 土坑 検出状況
３．368 土坑
４．369 土坑 検出状況
５．371 土坑〔北から〕
写真図版 44　８区・９区遺構
１．370 土坑 検出状況
２．373 土坑
３．374 土坑
４．石製品出土状況
５．９区 全景〔南から〕
写真図版 45　９区遺構
１．９区 北側斜面全景〔北西から〕
２．552 土坑 検出状況
３．557 土坑 検出状況
４．558 溝 検出状況
５．561 土坑
６．562 土坑
７．566 土坑
８．570 ピット
写真図版 46　10 区遺構
１．10 区 第２・３面検出遺構〔東から〕
２．10 区 第１面全景〔南から〕
３．200 土坑
４．281 土坑
５．281 土坑 鉄釘出土状況
写真図版 47　10 区遺構
１．10 区 第４面全景（斜面裾のピットは第３面検出）
〔南から〕
２．201 ピット
３．204 ピット
４．264 土坑
５．271 ピット
写真図版 48　10 区遺構
１．316 ピット
２．322 ピット
３．298 溝 断面
４．砂礫堆積状況（A-A’ 断面）
５．10 区 第５面全景〔南から〕
写真図版 49　トレンチ調査・１区・２区遺物
写真図版 50　２区遺物
写真図版 51　２区遺物
写真図版 52　２区遺物

写真図版 53　２区遺物
写真図版 54　３－１区遺物
写真図版 55　３－１区・３－２区遺物
写真図版 56　３－２区・４－１区遺物
写真図版 57　４－１区遺物
写真図版 58　４－１区遺物
写真図版 59　４－１区・４－２区遺物
写真図版 60　４－２区遺物
写真図版 61　４－２区・５区遺物
写真図版 62　５区遺物
写真図版 63　５区遺物
写真図版 64　５区遺物
写真図版 65　５区遺物
写真図版 66　５区遺物
写真図版 67　５区遺物
写真図版 68　５区遺物
写真図版 69　５区遺物
写真図版 70　５区遺物
写真図版 71　５区遺物
写真図版 72　５区遺物
写真図版 73　５区遺物
写真図版 74　５区遺物
写真図版 75　５区遺物
写真図版 76　５区遺物
写真図版 77　５区遺物
写真図版 78　５区遺物
写真図版 79　６区・８区遺物
写真図版 80　10 区遺物
写真図版 81　10 区遺物
写真図版 82　鉄製品Ｘ線写真
写真図版 83　鉄製品Ｘ線写真

【金龍寺旧境内跡 12 －２】
写真図版 84　１区遺構
　１．１区 全景〔西から〕
　２．42 溝周辺遺構
写真図版 85　１区遺構
　１．９土坑
　２．10 土坑 検出状況
　３．11 土坑
　４．13 土坑
　５．20 土坑 検出状況
　６．24 土坑
　７．26 土坑 検出状況
　８．27 土坑 検出状況
写真図版 86　１区遺構
　１．31 土坑
　２．36 土坑 検出状況
　３．12 溝 断面
　４．45 溝 断面
　５．17・18・19 土坑
　６．21・22 谷
　７．21 谷上層 土器出土状況
　８．22 谷 石斧出土状況
写真図版 87　１区・２区遺構
　１．１区・２区 全景〔北西から〕
　２．２区 全景〔北西から〕
写真図版 88　２区遺構
　１．１土坑
　２．２土坑 検出状況
　３．３ピット 検出状況
　４．４土坑
　５．５土坑 検出状況
　６．６土坑 検出状況
　７．７土坑 検出状況
　８．８土坑
写真図版 89　１区・２区遺物

成合西王寺山窯跡

巻頭図版２

須恵器窯と周辺付属遺構の全景

窯体断ち割り断面

上：成合西王寺山窯跡出土須恵器集合
下：「刀」刻印・刻書須恵器

巻頭図版４

上：４－１区 竪穴建物・段状遺構
中：２・３－１区 竪穴建物
下左：ヒスイ製勾玉
下右：段状遺構４出土石鏃

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と周辺調査

本調査は、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う、成合遺跡および金龍寺旧境内跡の埋蔵文化財の発掘調査である。現地での調査は、西日本高速道路株式会社関西支社の委託を受けた当センターが、平成 23 年７月１日から平成 25 年１月 31 日までの期間で実施した。

近畿自動車道名古屋神戸線は、昭和 62 年の第四次全国総合開発計画の閣議決定により構想された高速道路であり、平成元年に基本計画が公示され、平成 11 年には高槻第一 JCT から箕面 IC 間の施工命令が出された。平成 19 年にはそれまで仮称であった「第二名神高速道路」を、正式名称として「新名神高速道路」に変更し、平成 21 年には高槻第一 JCT から神戸 JCT 間の工事が着手された。円滑な交通の確保と、災害や事故また大規模改修工事の際の名神高速道路の代替路としての期待が大きく、開通に向けて建設工事が進められている（図１）。

埋蔵文化財の調査も、工事に先立ち箕面市、茨木市、高槻市など各所で実施されている。成合遺跡の周辺では（図２）、調査に先立つ直前の平成 23 年６月に、地下に存する埋蔵文化財の有無や広がり、また遺跡が確認された場合の遺構面の深さなどの情報を得るための試掘調査（成合遺跡隣接地 11 －１）が、「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その１」

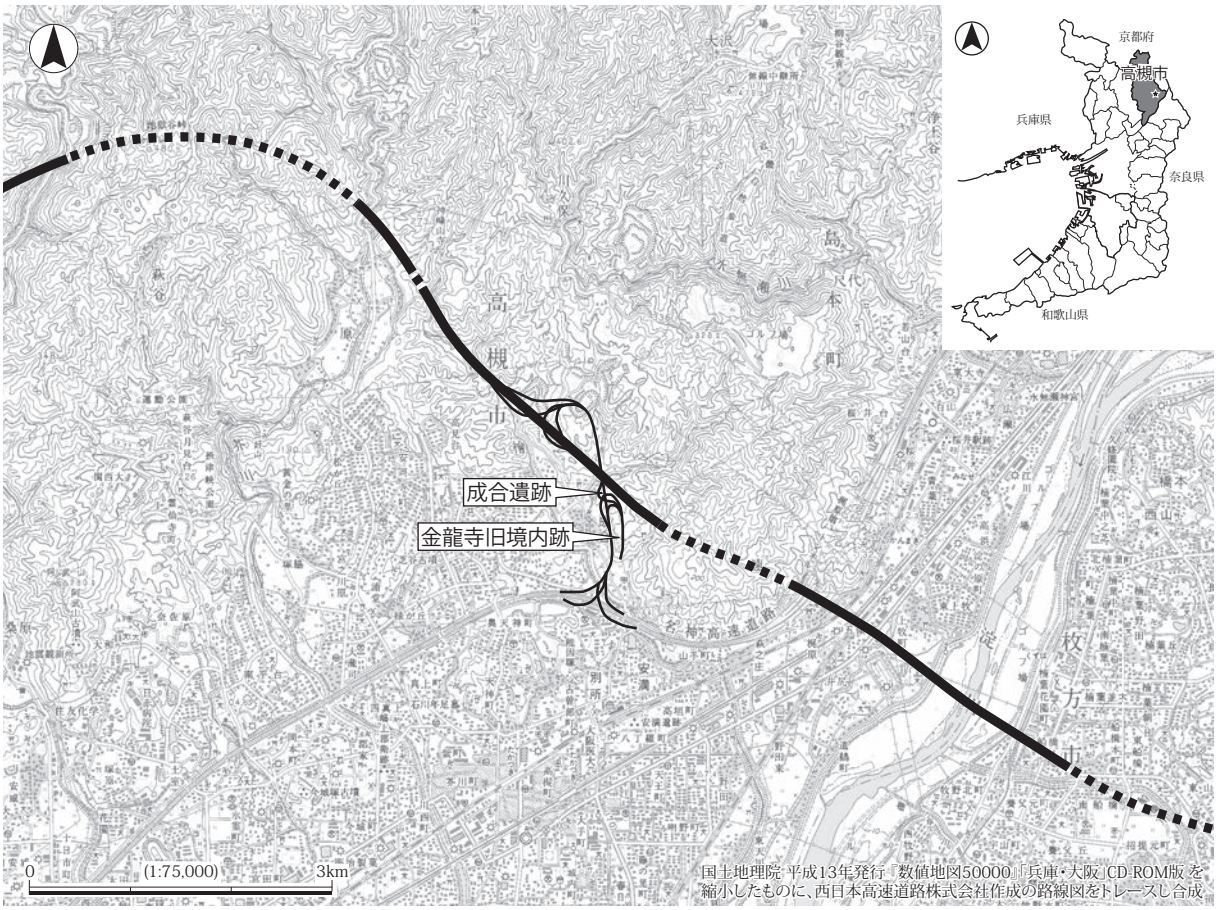


図１　新名神高速道路路線略図

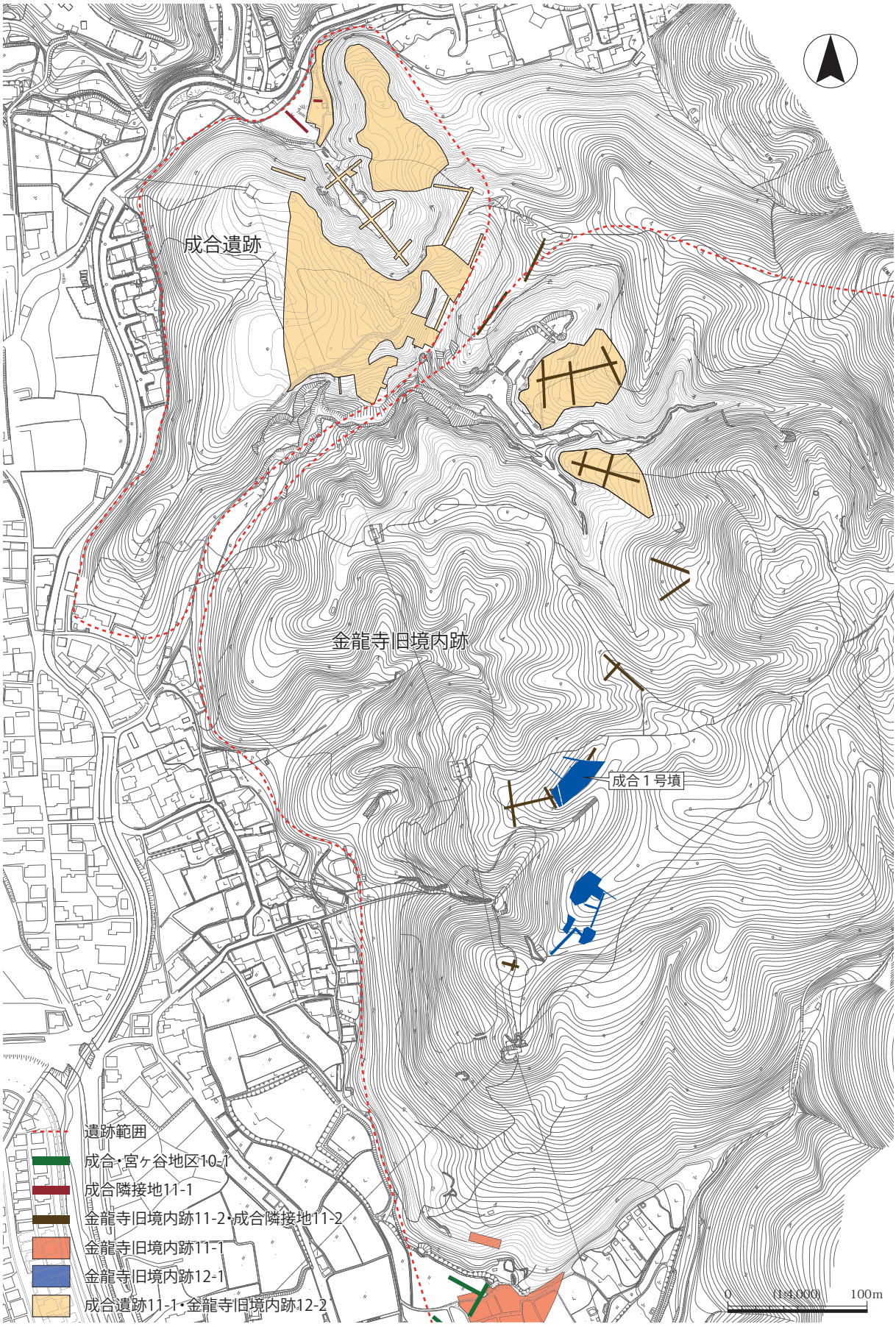

成合遺跡
金龍寺旧境内跡
成合１号墳
遺跡範囲
成合・宮ヶ谷地区10-1
成合隣接地11-1
金龍寺旧境内跡11-2・成合隣接地11-2
金龍寺旧境内跡11-1
金龍寺旧境内跡12-1
成合遺跡11-1・金龍寺旧境内跡12-2
0
1:4,000
100m

図２　周辺調査位置図

として、本格的な発掘調査を進めるための唯一の進入口となる成合遺跡北側の東檜尾川左岸で実施された。ここは成合遺跡からのびる小谷の開口部にあたっていることから、成合遺跡に関連する遺構や遺物が残存する可能性が考えられた。調査の結果、丘陵裾部に設定した調査区から、厚さ 0.1 ～ 0.15 mを測る古代から中世の時期の遺物包含層が確認され、遺跡範囲外の周辺にも遺跡が広がっていることが明らかとなった。この成果に基づき、当初は面積約 25,000 ㎡のほぼ円形に括られていた成合遺跡の範囲が、直ちに「西王寺山」と呼ばれる尾根全体を囲む広大なものへと拡大変更され、それに合わせ７月から開始した調査の範囲も周辺の尾根上に拡大することとなった。[1)]

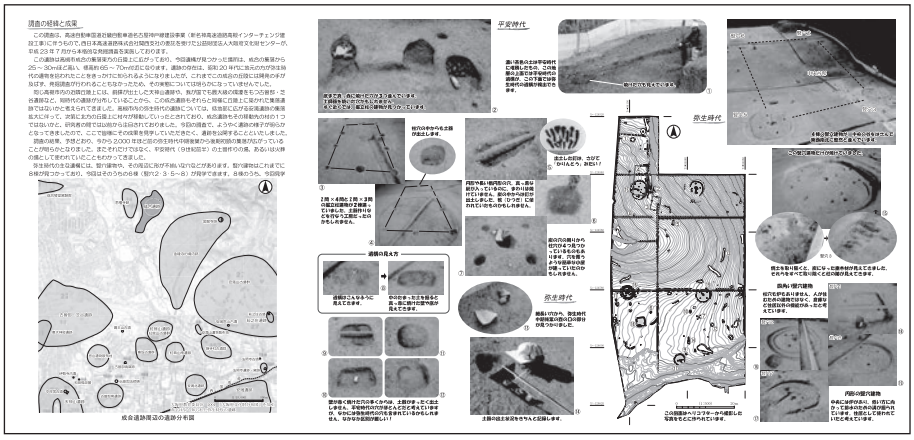
近隣では、平成 22 年８月から平成 23 年２月にかけて、高槻第二 JCT 建設予定地内で試掘調査（成合・宮ヶ谷地区 10 － 1 ）を実施し、新たに古代から中世の遺構と遺物包含層が確認され、平成 23 年６月から 10 月にかけて本格的な発掘調査（金龍寺旧境内跡 11 － 1 ）が実施されている。調査では帯飾りなど奈良時代から鎌倉・室町時代を中心とした遺物が数多く出土し、その成果については既に調査報告書が刊行されている。[2)] また成合遺跡調査期間中の平成 24 年２月から４月までの間には、金龍寺旧境内跡から成合遺跡との間の丘陵にかけて、７地区にわたって試掘ならびにトレンチ調査が実施され（金龍寺旧境内跡 11 － 2・成合遺跡隣接地 11 － 2 ）、成合遺跡に近接する舌状に張り出した２つの丘陵上で、遺物や遺構が新たに確認され、金龍寺旧境内跡と成合遺跡との間にも遺跡が広がっていることが明らかとなった。[3)] この成果をもとに高槻市は、平成 24 年６月に金龍寺旧境内跡の範囲をさらに成合遺跡のすぐ南側まで拡大変更したため、西日本高速道路株式会社との協議の結果、今回おこなっていた「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（高槻市域）その２」の調査の中で、近接する金龍寺旧境内跡の調査（金龍寺旧境内跡 12 － 2 ）も実施することとなった。なお金龍寺旧境内跡 11 － 2 のトレンチ調査では、南側の丘陵上からも遺構や遺物が確認されており、こちらについては今回の調査とは別に、周辺尾根上も含めて平成 24 年６月から９月にかけて発掘調査（金龍寺旧境内跡 12 － 1 ）が進められ、古墳時代後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳が１基発見されている。この古墳は「成合１号墳」として登録され、これについても既に調査報告書が刊行されている[4)]（図２）。

現地調査期間中は、現場作業と併行して現場詰所にて遺物の洗浄・注記、図面整理、写真整理等の基礎整理作業をおこなった。現地調査終了後の平成 25 年２月から平成 26 年７月までは、改めて「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理（高槻市域）」の契約を交わし、東大阪市所在の中部調査事務所に場所を移して、報告書刊行に向けた本格的な整理作業を進め、平成 26 年 10 月 31 日、本書刊行を以って一連の事業を終了した。

第２節　調査成果の公開

成合遺跡については、丘陵上の弥生時代の集落がある程度姿を現した調査期間中の平成 24 年４月 21 日に、遺跡の現地説明会を開催して地域の方々に発掘調査現場の公開をおこなった。[5)] 新聞各社に掲載されたこともあり、足場の悪い現場にもかかわらず当日は 255 名もの見学者が来場された。説明会では、来場の方々に遺跡というものを実感していただけるよう、調査区の中まで入っていただき、検出したままの状態の土器や遺構を間近で見ていただいた。また土器に自由に触って観察していただけるよう、須恵器窯出土の土器を詰めたコンテナを数ヶ所に設置し、さらに土の付いた出土したままの状態の土器を洗っていただける体験コーナーも設けた。大阪府立弥生文化博物館からは遺物接合パズルによる

現地説明会資料（表・裏）



遺構見学風景

遺物見学風景

遺構見学風景

土器洗い体験コーナーの風景

写真１　現地説明会資料と説明会風景

接合体験コーナーも設営していただき、まさに遺跡調査を体験できる現地説明会となった。普段触ることのできない土器に触ることができ、来場された方々からは「遺物に触れたのは初めてです。」・「多くの須恵器に触れることができて満足です。」との声が寄せられ、好評を得ることができた（写真１）。

この現地説明会では、出土したヒスイ勾玉に大きな関心が寄せられたことから、大阪府立弥生文化博物館にて、『高槻市成合遺跡－丘陵上の集落とヒスイ勾玉－』と題したスポット展示を、平成 24 年７月 14 日から８月２日までの期間で開催した。このスポット展示では、ヒスイ勾玉や弥生土器を公開するとともに、比較資料として当センターが過去に調査をおこなった寝屋川市太秦遺跡のヒスイ勾玉も併せて展示をしてた。

さらに調査期間中の平成 24 年 10 月 29 日には、高槻市生涯学習センターの歴史講座『最新考古学事情 2012』にて、地元市民を対象に今回の調査成果について講演をおこなった。[6)] 整理期間中の平成 25 年９月 28 日には、大阪府立近つ飛鳥博物館の土曜講座において、平安時代の須恵器窯の調査成果を中心に講演をおこなった。[7)] さらに平成 26 年４月８日から４月 29 日までの期間には、大阪府立弥生文化博物館において、ふたたびスポット展示を開催した。このスポット展示では、須恵器窯の調査成果を公開するとともに、展示期間中の平成 26 年４月 19 日には、『成合須恵器窯の系譜』と題したシンポジウムを開催し、[8)] 好評を得た。また、平成 26 年６月 28 日には、近畿弥生の会主催の研究集会にて、主に研究者を対象に今回の調査成果を報告している。[9)]

【註】

１）大阪府教育委員会 2012『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』16

２）金光正裕 2012『金龍寺旧境内跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 224 集（公財）大阪府文化財センター

３）大阪府教育委員会 2013『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』17

４）廣瀬時習 2013『成合１号墳』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 234 集（公財）大阪府文化財センター

５）公益財団法人大阪府文化財センター 2012『成合遺跡の調査』現地説明会資料

６）笹栗拓 2012「成合遺跡－山の上の弥生集落とヒスイ勾玉」高槻市生涯学習センター歴史講座『最新考古学事情 2012』高槻市生涯学習センター

７）笹栗拓 2013「高槻市成合遺跡の発掘調査－平安時代の須恵器窯を掘る－」土曜講座資料 大阪府立近つ飛鳥博物館

８）大阪府立弥生文化博物館編 2014『成合須恵器窯の系譜』スポット展示関連企画ミニシンポジウム資料

９）笹栗拓 2014「高槻市成合遺跡の調査－中期末の丘陵上の集落」『近畿弥生の会第 17 回集会和歌山場所発表要旨集』近畿弥生の会

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　自然・地理的環境

成合遺跡が所在する高槻市は、大阪府北東部の、大阪・京都両大都市のほぼ中間に位置し、北は京都府亀岡市・京都市西京区、東は大阪府島本町・枚方市、南は寝屋川市・摂津市、西は茨木市と接している。その市域南半部にはかつての西国街道に沿って、ＪＲ東海道本線や東海道新幹線、阪急京都線などの鉄道や、名神高速道路や国道 171 号など多くの交通網が集中する。

市域は東西幅約 10km に対して、南北幅は約 22km と広く、菱形を南北に引き伸ばしたような形を呈し、その北半部には丹波高地に連なる標高 200 m以上の北摂山地が、南半部には大阪平野の北部を形成する標高 10 m以下の淀川低地が広がっている。中央部には大阪層群からなる標高 30 ～ 200 mの高槻丘陵があり、その南端部には舌状に標高 10 ～ 30 mの富田台地が張り出している。この高槻丘陵は昭和 30 年代以降に宅地開発が進み、日吉台・安岡寺・南平台などの住宅地が広がっている。北摂山地からは中央を芥川が、その東を檜尾川が南流し、枚方市・寝屋川市との境を流れる淀川に流入する。それら河川の中流域には原盆地や服部谷、成合谷といった谷底平野が開け、北摂山地・高槻丘陵を抜けた山麓には小規模な扇状地を形成している（写真２）。このように北の北摂山地から南の淀川低地に至る起伏に富んだ自然環境や、古代の難波宮と平安京との中間点に位置するという地理的な環境は、この地域の歴史の発展に大きな影響を与えることとなった。

今回調査をおこなった成合遺跡・金龍寺旧境内跡は上記成合谷を西に見下ろす標高約 65 ～ 85 mの丘陵上に位置する。丘陵裾に広がる成合の現集落との比高差は約 25 ～ 45 mを測る。遺跡の北方には北摂山地が連なり、成合の集落が位置する成合谷のさらに西側には、山裾まで開発が進んだ住宅街が遥か茨木方面まで広がっている。晴れた日には、遺跡の南西、名神高速道路の向こうに大阪市内の高層ビル群も望むことができる。

第２節　歴史的環境

成合遺跡は、檜尾川上流の東側に広がる丘陵上に位置する遺跡で、昭和前半に弥生時代中期の土器片や石器が数点発見されたことにより、遺跡として認知されることとなった。近隣には、古曽部・芝谷遺跡や天神山遺跡、紅茸山遺跡、萩之庄遺跡など、丘陵上に弥生時代の遺跡が数多く分布しており、成合遺跡もこれらの丘陵上の遺跡のひとつと認識されていた。そのため、平野の大規模集落である安満遺跡の分村のひとつとして挙げられていたが、これまで開発の手がおよばなかったため、本格的な発掘調査が実施されておらず、その詳細については不明であった。

平野部からやや奥まった山間部に位置するため、近接して遺跡が広がっているという状況ではないが、上記のとおり、やや南方の北摂山地南端付近には、国の史跡である安満遺跡をはじめ、銅鐸が出土した天神山遺跡、環濠で囲まれた我が国でも最大級の高地性集落として知られる古曽部・芝谷遺跡などのほか、邪馬台国の女王卑弥呼との関連が指摘される銅鏡が発見された安満宮山古墳、千観再興の金龍寺跡など、学史的にも著名な遺跡が数多く広がっている（図３）。以下、周辺の遺跡に絞って簡単に紹介する。

写真２　調査地周辺の地形

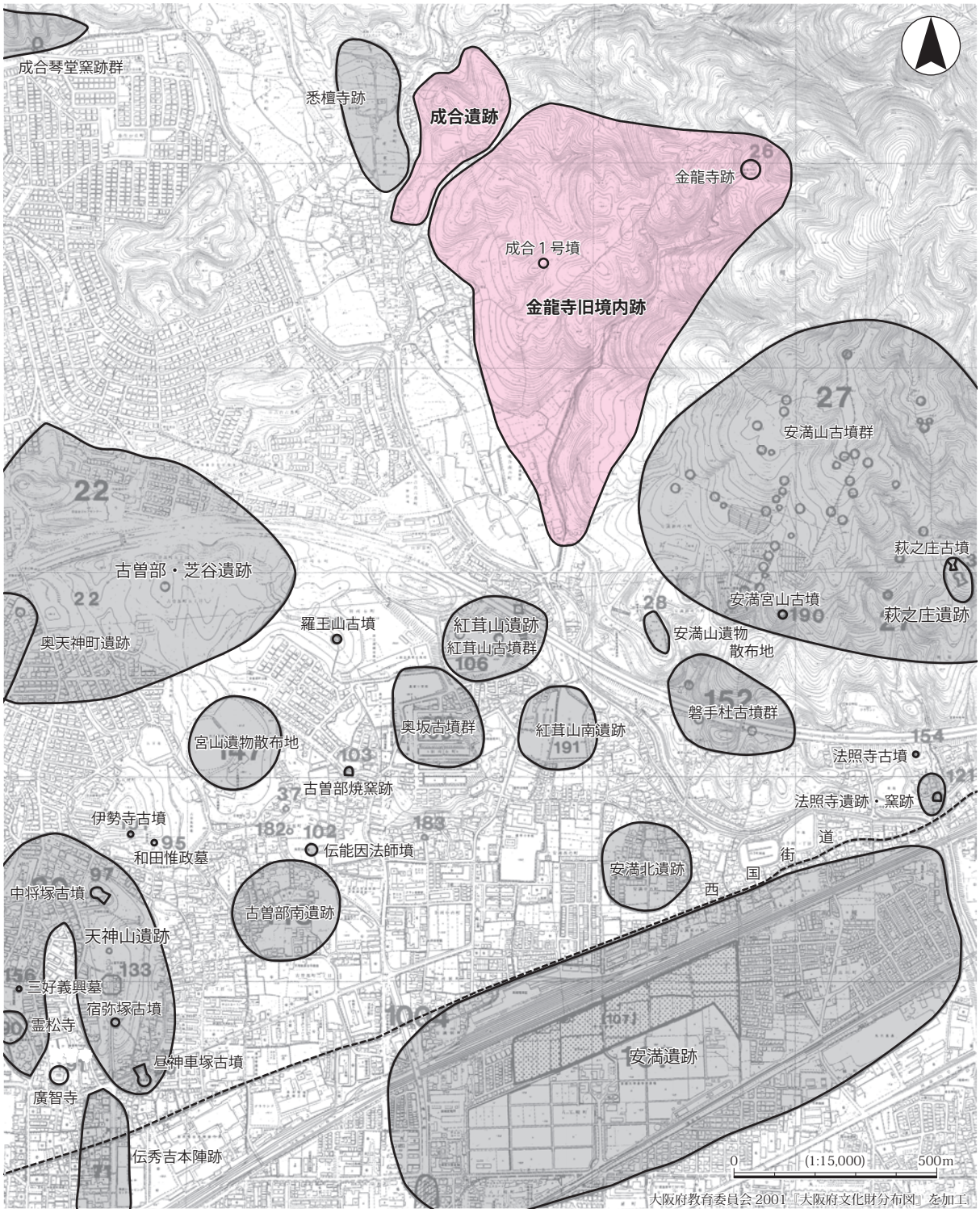


図３　調査地周辺の遺跡分布図

安満遺跡（写真３）　檜尾川が成合谷を抜け扇状地を形成したその末端、標高 10 m付近に位置する。昭和３年、京都大学農学部付属摂津農場設置に際して弥生土器や石器が多数発見され、その弥生土器の検討から、弥生文化が北部九州から畿内へ流入したとはじめて指摘された学史上著名な遺跡である。その後の調査によって、縄文時代晩期から、弥生時代・古墳時代を中心として、中世まで連綿と続く複合遺跡であることが判明した。特に弥生時代の集落は、これまでの調査によって、住居群や井戸からなる居住域、水田・用水路からなる生産域、方形周溝墓を中心とした墓域の３つの要素で構成された、東西

約 1.4km、南北約 600 mの範囲に広がる大規模なものであることが明らかとなり、その一部は平成 11 年に国の史跡に指定されている。弥生時代前期には遺跡中央西寄りに２重の環濠によって囲まれた居住域が築かれ、その南側に生産域と東側に墓域がそれぞれ形成される。中期前半になると居住域と東方の墓域が拡大し、墓域には 100 基以上の方形周溝墓が築かれる。中期後半にはそれまでの居住域の北側にも新たに居住域が形成され、それに伴って墓域も居住域東側から西側へと移動する。後期前半には一時的に集落が衰退するが、後期後半になると遺跡の東部のそれまで墓域であった場所に新たに居住域や生産域が形成されており、弥生時代を通じて５段階の変遷が辿れることが明らかにされている。出土した遺物も土器以外にも、赤漆塗りの櫛やかんざし、鍬や鋤などの農耕具類をはじめとした木製品が多く出土し、非常に遺存状態のよい木棺もみつかっている。また石器については、黒色の粘板岩をもちいた石包丁や石斧の未成品が多量に出土していることから、石器製作がおこなわれ製品は周辺集落へ供給されていたと考えられている。

天神山遺跡　安満遺跡の西方の標高 30 ～ 50 mの丘陵上に位置する。弥生時代中期以降、安満遺跡を見下ろす北側の丘陵上には、移動するように次々と大規模な高地性集落が出現するが、この遺跡もそのひとつである。昭和 30・32 年の調査で、中期初頭から末までの遺物が数多く出土し、７基の竪穴建物と方形周溝墓とみられる遺構などが検出されている。特徴的な遺物として分銅形土製品がある。なお昭和 27 年には、遺跡に挟まれた中央の丘陵上から、高さ 58.6cm の突線鈕２式に分類される袈裟襷文銅鐸が発見されている。また、ロサンゼルス・カウンティ美術館所蔵の突線鈕４式の「伝清水村出土の銅鐸」も、この天神山遺跡出土のものではないかとされている。

古曽部・芝谷遺跡（写真３）　金龍寺旧境内跡の西側、標高 60 ～ 100 mの丘陵上に位置する。もとは古曽部遺跡・芝谷遺跡・奥天神遺跡の３つの個別の遺跡として知られていたが、平成３・４年度に実施された古曽部遺跡の調査成果から、一連の遺跡であることが判明した。このときの調査で、集落を取り囲むように築かれた大規模な環濠が検出され、我が国でも最大規模の高地性集落であることが明らかとなった。遺跡は弥生時代後期初頭頃に出現するが、非常に短い期間しか存続せず、後期後半には突然姿を消しており、出現時期が安満遺跡の衰退期に対応していることから、安満遺跡から居住域の移動があったのではないかと考えられている。丘陵上からは約 80 棟もの竪穴建物が発見されており、中には米や豆類を貯蔵した土器が残ったままの状態で焼失したものもみつかっている。出土土器の中には琵琶湖周辺や瀬戸内地方から運ばれたものも含まれており、他地域との広い交流が窺える。

紅茸山遺跡・紅茸山古墳群　当遺跡とは檜尾川を挟んだ右岸に位置する。標高 35 ～ 50 mの丘陵上の遺跡で、弥生時代の集落のほか、古墳群や奈良時代の集落なども確認されている。弥生時代の集落は、上記の古曽部・芝谷遺跡が終息した後の後期後半に営まれたもので、18 基の竪穴建物と掘立柱の倉庫からなる。円形に近い隅丸方形の竪穴建物１棟がまずつくられ、その後、２棟を１単位とする方形の竪穴建物が２群の単位に分化し、それぞれ４回程度の移り変わりをしていたことが想定されている。またこの竪穴建物と重複するように、５基の方形周溝墓も検出されている。古墳時代には、前期から後期までを含む 17 基の古墳と 23 基の土坑墓が築かれている。墳形は円墳と方墳があり、円墳のうち２基は横穴式石室を埋葬施設とし、その他は全て木棺直葬である。このうち３つの埋葬施設をもつＣ２号墳からは、２面の内行花文鏡や石釧など豊富な副葬品がみつかり、またＣ３号墳の墳丘からは形象埴輪や円筒埴輪が発見されている。奈良時代の遺構としては、２群に分かれる９棟の掘立柱建物や井戸、土坑墓などがみつかっている。

安満遺跡が広がる水田と背後の安満山
（ビニールハウスは京都大学農学部の農場）

古曽部・芝谷遺跡遠景（成合遺跡より）

安満宮山古墳

金龍寺跡

写真３　調査地周辺の遺跡

萩之庄遺跡　安満遺跡を見下ろす見晴らしのよい安満山の尾根上に位置する。弥生時代中期末から後期の焼失した竪穴建物がみつかっており、安満遺跡の見張り場的な役割を果たしていたと考えられている。

安満宮山古墳（写真３）　調査地の東側に位置する安満山の山中に築かれた安満山古墳群のうちの一基で、安満遺跡を眼下に見下ろす南側に眺望の開けた標高 125 ｍの尾根上に位置する。墳丘は大半が削平されているが、長方形墳であったと想定され、その中央から割竹形木棺が直葬された深い木棺埋納坑が検出された。棺内には朱が塗られ、銅鏡５面のほか、鉄刀１振や鉄斧などの鉄製品、ガラス小玉 1,641 点など多数の副葬品が納められていた。５面の鏡の中には、「青龍三年」（235）銘の方格規矩鏡があり、それが同向式と呼ばれる定型化以前の平縁神獣鏡および定型の対置式の四神四獣鏡という三角縁神獣鏡では古い形式の文様構成をもつ鏡などと共に出土したことが特徴的で、特に中国の魏の年号である「青龍三年」の銘をもつ方格規矩鏡は、景初三年（239）に邪馬台国の女王卑弥呼が魏の国から賜ったとされる「銅鏡百枚」のうちの一部である可能性が高く注目されている。平成 12 年にはこれらの出土品が一括して国の重要文化財に指定され、古墳も復元整備によって発掘当時の状況がガラスシェルターの中で再現されている。

金龍寺跡（写真３）　調査地の北東側の安満山山中、標高 180 ｍ付近の小字「内供谷」にある。延暦９年（790）に参議阿部是雄なる人物が、成合の邂逅（たまさか）山に一寺を建立し安満寺と称したものを、康保元年（964）に千観が再興し、邂逅山金龍寺紫雲院と改称した。近くの古曽部に住んでいた能因法師が詠んだ「やまざとをはるの夕ぐれきてみればいりあひのかねに花ぞちりける」の歌は、この金龍寺の鐘の音を詠んだものとされる。平安時代を通じて摂津国衙から毎年一千束の稲を供給される地方官寺的な存在であり、中世には春日社領安満庄内に八反半の給免田を有していた。日想観信仰の地として、また千観・

能因ゆかりの桜の名所として親しまれたが、天正年中に高槻城主高山右近の兵火によって消失する。慶長年間には再興され、秋の松茸狩りなどかつての賑わいを取り戻したことが『摂津名所図会』から窺えるが、近代以降は無住となり、建物は昭和 58 年に完全に消失する。かつての寺観は今も山中に残る石垣等によって偲ぶことができる。

金龍寺旧境内跡　新名神高速道路建設工事に先立つ試掘調査によって新規に発見された遺跡で、平成 23 年 6 月から 10 月までの期間に当センターが丘陵裾部の発掘調査を実施している。奈良時代から鎌倉・室町時代を中心とした遺物が数多く出土しており、その中には石製の帯飾りや須恵器の硯など貴重なものも含まれていた。ただし遺構の残りは非常に悪く、金龍寺に関連するような顕著な遺構は検出できなかった。また平成 24 年には、遺跡中央の丘陵上で、「成合 1 号墳」と命名された後期古墳を新たに確認した。6 世紀後半の横穴式石室を埋葬施設とし、須恵器や鉄鏃、砥石等が出土している。

悉檀寺跡　成合遺跡のすぐ西側の、成合北の町に所在する春日神社に隣接していたと推定されており、境内からは平安時代の軒瓦が採取されている。『三代実録』の貞観 16 年（874）の条に、貞観 5 年に天台別院となり、同 16 年に官寺に列せられたとの記録がみられる。神峰山寺・本山寺・安岡寺・霊山寺などとともに山岳寺院の 1 つとされているが、その実態については明らかでない。

成合琴堂窯跡　谷を挟んだ成合遺跡の西側に位置しており、古くから須恵器が採取されていたため、周知されていた。平成 5 年度に実施された発掘調査において灰原が確認され、8 世紀末から 9 世紀初頭の須恵器が出土している。それ以前にも、7・8 世紀代の須恵器が採取されており、時期を跨いだ複数の須恵器窯が存在するようである。

【引用参考文献】

梯信暁 2004「『摂津名所図会』にみえる金龍寺の記事について」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館　2002 年度共同研究成果報告』（財）大阪府文化財センター

角川日本地名大辞典編纂委員会編 1983『角川日本地名大辞典 27 大阪府』角川書店

金光正裕 2012『金龍寺旧境内跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 224 集（公財）大阪府文化財センター

鐘ヶ江一郎編 2000『安満宮山古墳』高槻市文化財調査報告書 第 21 冊 高槻市教育委員会

小林健太郎 1977「付図高槻市大字・小字図」『高槻市史』第 3 巻史料編 I 高槻市役所

大日本名所図会刊行会編 1919『第 1 輯第 5 編 摂津名所図会』大日本名所図会刊行会

高槻市史編さん委員会編 1977『高槻市史』第 1 巻本編 I 高槻市役所

中村剛彰 1995「奈良時代末頃における一地方窯の様相～成合琴堂窯跡群発掘調査報告にかえて～」『高槻市文化財年報』平成 5 年度 高槻市教育委員会

橋本久和 2007『史跡・安満遺跡保存管理計画書』高槻市教育委員会

原口正三ほか 1973『高槻市史』第 6 巻考古編 高槻市役所

廣瀬時習 2013『成合 1 号墳』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 234 集（公財）大阪府文化財センター

平凡社地方資料センター編 1986『日本歴史地名大系 28 大阪府の地名』平凡社

宮崎康雄編 1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書 第 20 冊 高槻市教育委員会

森田克行 1989「大阪府 安満遺跡 ≪三島平野東半地域の弥生社会≫」『探訪 弥生の遺跡 畿内・東日本編』有斐閣

森田克行 1996「Ⅷ 摂津の弥生時代遺跡」『弥生時代の大阪湾沿岸』大阪経済法科大学出版部

第３章　調査の方法

第１節　調査区

当センターが調査台帳に登録する調査名は「成合遺跡 11 －１」とし、平成 24 年７月から追加で実施した金龍寺旧境内跡の調査を「金龍寺旧境内跡 12 －２」とした。

成合遺跡の調査は、遺構の有無や広がりを確認するための細長いトレンチ調査と、面的な調査を併用し、金龍寺旧境内跡は後者の調査のみである。

調査区の設定は樹木伐採後におこなったが、樹木伐採後の実際の地形は地図上の地形に比べ予想以上に起伏があり、当初面的に広げる調査の範囲となっていた箇所でも、場所によっては掘削作業の足場が確保できないくらいの急勾配な斜面もあった。そういった斜面部については、遺構が広がっている可能性が低いと想定されたため、大阪府教育委員会（以下、府教委）の指示により、まずは幅１～５ｍのトレンチ調査をおこなった。その結果、遺構の広がりが確認できない場合には、府教委の判断によってこのトレンチで調査を終了とした箇所もあり、３－１区南側の 11 －５トレンチ周辺や３－２区北側の 12 －７トレンチ周辺、また４－１区南東側の 11 －４トレンチ周辺の斜面などがそれにあたる。なお 11 －４トレンチ周辺の斜面については、須恵器窯の分布状況を把握するための地中レーダー探査と磁気探査を、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の協力により実施し（写真４）、須恵器窯は５区で検出された１基のみで、周辺斜面には分布していないことを確認している。

これとは逆に、トレンチ調査によって遺構や遺物が確認され、遺構が広がる可能性があると判断された場合には、直ちに協議の上、面的な調査に切り替えた。６・８・９区は、12 －５・12 －６トレンチの調査で遺構が確認されたために、広範囲に広げることとなった調査区であり、１区や４－２区、７区もこれにあたる。なお 12 －２～ 12 －４、11 －５～ 11 －７トレンチなどのように、トレンチ調査の結果、周辺に遺構が広がっている可能性が低いと判断された箇所については、府教委の判断により、このトレンチによって調査を終了とし、周辺を含め道路本体工事に引き渡した。このように、成合遺跡については当初の調査予定範囲に囚われず、遺構の広がりを確認しながら調査区を設定して、調査を進めていった。

したがって、調査区名については当初の計画どおりではなく、最終的な調査範囲を考慮し、当初の名称をできるだけ踏襲しながら、途中で一旦振り直している。その後の工程変更によって、１つの調査区内を分割して調査したような場合については、３－１・３－２区のように枝番を振った調査区名を付けた。トレンチ名については、当初計画時に振られた番号をそのまま採用し、新たに追加となったトレンチについては枝番の続きを振ることとした。

調査は、工事用進入路を確保する必要があったため、まずはその予定地にあたっていた 12 －３トレンチや 12 －４トレンチ南端部、１区の尾根上の一部などから始めた。小谷内に設定した 12 －１～ 12 －４トレンチについては、当初は分割することなく全体をまとめて調査する予定にしていたが、伐採材搬出作業と重なったため、12 －１・12 －２トレンチなどは後回しとなった。また面的に広げる本格的な調査の前に、周辺地域へ土砂が流出しないよう沈砂池設置等の砂防対策を講じる必要があったため、当初の調査区割りを変更して、まずは沈砂池設置箇所にあたっていた２区や 11 －３トレンチのような

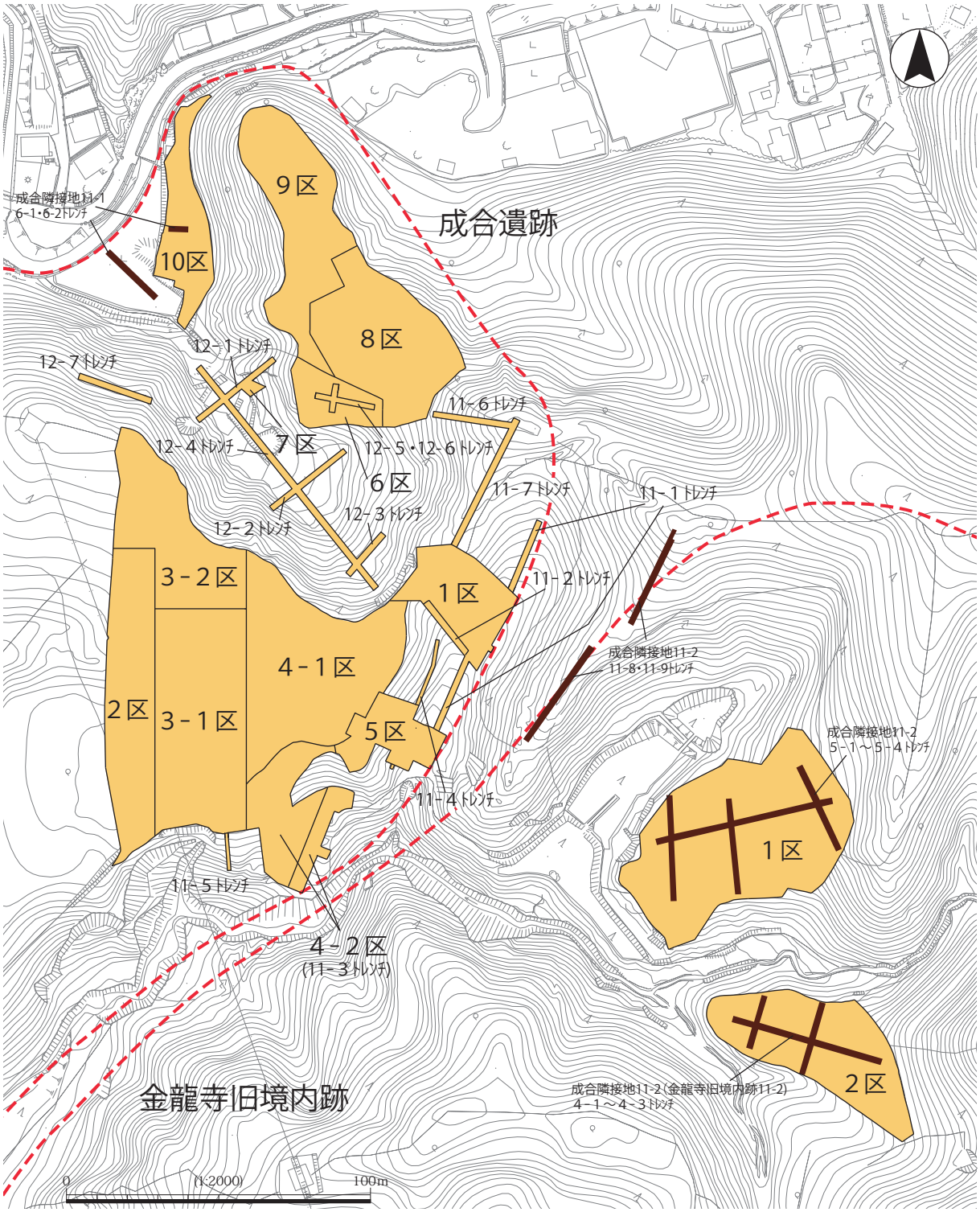


図４　調査区配置図

小規模な調査区から調査を進めることとなった。発掘作業が途切れることのないよう、調査担当者を分け、いくつかの調査区を併行して調査を進めた。調査順および主たる調査担当者は以下のとおりである。

平成23年７～８月：12－４トレンチ南端部、12－３・12－５・12－６トレンチ〔伊藤・笹栗〕

平成23年８～９月：成合遺跡１区（尾根上の一部）〔伊藤・笹栗〕

平成23年９～10月：６区〔伊藤・笹栗〕、11－７トレンチ〔笹栗〕

平成23年10～11月：11－１・11－６トレンチ〔笹栗〕
平成23年10～12月：成合遺跡２区（一部は平成24年２月まで調査）〔伊藤〕
平成23年10月～平成24年１月：11－３トレンチ〔笹栗〕
平成23年11月：11－２トレンチ〔笹栗〕
平成23年11月～12月：12－１・12－２・12－４トレンチ〔笹栗〕
平成23年11月～平成24年１月：成合遺跡１区〔笹栗〕
平成23年12月：成合遺跡７区〔伊藤〕、11－４トレンチ〔伊藤〕、
11－１トレンチ南端部（沈砂池設置箇所）〔笹栗〕
平成23年12月～平成24年３月：成合遺跡３－１区〔伊藤〕
平成23年12月～平成24年４月：成合遺跡10区（空撮は６月）〔笹栗〕
平成24年１月～６月：成合遺跡３－２区〔伊藤〕
平成24年２月：11－５トレンチ〔伊藤〕
平成24年２月～８月：成合遺跡５区〔笹栗〕
平成24年３月～４月：12－７トレンチ〔伊藤〕
平成24年４月～６月：成合遺跡８区〔金光〕
平成24年５月～８月：成合遺跡４－１区〔伊藤〕
平成24年７月～11月：成合遺跡４－２区〔笹栗〕
平成24年７月～12月：金龍寺旧境内跡１区〔金光〕
平成24年８月～10月：金龍寺旧境内跡２区〔伊藤〕
平成24年９月～平成25年１月：成合遺跡９区〔笹栗〕

調査完了時には、全ての調査区において府教委による立会を受け、本体工事への現地引き渡しをおこなったが、４－２区や11－１・11－２・11－３トレンチ、12－１・12－５・12－６トレンチのように、遺構の広がり具合によって調査区拡張の指示を受けることもあった。調査の途中にも、必要に応じ府教委の指導・指示を受けた（写真４）。府教委の立会日および指示については以下のとおりである。

平成 23 年８月５日：成合遺跡 12 －３トレンチ、12 －４トレンチ南端部、12 －５・12 －６トレンチ
・12 －３トレンチ、12 －４トレンチ南端部は引き渡し。
・12 －５・12 －６トレンチが位置する尾根上の平坦面（６区）は広範囲に広げて本調査へ。

平成 23 年９月７日：成合遺跡１区（尾根上の一部）
・１区は下層を確認する必要あり。
・２・３区南側斜面の地滑りを起こしている箇所については調査不要。引き渡し。
・３・４区北側の斜面については、まずはトレンチ調査（12 －７トレンチ）によって遺構の広がりを確認すること。

平成 23 年９月 27 日：成合遺跡６区、１区（尾根上の一部）
・６区は遺構完掘状況を次回の立会で確認する。
・１区（尾根上の一部）については、隣接する本調査箇所とあわせ再調査のこと。１区東側に工事用進入路を設置する場合は先行して調査のこと。

（遺跡範囲拡大に伴うその後の協議により、６区北側の尾根上（８・９区）と、遺跡北端の丘陵裾（10

区）に調査区を追加。また６区東側尾根上には 11 －６・11 －７トレンチを追加）

平成 23 年 10 月 11 日：成合遺跡６区、11 －７トレンチ

・６区は引き渡し。

・11 －６トレンチは６区側にやや向きを変更し、尾根頂部の状況を確認のこと。

・前回指示した１区先行調査箇所の範囲は東を 11 －７トレンチまでとする。

・４区南側斜面裾に沈砂池を設置する場合は、立会調査ではなく本調査と同様の調査をおこなうこと（範囲は 11 月 17 日に指示あり）

（その後の協議により、斜面および斜面裾に 11 －１・11 －２トレンチを追加）

・３・４区南側の斜面については、まずはトレンチ調査（11 －３・11 －５トレンチ）によって遺構の広がりを確認すること。

平成 23 年 11 月 17 日：成合遺跡 11 －１・11 －２・11 －６トレンチ

・11 －６・11 －７トレンチは引き渡し。

・前回指示した１区東側の拡張部から 11 －２トレンチ全体と 11 －１トレンチで遺構が検出された一部を含めるような範囲で調査区を設定し、面的な調査をおこなうこと（拡張する範囲も含め１区）。また 11 －１トレンチ南西端部の沈砂池設置箇所も一部拡張してさらに詳細な調査をおこなうこと。

平成 23 年 12 月７日：成合遺跡 11 －１トレンチ南端部（沈砂池設置箇所）、11 －３トレンチ

・11 －１トレンチ南西端部（沈砂池設置箇所）上方斜面に、幅１ｍの横方向のトレンチ（＝ 11 －４トレンチ）を入れ、須恵器窯の位置や分布状況を確認すること。

・11 －３トレンチは下層調査をおこなうこと。

平成 23 年 12 月 13 日：成合遺跡２区、11 －４トレンチ、12 －１・12 －２・12 －４トレンチ

・11 －４トレンチおよび 11 －１トレンチで灰原がみつかった上方の斜面部を面的に広げ、須恵器窯の調査を実施すること（５区）。（11 －１トレンチ南端部の沈砂池設置箇所の調査は一旦中断し、５区とともに調査）

・12 －１トレンチは斜面裾の一部を拡張し遺構を確認すること（７区）。

・12 －２・12 －４トレンチは引き渡し。

・２区の一部は引き渡し。竪穴建物は現地説明会まで保存のこと。

平成 23 年 12 月 26 日：成合遺跡１・７区、11 －３トレンチ

・１・７区は調査完了後引き渡し。

・11 －３トレンチは調査完了後引き渡し。ただしトレンチの西側斜面については拡張し面的な調査を実施すること（４－２区）。

・３区南側斜面に設定している 11 －５トレンチの幅は１ｍで構わない。

平成 24 年３月６日：成合遺跡３－１・10 区、11 －５トレンチ

・11 －５トレンチ周辺の斜面は調査不要。引き渡し。

・10 区検出の流路は範囲を確認し調査継続のこと。東側の斜面部にまで調査範囲を広げる必要はない。

・３－１区は調査完了後引き渡してよいが、２区の一部と３－１区をあわせて４月 21 日の予定で現地説明会を開催する必要あり。

平成 24 年４月６日：成合遺跡 10 区、12 －７トレンチ

・10 区は記録完了後引き渡し。

・12 －７トレンチが位置する３－２区北側の斜面については、現在面的に調査している範囲より下方は調査不要。引き渡し。

平成 24 年６月 15 日：成合遺跡３－２・５・８区

・３－２区は石列内の調査完了後引き渡し。

・５区は須恵器窯・古墳共に調査継続のこと。

・８区は一部を残し調査完了後引き渡し。９区側の一部については９区調査時に遺構再検出。

（平成 24 年６月に成合遺跡隣接地 11 －２の試掘調査の成果に基づき、金龍寺旧境内跡の範囲が拡大、金龍寺旧境内跡１・２区の調査を追加）

平成 24 年８月３日：成合遺跡４－１・５区

・４－１・５区は調査完了後引き渡し。

・４－１区南東側斜面は調査不要。引き渡し。

平成 24 年 10 月 10 日：成合遺跡４－２区、金龍寺旧境内跡２区

・４－２区南側は調査完了後引き渡し。北端部は既に引き渡した 11 －３トレンチの一部も含めてさらに東側まで拡張し調査すること。

・金龍寺旧境内跡２区は調査完了後引き渡し。

平成 24 年 11 月 15 日：成合遺跡４－２拡張区

・４－２区拡張区は引き渡し。

平成 24 年 12 月 19 日：金龍寺旧境内跡１区

・金龍寺旧境内跡１区は引き渡し。

平成 25 年１月 10 日：成合遺跡９区

・９区は引き渡し。

第２節　発掘作業の具体

調査地内にはこれまでまったく開発がおよんでいなかったため、樹木が鬱蒼と生い茂っており、まずはそれらの伐採作業から入った。表土層掘削の後、スコップ・鋤簾・ツルハシ等を使った人力による遺物包含層や自然堆積層等の掘削をおこない、遺構面の精査によって遺構を検出した。掘削で生じた土砂は、トレンチ調査では横置きとしたが、面的な調査ではベルトコンベアにより調査区外へと搬出した。調査区内には伐採された樹木の根が数多く残っていたことから、遺構面を傷めないよう、鋸・根切り鋏等を使った人力による除根作業も随時おこなった。検出した遺構については、移植ゴテ等を用いて丹念に掘り下げ、必要に応じて遺物出土状況や平面・埋土堆積状況等の図面作成と写真撮影をおこなった。調査区内は急勾配な斜面が多く非常に滑りやすくなっていたため、５区や斜面のトレンチ調査などでは、転落防止のために安全帯をつないで掘削作業をおこなっている。[1)]

遺物の取り上げ、遺構図面の作成、写真撮影等の作業については、基本的に当センターが平成 22 年に定めた『遺跡調査基本マニュアル』[2)]に準拠しておこなった。

地区割りについては、世界測地系に則った平面直角座標系第Ⅵ系を基準とし、Ⅰ～Ⅴの大小５段階の区画を用いた。これは大阪府内全域に共通する地区割りである。第Ⅰ区画は大阪府の南西部を通るＸ＝－ 192,000 m・Ｙ＝－ 88,000 mを起点に、府域を南北 15（Ａ～Ｏ）、東西９（０～８）区画に分割したもので、一区画は南北６km、東西８km となる。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を東西、南北各４分割の、計

16区画（1～16）に分けたもので、一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20（1～20）分割、南北15（A～O）分割する一辺100mの区画である。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画をさらに東西、南北ともに10（東西1～10、南北a～j）分割した一辺10mの区画である。第Ⅴ区画は第Ⅳ区画をさらに「田」の字状に4（Ⅰ～Ⅳ）分割したもので、一辺5mの区画である（図5）。

上記の方法で区画した場合、この調査の第Ⅰ区画は「L6」となるが、第Ⅱ区画は「3・4・7・8」の4つの区画に分かれる（図6）。遺物の取り上げ作業については、大部分の調査区ではこの地区割りを用い、基本的に第Ⅳ区画の10m区画ごとにおこなったが、トレンチ調査箇所ではこの地区割りを用いずにトレンチ名を用いた。また5区で検出した須恵器窯の灰原については、窯体主軸を基準にその東側か西側かというように、状況に応じて独自のグリッドを用いている。

遺物取上げ用ラベルへの記入は、煩雑となるため第Ⅰ・Ⅱ区画は省略し、「1A－6g」のように第Ⅲ区画以降のみを記入した。

現場の写真は、35mmフィルムカメラ・6×7フィルムカメラを使用し、モノクロとリバーサルフィルムによる写真の撮影をおこない、メモ写真としてデジタルカメラによる写真撮影もおこなっている。調査区の全景を撮影するような場合には、2～4－1区では、5段あるいは3段の写真撮影用足場を設置したが、8・9区や金龍寺旧境内跡などの調査では、周辺の調査が終わり、工事用進入路が確保されていたため、クローラ式高所作業車を利用して高位置からの撮影をおこなった（写真4）。撮影は基本的に調査担当者がおこなっている。

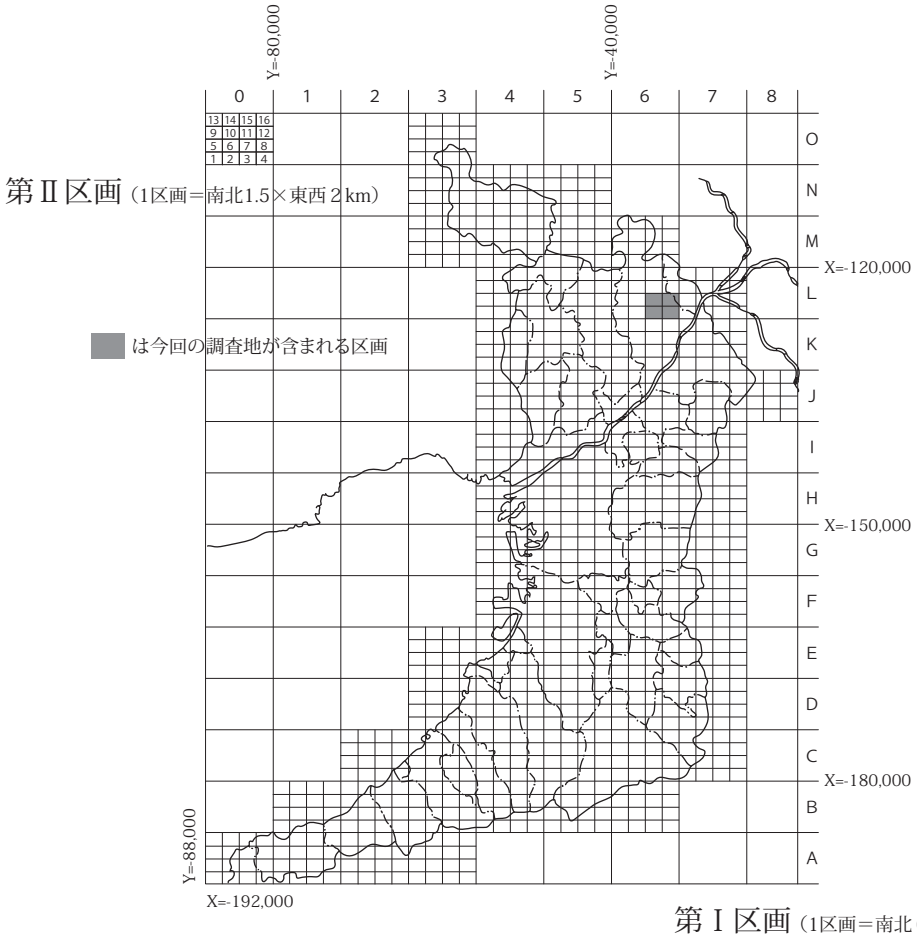
遺構全体の平面測量は、ヘリコプターによる空中写真測量をおこない、50分の1の全体平面図とそれを縮小編纂した100分の1の平面図を作成した。ヘリコプターでの撮影は計9回おこなった（写真4）。詳細は以下のとおりである。

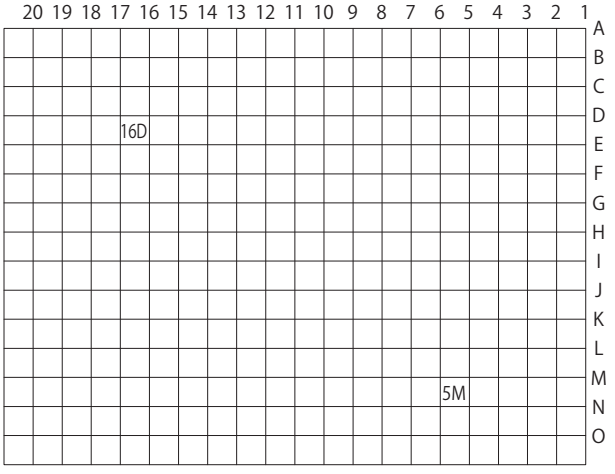
1回：平成23年10月4日　：成合遺跡6区
2回：平成23年11月22日：成合遺跡2区
3回：平成24年1月12日　：成合遺跡1区・7区・5区調査前の地形・4－2区（11－3トレンチ）
4回：平成24年3月8日　：成合遺跡3－1区・2区下層の一部
5回：平成24年6月13日：成合遺跡3－2区・5区・8区・10区
6回：平成24年8月9日　：成合遺跡4－1区
7回：平成24年10月18日：成合遺跡4－2区、金龍寺旧境内跡2区
8回：平成24年12月13日：金龍寺旧境内跡1区
9回：平成25年1月10日　：成合遺跡9区

なお、4－2区北東隅のように一部分のみ拡張し、遺構数も少ないような場合、あるいは5区検出の須恵器窯のように、遺構の状況が刻々と変わっていくような場合には、トータルステーションを用いた図面作成や、三次元計測機器を用いたレーザー計測による平面図化を併せておこなった（図102）。また簡単な略測平面図を作成する場合には、電子アリダートを用いた平板測量をおこなった（写真4）。そのほか遺物出土状況等各遺構の詳細図面や、土の堆積状況を示す地層断面図等については、レベルや巻尺・コンベックス等を用いて、随時20分の1や10分の1の図面を作成した（写真4）。これらの遺構図面は全て世界測地系に準拠して作成している。

方位は座標北を使用し、水準は全て東京湾平均海面（T.P.）を用いた。

遺構番号は遺構の種類、調査区等にかかわらず、1から通しで振り、遺構の種類は遺構番号の後ろに





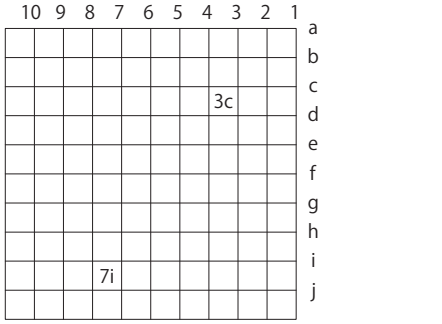


図５　地区割り方法

付した。「１土坑」・「２溝」・「３ピット」という具合である。ただし複数の遺構の集合体である竪穴建物や掘立柱建物などについては、「竪穴建物１」・「掘立柱建物１」のように前に遺構種類を標記し、後ろに番号を付している。成合遺跡と金龍寺旧境内跡とでは遺跡が異なるため、遺構番号はそれぞれ１から振った。つまり成合遺跡の「１土坑」もあれば、金龍寺旧境内跡の「１土坑」もあることになる。

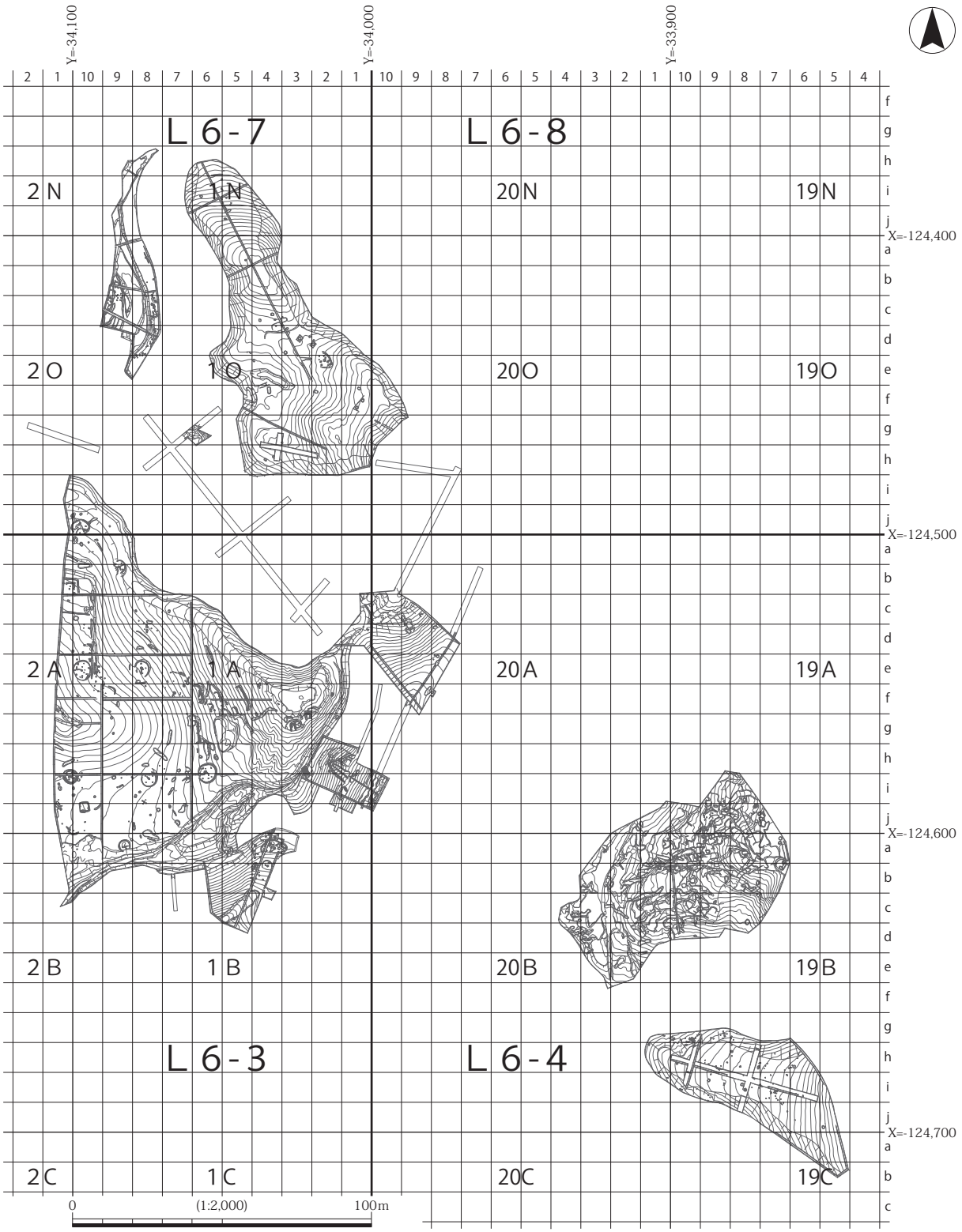


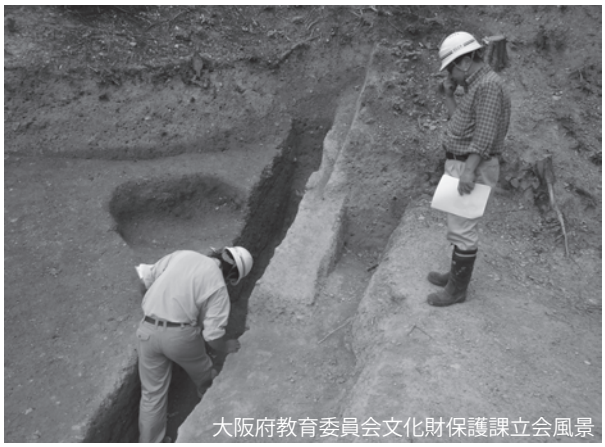
図6　調査区の地区割り図

【註】

1）現地での伐採作業や掘削作業は、西日本高速道路株式会社から新名神高速道路高槻インターチェンジ工事を請け負った鹿島建設株式会社によって進められた。

2）財団法人 大阪府文化財センター 2010『遺跡調査基本マニュアル』

土器出土状況実測作業


大阪府教育委員会文化財保護課立会風景

平板測量作業

高所作業車からの写真撮影作業

レーダー探査作業

ヘリコプターによる空中写真測量作業

写真撮影作業

写真４　現場作業風景

遺物洗浄作業
遺物計測作業
遺物への注記および接合・復元作業
遺物写真撮影作業
遺物実測作業
写真整理作業
デジタルトレース作業
収納作業

写真５　整理作業風景

第３節　整理作業

整理作業についても、当センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』に準拠しておこなった。

現地調査期間中は、現場詰所において出土遺物の洗浄や注記、現地にて作成した遺構図面や撮影した写真の整理など基礎的な整理作業を発掘調査と併行しながら実施し、現地調査終了後の平成 25 年２月から平成 26 年７月までは、東大阪市所在の中部調査事務所において報告書刊行に向けた本格的な整理作業を進めた（写真５）。

整理作業の対象となった遺物は、弥生時代から中世までの遺物を基本とし、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、施釉陶器、瓦、勾玉・石鏃・石庖丁・台石・五輪塔等の石器・石製品、鉄釘・銭等の金属製品などがある。収納は 55 × 35 × 15 ㎝の収納コンテナを主に使用し、コンテナ数は約 170 箱にのぼった。

遺物はブラシを用いて洗浄し、遺物登録台帳と照合できるよう、面相筆やスタンプによる注記作業をおこなった。遺物への注記は、成合遺跡が「ナリアイ 11 －１－□」、金龍寺旧境内跡が「コンリュウジ 12 －２－□」（□は遺物登録番号）とした。出土遺物は登録番号ごとにデジタルカメラで撮影し、出土調査区・出土区画・出土層位・出土遺構・出土年月日等とともに遺物登録台帳に登録した。その後遺構ごと、また遺物包含層出土遺物については、近隣の地区とも確認しながら接合作業をおこない、必要に応じて石膏を用いた遺物復元作業をおこなった。同時に実測可能な遺物をピックアップし、ピックアップしたものは順次実測作業をおこない、瓦や線刻文字等については拓本をとった。遺物実測数は石器等も含めて約 900 点となった。実測した遺物については、遺物登録台帳とは別に掲載遺物台帳とリンクしたピックアップ台帳を作成した。須恵器窯や関連遺構出土の須恵器については、出土量や器種組成を把握するために、破片数や重量、残存率の計測作業もおこなっている。

上記の手順で作成した遺物実測図は、スキャナーで原図を取り込み、描画ソフト（Adobe Illustrator）を用いてトレースし、必要に応じてデジタル化した拓本などのデータを貼り込み、挿図を作成した。最終的には実測した遺物 908 点を本書に掲載することとした。

遺構図については、空中写真測量によって調査地全体の遺構平面図が既にデジタル化されていたため、必要な箇所を拡大・加工し各平面図を作成した。現地で作成した個々の遺構平面・断面図や地層断面図などについても、遺物と同様の手順でデジタルトレースし、挿図を作成した。

このように報告書掲載の挿図は、遺構図・遺物実測図ともにデジタルデータによって作成した。

現地で撮影したモノクロ・リバーサルフィルムについては、その都度現像・焼き付けに出し、直ちにアルバムへの収納および台帳登録を進めた。写真台帳へはデジタルカメラで撮影した写真を用い、調査区、地区割り、撮影対象、撮影内容、撮影方向、撮影日等とともに、収納したアルバムを検索できるようアルバム・フィルム番号を記入した。また現地で作成した遺構図面とも対応するよう、図面番号もあわせて記入している。

遺物写真については、挿図のレイアウトがほぼ決まった段階で、大まかな写真図版のレイアウトを組み、中部調査事務所の写真室へ遺物を搬入して撮影をおこなった。

出土した遺物は、報告書掲載遺物とそれ以外の未掲載遺物とに分け、マニュアルにしたがって収納・保管している。

現地にて作成した遺構図面についても遺物整理作業と併行して整理・収納をおこない、これらも台帳に登録した。（伊藤）

第４章　成合遺跡の調査成果

第１節　トレンチ調査

11－1トレンチ〔図８、写真図版６・49〕

成合遺跡の南東端谷部に設定した幅２m、長さ 89 mのトレンチである。北側では 0.7 ～ 1.2m の厚さで斜面堆積層（１・２－１層）が認められ、２－１層除去面において、トレンチ北端から約 35 mの地点で土坑（35 土坑）を検出した。この遺構が検出された箇所については、府教委の指示により拡張して新たに１区を設定し、面的な調査をおこなっている。その成果については第２節で報告する。トレンチの北端から 48 mの地点では、２層除去面が深く落ち込み、この南側の谷部には斜面から流れ込んだシルトや砂層のラミナと、滞水状態で形成される黒褐色の泥層が互層状に堆積する状況を確認した（２－２層）。トレンチ南端では、２－２層中の地表面より 1.5 mの深さで、花崗岩製の五輪塔の火輪（１）１点と人頭大の大きさの石材が多く検出された。石材の性格を追究するため、沈砂池設置を予定していたトレンチ南端から約 12 mの範囲で谷幅にあわせて拡幅し、面的な調査を進めた。その結果、谷部では周辺部分からさらなる石材の広がりを確認したが、この時点では石材の性格は判断できなかった。その一方で、拡幅によって、トレンチ西側の斜面裾付近で焼土や炭が混じる黒色層を検出するとともに、熔着・変形した平安時代初頭の須恵器が多量に出土した。これにより、11 － 1 トレンチ南端部の西側斜面において須恵器窯が存在する可能性が高まったため、一旦調査を中断し、新たに斜面を横断する形でトレンチ（11 － 4 トレンチ）を設定し、須恵器窯の位置や数を確認することになった。その結果については 11 － 4 トレンチの項で報告しているが、11 － 1 トレンチの拡幅部にも灰原がおよんでいることが確実となったため、この部分は改めて５区を設定して面的な調査をおこなっている。11 － 1 トレンチ南端谷部の下層の状況については、灰原の範囲を確定するために西側斜面部分を含めた範囲で、改めて調査区を設定しており、その調査成果については第８節にて報告する。なお、石材については、後におこなわれた斜面上方の４－２・５区の調査において、破壊を受けた横穴式石室３基を確認しており、その石室石材が谷部に転落したものであると判断された。（笹栗）

11－2トレンチ〔写真図版６〕

遺跡の南東斜面に設定したが、トレンチ全体を１区の中に含めて再調査していることから、調査成果については第２節の報告に代える。（伊藤）

11－3トレンチ〔写真図版 31〕

４－１区南側に位置する遺跡南東斜面の一部に平坦部が認められたため、通常よりもやや広めの幅５mのトレンチを設定して調査を実施した。その結果、弥生時代から古代の遺構が多数検出され、府教委の指示により周辺にも調査区を拡張し、４－２区として改めて調査をおこなうこととなった。成果については第７節にてまとめて報告する。（伊藤）

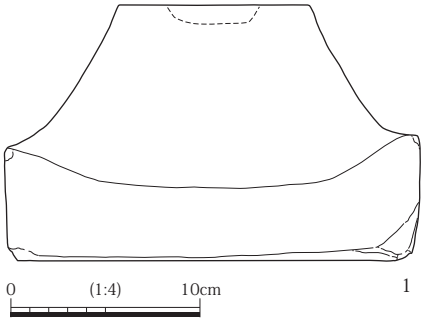


図７　11－1トレンチ出土遺物

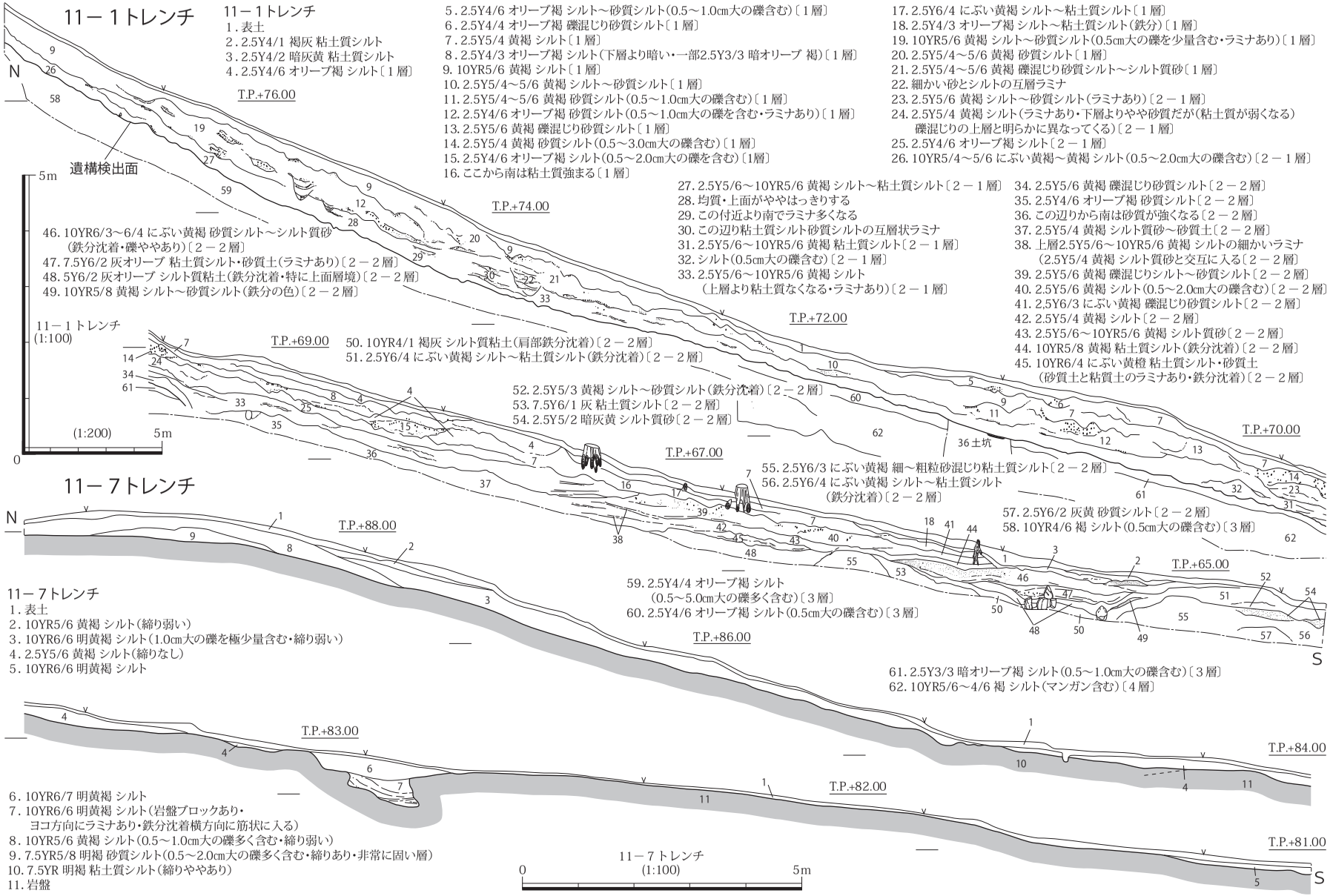


図8　11－1・11－7トレンチ地層断面図

11－4トレンチ〔図９、写真図版７〕

11－1トレンチ南端部の沈砂池設置箇所の調査において、焼土・炭層と焼けひずんだ須恵器が多数発見されたことから、上方斜面に須恵器窯が存在する可能性が高まった。このため府教委の指示により急遽須恵器窯の位置と数を特定するために、遺跡東南斜面の等高線にほぼ平行する幅１m、長さ 44.5 mのトレンチを設定した。

後に５区として本格的な調査を実施するトレンチ南半部は、表土層の下に小礫混じりの黄褐色シルト（１層）が約 0.2 mの厚さで確認され、その下面で被熱して赤褐色に変色した箇所が、上方へと続くように半円形に検出され、その被熱面の両側では炭の広がりが確認されている。これは窯の焚口付近と考えられ、ここに須恵器窯が１基存在することが確実視できるようになった。これに対してトレンチの北半部は、１層が約 0.5 ～ 0.6 mと厚くなり、その下面では焼土や炭の広がりはまったく検出できず、須恵器の分布も確認できなかった。須恵器窯の基盤層となる２層は、マンガンが沈着した拳～人頭大の硬い偽礫や小礫を多く含む黄褐色シルトで、厚さは約0.4～0.5 mを測る。２層の下は丘陵上の岩盤となる。

このトレンチの調査の結果、遺跡東南斜面に築かれた須恵器窯は１基であることが判明した。その一方で、このトレンチ北半部の斜面については、当初は面的な調査の対象範囲となっていたが、後におこなった４－１区の調査からも遺構が広がっている可能性が低いことが明らかとなったため、面的な調査は不要と判断されることとなった。（伊藤）

11－5トレンチ〔図９、写真図版７〕

３－１区の南側、遺跡の南斜面に設定した幅１m、長さ 12 mのトレンチである。作業が困難なほどの非常に勾配が急な斜面で、下半部では 38 度ほどの勾配となる。その下半部は表土層の下に小礫混じりの締まりのない黄褐色シルト（１層）が約 0.2 ～ 0.5 mの厚さで堆積し、その直下が風化して崩れた岩盤の礫層となる。上半部は岩盤までの間に、１層とともに細～小礫を多く含む黄褐色砂質シルトや小礫混じりの黄褐色シルトなどが約 0.7 ～ 1.1 m堆積し、それらの中間に、遺物を僅かに含む炭混じりの褐色シルトが認められた。遺構は確認できなかった。

当トレンチの北側に接する３－１区の平坦部には、弥生時代から古代の遺構が多数広がっているが、その南端部、つまり当トレンチのすぐ北側周辺は、金龍寺へと続く市道が通っているため、遺構面が削られ、遺構が全く残っていない。おそらくトレンチ上半部で認められた遺物包含層は、これら遺構の削平によってできたものと考えられる。

当トレンチ周辺の斜面部については、当初は面的な調査の対象範囲となっていたが、このトレンチの調査成果により、面的な調査は不要と判断されることとなった。（伊藤）

11－6トレンチ〔図９、写真図版７〕

次に報告する 11 －７トレンチ北端部にほぼ直交するように６区にむけて設定した幅２m、長さ 26 mのトレンチである。非常に急勾配な斜面で、表土層の下には 0.3 mの厚さで斜面堆積層（１層・黄褐色シルト層）が認められた。斜面部では１層直下に２層（明褐色シルト層）を確認し、東端の尾根頂部では１層直下で、斜面部では２層直下でそれぞれ基盤層を確認した。２層上面が６・８・９区における遺構面に相当すると考えられるが、遺構・遺物は確認できなかった。（笹栗）

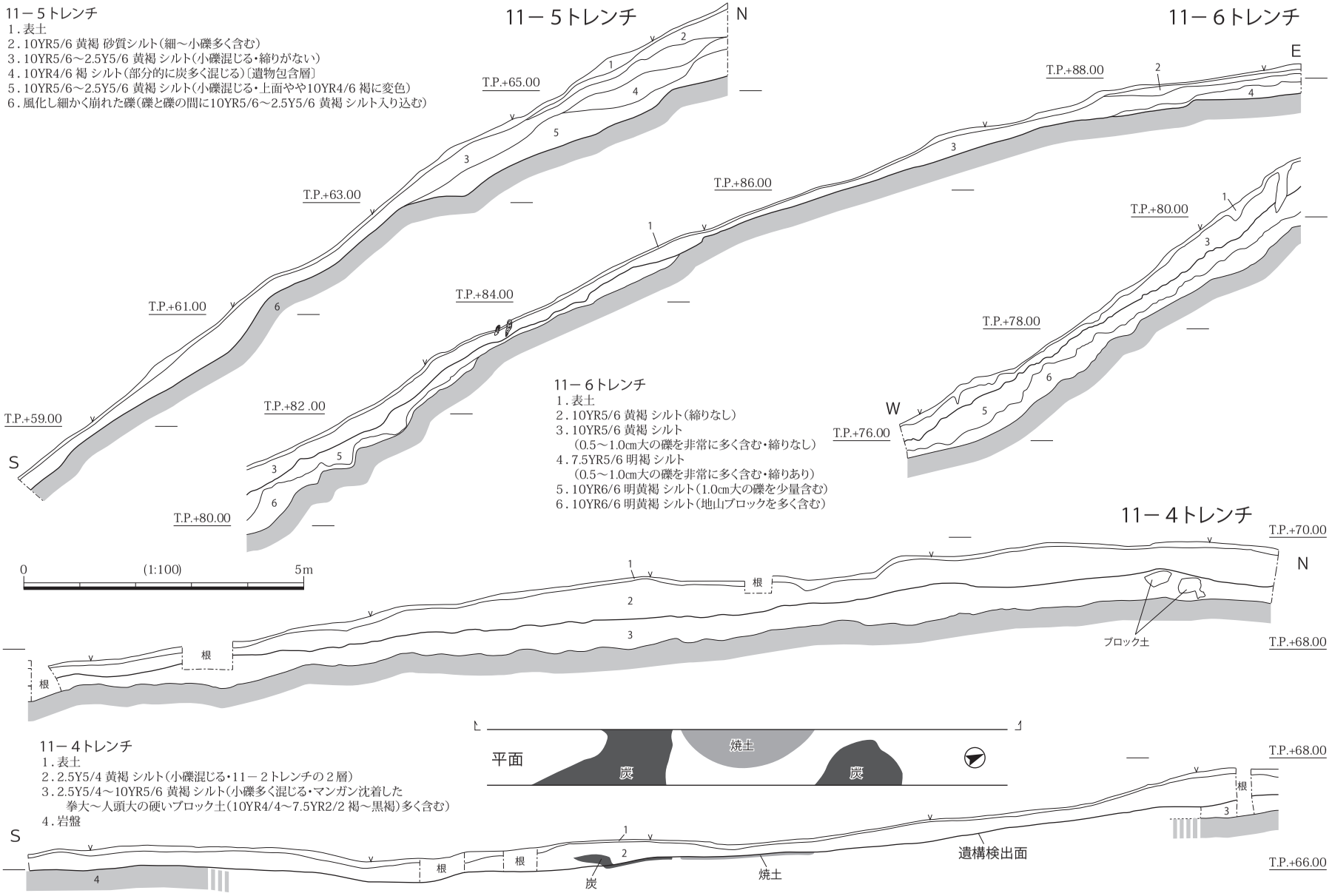


図9　11－4～11－6トレンチ地層断面図

11－7トレンチ〔図８、写真図版７〕

成合遺跡の東端､北東から南西にのびる尾根筋の頂部に設定した幅２m､長さ46mのトレンチである。表土直下約0.1 mの深さで基盤層を確認した。トレンチ北側の尾根頂部では、砂礫層とその落ち込みを確認したが、大阪層群と考えられる基盤層を構成する砂礫層で、遺構・遺物は確認できなかった。調査区の南端から北に約17 mの地点では、調査区を横断する深さ約0.75 mの溝を検出したが、その形状や埋土堆積状況から、人為的に掘削された遺構ではなく、自然の営力によって形成されたものであると判断した。（笹栗）

12－1・12－2・12－3・12－4トレンチ〔図10～13、写真図版８・49〕

東檜尾川にむかってのびる小谷内に設定したトレンチである。小谷を横断するように北側から12－1トレンチ（長さ32 m）、12－2トレンチ（長さ31 m）、12－3トレンチ（長さ18 m）とし、それらと直交し、小谷の真ん中を縦断するように12－4トレンチ（長さ94 m）を設定した。トレンチの全体で斜面堆積層（１層･黄褐色シルト）を確認した。各トレンチの斜面上方では基盤層を確認したが、斜面下方や谷の中央部においては、２m以上の堆積があり、湧水も著しいことから、その部分では地山の検出まではおこなうことができなかった。12－1トレンチと12－2トレンチの中間地点付近のやや北側で、近現代のため池を確認した。12－1トレンチの東側の斜面裾の傾斜変換点付近では、土坑（101 土坑）を１基検出した。この遺構がみつかったことにより、遺構周辺を７区として拡張調査することとなった。その成果については第10節で報告する。

なお、12－4トレンチと12－2トレンチの交点よりやや南側の１層中からは、勾玉（２）が１点出土している。この確認トレンチ周辺からは、遺構の広がりが全く確認されていないことから、本来は南西の丘陵上に展開する弥生時代の集落域に伴っていたものが谷部に転落したものと推定される。勾玉はヒスイ製の半玦状勾玉で、1.7 × 1.4cm、厚さ0.7cm、質量3.8 gをはかる。形態は、正面や側面に明瞭な面がみられ、頭部上面から背面にかけてはやや面を残すが尾部は湾曲する。頭部の孔は、断面形態が漏斗状の両面穿孔である。色調は淡い緑色地に乳白色が混じり、不透明である。周辺からは遺物の出土はないが、形態的な特徴から弥生時代中期に、石川県小松市八日市地方遺跡などをはじめとした北陸地方で生産された可能性が高い[1)]。大阪府下における弥生時代中期以前の半玦状勾玉の出土例としては、安満遺跡（高槻市[2)]）、太秦遺跡（寝屋川市[3)]）、鬼虎川遺跡２点（東大阪市[4)]）、池上曽根遺跡（和泉市・泉大津市[5)]）が挙げられ、本例が６例目となる。このうち、正面や側面が明瞭な面をもつといった点で、太秦遺跡のものが形態的に最も類似する。（笹栗）

12－5・12－6トレンチ〔図13、写真図版９〕

遺跡北端部に位置する尾根筋上に設定したトレンチである。12－5トレンチから古代の遺構が確認されたため、府教委の指示により、トレンチを設定した丘陵上の平坦部全体を面的に広げて調査することとなった。両トレンチは６区の中に含めて再調査していることから、その調査成果については第９節で報告する。（伊藤）

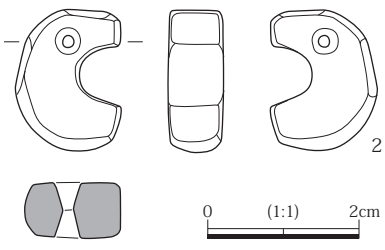


図10　12－4トレンチ出土遺物

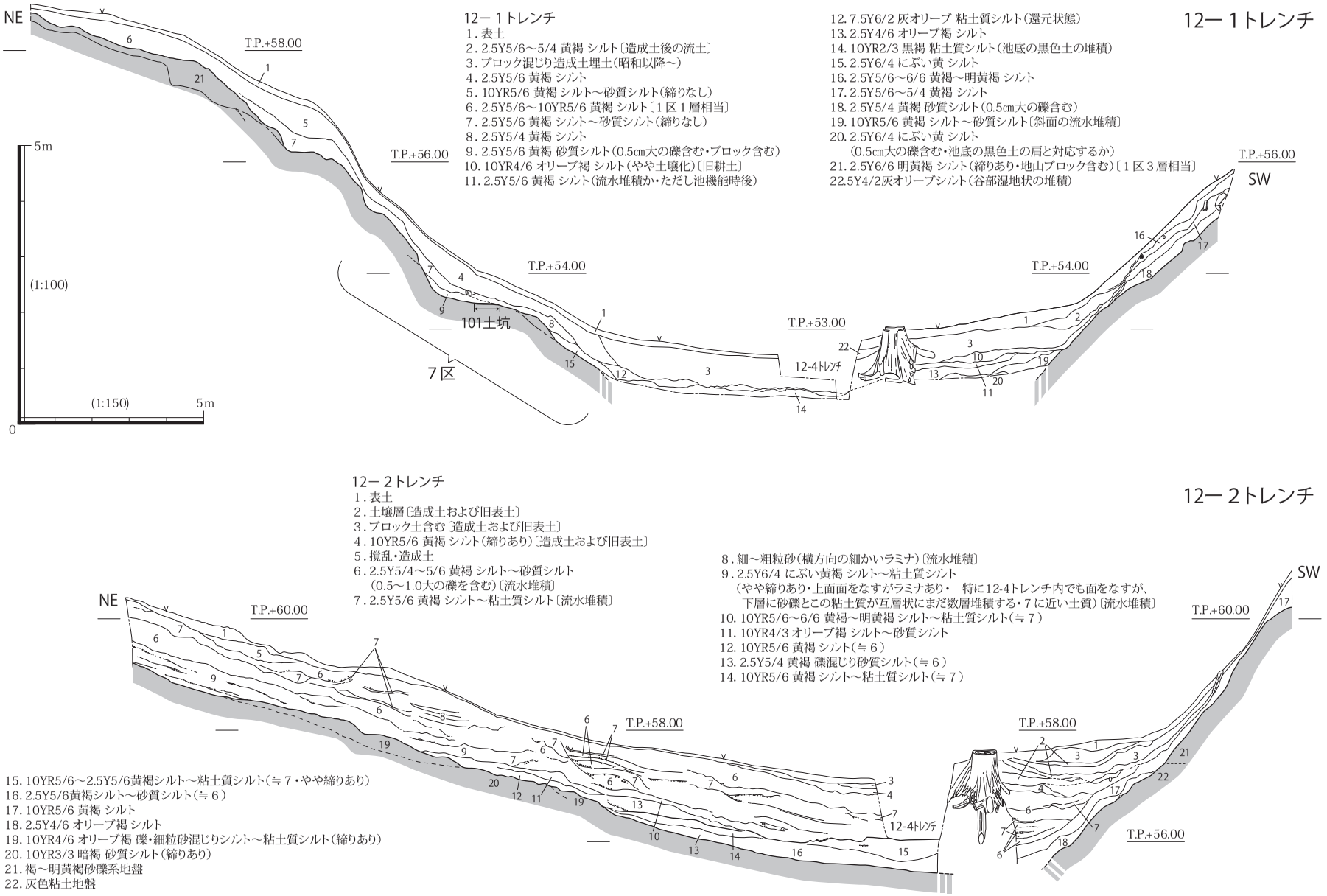


図 11　12－１・12－２トレンチ地層断面図

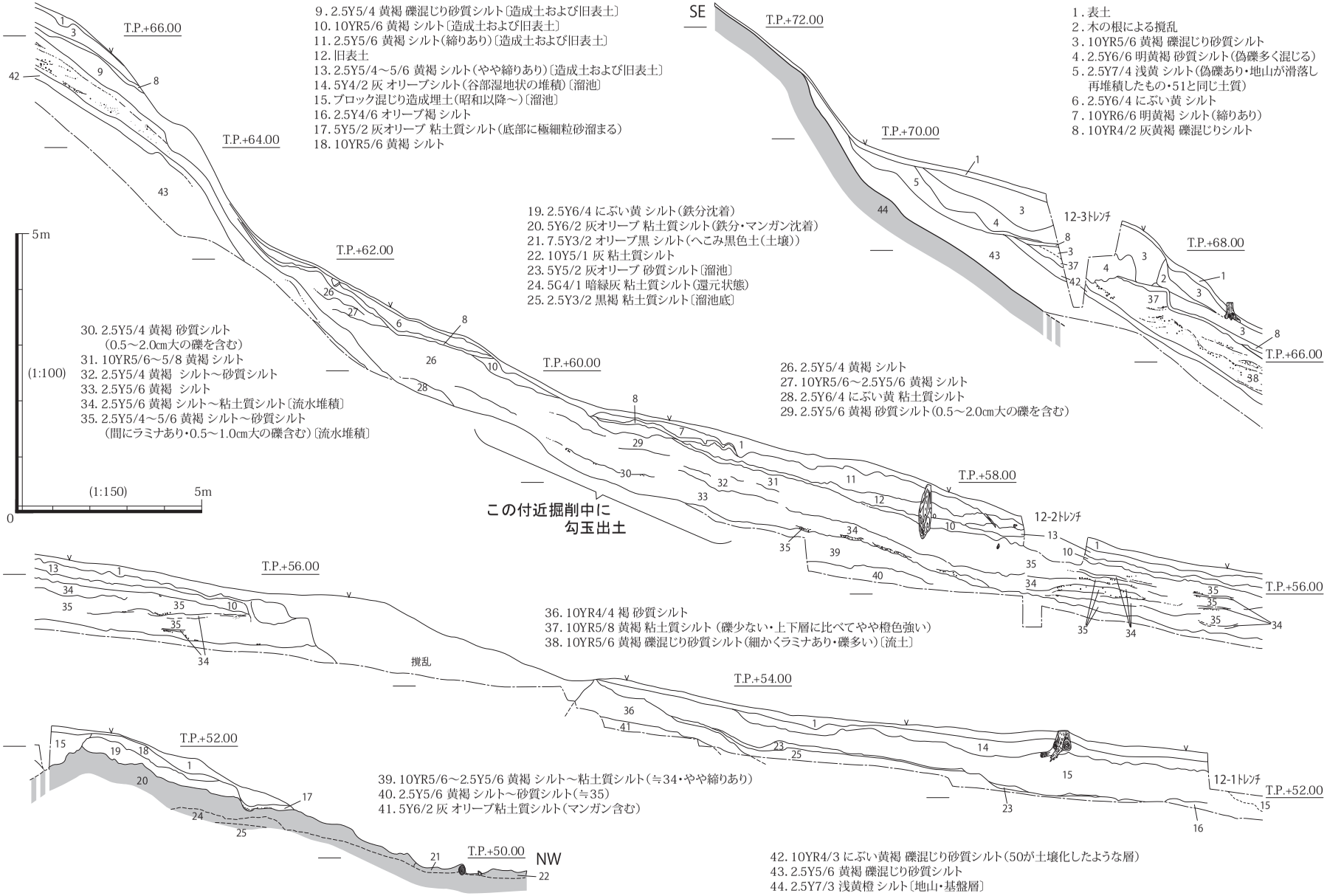


図12　12－4トレンチ地層断面図

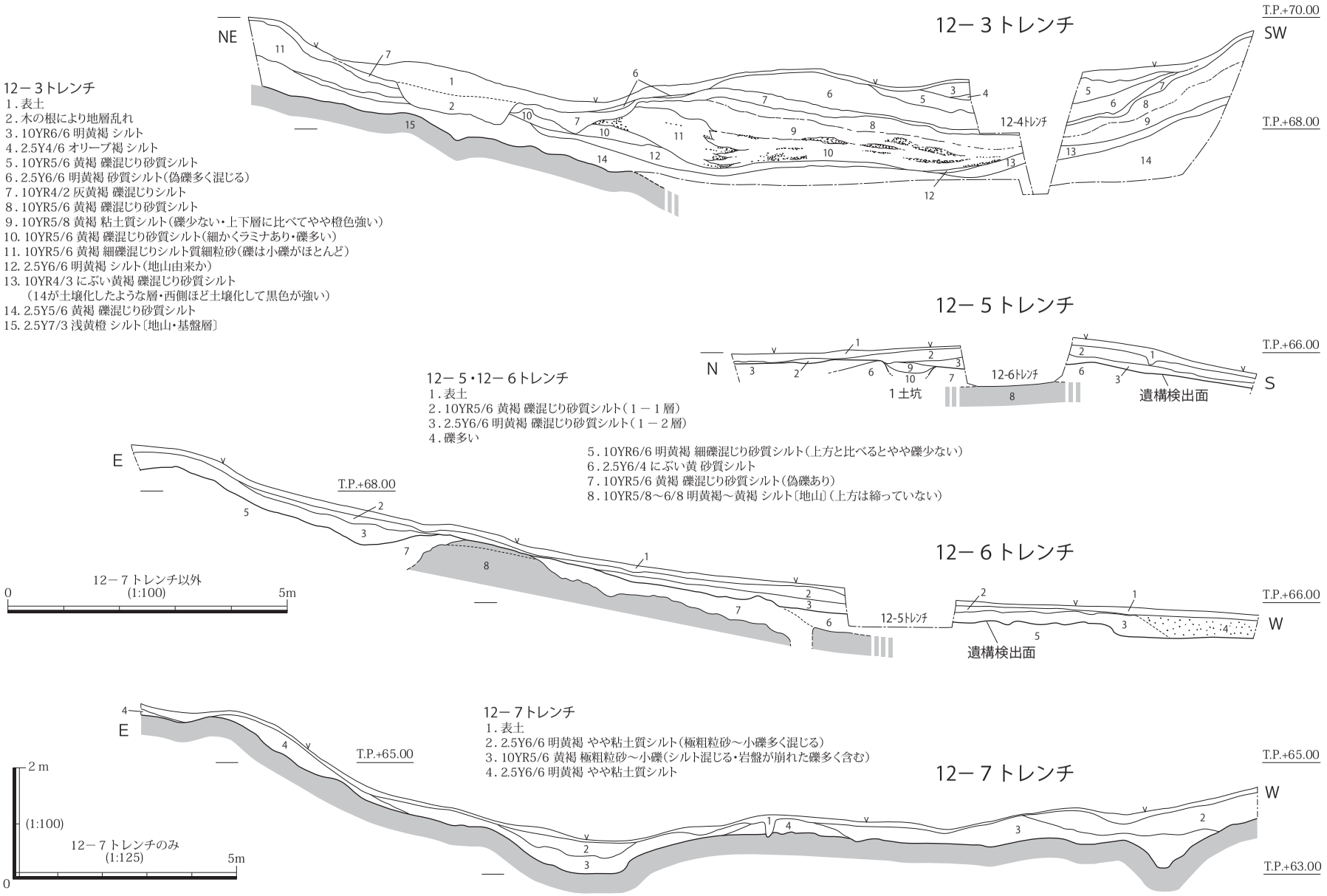


図13　12－3・12－5～12－7トレンチ地層断面図

12－7トレンチ〔図 13、写真図版９〕

３－２区の北側、10 区を見下ろす遺跡の北斜面に位置する。斜面の途中に若干の平坦部が認められたことから、遺構の広がりを確認するため幅２m、長さ 25 mのトレンチを設定した。表土層の下には、おそらく岩盤が削り流されたものと考えられる極粗粒砂～小礫が多く混じる明黄褐色のやや粘土質シルトや、シルト混じりの黄褐色極粗粒砂～小礫が、厚さ約 0.1 ～ 0.6 m、流路の最も深い箇所で 1.0 mの厚さで認められ、丘陵の岩盤に達する。斜面には数条の流路が認められるが、遺構・遺物ともに確認できなかった。

この周辺の斜面部については、当初は面的な調査の対象範囲となっていたが、このトレンチの調査成果により、面的な調査は不要と判断されることとなった。（伊藤）

【註】

1）浅野良治 2003「日本海沿岸における翡翠製勾玉の生産と流通」『富山大学考古学研究室蜃気楼－秋山進午先生古稀記念－』秋山進午先生古稀記念論集刊行会

2）原口正三ほか 1973『高槻市史』第６巻考古編 高槻市役所、木下尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史 中 岡崎敬先生退官記念論集』同朋社

3）市本芳三編 2006『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第 143 集（財）大阪府文化財センター

4）前掲２）木下 1987

5）池上曽根遺跡史跡指定 20 周年記念事業実行委員会編 1996『弥生の環濠都市と巨大神殿』

平成23年７月（伐採作業と併行して12－３・12－４トレンチの南端部から調査が始まった）

第２節　１区の調査成果（11－１トレンチの一部・11－２トレンチを含む）

〔図８・14 ～ 17、写真図版 10・11・49〕

遺跡南東斜面に位置する調査区である。当初は、工事用進入路設置のために先行して設けた尾根上の狭い範囲を１区として調査を進めていたが、その頂部で古代の遺構が検出され、また 11 －１・11 －２トレンチの調査で斜面から遺物包含層と谷部で遺構が確認されたことから、成合遺跡東側の尾根上から谷底部にかけて改めて調査区を拡張して再調査することとなった。面積は約 900 ㎡である。

層序は、表土を除去すると調査区の全体に、あまり締りのない黄褐色系のシルト層（１層）と、斜面部分では上層よりやや褐色がかったシルト層（２層）が、谷部では上層に比べやや粘性の強い層（２－１層　図８－ 23 ～ 27）が堆積していた。１層については、尾根上の林道造成に伴う盛土とその流出土の層境が部分的に不明瞭で判断がつかなかったが、１・２層ともに基本的には斜面堆積層と考えられ、0.8 ～ 1.0 m程度の厚さで堆積している。この１・２層は土師器・須恵器・弥生土器を包含するが、遺

図 14　１区検出遺構全体平面図

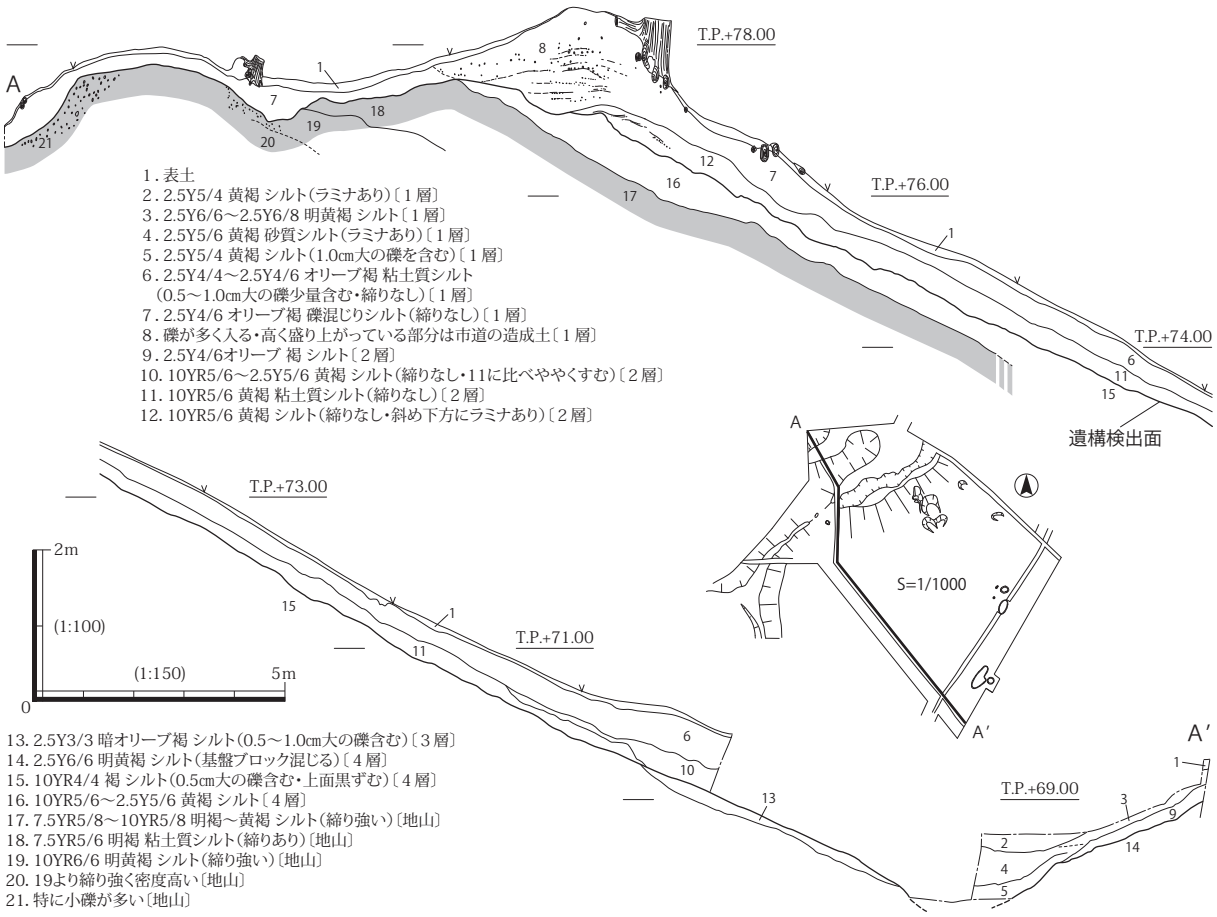


図 15　1区地層断面図

物の出土量は極めて少ない。この２層までを全て除去した面で遺構を検出している。２層以下については、あらかじめ谷底に設けた 11 －１トレンチや、斜面部分の 11 －２トレンチ部分を一部深く掘り下げることによって下層の状況を確認している。谷底部分を中心にオリーブ褐～暗オリーブ褐色シルト層（３層）が認められ、この層は弥生土器を包含するが出土量が極めて少なく、３層除去面では遺構は認められなかった。３層から出土する弥生土器は、丘陵上の集落域から流れ込んだ遺物であると考えられることから、この３層以下については府教委の判断によって調査不要とされた。その下層の褐色シルト層（４層）は、遺物を全く含まない地山層である。（伊藤）

包含層の遺物　各遺構からは遺物が全く出土していないが、遺構面直上の１・２層中からは土師器・須恵器・弥生土器が出土している。３は須恵器杯Ｂで、熔変していることから５区の須恵器窯で焼成された製品の可能性が極めて高い。また平瓶の底部～体部片と考えられる４についても、胎土や焼成の特徴から須恵器窯の製品の可能性がある。この他に土師器皿（５）や弥生土器底部（６）が出土している。谷底部分の遺構面直下の暗オリーブ褐色層（３層）からは、７の弥生土器高杯の杯部が出土しているが、遺物の出土量が極めて少なく、丘陵上の集落域から流れ込んだものと考えられる。（笹栗）

古代の遺構と遺物

遺構は、尾根頂部では１層除去面で土坑を２基、谷底の緩斜面部では２層下面で土坑４基とピット２基を検出した。遺構からの出土遺物はないものの、後述する他の調査区の成果から、８・９世紀代の遺構と考えられる。

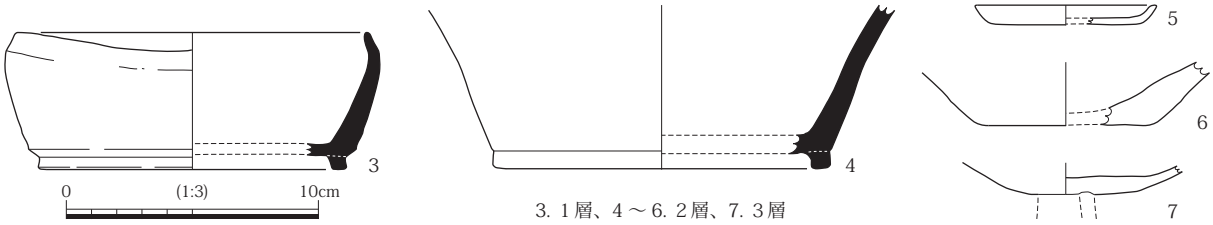


図 16　1区遺物包含層出土遺物

35 土坑　谷底部に位置し、11 － 1 トレンチで検出された土坑である。壁面の一部が被熱によって赤褐色に変色した焼土坑である。平面形は長辺 1.14 m、短辺 0.88 mの楕円形に近い隅丸長方形で、深さは 0.24 mを測る。埋土は下層が褐色シルトや炭、上層が小礫を多く含むにぶい黄褐～暗褐色のシルトである。

36 土坑　35 土坑のすぐ南側に位置する。平面形は長径 2 m、短径 1.05 mの楕円形を呈する。掘り込んで構築した遺構ではなく、炭混じりの褐色粘土質シルトが薄く溜まったような状況であった。35 土坑との位置関係や検出状況から、この土坑は 35 土坑から流れ出た、あるいは掻き出された灰や炭が溜まってできた遺構と考えられる。

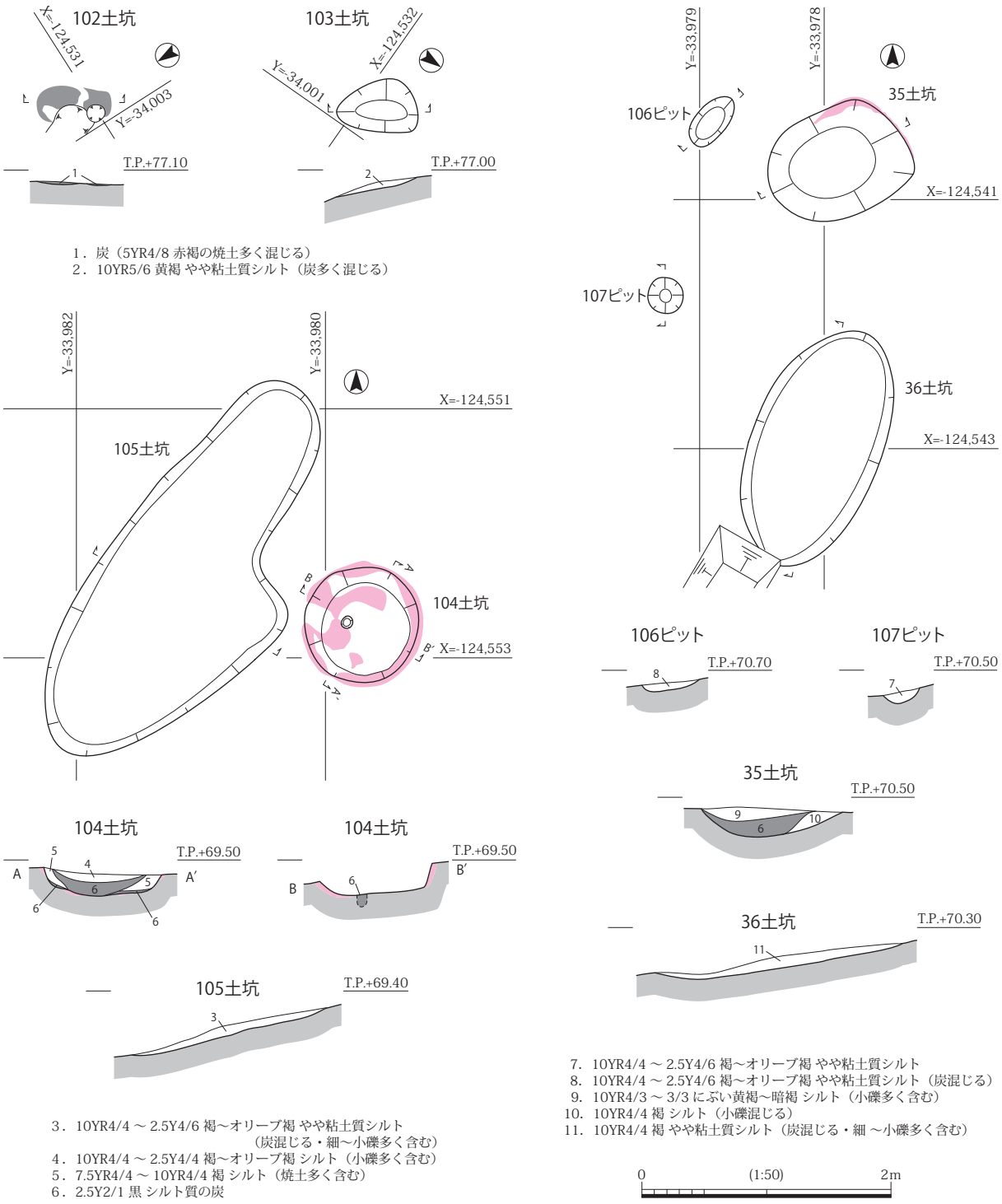
102 土坑　馬の背状に狭まった尾根の頂部に位置する。土坑状の掘り込みはなく、炭が薄く堆積するだけの遺構であるが、炭に焼土が多く含まれていることから、後世の削平によって遺構の上部が削られたと推測できる。北側の一部が削平を受けているが、炭の広がりは長径 0.6 m、短径 0.3 mの平面楕円形を呈するように認められる。

103 土坑　102 土坑の南東側に近接する。平面形は三角形に近い歪んだ楕円形で、長径 0.66 m、短径 0.43 mを測る。深さは 0.05 mで、埋土は炭が多く混じる黄褐色のやや粘土質のシルトである。

104 土坑　調査区南端部の谷底に位置する。35 土坑と同様に、壁面や底面の一部が被熱によって赤褐色に変色した焼土坑である。東壁から南壁は特に被熱が強く、東壁の一部は浅黄色に変色している箇所も認められた。平面形は直径約 0.92 ～ 0.95 mの円形で、深さは 0.18 mを測る。埋土は下部が炭、上部が焼土を多く含む褐色シルトで、断面から一度埋土を掘り直していることが観察できる。底部には小さな円形の窪みが認められ、炭が入っていたため遺構のように掘削したが、これは根の撹乱によるものであった可能性が高い。

105 土坑　104 土坑の西側に近接する。平面形は長径 3.45 m、短径 1 m以上の楕円形で、一部が 104 土坑側に張り出している。36 土坑と同様に、人為的に掘削された遺構ではなく、炭混じりの褐～オリーブ褐色粘土質シルトが薄く溜まったような状況であった。近接する 104 土坑との位置関係や検出状況から、35･36 土坑の関係と同じく、この土坑は 104 土坑とセットになる遺構であったことが窺える。104 土坑から流れ出た、あるいは掻き出された灰や炭の堆積によって形成されたと考えられる。

106・107 ピット　35 土坑の西側に位置する。106 ピットは直径約 0.3 mの円形、107 ピットは長径 0.46 m、短径 0.25 mの楕円形を呈する。深さはともに 0.1 m以下と浅い。埋土は褐～オリーブ褐色のやや粘土質シルトで、106 ピットには炭が混じっている。（伊藤）



1．炭（5YR4/8 赤褐の焼土多く混じる）
2．10YR5/6 黄褐 やや粘土質シルト（炭多く混じる）

3．10YR4/4 ～ 2.5Y4/6 褐～オリーブ褐 やや粘土質シルト
（炭混じる・細～小礫多く含む）
4．10YR4/4 ～ 2.5Y4/4 褐～オリーブ褐 シルト（小礫多く含む）
5．7.5YR4/4 ～ 10YR4/4 褐 シルト（焼土多く含む）
6．2.5Y2/1 黒 シルト質の炭

7．10YR4/4 ～ 2.5Y4/6 褐～オリーブ褐 やや粘土質シルト
8．10YR4/4 ～ 2.5Y4/6 褐～オリーブ褐 やや粘土質シルト（炭混じる）
9．10YR4/3 ～ 3/3 にぶい黄褐～暗褐 シルト（小礫多く含む）
10．10YR4/4 褐 シルト（小礫混じる）
11．10YR4/4 褐 やや粘土質シルト（炭混じる・細 ～小礫多く含む）

図 17　1 区遺構平面・断面図

第３節　２区の調査成果〔図 18 ～ 38、写真図版 12 ～ 17・49 ～ 53〕

本調査範囲の西辺部に位置する東西約 15 m、南北約 100 mの南北に長い調査区である。西向き斜面の最も雨水・湧水が集まる場所に当たっていたことから、本格的な調査の前に、砂防対策のための沈砂池を設ける必要があった。このため当初予定していた範囲までは広げることができず、調査面積は約 1,500 ㎡となった。

調査区内の地形は、南半に平坦部がみられるが、中央には大きな谷筋があり、北半はその谷筋にむかかう斜面となっている。層序は表土層の下に黄褐色シルト（１層）が約 0.2 mの厚さであり、それを除去すると中央の谷部を挟んで南半部は直ちに地山となる。北半部では濃い褐色シルト（２層）が北端の狭い範囲に広がっている。この地層は弥生時代から古代までの遺物を包含し、上面で９世紀代を主とする遺構が検出できる。斜面を平坦にするための古代の整地層であったと考えている。２層以下については、厚い褐～黄褐色粘土質シルト（３層）が確認されているが、遺構、遺物が認められないため、地山と考えられる。（伊藤）

包含層の遺物　遺物包含層からは、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・黒色土器・軒丸瓦・鉄製品と、弥生土器・石器などの各種遺物が出土している。１層からは古代の遺物と弥生時代の遺物がともに出土するが、古代の遺物の出土量が多く、その中でも中央谷部より北側に分布が偏る。２層中からは古代の遺物の出土量は総じて少ないが、弥生土器に混じって土師器が出土している。３層上面からの遺物の出土量は少なく、土師器・弥生土器が出土している。

１層中からは多くの土器が出土しているが、大半が破片である。８～ 20 は１層上面から出土したものである。９は口径 8.6cm、器高 3.4cm を測る須恵器杯Ａで、形態から７世紀代の可能性がある。11 は須恵器杯Ｂで、口径 12.4cm、器高 4.3cm を測る。高台が外端部に取り付き体部が外開きの形態である。12 は壺Ｍで、口縁端部がやや内傾する。11・12 は９世紀中頃に位置づけられる。13 は須恵器壺Ｌの口縁～体部で、頸部が口縁にむかってやや外側に開き、体部は丸みをもつ形態で、頸部は２段接合である。平城Ⅳ～Ⅴ、８世紀後半に位置づけられる。14 壺Ｌは平底の底部がやや外側に開く形態で９世紀代のものである。17 は灰釉陶器の壺底部である。これらとともに弥生土器の底部（18･19）や、鉢（20）が出土している。16 は成合遺跡から唯一出土した平城宮系の軒丸瓦である。中房には１＋６の蓮子を配し、蓮弁は盛り上がりがみられるが、磨滅が著しく文様がかなり不鮮明である。外区内縁には珠文を、外区外縁には凸線の鋸歯文を配する。これについては平城宮で同笵瓦は出土していないが、梶原瓦窯跡で出土しているⅨ型式（Ｔ 29）[1)] が同笵瓦であることが確認でき、梶原寺で表採された島谷コレクションの軒丸瓦にも同笵と考えられる瓦片がある。[2)] さらにこの成合遺跡出土の 16 軒丸瓦と梶原瓦窯跡出土のⅨ型式（Ｔ 29）は、灰色のやや軟質の焼き上がりで、混和材が少ないといった胎土の特徴も共通している。これらの瓦と文様構成がよく似た梶原瓦窯跡出土のＸ型式（Ｔ 30）は、梶原寺（図版６－９）[3)] と郡家今城遺跡[4)] で同笵瓦が出土しており、このうち梶原瓦窯跡と梶原寺出土品には、外縁外側に一段低い平縁風の突出がみられる特徴的な形態を示しているが、この成合遺跡出土の 16 軒丸瓦についてもこの平縁がついている。ただし、成合遺跡出土の 16 軒丸瓦は、磨滅が著しいため全周するかどうかは判断がつかない。そのため笵を押し当てた際に粘土がはみ出した痕跡の可能性もある。丸瓦と瓦当の接合方法は、瓦当裏面に溝を施し、そこに丸瓦を差し込んでから粘土が貼り付けられているが、梶原寺出土のＸ型式の軒丸瓦と接合方法が共通する。以上の点から、この成合遺跡出土の 16 軒丸瓦は梶原瓦窯跡

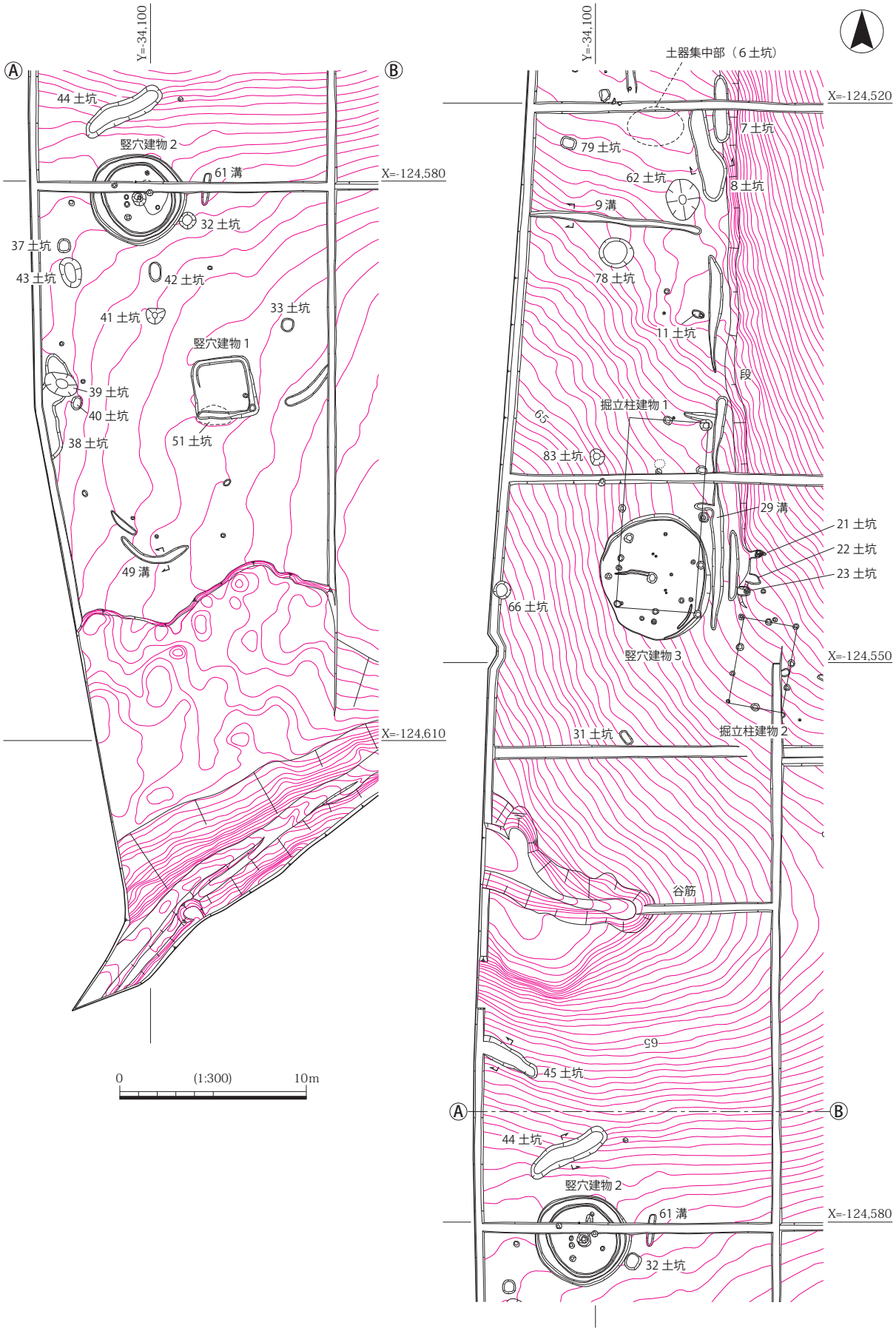


図 18　2 区検出遺構全体平面図

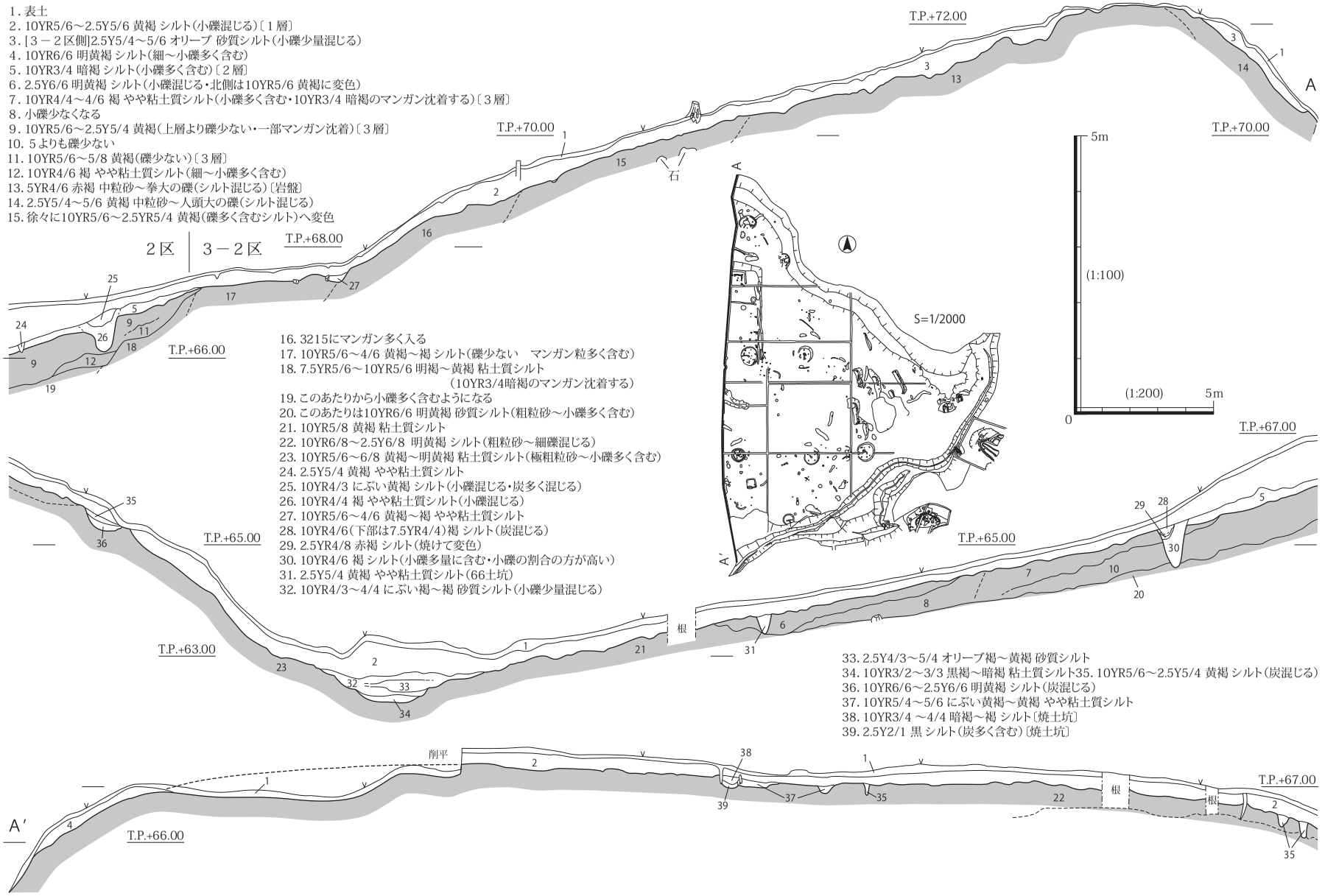

1. 表土
2. 10YR5/6～2.5Y5/6 黄褐 シルト(小礫混じる)〔1層〕
3. [3－2区側]2.5Y5/4～5/6 オリーブ 砂質シルト(小礫少量混じる)
4. 10YR6/6 明黄褐 シルト(細～小礫多く含む)
5. 10YR3/4 暗褐 シルト(小礫多く含む)〔2層〕
6. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト(小礫混じる・北側は10YR5/6 黄褐に変色)
7. 10YR4/4～4/6 褐 やや粘土質シルト(小礫多く含む・10YR3/4 暗褐のマンガン沈着する)〔3層〕
8. 小礫少なくなる
9. 10YR5/6～2.5Y5/4 黄褐(上層より礫少ない・一部マンガン沈着)〔3層〕
10. 5よりも礫少ない
11. 10YR5/6～5/8 黄褐(礫少ない)〔3層〕
12. 10YR4/6 褐 やや粘土質シルト(細～小礫多く含む)
13. 5YR4/6 赤褐 中粒砂～拳大の礫(シルト混じる)〔岩盤〕
14. 2.5Y5/4～5/6 黄褐 中粒砂～人頭大の礫(シルト混じる)
15. 徐々に10YR5/6～2.5YR5/4 黄褐(礫多く含むシルト)へ変色
16. 3215にマンガン多く入る
17. 10YR5/6～4/6 黄褐～褐 シルト(礫少ない　マンガン粒多く含む)
18. 7.5YR5/6～10YR5/6 明褐～黄褐 粘土質シルト
(10YR3/4暗褐のマンガン沈着する)
19. このあたりから小礫多く含むようになる
20. このあたりは10YR6/6 明黄褐 砂質シルト(粗粒砂～小礫多く含む)
21. 10YR5/8 黄褐 粘土質シルト
22. 10YR6/8～2.5Y6/8 明黄褐 シルト(粗粒砂～細礫混じる)
23. 10YR5/6～6/8 黄褐～明黄褐 粘土質シルト(極粗粒砂～小礫多く含む)
24. 2.5Y5/4 黄褐 やや粘土質シルト
25. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト(小礫混じる・炭多く混じる)
26. 10YR4/4 褐 やや粘土質シルト(小礫混じる)
27. 10YR5/6～4/6 黄褐～褐 やや粘土質シルト
28. 10YR4/6(下部は7.5YR4/4)褐 シルト(炭混じる)
29. 2.5YR4/8 赤褐 シルト(焼けて変色)
30. 10YR4/6 褐 シルト(小礫多量に含む・小礫の割合の方が高い)
31. 2.5Y5/4 黄褐 やや粘土質シルト(66土坑)
32. 10YR4/3～4/4 にぶい褐～褐 砂質シルト(小礫少量混じる)
33. 2.5Y4/3～5/4 オリーブ褐～黄褐 砂質シルト
34. 10YR3/2～3/3 黒褐～暗褐 粘土質シルト35. 10YR5/6～2.5Y5/4 黄褐 シルト(炭混じる)
36. 10YR6/6～2.5Y6/6 明黄褐 シルト(炭混じる)
37. 10YR5/4～5/6 にぶい黄褐～黄褐 やや粘土質シルト
38. 10YR3/4 ～4/4 暗褐～褐 シルト〔焼土坑〕
39. 2.5Y2/1 黒 シルト(炭多く含む)〔焼土坑〕
2区
3－2区
T.P.+72.00
T.P.+70.00
T.P.+68.00
T.P.+66.00
T.P.+65.00
T.P.+63.00
T.P.+67.00
A
A'
石
根
削平
S=1/2000
5m
(1:100)
(1:200)
0

図19　2区地層断面図

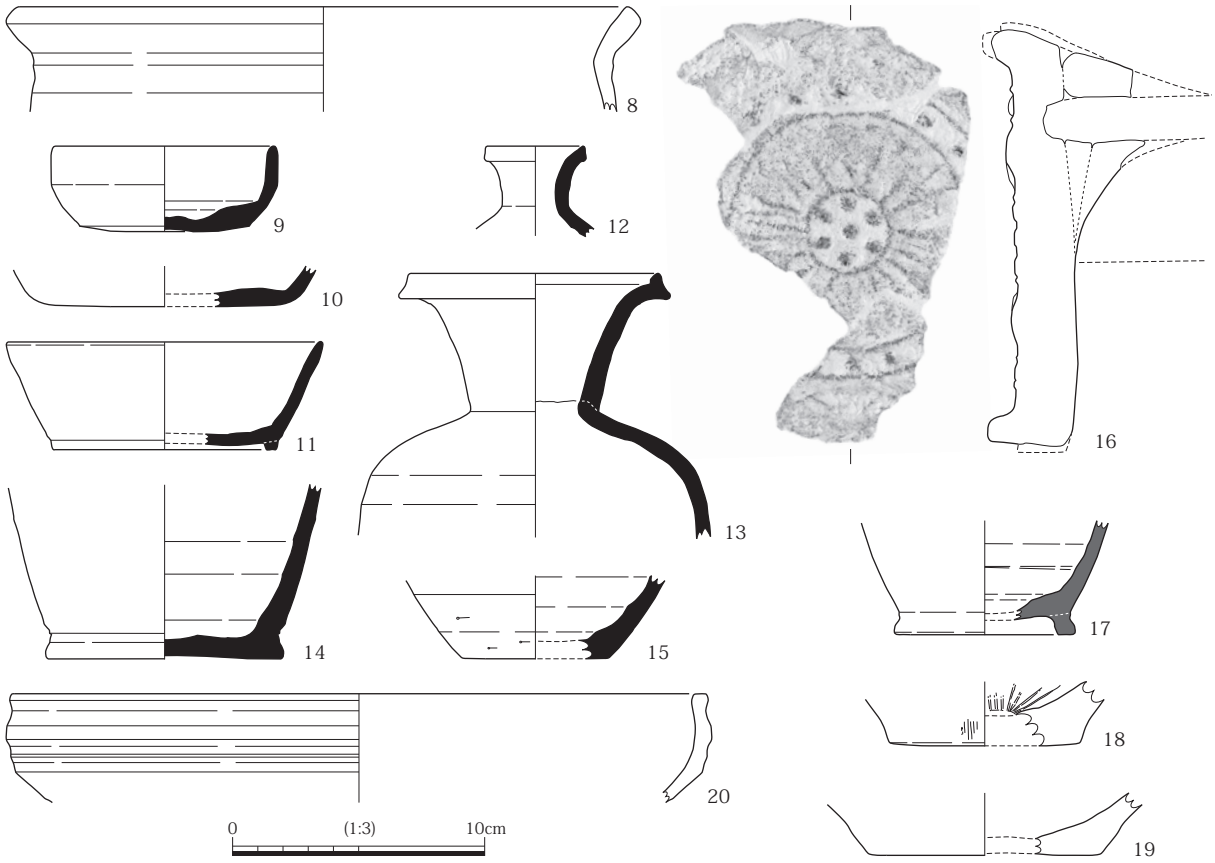


図 20　2 区 1 層上面出土遺物

で生産された製品であることを、ほぼ確実視することができる。

21 ～ 65 は 1 層中から出土したものである。そのうち土師器は 21 ～ 35 までを図化しており、供膳具や甕が多い。21 は杯 B と考えられる細片で、22 ～ 28 は皿である。皿は 22 ～ 26 が口径 14.6 ～ 15.6cm、27・28 が口径 18.9・18.8cm をそれぞれ測り、大小ふたつの規格があったと考えられる。内外面の摩滅が著しくはっきり観察できる個体は少ないが、外面ヘラケズリの c 手法と外面ナデの e 手法のものが混在しており、9 世紀前半から中頃を中心とした時期のものが多い。29 ～ 35 は甕で、形態のバリエーションはあるが、いずれの個体も頸部外面に強いナデを施し、口縁端部は内側に巻き込むものが多い。30・31・33 は体部外面にタタキがみられるが、平安京などでも同時期の甕の出土例が報告されている。36 ～ 39 は黒色土器の A 類（内黒）である。36・37 は中型の杯で、口縁部外面にもミガキが施されており、部分的に黒色化している。38・39 は小型の甕である。これらの黒色土器は概ね 9 世紀前半から中頃に位置づけられる。40 ～ 55 は須恵器である。40 は口径 12.1cm、器高 3.9cm を測る杯 A で、内外面に×字形の火襷きがみられる。41 ～ 43 は杯蓋でいずれの個体もつまみが欠損している。45 は杯 B の底部で、高台は外端につけられる。46 は壺の頸部、49 は削出し高台の底部である。47・48・50 ～ 52 は壺 M で、内面の回転ナデが顕著で頸部に絞り痕がみられることから水挽き成形と考えられる。口縁端部の形態は、47 のような端面をもつタイプと、48 のような丸くおさめるタイプが混在する。平底で糸切がみられ、9 世紀前半から中頃に位置づけられる。54・55 は壺の底部～体部で、丸底の底部に高台が付けられる。54 は壺 A、55 は大型の短頸壺などの器形が推測される。この他に鉄製品が 3 点出土している。59 は鉄釘で、長さ 7.9cm を測る。頭部は折曲による L 字形で屈曲部に抉り込みが入るタイプである。60 は棒状の鉄製品であるが、断面の形状が 59 とは異なるため鉄釘である

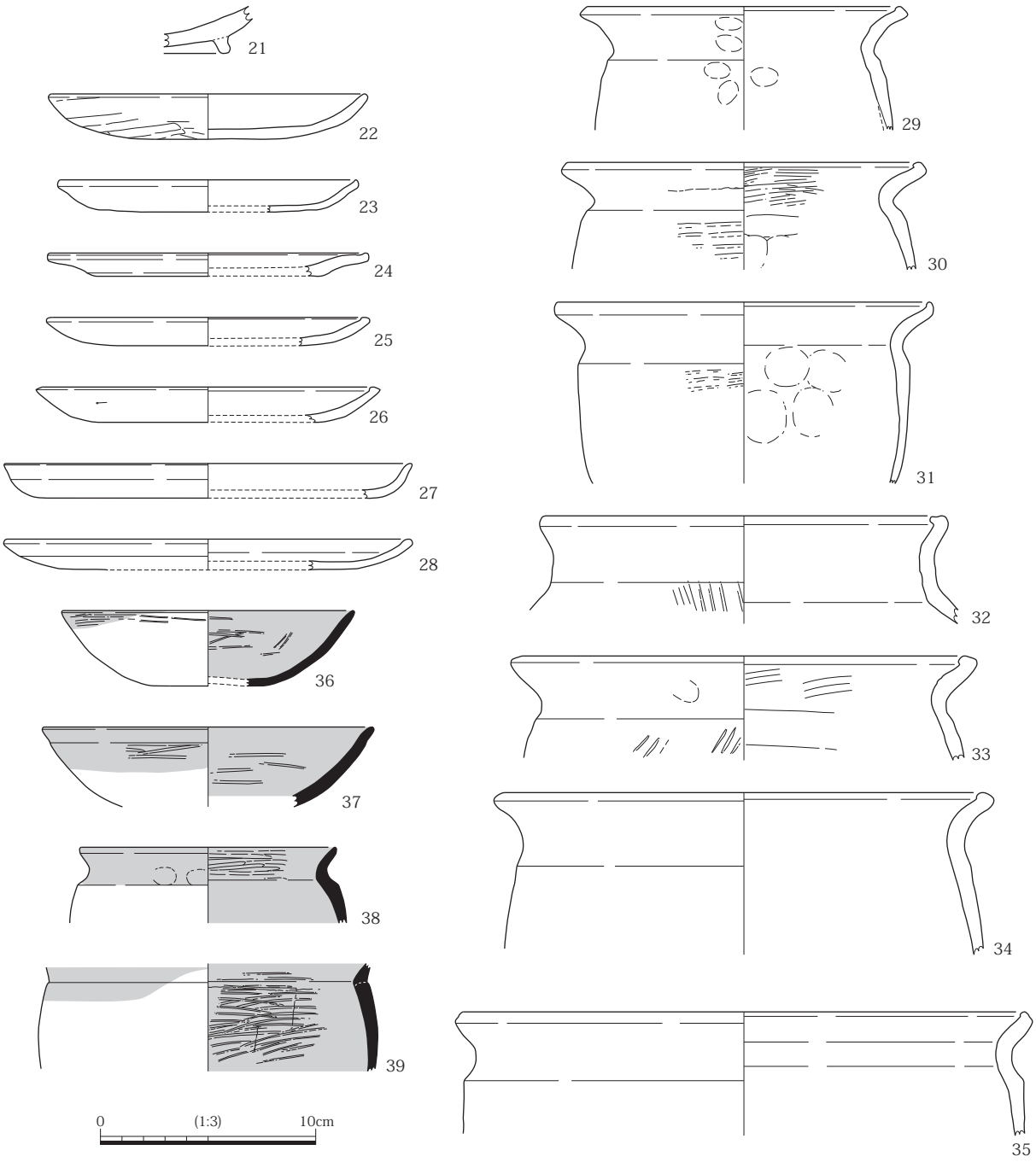


図 21　2区 1 層出土遺物

かは判断しがたい。61 は板状に長い鉄を 2 ヶ所で直角に折り曲げた形態で、用途は不明である。いずれも 8 ～ 9 世紀のものと推測される。弥生時代の遺物は出土量が少なく、土器も小片が多い。56 は壺の頸部で、幅広の貼付突帯に刻目文が施される。有段口縁の大型壺の破片と推測され、Ⅳ様式後半頃に位置づけられる。他には 62 台石などが出土している。

63 ～ 65 は 1 層の下面から出土した遺物である。64 は須恵器の壺底部で、高台に熔着がみられることから、5 区の須恵器窯で焼かれた製品の可能性もある。63 は外面タテハケを施す弥生土器の広口壺、65 は弥生土器の鉢口縁である。

66 ～ 71 は 2 層直上から出土した遺物である。66 は外面ヘラケズリを施した土師器皿、67 は土師器杯 A で、いずれも口縁端部が僅かに上方に引き上げられており、9 世紀前半に位置づけられる。68

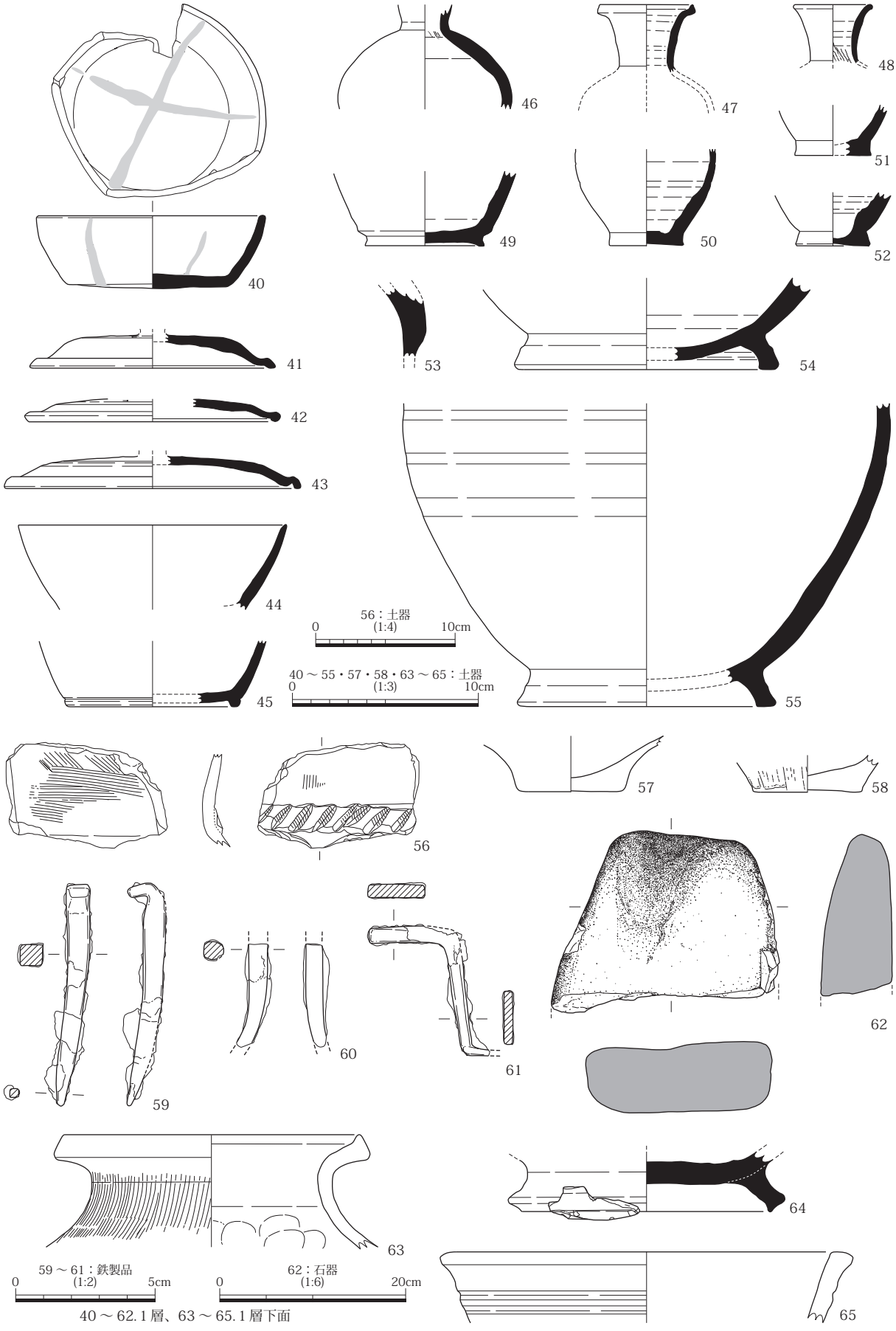


図 22　2 区 1 層～ 1 層下面出土遺物

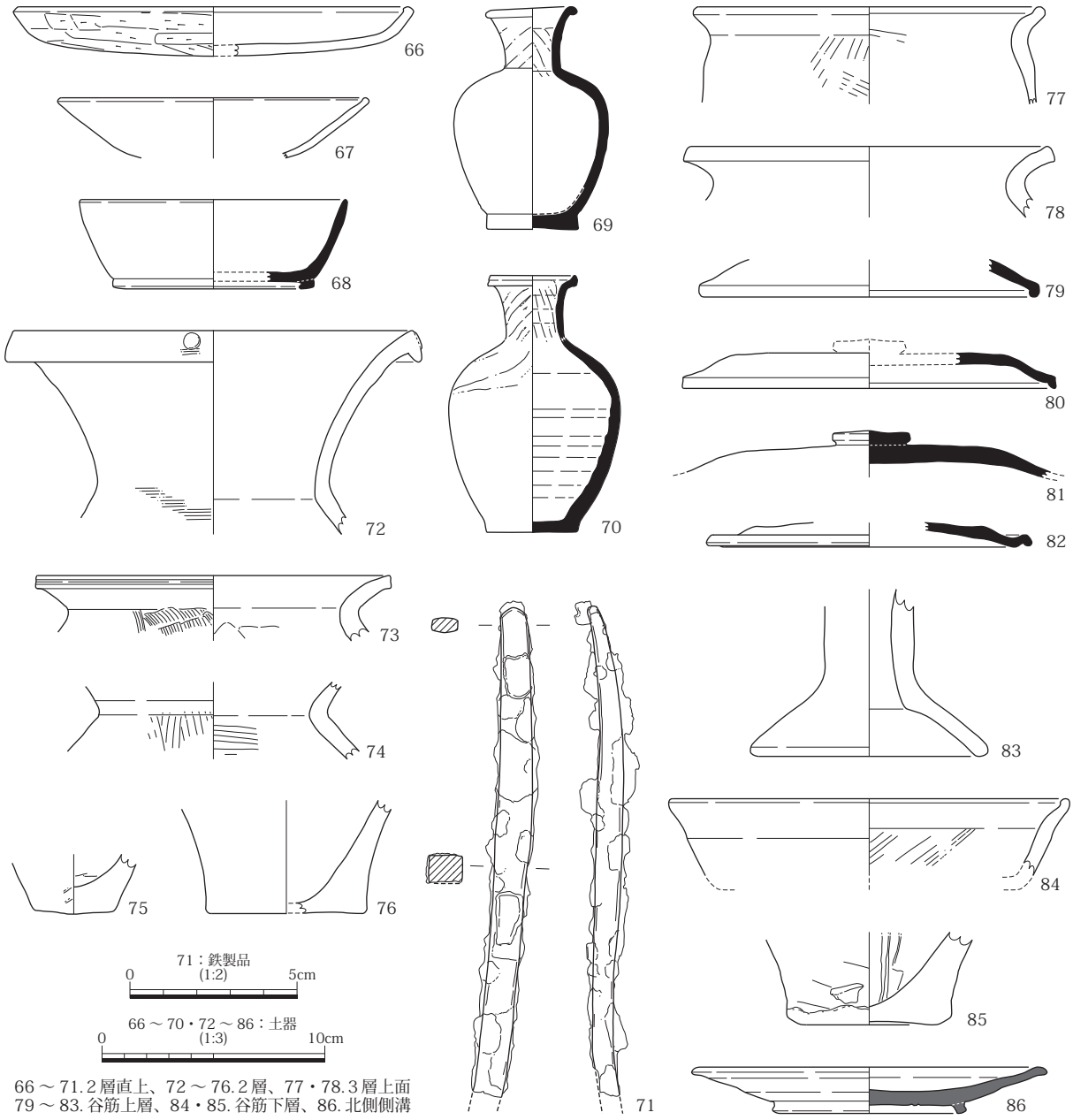


図 23　2 区 2 層および谷筋ほか出土遺物

は口径 11.8cm、器高 4.0cm を測る須恵器杯 B である。69・70 は平底の須恵器壺 M で、糸切り痕がみられる。頸部～体部上半で絞り痕が明瞭に観察でき、水挽き成形によるものと考えられる。71 は長さ 14.6cm と棒状に長い用途不明の鉄製品で、先端が反っているため、一見すると鉈と見間違うが、刃部は造り出されていないため、別の用途を想定する必要がある。

2 層からは 1 層に比べると遺物の出土量は少なく、弥生土器の比率が高まる。72 は広口壺の頸部～口縁部で、頸部が外方に開き口縁部がやや垂下する。摩滅が著しいため、調整がはっきりしないが、口縁端部には円形浮文が一部で残存し、波状文もしくは直線文が僅かにみられる。Ⅳ様式末を中心とした時期に位置づけられる。73 は口縁端部に凹線文が施された甕、74 は甕の頸部の破片で、75・76 は底部である。また、3 層上面からは 77 の土師器甕や、78 の弥生土器壺が出土している。

2 区のほぼ中央に位置する谷筋からは、周辺部からの流れ込みと考えられる遺物が出土している。上層から出土した 79 ～ 82 は須恵器杯蓋で、口縁端部に面をもつ 79・80 や、扁平なつまみをもつ 81

は８世紀中頃のものである。83 は弥生土器の柱状の脚部をもつ高杯である。84・85 は下層からの出土で、84 は土師器杯である。内外面の摩滅が著しいが内面に暗文がみられ、平城Ⅲ、８世紀中頃に位置づけられる。

また､調査区北側の側溝掘削中に出土した86は灰釉陶器の段皿で､1層出土の古代の遺物と関連する。内面はしっかりと施釉され、器形や高台の形状からK14 窯式期、９世紀前半頃に位置づけられる。

包含層から出土した遺物は、７世紀代の遺物も一部含まれるものの、大きくは弥生時代中期後半（Ⅳ様式）の遺物と８・９世紀代の遺物に分別できる。古代の遺物は８世紀中頃から後半（平城Ⅲ～Ⅳ）と、９世紀前半から中頃（平安京Ⅰ期新～Ⅱ期古）の遺物が中心で、その中でも９世紀前半から中頃の遺物の出土量が特に多く、造成された段の斜面裾からまとまって遺物が出土している。その一方で、５区の須恵器窯が操業した８世紀末から９世紀初頭頃の遺物は、確実視できるものは極めて少ない。（笹栗）

古代の遺構と遺物

遺構については１層下面で検出され、古代と弥生時代中期後半の遺構が同一面で重複している。古代の遺構は、包含層の出土遺物から９世紀前半から中頃のものが主体となるが、８世紀代の遺構もみられる。掘立柱建物２棟（掘立柱建物１・２）のほか、溝や土坑などがある。また遺構を築くにあたって、丘陵斜面を造成し、平坦面を成形した痕跡も認められた。

斜面の造成　調査区北半部で確認した斜面の造成痕跡である。南西方向にむかって傾斜する斜面の途中を切土し、それによって発生した土をその西側斜面に盛って平坦面を造成したもので、等高線の不自然さからも、明らかに人為的に切土されたものであったことが窺えた。この平坦面には後述する掘立柱建物１が建てられている。切土による段は、国土座標軸Ｘ＝－ 124,547 m付近を起点にして、Ｙ＝－ 34,092 ～－ 34,093 mのライン上をほぼまっすぐに北にむかってのびており、後述する３－２区に入ってすぐに西に折れてＬ字状となる。この段の裾部には、29 溝や７・８土坑など浅い溝や土坑が検出されている。現地調査の段階では、その形状によって溝と土坑とに区別したが、本来は南北に続く一連の遺構と考えられる。

29 溝　段裾に設けられた溝のうち、その南半部を指す。幅は約 0.6 ～ 0.7 mで、深さは深い箇所でも 0.1 m程度と浅い。埋土はにぶい黄色シルトである。

出土遺物には、周辺部からのものも含め土師器・須恵器・黒色土器・鉄製品などがみられる。87 ～ 89 は埋土中から出土したものである。87 は土師器の甕で、内外面ユビナデ・ユビオサエで成形し、外面には煤が付着する。88 はやや開き気味に立ち上がる体部に復元できる須恵器杯で、９世紀代と考えられる。89 は鉄釘と考えられる棒状の鉄製品である。90 ～ 93 は 29 溝周辺から出土した遺物である。90 は口径 19.8cm、器高 1.3cm を測る土師器皿で外面はナデによるｅ手法である。91 は扁平なつまみの付く須恵器杯蓋で、平城Ⅲ、８世紀中頃に位置づけられる。92 は須恵器壺Ｌの頸部～体部で、頸部に接合痕がみられず内面のナデが強いことから水挽き成形によるものと推測される。93 は黒色土器Ａ類の杯で、内面に細かいミガキを施す。90・92・93 はいずれも９世紀前半から中頃を中心とした時期に位置づける。

７・８土坑　調査区北端部の段裾にみられる土坑状の溝である。29 溝とは分離しており、幅が広くなっていたため土坑としたが､本来は29溝と一連の溝であった可能性が高い。7 土坑は３－２区までのび、長さは 3.6 mを測る。幅は 0.75 ～ 0.9 mで、深さは 0.1 m以下と浅い。８土坑は北端部を北側溝に切

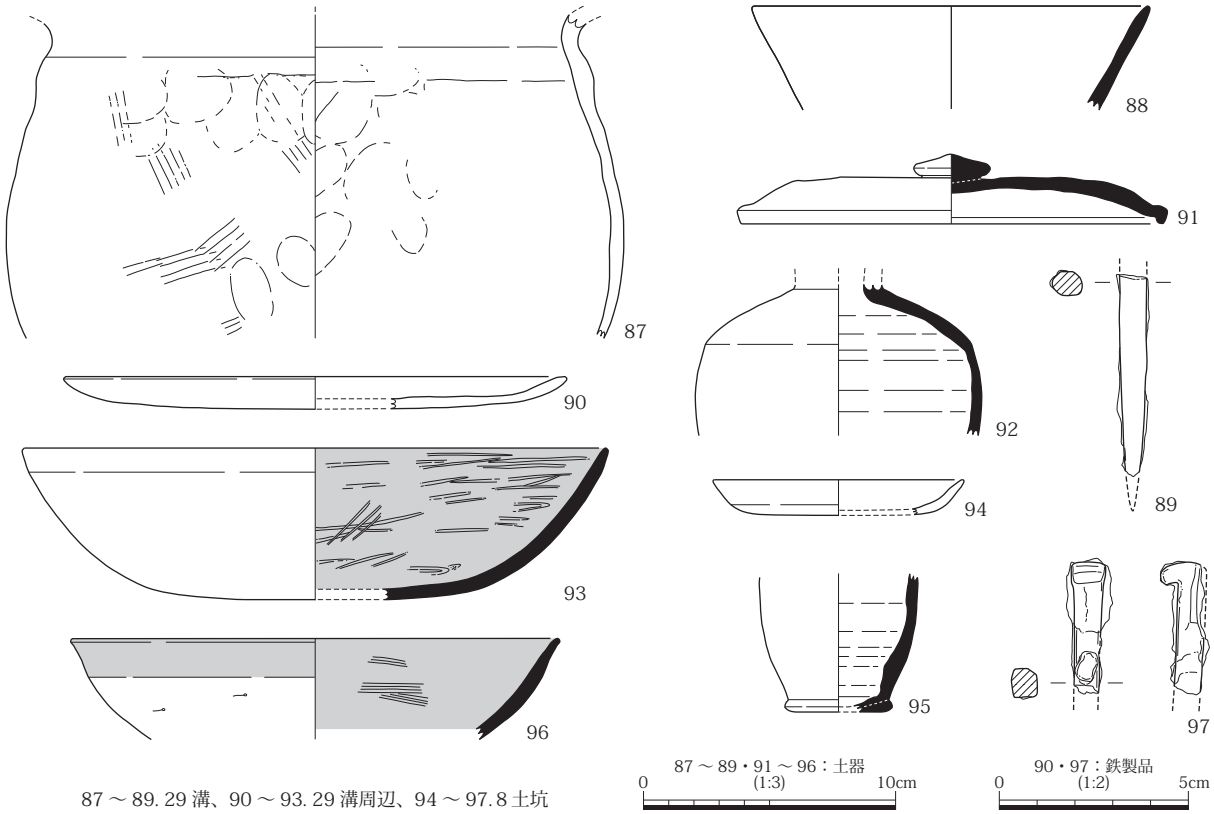


図 24　29 溝・８土坑出土遺物（周辺部出土も含む）

られるが、３－２区では検出していないことから、当調査区内でおさまる規模であったと考えられる。その長さは５m強で、幅は 0.95 ～ 1.5 mを測る。深さは 29 溝・７土坑と同じく 0.1 m以下で、埋土は両者とも褐色のやや粘土質シルトである。

29 溝と同様に埋土からは、土師器・須恵器・黒色土器のほか鉄釘が１点出土している。94 は土師器皿で、口径 9.9cm、器高 1.4cm を測る。外面ナデによるｅ手法で、９世紀前半から中頃に位置づけられる。95 は壺Mで、平底で丸みをもたない体部であることから、９世紀中頃以降に位置づけられる。96 は黒色土器Ａ類の杯もしくは椀で、口縁部外面も一部黒色化する。97 は鉄釘の頭部で、頭部形態は折曲げによるＬ字形である。この他に、併設する 62 土坑出土の 113 土師器甕は、８土坑出土破片と接合する。

掘立柱建物１　造成された段西側の平坦部に位置し、弥生時代の竪穴建物３と重複する。竪穴建物３が完全に埋まりきった後に、地山の土とよく似た明黄褐色のやや粘土質シルトを盛って造成し建物が建てられている。梁行２間、桁行４間の南北棟で、建物の主軸は座標北から４°程東に振れる。柱間寸法は梁行が 2.15 m等間、桁行が 2.5 m等間である。柱掘方は斜面上部側にあたる東側柱筋の残りがよく、平面形は一辺 0.4 ～ 0.6 m程の隅丸方形を呈する。深さはいずれも 0.2 m以上あり、最も深いものでは 0.45 mを測る。西側柱筋については斜面の下部側であることから、平面形も円形に近いものとなり、深さも浅い。また木の根の影響などにより検出できない箇所もある。埋土は地山の小ブロック土を多く含む黄褐色のやや粘土質シルトや炭が少量混じる明黄褐色のやや粘土質シルトなどで、柱痕跡が確認できるものもある。建物内部には２ヶ所、被熱によって赤褐色に変質している箇所が認められた。

柱穴のうち 17・74・81 ピットの埋土からは、土師器・須恵器・弥生土器が出土している。98 は 17 ピットから出土した土師器高杯の杯底部である。内外面の摩滅が著しいが、内面に暗文がみられる。北妻柱にあたる 81 ピットからは 99 須恵器杯Ｂの底部片が、壁面に張り付くような状態で出土した。

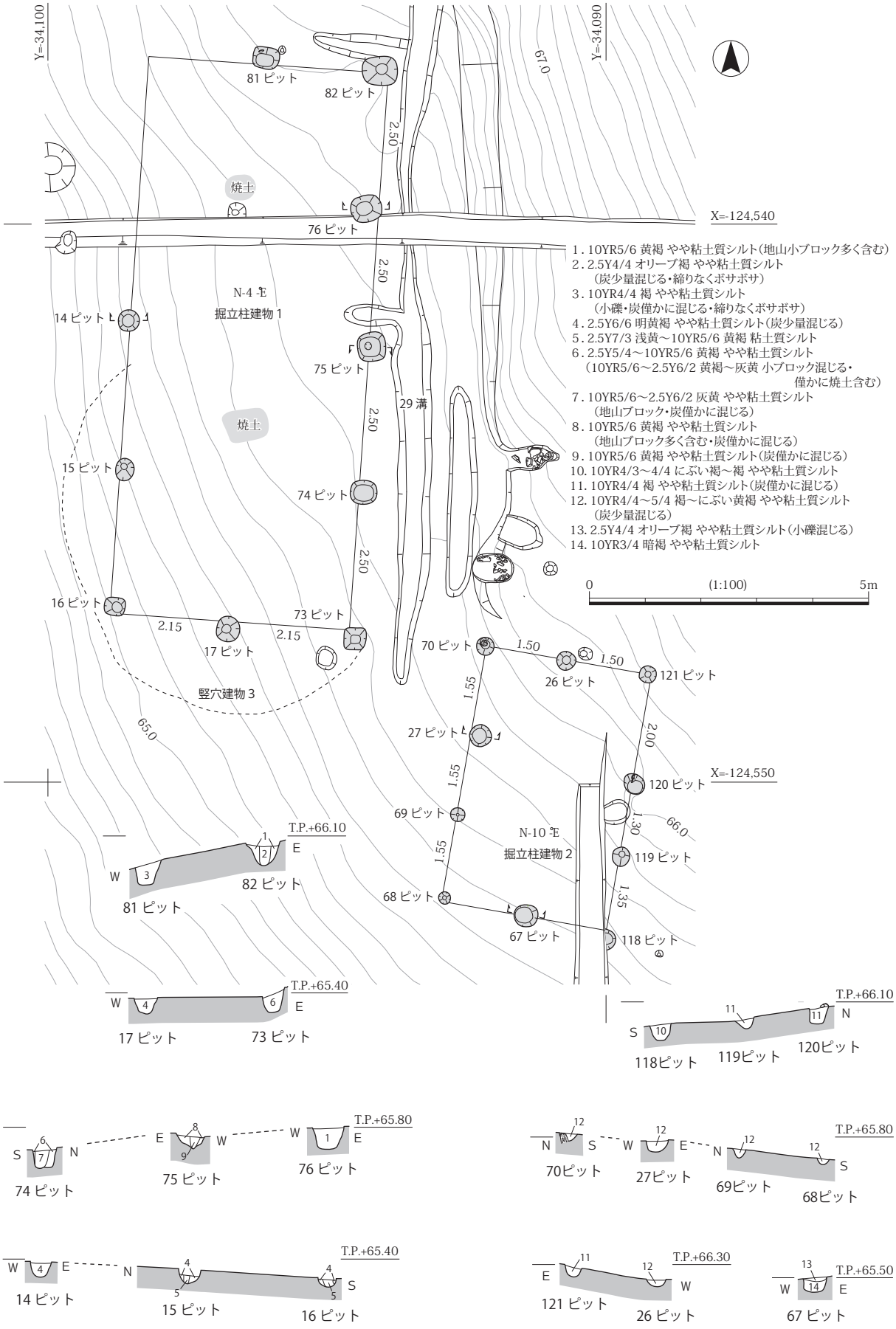
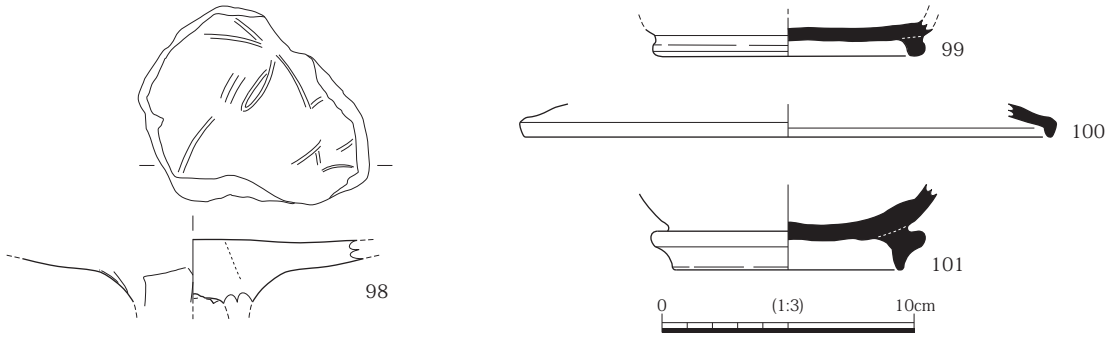


図 25　掘立柱建物 1 ・ 2 平面・断面図



98. 掘立柱建物１（17 ピット）、99. 掘立柱建物１（81 ピット）、100・101. 掘立柱建物２（120 ピット）

図 26　掘立柱建物１・２出土遺物

98 については８世紀代と考えられるが、99 については９世紀代の可能性も残されており、遺構の詳細な帰属時期については判断しがたい。弥生土器については、細片のため図化しなかったが、重複する竪穴建物３に伴うものの混入と考えられる。

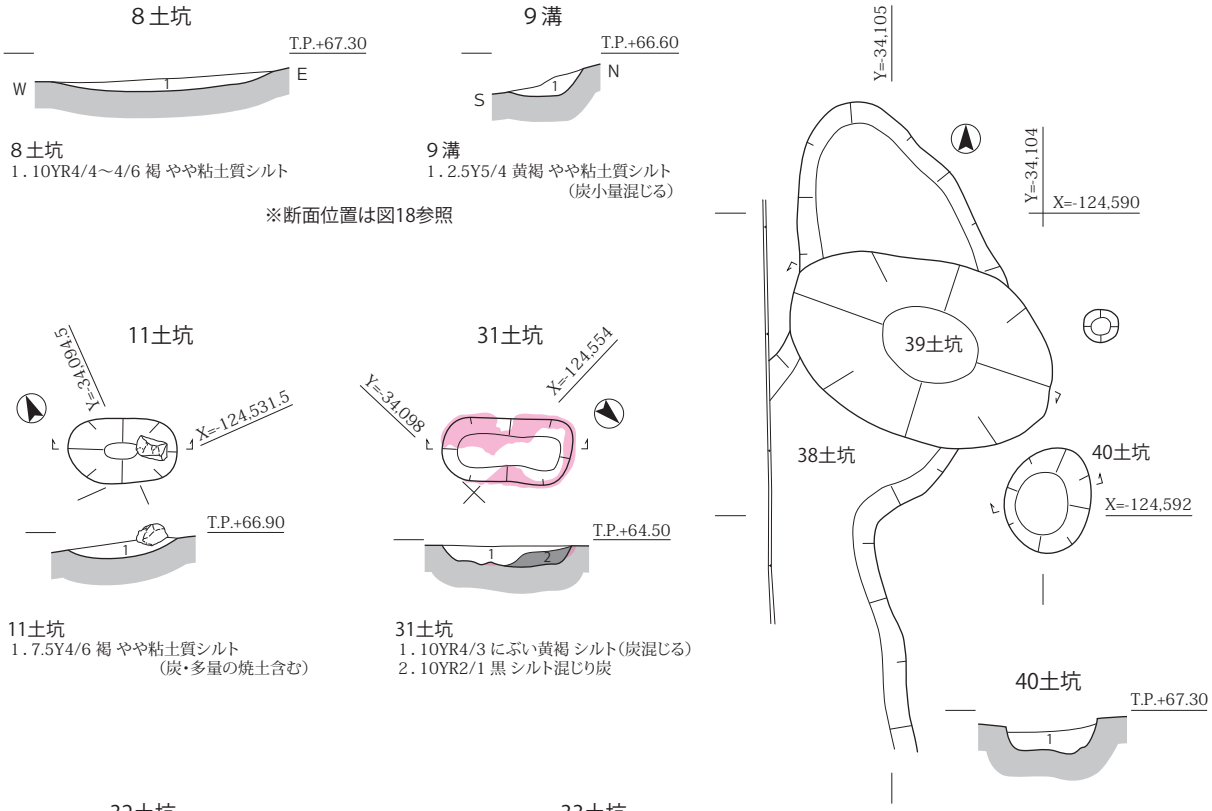
掘立柱建物２　掘立柱建物１の南東側に近接し、３－１区に跨いで検出した。上記の切土造成によってできた段の南端部に位置する。掘立柱建物１と同じ南北棟であるが、主軸の振れは掘立柱建物１よりも大きく、座標北から 10°東に振れる。梁行２間、桁行３間の建物で、柱間寸法は梁行が 1.5 m等間、桁行は西側柱筋が 1.55 m等間であるのに対して、東側柱筋の柱間は南から 1.35 m、1.30 m、2.0 mと揃っていない。柱掘方はどれも直径 0.2 ～ 0.4 m程度の円形で、深さは約 0.1 ～ 0.3 mを測る。埋土は炭が少量混じる褐～にぶい黄褐色のやや粘土質シルトなどである。

柱穴のうち 119・120 ピットの埋土からは須恵器片が少量出土している。100 杯蓋と 101 壺底部は、ともに 120 ピットからの出土である。100 の口縁端部の形状や 101 の高台の形状から、いずれも８世紀代に位置づけられる。

主軸の振れ幅が微妙に異なるものの、掘立柱建物１の南妻柱筋と、掘立柱建物２の北妻柱筋は、約 2.4 m隔ててほぼ揃っており、両者が計画的に配置された可能性がある。掘立柱建物１出土の遺物とは、時期差がみられる可能性もあることや、斜面の段造成との関係から、ふたつの建物の時期的な併行と位置関係についての理解がやや難しい。

土坑　土坑は、１区で検出された 35・104 土坑と同様の焼土坑が多い。一辺１m前後の小規模なものがほとんどで、埋土や形状から大きく２種に分類することができる。１つは、被熱によって壁面や底面が赤褐色に変色したもので、壁面はよく焼けているが、底部まで赤変しているものは少なく、31・37・79 土坑などがそれにあたる。もう１つについては、壁面や底面に被熱痕跡がみられないが、埋土に炭が充満したもので、32・33 土坑がそれにあたる。これらの焼土坑からは、遺物がほとんど出土しないため、詳細な時期を決定することが難しいが、一部からは古代の遺物が出土していることから、多くは古代に帰属するものと想定している。ただし、同一遺構面からは弥生時代の遺構も多数検出されているため、遺構の帰属時期の判断が難しいものが多数含まれている。遺構の機能、性格については、一部から鉄釘が出土していることなどから、火葬や納骨に関わる機能を想定している。

11 土坑　調査区北半の掘立柱建物１の北側に位置する。平面形は長径 0.72 m、短径 0.43 mの楕円形で、深さは 0.1 mを測る。壁面など被熱による変質は認められないが、褐色粘土質シルトの埋土に炭や多量の焼土が含まれていたことから、焼土坑の１つであることが平面検出の段階から判断できた。埋土の上面からは、標石のような人頭大の石材が出土している。



8土坑
1．10YR4/4～4/6 褐 やや粘土質シルト

9溝
1．2.5Y5/4 黄褐 やや粘土質シルト
（炭小量混じる）

※断面位置は図18参照

11土坑
1．7.5Y4/6 褐 やや粘土質シルト
（炭・多量の焼土含む）

31土坑
1．10YR4/3 にぶい黄褐 シルト（炭混じる）
2．10YR2/1 黒 シルト混じり炭

39・40土坑
1．2.5Y5/4 黄褐 やや粘土質シルト
2．2.5Y4/4 オリーブ褐 やや粘土質シルト

32土坑
1．10YR4/3 にぶい黄褐 シルト（炭混じる）
2．10YR2/1 黒 シルト（炭多量に含む）

33土坑
1．N1.5/0 黒 シルト質に土壌化した炭

62土坑
1．10YR5/6 黄褐 やや粘土質シルト（炭混じる）

37土坑
1．10YR4/3 にぶい黄褐 シルト（炭混じる）
2．10YR2/1 黒 シルト（炭多量に含む）

41土坑
1．2.5Y5/4 黄褐 やや粘土質シルト（小礫混じる）
2．10YR3/2 黒褐 やや粘土質シルト（炭多く含む）
3．10YR4/6 褐 やや粘土質シルト（炭・焼土混じる）

図 27　2区古代の遺構平面・断面図

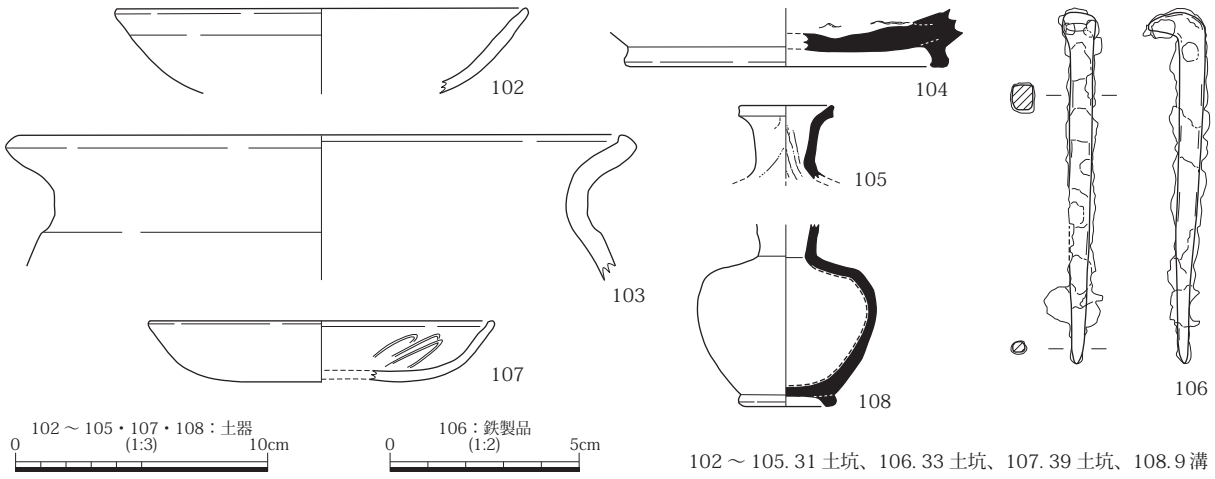


図 28　2区古代の遺構出土遺物

31 土坑　調査区北半の掘立柱建物 1 の南側に位置する。平面形は長径 0.86 m、短径 0.43 mの楕円形に近い隅丸長方形で、深さは約 0.14 mを測る。埋土はシルト混じりの炭や炭混じりのにぶい黄褐色シルトである。壁面および底面の一部に被熱による赤褐色の変質が認められた。埋土中からは、土師器、須恵器が出土している。102 は土師器の杯 A と考えられ、外面ナデによる e 手法である。103 は土師器甕で、口縁端部を内上方に突起させておさめる。105 は壺Mの口縁で、内外面に絞り痕が確認できる。104 は壺の底部である。これらの遺物は概ね 9 世紀前半から中頃に位置づけられる。

32 土坑　竪穴建物 2 の南東側に接する位置で検出された。平面形は長辺 0.88 m、短辺 0.82 mの隅丸方形で、深さは 0.12 ～ 0.14 mを測る。埋土は下層が炭を多量に含む黒色シルトで、上層が炭混じりのにぶい黄褐色シルトである。壁面などに被熱の痕跡は認められない。遺物も出土していない。

33 土坑　竪穴建物 1 の北東側に位置する。平面形は長辺 0.74 m、短辺 0.69 mの隅丸方形で、深さは 0.11 mを測る。埋土はシルト質に土壌化した炭である。壁面などに被熱の痕跡は認められない。埋土中からは、土師器の小片数点とともに、鉄釘が 1 本出土している。106 釘は頭部から先端まで完存しており、長さ 9.3cm を測る。頭部は折曲げて作り出し、上端は丸くカーブした形状である。この鉄釘は棺を留めていたものであった可能性が高い。つまり 31 土坑のように壁面が焼けて赤褐色に変質したものは火葬をおこなった土坑で、32・33 土坑のように被熱痕跡がなく炭が堆積する土坑は、火葬によって生じた炭を、拾骨後に残った骨や釘などとともに寄せ集めて場所を移して埋納したものであったと考えられる。

37 土坑　竪穴建物 2 の南西側に位置する。平面形は直径 0.7 ～ 0.74 mの円形で、深さは 0.13 mを測る。埋土は 32 土坑と同じで、下層が炭を多量に含む黒色シルト、上層が炭混じりのにぶい黄褐色シルトである。壁面の特に上方に被熱による赤褐色の変質が認められた。

39 土坑　竪穴建物 1 西側の調査区西端に位置する。38 土坑の埋土上面から掘り込まれた遺構である。平面形は長径 1.8 m、短径 1.2 mの楕円形を呈する。深さは 0.4 mで、埋土は下層がオリーブ褐色のやや粘土質シルト、上層が黄褐色のやや粘土質シルトである。埋土中からは土師器杯 A（107）が 1 点出土している。剥離が著しく内外面の調整がはっきりしないが、内面に螺旋暗文がみられ、8 世紀代に位置づけられる可能性が高い。

40 土坑　39 土坑の南東側に近接した位置で検出した。平面形は長径 0.7 m、短径 0.56 mの楕円形で、深さは 0.17 ～ 0.22 mを測る。埋土は黄褐色のやや粘土質のシルトで、弥生時代の遺構の埋土とよく

似ている。遺物も出土していないため、弥生時代の遺構であった可能性も否定できない。

62 土坑　調査区北端の 8 土坑のすぐ西側で検出された。平面形は長径 2.23 m、短径 1.78 mの楕円形を呈する。深さは平面規模に比べて浅く 0.14 m程度しかない。埋土は炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。土器がまとまって出土しているが、人為的に掘削された遺構というよりは、切土によって造成された段の裾にできた浅い窪みであったと考えられる。

出土遺物には土師器・須恵器・黒色土器・弥生土器などがある。109 は口径 16.6cm、器高 1.8cm を

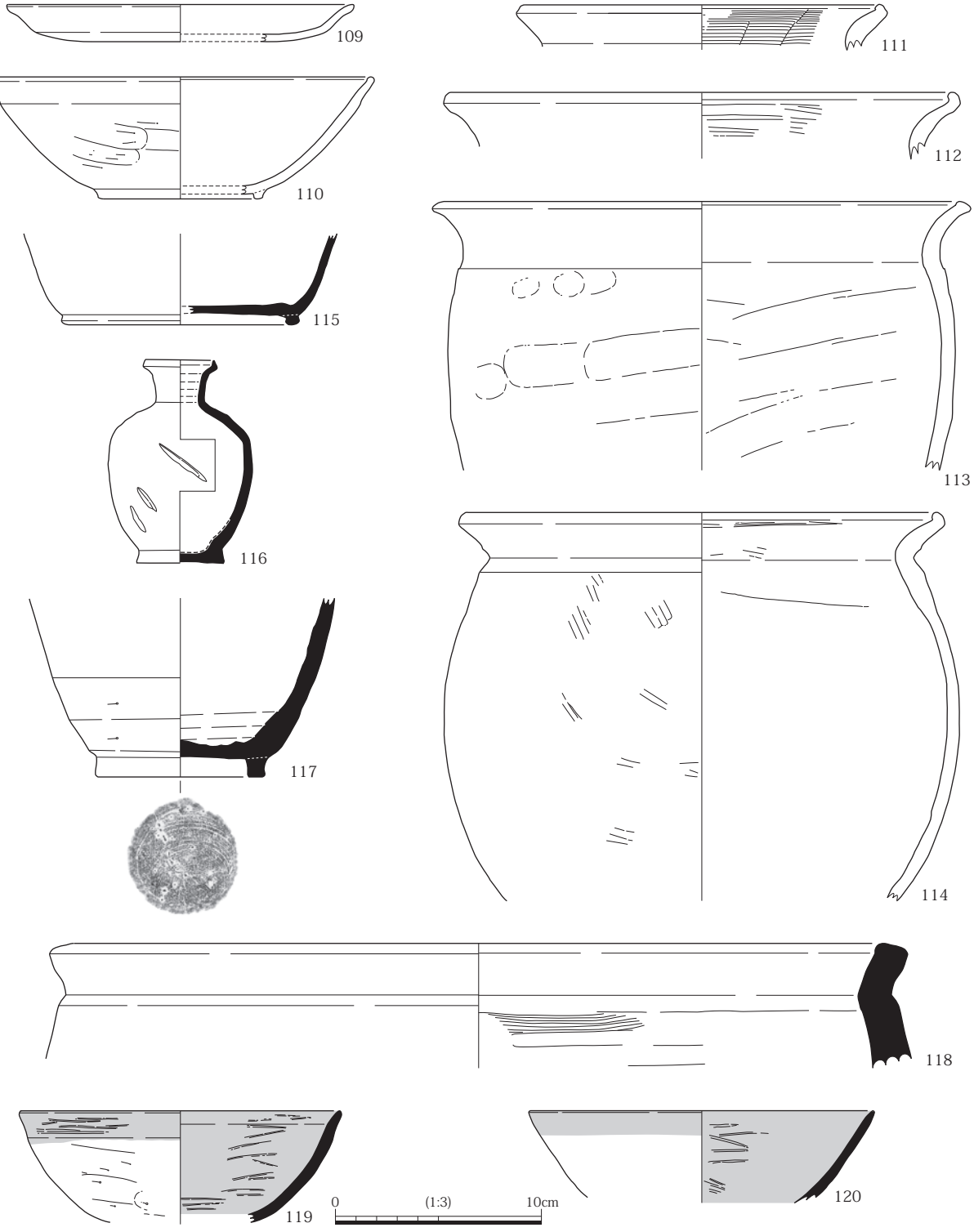


図 29　62 土坑出土遺物

測る土師器皿で、口縁部がやや外反する形状からやや新しい９世紀後半から 10 世紀前半に位置づけられる可能性がある。110 は土師器杯Ｂで、外面にケズリ、内面にナデを施し、口縁部を強くナデており、９世紀中頃に位置づけられる。111 ～ 114 は土師器甕である。いずれも口縁端部はやや内側に巻き込み、113 を除いて口縁部内面にハケがみられる。113・114 は体部下半まで残存しており、113 は体部が下方にまっすぐのびるのに対し、114 は体部がやや丸みをもつ個体で、体部の中央に最大径がくる。113 は体部外面がユビナデ･ユビオサエで、114 はナデによって消されたタタキが僅かにみられる。また、113 は８土坑出土破片と接合関係が認められる。115 ～ 118 は須恵器で、そのうち 115 は高台が底部外端のやや内寄りにつけられた杯Ｂの底部である。116 は完形の壺Ｍで､平底に糸切がみられる。体部に大きく刻みを入れた痕跡がみられるが､性格は不明である。117 は壺底部で､体部下半はケズリ､上半および内面は回転ナデ、底部は糸切りである。内面には粘土紐の接合痕がみられる。118 大甕もしくは大型の鉢の口縁で、口縁部が短く外反する。119・120 は黒色土器Ａ類で、119 が椀、120 が杯と考えられる。いずれも内面にヘラミガキを施し、口縁部外面の一部も黒色化している。これらの遺物は９世紀中頃を中心とした時期に位置づけられるものが多いが、109 や 119 は９世紀後半以降に位置づけられる可能性がある。

79 土坑　調査区北西隅に位置する。平面形は長辺 0.83 m、短辺 0.64 mの隅丸長方形で、深さは約 0.18 mを測る。埋土は下層に炭と焼土が混じる褐色のやや粘土質シルトや炭を多く含む黒褐色のやや粘土質シルトがあり、上層が小礫混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。壁面および底中央部に被熱による赤褐色の変質が認められた。その他の遺構と同様に、古代の整地層である２層上面から掘り込まれた可能性が高いと考えられるが、２層が広がる範囲がこの 79 土坑付近までであったため、２層の堆積が非常に浅く、２層の上面と下面のどちらに帰属するかはっきりとしなかった。なお、79 土坑の北側には、360 石列（３－２区）が検出されており、両者の関係性が注目される。

21・22・23 土坑　掘立柱建物１の東側で検出された３基の土坑（土坑 21・22・23）については、壁面や底面が被熱した焼土坑であるものの、その他の焼土坑とは検出状況がやや異なるものであった。３基の焼土坑は、切土造成された段の裾部に南北に並んでおり、いずれも西側に開口するような形状を示していた。さらにこの西側には焼土や炭などが土坑から掻き出されたような状況で堆積していた。西側が切土造成されているため、結果として西側に開口したようにみえるという可能性も十分に想定されるが、遺物が豊富に出土していることや、土坑の西側の焼土の堆積状況、壁面や底面の焼け方がその他の焼土坑とは異なっている点などをふまえると、段造成によって土坑の西側が削平されたものではなく、当初から西側に開口するように段の裾に設けられた可能性が高い。

21 土坑はこの３基の土坑うち、最も北側にあたる。東西に長い不整形な平面形で、奥壁側の東先端部が小さく突出しており、煙道のような構造であったと想定される。突出部先端から開口部までの長さは約１mで、幅は 0.45 mを測る。深さは 0.14 mで、埋土は炭混じりのにぶい黄色やや粘土質シルトである。埋土上面には 11 土坑と同じく、土坑の場所を明示するかのように人頭大の石が置かれていた。突出部周辺を除いた壁面と床面の全面が強い被熱により赤褐色に変色する点で、他の多くの焼土坑とはやや特徴が異なる。

埋土中からは、石材とともに土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器など、多数の遺物が出土している。土器には二次的な被熱の痕跡は認められないため、石材と土器類は遺構の廃絶後に土坑内に埋められた可能性が高い。121 は口径 15.0cm、器高 1.8cm を測る土師器皿で、内外面の剥離が著しく調整は不明

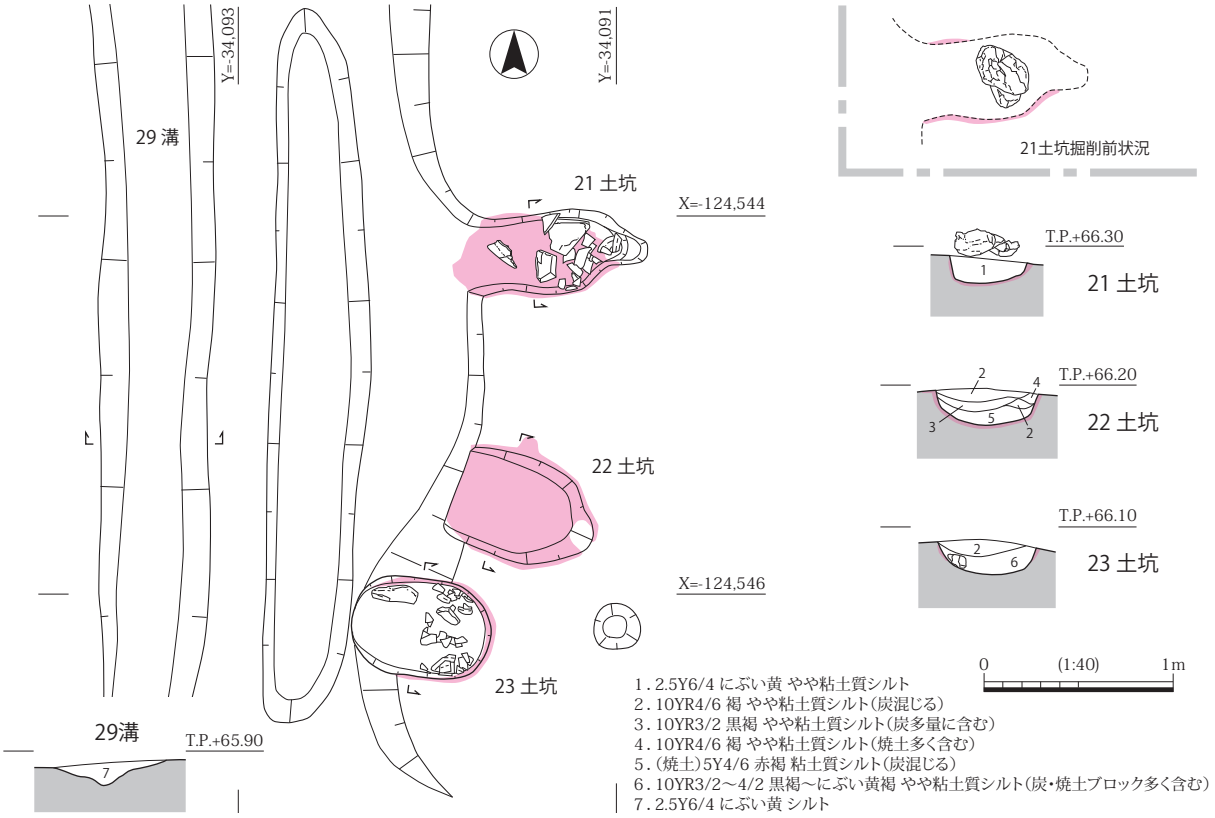


図 30　21・22・23 土坑、29 溝平面・断面図

である。122・123 は土師器甕で、122 は体部がまっすぐ下方にのびる形態で、口縁部内面がハケ、体部内面がユビナデ・ユビオサエである。123 は体部が丸みをもつ形態で、外面にタタキがみられる。124 は須恵器の長頸壺で、肩部が屈曲する壺Ｋである。やや薄手の灰白～灰黄色の色調で、特徴的な濃緑色の自然釉が肩部全面に付着していることから、東海産の可能性がある。このうち猿投窯では肩の丸い長頸壺が主体を占めており、肩部が屈曲するタイプの長頸壺は湖西窯産の可能性が高く[5)]、８世紀後半から９世紀中頃に位置づけられる。125 は須恵器甕の体部片で、外面が平行タタキで、内面に円形のあて具痕がみられる。胎土や焼成などから、５区の須恵器窯で生産された製品の可能性があり、灰原出土の 717 とよく似る。126 は黒色土器Ａ類杯で、体部が外開きの形態を呈する。内外面の摩滅が著しいが、口縁部外面と内面にヘラミガキが施され、口縁部が部分的に黒色化する。９世紀中頃と考えられる。これらの遺物は、やや時期差もみられるものの、最も新しい時期の遺物の年代をふまえると、遺構の年代は９世紀中頃に位置づけられる。

22 土坑は３基のうちの中央の土坑である。平面形は西側に開口するＵ字状を呈し、奥壁側の東先端部が 21 土坑と同様にやや突出する。開口部までの東西長は 0.77 ｍで、幅は 0.56 ｍを測る。深さは 0.2 ｍで、埋土は下層が炭混じりの赤褐色粘土質シルトで、上層が炭や焼土を多く含む褐色や黒褐色のやや粘土質シルトである。21 土坑同様に突出部の一部以外、全体がよく被熱し、赤褐色に変質している。

埋土中からは、黒色土器Ａ類の鉢Ａ（127）が１点出土している。体部の下半まで残存しており、底部はそれほど突出しない形態に復元できる。体部外面は剥離や摩滅が著しいため調整がはっきりしないが、口縁部外面や内面には非常に細かなミガキを施し、内面とともに口縁部外面の一部が黒色化している。内面は底部付近までミガキがみられるが、底部までは黒色化していない。また内面には螺旋暗文がみられる。９世紀代に位置づけられると推測される。

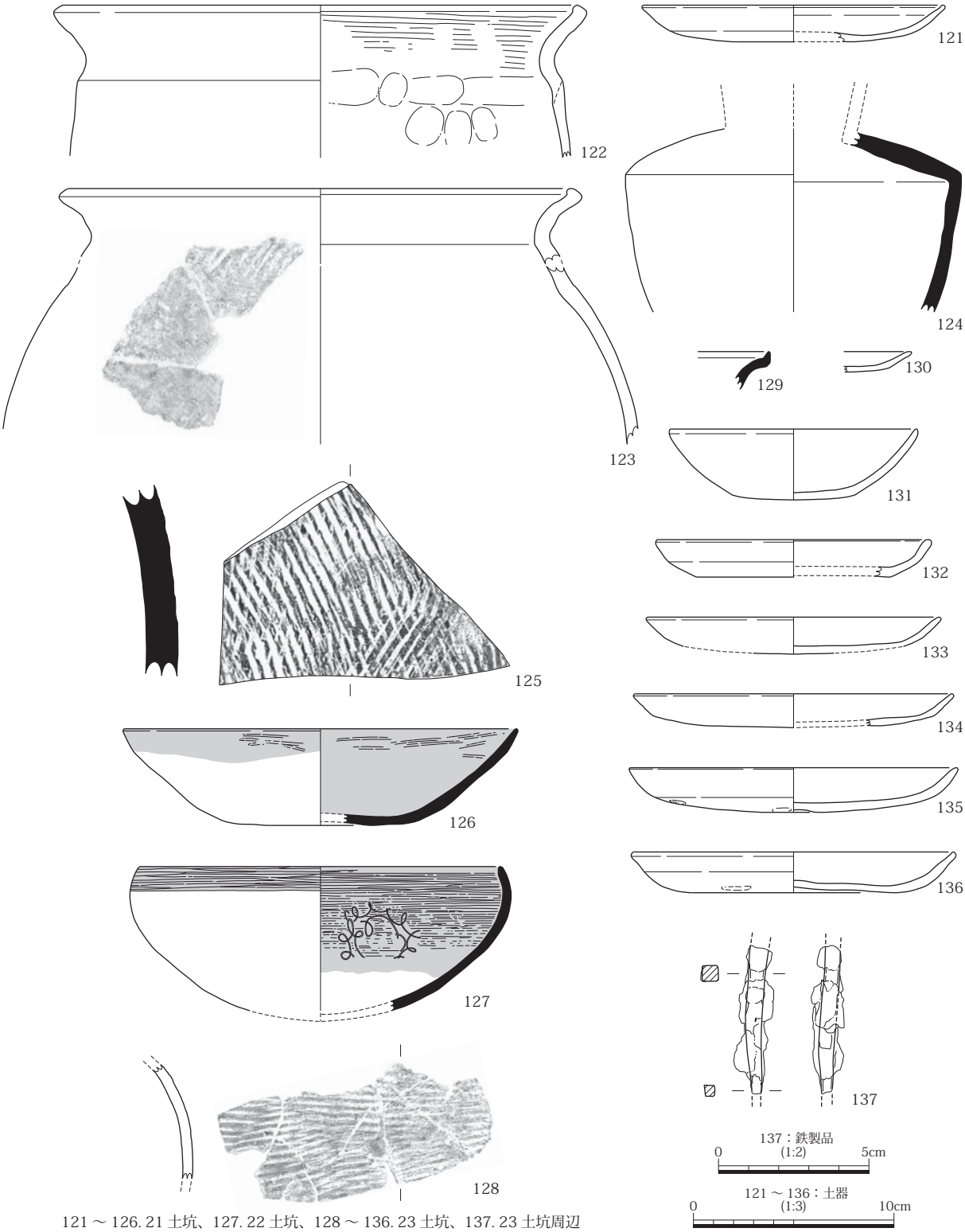


図 31　21・22・23 土坑出土遺物

23 土坑は 3 基のうちの南側の土坑である。平面形は楕円形を呈する。開口部までの東西長は 0.74 m で、幅は 0.52 mを測る。上記のとおり、他の 2 基が底面までよく焼けているのに対して、この土坑だけは被熱による赤褐色の変質が奥側の壁面にしか認められず、底面には認められない。埋土は下層が炭や焼土のブロックを多く含む黒褐～にぶい黄褐色のやや粘土質シルトで、上層が炭混じりの褐色やや粘土質シルトである。

埋土中からは、須恵器片１点と被熱した石材数点とともに、土師器がまとまって出土しており、特に皿が多い。このうち、128 は外面にタタキが施された土師器甕、129 は須恵器壺Ｌの口縁である。131 は土師器椀Ａで、内外面の摩滅が著しいため調整が不明であるが、器形から９世紀前半から中頃に位置づけられる。130・132 ～ 136 は土師器皿である。130 は細片のため断面のみ図化しているが端部がやや外反する形態である。132 ～ 136 は、口径 13.7 ～ 16.0cm、器高 1.6 ～ 2.2cm を測り、内外面が摩滅した個体が多いが、いずれの個体も外面は全てナデによるｅ手法で、９世紀中頃に位置づけられる。

21・23 土坑のように、焼土坑の内部から多くの土器がまとまって出土するという状況は、他の焼土坑ではみられない特徴であり、これらの遺構の性格を理解する上で非常に重要な所見といえる。特に、23 土坑のように出土遺物の多数が土師器で占められる点は、大きな特徴で、西側が開口している遺構の形状や、21・22 土坑のように奥壁側に煙道部を想起させるような張り出しが認められることなどから、これらの遺構の機能が土師器を焼成するための土坑であった可能性がある。土坑内からは土師器とともに須恵器や灰釉陶器、石材なども出土しており、これらについては被熱していないため、土坑の廃絶時に投棄されたことがわかるが、遺構の機能と性格については課題も残る。また 21 土坑では、11 土坑と同様にその場所を明示するかのように、土坑の上に石材が置かれていたことなども、遺構の性格を理解する上で注意が必要である。今後の類例の蓄積を待ち、慎重に検討していく必要がある。

なお、土坑内から出土したものか定かではないが、遺物取り上げ後しばらく経ってから、これらの土坑内やその周辺を精査中に、鉄釘（137）が１点出土している点も特記しておく。

９溝　調査区北端部に位置する。２層上面で検出した。７・８土坑、29 溝とほぼ直交する東西方向の溝で、幅は約 0.3 ～ 0.5 ｍを測る。深さは 0.1 ｍ程度であるが、西端の壁際では 0.16 ｍとやや深くなる。埋土は炭が少量混じる黄褐色のやや粘土質のシルトである。何らかの施設を区画する溝であったと考えられ、３－２区で報告する 360 石列のすぐ南側に位置していることから、それとの関係が窺われる。

埋土からは土師器、須恵器が出土している。108 は壺Ｍで、口縁部を欠くが体部は完存する。体部に丸みをもち、やや低い高台が付けられることから、８世紀末から９世紀初頭に位置づけられる。

土器集中部（６土坑）　この他、明確な遺構は検出できなかったが、調査区北端部の側溝際、８土坑西

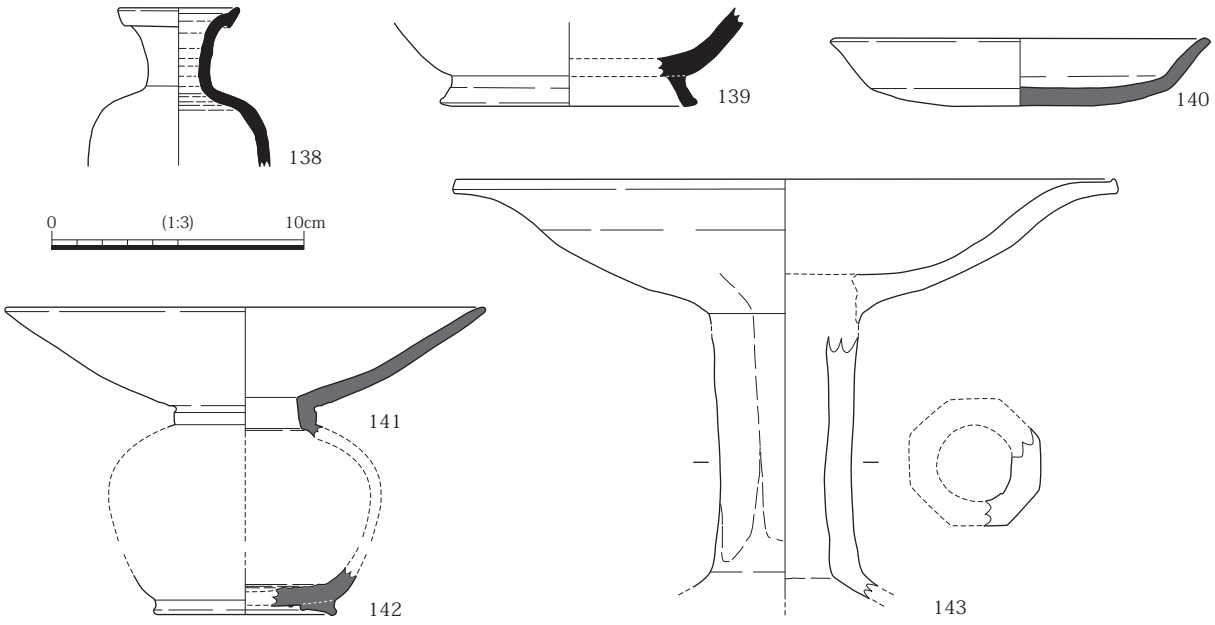


図 32　土器集中部（６土坑）出土遺物

側の木の根の周辺で遺物がまとまって出土している。拳大の石が他の地点よりも多く認められたため、石組みの遺構か、あるいはそれらを除去した段階で何らかの遺構が検出される可能性が想定された。そのため、当初は６土坑として調査を進めたものの、石材の並びなどは確認されず、また石材を全て除去した段階でも、掘り込みなどの遺構は全く確認されなかった。

ただし、この土器集中部では、土師器や須恵器とともに、灰釉陶器や緑釉陶器などがまとまって出土しており、注目される。138 は須恵器壺Mの口縁～体部で、内外面回転ナデ調整で、頸部に絞り痕がみられることから水挽き成形によるものと推測される。口縁部が外反する形態から、成合遺跡出土の壺Mの中で最も新しい９世紀後半に位置づけられる。139 は須恵器壺の底部で、やや外向きにふんばる高台のため、短頸壺などの可能性がある。140 は灰釉陶器の皿で、内外面に施釉される。底部に三叉トチンの痕跡がみられる。無高台で須恵器の皿のような形態を呈する非常に珍しい器形で、無高台の皿はK14 窯式期の黒笹 116 号窯[6)]などに類例があり、９世紀前半から中頃に位置づけられる可能性が高い。141 と 142 は同一個体と考えられる緑釉陶器の唾壺で、口縁部と底部の破片が出土している。口縁部外面は摩滅が著しいが、緑釉が部分的に残る。内面は被熱を受けたように赤く変色している。内外面ナデ調整で内面にはロクロ目がみられる。底部は貼り付けの蛇の目高台で、三叉トチンの痕跡も残る。非常に丁寧なつくりで、東海産の可能性が高い。蛇の目高台が増加する９世紀中頃から後半のものと推測される。143 は土師器高杯で、多面取りした柱状の脚部と口縁部の破片が出土している。口縁部はラッパ状に開く形態で、脚部は３角分しか残存していないが、８角ないしは７角に復元されると推測される。これらの遺物は概ね９世紀中頃を中心とした時期に位置づけることができる。

弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の主な遺構には、竪穴建物３棟のほか、土坑などがある。

竪穴建物１　調査区南半の平坦部、標高 67.6 m付近に位置する。平面形は一辺 3.3 mの隅丸方形を呈し、主軸は座標北から僅かに西に振れる。周囲には幅約 0.3 ～ 0.4 mの壁溝がめぐるが、主柱穴は検出できなかった。竪穴内からは 46・48 ピットが検出されているが、断面観察の結果、46 ピットは明らかに竪穴建物の埋土を切っていることが確認でき、古代の遺構の可能性が高い。おそらく 48 ピットについても同様に後世(古代)の遺構と考えられる。また建物の南西隅は平面楕円形の 51 土坑と重複する。こちらは竪穴の南辺壁溝を 51 土坑の埋土上面で検出しており、51 土坑が竪穴建物よりも一時期古い遺構であったことが明らかである。これにより周辺には竪穴建物が構築される以前の遺構も広がっていたことが窺える。

埋土からは弥生土器が数点出土しているが、細片が多く、図化できたのは短頸壺（144）の頸部片のみである。頸部が直立し、口縁部が僅かに受け口状に屈曲する形状で、内外面の摩滅が著しく調整や文様についてははっきりしない。頸部には貼り付け突帯をもち、刻み目文を施す。Ⅳ様式後半に位置づけられる。

なお、成合遺跡で確認されている竪穴建物のうち、平面形が方形を呈するものは、この竪穴建物１のみである。また建物内に明確な主柱穴がみられないという点で、他の竪穴建物とは様相が異なる。出土遺物の年代観も他の竪穴建物と大差がないことから、この平面形の違いは建物の機能差と捉えることもでき、倉庫などの施設であった可能性がある。

竪穴建物２　竪穴建物１の北側、南半に広がる平坦部から中央谷筋へとむかう傾斜変換点の標高 67.0 m

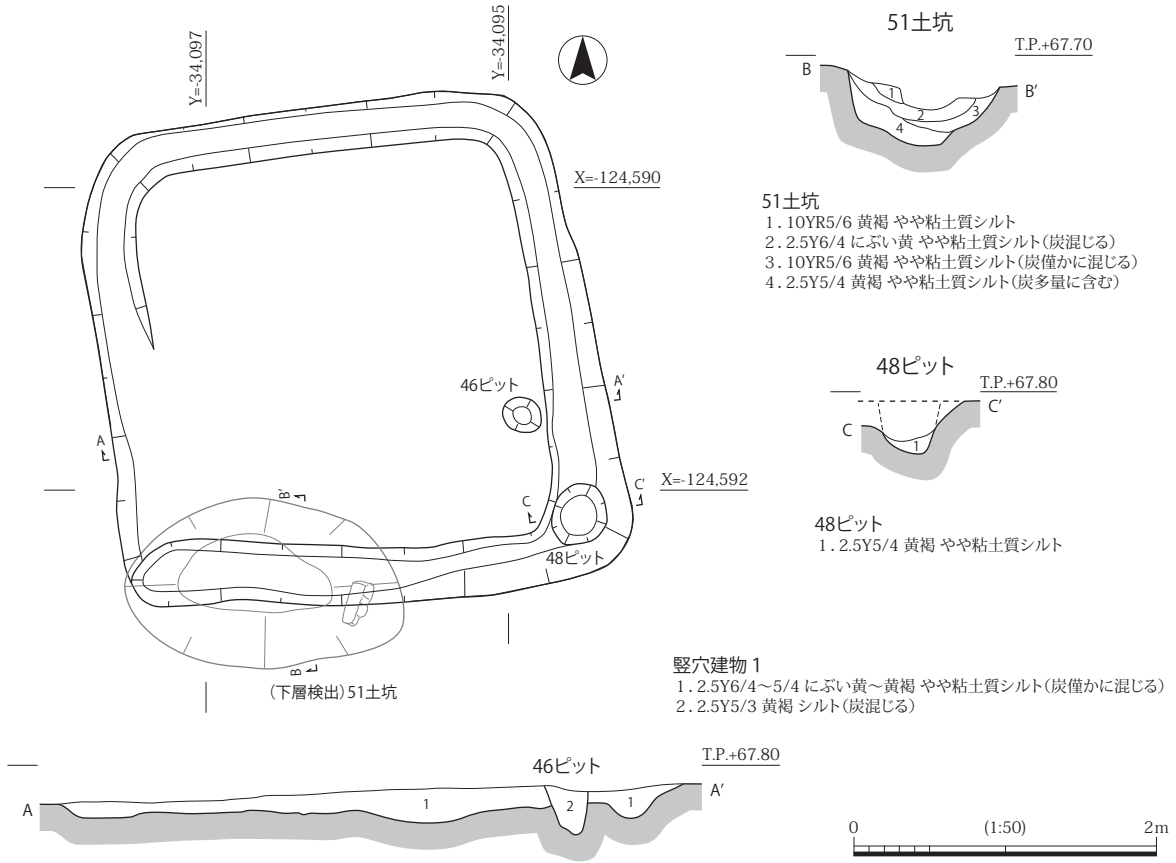
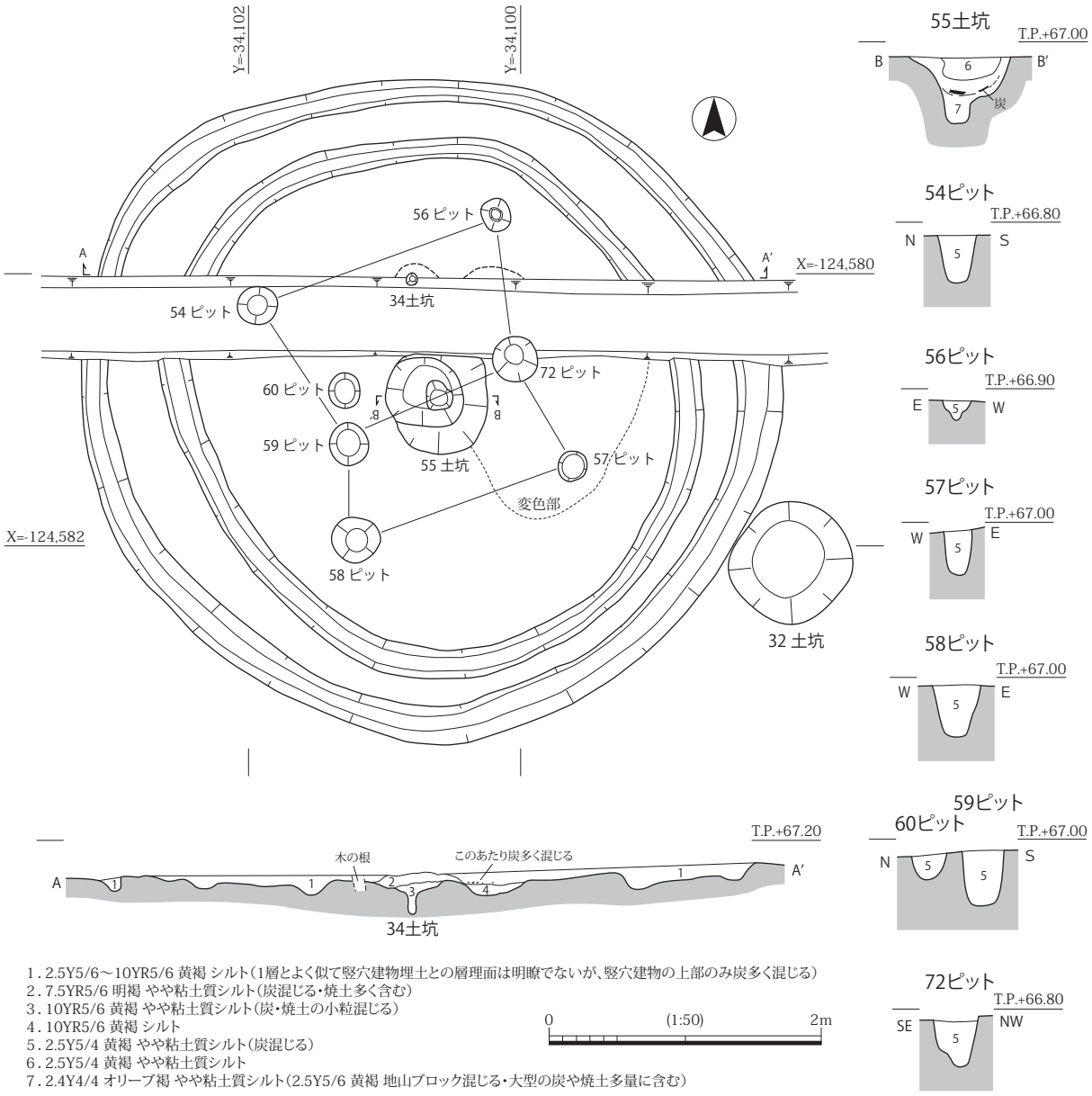


図 33　竪穴建物 1 平面・断面図

付近に位置する。平面形は整った円形を呈し、直径は 4.9 ～ 5.15 mを測る。壁に沿って幅約 0.2 ～ 0.3 mの壁溝と、さらにその内側に、幅約 0.2 mの若干楕円形に歪んだ溝がめぐり、二重に溝がめぐる構造となっている。内側と外側の溝との間隔は、内側の溝が楕円形であるため 0.15 ～ 0.45 mと均一ではなく、南東側が狭い。一般的には竪穴建物に二重の溝が検出された場合、縮小や拡張など建物の建て替えを想定するが、この竪穴建物２については、平面検出状況や断面、また検出された柱穴からも建て替えがあったことは窺えない。やや西偏する柱穴の並びと内側の溝の歪み方がほぼ一致していることから、二重の溝は構築された当初からのものであり、生活している時点でも機能していたと考えられる。他には、内側の溝が壁溝で外側の溝が周堤外側の溝、つまり内側の溝と外側の溝の間に周堤が存在した可能性も想定できるが、そうした場合、内部の広さは直径 3.25 ～ 3.7 mの楕円形という生活するにはあまりにも狭い空間となってしまい、また周堤の幅も狭いものとなるため、このような復元にはやや難がある。そのため､内側の溝は土間床面の乾燥を保つための機能を備えていたとみるのが無難であるが、他の竪穴建物では同様の遺構が全く検出されていないため、内側の溝の機能や性格ははっきりしない部分があり、これまで建て替えと報告されていた資料などと比較検討し、今後その構造を明らかにしていく必要がある。

この建物の主柱は６本であるが、うち中央寄りの２本（59・72 ピット）は、他の４本（54・56 ～ 58 ピット）の柱で囲まれた約 1.8 ～ 1.9 mの方形内にやや入り込んでおり、後述する中央土坑を挟むように設けられていることから、棟持柱であったと推測される。この棟持柱の柱間は 1.4 mである。柱穴はいずれも直径約 0.2 ～ 0.35 mの円形で、埋土は炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。また竪穴建物中央には、「中央土坑」（55 土坑）が設けられ、その規模は南北 0.72 m、東西 0.75 mと柱穴

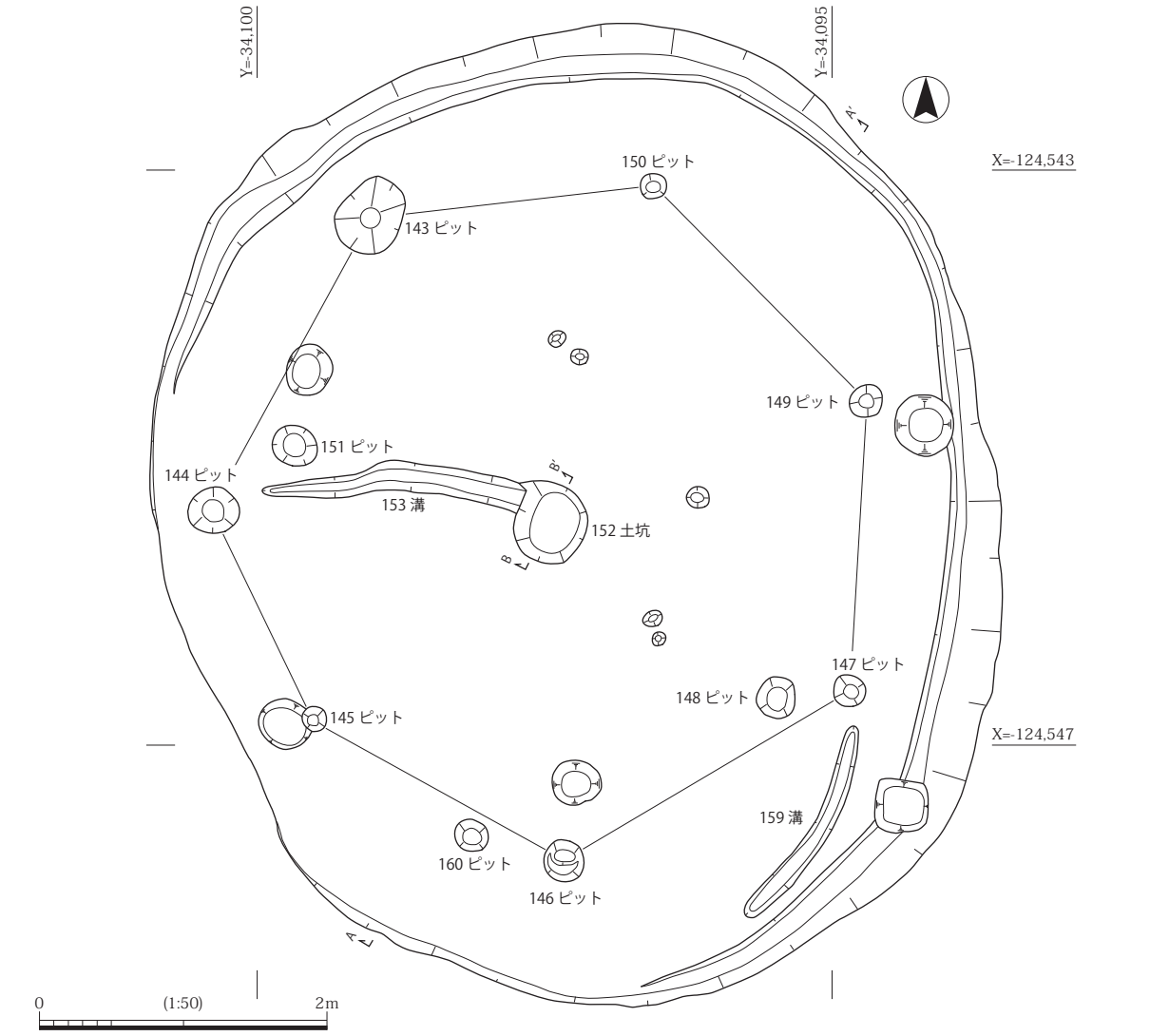


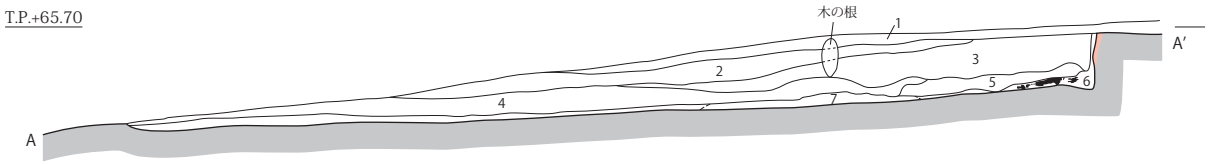
1．2.5Y5/6～10YR5/6 黄褐 シルト（1層とよく似て竪穴建物埋土との層理面は明瞭でないが、竪穴建物の上部のみ炭多く混じる）
2．7.5YR5/6 明褐 やや粘土質シルト（炭混じる・焼土多く含む）
3．10YR5/6 黄褐 やや粘土質シルト（炭・焼土の小粒混じる）
4．10YR5/6 黄褐 シルト
5．2.5Y5/4 黄褐 やや粘土質シルト（炭混じる）
6．2.5Y5/4 黄褐 やや粘土質シルト
7．2.4Y4/4 オリーブ褐 やや粘土質シルト（2.5Y5/6 黄褐 地山ブロック混じる・大型の炭や焼土多量に含む）

図 34　竪穴建物 2 平面・断面図

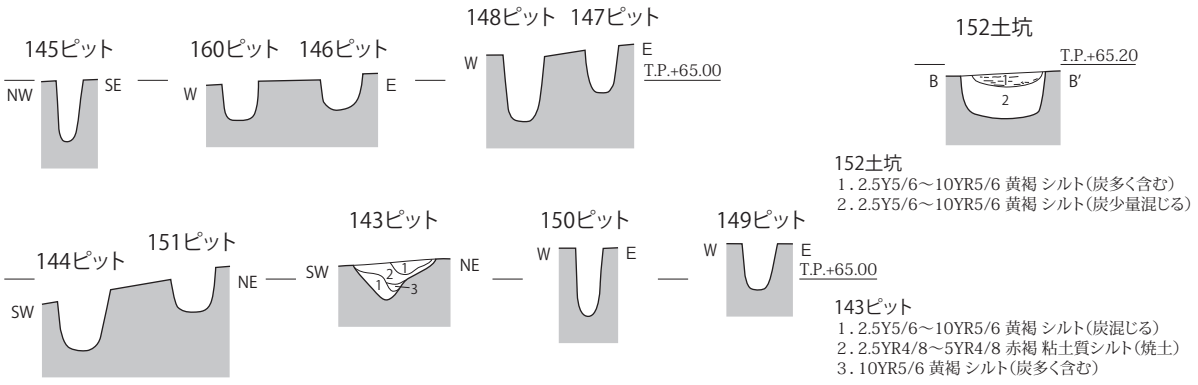
に比べ大型で、深さは 0.6 mを測る。２段掘り状に窪んでおり、下層は焼土や大型の炭を多く含む地山ブロック土混じりのオリーブ褐色やや粘土質シルトで、上層は黄褐色のやや粘土質シルトで埋まっている。壁面や底面に被熱による赤変は認められなかった。なお 55 土坑東側の一部に、他とは土質が若干異なる黄褐色のやや粘土質シルトの箇所が認められたが、これについては人為的に掘られた遺構ではなく、地山の中での土質の違いと判断した。

柱穴や 55 土坑の埋土中からは弥生土器や石器が出土しているが、いずれも細片で出土量は極めて少ない。145 は建物内の床面直上から出土した粘板岩で、磨製石剣の破片と考えられる。鎬が二股にわかれる基部に近い部分の破片で、両縁の刃部は残存しない。図上の右下側では刃部に対して斜め方向の研磨の痕跡がみられ、２次的に加工されている。表面は丁寧な研磨が施される一方で、裏面については研磨が粗く部分的に自然面が残る。146 は小型の甕で、55 土坑から出土した。内外面は著しく摩滅しているため調整がはっきりしないが、内面はケズリを施したのちにナデ消している。147 は底部の破片である。これらの破片からの詳細な時期比定は難しいが、他の遺構と同様にⅣ様式の範疇におさまる





1．2.5Y6/6～10YR6/6 明黄褐 やや粘土質シルト
2．10YR4/4～5/6 褐～黄褐 シルト(炭・小礫混じる)
3．10YR5/4～5/6 にぶい黄褐～黄褐 シルト(炭・小礫混じる)
4．7.5YR4/6～10YR5/6 褐～黄褐 シルト(焼土の小粒・炭多く含む)
5．2.5Y6/6～10YR6/6 明黄褐 シルト
（小礫少量混じる・2.5Y6/2 灰黄や10YR5/6 黄褐の地山小ブロック含む)
6．7.5YR4/6～10YR4/6 褐 シルト(炭・焼土多く含む)
7．10YR4/6 褐 シルト(5YR5/6 明赤褐の焼土や炭混じる)



152土坑
1．2.5Y5/6～10YR5/6 黄褐 シルト(炭多く含む)
2．2.5Y5/6～10YR5/6 黄褐 シルト(炭少量混じる)

143ピット
1．2.5Y5/6～10YR5/6 黄褐 シルト(炭混じる)
2．2.5YR4/8～5YR4/8 赤褐 粘土質シルト(焼土)
3．10YR5/6 黄褐 シルト(炭多く含む)

図 35　竪穴建物３平面・断面図

と考えられる。

竪穴建物３　中央谷筋の北側、標高 65 m付近に位置し、古代の掘立柱建物１と重複する。竪穴建物２とはちょうど 30 m隔てて、中央の谷筋を挟んで対峙するような位置関係にあり、計画的な配置であったことが窺える。竪穴の平面形は南北 6.8 m、東西 5.9 mの楕円形を呈する。山側にあたる東壁は残りがよく 0.35 m程の立ち上がりが認められたが、西側は斜面の下方にあたるため壁は認められない。壁が認められる範囲では、その裾に幅 0.15 ～ 0.2 m程の壁溝がめぐっている。主柱は 143 ～ 147・149・150 ピットを柱穴とする７本であったと考えられるが、146 ピットに近接して 160 ピットが、147 ピットに近接して 148 ピットがみられることから、建て替えがあった可能性も考えられる。ただし、竪穴の輪郭には拡張など大きな改変は加えられていない。柱穴は 145・150 ピットのような直径 0.2 m弱の小さなものから、143 ピットのような直径 0.5 m以上のやや大型のものまで大きさにばらつきがあり、深さも 0.2 m程度の浅いものから 0.4 m以上のしっかりしたものまであり、底面のレベルも揃っていない。埋土は炭や焼土が混じる黄褐色シルトである。この他竪穴の中央には、溝（153 溝）が付随する中央土坑（152 土坑）が１基設けられている。152 土坑は長径 0.56 m、短径 0.5 mの楕円形で、深さは 0.3 mを測る。埋土は炭が混じる黄褐色シルトで、上層は特に炭の混入が多い。153 溝は幅約 0.2 mで、西側の低い方向にむかってのびる。

この竪穴建物３は埋土上面にまで炭や焼土が広がっており、遺構検出した当初から焼失建物であることが容易に判断でき、遺構の輪郭をはっきり検出できた。竪穴内部には多くの焼土や炭が堆積しており、埋土を少々下げた段階では、中央部から東半部にかけて広範囲な焼土の広がりが検出され、南東部では、垂木材と考えられる炭が放射状に並んでいる様子も観察できた。さらに下げた床面近くでは、北半部を中心に焼土や多くの炭を検出した。焼土は周りの壁溝内にも入り込んでいたため、その輪郭の検出が容易にできた。炭は放射状に分布しており、垂木材が焼け落ちた様子をよく留めていた。この炭化材の一部については、樹種鑑定およびＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施しており、樹種鑑定によってカシ・シイ・サカキなどの常緑広葉樹が使われていたことが判明し、年代については紀元前後の測定値が得られている（第６章参照）。なお竪穴建物の埋土からは、遺物がほとんど出土していない。そのため、

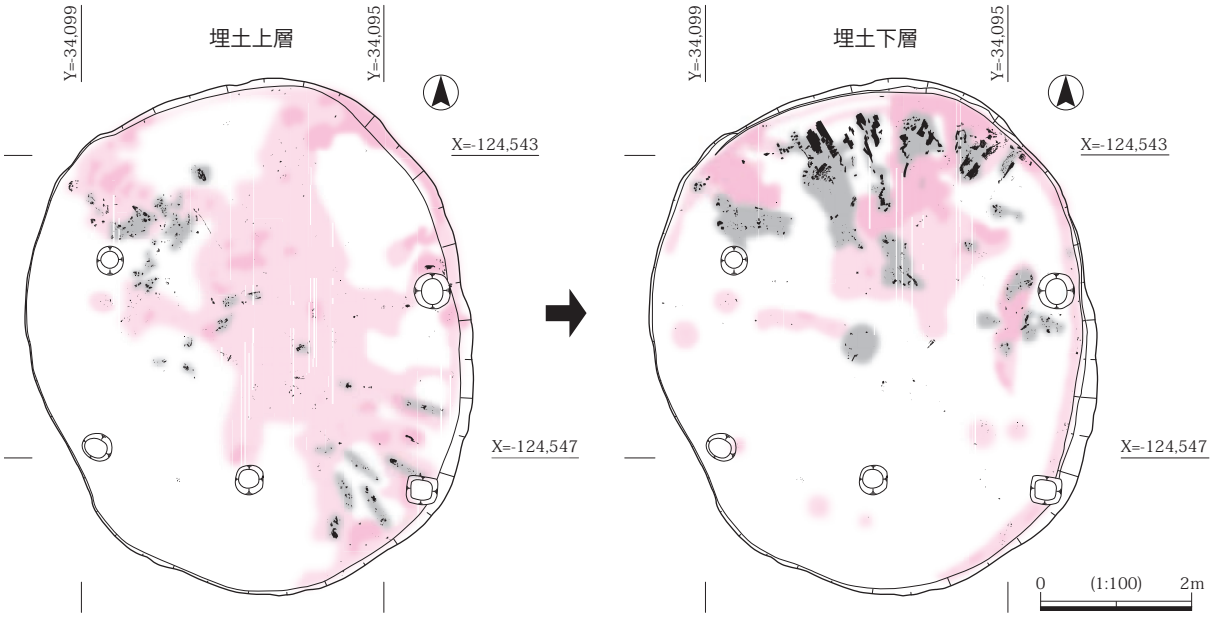


図 36　竪穴建物３埋土炭・焼土検出状況図

この竪穴建物２が機能している段階に失火したものではなく、建物を放棄した後に出火したもの推測される。

ところで、この竪穴建物３の埋土からは上記のとおり多量の焼土が検出されているが、一般的に復元されているような茅葺の竪穴建物が火災にあった場合、内にこれほど多くの焼土が入り込むことについてやや疑問が残る。近隣の古曽部・芝谷遺跡の住居Ｓ 12[7]や萩之庄遺跡[8]でも、同じような検出状況の焼失建物が発見されているが、こちらでは、検出された焼土は火災の消火のために投げ入れられた土と解釈されている。この点については、先に述べたように、この竪穴建物３は廃絶した段階での出火と推測される建物であり、その建物を消火するためにわざわざ土を投げ入れるのは、やや不合理で、自然鎮火を待つ方が無難ではなかったか、という疑問も残る。焼土や炭の検出状況は、床面近くに炭化材が多く、赤褐色に焼けた土はそれらの炭化材を覆うような堆積を示していた。消火のために土が投げ入れられた場合でも、同じ検出状況になる可能性も否定できないが、しかしその場合、投入された土がこれほどまでに焼けて赤変するとは考え難い。つまり、少なくとも当遺跡の竪穴建物については、一般的に復元されるような茅葺の建物ではなく、通常の竪穴建物のように垂木を並べ、ある程度下地となるような屋根を葺いた上に土を塗った土屋根の建物であった可能性が高いと考えている。竪穴建物の構造の解明は、当遺跡周辺の弥生時代のムラの景観、また当時の環境復元にとっても非常に重要な問題である。今後焼失建物の類例を検討し、明らかにしていく必要がある。

上述したように、出土遺物は極めて少なく、図化できたものは僅かである。149 は床面直上から出土した甕で、頸部がくの字状に屈曲する。内外面は摩滅により調整などは不明である。詳細な時期比定は難しいが、他の遺構と同様にⅣ様式の範疇におさまる。

38 土坑　竪穴建物２の南側、調査区西壁際に位置する。古代に属する 39 土坑と重複し、39 土坑に切られていることから、弥生時代の遺構と判断した。南北に長い不整形な土坑で、南北長は 5.7 m以上、東西幅は約 1.3 mを測り、西側の調査区外にのびると推測できる。深さは約 0.15 ～ 0.25 mで、埋土はにぶい黄褐～黄褐色のやや粘土質のシルトである。

41 土坑　竪穴建物２の南側に位置する。南半の平坦部で最初にみつかった遺構である。埋土が地山とよく似ていたため、細心の注意を払って遺構検出しなければ見落としてしまうほど、輪郭が非常に不明瞭であった。埋土中に炭粒が含まれていたことから、かろうじて検出することができ、この遺構の発見をきっかけに、以後炭粒を手掛かりにして次々と遺構が検出できるようになった。

平面形は東西 1.0 m、南北 0.84 mの隅丸三角形で、深さは 0.25 mを測る。埋土は黄褐色のやや粘土質シルトで、中層は炭や焼土を多く含んでいる。遺物は出土していないが、埋土の状況から弥生時代の遺構と判断した。

42 土坑　竪穴建物２の南側に近接する。平面形は長径 1.02 m、短径 0.64 mの南北に長い楕円形で、深さは 0.12 mを測る。埋土は炭が少量混じる黄褐色のやや粘土質のシルトである。埋土からは弥生土器の小片が１点出土している（148）。小型の鉢の口縁で、外面にタテハケ内面に粗いヨコハケを確認できる。

43 土坑　竪穴建物２の南西側に近接する。平面形は長径 1.66 m、短径 1.06 mの楕円形で、深さは約 0.2 mを測る。埋土は炭が少量混じる黄褐色のやや粘土質のシルトである。

44・45 土坑　竪穴建物２の北側、中央谷筋にむかって傾斜する斜面部で近接して検出した。ともによく似た形状の長い楕円形の土坑で、45 土坑はさらに西側の調査区外へとのびる。44 土坑は幅約 1.1 m、

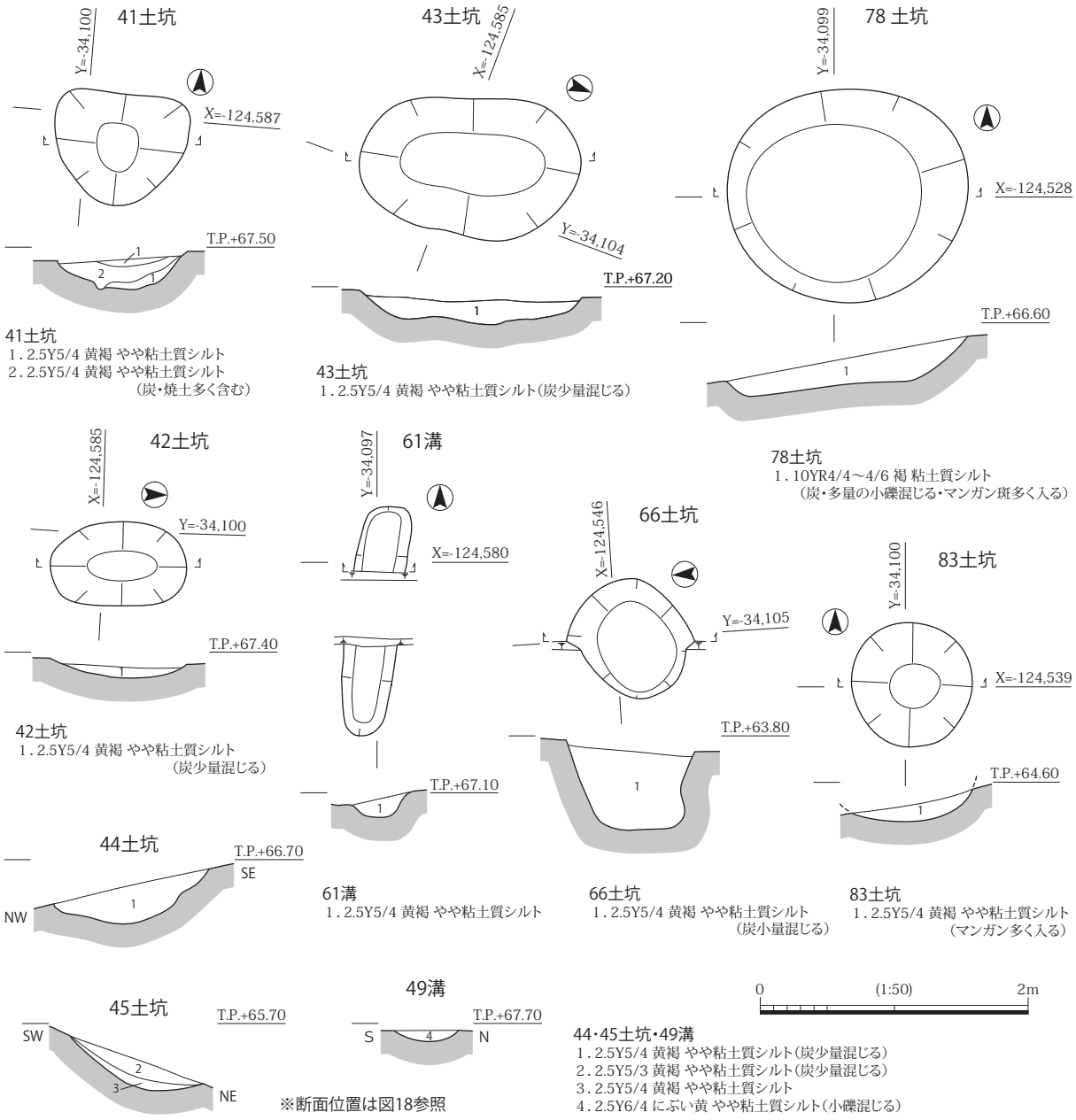
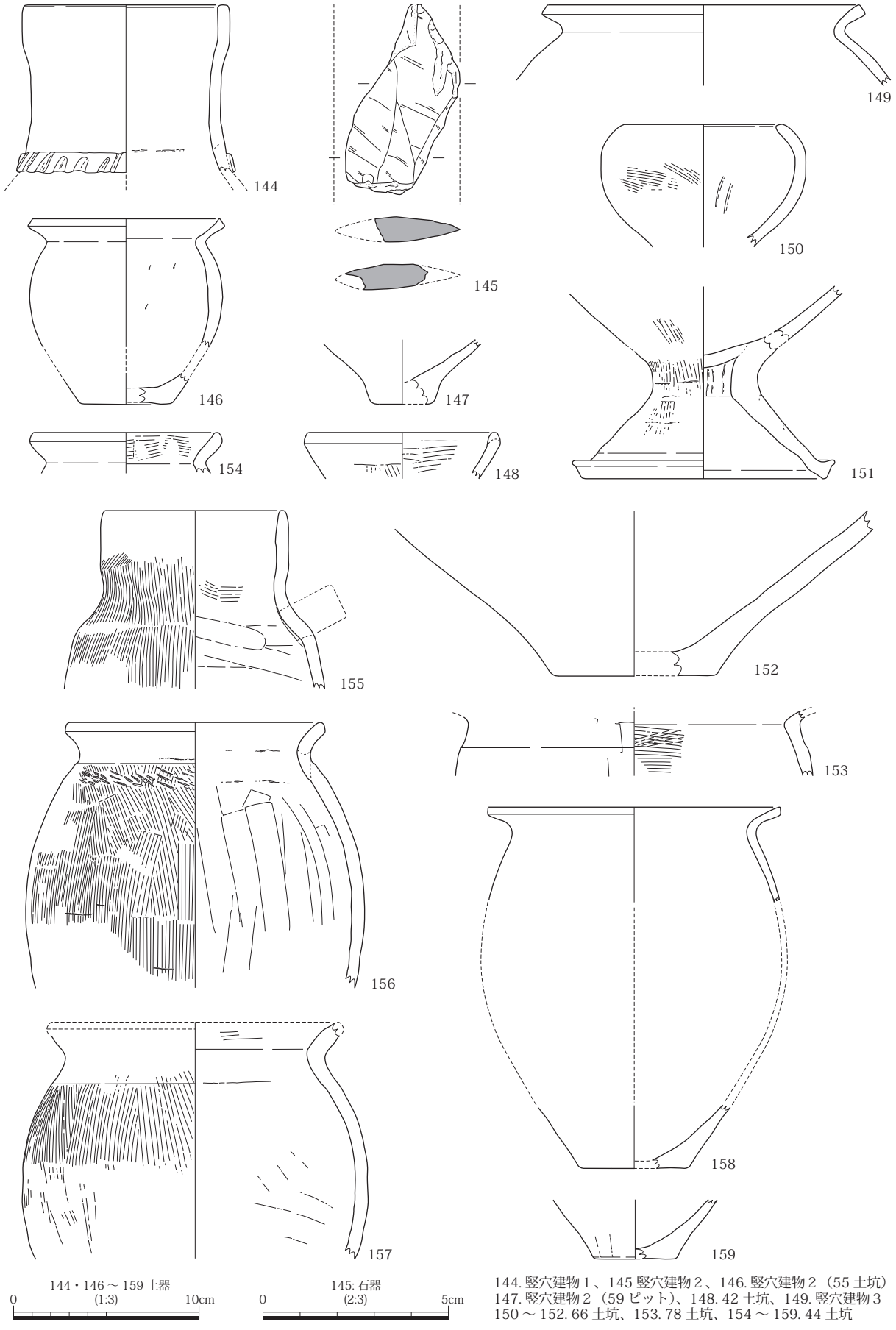


図 37　2区弥生時代の遺構平面・断面図

長さ 4.6 m、深さ約 0.3 m、45 土坑は幅約 0.7 ～ 1.1 m、長さ 4.8 m以上、深さ約 0.2 mを測る。埋土は炭が混じる黄褐色のやや粘土質シルトである。

44 土坑の埋土からは、弥生土器の小片が多数出土しており、中でも甕の比率が特に多い。154 は小型の甕の口縁で、端部が肥厚する。156・157 は甕の口縁部～体部上半で、口縁部から体部にかけてなだらかに屈曲し、胴部中央付近に最大径がくる。157 は口縁端部が剥離しているが、いずれも端部は丸くおさめられ、口縁部にヨコナデ、体部外面にタテハケ、内面にナデを施す。156 は頸部付近に刻み目文が施されており、これについては古曽部・芝谷遺跡などで類例がみられる。胎土や色調から 154・156・157 のいずれかが、159 底部と同一個体となる可能性が高い。158 は内外面が摩滅しており調整や文様は不明であるが、156・157 と比べより器壁が薄く、口縁部が外側に強く外反し、色調がやや橙色気味であるなど、胎土も異なる。155 は短頸壺で、細身の体部から緩やかに頸部にむかって立ち上がり、口縁部が直口する。外面は体部から頸部にかけてタテハケが施されるが、装飾はみられな



144. 竪穴建物１、145 竪穴建物２、146. 竪穴建物２（55 土坑）
147. 竪穴建物２（59 ピット）、148. 42 土坑、149. 竪穴建物３
150 ～ 152. 66 土坑、153. 78 土坑、154 ～ 159. 44 土坑

図 38　２区弥生時代の遺構出土遺物

い。内面ヨコ・ナナメ方向のナデで仕上げられる。肩部には把手が取り付けられていたようで、剥離痕と孔が1ヶ所ずつみられる。無文で器形的にもやや新しい後期的な特徴を備えるが、把手が付き、内面がナデの古い要素も残しており、Ⅳ様式末からⅤ様式初頭頃に位置づけられると推測される。また、その他の土器についても時期的に大きな矛盾はないと考えられ、44土坑は成合遺跡全体の中でも最も新しい時期の遺構と考えられる。

51土坑　竪穴建物1と重複する土坑である。前述のとおり、この土坑の埋土上面で竪穴の壁溝が検出されており、竪穴建物1よりも古い。平面形は長径1.85 m、短径1.14 mの東西に長い楕円形で、深さは約0.5 mを測る。埋土は炭が混じる黄褐色、あるいはにぶい黄色のやや粘土質シルトで、東寄りの底から人頭大の石材が出土している。

66土坑　竪穴建物3の西側に位置する。西側の半分が調査区の側溝と重なるものの、平面形は長辺0.9 m以上、短辺0.8 m以上の隅丸長方形であったことが復元できる。深さは0.6 m強と深く、底部も水平に築かれている。埋土は炭が少量混じる黄褐色のやや粘土質シルトで、水が溜まっていたような様子は窺えなかった。埋土中からは弥生土器が比較的まとまって出土している。150は無頸壺で、外面が無文で口縁部が丸くおさめられる。151は台付鉢の脚部で、脚部外面にタテハケがみられる。152は底部片で大型の壺と考えられる。この中でも150が形態的にやや新しく位置づけられ、Ⅳ様式末からⅤ様式初頭まで下る可能性もある。

49溝　竪穴建物1の南方で検出した。幅は約0.35～0.5 mで、深さは0.1 m弱である。弧を描くようにのびており、竪穴建物の壁溝になる可能性も考えられたが、建物になることを示す積極的な根拠は得られなかったため、機能や性格は不明である。

61溝　竪穴建物2の東側に近接する。溝というよりも土坑に近い南北に長い楕円形の形状を呈する。南北長1.73 m、東西幅0.4 mを測る。深さは約0.15 mで、埋土は黄褐色のやや粘土質のシルトである。

78土坑　竪穴建物3の北側の2層下面で検出した。平面形は長径1.8 m、短径1.6 mの楕円形で、深さは0.15～0.25 mを測る。埋土はマンガンが多く入る炭や小礫混じりの褐色粘土質シルトである。埋土中からは、弥生土器が少量出土している。153は甕の頸部で、体部内面にヨコ・ナナメハケが施される。出土遺物が少ないため詳細な時期比定は難しいが、Ⅳ様式の範疇におさまると考えられる。

83土坑　竪穴建物3の北側に位置する。平面形は直径約0.9 mの円形で、深さは0.13 mを測る。本来は3層（地山）の上面で検出されるべき遺構であるが、埋土の黄褐色やや粘土質シルトの中にマンガンが多く入り込んでいたため、3層との判別が難しく、下層確認のための3層掘削中に検出された。したがって本来の規模はこれよりも一回りほど大きかったものと考えられる。　（伊藤・笹栗）

【註】

1）鎌田博子 1997『梶原瓦窯跡』名神高速道路内遺跡調査会調査報告 第３輯　名神高速道路内遺跡調査会

2）下記に記載の島谷コレクションのうちの未掲載資料、高槻市教育委員会蔵
　島谷稔 1974「高槻上代寺院跡の研究（一）」『大阪文化誌』第１巻第１号 大阪文化財センター

3）原口正三ほか 1973『高槻市史』第６巻考古編高槻市史編さん委員会、前掲２）島谷 1974、高橋公一「平城宮系軒瓦」『文化財学論集』文化財学論集刊行会

4）高橋公一 1994「郡家今城遺跡の軒丸瓦」『高槻市文化財年報平成４年度』高槻市教育委員会

5）贄元洋 2000a「猿投窯・湖西窯出土須恵器の主要器種分類」『須恵器生産の出現から消滅』第１回東海土器研究会資料、贄元洋 2000b「古代湖西窯編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第１回東海土器研究会資料

6）安田幸一・尾野善裕 1994『黒笹 116・117 号窯跡発掘調査報告書』三好町教育委員会

7）宮崎康雄編 1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書 第 20 冊 高槻市教育委員会

8）前掲３）原口ほか 1973

２区竪穴建物３の調査風景

第４節　３－１区の調査成果〔図 39 ～ 52、写真図版 17 ～ 21・54・55〕

２区の東側に接する南北約 72 m、東西 30 m、面積約 2,200 ㎡の調査区である。基本的には２区と同様の地形で、南半には傾斜が緩やかな平坦部が広がり、北半は中央の谷筋へむかう斜面地となっている。２区と同じく、表土とその下の黄褐色シルト（１層）を除去すると、古代（８・９世紀）と弥生時代中期後半の遺構面が同一面で検出されている。（伊藤）

包含層の遺物　１層中からは、土師器・須恵器・弥生土器が出土している。隣接する２区に比べると、古代の土師器・須恵器の出土量が格段に少なくなり、相対的に弥生土器の出土量が目立つようになる。160 は須恵器杯Ｂの底部～体部で、高台が底部外端よりやや内側に取りつく。161 は壺Ｋの体部～頸部で、頸部は細く口縁部にむかって開き、頸部内面に自然釉が付着する。160・161 については８世紀代に位置づけられる。162・163 は体部の立ち上がりの形態から壺Ｌの底部と考えられ、胎土・焼成から５区須恵器窯で焼成された製品の可能性がある。164 ～ 173 は弥生土器である。164 は有段口縁の大型壺の口縁部で、頸部から口縁にむかって大きく開いたのち明瞭に屈曲し、二次口縁は直立する。外面の口縁の上端と下端に凹線文を施したのち刻目文を施す。165 はこの器種の頸部と考えられる破片で、幅広の貼付突帯に刻目文を施す。同様の有段口縁壺は今回の調査で多数出土しているが、164 と 165 はその中でも特に加飾性が強いが、Ⅳ様式後半の範疇で捉えることができるだろう。166 は壺の体部片で、外面に波状文と直線文を交互に配した文様がみられる。Ⅳ様式３段階以前でよくみられる施文パターンであるが、搬入土器を除くと本遺跡で体部の櫛描文が施された破片は極めて少ない。169・170 は高杯の脚部で、細長い柱状部から屈曲して裾部に広がる形態である。171・172 は高杯の脚端部で、172 には円孔がある。また 171 は胎土の特徴から搬入品の可能性がある。167・168・173 については、１層の下面から出土したもので、167 は外面に多重の凹線文を施した小型の無頸壺、173 は鉢の口縁である。168 は壺の底部で、内外面ともにケズリが施される。これらの土器はⅣ様式の範疇におさまると考えられるが、やや古い時期の要素をもつ遺物もやや目立つ点が特徴である。（笹栗）

古代の遺構と遺物

古代の遺構としては主に土坑が検出されている。２区と同様に焼土坑が多く検出されており、調査区全体にまばらに分布している。ただし、遺物を伴わないものが大半で、全てが古代に帰属するか判断が難しく、弥生時代の遺構の可能性も残す。この焼土坑については、１・２区と同様に、壁面が焼けて赤褐色に変質したものと、壁面が焼けずに炭が堆積しているものの２種に大きくは分別できる。

115 土坑　中央谷部の２区寄りに位置する。平面形は直径約 0.7 mの隅丸方形に近い円形を呈する。深さは 0.1 m以下と浅く、炭を多く含む暗褐色シルトを埋土とする。壁面に被熱による赤変は認められない。

116 土坑　中央谷部の２区寄り、115 土坑の北側に位置する。平面形は一辺 0.8 mの隅丸方形で、深さは 0.18 mを測る。埋土は下層に焼土を多く含む暗褐色のやや粘土質シルトや、炭・焼土・褐色ブロック土・礫などを多く含む暗褐色シルトがあり、上層が小礫混じりの褐～にぶい黄褐色のやや粘土質シルトである。壁面は被熱し赤褐色に変質しており、一部は強く被熱したため黄褐色に変色している。また、その外側が黒色に変色している箇所も認められた。

117 土坑　中央谷部の２区寄り、116 土坑の北側に近接する。平面形は小さな隅丸長方形で、長辺 0.5 m、

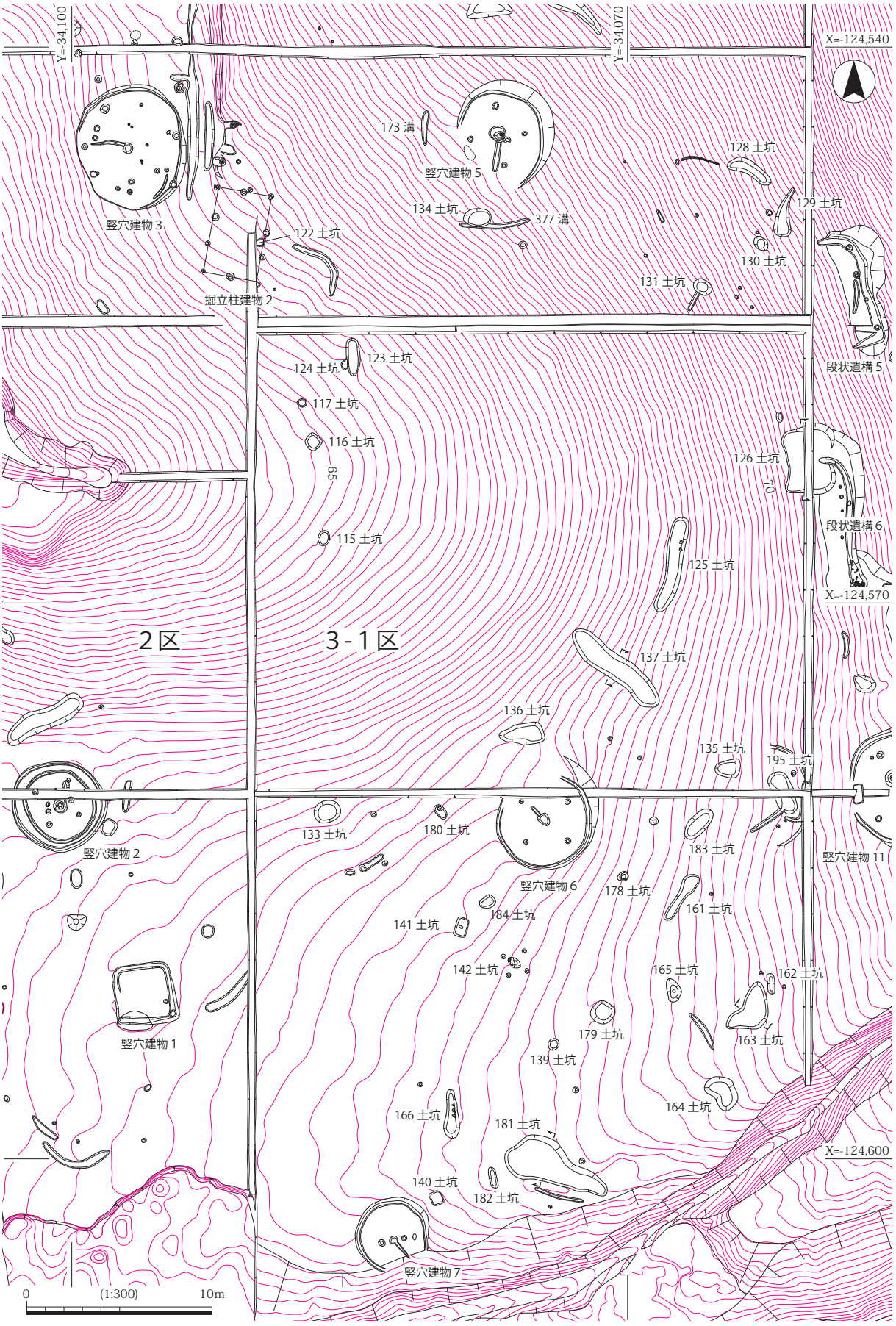


図 39　3－1区検出遺構全体平面図

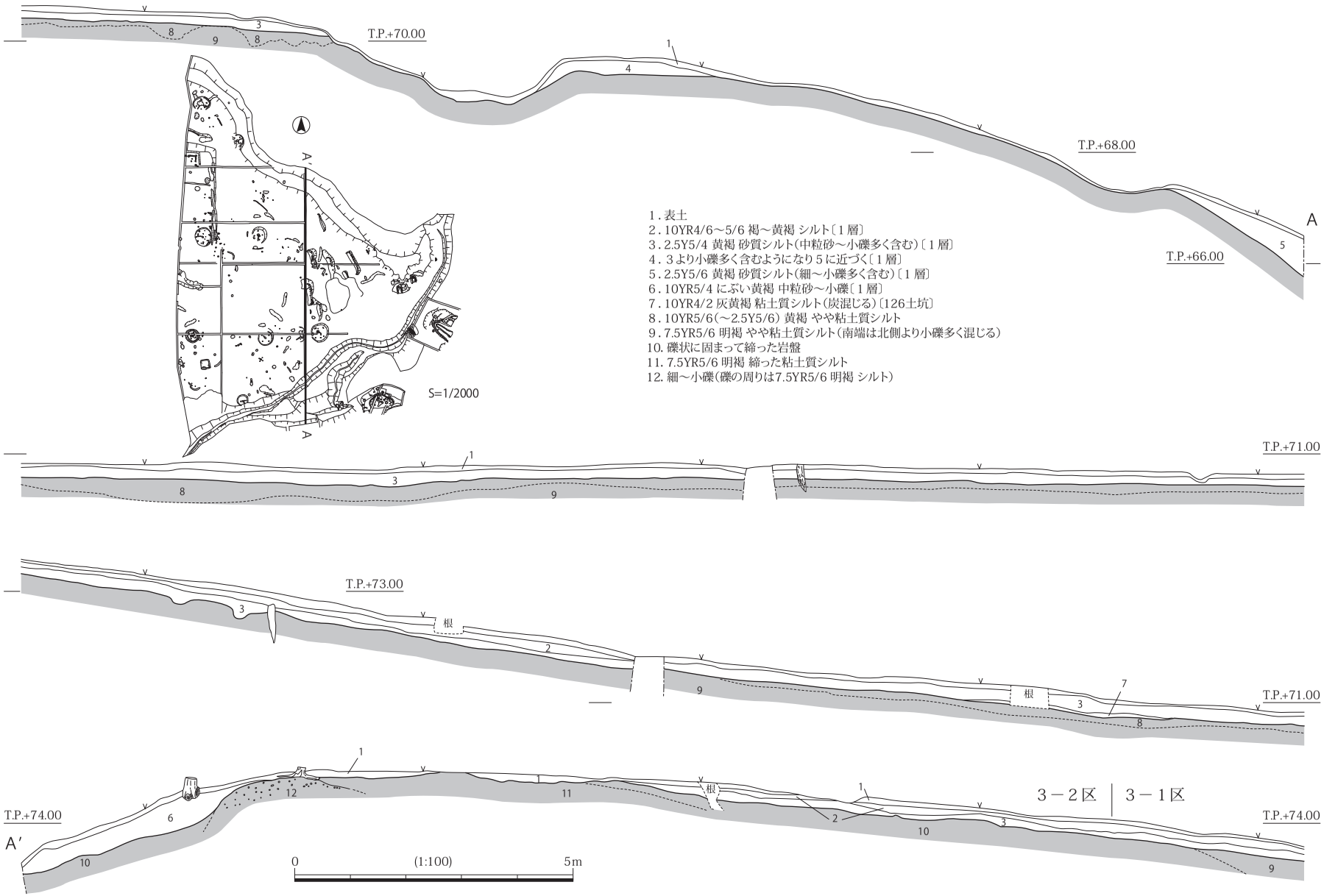


図40　3－1・3－2区地層断面図

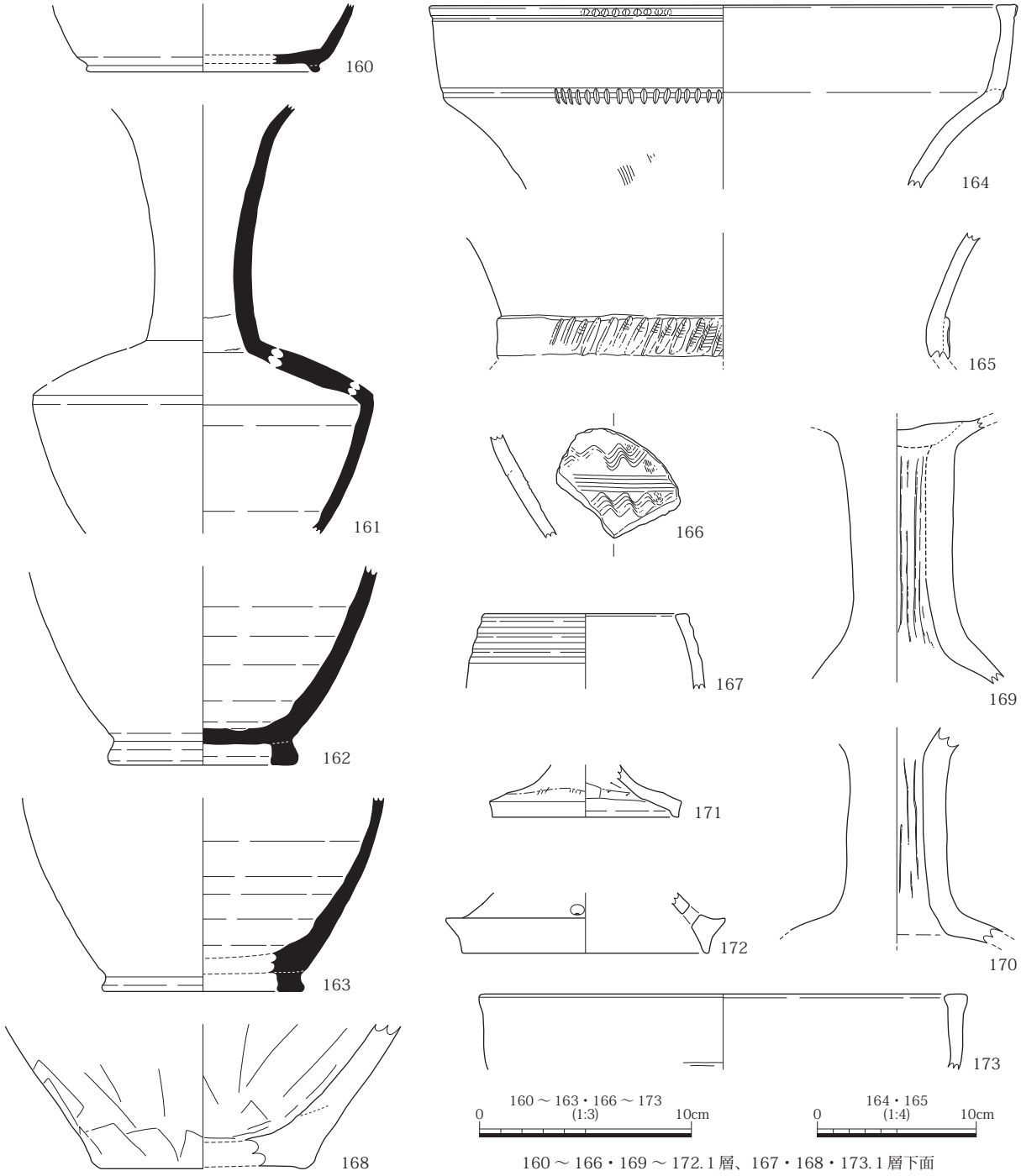


図 41　3－1 区 1 層出土遺物

短辺 0.46 mを測る。深さは 0.15 mで、埋土は下層が炭や焼土を多く含む暗褐色シルトで、上層が焼土を多く含む暗褐色やや粘土質シルトや、小礫混じりの褐色やや粘土質シルトである。壁面はよく焼けて赤褐色に変質する。

122 土坑　調査区北方の 2 区との調査区境に位置し、掘立柱建物 2 と重複する。平面形は幅約 0.4 mの楕円形に復元できるが、西半が調査区境の側溝によって失われているため、全体の規模は明らかでない。深さは 0.14 mで、埋土は焼土や炭を多く含む褐色シルトである。埋土中に焼土ブロックが含まれているため、埋土全体が赤褐色を呈し、そのため検出段階では被熱した焼土坑と考えられたが、壁面は被熱していなかった。埋土からは、土師器と思われる小片が出土している。

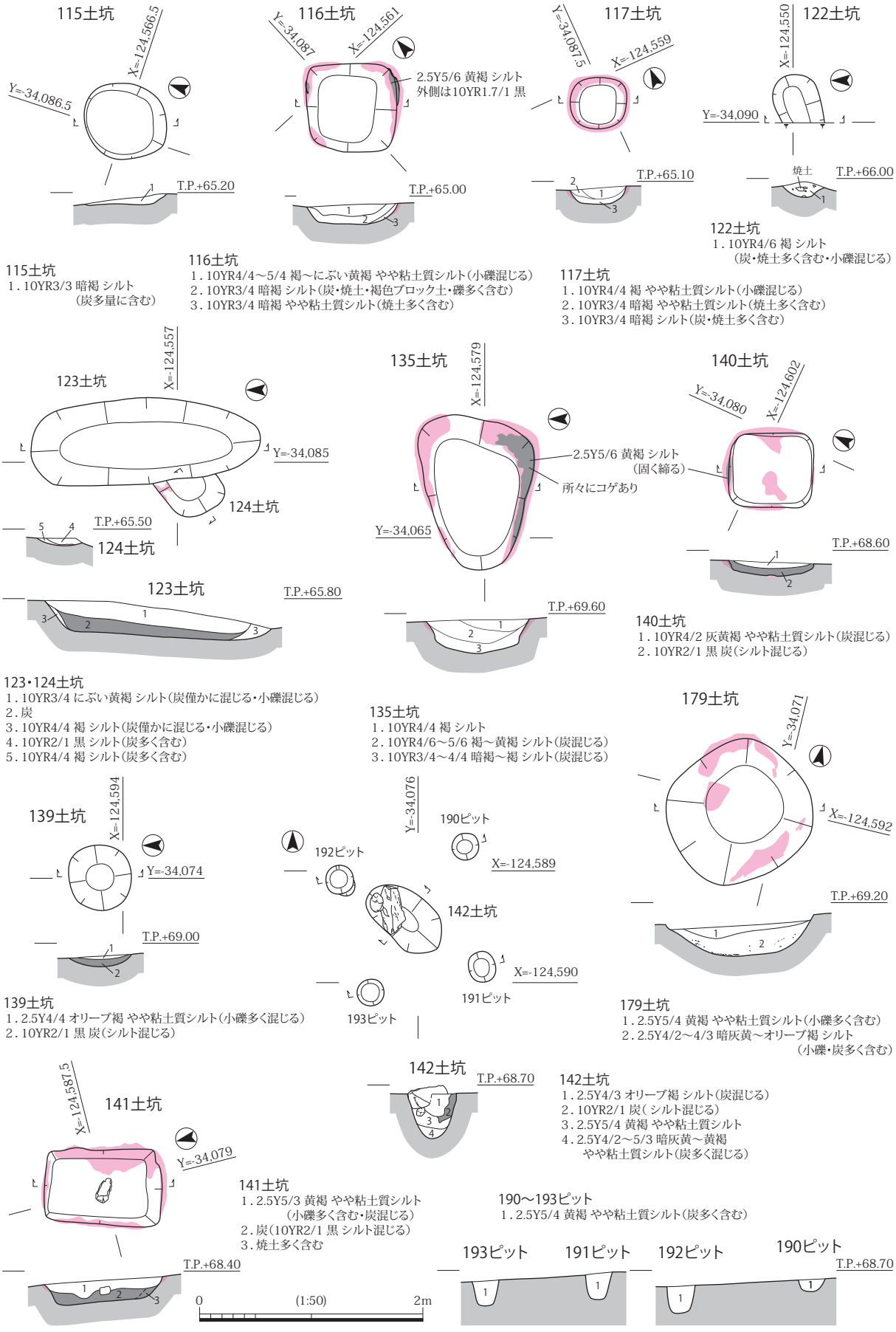


図 42　3－1 区古代の遺構平面・断面図

123 土坑　中央谷部の２区寄り、117 土坑の北東側に位置する。平面形は長さ 2.05 m、幅約 0.75 m の南北に長い楕円形で、深さは 0.28 mを測る。埋土は底部に 0.05 ～ 0.15 mの厚みの炭がたまっており、その上に炭や小礫混じりのにぶい黄褐色シルトが堆積している。また、壁面などに被熱による赤変は認められない。

炭の中からは土師器・須恵器の小片とともに 15 点の鉄釘が出土した。出土した鉄釘は、ほぼ全形が残存するものが２点（177・178）、先端を欠き頭部が残存するものが９点（179 ～ 187）と、先端部が残存するものが３点（189 ～ 191）、その他に棒状部分のみ残存するものが１点（188）で、計 15 点である。いずれの個体も錆び膨れが著しく、遺存状態が極めて悪い。また曲がって変形したものが多く、木質なども全く残っていないため、熱を受けた可能性が考えられる。これらの釘は木棺釘であったと考えられるが、木材が朽ちた後に残った釘ではなく、熱を受けたものであったことが窺える。頭部から先端近くまで残る 177 ～ 179 は、長さが 6.0cm 強で、これらはいずれも曲がっていたり、部分的な欠損があるため、実際の長さは 7.0cm 程度に復元できる。釘頭の形態は全てＬ字形の折曲げのもので、Ｘ線レントゲン写真を撮影した結果（写真図版 82）、内側に抉り込みが入るものが多いが、181・184・185 のように抉り込みがないものもみられる。釘の断面は全て方形で、一辺 0.5cm 前後である。この他に、土師器や須恵器の破片も出土している。

遺構の規模や底面に炭を敷いている状況からは、８区検出の 371 土坑のような底に炭を敷いた上に木棺を据えた木棺墓とする可能性も想定できるが、出土した釘の遺存状態から、鉄釘は木棺に緊結され

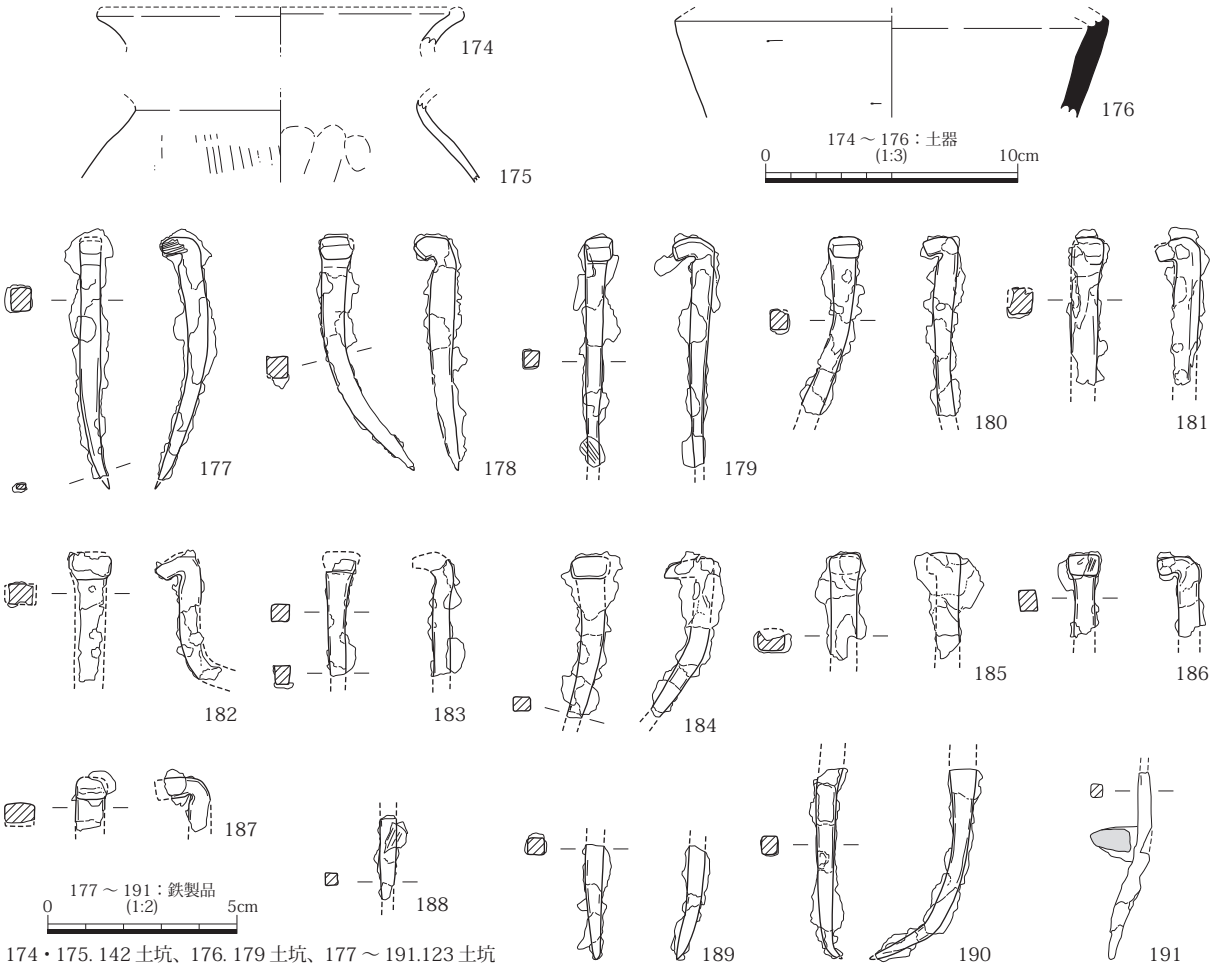


図 43　３－１区古代の遺構出土遺物

た状態で、一度火にかけられた可能性が高い。底面や側面には被熱がみられないことから、この土坑は木棺が一度火葬されたのちに二次的に残った灰や炭を納めた土坑、いわゆる「火葬灰埋納土壙」[1)]とよばれるものと同一の性格の遺構と推測される。ただし周辺部にあたる２区の包含層中からは、蔵骨器になりうるような壺の底部片（54・55）なども出土していることから、この削平された 123 土坑の上面や周辺部に別に、蔵骨器を伴う納骨遺構（典型的な火葬墓）が存在した可能性も想定される。

なお埋土下層の炭について、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施しており、８世紀後半から 10 世紀後半の遺構であったとの成果を得ている（第６章参照）。分析データからは 200 年前後の大きな時期幅がみられるが、周辺では 10 世紀代の遺構・遺物はほとんど確認されていないことから、８世紀後半から９世紀中頃におさまる遺構とみてよい。

124 土坑　123 土坑の西側に重複する。平面形は一辺 0.5 ｍの隅丸方形に復元できるが、東半は 123 土坑に切られる。深さは 0.1 ｍ弱と浅く、北壁の一部に被熱により赤変している。埋土は炭を多く含む褐～黒色のシルトである。

135 土坑　調査区南半の、竪穴建物６の東側に位置する。平面形は長さ 1.4 ｍ、最大幅 1.03 ｍの隅丸三角形を呈する。深さは 0.3 ｍで、埋土は下層が炭混じりの暗褐～褐色シルト、中層が炭混じりの褐～黄褐色シルト、上層が褐色シルトである。壁面は被熱により赤褐色に変色しており、特に南壁は 116 土坑同様に、強い被熱のため黄褐色に変色している箇所がみられる。

139 土坑　調査区南半の、竪穴建物６の南側に位置する。平面形は直径 0.55 ｍ強の円形を呈する。深さは 0.1 ｍで、埋土は下層にシルト混じりの炭があり、上層に小礫混じりのオリーブ褐色やや粘土質シルトが薄くのる。被熱による赤変は認められない。

140 土坑　調査区南端の、竪穴建物７のすぐ東側に位置する。平面形は長辺 0.76 ｍ、短辺 0.66 ｍの隅丸長方形を呈する。深さは 0.12 ｍで、埋土は下層にシルト混じりの炭があり、上層が炭混じりの灰黄褐色やや粘土質シルトである。壁面および底面の一部が焼けて赤褐色に変質する。また壁面の一部には、116 土坑や 135 土坑と同様に、強い被熱のため黄褐色に変色している箇所がみられた。

141 土坑　調査区南半の平坦部、竪穴建物６の南西側に位置する。平面形は長辺 1.06 ｍ、短辺 0.7 ｍの隅丸長方形を呈する。深さは 0.2 ｍで、下層にシルト混じりの炭が、上層に小礫を多く含む炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトが堆積する。壁面は四方ともによく被熱し赤褐色に変色している。遺構中央の炭層上面から拳大の小さな石材が１つ検出されたほか､埋土からは土師器の細片が数点出土している。

142 土坑　調査区の南半の、竪穴建物６の南側に位置する。平面形は長径 0.78 ｍ、短径 0.44 ｍの楕円形で、深さは 0.4 ｍとやや深い。埋土は下層から炭が多く混じる暗灰黄～黄褐色やや粘土質シルト、黄褐色やや粘土質シルト、シルト混じりの炭、炭混じりのオリーブ褐色シルトで、その上層に拳大の石材２つと人頭大の石材１つが据えられていた。埋葬場所を明示する「墓じるし」としての機能が窺える。この 142 土坑の周囲からピット４基（190 ～ 193 ピット）を検出した。ピットの平面形はいずれも直径 0.2 ｍ強の円形で、深さは 0.1 ～ 0.2 ｍ強を測る。埋土は炭を多く含む黄褐色やや粘土質のシルトである。ピットは 142 土坑を囲むように方形に並んでおり、小規模な覆い屋のようなものが建てられていた可能性がある。なお同様の遺構は、福島県武井Ｅ遺跡[2)]でも確認されている。

埋土からは、遺物が少量出土している。174 は古代の土師器甕の口縁で、外面に煤が付着する。口縁端部は摩滅するが内面に巻き込む。175 は他の土師器とはやや胎土が異なるため、時期の異なる混入品の可能性がある 。

179 土坑　調査区南半の平坦部、竪穴建物６の南東側に位置する。平面形は一辺 1.2 m前後のやや大型の隅丸方形を呈し、深さ 0.3 mを測る。埋土は下層が小礫や炭を多く含む暗灰黄～オリーブ褐色シルト、上層が小礫を多く含む黄褐色のやや粘土質シルトで、壁面の一部が被熱し赤褐色に変色している。埋土からは土師器と須恵器の細片が出土している。176 は須恵器壺Ｋの肩部～体部で、外面は回転ヘラケズリ、内面回転ナデで成形する。８世紀代のものと考えられる。

弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は竪穴建物３棟のほか、土坑などがある。いずれも１層除去面、古代の遺構と同一面で検出された。

竪穴建物５　調査区の北端部、標高 68.5 m付近に位置する。２区で検出した竪穴建物３とは 15 mを隔てて東西方向に並ぶ。平面形は直径約 5.3 mのやや歪んだ円形であるが、斜面下部側にあたる南西隅の一部は失われており検出できない。やや急勾配な斜面部に築かれていることから、斜面上部側は深く、0.8 m程掘り込まれている。その壁は垂直ではなく、45°に近い角度で立ち上がり、壁裾には幅約 0.2 mの壁溝がめぐる。４本主柱（169 ～ 172 ピット）の建物で、中央には土坑（175 土坑）が１基設けられ、溝（176 溝）が付随する。柱間寸法は 2.1 ～ 2.3 mで、各ピットは直径 0.25 ～ 0.35 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mを測る。埋土はマンガンや炭を含むオリーブ褐色シルトである。中央の 175 土坑は、直径 0.85 ～ 0.9 mの歪んだ円形で、深さは 0.44 mを測る。３段に掘られており、下層には炭のブロックが入る黒褐色シルトと暗オリーブ褐色シルトの混合土、中層には黒褐色シルトと黄褐色シルトの混合土、上層にはマンガンや炭を含む黄褐色シルトが堆積する。176 溝は浅く、中央土坑から南側の斜面下方にむかってまっすぐにのびる。焼失した様子は窺えないが、南西隅の一部に赤褐色に変質した被熱面が認められた。

この竪穴建物の南と西側では、竪穴から約 1.5 m隔てて幅 0.3 m程の細い溝（173・377 溝）を検出している。周堤外側に掘られていた溝の名残であった可能性も考えられる。

埋土からは、弥生土器が出土しているがいずれも細片で、図化が可能なものは、192 の把手や 193 の底部などがある。この他には 194 の台石が１点出土している。詳細な時期比定は難しいが、他の竪穴建物と同様にⅣ様式の範疇におさまるものと推測される。

竪穴建物６　調査区のほぼ中央、標高 68.2 m付近に位置する。竪穴建物５の 31 m南に位置し、中央谷部を挟んで対峙しており、２区の竪穴建物２と３の位置関係とよく似ている。また竪穴建物５が竪穴建物３の東側に位置するように、この竪穴建物６は竪穴建物２の真東に 21 m隔てて並ぶ。このように竪穴建物２・３・５・６の４棟は、中央谷部を囲むように東西南北に整然と並んでおり（巻頭図版４）、当初から計画的に配置されたものであったことを窺わせる。平面形は直径 5.2 mの整った円形を呈し、周囲には幅約 0.2 ～ 0.3 mの壁溝がめぐる。中央土坑（198 土坑）を有する４本主柱（265 ～ 268 ピット）の建物で、柱間寸法は東西が 2.2 ～ 2.5 m、南北が 2.15 mを測る。柱穴はいずれも直径 0.2 ～ 0.3 m程度の円形で、深さは約 0.2 ～ 0.3 m弱である。埋土は炭が混じる褐色のやや粘土質シルトである。中央の 198 土坑は、幅 0.6 m、長さ 0.7 mの隅丸三角形を呈する。深さは 0.14 mと浅く、埋土は下層に炭が多く混じる黒褐色のシルトがあり、上層がピットと同じ炭が混じる褐色のやや粘土質シルトである。中央土坑からは北西方向にむかって浅い溝がのびる。竪穴建物６の埋土は、褐色のやや粘土質シルトで、小さな炭粒が混じっていたため、遺構検出は比較的容易であったが、竪穴床面からは炭や焼土は認められない。

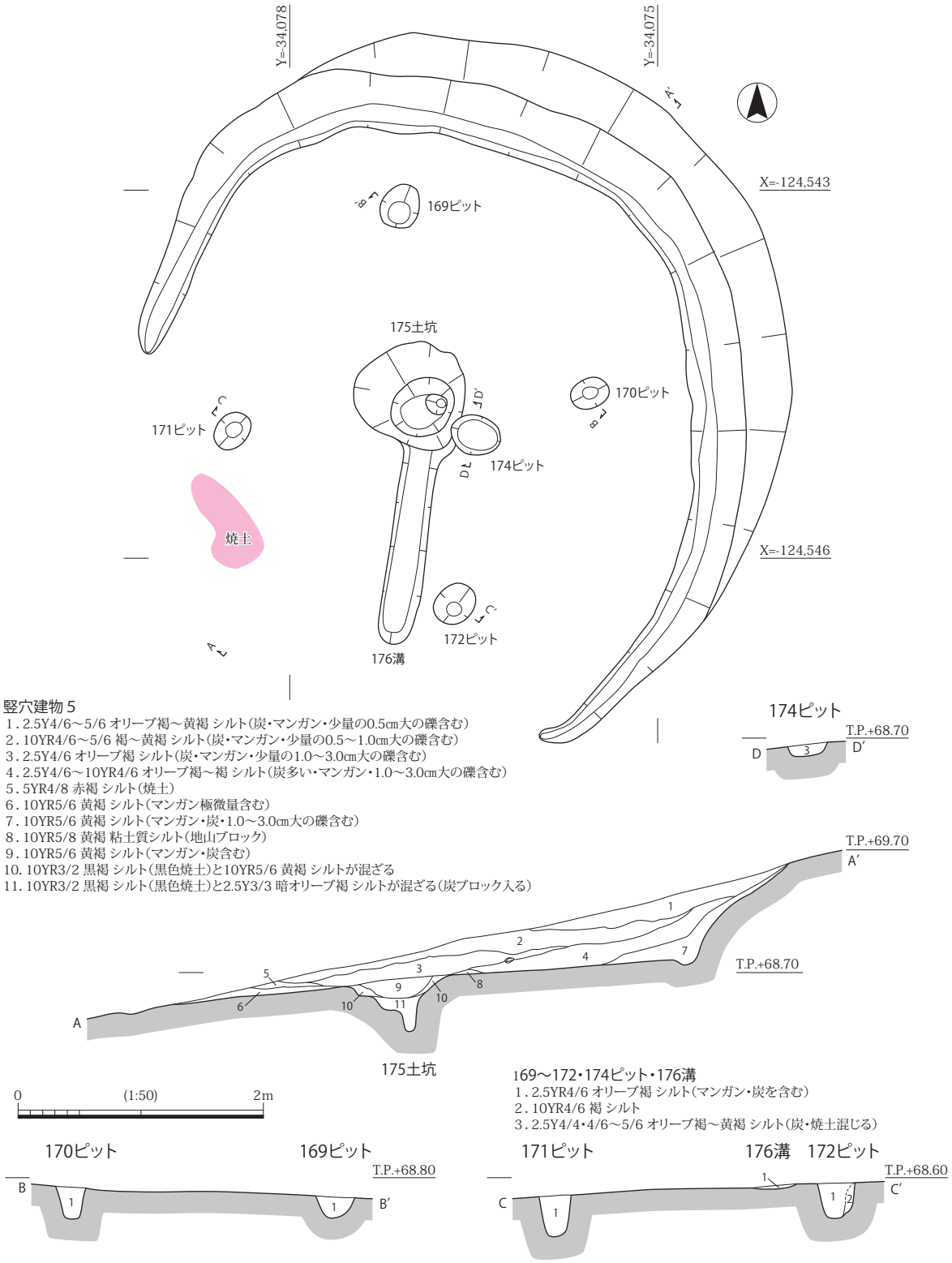


図 44　竪穴建物５平面・断面図

埋土からは、弥生土器が少量出土するのみで、細片が多く、壁溝から出土した 195 の蓋が図化できる程度である。他の竪穴建物と同様にⅣ様式の範疇におさまるものと推測される。

竪穴建物７　調査区南端の斜面肩部、竪穴建物６の南南西方向に 19 m隔てた、標高 68 m付近に位置する。平面形は他の竪穴建物と同様に円形で、壁に沿って幅 0.2 m強の壁溝がめぐるが、南端の一部は林道によって削平されている。直径４m程度の大きさで、他の竪穴建物に比べるとやや小さい。埋土は

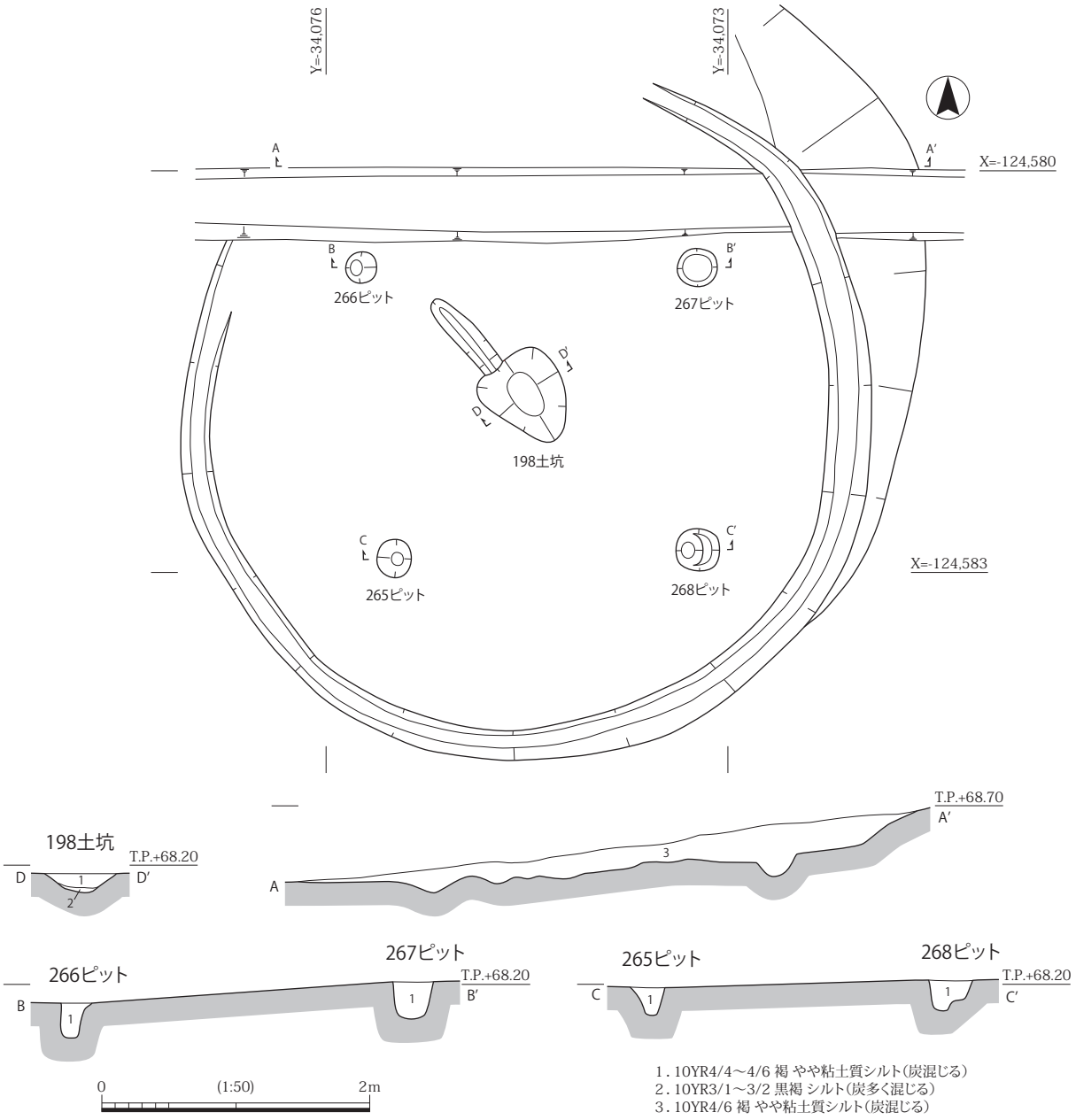


図 45　竪穴建物 6 平面・断面図

炭を多く含む黄褐色のやや粘土質シルトである。また、多くの竪穴建物が基本的に 4 本主柱であるのに対し、この竪穴建物 7 は主柱（棟持柱）2 本の構造である。その棟持柱（186・188 ピット）の柱間は 1.2 mで、ちょうどその柱と柱の間に中央土坑（187 土坑）が設けられている。柱穴はともに平面が円形で、186 ピットが直径 0.3 m、深さ 0.22 m、188 ピットが直径約 0.35 m、深さ 0.3 mをそれぞれ測る。埋土は炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。187 土坑は直径 0.4 m程のほぼ円形で、深さは 0.1 m程しかなく浅い。埋土はマンガンが入る炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。中央土坑からは斜面側の南東方向にむかって溝（189 溝）がのびている。この他 186 ピットの東側に、赤褐色に変質した被熱面が認められた。

埋土からは弥生土器が出土しているが、竪穴建物 5・6 に比べると出土量はやや多い。196 は広口壺の口縁部、197 は壺の頸部である。いずれも内外面の摩滅が著しく、調整などははっきりしない。199 は 189 溝から出土した、無頸壺の口縁部で、内外面の摩滅が著しいが、外面に縦方向の棒状浮文

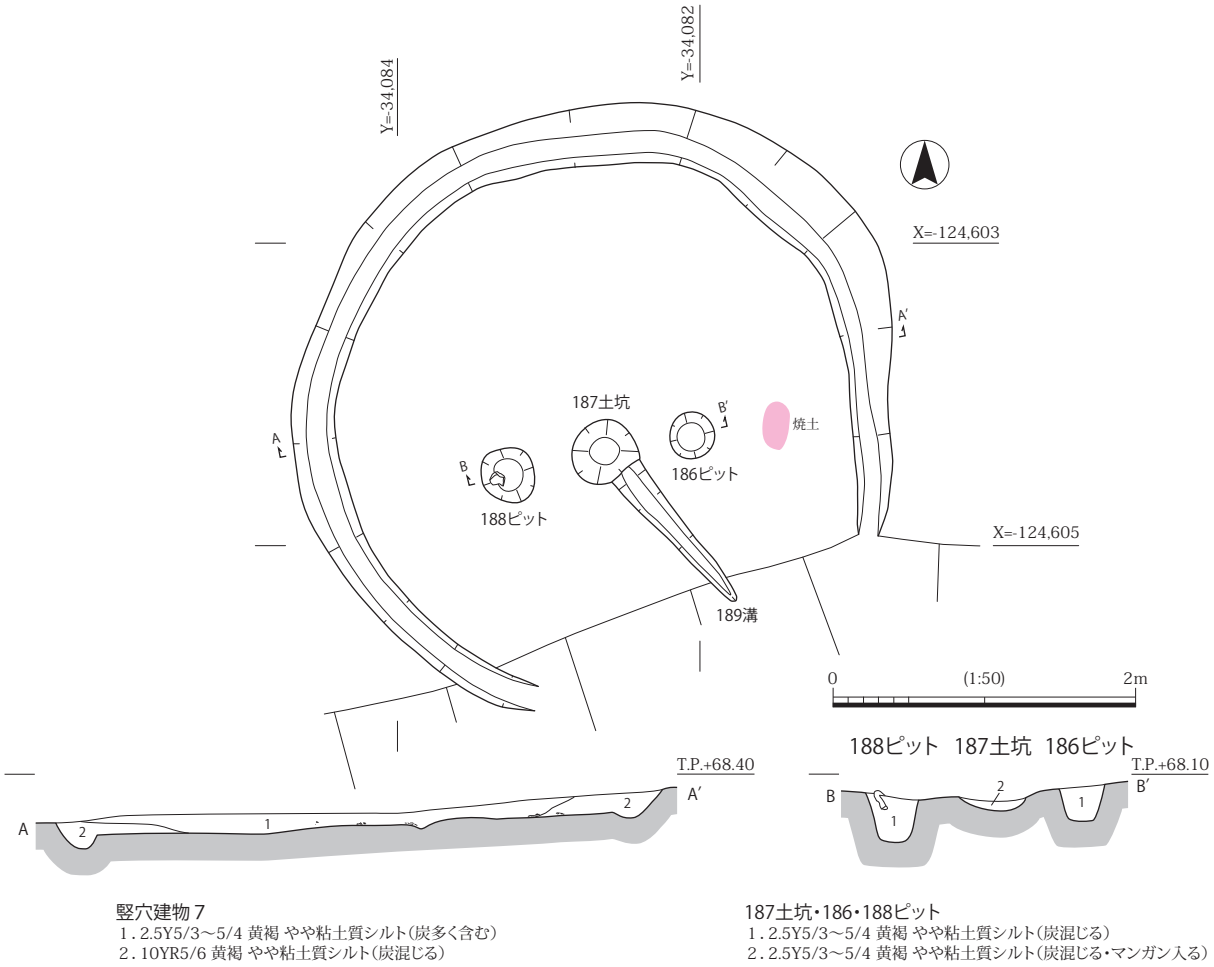


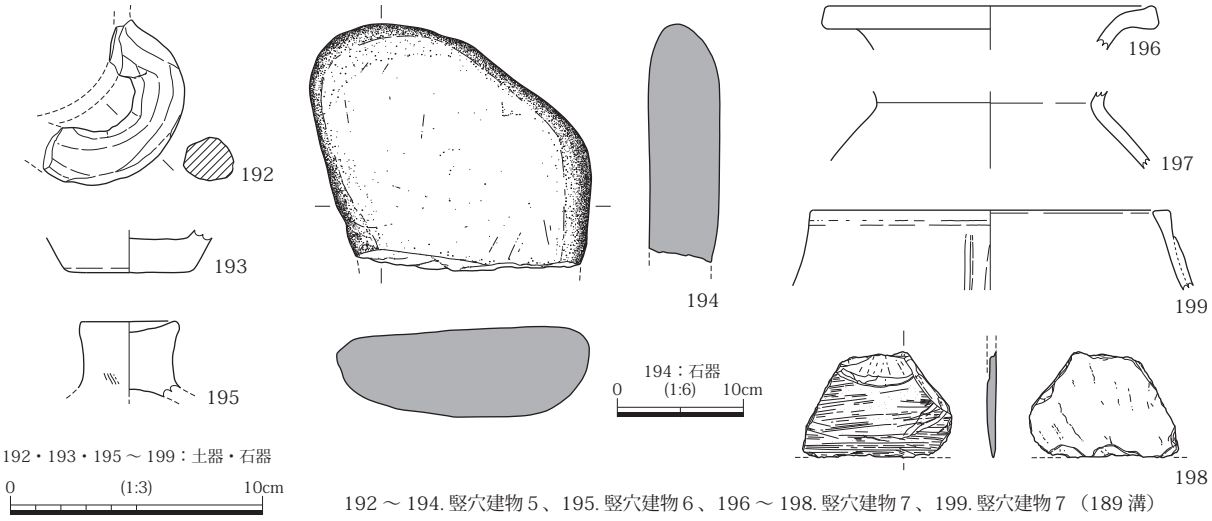
図 46　竪穴建物７平面・断面図

が残る。198 は粘板岩の磨製石包丁と考えられる。出土遺物は、他の竪穴建物と同様にⅣ様式の範疇におさまるものと推測される。

195 土坑　以上３棟のほか、竪穴建物６の真東、調査区の東壁際で竪穴建物によく似た遺構を検出した。被熱によって上面が赤褐色に変質した土坑（195 土坑）を検出したことから、周囲を精査したところ、その土坑の東側に壁溝かと思われた細溝を検出した。竪穴建物２と６の延長線上にきれいに並んでおり、また周辺から弥生土器も数点出土したことから、当初は竪穴建物になるものと考え、竪穴建物８として調査を進めた。しかし、この土坑の規模が竪穴建物の中央土坑にしてはやや大きすぎ、位置が溝と近接なことや、弥生時代の竪穴建物の中央土坑が被熱によって赤変している例が成合遺跡内では他にみつかっていないこと、また建物の検出時の輪郭も他の竪穴建物に比べて非常に不明瞭で、壁溝や柱穴もはっきりしなかったことなどから、他の竪穴建物とは検出状況が明らかに異なっていた。そのため、平成 24 年４月 21 日に実施した現地説明会の段階では、竪穴建物として公開していたが、他の竪穴建物との比較・検討により、最終的に、この遺構は竪穴建物ではないと判断した。

この 195 土坑は長径 2.4 m、短径 1.1 mの楕円形の土坑で、深さは深い箇所で 0.26 mを測る。埋土は小礫を多く含む炭混じりの黄褐色シルトで、その上面の一部がよく焼けて赤褐色に変質している。この焼けた土坑自体は、古代の遺構の可能性が高い。周辺からは、弥生土器が少量出土しており、その中でも 228 甕は赤味がかった色調で、東播磨もしくは淡路系の可能性がある。

125・137 土坑　竪穴建物６の北側で検出した。２区で検出した 44・45 土坑と同様に長い楕円形を呈



192 ～ 194. 竪穴建物５、195. 竪穴建物６、196 ～ 198. 竪穴建物７、199. 竪穴建物７（189 溝）

図 47　３－１区竪穴建物出土遺物

するもので、その形状は一見方形周溝墓の周溝を思わせるが、周溝墓を構成するような配置には分布していない。125 土坑は幅約 0.8 ～ 0.95 m、長さ 5.25 m、深さ約 0.15 m、137 土坑は幅約 1.3 m、長さ 6.0 m、深さ約 0.25 mを測る。埋土はマンガンが多く入る小礫混じりの黄褐色シルトである。

125 土坑から出土した 200 は、有段口縁の大型壺で、口縁部から頸部まで残存する。頸部から口縁部にむかって外反し、直立した二次口縁がつく。二次口縁の上端・下端に凹線文を施したのち刻目文を施す。この中央にはヘラ描きの斜格子文を配し、円形浮文が付される。頸部外面はタテハケ調整で、頸部には幅広の貼付突帯がめぐり刻目文を施す。遺跡内で出土した土器の中で最も加飾性の強い大型壺で、器形的にもやや古い特徴がみられるが、Ⅳ様式後半の中で捉えることができると考える。なお、１層から出土した 164・165 については、同一個体の可能性もある。

126 土坑　125 土坑の北東、調査区の東壁際に位置する。４－１区で検出した段状遺構と切り合う土坑で、当調査区内ではその西半のみを検出した。詳細については第６節で報告する。

128 土坑　調査区北東隅に位置する。125 土坑に似た楕円形の長い土坑で、幅約 0.65 ～ 0.75 m、長さ約 2.5 mを測る。深さは 0.18 mで、埋土は小礫を多く含む黄褐色のやや粘土質シルトである。

129 土坑　128 土坑の南東側に位置する。128 土坑に似た下膨れの南北に長い土坑である。幅は北側で約 0.25 m、南側が 0.9 m前後で、長さは約 2.7 mである。深さは 0.12 mで、埋土は炭や小礫が多く混じる褐色シルトである。

130 土坑　129 土坑の南西側に近接する。平面形は長さ 0.93 m、幅 0.74 mの隅丸の菱形を呈する。深さは 0.17 mで、埋土の下層は炭が僅かに混じる黄褐色のやや粘土質シルトで、上層は炭や小礫が多く混じる褐色シルトである。弥生土器と思われる小片が出土している。

131 土坑　130 土坑の南西側に位置する。平面形は長径 1.06 m、短径 0.8 mの隅丸長方形に近い楕円形を呈する。深さは中央部が一段深く 0.2 mを測る。埋土は 130 土坑と同じく炭が僅かに混じる黄褐色のやや粘土質シルトで、上面に 129 土坑の埋土と同じ炭や小礫が多く混じる褐色シルトが薄くのる。この土坑からは、南西方向にむかって幅 0.3 m弱の浅い溝がのびている。

133 土坑　竪穴建物６の西側、竪穴建物２とのちょうど中間に位置する。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径 1.44 m、短径 1.22 mを測る。深さは 0.2 mで、埋土は炭や小礫混じりの黄褐色シルトである。埋土内からは、弥生土器が出土した。201 は高杯の脚部で、内面に絞り痕が残る。202 は底部の破片

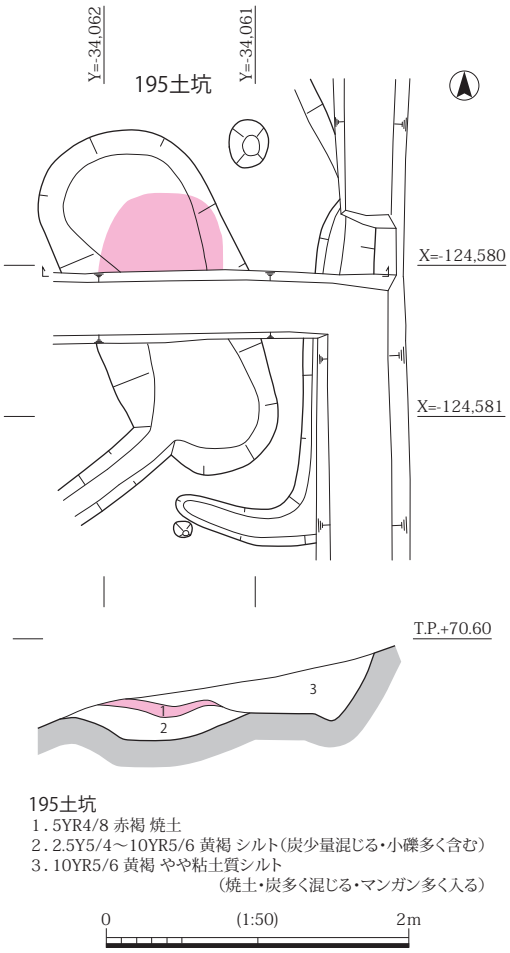


図 48　195 土坑平面・断面図

である。詳細な時期比定は難しいが、Ⅳ様式の範疇におさまると推測される。

134 土坑　調査区の北端、竪穴建物 5 の南側に近接する。377 溝と重複する土坑で、図面上は土坑が切っているように表現しているが、実際は土坑が溝に切られていた。平面形は長径 1.52 m、短径 1.0 mの楕円形を呈し、深さは 0.35 mを測る。埋土は下層が小礫と炭が多く混じる暗褐色のやや粘土質シルトで、上層が小礫を多く含む黄褐色のやや粘土質シルトである。この埋土上層は周辺の地山とよく似ていたため、遺構の輪郭が不明瞭で、遺構検出が難しかった。

埋土からは、弥生土器片がまとまって出土している。203・204 は底部で、203 には外面にケズリがみられる。205 は甕の頸部～体部、206 は口縁部～頸部である。205 は体部外面タテハケ、内面ナデである。206 の口縁端部はやや上方に上がり、外面に細かい凹線が施されており、搬入品の可能性がある。これらの土器は詳細な時期比定は難しいが、Ⅳ様式の範疇におさまると推測される。

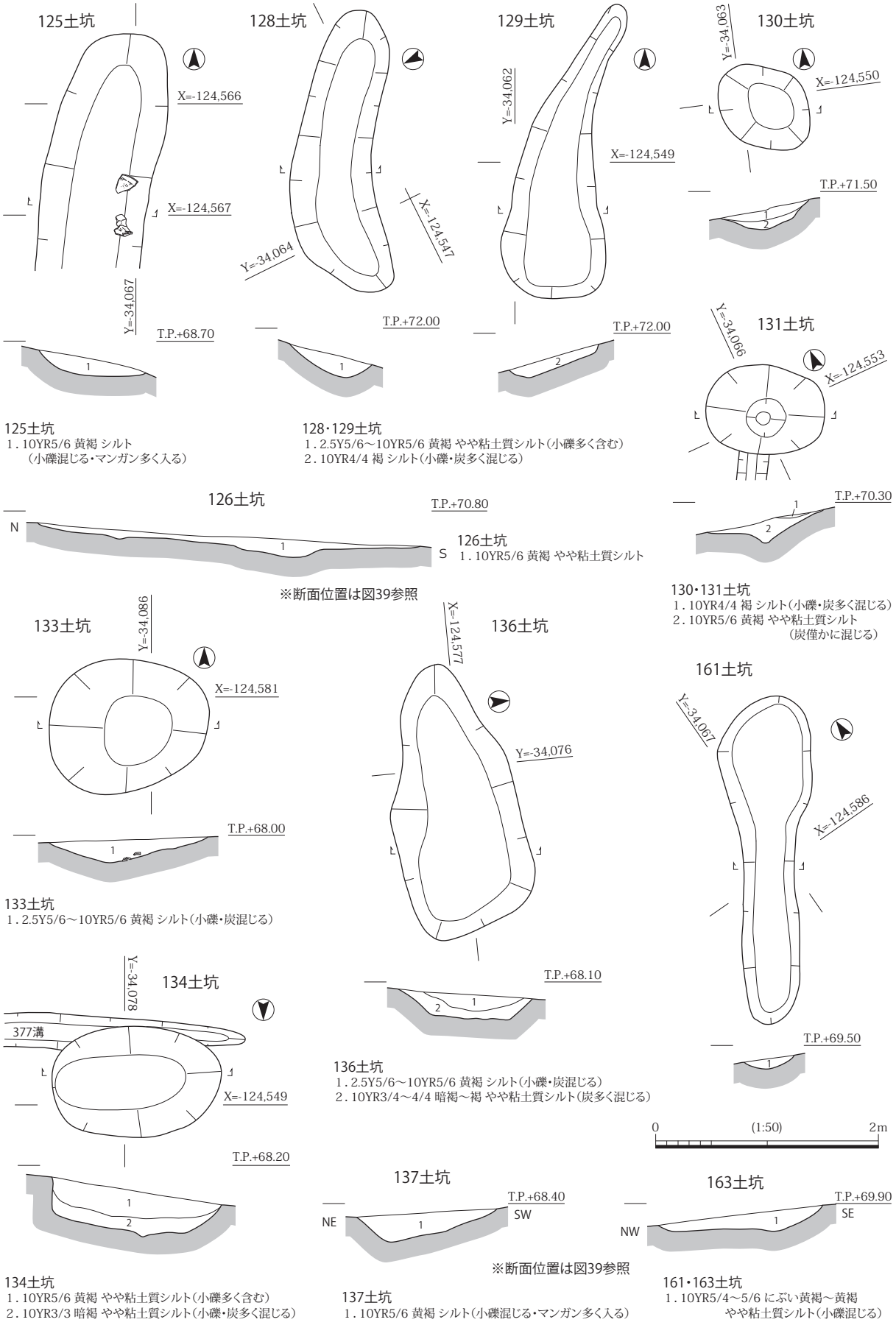
136 土坑　竪穴建物 6 の北側に近接する。東西に長い不整形な土坑で、南北幅 1.15 m、東西長約 2.4 mを測る。深さは 0.2 mで、埋土の下層は炭が多く混じる褐～暗褐色のやや粘土質シルトで、上層は炭や小礫混じりの黄褐色シルトである。埋土からは、弥生土器がややまとまって出土している。207 は外方に大きく開く鉢の口縁と考えられ、内外面はヨコナデ・ユビオサエで調整される。形態的にあまり類例がない。208 ～ 210 は底部で、209・210 は外面タテナデである。211 は高杯もしくは鉢の脚部である。いずれもⅣ様式の範疇におさまると推測される

161 土坑　調査区南半の、竪穴建物 6 の南東側に位置する。平面形は一端がやや膨れた長い楕円形を呈する。幅は狭い箇所で約 0.5 m、膨れた箇所で約 0.8 m、長さは 2.95 mを測る。深さは 0.1 mで、埋土は小礫混じりのにぶい黄褐～黄褐色やや粘土質シルトである。

162 土坑　調査区南半の東壁寄りに位置する。平面形は南北に長い楕円形で、長さ 1.12 m、幅 0.35 mを測る。深さは 0.15 mで、埋土はマンガンが多く入る黄褐色のやや粘土質シルトである。埋土からは弥生土器の小片が出土している。

163 土坑　162 土坑の西側に近接する。くの字に曲がる不整形な大型の土坑で、長さ 3.0 m、最大幅 1.45 mを測る。深さは 0.18 mで、埋土は 161 土坑と同じ小礫混じりのにぶい黄褐～黄褐色やや粘土質シルトである。

164 土坑　163 土坑の南側に位置する。平面形は大型のビーンズ形を呈する。長さ 2.0 m、幅約 1.2 mで、深さは 0.26 mを測る。埋土は下層が炭や小礫混じりのオリーブ褐色シルトで、上層が炭や小礫混じりの褐色シルトである。埋土からは、弥生土器がややまとまって出土している。212 は甕の口縁部



125土坑
1．10YR5/6 黄褐 シルト
（小礫混じる・マンガン多く入る）

128・129土坑
1．2.5Y5/6～10YR5/6 黄褐 やや粘土質シルト（小礫多く含む）
2．10YR4/4 褐 シルト（小礫・炭多く混じる）

126土坑
1．10YR5/6 黄褐 やや粘土質シルト

※断面位置は図39参照

130・131土坑
1．10YR4/4 褐 シルト（小礫・炭多く混じる）
2．10YR5/6 黄褐 やや粘土質シルト
（炭僅かに混じる）

133土坑
1．2.5Y5/6～10YR5/6 黄褐 シルト（小礫・炭混じる）

136土坑
1．2.5Y5/6～10YR5/6 黄褐 シルト（小礫・炭混じる）
2．10YR3/4～4/4 暗褐～褐 やや粘土質シルト（炭多く混じる）

134土坑
1．10YR5/6 黄褐 やや粘土質シルト（小礫多く含む）
2．10YR3/3 暗褐 やや粘土質シルト（小礫・炭多く混じる）

137土坑
1．10YR5/6 黄褐 シルト（小礫混じる・マンガン多く入る）

※断面位置は図39参照

161・163土坑
1．10YR5/4～5/6 にぶい黄褐～黄褐
やや粘土質シルト（小礫混じる）

図 49　3－1区弥生時代の遺構平面・断面図（1）

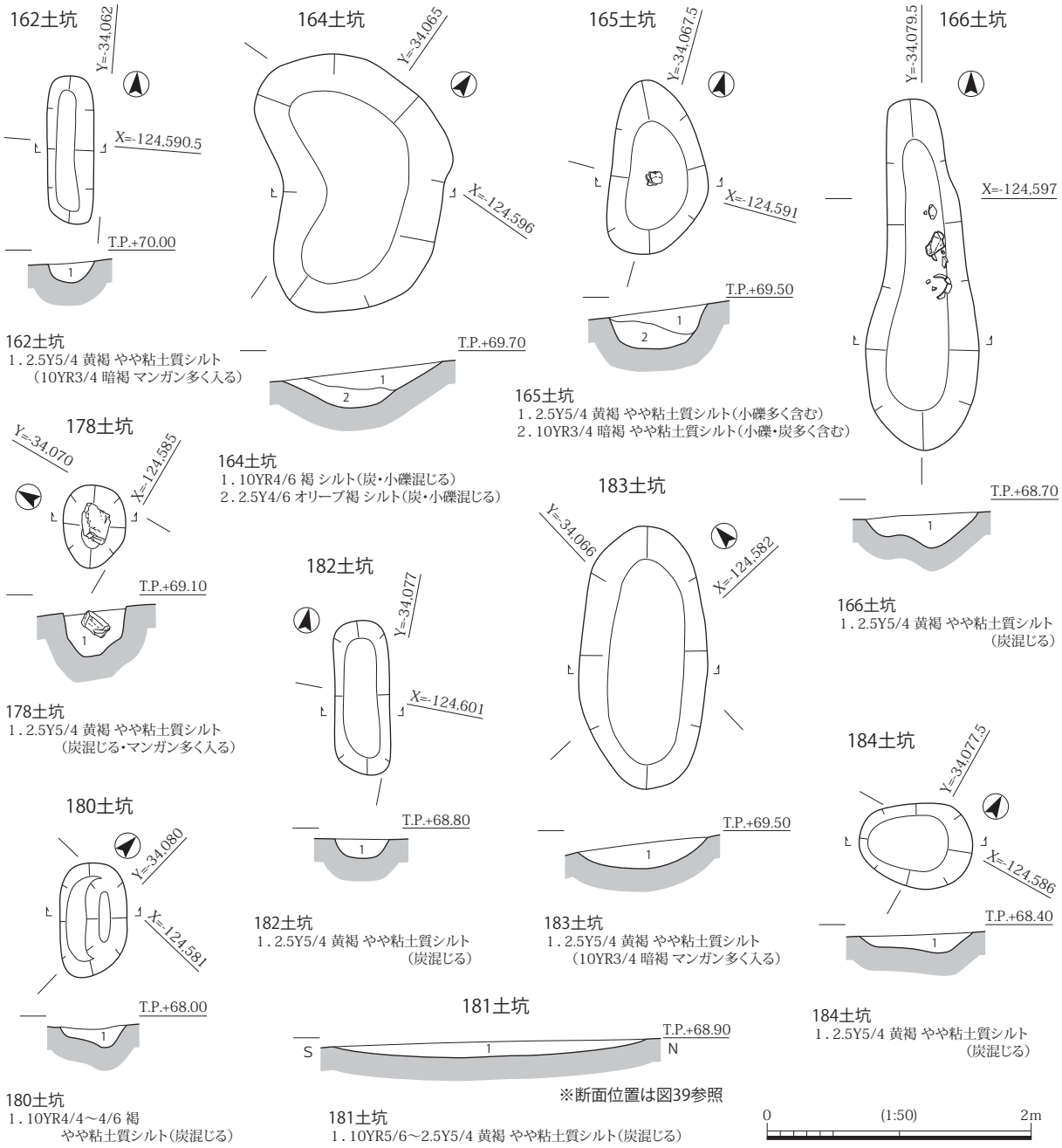
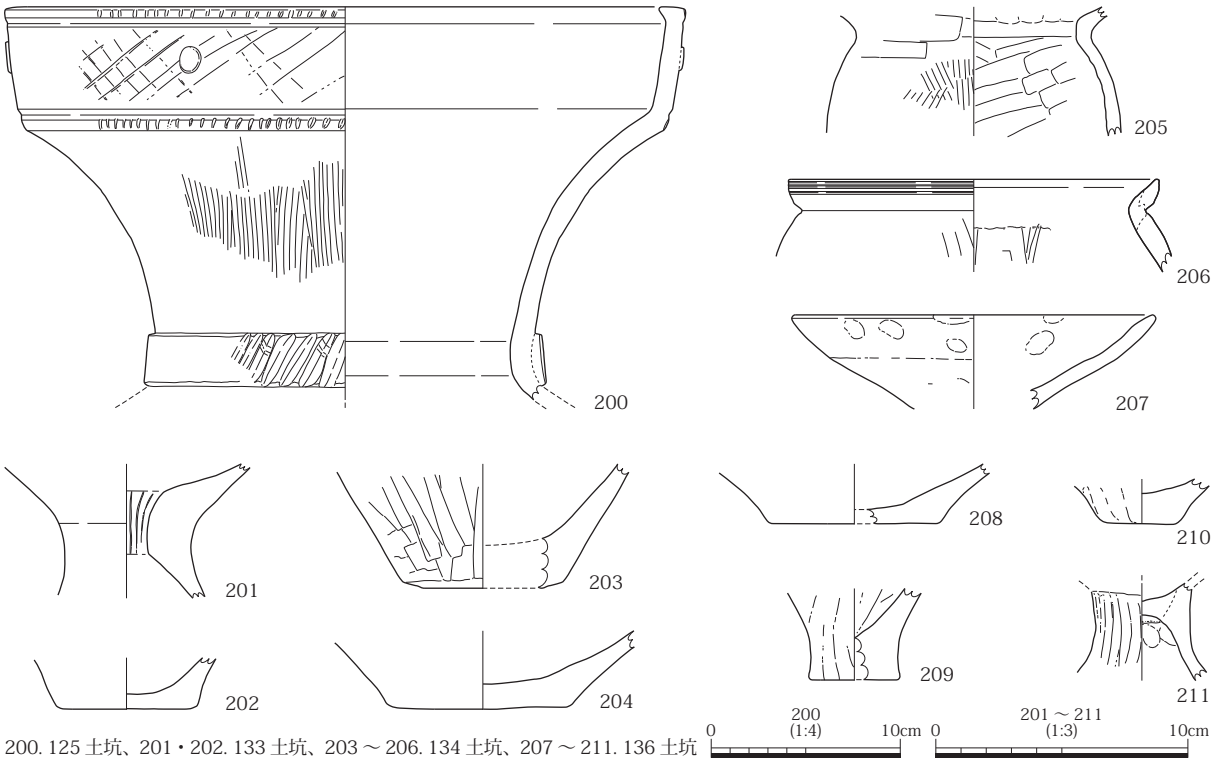


図 50　3－1 区弥生時代の遺構平面・断面図（2）

～体部で、口縁端部が内側上方にやや突出する。内外面の摩滅が著しいが、外面にヨコハケが僅かにみられる。213・214 は底部、215 は蓋、216 は脚台部、217 は高杯である。他の遺構と同様に、Ⅳ様式の範疇におさまると推測される。

165 土坑　163 土坑の西側に位置する。平面形は長径 1.32 m、短径 0.85 mの歪んだ楕円形を呈する。深さは 0.3 mで、埋土は下層が炭や小礫を多く含む暗褐色のやや粘土質シルト、上層が小礫を多く含む黄褐色のやや粘土質シルトである。埋土からは、弥生土器がまとまって出土している。218 は小型の壺の口縁の可能性がある。219 は頸部から口縁部に向かってカーブし、口縁部が短く丸くおさめられる。甕と考えられるが、鉢の可能性もある。220 は甕の口縁～体部で、頸部はくの字に屈曲し、口縁部の端面はやや上方におさめる。内外面は摩滅が著しいが、外面にハケがみられる。221 は小型の甕で、口縁端部の面取りがおこなわれず丸くおさめられている。内外面ともにナデ調整である。これらの土器



200. 125 土坑、201・202. 133 土坑、203 ～ 206. 134 土坑、207 ～ 211. 136 土坑

図 51　3－1 区弥生時代の遺構出土遺物（1）

についても、Ⅳ様式の範疇におさまる。

166 土坑　竪穴建物 7 の北側に位置する。平面形は下膨れの楕円形で、長さは 2.66 m、幅は北側で約 0.4 m、南側で約 0.85 mを測る。深さは約 0.25 mで、埋土は炭が混じる黄褐色のやや粘土質シルトである。埋土からは、弥生土器がまとまって出土しており、底面からはやや浮いた状態で出土した。222 は端部がやや肥厚する壺の口縁、223 が甕の口縁である。224 は底部～体部片、225 が底部で、いずれも内外面は摩滅している。226 は底部～体部の最大径付近まで残存する甕で、外面がタテハケ、内面がヘラケズリで、やや新しい要素がみられる。Ⅳ様式末頃を中心とした時期に位置づけられる。

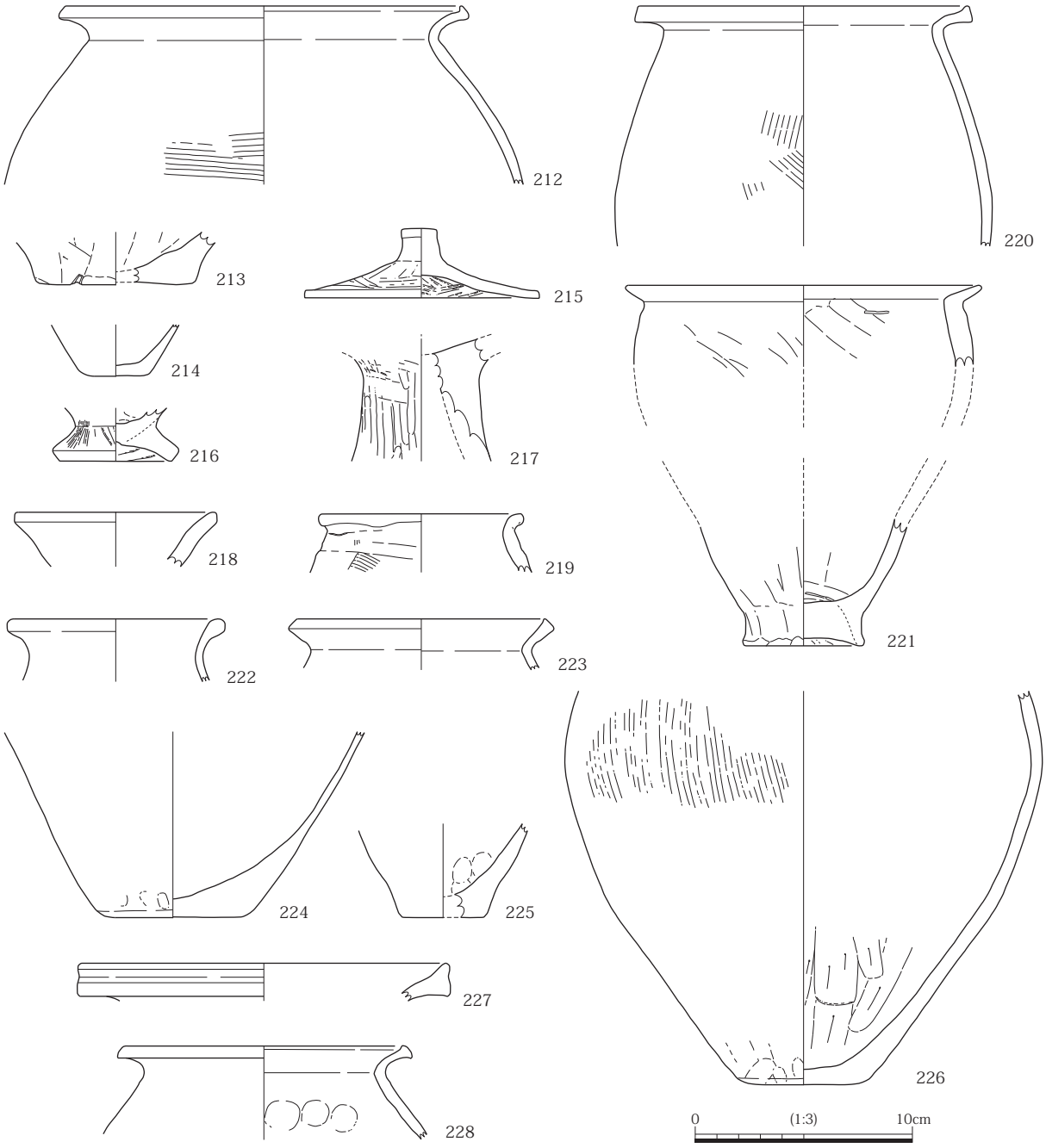
178 土坑　竪穴建物 6 の南東側に近接する。平面形は長径 0.63 m、短径 0.47 mの楕円形で、深さは 0.34 mを測る。埋土はマンガンが多く入る炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトで、その上層に人頭大の石材が 1 点埋まっていた。

180 土坑　竪穴建物 6 の西側に近接する。平面形は長径 0.87 m、短径 0.5 mの楕円形で、深さは深い箇所で 0.16 mを測る。埋土は炭混じりの褐色やや粘土質シルトである。埋土からは、弥生土器が少量出土している。227 は広口壺の口縁で、端部に凹線文が施される。

181 土坑　竪穴建物 7 の東側に位置する。大型の不整形な土坑である。東西方向に長く、長さは 5.9 m、幅は広い箇所で 2.4 m、狭い箇所で約 1.2 mを測る。深さは 0.1 mで、埋土は炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。

182 土坑　181 土坑の西側に近接する。162 土坑によく似た形状の土坑で、平面形は南北に長い楕円形を呈する。長さは 1.17 m、幅 0.42 mで、深さは 0.15 mを測る。埋土は炭混じりの黄褐色のやや粘土質シルトである。

183 土坑　161 土坑の北側に位置する。平面形は長径約 2 m、短径約 1 mの楕円形を呈する。深さ 0.2 mで、埋土は 162 土坑と同じマンガンが多く入る黄褐色のやや粘土質シルトである。



212 ～ 217. 164 土坑、218 ～ 221. 165 土坑、222 ～ 226. 166 土坑、227. 180 土坑、228. 195 土坑周辺

図 52　3 － 1 区弥生時代の遺構出土遺物（2）

184 土坑　竪穴建物 6 の南西側に近接する。平面形は長径 0.86 m、短径 0.65 mの楕円形を呈する。深さは約 0.1 mで、埋土は炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。（伊藤・笹栗）

【註】

1）小林義孝 1992「灰を納めた土壙」『究班 埋蔵文化財研究会 15 周年記念論文集』15 周年記念論文集編集委員会

2）安田稔・長島雄一・吉田秀享 1989「武井 E 遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告 I 』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター

第５節　３－２区の調査成果〔図 53 ～ 61、写真図版 22 ～ 24・55・56〕

２区と３－１区の北側に接する約 1,400 ㎡の調査区である。調査区北側には南東―北西方向の尾根筋が通っており、その尾根を境に南西側では、やや緩やかな斜面となっており、この緩斜面地で遺構が検出されている。北東側については、12 －１～ 12 －４トレンチを設定した小谷へと落ちる急勾配な斜面となる。これまでの調査区と同様に、表土層とその下の黄褐色シルト（１層）を除去すると、古代（８・９世紀）と弥生時代中期後半の遺構面が同一面で検出される。また、調査区東側の尾根筋上など、場所によっては１層がなく、表土層直下が遺構面（地山）となる箇所もある。（伊藤）

包含層の遺物　１層からは、土師器・須恵器・弥生土器が出土している。南側に隣接する２区と比べると、古代の遺物は少ない。229 は須恵器壺Ｍで、口縁部が丸くおさめられるタイプのもので、平底で糸切痕がみられる。９世紀前半から中頃に位置づけられる。230 は弥生土器の甕口縁部～体部、231 は壺の底部、233 は蓋である。232 は弥生土器高杯の脚部で、脚部に凹線を施し脚端部にむかって開く形態である。これらの弥生土器はいずれもⅣ様式の範疇におさまるものと推測される。この他に１層中からは、寛永通宝も４枚出土している。（笹栗）

古代の遺構と遺物

古代の遺構については、２区から続く斜面の造成痕跡や石列・土坑などが検出されている。

斜面の造成　調査区南西側でみられる斜面の造成痕跡で、南西方向にむかって傾斜する斜面の途中を切土し、平坦面が造成されている。切土による段は、南に位置する２区から続いており、国土座標軸にのる南北方向の段であるが、３－２区に入って６ｍ程の地点で西に向きを変えてＬ字状に曲がる。この西に折れ曲がった箇所の段裾に、360 石列がある。また、段の北側には、幅４～５ｍ程度のテラス状の平坦部がみられ、これについても人為的な造成によるものであった可能性がある。このテラス状の平坦部では、336 土坑と 337 溝が検出されている。

360 石列　調査区南西隅、２区との調査区境のすぐ北側に位置する。上記のとおり斜面の造成によってできた平坦部の北端に築かれており、２区検出の掘立柱建物とほぼ同時期の古代の遺構であったことが推測できる。国土座標軸にのるＬ字状の石列で、切土による段の向きと同じく、南北方向の石列の北端から、直角に西に折れ曲がっており、ちょうど四角あるいはコの字状に囲まれた石列の北東隅を検出したような状況であった。その規模は南北 4.0 m、東西 4.2 ｍ分を検出したが、石列はさらに西側の調査区外へと続いていると考えられる。南側については、石列のすぐ南側に接する２区では、表土掘削時にひと抱えほどの大きさの石材が１点みられた以外、石列の痕跡は全く検出されなかった。石列は標高 67.4 ～ 67.5 ｍの平坦部に築かれているが、２区まではその平坦部は続いておらず、遺構面が緩やかな

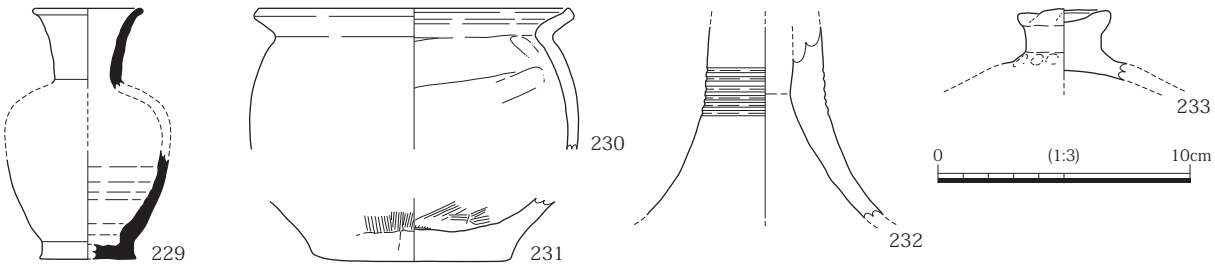


図 53　３－２区１層出土遺物

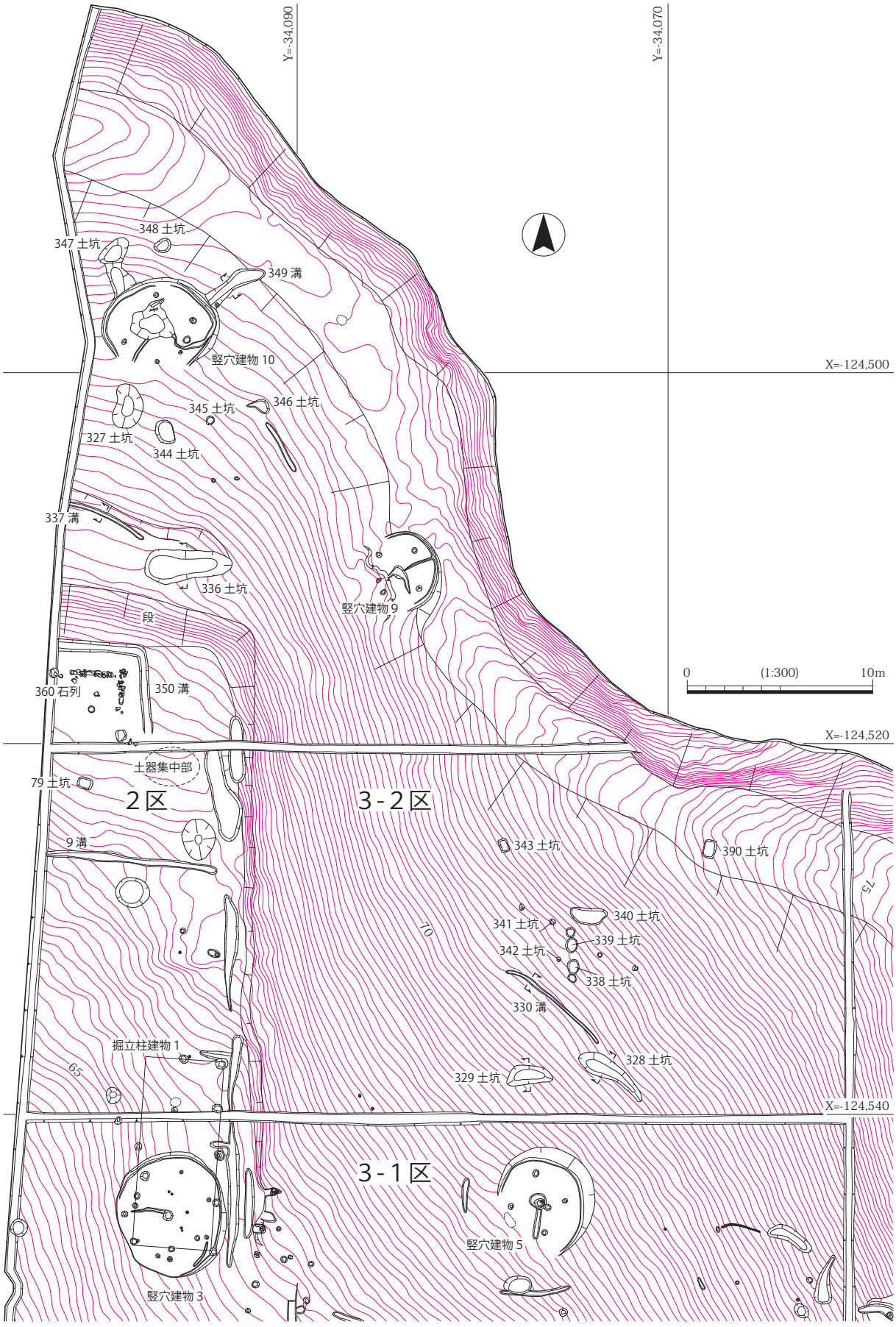


図 54　3 － 2 区検出遺構全体平面図

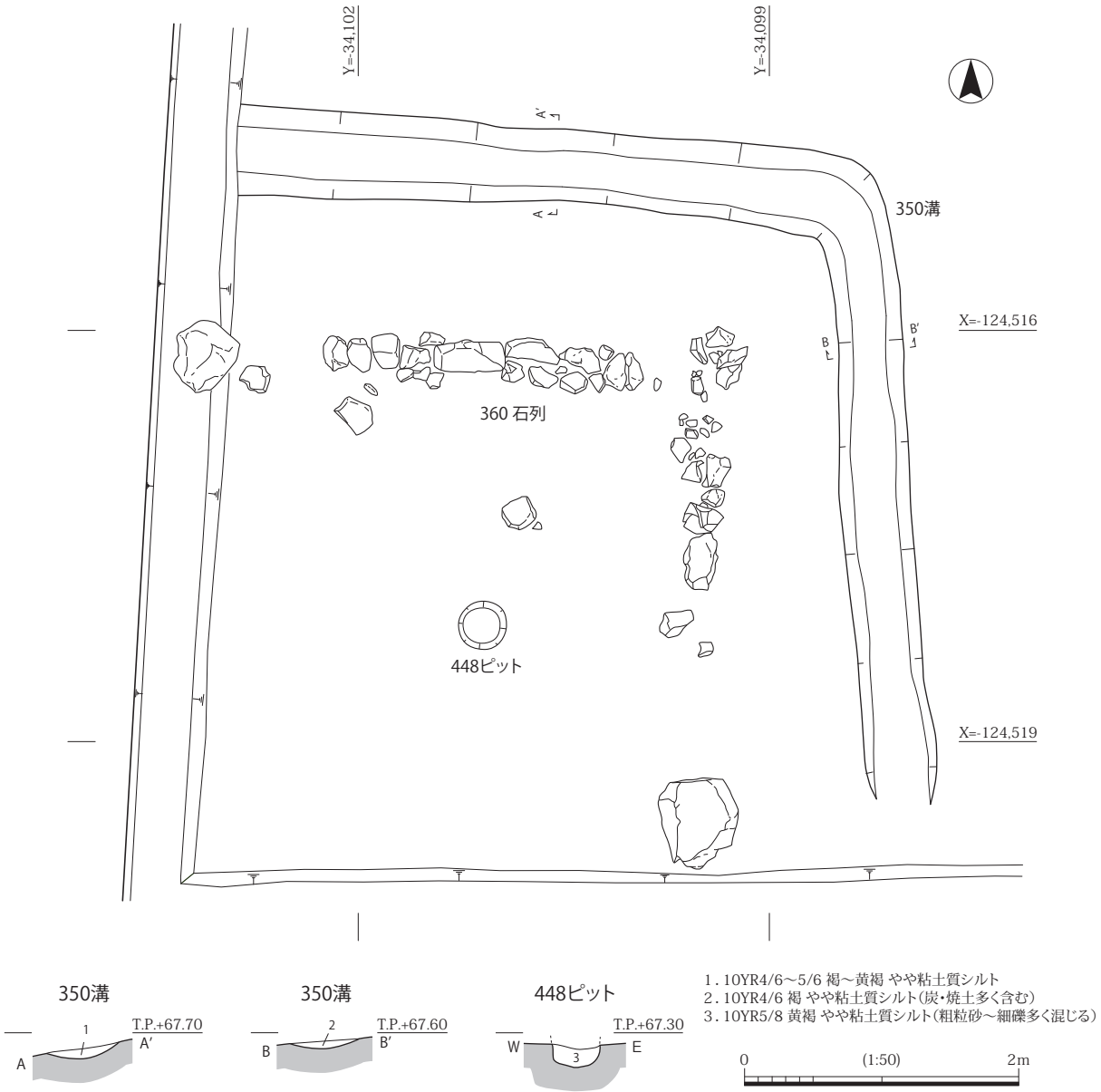


図 55　360 石列平面・断面図

傾斜を成している。これがもともとの地形であったのか、後から削平されたものであるかは明らかでないが、もともとの地形であったとすれば、石列の南端はちょうど２区と３－２区との調査区境あたりであったと復元できる。一方で後に削平または流出したものであった場合、２区で検出した東西方向にのびる９溝が南端を画していた可能性もある。石列に使われた石材の大きさは一定ではなく、拳大のものから礎石にも使われるくらいの大きさのものもみられる。石材は全て角張ったものを使用し、上面、内面、外面、いずれの面も揃えられておらず、雑然と並んでいる。なお同様の石材は、この石列の東側から斜面裾までの範囲で多数散在していた。石列の北東隅から西 3.6 m地点と、南 3.3 mの地点には、礎石大の大型の石材がみられる。西側については未調査地で、南側についてはこの石列が続いているかはっきりしていないため、この礎石大の石材が石列の隅に位置するのか、石列の途中にくるのか判断がつかない。また、南側の石材については上面に平らな面が向けられる一方で、西側の石材については平らな面が上面を向いておらず、その上に柱がのるかどうかは定かではない。そのため、この石列については、一見すると石列を伴う礎石立ちに建物の一部のようにもみえるが、礎石となりうる大型の石材が、面を

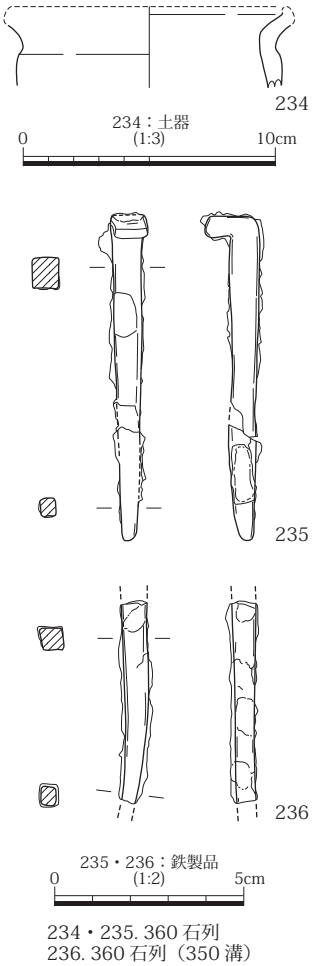


図 56　360 石列出土遺物

揃えて規則的に並ぶような状況はみられないため、この遺構の性格ははっきりしない。買地券が出土したことで知られる大宰府の宮の本遺跡[1)]などにみられる、土壇周囲の列石にもよく似ており、葬送儀礼にかかわる施設をめぐる列石であった可能性なども想定される。

石列の外側には、北面では約 1.0 m、東面では約 0.8 m隔てて、石列に並行するようにＬ字に曲がる浅い溝（350 溝）が検出された。幅約 0.5 m、深さは 0.1 m弱で、埋土は炭や焼土を多く含む褐色やや粘土質シルトや、黄褐～褐色やや粘土質シルトである。この石列が建物に伴う遺構であれば、その外側にある溝は雨落ち溝の可能性が高い。また石列内からはピット（448 ピット）が 1 基検出されている。石列の内側を徐々に下げている段階で検出された遺構であるため、この石列に伴うものかは明らかでない。直径 0.35 mで、埋土は粗粒砂～細礫が多く混じる黄褐色やや粘土質シルトである。

360 石列および 350 溝からは僅かながら古代の遺物が出土している。234 は土師器の小型の甕で、石列内から出土した。摩滅が著しいが口縁端部が内側に巻き込む形状である。この他鉄製品が 2 点（235・236）出土している。235 は石列内から出土したほぼ完形の鉄釘で、長さ 8.6cm を測る。正方形に近い断面形を呈し、頭部が折り曲げによるＬ字形である。236 は 350 溝から出土しており、頭部・先端部ともに欠損しているが、235 と断面形態が酷似していることから、鉄釘の可能性が極めて高い。

なお、この石列の南東側、ちょうど 2 区側に入る箇所では、主に 9 世紀中頃を中心とした時期の遺物がまとまって出土している（図 32）。ここからは、緑釉陶器の唾壺（141・142）や、灰釉陶器の皿（140 および図 23 － 86）などが、まとまって出土している。さらにこの付近からは拳大の石材も多くみられたことから、これらの遺物は、この 360 石列に伴う可能性が高い。

336 土坑　360 石列北側のテラス状の平坦部に位置する。東西方向に長い土坑で、長さ 4.7 m、幅 1.3 ～ 1.9 mを測る。深さは約 0.2 mで、埋土は礫を多く含みマンガンが入る黄褐色やや粘土質シルトである。埋土からは、弥生土器数点と須恵器片 1 点が出土している。須恵器については、小片のため図化していない。混入の可能性も考えられるが、この 1 点から古代の遺構と判断した。245 は弥生土器高杯の脚部で、外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ調整である。円盤充填によるが円盤が剥落している。この他に図化できなかったが、刻目文を施した貼付突帯をもつ壺頸部の小破片もあることから、弥生土器はⅣ様式半ばから後半頃のものと考えられる。

337 溝　336 土坑の西側、テラス状平坦部の段裾に位置する。幅は約 0.25 mで、非常に浅い。埋土は炭や小礫が混じるにぶい黄褐～黄褐色シルトである。埋土内から出土した弥生土器のうち、241 は底部で、外面に煤に付着することから甕と考えられる。外面はタテハケで、内面は摩滅のため確実視できないがケズリの可能性がある。出土した遺物は弥生土器のみであるが、古代の造成に伴うテラス状に位置するため、古代の遺構であった可能性が高いと考えている。

調査区南東部の遺構と遺物

次に報告する遺構は、調査区の南半、３－１区で検出した竪穴建物５の北側でまとまって検出したものである。このあたりは南西にむかって下る斜面地で、比較的遺構が稀薄である。古代と弥生時代の遺構が混在しているが、時期比定がやや難しいためまとめて報告する。

328・329 土坑　調査区の南端部に位置する。３－１区で検出した竪穴建物５のすぐ北側に約 3.5 ～ 4.5 m隔てて築かれていることから、ともにその周堤外側の溝であった可能性も考えられる。328 土坑は等高線に並行する南東―北西方向に長い土坑で、長さは 4.1 m、幅は最も広い箇所で 1.2 m、深さは 0.15 mを測る。329 土坑は東西方向に長い土坑で、長さは 2.5 m、幅は最も広い箇所で 1.1 m、深さは 0.1 mを測る。埋土は両者とも炭混じりの黄褐色シルトである。このうち 328 土坑の埋土からは弥生土器が少量出土している。図化できたのは 244 の底部のみであるが、他の遺構と同様にⅣ様式の範疇におさまるものと推測される。

338 土坑　328・329 土坑の北側に位置する。平面形は長辺 0.85 m、短辺 0.3 mの隅丸長方形を呈する。深さは 0.1 mで、埋土は炭が少量混じる明黄褐～黄褐色シルトである。なおすぐ西側に近接する 342 ピットの埋土には、多量の炭や焼土が混じっていたことを特記しておく。

339 土坑　338 土坑のすぐ北側に位置する。平面形は長径 0.87 m、短径 0.66 mの歪んだ楕円形で、深さは 0.18 mを測る。埋土は上層が小礫と炭混じりの黄褐～褐色シルトで、下層が少量の炭が混じる明黄褐～黄褐色シルトである。遺構内からは遺物が出土していないが、遺構周辺から遺物がまとまって

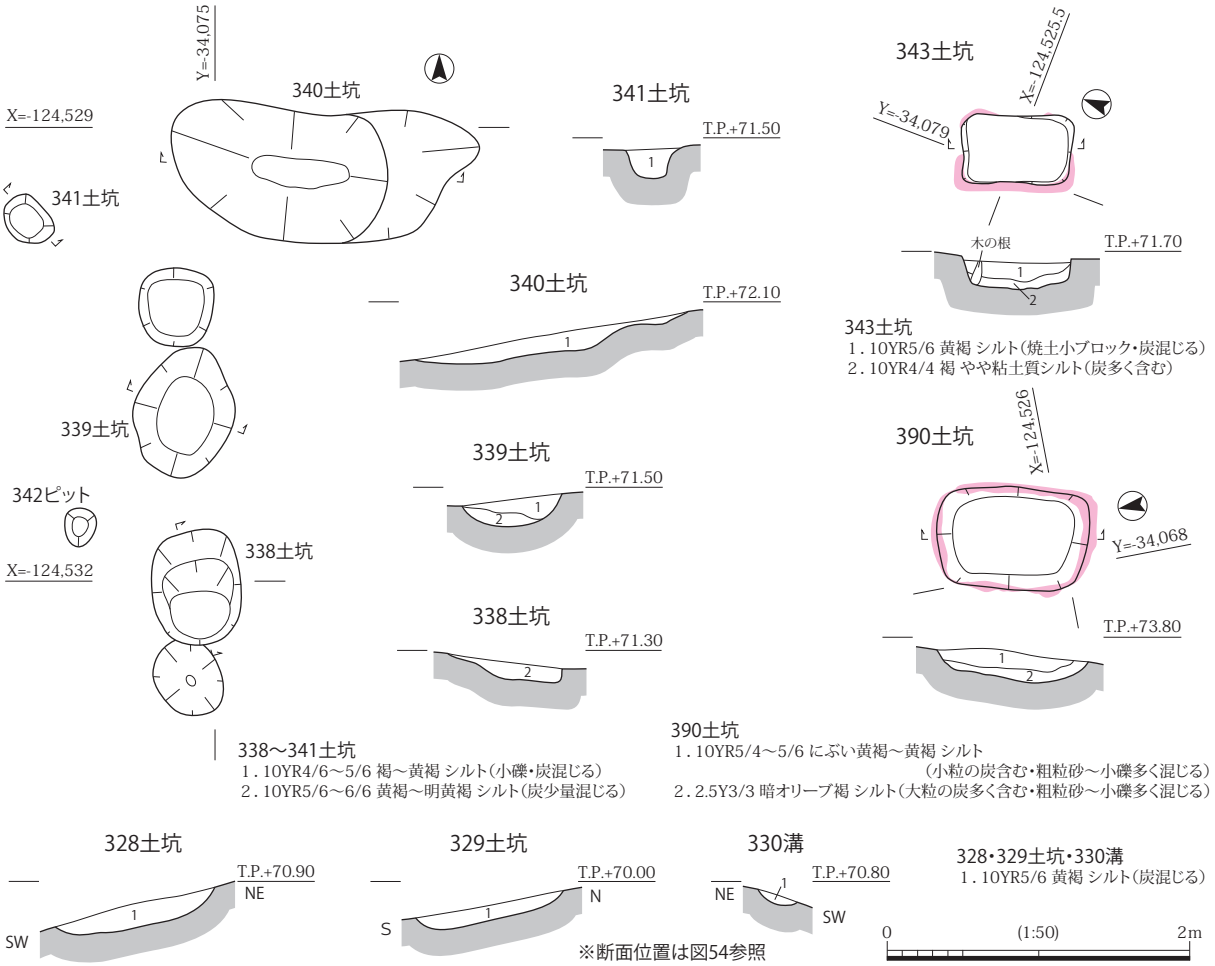


図 57　３－２区調査区南東部検出遺構平面・断面図

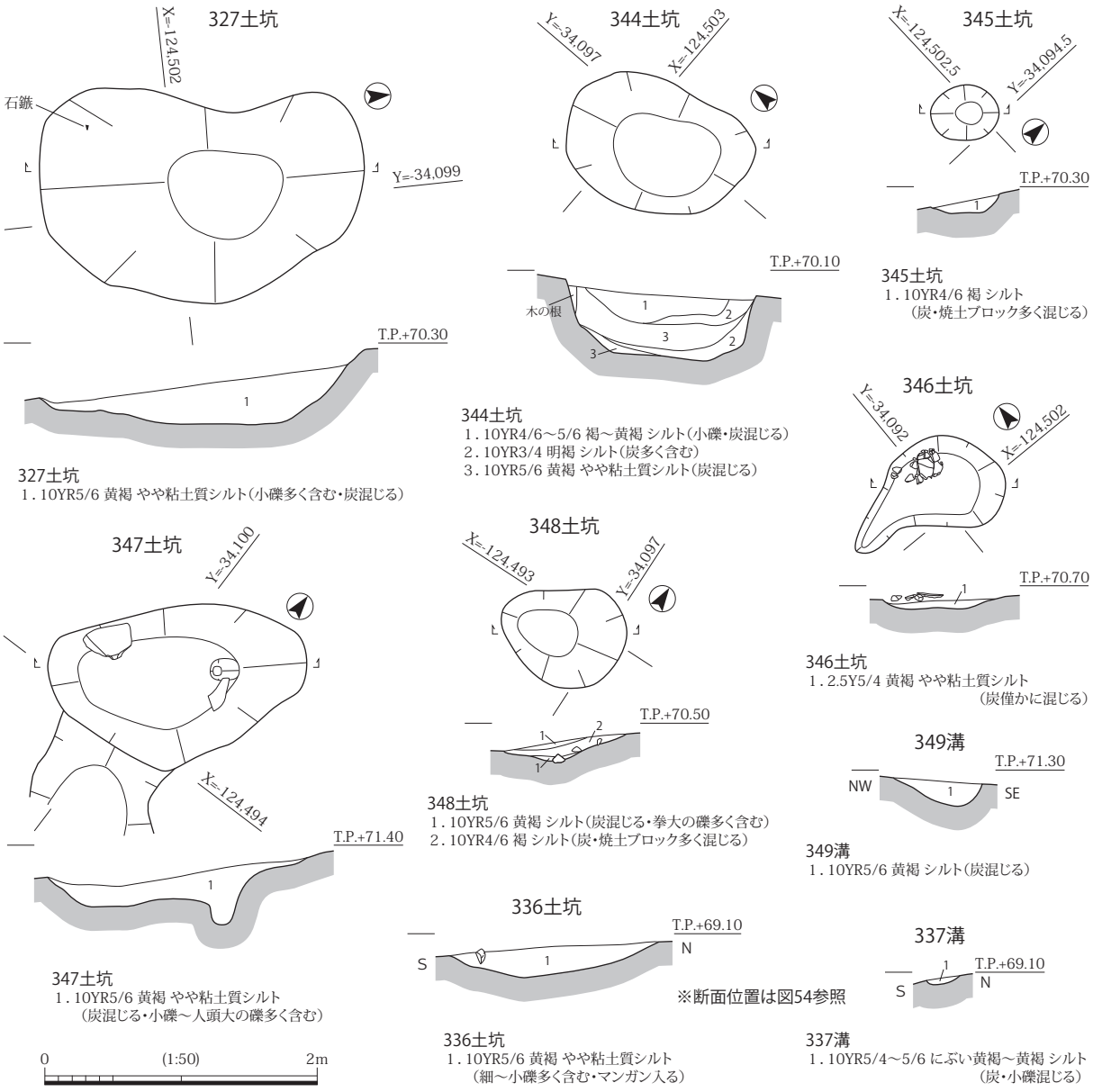


図 58　3－2区調査区北半部検出遺構平面・断面図

出土している。246 は弥生土器の壺頸部～体部で、外面がタテハケ、内面がナデ調整である。詳細な時期は不明であるが、他の遺構と同様にⅣ様式の範疇におさまるものと推測される。

340 土坑　339 土坑の北側に位置する。東西に長い不整形な土坑で東西 2.04 m、南北 0.85 mを測る。深さは 0.1 m強で、埋土は小礫と炭が混じる黄褐～褐色シルトである。

341 土坑　340 土坑の西側に位置する。0.35×0.27 mの小規模な楕円形の土坑で、深さは 0.2 mを測る。埋土は小礫と炭が混じる黄褐～褐色シルトである。

343 土坑　調査区の南半、340 土坑の北西側に位置する、焼土坑である。平面形は長辺 0.75 m、短辺 0.45 mの隅丸長方形で、深さは 0.2 mを測る。埋土は下層が炭を多く含む褐色のやや粘土質シルト、上層が焼土の小ブロックと炭が混じる黄褐色シルトで、壁面が被熱して赤褐色に変色している。埋土内からは遺物は出土していないが、古代に帰属する遺構と考えられる。

390 土坑　調査区東側の尾根筋上に位置する。343 土坑と同様の焼土坑である。平面形は長辺 1.0 m、短辺 0.68 mの隅丸長方形で、深さは 0.18 mを測る。埋土は下層が大粒の炭を多く含み、粗粒砂～小

礫が多く混じる暗オリーブ褐色シルトで、上層が小粒の炭を含み、粗粒砂～小礫が多く混じるにぶい黄褐～黄褐色シルトである。壁面は四方ともに被熱して赤褐色に変色する。埋土内からは遺物は出土していないが、古代に帰属する遺構と考えられる

330 溝　調査区の南端、328・329 土坑のすぐ北側に位置する。等高線に並行する南東―北西方向の細溝で、幅は約 0.25 mを測る。深さは約 0.05 mで、埋土は炭混じりの黄褐色シルトである。

弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては、竪穴建物２棟のほか、土坑などが検出された。

竪穴建物９　調査区北東側の尾根筋上、標高 71.1 m付近に位置する。平面形は整った円形に復元できるが、西側にむかって斜面が下っており、西側半分は削平されていた。南北で直径 4.2 m、東壁での深さは 0.3 mを測る。壁に沿って幅 0.15 ～ 0.3 m程度の壁溝がめぐり、東側の壁溝からは中央土坑（335

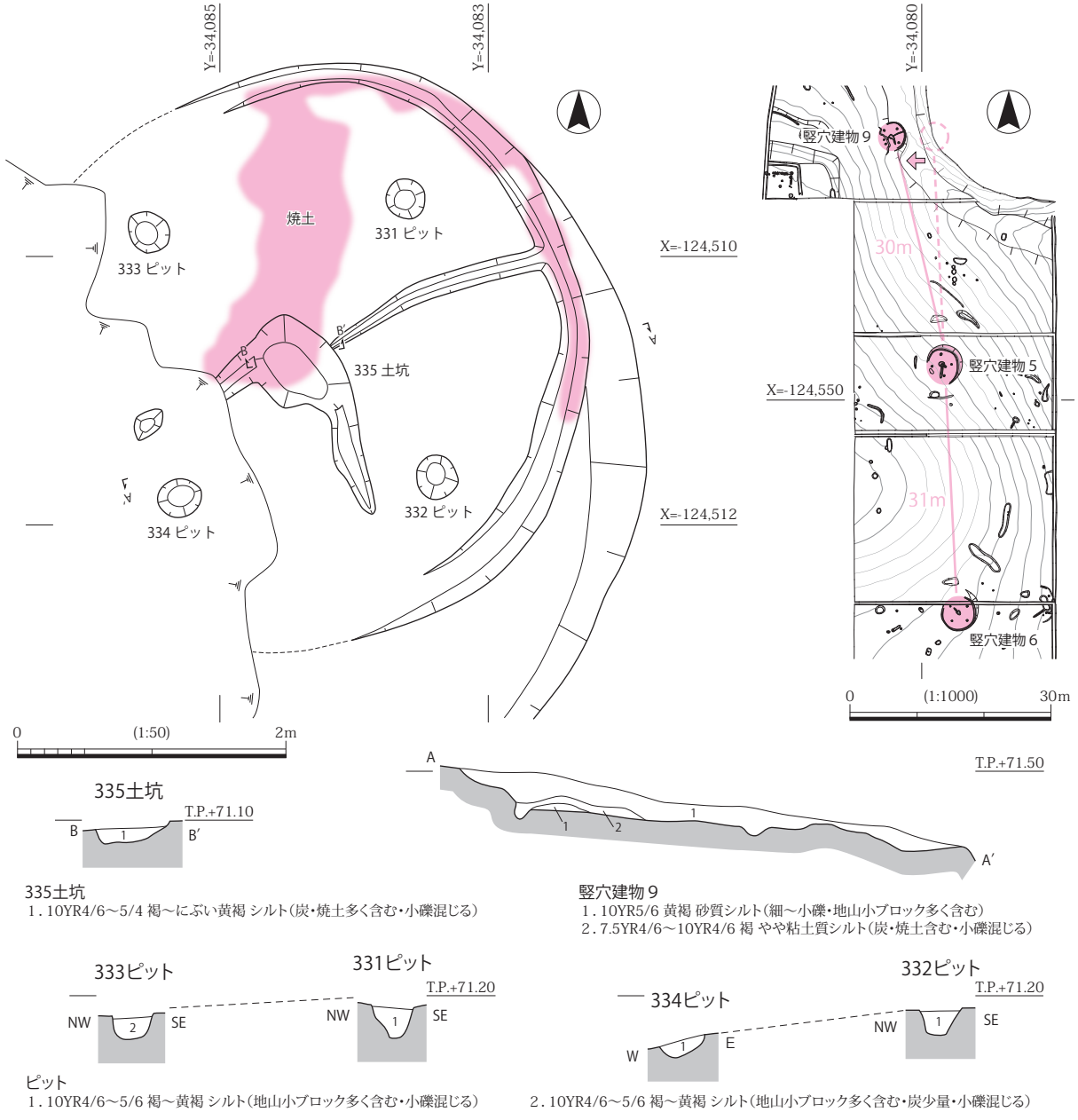


図 59　竪穴建物９平面・断面図

土坑）にむかって幅 0.15 m程の細溝が 1 条のびている。中央土坑を有する 4 本主柱（331 ～ 334 ピット）の建物で、柱間が全て 2 mの間隔でほぼ正方形に並んでいる。柱穴はいずれも直径 0.3 m程度の円形で、深さは約 0.2 mである。埋土は地山の小ブロック土を多く含む小礫混じりの黄褐～褐色シルトで、333 ピットにのみ炭が少量混じっている。中央土坑（335 土坑）は本来 0.5×0.8 m程度の楕円形であったと思われるが、東壁溝からの溝に加え、西や南側にも溝が接合しておりやや形がいびつである。深さは 0.15 mと浅く、埋土は炭や焼土を多く含む小礫混じりのにぶい黄褐～褐色シルトである。335 土坑には、南南東方向と南西方向に溝が接続しているが、このうち斜面下方にむかう南西方向の溝については削平を受けている。床面の一部や北東側の壁溝内に焼土の広がりが認められたが、建築部材であったことが窺えるような大型の炭はなく、小さな炭粒が混じった焼土が薄く広がっているという状況であった。竪穴建物 3 の状況とは異なっており、焼失建物であったかはやや判断が難しい。

この竪穴建物 9 については、3 － 1 区の竪穴建物 5 の北 30 mに位置する。そのため、南から竪穴建物 6 ・5・ 9 の 3 棟がほぼ等間隔で並んでおり、 3 棟の竪穴建物は計画的に配置された可能性が高いことが窺える。ただし、この竪穴建物 9 については、竪穴建物 6 と 5 の延長ラインからやや西にずれているが、これは竪穴建物 6 と 5 の延長ラインで、等間隔の距離を保とうとすると、北側の急斜面地に位置してしまうため、地形に即してやや西側の位置にずらして竪穴建物 9 を築いたものと推測される。

出土遺物については、床面直上から弥生土器が数点出土している。237・238 はともに底部で、詳細な時期は不明であるが、他の遺構と同様にⅣ様式の範疇におさまるものと推測される。

竪穴建物 10　竪穴建物 9 の北西側、尾根筋からやや南西側に下がった標高 70.5 m付近に位置する。平面形は長径 5.8 m、短径 5.2 mのやや歪んだ楕円形で、深さは北壁際で 0.4 mを測る。ただし南西側にむかって斜面が下っているため、南側の一部は削平されていた。壁に沿って幅 0.25 ～ 0.3 mの壁溝がめぐり、その東側の壁溝からは中央土坑（353 土坑）にむって蛇行する細溝が続いている。この溝が意図的に掘られた溝であったかは明らかでない。壁溝内には炭や焼土が入り込んでいたため、検出は容易であった。 4 本主柱（354 ～ 357 ピット）の建物であるが、柱間は 354 － 355 ピット間が 2.3 m、356 － 357 ピット間が 2.1 m、354 － 356 ピット間が 2.9 m、355 － 357 ピット間が 3.1 mと不揃いで、歪んだ長方形となる。柱穴は直径 0.2 ～ 0.3 m程度の円形や楕円形で、深さはいずれも 0.35 m前後とやや深い。埋土は炭を多く含むにぶい黄褐～黄褐色シルトである。中央土坑（353 土坑）は他の竪穴建物と比べやや不明瞭で、2.1 × 1.6 m程の不整形な浅い窪みで、埋土は炭や小礫混じりの黄褐色シルトであった。南西の斜面にむかって幅約 0.2 mの溝がのびている。床面には炭や赤変した焼土が薄く広がった状況であり、明らかに建築部材であることを示すような炭化材はみられなかった。竪穴建物 9 と同様に、焼失建物であったかはやや判断が難しい。

隣接する 2 区では谷を挟んで南北に並んだ竪穴建物 2 と 3 が検出されたが、この竪穴建物 10 は竪穴建物 2・3 の延長ライン上の最も北側に位置しており、計画的に配置された建物であったことが窺える。竪穴建物 3 との間隔が 42 m、竪穴建物 9 との間隔が約 14 mである。

埋土からは、弥生土器が少量出土している。239 は甕の底部、240 は高杯の脚部で、鉢脚部の可能性もある。240 は外面に凹線文を施し、脚端部付近に円孔がみられ、他の遺構と同様にⅣ様式後半を中心とした時期に位置づけられる。

327 土坑　竪穴建物 10 の南側に近接する。平面形は南北の長さ 2.2 m、幅約 1.4 mのビーンズ形を呈する。深さは 0.44 mで、埋土は小礫を多く含む炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。埋土からは、

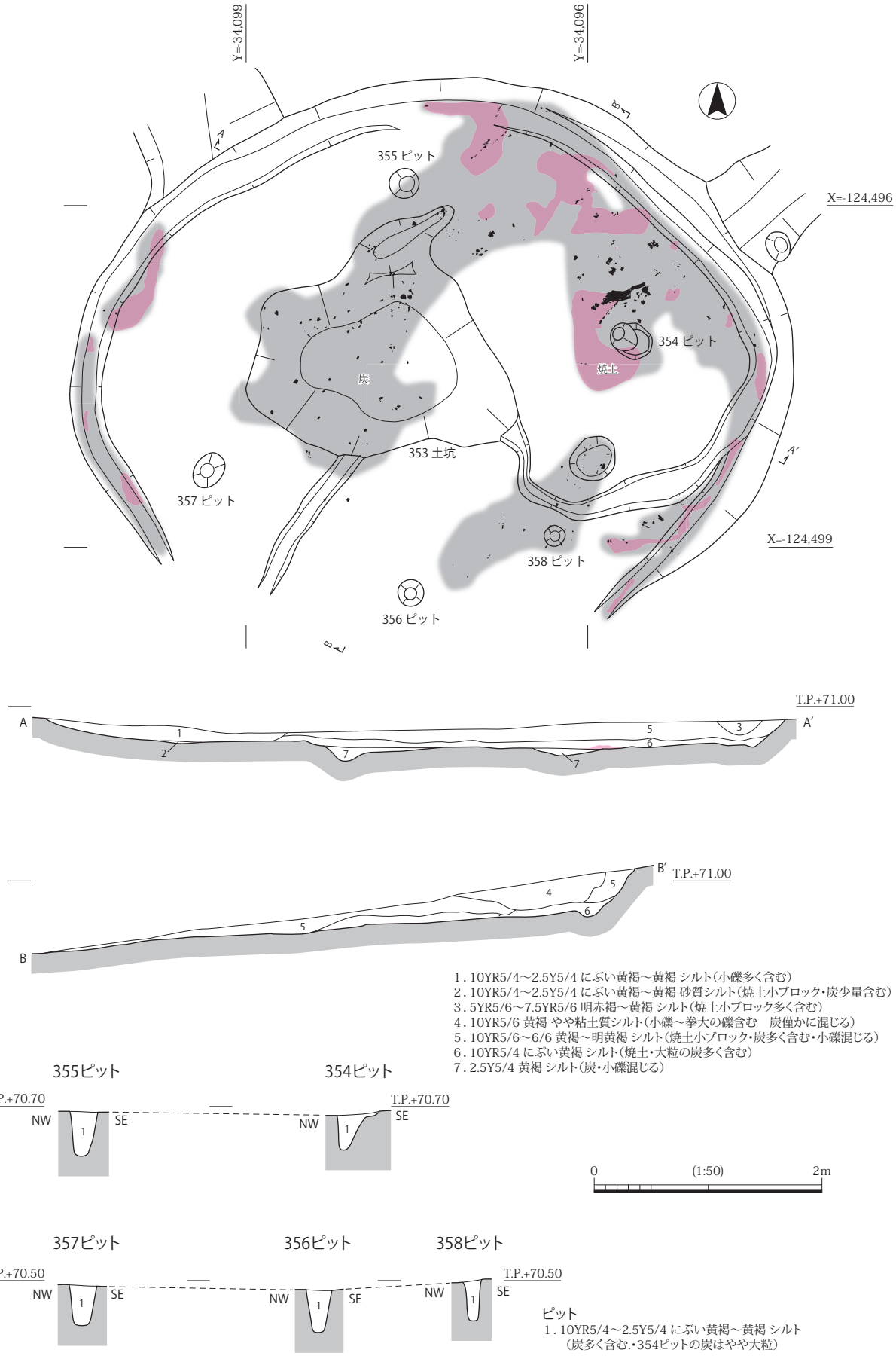


図 60　竪穴建物 10 平面・断面図

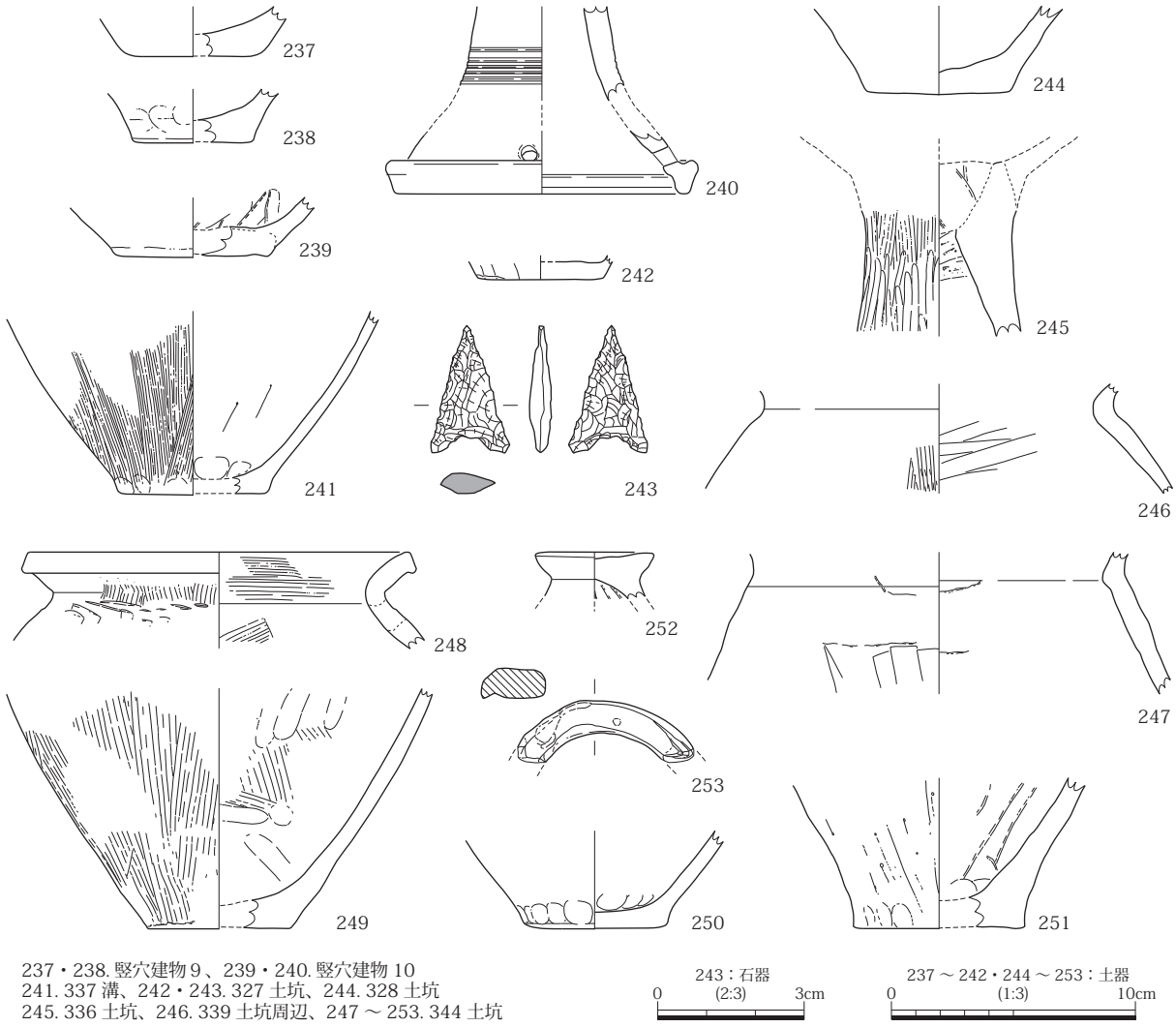


図 61　3－2 区遺構出土遺物

弥生土器とともに打製石鏃が 1 点出土している。242 は弥生土器の底部片で、詳細は不明だが薄手の甕と考えられる。243 はサヌカイト製の凹基式石鏃である。長さ 2.6cm、幅 1.6cm、重量 1.1g をはかる。これらの遺物の詳細な時期は決め難いが、弥生土器については他の遺構と同じⅣ様式の範疇におさまるものと考えられる。一方で石鏃については縄文時代晩期頃のもので、混入によるものの可能性が高い。

344 土坑　竪穴建物 10 南側の、327 土坑の東側に近接する。平面形は長径 1.38 m、短径 0.98 mの楕円形を呈する。深さは 0.5 mで、炭が混じる黄褐色シルトや明褐色シルトが互層になって堆積している。

埋土からは弥生土器がややまとまって出土している。247 は壺の頸部～体部と考えられ、外面板ナデ、内面ナデ調整で頸部には接合痕がみられる。248・249 は甕で、それぞれ口縁部と底部である。248 は、口縁端部がやや肥厚し下方に僅かに突出し、体部外面が板ナデ、その他は主にハケ調整を施す。249 は外面タテハケ、内面タテハケの後にナデ調整を施し、内外面には僅かに煤が付着する。250・251 は底部で、250 は内外面が摩滅のため調整がはっきりしないが、251 は外面ケズリ、内面ナデ調整で、内外面に煤が付着する。この他には、252 蓋や 253 把手などがみられる。これらの遺物は概ねⅣ様式後半を中心とした時期に位置づけられると考えられる。

345 土坑　344 土坑の東側に位置する。平面形は長径 0.5 m、短径 0.4 mの楕円形で、深さは 0.1 mを測る。埋土は炭や焼土ブロックが多く混じる褐色シルトである。

346 土坑　345 土坑の東側に位置する。不整形な深さ 0.1 m足らずの浅い土坑である。埋土は僅かに炭が混じる黄褐色のやや粘土質シルトで、上面からは弥生土器の甕体部片が潰れたような状態で出土している。

347 土坑　竪穴建物 10 の北側に近接する。平面形は長径 1.9 m、短径 1.15 mの楕円形を呈する。底面の一部でピット状に深い箇所があるが、平均 0.15 m程度の深度で、埋土は礫を多く含む炭混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。なお、この土坑と竪穴建物 10 をつなぐような溝状の窪みが認められるが、これは人為的に掘削された遺構ではなく、水が流れたためにできた自然の流路のようなものであったと考えられる。

348 土坑　347 土坑のすぐ東側に位置する。平面形は長径 0.94 m、短径 0.78 mの倒卵形を呈する。深さは 0.15 mで、埋土は拳大の礫を多く含む炭混じりの黄褐色シルトや、炭や焼土ブロックが多く混じる褐色シルトである。

349 溝　竪穴建物 10 の東側に位置する。尾根の頂部を起点に竪穴建物 10 に取り付く溝で、深さは 0.17 mを測る。埋土は炭混じりの黄褐色シルトである。人為的に掘削された溝ではなく、竪穴建物が築かれる以前に形成された自然の流路で、竪穴建物を築くにあたって埋められたものであったと考えている。　（伊藤・笹栗）

【註】

1）山本信夫編 1980『宮ノ本遺跡』大宰府町の文化財第３集 大宰府町教育委員会

３－２区北東斜面の昇降階段（階段横のスロープを使ってベルトコンベヤーを引き上げた）

第６節　４－１区の調査成果〔図 62 ～ 81、写真図版 25 ～ 29・56 ～ 59〕

３－１・３－２区の東側に接する約 2,400 ㎡の調査区である。本調査範囲の中では最も高い標高 82.5 mの丘陵の頂部を含んだ調査区で、頂部からは南西の古曽部・芝谷遺跡をはじめ、遠くは大阪市内の高層ビル群から、背後に広がる北摂山地の山並みまで四方を見渡すことができる。この頂部周囲の斜面はどこも勾配がやや急なため、２区や３－１区でみられたような平坦部はみられない。

層序については、表土層とその下の黄褐色シルト（１層）を除去すると、これまでの調査区と同様に面となり、ここで遺構が検出されている。ただし、尾根の頂部など、場所によっては表土層直下で地山面となる箇所や、既に地山が露出している箇所なども存在している。遺構についても、これまでの調査区と同様に、弥生時代と古代の遺構が検出され、頂部南斜面では新たに横穴式石室の掘方が２基分みつかっている。ただし、最も遺構の検出を期待していた丘陵の頂部では遺構は検出されなかった。（伊藤）

包含層の遺物　１層からは、土師器・須恵器・弥生土器が出土しているが、同じ丘陵上の２・３－１・３－２区に比べると遺物の出土量は特に少ない。これは他の調査区に比べて標高が高く急な斜面地であり、遺物が下方に流れた可能性が推測される。254 は９世紀代の扁平な形態の須恵器杯蓋で、焼け歪があることから５区の須恵器窯の製品の可能性が高い。255 は須恵器杯 H の蓋で、口径 11.6cm を測り、天井部はヘラ切り未調整である。飛鳥Ⅰ、7 世紀前半のもので、古墳２や古墳３に伴うものと考えられる。256 ～ 262 は弥生土器である。256 は頸部に櫛描直線文が施された広口壺の頸部で、257 は波状文が施された体部の小片である。遺跡内で櫛描文が施された壺は出土量が少なく、時期的にやや古く位置づけられる可能性がある。258 は大型の無頸壺と考えられ、口縁部に凹線が施される。260 は甕の口縁、259・261 は底部である。262 は大型の鉢の口縁で、口縁内面に僅かにミガキがみられる。

（笹栗）

古代の遺構と遺物

古代の遺構についてはこれまでの調査区と同様に焼土坑が数基検出された。また、この他に古墳が２基みつかっている。

394 土坑　調査区の南東斜面に位置する。平面形は大型の楕円形で、長径 1.17 m、短径 0.9 mを測る。深さは約 0.05 mと非常に浅く、埋土は炭と小礫が混じる黒褐～暗褐色のやや粘土質シルトである。壁

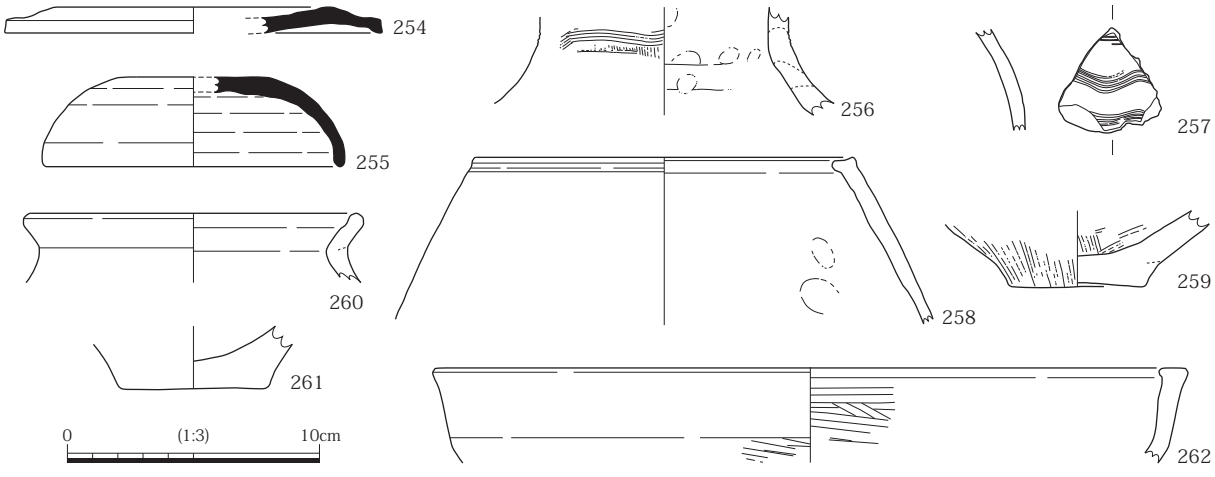


図 62　４－１区１層出土遺物

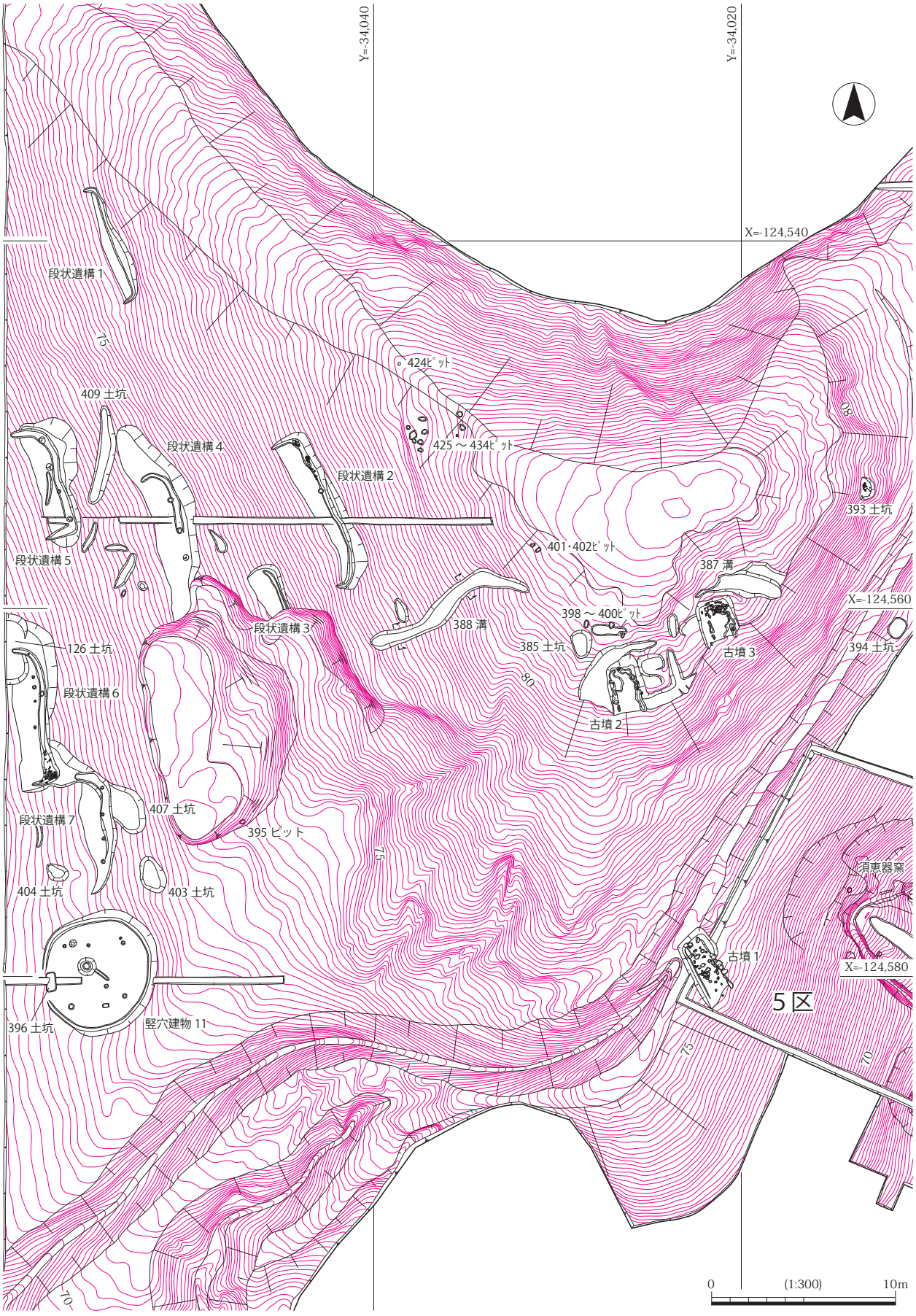


図 63　4－1 区検出遺構全体平面図

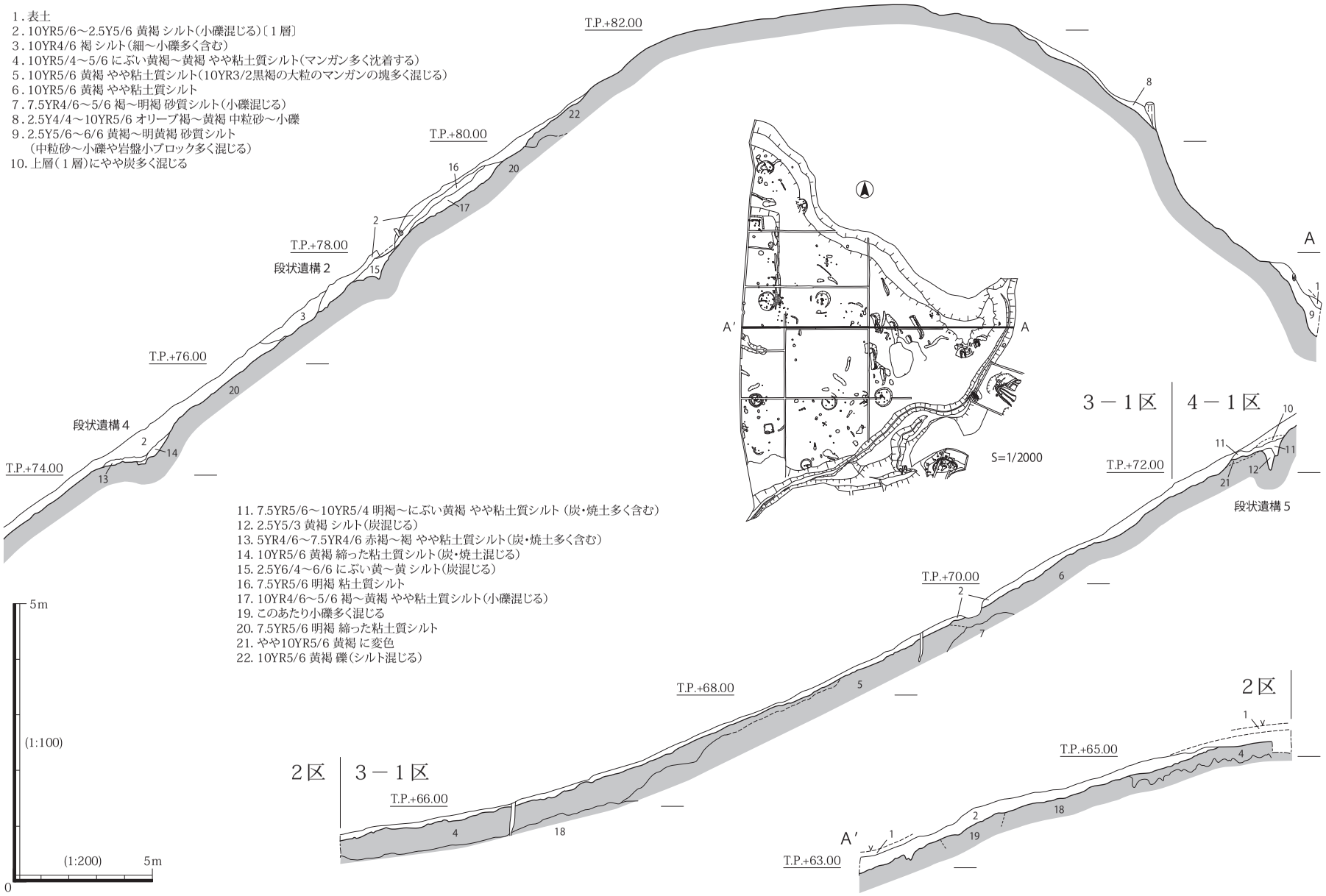


図64　２・３－１・４－１区地層断面図

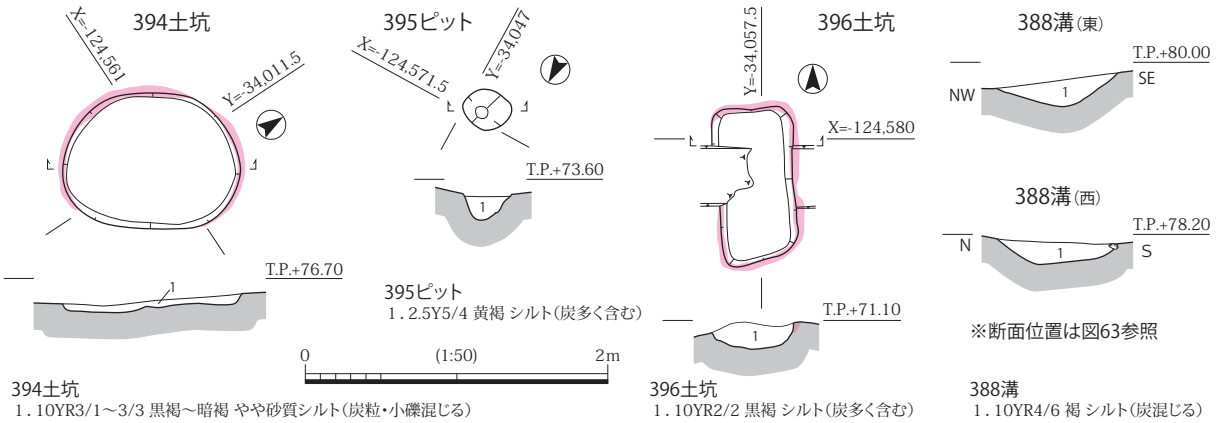


図 65　4－1 区古代の遺構平面・断面図

面が被熱により赤褐色に変色している。

395 ピット　段状遺構 7 の東側、溜池状の撹乱の南壁に位置する。平面楕円形の小さなピットで、長径 0.32 m、短径 0.27 mを測る。深さは 0.2 m強で、埋土は炭を多く含む黄褐色シルトである。

396 土坑　竪穴建物 11 と重複する。平面形は長辺 1.05 m、短辺 0.5 mの隅丸長方形で、深さは約 0.15 mを測る。埋土は炭を多く含む黒褐色シルトで、壁面が被熱により赤褐色に変色する。

388 溝　調査区西斜面の最も高所に位置する。丘陵頂部付近から西にむかってのびる溝で、等高線に直交する。延長約 10 mで、幅は 1 m前後である。深さは約 0.15 mで、埋土は炭混じりの褐色シルトである。埋土からは、細片のため図化していないが、 9 世紀代の須恵器杯 B が 1 点出土している。

頂部ピット　この他丘陵の頂部平坦面の周囲で、小規模な焼けたピットを多数検出した。古墳を検出した南斜面側には 398 ～ 400 ピットの 3 基が、西斜面の 388 溝のすぐ東側に 401･402 ピットの 2 基が、北西方向にむかってのびる尾根筋の脇に 424 ～ 434 ピットの 11 基がまとまってみられる。いずれも直径 0.3 m前後の小さな円形や楕円形、あるいは卵形を呈し、浅い。遺構の底はよく焼けて赤褐色に変色し、内部には炭が堆積するなどの特徴がある。各遺構の規模については表 1 にまとめた。遺物が出土していないため、正確な時期は不明であるが、399・400 ピットが古墳 2 周囲の 397 溝の埋土上面で検出されており、 7 世紀以降の焼成行為によるものであることは確実視できる。遺跡内で多数検出されている焼土坑と同様の性格で、 8 ・ 9 世紀代に帰属する遺構と推測される。

古墳 2（成合西王寺山 2 号墳）　古墳は丘陵頂部の南斜面への落ち際で 2 基（古墳 2 ・ 3）並んで検出した。ともに横穴式石室を埋葬施設とする古墳で、その石室掘方と周溝が検出された。古墳 2 は、 2 基並ぶうちの西側の古墳で、石室掘方と、その北側で浅い周溝（382・383 溝）が検出された。この溝は途中で切れてはいるものの、弧状にめぐることから、墳形が円墳であったことがわかる。ただし、盛土については完全に流出しており、墳丘は確認できなかったが、周溝と石室の位置関係から、径 4.5 m程度の規模に復元でき、周溝まで含めた東西の直径は 5.8 mを測る。西から北側の周溝である 383 溝は、石室掘方北側では掘方に接するように幅約 0.5 m、深さ約 0.15 mで検出できるが、西側では石室側の溝肩が乱れており明瞭でない。埋土は粘土質シルト混じりの黄褐色中粒砂～小礫である。東側周溝である 382 溝は広い部分で幅 0.65 m、深さは約 0.15 mを測る。埋土は地山ブロック土を少量含む細礫～小礫混じりの黄褐色シルトである。この 382 溝については、東側に接する古墳 3 との位置関係から両古墳の周溝が共有されていた可能性が高い。

埋葬施設は南に開口する横穴式石室と推測されるが、石室石材は全て抜き取られており、石室は全く

表１　４－１区頂部ピット一覧

遺構番号	平面規模(m)	平面形	深 さ(m)	埋　　土	特　　徴
398ピット	0.46×0.22	楕円形	0.10	焼土を多く含むシルト混じりの炭	一部が被熱により赤変
399ピット	0.35×0.21	楕円形	0.06	焼土を多く含むシルト混じりの炭	赤変なし
400ピット	0.32×0.23	不整形	0.02	焼土を多く含むシルト混じりの炭	一部が被熱により赤変
401ピット	0.28×0.16	楕円形	0.02	シルト混じりの炭	赤変なし
402ピット	0.34×0.17	楕円形	0.07	シルト混じりの炭	一部が被熱により赤変
424ピット	0.16×0.14	円形	0	なし	全体が被熱により赤変
425ピット	0.37×0.33	卵形	0.02	炭	一部が被熱により赤変
426ピット	0.40×0.32	卵形	0.05	シルト混じりの炭	一部が被熱により赤変
427ピット	0.17×0.13	楕円形	0.01	炭	一部が被熱により赤変
428ピット	0.48×0.25	楕円形	0.02	炭	一部が被熱により赤変
429ピット	0.34×0.27	隅丸五角形	0.03	炭	一部が被熱により赤変
430ピット	0.32×0.26	歪んだ円形	0.05	炭	全体が被熱により赤変
431ピット	0.33×0.22	卵形	0.04	炭	一部が被熱により赤変
432ピット	0.22×0.22	円形	0.02	炭	一部が被熱により赤変
433ピット	0.54×0.42	不整形	0.02	炭	全体が被熱により赤変
434ピット	0.24×0.22	円形	0	なし	全体が被熱により赤変

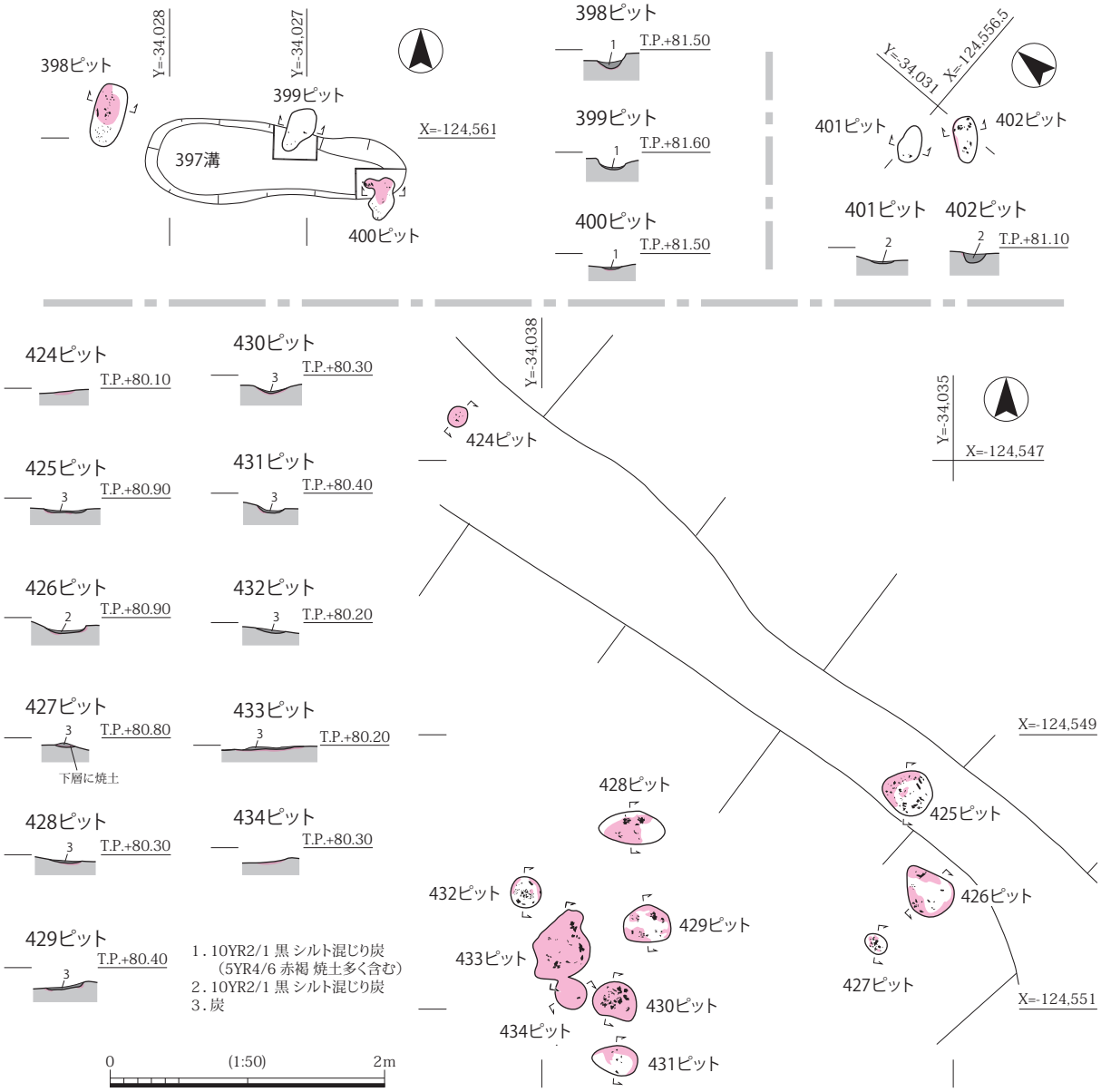


図 66　４－１区頂部ピット平面・断面図

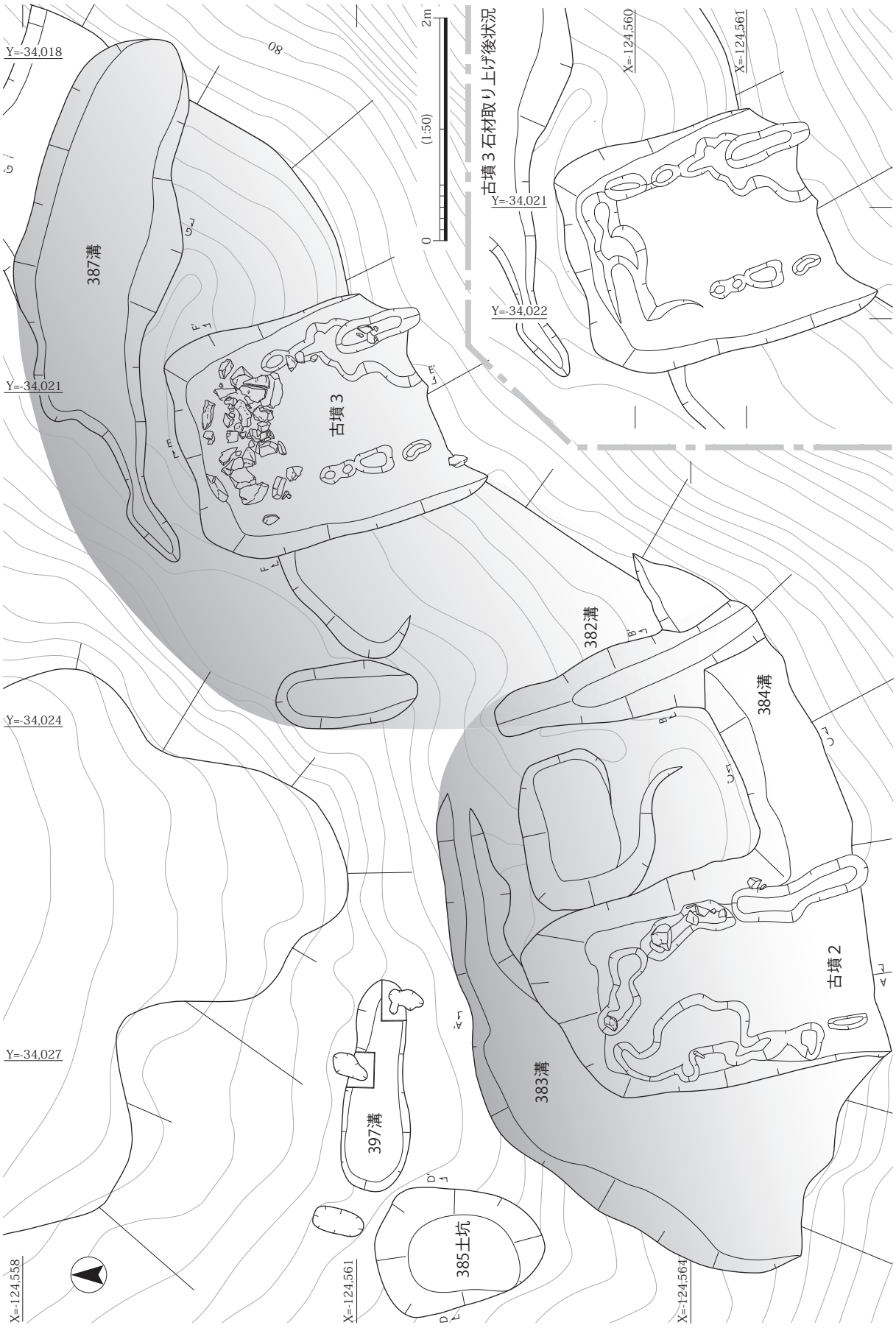

古墳3石材取り上げ後状況
0
(1:50)
2m
Y=-34,018
Y=-34,021
Y=-34,024
Y=-34,027
X=-124,558
X=-124,561
X=-124,564
X=-124,560
X=-124,561
Y=-34,021
Y=-34,022
387溝
古墳3
382溝
384溝
古墳2
383溝
397溝
385土坑

図 67　古墳 2 ・ 3 平面図

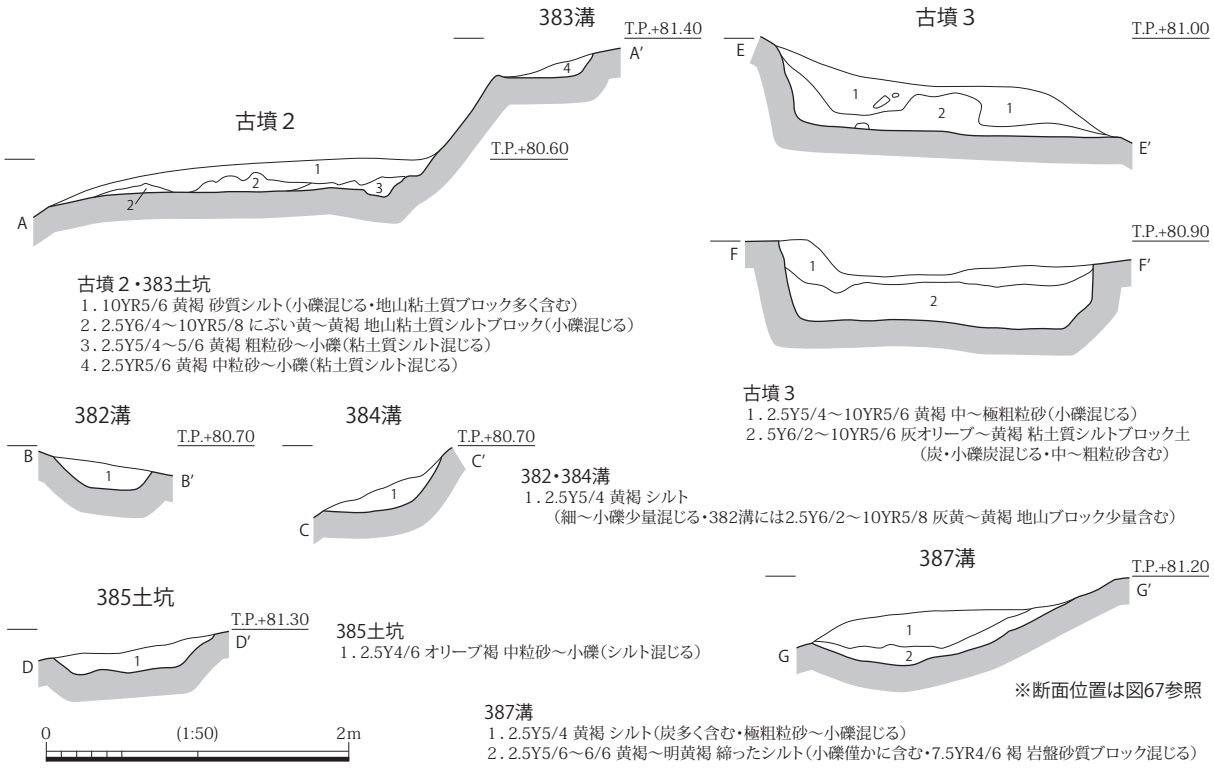


図 68　古墳２・３、385 土坑断面図

残存していなかった。また開口部側が大きく流出していたため、石室構造などの詳細も明らかでない。石室掘方は岩盤を掘り込んでおり、上面で東西幅が 1.8 ～ 2.0 m、南北の残存長が 3.2 mを測る。掘方の深さは約 0.8 mで、最下層に粘土質シルト混じりの黄褐色粗粒砂～小礫や、小礫混じりの黄褐～にぶい黄色地山ブロック土があり、その上に地山のブロック土を多く含む小礫混じりの黄褐色砂質シルトが堆積する。石室床面の標高は約 80.4 mで、床面からは浅い石室石材の抜き取り痕が検出されている。この抜き取り痕には、石室石材の残骸と考えられる石材が数点みられた。また、この抜き取り痕から、石室の幅が 1.0 m程度に復元できる。石室主軸は約Ｎ－ 10°－Ｗで、僅かに西偏し、５区で検出された古墳１と比べると振れ幅が小さい。なお石室掘方の南東部には、382 溝と切り合うように 384 溝とした平坦部がみられる。

古墳２周辺の 382・384 溝の埋土からは、弥生土器の細片と須恵器が出土している。265 は須恵器の盤で、製品の焼き上がりや胎土から、近接する５区の須恵器窯の製品である可能性が高く、出土遺物はこれらの溝に伴うものではないと考えられる。須恵器窯の操業に伴い周辺が造成され、その際に石室が解体された可能性が推測される。

古墳３（成合西王寺山３号墳）　古墳２のすぐ東側に接する。古墳２と同様に石室掘方の北方で浅い周溝（387 溝）を検出しており、こちらも円墳であったことがわかる。周溝と石室の位置関係から、径６m程度の規模に復元でき、周溝までを含めた東西の直径は約７mを測る。ただし盛土は完全に流出しており、墳丘は確認できなかった。また、上述したように西側周溝にあたる 382 溝は、西側の古墳２と共有していたと考えられる。北から東側の周溝にあたる 387 溝は、幅１m以上と広い。特に断面観察をおこなった北東隅あたりは、外側の溝肩部が崩れなだらかに広がっている。387 溝の深さは 0.3 m強で、下層に小礫を僅かに含む岩盤の砂質ブロック土混じりの明黄褐～黄褐色シルトが、上層には炭を多く含む極粗粒砂～小礫混じりの黄褐色シルトが堆積する。

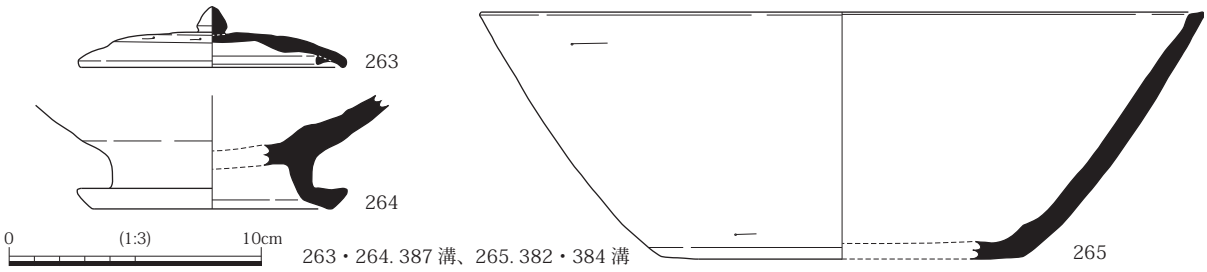


図 69　古墳２・３出土遺物

埋葬施設は南に開口する横穴式石室であるが、古墳２と同様に石室石材は全て抜き取られており、石室は残存しない。また開口部側が大きく流出していたため、石室構造などの詳細も明らかでない。石室掘方は岩盤を掘り込んでおり、上面での東西幅が 2.08 m、南北の残存長が 2.6 mを測る。深さは約 0.5 mで、下層に中粒～粗粒砂を含む炭や小礫混じりの黄褐～灰オリーブ粘土質シルトブロック土があり、その上に小礫混じりの黄褐色中粒～極粗粒砂が堆積する。なお奥壁付近には、石室石材の残骸と考えられる拳大の石材が多数散乱していた。石室床面の標高は 80.35 ～ 80.40 mで、床面からは古墳２と同様に浅い石室石材の抜き取り痕が検出された。この抜き取り痕から、石室の幅が古墳２と同様に 1.0 m程度に復元できる。石室の主軸は約Ｎ－ 16°－Ｗで、僅かに西偏する。

また、５区下端の谷部からは、多数の石材が転落したような状態でみつかっているが、それについてはこれらの古墳の石室石材であった可能性が高い。後世の造成によって石室石材が抜き取られ、谷に廃棄されたのであろう。

周溝と考えられる 387 溝の埋土からは、７世紀代の須恵器が２点出土している。263 は口径 10.4cm を測る杯Ｇ蓋で、天井部は回転ヘラケズリののち宝珠つまみが付く。飛鳥Ⅱ、７世紀中頃に位置づけられる。264 は壺の脚台部と考えられ、脚端部がハの字状に開いたのち底部設置面にむかって屈曲して段になる。同様の形態のものは、陶邑 TK217 号窯[1)]などに類例がある。この２点はともに７世紀前半から中頃に位置づけられ、時期的にも古墳３に伴う可能性が極めて高い。

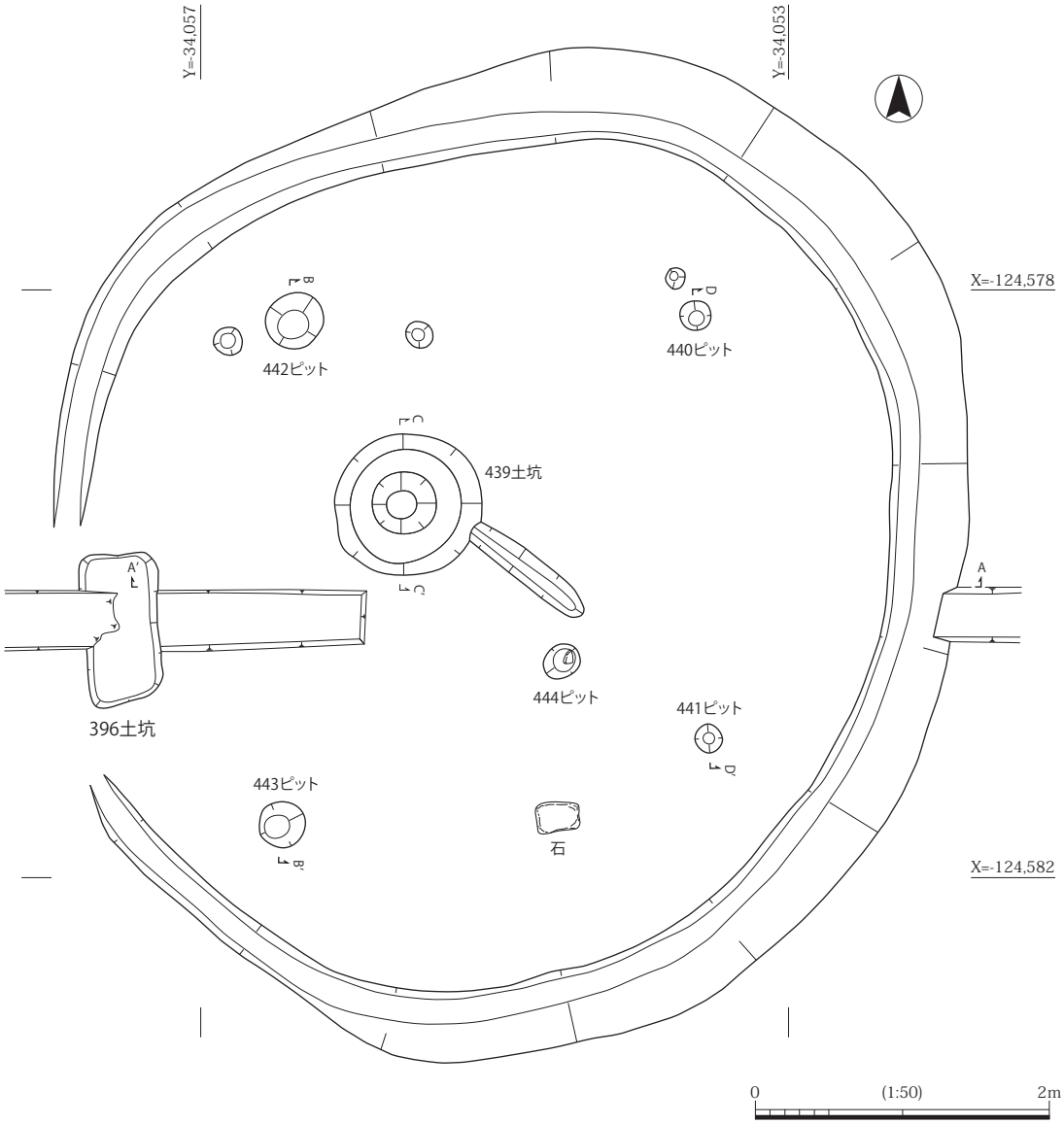
385 土坑　東西 1.15 m、南北 1.5 mのやや歪んだ楕円形を呈する。深さは約 0.15 mで、埋土はシルト混じりのオリーブ褐色中粒砂～小礫である。埋土が近接する古墳の周溝埋土とよく似ていることから、古墳と同時期の遺構と考えられるが、遺物が出土していないため、詳細は不明である。

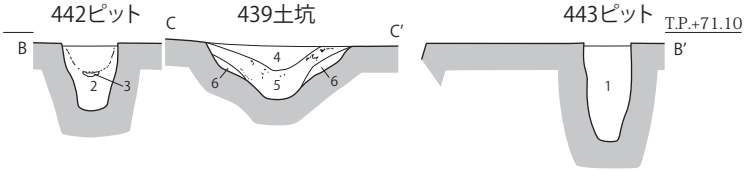
397 溝　長さ約 1.9 m、幅約 0.45 ～ 0.6 mの東西に長い楕円形で、埋土上面に前述した古代のピットが築かれている。385 土坑と同様に、埋土が近接する古墳の周溝埋土とよく似ているため、古墳と同時期の可能性があるが、遺物が出土していないため、詳細は不明である。

弥生時代の遺構と遺物

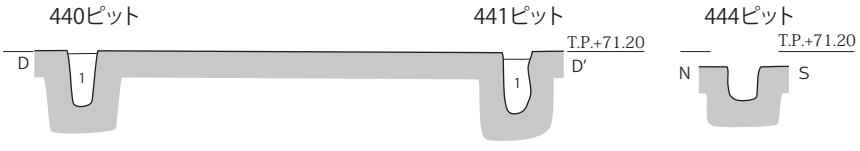
弥生時代の主な遺構としては、竪穴建物１棟と段状遺構７基のほか、土坑が検出されている。

竪穴建物 11　調査区の南西隅、３－１区で検出された竪穴建物６から東に 14 m隔てた標高 71 m付近に位置する。２区で検出された竪穴建物３と、竪穴建物６、竪穴建物 11 とが東西に３棟が整然と並んでおり、３棟が計画的に配置されたものであったことが窺える。平面形は円形を呈し、直径は南北 7.0 m、東西 6.2 mで、斜面上部側の最も深い東壁側で深さ 0.75 mを測る。壁裾には幅 0.25 ～ 0.4 mの壁溝がめぐる。溝は北半部で特に残りがよく、深さ 0.2 m前後を測る箇所もあり、壁溝埋土に炭や焼土が多く混じる箇所もあった。４本主柱（440 ～ 443 ピット）の構造で、中央土坑（439 土坑）が１基設けら





440～443ピット・439土坑
1．10YR4/4 褐 締りの無いシルト(炭混じる)
2．2.5Y5/4～10YR5/6 黄褐 シルト
(地山ブロック・炭混じる・上層特に炭多い)
3．2.5Y6/6 明黄褐 地山粘土質シルト
4．10YR5/4 にぶい黄褐 シルト(炭混じる)
5．10YR4/4～5/4 褐～にぶい黄褐 シルト(炭多く含む)
6．10YR4/6～5/6 褐～黄褐 粘土質シルト(炭僅かに含む)



竪穴建物11
1．2.5Y5/4 黄褐 シルト
2．2.5Y5/6 黄褐 やや粘土質シルト
3．10YR5/6 黄褐 やや粘土質シルト
北辺部の壁溝埋土は10YR4/6 褐 粘土質シルト(炭・焼土多く含む)
4．10YR5/6 黄褐 やや粘土質シルト(焼土粒・炭多く混じる)

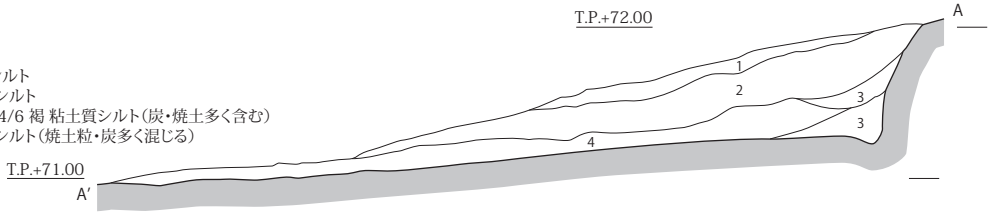


図 70　竪穴建物 11 平面・断面図

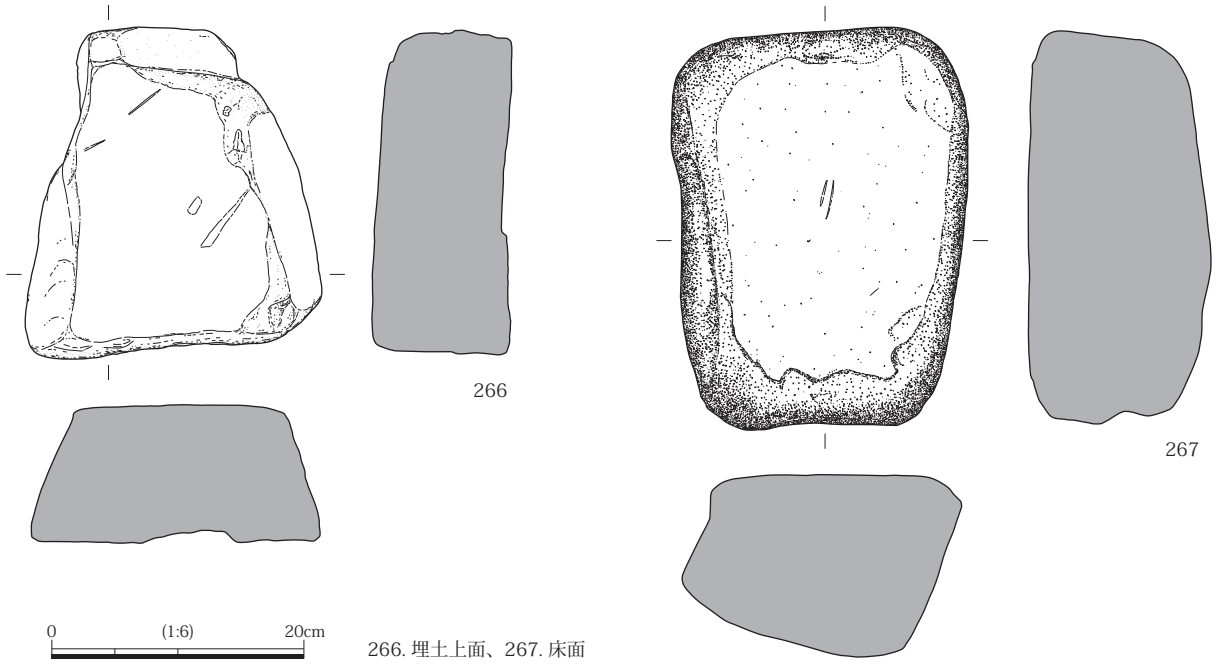


図 71　竪穴建物 11 出土遺物

れている。柱の並びは南西隅の 443 ピットが南に大きくずれているため、方形にはならず台形状を呈する。柱間寸法はその広がった西の柱筋が 3.4 mで、東柱筋が 2.9 m、北柱筋が 2.8 m、南柱筋が 3.0 mである。いずれのピットも平面は円形で、他の竪穴建物に比べて深い。東側の 440・441 ピットはともに直径 0.2 mで、深さは 440 ピットが 0.37 m、441 ピットが 0.41 mである。西側の 442 ピットは直径約 0.4 m、深さ 0.45 m、443 ピットは直径約 0.3 m、深さ 0.65 mを測る。埋土は 442 ピットが地山のブロック土と炭が混じる黄褐色シルトで、それ以外の３基は炭混じりの褐色シルトである。中央の 439 土坑は、直径 1.0 mの正円形で、底面中央が一段窪んでいる。深さは 0.35 mを測る。埋土は最下層に僅かに炭が混じる黄褐～褐色粘土質シルトがあり、その上が炭を多く含むにぶい黄褐～褐色シルトや、炭混じりのにぶい黄褐色シルトである。この中央土坑には、幅 0.2 mの溝が接続しているが、他の竪穴建物とは異なり、斜面上方側に接続しているため、同様の機能や性格のものであるかははっきりしない。２区で検出した竪穴建物３のように､炭化した部材が倒れ込むような状況ではなかったものの、上述したように、壁溝内や床面には焼土粒や炭が多く広がっていた。

床面からは、台石が１点（267）据わった状態で出土していたが、土器は細片が数点出土した程度で、遺物の出土量は少ない。弥生土器は細片のため図化が可能なものは少ないが、埋土中から出土した破片の一部が、隣接する段状遺構７で出土した短頸壺の頸部～口縁部（308）と接合している。また埋土上面からも台石（266）が出土しており、床面のものと併せて２点が出土している。遺構の詳細な時期を決定するのは難しいが、破片が接合した 308 壺は、遺跡内から出土した他の壺類に比べると装飾性が強いことから、やや古いⅣ様式前半～中頃に位置づけられる可能性がある。

段状遺構１　４－１区の丘陵西斜面、丘陵内の中央谷部の東奥付近からは、段状遺構が７基検出されている。これらの段状遺構は、いずれも等高線と平行するように斜面を切土して平坦面を造成し、その山側の壁裾に溝をめぐらしている。平面形は全て方形を呈する。このうち段状遺構１については、他の段状遺構とやや離れた調査区北方の西斜面に位置している。等高線に平行するように西の谷側にむかって掘り込まれた南北に長い遺構で、東壁に沿ってコの字状に壁溝がめぐる。壁溝の幅は 0.2 ～ 0.4 m程度

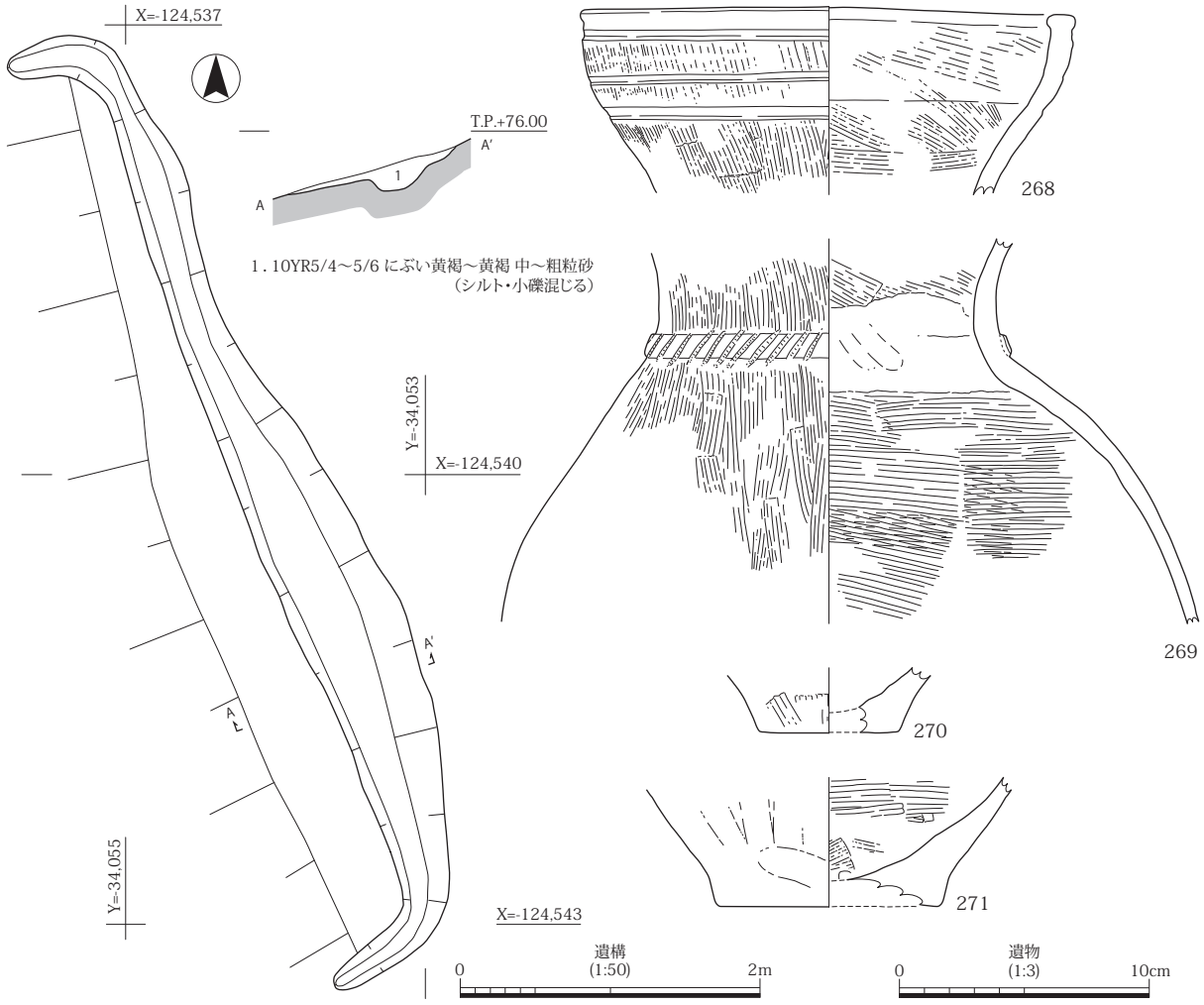


図 72　段状遺構 1 平面・断面図および出土遺物

であるが、東壁際で若干広がっている箇所がみられ、深さは約 0.1 mである。平坦面の標高は約 75.7 mで、南北の規模は 6.6 m、東壁での深さは約 0.2 m強を測る。平坦面の奥行きはほとんどなく、広い箇所でも 0.45 m程と非常に狭いため、西側の大半が流出していると考えられる。遺構の埋土はシルトと小礫混じりのにぶい黄褐～黄褐色中粒～粗粒砂である。平坦面からは、柱穴などは検出されなかった。

このような段状遺構とした遺構については、山側を切土によって削り、その切土によって生じた土を谷側に盛って平坦面を造り出し、ある程度の面積を確保していたと考えられる。その場合、平坦面の面積は、単純には切土によってできた平坦面の面積、つまり調査によって検出された平坦面の面積のおよそ倍の広さになると推測されるが、盛土部分は流出しているためか、全く検出されていない。

出土遺物については、壁溝の西肩部から、弥生土器が潰れて細かく破砕したような状態でみつかっている。有段口縁の大型壺で、268 が口縁部、269 が頸部～体部で、接点こそないが同一個体である、また 270 は底部と考えられる。頸部から外側に開いたのち、口縁部にむかって段をもたずに緩くカーブしながら直立する。外面はタテハケ調整で仕上げられたのち、口縁部に 3 条の凹線を施し、頸部に貼付突帯を付す。突帯は、やや狭いもので刻目文を施す。内面は主にハケ調整で成形する。この壺は形態的な特徴から、Ⅳ様式後半を中心とした時期に位置づけられる。また、この他に底部が 1 点（271）出土している。

段状遺構 2　丘陵頂部の真西、段状遺構 1 の南東側に位置する。等高線に平行するように西の谷側にむ

かって掘り込まれた南北に長い遺構で、東壁に沿ってコの字状に壁溝がめぐる。平坦面の標高は 77.55 m で、南北の規模は 9.0 m、東壁での深さは約 0.5 m強を測る。残存する平坦面の奥行きは最も広い箇所で 1 m程度残っているが、西側については盛土が流出していると考えられる。仮に盛土が存在していた場合、平坦面の奥行きは 2 m程度であったと推測できる。埋土は炭を多く含むにぶい黄～黄色シルトや小礫混じりの黄褐色シルトである。平坦面の北半部には建築部材の形を残した大型の炭化材とともに、焼土が 3.0 × 1.5 mの範囲に 0.1 m程の厚みで広がっており、それが壁溝内にも達していた。このため上屋が存在した可能性が高く、上屋が火災に遭ったか、あるいは解体した建物の部材を北半にまとめて焼却していた可能性などが想定される。壁溝の幅は約 0.3 ～ 0.4 mで、深さは 0.05 m前後と浅い。この壁溝と重複して、遺構の北半で 3 基のピット（445 ～ 447 ピット）が並んで検出された。壁溝埋土を除去した段階で検出しており、特に北端の 447 ピットは、溝内に散乱していた土器がピット内に入り込むような状態で出土した。柱間は 1.5 m等間で、ピットの平面形は直径約 0.25 ～ 0.4 mの円形あるいは楕円形、深さは 0.1 ～ 0.3 mを測る。埋土は炭が多く混じる明黄褐～灰褐色の締った粘土質シルトである。このピットの性格については、上屋を支える柱の柱穴であった可能性が高いと考えられるが、そうした場合、排水機能を併せもつ壁溝内に柱が立つことになるため、復元案としてはやや違和感がある。後述する段状遺構 4 ・ 5 ・ 7 でも同様のピットが検出状されており、今後類例を集め上屋の構造を明らかにしていく必要がある。

焼土が広がっていた北半部の壁溝内からは、弥生土器がまとまって出土した。特に甕の出土量が多く、この他に、無頸壺などもみられるが、他の遺構に比べると壺の出土量は少ない。272 はほぼ完形に復元できる小型の鉢で、内外面ともユビナデ・ユビオサエで成形される。このような逆円錐台形の小型鉢はⅤ様式になって出現する器形とされ、Ⅳ様式の中では今のところ類例が知られていない。底部が完存していないため、図上の天地が逆で、高杯の脚部になる可能性も残される。273・274 は無頸壺の口縁～体部で、273 は口縁に凹線文が、274 は口縁に 1 条と体部に 2 条凹線文がそれぞれ施される。274 は口縁部に円孔がみられる。無頸壺については、Ⅳ様式中頃からⅤ様式後半まで器形的な変化があまりみられないが、外面の凹線文の条数が少なくなっており、その中でもやや新しい時期に位置づけられる可能性がある。275 は短頸壺の口縁～体部で、口縁部は僅かに外に開き、肩部に把手が付く。内外面の摩滅が著しく、調整がはっきりしないが、口縁部に多条の凹線文が施される。頸部に突帯などの装飾はみられない。Ⅳ様式後半を中心とした時期に位置づけられる。276・277 はともに小型の甕で、胴部が丸みを持たない倒卵形を呈する。276 は口縁端部が摩滅しているが、口縁部は短く外反し端部は丸くおさめられ、277 も同様の形態であると推測される。276 は体部外面下半がヘラケズリ、外面上半および内面がユビナデ調整で、277 は外面タテハケ、内面ナデおよびヨコハケ調整である。Ⅳ様式の小型甕としては一般的な形態である。278 ～ 281 は甕で、そのうち 278・279 は口縁～体部で内外面が風化している。280 は口縁端部に凹線文を施し、外面はタテ・ナナメハケで調整される。周辺出土の 281 はこの 280 と同一の個体である可能性が高い。この他には、底部 4 点（282 ～ 285）を図化している。

段状遺構 2 から出土した遺物については、272 小型鉢の位置づけによって年代が大きく異なるが、無頸壺や短頸壺、甕についてはⅤ様式的な新しい要素は見出しがたく、Ⅳ様式後半を中心とした時期の特徴を示しており、Ⅳ様式末以降に位置づけるのが穏当と考えられる。

段状遺構 3　段状遺構 2 のすぐ南西側に位置する。他の段状遺構と同様に等高線に平行するように西の

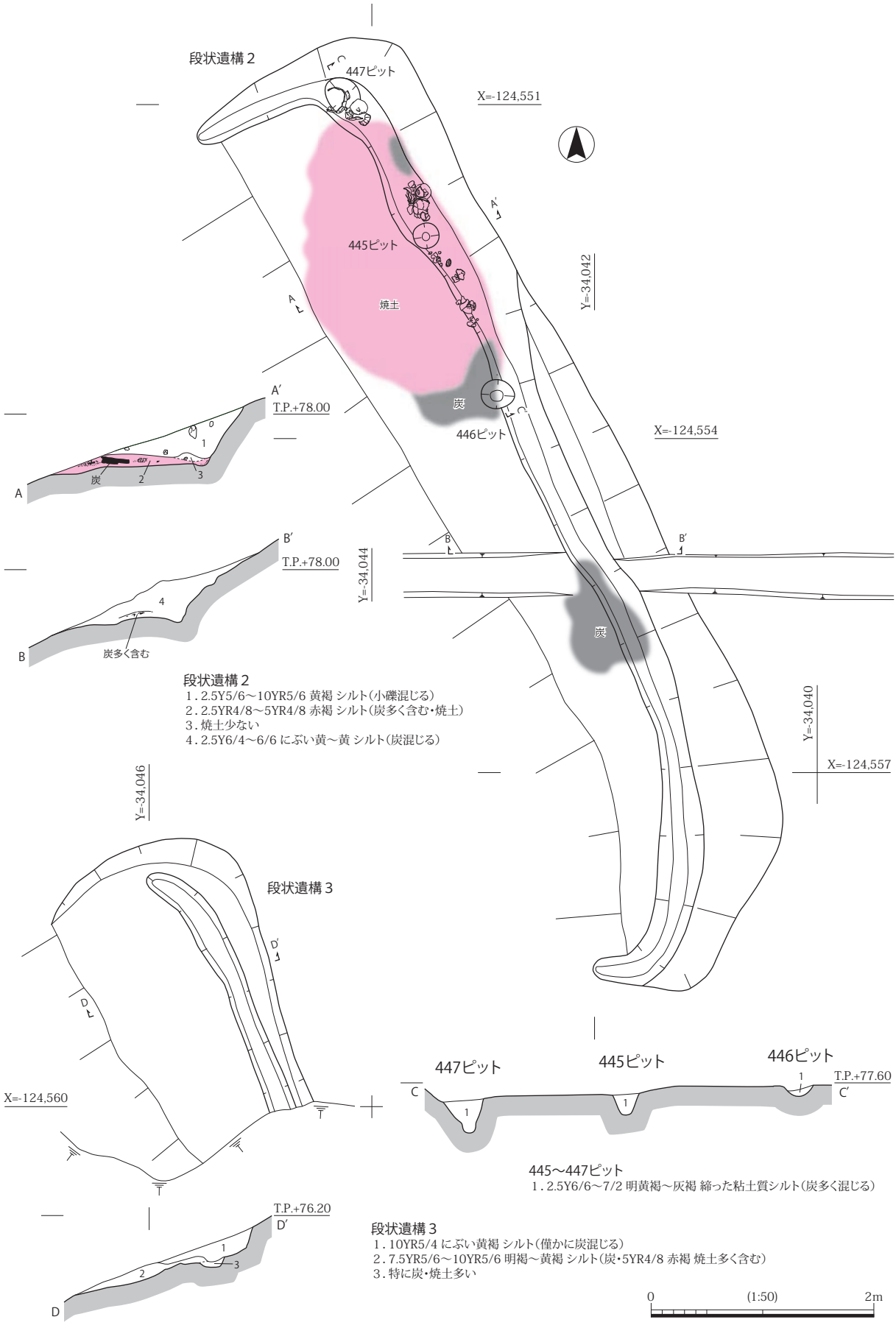


図 73　段状遺構２・３平面・断面図

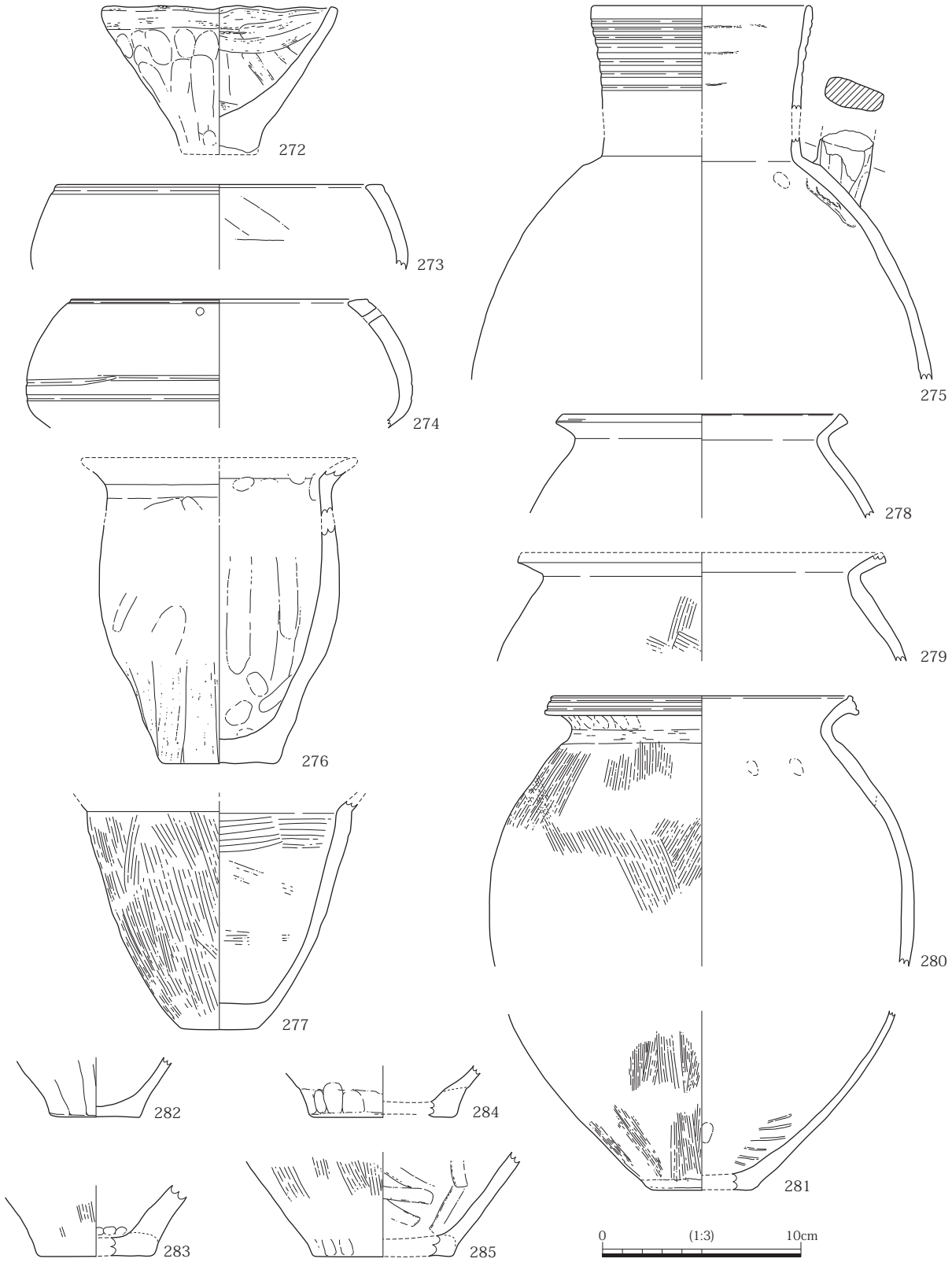


図 74　段状遺構 2 出土遺物

谷側にむかって掘り込まれた遺構であるが、南半部が溜池状の大きな撹乱によって削られているため、北端から 2.7 mまでしか残っていない。平坦面の標高は 77.5 ～ 75.7 mで、僅かに西に傾斜している。東壁での深さは約 0.3 mで、その壁裾には壁溝がめぐる。ただし溝の北端は僅かに曲がる程度で、他の段状遺構のような明確な折れ曲がりはみられなかった。壁溝の幅は約 0.2 m、深さは約 0.05 mである。

平坦面の奥行きは1m程度で、平坦面には炭や焼土を多く含む明褐～黄褐色シルトが堆積していた。特に壁溝内には炭や焼土が多く混じっていたが、上屋の焼失によるものであるかは判断できない。なお、平坦面からは建物跡を示すようなピットなどは検出されなかった。また、遺物は出土していない。

段状遺構4　段状遺構2の西側に位置する。他の段状遺構と同様に等高線に平行するように西の谷側にむかって掘り込まれた南北に長い遺構であるが、南端の一部が溜池状の大きな撹乱によって失われている。平坦面の標高は74.2m前後で、南北の残存長は今回検出した段状遺構の中では最大規模の約11mを測る。東壁での掘り込みの深さは約0.5～0.6mで、その壁裾には壁溝がめぐるが、南半は残りが悪く検出できなかった。したがって段状遺構1・2のようなコの字状ではなく、北半のみのL字状の溝となっている。本来ならば、この北辺の折れ曲がりが遺構の北端となるはずであるが、この遺構は北辺周溝よりさらに2.8m程北側まで平坦面が広がっている。このため南北規模が長いものとなっているが、その北側の広がりを除けば、他の段状遺構とほぼ同規模になる。壁溝の幅は約0.25～0.45m、深さは約0.05mで、平坦面の奥行きは約1.3mである。遺構の埋土は黄褐色シルトを主体とし、その中には焼土や炭が多く混じっていたが、段状遺構2・3と同様に、上屋も焼失によるものであるかは判断できない。段状遺構2と同様に東壁溝と重複して3基のピット（435～437ピット）が並んで検出された。柱間は北から1.4m、1.2mで、ピットの平面形は直径約0.3mの円形で、深さは0.45～0.6mを測る。埋土は炭が多く混じる褐色のやや粘土質シルトである。

埋土内からは、弥生土器数点のほか、遺構のほぼ中央の平坦面から石鏃が6点まとまって出土している。286～292は弥生土器で、細片が多い。286は甕の口縁で、端部が上方に突出し凹線文を施す。287は甕の口縁部～体部で、外面にタタキがみられるなど、やや新しい要素をもつ。288は広口壺の口縁部で、端部に退化した凹線文を施す。289の脚部は、脚端部にむかって開いたのち内側に屈曲して底面に接するもので、類例はあまりない。290は外面に凹線文を施した鉢の脚台部と考えられる。291・292はともに底部である。このうち286・287の壺や甕については、Ⅳ様式末頃を中心とした時期に位置づけられる。

293～298は平坦面から出土した石鏃で、293～297がサヌカイトの打製石鏃、298が粘板岩製の磨製石鏃である。そのうち293～295は凸基式で、長さ3.8～4.3cm、質量1.9～2.9gをはかる。296は大型化した有茎式で、長さ6.1cm、質量4.5gをはかる。297はやや小型の有茎式で、他と比べると石材がやや粗く、長さ2.7cm、質量1.9gをはかる。298は粘板岩製の磨製石鏃で、幅広の大型品であり、長さ5.6cm、質量6.8gをはかる。同様の形態のものは、摂津では中期後半の三田市奈カリ与遺跡[2)]や、後期初頭の古曽部・芝谷遺跡[3)]などで出土例があり、これらについては形態的に鉄鏃と類似するものがみられることから、金属器を模倣したものと考えられている。[4)]土器の特徴から、Ⅳ様式末頃を中心とした時期に位置づけられるが、石鏃についても凸基式と有茎式が共伴し、大型化した有茎式や金属器模倣の大型磨製石鏃などもみられることから、時期的には矛盾しない。

段状遺構5　調査区の西端、段状遺構4の西側に位置する。他の段状遺構と同じく等高線に平行するように西の谷側にむかって掘り込まれた南北に長い遺構で、東壁に沿ってコの字状に壁溝がめぐる。南北の規模は7.0m、東壁での掘り込みの深さは約0.3～0.7mを測る。なお東壁については、北半部が外側に大きく広がっているが、これは当初からの人為的に掘り込まれたものではなく、廃絶後に崩れたものと考えられる。平坦面の標高は72.3～72.4mで、奥行きは約1mである。壁溝の幅は約0.35～0.5m、深さは深い箇所で0.1m、埋土は炭や焼土が混じる黄褐色シルトや黄褐色粘土質シルトである。この壁

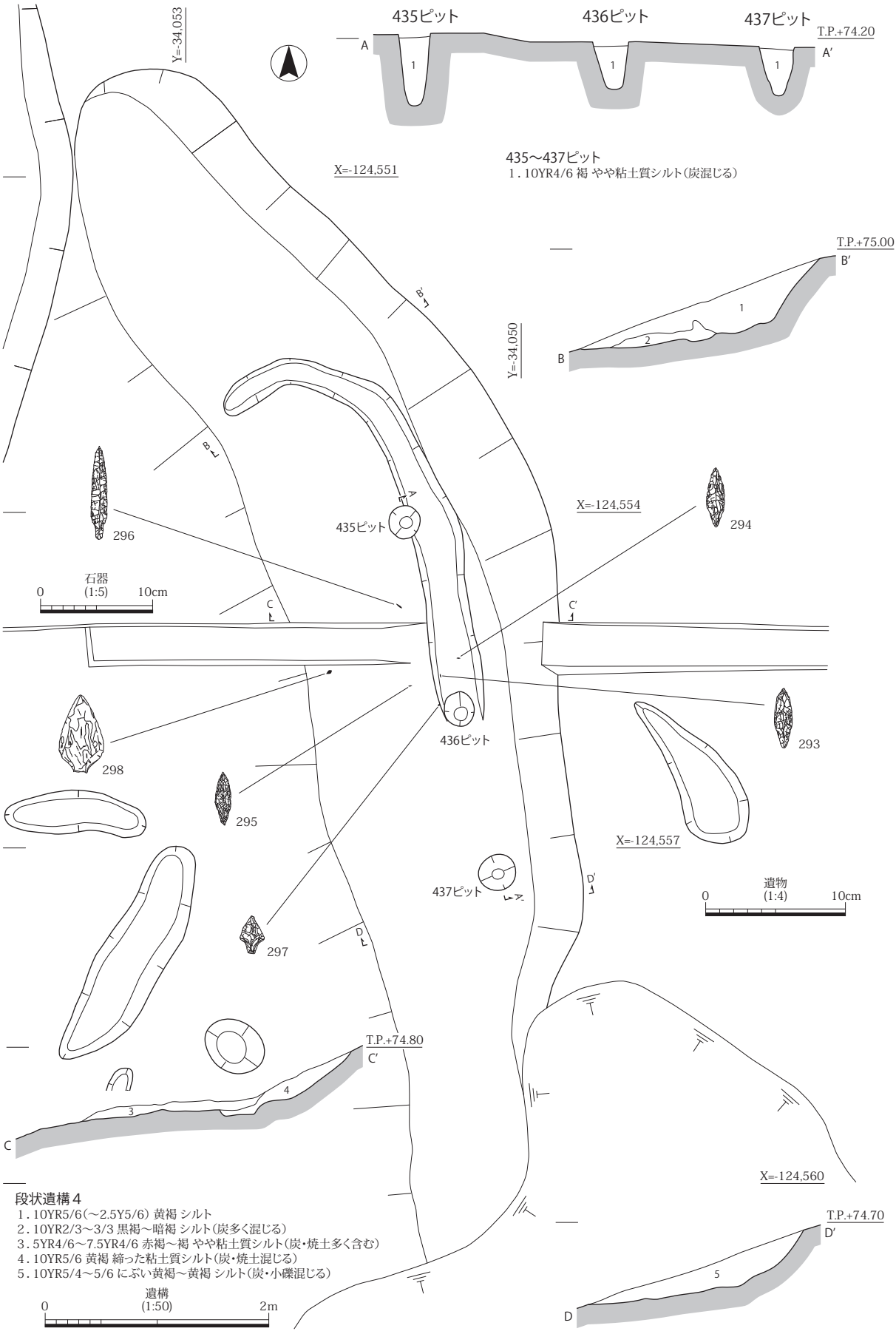


図 75　段状遺構４平面・断面図

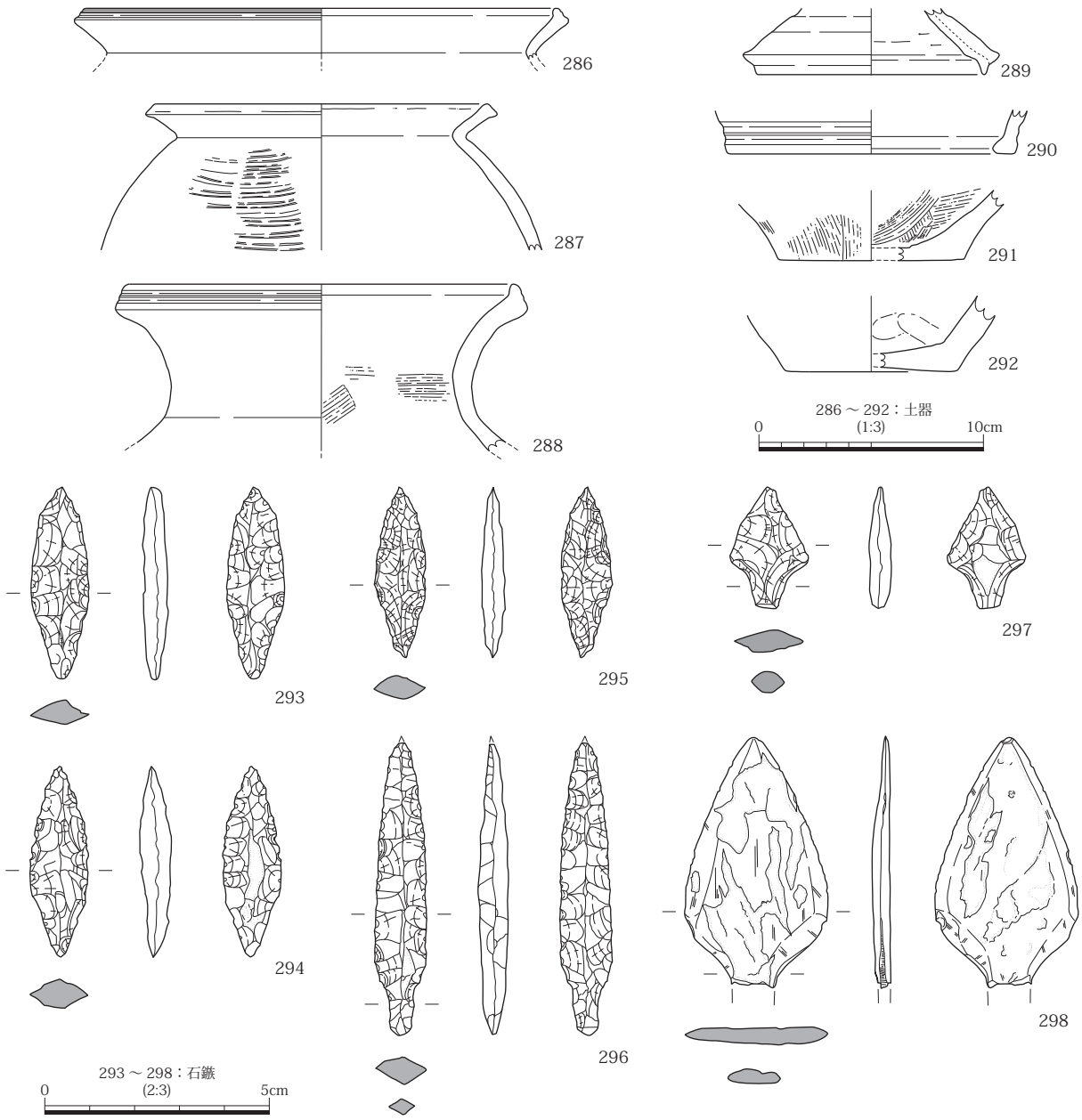


図 76　段状遺構 4 出土遺物

溝と重複して 4 基のピット（420 ～ 423 ピット）が並んで検出された。これらのピットは、壁溝外に出ている 421 ピットを除いて、壁溝埋土を除去した段階で検出された。柱間は 1.5 m等間で、平面形はいずれも円形を呈する。422 ピットのみ、やや規模が小さく、直径 0.2 m、深さ 0.28 m程度であるが、他の 3 基は直径 0.35 m強で、深さも 420・421 ピットは 0.5 m以上ある。埋土はどれも炭混じりの黄褐色シルトである。

埋土や壁溝から弥生土器が少量出土している。このうち図化できたものは 299・300 の底部のみで、詳細な時期は不明であるものの、他の遺構と同様にⅣ様式の範疇におさまると推測される。

段状遺構 6　調査区の西端、段状遺構 5 の南側に位置する。他の段状遺構と同じく、等高線に平行するように西の谷側にむかって掘り込まれた南北に長い遺構で、東壁に沿ってコの字状に壁溝がめぐっている。北辺の壁は、段状遺構 4 のように壁溝の屈曲部よりもさらに北側まで大きく広がっており、南北長約 9.5 mの遺構のようにもみえるが、これは段状遺構 6 の本来の形状ではなく、北端部に重複する 126

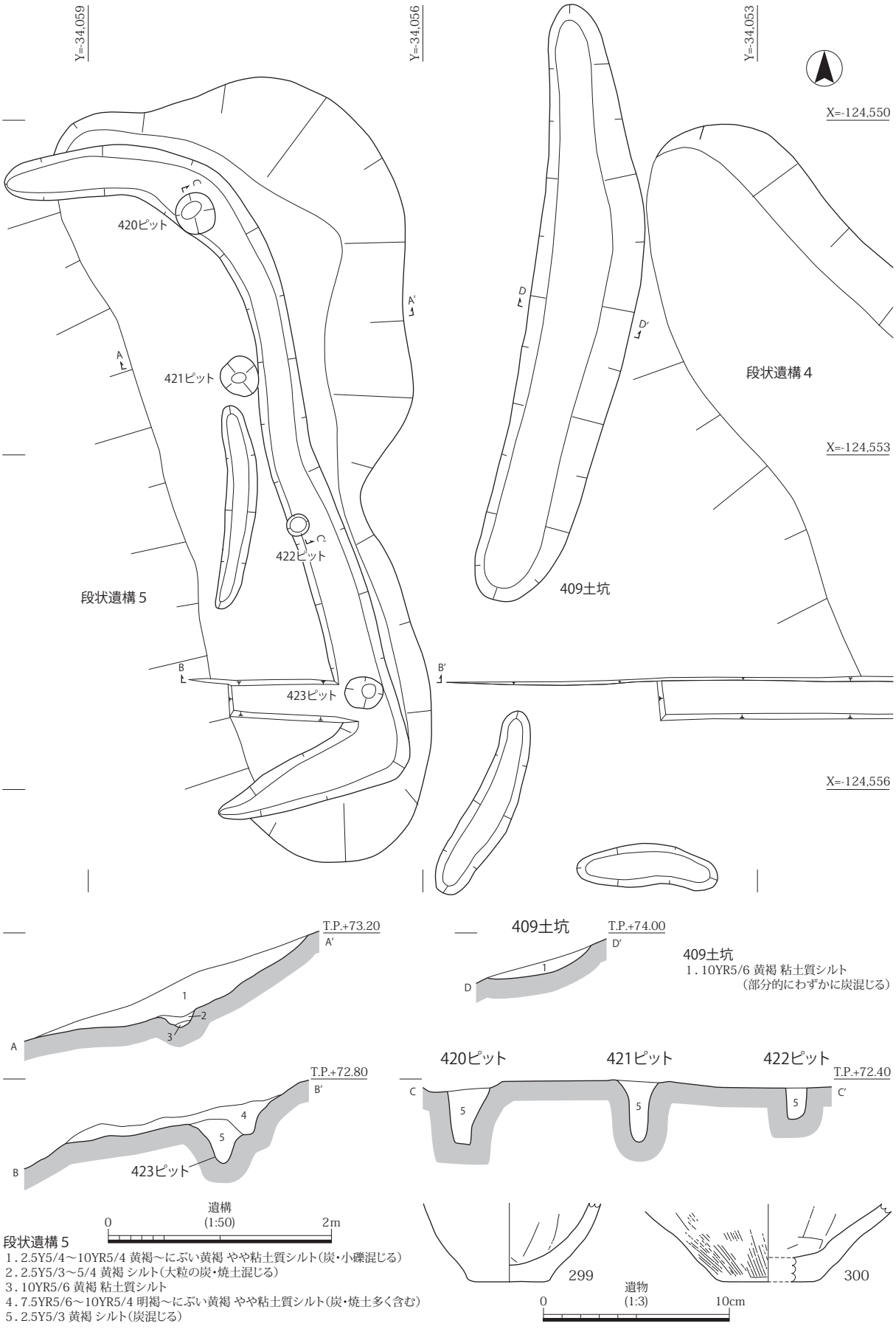


図 77　段状遺構 5、409 土坑平面・断面図および出土遺物

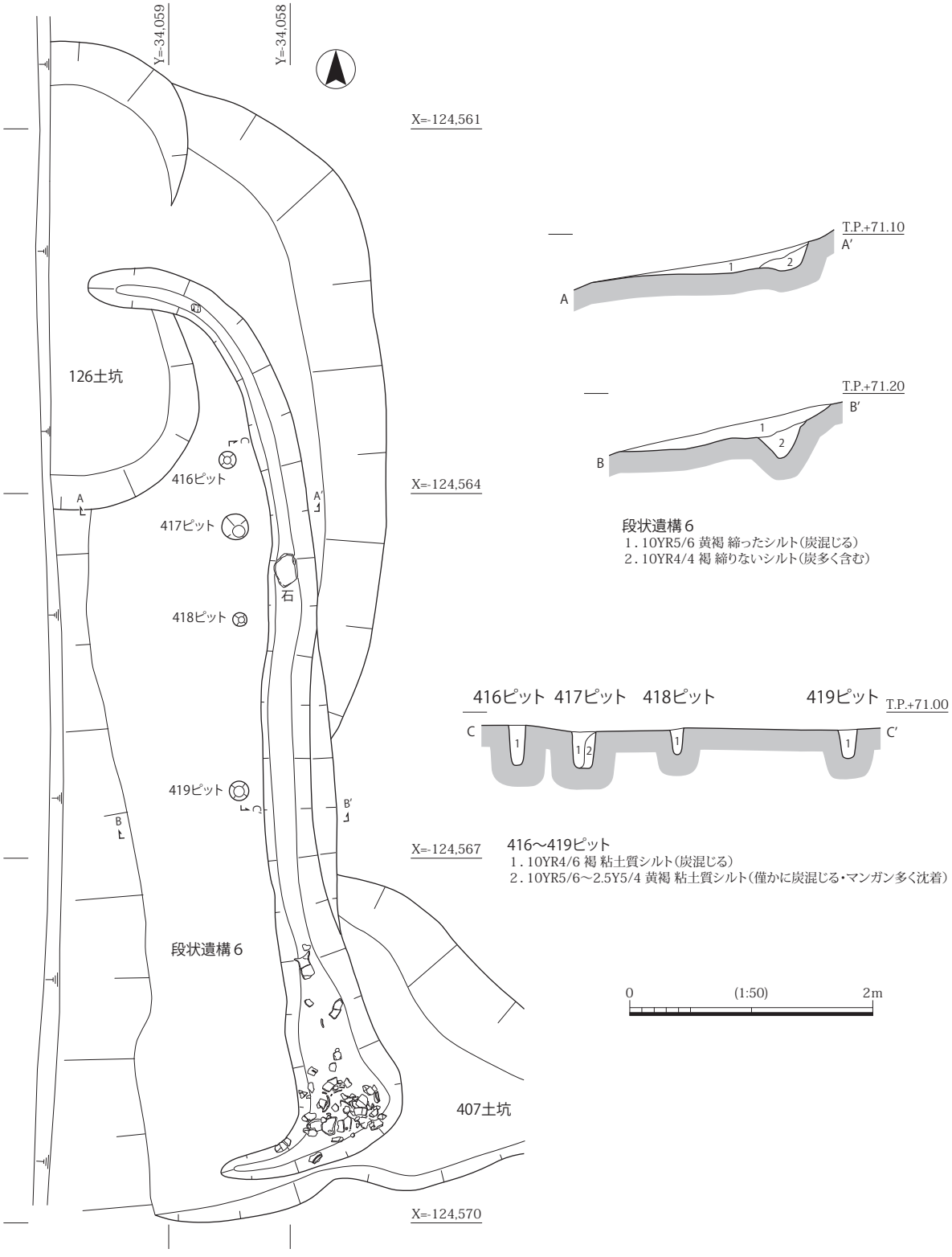


図 78　段状遺構６平面・断面図

土坑による撹乱の影響と思われる。したがって実際の南北の規模は、北辺壁溝までの約 7.8 m程度であったと推測される。東壁での掘り込みの深さは約 0.3 mで、平坦面の標高は約 70.85 mで、奥行きは 1.1 ～ 1.5 mである。壁溝の幅は 0.3 ～ 0.4 m程度であるが、南端部のコーナー付近では 0.8 m程度まで幅が広がっており、ここからは弥生土器がまとまって出土している。深さは深い箇所で約 0.2 mを測り、埋土は炭を多く含む締りのない褐色シルトである。この壁溝に沿って、遺構の北半で４基のピット

（416 ～ 419 ピット）が並んで検出された。他の段状遺構で検出されたピットは、いずれも壁溝と重複していたが、この段状遺構については、ピットと壁溝が重複しておらず、壁溝の西側にややずれている。平面形はいずれも小規模な円形で、直径は 0.1 ～ 0.2 m程度である。深さは約 0.2 ～ 0.3 mで、埋土は炭混じりの褐色シルトである。柱間は北から 0.6 m、0.7 m、1.4 mである。

壁溝や遺構周辺からは弥生土器や石器がまとまって出土しており、特に壁溝南東コーナー付近からは弥生土器が集中する。このうち、301 ～ 303 は大型の短頸壺である。301 は体部下半に最大径がくる下膨れの形態で、頸部から口縁にむかってやや開きながら立ち上がり、上端部は直立気味におさまる。頸部には断面が台形気味に突出した突帯を貼り付け、刻み目文を施す。体部はハケやナデ調整で仕上げ、体部の最大径の位置に円形の刺突文を施すが、この円孔は全周しない。302 は高さ約 32cm に復元され、体部中位に最大径をもち、頸部から口縁部にむかって開き、口縁部にむかってやや緩くカーブしながらまっすぐ上方にのびる。口縁部外面にはヨコナデによる条線がみられるが、これは凹線文が退化したものと推測される。頸部には 301 と同様に台形気味の突帯に刻み目文を施す。外面体部は下半がヘラケズリで上半がタテハケ、内面はナデ調整が施される。体部の最大径付近に刺突文を施すが、これについても 301 と同様に全周しない。301・302 の 2 点の壺は、頸部の突帯や胎土で共通性がみられ、同工によるものと推測される。また、この 2 点については、頸部がやや開いたのち口縁端部にむかってゆるくカーブしながら直立するもので、有段口縁の大型壺の系譜をひくものと考えらえる。口縁部の文様が退化してヨコナデになっていることや、頸部突帯が突出した台形気味の形状であることなども、新しい要素として捉えることができ、Ⅳ様式末頃に位置づけることができる。303 は胴部～体部まで復元でき、頸部に突帯はないが全体の形状は 302 に近い。内外面の摩滅が著しく、調整などは不明である。304 は甕の口縁で、外面タテハケがみられ、305 は広口壺の口縁と考えられる。この他に 306 の台石が 1 点出土しており、これについては被熱しているため、表面の剥離が著しい。さらに、遺構周辺からは 310 の底部片や、脚部に円形の刺突文を多数施した 311 の高杯脚部が出土している。これらの土器も、301・302 と同様にⅣ様式末頃に位置づけられるものである。

以上のように段状遺構 6 出土の土器は、他の段状遺構から出土する土器に比べやや新しい様相を示している。成合遺跡でみつかっている他の遺構出土の弥生土器と比べても、最も新しい時期の土器群であり、段状遺構 6 が弥生時代の集落の最終段階の遺構であったことがわかる。

段状遺構 7　段状遺構 6 の南東側に近接し、407 土坑と重複する。他の段状遺構と同じく、等高線に平行するように西の谷側にむかって掘り込まれた南北に長い遺構である。東壁際の壁溝は本来コの字状にめぐっていたと思われるが、南端部は浅く不明瞭となっていたため、南側の折れ曲がり部分は検出できなかった。遺構の南北規模は 6.6 mで、東壁での掘り込みの深さは約 0.2 mを測る。平坦面の標高は 71.6 ～ 71.8 mで、残存する平坦面の奥行きは約 1 mである。壁溝の幅は約 0.4 ～ 0.7 m、深さは約 0.1 mで、埋土は炭や焼土を多く含む黒褐～暗褐色シルトである。この壁溝と重複するように 4 基のピット（412 ～ 415 ピット）が並んで検出された。柱間は北から 1.4 m、1.35 m、1.25 mで、平面形はどれも直径 0.2 m弱の小規模な円形を呈する。深さは 0.2 ～ 0.25 mで、埋土はどれも炭混じりの黄褐色粘土質シルトである。

壁溝の埋土や遺構周辺からは、弥生土器が少量出土しているが、一部には隣接する 407 土坑の周辺出土のものと接合関係があるものもみられる。遺構が重複しており、遺構ごとの遺物取り上げが精密にできず、混入してしまった可能性もある。また、この他にも竪穴建物 11 および 3 － 1 区 1 層出土の遺

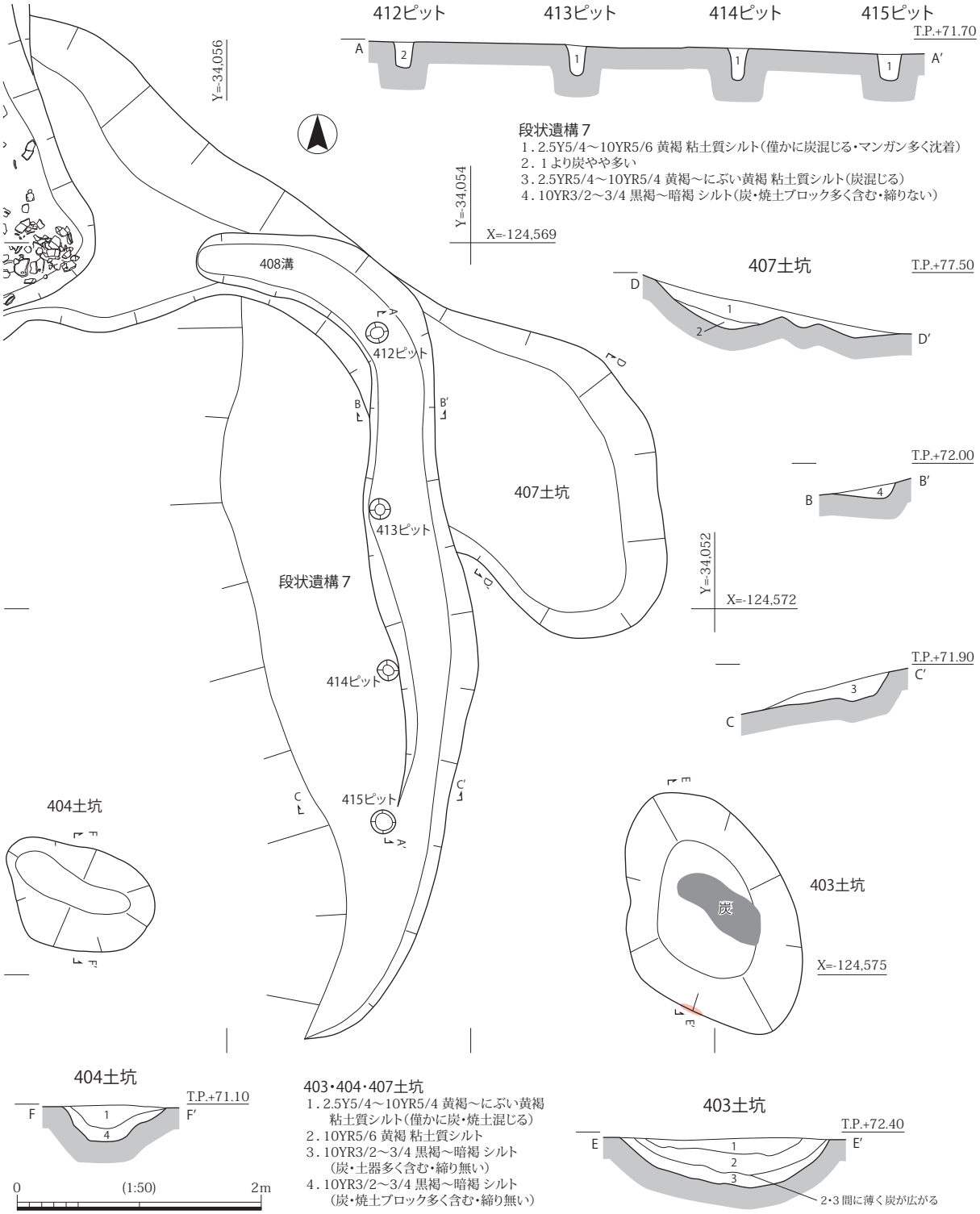
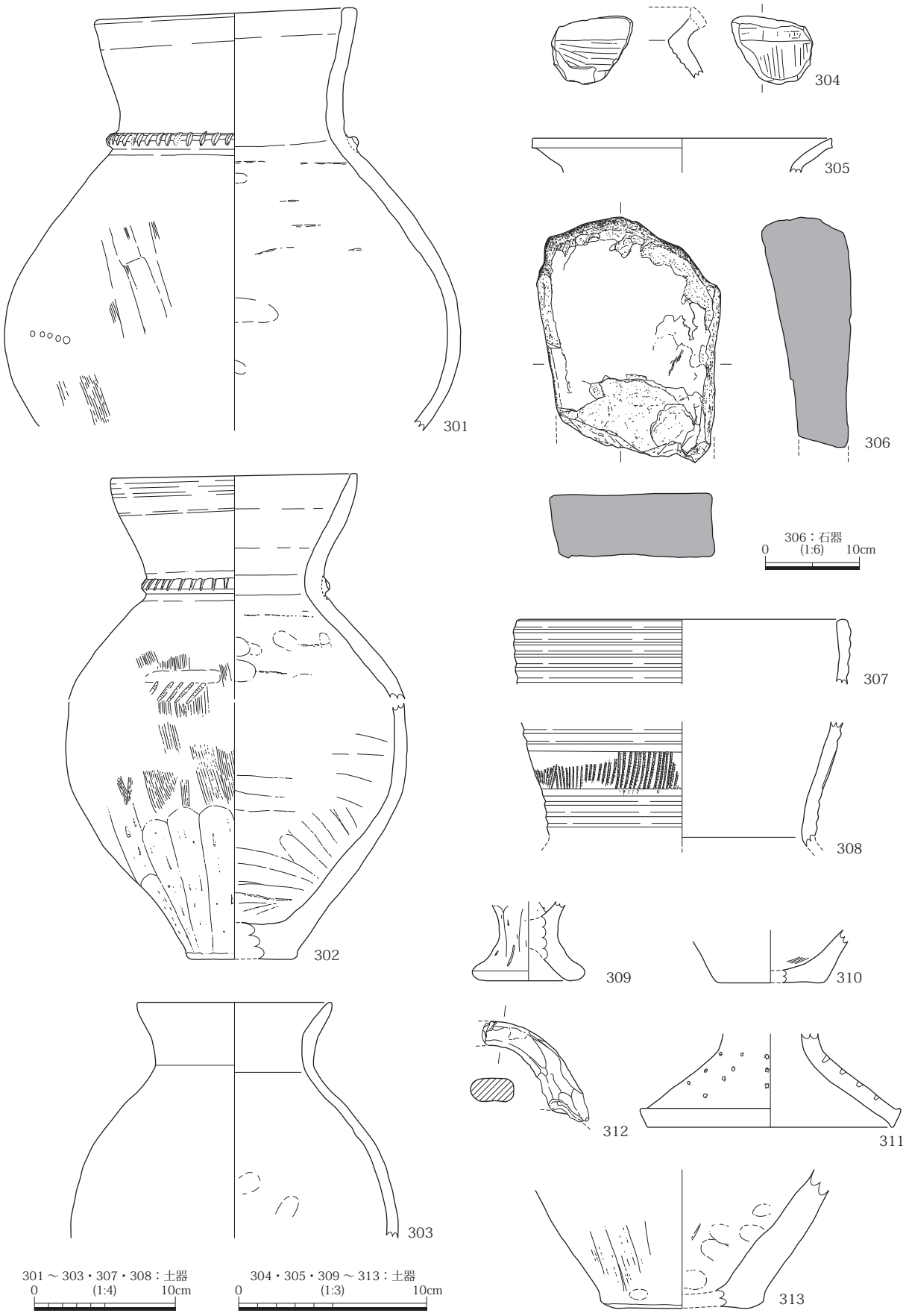


図 79　段状遺構 7、403・404・407 土坑平面・断面図

物と接合するものもある。307・308 は同一個体と考えられる短頸壺の頸部～口縁部で、307 が 407 土坑周辺からの出土破片と、308 が竪穴建物 11 や 3－1 区 1 層からの出土破片と接合関係がみられる。口縁部のやや頸部よりの位置に櫛描刺突文を施したのち、その上下に凹線文をめぐらす。この他に壁溝から 309 の脚台部や、周辺の遺構面直上からは 312 の把手なども出土している。307・308 は遺跡内から出土した壺類に比べると装飾性が強いことから、やや古いⅣ様式前半から中頃に位置づけられる可能性がある。



301 ～ 306. 段状遺構 6 、307 ～ 309. 段状遺構 7 、310・311. 段状遺構 6 周辺、312. 段状遺構 7 周辺、313. 407 土坑周辺

図 80　段状遺構 6 ・ 7 および周辺出土遺物

なお、段状遺構７の壁溝の北側と段状遺構６とは 0.8 ｍしか離れていないため、この２つの遺構がともに建物であった場合、両者が同時並存していたとは考え難い。出土遺物からは、段状遺構６出土の弥生土器の方がやや新しい様相を示していることから、段状遺構７が段状遺構６よりも先行する時期の遺構と考えられる。

126 土坑　段状遺構６の北端に重複し、西側の一部は２区まで広がっている。平面形は、一見南北 3.85 ｍ、東西 2.8 ｍの隅丸長方形のようにみえるが、段状遺構６北側の輪郭に不自然な箇所がみられることから、段状遺構の東側から続く不整形な土坑であったと考えられる。深さは 0.1 ｍ程度で、埋土は炭混じりの灰黄褐色粘土質シルトである。段状遺構との先後関係については、土坑の方が新しいと考えられるが、両者の埋土がよく似ており、切り合い関係が不明瞭であったため、はっきりしなかった。人為的な遺構というよりは、自然の営力によってできた窪みのようなものであった可能性が高い。

393 土坑　頂部東側斜面に位置する。樹木伐採の前から斜面に土器片が露出しており、表土を掘削したところ、さらに多くの土器の広がりが確認された。ただし、崩れかけた急斜面に位置していたことから、遺構の大部分が削れており、本来の遺構の形状は明らかでない。現状では南北約 1.2 ｍ、東西 0.8 ｍの範囲に、半円状に炭と小礫を多く含む褐色シルトが 0.1 ｍ強の厚さで堆積しており、その上面から弥生土器がまとまって出土した。

このうち、315 は有段口縁の大型壺の口縁～頸部であり、頸部からやや開きながら立ち上がったのち、ゆるやかに屈曲して口縁にむかって直立する。口縁部には凹線文が３条施され、頸部外面はタテハケ調整、頸部には幅の狭い貼付突帯が付され刻目文が施される。316 は底部、314 は台付鉢で脚台部から体部の中程までが残存する。体部外面には刻みのような施文がみられ、屈曲部付近では剥離痕がみられることから突帯が付されていた可能性がある。315 壺の特徴からⅣ様式後半を中心とした時期に位置づけられる。

403 土坑　段状遺構７の東側に近接する。平面形は長径 2.15 ｍ、短径 1.4 ｍの楕円形で、深さは 0.4 ｍを測る。埋土は下層が炭や土器を多く含む締りの無い黒褐～暗褐色シルト、中層が黄褐色粘土質シルト、上層が僅かに炭や焼土が混じる黄褐～にぶい黄褐色粘土質シルトで、下層の黒褐～暗褐色シルトの上面

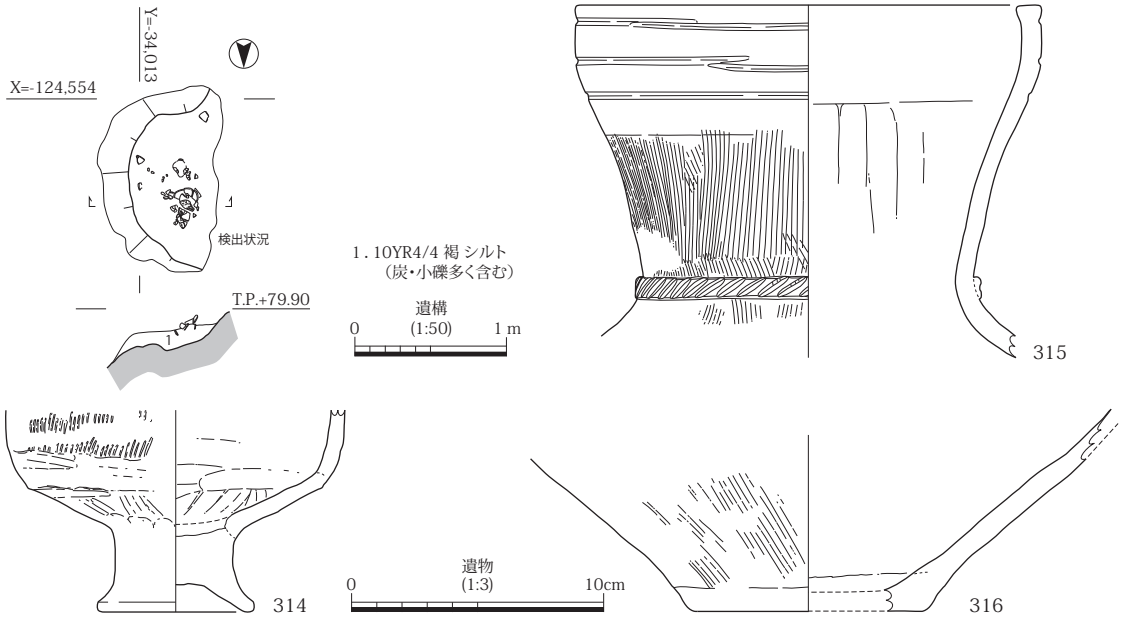


図 81　393 土坑平面・断面図および出土遺物

には薄く炭が広がっていた。また、遺構肩部に僅かではあるが被熱により赤変している。埋土からは、弥生土器片が数点出土している。

404 土坑　段状遺構７の西側に近接する。平面形は長径 1.3 m、短径 0.85 mやや歪んだ楕円形で、深さは 0.3 mを測る。埋土は下層が炭や焼土ブロックを多く含む、締りのない黒褐～暗褐色シルトで、上層が僅かに炭や焼土が混じる黄褐～にぶい黄褐色粘土質シルトである。

407 土坑　段状遺構６・７に重複する。段状遺構７の東側から段状遺構６の南東隅にむかってのびる流路状の遺構で、長さは約７mを測る。幅は狭い箇所で約 0.8 m、広い箇所で約 1.8 ～ 2.5 mで、深さは深い箇所で約 0.25 mである。埋土は下層が黄褐色粘土質シルトで、上層が僅かに炭や焼土が混じる黄褐～にぶい黄褐色粘土質シルトである。段状遺構６・７との先後関係については、この 407 土坑が新しいと考えられるが、平面・断面ともに切り合い関係が不明瞭であり、先後関係は判然としない。

遺構内からは弥生土器が少量出土しているが、周辺からも 313 の壺底部や、段状遺構７出土の 307 と接合する壺の口縁片などが出土している。遺構が重複しており、遺構ごとの遺物取り上げが精密にできず、混入してしまった可能性もある。遺構の詳細な時期比定は難しいが、段状遺構７よりも新しい時期の遺構と考えられるため、Ⅳ様式中頃から後半に位置づけられると推測される。

409 土坑　段状遺構４と５の間に位置する。南北方向に細長い土坑で、長さは 5.4 m、幅は最も広い箇所で 0.95 mを測る。深さは 0.1 m程度と浅い。埋土は部分的に僅かに炭が混じる黄褐色の粘土質シルトである。

（伊藤・笹栗）

【註】

１）田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
２）井守徳男編 1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県教育委員会
３）宮崎康雄編 1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書 第 20 冊　高槻市教育委員会
４）寺前直人 1999「近畿地方の磨製石鏃にみる地域間交流とその背景」『国家形成期の考古学 －大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集－』大阪大学考古学研究室

第７節　４－２区の調査成果〔図 82 ～ 95、写真図版 30 ～ 32・59 ～ 61〕

丘陵の南斜面の一部に張り出すような緩斜面部が認められたため、11－３トレンチとして長さ 33 m、幅５mのトレンチを設定して調査を進めた。その結果、古代と弥生時代の３面の遺構面が確認された。調査は 11－３トレンチとして設定した範囲の調査を完了した後、府教委の指示により、遺構や遺物の広がりが予測されるトレンチ西側の斜面部と北東側の平坦部分について、後日改めて４－２区として広く調査を進めることとなった。ここでは 11－３トレンチ分の成果についても、４－２区として併せて報告する。最終的な調査面積は約 900 ㎡である。

層序については、１層は調査区全体に堆積する黄褐～明黄褐色シルトの斜面堆積層である。斜面勾配がきつい西側では 0.3 m程度、斜面傾斜が変換する東側で 0.7 m程度、調査区北東側でやや厚い 1.0 m程度の堆積がそれぞれ認められた。西側斜面部分では１層除去面で地山が検出され、遺構・遺物は希薄であった。調査区の斜面下方の南端部分では、中央に谷が入り込む地形となっていたが、この谷部に２

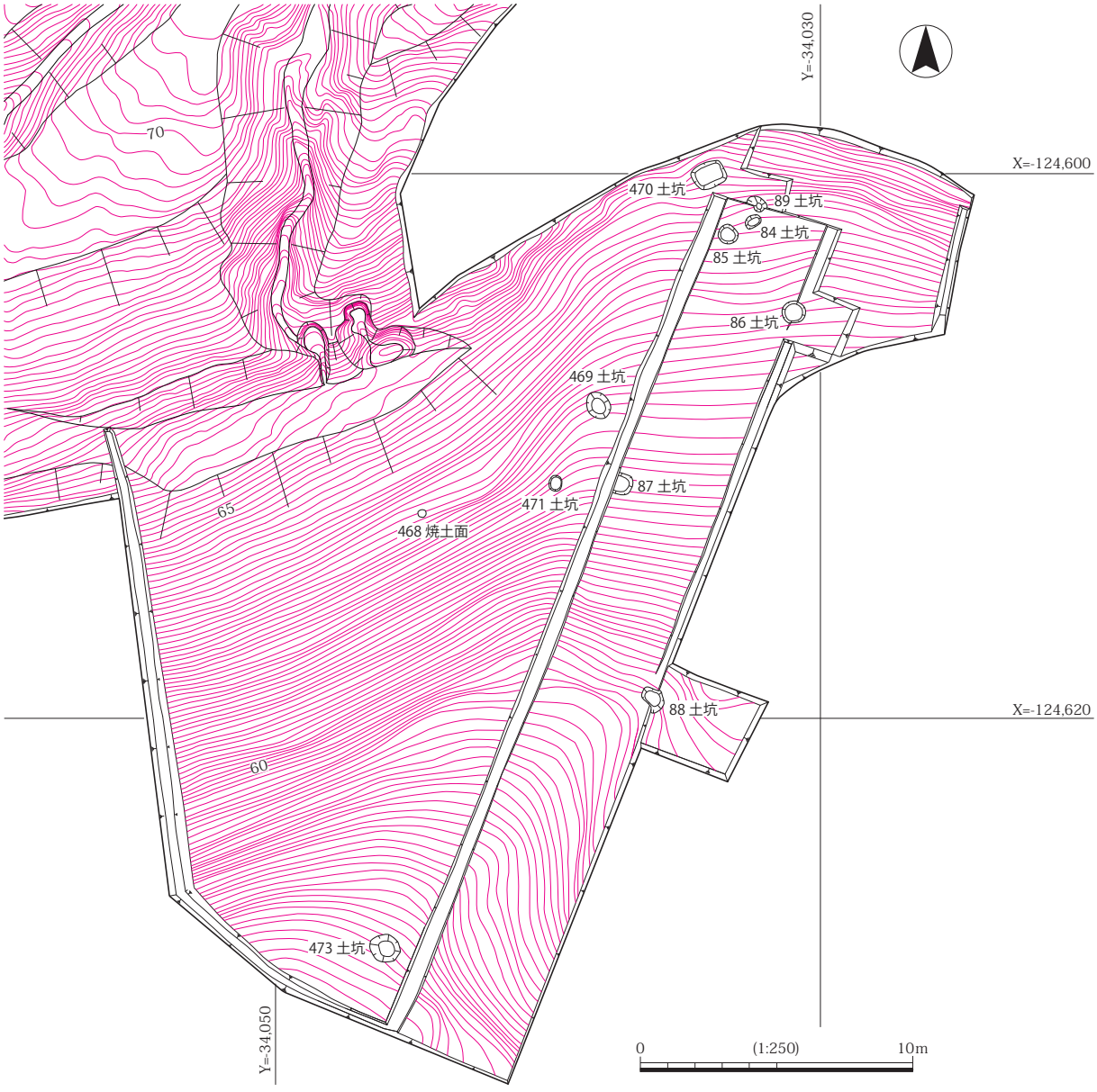


図 82　４－２区第１面検出遺構全体平面図

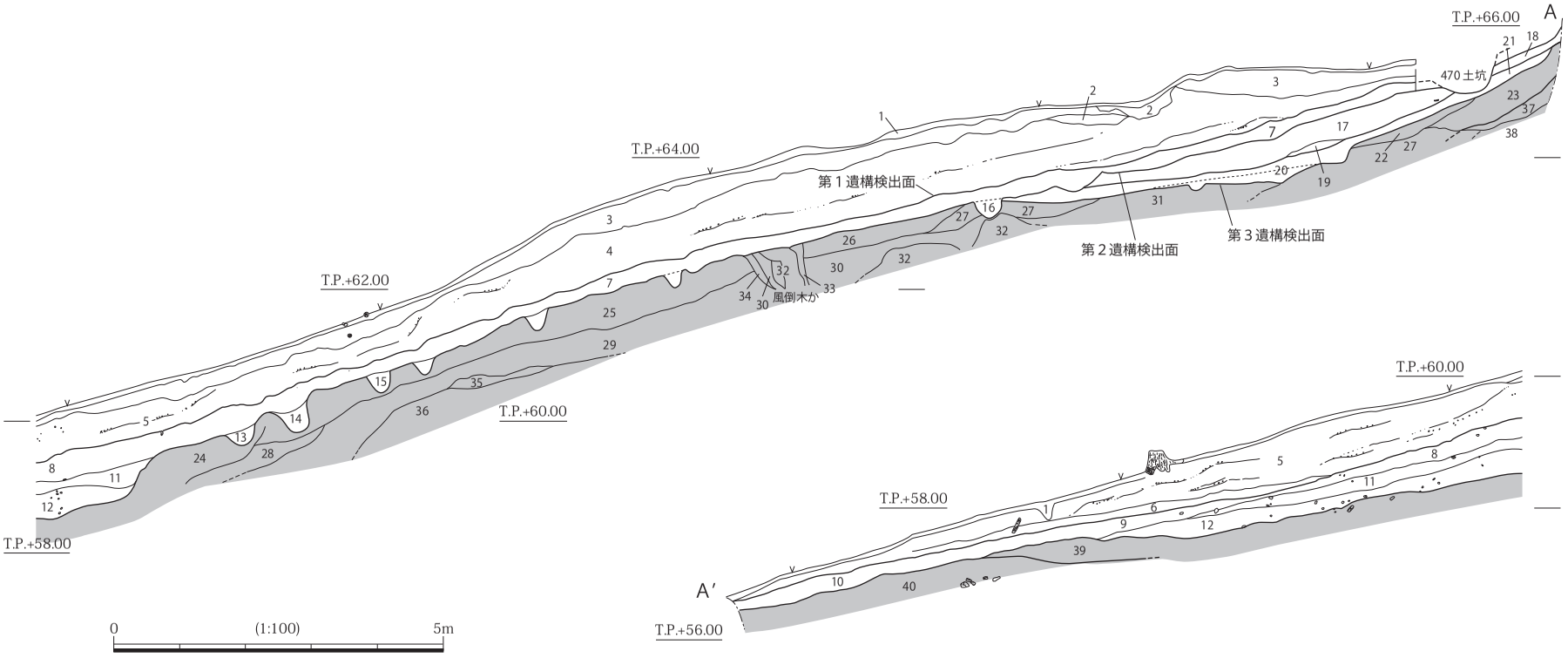
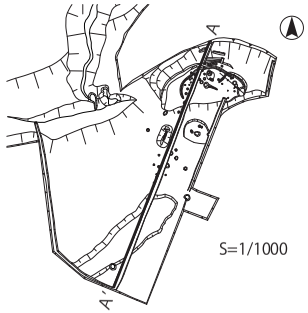


図83　4－2区地層断面図

1. 表土
2. 撹乱
3. 10YR5/6 黄褐 シルト〔道の造成後の流れ堆積〕
4. 10YR5/6～6/6 黄褐～明黄褐 シルト(礫混じる・ラミナあり)〔１層〕
5. 10YR5/6 黄褐 シルト(礫混じり、やや砂質強いシルトのラミナあり)〔１層〕
6. 2.5Y5/6～6/6 黄褐～明黄褐 シルト～粘土質シルト〔２層〕
7. 2.5Y4/6～5/6 オリーブ褐～黄褐 シルト(0.5～1.0㎝大の礫やや含む・遺物あり・弥生包含層)〔３層〕
8. 2.5Y5/6 黄褐 礫混じりシルト(1.0～3.0㎝大の礫含む)〔３層〕
9. この辺りから北の方では３層が礫っぽい
10. 2.5Y5/6 黄褐 シルト(あまり礫っぽくない)〔３層〕
11. 2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じりシルト(1.0～3.0㎝大の礫非常に多く含む)〔99落ち込み〕
12. 2.5Y4/6～5/6 オリーブ褐～黄褐 礫混じりシルト(1.0～3.0㎝大の礫多く含む)〔99落ち込み〕
13. 10YR4/6 褐 シルト〔489ピット〕
14. 2.5Y4/6～10YR4/6 オリーブ褐～褐 礫混じりシルト(1.0～3.0㎝大の円礫やや多く含む)〔490ピット〕
15. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト〔492ピット〕
16. 2.5Y4/4～4/6 オリーブ褐 シルト(炭混じる)〔488ピット〕
17. 2.5Y6/8 明黄褐 シルト(炭混じる・土器あり)〔４層〕
18. 2.5Y5/6 黄褐 シルト〔４層〕
19. 10YR5/6 黄褐 シルト〔４層〕
20. 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト(5.0㎝大の礫やや多く含む・炭あり・土器あり・弥生包含層)〔５層〕
21. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト〔５層〕
22. 2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト(礫混じる)
23. 2.5Y5/6 黄褐 礫混じり砂質シルト(締りなし・非常に弱い)
24. 2.5Y5/4 黄褐 シルト(0.5㎝大の細かな礫多く含む)
25. 2.5Y5/6 黄褐 シルト(1.0～3.0㎝大の礫まばらに含む)
26. 2.5Y5/6～10YR5/6 黄褐 シルト
27. 10YR5/6 黄褐 シルト
28. 2.5Y5/6 黄褐 シルト(0.5㎝大の細かい円礫が多く入る傾向)
29. 2.5Y4/6～5/6 オリーブ褐～黄褐 礫混じりシルト(1.0～3.0㎝大の礫やや多く含む)
30. 2.5Y5/4 黄褐 シルト(0.5～3.0㎝大の礫少量含む・古い堆積層か?・遺物なし)
31. 2.5Y5/6 黄褐 シルト
32. 5Y6/4 オリーブ黄 礫混じりシルト(地山ブロック(偽礫)・マンガン多く含む)
33. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト
34. 27と31のまだら
35. 10YR5/8 黄褐 シルト〔下層のやや風化した層〕
36. 7.5YR5/8～10YR5/8 明褐～黄褐 粘土質シルト〔赤地山〕
37. 7.5Y5/2 灰オリーブ 砂質シルト〔岩盤風化層〕
38. 10Y6/1 灰 岩盤
39. 風化した角礫〔非岩盤〕
40. 角礫〔岩盤〕



層が堆積していた。２層も１層と同様に斜面堆積層であるが、斜面下方の谷部にのみみられるため、１層に比べると水分をやや多く含み粘性が強い。１層中からは、８・９世紀代の須恵器をはじめ、土師器や弥生土器の出土が認められる。1・2層除去面では、焼土坑や土坑が検出され、この面を第１面とした。

３層は主に東側緩斜面とそこから続く谷部に堆積するオリーブ褐～黄褐色礫混じりシルトの土壌層で、0.2 m程度の厚さで堆積する。３層中からは弥生土器、土師器、須恵器、鉄製品などが出土しており、細片を含めれば弥生土器の出土量がやや多い。この３層除去面では、斜面の上方を中心に古代の土坑やピットを確認しており、この面を第２面とした。一方で、この東側緩斜面部分のうち概ねＸ＝－ 124,610 付近より南、標高 62.8 mより斜面下方については、この３層を除去した段階で地山面を検出しており、竪穴建物や土坑、落ち込み、ピットを確認している。これらの遺構のうち竪穴建物４や 474 土坑、99・485 落ち込みは、埋土内から弥生土器のみが出土しており、斜面上半部の第２面の遺構とは帰属時期が異なり、後述する第３面に帰属すると考えられる。一方でその他のピットについては、埋土に遺物を包含しないため、第２面と第３面のどちらに遺構が帰属するか判然としない。

調査区の北東側では、３層の下層で比較的遺物を多く含む明黄褐～黄褐色シルトの斜面堆積層（４層）と、オリーブ褐色砂質シルトの土壌層（５層）を確認した。特にこの４・５層からは弥生時代の遺物のみが出土している。この５層を除去すると、調査区の東西約 15 m、南北５m程度の平坦面が確認され、ここで重複する３棟の竪穴建物が検出されたため、この面を第３面とした。この平坦部分では、３層と５層の間に黄褐色の斜面堆積層である４層が間層として存在するため、それぞれの除去面の遺構を明確に峻別できたが、その一方で３層と５層はともに色調や土質がよく似た土壌層であり、斜面部分ではその層境を十分に捉えられなかった可能性がある。そのため前述した通り、東側斜面部や谷部の遺構のうち竪穴建物４をはじめとした埋土に弥生土器のみ含む遺構を除いたピット群は、３層とした土壌層中から切り込まれた第２面に属する古代の遺構であるか、第３面に属する弥生時代の遺構であるかはっきりとしない。

包含層出土の遺物　317 ～ 323 は１層中から出土した須恵器である。杯Ａ 317 ～ 319 は口径 10.8 ～ 12.2cm、器高 3.5 ～ 4.1cm を測る。317 はやや尖り気味の底部で、318・321 は平底で底部から体部にかけて丸みをもつ。杯Ｂ蓋 320 ～ 322 は口径が 16.0 ～ 16.3cm で、口縁端部が屈曲しない形態で、扁平なつまみをもつ。杯Ｂ 323 は高台がやや内側に取り付き、底部から体部にかけて丸みをもってたちあがる。これらの須恵器は平城Ⅲ、８世紀中頃を中心とした時期に位置づけられる。324・325 は 11 －３トレンチ埋め戻し土から出土したものであるが、１層もしくは３層中の遺物であると考えられる。この 324 壺Ｍや 325 壺底部は、５区の須恵器窯の製品である可能性が想定され、９世紀初頭まで下ると考えられる。

326 ～ 336 は３層中からの出土で、須恵器や弥生土器、鉄製品がみられる。326 ～ 328 は須恵器杯Ａで、326 は１層から出土した 317 と同様にやや尖り気味の底部をもつ。口径 11.8cm、器高 4.0cm。327・328 は口径に対してやや器高の低い形態で、底部から体部にかけて丸みをもつ。327 が口径 14.6cm、器高 3.2cm で、328 が口径 19.8cm、器高 3.7cm を測る。329・330 は杯Ｂ蓋で、329 のつまみは扁平で、330 の口縁部の形態は屈曲形態ではない。331 は小型の壺の口縁である。これらの須恵器についても、１層中から出土した須恵器と同様に、８世紀中頃を中心とした時期に位置づけられる。特に 328 は第２面精査中に出土し、第２面の時期の上限年代が８世紀中頃とする根拠となり、472 土坑の年代とも矛盾はない。332 は壺Ｌの底部で、５区の須恵器窯に最も近い調査区の北東端から出土

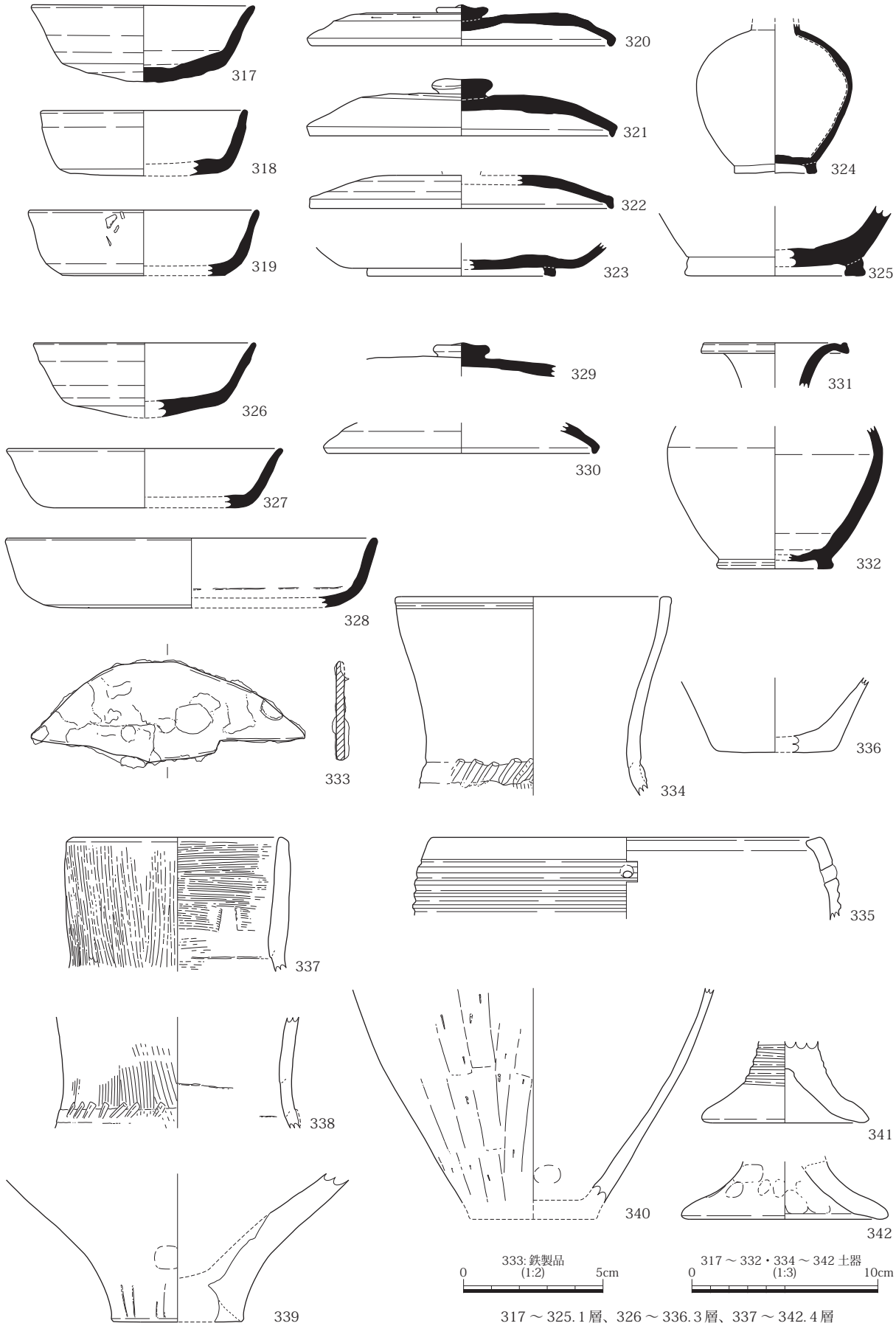


図 84　4 － 2 区遺物包含層出土遺物

しており、高台の付け方や焼き上がりの胎土・色調などから、5区の須恵器窯の製品である可能性が高い。この他に333板状鉄製品の出土もみられる。334～336は弥生土器で、3層中からはこの他にも図化できない細片も含めて一定量の出土がみられた。334は壺で、頸部がやや外開きに立ち上がったのち口縁部がまっすぐのびる。特に摩滅が著しく、口縁部の凹線文と、頸部の刺突痕がかろうじて確認できる。335は無頸壺で、外面に多条の凹線文が施され、円孔がみられる。336は壺もしくは甕の底部である。これらの遺物はⅣ様式後半を中心とした時期に位置づけられるだろう。

337～342は4層中から出土した弥生土器である。337は口縁部が直口する短頸壺で、外面タテハケ、内面にヨコハケを施す。338は壺の頸部で、突帯が剥離しており刺突痕がみられる。339は壺の底部で、同一個体と考えられる体部片が竪穴建物13や14の埋土から出土しており、どちらかの建物に伴う可能性が高い。340は壺もしくは甕の胴部から底部の破片で、外面ヘラケズリを施す。341・342は高杯の脚部で、脚端部はやや厚手で開きながらのび、端部は丸くおさまる。341は多条の凹線文を施す。これらの弥生土器の時期は、Ⅳ様式後半を中心とした時期に位置づけられる。4層の広がる範囲は、主に竪穴建物13～15の上面におさまるが、4層が上方からの流れ込みによる斜面堆積層であることをふまえれば、丘陵上の集落に伴う遺物の可能性もある。

第1面の遺構と遺物

1・2層を除去して検出した遺構面で、10基の土坑と焼土面を検出した。調査区の北東側を中心に一部まとまるが、斜面や谷部にも散在する。遺構面を覆う斜面堆積層の1層中からは弥生土器、土師器、須恵器が出土するが、遺物の出土量は総じて少ない。8世紀代の須恵器の出土量がやや多いが、一部に須恵器窯の製品と考えられる遺物も出土している。遺構面下の3層から出土する遺物についても、同様に8世紀代の遺物とともに、須恵器窯の製品と考えられる遺物が極少量出土することから、検出された遺構は、須恵器窯の操業後の9世紀初頭以降のものと考えられる。

84土坑　調査区の北東側で検出した楕円形の土坑で、長径0.62、短径0.44 m、深さ0.26 mを測る。埋土は礫をやや多く含むにぶい黄色シルトである。

85土坑　84土坑の南西に隣接する円形の焼土坑で、径0.67～0.72 m、深さ0.12 mを測る。埋土に焼土を含む焼土坑である。

86土坑　平面が円形の土坑で、径0.86 m、深さ0.08 mを測る。埋土はにぶい黄色シルト～砂質シルトである。

87土坑　東側緩斜面の標高62.6 m付近で検出された。断面確認用のトレンチによって全体の形状がはっきりしないが、平面が円形の土坑で、径0.78 m、深さ0.12 mを測る。埋土はにぶい黄橙色シルトで、他の遺構と異なり1層と土質が似ている。

88土坑　調査区の東側斜面をやや下がった標高60.0 m付近で検出した楕円形の焼土坑で、長径0.95 m、深さ0.14 mを測る。埋土の底部を中心に、炭や焼土が堆積するタイプの焼土坑である。

89土坑　84土坑の北に隣接する円形の土坑で、径0.76 m、深さ0.3 mを測る。埋土には礫を非常に多く含む暗褐～オリーブ褐色シルトである。

468焼土面　0.3 m程度の範囲で被熱し赤変した焼土面が、西側斜面で検出された。

469土坑　調査区西側から続く斜面と東側緩斜面部分の傾斜変換点付近、標高63.4 m付近で検出された楕円形の土坑で、長径1.04 m、短径0.84 m、深さ0.15 mを測る。埋土はやや粘性のある黄褐色シ

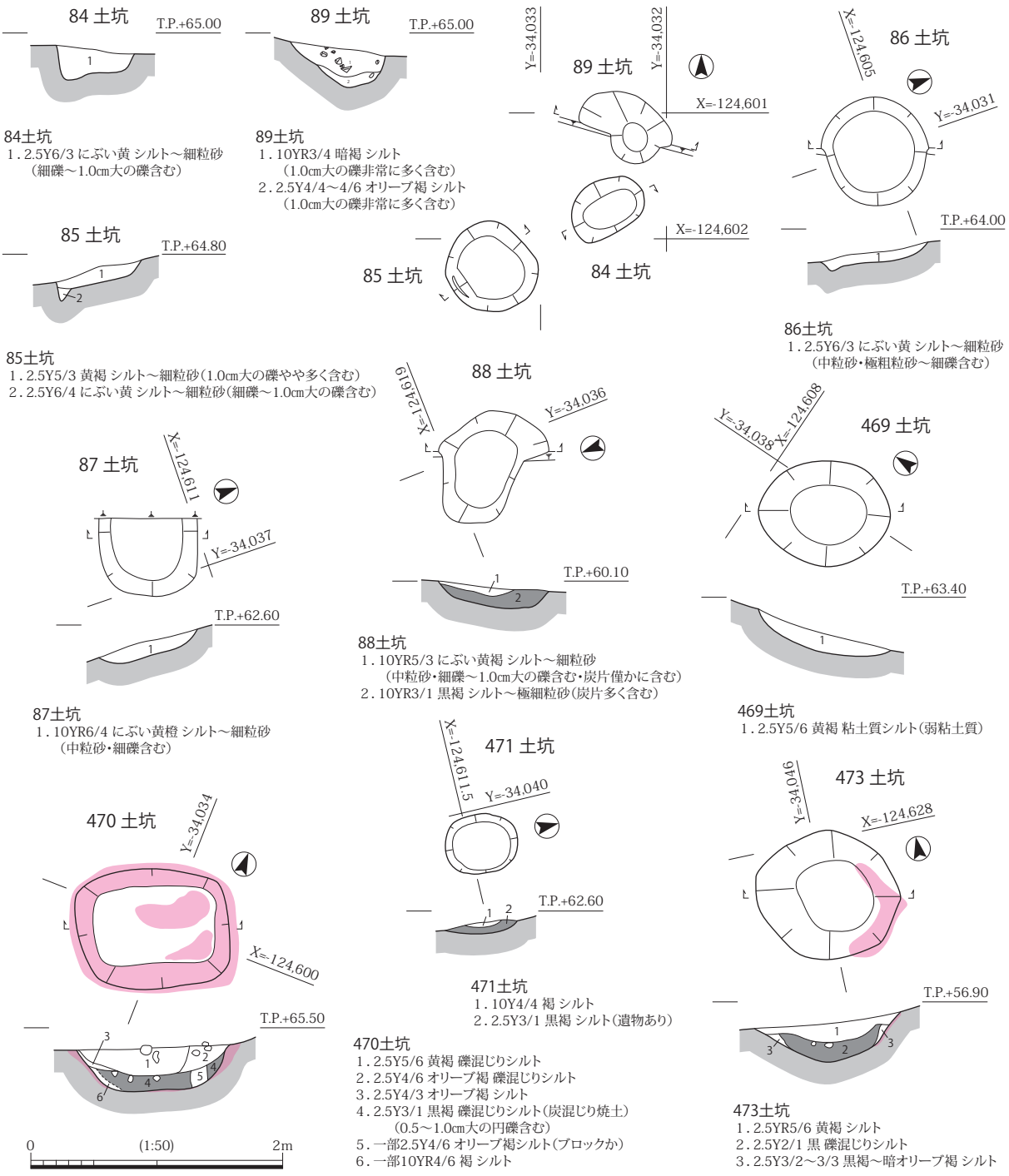


図 85　4－2区第1面検出遺構平面・断面図

ルトで、87 土坑と同様に 1 層と土質が似る。

470 土坑　北側斜面上方で検出した隅丸方形の焼土坑で、長辺 1.19 m、短辺 0.95 m、深さ 0.33 mを測る。壁面および底部の一部が被熱し赤変している。埋土の上半に黄褐～オリーブ褐色礫混じりシルトが、下半に黒褐色シルトの炭混じりの焼土が堆積する。

471 土坑　調査区の中央寄り、87 土坑や 469 土坑に近接する。平面が円形の焼土坑で、長径 0.58 m、短径 0.46 m、深さ 0.09 mを測る。埋土の底部を中心に黒褐色シルトの焼土が堆積する。遺構が非常に浅いため、上半部が流出したかもしくは削平された可能性が高い。埋土中からは弥生土器が出土しているが、これまでの調査成果や古代の遺構面で検出されていることから、古代に帰属すると考えられる。

図 86　４－２区第２・３面検出遺構全体平面図

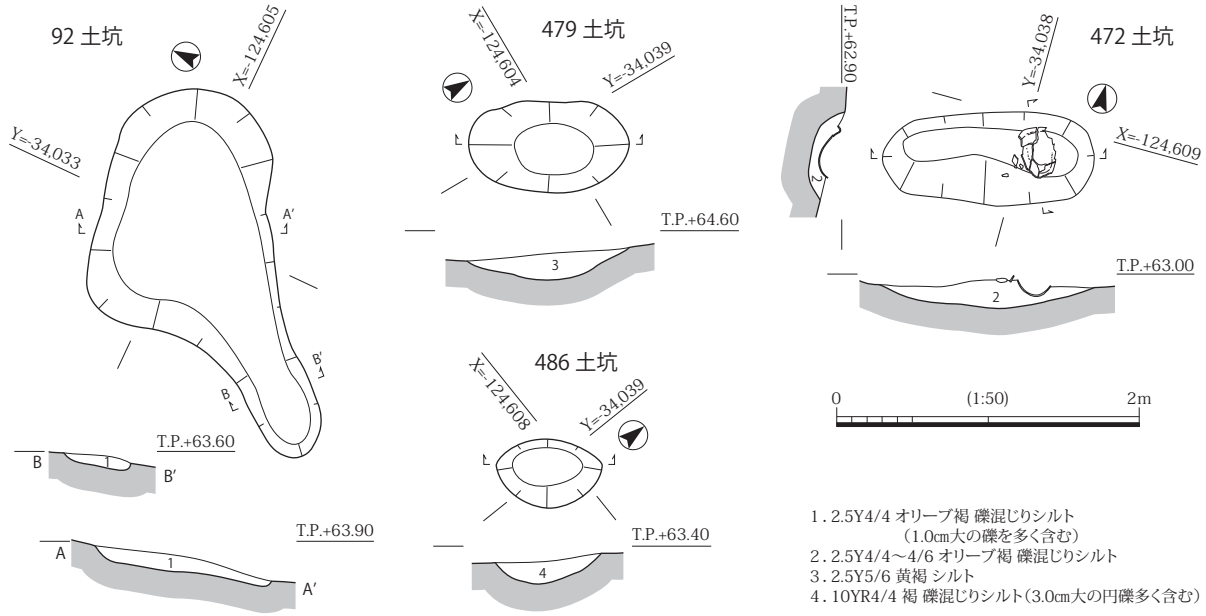


図 87　4－2区第2面検出土坑平面・断面図

473 土坑　調査区南端谷部のやや平坦な面で検出された円形の焼土坑で、長径 1.14 m、短径 1.02 m、深さ 0.30 mを測る。東側の壁面を中心に被熱し赤変している。これまでに検出された焼土坑と同様に、埋土上半には黄褐色シルトが、下半に黒～黒褐色シルトの焼土が堆積する。

第2面の遺構と遺物

土壌層である3層を除去して検出された遺構面で、東側緩斜面上方を中心に土坑やピットが検出された。3層中からは弥生土器や土師器、須恵器などが出土するが、出土遺物の中心は8世紀代の須恵器が占めることから、第2面の遺構は8世紀中頃を下限とすると考えられる。なお、概ねX＝－124,610より南、標高 62.8 mより斜面下方では、3層除去面で地山面が検出されており、埋土から弥生土器のみが出土する竪穴建物4、474 土坑、99・485 落ち込みを除いた、その他のピットについては、遺物の出土がみられないことから、第2面・第3面のどちらに属するかはっきりと判断ができない。帰属時期が不明の遺構は、この面の遺構として、ここで報告する。

92 土坑　調査区北東側の緩斜面で検出された不正形の土坑で、長さ 2.55 m、幅 1.25 m、深さ 0.1 mを測る。埋土はオリーブ褐色シルトで礫を多く含む。

472 土坑　調査区の中央付近、緩斜面で検出された楕円形の土坑で、長径 1.4 m、短径 0.62 m、深さ 0.19 mを測る。埋土はオリーブ褐色シルトで礫を多く含む。土坑の東寄りには土師器の甕が、口縁部側を斜面上方に底部側を下方にして1点据えられていた。土坑の上面が削平を受けているため、下半部のみしか残存していないが、丁寧に据えられている。遺構の性格としては、墓などの可能性が想定される。

この土師器甕 343 は、口径 27.6cm、胴部最大径 27.8cm を測り、器高は 30cm 強で、器壁の厚さが 0.5 ～ 0.7cm で薄手のつくりである。胴部がやや長めの形状で、口縁部は胴部より広がり、強く外反し端部に面をもつ。胴部は外面がハケ、内部がユビオサエ、口縁部内面にはヨコハケが施されている。丘陵上の集落出土の土師器甕と比べると、口縁端部の形状や器壁の厚さなどが大きく異なっている。また、この他に埋土中からは、須恵器や弥生土器も出土している。344 は須恵器の蓋で、口径が 21.9cm を測り、天井部が笠形を呈するタイプの器形に復元される。外面の口縁部付近に径 0.7cm 程度の円を描いたよ

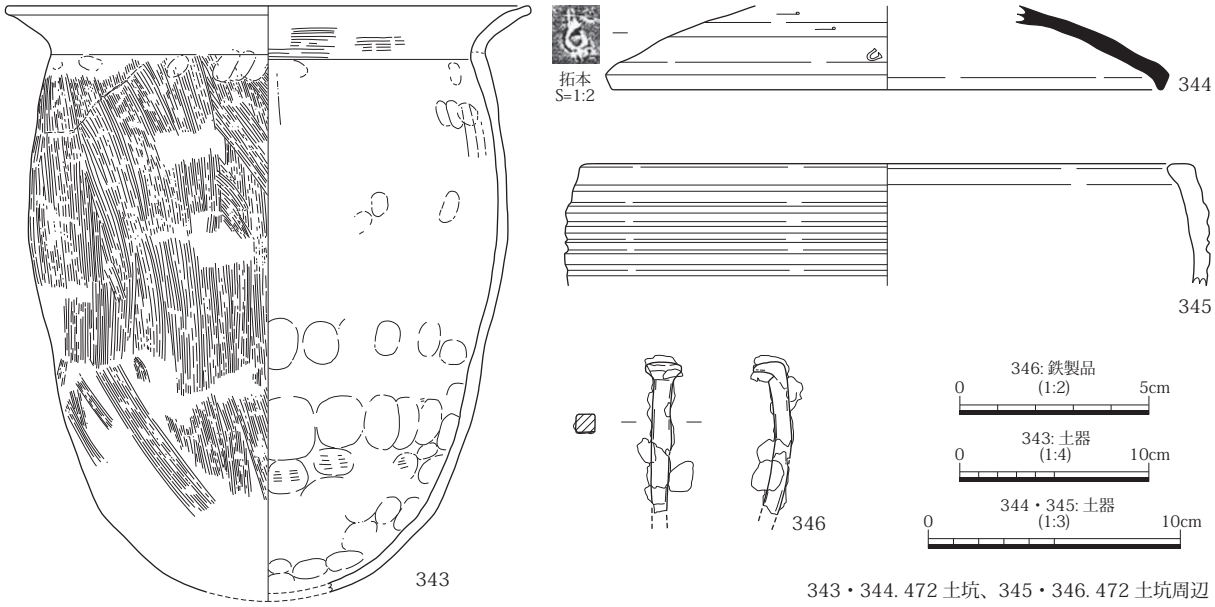


図 88　472 土坑および周辺出土遺物

うなへラガキ痕跡がみられるが、性格は不明である。平城Ⅲの 8 世紀中頃に位置づけられる。また、この 472 土坑周辺からは 346 鉄釘の出土もみられる。345 弥生土器は外面に多条の凹線文を施す鉢の口縁部で、下層の集落に伴うものが埋土に混入したものと考えられる。底部に据えられた 343 甕や、埋土から出土した 344 須恵器杯蓋の年代から、472 土坑の年代は 8 世紀中頃を中心とした時期の遺構と考えられる。また、この 472 土坑が第 2 面の遺構のうち、唯一年代をおさえることのできる遺構である。

479 土坑　調査区の北側中央寄り、西側斜面と東側緩斜面との傾斜変換点付近で検出された楕円形の土坑で、長径 1.06 m、短径 0.61 m、深さ 0.18 mを測る。埋土は黄褐色シルトである。

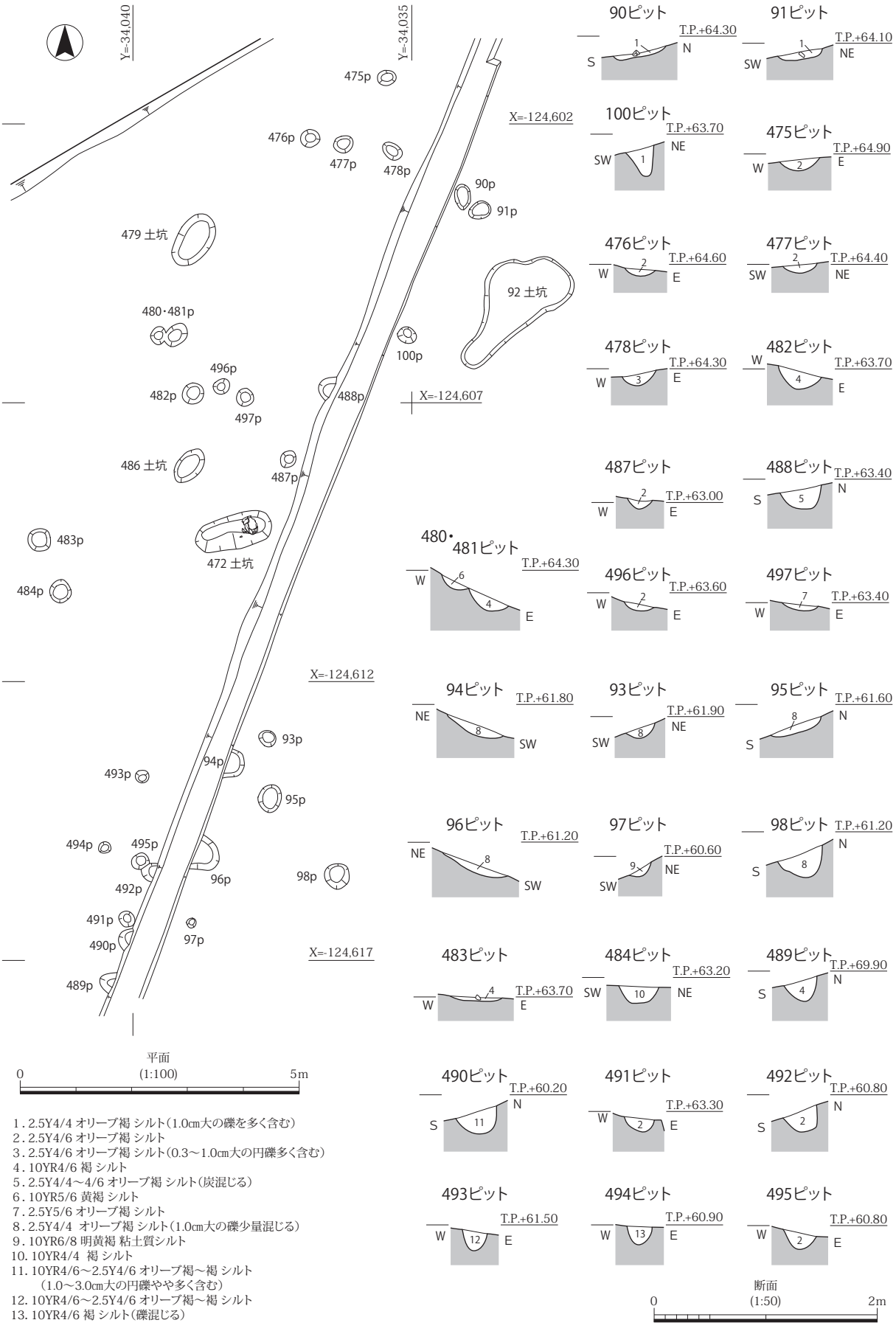
486 土坑　472 土坑の北側で検出された楕円形の土坑で、長径 0.7 m、短径 0.45 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は褐色シルトで礫を多く含む。

90・91・100・475 ～ 478・480 ～ 482・487・488・496・497 ピット　92 土坑や 472 土坑が位置する東側緩斜面の上方に位置するピット群である。径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.25 ～ 0.5 mを測る。埋土はオリーブ褐色系のシルトのものが多く、それほど大きな差異はみられない。

93 ～ 98・483・484・489 ～ 495 ピット　東側緩斜面の下方において、3 層を除去したのち地山直上で検出されたピット群で、第 2 面もしくは第 3 面に属するピット群である。この中でも 94・96 ピットは径 0.5 ～ 0.6 m程度でやや規模が大きい。その他のピットは径 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.05 ～ 0.12 mを測る。埋土に顕著な差異はほとんどないが、483・489・491・492・495 に関しては、斜面上方の埋土と土質が似ており、上方のピット群と同様に第 2 面に属する可能性がある。93 ～ 98・484・490・493・494 ピットは、埋土の土質から第 2 面と第 3 面のどちらに帰属するか判然としない。

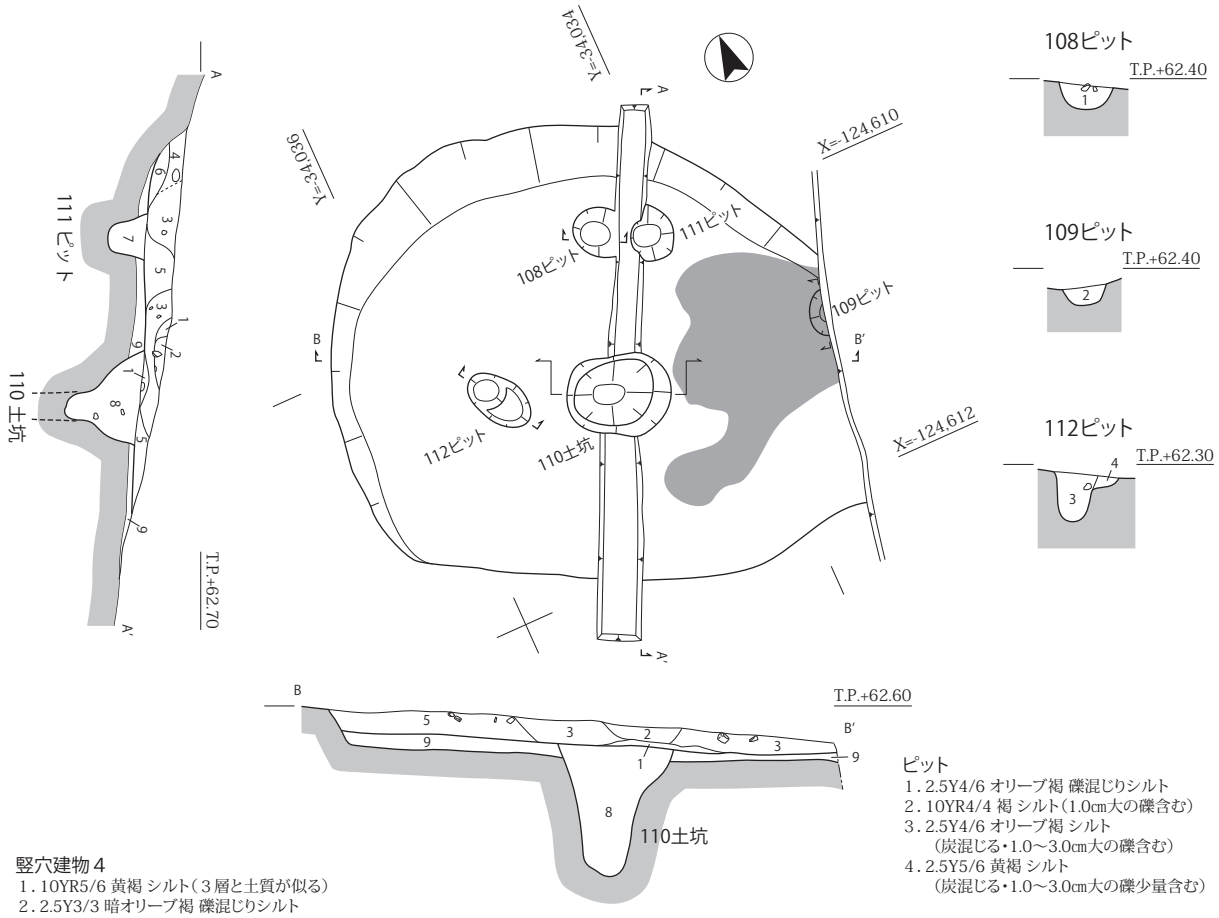
第 3 面の遺構と遺物

調査区北東側では 5 層を、東側緩斜面部分の下方では 3 層を除去した面で、竪穴建物 4 棟と土坑や谷状の落ち込みを検出した。北東側では土壌層の 3 層下に斜面堆積層の 4 層と土壌層の 5 層が存在し、4・5 層を除去したところ明瞭な平坦面が確認され、そこで重複する竪穴建物 3 棟をはじめとする遺構が検出された。遺構を検出した平坦部の南に続く緩斜面では、竪穴建物 4 と土坑 474 が第 3 面に属し、



1. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト(1.0㎝大の礫を多く含む)
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト
3. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト(0.3～1.0㎝大の円礫多く含む)
4. 10YR4/6 褐 シルト
5. 2.5Y4/4～4/6 オリーブ褐 シルト(炭混じる)
6. 10YR5/6 黄褐 シルト
7. 2.5Y5/6 オリーブ褐 シルト
8. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト(1.0㎝大の礫少量混じる)
9. 10YR6/8 明黄褐 粘土質シルト
10. 10YR4/4 褐 シルト
11. 10YR4/6～2.5Y4/6 オリーブ褐～褐 シルト
(1.0～3.0㎝大の円礫やや多く含む)
12. 10YR4/6～2.5Y4/6 オリーブ褐～褐 シルト
13. 10YR4/6 褐 シルト(礫混じる)

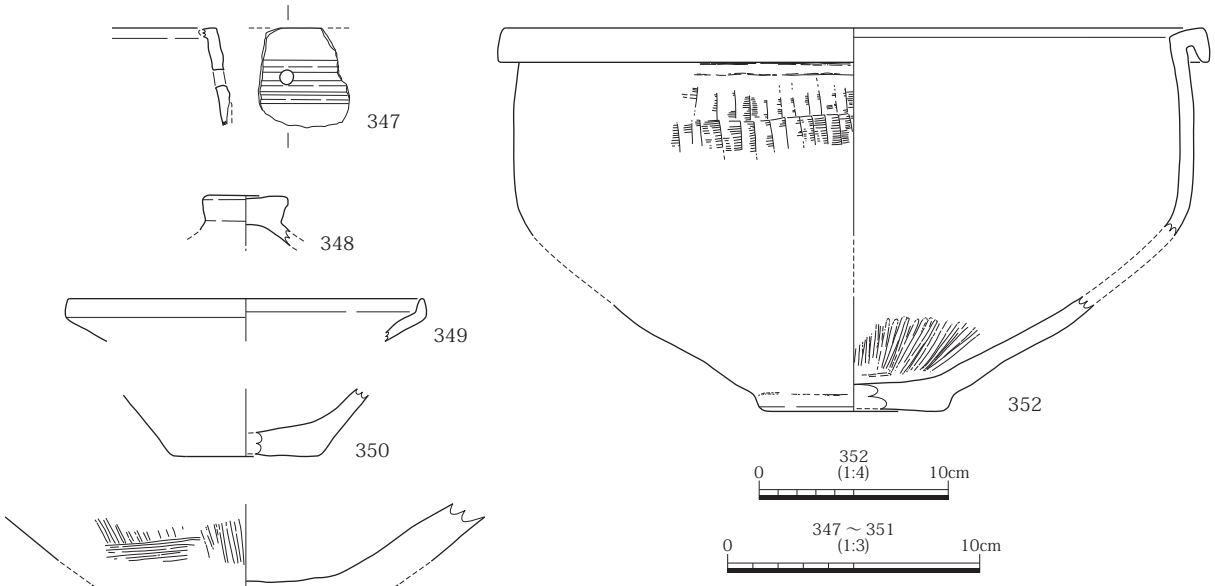
図 89　4－2区第2面検出遺構平面・断面図



竪穴建物４
1．10YR5/6 黄褐 シルト（３層と土質が似る）
2．2.5Y3/3 暗オリーブ褐 礫混じりシルト
（中心部に焼土（2.5Y2/1 黒 シルト）がつまる・1.0～2.0㎝大の礫多く含む・炭混じる）
3．10YR4/4 褐 礫混じりシルト（1.0～2.0㎝大の礫多く含む・炭混じる）
4．2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じりシルト（0.5～3.0㎝大の礫含む、埋土３と土質が似る）
5．10YR5/6 黄褐 礫混じりシルト（1.0～2.0㎝大の礫多く含む・炭混じる）
6．2.5Y5/6 黄褐 シルト（地山および埋土５と土質が似る）
7．10YR5/6 黄褐 礫混じりシルト（1.0～3.0㎝大の礫含む）〔111ピット〕
8．2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じりシルト（炭多量に混じる・土器の砕片あり・1.0㎝大の礫含む）〔110土坑〕
9．2.5Y5/6 暗褐 シルト（1.0～3.0㎝大の礫少量含む・土器細片あり・炭含む（上面で面的に広がる）・機能面か）

ピット
1．2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じりシルト
2．10YR4/4 褐 シルト（1.0㎝大の礫含む）
3．2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト
（炭混じる・1.0～3.0㎝大の礫含む）
4．2.5Y5/6 黄褐 シルト
（炭混じる・1.0～3.0㎝大の礫少量含む）

遺構
0 (1:50) 2m



347・348. 竪穴建物４、349 ～ 351. 竪穴建物４周辺
352. 竪穴建物４および 472・474 土坑周辺

図 90　竪穴建物４平面・断面図および出土遺物

竪穴13・15 [A-A′、B-B′]
1. 10YR4/6 褐 シルト(0.3㎝大の円礫含む)
2. 2.5Y5/6 黄褐 シルト〔4層〕
(締りあり・クサレ礫大多く含む・0.5～1.0㎝大の礫含む・土器・炭含む)
3. 2.5Y6/6 明黄褐 礫混じりシルト〔4層〕
4. 10YR5/6 黄褐 礫混じりシルト
5. 4層系
6. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト〔5層〕
7. 2.5Y4/6～5/6 オリーブ褐～黄褐 シルト(15よりやや暗い)〔5層〕
8. 10YR4/4 褐 シルト
(炭・赤色焼土多く含む・0.5㎝大の円礫含むがやや少ない・遺物多数出土)〔竪穴13埋土〕
9. 10YR3/4 暗褐 礫混じりシルト(遺物・炭含む)〔竪穴13埋土〕
10. 7.5YR4/4 褐 シルト(0.5㎝大の円礫・炭含む)〔500土坑〕
11. 10YR3/1 黒褐 シルト(炭・焼土の層)〔500土坑〕
12. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト〔518ピット〕
13. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト(0.5㎝大の円礫非常に多く含む)〔竪穴15埋土〕
14. 2.5YR5/4 黄褐 砂質シルト
(0.3～0.5㎝大の円礫非常に多く含む・炭含む・遺物は少ない)〔竪穴15埋土〕
15. 10YR5/6 黄褐 砂質シルト
(0.3～0.5㎝大の円礫非常に多く含む・炭含む・遺物は少ない)
16. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト(炭あり)〔543ピット〕
17. 2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じりシルト〔517ピット〕
18. 2.5Y4/4～4/6 オリーブ褐 シルト〔523ピット〕
19. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト(炭あり)〔538溝〕
20. 2.5Y5/6 黄褐 シルト(炭あり)〔538溝〕

竪穴建物14 [C-C′、D-D′]
1. 2.5Y5/6 黄褐 シルト(土器・炭含む)〔竪穴14埋土〕
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト(5.0㎝大の角礫含む)〔519土坑〕
3. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト〔499土坑〕
4. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト(0.5㎝大の円礫非常に多く含む)〔竪穴15埋土〕
5. 2.5Y4/6～5/6 オリーブ褐～黄褐 シルト(炭少量含む)〔528ピット〕
6. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト(角礫含む)〔530ピット〕

図 91　竪穴建物 13・14・15 平面・断面図

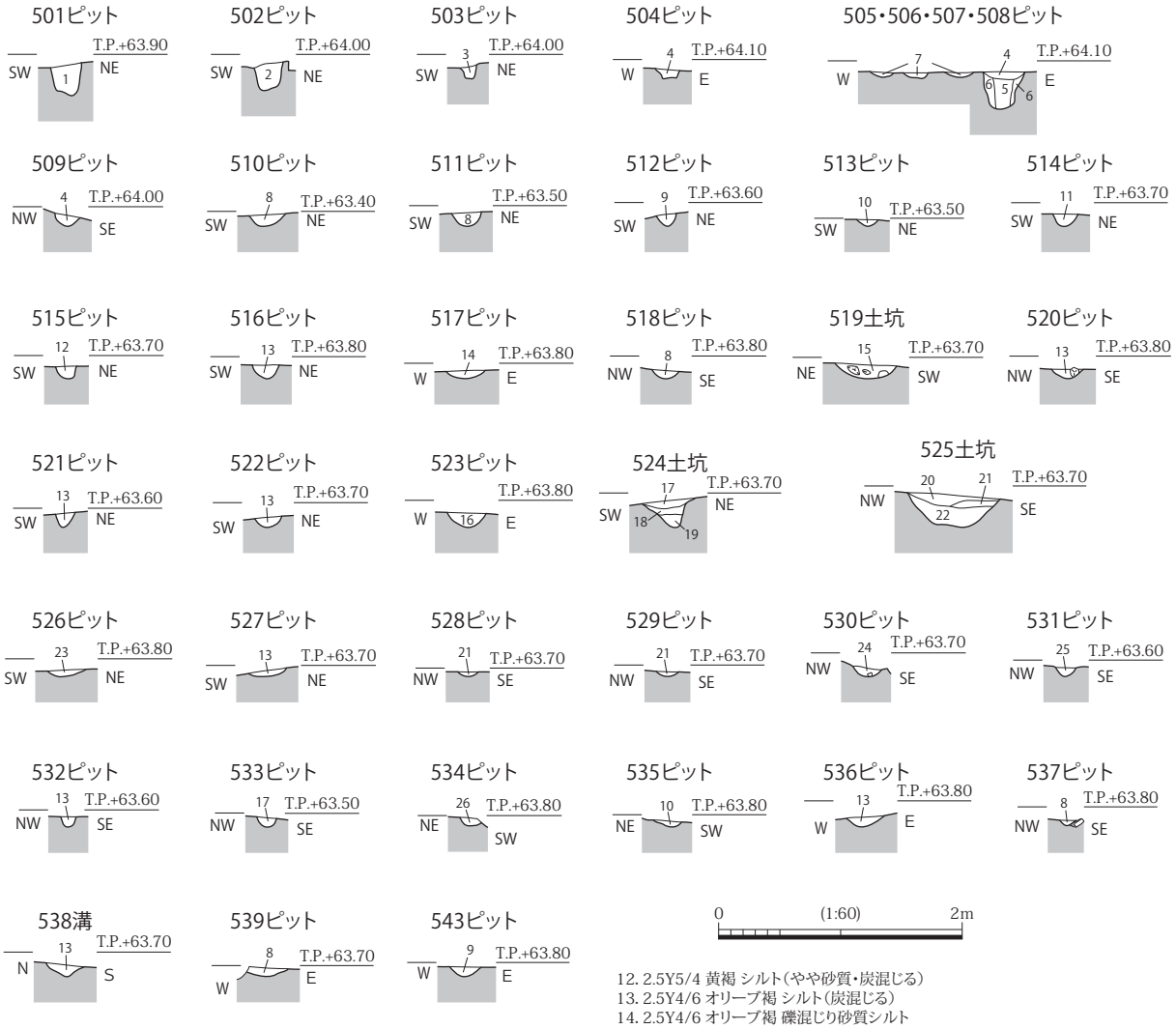
その斜面下方で検出されたピット群については、第２面の項で既に報告しているが、この面に帰属する可能性もある。さらに斜面下方では 99・485 落ち込みが確認され、埋土からは弥生時代の遺物がまとまって出土している。この面で検出された遺構内埋土や北東平坦面を覆う４・５層からは、弥生時代中期後半、Ⅳ様式後半の土器が出土している。

竪穴建物４　北東側平坦面から斜面を約３ｍ南にやや下がった位置で、3.6×2.9 ｍの規模を測る円形の竪穴建物を検出した。建物の東側の一部は調査区の側溝によって削平されてしまっている。この竪穴建物４には、中央土坑（110 土坑）とピット（108・109・111・112 ピット）が伴う。建物の埋土は全体的には礫を多く含む黄褐色シルトが堆積しているが、中央土坑の上面付近を中心に、炭を多く含んだ焼土の広がりが認められた。また埋土の下層９には、炭や土器の細片が少量含まれるが、上面で炭の面的な広がりをみせることや、中央土坑やピットの多くがこの上面で検出されることから、９の上面が建物の機能面で、それを除去した地山直上面が加工面であると考えられる。検出面より機能面までの深さが 0.21 m、加工面までの深さが 0.27 ｍを測る。周壁溝は認められなかった。中央土坑である 110 土坑は、長径 0.67 m、短径 0.52 m、深さは 0.85 ｍを測り、平面形が楕円形で、２段掘り状に掘り込まれた深手のものである。埋土には炭が多量に含まれ、弥生土器の細片も含まれる。108・109・111・112 ピットは主柱穴と考えられるが、ピットの並びが不規則であることや、建物の東側が削平を受けていることから、竪穴建物の柱本数ははっきりしない。このピットのうち 108・109・111 ピットが機能面で検出され、112 ピットが加工面から検出された。

埋土中からは弥生土器が少量出土しており、摩滅したものがほとんどである。347 は無頸壺の口縁と考えられる破片で、外面に多条の凹線文を施し、円孔をあける。348 は蓋のつまみ部分の破片である。349 ～ 352 は竪穴建物４の周辺から出土した土器で、特に 351 は北西肩部付近からまとまって出土した壺底部で、外面はハケ調整である。352 は胎土が茶褐色で角閃石を含む生駒西麓産の大型鉢である。体部はほぼまっすぐ上方に立ち上り、口縁端部が折り曲げられ 1.8cm 下方に垂下する。内外面が著しく摩滅しているが、体部外面には簾状文が施され、施文原体の幅が 2.0cm 強である。底部内面にはミガキがみられる。濱田編年Ⅳ様式古段階[1)]、寺澤・森井編年Ⅳ－３様式[2)]に位置づけられる。口縁～体部の破片については建物周辺から、底部の破片については近接する 474 土坑の上面付近からそれぞれ出土しているが、同一個体と考えられる破片が埋土中から複数点出土するため、竪穴建物４に伴っていた可能性が高く、遺構の帰属時期や他地域との併行関係を考える上で重要である。

竪穴建物 13・14・15　調査区の北東側にのみ広がる４・５層を除去したところ、３棟の竪穴建物（13・14・15）が重複する形で検出された。このうち竪穴建物 13 については、竪穴建物 15 の上面で検出されていることや、竪穴建物 14 の周壁溝が竪穴建物 15 の周壁溝を切っていることから、竪穴建物 15 が３棟の中で最も古い。竪穴建物 13 と 14 については、明確な切り合い関係が認められなかったため、前後関係がはっきりしないが、検出段階で最も先に認識され、床面のレベルが高い竪穴建物 13 が、３棟の中で最も新しい可能性が高く、竪穴建物 13、14、15 の順で建て替えられたと推測される。

竪穴建物 13 については、北側の斜面裾部で段状の掘り込みが認められ、円形で径 5.6 m以上の規模に復元できる。段の裾部に並ぶピット（501 ～ 509 ピット）や 518 ピットは、この竪穴建物 13 に伴うものと考えられるが、周壁溝はない。埋土は褐色シルト（８）で炭を多く含み、弥生土器の出土量が比較的多い。この埋土除去面で検出した 500 土坑は、径 1.1 m、深さ 0.07 ｍを測る不正円形で、中央土坑と考えられ、土坑の底面には炭・焼土の堆積が認められる。

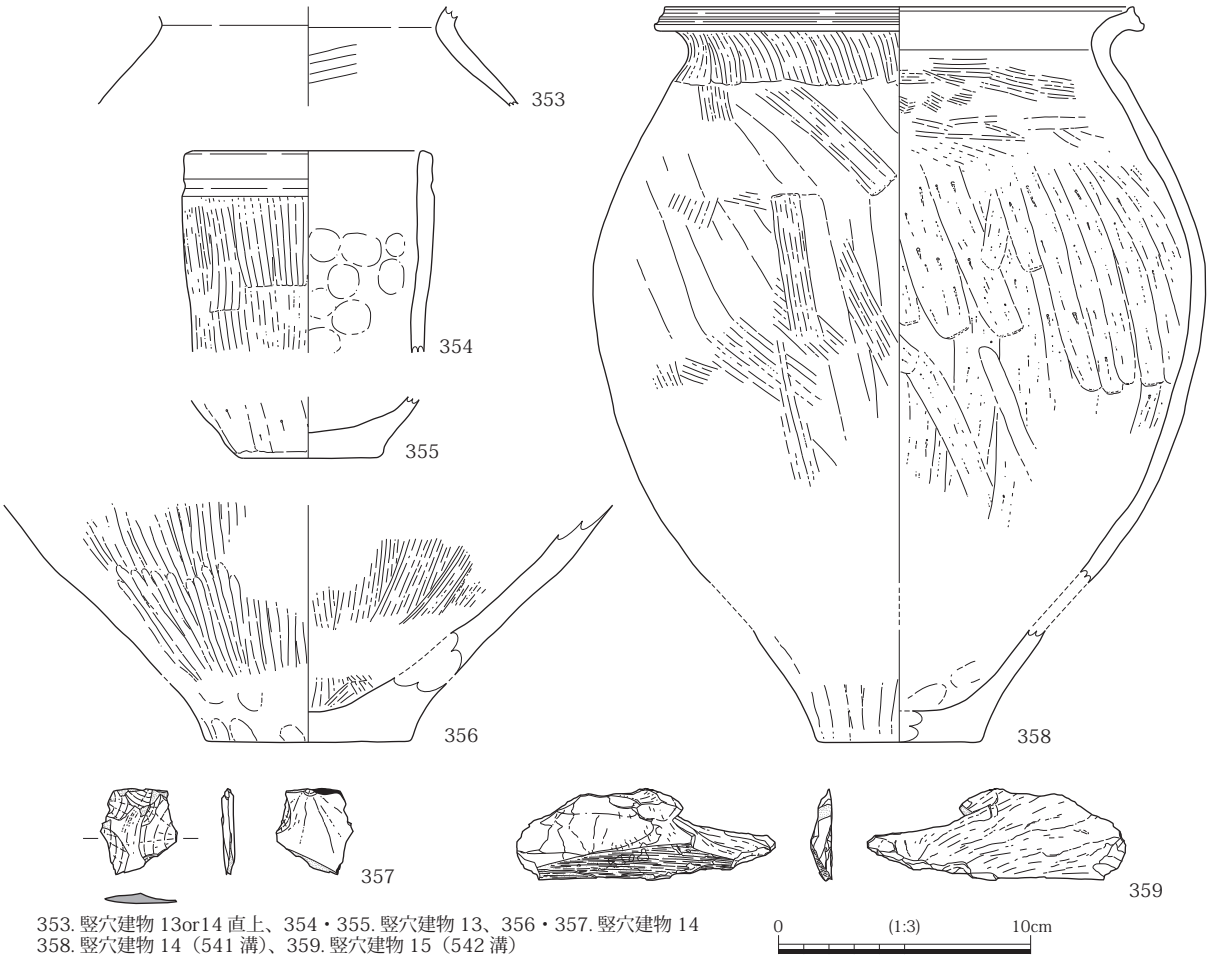


1. 2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じり砂質シルト(1.0㎝大の円礫含む・炭あり)
2. 2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じり砂質シルト(1.0㎝大の円礫含む)
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト
4. 2.5Y5/4 黄褐 シルト
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト(炭混じる・柱痕跡・遺物あり)
6. 2.5Y5/6 黄褐 シルト(1.0㎝大の礫含む)
7. 2.5Y5/3 黄褐 シルト(炭混じる)
8. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト(炭混じる)
10. 2.5Y5/6 黄褐 シルト
11. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト(やや砂質・炭混じる)
12. 2.5Y5/4 黄褐 シルト(やや砂質・炭混じる)
13. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト(炭混じる)
14. 2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じり砂質シルト
15. 2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じりシルト(5.0㎝大の角礫(岩盤由来)含む・炭多い)
16. 2.5Y4/4～4/6 オリーブ褐 シルト(炭混じる)
17. 10YR4/6 褐 シルト(炭あり)
18. 2.5Y5/6 黄褐 シルト(炭あり)
19. 2.5Y5/6 黄褐 シルト(炭多い)
20. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト(炭多い)
21. 2.5Y4/6～5/6 オリーブ褐～黄褐 シルト(炭あり)
22. 2.5Y5/4～5/6 黄褐 シルト(炭あり)
23. 2.5Y4/6～5/6 オリーブ褐～黄褐 シルト
24. 2.5Y4/6 オリーブ褐 礫混じりシルト(角礫含む)
25. 10YR4/6～5/6 褐～黄褐 シルト(炭あり)
26. 2.5Y4/4～5/4 オリーブ褐～黄褐 砂質シルト

図 92　竪穴建物 13・14・15 内ピット断面図

東寄りの竪穴建物 14 は、3.6 × 2.4 mの規模を測る隅丸方形で、周壁溝(541 溝)と中央土坑(519 土坑)を伴う。周壁溝（541 溝）が竪穴建物 15 の周壁溝（542 溝）を切っているため、竪穴建物 15 の廃絶後に建てられたことがわかる。周壁溝内および周辺部からは弥生土器がまとまって出土している。中央土坑である 519 土坑は、平面円形で、径 0.5 m、深さ 0.1 mを測る。この土坑の南側に隣接して被熱し赤変した焼土面が広がっている。520・528 ～ 532・537 ピットはこの竪穴建物 14 に伴う主柱穴であると考えられる。なお、竪穴建物 14 の南東では 541 溝を切る形で 499 土坑が検出されている。

竪穴建物 15 は 7.0 × 2.8 mの規模を測る円形で、成合遺跡の竪穴建物の中では大型の部類に入り、周壁溝（542 溝）と中央土坑（525 土坑）を伴う。埋土は円礫を多く含む黄褐色シルト（14・15）で、埋土中に炭は含まれるが遺物量は少なく、上層の竪穴 13 の埋土とは容易に区別することができる。525 土坑は長径 0.8 m、短径 0.62 mを測り、深さは 0.22 mである。埋土はオリーブ褐～黄褐色シル



353. 竪穴建物 13or14 直上、354・355. 竪穴建物 13、356・357. 竪穴建物 14
358. 竪穴建物 14（541 溝）、359. 竪穴建物 15（542 溝）

図 93　竪穴建物 13・14・15 出土遺物

トで炭を含む。この土坑に接続する形で東に 538 溝がのびる。この竪穴建物 15 の底面からは多数のピットが検出されており、いずれかがこの建物に伴う主柱穴になると考えられる。

出土遺物については、竪穴建物 13・14 からは比較的まとまって遺物が出土したのに対し、竪穴建物 15 からの遺物の出土量はやや少ない。また摩滅したものも多く、図化できたものは少ない。353 は弥生土器の甕もしくは壺の頸部で、竪穴建物 13・14 の上面から出土しているが、どちらの遺構に伴うかは判断ができない。354・355 は竪穴建物 13 からの出土で、354 は頸部から口縁部にむかってほぼ直立し、口縁部に 1 条の凹線が施されており、長頸壺の可能性がある。356 ～ 358 は竪穴建物 14 からの出土である。356 は外面ミガキ、内面ハケの壺底部で、519 土坑と 542 土坑の間の床面直上からまとまって出土している。358 はほぼ全形を復元できる甕で、口縁部から体部を中心とした破片の多くは 541 溝内埋土からまとまって出土した。外面にタテハケ、内面にヘラケズリを施すなど、時期的に新しい要素がみられる。357 はサヌカイトの剥片である。359 は竪穴建物 15 の周壁溝（542 溝）から出土した粘板岩の剥片である。この中でも特に 358 甕については、内面にヘラケズリが施されるなど新しい要素が認められることから、Ⅳ様式末を中心とした時期に位置づけることができる。そのため、この 358 甕を伴う竪穴建物 14 がⅣ様式末頃に位置づけられ、この竪穴建物 14 に先行する竪穴建物 15 については、それよりも古いⅣ様式後半以前の可能性が高い。一方で、竪穴建物 13 については、竪穴建物 14 と明確な切り合い関係が認められなかったため正確な前後関係がはっきりしないが、最も上面で検出されていることや、竪穴建物 13 から出土した 354 壺は主にⅤ様式前半に盛行する長頸壺

に復元できる可能性が高いため、竪穴建物 13 の方が後出するとみられる。少なくとも竪穴建物 14 と相前後するⅣ様式末以降に位置づけられるだろう。

474 土坑　竪穴建物 4 のすぐ西で検出した縦長の土坑で、長径 3.0 m、短径 1.6 m、深さ 0.5 mを測る。斜面上方の北側が 2 段に深く掘り込まれ、底部はほぼ水平で南にむかって開口するような形状を呈する。上層のオリーブ褐～黄褐色シルト（1）を除去すると、0.2 ～ 0.1 mの深さで炭を含む褐色礫混じりシルト（2）がみられ、ここからは弥生土器片が多く出土した。特に、1 個体に復元が可能な 360 壺は、土坑のほぼ中央付近から、細かい破片がバラバラの状態で出土しており、破砕した土器を人為的に埋めたと考えられる。その下層の埋土は黄褐～褐色シルト（3・4）で、底部付近は炭がかなり多く含むといった特徴があり、この層中からも少量の土器が出土している。肩部の埋土（5）と底部の埋土（6）は遺物が含まれないことから、これらの上面が機能面であったと考えられる。埋土の途中に人為的な土器の破砕痕跡がみられることや、土坑の底面がほぼ水平であること、またその規模等から、この土坑は墓の可能性が想定される。その場合、明確な木棺の痕跡がみられないことから、土坑墓であったことがわかる。埋土の途中からまとまって破砕された土器が出土する点については、弥生時代後期初頭から古

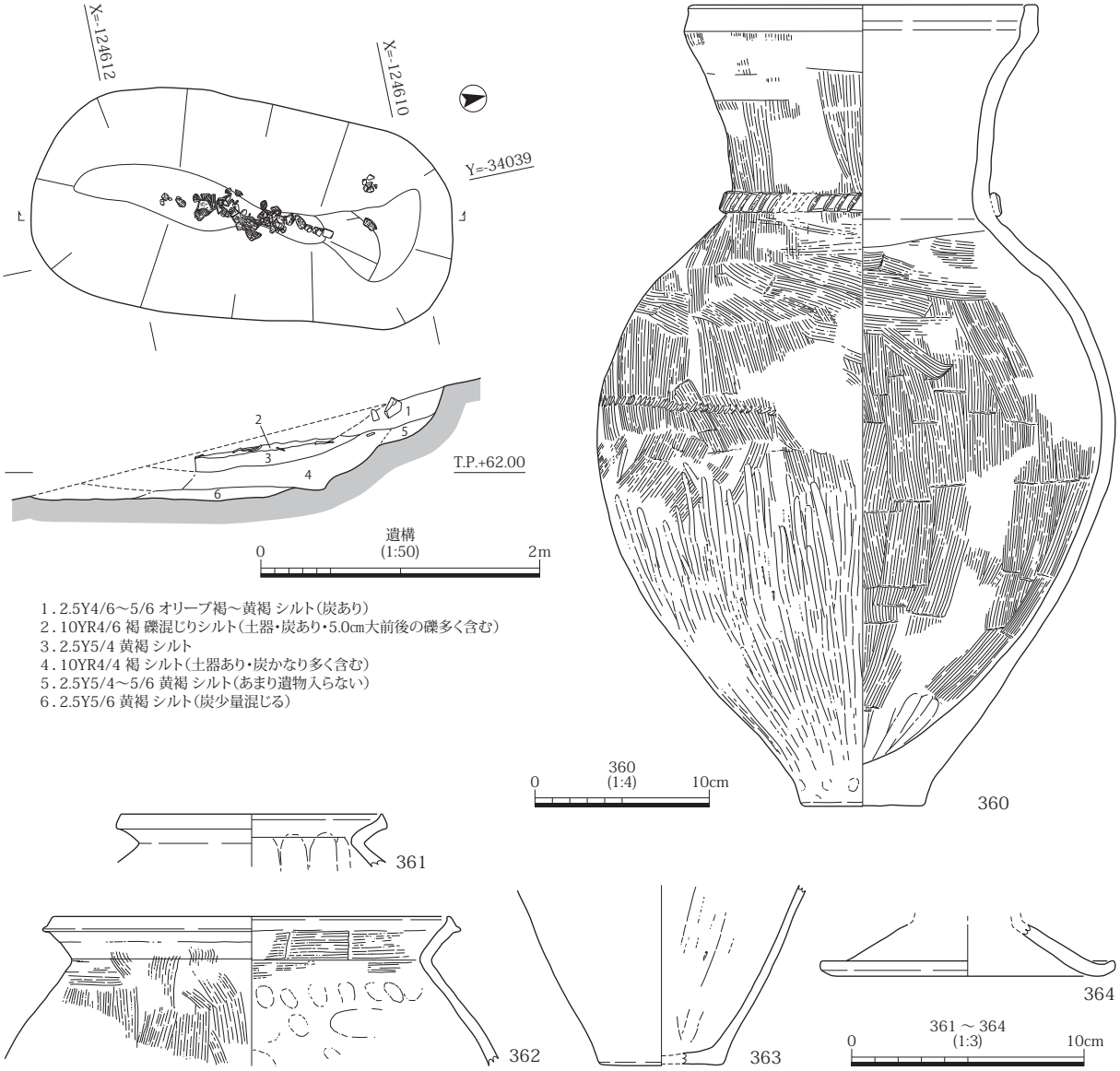


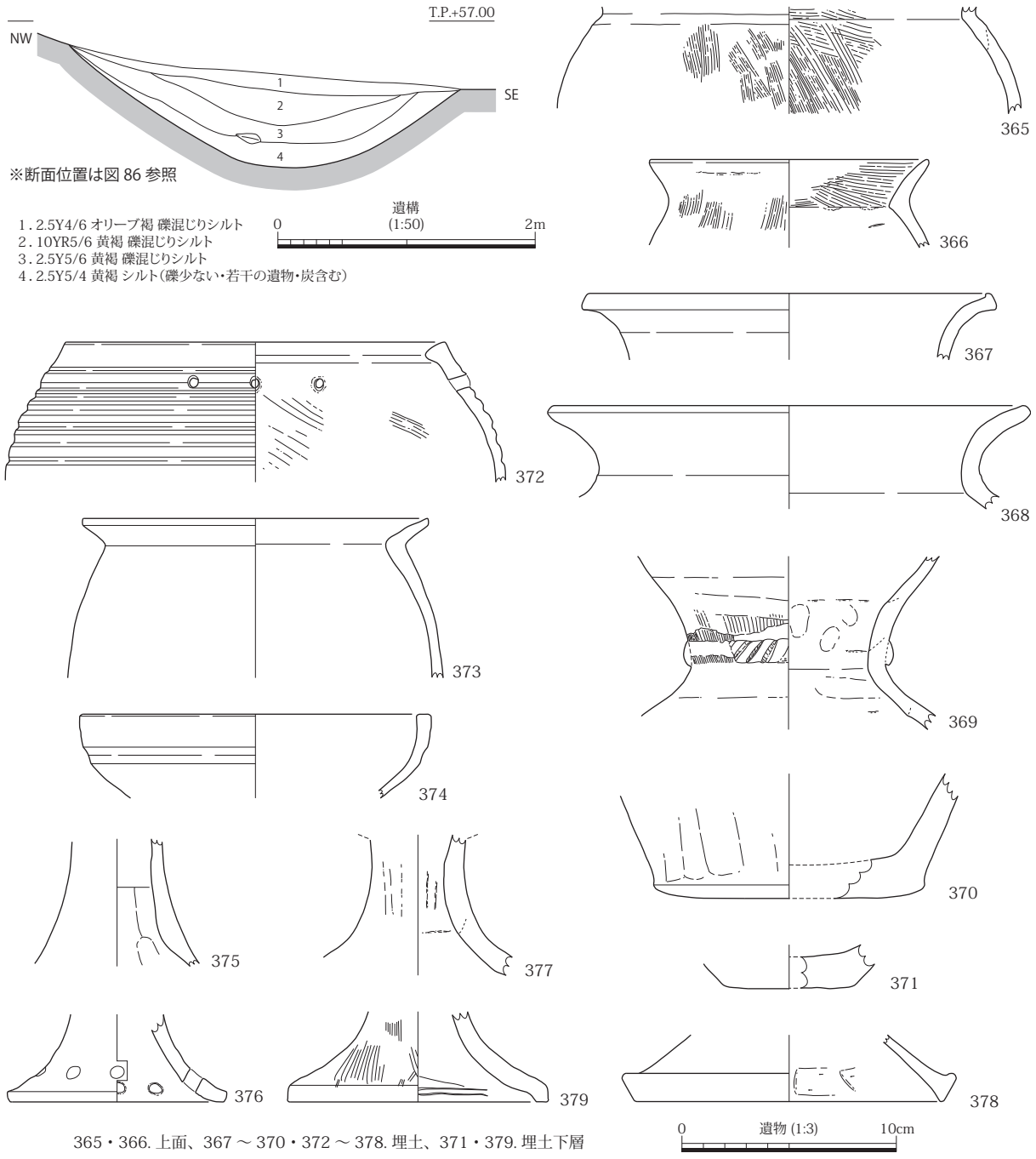
図 94　474 土坑平面・断面図および出土遺物

墳時代初頭にかけて、山陰の因幡から北陸の越前までの日本海側に顕著な葬送儀礼のあり方として認識されているが[3]、近隣では古曽部・芝谷遺跡の木棺墓Ｋ１とＫ４に事例が存在する[4]。この古曽部・芝谷遺跡の２基の事例は木棺墓の事例であり、小口付近から複数の器種がまとまって出土している点で、この474 土坑の事例とは異なるが、小地域内の弥生時代の墓制の特徴として捉えることができる可能性がある。

埋土内から出土した弥生土器のうち、上層から出土した 360 は、埋土２～３にかけてまとまって出土した有段口縁の大型壺である。頸部に刻目文を施した貼付突帯を付けるが、口縁部外面はヨコナデ調整で凹線を施さない。体部は外面底部にタテ方向のミガキで、上半部はタテハケおよびナナメハケ、内面はタテハケを施す。胴部中央付近には爪状の刻目文が施されるが、これについては全周しない。361 は上層の埋土１から出土した甕の口縁部で、口縁端部がやや上方に引き伸ばされる。362・363 はそれぞれ甕の口縁と底部で、ともに器壁が薄く同一個体の可能性もある。360 と同様に埋土２～３にかけてまとまって出土した。362 は体部外面がタテハケで内面がユビオサエ、口縁端部が上下に引き伸ばされ、内面にヨコハケを施す。363 は小型の甕で器壁が非常に薄い。364 は下層埋土４から出土した高杯の脚端部である。胎土が茶褐色の生駒西麓産の搬入土器で、裾広がりの形状から柱状の脚部に復元できると推測される。360 壺の口縁部の凹線文が省略されていることや、363 甕の内面がヘラケズリであることから、これらの土器は時期的にやや新しいⅣ様式後半から末頃に位置づけることができる。なお、埋土１層上面からは竪穴建物４から出土した生駒西麓産の大型鉢（352）の底部が出土しており、474 土坑は竪穴建物４よりも先行すると考えられる。

99・485 落ち込み　調査区の南端部で北東－南西方向にむかって下がる谷状の落ち込みを確認した。この谷状の落ち込みは幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.7 m程度の規模を測る。埋土は斜面からの流れ込みと考えられる黄褐～オリーブ褐色のシルトが堆積し、炭や礫をやや多く含むといった特徴がある。遺構の性格は、自然の落ち込みと考えられるが、埋土中からは一定量の弥生土器が出土している。

出土した土器は摩滅したものが多く、斜面上方に存在する竪穴建物などから流れ込みによるものと考えられ、北東側からの出土量がやや多い。365・366 は落ち込み上面から出土したもので、365 が壺の胴部、366 が甕の口縁部である。366 は頸部内面が明瞭に屈曲するくの字状の口縁形態で、やや上方気味に開き端部は丸くおさまる。367 ～ 379 は落ち込み埋土から出土の弥生土器である。367・368 は壺の口縁である。369 は有段口縁の壺頸部で、頸部に貼付突帯をもち刻目文を施す。370・371 は壺の底部である。372 は外面に多条の凹線が施される無頸壺で、口縁端部が内側にやや張り出す。口縁部付近に円孔が２ヶ所以上確認できる。373 は甕の口縁で端部は丸くおさめられる。374 は高杯もしくは鉢の口縁部と考えられ、ともに外面に凹線が１条施される。375 ～ 379 は高杯の脚部で、376 は裾部に円孔が多数みられ、377 は内面に絞り痕が確認できる。これらの遺物については、周辺の遺構と同様にⅣ様式後半を中心とした時期に位置づけられる。（笹栗）



365・366. 上面、367 ～ 370・372 ～ 378. 埋土、371・379. 埋土下層

図 95　99・485 落ち込み断面図および出土遺物

【註】

1）濱田延充 1993「生駒西麓第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」『弥生文化博物館研究報告』第２集 大阪府立弥生文化博物館

2）寺澤薫・森井貞雄 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅰ』木耳社

3）松井敬代 1991「破砕土器の埋納について」『但馬考古学研究』第６集、肥後弘幸 1994「墓壙内破砕土器供献（上）・（下）」『みずほ』12・13 号大和弥生文化の会、村田裕介 2013「丹後地域における葬送儀礼への他地域からの影響について」『みずほ別冊弥生研究の群像』大和弥生文化の会

4）宮崎康雄編 1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書 第 20 冊 高槻市教育委員会

第８節　５区の調査成果〔図 96 ～ 151、写真図版 33 ～ 39・61 ～ 78〕

須恵器窯および付属遺構を調査するために設定された調査区である。遺跡内の南東端の谷に設定した 11 － 1 トレンチの調査において、トレンチの南西端から五輪塔の火輪（図７）や人頭大の石材が多数検出された。その石材の性格を追究するために、谷幅いっぱいにトレンチ幅を拡張したところ、トレンチ西側の斜面裾から炭や焼土を含む黒色土とともに、窯体片や熔着した須恵器が多量に出土したため、斜面の上方に須恵器窯が存在する可能性が高まった。その後、斜面部分を横断する形で 11 － 4 トレンチを設け、須恵器窯の位置や基数を確認したところ、窯体の焚口部分と推測される被熱面や焼土の広がりが確認されたことから、窯の基数は１基で、11 － 4 トレンチの上方に窯体が存在することがほぼ確定した。調査の前には独立行政法人奈良文化財研究所の金田明大氏の協力のもと、地中レーダー探査と磁気探査をおこない、窯体の位置や形状を調査したところ、大方の予想通り、斜面上方のくぼみ部分で窯体の存在を示す強い反応が認められ、周辺には掘り込みや付属遺構が存在する可能性が指摘された。

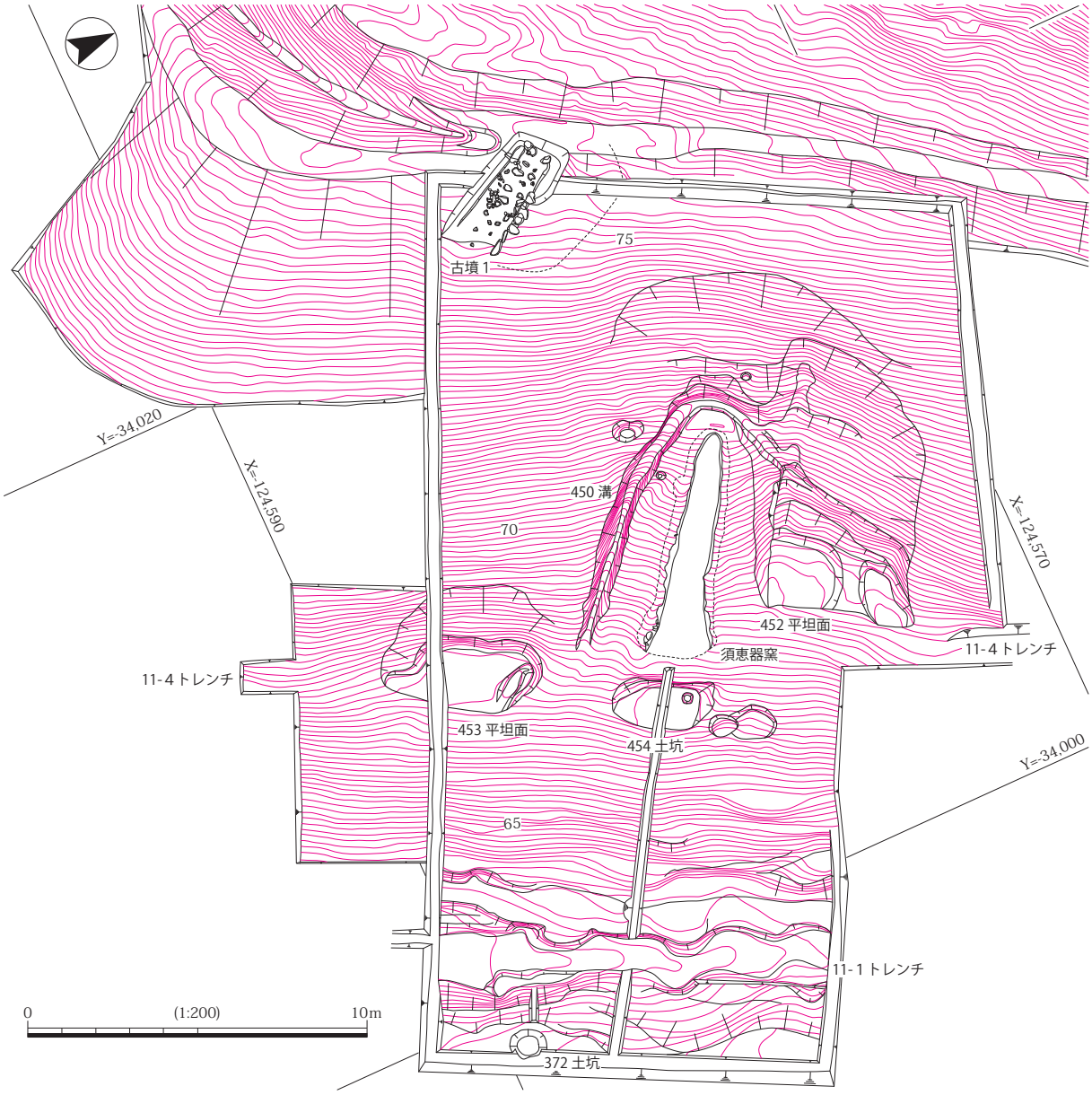


図 96　５区検出遺構全体平面図

これらの結果をもとに、灰原の広がりや付属遺構の存在もふまえ、斜面上方から谷を挟んだ反対の斜面の裾部分までを５区として設定し、調査を進めた。最終的な調査面積は約 500 ㎡である。

調査区全体に広がる明黄褐～黄褐色シルトの斜面堆積層（１・２層）を除去したところ、須恵器窯１基と、その下方斜面に広がる灰原が検出された。その後、窯体の調査と周辺部の精査をおこない、平坦面や溝、土坑などの窯の操業に関わる付属遺構が確認された。また、調査区の斜面上方の標高 75 m 付近では、２層除去面で７世紀中頃の古墳が１基検出された。なお、須恵器窯と古墳１については、高槻市教育委員会によってそれぞれ新規に “成合西王寺山窯跡”・“成合西王寺山１号墳” と命名されている。

須恵器窯（成合西王寺山窯跡）の調査成果

調査前の状況　窖窯構造の須恵器窯は地下式もしくは半地下式の構造が多いため、操業後に天井が崩落してくぼみが生じ、現地形から埋没痕跡が確認できる場合がある。そこで現地形と須恵器窯の関係を明

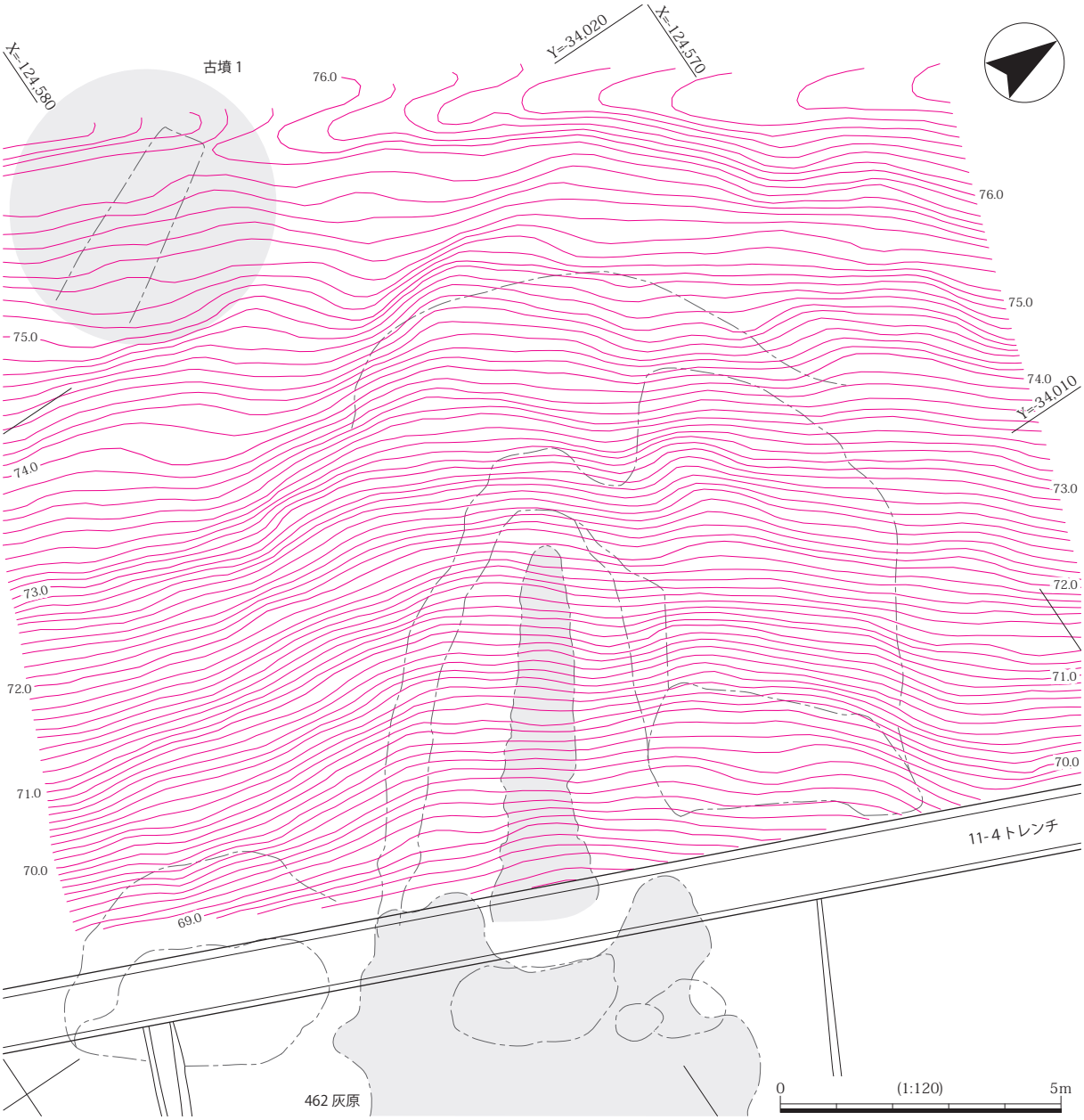


図 97　須恵器窯調査前地形測量図

らかにするために、事前に窯跡の位置が推定された 11 － 4 トレンチの上方の斜面の航空測量をおこなったところ、７～８ｍ幅でくぼみが認められた（図 97）。発掘調査で確認できた窯体の位置は、くぼみの中心には位置していないが、くぼみは窯体と付属遺構の構築に伴う斜面の人為的な地形改変のラインとほぼ一致しており、結果的には窯跡の痕跡が現地形に反映されていたことがわかった。

探査の成果　調査の前には、須恵器窯の正確な位置と基数、規模等を確定させるため、平成 24 年 1 月 24 日・25 日の二日間に渡って、独立行政法人奈良文化財研究所の金田明大氏の協力を得て、地中レーダー（ＧＰＲ）探査と磁気探査を実施した。窯跡の位置が推定された斜面に、およそ南北幅 24 ｍ、東西長 16 ｍの範囲で探査用のグリッドを設定し、探査方法は地中レーダー（ＧＰＲ）探査と磁気探査を併用した。

地中レーダー（ＧＰＲ）探査は、電磁波の反射、屈折、透化現象を利用して、地中の構造を把握す

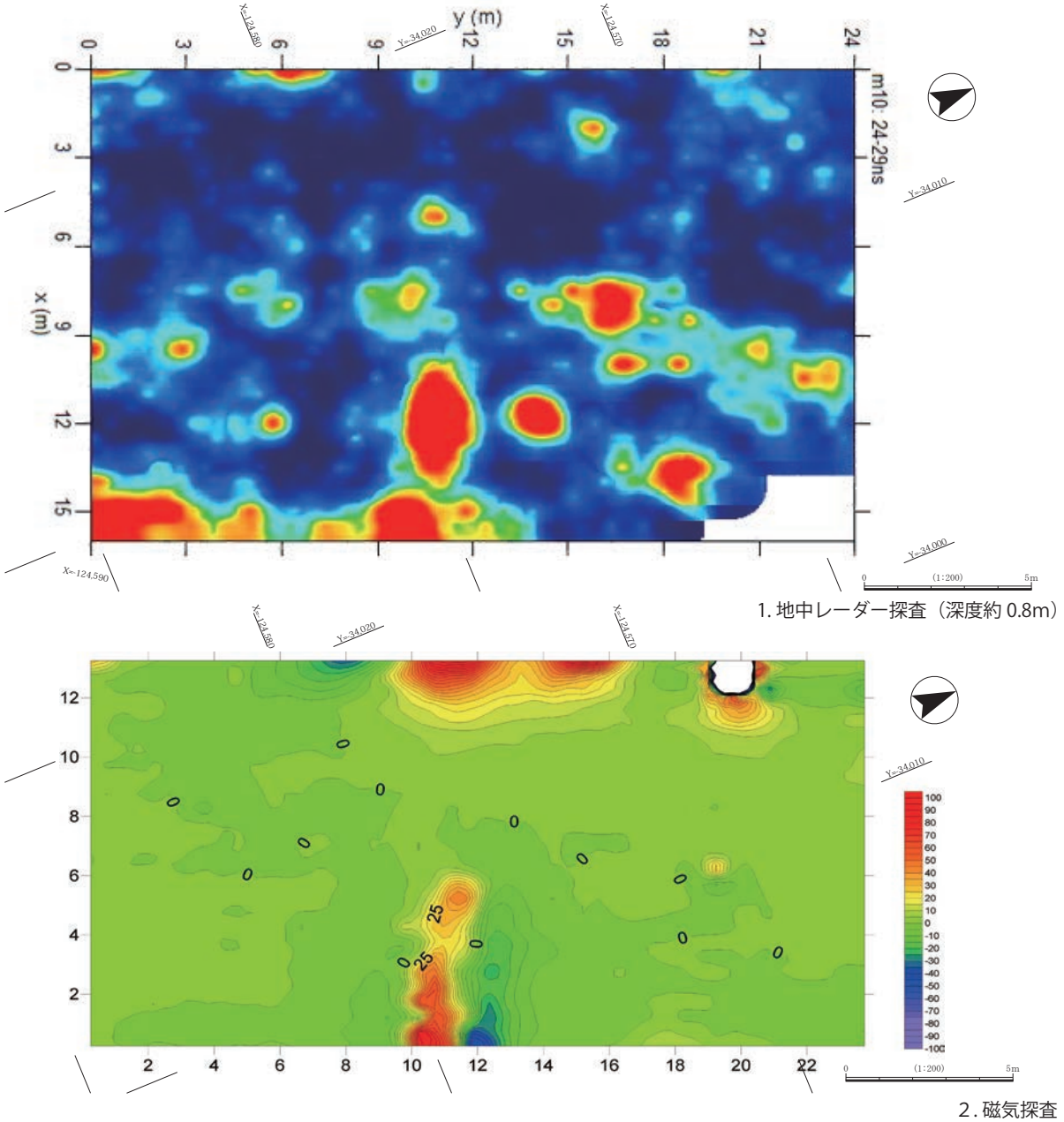


図 98　須恵器窯の探査結果

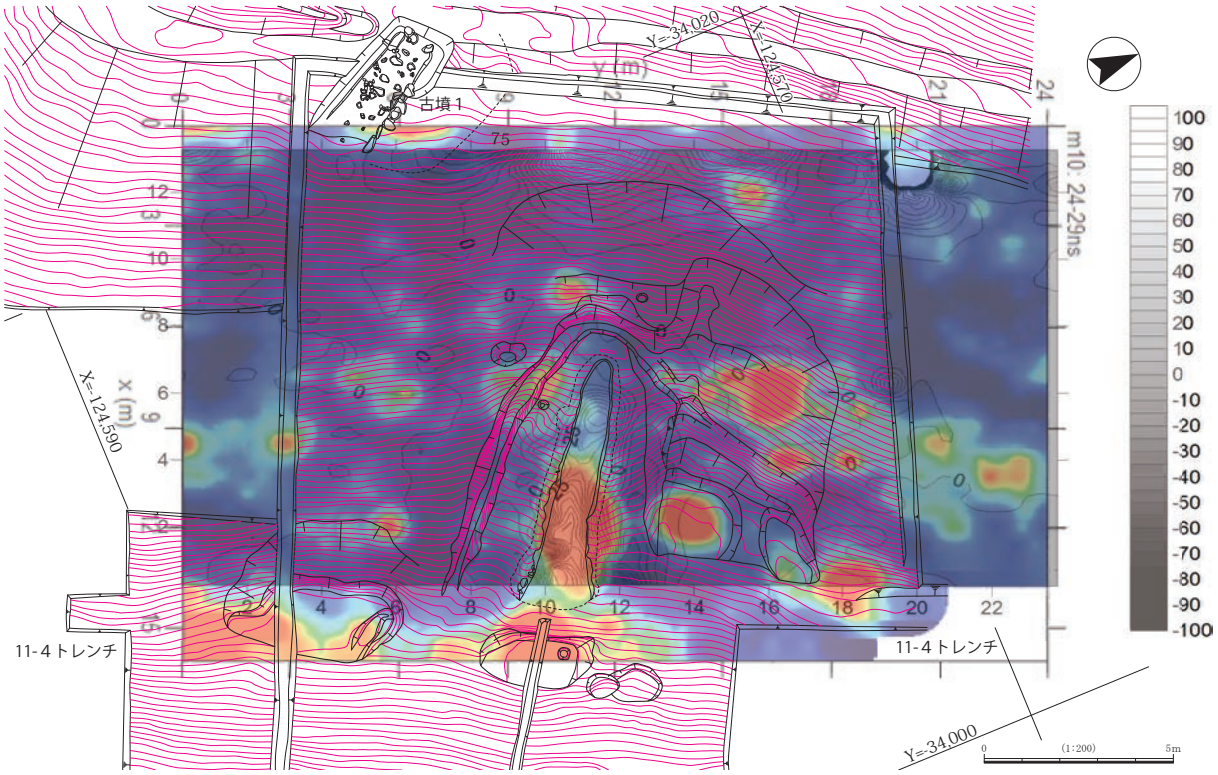


図 99　５区検出遺構と地中レーダー探査・磁気探査結果の合成

る手法である。電磁波の送受信をおこなうアンテナを斜面に並行に動かして計測をおこない、400MHz を中心とした周波数で地中の構造を確認した。図 98 － 1 は、地表面からの深さ約 0.8 m前後の部分の平面的な反射の結果を示した図であるが、この図のちょうど真ん中に赤色で表された楕円形の反応が、窯体の位置と規模を示しており、窯体の幅が２m程度になることがわかる。また、窯体の斜面下方にもうひとつ強い反応がみられるが、これについては 454 土坑の反応を示していると考えられる。特に地中レーダー探査では、灰原の反応を示すこともあるため、灰や焼土が深く詰まった 454 土坑の反応が明瞭に表れていることを示している。この他に、深さごとの探査データから、窯体周辺部が台形状に造成されている点や、窯体の南側に溝がのびる点が判明している。

次に磁気探査については、鉄類が磁化した磁気異常を測定する方法で、窯跡や炉跡など高温で熱せられた熱残留磁気をもつ遺構で有効な探査方法である。この熱残留磁気を測定する方法には二通りあるが、今回はフラックスゲート磁力計を使用した。図 98 － 2 が磁気探査の成果を示した図になるが、図のちょうど真ん中付近に正（赤）と負（青）の反応がみられ、これにより窯跡が１基存在することが確実視できるようになった。この他には、計測範囲の西端、斜面上方にも強い反応が３ヵ所確認でき、正負の強い反応を示す部分もみられたが、これについては金属反応と考えられ、地表面に落ちていた釘類などに反応したノイズである可能性が考えられる。また窯体の周辺部分には、濃い目の緑色で示されたやや強めの反応が広がっているのが確認されているが、これについては周辺部の造成痕跡を示している可能性もある。

さらに地中レーダー探査と磁気探査の成果を合成させ、最終的に検出された遺構図と重ね合わせたものが図 99 になる。ここからは検出された窯体の位置と、探査で発見された窯体の反応がほぼ一致する成果が得られた。さらに 452 平坦面に伴う掘り込みの痕跡や 454 土坑などについても、探査の反応と遺構の位置が概ね一致していることがわかる。

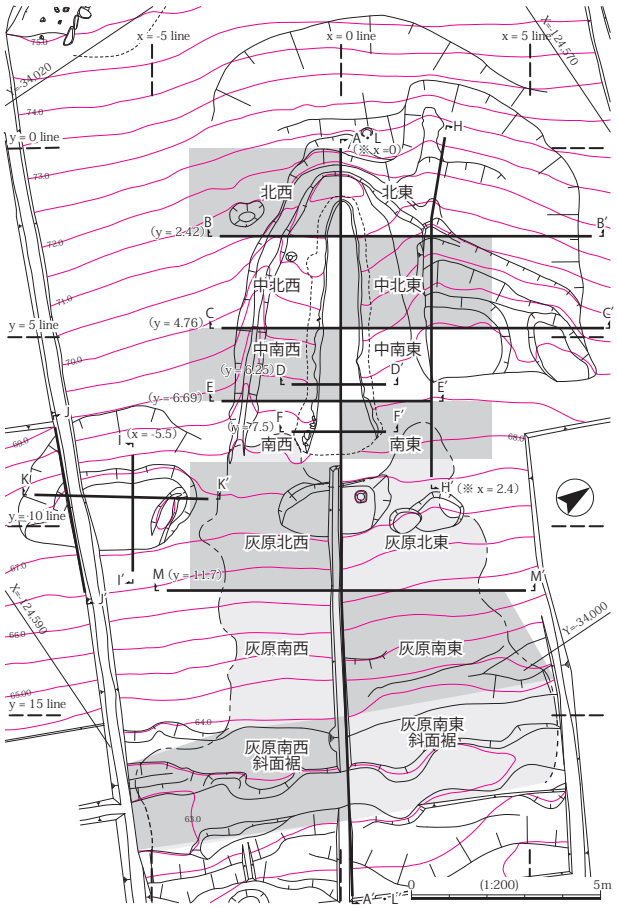


図 100　須恵器窯の調査グリット配置図

グリッド設定と遺物の取り上げ方法　窯体は国土座標のＸ＝－ 124,580、Ｙ＝－ 34,010 付近に位置し、窯体と関連する付属遺構は、本報告で標準的に用いる地区割りの中の L-6-8-20A-10i、L6-7-1A-1h・1i・2h・2i の範囲におさまる。窯体の主軸は傾斜に沿った北西－南東方向で、座標北から 56.4° 西に振れる。須恵器窯は斜面の傾斜に沿って構築されているため、平面直角座標に基づいて設定された当センターで標準的に使用する地区割に即した場合（第３章第２節参照）、遺物の取り上げに際して出土地点などの情報が不十分になる恐れがあった。そのためこの須恵器窯の調査にあたっては、窯体の主軸方向（Ａ－Ａ′）をｘ、直交方向をｙとし、窯体の斜面上方、450 溝の掘方付近にｙ＝０を置いて、斜面上方を北とするローカルグリッドを設定して調査を進めた。遺物の取り上げにあたっては、設定した主軸ラインと横断面のラインを軸に区割りを設定しておこなった（図 100）。また窯体内からは、まとまって遺物が出土していることから、先に設定した区割りとともに、ローカルグリッドの値を記して遺物の取り上げを細かくおこなっている箇所もある。

なお、須恵器窯と付属遺構に関する報告においては、このグリッドとその方角を用いて記すとともに、本報告の最後に一覧で掲載した遺物観察表についても、同様にこのローカルグリッドに基づいた表記を用いることとする。

検出された遺構　これらの事前調査の成果をふまえ、窯跡の存在が推測された位置を中心に斜面部分に調査区を設定し調査を進めた。まず、調査区全体に広がる斜面堆積層（１・２層）を除去したところ、斜面のほぼ中央付近から表土下 0.3 ｍの深さで、窯体（449 須恵器窯）の輪郭と、窯体の下方で灰原（462 灰原）と考えられる焼土や炭の広がりが確認された。灰原は東西約９ｍ × 南北約８ｍの範囲に広がっており、斜面裾の谷底にまでおよんでいる。さらに、窯体の周辺部は人為的に造成されていることが確認され、窯の維持・管理や操業時の作業場としての機能が想定される付属遺構が数多く検出されている（図 101・102）。この付属遺構には、溝１基（450 溝）、平坦面２基（452・453 平坦面）とそれらに伴う掘り込み痕跡、土坑３基（454 ～ 456 土坑）、ピット３基（459 ～ 461 ピット）がある。窯が築かれた斜面は 27 ～ 33° の急傾斜で、窯体は斜面の途中に構築されていたため、これらの付属遺構は、須恵器窯の操業に際して必要不可欠であったことが推測される。

窯体

窯体の規模と概要　須恵器窯（449 須恵器窯、以下 449 は省略）は地上式構造の窖窯で、全長は水平距離で 6.65 m、斜距離で 7.5 ｍを測る。窯尻は幅が狭くすぼまっており、斜面下方にむけて徐々に幅

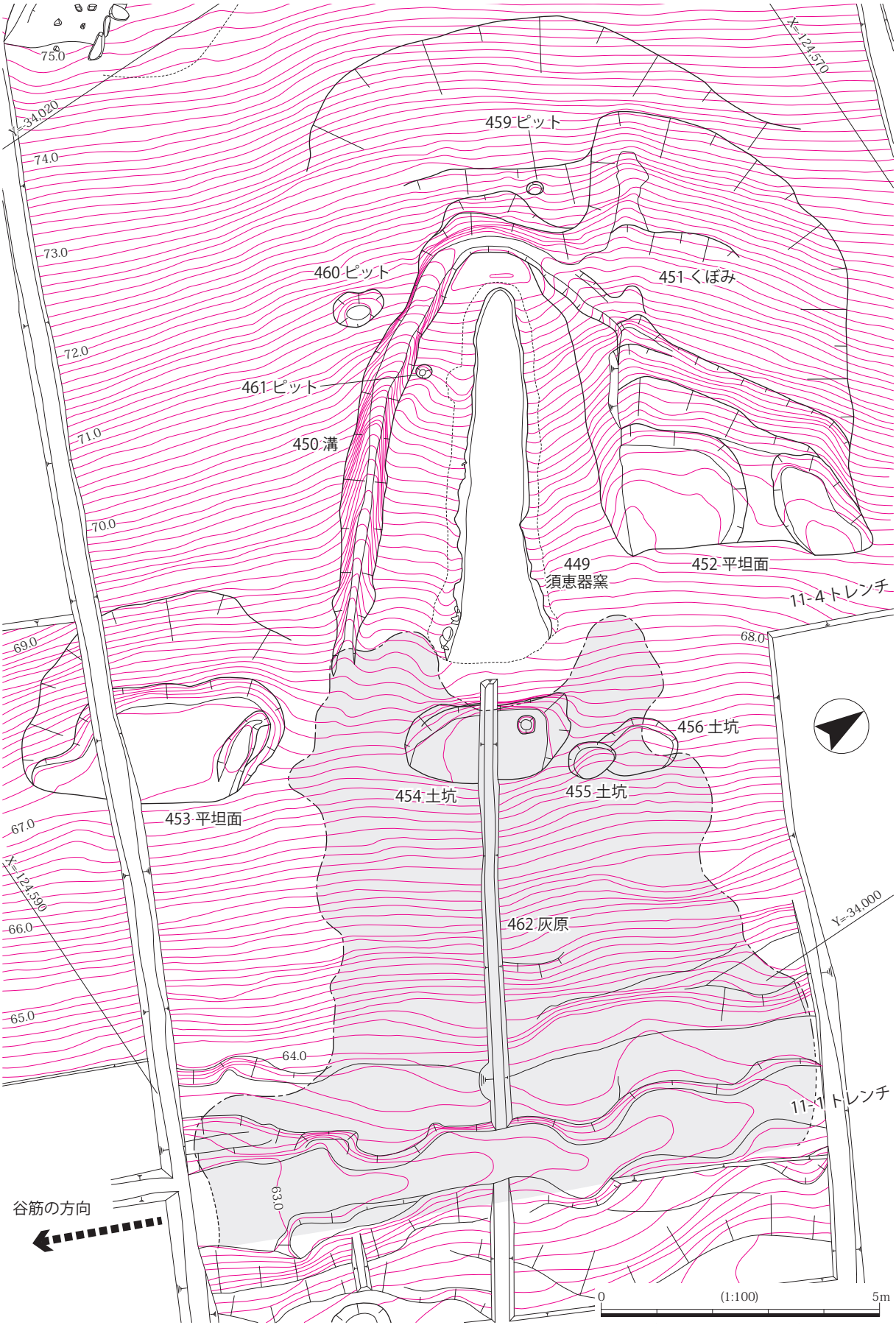


図 101　須恵器窯および周辺遺構平面図

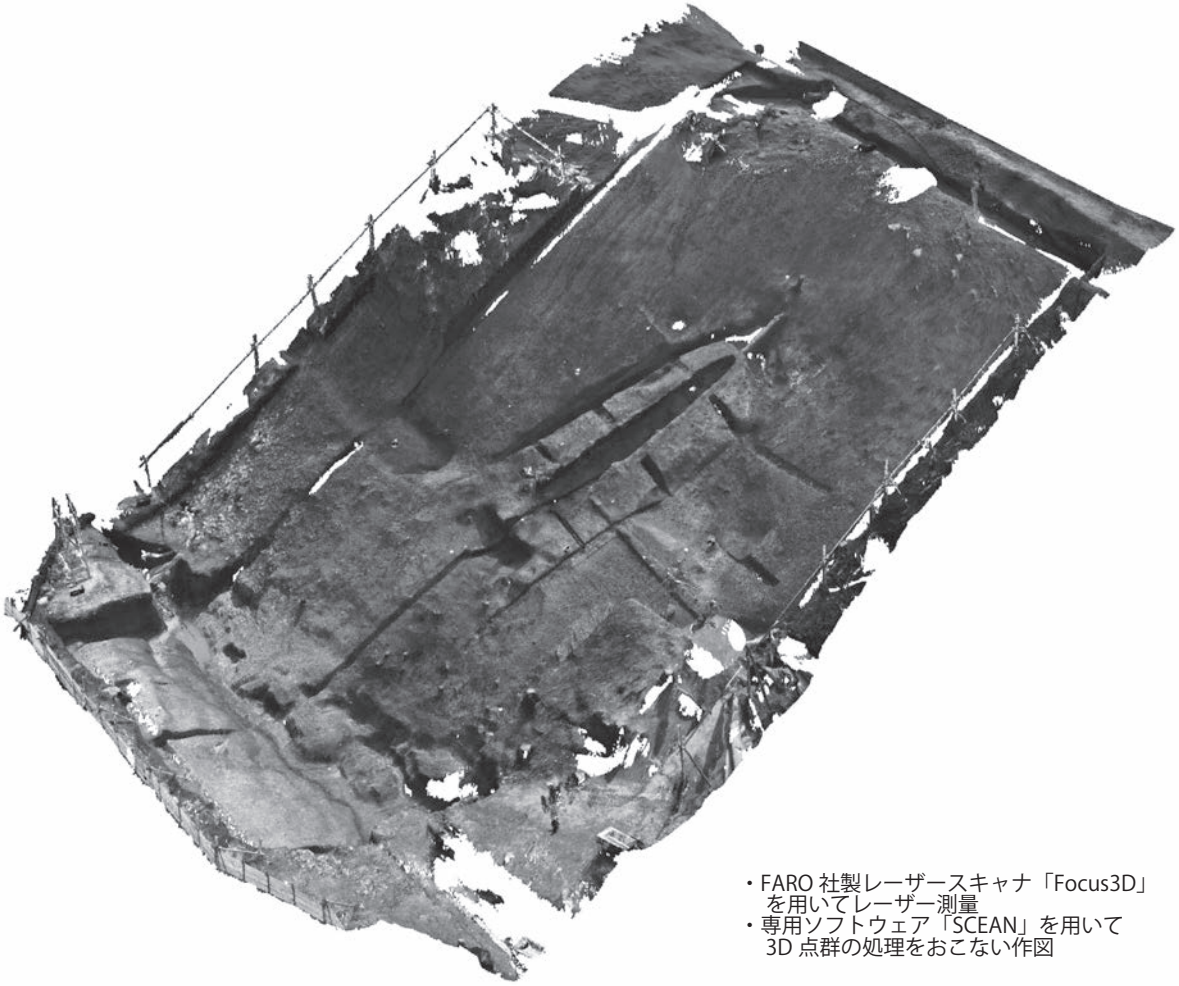


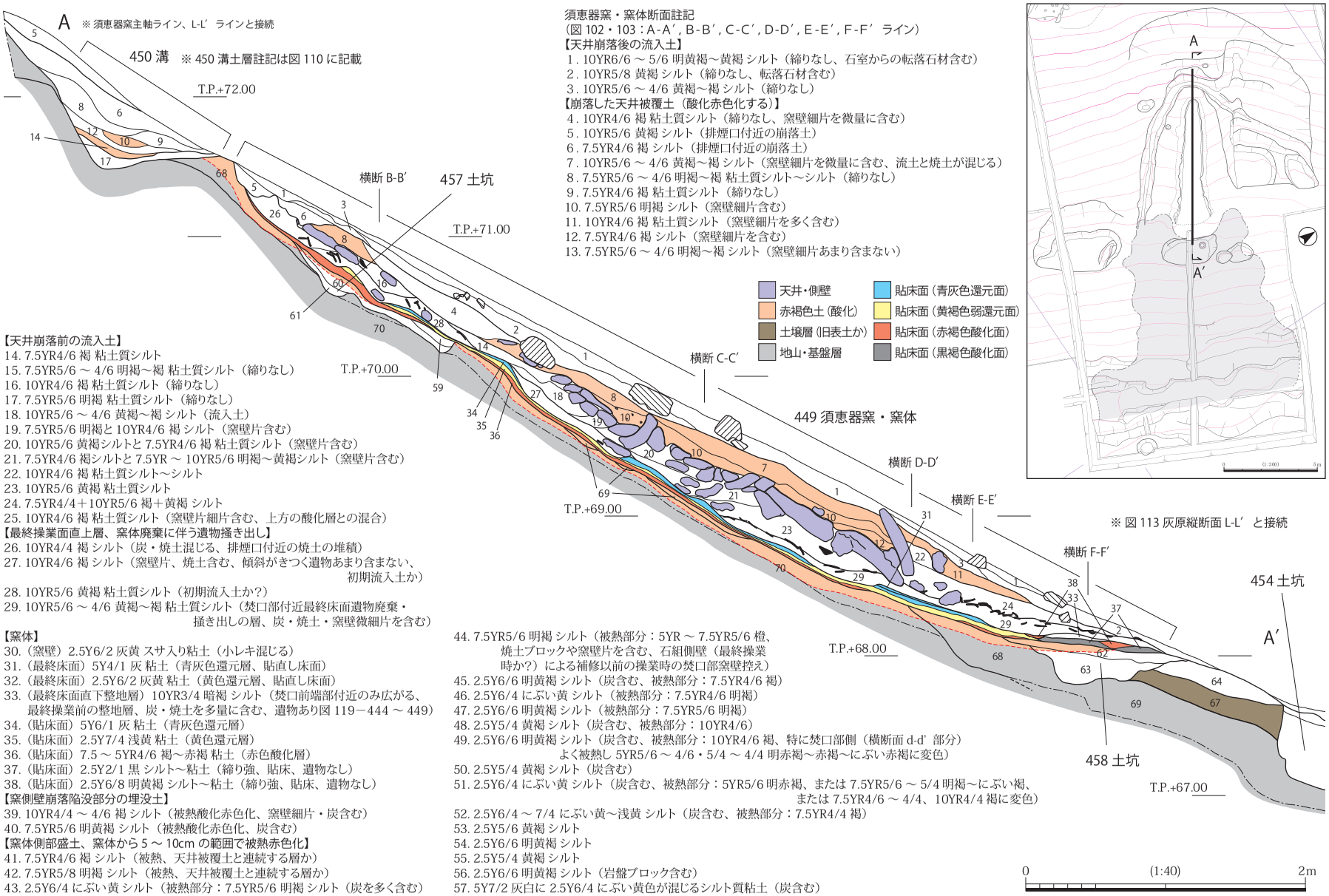
図 102　須恵器窯三次元立体図

を広げ、末端部分ではハの字状に幅が広がる。そのため、幅は窯尻付近で 0.8 m、中央付近で 1.05 m、焚口で 1.65 mを測り、焚口から排煙口までの高低差は 3.5 mである。側壁は焚口前端から 3 ～ 3.5 m付近で最も残りが良く、床面から高さ 0.65 mまで残存している。

床面は焚口前端から水平距離で 1.3 m付近まではほぼ水平な面が続き、そこから 1.1 mは奥にむかって約 15°の傾斜角で徐々に立ち上がっている。この傾斜の変換点より手前が焚口で奥側が燃焼部と考えられ、傾斜変換点より奥は床面が還元して青灰色に変色している。さらに奥側は 0 ～ 35°の急傾斜で床面が強く立ち上がっており、この傾斜変換点が焼成部境であると判断できる。窯尻は床面から上方にむかってやや強く立ち上がるが、明確な奥壁はもたない。

窯体の埋没状況（図 103・104） 窯体内の埋土上層には、遺構面を覆う斜面堆積層（2 層）と同質の明黄褐～黄褐色シルト（1 ～ 3）が 0.1 ～ 0.15 m程度の厚さで堆積していた。層中には斜面上方や 4 － 1 区で検出された古墳の石室石材と推測される 0.2 ～ 0.4 m大の石材が転落しており、この層は窯体の陥没部分に窯の廃絶後に堆積したものと推測される。

この層の下では、0.1 ～ 0.2 m程度の厚さで被熱によって酸化した褐～明褐色シルト（4 ～ 13）が確認され、その層を除去したところ、崩落した天井が検出された。天井は側壁の一部とともに崩落しており、ブロック状の塊となって検出された（図版 34 － 2 ・ 3）。部分的に断面がアーチ状に残る箇所を確認でき、崩落したままの状態をよく留めていた（図 104：D － D′、図版 34 － 3）。天井の粘土



須恵器窯・窯体断面註記
(図 102・103：A-A′, B-B′, C-C′, D-D′, E-E′, F-F′ ライン)

【天井崩落後の流入土】
1. 10YR6/6 ～ 5/6 明黄褐～黄褐 シルト（締りなし、石室からの転落石材含む）
2. 10YR5/8 黄褐 シルト（締りなし、転落石材含む）
3. 10YR5/6 ～ 4/6 黄褐～褐 シルト（締りなし）

【崩落した天井被覆土（酸化赤色化する）】
4. 10YR4/6 褐 粘土質シルト（締りなし、窯壁細片を微量に含む）
5. 10YR5/6 黄褐 シルト（排煙口付近の崩落土）
6. 7.5YR4/6 褐 シルト（排煙口付近の崩落土）
7. 10YR5/6 ～ 4/6 黄褐～褐 シルト（窯壁細片を微量に含む、流土と焼土が混じる）
8. 7.5YR5/6 ～ 4/6 明褐～褐 粘土質シルト～シルト（締りなし）
9. 7.5YR4/6 褐 粘土質シルト（締りなし）
10. 7.5YR5/6 明褐 シルト（窯壁細片含む）
11. 10YR4/6 褐 粘土質シルト（窯壁細片を多く含む）
12. 7.5YR4/6 褐 シルト（窯壁細片を含む）
13. 7.5YR5/6 ～ 4/6 明褐～褐 シルト（窯壁細片あまり含まない）

【天井崩落前の流入土】
14. 7.5YR4/6 褐 粘土質シルト
15. 7.5YR5/6 ～ 4/6 明褐～褐 粘土質シルト（締りなし）
16. 10YR4/6 褐 粘土質シルト（締りなし）
17. 7.5YR5/6 明褐 粘土質シルト（締りなし）
18. 10YR5/6 ～ 4/6 黄褐～褐 シルト（流入土）
19. 7.5YR5/6 明褐と 10YR4/6 褐 シルト（窯壁片含む）
20. 10YR5/6 黄褐シルトと 7.5YR4/6 褐 粘土質シルト（窯壁片含む）
21. 7.5YR4/6 褐シルトと 7.5YR ～ 10YR5/6 明褐～黄褐シルト（窯壁片含む）
22. 10YR4/6 褐 粘土質シルト～シルト
23. 10YR5/6 黄褐 粘土質シルト
24. 7.5YR4/4＋10YR5/6 褐＋黄褐 シルト
25. 10YR4/6 褐 粘土質シルト（窯壁片細片含む、上方の酸化層との混合）

【最終操業面直上層、窯体廃棄に伴う遺物掻き出し】
26. 10YR4/4 褐 シルト（炭・焼土混じる、排煙口付近の焼土の堆積）
27. 10YR4/6 褐 シルト（窯壁片、焼土含む、傾斜がきつく遺物あまり含まない、初期流入土か）
28. 10YR5/6 黄褐 粘土質シルト（初期流入土か?）
29. 10YR5/6 ～ 4/6 黄褐～褐 粘土質シルト（焚口部付近最終床面遺物廃棄・掻き出しの層、炭・焼土・窯壁微細片を含む）

【窯体】
30.（窯壁）2.5Y6/2 灰黄 スサ入り粘土（小レキ混じる）
31.（最終床面）5Y4/1 灰 粘土（青灰色還元層、貼直し床面）
32.（最終床面）2.5Y6/2 灰黄 粘土（黄色還元層、貼直し床面）
33.（最終床面直下整地層）10YR3/4 暗褐 シルト（焚口前端部付近のみ広がる、最終操業前の整地層、炭・焼土を多量に含む、遺物あり図 119－444 ～ 449）
34.（貼床面）5Y6/1 灰 粘土（青灰色還元層）
35.（貼床面）2.5Y7/4 浅黄 粘土（黄色還元層）
36.（貼床面）7.5 ～ 5YR4/6 褐～赤褐 粘土（赤色酸化層）
37.（貼床面）2.5Y2/1 黒 シルト～粘土（締り強、貼床、遺物なし）
38.（貼床面）2.5Y6/8 明黄褐 シルト～粘土（締り強、貼床、遺物なし）

【窯側壁崩落陥没部分の埋没土】
39. 10YR4/4 ～ 4/6 褐 シルト（被熱酸化赤色化、窯壁細片・炭含む）
40. 7.5YR5/6 明黄褐 シルト（被熱酸化赤色化、炭含む）

【窯体側部盛土、窯体から 5 ～ 10cm の範囲で被熱赤色化】
41. 7.5YR4/6 褐 シルト（被熱、天井被覆土と連続する層か）
42. 7.5YR5/8 明褐 シルト（被熱、天井被覆土と連続する層か）
43. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト（被熱部分：7.5YR5/6 明褐 シルト（炭を多く含む）
44. 7.5YR5/6 明褐 シルト（被熱部分：5YR ～ 7.5YR5/6 橙、焼土ブロックや窯壁片を含む、石組側壁（最終操業時か?）による補修以前の操業時の焚口部窯壁控え）
45. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト（炭含む、被熱部分：7.5YR4/6 褐）
46. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト（被熱部分：7.5YR4/6 明褐）
47. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト（被熱部分：7.5YR5/6 明褐）
48. 2.5Y5/4 黄褐 シルト（炭含む、被熱部分：10YR4/6）
49. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト（炭含む、被熱部分：10YR4/6 褐、特に焚口部側（横断面 d-d′ 部分）よく被熱し 5YR5/6 ～ 4/6・5/4 ～ 4/4 明赤褐～赤褐～にぶい赤褐に変色）
50. 2.5Y5/4 黄褐 シルト（炭含む）
51. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト（炭含む、被熱部分：5YR5/6 明赤褐、または 7.5YR5/6 ～ 5/4 明褐～にぶい褐、または 7.5YR4/6 ～ 4/4、10YR4/4 褐に変色）
52. 2.5Y6/4 ～ 7/4 にぶい黄～浅黄 シルト（炭含む、被熱部分：7.5YR4/4 褐）
53. 2.5Y5/6 黄褐 シルト
54. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト
55. 2.5Y5/4 黄褐 シルト
56. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト（岩盤ブロック含む）
57. 5Y7/2 灰白に 2.5Y6/4 にぶい黄色が混じるシルト質粘土（炭含む）

図 103　窯体縦断面図

※図 103 からの続き

【窯床面直下、457 土坑埋土】
58. 7.5YR5/6 明褐 シルト（被熱あり、埋土上層１）
59. 10YR4/6 褐 シルト（明確な被熱なし、炭含む、埋土上層２）
60. 7.5YR4/4・10YR4/6 褐 シルト（被熱あり、炭を多く含む、埋土中層）
61. 2.5Y6/4 ～ 5/4 にぶい黄～黄褐 砂質シルト（炭含む、埋土下層）
【窯床面直下、458 土坑埋土】
62. 7.5YR5/4＋3/3 にぶい褐＋暗褐 シルト
（やや被熱を受ける、炭含む、埋土上層）
63. 10YR5/6 黄褐 シルトに 2.5Y6/2 ～ 6/3 灰黄～にぶい黄 ブロックが混じる
（基盤粘土ブロックを含む、埋土下層）

【前庭部平坦面造成盛土】
64. 2.5Y5/6 黄褐 シルト（炭含む）
65. 2.5Y5/4 黄褐 シルト（盛土か？）
【旧表土】
66. 2.5Y5/4 黄褐 シルト（土壌層、上層 49 層に比べややくすむ）
67. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト（土壌層）
【地山および基盤層】
68.（地山）2.5Y6/6 ～ 6/4 明黄褐～にぶい黄 シルト
（0.5 大程度の礫および偽礫含む、締りあり、
斜面堆積、被熱部：7.5YR5/6 ～ 4/6 明褐～褐、
特に被熱の強い部分で 5YR5/6 ～ 4/6 明赤褐～赤褐）
69.（地山）2.5Y5/4 ～ 5/6 黄褐 シルト
（0.5 大程度の礫および偽礫含む、斜面堆積、被熱部：7.5YR4/4 褐 シルト）
70.（基盤層）5Y7/2 灰白 粘土、被熱部：5YR4/6 赤褐（部分的に礫混じる）

にはスサや砂粒を混ぜており、内面側には自然釉が付着する箇所もみられた。また、天井の上層に堆積していた被熱土（４～ 13）については、縦断面をみると天井と対応する位置のほぼ上面にのみ認められることから、天井の被覆土と判断することができる。崩落した天井から床面までの間には、窯体や天井の細かな粘土片を含む黄褐～明褐色シルトが 0.1 ～ 0.2 mの厚さでみられ、この層は窯の廃絶から天井が崩落するまでの間に窯体内に流入した堆積土と考えられる。

床面の検出状況　流入土を除去したところで粘土の貼床面が確認され、窯尻付近と窯体の中央～焚口までの２ヶ所で、遺物がまとまって出土した（図 105・106）。窯尻付近（Ｂ－Ｂ′付近）では、主に半裁状態の杯Ｂが伏せられ床面に据えられており、一部には壺や平瓶の底部、杯蓋などの破片もみられた（図版 36 － 1）。これらの須恵器はよく焼き締り、破断面が二次的な焼成を受けていることから、焼成失敗品が焼台として転用されたことを示している。

床面は、窯尻から 2.0 m手前にむかっていったん段状に落ち込み、その後徐々に傾斜を緩めながら焚口までのびているが、この落ち込み部分から前面側（Ｃ－Ｃ′より前面側）にかけては、まとまって遺物が出土している。窯体の中央付近では、開口部側と同様に床面に須恵器が据え置かれたような箇所もみられるが、手前側では須恵器がばらばらで散乱した状態で出土している。これらは焼成不良の個体が主体を占めていることから、最終操業時の失敗品を窯体の前面側に掻き出した状態のまま窯を放棄したことがわかる。この焼成不良の須恵器は、皿や杯Ａ、杯蓋が多くの比率を占めており（第７章参照）、これらの器種が窯体内で火回りが悪い位置で焼成されたことを示している。また、この部分から出土した須恵器の中には、焼成が良好な個体や軟質の九輪も一定程度含まれるが、焼成不良の個体とは異なり、器種にバリエーションがみられる。熔着した個体や、破断面が二次的な焼成を受けた個体が多くみられるため、焼台として転用された個体が多数を占めると考えられる。九輪は床面に据えられていた破片や、壁体に挿しこまれていた破片がみられたことから、最終操業時に焼成された個体ではなく、焼台として転用された個体と考えられる。

窯体の下半部から中央付近までは、床面の凹凸が少ないが、傾斜が急になる上半部では粘土塊やくぼみがあって床面に凹凸がみられる（図 107）。窯尻付近ではこの凹凸をうまく活かし、須恵器が焼台として据えられていた。床面の凹凸は列状には並んでいないことから、床面に製品を置くための恒久的な段は造成されていなかったと考えられる。このため、操業の度に粘土塊などを床面に据えて、製品の置場を整えていた可能性が高い。

焚口部分については最終操業時に床面を整地していることが確認できた。この整地層（図 103・104 － 33）の中からは須恵器も出土しており（図 120：444 ～ 450）、これらの須恵器については最終操業よりも古い操業に伴うことを示している。整地層の下面は被熱した黒色もしくは明黄褐色の粘土の貼床面で（図 103・104 － 37・38）、最終操業よりも前の床面の焚口部分と考えられる。焚口の前面に

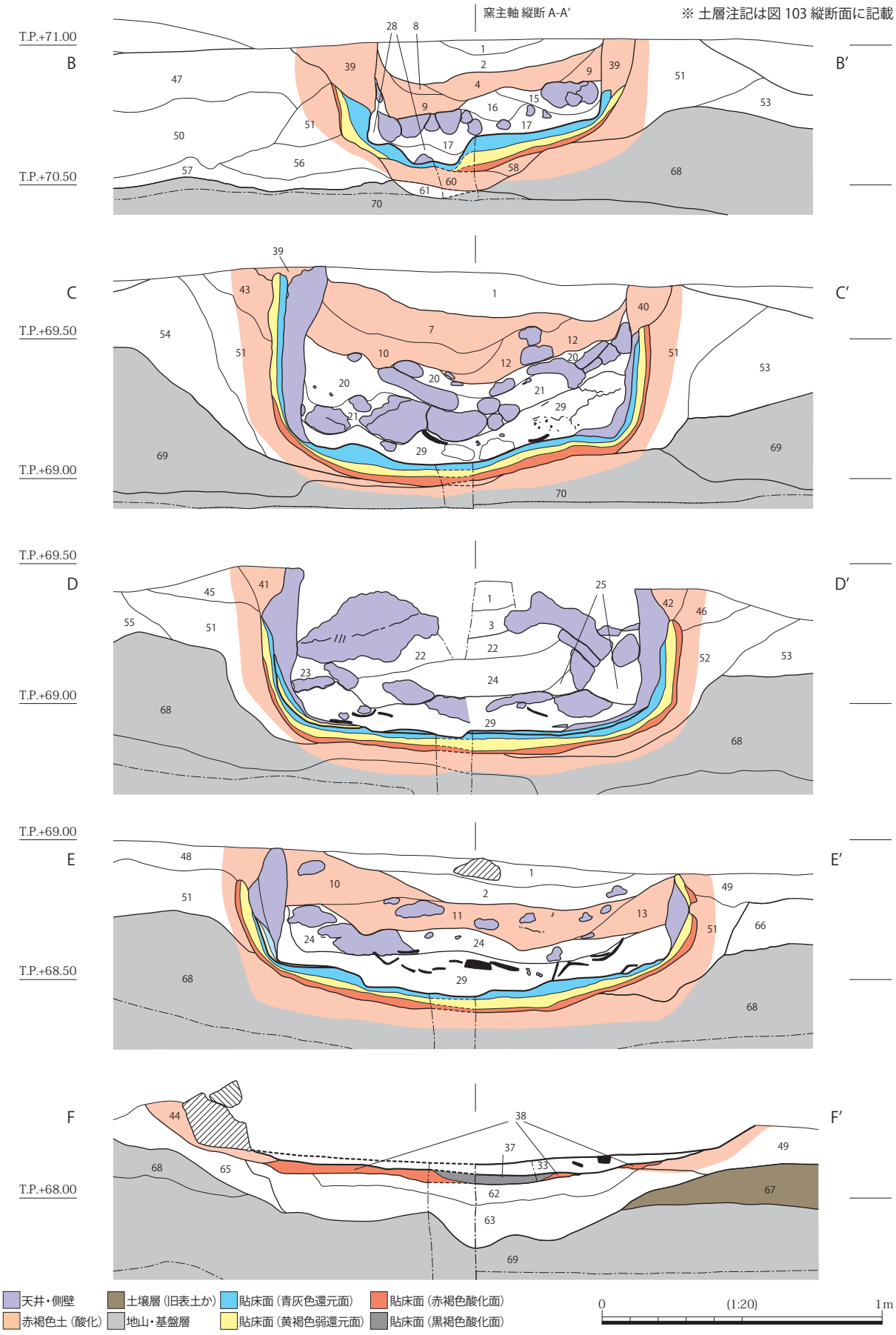

窯主軸 縦断 A-A′
※ 土層注記は図 103 縦断面に記載
T.P.+71.00
T.P.+70.50
T.P.+69.50
T.P.+69.00
T.P.+69.50
T.P.+69.00
T.P.+69.00
T.P.+68.50
T.P.+68.00
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
天井・側壁
赤褐色土（酸化）
土壌層（旧表土か）
地山・基盤層
貼床面（青灰色還元面）
貼床面（黄褐色弱還元面）
貼床面（赤褐色酸化面）
貼床面（黒褐色酸化面）
0
(1:20)
1m

図 104　窯体横断面図

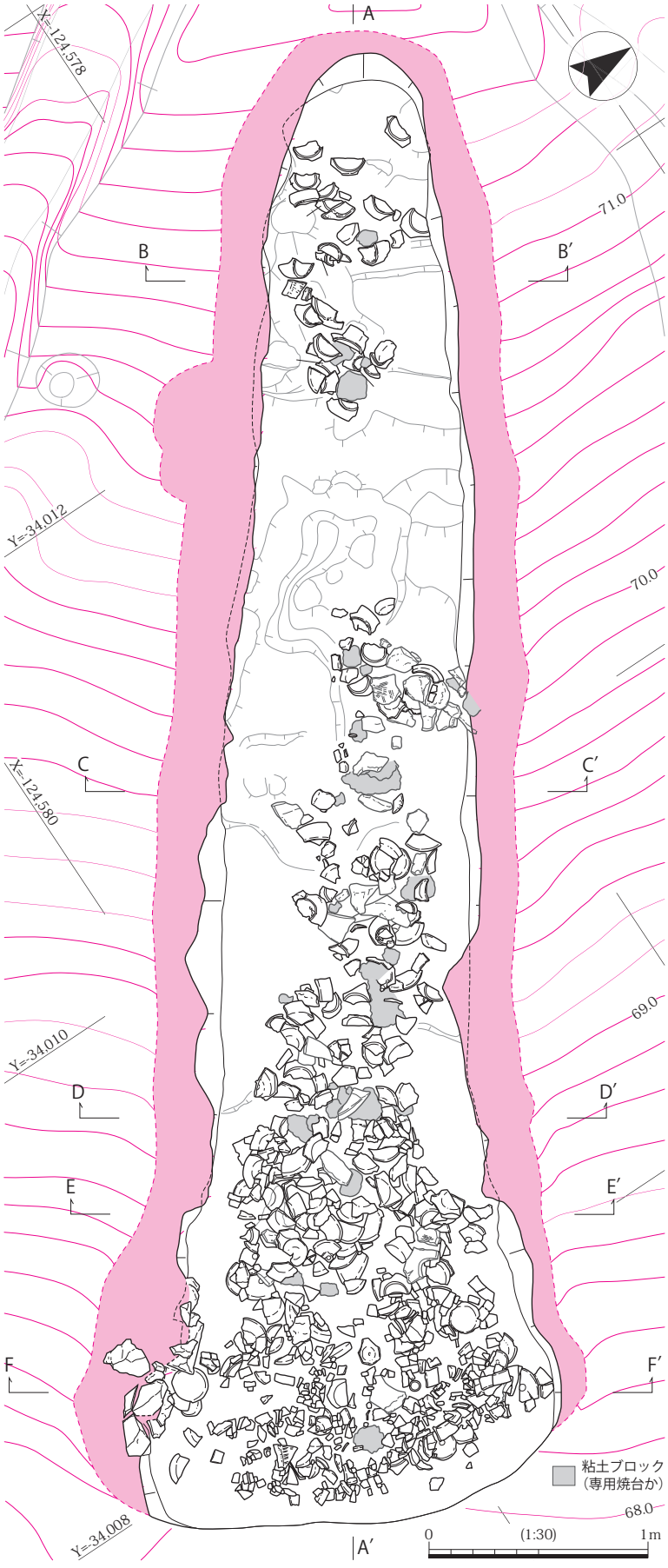


図 105　窯体内最終床面遺物出土状況図

は傾斜が緩やかな前庭部が存在するが、焚口前端から下方側へ 0.7 mの位置から 454 土坑が掘り込まれているため、前庭部のスペースは非常に狭い。

なお、窯体内から出土した炭化材の樹種同定分析をおこなったところ、炭化材にはマツ類とカエデ属がみられた（第 6 章第 2 節参照）。このうちマツ類については、燃焼材と考えられる一方で、カエデ属については、薪炭材としては火付きが悪い樹種であるため、窯体の構築材として用いられた可能性がある。

窯体の構造　床面は細かい砂粒や礫が若干含まれるものの、極めて精良な粘土による貼床であった。焚口部分を除くと床面は還元して青灰色に変色しており、断ち割りの断面を観察すると、貼床は窯体の内側から外側にむかって青灰色、浅黄色、赤褐色へと順に変色していた。床面の粘土は側壁にかけてU字状に立ち上がっており、床面からの高さが、開口部や焼成部付近では 0.3 m程度、燃焼部では最大 0.6 mまで立ち上っていた（図 104）。燃焼部左側壁の床面から側壁の立ち上がり部分については、床面の粘土が内側から青灰色、黄褐色、青灰色、黄褐色、赤褐色の順に変色している箇所もみられることから、床面を補修した痕跡として捉えることができる（図 104：D－D′およびE－E′）。そのため、少なくとも 2 回以上の操業があったことがわかるが、床面の補修は部分的に認められるのみで、基本的には同じ床面を繰り返し使用し、床面の

補修は最低限に留めていた可能性が高い。

床面から立ち上がる側壁の粘土の内側には、粗い粘土が貼り付けられており、これは崩落した天井と同じスサ入りの粗い粘土であることから、天井と側壁は一体的に構築されていたことを示している。窯体の内側はよく被熱しており、自然釉の付着もみられる。また壁面には、ユビで粘土を撫でつけた痕跡を明瞭に残す箇所もみられた（図版 36 － 3）。このスサ入りの粗い粘土は、燃焼部では補修した壁面の内側に貼り付けられていることから、少なくとも窯体の前面側では、天井と側壁の補修を繰り返していたことが窺える。

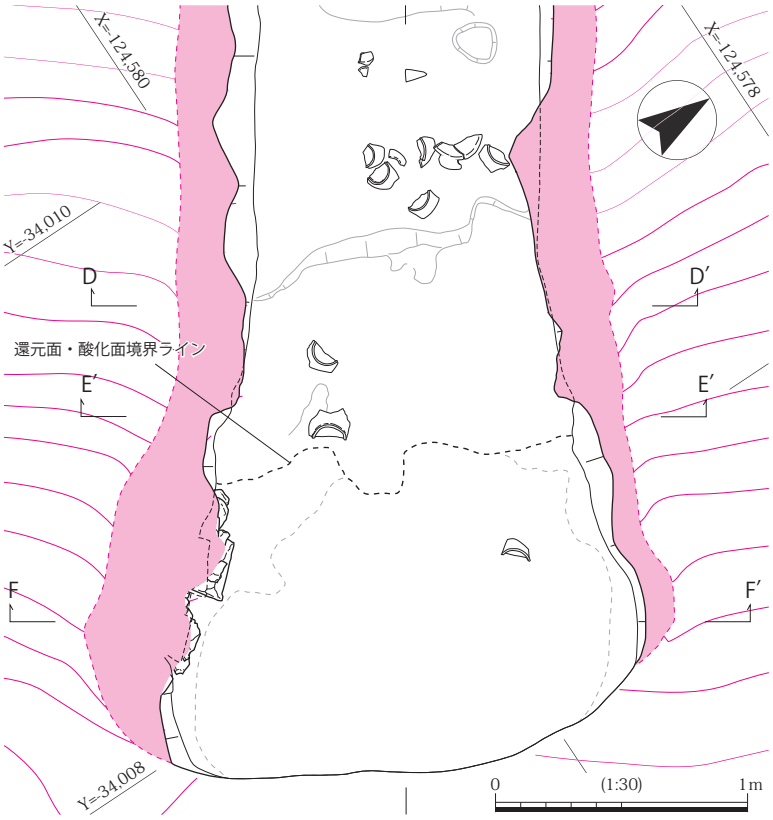


図 106　窯体内最終床面下層遺物出土状況図

焚口部分の左側壁には石組がみられ、石組の内面も被熱していた（図 108、図版 36 － 4）。石組の外側の控え土には細かな窯壁片が含まれていることから、この石組は 2 次的な改修によって付加されたものであることがわかる。

窯体の側壁は、床面からほぼまっすぐ上方に立ち上がっており、天井は検出面からアーチ上に盛り上がっていた可能性が高い。窯体内には天井が崩落したままであったことから、縦断面から判断する限り、窯の廃絶段階での天井の長さは水平距離で 4.35 mに復元できる（図 103）。焚口の前端から 1.8 mまでの範囲は天井が残存していなかったが、焚口前端から 1.3 mより奥側部分では床面は還元して青灰色に変色していたため、この 0.5 mの範囲にも操業段階では天井が架かっていたことがわかる。天井は、窯出しの際に製品を取り出しやすくするために意図的に破壊されたか、もしくは最終操業より前の段階で燃焼部の天井が壊れ、最終操業時には天井がやや短くなっていたか、などといったような状況が想定される。排煙口の大きさについては、窯尻の天井の落ち込みがない範囲から 0.65 m程度に復元できる。天井の上部には、先に述べたように被熱によって赤褐色に酸化したシルト層が検出されていることから、天井は地山由来のシルト層で覆われていたことがわかる。

窯体の構築方法については、断ち割りによって把握することができた。窯体の斜面上方側から中央付近までは、窯体にあわせて斜面の地山を掘り込んで下半部を成形されており、この掘り込みは窯体の上半部ではやや浅いが、中心では深く基盤層まで達している部分もあった。窯体上半部の側方の土質は、明黄褐色シルトを主体とし、細かな炭が含まれることから人為的な盛土と考えられる（図 104 － 41 ～ 57）。窯体の下半部にむかって、掘り込みは徐々に浅くなり、下半部の側方や焚口前端付近では、旧表土と考えられるオリーブ褐～黄褐色シルトの土壌層（図 103・104 － 66・67）が確認された。さらに焚口の側方や前庭部の下からは、この土壌層の上に盛土と考えられる黄褐色シルト（図 103・104 － 64・65）がみられることから、焚口～前庭部は旧地形にそのまま盛土を施して平坦面を造成し、窯

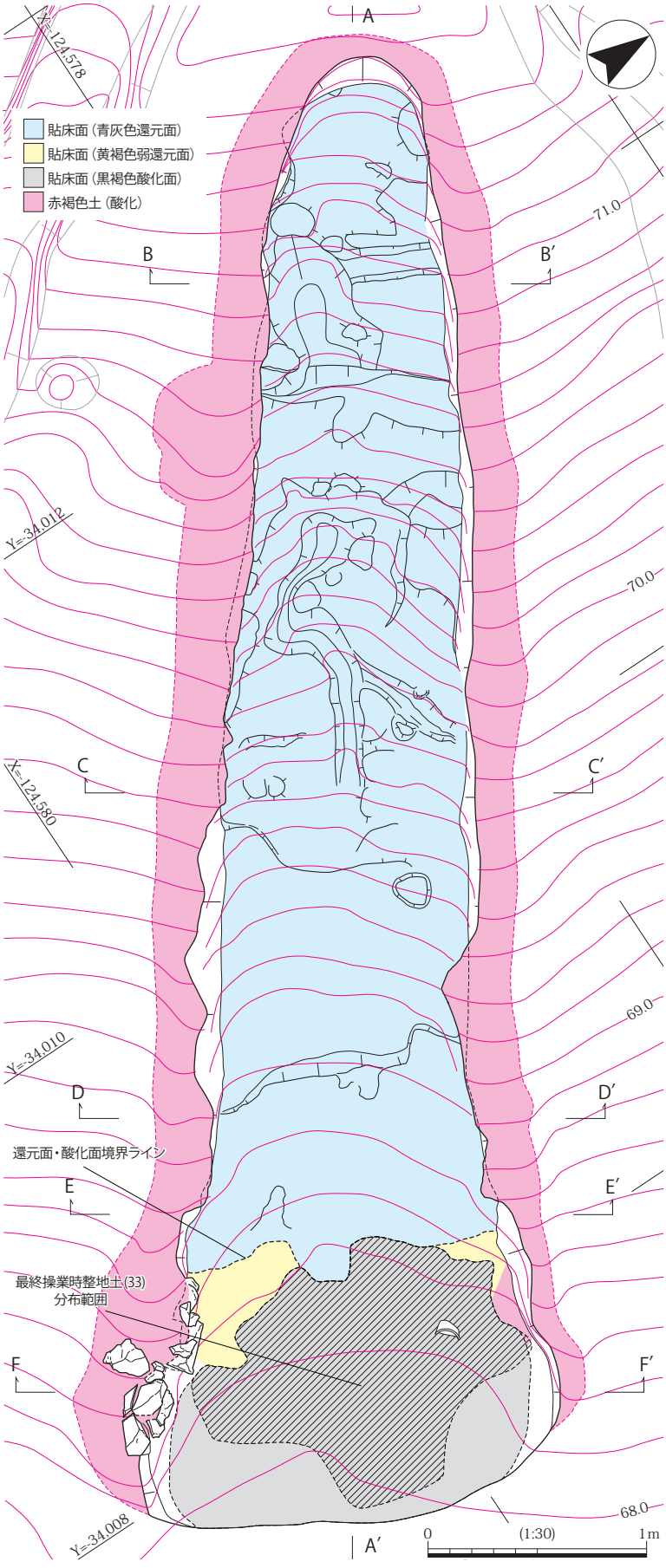


図 107　窯体内最終床面検出状況図

体を構築していたことがわかる。

窯体の中心付近では掘り込みがやや深いものの、全体的には掘り込みは浅く、窯体の側方や下半部では盛土を施して窯体を成形し、天井は盛り上がった形状に復元できることから、本窯の構造は地上式の窖窯と捉えて大過はないと言える。

窯体構築面の遺構　窯体構造を把握したのち、貼床と窯背部の盛土を除去して窯体の掘方を検出し、窯体の貼床除去面では、457・458 土坑、466 ピットを確認した（図 109）。掘方は、窯体よりやや幅広ではあるが、形状はほぼ一致しており、窯尻側では掘り込みが非常に浅く、焼成部ではやや掘り込みが深い。窯体中央のＣ－Ｃ′ライン付近で掘り込みが最も深く、そこから焚口にむかって掘り込みが徐々に浅くなっておさまる。焚口部分は断面で、旧表土と盛土が確認されており、窯体の焚口から前庭部にかけては、盛土によって造成されているため、掘り込みはおよんでいない。

457 土坑は 1.2 × 1.0 m程度の不整形の土坑で、深さは 0.1 ～ 0.15 m程度の浅いものである。埋土には炭が含まれており、人為的な掘り込みであるものの、遺構の性格は不明である。窯体が急な斜面に構築されているため、窯体を構築する際に斜面に設けた足場として掘り込まれた可能性も想定される。なお埋土内から検出された炭化物は、樹種同定の結果、マツ類とコナラ節が確認されており、須恵器窯が築かれる以前の周辺環境は、比較的再生能力が高い樹

木が生育していたことがわかる（第６章第２節参照）。

焚口の床面下から検出された 458 土坑は、1.8×1.0 m、深さ 0.3 mの不整形の土抗で、前庭部の盛土を掘り込んでいる。埋土は、にぶい褐～暗褐・灰黄色シルトを主体とし、炭や基盤ブロックが含まれる。土坑の位置や形状からは、いわゆる舟底状ピットと呼ばれるものの可能性も想起されるが、土坑が埋め戻された後に再び上面に粘土による貼床がされており、改修に伴う掘り返しの形跡が認められないことから、異なる性格の遺構であると考えられる。そのため、457 土坑と同様に、窯体を構築する際に斜面に設けた足場などが機能として想定される。

466 ピットは 458 土坑の周辺で検出され、径 0.3 m、深さ 0.2 mである。床面の貼床より下面から掘り込まれており、これについては遺構の性格は不明である。

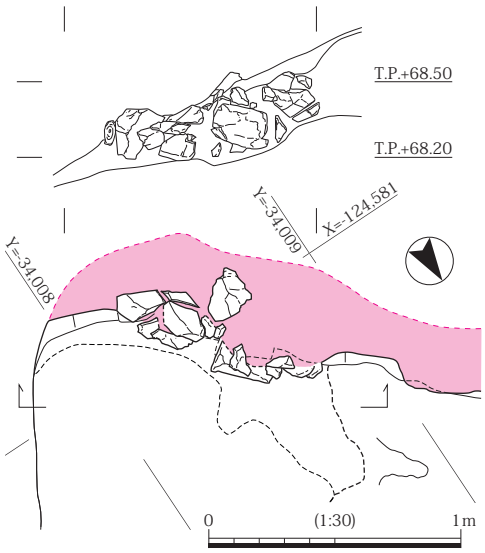


図 108　焚口部左側壁
石組側壁平面・断面図

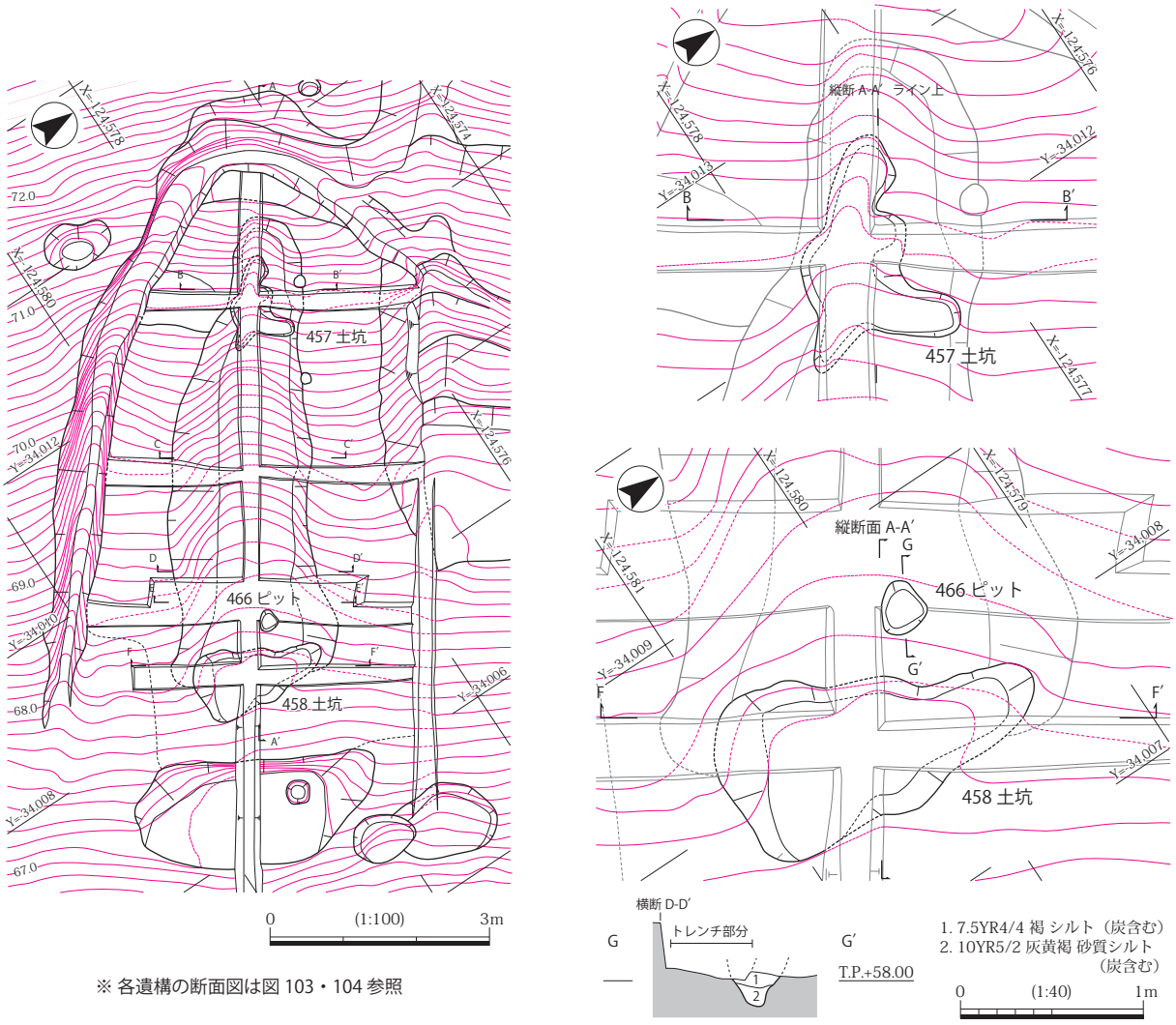
周辺付属遺構

450 溝　窯体の西側と窯背部をめぐり、東側では 451 くぼみ・452 平坦面に接続する溝である。窯背部は斜面上方側を大きく掘り込み、下方側は掘りこみが浅く、開口部との間に狭い平坦部分がみられる。埋土は赤褐色に酸化した焼土を含み、焼成不良の須恵器が多量に出土していることから、窯背部では排煙口から窯体内の温度調整や製品の窯出し作業をおこなっていたことが推測される。窯背部付近での須恵器の出土量が特に多いことから、不良品を溝の中に廃棄したことが窺われる。さらに、ここから出土した須恵器は、杯Ａや皿の出土量が多く、なおかつそれらの遺物は焼成不良の個体が多いといった特徴がある。そのため、窯尻付近では主に杯Ａや皿が焼成されており、さらに、窯尻付近の火回りが悪かったことがわかる。（第７章参照）

窯体の西側では、検出面の幅が 0.5 ～ 0.7 mで、深さが最も深いところで 0.6 mを測る。溝は窯体をめぐるように深く掘り込まれており、窯体内への雨水の浸入を防ぐための機能が想定される。さらに排煙口から製品の窯出しがおこなわれていた可能性もあることから、この溝には、窯背部へむかうための通路としての機能も備えていたと考えられる。

窯背部の断面（図 103）を観察すると、赤褐色の焼土層が２層分確認でき（10・14）、このふたつの層は窯の操業と対応する可能性が高い。さらに上層の黄褐色砂質シルト（６）は、赤褐色の焼土をほとんど含まないが、炭とともに焼成不良の須恵器が出土しているため、最終操業時の窯出しに関係する層の可能性が高く、断面の観察からは少なくとも３回以上の操業があったことがわかる。埋土（８・９・12・17）については、操業の休止段階の流土が堆積した間層と考えられる。このうち 17 については、遺物や焼土は含んでおらず溝の加工面に直接堆積していることから、溝の掘削の後、最初の操業までに堆積した流土と考えられる。

溝の西側埋土（図 110）については、大きく３層に分けることができ、このうち上層（７）と下層（15・16）はオリーブ褐色シルトを主体とし、中層（11・13）はやや黄褐色シルトを主体とする。いずれも埋土に炭や焼土が混じり、熔着した須恵器や焼成不良の須恵器が出土することから、溝の埋没は窯の操業ごとに徐々に進んだことがわかる。なお窯背部と西側の埋土の対応関係については、窯背部上層（６）



※ 各遺構の断面図は図 103・104 参照

図 109　窯体掘方および窯体構築面の遺構平面・断面図

と西側上層（7）、窯背部（10）と西側中層（11・13）、窯背部（14）と西側下層（15・16）が、それぞれ対応すると考えらえる（表 2）。

溝は窯体をめぐるようにのびており、東側では 451 くぼみや 452 平坦面と接続する。赤褐色の焼土は東にむかって徐々に不明瞭になり、遺物の出土量も減っていく。そのため窯背部から窯出しされた須恵器は、452 平坦面にも落ち込んでいることが推測される。

451 くぼみ・452 平坦面　窯体のほぼ中央部分の東側方で検出した平坦面で、平坦部分は 4.0×1.5 m 程度の広さがある。窯体よりも上方から斜面を大きく掘り込んで平坦面を造成しており、掘り込みは部分的に基盤層にまでおよんでいる。窯体をめぐる 450 溝は、西側からのびてこの平坦面に接続しており、降雨時には平坦面にも雨水が流れ込んでいたと考えられる。この平坦面については、窯の操業に伴う作業場や、薪などの資材や製品の仮置き場としての機能が想定される。

埋土の断面（図 110・111）を観察すると、埋土の中・下層（22 ～ 28）には炭や焼土を含み、須恵器が多く出土しているため、窯体に近い西側から徐々に平坦面が埋没していったことがわかる。須恵器には窯変した個体や焼成不良の個体も含まれていることから、窯背部から窯出しされた製品が投棄されて平坦面に溜まったことがわかる。この中でも（28）からは比較的多く須恵器が出土しており、操業の初期段階の製品と考えられる（図 123：498 ～ 512）。埋土の最下層（29）は細かな円礫や地山ブロ

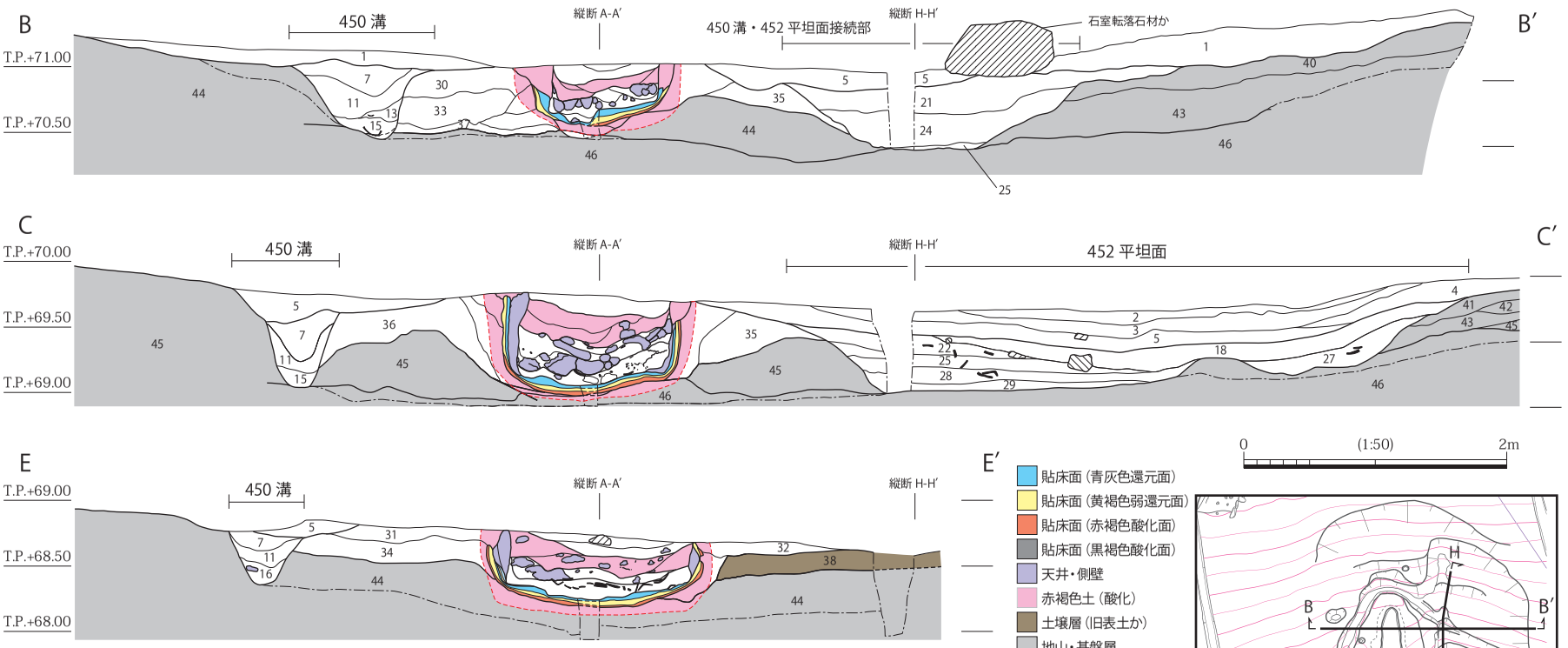


図 110　窯体および 450 溝・452 平坦面横断面図

450溝・451くぼみ・452平坦面（B-B′、C-C′、E-E′、H-H′ラインおよび図102A-A′の450溝部分）

【流土（操業停止以降）】

1. 2.5Y5/4 ～ 5/6・6/6 黄褐～明黄褐 シルト～礫混じりシルト（炭含む、締りなし）
2. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト
3. 2.5Y5/6 黄褐 シルト
4. 10YR5/6 黄褐 シルト
5. 2.5Y5/6 ～ 6/6 黄褐～明黄褐 シルト～礫混じりシルト
（452 平坦面上面、須恵器出土量がやや多い、２次堆積か、図 123−485 ～ 488）

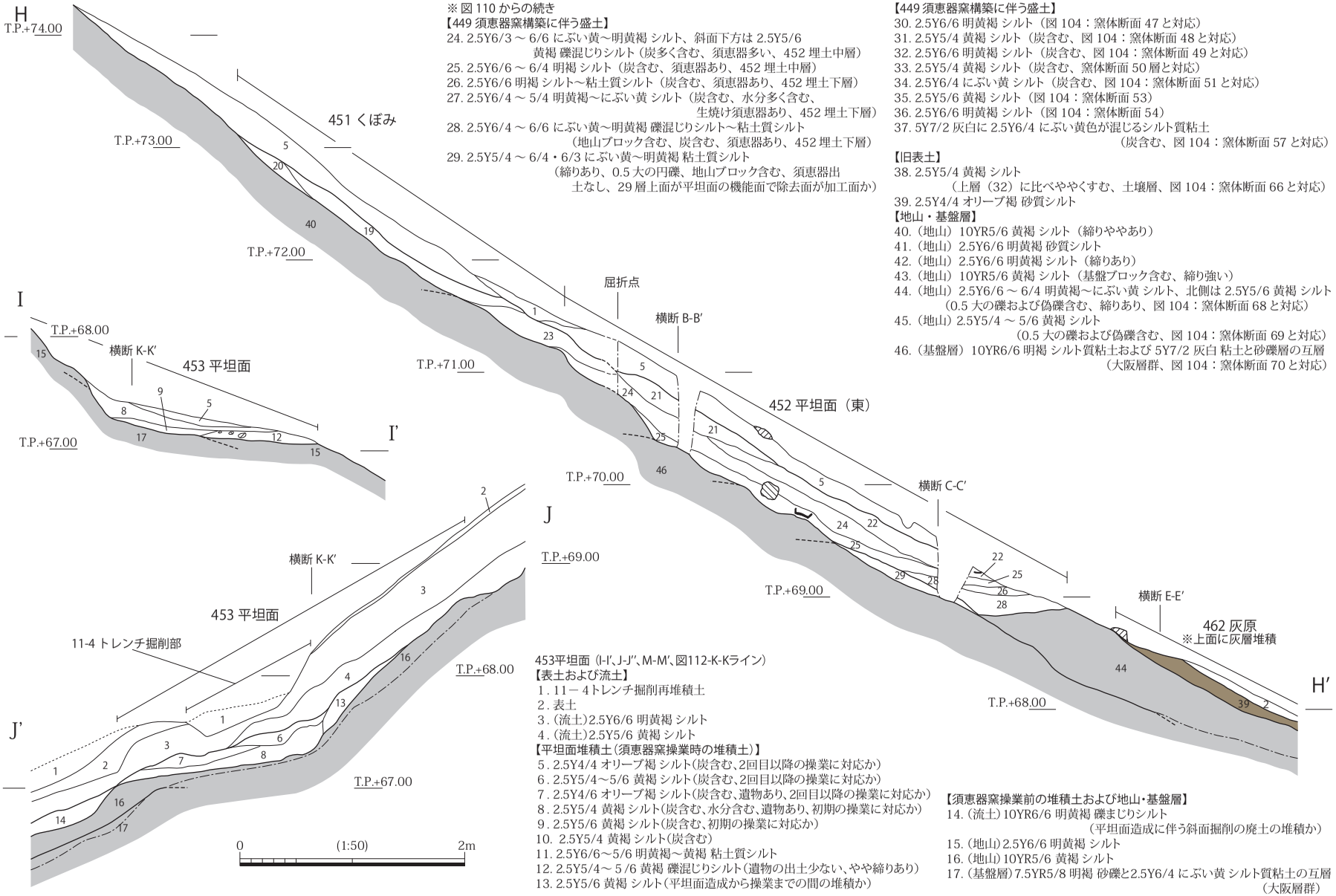
【450 溝埋土】

6. 2.5Y6/4 にぶい黄 砂質シルト（炭含む、須恵器あり、
最終操業時の窯出しに伴う可能性が高い、7 と対応か）
7. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト（炭・焼土含む、生焼け須恵器あり、6 と対応か）
8. 2.5Y5/6 ～ 6/6 黄褐～明黄褐 シルト（地山由来流土、間層か）
9. 2.5Y6/8 ～ 6/6 明黄褐 シルト（地山由来流土、間層か）
10. 2.5Y6/8 ～ 6/6 明黄褐 シルト（炭・焼土含む、特に底に炭と酸化赤色焼土の
堆積あり、生焼け須恵器あり、窯出しに伴う可能性が高い、11 と対応か）
11. 2.5Y5/6・5/4 ～ 6/4 黄褐～にぶい黄 シルト（炭・焼土含む、生焼け須恵器あり、
10 と対応か）
12. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト（間層か）
13. 10YR5/6 黄褐 シルト（炭含む、生焼け須恵器あり、間層か）
14. 7.5YR4/6 褐 シルト（炭・焼土含む、特に底に炭と酸化赤色焼土の堆積あり、
生焼け須恵器あり、窯出しに伴う可能性が高い、15 と対応か）
15. 10YR5/4 にぶい黄 シルト（炭・焼土含む、生焼け須恵器あり、特に須恵器出土量多い、
上層 13 よりやや黒ずむ、底部は水分含む、14 と対応か）
16. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト（炭・焼土多く含む、須恵器・窯壁片あり、
水分多く含む、15 と対応）
17. 2.5Y6/4 にぶい黄 砂質シルト（炭含む、遺物なし、17 上面が 450 溝機能面で、
この層の除去面が 加工面か、もしくは溝掘削後から窯焚きまでの間の堆積土か）

【451 くぼみ・452 平坦面埋土】

18. 2.5Y4/3 オリーブ褐 礫混じりシルト（0.5 大の礫含む、水分含む、生焼け
須恵器あり、450 溝埋土 6・7 層および 451 くぼみ埋土 19 と対応か、452 埋土上層）
19. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト（炭含む、生焼けの須恵器あり、450 溝埋土 6・7 および
452 平坦面埋土 18 と対応か、最終操業時の窯出しに伴う
堆積土の可能性あり、452 平坦面の遺物と接合関係あり）
20. 10YR ～ 2.5Y5/6 黄褐 シルト
21. 2.5Y ～ 10YR5/6 黄褐 シルト
22. 2.5Y ～ 10YR5/6 黄褐 礫混じりシルト、斜面下方は 2.5Y6/4 ～ 6/6 にぶい黄
～明黄褐 シルト（炭含む、須恵器あり、452 埋土中層）
23. 2.5Y6/4 黄褐 礫混じりシルト～粘土質シルト（斜面上方の方が粘質強い、マンガン含む、
炭多く含む、須恵器あり、450 溝埋土 10 もしくは 14 と対応か、
ただし溝の埋土に含まれる焼土はこの断面部分までは広がらない 452 埋土中層）

図 111　451 くぼみ・452 平坦面・453 平坦面縦断面図



※図 110 からの続き

【449 須恵器窯構築に伴う盛土】

24. 2.5Y6/3 ～ 6/6 にぶい黄～明黄褐 シルト、斜面下方は 2.5Y5/6 黄褐 礫混じりシルト（炭多く含む、須恵器多い、452 埋土中層）
25. 2.5Y6/6 ～ 6/4 明褐 シルト（炭含む、須恵器あり、452 埋土中層）
26. 2.5Y6/6 明褐 シルト～粘土質シルト（炭含む、須恵器あり、452 埋土下層）
27. 2.5Y6/4 ～ 5/4 明黄褐～にぶい黄 シルト（炭含む、水分多く含む、生焼け須恵器あり、452 埋土下層）
28. 2.5Y6/4 ～ 6/6 にぶい黄～明黄褐 礫混じりシルト～粘土質シルト（地山ブロック含む、炭含む、須恵器あり、452 埋土下層）
29. 2.5Y5/4 ～ 6/4・6/3 にぶい黄～明黄褐 粘土質シルト（締りあり、0.5 大の円礫、地山ブロック含む、須恵器出土なし、29 層上面が平坦面の機能面で除去面が加工面か）

【449 須恵器窯構築に伴う盛土】

30. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト（図 104：窯体断面 47 と対応）
31. 2.5Y5/4 黄褐 シルト（炭含む、図 104：窯体断面 48 と対応）
32. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト（炭含む、図 104：窯体断面 49 と対応）
33. 2.5Y5/4 黄褐 シルト（炭含む、窯体断面 50 層と対応）
34. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト（炭含む、図 104：窯体断面 51 と対応）
35. 2.5Y5/6 黄褐 シルト（図 104：窯体断面 53）
36. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト（図 104：窯体断面 54）
37. 5Y7/2 灰白に 2.5Y6/4 にぶい黄色が混じるシルト質粘土（炭含む、図 104：窯体断面 57 と対応）

【旧表土】

38. 2.5Y5/4 黄褐 シルト（上層（32）に比べややくすむ、土壌層、図 104：窯体断面 66 と対応）
39. 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト

【地山・基盤層】

40.（地山）10YR5/6 黄褐 シルト（締りややあり）
41.（地山）2.5Y6/6 明黄褐 砂質シルト
42.（地山）2.5Y6/6 明黄褐 シルト（締りあり）
43.（地山）10YR5/6 黄褐 シルト（基盤ブロック含む、締り強い）
44.（地山）2.5Y6/6 ～ 6/4 明黄褐～にぶい黄 シルト、北側は 2.5Y5/6 黄褐 シルト（0.5 大の礫および偽礫含む、締りあり、図 104：窯体断面 68 と対応）
45.（地山）2.5Y5/4 ～ 5/6 黄褐 シルト（0.5 大の礫および偽礫含む、図 104：窯体断面 69 と対応）
46.（基盤層）10YR6/6 明褐 シルト質粘土および 5Y7/2 灰白 粘土と砂礫層の互層（大阪層群、図 104：窯体断面 70 と対応）

453平坦面（I-I′、J-J″、M-M′、図112-K-Kライン）

【表土および流土】

1. 11－4トレンチ掘削再堆積土
2. 表土
3.（流土）2.5Y6/6 明黄褐 シルト
4.（流土）2.5Y5/6 黄褐 シルト

【平坦面堆積土（須恵器窯操業時の堆積土）】

5. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト（炭含む、2回目以降の操業に対応か）
6. 2.5Y5/4～5/6 黄褐 シルト（炭含む、2回目以降の操業に対応か）
7. 2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト（炭含む、遺物あり、2回目以降の操業に対応か）
8. 2.5Y5/4 黄褐 シルト（炭含む、水分含む、遺物あり、初期の操業に対応か）
9. 2.5Y5/6 黄褐 シルト（炭含む、初期の操業に対応か）
10. 2.5Y5/4 黄褐 シルト（炭含む）
11. 2.5Y6/6～5/6 明黄褐～黄褐 粘土質シルト
12. 2.5Y5/4～5/6 黄褐 礫混じりシルト（遺物の出土少ない、やや締りあり）
13. 2.5Y5/6 黄褐 シルト（平坦面造成から操業までの間の堆積か）

【須恵器窯操業前の堆積土および地山・基盤層】

14.（流土）10YR6/6 明黄褐 礫まじりシルト（平坦面造成に伴う斜面掘削の廃土の堆積か）
15.（地山）2.5Y6/6 明黄褐 シルト
16.（地山）10YR5/6 黄褐 シルト
17.（基盤層）7.5YR5/8 明褐 砂礫と2.5Y6/4 にぶい黄 シルト質粘土の互層（大阪層群）

ックを含むが遺物が、出土しないことから、平坦面の掘削の後、最初の操業までに堆積した流土と推測される。平坦面がある程度埋没した段階では、平坦部分が狭くなり、平坦部分の中心が東側に移る。ここに堆積した上層の埋土（18）は、炭や焼土礫を多く含むオリーブ褐色シルトで、焼成不良の須恵器が出土している。さらに上面の（5）からも須恵器がまとまって出土している。

表２　450 溝・451 くぼみ・452 平坦面 断面層序対応関係

	450溝（西）	450溝（窯背部）		451くぼみ	452平坦面
（上面）	5				
上層	7	6		19	18
中層	11・13	10	（8・9）	23	22～28
下層	15・16	14	（12）		
（加工面初期堆積層）	—	17		—	29

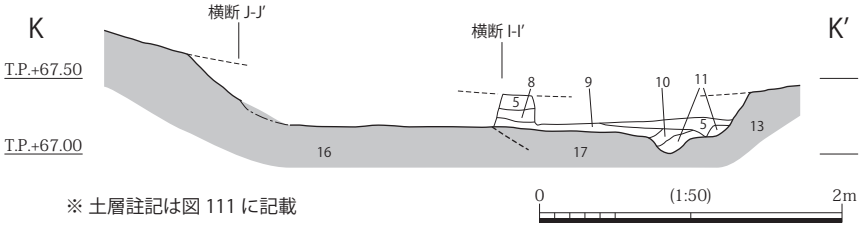


図 112　453 平坦面横断面図

平坦面の斜面上方の窯背部の東側では、450 溝周辺の平坦部分が東にのびて浅いくぼみが形成されており、これを 451 くぼみとした。断面（図 111：H－H′）からは、452 平坦面の中・下層（22～28）の堆積の跡に形成されたと考えられ、窯背部での窯出しの作業スペースとして平坦部分が僅かに残ったものと推測される。このくぼみに溜まった埋土（19）は、土質から 452 平坦面の埋土上層（18）や 450 溝の最終操業時の埋土（６）と対応すると考えられ、最終操業時の窯出しに関わる層の可能性が高い。

なお、450 溝・451 くぼみ・452 平坦面の埋土の対応関係については、各断面図（図 103・110・111）の註に明記し、表２にて整理している。

453 平坦面　窯体前庭部の南西で検出された平坦面で、平坦部分は 3.5×1.8 m程度の広さがある。452 平坦面と同様に、窯の操業に伴う作業場や、薪などの資材や製品の仮置き場としての機能が想定される。埋土（図 111・112）には炭や須恵器が含まれるが、窯体とはやや離れており、窯背部からの遺物の流れ込みもないため、452 平坦面よりも遺物の出土量は少ない。平坦面の東寄りには浅い窪み状の落ち込みがみられるが、性格については不明である。

灰原（462灰原）　灰原は窯体の斜面下方で東西約９m×南北約８mの範囲に広がっていた。斜面は33°の急傾斜であったため灰層の堆積はそれほど厚くなく、最も厚い箇所で0.3m、平均で0.15～0.2m程度であった（図113）。灰原の堆積は、炭や焼土によるオリーブ褐～黒褐色シルトを主体とするが、操業の休止期間を示す間層を挟んでいなかったため、灰原の堆積を細分することはできなかった（１～７）。また、間層がみられなかったことから、操業期間についても比較的短期間のものであったことが推測される。斜面の裾の谷部分は、灰原からの流れ込みによる黒～黒褐色粘土質シルトが厚く堆積していた。

出土遺物の大半はこの灰原から出土しており、取り上げに際しては畦を中心に区分けし、検出面からの深さも加味しながら取り上げをおこなった。出土地点と灰原堆積層の深さによる遺物の出土傾向については、型式差や時期差は見出せなかったが、急傾斜であるため斜面下方や裾の遺物の出土量が多く、

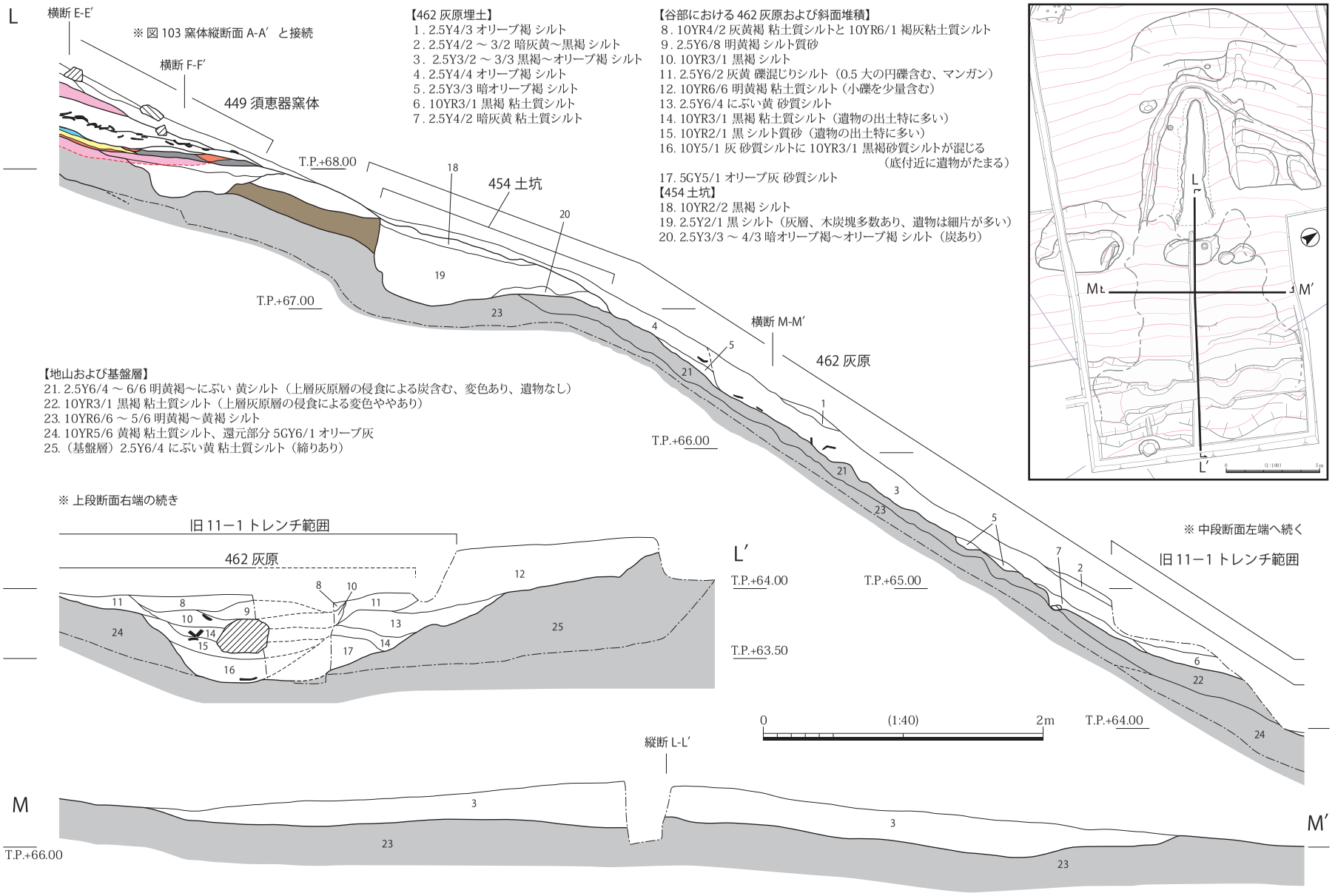

L
横断 E-E′
※図 103 窯体縦断面 A-A′ と接続
横断 F-F′
449 須恵器窯体
T.P.+68.00
454 土坑
T.P.+67.00
横断 M-M′
462 灰原
T.P.+66.00
L′
T.P.+64.00
T.P.+65.00
T.P.+63.50
T.P.+64.00
※ 上段断面右端の続き
旧 11−1 トレンチ範囲
462 灰原
※ 中段断面左端へ続く
旧 11−1 トレンチ範囲
0
(1:40)
2m
縦断 L-L′
M
M′
T.P.+66.00
【462 灰原埋土】
1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト
2. 2.5Y4/2 ～ 3/2 暗灰黄～黒褐 シルト
3. 2.5Y3/2 ～ 3/3 黒褐～オリーブ褐 シルト
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト
6. 10YR3/1 黒褐 粘土質シルト
7. 2.5Y4/2 暗灰黄 粘土質シルト
【谷部における 462 灰原および斜面堆積】
8. 10YR4/2 灰黄褐 粘土質シルトと 10YR6/1 褐灰粘土質シルト
9. 2.5Y6/8 明黄褐 シルト質砂
10. 10YR3/1 黒褐 シルト
11. 2.5Y6/2 灰黄 礫混じりシルト（0.5 大の円礫含む、マンガン）
12. 10YR6/6 明黄褐 粘土質シルト（小礫を少量含む）
13. 2.5Y6/4 にぶい黄 砂質シルト
14. 10YR3/1 黒褐 粘土質シルト（遺物の出土特に多い）
15. 10YR2/1 黒 シルト質砂（遺物の出土特に多い）
16. 10Y5/1 灰 砂質シルトに 10YR3/1 黒褐砂質シルトが混じる
（底付近に遺物がたまる）
17. 5GY5/1 オリーブ灰 砂質シルト
【454 土坑】
18. 10YR2/2 黒褐 シルト
19. 2.5Y2/1 黒 シルト（灰層、木炭塊多数あり、遺物は細片が多い）
20. 2.5Y3/3 ～ 4/3 暗オリーブ褐～オリーブ褐 シルト（炭あり）
【地山および基盤層】
21. 2.5Y6/4 ～ 6/6 明黄褐～にぶい 黄シルト（上層灰原層の侵食による炭含む、変色あり、遺物なし）
22. 10YR3/1 黒褐 粘土質シルト（上層灰原層の侵食による変色ややあり）
23. 10YR6/6 ～ 5/6 明黄褐～黄褐 シルト
24. 10YR5/6 黄褐 粘土質シルト、還元部分 5GY6/1 オリーブ灰
25.（基盤層）2.5Y6/4 にぶい黄 粘土質シルト（締りあり）

図 113　灰原断面図

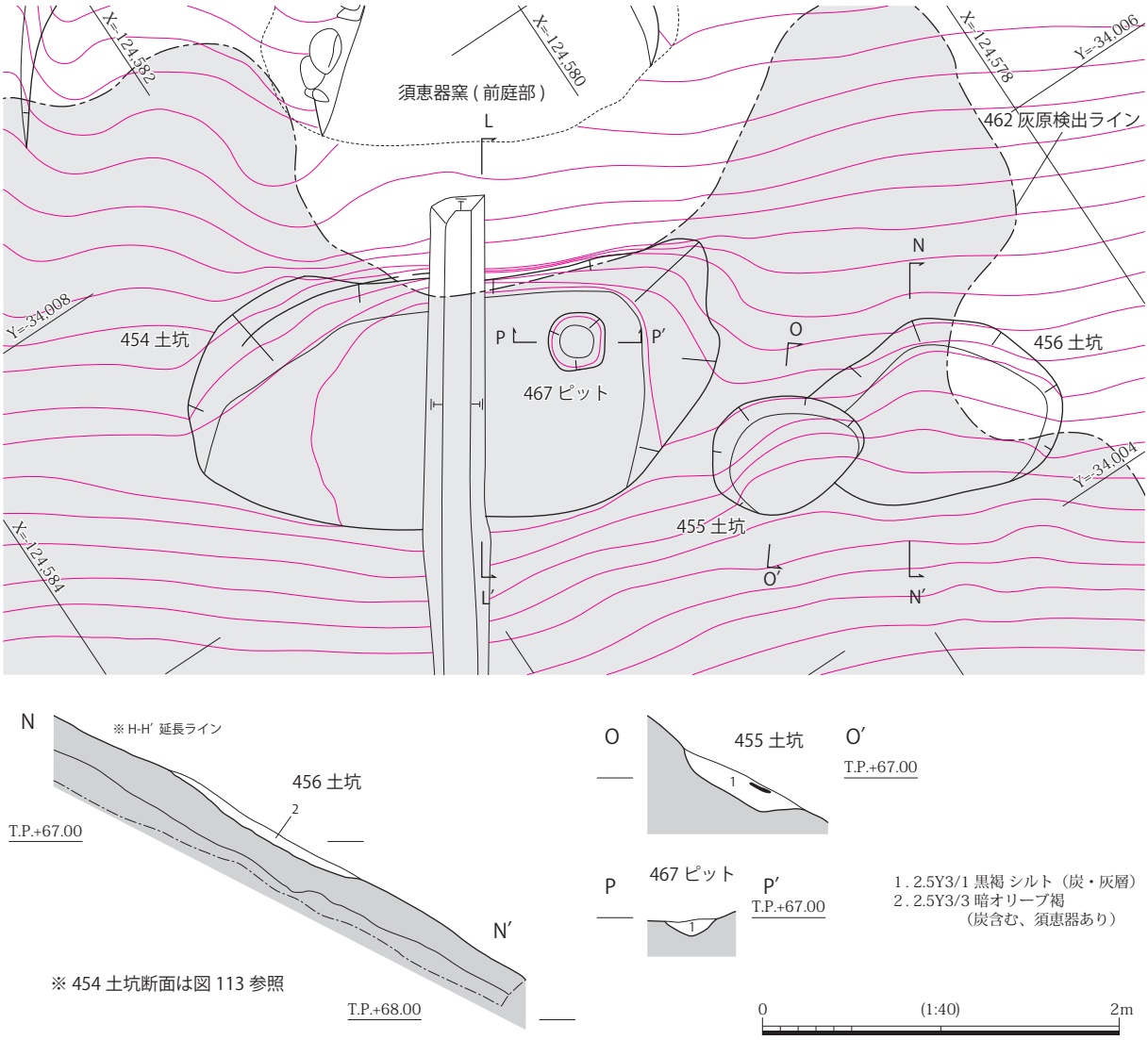


図 114　454・455・456 土坑、467 ピット 平面・断面図

中でも比較的大型で重量のある器種が多く出土する傾向がみられた。

454 土坑　窯体の前庭部の斜面直下で検出した楕円形の土坑で、灰原除去面で検出された（図 113・114）。3.0 × 0.7 mの規模で、検出面からの深さは最も深い窯体側で 0.6 mを測る。特に窯体側はオーバーハング気味に深く掘り込まれており、斜面下方側は開口するような形状を呈していた。埋土は炭や灰、焼土による黒褐～黒色シルトを主体とし、須恵器も多く出土している。埋土内から出土した須恵器は、細片の個体が多いのが特徴で、灰原から出土した須恵器と接合関係がある個体も破片も含まれている。このような土坑が、窯の周辺で検出されること自体はそれほど珍しいことではないが、遺構の性格や機能についてははっきりしたことはわかっておらず不明である。埋土が炭・焼土で充満し、遺物も細片のものが多いことから、廃棄土坑のような性格が想定される。また、土坑の底で径 0.3 m、深さ 0.1 mのピット（467 ピット）を 1 基検出したが、こちらについても性格は不明である。

455 土坑・456 土坑　454 土坑の東で検出した土坑で、454 土坑と同様に灰原除去面で検出された（図 114）。ともに円形で、455 土坑は 0.85×0.65 m、深さ 0.15 mを、456 土抗は 1.4×1.0 m、深さ 0.05 mをそれぞれ測る。この 2 つの土坑は、454 土坑に比べると規模が小さく、浅い。また、455 土坑が 456 土坑を切り込んでいる。埋土は、炭や灰、焼土による黒褐～暗オリーブ褐色を主体とし、埋

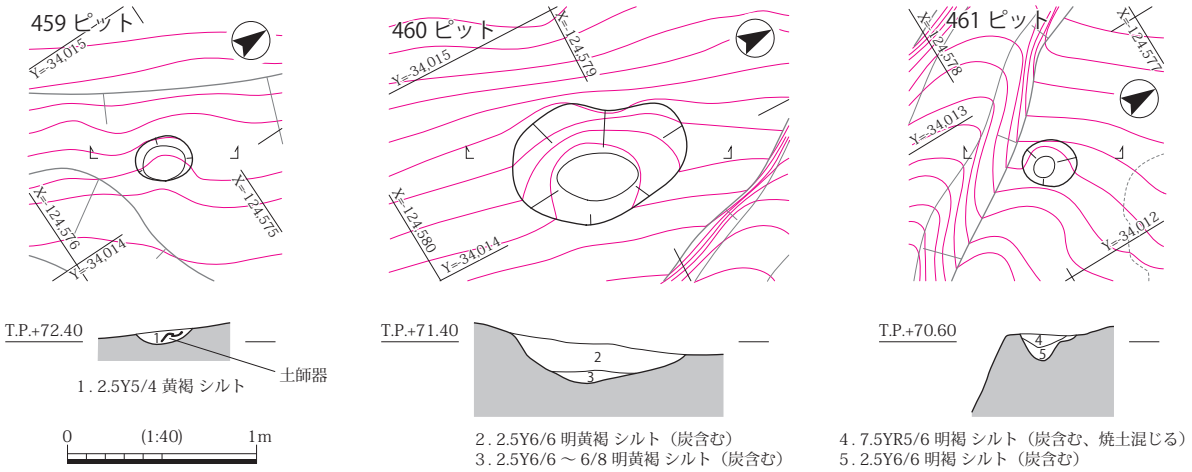


図 115　459・460・461 ピット平面・断面図

土からは須恵器が出土している。この２つの土坑については、はっきりとした性格は不明で、遺構自体が極めて浅いことから、自然のくぼみに灰原の堆積層が溜まったもので、人為的な遺構ではない可能性も想定される。

ピット　窯体の上方や側方で、ピットが３基（459 ～ 461 ピット）検出された（図 115）。459・461 ピットは径 0.3 m程度の小さなもので、460 ピットは 0.9×0.6 mの大きさである。窯体の周辺からは覆屋と考えられるピットが検出される場合があるが、ピットの数が少なく、列状の並びもみられないことから、これらのピットの性格は不明である。

出土遺物

本窯では、窯体内および灰原、関連する付属遺構から、コンテナ箱で 134 箱分の須恵器が出土し、破片の総点数が 33,598 点、総重量が 1,002.965kg であった。

出土した須恵器の器種分類については、基本的には奈良文化財研究所が用いる平城京分類に準拠した。[1] この分類に該当しない器種等については、篠窯跡群の石井清司の分類[2]などを主に用いているが、このような場合には報文中にその旨を示している。

出土須恵器の器種と組成　成合西王寺山窯跡から出土した須恵器の器種は、供膳具では杯Ａ、杯Ｂ、杯蓋、皿Ｃが主体を占め、皿Ｅや高杯の出土がごく僅かにみられる。このうち杯蓋については、天井に丸みをもち器高が高い形態と、扁平で器高が低く口縁部が屈曲する形態とに大別でき、前者を杯蓋Ⅰ、後者を杯蓋Ⅱとした。また、皿Ｃについては、口縁端部が角張った面をもつ皿Ｃが大半であるが、窯体内からは口縁部内面に沈線を施す形態の皿が出土しており、これについては皿ＣⅡとした。壺類については、長頸壺の壺Ｌと小型の壺Ｍが主体を占め、この他に耳付の壺Ｎ、短頸壺の壺Ａと壺蓋、広口壺の壺Ｅと壺Ｈ、壺Ｑ、平瓶がある。鉢類については、全体に個体数が少ないが、鉢Ｄ、鉢Ｆ、盤がみられる。甕については、外面にタタキ目をもつ通有の甕の他に、土師器に通有の器形で外面にハケ調整を施した甕もみられる。この他には、円面硯や風字硯などの文房具、鉄鉢形の鉢Ａや花瓶などの仏具も一定程度みられ、寺院の塔に用いられた九輪も出土している。このように、成合西王寺山窯跡で生産された須恵器は、奈良時代後半から平安時代初頭にみられる器種をほぼ網羅していることがわかる（図 116）。さらに本窯からは、「刀」という文字が刻印・刻書された須恵器も計７点出土している。

器種組成と出土量といった生産内容を把握するために、出土した須恵器の破片数と個体数、重量を全て計測した。[3] 出土した須恵器については、出土地点と層位、取り上げ日時ごとに登録番号を付している

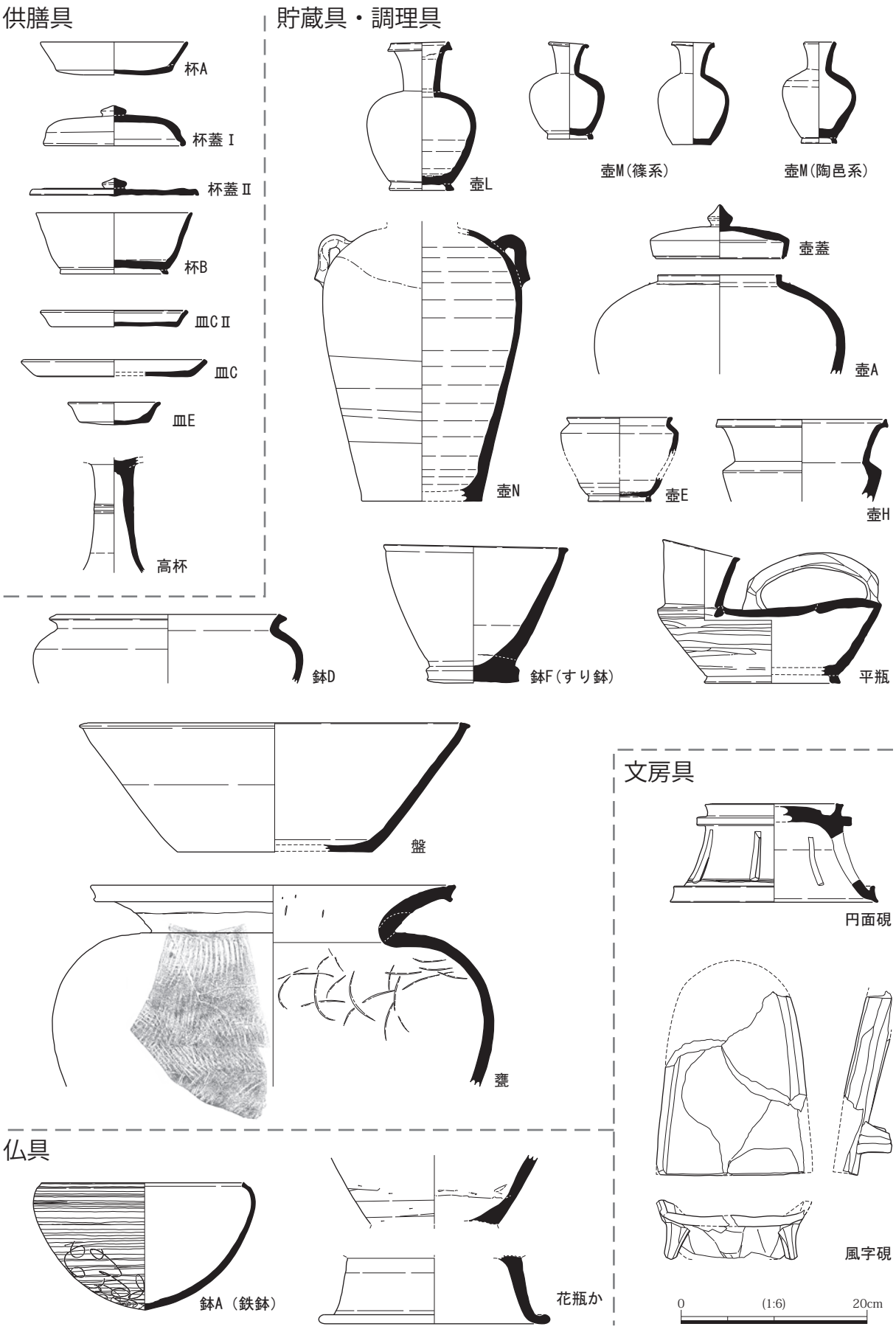


図 116　成合西王寺山窯跡出土須恵器の器種一覧

ため、破片ごとに器種分類と部位の認定をおこない、破片数をカウントした。この際に、焼成や色調、口径、底径、残存率、重量といった、基本的な情報を併せてデータ化した。焼成については、良、やや良、普通、やや不良、不良の５段階に区別し、固く焼き締ったものを良に、部分的に焼成が悪い箇所がみられるものをやや良と認識し、それらに比べて焼き締りが悪くやや軟質気味の焼成ものを普通とした。また焼きが悪く須恵器質に焼成されていないものをやや不良・不良とし、このうち内外面の調整を観察できるものをやや不良に、調整が全く観察できないものを不良とした。色調については、１点ずつ土色帖を参照すると時間と労力がかかり、かえって煩雑化してしまうため、暗灰、灰、灰白、燈、燈褐の５段階に統一し、単純に目視で区別した。個体数については、口縁部と底部の残存率計測法によって個体数を把握した。口径１cm ごとの多重同心円を放射状に 32 分割し、残存度は１～ 32 までの数値を表記して加算し、残存度 32 をもって１個体とした。重量の計測は、ばねばかりで 10 ｇごとに四捨五入して計測し、登録番号、器種、部位、焼成、色調が同一のものについては、まとめて計測をおこなった。

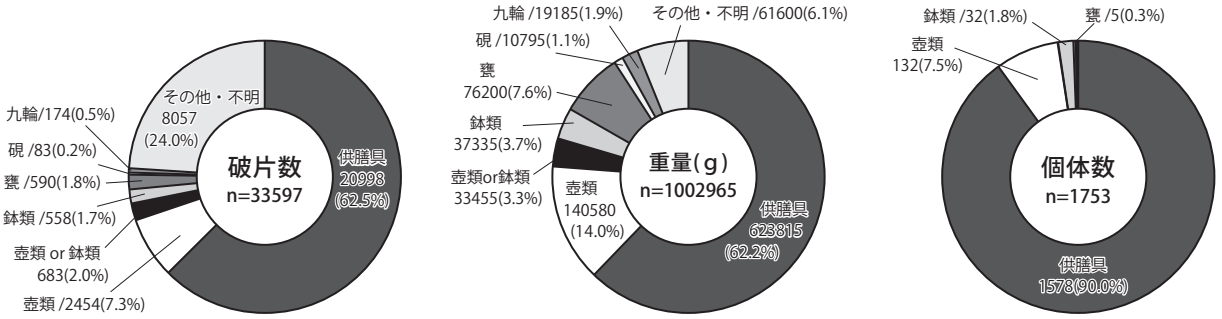
このような計測を経た上で、全体の器種組成を検討すると（表３）、供膳具の出土量が最も多く、破片数および重量で全体の 60％程度、個体数で全体の 90％程度の割合を占めることがまずわかる。その他では、壺類と鉢類の順に出土量が多く、甕や硯、九輪などは少ないといった特徴がある。特に壺類については、150 個体以上の出土数を確認することができるなど、一定の割合を占めている。また、供膳具や甕などは、器壁の厚さや調整などから他の器種と容易に区別ができるため、不明とした破片の多くは壺類や鉢類などの破片の可能性が高い。このため、全体の中での壺類と鉢類の占める割合は、破片数および重量で 30 ～ 35％程度であったことが推測でき、壺（特に壺Ｌ、壺Ｍ）が主要な生産品目であったことがわかる。このように、供膳具が生産の主体を占めるという点は揺るぎないものの、壺類をはじめとした供膳具以外の器種の生産も積極的におこなわれていたことが特徴的である。

さらに出土数の多い供膳具の器種組成を把握すると、杯蓋、杯Ｂ、杯Ａ、皿Ｃの順に出土量が多いことがわかる（表３－３・４）。口縁部残存率から割り出した個体数から全体の組成の比率をみると、杯蓋が 50％以上の比率を占めているが、杯Ａ・杯Ｂ・皿Ｃの口縁部計測法から算出した個体数は、底部計測法によって算出した個体数よりも遥かに少ないため、杯蓋の占める割合はそれほど多くはならない。そのため、杯蓋に関しては口縁部計測法によって算出した個体数を、その他の杯Ａ・杯Ｂ・皿Ｃについては底部計測法によって算出した個体数をそれぞれ用いることによって、供膳具の器種の実体に近い比率を求めることができると考えた。ただし底部片については、杯Ａか皿Ｃのどちらかとなる平底の底部片が併せて 390 個体分出土しており、これについては杯Ａと皿Ｃに割り振らなければ、全体の組成を把握できない。そのために、この平底の底部片については、単純に杯Ａと皿Ｃの底部計測法から算出した個体数の比率で、杯Ａと皿Ｃの個体数にそれぞれ割り振って調整し、供膳具全体の組成を求めることにした。このような調整を経た上で供膳具の器種組成を表したものが、表３－３の最も右側の欄になる。供膳具の中での各器種の占める割合は、杯蓋、杯Ｂ、杯Ａ、皿Ｃの順で変わりはないが、杯蓋の出土量が 40％弱となり、結果的に破片数や重量で導き出した比率と大きな齟齬はないものと思われる。また、重量の比率のうち杯蓋と杯Ｂの占める割合がやや高くなっているのは、このふたつの器種がやや厚手で重量感があるといった特徴が反映されていると推測することができる。ここで特筆すべき点としては、杯蓋が全体の 40％弱の割合を占めるなど、依然として杯蓋の出土量が最も多く、本来組み合うはずの杯Ｂの個体数よりも多く生産されていることは確実視できることである。この要因としては、杯蓋の方が杯Ｂよりも失敗する確率が高かった可能性も想定できるが、本来組み合うはずではない杯Ａに

表３　成合西王寺山窯跡出土須恵器の器種組成

１．須恵器の器種組成　（窯体・付属遺構・灰原など全ての遺構を含む）

器種	破片数	重量（g）	個体数（口縁部計測法）
供膳具	20998（62.5%）	623815（62.2%）	1578.4（90.0%）
壺類	2454（7.3%）	140580（14.0%）	132.3（7.5%）
壺類 or 鉢類	683（2.0%）	33455（3.3%）	1.0（0.1%）
鉢類	558（1.7%）	37335（3.7%）	31.6（1.8%）
甕	590（1.8%）	76200（7.6%）	5.0（0.3%）
硯	83（0.2%）	10795（1.1%）	2.1（0.1%）
九輪	174（0.5%）	19185（1.9%）	0.0（0.0%）
その他・不明	8057（24.0%）	61600（6.1%）	3.0（0.2%）
総計	33597	1002965	1753.4

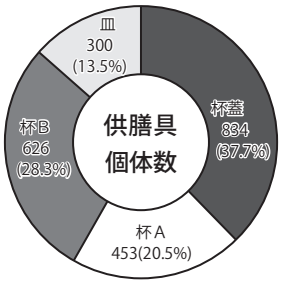


２．出土須恵器の器種

３．供膳具の器種組成　（窯体・付属遺構・灰原など全ての遺構を含む）

器種	破片数	重量（g）	個体数（口縁部計測法）	個体数（底部計測法）	個体数
杯蓋	7545（35.9%）	282205（45.2%）	834.4（52.9%）		834.4（37.7%）
杯A	1304（6.2%）	34730（5.6%）	102.0（6.5%）	218.0（15.8%）	452.7（20.5%）
杯B	3274（15.6%）	181525（29.1%）	166.9（10.6%）	625.8（45.4%）	625.8（28.3%）
皿C	1747（8.3%）	37255（6.0%）	125.3（7.9%）	144.3（10.5%）	299.6（13.5%）
杯身・口縁部（杯A or 杯B）	4221（20.1%）	43480（7.0%）	335.7（21.3%）		
平底・底部（杯A or 皿）	2814（13.4%）	42425（6.8%）		390.0（28.3%）	
不明・その他	93（0.4%）	2195（0.4%）	14.1（0.9%）	1.7（0.1%）	
供膳具総計	20998	623815	1578.4	1379.8	2212.5

※右欄の個体数については、杯蓋は口縁部計測法で、杯A・杯B・皿Cは底部計測法によってそれぞれ算出。
※このうち杯Aと皿Cについては、平底底部を杯A・皿Cの出土量比で、それぞれに割り振って加算し、個体数を算出。



４．供膳具の器種組成

５．壺類・鉢類・甕類ほかの器種組成　（窯体・付属遺構・灰原など全ての遺構を含む）

器種	破片数	重量（g）	個体数（口縁部計測法）	個体数（底部計測法）
壺L	31（0.7%）	3685（1.2%）	8.1（4.7%）	4.7（2.6%）
壺M	273（6.2%）	12110（4.1%）	62.8（36.7%）	54.1（30.0%）
壺A	59（1.4%）	3605（1.2%）	4.6（2.7%）	1.1（0.6%）
壺蓋	65（1.5%）	2755（0.9%）	13（7.6%）	
広口壺	21（0.5%）	710（0.2%）	1.3（0.8%）	
平瓶	185（4.2%）	15095（5.1%）	3.7（2.2%）	3.3（1.8%）
壺（不明）	1800（41.2%）	100470（33.7%）	38.6（22.6%）	93.3（51.7%）
甕	517（11.8%）	74235（24.9%）	3.9（2.3%）	1.7（0.9%）
土師器系甕	73（1.7%）	1965（0.7%）	1.0（0.6%）	
鉢	291（6.7%）	15705（5.3%）	20.5（12.0%）	4.0（2.2%）
盤	200（4.6%）	17720（5.9%）	9.1（5.3%）	9.3（5.1%）
硯	83（1.9%）	10795（3.6%）	2.1（1.2%）	4.3（2.4%）
その他・不明	770（17.6%）	39515（13.2%）	2.3（1.3%）	4.8（2.7%）
総計	4368	298365	171.0	180.6

も、杯蓋が伴っていたことを想定する必要があるだろう。

壺類や鉢類をはじめとしたその他の器種の組成については、表３－５にて示した。全体の器種組成を検討したところ、単純に不明とした破片の多くは、前述したように、供膳具以外の壺類や鉢類の破片である可能性が高いが、どの器種になるか判断がつかないためここでは除外している。そのためこの表３－５では、壺類や鉢類をはじめとした供膳具以外の器種の中での生産品目のおおよそを把握することができる。まずここからは、壺類が出土破片数や重量の比率において、それぞれ半数程度を占めることから、供膳具以外の器種の中では壺類の出土が多いことがわかる。その中でも壺Mの出土数が最も多く、主力的な生産品目であったことがわかる。さらに壺類（不明）としたもののうち、口縁部の破片の多くは端部が上下に拡張したもので壺Ｌや壺Ｎの可能性が高く、底部の破片は高台のある底部片が大半であることから、壺Ｌや壺Ａ、平瓶、広口壺などにあたる可能性が考えられる。さらに計測後におこなった接合検討の結果からは、これらの大半は壺Ｌの破片であったことから、壺Ｌも主力的な生産品目のひとつであったことがわかり、壺Ｌ・壺Mを併せた長頸壺全体で 100 ～ 150 点程度の個体数を算出することができる。その他の器種については、口縁部計測法や底部計測法から算出される個体数はせいぜい多く見積もって５点程度であるが、甕や硯など特定の器種については、特徴的な部位の数や調整、焼成、器壁の厚さなどから個体識別が可能である。そのため、少なくとも広口壺は合わせて７点、平瓶 10 点、鉢Ｆ ４点、甕６点、土師器系の甕３点、円面硯 10 点、風字硯１点、鉢Ａ６点、花瓶２点、九輪（法輪）２点を、それぞれ確認することができる。壺Ａや鉢Ｄ、盤などの大型の器種は出土破片から個体数を割り出すことは難しいが、法量にバラエティーがあり、もう少し多い個体数を見積もることができる。

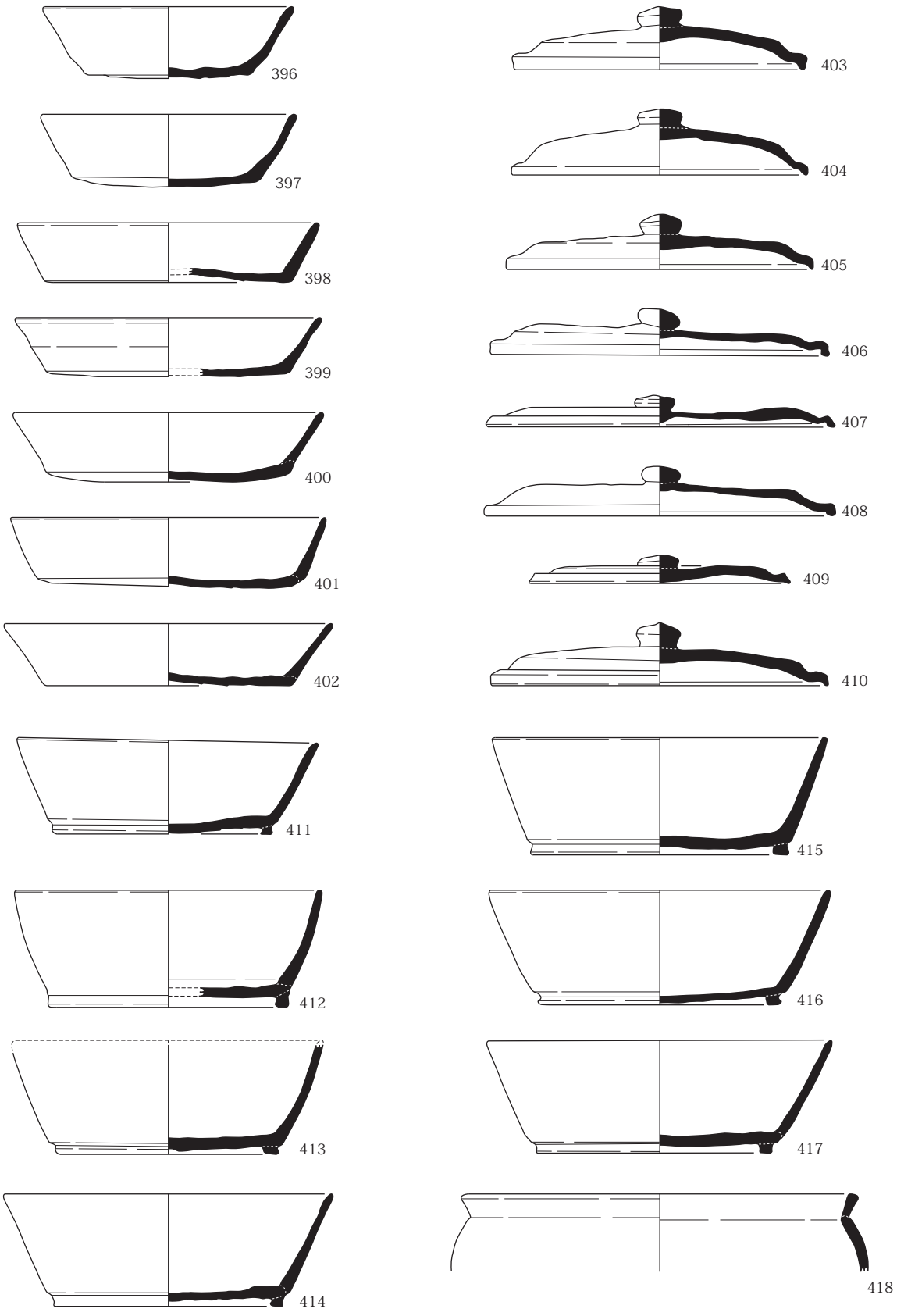
このように成合西王寺山窯跡で生産された須恵器は、供膳具の生産を主体とする窯であることに疑いはないものの、壺類や鉢類も一定程度の生産の割合を占めており、幅広い器種を網羅的に生産したことが大きな特徴といえる。特に円面硯や風字硯、鉢Ａ、花瓶、九輪（法輪）なども併せて生産されていることから、一般集落よりはむしろ都城や官衙、寺院などへの供給を目的とした可能性が高いといえるだろう。

窯体および付属遺構出土の須恵器

窯体内出土遺物　窯体内からは総量 5075 点、約 75.710kg の須恵器が出土している。この中で 380 ～ 395 は、開口部付近の床面に伏せて据えられた状態で出土した個体で、いずれもよく焼き締り、破面や剥離面が二次的な焼成を受けていることから、最終操業以前の失敗品が焼台として再利用されたと考えられる（図 117、図版 36）。半裁された杯Ｂが多く、他に杯蓋や壺Ｌ、平瓶、甕の破片などがある。杯Ｂ（381 ～ 392）は、口径が器高の３倍程度の大きさで、体部が上方にまっすぐのびる深手の個体が多く、高台は底部の外端よりやや内側に付けられる。１個体あたりの重量は、口径 20cm 大の大型品で 500 ～ 600 ｇ、口径 16cm 大の中型品で 300 ～ 350 ｇに復元でき、厚手で重量感のある個体が多い。381 は内面に沈線のような条痕がみられるが、意図的なものであるかどうかははっきりしない。394 平瓶は屈曲より下半が残る個体で、杯Ｂと同じように伏せた状態で出土している。この他の器種についてはいずれも小破片で、かませの破片として転用されたものと考えられる。

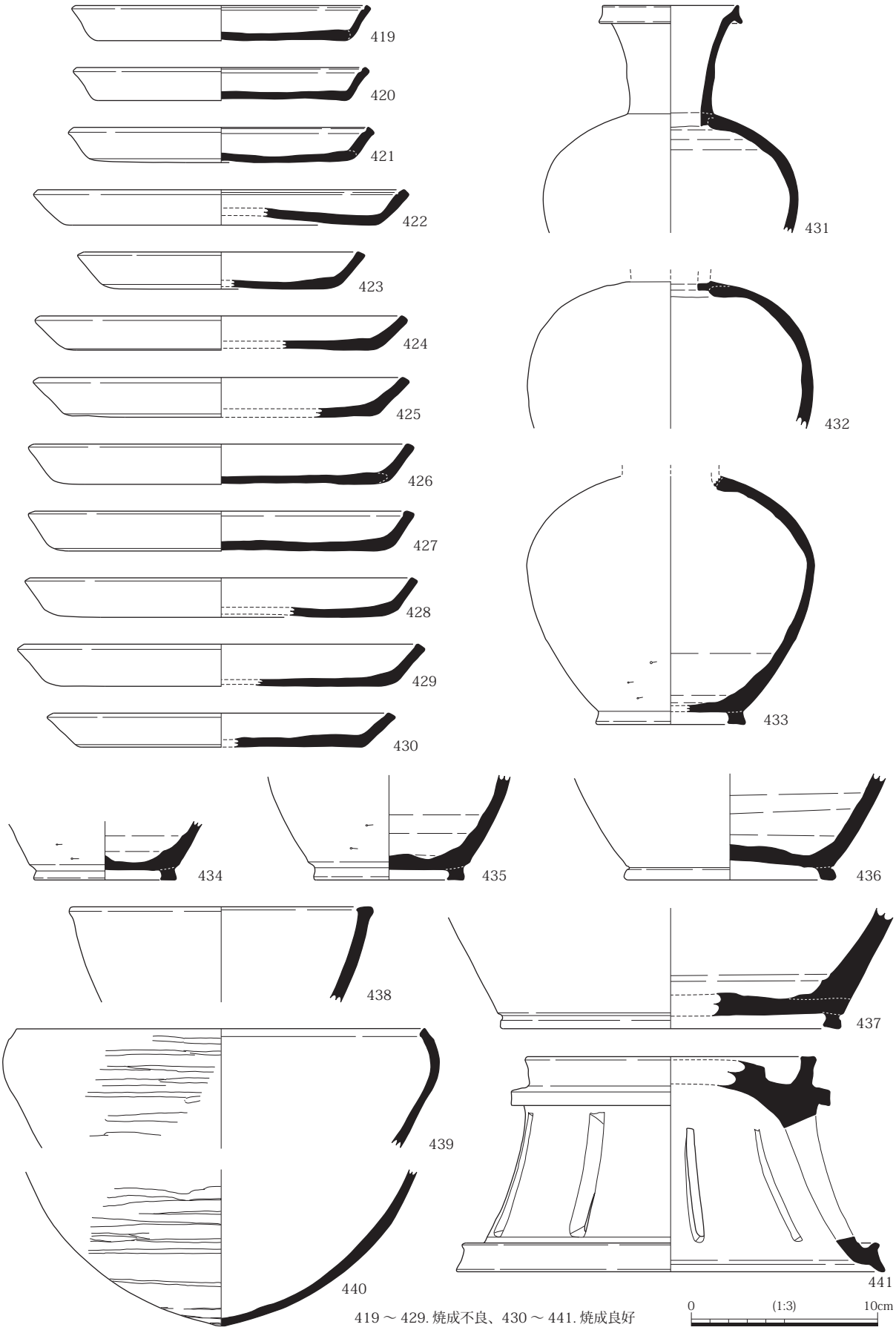
396 ～ 441 は、最終床面直上の燃焼部から焚口までの範囲でまとまって出土した個体である。このうち 396 ～ 408・411 ～ 429 については、焼成が非常に悪い生焼けの個体で、最終操業時の失敗品と考えられる。焼成が不良の個体はほとんどが供膳具で、最終焼成時に供膳具が置かれた場所の火回りが悪かったことがわかる。杯Ａ（396 ～ 402）はやや深手で口径が小さく、底部にやや丸みをもつ個体（396・

図 117　窯体内出土遺物（1）　窯尻周辺



396 ～ 408・411 ～ 418 . 焼成不良、409・410. 焼成良好

図 118　窯体内出土遺物（2） 焼成部～焚口



419 ～ 429. 焼成不良、430 ～ 441. 焼成良好

図 119　窯体内出土遺物（3）　焼成部～焚口

397）と、浅めで口径が大きい個体（398 ～ 402）がある。底部と体部の境に接合痕が確認できる個体があることから、円盤状の底部から体部は粘土紐もしくは輪積みされたことがわかる。杯蓋（403 ～ 410）は天井に丸みをもつ形態の杯蓋Ⅰ（403・404・410）と、扁平な形態の杯蓋Ⅱ（405 ～ 409）の両者がある。杯Ｂ（411 ～ 417）は、焼台に転用された個体と同様に、やや深手で高台が底部の外端からやや内側に取り付くものが多い。419 ～ 430 は皿で、このうち 423 ～ 430 は口縁端部に面をもつ皿Ｃである。口径 14 ～ 15cm 程度の個体もみられるが、口径 18 ～ 20cm のサイズの個体が特に多い。一方で 419 ～ 422 は口縁部内面に沈線を有する皿ＣⅡで、端部がやや丸みをもつ個体（419・420）と、423 ～ 430 と同様に口縁端部に面をもつ個体（421・422）がある。口径は 12 ～ 20cm 大までサイズのバリエーションがあるが、16 ～ 17cm 程度のサイズの個体が多数を占める。このような内面に沈線をもつ個体は基本的には窯体内以外からは出土しておらず、焼成が悪い個体ばかりであることから、最終操業時のみに焼成された器種と考えられる。418 については焼成不良の鉢Ｄであるが、供膳具以外の器種で焼成不良のものはこの個体以外にはほとんどない。

409・410・430 ～ 441 はよく焼け締った個体で、内外面に熔着した個体や破面に二次的な焼成を受けた個体も多く、失敗品が焼台やかませ片として窯体内にもちこまれたものが大半であったと考えられる。床面に据え置かれた転用焼台には杯Ｂを選択的に用いていたが、かませ片として使用された破片は特定の器種を選択した様子は窺えない。441 円面硯については、灰原出土の破片と接合関係がある。

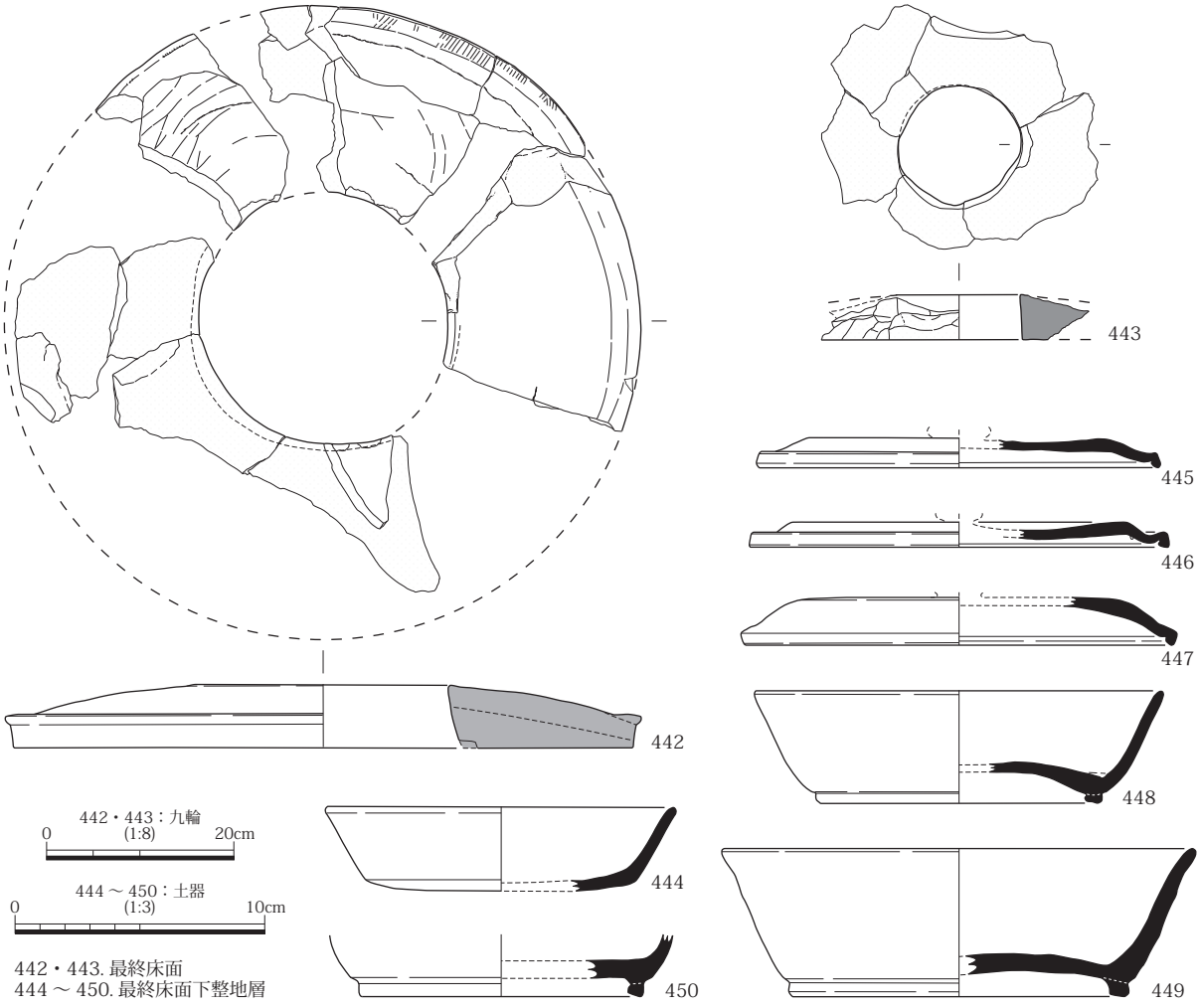
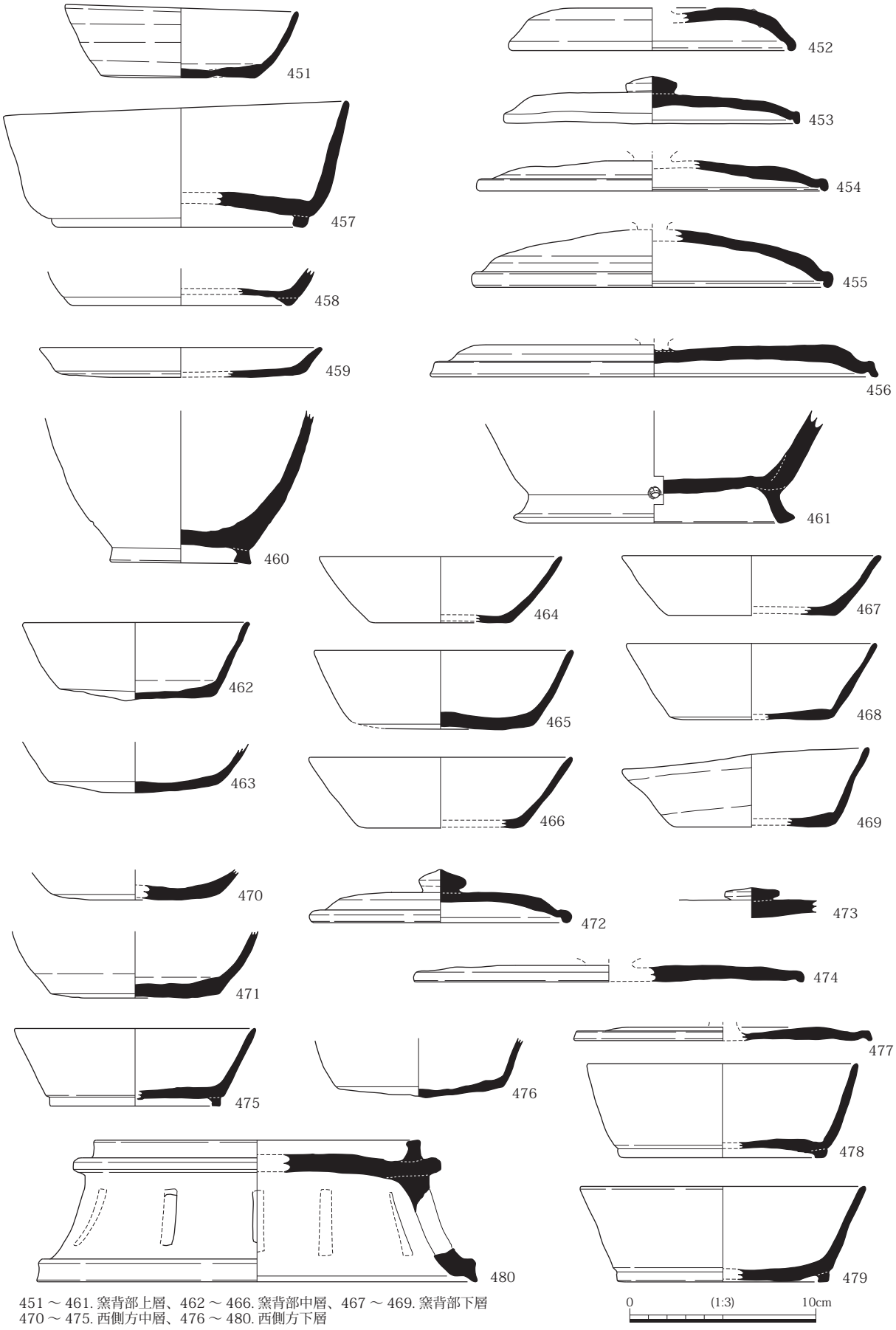


図 120　窯体内出土遺物（4）　九輪・整地層



451 ～ 461. 窯背部上層、462 ～ 466. 窯背部中層、467 ～ 469. 窯背部下層
470 ～ 475. 西側方中層、476 ～ 480. 西側方下層

図 121　450 溝出土遺物

窯体内から出土した破片にのみ降灰が著しく、自然釉が付着していることから、焼成に失敗した製品の破片が、窯体内に持ち込まれていたことを裏付ける資料となる。

442・443 は環状の土製品で、軟質の焼き上がりのものである。442 は径 67.8cm、内円の径が 26.5cm、高さ 6.7cm を測る。443 は内側部分のみが残る個体で、442 に比べて小型で、内円の径が 13.1cm、高さが 4.8cm を測り、443 の径と内径の比率などを参考にすると、径は 30 ～ 35cm 程度に復元される。両個体とも内面や外面、底面の一部に布目痕がみられる。ほぼ全ての破片が最終床面から出土しているが、442 の中の最も大きな破片のみが灰原から出土している。また、壁面に埋め込まれた状態で出土した破片もあることから、最終操業時に焼成された個体ではなく、転用焼台として窯体内に持ち込まれたものと考えられる。この遺物の性格としては、寺院の塔の頂部を飾る相輪の九輪（法輪）部分にあたる可能性が想定される。ただし風鐸を取り付けるスカシ孔などはなく、単純な環状の形態で、類似する個体は見出しがたい。[4)]

444 ～ 450 は焚口床面の整地層（図 103・104 － 33）から出土した個体で、最終操業時よりも前に生産された製品と考えられる。そのうち 450 杯 B については 466 ピット上面から出土している。熔着した個体や焼けひずみがある個体も含まれる。447 杯蓋のように口縁端部の形態がやや古手の個体もみられるが、全体的には最終操業時の床面出土の須恵器と、時期的に大きな差はみられない。

450 溝　埋土内からは総量 459 点、6.480kg の須恵器が出土している。特に窯背部から北西側方にかけて、炭・焼土とともに須恵器が多く出土している。451 ～ 469 が窯背部から北西側方までの範囲から出土した個体で、上層（451 ～ 461）・中層（462 ～ 466）・下層（467 ～ 469）に大きく分けることができ、層位に関わらず焼成不良の杯 A や皿の出土量が多い。上層から出土した須恵器は器種にややバリエーションがみられ、杯蓋や壺類はいずれも焼成が良いことから、かませ片として転用された可能性が高い。このうち 461 壺については、底部に円孔が施されており、全体の形状が不明であるが、やや特殊な器形と推測される。中層・下層からは焼成不良の杯 A（462 ～ 469）が特に多く、これらの遺物は初期の操業段階の失敗品と考えられる。470 ～ 480 は溝の西側から出土した個体で、窯背部から下方に流れてきたと考えられる。中層（470 ～ 475）と下層（476 ～ 480）からまとまって須恵器が出土している。全体的にみると、出土地点や層位ごとに形態的な差はみられない。焼成不良の杯 A や皿が特に多いことから、杯 A や皿は窯尻付近で焼成され、排煙口から窯出しされ、失敗品が溝内に投棄された可能性が推測される。

451 くぼみ　埋土内からは総量 138 点、1.440kg の須恵器が出土している。450 溝から 451 くぼみにまたがった範囲から須恵器が多く出土しており、482・483 のような熔着した杯蓋の破片や、484 鉢 A などを図化した。この他には、450 溝の窯背部出土の個体と同様に、杯 A や皿が多く出土しており、大半は焼成が悪い。杯 B や杯蓋、壺類などその他の器種の出土量は少なく、いずれも焼成が良好で、転

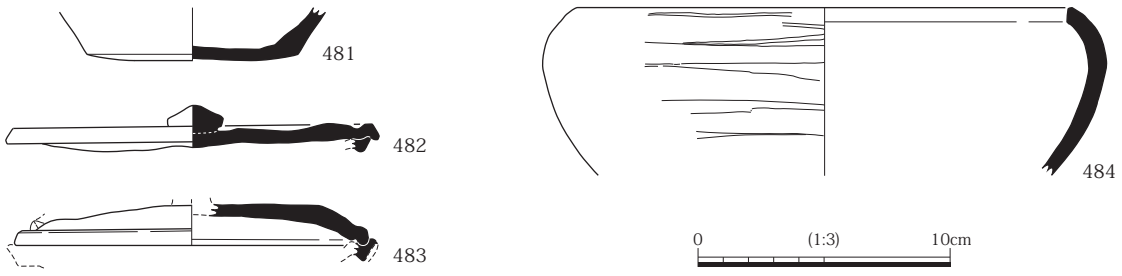


図 122　451 くぼみ出土遺物

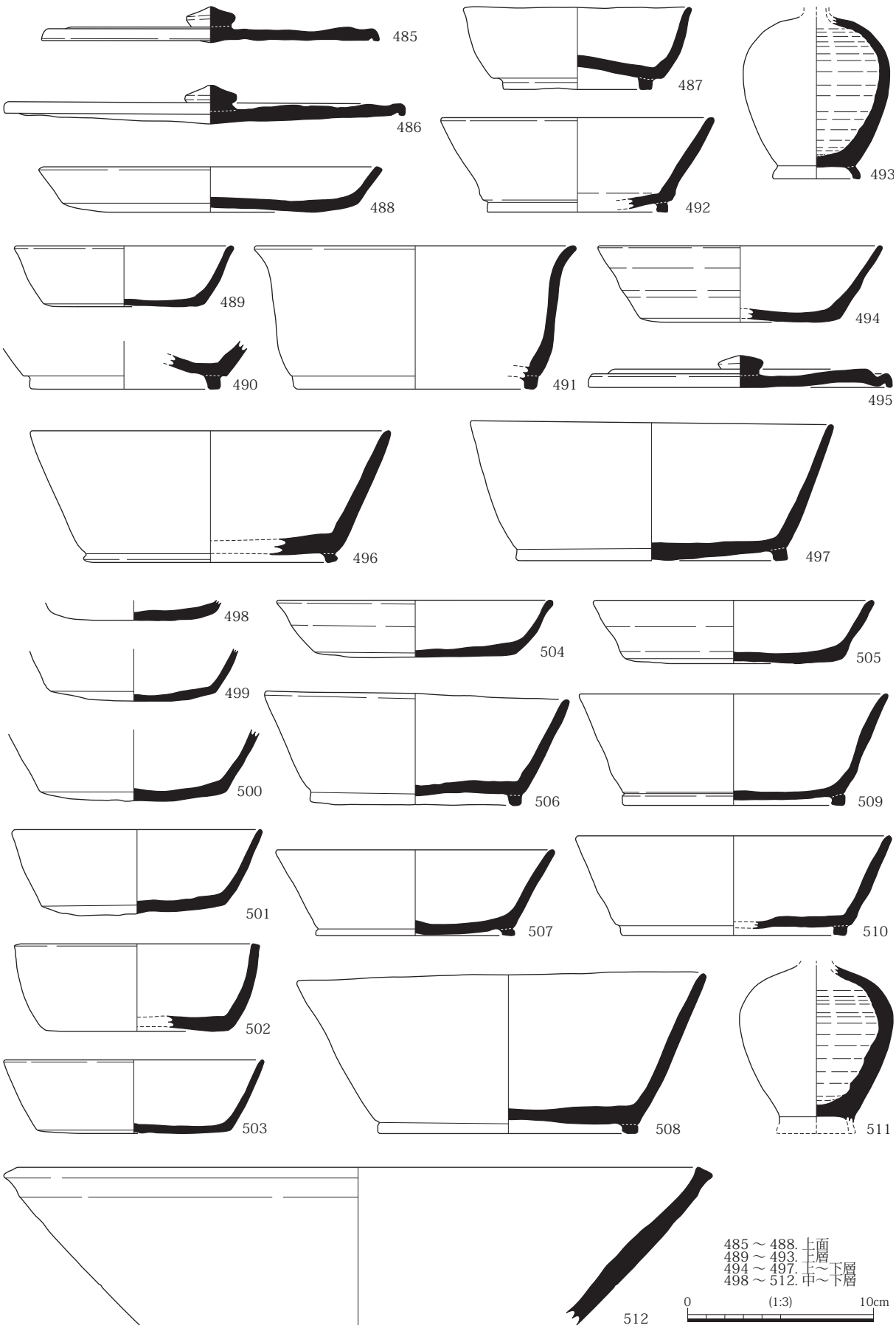


図 123　452 平坦面出土遺物

用焼台やかませ片として使用された可能性が想定される。

452 平坦面　埋土内からは総量 522 点、6.575kg の須恵器が出土している。このうち 485 ～ 488 が平坦面の上面（図 110・111 － 5）、489 ～ 493 が上層（図 110・111 － 18）、494 ～ 497 が上層から下層のうちのいずれか、498 ～ 512 が中～下層（図 110・111 － 22 ～ 28）から、それぞれ出土している。これらの多くは 450 溝と同様に、焼成不良の杯 A や皿が特に多く、窯背部で投棄された須恵器が、452 平坦面に落ち込んで堆積したものと推測される。出土した須恵器のうち、杯 B については焼成が悪い個体と良い個体の両者がある。杯蓋や壺、鉢類については、いずれも焼成が良好で、転用焼台かかませ片として使用されたか、もしくは平坦面で失敗品を廃棄したかの、どちらかを想定することができる。杯 A や皿に関しては、前述したように焼成が悪い個体が多い。出土層位ごとに形態的な差はみられず、450 溝出土の須恵器と大きく変わるところもない。さらに 506 杯 B は、452 平坦面から出土した

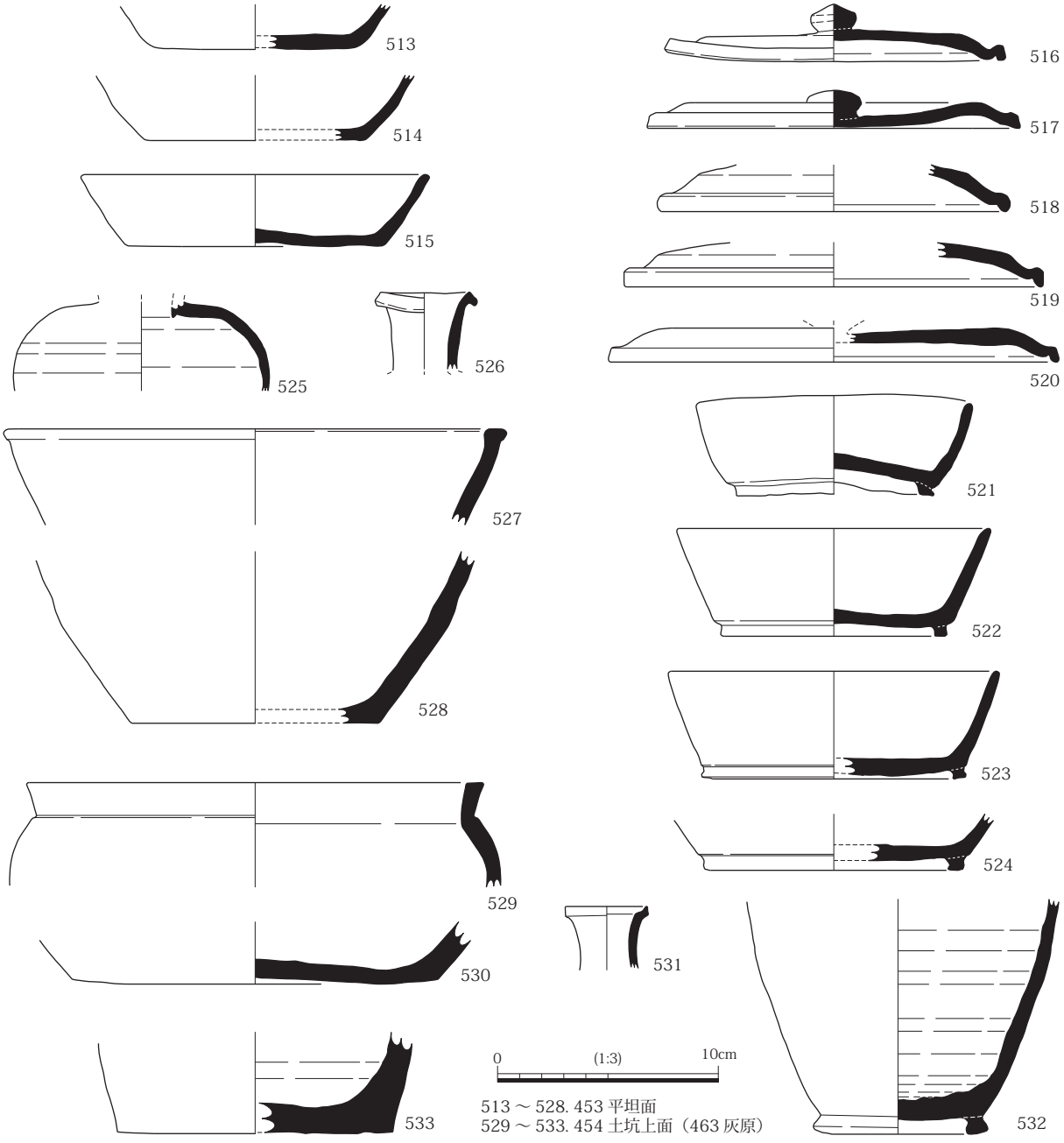


図 124　453 平坦面および 454 土坑上面（463 灰原）出土遺物

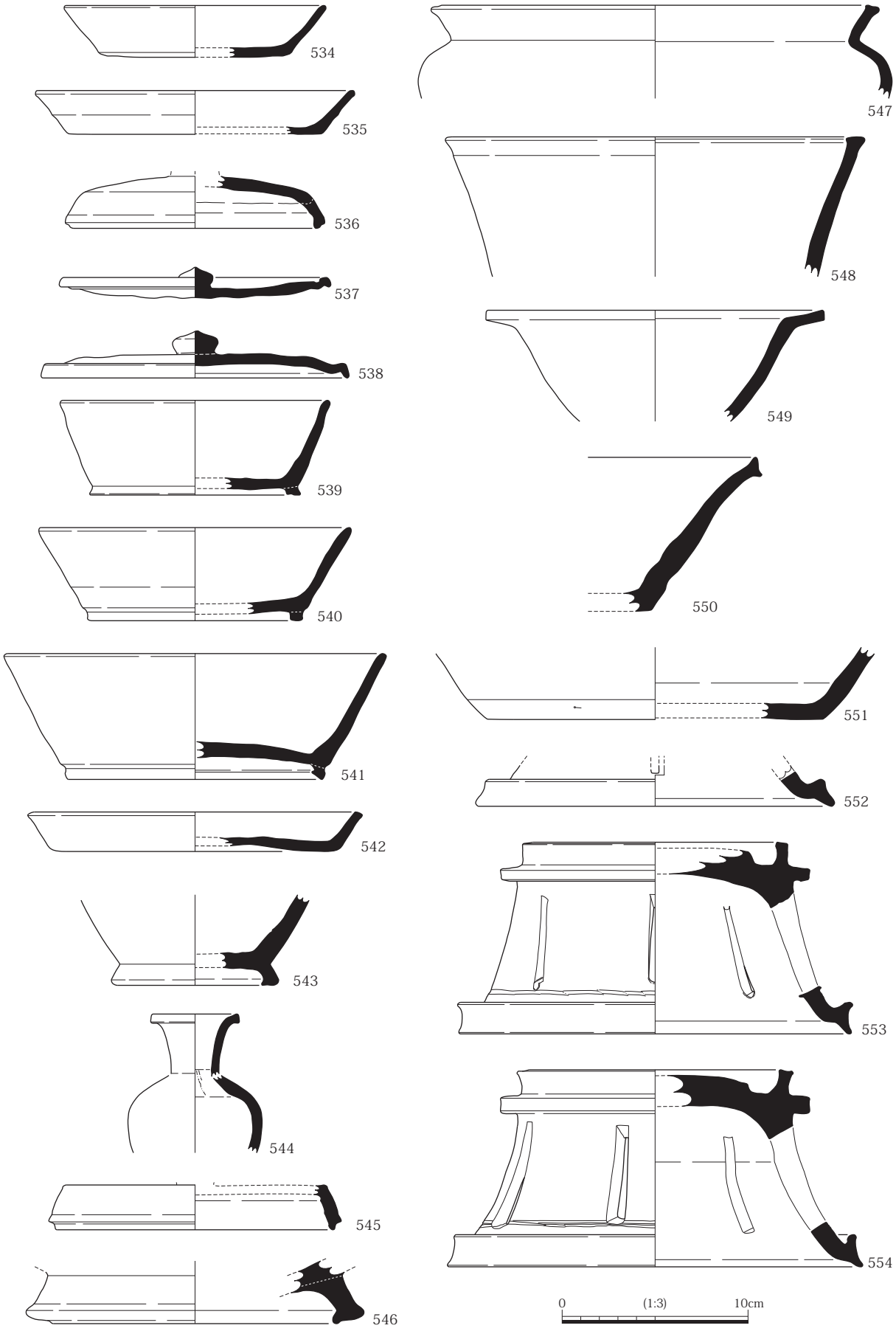


図 125　454 土坑出土遺物

破片と 450 溝の北西側から出土した破片が接合した個体であり、窯背部で投棄された須恵器片が窯体の左右に分かれて流れていったことを示している。

453 平坦面　埋土内からは総量 137 点､3.700kg の須恵器が出土している。平坦面の埋土の中～下層（図 111・112 －７～９）での出土量がやや多いが、452 平坦面と比べると出土量は少ない。焼成が不良の個体も多く、平坦面で選別・投棄された破片が溜まったものと推測される。450 溝や 452 平坦面と同様に供膳具の出土比率が高く、杯Ａや皿は焼成不良のものが多い一方で、その他の器種では焼成が良好なものが多い。

454 土坑　上面出土の個体も含め総量 1725 点、26.350kg の須恵器が出土している。供膳具が 50％の割合を占めるが、壺類や鉢類の比率がやや高いと考えられる。454 土坑から出土した須恵器は、窯体内やその他の遺構から出土した個体と大きく変わるところはないが、細片の個体や熔着・窯変した個体も多いのが特徴として挙げられる。また硯や甕など出土点数が少ない器種については、灰原出土の破片との接合関係が確認されており（553・554、図 137：714、図 138：718）、灰原出土の破片と接合する個体が他にも多数あることが予想される。やや特殊な遺物としては、口縁部が折れ曲がって水平になる 549 鉢がある。これについては窯変した可能性も捨てきれないが、篠窯の意泉院裏山窯[5)]などに類例がある。他には、円面硯の破片が３個体分出土しており、このうち 553 と 554 については、灰原出土の破片と接合関係がみられる。スカシ孔の下端に断続的な沈線が施されており、スカシ孔の下端の位置の目安のためにつけられた割付ラインと考えらえる。

455 土坑・456 土坑　上面出土の分も含め、２つの土抗をあわせて総量 144 点、2.750kg の須恵器が出土している。他の遺構と同様に、供膳具の出土比率が高く、焼成不良の個体や窯変した個体が含まれ、他の遺構から出土した個体と大きく変わるところはない。

灰原出土の須恵器　出土遺物の大半は灰原からの出土で、総量 25,021 点、871.180kg の須恵器が出土している。遺物の取り上げについては、畦を中心として東西南北に区分けし、検出面から５cm まで、検出面より５～ 10cm、地山直上とに、大まかに分けて遺物の取り上げをおこなった。また、灰原の上

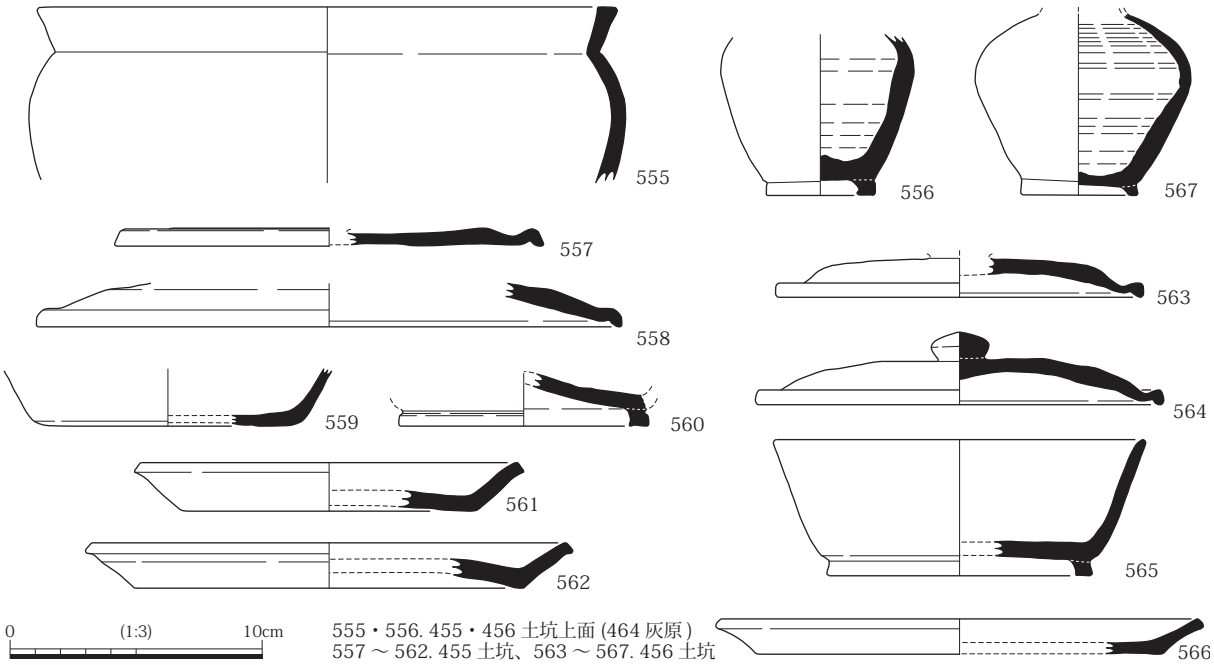


図 126　455・456 土坑、464 灰原出土遺物

面の２層中からも須恵器は多く出土しており、これらは灰原の堆積層出土の個体と接合関係が多くみられた。このように、遺物の取り上げの際には、出土地点や層位に留意しながら取り上げをおこなったが、大型器種が斜面裾の谷部から出土する傾向がみられる以外には、大きな傾向は見出しがたかった。このため、出土地点や層位に大きな傾向の違いがみられないことから、灰原全体を一括して器種ごとに出土遺物の報告をおこなうこととし、出土地点や層位についての情報は巻末の観察表に記載しているため、そちらを参照されたい。

供膳具　杯Ａ、杯蓋、杯Ｂ、皿Ｃが供膳具の主体を占め、この他に皿Ｅ、高杯などが数点出土している。杯Ａは、器高 2.5cm を目安に皿と区別することができ、器高は３～４cm におさまる個体が多く、その中でも 3.5cm 前後の個体が特に多い（568 ～ 581）。最小で口径 10cm 未満の小型品や（568・569）、20cm 程度の大型品もみられるが、13 ～ 16cm 程度の中・小型品が主体を占め、その中でも 15・16cm 前後の個体が 55％程度の割合を占める。体部はいずれも斜め外方に立ち上がって、底部はやや丸みをもつ個体と平滑な個体が存在する。口縁端部は基本的には丸くおさめられ、581 のように四角い個体は例外的である。焼成が良好で灰色の個体と、焼成が悪く灰白色やにぶい黄褐色の個体の両者がみられるが、焼成の悪い個体の占める比率がやや高い。底部と体部の立ち上がりの断面で、粘土紐の接合痕がみられる個体があり、焼成不良の個体を中心に底部と体部の境で破損している個体も多いことから、円形の粘土板から体部は紐積みないしは輪積みされていたと考えられる。個体ごとに大きな時期差は見出しがたいが、574 については体部が丸みをもって立ち上がっており、形態的には９世紀前半から中頃のやや新しい時期に多くみられる。

杯蓋は、天井部が笠形の形態で器高が高い杯蓋Ⅰ（582 ～ 588）と、扁平な形態で口縁端部がＳ字状に屈曲する杯蓋Ⅱ（589 ～ 602）の２形態がある。ただし、両者の中間的な形態もあり、必ずしもはっきり区別できるわけではない。杯蓋Ⅰとした個体はつまみを含めた器高が３cm 以上で、口径は 12 ～ 20cm のサイズとなる。このうち 15 ～ 16cm のサイズの個体が主体を占め、20cm を超える個体は少ない。582 ～ 586 のように口縁端部を強くナデによって、内面に顕著な凹みがみられる個体が多く、整形の際の特徴がよくあらわれている。その一方で、587・588 のように端部がＳ字形に屈曲する個体

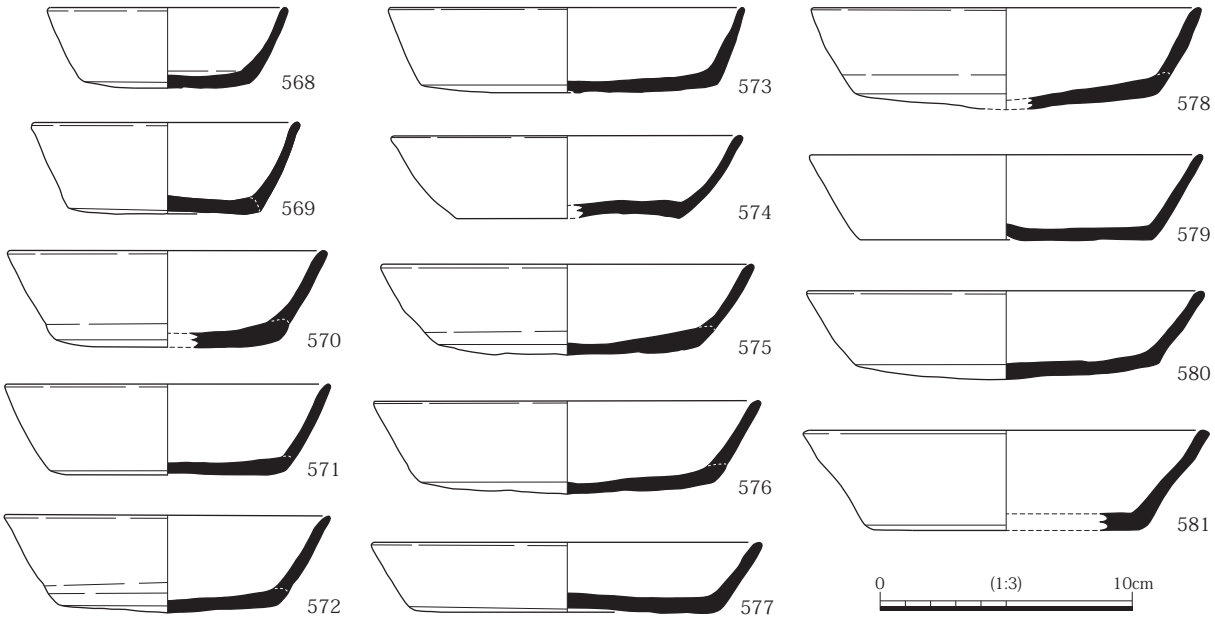


図 127　灰原出土遺物（１）　杯Ａ

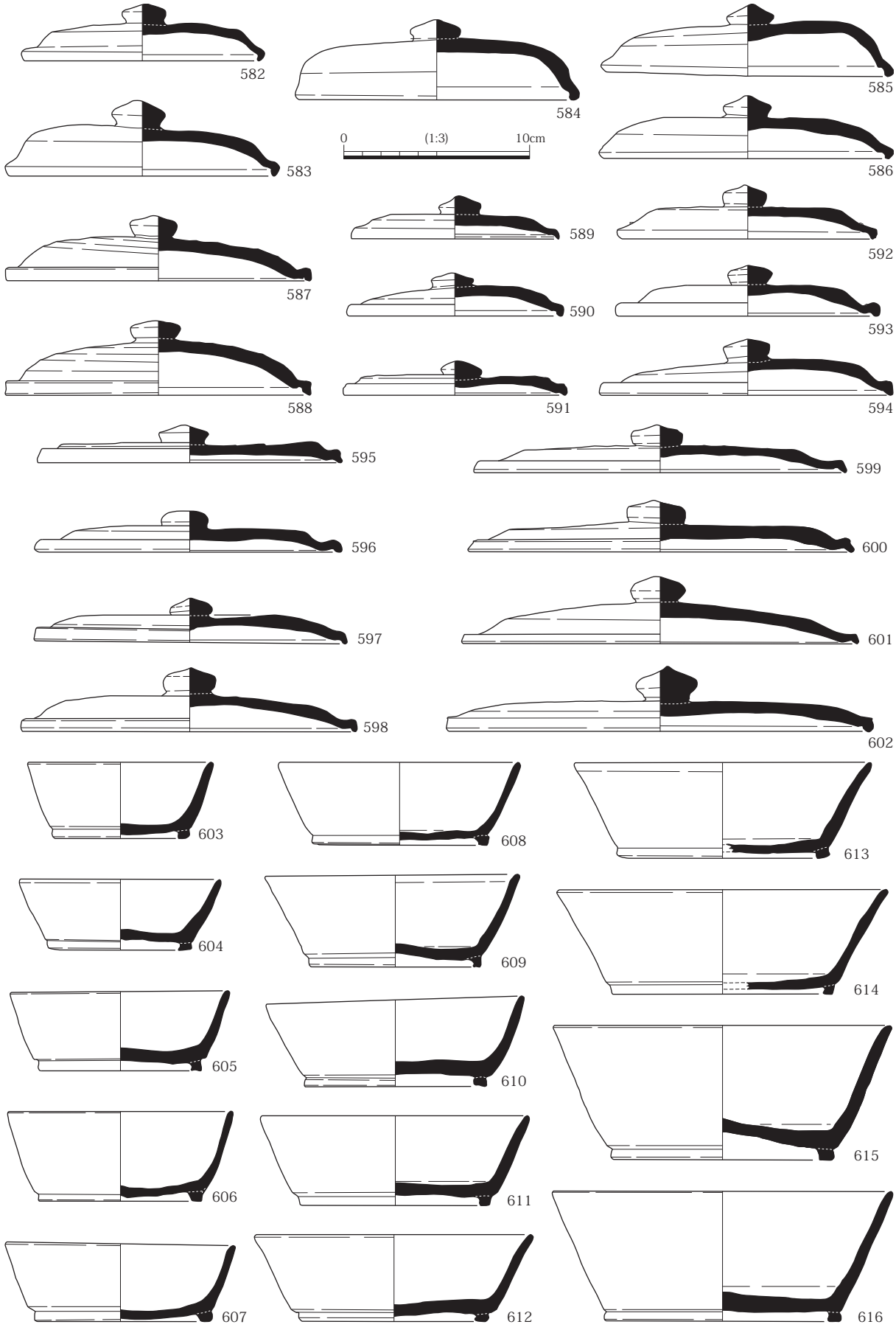


図 128　灰原出土遺物（2）杯蓋・杯B

もある。杯蓋Ⅱについては、大型品（601・602 など）を除けば、つまみを含めた器高が 3 cm 以下の扁平な個体が多く、口径 10 ～ 25cm までサイズにばらつきがみられる。その中でも主体を占めるのは口径 15 ～ 18cm の中型品で、特に 16・17cm の個体が約 40％程度を占めるが、口径が 20cm を超える大型品も 10％以上はある。ただし、口径 23cm 以上と 12cm 以下のサイズの個体は特に少ない。口縁端部の形態はいずれも S 字形に屈曲し、この屈曲部の外面の凹みに剥離痕跡がみられる個体が多い。さらにこれらの多くは、この凹みを境に外側にのみ降灰がみられることから、この凹み部分に杯 B の口縁を重ねて焼成していたことが推測される。また、焼成が良好で、灰色や暗灰色の焼き上がりの個体が多いといった特徴もある。杯蓋Ⅰと杯蓋Ⅱは、量的には後者が圧倒的に多い。両者の中間的な形態のものもあって、両者の区別が難しい個体も多いため、出土量比ははっきりしないが、杯蓋全体に占める杯蓋Ⅰの割合はせいぜい 10％程度である。また前述したように、出土個体数や破片数からは、本来的にセット関係がある杯 B よりも杯蓋の方が多く出土しており、杯 A の蓋としても使用されていた可能性もある。

杯 B は口径 10 ～ 22cm、器高 3.5 ～ 8 cm まで、サイズにばらつきがみられる。口径 13 ～ 17cm 程度の中・小型品が主体を占め、その中でも口径 14 ～ 15cm の個体が約 40％程度の割合を占める（603 ～ 617）。また、杯蓋は口径がひとまわり大きい 16 ～ 17cm の個体が主体を占めており、口径 14 ～ 15cm の杯 B と口径 16 ～ 17cm の杯蓋がセット関係になることがわかる。さらに、その出土比率がどちらも 40％程度で、よく整合している。大型品はやや深手で、体部がやや外開きの形態の個体も多く（613 ～ 616）、いずれも底部の外端からやや内寄りに高台が取り付く。杯 A や皿に比べると、焼成が良好で灰色から暗灰色の焼き上がりの個体が多い。616・617 は、破断面が二次的な焼成を受けており、焼台として転用された個体と考えられる。また 617 には、底部にいわゆる爪形状圧痕がみられ、この個体 1 点にのみみられる。

皿は、大半が口縁端部に面をもつ皿 C である（618 ～ 628）。内面に沈線が施される皿 C Ⅱについては、窯体内出土の個体にほぼ限られ、灰原からは基本的に出土していない。器高は基本的には 2.0cm 以下で、口縁の形状もあわせると、杯 A とは容易に分別できる。口径は基本的には 13 ～ 23cm までにおさまり、サイズにばらつきがある。この中で主体を占めるのは、口径 17 ～ 20cm のサイズのもので、特に 18 ～ 19cm の個体が 60％近くの割合を占めるなど、杯 A や杯 B に比べると、口径がひとまわり大きな個体が多い傾向がある。外面底部には接合痕を明瞭に残す個体がいくつかみられ、杯 A と同様に円盤状の底部から体部は粘土紐積みもしくは輪積みされていたと考えられる。628 は、体部がやや外反し、端部が丸くおさめられた個体である。器壁もやや薄手で、例外的な存在である。

その他の供膳具としては、皿 E や高杯などがみられるが、出土した個体は図化したものに限られる（629 ～ 632）。灯明皿と考えられる小型の皿 E（629・630）は、2 点出土しており、口径 9.8cm、器高 2.4 ～ 2.5cm を測る。底部から体部にかけて厚手につくられており、口縁部は外反する。高杯は脚部のみが 2 点出土しているが、杯部の形態が不明である。いずれも脚柱部の中央付近に 2 条の沈線がみられる。

壺類（貯蔵具）　壺類は長頸壺の壺 L・壺 M が主体を占めるが、この他に壺 N、壺 A、壺蓋、壺 E、壺 H、壺 Q、平瓶などがみられるなど、器種のバリエーションは豊富である。

長頸壺は全て肩部に丸みをもつ壺 L で、肩部が屈曲する壺 K は出土していない。大・中・小の 3 サイズに分けることができる。小サイズの個体（633 ～ 639）は、全形が判明する 635 ～ 637 から、器

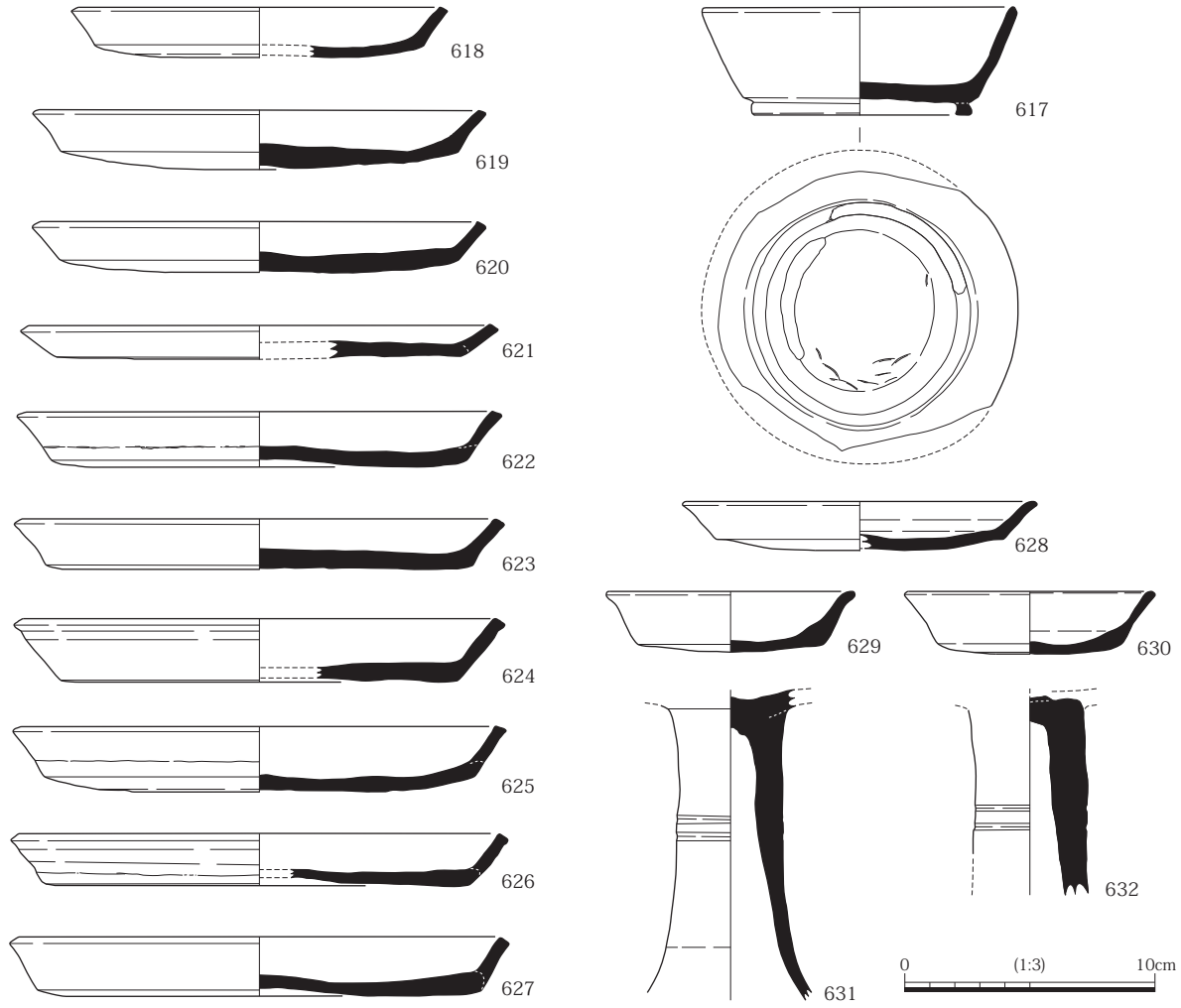


図 129　灰原出土遺物（3）　皿Cほか供膳具

高 15 ～ 16cm、最大径 12cm 程度の大きさになる。中サイズの個体（640 ～ 648）のうち、全形が唯一判明する 640 は、器高 20.1cm、最大径 15.0cm を測る。大サイズの個体（649 ～ 651）については、全形が判明する資料はないが、頸部から口縁までの高さ（649）と、底部から頸部までの高さ（650）を合わせると、器高 25cm、最大径 18 ～ 20cm 程度に復元できる。出土した壺Ｌは口径や頸部長、頸部径などいずれの法量も、このサイズに近い値におさまることから、サイズにこの大・中・小の規格性があったことが窺われる。

体部の形態は 633 や 634 のように、ややなで肩気味の形態もみられるが、多くは比較的丸みをもって肩が張る形態で、最大径は中位よりやや上方にくる。口縁部は上下に肥厚させ、端面が内に傾く個体が多い。体部は内外面ともにナデ調整で整形されるが、大サイズの個体については、外面下半にケズリを施す。底部にはやや外開きに踏ん張るしっかりした輪高台が取り付く。底部の切り離しの痕跡については、高台の貼付けの際のナデつけによって消されており、底部の切り離しの方法がわからない個体が多いが、635 や 648 のように、糸切り痕がはっきりと残る個体もある。そのため、中サイズ以下の個体については、基本的には底部の切り離しに糸切りが採用されていた可能性が高いと推測される。頸部の接合方法については、円盤閉塞法による三段接合と回転絞り閉塞法による二段接合の両者がみられ、三段接合の個体が占める割合が多い。二段接合は中サイズ以下の個体で確認でき、小サイズの個体に多い傾向がある。そのうち 633・634 については、頸部の接合痕がはっきり確認できない個体で、肩部

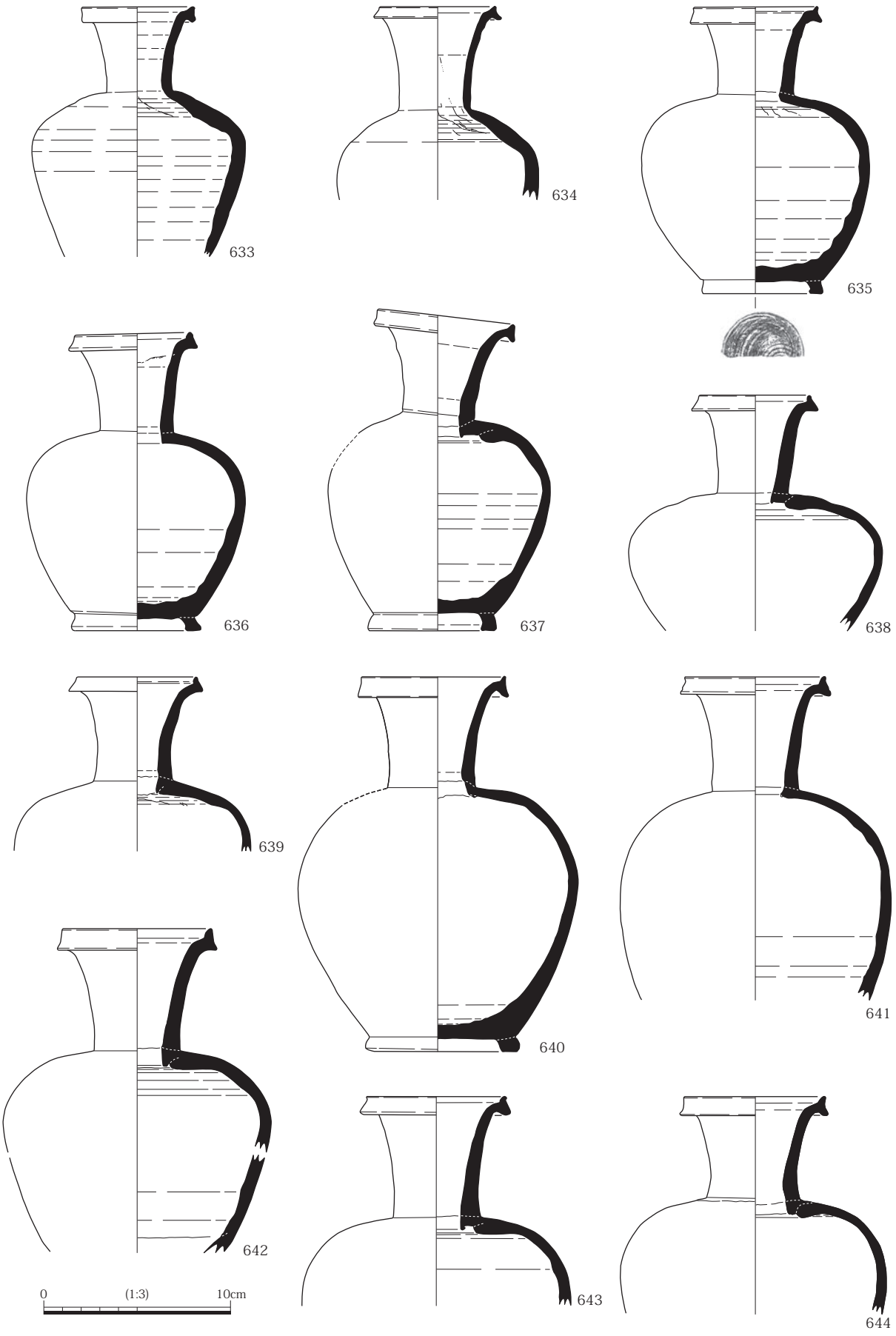


図 130　灰原出土遺物（4）　壺L

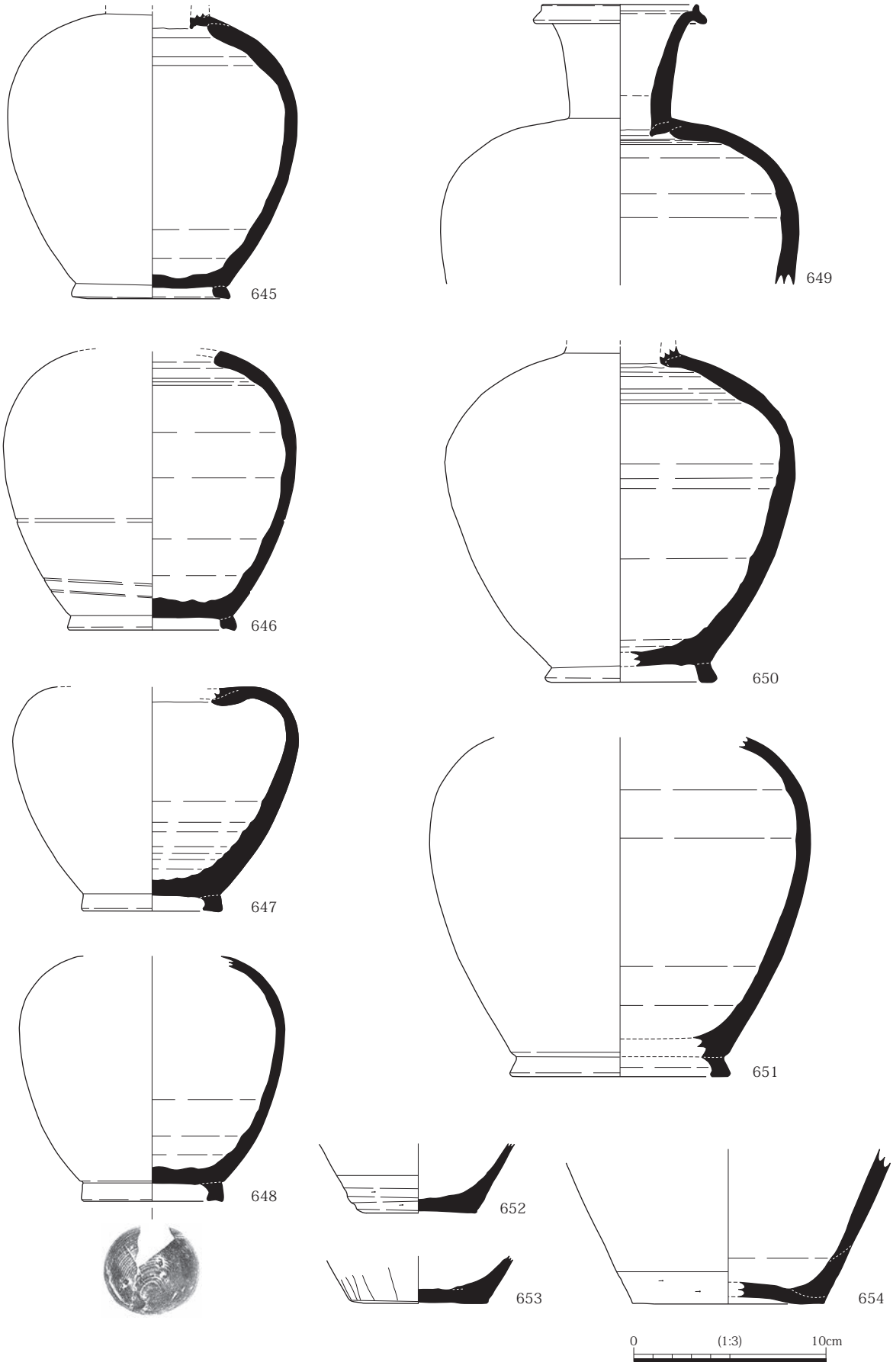


図 131　灰原出土遺物（5）　壺L ほか

から頸部にかけて器壁が極端に薄くなるといった特徴がある。

この他に壺Ｌと同サイズの壺で、底部が平底の個体が３点出土している（652 ～ 654）。いずれも外面下半はケズリによって成形される。壺Ｌと法量は近いが、底部からの立ち上がりが直線的で、丸みをもつ壺Ｌとは形態がやや異なることから、別の器種の可能性もある。

小型の壺Ｍについても出土数が多く、確認できる個体数が 100 点近い数にのぼる（655 ～ 669）。いずれも器高が 11cm 前後、最大径が８cm 前後におさまっていることから、規格性があったことが窺える。壺Ｌと同様に体部は丸みをもって肩が張る形態であるが、やや胴部が長めで、最大径が体部の中位以上にくる個体が多い。口縁端部の形態は、端部をまっすぐ上方に引き伸ばしたいわゆる陶邑タイプ（655・656）と、壺Ｌと同様に端部を上下に肥厚させる篠タイプ（658 ～ 661・665 ～ 667）に分類され[6]、この他に端部が丸くおさめられるものもある（657）。出土量は篠タイプが圧倒的に多く、85％程度の割合を占め、端部が丸いタイプが 11.5％で、陶邑タイプは 3.5％にすぎない。全て体部下半から底部にむかって直線的にすぼまる形態で、底部の断面形が台形状の個体はない。底部には輪高台が付く個体が多いが、高台がない個体もあり、約 14％の割合を占める。高台の有無については、時期差として認識できる可能性もあるが[7]、灰原の南東斜面の地山面直上からも無高台の個体（666・667）が出土しており、操業開始当初から無高台の個体も製作されていた可能性が極めて高い。底部の切り離し方法については、

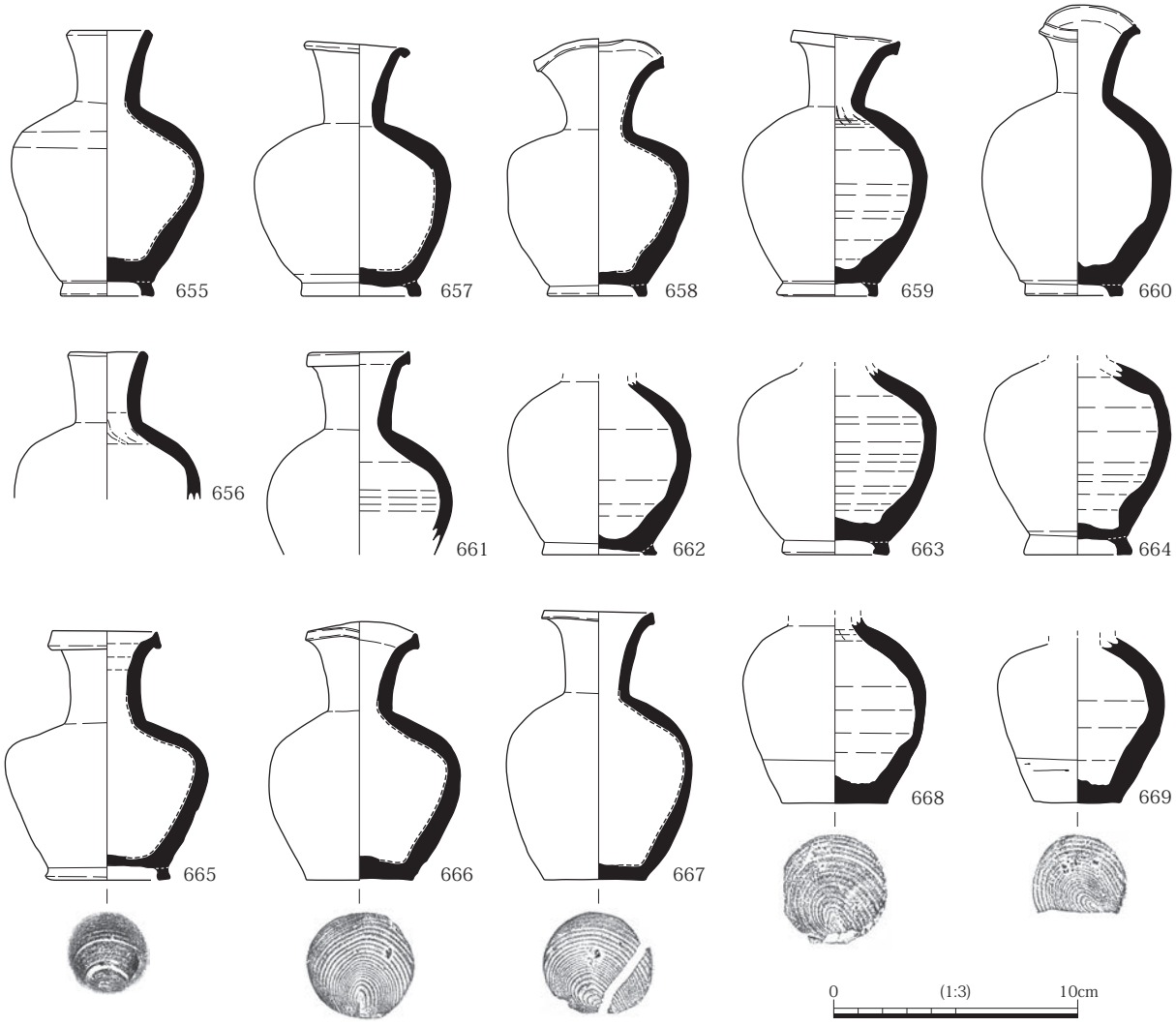


図 132　灰原出土遺物（６）　壺Ｍ

ヘラ切りの個体は確認されておらず、また高台付きの個体のうち、底部に糸切り痕が残る個体（665など）がみられることから、底部の切り離しには全面的に糸切りが採用されていたと考えられる。

肩部に耳を付けた壺Nは、少なくとも２点（672・673）確認することができる。また671については、耳の貼付け箇所を確認できないが、器形から壺Nの可能性が高い。この他に、口縁部から肩部のみが残る670についても、壺Lの大サイズの個体よりひとまわり大きいことから、壺Nの口縁部の可能

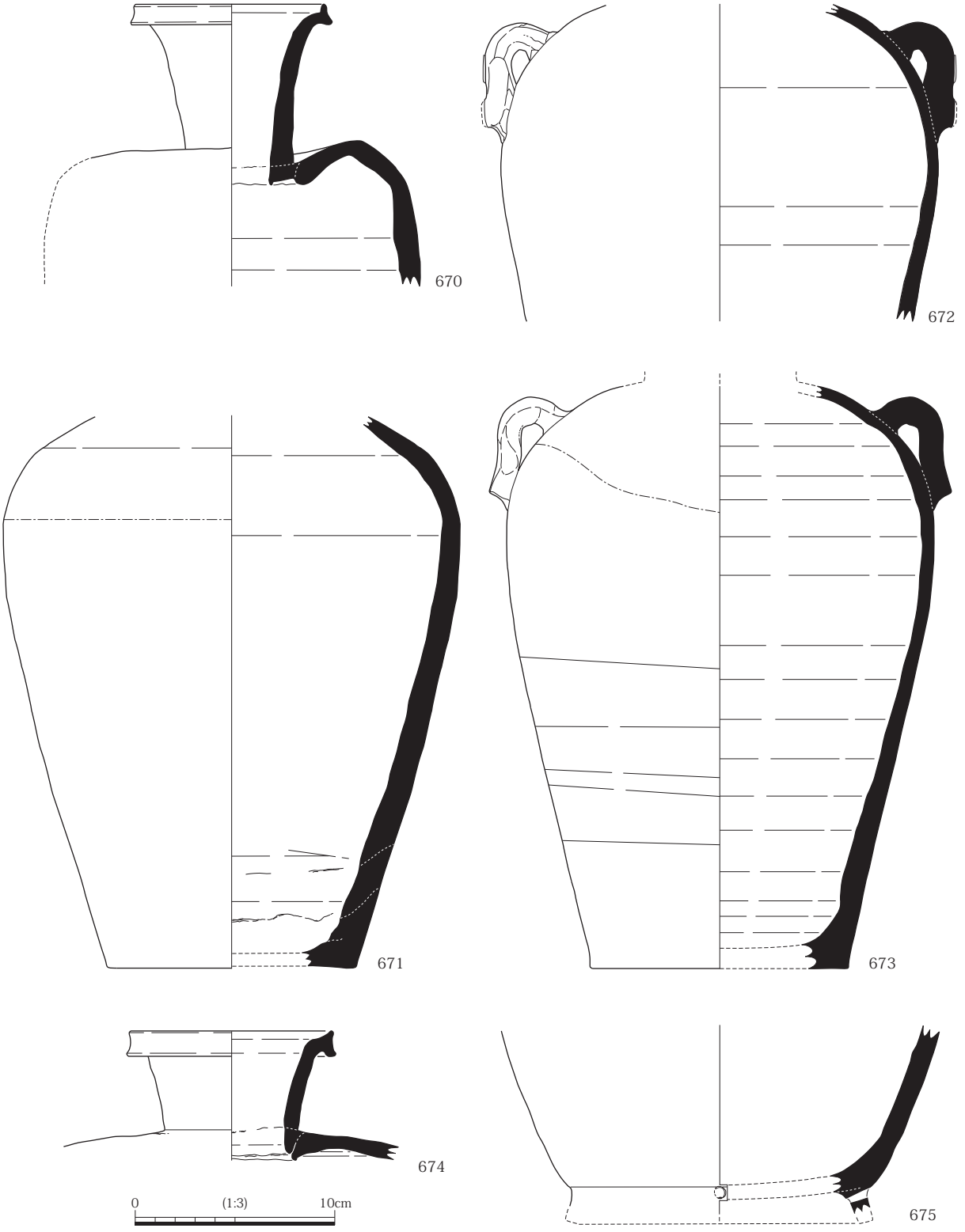


図133　灰原出土遺物（７）　壺Nほか

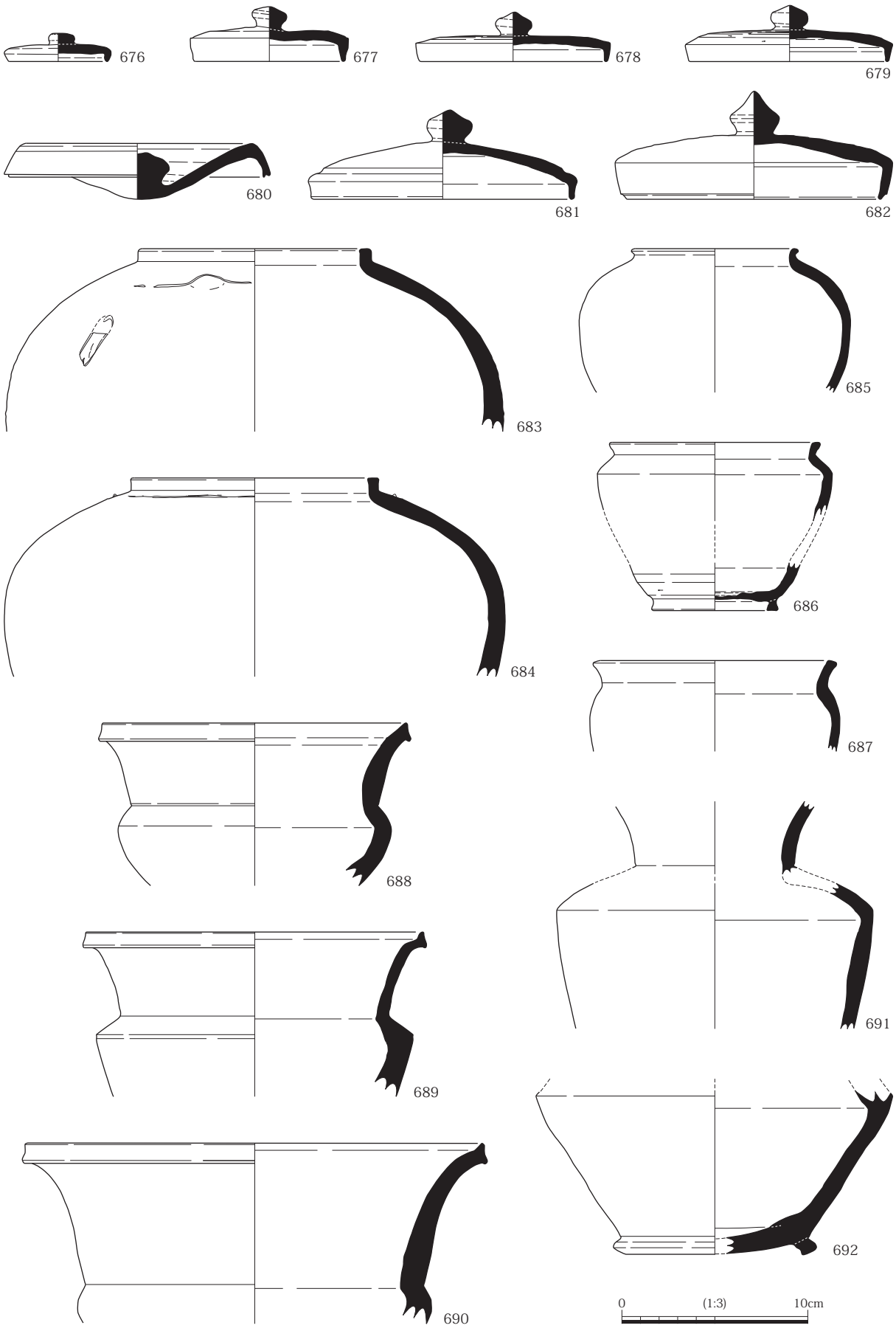


図 134　灰原出土遺物（8）　短頸壺・広口壺

性がある。底部から肩部まで復元できる 673 は、底部から上方にむかってやや開きながらまっすぐのび、丸みをもった肩部に耳が対で付けられる。内外面ナデ調整で、外面下半についてはケズリが施される。底部から肩部までの高さが 30cm 前後であるため、器高は 35 ～ 40cm 程度に復元できる。

肩部から口縁部までが残る 674 は、一般的な壺 L とは異なり、頸部が太く短い個体で、肩部の幅も広くなる。これは、大阪大学の篠窯跡群の器種分類の中で壺 B もしくは壺 C[8] とされる、体部が下膨れした器形に復元できる可能性がある。この他には、高台に小円孔が穿たれた壺の底部（675）などがあるが、上半部の形状が不明である。同一形態の壺は 450 溝からも 1 点出土している（図 121：461）。

壺 A は、直立した短い口縁をもつ短頸壺である（683 ～ 685、図 142：742）。全形が復元できる個体は、刻書がある 742 のみで、壺 A とはっきり認識できる破片は、全て口縁部を中心とした破片に限られる。体部の最大径が 30cm 程度のサイズの個体（683・684）と、15cm 程度の中サイズの個体（685）がある。683・684 は頸部が短く直立するのに対し、685 はやや外反し端部が丸くおさめられる。口縁の

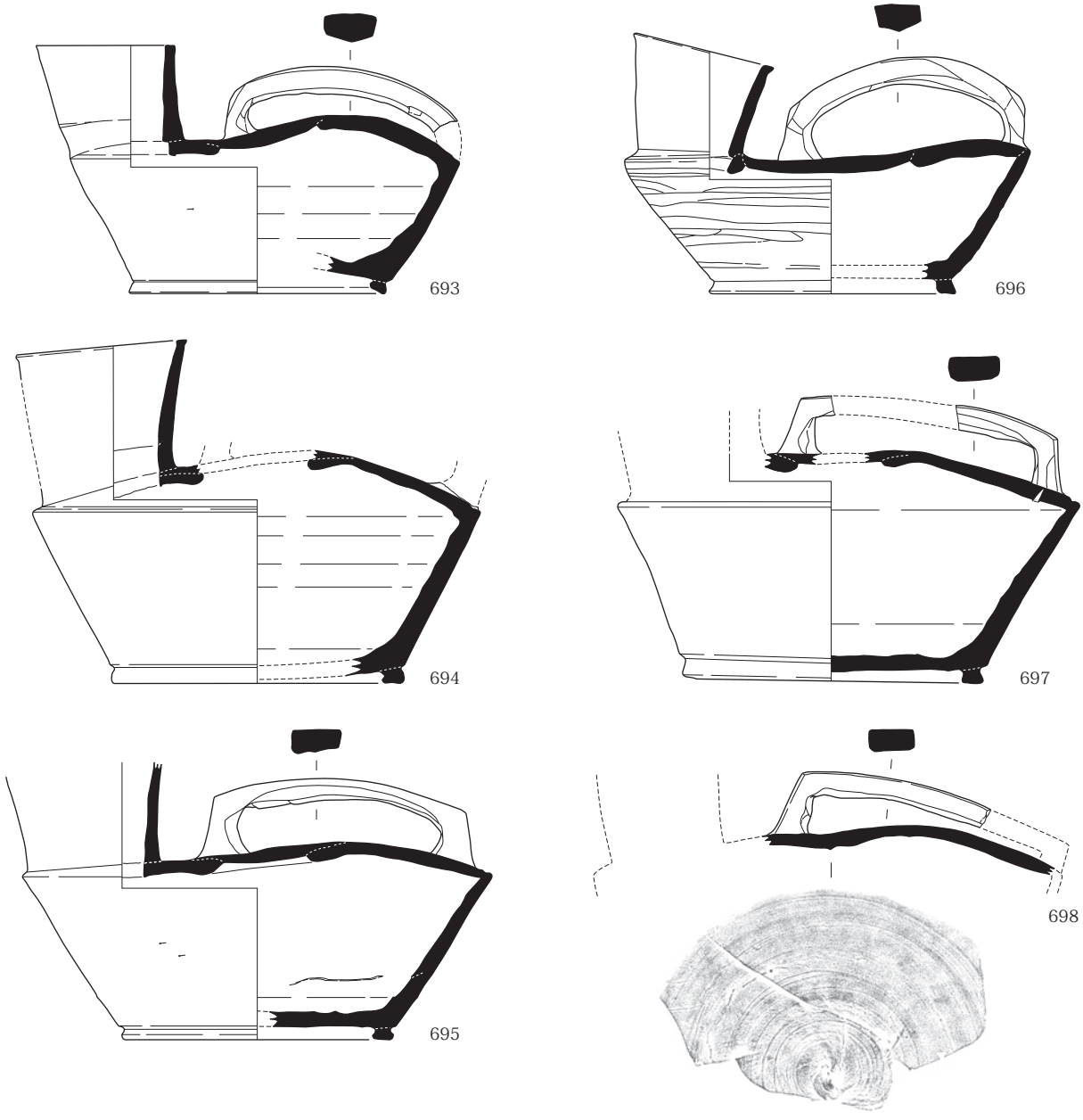


図 135　灰原出土遺物（9）　平瓶

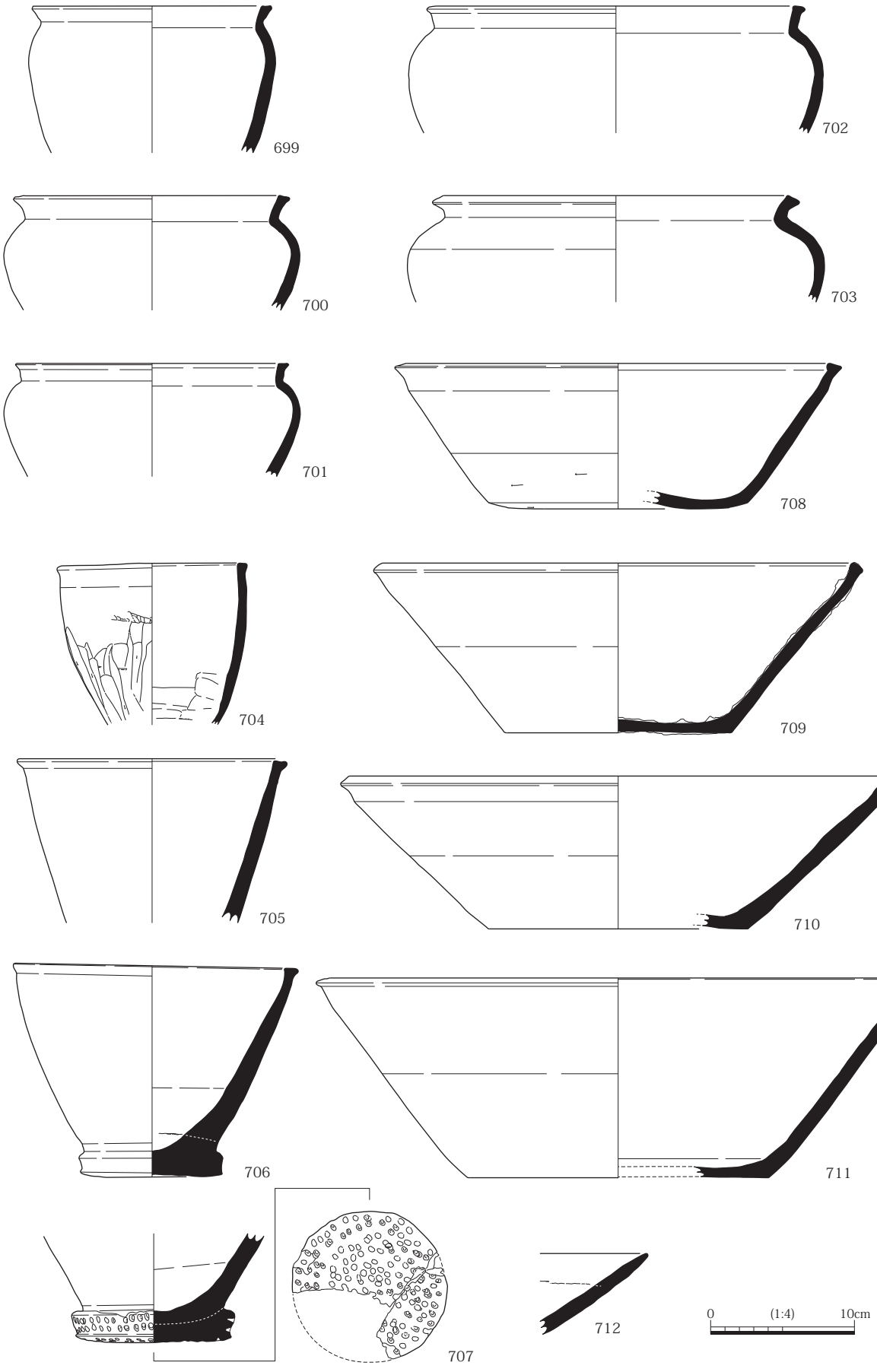


図 136　灰原出土遺物（10）　鉢類

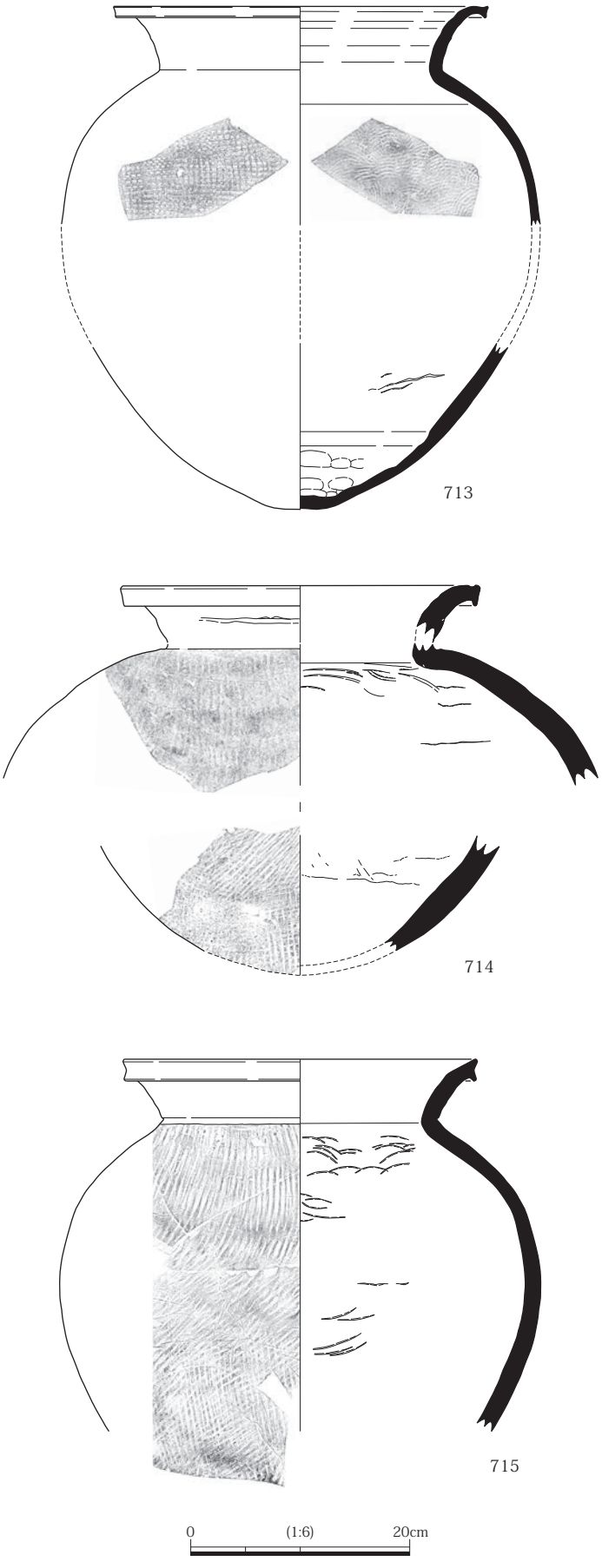


図 137　灰原出土遺物（11）　甕

やや外側に剥離痕が円形にめぐり、その剥離痕の外側にのみ降灰がみられる個体が多いことから、蓋をした状態で焼成された可能性が高い。刻書のある 742 は、唯一全形が判明する個体で、器壁が薄く、極めて精巧なつくりである。その他の個体と比べると、口縁が広めで、やや外方に開く特徴がある。壺Ａの底部の形状は、はっきりとはわからないが、底部が丸みをもった形状に復元される 454 土抗出土の 546（図 125）などは、壺Ａの底部である可能性が高い。

壺Ａに伴う壺蓋は、天井部が平坦で口縁部は直角に折れ曲がってまっすぐ下方にのびる形態で、天井部には回転ヘラケズリが施されている（676 ～ 682）。そのため、杯蓋とは容易に区別ができる。サイズにばらつきがみられることから、セットとなる壺Ａに様々なサイズがあったことがわかる。つまみは、杯蓋のつまみと比べるとやや高めの個体が多く、682 のように宝珠形の個体もある。口縁端部の形状は、単純に丸くおさめた個体と（676 ～ 679・681）、外面に段をもつ個体（680・682）がみられる。

広口壺は出土数が少ないが、器種にバリエーションがみられる（686 ～ 692）。686 は壺Ｅで、この 1 個体のみが確認できる。小型で器壁が薄く、形状は肩部が明瞭に屈曲し、口縁部が外方に短く立ち上がる。底部には高台が付く。687 は 686 と比べると、頸部がやや長く、肩部がほとんど張らない形状で、形態的に類似する個体はあまりない。688 ～ 690 は口縁部が大きく外反する壺Ｈで、いずれも頸部から口縁部の破片である。688・690 は肩部に丸みをもつ形態であるのに対し、689 は明瞭に屈曲し

て稜をもつ。頸部内面の中ほどには、植物繊維状の痕跡が付着しており、その痕跡よりも下側の焼き締りが悪いといった特徴がある。691は肩部が屈曲する壺の体部から頸部の破片で、頸部径がやや狭いことから壺Qの可能性が高い。692は壺Hもしくは壺Qの底部から肩部にかけての破片である。外開きの高台が取り付き、底部は丸みがあるため底面に接する。体部は外開きにまっすぐのび、肩部が明瞭に屈曲する。688～690と同様に、内面の焼き締りが悪い。

平瓶は合わせて少なくとも10個体以上が確認でき、そのうち6個体分を図化した（693～698）。最大径23.0～27.8cm、底径14.4～17.0cm、器高14.7～20.4cmを測る。いずれも高台が取り付き、把手が伴う。内面および口縁部は回転ナデで成形され、体部外面は回転ヘラケズリが施されるが、696については体部外面にミガキが施されている。成形の方法については、基本的には天井部を円盤で閉塞したのち、体部が成形され、口縁部は穿孔後に取り付けてられている。ただし698は、回転絞り切り法によって閉塞された個体で、類例は少ない。[9)] また697は、肩部付近に小孔がみられる個体で、これについては空気抜きの小孔と考えられている。[10)] 小孔は外側から内側にむかって穿孔されているが、天井部の整形の際に外側は塞がれている。

鉢類（貯蔵具・調理具） 鉢D、鉢F（すり鉢）、盤がみられる。全体に占める個体数はそれほど多くなく、個体数全形を復元できる個体もあまり多くないが、鉢類と推測される破片は一定程度の割合を占めている。この他に、鉄鉢形の鉢Aもあるが、これについては仏具の項にて報告する。

鉢Dは、全形を復元できる個体がなく、全て口縁部を中心とした破片に限られる（699～703）。口径18cm、最大径20cm前後の一群

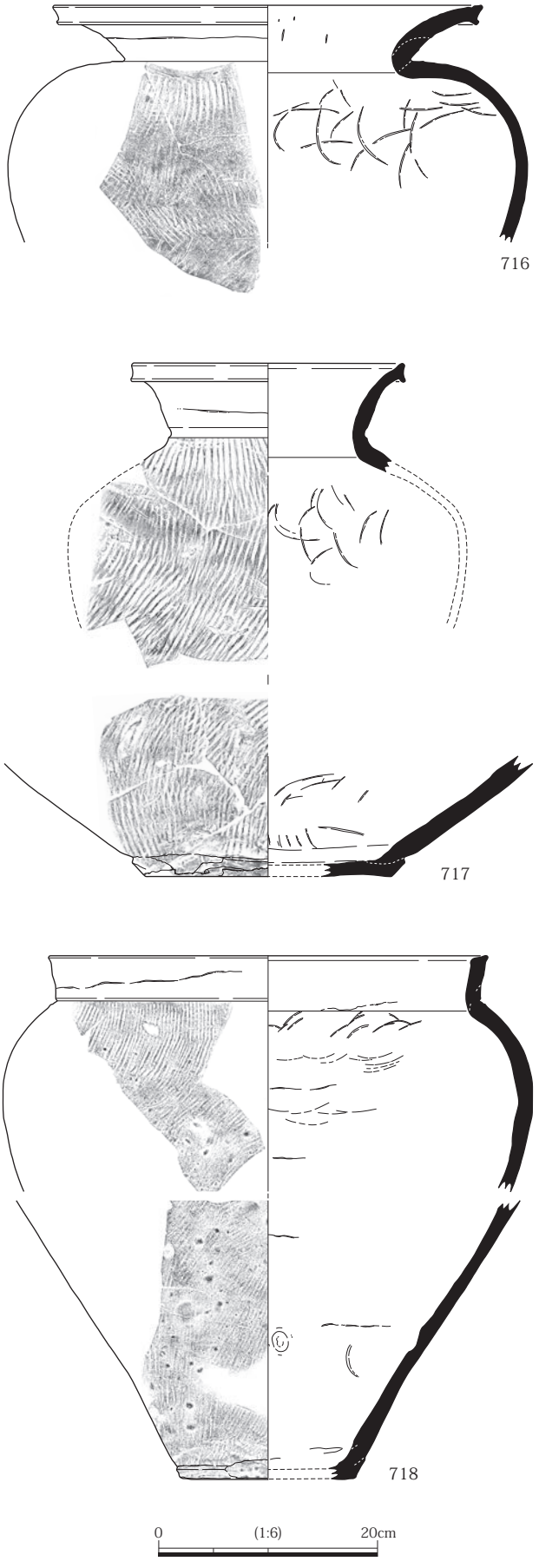


図138　灰原出土遺物（12）　甕

（700・701）と、口径 25cm、最大径 29cm 前後の一群（702・703）に大きく分けられると推測される。いずれも内外面ともに回転ナデ調整で、口縁部は直立もしくはやや外側に開く形状で、端部は外側に肥厚する個体が多い。底部については確認ができないため、高台の有無については不明である。

鉢Ｆ（すり鉢）は、少なくとも 4 個体以上は確認できる（704 ～ 707）。完形に復元できる 706 は、口径 19.3cm、器高 14.9cm を測る。円盤状の厚手の底部から、体部は斜め上方に開き、口縁端部は上面がほぼ水平で、外側にやや拡張する。704・705 は底部のない破片であるが、体部の形状から鉢Ｆになると推測される。基本的に体部は回転ナデ調整で成形されるが、704 は体部下半を下から上方向にヘラケズリを施す、特異な例である。底部が残る 2 個体のうち、706 には穿孔がないが、707 には底面と底部側面に多数の穿孔がある。

盤は、いずれも口径 30cm 以上の大型品となる（708 ～ 712）。鉢Ｄや鉢Ｆと同様に口縁端部が外側に肥厚し、端面が外傾する。底部および体部下半には回転ヘラケズリが、内面および体部上半には回転ナデが施される。712 については、口縁端部をまるくおさめる個体で、全形ははっきりしないが、体部の傾きから盤と推測できる。709 は、内面全体に窯壁や置台などに用いられる砂粒を含んだ粗い粘土が付着している。さらに底部全体に砂が付着していることから、焼台として転用され、倒置状態で据え置かれた可能性が高い。

この他に鉢の可能性がある破片としては、図 139：722・723 などがある。722 は、平底で体部がほぼまっすぐ上方にのび、大型の鉢底部の可能性がある。723 は、大型品の別づくりの底部で、上面が接合面で剥離している。底部には低い高台をつくり出して回転ナデで成形されている。全形については、全く判断がつかないが、鉢や甕などの底部の可能性がある。

甕（貯蔵具）　甕については、内外面の調整や色調、器壁の厚さから、破片から個体の識別が概ね可能となる。このうちは、外面にタタキがある通有の須恵器の甕 6 個体（713 ～ 718）とともに、土師器の器形で外面がハケで調整された甕が 3 個体（719 ～ 721）ある。

通有の須恵器の甕は、頸部が外反し、口縁部端部に面をもって上下に拡張する、いわゆる甕Ａ（713

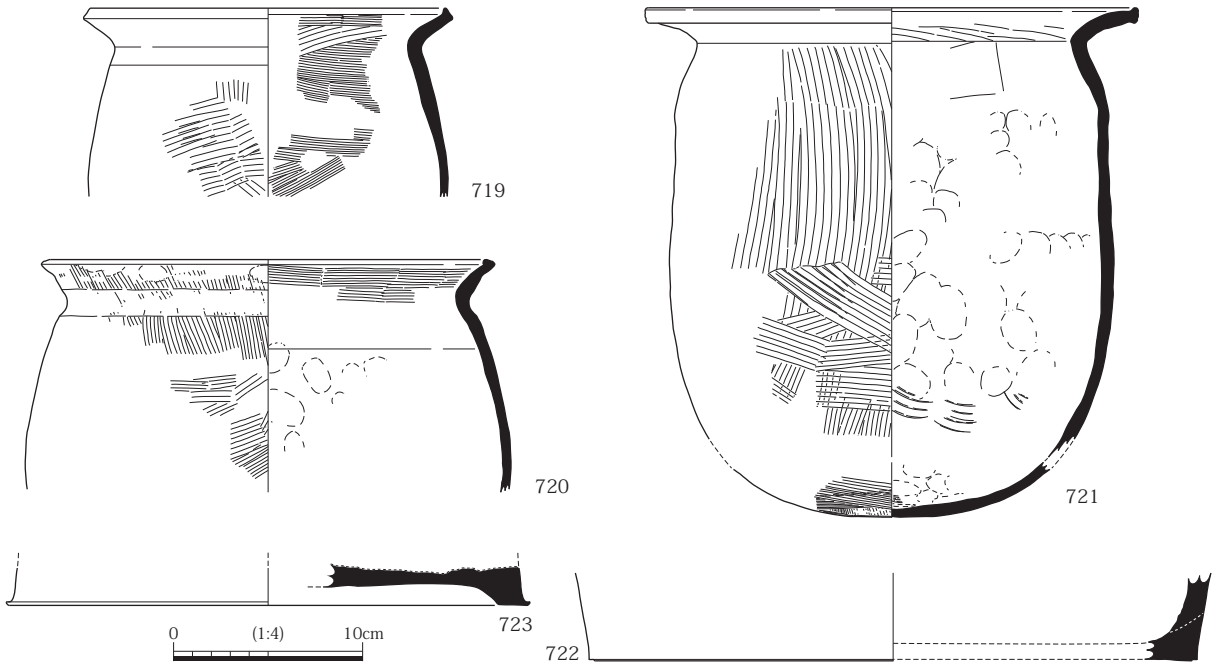


図 139　灰原出土遺物（13）　甕（土師器系）ほか

～ 717）が多く、丸底の個体（713・714）と、平底の個体（717）がある。いずれも体部の中位付近に最大径がある。713 については、外面が格子目タタキで、内面に同心円状の当て具痕が残り、丸底の底部には円盤の痕跡がはっきりと観察できる。器壁は 0.8cm 程度で、出土した甕の中で最も薄く、精巧に作られた個体で、その他の個体とは最も容易に区別がつく。そのため、検証の余地はないが、本窯で生産された個体ではなく、斜面上方の古墳などに伴う個体であった可能性も考慮する必要がある。

その他の個体は、いずれも外面が平行タタキで、内面に円形の当て具痕跡が残る。このうち、714 ～ 717 の 4 個体はタタキの痕跡がよく似ており、同一の工具を用いた可能性がある。ただし、716・717 はタタキ目がはっきり認められるのに対し、713 はタタキ目がやや不明瞭である。714・715・716 は器壁が 1.5 ～ 2 cm 前後と厚手で、714 については器壁の厚さが平均で 2 cm をこえる。717 は器壁がやや薄手の個体であるが、窯変が特に著しい。底部は平底で、窯変しているため、体部が大きく開いている。

718 は直立した短い口縁部で平底の、いわゆる甕 C で、口径 40.0cm、最大径 48.4cm、底径 15.8cm を測り、器高は 45cm 程度に復元できる。最大径に対して底径が小さいため、体部は底部から斜め外方にむかってまっすぐのび、肩部付近に体部最大径の位置がくる。体部の平行タタキは、714 ～ 717 に比べてややタタキ目が細かい。内面の当て具痕は、714 ～ 717 と同じ円形の個体である。また、外面には気泡が比較的多くみられる。

土師器の器形および製作技術でつくられた甕は、いずれも広口で、体部外面にハケ調整が施される。719・720 は頸部がくの字状に屈曲し、721 は強く外反する。内面は 719 がハケ、720・721 がユビ

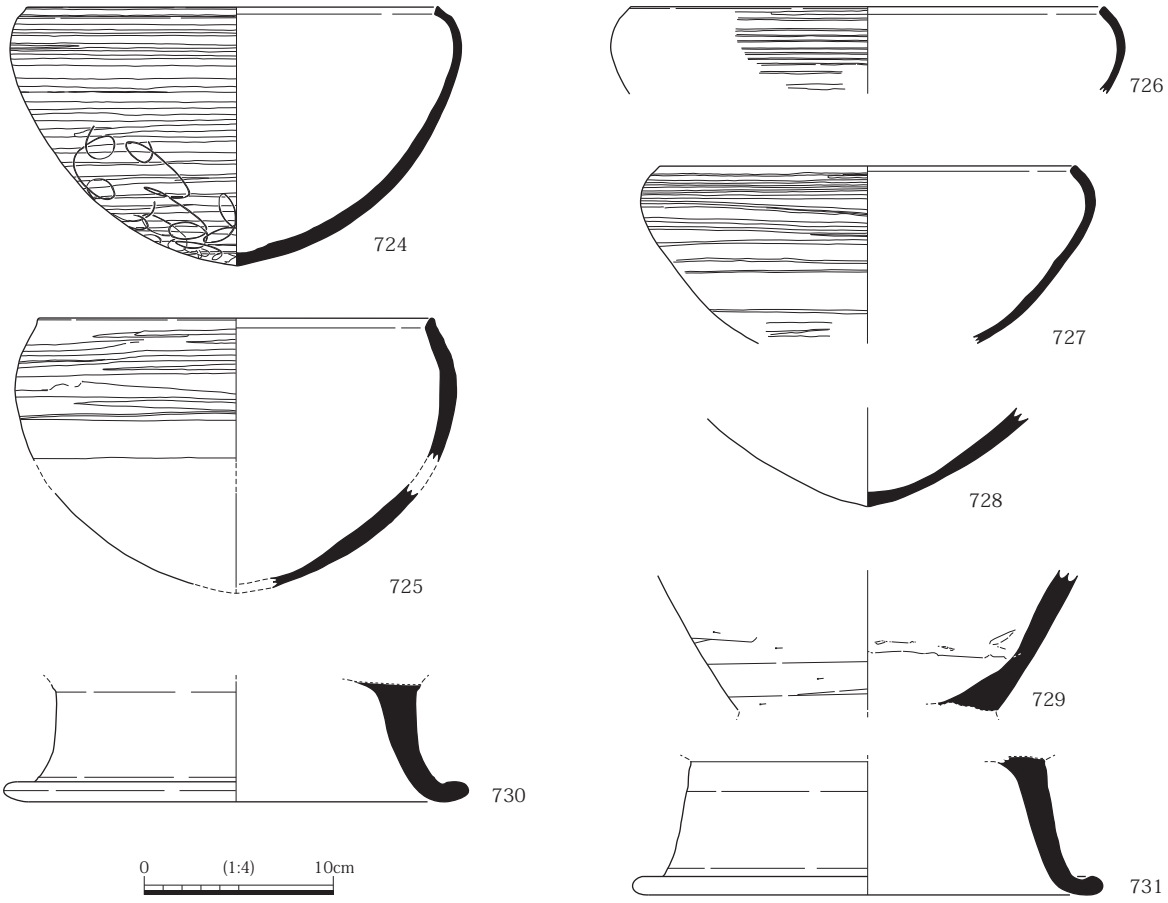


図 140　灰原出土遺物（14）　仏具

オサエで、721 の底部付近には同心円文の当て具痕が僅かに残る。全形が概ね復元できる 721 は中胴で、体部の最大径よりも口径の方が大きい。

仏具　仏教関係遺物としては、鉄鉢形の鉢 A と花瓶の破片がある（724 ～ 731）。この他に窯体内からは、仏塔の頂部を飾る相輪の九輪（法輪）（図 120：442・443）も出土しており、灰原出土破片との接合関係もある。724 ～ 728 は鉄鉢形の鉢 A で、窯体内や付属遺構の出土分（図 119：439・440、図 122：484）も含めると、少なくとも 6 個体以上は確認できる。口縁部内面に端面をもち、底部が判明する個体は全て尖り底である。全形が判明する 724 は最大径 23.9cm、器高 13.7cm を測る。薄手でシャープなつくりの個体が多いが、725 については、やや厚手で焼成も悪い。回転ナデで全体を成形したのち、外面には回転台を用いたミガキを施しているため、無数の線条痕がみられ、光沢感がある。また 724 については、外面の底部から体部下半にかけて、螺旋暗文が施されており、特徴的である。

730・731 は鉢もしくは壺の脚台部で、脚端部の形状が玉縁状を呈している。730・731 ともに底部とは接合面で剥離しており、花瓶に復元できる可能性がある。また同一個体ではないが、729 は鉢の体部で、底部に剥離痕跡があることから、脚台部が伴っていたと考えられるため、これについても花瓶の可能性がある。

文房具（硯）　円面硯と風字硯があり（732 ～ 738）、円面硯は窯体内や周辺遺構の出土分（図 119 － 441、図 121 － 480、図 125 － 552 ～ 554）を含めて 10 点以上、風字硯は 1 点をそれぞれ確認することができる。円面硯は全て圏足円面硯で、スカシ孔は方形と小円の個体がある。外堤径が 14.5cm と 17cm 前後、硯面径が 10cm 前後、器高が 8cm 前後と 10cm 程度、底径が 21cm 前後と 24cm 前後に集中する傾向があり、ある程度の規格性があったことが窺われる。脚端部の形態は上下に拡張させており、甕の口縁端部の形態と類似している。また、器壁の厚さは 1 ～ 1.5cm 程度と全体的に厚く、甕を製作した工人たちが硯の製作に関与していた可能性も推測される。硯面部分が完存する個体はほとんどないが、この硯面部分には広口壺と同様に、植物繊維状の痕跡が付着している場合がある。方形スカシの個体は、脚部が 8 割程度残存する 732 では、スカシの孔数が 10 で、その他の個体のスカシの孔数も、スカシ孔の間隔から、それに近い孔数であったことが推測される。スカシ孔はヘラ状の工具で外面から穿孔しており、スカシ孔の上端から下端にむかって穿孔し、そのまま上端にむかって回しながら穿孔しているため、スカシ孔の下端部分は丸くなっている。また、734・735 および、灰原以外の破片と接合関係がある窯体内出土の 441（図 119）と 454 土坑出土の 553・554（図 125）については、スカシ孔の下端部分に沈線がみられ、スカシ孔の下端の位置の目安のためにつけられた割付け線と推測される。円形スカシの個体については、全体的な器形や調整は方形スカシの個体と大きく変わりはない。スカシ孔の間隔から、孔数は 736 が 5 もしくは 6、737 が 8 であったと考えられる。また 736 は、円形スカシであるものの、734・735 と同様の脚台部の下端付近に断続的な沈線がみられる。

風字硯（738）は、脚部が 2 本取り付けられ、硯面部分を区画する突線などはない。硯面および内面は平滑に仕上げられ、外面や裏面、脚部はヘラケズリで成形されている。

刻印・刻書須恵器　「刀」という文字が刻印・刻書された須恵器が、計 7 点出土している（739 ～ 745）。刻印の個体は 3 点出土（739 ～ 741）しており、「刀」という文字を丸囲いした個体で、全て同一の印判による個体である。いずれも供膳具の内面の見込みに刻印がなされており、このうち 741 皿 C については、全形が復元できる。刻書された個体は 4 点（742 ～ 745）出土しており、いずれも壺類もしくは鉢類の外面にヘラ描きされている。また、この中で 742 壺 A のみが全形が判明している。

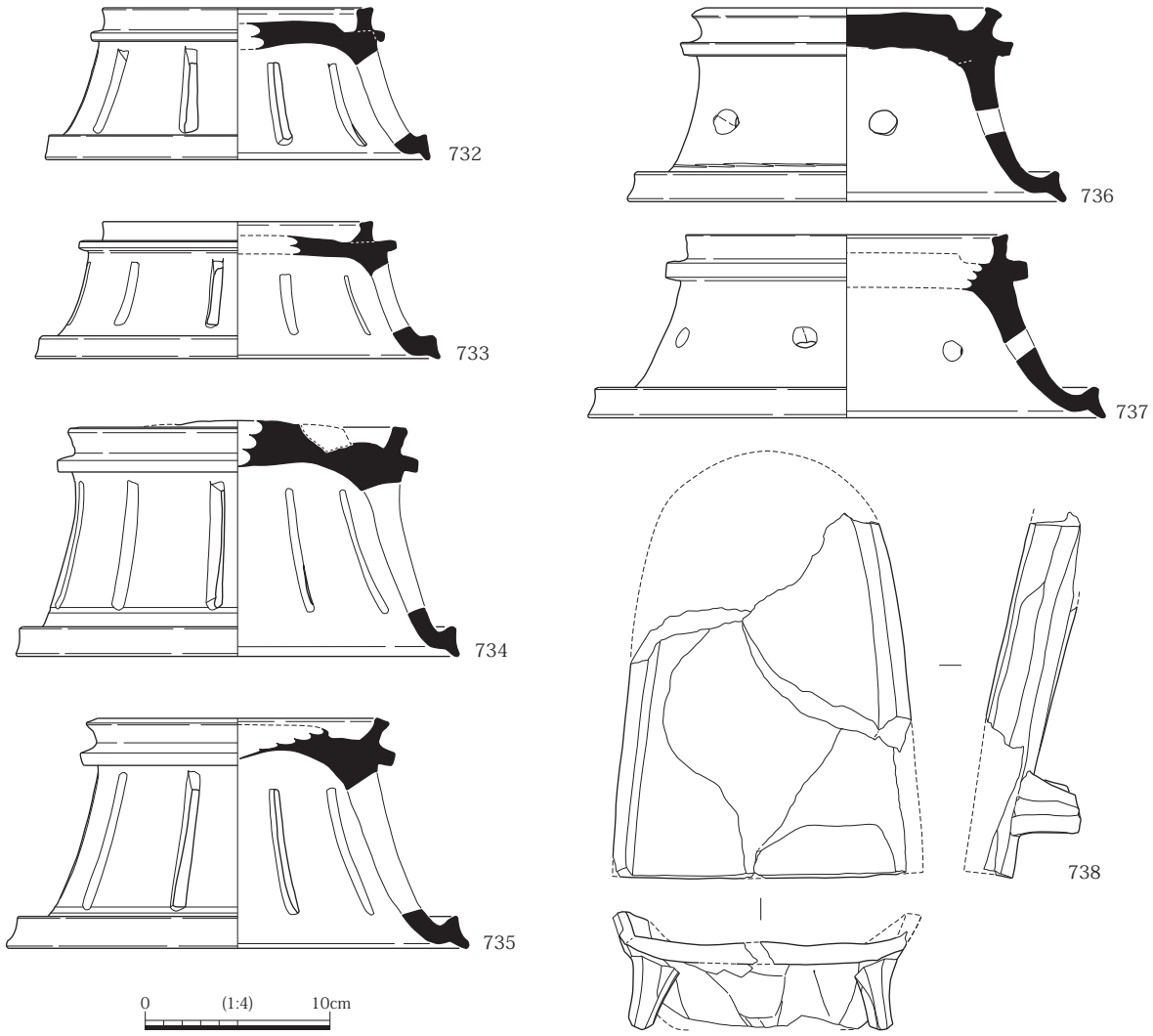


図 141　灰原出土遺物（15）　硯

刻書は、いずれも２画目が“はね”である点が特徴的で、同じつくり手による刻書の可能性が高い。

熔着須恵器　破片同士が溶着してくっついた須恵器は、コンテナ箱で計４箱分出土しており、重ね焼きの方法や窯詰め方法を復元できるものを中心にピックアップして図化した（746～755）。746～749は、杯Ｂと杯蓋の重ね焼きを復元できる熔着資料である。746・747 は、杯Ｂの口縁部に杯蓋の天井部側を逆位で重ね、杯蓋は裏面同士を重ね合わせていることがわかる資料である。正位で上に重ねられた図上で上の杯蓋には、天井部の屈曲部分に杯身の口縁部の破片が熔着しており、杯蓋の上には杯Ｂが逆位で重ねられていたことが推測できる。さらに 747 には、杯Ｂの底部に置台の粘土が付着しており、窯体床面に粘土塊を据えて重ね焼きしていたことが窺われる。748・749 に関しては、杯蓋の裏面同士が熔着している資料で、天井部の屈曲付近に熔着痕跡がみられることから、746・747 と同様の方法で重ね焼きされていたことを示している。さらに、杯蓋はⅡ類とした扁平な個体が大半を占めている点や、杯蓋Ⅱ類の屈曲部に熔着痕跡がみられる個体が多い点などから、杯Ｂと杯蓋はセットで重ね焼きされるパターンが多かったことが推測できる。その一方で、754 のように杯Ｂ同士を正位で重ね合わせた熔着資料や、図化することができなかったが、降灰の痕跡や小破片の熔着痕跡から、杯蓋同士を正位で重ね合わせた個体も、僅かながら存在しており、杯蓋と杯Ｂの重ね焼き方法にバリエーションが存在したことがわかる。

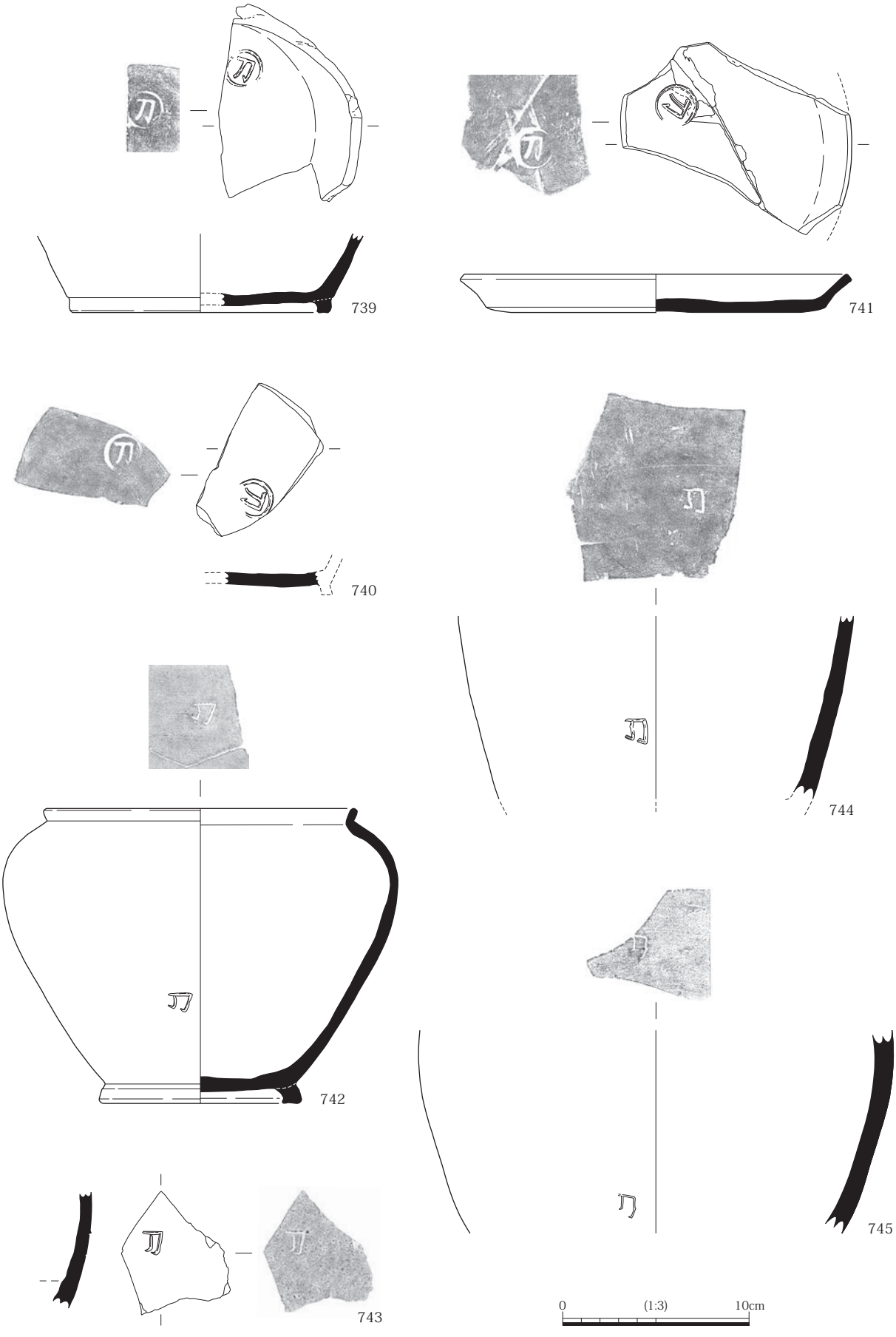


図 142　灰原出土遺物（16）「刀」刻印・刻書須恵器

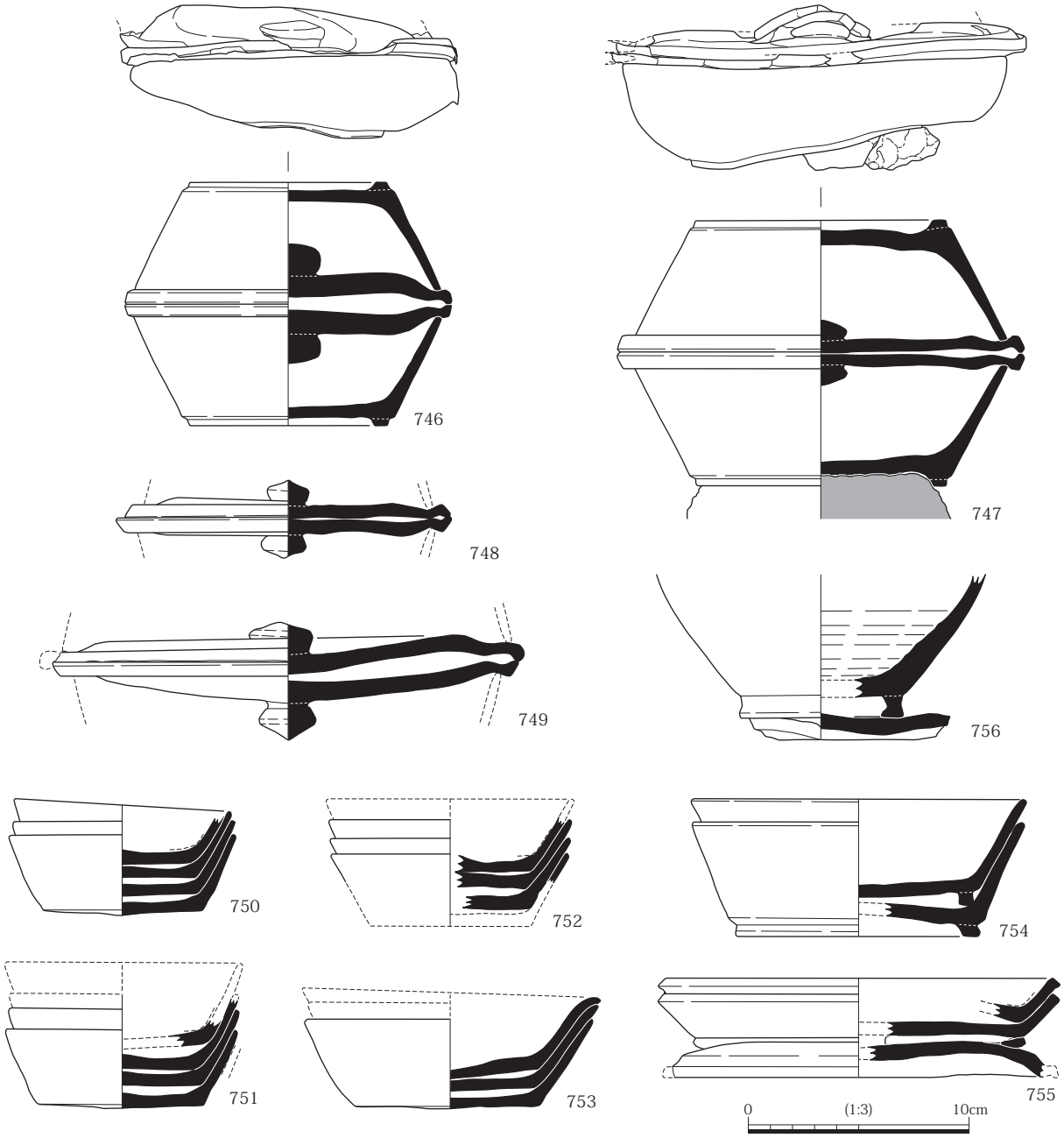


図 143　灰原出土遺物（17）　熔着須恵器

750 ～ 753 は、杯Ａを正位で重ね焼きした熔着資料で、ほぼ同じサイズの個体を積み重ねている。750・751・752 については、４個体分の破片が積み重ねられており、さらにこれらには底部内面や外面に熔着痕跡がみられる。751 については、内外面ともに溶着痕跡が認められることから、少なくとも６個体分の積み重ねが確認できる。杯Ａについては、その他の重ね焼きの方法を確認できる溶着資料がないため、基本的にはこの方法でのみ重ね焼きされていたことが推測される。755 については、皿Ｃを正位に重ね焼きした熔着資料で、底部に杯蓋の失敗した破片とかませ片が熔着している。皿Ｃの重ね焼き方法を推測する熔着資料は少ないが、基本的には杯Ａと同様に正位で重ね焼きされていた可能性が高い。

このように供膳具については、重ね焼きの方法を推測する熔着資料が一定程度出土しているが、その他の器種では焼成方法を推測できるような熔着資料はあまりない。その中で 756 については、壺Ｌの

底部に器種不明の破片が熔着しており、この破片は転用焼台と推測される。壺類や鉢類などその他の器種のほとんどは、床面に設置した置台の上に直接据えるか、かませ片などの転用焼台を挟んで製品を安定させるなどして、焼成していた可能性が想定される。

その他　この他に用途不明の土製品や、窯体の一部についても図化した（757 ～ 759）。757 は円盤状の形態を呈する土製品で、径 20.0cm を測る。図上の上面側は剥離面の可能性があり、大型の壺類や鉢類の底部になる可能性もある。758 は小型の円盤状の土製品で、径 6.0cm を測る。図上の上面側が球状に丸みをもって膨らみ、辺縁部にはヨコナデを施す。いずれも遺物の性格や用途は不明である。

759 は、内部に棒状の空洞部分がある柱状の窯壁片である。断面を観察すると、この空洞部分には本来は木芯が存在し、その木芯に粘土を巻き付けられていた可能性が想定できる。この窯壁は、分炎柱[11]と呼ばれる、焼成部境に設置された支柱と推測され、窯体の床面には支柱の痕跡がみられないことから、仮設の支柱であった可能性が高い。

須恵器窯に伴わない遺物　周辺遺構および灰原からは、本窯に伴わない遺物もいくつか出土している（760 ～ 764）。760 ～ 763 は、灰原および 452・453 平坦面から出土した須恵器で、760・761 が杯Ｈ蓋、762・763 が杯Ｇ蓋である。このうち 761 は、細片であるが口径がやや大きく復元でき、TK209 型式から飛鳥Ⅰ、７世紀初頭から前半頃に位置づけられる。760・762・763 は、古墳１と同時期の飛鳥Ⅱに位置づけられる。いずれも須恵器窯の斜面上方に位置する古墳１～３のいずれかに伴うものが、転落してきた可能性が極めて高い。なお図 137 － 713 の甕については、前述したように、その他の甕とは調整や胎土、焼成、器壁の厚さが大きく異なる個体であるため、本窯で生産された甕ではない可能性も考慮する必要がある。その場合、斜面上方にある古墳１～３のいずれかに伴う遺物の可能性もある。764 は、窯体の上方に位置する 459 ピットの埋土から出土した土師器甕の口縁部片で、須恵器窯とは時期的な齟齬はない。これについては須恵器窯の製品ではないが、459 ピットが、窯体と同時期の関連遺構であることを裏付ける資料となりうる。

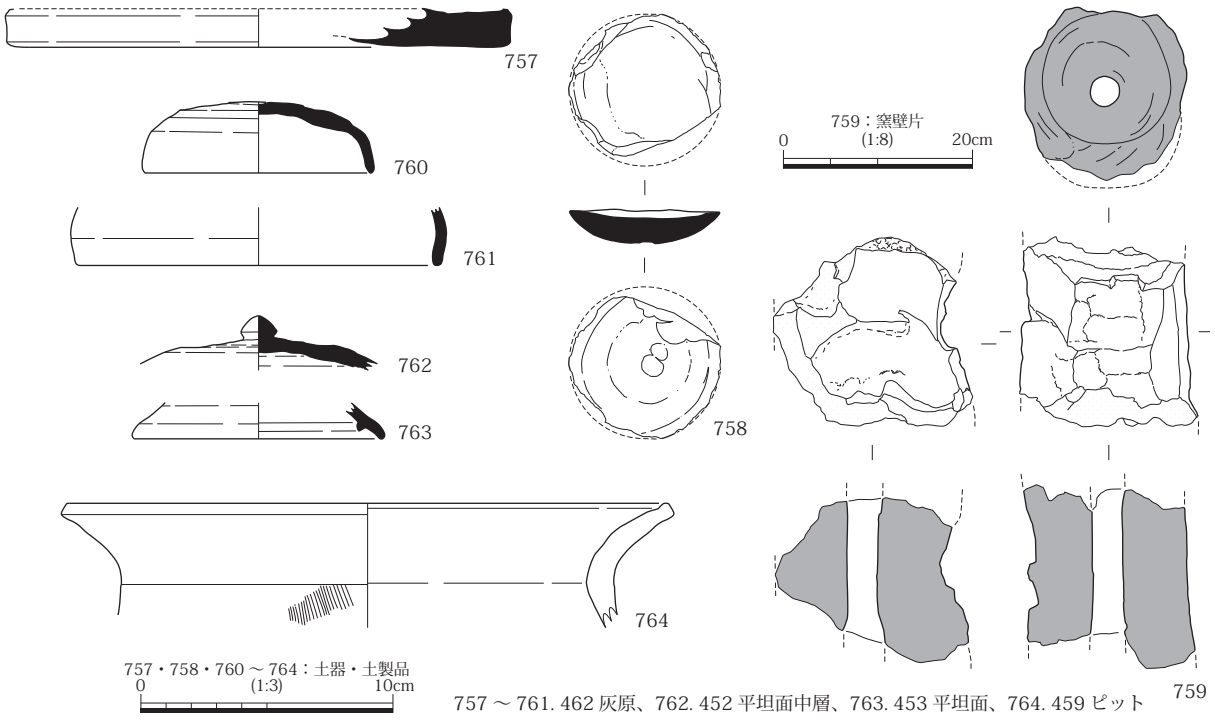


図 144　灰原出土遺物（18）・須恵器窯に伴わない遺物

出土須恵器の年代観　本窯から出土した須恵器は器形や器種組成から、平城Ⅵ～Ⅶ、平安京Ⅰ期中、８世紀末から９世紀初頭を中心とした時期､つまり長岡京から平安京遷都直後に位置づけることができる。生産地で距離的にも近い篠窯跡群出土の資料と比較すると、西長尾１・４号窯跡[12]や芦原１・３号窯[13]と器形的な特徴は類似する。

このうち供膳具については、杯蓋がⅡ類とした扁平な形態の個体が多数を占め、杯Ｂの高台の位置が底部の外端から僅かに内側に取り付けられている点などが、時期的な特徴をよく示している。その他の器種については、長頸壺は全て肩部が丸い壺Ｌ・壺Ｍで体部が比較的丸みをもち、鉢Ａ（鉄鉢形）の底部がいずれも尖り底である点、平瓶の底部に全て高台がつく点などが、８世紀後半から末以降の特徴を示している。また、高杯や広口壺（壺Ｈ・壺Ｑ）、鉢Ｆ（すり鉢）などは奈良時代に多くみらる器種であり、平安京遷都以降には出土量が減少していくため、それらの器種が隈なく生産されていることから、平安時代初頭以前に位置づけることができると考えられる。

この時期には中型以上の長頸壺（壺Ｌ）の頸部の接合方法が、円盤閉塞法による三段接合から回転絞り閉塞法による二段接合へ変化する時期でもあり、本窯で三段接合の占める割合が多い点は、やや古い時期の特徴と捉えることもできる。ただしこれについては漸次的に変化していく特徴でもあるため、古い時期に多い頸部三段接合が遅くまで残る点が本窯の特徴としみなすことも可能である。その一方で、中・小型の壺類の底部の切り離しにはほぼ全面的に糸切りが採用されている可能性が高く、長頸壺の体部がやや長くなりはじめ最大径が体部のやや上方の肩部付近に位置する個体が多い点や、小型の長頸壺（壺Ｍ）のうち無高台の個体が１割以上認められる点、風字硯がみられる点などは、新しい時期の特徴として捉えることができる。そのため８世紀末から９世紀初頭までの時期幅の中でも、このような新しい時期の特徴を重視すれば、平安京遷都直後の９世紀初頭頃に位置づけるのが穏当と考えられる。

その他の古代の遺構

372 土坑　462 須恵器窯と谷を挟んで反対の西向き斜面の裾付近で検出された円形の土坑で､径 0.9 m、深さ 0.24 mを測る（図 145)。埋土は上層と下層に分かれて黒色の粘質土が堆積し、間層を挟む。下層はやや砂質が強い。埋土中からは、須恵器窯に時期的に近い９世紀代の杯蓋が２点出土しているが（765・766)、須恵器窯との関係や遺構の性格は不明である。

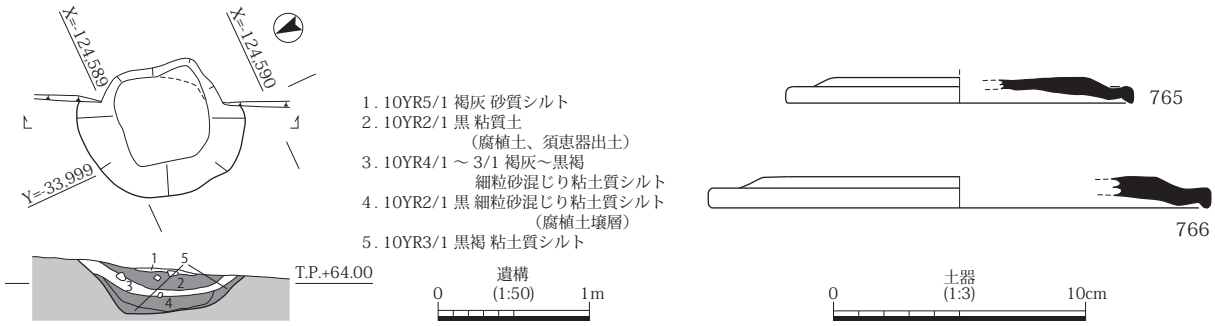


図 145　372 土坑平面・断面図および出土遺物

古墳１（成合西王寺山１号墳）の調査成果

斜面堆積層（１・２層）を除去したところ、東向き斜面上方で直線的に並ぶ石列とその周辺で７世紀代の須恵器が出土した。この部分の調査を進めると、石列は横穴式石室の側壁であることが判明した（古墳１）。４－１区で確認された２基の古墳とは直線距離で南側に 17 m、標高が５m低い地点に位置し、開口方向が他の２基と比べるとやや東に振れている。

墳丘　横穴式石室が検出された段階では、側壁がかろうじて残存する状況であり、盛土は大半が流出しており明確な墳丘は認められなかった（図 146）。石室は西から東に下がる斜面に築造されており、最も高い石室の西側では、表土を除去した段階ですぐに基盤層が検出された。石室の東側では、石室と直交した土層断面で 0.1 ～ 0.2 m程度の厚さの墳丘盛土と考えられる明褐黄色シルト（図 147 － 11）が確認された。この層は、断面で石室主軸ラインから外側に 2.2 mの位置までのびており、また、石室主軸から東へ 2.5 m付近の位置で、墳端と考えられる傾斜のラインが確認できたことから、径５m程度の円墳に復元できる可能性がある。ただし、石室の後背部から西側にかけては、基盤層を大きく削りこんで里道を造成しており、墳端や周溝は全く確認できなかった。古墳の築造された時期を勘案すると、石室を覆う程度の簡素な盛土であった可能性が高い。

石室内埋土の堆積状況　石室内の断面を観察すると（図 147）、埋土の大半は石室が撹乱された後に堆

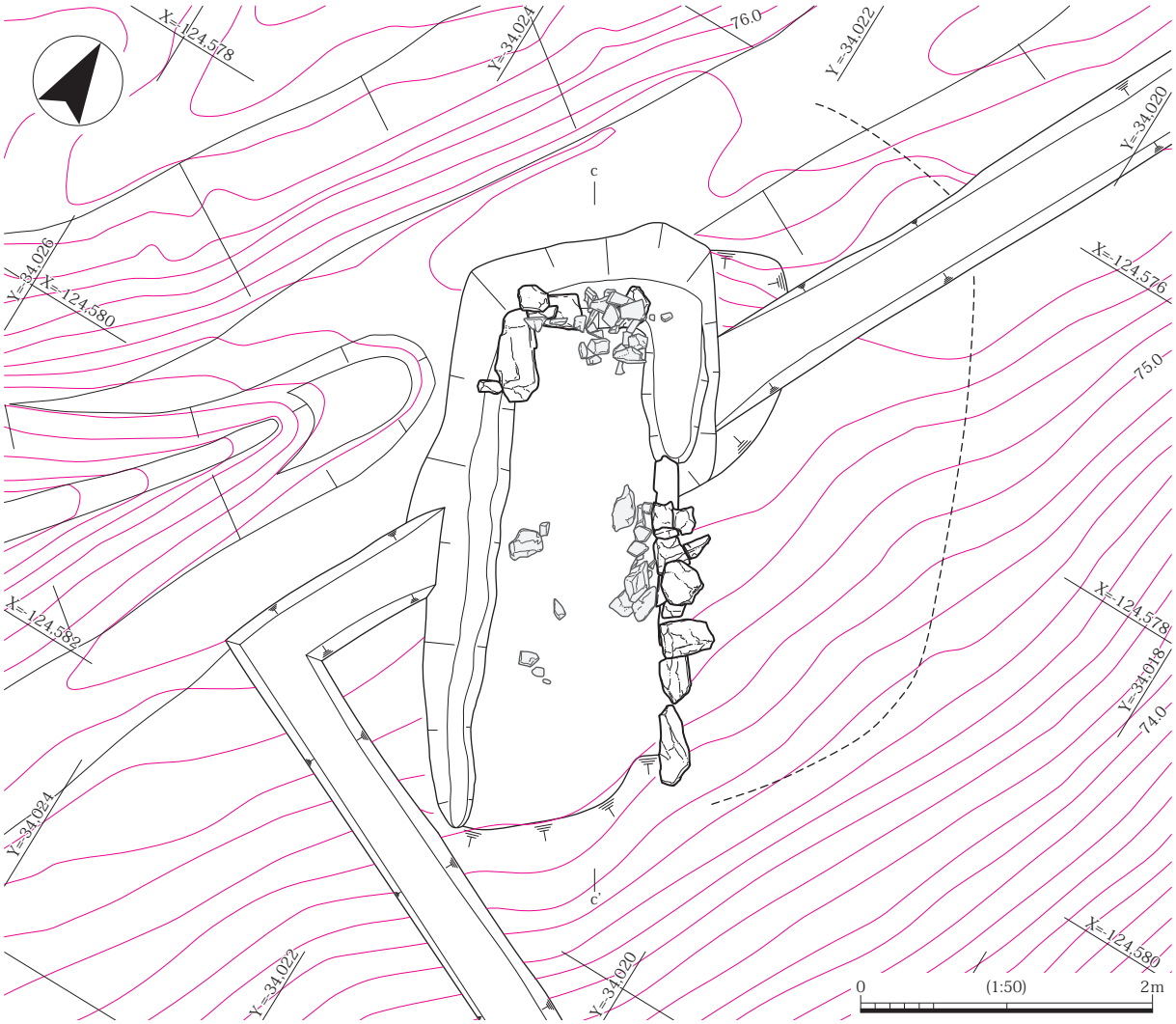
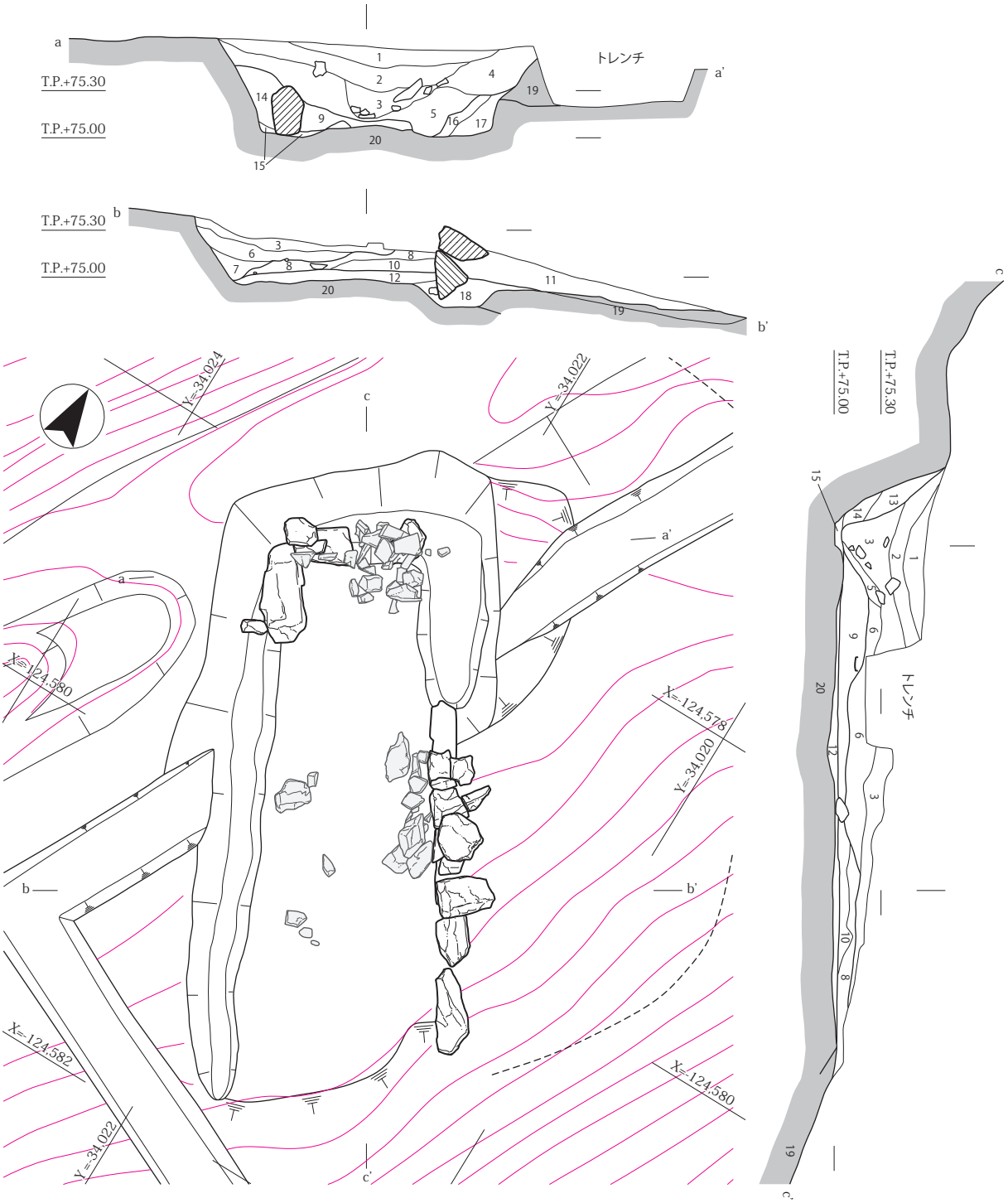


図 146　古墳１検出状況図



1. 撹乱土 A　10YR5/6 黄褐 シルト
2. 撹乱土 A　2.5Y5/4 黄褐 シルト（締りなし、水分含む）
3. 撹乱土 A　2.5Y6/6 ～ 5/6 明黄褐～黄褐 砂質シルト
4. 撹乱土 B　10YR6/6 明黄褐 シルト
（締り強、炭・白色粘土ブロック混じる）
5. 撹乱土 B　10YR7/6 明黄褐 シルト
（締り強、炭・白色粘土ブロック混じる）
6. 撹乱土 C　2.5Y5/6 ～ 6/6 ～ 6/4 黄褐～明黄褐～にぶい黄シルト～粘質シルト（締りなし、水分含む、炭混じる）
7. 撹乱土 C　2.5Y5/3 黄褐 シルト（締りなし、炭混じる）
8. 石室内埋土　2.5Y5/6 ～ 6/6 黄褐～明黄褐 シルト
（締りややあり）
9. 石室内埋土　2.5Y6/6 明黄褐 シルト
（締りややあり、地山ブロックが混じる）
10. 石室内埋土　10YR5/6 黄褐 シルト
11. 墳丘盛土　2.5Y6/6 明黄褐 シルト（炭・弥生土器混じる）
12. 石室床面整地土　2.5Y6/6 明黄褐 シルト
13. 奥・側壁裏込埋土　2.5Y5/6 ～ 6/6 黄褐～明黄褐 シルト
14. 奥・側壁裏込埋土　2.5Y5/4 ～ 5/6 ～ 4/6 黄褐～オリーブ褐 シルト
15. 側壁据付埋土　2.5Y7/6 ～ 6/6 浅黄橙～明黄褐 シルト
16. 奥・側壁裏込埋土　2.5Y5/4 ～ 4/4 黄褐～オリーブ褐 シルト（炭混じる）
17. 奥・側壁裏込埋土　2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト（炭混じる）
18. 側壁据付埋土　2.5Y5/4 黄褐 礫混じりシルト（0.5cm 大の礫混じる）
19. 地山
20. 基盤層

図 147　古墳 1 横穴式石室検出状況 平面・断面図

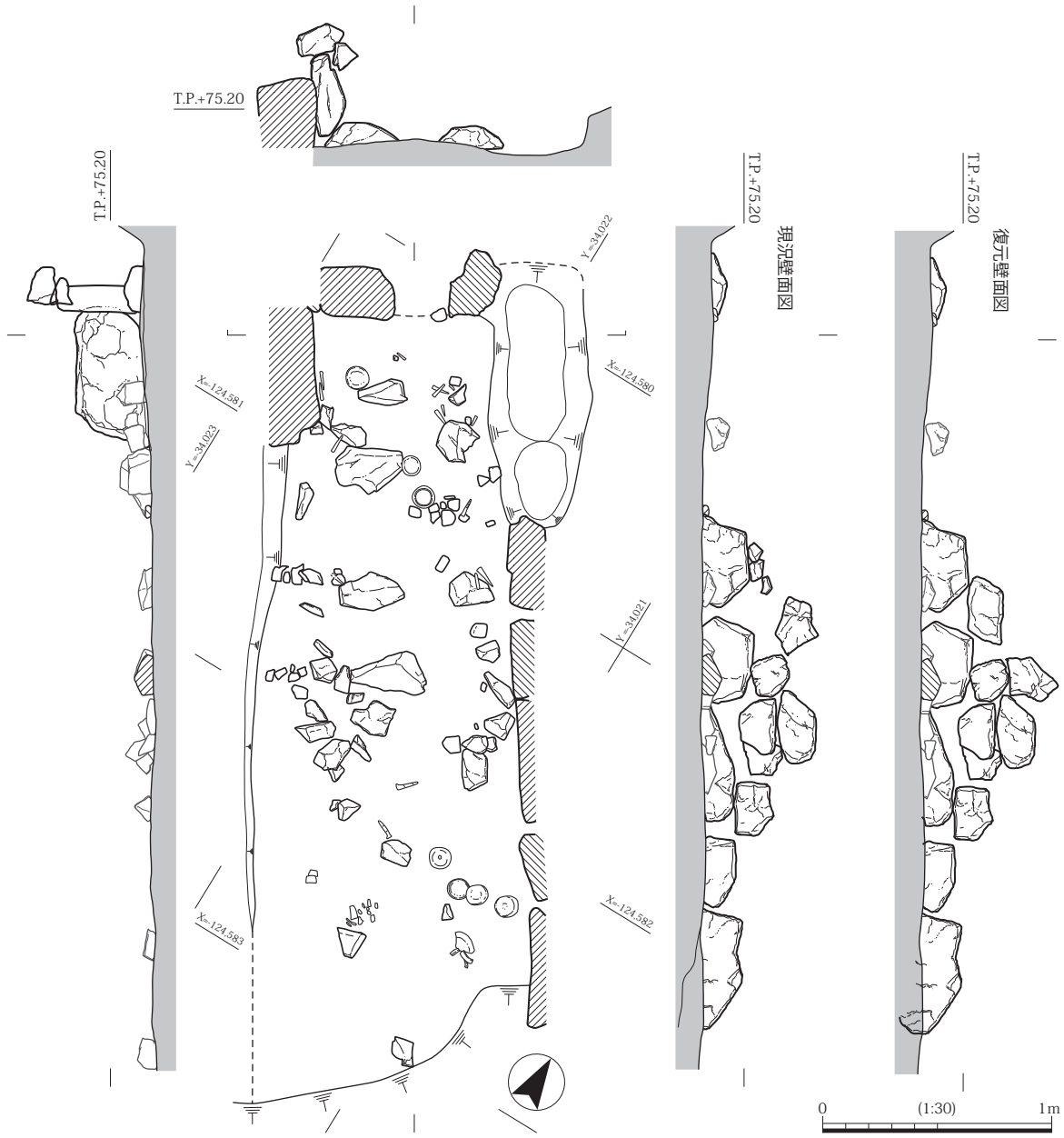


図 148　古墳 1 横穴式石室

積したと考えられる、あまり締りのない黄褐～明黄褐色シルト（1～7）で、この層が床面近くまで堆積していた。特に右側壁や奥壁付近では撹乱が深くまでおよんでおり、基底石材までが抜き取られていた。埋土内には、側壁に使用されたと考えられる拳大から人頭大の石材が散乱していた。石室床面上に堆積していた黄褐～明黄褐色シルト（8～10）は、撹乱の後に堆積した上層（1～7）と、色調はあまり変わらないが、やや締りがあり、埋葬完了後から撹乱がおよぶまでの期間に石室内に流入した堆積土と考えられる。

埋葬施設　埋葬施設は無袖の横穴式石室で、石室規模は全長 3.1 m、奥壁幅 0.8 m、開口部幅 1.2 mを測る（図 148）。開口方向は東に 32°振れ、奥壁幅よりも開口部の幅がやや広くなっている。石室石材は大部分が抜き取られており、奥壁の右コーナー付近と左側壁の一部のみが残存している。開口部で閉塞の痕跡が一切確認できないことから、削平を受けた可能性が高い。左側壁は部分的に 3 段分まで確認でき、残存高は 0.5 mを測る。横方向の長手積みで、石材は比較的整った面を内側にむける。使用石

材は 0.3 ～ 0.6 m程度の人頭大のチャートを主体としており、側壁最下段の石材はやや大きいものを用いている。

石室掘方は、石室よりひとまわり大きい 4.0 × 1.9 m、深さ 0.6 mの規模を測る（図 149）。西から東に下がる斜面に、南東方向に開口する石室が構築されているため、奥壁側から右側壁側にかけて、掘方が基盤層を深く掘り込んでいる。掘方は奥壁と側壁の基底石を据えるため、基底石の輪郭に沿ってコの字状に石室床面よりもやや深く掘り込まれている。また、石室床面の地山の直上に認められる明黄褐色シルト（図 147 － 12）は、基底石設置後の床面の整地土と考えられる。

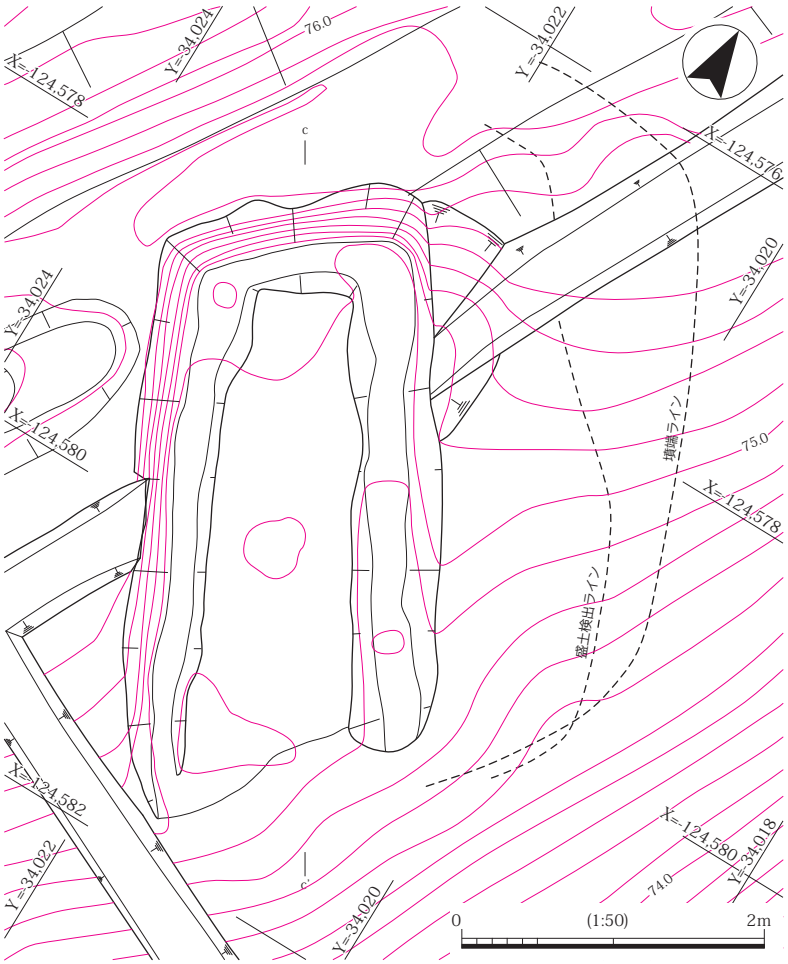


図 149　古墳 1 石室掘方平面図

4 － 1 区の古墳 2 ・ 3 も含め、3 基の古墳はともに大きな破壊を受けており、石室石材の大部分が抜き取られている。このため、11 － 1 トレンチの調査の際に検出された多数の人頭大の石材は、石室石材が投棄され斜面下方の谷部に堆積したものであると考えられる（図版 6 － 4）。古墳 1 の直上には金龍寺につながる里道が走っており、この里道が造成された際に、古墳が破壊されたことが推測される。11 － 1 トレンチでは、人頭大の石材とともに五輪塔の火輪（図 7）が出土していることから、里道の造成は中世以降におこなわれた可能性が高い。この人頭大の石材は、須恵器窯の灰原の堆積層よりも上面で検出されており、大規模な古墳の破壊行為は須恵器窯の操業後におこなわれたことは疑いないが、その一方で、須恵器窯に伴う 452・453 平坦面や灰原からも、7 世紀代の須恵器が数点出土していることから（図 144：760 ～ 763）、古墳の破壊は須恵器窯の操業前後から複数回に渡っておこなわれていたことが窺える。

床面の遺存状況　石室は大きく破壊を受けていたにも関わらず、床面の遺存状況は良好であった。棺台と考えられる石材の並びが検出され、須恵器、土師器、鉄釘などが現位置で出土した（図 150）。玄室床面の奥壁から 2 mまでの範囲を中心に、拳大から人頭大の石材が多数検出された。特に右側壁よりのやや大きめの石材の並びは、棺台の石材と推測され、左側壁側にもやや小ぶりではあるが、それに対応するような石材の並びが確認できる。この範囲を中心に、鉄釘が 16 点出土しており、石材の並びや鉄釘の出土状況から、奥壁から 0.2 m離れた位置に、長さ 2 ×0.6 m程度の規模の釘付式の木棺が安置されていたことがわかる。

この他に、床面からは須恵器と土師器が出土した。奥壁側では、須恵器の杯H蓋 1 点（769）と杯H

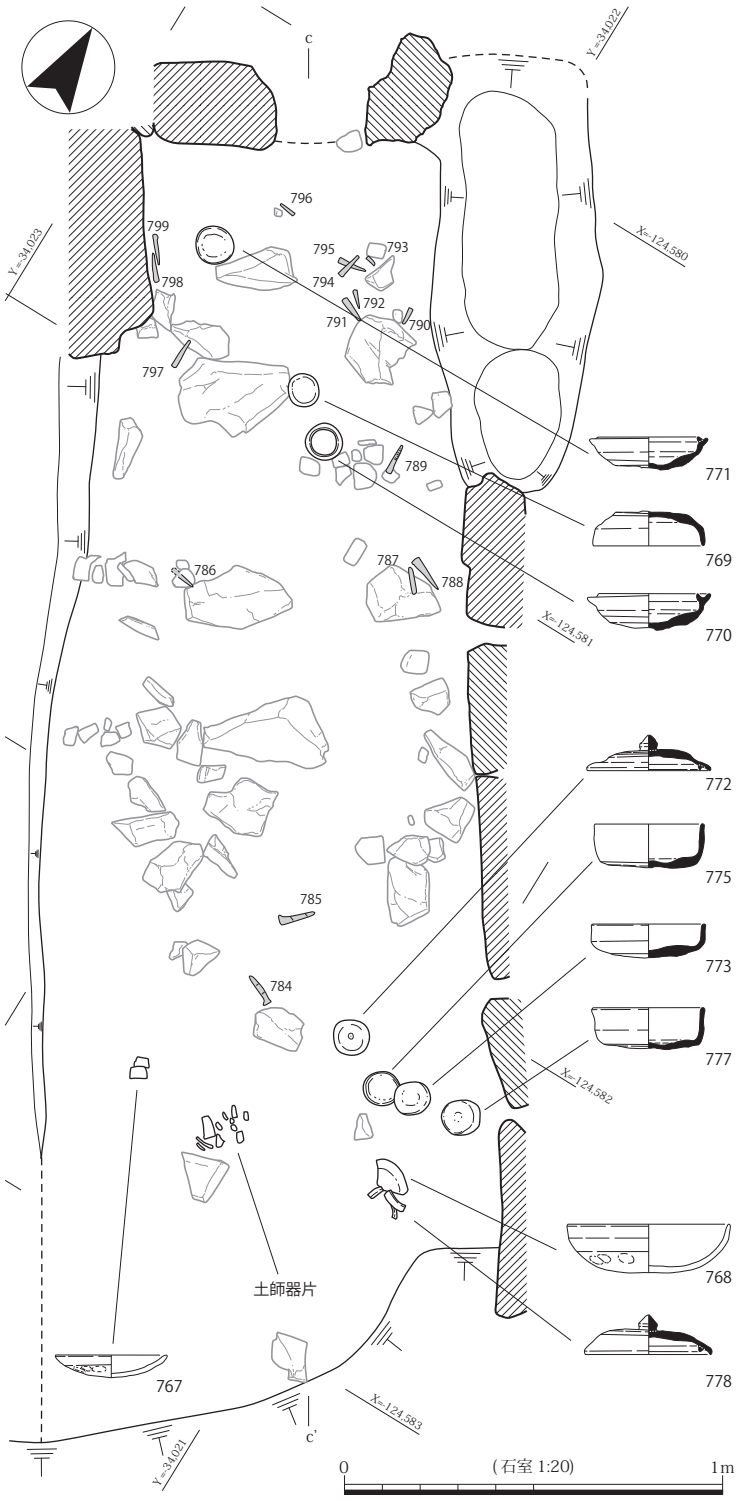


図 150　古墳 1 石室床面遺物出土状況図

身 2 点（770・771）が出土しており、このうち右奥コーナー付近から出土した 771 は、床面直上から出土している。杯蓋と杯身のセットである 769・770 は、床面からやや浮いた、棺台の石材の上面レベルで出土していることから、本来は木棺の上面に置かれていた可能性が高い。開口部側では、左側壁寄りの床面直上から完形の杯 G 蓋 1 点（772）と杯 G 身 3 点（773・775・777）がまとまって出土している。さらにこの周辺には土師器（767・768）や須恵器（778）の破片も出土しているが、このうち 778 については石室の周辺から出土した破片と接合関係がみられることから、石室が破壊を受けた際に破損したものと考えられる。奥壁側では須恵器の杯 H が、開口部側で須恵器の杯 G と土師器がそれぞれまとまって出土しており、意図的に器種と副葬の位置が決められていたことが窺われる。また、床面の遺物出土状況や検出された石材の並びからは、これらを二次的に移動させた痕跡がみられないため、埋葬の回数は 1 回のみであったと考えられる。

出土遺物　石室内および周辺部から出土した遺物は、土師器 3 点、須恵器 15 点、鉄釘 16 点で、このうち須恵器と鉄釘は全て、土師器は図化可能な 2 点を図化した。土師器 2 点（767・768）は、ともに石室開口部付近からまとまって出土している。767 は器高が低い皿状の形態と考えられ、器形的にはあまり類例がない。底部はユビオサエ、体部にナデを施す。768 は杯で、口径 12.8cm、器高 3.9cm を測り、底部は 767 と同様にユビオサエで成形し、体部から口縁部までヨコナデを施す。

須恵器は、杯 H 蓋が 1 点（769）、杯 H 身が 2 点（770・771）、杯 G 蓋が 6 点（772・774・776・778・780・781）、杯 G 身が 5 点（773・775・777・779・782）出土している。このうち、769 ～ 773・775・777 の計 7 点が原位置からの出土で、774・776・779 ～ 782 の 6 点は石室内の埋土や周

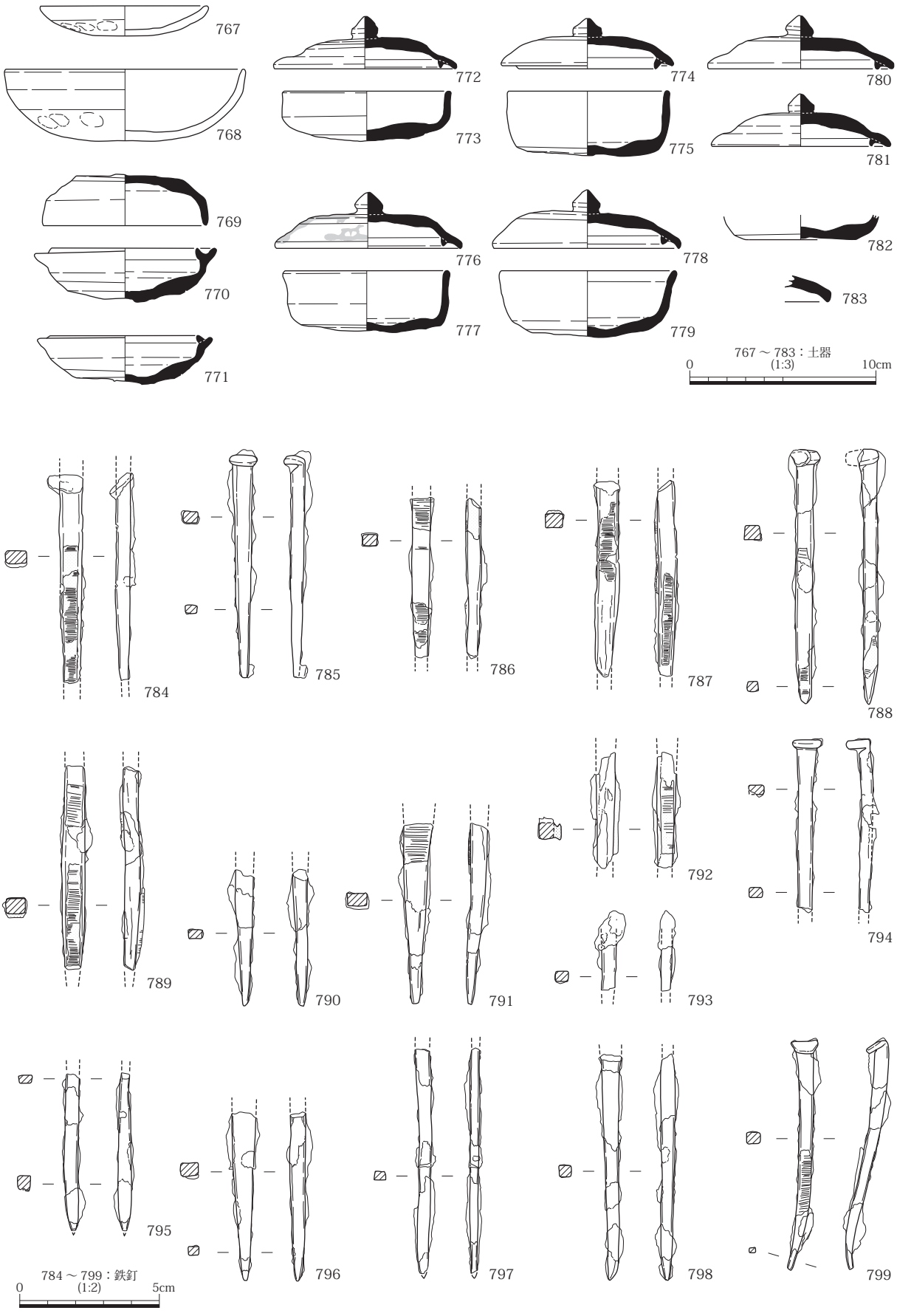


図 151　古墳 1 出土遺物

辺部から出土した個体である。また 779 については、石室床面から出土した破片と周辺部出土の破片が接合した個体である。杯Ｈ蓋（769）が口径 8.8cm、杯Ｈ身（770・771）が口径 7.8 ～ 7.9cm を測り、杯身の立ち上がりは低い。771 の立ち上がりは輪状の粘土をナデつけた痕跡が明瞭に観察できる。いずれも体部が回転ナデ、天井部および底部はヘラ切り未調整で、内面部分に横方向に２回ナデを施す。成形の特徴から、同一工人による製作と推測され、出土状況から 769 と 770 がセット関係となる。杯Ｇ蓋（772・774・776・778・780・781）は、口径 9.4 ～ 9.9cm を測り、かえりがやや強く下方へ突出する 774 を除けば、口縁部よりかえりが低く下がることはない。かえりは輪状の粘土をナデつけた痕跡が明瞭に観察できる。天井部は降灰し、776 のように自然釉が顕著にかかる個体もある。そのため天井部の調整が判然としない個体もあるが、ヘラ削りしたのちに乳頭状もしくは宝珠形のつまみがナデつけられている。杯Ｇ身（773・775・777・779・782）は、口径 8.5 ～ 9.0cm、器高 2.7 ～ 3.6cm を測る。底部はヘラ切りされたのち、不定方向の擦痕があるものの、基本的には未調整で、体部や内面はナデ調整を施す。これらの杯Ｇ・Ｈともに、いずれも蓋の天井部に自然釉ないしは降灰がみられるのに対し、身では自然釉の付着がみられないため、蓋と身がセットで重ねられた状態で正置して焼成されたと推測される。出土した須恵器は杯Ｈが残り、杯Ｇ身の口径が最も縮小化した９cm 前後で、杯Ｇ蓋のつまみが乳頭状ないしは宝珠形であることなどから飛鳥Ⅱ、７世紀第３四半期頃に位置づけられる。なお 783 は８世紀代の杯Ｂ蓋の口縁部の破片であるため、石室の周辺部から出土しているものの、本古墳に伴う遺物ではないと考えられる。

鉄釘（784 ～ 799）は全てが石室床面から出土しており、概ね現位置を保っていると考えられる。この中で頭部から先端部まで完存している個体は、785・788・799 のみで、長さが 7.9 ～ 9.1cm、重さ 5.7 ～ 7.4g をはかる。ただし 789 は頭部と先端部が欠損している個体であるが、完形の個体よりも重く、重さ 9.4 ｇを量る。この他に、頭部が残存する個体が１点（794）、先端部が残存する個体が６点（790・791・795・796・797・798）ある。頭部はいずれも直角に折り曲げるタイプで、頭部が部分的に欠損する 788 を除く３点については、屈曲部にくびれ込みがある。釘の断面は正方形ないしはやや幅が広い長方形で一辺が 0.3 ～ 0.8cm を測る。793 を除けば、他は全て別個体であると考えられ、鉄釘は少なくとも 14 本以上は使用されていたことがわかる。また、784・786・787・788・789・791・792・799 の８個体には木質の付着が認められ、いずれも横方向の木目がみられ、縦方向の木目はみられない。ただし、木質の付着状況が変化する箇所を明確に観察することもできない。木質は主に釘の正面や背面に付着する個体が多いが、787 については側面にも横方向の木目が確認できる。上半部に正面側の木目が、下半部に背面側の木目が偏って付着することから、両者の交点付近に木棺材の結合部分があった可能性も推測されるが、787 は頭部および先端部が欠損しており、木棺の棺材の厚さを推定することができない。（笹栗）

【註】

1）小笠原好彦・西弘海 1976「第Ⅴ章考察 ３土器」『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』奈良文化財研究所学報 第 26 冊 奈良国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所 1981『平城宮発掘調査報告書ＸⅠ』奈良文化財研究所学報 第 40 冊 奈良国立文化財研究所、巽淳一郎 1991「第Ⅵ章考察 ２土器」『平城宮発掘調査報告書ＸⅢ』奈良文化財研究所学報 第 40 冊奈良国立文化財研究所、神野恵 2005「第３章出土遺物 ３－１－３土器類」『平城宮発掘調査報告ＸⅥ 兵部省地区調査』奈良文化財研究所学報 第 70 冊 独立行政法人奈良文化財研究所

2） 石井清司 1995「篠窯須恵器」中世土器研究会編『概説　中世土器・陶磁器』真陽社

3） 計量分析の方法については、主に（江浦 1995）を参照した。また、計量分析におけるそれぞれの計測法の特徴や利点および欠点については（宇野 1992）に詳しい。

江浦洋 1995「陶邑周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財）大阪文化財センター

宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集 国立歴史民俗博物館

4） 陶製・土製の九輪の類例としては、陶邑 KM29 窯跡などに類例がある。ここでは九輪が 2 点出土しているが、いずれも薄手で上面から側面が 90° 屈曲して垂下する形態で、本窯で出土したようなドーナツ状の環状製品は管見の限り類例がない。灰釉陶器の中には厚手の製品もみられ、静岡県浜松市吉名 1 号窯の例が形態的には近い。

鈴木敏則 2014『吉名古窯跡群 － 1 号窯跡の発掘調査－』浜松市教育委員会

5） 高橋照彦・中久保辰夫編 2012『篠窯跡群大谷 5 号窯の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告 第 5 冊 大阪大学考古学研究室篠窯調査団

6） 伊野近富 1990「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第 37 号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

7） 前掲 2）石井 1995 など

8） 前掲 5）高橋・中久保編 2012

9） 陶邑ＴＫ 217 号窯で事例が紹介されている。

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

10）北野博 2001「須恵器の風船技法」『須恵器の貯蔵具を考えるⅡ つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究第 9 号 北陸古代土器研究会

11）分炎柱は、東海の灰釉陶器窯に特有の構造とされるため、畿内の須恵器窯に分炎柱が存在するかどうかについては、十分な検討が必要である。分炎柱の性格については、窯体内の温度をコントロールするために焼成部口を絞り込むための効果や、天井の崩落を防止するための機能などが想定されている。分炎柱の機能や構造に関する所説については、（望月 2010）に詳しい。

望月精司 2010「窖窯構造をもつ須恵器窯跡の各部位構造とその理解」窯跡研究会編『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』真陽社

12）杉原和雄・石井清司・引原茂治・田中彰・土橋誠 1984『篠窯跡群Ⅰ』京都府遺跡調査報告書 第 2 冊（財）京都府埋蔵文化財センター

13）土橋誠編 1989『篠窯跡群Ⅱ』京都府遺跡調査報告書 第 11 冊（財）京都府埋蔵文化財センター

第９節　６区の調査成果（12－5・12－6トレンチを含む）

〔図 13・152 ～ 154、写真図版 40・79〕

12－1～12－4トレンチを設定した小谷を挟んで２～５区の対岸、遺跡北端部の尾根上に位置する。12－5・12－6トレンチの調査において遺構が確認されたため、トレンチ周辺の尾根上平坦部に調査区を広げて６区とした。面積は約 450 ㎡である。

表土層の下に礫混じりの黄褐～明黄褐色砂質シルト（1－1・1－2層）が 0.2 ～ 0.4 mほどの厚みであり、これを除去した面で遺構を検出したが、この面は岩盤層の上面ではなく、岩盤層より上の砂質シルト層の上面である。層理面が不明瞭であったため、試掘調査の段階では岩盤層の上面を追って一部掘り下げてしまったが、遺構が検出されたことにより、遺構面と認識することができた。

１層からは、弥生土器・土師器・須恵器が数点ずつ出土している。800 は弥生土器の水平口縁の高杯と推測でき、口縁部が欠損する。杯部が浅い形態に復元でき、Ⅳ様式後半に位置づけられる。801 は須恵器の壺もしくは平瓶の頸部片と考えられ、８・９世紀代の遺物である。

古代の遺構

４基の土坑を確認した。このうち１～３土坑の３基は焼土坑で、これまでにも報告したように、同様の性格の遺構は遺跡内で数多くみつかっている。

１土坑　調査区中央部に位置する。12－5トレンチで一部が検出されたため、この６区として拡張するきっかけとなった土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺 0.8 m、短辺 0.5 m以上、深さ 0.2 mを測る。埋土は上層が黄褐色シルト、下層は炭が多く混じるオリーブ黒色シルトである。壁面が被熱

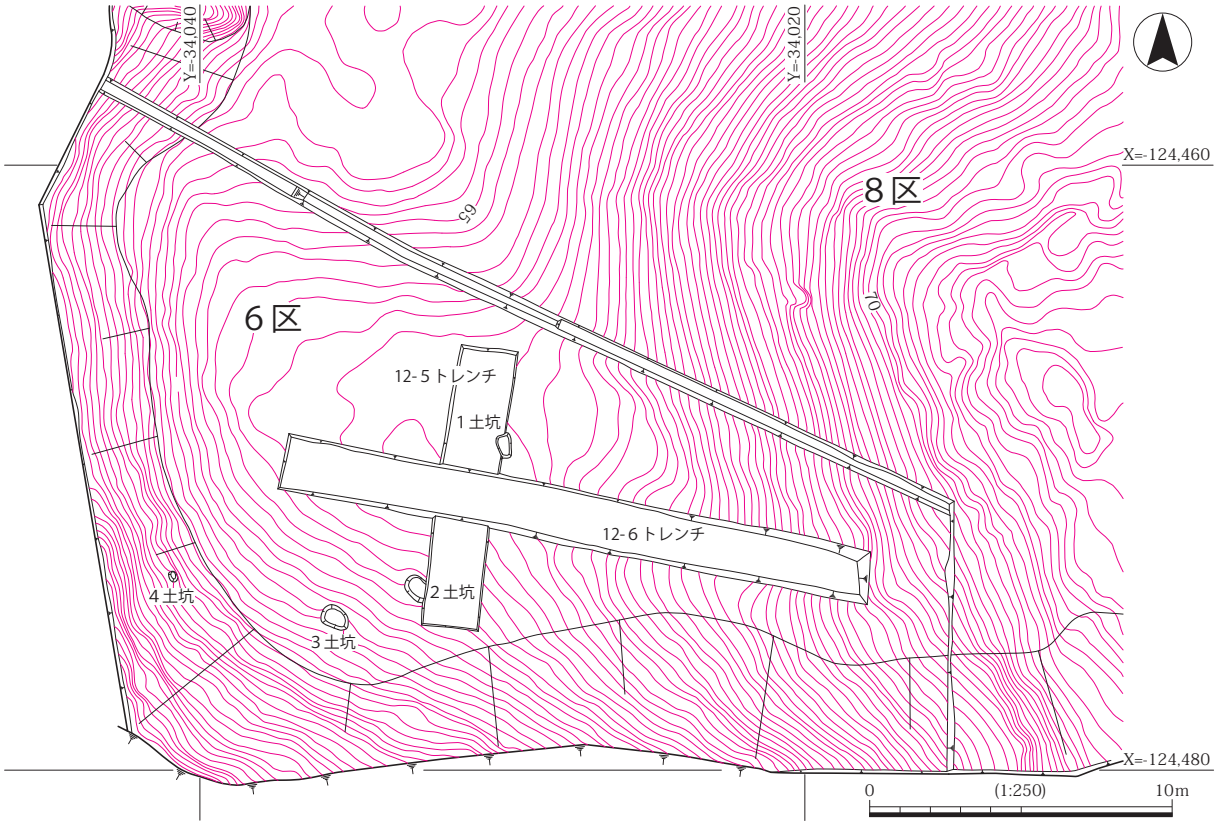


図 152　６区検出遺構全体平面図

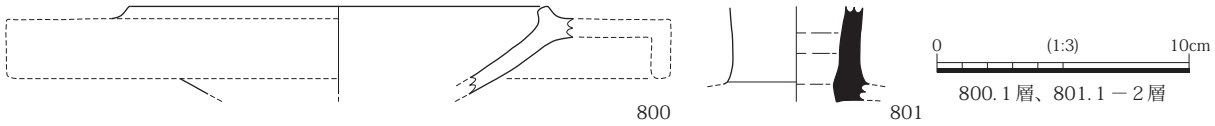


図 153　６区遺物包含層出土遺物

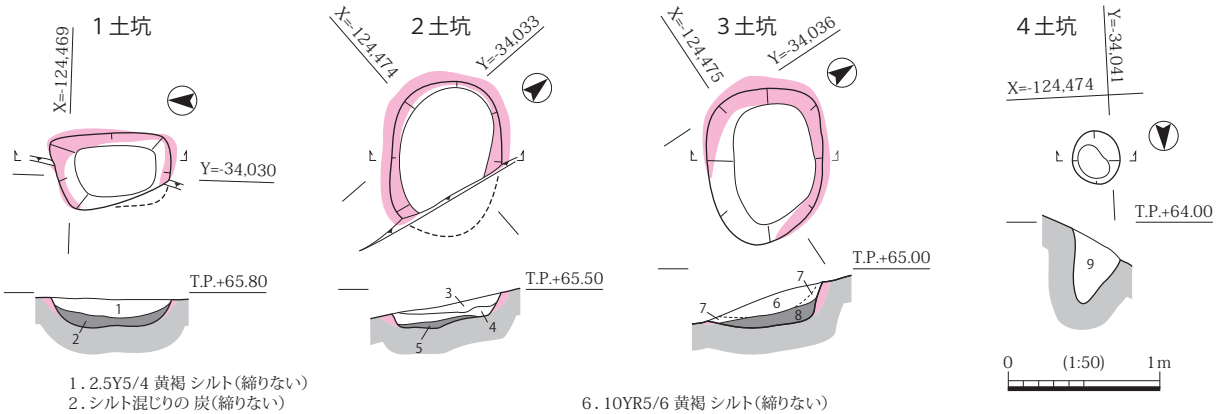
によって赤褐色に変色する。埋土からは、土師器皿の細片が出土している。

２土坑　１土坑の南側に位置し、これについても一部が 12 － 5 トレンチにかかっていた。平面形はやや大型の楕円形を呈し、遺構の東端が 12 － 5 トレンチの調査の際に削平を受けているが、長径約 1 m、短径 0.72 mに復元でき、深さ 0.14 mを測る。埋土は上層が小礫混じりの黄褐色シルト、中層が炭混じりの暗オリーブ褐色シルト、下層が炭を多く含む焼土混じりのオリーブ黒色シルトである。この土坑も壁面が被熱によって赤褐色に変色している。

３土坑　２土坑のすぐ西側に位置する。平面形は角が取れた隅丸長方形を呈する。長辺 1.0 m、短辺 0.76 mで、深さは 0.22 mを測る。埋土は上層が黄褐～褐色シルト、下層が炭を多く含む黒色シルトである。この土坑も壁面が被熱によって赤褐色に変色している。

４土坑　調査区西端の斜面部に位置する。土坑というよりはピットとすべき小規模な遺構である。平面形は直径 0.3 m強の小さな円形で、深さは 0.5 mを測る。埋土は炭と焼土が多く混じる褐～黄褐色シルトで、壁面に被熱による赤変は認められない。明らかに他の３基とは性格を異にする遺構である。

（伊藤・笹栗）



1．2.5Y5/4 黄褐 シルト(締りない)
2．シルト混じりの 炭(締りない)
3．10YR5/6 黄褐 シルト(小礫混じる・締りない)
4．2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト(炭混じる・締りない)
5．5Y2/2 オリーブ黒 シルト(炭多く含む・焼土混じる・締りない)
6．10YR5/6 黄褐 シルト(締りない)
7．10YR4/4 褐 シルト（６が焼けたような状態で変色・締りない)
8．2.5Y2/1 黒 シルト(炭多く含む・締りない)
9．10Y R4/6～5/6 褐～黄褐 シルト(炭・焼土多く混じる)

図 154　６区検出遺構平面・断面図

第 10 節　7 区の調査成果（12 － 1 トレンチの一部を含む）〔図 11・155、写真図版 41〕

12 － 1 トレンチの南壁際で遺構が検出されたことにより、急遽拡張して調査することとなった調査区である。6 区西側の斜面裾部に認められた僅かな平坦部の調査で、調査面積は 12 － 1 トレンチ部と合わせても約 33 ㎡と非常に狭い。

遺構面となる地山の平坦部は、表土層とその下の黄褐色シルト層を合わせて 0.5 ～ 0.6 mほど除去すると現れるが、この平坦部は僅か 5.5 ㎡程度の広さしかなく、調査区の南半部は、12 － 4 トレンチで検出した溜池へと続くように深く落ち込んでいる。落ち込みの裾部には護岸のために打たれたとみられる細い木杭の列も認められた。

101 土坑　この僅かな平坦部で、平面が楕円形を呈する炭の広がりが検出された。他の調査区で検出されているような土坑状に窪んだものではなく、薄い炭の広がりが確認された。この炭の広がりは長径 1.93 m、短径 0.95 mを測るが、断面の観察から、2 枚の炭層がややずれるようにして広がっていることが確認できる。西側の炭層は地山直上に広がっているが、この上に薄い灰色極細粒砂～中粒砂と黄褐色粘土質シルトを挟んで、上面に東側の炭層が広がっている。この間層は極めて薄く、またほぼ同じ位置にある、よく似た炭の広がりであるため、この 2 枚の炭層に時期差はほとんどないものと考えられる。遺物が全く出土していないため、遺構の時期を特定することができないが、現時点では 6 区はじめ他の調査区で検出されている焼土坑と同時期の遺構であると考えている。（伊藤）

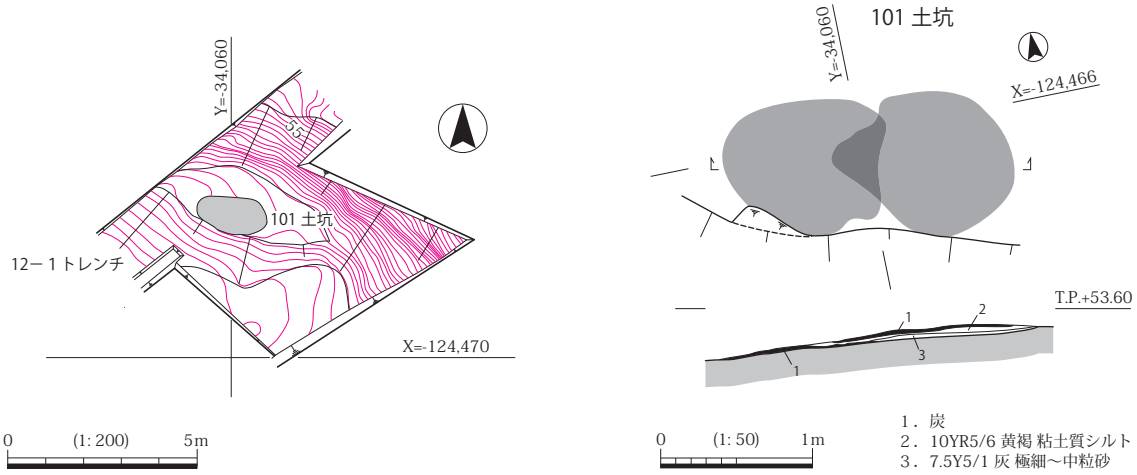


図 155　7 区検出遺構全体平面図、101 土坑平面・断面図

第 11 節　8 区の調査成果〔図 156 ～ 162、写真図版 41 ～ 44・79〕

2 ～ 5 区と小谷を隔てた北東側尾根上の調査区で、6 区の北側に位置する。面積は約 1,700 ㎡である。

調査区を設定した尾根筋は南東から北西方向にむかってのびており、東側と西側は急峻な斜面となるが、南東部と北西部には緩やかに傾斜する平坦な面がみられる。表土層と黄褐色細粒砂～シルト（1 層）を除去すると、明黄褐色の細粒砂～シルト（2 層）となり、その下は丘陵の基盤層となる。2 層以下は地山層で、遺構は全て 1 層下面で検出された。なお調査区北西の谷部では、1 層と 2 層との間に礫を多く含む明黄褐色の中粒砂～細粒砂の堆積が認められた。（金光・伊藤）

包含層の遺物　1 層中および礫層からは、土師器・須恵器・弥生土器・鉄製品・石器が出土している。古代の土師器や須恵器の出土が多く、弥生時代の遺物は極少量みられる程度である。802 ～ 805 は 1 層から出土した土器で、802 が土師器甕の頸部、803 が弥生土器の底部である。804 は須恵器壺 K の口縁部と考えられ、内面に自然釉の付着がみられる。805 は須恵器壺の頸部で、頸部は 3 段接合である。ともに 8 世紀代の遺物と考えられる。806 ～ 812 は谷部の礫層からの出土で、古代の須恵器が多い。806 は土師器杯 C で、口縁部ヨコナデ、底部ヘラケケズリで、内面に放射暗文を施す。平城Ⅲ、8 世紀中頃に位置づけられる。807 は須恵器杯蓋で、天井に環状のつまみが付くタイプと考えられる。

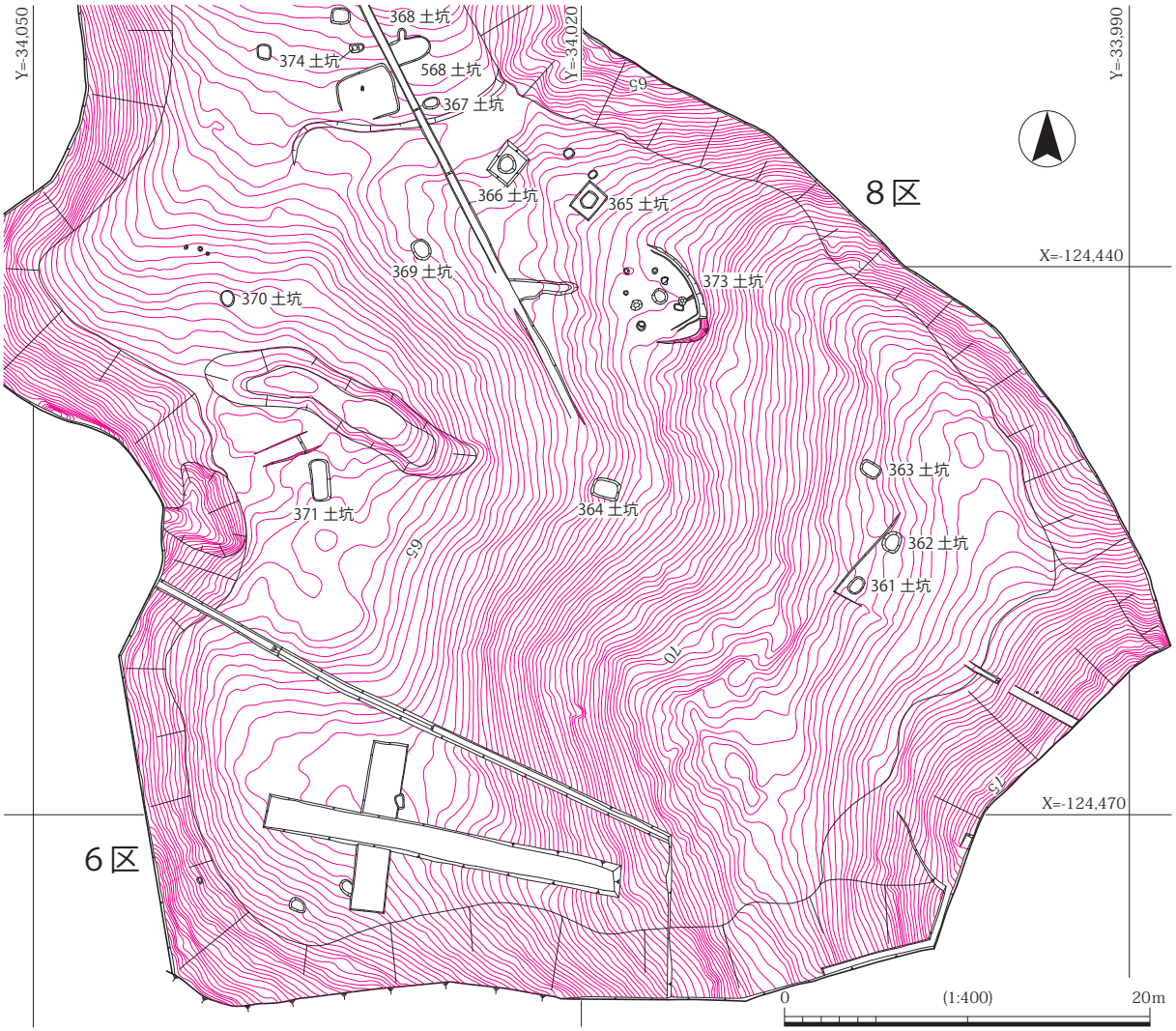


図 156　8 区検出遺構全体平面図

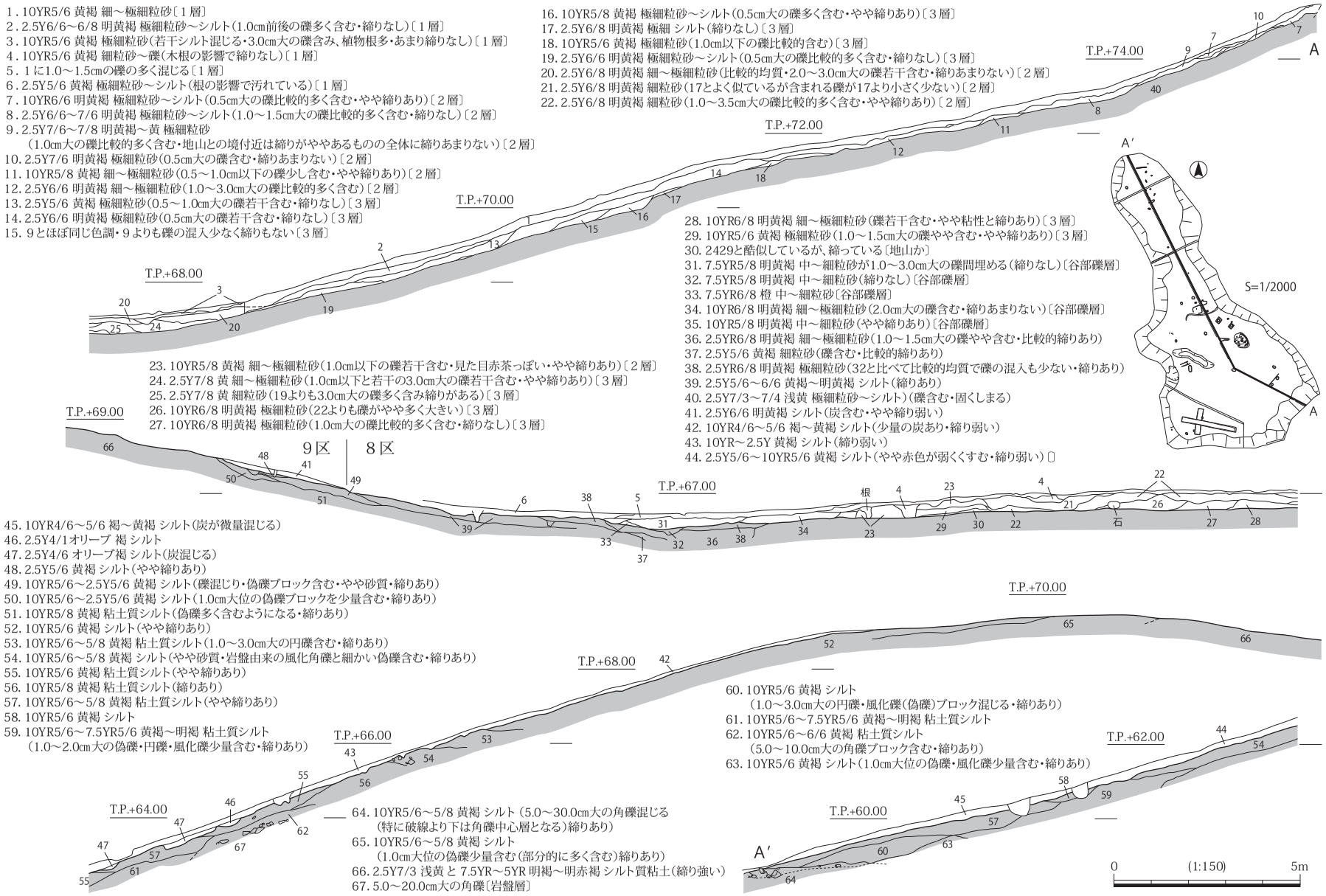


図157　8・9区地層断面図

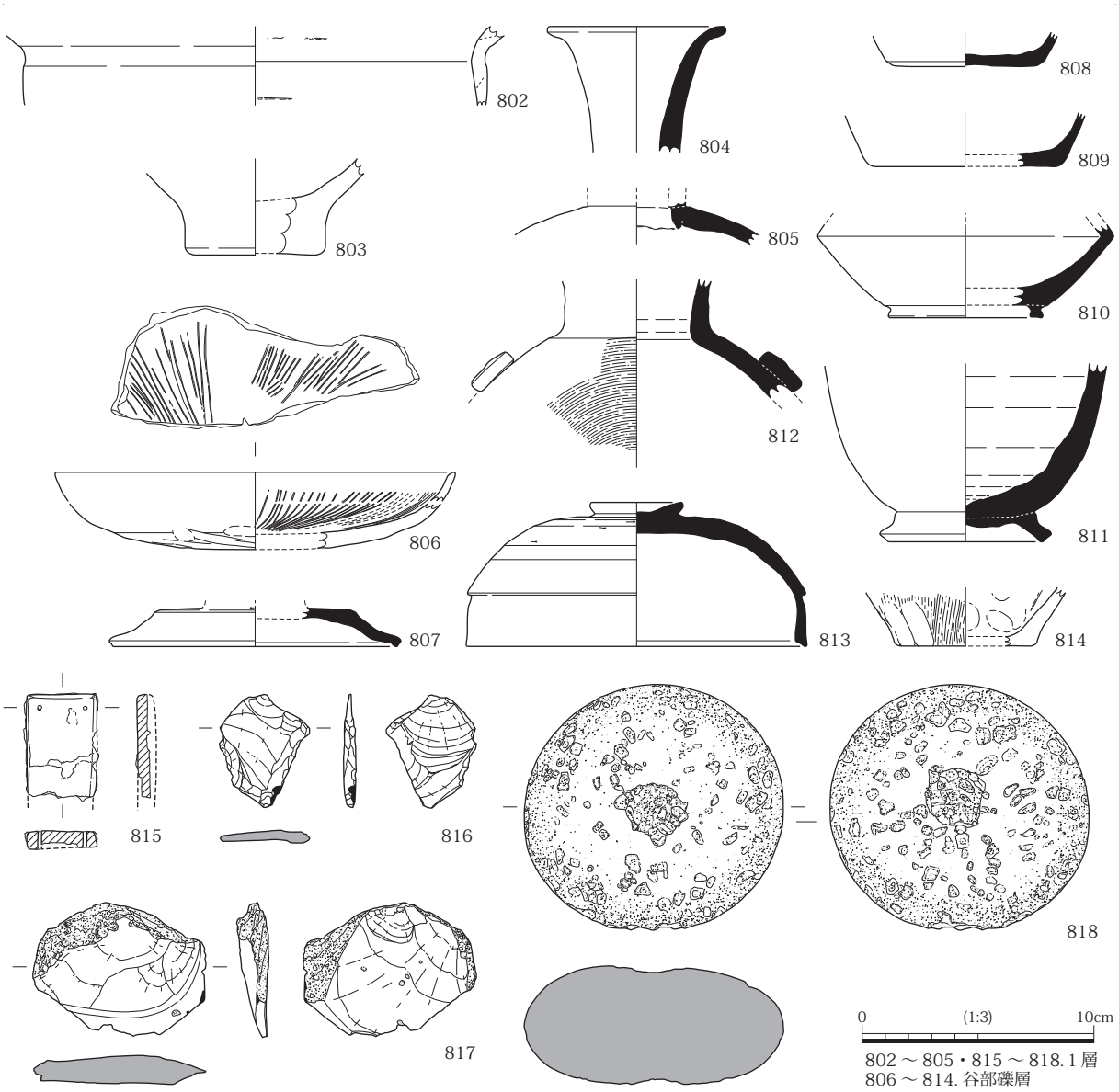


図 158　8 区遺物包含層出土遺物

808・809 は須恵器杯 A の底部で、底部はヘラ切り未調整である。810 は須恵器の広口壺の底部～肩部で、底部には高台が付き、肩部に明瞭な屈曲がみられる。811 は須恵器壺の底部で、体部にむかってあまり開かずにのびており、体部の形状から水瓶や浄瓶などに復元できる可能性がある。底部には小皿状のものを逆向きに貼り付けて高台としている。これらの土師器・須恵器はいずれも 8 世紀を中心とした時期に位置づけられる。その他には、古墳時代の須恵器が数点出土している。812 は提瓶で、体部外面にカキメを施し、肩部には把手が形骸化したボタンが付されており、TK43 ～ 209 型式、6 世紀後半から末頃に位置づけられる。813 は有蓋高杯の蓋で、TK47 型式、5 世紀末に位置づけられ、近辺に古墳があった可能性もある。814 は弥生土器の底部である。この他に 1 層中からは不明の板状鉄製品（815）や、サヌカイトの剥片（816･817）、凹石（818）が出土している。815 は長さ 4.6cm 以上、幅 3.1cm のサイズの長方形の板状の鉄製品で、短辺の端に小孔が 2 ヶ所ある。一見すると形態的に小札にもみえるが、厚さが 0.8cm とやや厚みがあり、用途は不明である。（笹栗）

遺構

1層下面で土坑やピットなどの遺構が検出された。この他に、北側に隣接する9区の調査の段階で、8区の調査部分も含めて精査したところ、これらの土坑と重複する遺構（563・568土坑）が検出されたため、ここであわせて報告する。373土坑と563・568土坑を除く12基の土坑は、全てこれまでの調査区でも検出されたものと同様の焼土坑で、このうち361～367土坑は、壁面が被熱によって赤褐色に変色するタイプのもので、浅いものが多いことから、大部分は削平を受けていると考えられる。これら373土坑を除いた遺構は、出土遺物は少ないものの、他の調査区と同様に8・9世紀代を中心とした古代の遺構と考えられる。

361土坑　調査区東寄りの、尾根筋から若干西側に下りた斜面に位置する。平面形は長辺0.98 m、短辺0.63 mの隅丸長方形で、深さは約0.1 mを測る。埋土は下層が炭で、上層が礫を多く含む褐色極細粒砂～シルトである。壁面の一部が被熱により赤褐色に変色している。

362土坑　361土坑の北東側に近接する。平面形は長辺1.1 m、短辺0.9 mの角のとれた隅丸長方形で、深さは0.16 mを測る。埋土は下層が炭で、上層が黄色極細粒砂～シルトのブロック土を含む褐色極細粒砂～シルトなどである。壁面の一部が被熱により赤変している。

363土坑　362土坑の北側に近接する。平面形は長辺1.08 m、短辺0.68 mの隅丸長方形で、深さは約0.1 mを測る。埋土は下層が炭で、上層が焼土を含む褐色極細粒砂～シルトである。壁面の一部が被熱により赤変している。

364土坑　調査区ほぼ中央の斜面に位置する。平面形は長辺1.5 m、短辺1.1 mの隅丸長方形で、壁面の一部が被熱により赤変している。深さは0.1 mを測る。埋土は西側に礫や炭化物を含む明黄褐色極細粒砂～シルトが、その下にもぐりこむように東側には礫を含むオリーブ褐色極細粒砂～細粒砂がみられ、東側の埋土の上面には薄い炭層が広がっている。

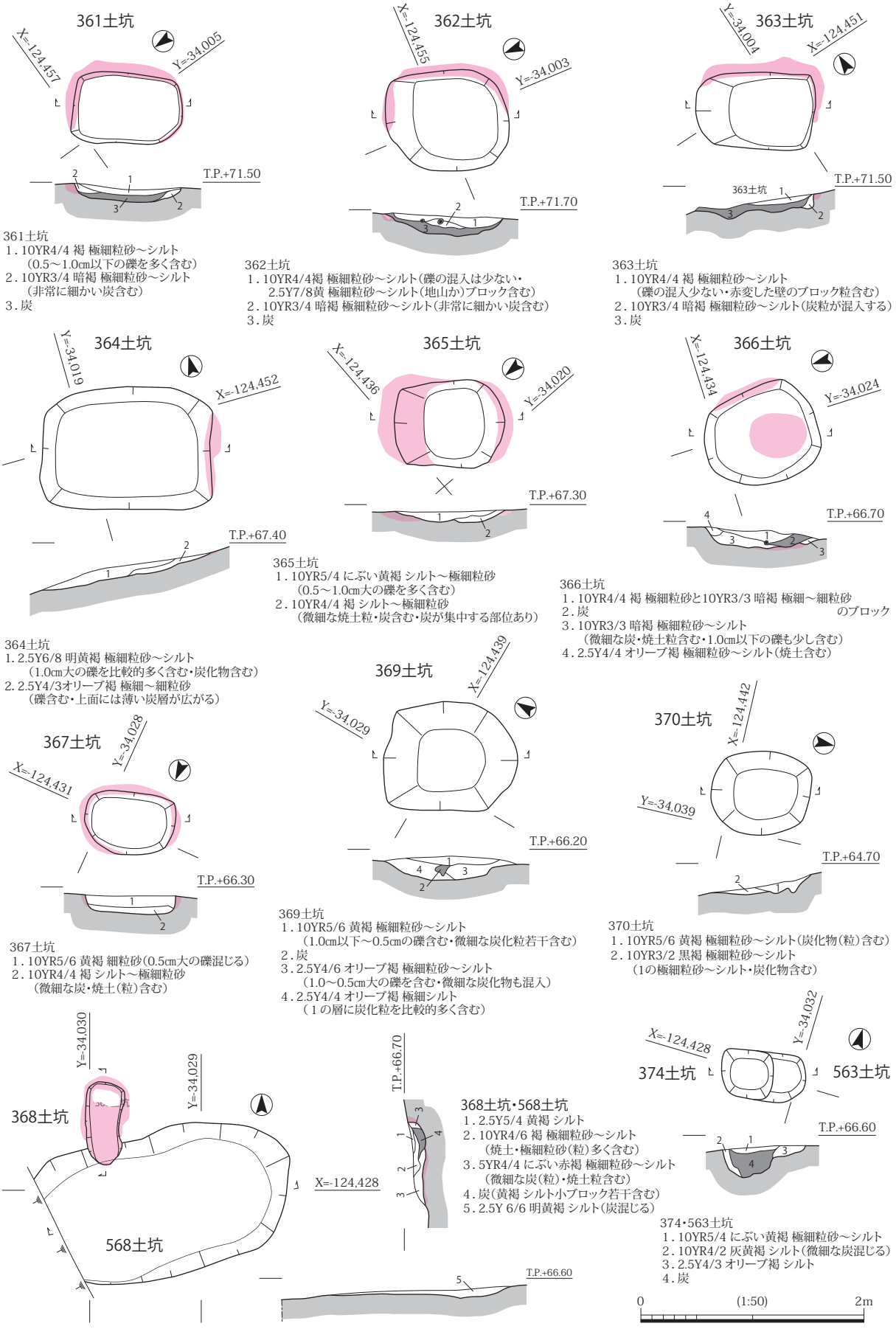
365土坑　調査区北方の尾根筋上に位置する。平面形は長辺1.0 m、短辺0.8 mの隅丸長方形で、深さは0.1 mを測る。埋土は礫を多く含むにぶい黄褐色シルト～極細粒砂や、炭と焼土を含む褐色シルト～極細粒砂である。壁面が被熱により赤変している。

366土坑　調査区北方の尾根筋上、365土坑の西側に近接する。平面形は長辺1.04 m、短辺0.86 mの隅丸長方形で、深さは0.15 mを測る。埋土は炭のほか、褐色極細粒砂と暗褐色極細粒砂～細粒砂のブロック土や、炭や焼土を含む暗褐色極細粒砂～シルトなどである。壁面および底面の一部が被熱により赤変している。

367土坑　調査区北方の尾根筋上、366土坑の北西側に近接する。平面形は長辺0.8 m、短辺0.56 mの隅丸長方形で、深さは0.16 mを測る。埋土は下層が炭や焼土を含む褐色シルト～極細粒砂で、上層が礫混じりの黄褐色細粒砂である。壁面が被熱により赤変している。

埋土からは須恵器がまとまって出土している。819～822は杯Aで、これらは全て焼成が悪い生焼けのもので、出土した杯Aの全5点のうち4点を図化した。いずれも底部が回転ヘラ切り未調整で、821については底部と体部に接合痕がみられることから、粘土紐もしくは輪積みによる成形によるものであることがわかる。823は肩部が屈曲する壺で、やや灰白気味の焼き上がりで、肩部には自然釉がかかる。東海系の可能性がある。これらの遺物は8世紀後半から9世紀前半に位置づけられる。

368土坑・568土坑　調査区北端部に位置する。368土坑は南側が開口するU字状を呈し、規模は長さ0.74 m、幅0.3 m、深さ0.1 m強と、やや小型の土坑である。南側開口部側には隣接して浅いくぼみ（568



361土坑
1．10YR4/4 褐 極細粒砂～シルト
（0.5～1.0㎝以下の礫を多く含む）
2．10YR3/4 暗褐 極細粒砂～シルト
（非常に細かい炭含む）
3．炭

362土坑
1．10YR4/4褐 極細粒砂～シルト（礫の混入は少ない・
2.5Y7/8黄 極細粒砂～シルト（地山か）ブロック含む）
2．10YR3/4 暗褐 極細粒砂～シルト（非常に細かい炭含む）
3．炭

363土坑
1．10YR4/4 褐 極細粒砂～シルト
（礫の混入少ない・赤変した壁のブロック粒含む）
2．10YR3/4 暗褐 極細粒砂～シルト（炭粒が混入する）
3．炭

364土坑
1．2.5Y6/8 明黄褐 極細粒砂～シルト
（1.0㎝大の礫を比較的多く含む・炭化物含む）
2．2.5Y4/3オリーブ褐 極細～細粒砂
（礫含む・上面には薄い炭層が広がる）

365土坑
1．10YR5/4 にぶい黄褐 シルト～極細粒砂
（0.5～1.0㎝大の礫を多く含む）
2．10YR4/4 褐 シルト～極細粒砂
（微細な焼土粒・炭含む・炭が集中する部位あり）

366土坑
1．10YR4/4 褐 極細粒砂と10YR3/3 暗褐 極細～細粒砂
2．炭　のブロック
3．10YR3/3 暗褐 極細粒砂～シルト
（微細な炭・焼土粒含む・1.0㎝以下の礫も少し含む）
4．2.5Y4/4 オリーブ褐 極細粒砂～シルト（焼土含む）

367土坑
1．10YR5/6 黄褐 細粒砂（0.5㎝大の礫混じる）
2．10YR4/4 褐 シルト～極細粒砂
（微細な炭・焼土（粒）含む）

369土坑
1．10YR5/6 黄褐 極細粒砂～シルト
（1.0㎝以下～0.5㎝の礫含む・微細な炭化粒若干含む）
2．炭
3．2.5Y4/6 オリーブ褐 極細粒砂～シルト
（1.0～0.5㎝大の礫を含む・微細な炭化物も混入）
4．2.5Y4/4 オリーブ褐 極細シルト
（1の層に炭化粒を比較的多く含む）

370土坑
1．10YR5/6 黄褐 極細粒砂～シルト（炭化物（粒）含む）
2．10YR3/2 黒褐 極細粒砂～シルト
（1の極細粒砂～シルト・炭化物含む）

368土坑・568土坑
1．2.5Y5/4 黄褐 シルト
2．10YR4/6 褐 極細粒砂～シルト
（焼土・極細粒砂（粒）多く含む）
3．5YR4/4 にぶい赤褐 極細粒砂～シルト
（微細な炭（粒）・焼土粒含む）
4．炭（黄褐 シルト小ブロック若干含む）
5．2.5Y 6/6 明黄褐 シルト（炭混じる）

374・563土坑
1．10YR5/4 にぶい黄褐 極細粒砂～シルト
2．10YR4/2 灰黄褐 シルト（微細な炭混じる）
3．2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト
4．炭

図 159　8区検出遺構平面・断面図

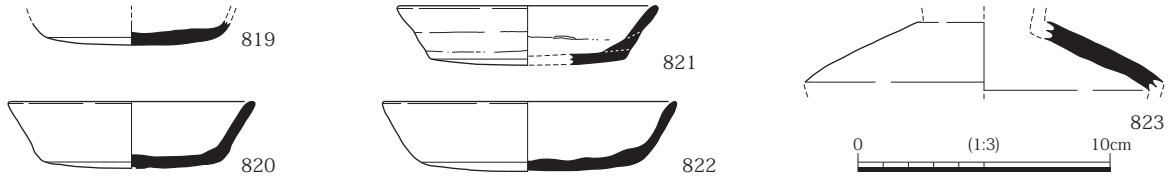


図 160　367 土坑出土遺物

土坑）がみられる。埋土は、下層が炭や焼土を含むにぶい赤褐色極細粒砂～シルトや炭で、上層が焼土を多く含む褐色極細粒砂～シルトや黄褐色シルトである。奥壁際の底面は、被熱が弱かったためか、部分的に赤褐色に変色していない箇所もみられるが、それ以外は壁面も底面もよく焼けており、赤褐色に変色している。土坑の規模がやや小さいものの、遺構の形状や被熱の受け方などで、２区で検出された 21・22・23 土坑と非常によく似ている。そのため、同じような遺構の機能や性格を有していたと推測され、出土遺物はないが、これについても土師器焼成土坑などの可能性が想定される。

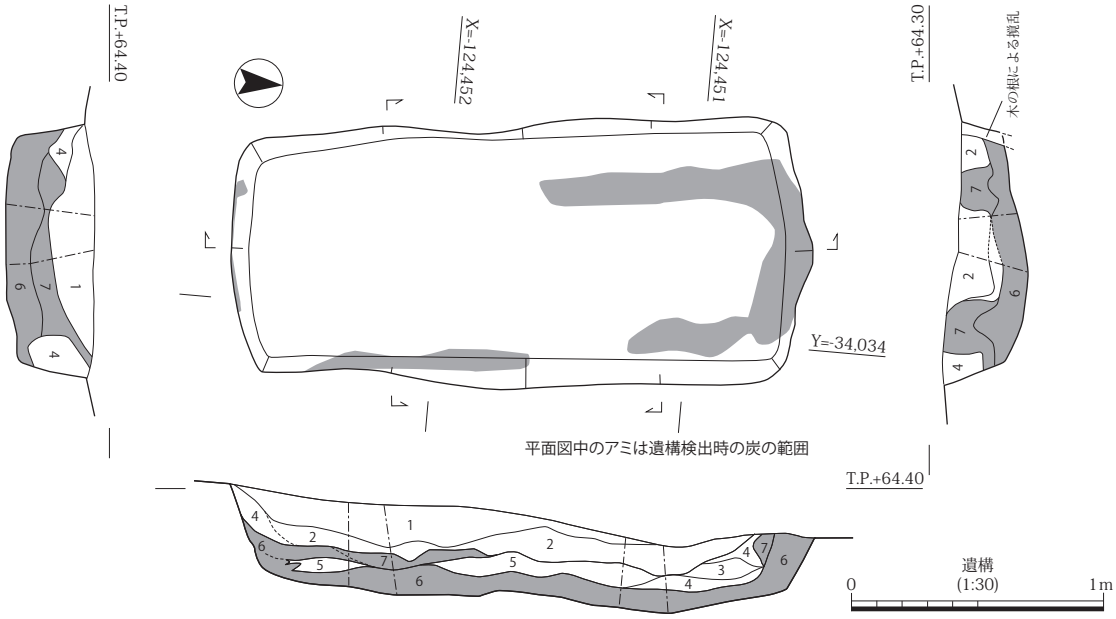
568 土坑は、この 368 土坑の南側に隣接する浅いくぼみ状の遺構で、下層確認用の溝によって一部を欠くが、長径 2.2 m以上、短径 1.3 mの平面楕円形に復元でき、深さは 0.1 m以下と浅い。埋土は炭混じりの明黄褐色シルトであり、１区で検出された 35 土坑に隣接する 36 土坑や、104 土坑に隣接する 105 土坑のように、368 土坑の内部から掻き出された灰や炭が溜まって形成された遺構と考えられる。

369 土坑　調査区北半の、365・366 土坑の西側に位置する。壁面に被熱による赤変は認められず、埋土に炭が入るタイプの焼土坑である。平面形は長辺 1.2 m、短辺 0.98 mの隅丸長方形で、深さは 0.22 mを測る。埋土は礫や炭を含む黄褐～オリーブ褐色の極細粒砂～シルトや炭などである。

370 土坑　369 土坑の西側に位置する。369 土坑同様に壁面に被熱による赤変は認められず、埋土に炭が入るタイプの焼土坑である。平面形は長辺 0.9 m、短辺 0.75 mの楕円形に近い隅丸長方形を呈する。深さは 0.1 m以下と浅い。埋土は炭を含む黄褐色や黒褐色の極細粒砂～シルトである。

371 土坑　調査区西側の最も傾斜が緩やかな場所に、他の土坑とはやや離れて位置する。土坑の平面形は南北に長い長方形で、長辺約 2.31 m、短辺 0.94 ～ 1.06 mで、深さは約 0.35 mを測る。この土坑については、まず土坑を検出した段階で、土坑の輪郭の内側北寄りで、コの字形に炭が広がっているのが確認された。さらに土坑の埋土を掘り進めると、土坑の底面全体に 0.10 ～ 0.17cm の厚さで炭が敷き詰められているのが確認され、検出段階で平面的にみられたコに字状が炭の広がっていた部分には、炭層が底面からほぼ垂直に立ち上がっていることが確認された。土坑の検出面で顕著な炭の広がりがみられなかった南側については、土坑埋土の横断面を観察すると、ここでも底面からの炭の立ち上がりが確認された。このような遺構の検出状況から、土坑のひとまわり内側が炭で長方形に囲われていたことがわかり、その規模や形状から木棺の痕跡と考えられる。また、埋土中からは後述するように、鉄釘も出土しており、木棺の存在を確実視することができる。さらに木棺の周りに炭をめぐらす構造であることから、この 373 土坑は木炭槨木棺墓と推測でき、炭の内法の大きさから、長さ 1.95 m、幅 0.36 mの木棺を復元できる。

木棺の南北の小口側については、土坑の肩部に炭の立ち上がりが確認できるが、その一方で長辺側では、土坑の肩部と炭立ち上がりの間の平面 0.1 mの幅で、灰黄褐色の埋土が認められる。このため、墓壙の幅いっぱいに木炭を充填するのではなく、土坑の掘削後、いったん底面に炭を敷き詰めた後に、木棺の安置の前後どちらであるかは判断がつかないが、長辺側を埋めて土坑をやや狭めていたことがわか



1．10YR5/6 黄褐 極細粒砂～シルト（0.5㎝大の礫含む・炭ブロック少し混入）
2．10YR4/2 灰黄褐 細～極細粒砂（比較的大きめの炭材をやや多めに含む）
3．2よりも炭粒を多く含む
4．2.5Y4/1 黄灰 細～極細粒砂（2とよく似ている・1の土に炭粒子が多く混じる）
5．2.5Y4/6 オリーブ褐 極細～細粒砂（0.5㎝以下の礫若干含む）
6．炭層（特によく締っており木材状のものもある）
7．炭層（6に比べ炭が薄い）

遺構検出状況〔北から〕

縦断面〔東から〕

横断面〔北から〕

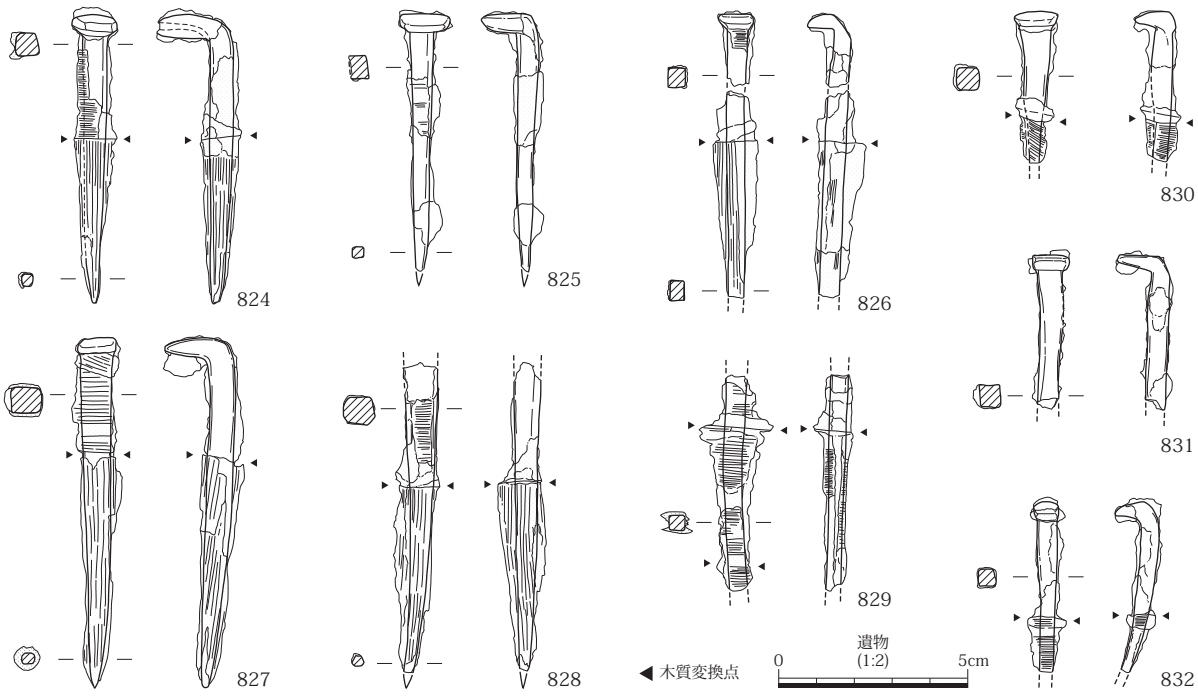


図 161　371 土坑平面・断面図、検出状況・断面写真および出土遺物

る。この長辺側に埋土で幅が狭められた意味についてははっきりしないが、用意した炭の量によって調整された可能性も想定される。

この土坑内から出土した炭については、他の焼土坑の炭が、シルト状に細かくなったものから大きくてもせいぜい爪大サイズ程度のものであるのに対し、材の形状がはっきり残るような大型の炭化材が多くみられる点で、その他の焼土坑とは大きく異なっていた。さらにこの炭化材について、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施したところ、8 世紀後半から 9 世紀後半までの測定結果が得られている（第６章第 4 節参照）。また、これらの炭化材はアカマツやクロマツなどのニヨウマツ類であったことが判明しており、これについては、『続日本後紀』巻十二に、嵯峨太上天皇の造墓に関する遺詔として、「重以棺槨、繞以末炭。」という記事があることと合致する成果であり、大変興味深い事例となる。

炭層から出土した鉄釘は 9 点にのぼる（824 ～ 832）。このうち頭部から先端部までほぼ完存するものが 3 点、頭部のみが残存するものが 4 点、先端部のみが残存するものが 1 点みられる。完存する 3 点のうち、824・825 が長さ 6.8 ～ 7.6cm 程度、827 が長さ 9.3cm で、鉄釘のサイズは大きくこの 2 つに分類される。頭部の形態はいずれも、折り曲げによるＬ字形である。831 を除いて木質が良好に残存しており、この木質は針葉樹であることが判明している。木質が残っている個体の中で 825 を除く個体については、木質の木目方向が途中で変化していることが確認できる。824･826 ～ 828 の 4 本は、頭部側が横方向の木目で、先端部側が直交する縦方向の木目がみられる。829 については頭部側・先端部側もともに横方向の木目がみられ、830・832 は頭部側の木目方向がはっきりしないが先端部側が横方向である。この木質の変換点の残存状態が良好なもののうち、頭部までが残っている 824・827・830・832 から、棺材の厚みが 2.5cm 程度であったことが判断できる。また頭部までの長さがはっきりわからない 826 や 828 は、棺材の厚みがやや厚く、3.0cm 程度であったことがわかる。

遺構の規模や形状、底部に炭が堆積しているといった特徴、また鉄釘が多数出土している点で、３－１区で検出された 123 土坑とよく似ているが、この 371 土坑から出土した鉄釘は、いずれも良く木質が残っており、123 土坑出土の鉄釘のように被熱したような痕跡はまったくみられない。123 土坑は、出土した鉄釘が被熱を受けていたことから、木棺が火葬されたのちに棺の灰とそれに伴う棺釘をまとめて土坑内に敷き詰めていたものと考えられるが、これに対し 371 土坑では、鉄釘の状態から棺が直接火葬された痕跡は見出しがたく、土坑内に鉄釘を伴う木棺が安置されていたことが確実視できる。遺構の検出状況からは、土坑内に炭を敷き詰められた上に木棺が安置され、木棺の周囲が木炭で囲まれていた構造であった可能性が極めて高く、この土坑が木炭槨木棺墓であったことがわかる。この鉄釘の取り上げの際に、出土位置の記録が不十分であったため、木棺の構造までは復元できないが、先に述べた検出状況から、木棺の規模は、長辺 1.95 m、短辺 0.36 mに復元でき、棺材の厚さが 2.5 ～ 3.0cm であったことがわかる。

373 土坑　調査区のほぼ中央の北寄り、尾根筋からやや下った若干傾斜が緩やかになった地点に位置する。木の根などによる撹乱によって遺構底面や壁の大半が失われている。平面形は現存長一辺約 4 m前後の方形を呈する。埋土は 0.5 ～ 2.0cm 大の礫を多く含む明黄褐色の極細粒砂～細粒砂で、その下面でピットが数基検出されたが、建物に伴う配置をとるものではなかった。埋土上層から古代のものと考えられる土師器・須恵器の細片が出土したが、時期は特定できなかった。竪穴建物であったのかは断定できない。

374・563 土坑　調査区北端の、368 土坑の西側に位置する。374 土坑は一辺約 0.45 mの隅丸方形を

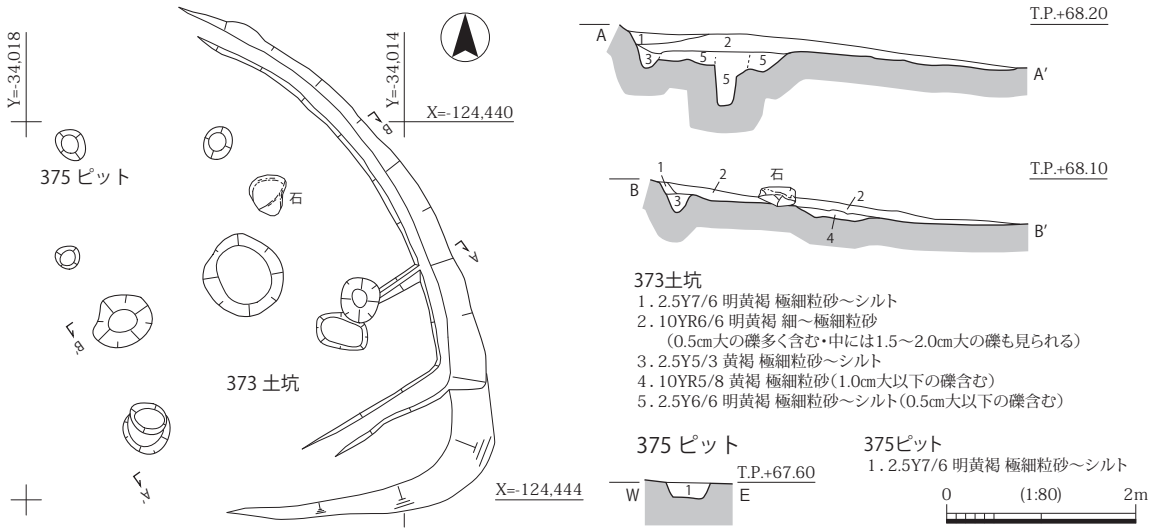


図 162　373 土坑、375 ピット平面・断面図

呈する。深さは 0.26 mで、埋土の大半が炭である。563 土坑は 374 土坑に切られる形で東側に重複する。９区の調査の際に、374 土坑周辺を再精査したところ検出された。深さは 374 土坑に比べて浅く 0.1 m程度しかなく、埋土はオリーブ褐色シルトである。両者は一連の遺構であった可能性も想定される。

（金光・伊藤・笹栗）

成合遺跡北方の山並み（手前は８・９区）

第 12 節　9 区の調査成果〔図 157・163 ～ 165、写真図版 44・45〕

8 区の北側に隣接する調査区で、8 区から北西側の舌状に張り出した尾根の先端部にあたる。面積は約 1,500 ㎡である。標高 69.5 mの尾根の頂部には長さ 15 m、幅 7 m程度の平坦面が広がり、北側の先端部の標高 64 ～ 59 m付近には緩斜面地がみられる。南側は隣接する 8 区から続く平坦地が存在し、最近まで畑地として利用されていたようである。調査を進めると、尾根の頂部付近では表土を除去するとすぐに大阪層群と考えられる基盤粘土層が検出されたが、尾根頂部から北側の尾根先端にかけての傾斜地および、頂部から南側の緩斜面地では、厚さ 0.1 ～ 0.2 mの黄褐色シルトの斜面堆積層（1 層）が認められ、この 1 層直下で土坑、溝、ピット等が検出された。遺構は、尾根の頂部付近、南側の 8 区との境界付近の平坦地、北側の尾根先端の緩斜面部の 3 ヶ所でそれぞれ検出されている。この 9 区では、1 層中からの遺物の出土量が極めて少なく、遺構埋土からも遺物はほとんど出土していない。そのため、遺構の帰属時期を判断する材料に欠けるため、検出地点ごとに遺構の報告をおこなうこととする。

北半緩斜面の遺構

尾根の頂部から高さ 5 m程度下がった北側の緩斜面地、標高 64.0 ～ 60.0 m付近で、土坑や溝、ピットが検出された。いずれの遺構も、埋土が斜面堆積層よりも褐色が強く、炭も含まれることから、何らかの人為的痕跡が窺えるが、極めて浅いものであった。また、周辺部分の包含層も含めて遺物の出土をみないことから、時期や性格等ははっきりしない。

547 溝　長さ 1.0 m以上、幅 0.2 m、深さ 0.05 mを測る溝である。南半に切り株があったため、長さははっきりしなかったが、それほど長くはならないと考えられる。埋土は炭を含む褐色シルトである。

548 土坑　長径 0.45 m、短径 0.35 m、深さ 0.1 mを測る楕円形の土坑で、埋土は炭を含む褐色シルトである。

549 土坑　長径 0.62、短径 0.45 m、深さ 0.15 mを測る楕円形の土坑で、埋土は炭を含むオリーブ褐色粘土質シルトである。

550 溝　長さ 3.5 m、幅約 0.15 mを測る直線的な溝である。深さは最も深いところで 0.1 mを測るが、西側にむかって徐々に浅くなる。埋土は炭を含むオリーブ褐色シルトである。

551 土坑　径 0.28 mの円形の土坑である。深さは部分的に下がった部分で 0.14 mを測る。埋土は炭や円礫を含む褐色シルトである。

553 土坑　長さ 2.15 m、幅 0.75 mを測る不正形の土坑で、深さは最も深いところで 0.12 mを測る。南西部分は溝状にのび、やや 2 段にくぼむ。埋土はオリーブ褐色シルトである。

558 溝　553 土坑に隣接する長さ 1.45 m、幅 0.3 m以上、深さ 0.15 mの溝である。溝の縦方向に断面観察用のトレンチがかかるため、幅が不明で、全体の形状も土坑状になる可能性がある。埋土は炭を含むオリーブ褐色シルトである。

559 土坑　径 0.45 m、深さ 0.15 mを測る土坑である。断面観察用のトレンチがかかるため、全体の形状は不明であるが、円形を呈すると考えられる。埋土は炭を含むオリーブ褐色シルトである。

554 ～ 556・560 ピット　いずれも径 0.3 ～ 0.5 mを測る楕円形のピットで、深さも 0.05 m以下と極めて浅い。いずれの埋土もオリーブ褐色シルトで炭が含まれる。

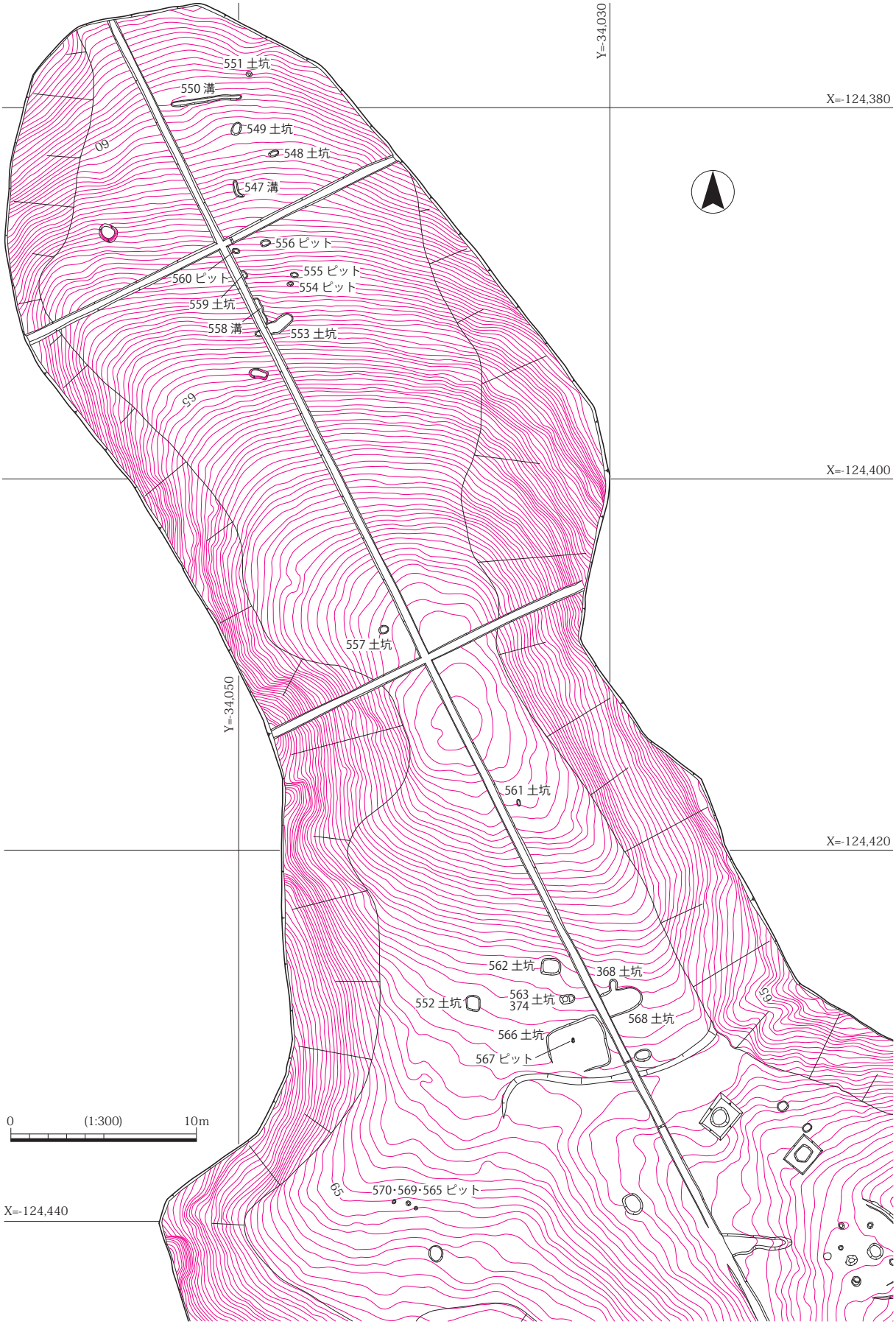


図 163　９区検出遺構全体平面図

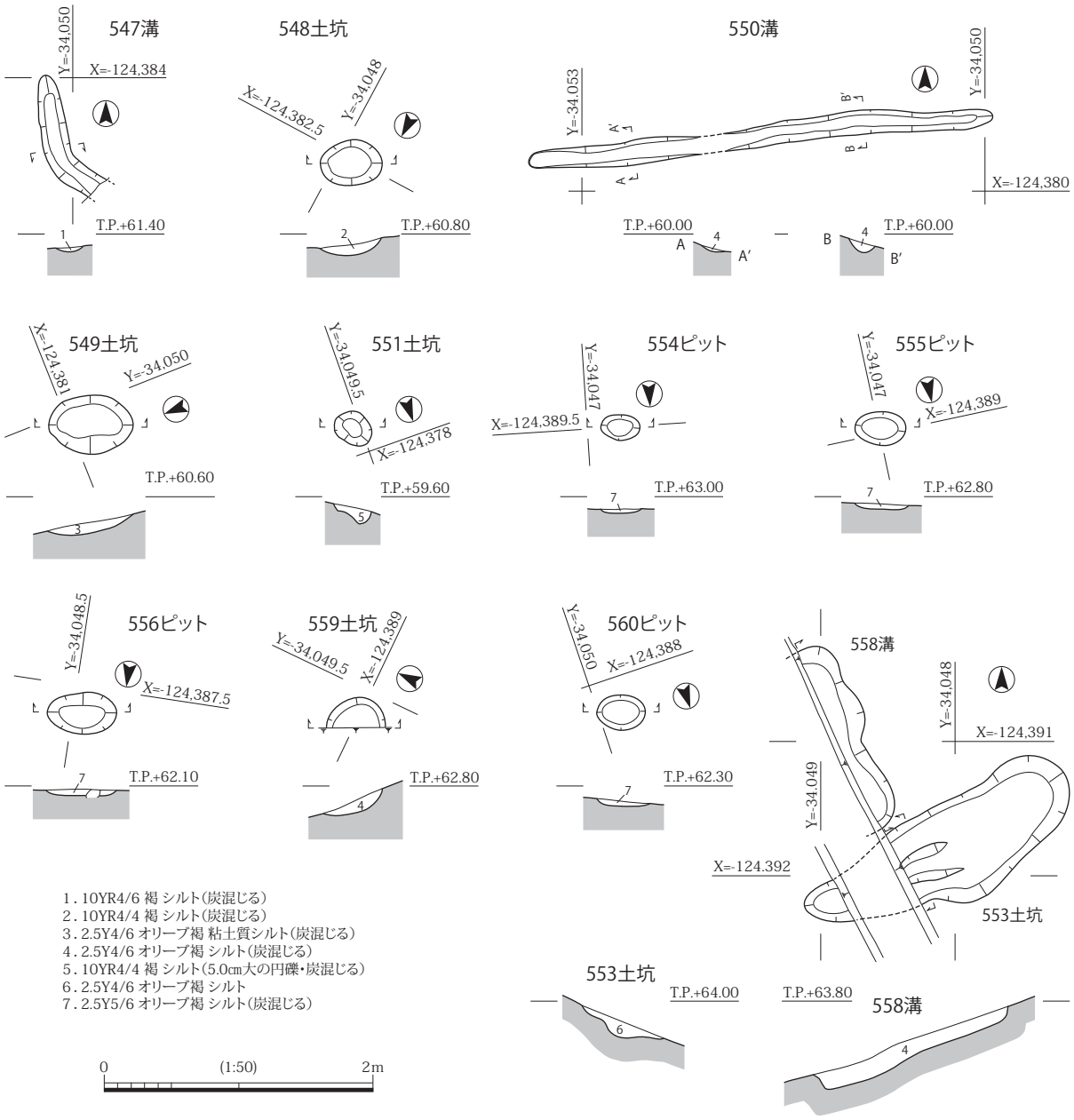


図 164　９区北半緩斜面検出遺構平面・断面図

尾根頂部および南半平坦面の遺構

尾根頂部付近では頂部から斜面にかかる傾斜変換点付近で２基の焼土坑を、８区と隣接する南側の平坦地では、土坑やピットがそれぞれ検出された。このうち 552・561・562 土坑については、壁面が被熱によって赤変した焼土坑である。尾根頂部および南側平坦面の遺構については、周辺包含層からの遺物の出土は極めて少なく正確な時期比定は難しいが、566 土坑および 567 ピット内の埋土からは古代の土師器片が出土していることや、８区から続く平坦地およびその隣接部分にあたり、これまでの調査でも同様の性格の遺構は多数検出されており、それらの成果を加味すると、８・９世紀代に位置づけられると考えられる。

552 土坑　調査区の南側平坦面に位置する、長辺 0.8 m、短辺 0.65 m、深さ 0.1 mを測る隅丸方形の焼土坑である。非常に浅く、遺構近辺は耕作として利用されていたことから、大きく削平を受けていたと考えられる。埋土上層には炭が混じる黄褐色シルト、下層には炭を含むオリーブ褐色シルトの焼土層

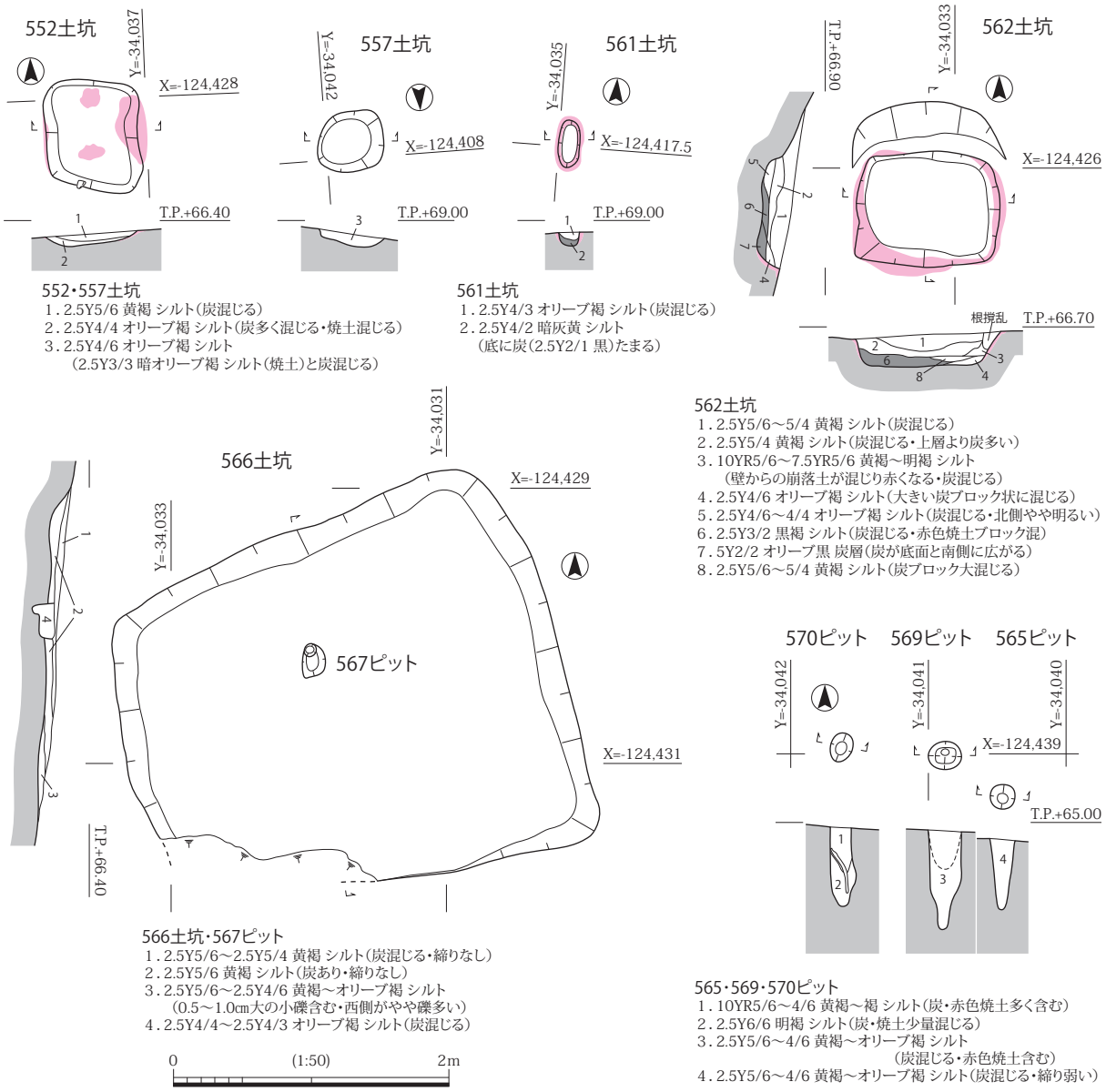


図 165　9区尾根頂部および南半平坦面検出遺構平面・断面図

でレンズ状に堆積する。底部から壁面にかけて、部分的に被熱により赤変している。

557 土坑　尾根頂部から北側斜面にかかる傾斜変換点付近に位置する。径 0.5 m程度のややいびつな円形を呈する焼土坑で、深さ 0.1 mを測る。埋土は炭を含む暗オリーブ褐色シルトの焼土である。

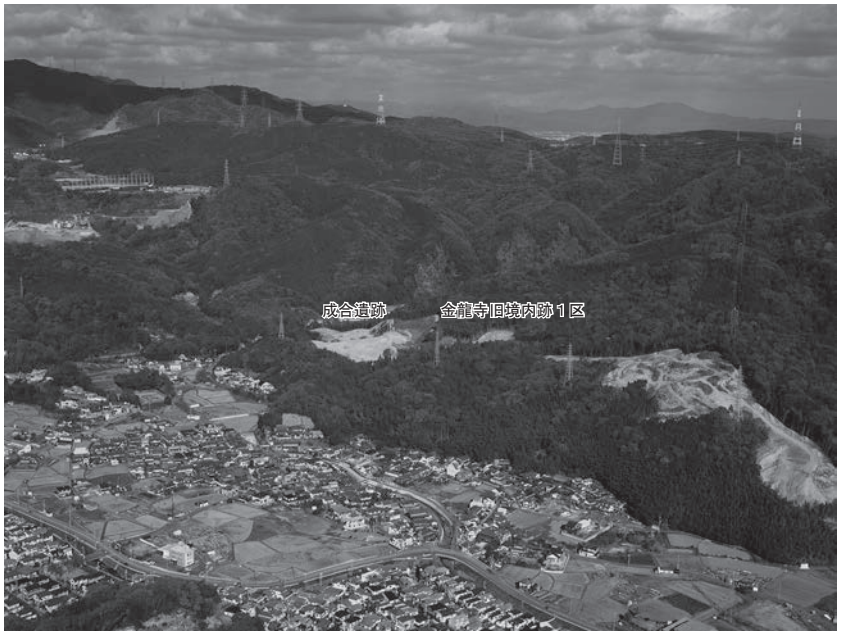
561 土坑　尾根頂部から南側斜面にかかる傾斜変換点付近に位置する。長径 0.4 m、短径 0.2 mの楕円形を呈する小型の焼土坑で、深さ 0.1 mを測る。斜面上方の北側が深く掘り込まれ、南側がなだらかに開口する形状を呈する。上層がオリーブ褐色シルト、下層が暗灰黄色シルトの焼土で、底には炭が多く堆積する。壁面は被熱を受け赤変していた。8区 368 土坑と規模や形状が非常によく似ており、2区 21 ～ 23 土坑などともに土師器焼成坑の可能性もある。ただし、他の遺構にみられたような、遺構の前面部分での炭や焼土の堆積は認められないことから、削平されてしまったか、あるいは別の性格の遺構であったかについては、はっきりとは判断できない。

562 土坑　調査区の南側平坦面に位置する、長辺 1.05 m、短辺 0.75 m、深さ 0.25 mを測る隅丸方形の焼土坑である。北側は地山を一旦削り込んだ後に土坑を掘り込んでいたようである。埋土の上半は主

に炭を少量含む黄褐～明褐色シルトが、底部付近にはオリーブ褐～黒褐色シルトの焼土層が堆積し、底部には特に炭が多い。壁面と底部の下場付近を中心に、被熱し赤変している。同様の焼土坑はこれまでに多く検出されており、基本的には８・９世紀代に属する遺構であると考えられる。

566 土坑・567 ピット　８区 368・568 土坑の南西に隣接する位置で検出された、長辺 3.2× 短辺 2.8 m、深さ 0.1 mの方形を呈する土坑である。中央よりやや北寄りに 0.25×0.15 m、深さ 0.15 mの 567 ピットが認められる。土坑埋土は黄褐～オリーブ褐色シルトで埋土に炭を含む。567 ピットは土坑埋土途中から掘り込まれているようである。土坑およびピットの埋土中からは、古代と考えられる土師器甕片が出土したが、細片のため図化できなかった。検出された段階では、形状や規模から竪穴建物の可能性も想定して調査を進めたが、ピットが１基検出されるのみで、周壁溝もないことから、竪穴建物の可能性は低く、遺構の性格は不明である。

565・569・570 ピット　調査区南西側で 565・569・570 の３基のピットが 0.55 ～ 0.75 mの間隔で並ぶように検出された。いずれのピットも径が約 0.2 m、深さが 0.5 ～ 0.72 mを測る。埋土は炭や焼土を含む黄褐～明褐色シルトで、569・570 ピットに関しては被熱して赤変した焼土も含まれる。埋土の様相は、他の焼土坑の埋土とよく似ている。遺構の性格は不明であるが、８・９世紀代に属する遺構であると推測される。（笹栗）



平成24年12月（高速道路建設工事のための伐採が進んでいる）

第 13 節　10 区の調査成果〔図 166 ～ 176、写真図版 46 ～ 48・80・81〕

成合遺跡の北端付近の南東から北西にのびる小谷の開口部にあたり、９区が設定された北側尾根の西斜面裾に設定された調査区である。東檜尾川に接して３段に造成された棚田状の耕作地のうち、平成 22 年６月に成合遺跡隣接地 11 － 1 としておこなわれた試掘調査で、厚さ 0.1 ～ 0.15 mの古代から中世の遺物包含層が確認されたため、[1)] 包含層が認められる耕作地の上側２段分が本調査の対象となった。最終的な調査面積は約 700 ㎡である。

調査の結果、X＝－ 124,400 以北では１層除去面で現耕作面より古い耕作面を確認したものの、明確な遺構は認められず、遺物も出土しなかった。X＝－ 124,400 以南では、下段で５面の遺構面を確認した。１層は現耕作面に伴う耕土および造成土で、0.2 ～ 0.3 mの厚さで堆積する。１層除去面では鋤溝が検出されており、この面を第１面とした。１層中からは下層と同様に古代の遺物が少量出土するが、第１面の時期は明確にしがたい。この耕土より下層については上段と下段で土層のつながりがないため、段の上下で遺構面の対応関係がはっきりしない。下段については、２層が炭や地山由来の黄色粒が混じるオリーブ褐～暗褐色シルトで、0.1 ～ 0.2 mの厚さで堆積する。この層は試掘調査で古代から中世の遺物包含層とされた層で、古代の遺物が少量出土する。２層除去面では 200 土坑が検出されており、この面を第２面とした。第２面の年代を詳しく絞り込むことはできないが、検出された遺構はこれまでに遺跡内で多数検出されているものと同様の焼土坑であり、古代の遺構と考えられる。後述する第３面の年代から、10 世紀以降に位置づけられる。３層はマンガンを多く含む炭混じりのオリーブ褐～褐色シルトで、古代の遺物が少量出土する。下層で旧流路が検出された上面付近では 0.1 mの厚さで堆積するが、東西にむかって堆積が薄くなる。４－１層は礫混じりの褐～オリーブ褐色シルトで、下段の主に西側を中心に 0.2 mの厚さで堆積する。３層を除去した段階では遺構の存在を明確にできなかったが、４－１層を除去したところで、調査区を縦断する東檜尾川の旧流路（296 流路）が検出され、この流路上面のくぼみに堆積した４－２層は、にぶい黄褐～褐色シルトを主体とし、上面で溝、土坑、ピット等が検出された。これらの遺構埋土の多くは４－１層とよく似た土質であり、横断面（図 167、Ａ－Ａ′）の検討の結果、281 土坑をはじめとした遺構の多くは、４層上面に帰属すると判断できる。一方で上段の裾で検出された 279 溝は、４－２層を埋土最下層とする落ち込み状の溝で、より古い遺構も存在する。これらの４層上面および下面から検出され、296 流路埋没以後に形成された遺構を、第３面の遺構とする。第３面で検出された 281 土坑からは遺物が豊富に出土しており、第３面の年代は９世紀後半から 10 世紀前半頃を中心とする。ただし、11 世紀代の遺物が出土した遺構もみられることから、新しい時期の遺構が存在する可能性がある。

上段については、１層の下に炭・黄色粒が混じりの暗褐色シルト（上段２層：図 167、Ａ－Ａ′－ 14）が堆積し、この２層除去面において地山が検出され、この地山面でピットが多数確認された。上段２層については、下段２層（図 167、Ａ－Ａ′－ 13）や 279 溝上層（図 167、Ａ－Ａ′－ 20）と土質が似るが、遺物の出土もほとんどなく下段の層との対応関係が明確でない。このため推測の域を出ないが、上段のピット群は遺構がまとまって検出された下段の第３面との対応関係が高いと考えられる。

第４面は東檜尾川の旧流路である 296 流路が機能していた４層除去面で、この他に旧流路に並行した 280 流路も併せて検出された。296 流路内からの遺物の出土量は多くないが、９世紀中頃の須恵器や土師器甕がまとまって出土している。５層は 296 流路の西側に広がる炭混じりの暗褐～黒褐色砂質

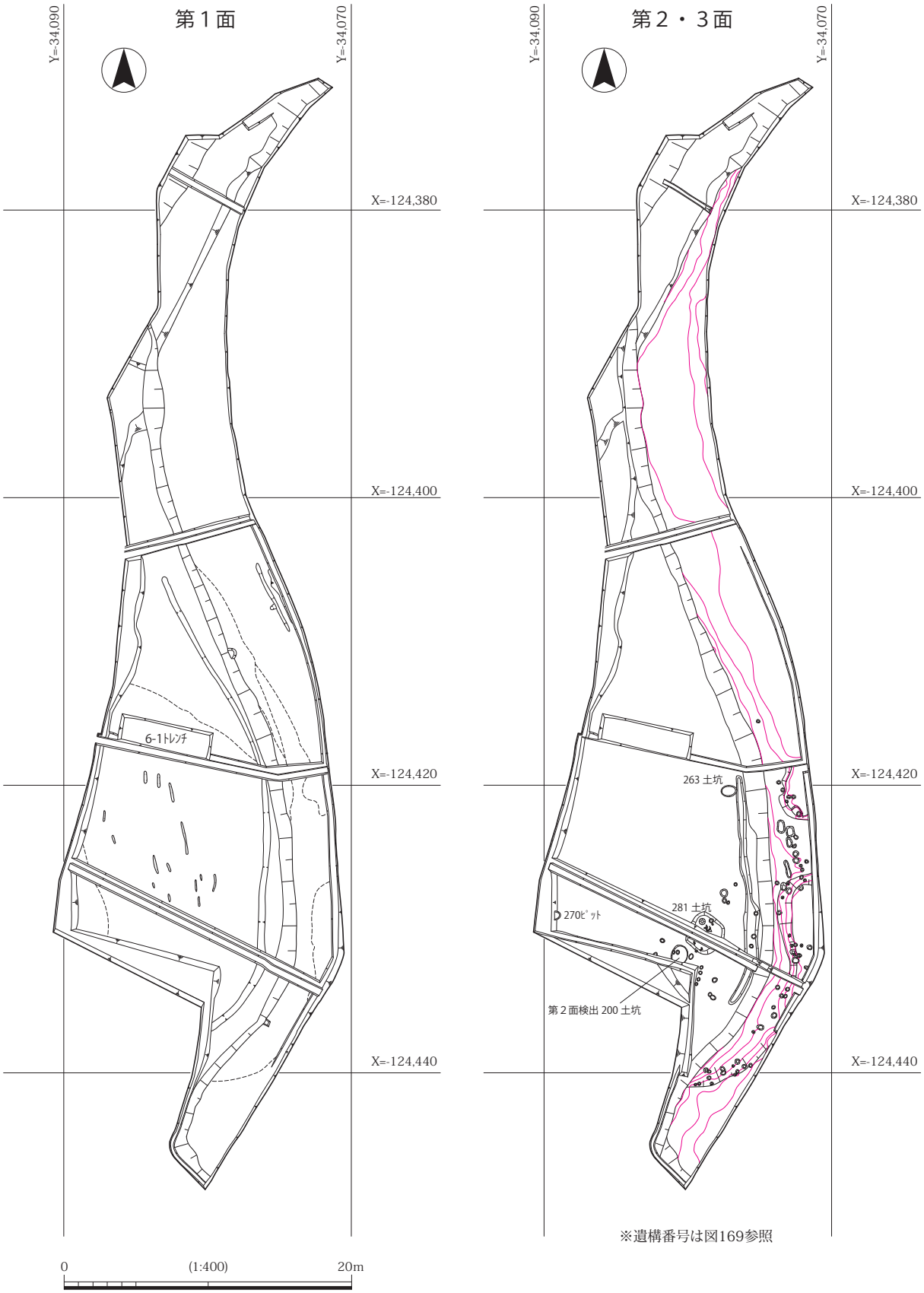
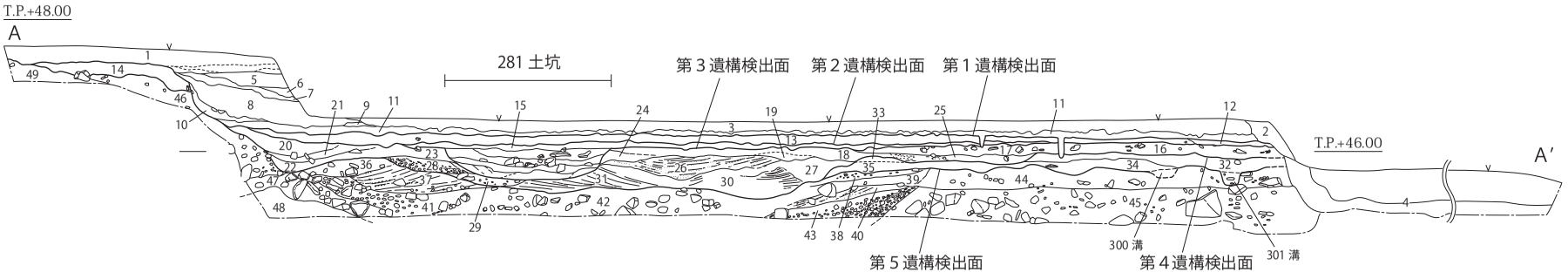
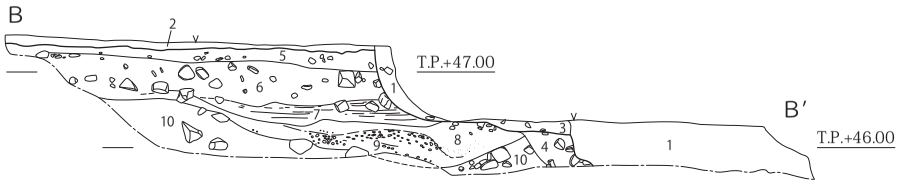


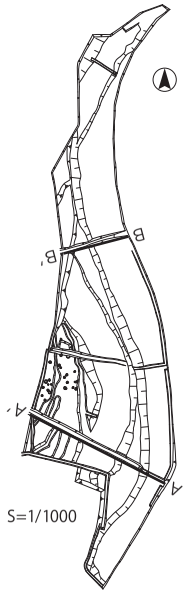
図 166　10 区第１～３面検出遺構全体平面図

図167　10区地層断面図





0　(1:100)　5m



A－A′断面

1. 2.5Y5/3 黄褐 粘土質シルト〔耕土層・１層〕
2. 2,5Y4/4 オリーブ褐 シルト〔耕土層・１層〕
3. 5Y5/3 灰オリーブ 粘土質シルト（鉄分・マンガン含む）〔耕土層・１層〕
4. ３段目造成土・１層
5. 10YR4/6 褐 シルト〔上段造成土・１層〕
6. 10YR6/8 明黄褐 シルト〔上段造成土・１層〕
7. 2.5YR4/3 オリーブ褐 シルト〔上段造成土・１層〕
8. 10YR6/6 明黄褐 シルト（締り強い）〔上段造成土・１層〕
9. 10YR4/2 灰黄褐 シルト〔上段造成土・１層〕
10. 10YR3/4 暗褐 シルト（炭・黄色粒混じる、13の再堆積によるものか）〔上段造成土・１層〕
11. 5Y5/2～5/3 灰オリーブ 粘土質シルト（鉄分・マンガン含む）〔耕土層・１層〕
12. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト（炭・黄色粒混じる）〔下段２層〕
13. 10YR3/4 暗褐 シルト（炭・黄色粒混じる）〔下段２層〕
14. 7.5YR3/3 暗褐 シルト（炭・黄色粒混じる）〔上段２層〕
15. 2.5Y4/6～10YR4/6 オリーブ褐～褐 シルト（上下層境マンガン顕著、炭混じる）〔３層〕
16. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗粒砂（3.0～10.0㎝大の礫含む）〔４－１層〕
17. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト（礫含む）〔４－１層〕
18. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト（0.5～3.0㎝大・大型礫を多く含む）〔４－１層〕
19. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト（礫含む）〔４－１層〕
20. 10YR3/2 黒褐 粘土質シルト（炭・黄色粒混じる、遺物多く出土）〔279溝埋土〕
21. 10YR3/3 暗褐 シルト（炭混じる）〔279溝埋土〕
22. 10YR4/3 にぶい黄褐 砂質シルト〔４－２層・279溝埋土〕
23. 10YR4/4 褐シルト（0.5～3.0㎝大の礫多く含む・遺物多く出土）〔４－２層〕
24. 2.5Y4/6～10YR4/6 オリーブ褐～褐 シルト～粘土質シルト〔４－２層〕
25. 10YR4/4 褐 シルト質細粒砂（炭混じる）〔280溝埋土〕
26. 10YR4/4 褐 細～粗粒砂〔296流路埋土〕
27. 10YR4/4 褐 砂質シルト〔296流路埋土〕
28. 2.5Y4/3 オリーブ褐（1.0～3.0㎝大の礫・上層細礫）〔296流路埋土〕
29. 2.5Y4/3 オリーブ褐 砂質シルト（0.5～3.0㎝大の礫含む）〔296流路埋土〕
30. 10YR4/4 褐 砂質シルト～粗粒砂〔296流路埋土〕
31. 10YR4/4 褐 細粒砂・礫（1.0～3.0㎝大の礫）〔296流路埋土〕
32. 10YR3/3 暗褐 砂質シルト（炭混じる）〔５層〕
33. 10YR3/4～4/4 暗褐～褐 砂質シルト（炭混じる・下層よりやや粘性強い）〔５層〕
34. 10YR2/3～3/3 黒褐～暗褐 シルト（炭混じる）〔５層〕
35. 10YR3/4～4/4 暗褐～褐 砂質シルト（炭混じる）〔５層〕
36. 2.5Y5/6 黄褐 礫混じりシルト・粗粒砂（1.0～10.0㎝大の礫含む）〔下層旧流路・地山〕
37. 2.5Y4/6オリーブ褐 粗粒砂～細礫〔下層旧流路・地山〕
38. 2.5Y4/4 オリーブ褐 礫混じり細～粗粒砂〔下層旧流路・地山〕
39. 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト（礫混じる）〔下層旧流路・地山〕
40. 2.5Y4/4 オリーブ褐 礫混じり細～粗粒砂〔下層旧流路・地山〕
41. 砂礫（3.0㎝大の礫、隙間に2.5Y5/6 黄褐 粘質土入り込む）〔下層旧流路・地山〕
42. 砂礫（人頭大の礫、隙間に2.5Y5/6 黄褐 粘質土入り込む）〔下層旧流路・地山〕
43. 砂礫（1.0～5.0㎝大の礫）〔下層旧流路・地山〕
44. 2.5Y5/3黄褐 礫混じり粗粒砂〔地山〕
45. 砂礫（粗粒砂・2.0㎝大・人頭大の礫）〔地山〕隙間に2.5Y4/6～5/6 オリーブ褐～黄褐 粘質土入り込む）〔地山〕
46. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト＋砂礫（人頭大の礫含む）〔地山〕
47. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト質砂（人頭大の礫多数含む）〔地山〕
48. 2.5Y6/4 にぶい黄 砂質シルト〔地山〕
49. 2.5Y5/3 黄褐 シルト〔地山〕

B－B′断面

1. 造成土・1層
2. 2.5Y6/4 にぶい黄 粘土質シルト（鉄分・マンガン含む）〔耕土層・1層〕
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト〔４層か?〕
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐 砂質シルト（礫混じる）〔５層か?〕
5. 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルト（0.5～5.0㎝大の礫多く含む）〔地山〕
6. 2.5Y5/4 黄褐 細～粗粒砂（礫含む）〔地山〕
7. 2.5Y5/4 黄褐 細～粗粒砂（ラミナあり）〔下層旧流路・地山〕
8. 2.5Y5/6 黄褐 粗粒砂〔下層旧流路・地山〕
9. 2.5Y5/6 黄褐 粗粒砂～礫〔下層旧流路・地山〕
10. 2.5Y5/4 黄褐 細粒砂（礫含む）〔地山〕

シルトで、９世紀代の遺物が少量出土する。５層除去面では溝やピットが検出されており、この面を第５面とする。５層から９世紀中頃の遺物が出土しており、第５面はそれ以前の時期にあたる。５層以下の下層については、遺構・遺物が確認されていない地山である。Ａ－Ａ′断面からは、296 流路のほぼ真下からさらに古い時期の流路の痕跡が確認された（図 167、Ａ－Ａ′－ 36 ～ 42）。またさらに北側ではＢ－Ｂ′断面からは、上段の下から流路の痕跡がみつかっており（図 167、Ｂ－Ｂ′－７～９）、北側に関しては 296 流路よりも東寄りに位置していたことが判明している。東檜尾川の流路は本来山裾側の東寄りであったものが、調査区北側では流路が蛇行するように徐々に西へ移っていき、第４面の段階に流路が埋まった後は、より西側の現在の流路に固定されたと考えられる。そのため、この流路を境に東西で地山の様相が大きく異なっている。東の山側では黄褐色シルト層を基盤とし、西側では河川の氾濫堆積と考えられる礫混じり黄褐～オリーブ褐色粗粒砂を基盤としていた。

包含層の遺物　833 ～ 835 は１層から出土した土師器・須恵器である。833 土師器皿は、口径 15.2cm、器高 2.2cm を測る。834 は土師器甕、835 は須恵器甕である。836 は下段２層から、837 は上段２層から、838 は３層からそれぞれ出土した須恵器でいずれも長頸壺の破片と考えられる。これらの遺物の年代は、８・９世紀代に位置づけられるが、それぞれの層の年代を示すものとはならない。839・840 は４－２層から出土した須恵器で、839 は杯Ａ、840 は壺底部である。これらは 279 溝周辺からまとまって出土した。841・842 は５層から出土した須恵器杯Ａである。841 は口径 9.8cm、器高 2.5cm を測り、平らな底部に体部が外方にまっすぐ開く形態で、９世紀中頃以降に位置づけられる。このため、５層の下限の年代を示す資料になりうる。842 は、ほぼ完形で口径 11.8cm、器高 3.5cm を測る。口縁部が焼け歪んでおり、別個体の破片が熔着していることから、付近に須恵器窯が存在する可能性がある。

第１面の遺構

現耕土層である１層を除去した面で、数条の鋤溝を検出したが、それ以外に顕著な遺構は検出されなかった。第１面の標高は 46.2 ～ 46.3 ｍである。１層中からは、下層と同様に古代の土師器・須恵器が少量出土するのみで、第１面とした耕作面の年代を示す遺物はなかった。

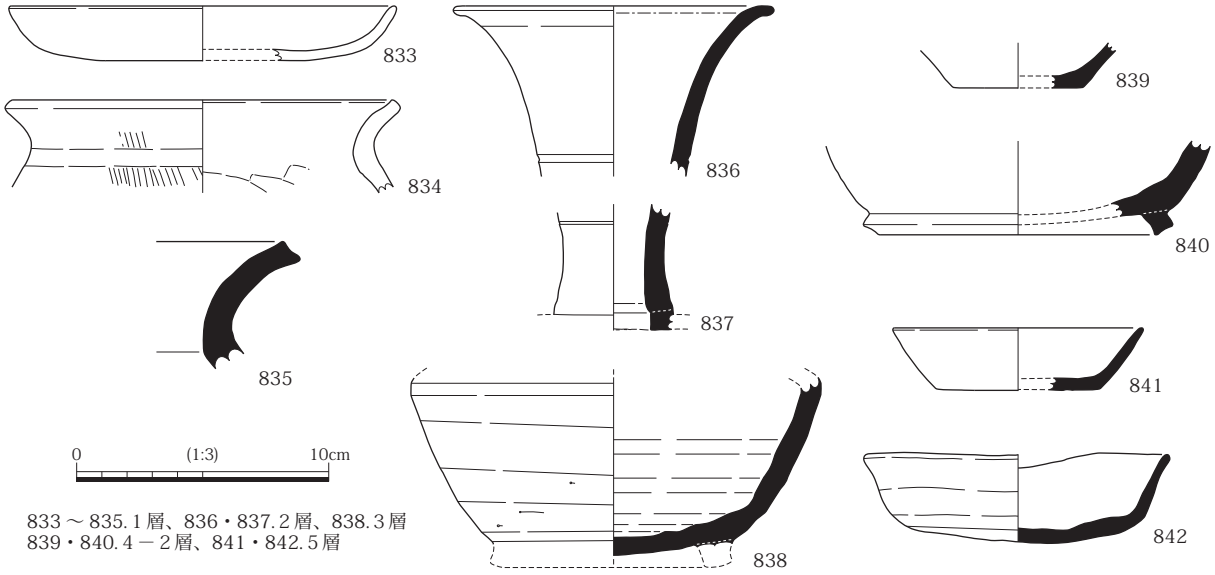


図 168　10 区遺物包含層出土遺物

第２面の遺構

試掘調査で確認された遺物包含層（２層）を除去した面で、200 土坑を検出した。ただし 200 土坑以外は明確な遺構は存在しない。遺構面の標高は 46.1 mである。上層の２層からは古代の土師器・須恵器が少量出土するものの、下層からも同様の遺物が出土しており、第２面の時期を特定するには至らなかった。後述する下層遺構面との関係から、11 ～ 12 世紀代の遺構面であると推測される。

200 土坑　調査区の南で検出された円形の土坑で、南側の一部が撹乱により削平を受ける。径 1.1 m、深さ 0.24 mを測る。埋土の底面と上層に黒褐色粘土質シルトが堆積し、褐色粘土質シルトが間層として挟まれる。東側底面から立ち上がり部分にかけて被熱により赤変している。小片のため図化できなかったが、埋土内からは古代の須恵器の甕片や土師器片が出土している。古代の遺物が出土することや、第３面 264 土坑のように、同様の性格の遺構も多数みられることから、この 200 土坑が中世以降に大きく下ることは考え難い。正確な時期比定は難しいものの、第３面との関係から平安時代後半の 11 ～ 12 世紀代の遺構と推測される。

第３面の遺構

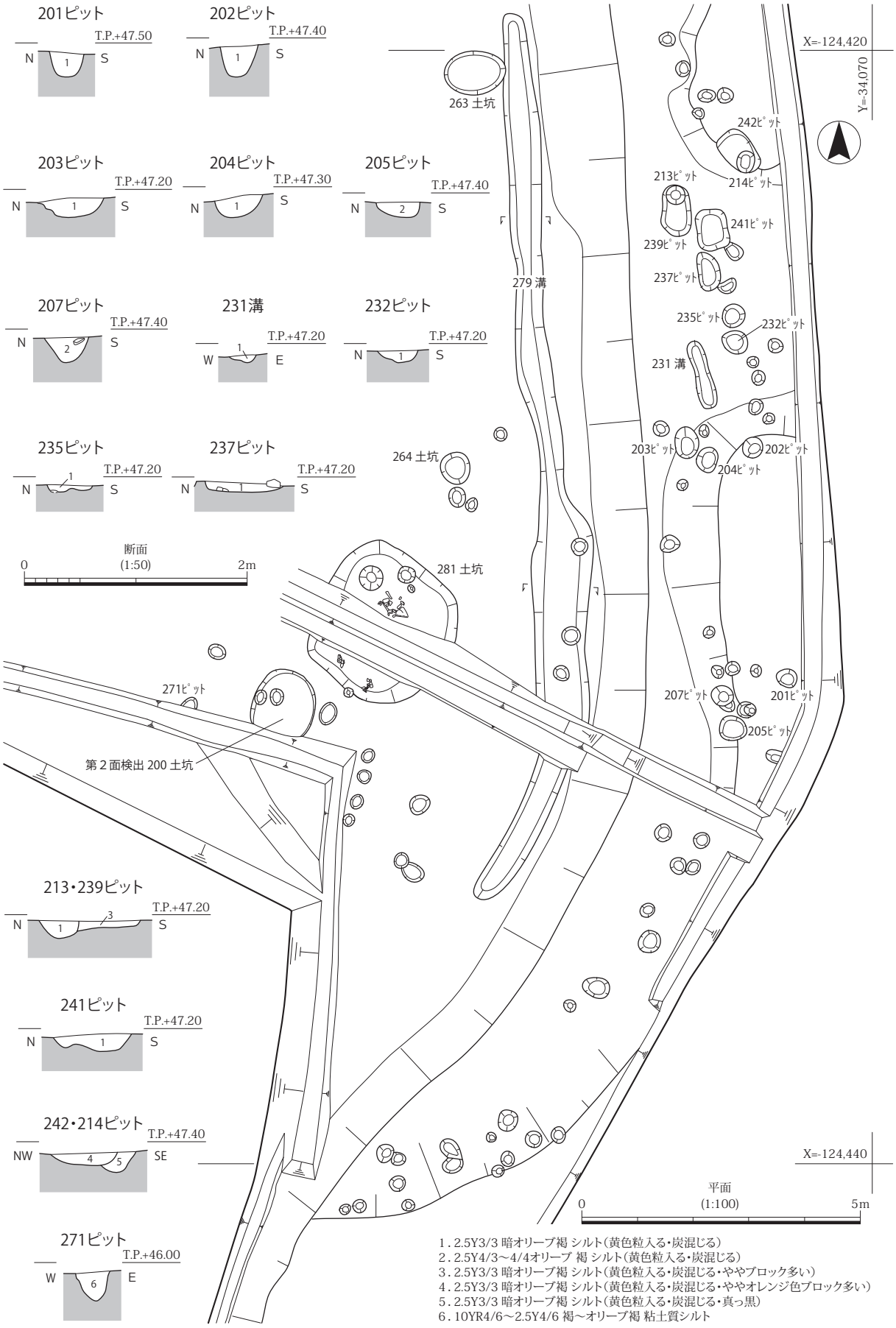
３層除去面から 296 流路上面で検出された遺構を第３面の遺構とし、この面では土坑や溝、ピット等が検出された。遺構の多くは４－１層除去面、下層の東檜尾川の旧流路（296 流路）上面のくぼみに堆積した４－２層上面で検出されたが、断面検討の結果、281 土坑をはじめとした遺構の多くは、４層上面に帰属すると判断された。その一方で上段の裾で検出された 279 溝は、４－２層を埋土最下層とする落ち込み状の溝で、より古い遺構も存在するが、同一面として取り扱っている。遺構面の標高は 46.0 mである。これらの遺構の埋土からは、９世紀後半から 10 世紀前半頃の遺物が出土しており、その時期の遺構が大半を占めると推測される。ただし、調査区南西端の 270 ピットからは 11 世紀代の遺物が出土しており、その時期の遺構も存在する可能性がある。

263 土坑　楕円形の土坑で、長径 0.77 m、短径 0.6 m、深さ 0.07 mを測る。埋土に炭混じりの暗オリーブ褐色シルトが堆積する。中型の礫が多く含まれる。

264 土坑　円形の焼土坑で、径 0.7 m、深さ 0.17 mを測る。上層に炭や赤色焼土混じりの暗褐色シルトが堆積し、底部付近には炭が顕著に堆積する。北側底面から立ち上がり部分にかけて被熱を受け赤変している。上部は削平されたと思われ、検出された規模は一回り小さいが、第２面で検出された 200 土坑と酷似する。

281 土坑　隅丸方形の土坑で、長辺 2.5 m、短辺 2.6 m、深さ 0.45 mを測る。横断面Ａ－Ａ′の検討から、４－１層上面から掘り込まれたと考えられる。埋土は大きく３層にわけられ、上層には大型の礫が多数含まれる炭混じり暗褐色シルト（１・２）が、中層には明黄褐色のシルト質粘質土（３）が堆積する。下層は黒褐～暗オリーブ褐色シルト（４～６）で、底部付近には炭が顕著に堆積する。ただし土坑の底面や壁面に被熱した痕跡はみられない。出土遺物の大半は炭混じりの下層から出土しており、土師器、須恵器、黒色土器、鉄器がみられる。鉄器の出土量が多いことが特徴的で、大型の鉄釘や刀子を除けば、製品とは考えづらい用途不明の鉄器片が大半で、不要な鉄を土器とともに廃棄した土坑であると考えられる。

土師器は３点図化した。このうち 843 は杯Ａで、口径 12.6cm、器高 2.6cm を測る。844 は高台のつく杯Ｂで、口径 18.7cm、器高 5.6cm に復元でき、著しく摩滅しているものの内外面ナデ調整を基



1．2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト（黄色粒入る・炭混じる）
2．2.5Y4/3～4/4オリーブ 褐 シルト（黄色粒入る・炭混じる）
3．2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト（黄色粒入る・炭混じる・ややブロック多い）
4．2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト（黄色粒入る・炭混じる・ややオレンジ色ブロック多い）
5．2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト（黄色粒入る・炭混じる・真っ黒）
6．10YR4/6～2.5Y4/6 褐～オリーブ褐 粘土質シルト

図 169　10 区第２・３面検出遺構平面・断面図（１）

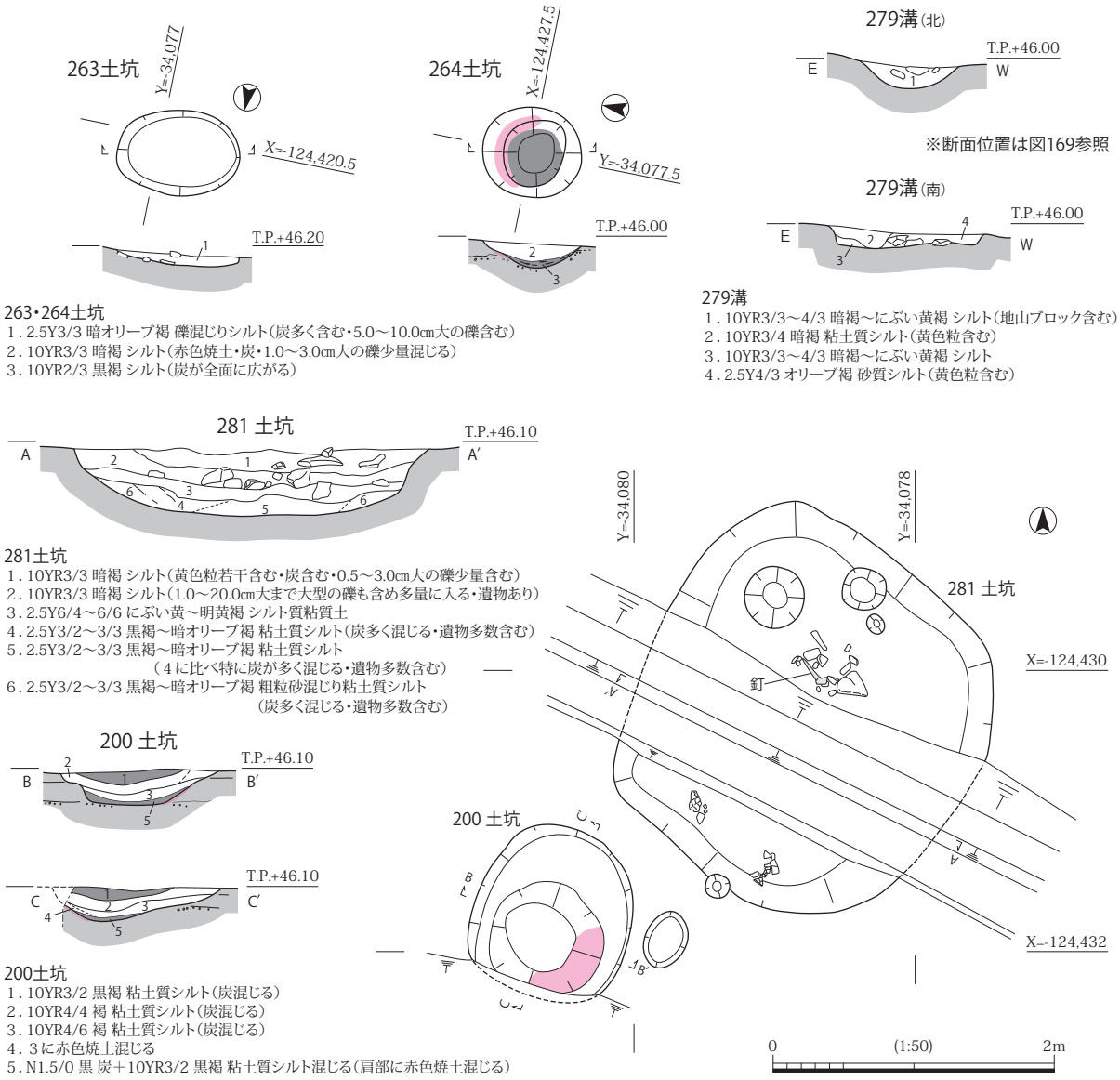


図 170　10 区第 2・3 面検出遺構平面・断面図（2）

本とし、口縁端部が上方にやや突出する。845 は口径 17.6cm の小型の甕である。846 ～ 848 は須恵器杯 A で、846 は底部に丸みを持つ小型のものである。847・848 はそれぞれ口縁部と底部の破片で、平らな底部に体部が外方にまっすぐ開く形態に復元され、847 の口径が 14.4cm、848 の底径が 7.6cm を測る。849 は壺の体部で、底部に近い破片である。外面に一条の沈線がみられる。850 は甕の底部で、外面に格子目タタキがみられる。851 ～ 854 は黒色土器 A 類で、底部が残存する 853・854 は輪高台を有する椀である。外面は口縁部付近のミガキを施した部分を中心に一部黒色化する。852・853 は体部外面にヘラケズリがみられる。内面は横方向のヘラミガキを施し、852 には暗文も認められる。全形を復元できる 853 は、口径 17.0cm、器高 4.3cm を測る。

鉄製品は 22 点出土しており、全て図化した。855 は大型の釘で、先端部が欠損するが、残存長 19.1cm、重さ 102.9g を測る。断面が長方形で、方形の釘頭が鍛接されたと考えられる。856 は大型の釘の先端部と考えられる。857 は中型の釘で、858 も釘の可能性がある。859・860 は頭部が折り曲げられた釘の可能性も想定できるが、断面が不整形であるため性格は不明である。861 は両関の刀子で把手の先端が欠損している。残存長 8.7cm、刀身長 4.8cm を測る。862 ～ 876 は不明鉄製品で、

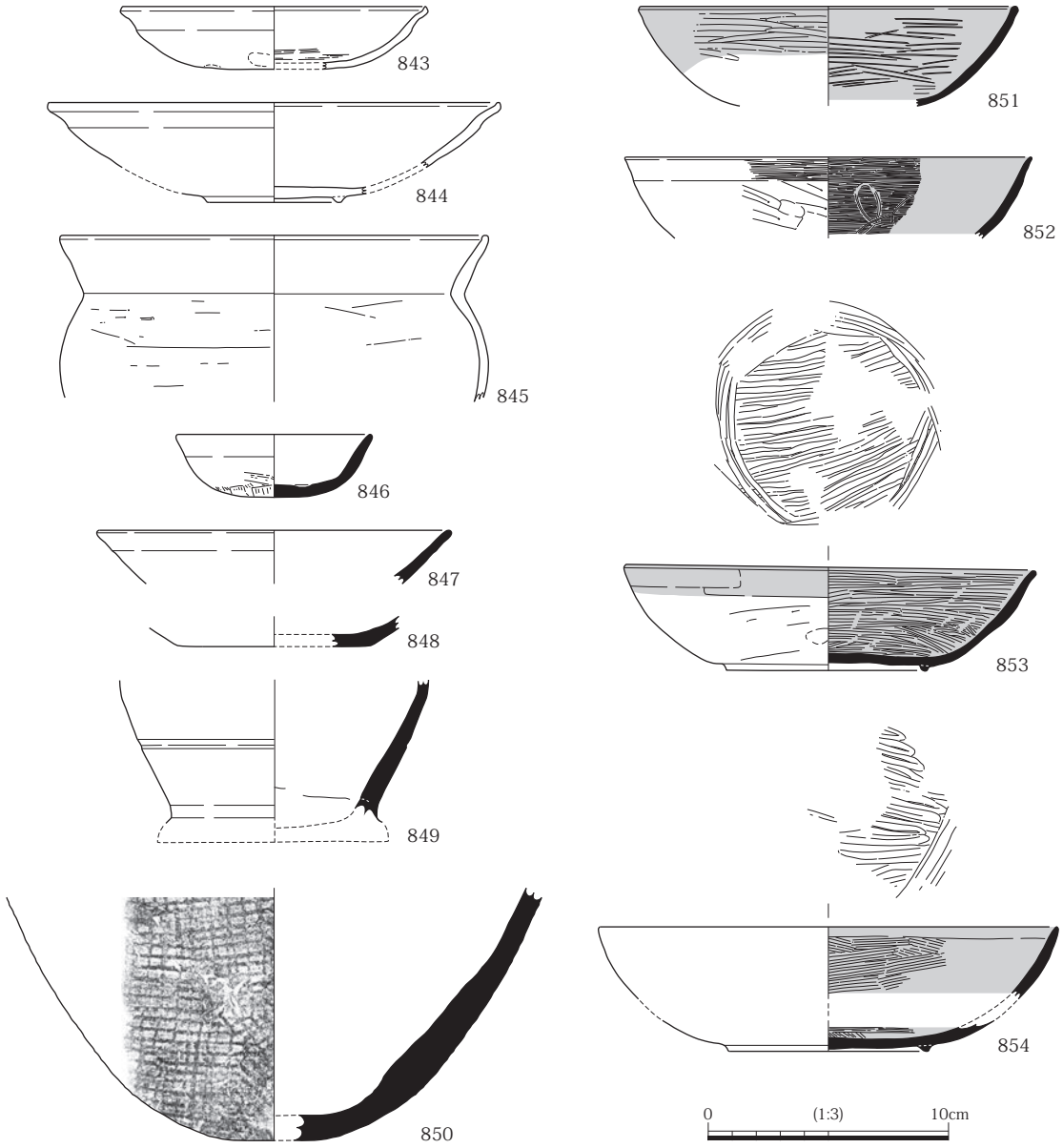


図 171　281 土坑出土遺物（1）　土器

明確な製品であるかははっきりしない。862・863 は断面が板状に薄い。864 は断面形態から刀子の刀身部である可能性もある。865 ～ 876 は棒状の鉄製品であるが、用途等は不明で、断面が方形で細身のものが多い。これらの遺物のうち、土師器や黒色土器は平安京Ⅱ期中～新、9 世紀末から 10 世紀前半を中心とする時期に位置づけられる。

279 溝　上段裾付近、X＝－ 124,420 付近から南にむかって長さ 16.3 m、幅 0.5 ～ 1.0 mで検出された溝である。4 － 2 層を埋土の最下層とし、3 層分の堆積が認められる。281 土坑が 4 － 2 層を掘り込んでいることから、279 溝は 281 土坑よりも古く、9 世紀後半以前の遺構であることが推測される。

特にX＝－ 124,430 以南では、土師器や須恵器など遺物がまとまって出土している。図化できたものは少ないが、周辺にも遺物の広がりがみられ、4 － 2 層出土とした 839・840 についても、279 溝周辺から出土した遺物である。279 溝の埋土から出土した遺物のうち、878 は長頸壺の頸部である。879 は耳付の大型甕で、口縁部が直立する形態である。内面の底部付近を中心に同心円あて具痕があり、外面体部下半に平行タタキ、体部上半にはカキメが施される。前述したように 279 溝は、281 土坑よ

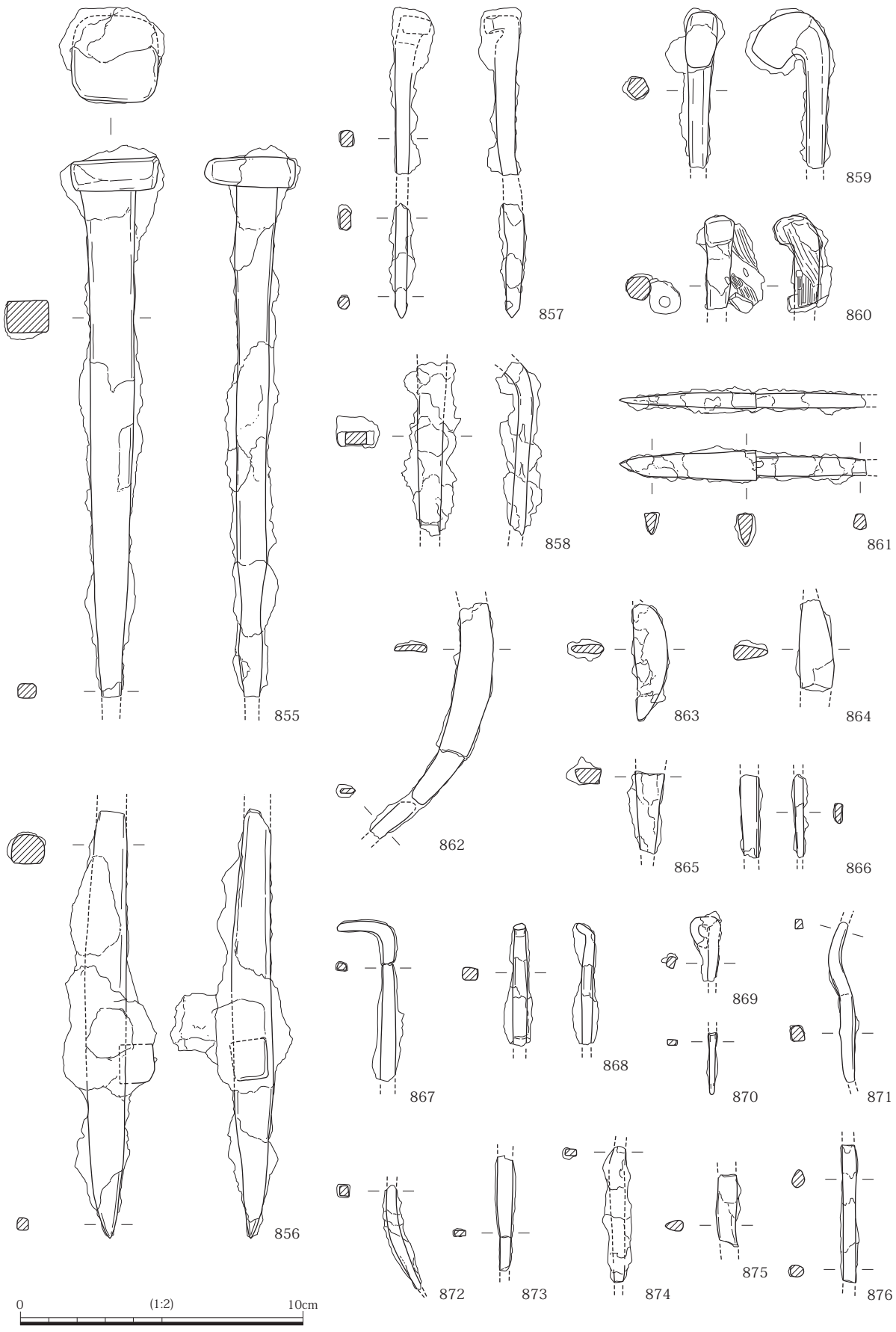
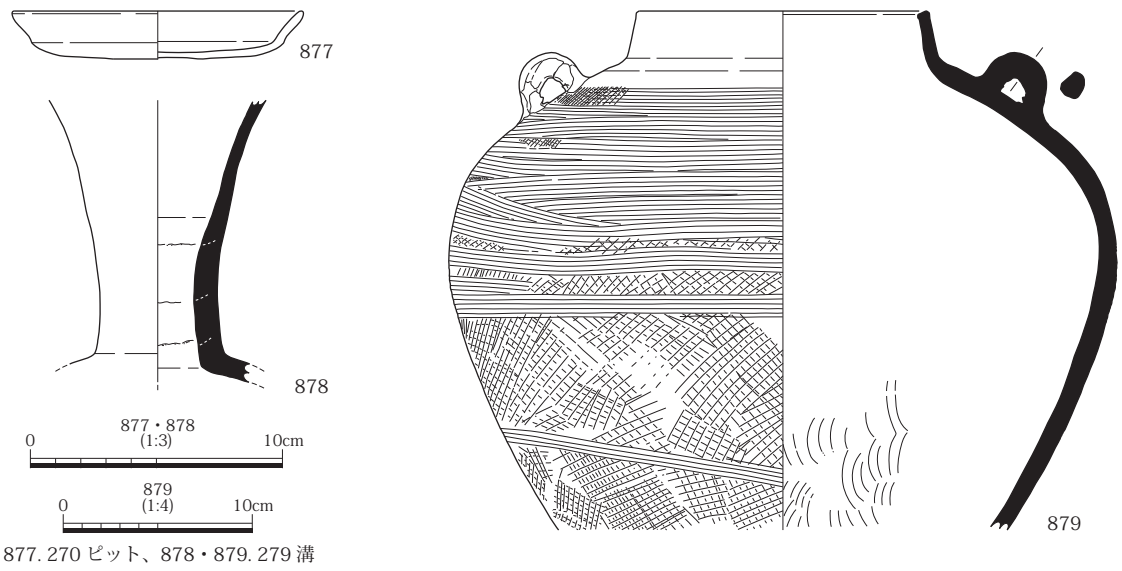


図 172　281 土坑出土遺物（2） 鉄製品



877. 270 ピット、878・879. 279 溝

図 173　10 区第 3 面遺構出土遺物

りも古く、遺物についても 9 世紀後半頃を中心とした時期に位置付けられるため、齟齬はないと考えられる。

270 ピット　径 0.6 m、深さ 0.16 mを測るピットで、他の遺構とは離れた調査区の南西端で検出された。埋土から 877 土師器皿Nが 1 点出土しており、口径 11.4cm、器高 1.9cm を測る。口縁部が外反する形態で、平安京Ⅳ期、11 世紀代に位置づけられる。近辺ではこのピット以外に遺構は検出されていないが、削平された 11 世紀代の遺構の存在が示唆される。

上段の遺構　上段は幅 2.5 ～ 3.5 mの広さで斜面裾を成形して造られた平坦面で、2 層除去面において溝とピットがあわせて約 60 基検出された。これらの遺構の埋土は、上層 2 層と酷似する炭や細かな黄色粒が顕著に混じる暗オリーブシルトを主体とする。このうち 231 溝は長さ 1.3 m、幅 0.3 m、深さ 0.08 mを測る。ピットはいずれも径 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mを測る。これらのピットの広がりからは、掘立柱建物の配列等を復元することはできないため、性格等は不明である。上下の段の層と遺構面の対応関係がみられないことと、遺物の出土も極めて少量であることから、上段の遺構の時期ははっきりしない。上段 2 層が 279 溝の埋土と土質が似ることや、上段遺構面と隣接した位置で第 3 面の遺構がみられることから、下段の第 3 面との対応関係が推測される。

第 4 面の遺構

4 － 2 層除去面で東檜尾川の旧流路と考えられる 296 流路とその流路の西側に並行する 280 溝が検出された。遺構面の標高は 45.9 mである。296 流路、280 溝から出土する遺物の年代から、流路は 9 世紀中頃に埋没したと考えられる。

280 溝　296 流路の西側で流路に並行するように検出された溝である。幅が 2.5 m、深さは 0.15 mを測る。北側では遺構の肩がはっきりしないが、南側にむかって明瞭になり深度が増す。埋土は褐色シルト質細粒砂である。

埋土からは、遺物の出土量は極めて少ないが、土師器と須恵器が出土している。880 は土師器甕で、口径 20.4cm を測る。881 は須恵器の壺蓋で、口径 12.0 cm を測る。外面には自然釉が付着し、口縁部の形態から 8 世紀代のものと考えられる。

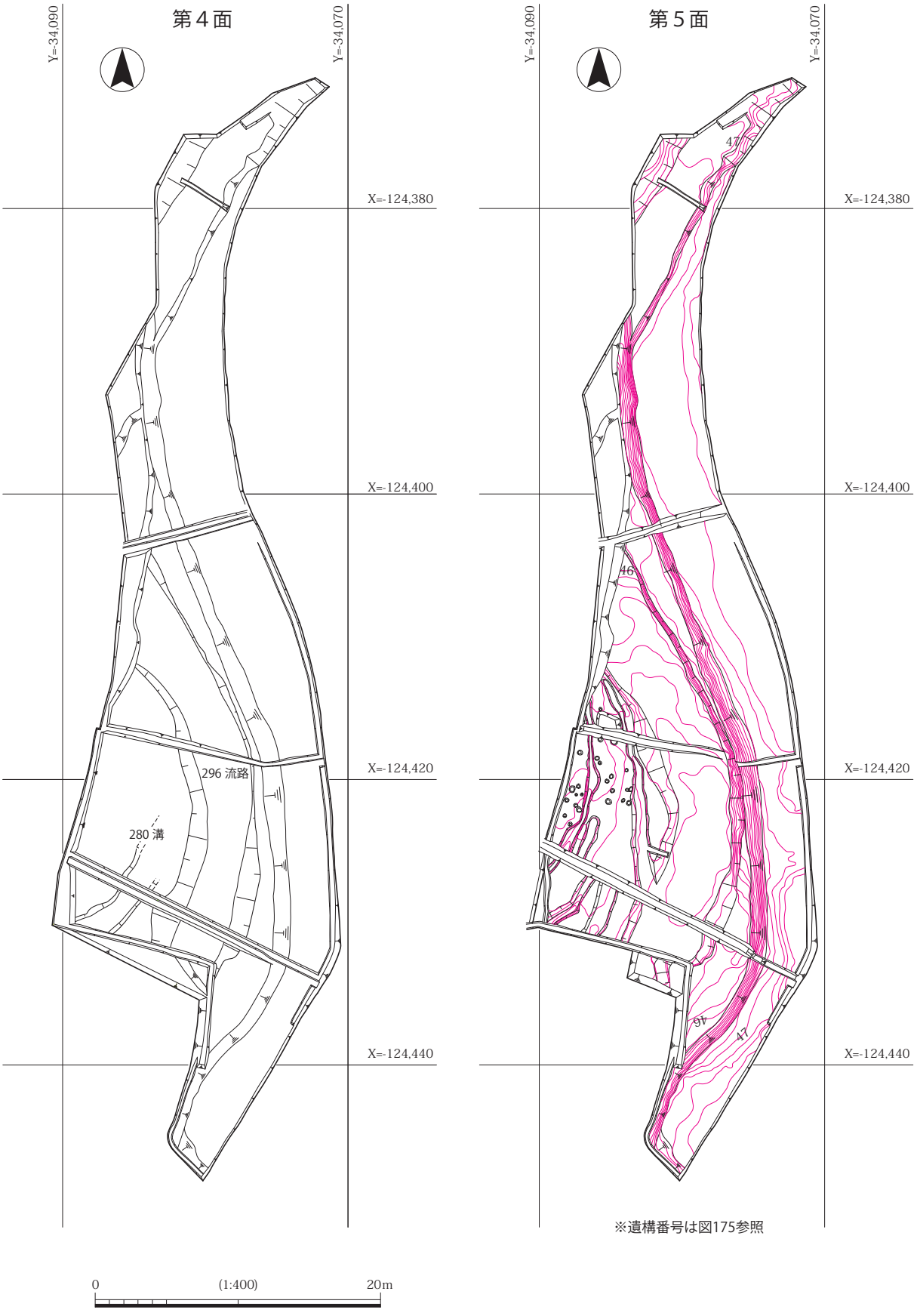


図 174　10 区第４・５面検出遺構全体平面図

296 流路　調査区を南北方向に縦断する流路で、調査区の中央付近の西側から進入し、北西から南東方向にのびたあと、上段裾で北東から南西方向に向きを変えている。東檜尾川の旧流路と考えられ、現流路に比べ、この旧流路が機能していた段階では地形にあわせて蛇行していた様子が窺える。流路は幅4.0 ～ 6.0 m、深さ 0.7 mを測り、埋土は褐～オリーブ褐色の粗粒砂･細粒砂･砂質シルトを主体とする。

流路内からの遺物の出土量は少ないが、横断面Ａ－Ａ′付近からはまとまって遺物が出土している。このうち 882 ～ 884 は土師器甕で、882 は口縁部から体部までの破片である。口径 19.2cm を測り、外面にタテハケの痕跡が僅かにみられる。著しく摩滅しているため、上流から流れ込んできたものと考えられる。883 は口径 26.4cm を測るが、高杯の口縁端部の可能性もある。884 はほぼ全形を復元できる個体で､280 溝や 5 層出土の土師器片との接合関係がみられる。口径 29.5cm､残存高 27.3cm を測り、胴部がやや長い形態で、口縁端部は内側に巻き込み丸くおさめる。体部外面にタテハケ、口縁部内面ヨコハケを施し、内面の底部付近には同心円あて具痕が残る。また、外面には煤の付着がみられる。885 は須恵器壺Ｍの底部～体部片で、内外面が著しく摩滅していることから、上流から流れ込んできたものと考えられる。平底で水挽き成形である。886 は杯Ｂの底部で、底部外端に高台が付く。887 は棒状の不明鉄製品である。この中でも 885・886 については 9 世紀中頃を中心とした時期に位置づけられ、流路の埋没年代を示すと考えられる。

第 5 面の遺構

296 流路の西側に広がる 5 層を除去した面で、溝 5 条とピットが検出された。遺構面の標高は 45.7 ～ 45.8 mで、この第 5 面が最終遺構面である。第 4 面で検出された 296 流路はこの遺構面でも機能していたと考えられ、東檜尾川旧流路の右岸に生活面が存在していたことがわかる。検出された溝は、全て 296 流路と並行する南北方向のもので、流路との関係が推測される。第 5 面を覆う 5 層中からの遺物の出土量は極めて少ないが、9 世紀中頃の須恵器が出土しており、第 5 面の下限の年代を示すと考えられる。また遺構内から出土する遺物についても 9 世紀中頃の年代を示すことから、検出された遺構はこの時期を中心とするものと推測される。一方で、調査区全体の中では 8 世紀代の遺物もみられることから、一部の遺構は 8 世紀代にさかのぼる可能性がある。

297 溝　北北西から南南東方向にむかってのびる溝で、長さ 16.0 m、幅 0.6 ～ 1.4 m、深さ 0.08 ～ 0.25 mを測る。南端は 296 流路に接続する。埋土は褐～オリーブ褐色砂～シルトで、埋土内からは遺物は出土していない。

298 溝　北端と南端は撹乱によって削平を受けるが、296 流路と同様に南半では西向きにゆるやかに屈曲している。検出長 12.6 m、幅 0.3 ～ 1.0 m、深さ 0.24 ～ 0.3 mを測る。埋土は暗褐～褐色砂質シルトで、埋土内からは土師器の細片が出土しているが、時期等は不明である。

299 溝　南端はトレンチによって削平を受けるため、全形は不明であるが、他の溝と比べるとやや短い溝である。検出長 3.0 m、幅 0.7 ～ 0.9 m、深さ 0.14 mを測る。埋土は暗褐～褐色砂質シルトで、埋土内からは遺物は出土していない。

300 溝　検出長 3.6 m、幅 1.4 m、深さ 0.13 mを測る溝で、北端はトレンチによって削平を受けている。埋土は褐色砂質シルトで、埋土内からは 888 土師器杯が 1 点出土している。口径 10.3cm、器高 2.5cm を測り、口縁部がやや外反する形態で、著しく摩滅しているが内外面ともにナデ調整で、外面底部にはケズリの痕跡も一部みられる。平安京Ⅱ期古、9 世紀中頃に位置づけられる。

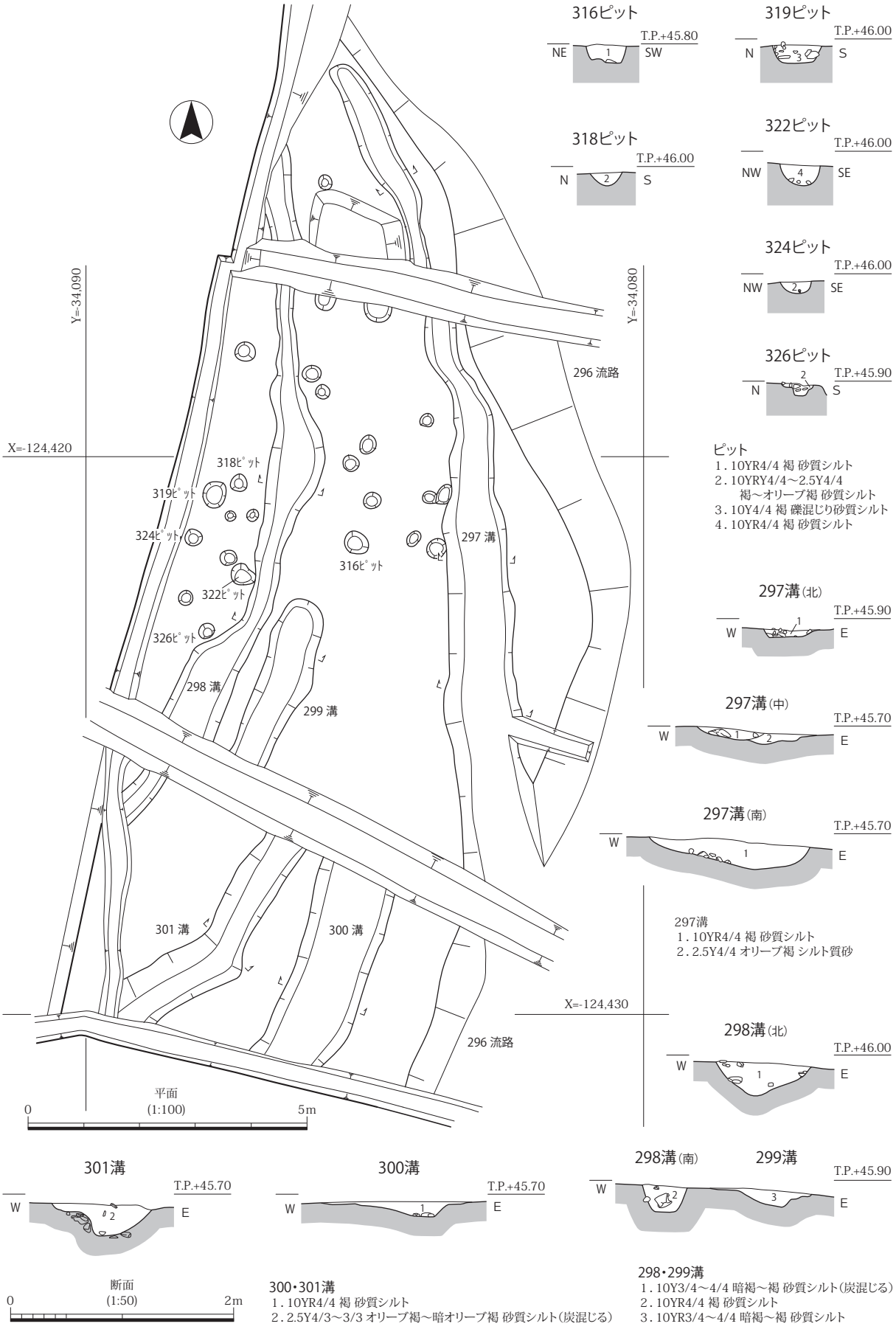


図 175　10 区第 5 面検出遺構平面・断面図

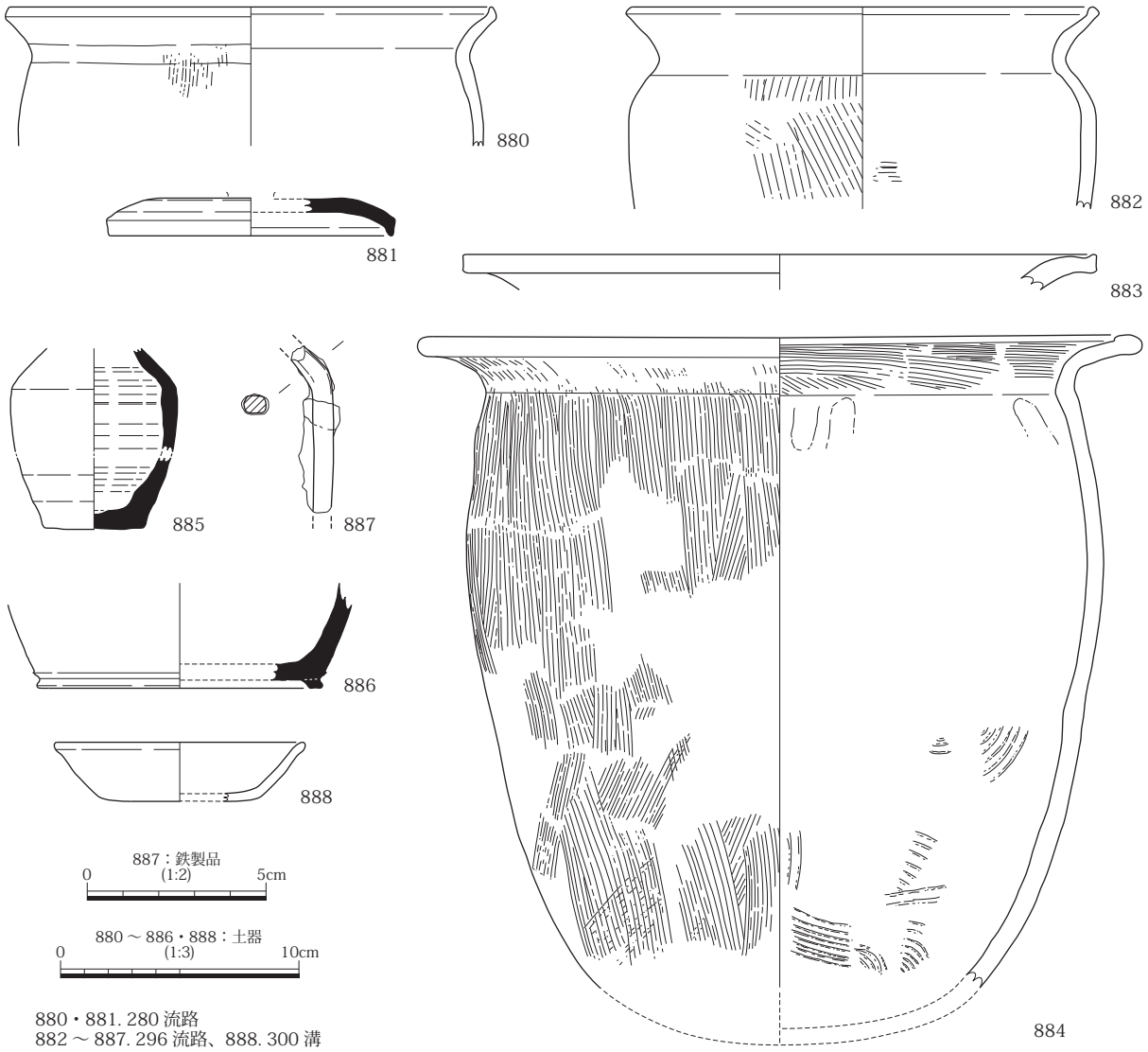


図 176　10 区第 4 ・ 5 面遺構出土遺物

301 溝　北東から南西方向にのびる溝で、途中で西に屈曲する。検出長 4.6 m、幅 0.8 ～ 0.9 m、深さ 0.55 mを測る。埋土は炭が混じるオリーブ褐～暗オリーブ褐色砂質シルトで、埋土内からは須恵器の甕の小片が出土しているが、時期等は不明である。

ピット群　297 溝より西側で径 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m程度のピットが 24 基検出されている。これらのピットの埋土は溝と同様に褐～オリーブ褐色砂質シルトを主体とする。調査区の西側は耕作によって削平を受けて一段下げられているが、西側にも遺構が広がっていた可能性が高い。またさらに西側は現在檜尾川が流れているものの、第 5 面が機能していたと考えられる 9 世紀中頃以前は、東側の 296 流路が旧流路として機能しており、296 流路の西側に集落域が広がっていたと考えられる。

（笹栗）

【註】

1）大阪府教育委員会 2012『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』16

第５章　金龍寺旧境内跡の調査成果

成合遺跡 11 － 1 の調査期間中に実施された試掘調査（成合遺跡隣接地 11 － 2）のうち、成合遺跡の東側隣接地と金龍寺旧境内跡の北西隣接地の間の尾根上に設定されたトレンチで、焼土坑をはじめとした遺構と弥生土器・須恵器等が検出された。その結果を受けて、金龍寺旧境内跡の遺跡範囲が成合遺跡とほぼ隣接する範囲まで大きく拡大することとなったため[1)]、西日本高速道路株式会社と変更契約を締結し、調査を実施するととになった。

今回の金龍寺旧境内跡の調査（金龍寺旧境内跡 12 － 2）は、遺跡の北西端部、成合遺跡東側の谷と尾根を隔てた丘陵尾根上の緩斜面地を中心に、２ヶ所の調査区を設定した。北側尾根の調査区を１区、南側尾根の調査区を２区とし、平成 24 年７月～ 12 月の期間で調査を実施した。

第１節　１区の調査成果〔図 177 ～ 186、写真図版 84 ～ 87・89〕

１区は、成合遺跡に最も近い調査区の南西端の標高が約 70 m、北東端の標高が約 85 mで、北東から南西方向にむかってのびる丘陵尾根上にあたる。尾根の西側先端部付近は畑地として開墾されていたため平坦地となっており、地形の改変が著しい。これに対して南北の斜面は、比較的傾斜が急な斜面地をなし、谷を隔てて南側には一段低い２区の尾根がのびる。調査区の東側の尾根の付け根付近にはやや狭い平坦面がみられ、さらに東側は南北方向にのびる尾根の急峻な斜面につながる。調査面積は 3,100 ㎡である。

層序については、表土層および表土層直下に堆積する厚さ 0.2 ～ 0.4 mの明黄褐色シルトを１層とした。この１層を除去すると、小礫を多く含む明黄褐色砂質シルトや硬くしまった丘陵基盤岩層からなる地山面が現れるが、埋没谷（浸食痕跡）部分には、黄褐色シルト～中粒砂層や 0.2 ～ 0.5cm 大の礫を多く含む礫層など複数の層が堆積する。これらの層は連続性に欠け層相も一様でなく変化しており、この谷部に堆積する層を２層として一括した。また、西側では斜面裾部をカットして形成された平坦部が検出され、平坦部およびカット部分には粗粒砂～礫を多く含む明黄褐色シルト～細粒砂層などが堆積しており、これらを３層として一括した。

古代の遺構と遺物

調査の結果、丘陵尾根を浸食して形成された谷（浸食痕）や斜面の一部をカットし平坦部を設けた造成跡のほか、丘陵尾根上や裾部から土坑や溝などの遺構が検出された。谷（浸食痕跡）が南西側丘陵先端部と尾根筋上および北から西側斜面にかけて検出されており、特に丘陵先端部で地山面が大きく削られ本来の地形が著しく改変されていた。また尾根筋上では、土抗・溝などの遺構が削られて尾根筋から北側斜面では土坑・溝などの遺構が削られていた。

北西側斜面から丘陵先端部にかけてみられる平坦面は、斜面の裾を深さ 0.5 m前後ほぼ垂直に削り出し、幅約６m、長さ約 14 mの平坦面が造成されていたが、これは畑地として開墾されたためによるものである。この平坦面からは、径 0.1 m前後のピットが数基検出されているが、配置関係に規則性は認められなかったため、性格等は不明である。土坑は、尾根北西端の高所平坦部や尾根筋沿いや丘陵裾部

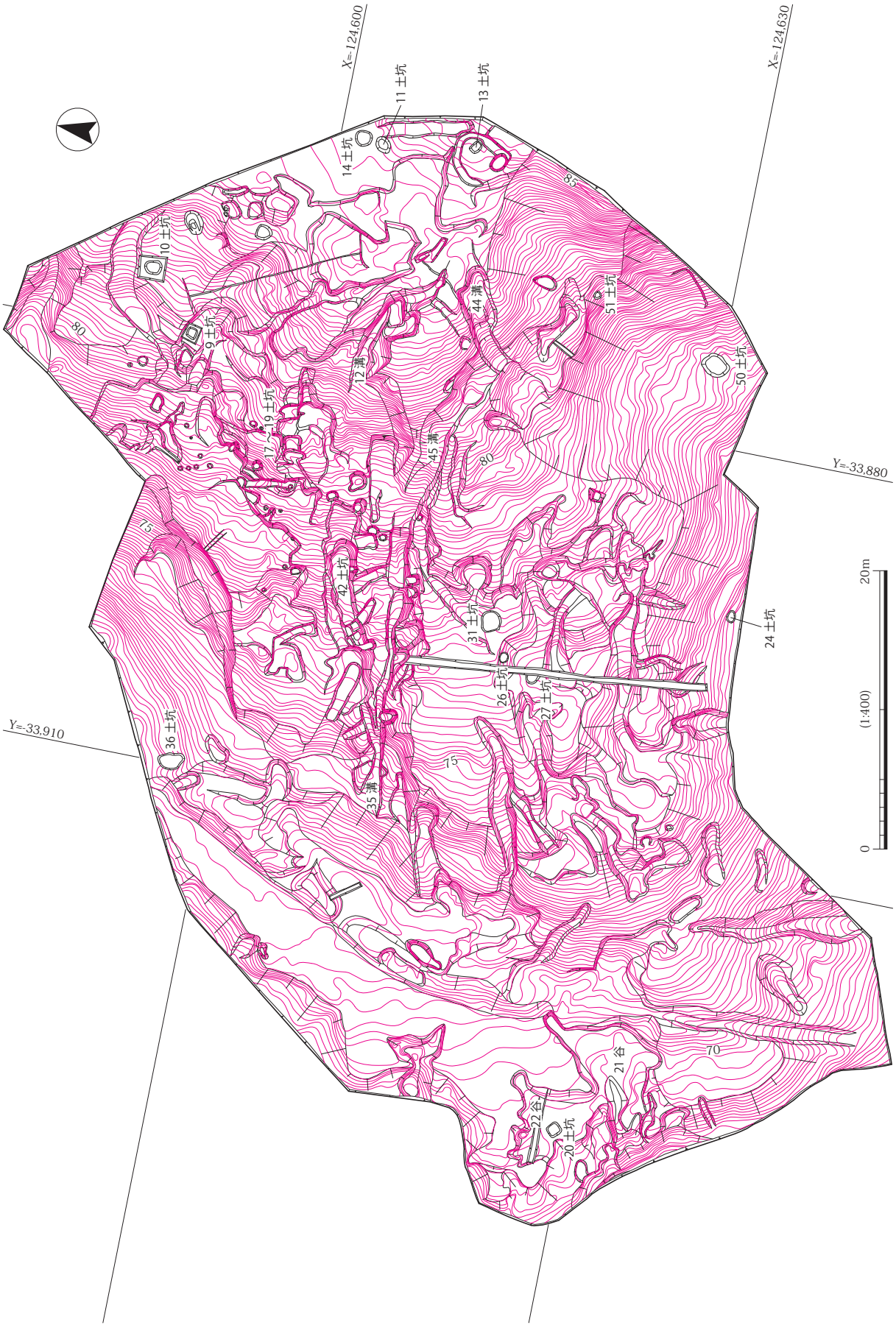
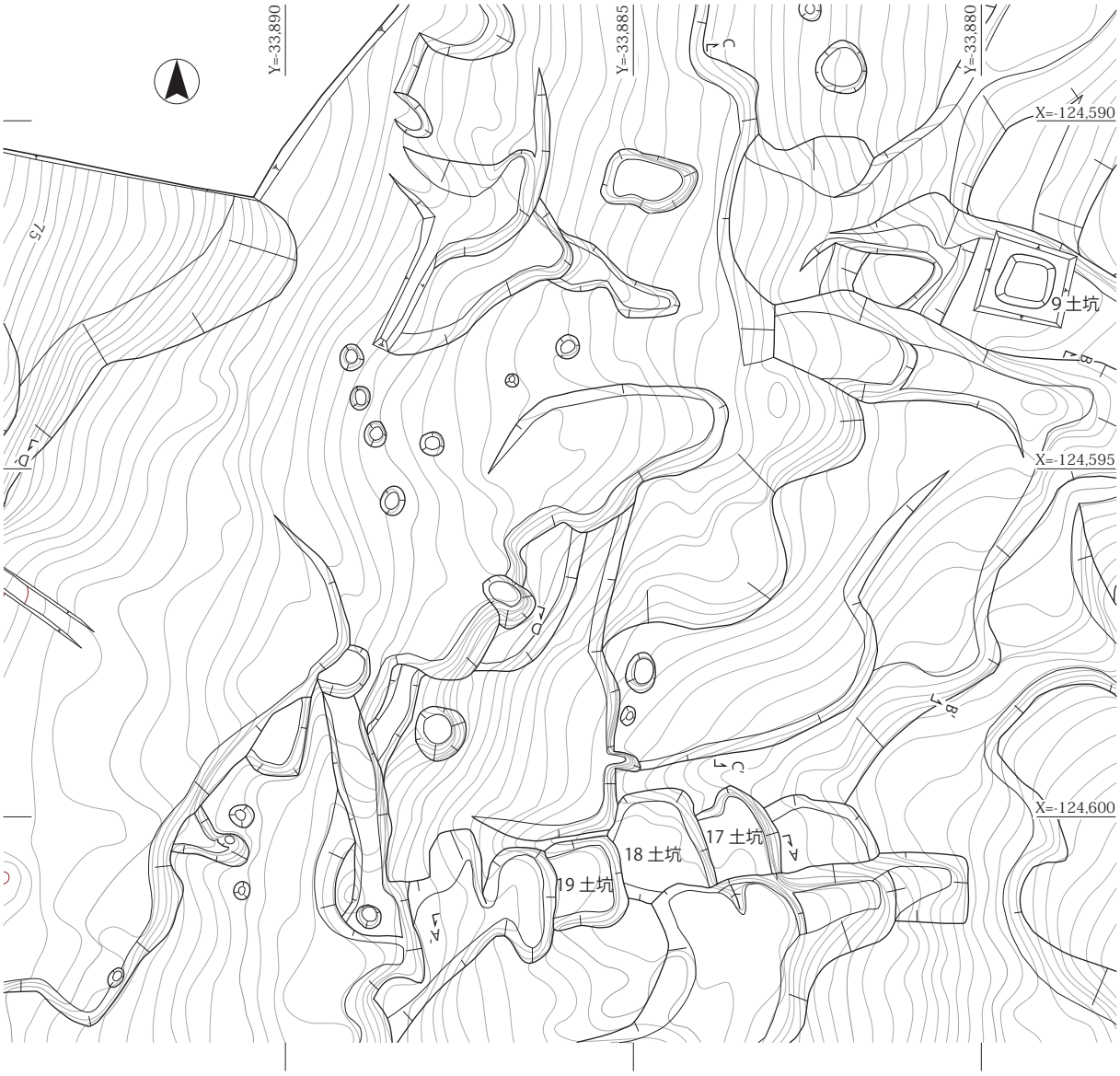
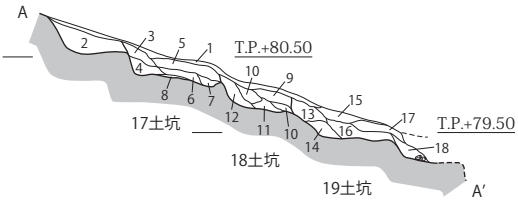


図 177　1 区検出遺構全体平面図





断面B－B′
1．10YR6/8 明黄褐 極細～細粒砂(0.5～3.0㎝大の礫多く含む(0.5㎝大が主)・締りなし)
2．2.5Y6/4 にぶい黄橙 シルト～極細粒砂(1.0～1.5㎝大の礫やや多く含む)
3．1.0～3.0㎝大の礫層(礫間に2.5Y5/3 黄褐 細粒砂・比較的締っている)
4．2.5Y6/8 明黄褐 細粒砂(3.0㎝大の礫多く含む)
5．10YR6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂
6．2.0～4.0㎝大を主とする礫層(礫間に10Y5/4 にぶい黄褐 極細～細粒砂・比較的締っている)
7．10YR5/3 にぶい黄褐 極細粒砂(3.0㎝大の礫含む)

断面A－A′(17・18・19土坑)
1．2.5Y6/6 明黄褐 極細～細粒砂(シルト・0.5～1.0㎝大の礫若干含む)
2．図面作成前にアゼ崩落のため詳細不明(10YR6/4 にぶい黄橙 極細粒砂(1.0～1.5㎝大の礫含む)
3．0.5㎝大礫ブロック(10.0×8.0㎝)・10YR6/4 にぶい黄橙 シルト～極細粒砂(礫ブロックは固く締っている)
4．0.5～1.0㎝(最大6.0㎝)の礫層(礫間に2.5Y6/4 にぶい黄 シルト～極細粒砂・若干粘性がある)
5．0.3～0.5㎝大を主流とする礫層(1.0㎝大の礫も若干含まれる・礫間に10YR6/6 明黄褐 極細～細粒砂・やや締りあり)
6．10YR6/6 明黄褐 極細粒砂(0.5～1.0㎝・1.5㎝大の礫多く含む)
7．10YR6/6 明黄褐 細粒砂
8．10YR6/4 にぶい黄橙 シルト～極細粒砂
9．10YR6/6 明黄褐 シルト～極細粒砂(やや粘性あり・1.0㎝以下の礫若干含む)
10．2.5Y6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂(やや粘性あり)
11．10YR6/8 明黄褐 極細粒砂(シルト・礫若干含む)
12．0.5～1.0㎝大の礫層(礫間に10YR5/8 黄褐 極細粒砂・比較的よく締る)
13．10YR4/6 褐 極細～細粒砂
14．10YR6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂(1.5～2.0㎝大の礫若干含む)
15．0.5～1.5㎝大の礫層(礫間に2.5Y6/6 明黄褐 極細～細粒砂
16．10YR5/6 黄褐 極細粒砂(1.5㎝大の礫・10YR6/4 にぶい黄褐 シルト(地山の一部)ブロック含む)
17．0.3～1.0㎝以下を主流とする礫層(礫間に2.5Y6/8 明黄褐 細粒砂・比較的よく締る)
18．1.0㎝大の礫層(下部には3.0～4.0㎝大の礫)

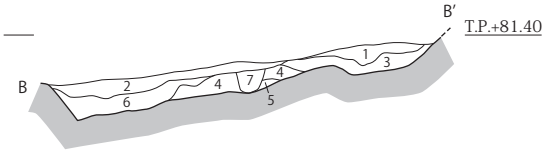
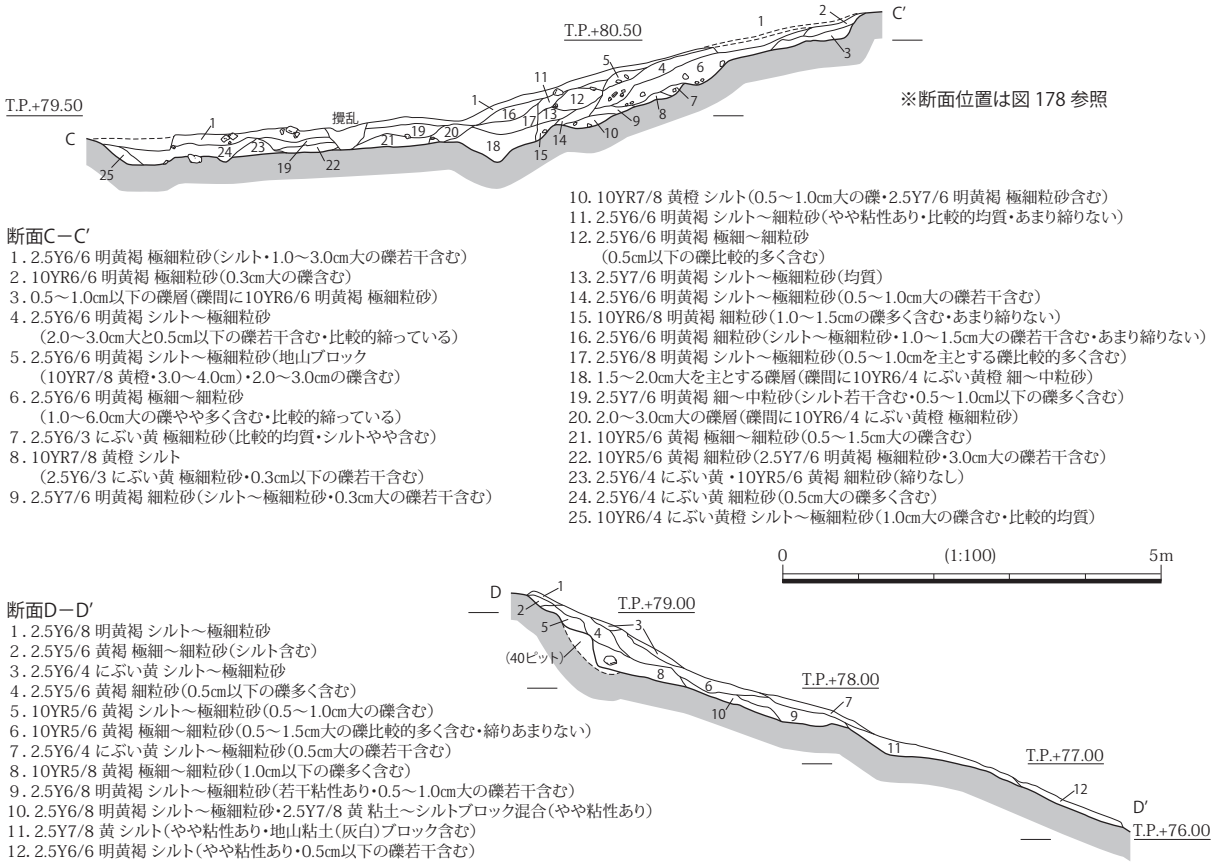


図 178　1区北東部平面・断面図



断面C－C′
1. 2.5Y6/6 明黄褐 極細粒砂(シルト・1.0～3.0㎝大の礫若干含む)
2. 10YR6/6 明黄褐 極細粒砂(0.3㎝大の礫含む)
3. 0.5～1.0㎝以下の礫層(礫間に10YR6/6 明黄褐 極細粒砂)
4. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト～極細粒砂
(2.0～3.0㎝大と0.5㎝以下の礫若干含む・比較的締っている)
5. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト～極細粒砂(地山ブロック
(10YR7/8 黄橙・3.0～4.0㎝)・2.0～3.0㎝の礫含む)
6. 2.5Y6/6 明黄褐 極細～細粒砂
(1.0～6.0㎝大の礫やや多く含む・比較的締っている)
7. 2.5Y6/3 にぶい黄 極細粒砂(比較的均質・シルトやや含む)
8. 10YR7/8 黄橙 シルト
(2.5Y6/3 にぶい黄 極細粒砂・0.3㎝以下の礫若干含む)
9. 2.5Y7/6 明黄褐 細粒砂(シルト～極細粒砂・0.3㎝大の礫若干含む)
10. 10YR7/8 黄橙 シルト(0.5～1.0㎝大の礫・2.5Y7/6 明黄褐 極細粒砂含む)
11. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト～細粒砂(やや粘性あり・比較的均質・あまり締りない)
12. 2.5Y6/6 明黄褐 極細～細粒砂
(0.5㎝以下の礫比較的多く含む)
13. 2.5Y7/6 明黄褐 シルト～極細粒砂(均質)
14. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト～極細粒砂(0.5～1.0㎝大の礫若干含む)
15. 10YR6/8 明黄褐 細粒砂(1.0～1.5㎝の礫多く含む・あまり締りない)
16. 2.5Y6/6 明黄褐 細粒砂(シルト～極細粒砂・1.0～1.5㎝大の礫若干含む・あまり締りない)
17. 2.5Y6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂(0.5～1.0㎝を主とする礫比較的多く含む)
18. 1.5～2.0㎝大を主とする礫層(礫間に10YR6/4 にぶい黄橙 細～中粒砂)
19. 2.5Y7/6 明黄褐 細～中粒砂(シルト若干含む・0.5～1.0㎝以下の礫多く含む)
20. 2.0～3.0㎝大の礫層(礫間に10YR6/4 にぶい黄橙 極細粒砂)
21. 10YR5/6 黄褐 極細～細粒砂(0.5～1.5㎝大の礫含む)
22. 10YR5/6 黄褐 細粒砂(2.5Y7/6 明黄褐 極細粒砂・3.0㎝大の礫若干含む)
23. 2.5Y6/4 にぶい黄・10YR5/6 黄褐 細粒砂(締りなし)
24. 2.5Y6/4 にぶい黄 細粒砂(0.5㎝大の礫多く含む)
25. 10YR6/4 にぶい黄橙 シルト～極細粒砂(1.0㎝大の礫含む・比較的均質)

断面D－D′
1. 2.5Y6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂
2. 2.5Y5/6 黄褐 極細～細粒砂(シルト含む)
3. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト～極細粒砂
4. 2.5Y5/6 黄褐 細粒砂(0.5㎝以下の礫多く含む)
5. 10YR5/6 黄褐 シルト～極細粒砂(0.5～1.0㎝大の礫含む)
6. 10YR5/6 黄褐 極細～細粒砂(0.5～1.5㎝大の礫比較的多く含む・締りあまりない)
7. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト～極細粒砂(0.5㎝大の礫若干含む)
8. 10YR5/8 黄褐 極細～細粒砂(1.0㎝以下の礫多く含む)
9. 2.5Y6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂(若干粘性あり・0.5～1.0㎝大の礫若干含む)
10. 2.5Y6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂・2.5Y7/8 黄 粘土～シルトブロック混合(やや粘性あり)
11. 2.5Y7/8 黄 シルト(やや粘性あり・地山粘土(灰白)ブロック含む)
12. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト(やや粘性あり・0.5㎝以下の礫若干含む)

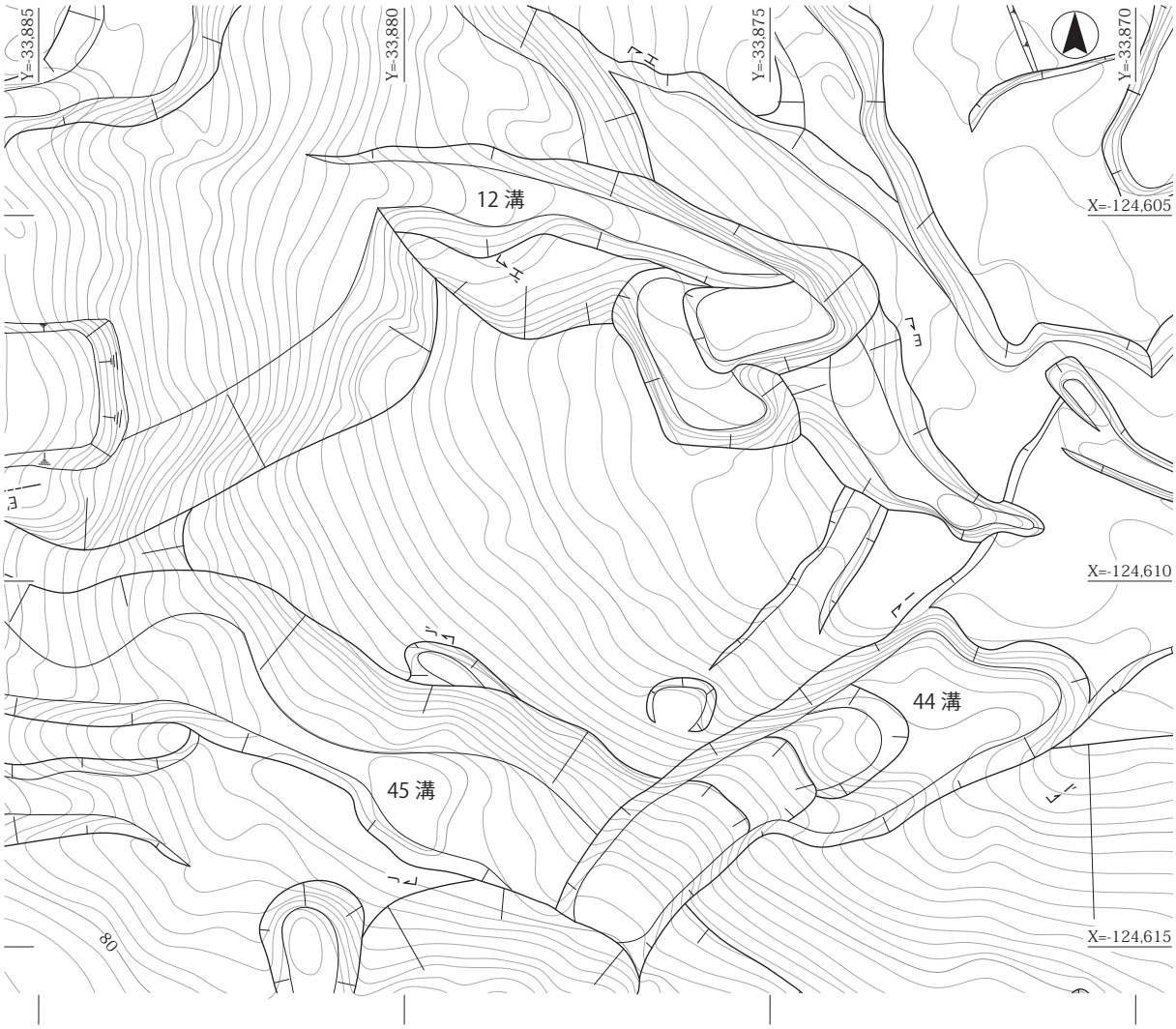
図 179　1 区北東部断面図

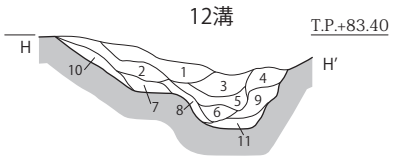
で検出された。このうち多くは、成合遺跡で検出されたものと同様の焼土坑で、壁面が被熱して硬く赤変し、埋土に炭を多く含む。調査区内で併せて 12 基検出されており、これらは調査区内に散在するが、尾根筋にそって階段状に列をなすものもみられた（土坑 17・18・19)。溝については、丘陵尾根を横断するように東から南西方向に掘削された溝や、丘陵西側斜面沿いに北東から南西方向に掘削された溝などが検出されている。

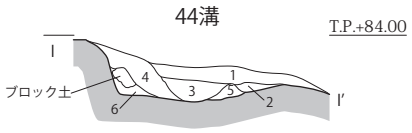
17・18・19 土坑　尾根筋に沿って北東から南西方向に階段状に掘削された、一辺 1.5 m前後、深さ 0.5 mの方形の土坑である。各土坑の壁はほぼ垂直で底面は平坦な面をなす。各土坑間の底面は約 0.3 ～ 0.4 mの段差を有している。いずれも 0.3 ～ 0.5cm 大の礫を多く含む明黄褐色砂質土を埋土としており、埋土の新旧関係から上段北東側から順次掘削されたものと考えられるが、埋土層相は酷似しており、これらはほぼ同時期に掘削されたものと考えられる。南側にも同様の土坑列が検出されたが、浸食によって大半を失われており、本来の形状や 17・18・19 土坑との新旧関係は定かではない。いずれの土坑からも、遺物は出土していない。

42 土坑　調査区中央部、丘陵尾根筋西側斜面の、尾根筋を浸食する谷の中で検出された。長さ 8.0 m、幅 2.5 mを測り、深さは 0.6 m前後である。南西側は浸食によって失われている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。小礫を若干含む明黄褐色シルト～極細粒砂層を埋土とする。遺物は出土していない。

35 溝　42 土坑の南、丘陵尾根筋西側斜面で検出された。上部は浸食によって失われていると考えられる。長さ 16 m、幅 0.6 mを測り、深さは約 0.5 mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。埋土は 0.5cm 以下の礫を若干含む明黄褐色シルト～極細粒砂層である。45 溝の南西側延長状に位置することから一連の溝の可能性が考えられるが、浸食谷によって層の連続が断たれていることから確証は

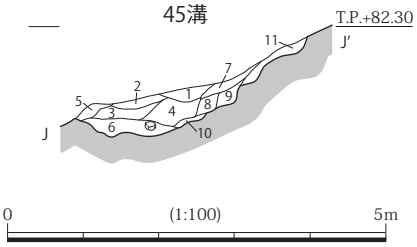






12溝（断面H－H′）
1．10YR6/8 明黄褐 砂質シルト（1.0～1.5㎝大の礫多く含む）
2．2.5Y6/8 明黄褐 極細粒砂（シルト・1.0㎝大の礫若干含む）
3．2.5Y6/8 明黄褐 極細粒砂（シルト若干含む・締りない）
4．2.5Y6/6 明黄褐 砂質シルト（0.5～1.0㎝大の礫若干含む・やや締りあり）
5．2.5Y6/8 明黄褐 極細粒砂
6．2.5Y5/4 黄褐 極細粒砂（シルト若干含む・やや粘性あり）
7．10YR5/8 黄褐 極細粒砂（1.0～2.0㎝大の礫若干含む）
8．10YR6/8 明黄褐 シルト（基盤粘土小ブロック僅かに含む・やや粘性あり）
9．2.5Y6/8 明黄褐 極細粒砂（0.5～1.0㎝大の礫若干含む・若干粘性あり）
10. 10YR5/8 黄褐 砂質シルト（3.0～4.0㎝大の礫若干含む）
11. 10YR5/6 黄褐 極細粒砂（やや粘性あり・やや締りあり・小礫若干含む）

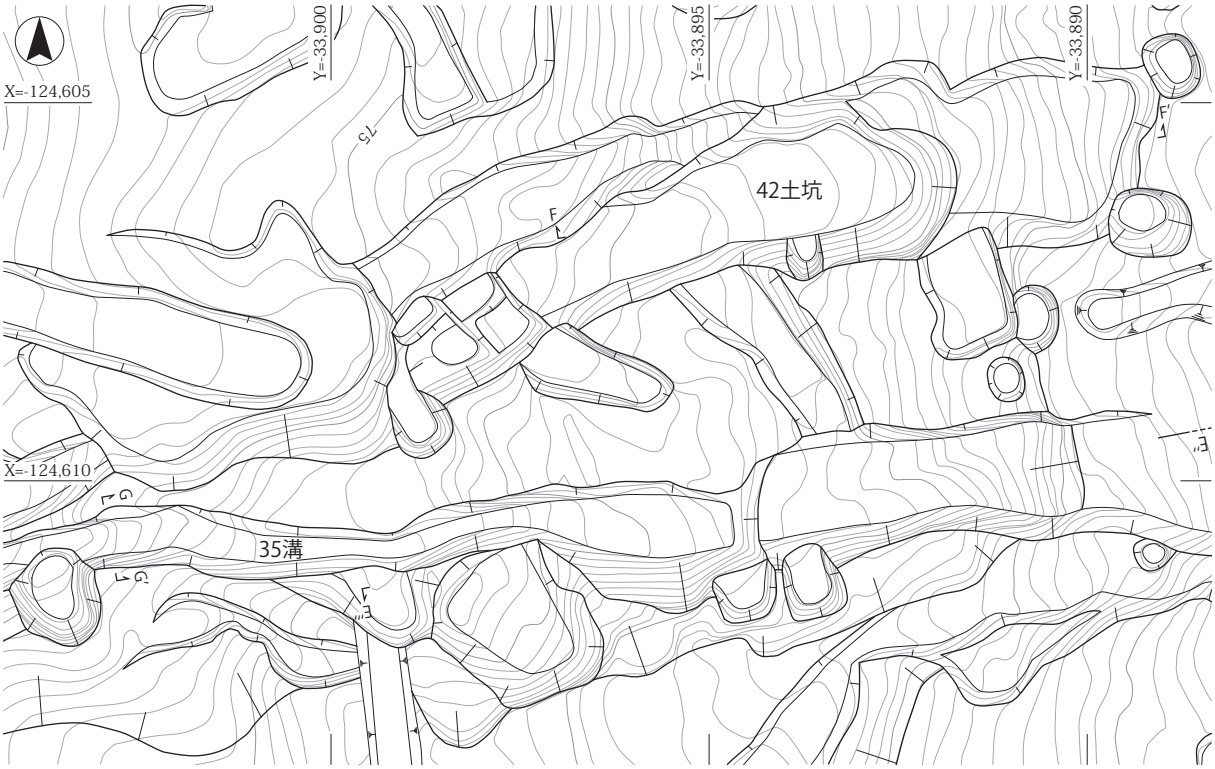
44溝（断面I－I′）
1．10YR6/8 明黄褐 細粒砂（シルト若干・1.0～2.0㎝大の礫含む・やや締りあり）
2．10YR6/8 明黄褐 極細～細粒砂（1.0～2.0㎝大の礫含む）
3．0.5～1.5㎝大の礫層（礫間に2.5Y6/6 明黄褐 極細～細粒砂）
4．1.5～3.0㎝大の礫層（礫間に10YR5/8 黄褐 細粒砂・10YR6/8 明黄褐 細粒砂）
5．1.5～3.0㎝大の礫層（礫間に10YR6/8 明黄褐 極細～細粒砂）
6．1.5～3.0㎝大の礫層（礫間に10YR6/8 明黄褐 極細～細粒砂・基盤岩ブロック含む）

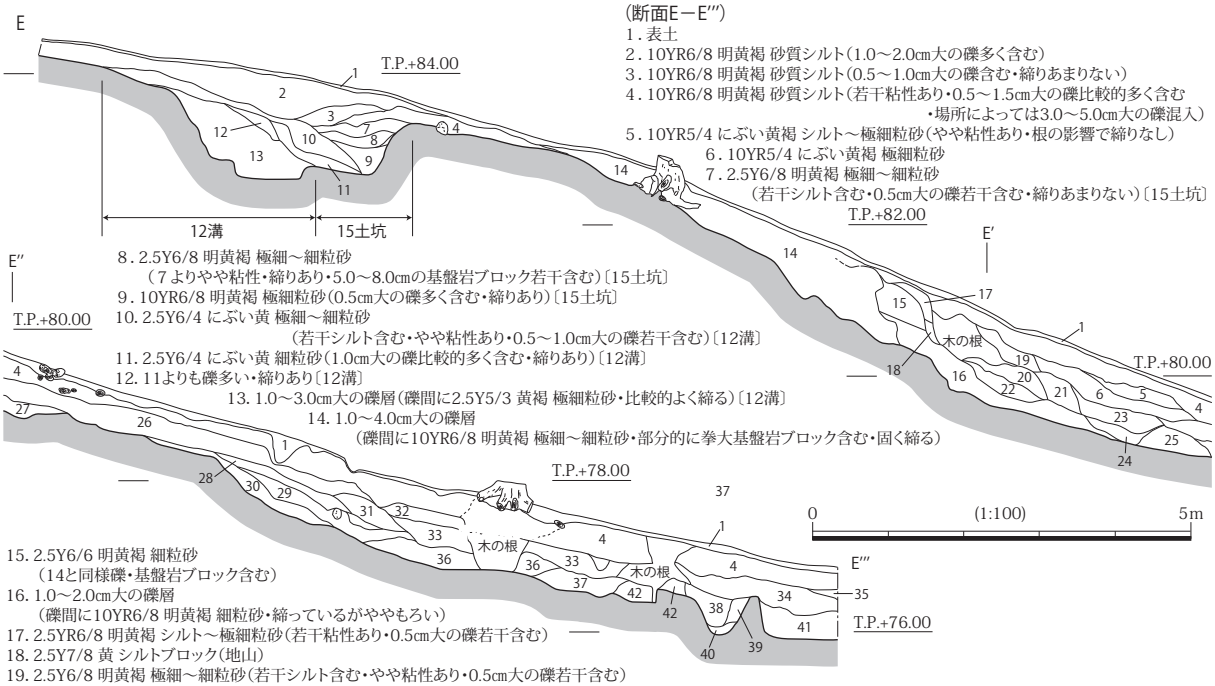


45溝（断面J－J′）
1．2.5Y6/8 明黄褐 細粒砂（0.5㎝大の礫比較的多く含む）
2．2.5Y6/8 明黄褐 細粒砂（0.5～1.5㎝大の礫・2.5Y6/6 明黄褐 極細粒砂含む）
3．2.5Y6/6 明黄褐 シルト～極細粒砂（1.5～2.0㎝大の礫若干含む・やや粘性あり）
4．2.5Y6/6 明黄褐 シルト～極細粒砂（1.5～2.0㎝大の礫若干含む・2.5Y7/6 明黄褐 極細粒砂含む）
5．1.0～1.5㎝大の礫層（礫間に2.5Y6/4 にぶい黄 細粒砂・やや締りあり）
6．2.5Y6/6 明黄褐 細粒砂（10YR5/6 黄褐 細粒砂・基盤岩ブロック含む）
7．2.5Y7/6 明黄褐 極細～細粒砂（1.0㎝大の礫含む）
8．2.5Y7/6 明黄褐 極細～細粒砂（1.0㎝大の礫若干含む・比較的均質・やや締りあり）
9．2.5Y6/8 明黄褐 極細～細粒砂（1.0㎝以下の礫含む・やや締りあり）
10. 2.5Y7/6 明黄褐 シルト～極細粒砂
11. 2.5Y6/6 明黄褐 細粒砂（2.0～3.0㎝大の礫含む）

※断面 E－E′ はさらに西側に続く長いものであるため図 181 に示している

図 180　1 区南東部平面・断面図





(断面E－E‴)

1. 表土
2. 10YR6/8 明黄褐 砂質シルト(1.0～2.0㎝大の礫多く含む)
3. 10YR6/8 明黄褐 砂質シルト(0.5～1.0㎝大の礫含む・締りあまりない)
4. 10YR6/8 明黄褐 砂質シルト(若干粘性あり・0.5～1.5㎝大の礫比較的多く含む・場所によっては3.0～5.0㎝大の礫混入)
5. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト～極細粒砂(やや粘性あり・根の影響で締りなし)
6. 10YR5/4 にぶい黄褐 極細粒砂
7. 2.5Y6/8 明黄褐 極細～細粒砂(若干シルト含む・0.5㎝大の礫若干含む・締りあまりない)〔15土坑〕
8. 2.5Y6/8 明黄褐 極細～細粒砂(7よりやや粘性・締りあり・5.0～8.0㎝の基盤岩ブロック若干含む)〔15土坑〕
9. 10YR6/8 明黄褐 極細粒砂(0.5㎝大の礫多く含む・締りあり)〔15土坑〕
10. 2.5Y6/4 にぶい黄 極細～細粒砂(若干シルト含む・やや粘性あり・0.5～1.0㎝大の礫若干含む)〔12溝〕
11. 2.5Y6/4 にぶい黄 細粒砂(1.0㎝大の礫比較的多く含む・締りあり)〔12溝〕
12. 11よりも礫多い・締りあり〔12溝〕
13. 1.0～3.0㎝大の礫層(礫間に2.5Y5/3 黄褐 極細粒砂・比較的よく締る)〔12溝〕
14. 1.0～4.0㎝大の礫層(礫間に10YR6/8 明黄褐 極細～細粒砂・部分的に拳大基盤岩ブロック含む・固く締る)
15. 2.5Y6/6 明黄褐 細粒砂(14と同様礫・基盤岩ブロック含む)
16. 1.0～2.0㎝大の礫層(礫間に10YR6/8 明黄褐 細粒砂・締っているがややもろい)
17. 2.5YR6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂(若干粘性あり・0.5㎝大の礫若干含む)
18. 2.5Y7/8 黄 シルトブロック(地山)
19. 2.5Y6/8 明黄褐 極細～細粒砂(若干シルト含む・やや粘性あり・0.5㎝大の礫若干含む)
20. 2.5Y6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂(やや粘性あり・1.0～1.5㎝大の礫若干含む)
21. 2.5Y6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂(やや締りなし・1.0～1.5㎝大の礫若干含む)
22. 10YR6/8 明黄褐 シルト(1.0㎝大の礫・基盤岩ブロック若干含む・やや締りあり)
23. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト～極細粒砂(やや粘性あり・若干締りあり)
24. 10YR6/8 明黄褐 極細粒砂(若干シルト含む・0.5㎝大の礫若干含む)
25. 10YR5/8 黄褐 シルト～極細粒砂(0.5～1.0㎝大の礫含む・やや締りあり)
26. 2.5Y6/6 明黄褐 極細粒砂(0.5㎝大の礫やや多く含む・やや締りあり)
27. 2.5Y6/6 明黄褐 極細～細粒砂(締りなし)
28. 2.5Y5/6 黄褐 極細～細粒砂(0.5～1.0㎝大の礫若干含む・あまり締りない)
29. 2.5Y5/6 黄褐 細粒砂(若干シルト含む・やや粘性あり・3.0㎝大の礫・基盤岩ブロック若干含む・やや締りあり)
30. 2.5Y5/6 黄褐 極細粒砂(若干シルト含む・やや粘性あり・3.0～4.0㎝大の礫僅かに含む)
31. 10YR6/6 明黄褐 極細～細粒砂(0.5～1.5㎝大の礫比較的多く含む)
32. 10YR6/6 明黄褐 極細粒砂(若干シルト含む・やや粘性あり・0.5㎝大の礫若干含む)
33. 2.5Y6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂 (0.3～0.5㎝大の礫若干含む)
34. 10YR5/6 黄褐 極細～細粒砂(0.5～1.0㎝大の礫多く含む・5.0～10.0㎝大の基盤岩ブロック・地山粘土質シルトブロック含む・あまり締りない)
35. 10YR5/6 黄褐 細～中粒砂(1.0㎝大の礫多く含む・34とよく似る)
36. 10YR6/8 明黄褐 細粒砂(若干シルト含む・0.5㎝大の礫・基盤岩ブロック若干含む)
37. 1.0㎝大が主の礫層(礫間に10YR6/8 明黄褐 極細～細粒砂・基盤岩ブロック含む・やや締りあり)
38. 2.5Y6/8 明黄褐シルト～極細粒砂(基盤岩ブロック・地山粘土質シルトブロック含む)
39. 7.5YR5/8 明褐 地山粘土質ブロック・2.5Y6/6 明黄褐 極細～細粒砂ブロック・0.5㎝大の礫
40. 38と地山粘土質ブロック・10YR5/6 黄褐 極細粒砂
41. 10YR5/6 黄褐 極細粒砂(2.5Y6/8 明黄褐 細粒砂・0.5～1.0㎝大の礫若干含む・あまり締りない)
42. 地山粘土ブロック

図 181　1区中央平面・断面図

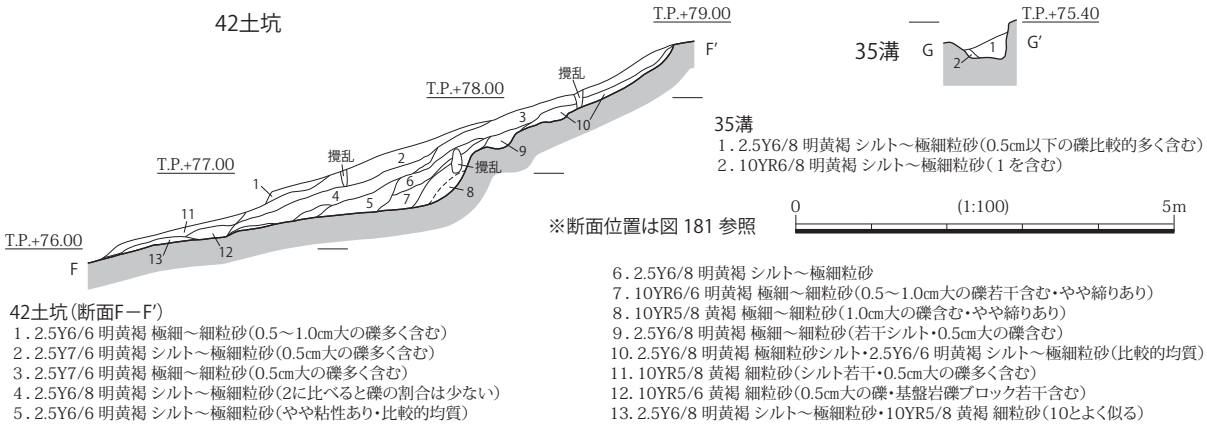


図 182　42 土坑、35 溝断面図

得られなかった。遺物は出土していない。

12 溝　調査区東部では、南北方向の幅 0.5 ～ 1.0 m、深さ 0.3 mの溝やほぼ東西方向に尾根筋に沿う溝が検出された。その中でも 12・44・45 溝は、幅 1.5 ～ 3.0 m、深さ 0.4 ～ 0.6 mと規模が大きい。12・45 溝はほぼ並行し、尾根を横断した後、西側丘陵先端方向にむかって掘削されている。いずれも西半部は浸食谷によって連続性を絶たれている。いずれの溝も、埋土は礫を含む黄褐色砂質土とし、水性堆積は認められない。

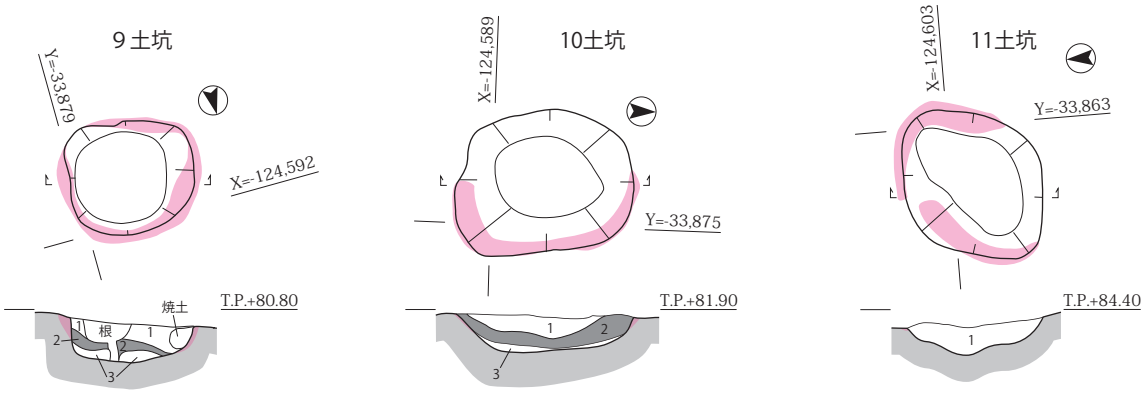
この３条の溝のうち、12 溝については北東端平坦部よりやや下った地点で丘陵を横断している。深さ 1.2 m前後　最大幅 3.5 ～ 4.0 mの規模で、底面の一部はさらに幅 0.9 m、深さ 0.4 m前後とより深く掘削されている。北東端は直立した壁をへて急に浅くなり丘陵平坦部に続き不明瞭となる。南西端は浸食によって削平されている。埋土は、0.5 ～ 1.5cm 大の礫を含む明黄褐色細粒砂～シルトで、黄褐色の地山粘土のブロック土を若干含む。流水堆積層は認められない。遺物は出土していない。

44 溝　44 溝は、12・45 溝と直交し、南側斜面を縦断して、調査区北東端の平坦部から南西方向に掘削された幅 2.5 m、深さ 0.5 m前後の溝である。底面は階段状に段差が設けられている。北東端は丘陵平坦部に続くが不鮮明となり、南西側は谷地形へ続くが浸食斜面に続くため、不明瞭になる。埋土は、0.5 ～ 3.0cm 大を主とする礫層で礫間は明黄褐色砂質土となる。12・45 溝と同様の埋土で遺物も出土していない。

45 溝　12 溝の南側に位置し、12 溝とほぼ並行して東から西方向に尾根を横断する溝である。東端は 44 溝に続くが新旧関係は確認されなかった。また西端は浸食谷によって失われている。幅 2.5 m、深さ 0.6 mの規模で、約 13 mを検出した。埋土は、1.0 ～ 2.0cm 大の礫を多く含む明黄褐色シルト～細粒砂層で、遺物は出土していない。

９土坑　調査区の北東隅に位置する。調査区内では成合遺跡で検出されたものと同様の焼土坑が合わせて 12 基検出されており、９土坑はそのうちの１基である。平面形は長辺 0.82 m、短辺 0.74 mの隅丸長方形を呈する。深さは 0.25 mで、埋土は下層がシルトを若干含む明黄褐色の極細粒～細粒砂、上層が礫や若干の炭を含む黄褐色のシルト～極細粒砂で、中層に 0.04 ～ 0.08 mの厚さで灰を含む炭が堆積する。四方の壁面がよく被熱し赤褐色に変色している。

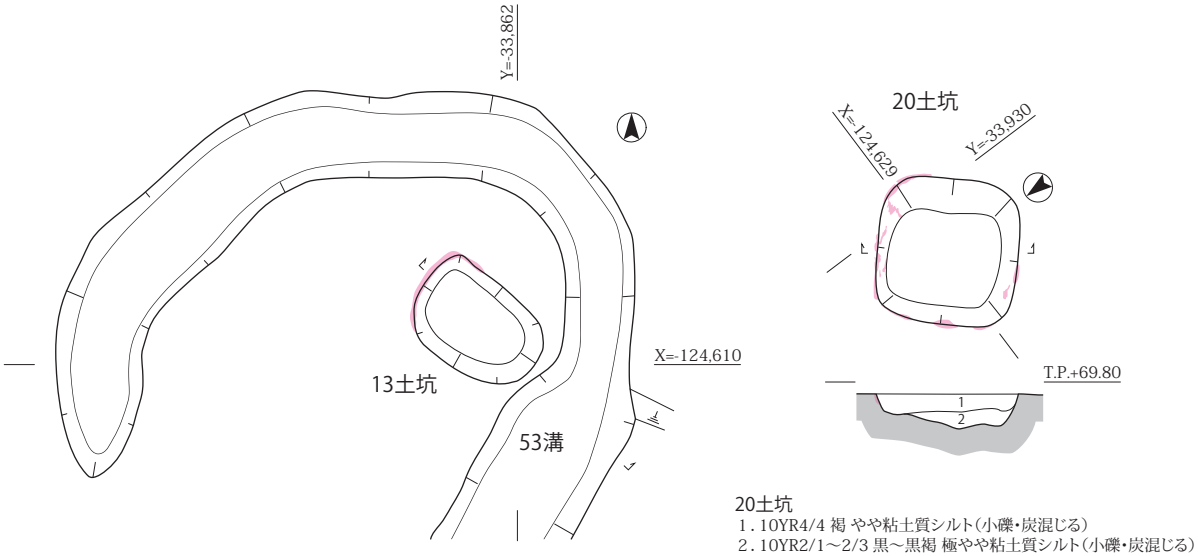
10 土坑　上記９土坑の北東側に位置する。平面形は一部の角が張り出した隅丸長方形を呈する。張り出し部を除けば長辺は約 1.1 m、短辺は 0.92 mである。深さは 0.25 mで、埋土は下層が明黄褐色の極細粒～細粒砂、上層が礫を含む黄褐色のシルト～極細粒砂で、中層に炭が約 0.08 mの厚さで堆積する。



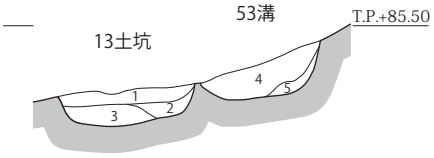
9土坑
1．2.5Y5/6 黄褐 シルト～極細粒砂
（0.5～1.0㎝大の礫・炭・焼土若干含む・締りなし）
2．炭・灰（炭化材なし）
3．2.5Y6/8 明黄褐 極細～細粒砂（若干シルト含む）

10土坑
1．2.5Y5/6 黄褐 シルト～極細粒砂（0.5～1.0㎝大の礫含む）
2．炭
3．2.5Y6/8 明黄褐 極細～細粒砂

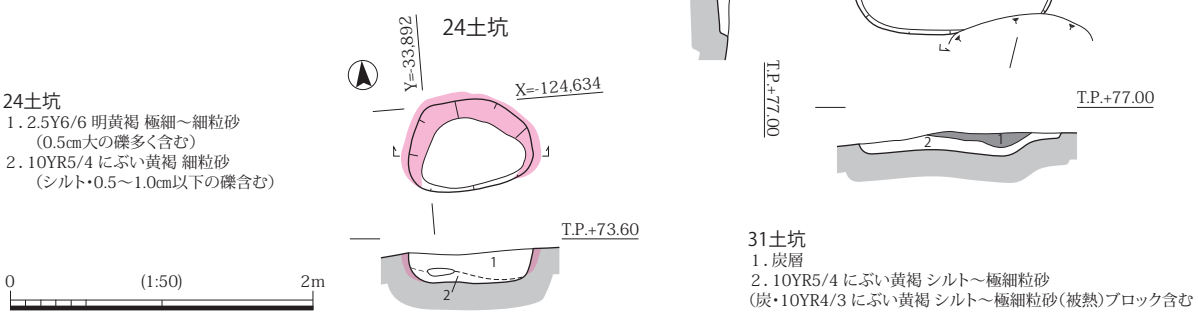
11土坑
1．2.5Y5/6 黄褐 極細～細粒砂（礫・炭含む）



20土坑
1．10YR4/4 褐 やや粘土質シルト（小礫・炭混じる）
2．10YR2/1～2/3 黒～黒褐 極やや粘土質シルト（小礫・炭混じる）



13土坑・53溝
1．2.5Y5/6 黄褐 シルト～極細粒砂（0.5㎝大の礫やや含む）
2．10YR5/6 黄褐 細粒砂（礫含む）
3．10YR4/2 灰黄褐 細粒砂（礫・炭含む　締りなし）
4．2.5Y6/8 明黄褐 極細～細粒砂（0.5～1.0㎝大の礫多く含む・締りなし）
5．10YR7/8 黄橙 極細粒砂（0.5㎝大の礫含む・やや締りあり）



24土坑
1．2.5Y6/6 明黄褐 極細～細粒砂
（0.5㎝大の礫多く含む）
2．10YR5/4 にぶい黄褐 細粒砂
（シルト・0.5～1.0㎝以下の礫含む）

31土坑
1．炭層
2．10YR5/4 にぶい黄褐 シルト～極細粒砂
（炭・10YR4/3 にぶい黄褐 シルト～極細粒砂（被熱）ブロック含む

図 183　1区検出焼土坑平面・断面図

東半部の壁面が被熱して赤褐色に変色する。

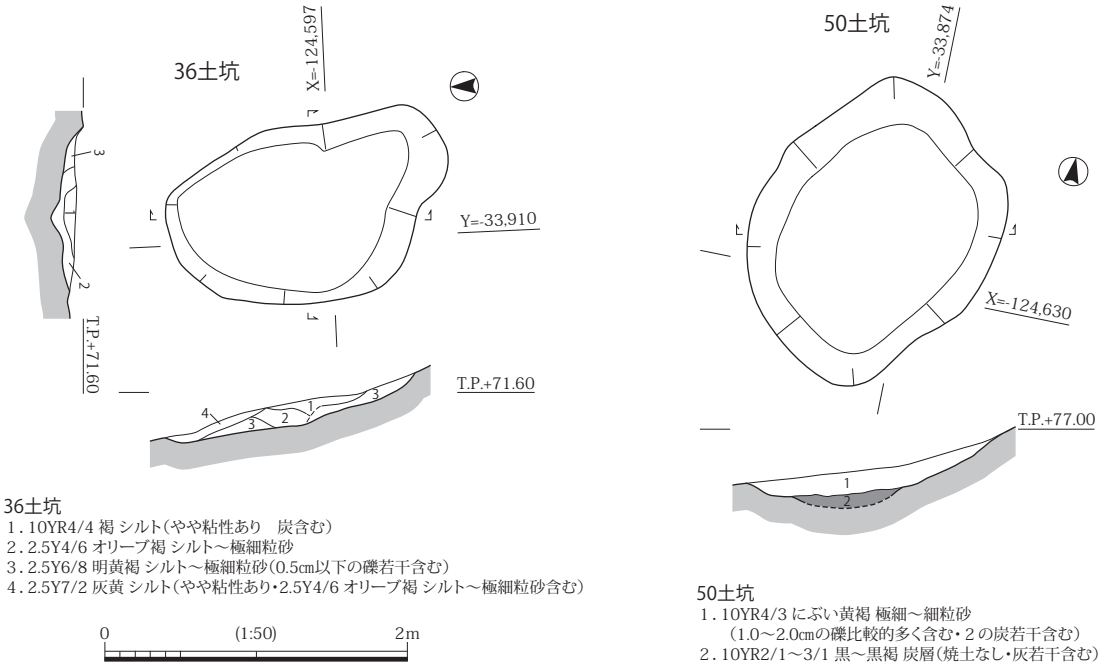
11 土坑　調査区東端の壁際に位置する。平面形は長さ 1.15 m、幅 0.92 mの隅丸の菱形を呈する。深さは約 0.2 mで、埋土は炭や礫を含む黄褐色の極細粒～細粒砂である。南側以外の壁面が被熱して赤変している。

13 土坑　調査区の東端、上記 11 土坑の南側に位置する。平面形は楕円形に近い隅丸長方形を呈する。長辺は 0.9 m、短辺は 0.63 mで、深さは 0.25 mを測る。埋土は下層が炭や礫を含む灰黄褐色細粒砂や黄褐色細粒砂で、上層が礫を含む黄褐色シルト～極細粒砂である。西壁上部が被熱して赤変する。さらにこの土坑の周囲には、幅約 0.5 ～ 0.8 mの溝（53 溝）が円を描くようにめぐっている。深さは 0.2 ～ 0.25 mで、埋土は締りのない明黄褐色極細粒～細粒砂を主とする。ただし、このふたつの遺構を積極的に結び付ける根拠は乏しく、土坑に伴う溝ではないと考えられる。

20 土坑　調査区西端で検出した 22 谷内に位置する。22 谷の埋土を除去した地山上面で検出された。平面形は整った隅丸方形で、一辺は 0.94 ～ 0.97 mを測る。深さは 0.20 ～ 0.23 mで、埋土は下層が小礫と炭が混じる黒～黒褐色のやや粘土質シルトで、上層が小礫と炭が混じる褐色のやや粘土質シルトである。壁面の所々が被熱して赤褐色に変色する。埋土からは弥生土器の細片が出土しており、889 広口壺の口縁部片などがある。ただし、遺構が 22 谷内に位置するため、22 谷が埋められた際に、周囲の弥生土器を包含する土で埋められたために混入したと考えられる。

24 土坑　調査区南端の壁際に位置する。平面形は楕円形に近い隅丸長方形で、長辺 1.32 m、短辺 0.6 mを測る。深さは 0.2 mで、埋土は下層がシルトや礫を含むにぶい黄褐色細粒砂、上層が礫を多く含む明黄褐色極細粒～細粒砂である。斜面下部側にあたる南壁以外の壁は、被熱し赤褐色に変色するが、底面については赤変していない。

31 土坑　調査区中央に位置する。平面形は隅丸方形で、長辺 1.5 m、短辺 1.34 mを測る。深さは約 0.15 mで、埋土は下層が炭や焼土を含むにぶい黄褐色のシルト～極細粒砂で、上層が炭である。東壁が被熱して赤変する。



36土坑
1．10YR4/4 褐 シルト(やや粘性あり　炭含む)
2．2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト～極細粒砂
3．2.5Y6/8 明黄褐 シルト～極細粒砂(0.5㎝以下の礫若干含む)
4．2.5Y7/2 灰黄 シルト(やや粘性あり・2.5Y4/6 オリーブ褐 シルト～極細粒砂含む)

50土坑
1．10YR4/3 にぶい黄褐 極細～細粒砂
　(1.0～2.0㎝の礫比較的多く含む・2 の炭若干含む)
2．10YR2/1～3/1 黒～黒褐 炭層(焼土なし・灰若干含む)

図 184　36・50 土坑平面・断面図

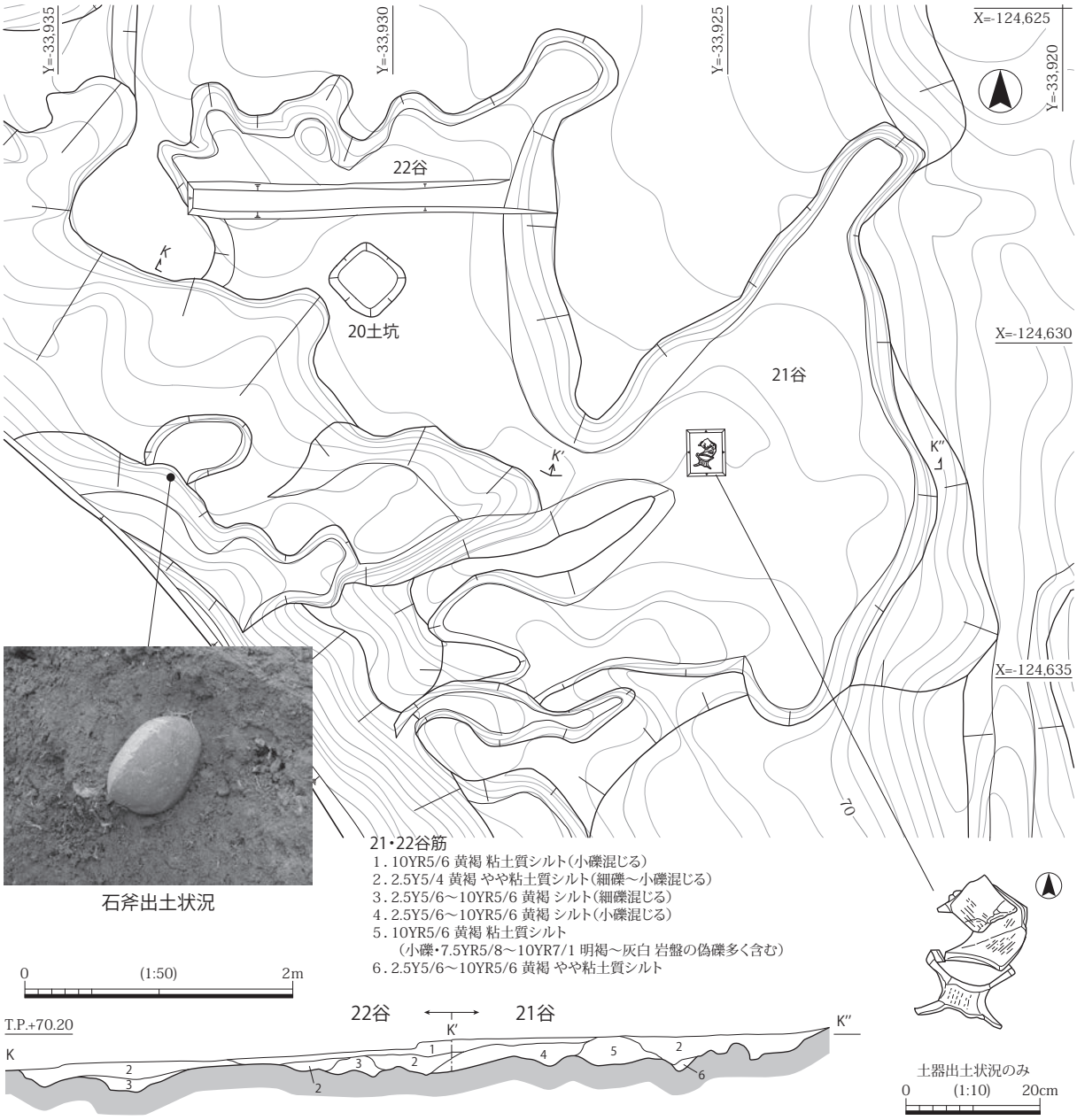


図 185　21・22 谷平面・断面図および遺物出土状況

36 土坑　調査区の北端中央に位置する。平面形は一部が張り出した楕円形を呈する。張り出し部を除けば長径は 1.65 m、短径は 1.18 mで、深さは約 0.16 mを測る。埋土はオリーブ褐色や明黄褐色のシルト～極細粒砂や灰黄色シルトで、最上層に炭を含む褐色シルトが堆積する。壁面および底面に被熱による赤変が認められないタイプの焼土坑である。

50 土坑　調査区南東隅に位置する。上記 36 土坑同様に、平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、長辺 1.85 m、短辺 1.55 mを測る。深さは 0.18 m以上で、下層に灰を若干含む炭が堆積し、上層は炭や礫を含むにぶい黄褐色の極細粒～細粒砂で、壁面に被熱痕跡が認められないタイプの焼土坑である。

なお、この他に調査区南東部の 51 土坑と、中央の 31 土坑の南西側に近接した 26・27 土坑（写真図版 85 －７・８）は、上記の遺構と同様の焼土坑である。現地調査の段階で十分な記録が残せなかったが、３基ともに被熱して壁面が赤褐色に変色したタイプの土坑であることが確認されている。

（金光・伊藤）

14 土坑　調査区の東端、11 土坑の北側に近接する。平面形はほぼ円形で、直径 1.15 ～ 1.2 m、深さ約 0.1 mを測るが、人為的に掘削された遺構とは考え難い。ただし、埋土中からは高杯もしくは鉢の脚台部と考えられる弥生土器（890）が 1 点出土しており、弥生時代に帰属する自然の落ち込みの可能性がある。土器は円盤充填がみられ、脚部外面タテナデ、内面ヨコナデを施す。21・22 谷から出土した土器と同様に、Ⅲ様式後半からⅣ様式の範疇におさまると考えられる。

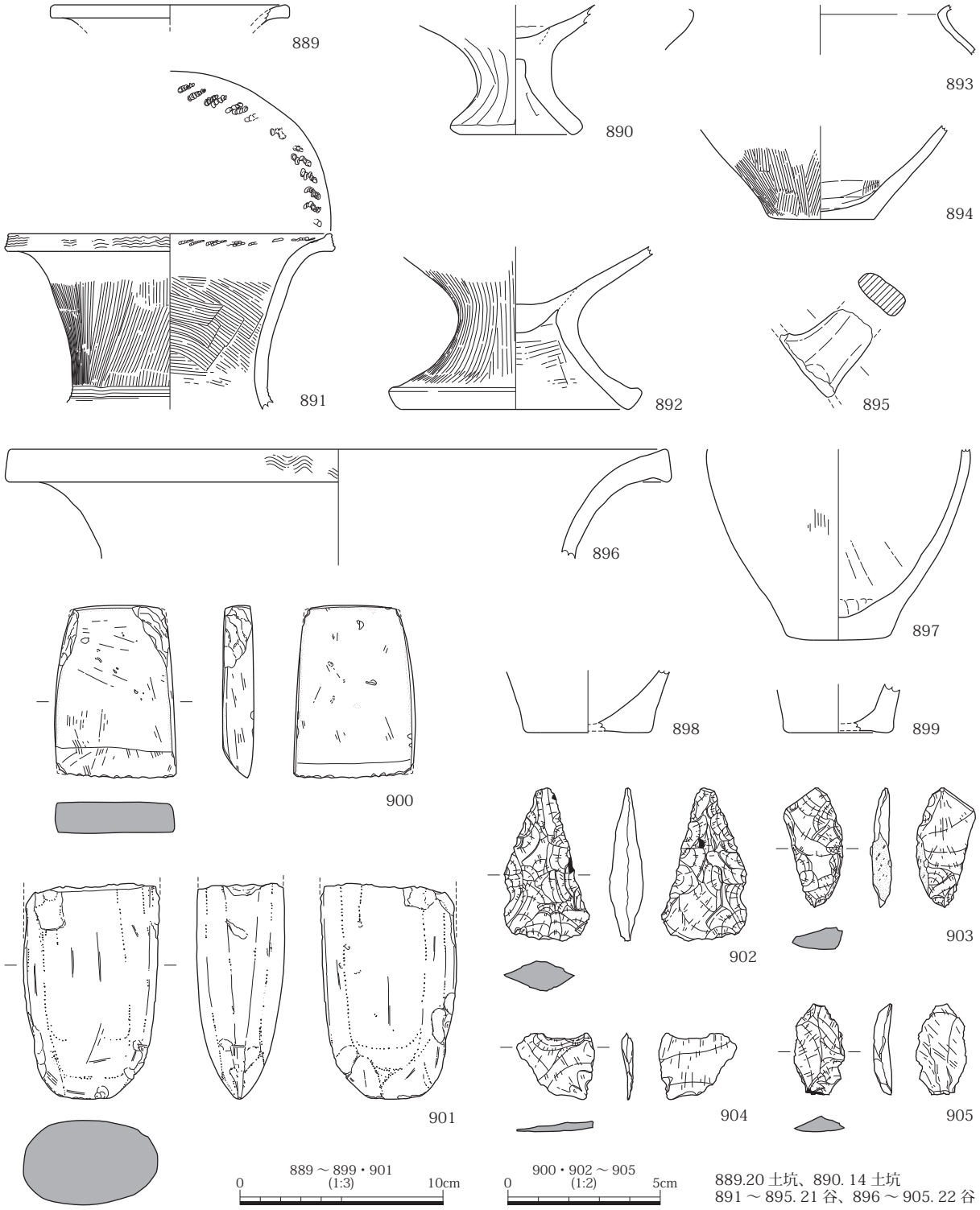


図 186　1 区遺構出土遺物

21・22 谷　人為的に築かれた流路ではなく、自然の浸食作用により形成された北東から南西方向にむかう流路である。埋土から弥生土器と石器がまとまって出土しており、弥生時代に帰属する可能性が高いものである。この遺構については、埋土に自然堆積を示す地層はみられず、細礫や小礫が混じる黄褐色のやや粘土質シルトやシルト、あるいは岩盤の偽礫を多く含む黄褐色の粘土質シルトなど、人為的に埋められた土が堆積している。調査区の西端には後世に造成された平坦部がみられるが、この流路はその平坦部の造成によって埋められたと考えられる。

21 谷から出土した遺物のうち、891 と 892 は上層からまとまって出土している（図 185）。891 は広口壺の口縁～頸部で、端部はあまり拡張しない形状である。口縁端部に波状文、内縁部に刺突文、頸部に直線文が施され、外面タテハケがみられる。892 は高杯もしくは鉢の脚台部である。円盤充填で、外面にタテハケがみられる。893 は壺の頸部、894 は壺もしくは甕の底部で、外面にタテハケがみられる。895 は水差しの把手である。これらの土器のうち、特に 891 の広口壺は凹線文が施されないことから、成合遺跡出土の弥生土器より一段階古い、Ⅲ様式後半からⅣ様式前半を中心とした時期に位置づけられる。

22 谷からは、主に弥生土器と石器が出土しているが、弥生土器は細片で摩滅したものが多い。896 は広口壺の口縁で、口縁端部に僅かながら波状文が確認できる。897 は甕の底部～体部で、外面タテハケ、内面ナデがみられる。898・899 は壺もしくは甕の底部である。土器の多くは小片で摩滅しているため、詳細な時期を限定することは難しいが、896 広口壺の外面端部の波状文は 21 谷出土の 891 と同様のものであり、ほぼ同時期のⅢ様式後半からⅣ様式前半に位置づけられると考えられる。石器は 6 点が出土しており、そのうち 900 が完形の扁平片刃石斧で、刃部に使用痕と考えられる擦痕がみられる。901 は太型蛤刃石斧で、基部が欠損している。902 ～ 905 はいずれもサヌカイトの剥片で、902 は形態から石鏃の未製品の可能性が高いものである。なお、上層からは須恵器甕の小片が 1 点出土しているが、混入によるものと考えられる。（金光・伊藤・笹栗）

【註】

1）大阪府教育委員会 2013『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』17

第２節　２区の調査成果〔図 187 ～ 190、写真図版 87 ～ 89〕

谷筋を１つ挟んで金龍寺旧境内跡１区のすぐ南側の尾根上に位置する。この尾根筋は東から西へと舌状に張り出し、尾根の頂部には、やや幅の広い緩斜面がみられる。先立って実施された試掘調査では、尾根上の緩斜面部から古代と考えられる遺構や遺物が確認されており、この成果に基づき、急傾斜な斜面部を除く尾根筋先端の緩斜面部に調査区を設定した。面積は約 1,600 ㎡である。

調査区の標高は東の山側で約 82 m、西端部で約 68 mを測る。層序は表土の下に小礫混じりの締りのない黄褐色シルト（１層）があり、これを除去した面が遺構面となる。ただし斜面部など場所によっては表土直下が遺構面（地山）となる箇所もある。１層は山側の調査区東端で厚さ約 0.6 mを測り、西側の尾根先端にむかって徐々に薄くなっていく。１層の下には小礫を多く含む明黄褐色砂質シルト（２層）がみられるが、これは遺物を全く含まない地山層で、周囲の斜面部を除く緩斜面部全体に広がっており、背後の山中にむかってやや土質を変えながら続いている。それより下層は人力では掘削が困難なほどの硬い丘陵の岩盤層となる。この岩盤の上面には、浸食による凹凸が多数認められた（図 189）。

（伊藤）

包含層の遺物　１層中からは、土師器と須恵器が数点のみ出土しているが、いずれも細片で形態が判明するものはない。その他には石器が２点出土している。906 は形態から太型蛤刃石斧の基部と考えられるが、やや大きくまた側面がよく磨滅しているため、摺石の可能性もある。907 はサヌカイトの剥片である。２区からは弥生土器が出土していないため、これらの石器は成合遺跡の集落周辺の開墾によるものと推測される。

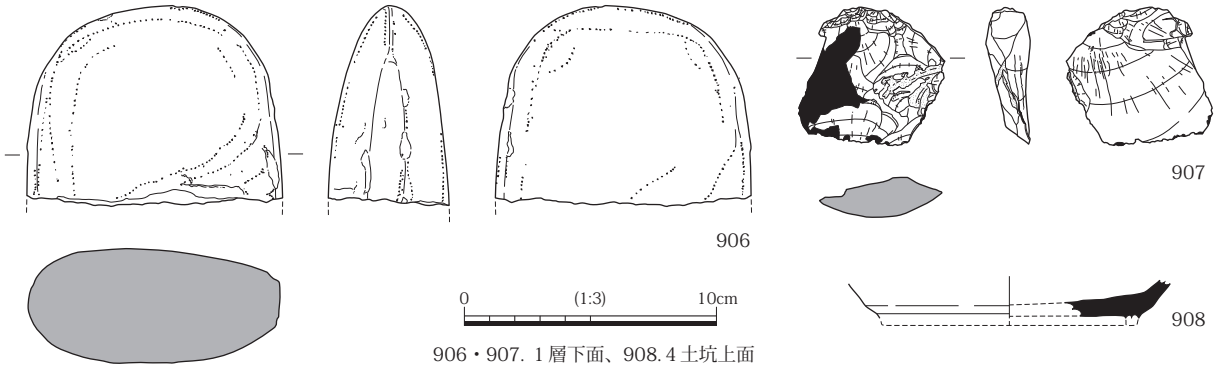
（笹栗）

古代の遺構と遺物

１層下面では、 土坑７基とピット１基を検出した。土坑７基のうち６基は焼土坑で、埋土には多くの炭が含まれていた。遺構内の埋土からは遺物が出土していないため、これらの遺構の時期を判断するのは困難であるが、隣接する成合遺跡の成果から古代（８・９世紀代）の遺構とみなしてよいだろう。

１土坑　７基の中では最も東側の山寄りに位置する。平面形は長辺 1.1 m、短辺 0.96 mのやや歪んだ隅丸長方形を呈し、深さは 0.18 mを測る。埋土は上層が炭や土師質に焼けた小土塊混じりの黄褐～オリーブ褐色やや粘土質シルトで、下層が炭や土師質に焼けた小土塊を多く含む黒褐色やや粘土質シルトである。山側の壁面および底面の一部が被熱により赤褐色に変色している。

２土坑　調査区東寄りの、１土坑の北西側に位置する。平面形は長辺 1.0 m、短辺 0.9 mの隅丸方形で、



906・907. １層下面、908. ４土坑上面

図 187　２区出土遺物

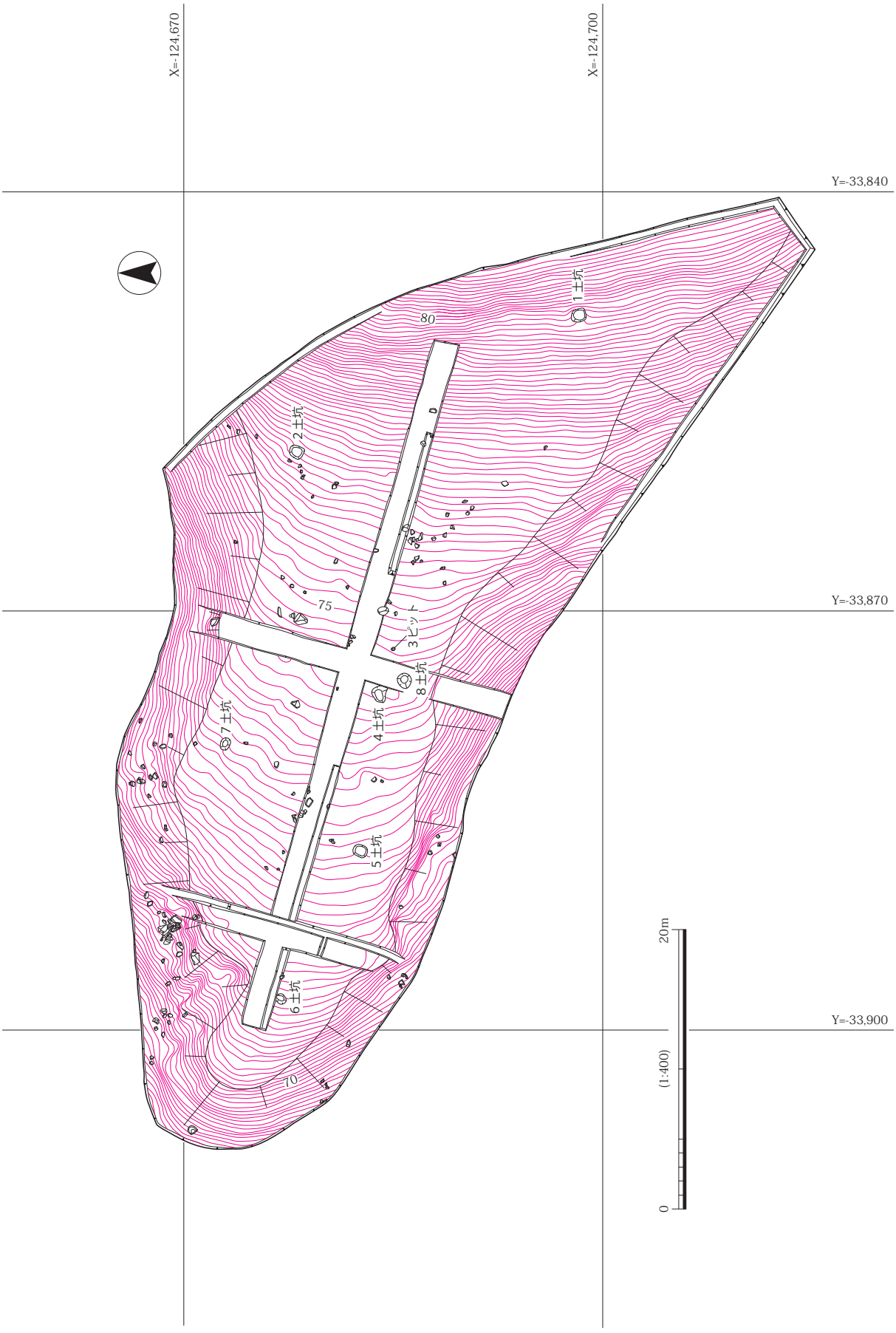
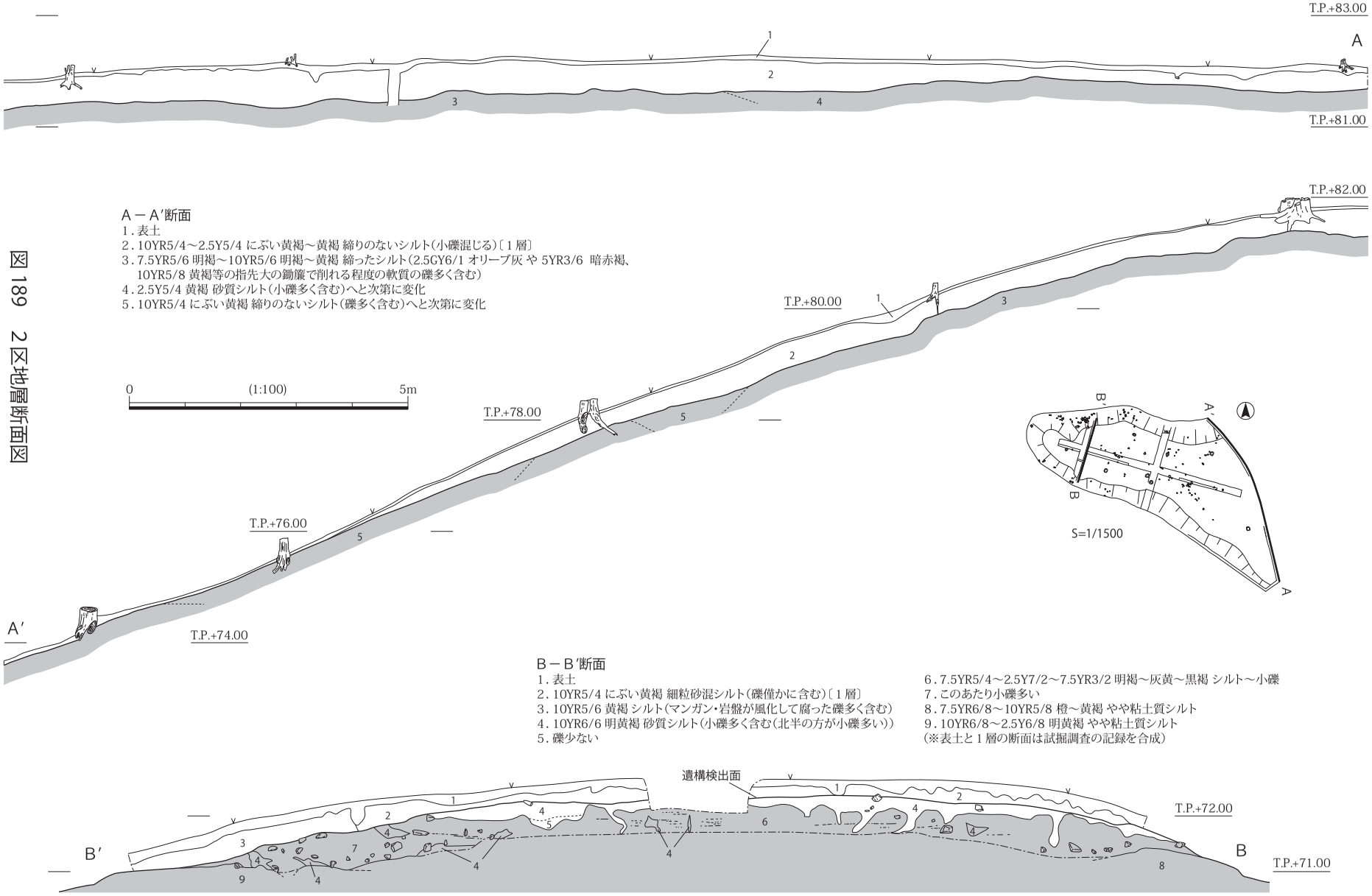


図 188　2 区検出遺構全体平面図

図189　2区地層断面図



A－A′断面
1．表土
2．10YR5/4～2.5Y5/4 にぶい黄褐～黄褐 締りのないシルト（小礫混じる）〔1層〕
3．7.5YR5/6 明褐～10YR5/6 明褐～黄褐 締ったシルト（2.5GY6/1 オリーブ灰 や 5YR3/6 暗赤褐、10YR5/8 黄褐等の指先大の鋤簾で削れる程度の軟質の礫多く含む）
4．2.5Y5/4 黄褐 砂質シルト（小礫多く含む）へと次第に変化
5．10YR5/4 にぶい黄褐 締りのないシルト（礫多く含む）へと次第に変化

B－B′断面
1．表土
2．10YR5/4 にぶい黄褐 細粒砂混シルト（礫僅かに含む）〔1層〕
3．10YR5/6 黄褐 シルト（マンガン・岩盤が風化して腐った礫多く含む）
4．10YR6/6 明黄褐 砂質シルト（小礫多く含む（北半の方が小礫多い））
5．礫少ない
6．7.5YR5/4～2.5Y7/2～7.5YR3/2 明褐～灰黄～黒褐 シルト～小礫
7．このあたり小礫多い
8．7.5YR6/8～10YR5/8 橙～黄褐 やや粘土質シルト
9．10YR6/8～2.5Y6/8 明黄褐 やや粘土質シルト
（※表土と1層の断面は試掘調査の記録を合成）

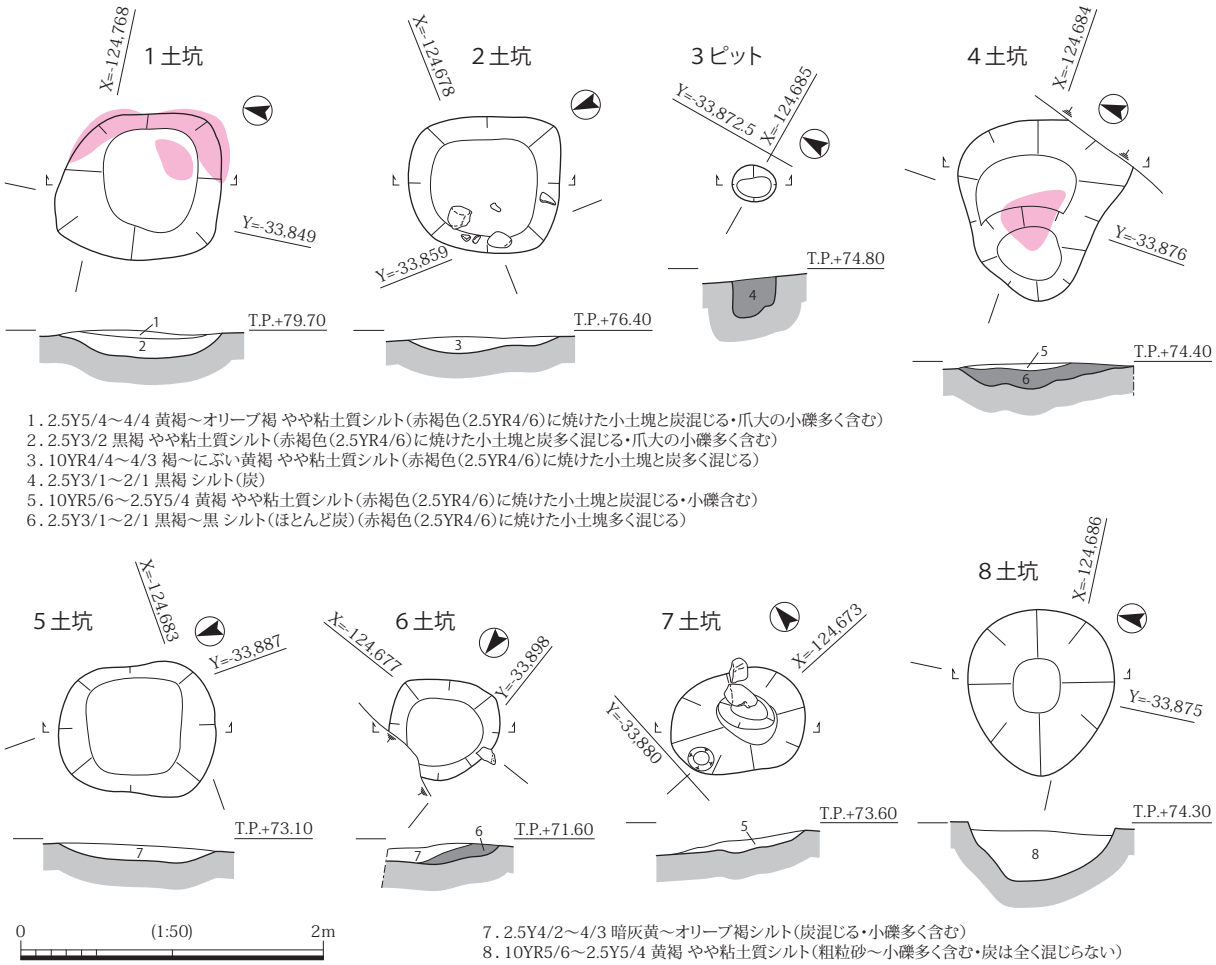


図 190　２区検出遺構平面・断面図

深さは 0.1 mを測る。埋土は炭や土師質に焼けた小土塊を多く含むにぶい黄褐～褐色やや粘土質シルトである。壁面等に被熱による赤変は認められない。

３ピット　調査区のほぼ中央に位置する。平面形は直径0.25～0.3 mの楕円形で、深さは0.27 mを測る。埋土は炭を多く含む黒褐～黒色シルトである。

４土坑　３ピットのすぐ西側に位置する。長径 1.2 m、短径 1.16 m以上の２つの遺構が重複したような不整形な平面形を呈する。また、東側の深さが0.15 m程度であるのに対して、西側の深さが0.25 mで、一段深くなることから、２つの遺構が重複していた可能性が高い。平面検出の段階では、断面観察用の畦を設定した東側で炭が顕著で、この部分に南北に長い楕円形の土坑が１つあるように検出されていたため、西側が古く、東側の楕円形の土坑が新しいと推測される。ただし、設定した断面観察用の畦の方向が適切ではなく、切り合い関係がはっきりと検証できたわけではない。埋土は基本的には上層が炭や細かい焼土塊が混じる黄褐色やや粘土質シルトで、下層が炭や土師質に焼けた小土塊を多く含む黒褐～黒色シルトである。底面中央付近の一部が被熱し赤褐色に変色している。

土坑の上面からは須恵器杯Ｂの破片（908）が１点出土している。高台は剥離しているが外端からやや内側に取り付けられており、８世紀末以降に位置づけられる。そのため、金龍寺旧境内跡で検出されている焼土坑についても、成合遺跡の焼土坑と同様に８・９世紀代の遺構であったことがわかる。

５土坑　調査区の西半、４土坑の西側に位置する。平面形は丸みをもった隅丸長方形を呈する。長辺は 1.04 m、短辺 0.8～0.9 mで、深さは 0.1 mを測る。埋土は小礫を多く含む炭混じりの暗灰黄～

オリーブ褐色シルトである。壁面等に被熱による赤変は認められない。

６土坑　５土坑のさらに西側、調査区の最も西寄りに位置する。平面形は長辺 0.74 m、短辺 0.66 m の隅丸方形で、一部が試掘調査トレンチにかかる。深さは約 0.1 mで、埋土は上層が炭混じりの暗灰黄～オリーブ褐色シルト、下層が炭や細かい焼土塊が多く混じる黒褐～黒色シルトである。壁面等に被熱による赤変は認められない。

７土坑　調査区北半、４土坑の北側に位置する。平面形は長径 0.90 m、短径 0.66 mの楕円形を呈する。深さは 0.1 m弱と非常に浅く、埋土は炭や細かい焼土塊混じりの黄褐色やや粘土質シルトである。壁面等に被熱による赤変は認められない。

８土坑　４土坑のすぐ南側に近接しており、試掘のトレンチ調査の際に既に検出されていた土坑である。平面形が径 0.97 ～ 1.10 mのややゆがんだ円形を呈し、深さは 0.4 mを測る。埋土は２層によく似た粗粒砂～小礫を多く含む黄褐色やや粘土質シルトである。調査区内で検出されている他の土坑は、いずれも埋土に炭が混入するものの、この土坑には全くそのような特徴はみられない。また、検出面についても、他の土坑が１層の下面であるのに対し、この土坑については無遺物層の２層下面（岩盤上面）の検出であるため、遺構と考えられるような形状を呈しているものの、２層下面（岩盤上面）にも同様の不整形の窪みが多数みられることから、人為的な遺構ではなく、自然の窪みであった可能性が高い。

（伊藤・笹栗）

金龍寺１区から西を望む（住宅地の右端付近に成合琴堂窯跡がある）

第６章　自然科学分析

第１節　はじめに

今回の発掘調査に伴い、自然科学分析として出土炭化材樹種同定分析、蛍光Ｘ線分析法による須恵器の胎土分析、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定をそれぞれ実施した。各分析試料の採取地点については図 191 の通りである。このうち炭化材樹種同定分析（第２節）をパリノ・サーヴェイ株式会社に、須恵器の胎土分析（第３節）と放射性炭素年代測定（第４節）を株式会社パレオ・ラボにそれぞれ委託した。以下の報告では、各節の１項目の分析の目的と試料の概要については笹栗が記し、分析内容および結果を記した各節の２項目以下については当センターが提出を受けた報告書に、部分的な修正を加えて掲載している。

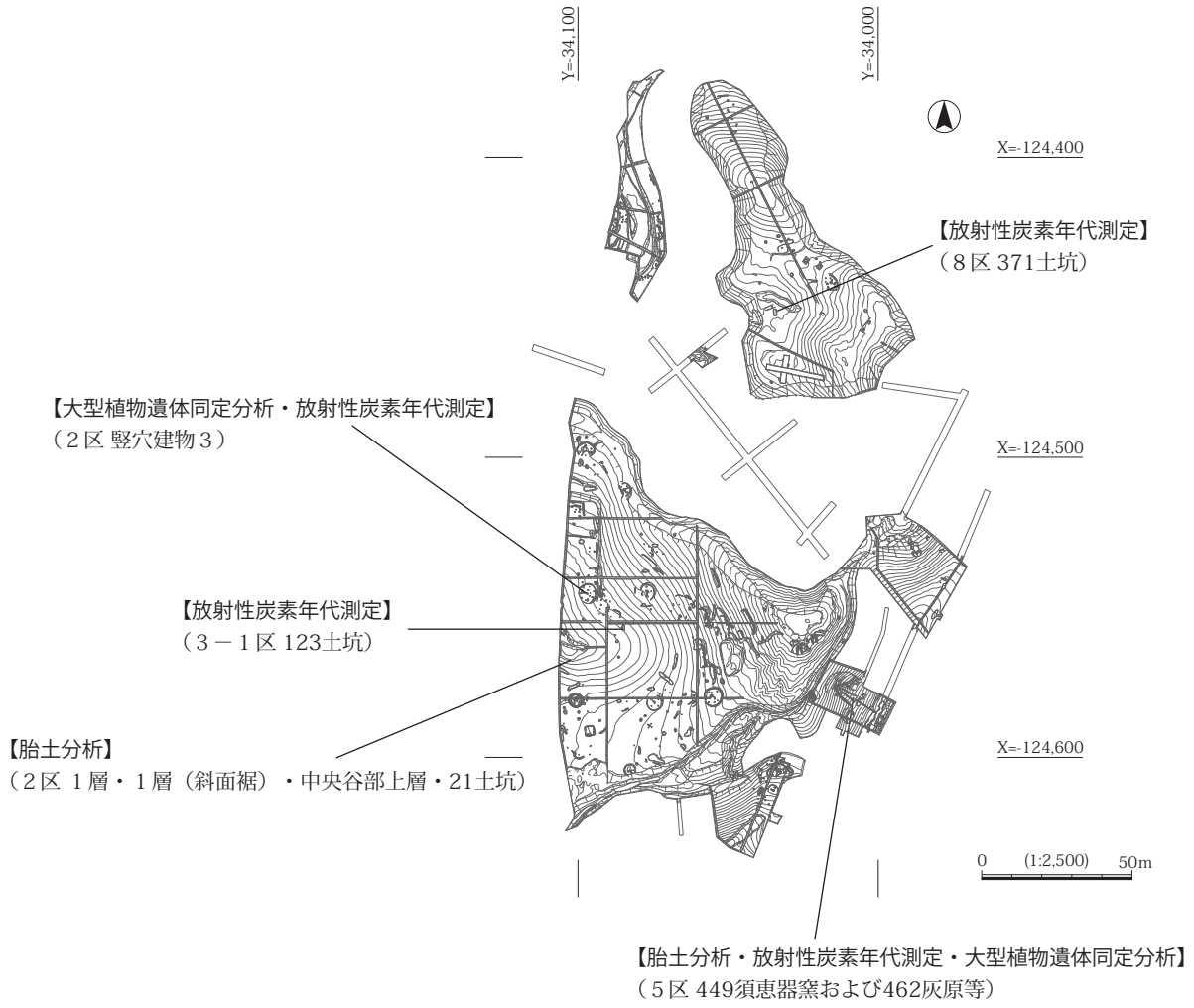


図 191　試料採取地点

第２節　出土炭化材樹種同定分析（大型植物遺体同定分析）

１．分析の目的と試料の概要

５区で検出された須恵器窯（成合西王寺山窯跡）と周辺付属遺構、２区で検出された弥生時代中期後半の竪穴建物３で、それぞれ出土した炭化材の樹種同定分析をおこなった。このうち須恵器窯および周辺付属遺構出土の炭化材については、燃料材および構築材の利用状況や、周辺の植生環境の把握を目的として、分析をおこなった。特に二次林化の指標とされるアカマツの利用の有無や頻度を把握することは、須恵器窯周辺の森林の開発状況を推測するための基礎的なデータとなる。[1)] また同じ成合地区内には、ほぼ同時期の成合琴堂窯[2)]が存在することから、周辺で未発見の窯跡が他にも存在する可能性があり、それを推測する手がかりとして、周辺の植生環境から開発の状況を把握する必要性もあると思われる。

一方で、弥生時代の竪穴建物３については、構築材と考えられる炭化材が良好に遺存した焼失建物であることから、炭化材の樹種構成や形状の分析成果から、竪穴建物の建築材の選択性や上部構造を推測するための有益なデータとなると考えられる。また、遺跡は平野部からやや奥まった丘陵上に立地しており、周辺には中期後半以前の遺跡や遺物散布地は現在のところ認められない。そのため、この竪穴建物３の建築材から当時の植生環境を把握することで、山間部の集落が進出する以前の開発状況を推測する手がかりとなる。特に、檜尾川の扇状地付近では、弥生時代中期後半から後期初頭にかけて平野部の一大集落である安満遺跡が衰退し、丘陵上の古曽部・芝谷遺跡が出現するなど、居住域が移動していることが指摘されている。[3)] 成合遺跡は両遺跡がそれぞれ衰退・出現する時期に、山間部の丘陵上に短期間に成立した集落遺跡であるため、周辺部の集落動態と成合遺跡の出現が密接に関わっていることが推測できる。遺跡周辺の山林の開発状況を把握することは、遺跡の出現の背景を検討する上で重要な情報となる。（笹栗）

２．試料

分析試料は、試料１と試料２の２点である（図 191）。試料１は５区の須恵器窯および周辺の付属遺構から出土した炭化材である。試料２は、３区の竪穴建物３の下層埋土から出土した炭化材で、試料の採取位置については図 192 において示している。試料の詳細は結果と併せて表４に示す。

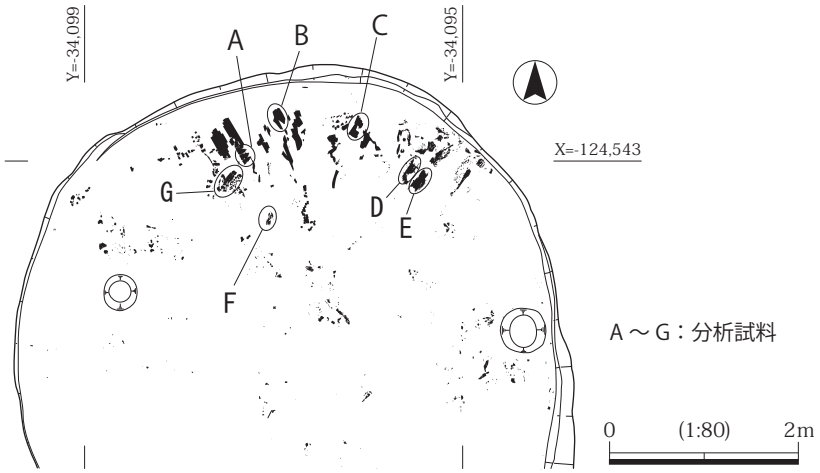


図 192　竪穴建物３分析試料採取位置

表４　大型植物遺体同定結果

試料番号		地区	遺構	位置・層位	状態	種類
1	A	5区	須恵器窯	窯体内床面直上	炭化材	マツ属複維管束亜属
	B				炭化材	カエデ属
	C				炭化材	マツ属複維管束亜属
	D		457土坑	窯内開口部付近床面直下	炭化材	マツ属複維管束亜属
	E				炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ
	F		466ピット	―	炭片混じり土壌	微細片のため種類不明
	G		須恵器窯	東側方盛土内	炭化材	マツ属複維管束亜属
	H		462灰原	南西上層	炭化材	マツ属複維管束亜属
	I			北東上層	炭化材	マツ属複維管束亜属
	J			南西上層	炭化材	マツ属複維管束亜属
	K			北東下層	炭化材	マツ属複維管束亜属
	L			南東下層	炭化材	マツ属複維管束亜属
	M			南東斜面裾下層	炭化材	マツ属複維管束亜属
	N		454土坑	―	炭化材	マツ属複維管束亜属
2	A	2区	竪穴建物3	図192に対応	炭化材	コナラ属アカガシ亜属
	B				炭化材	スダジイ
	C				炭化材	スダジイ
	D				炭化材	スダジイ
	E				炭化材	コナラ属アカガシ亜属
	F				炭化材	コナラ属アカガシ亜属
	G				炭化材	サカキ

３．分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）[4]を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995 ～ 1999）[5]を参考にする。

４．結果

大型植物遺体（炭化材）の同定結果を表４に示す。炭化材は、針葉樹１分類群（マツ属複維管束亜属）、広葉樹・分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・スダジイ・サカキ・カエデ属）に同定された。なお、試料番号１－Ｆは、土壌中に細かな炭化材が認められるが、同定可能な炭化材が認められず、種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、１～ 15 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Quercus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～ 20 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スダジイ（Castanopsis cuspidata var. sieboldii（Makino）Nakai） ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

・サカキ（Cleyera japonica Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.） ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

・カエデ属（Acer） カエデ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

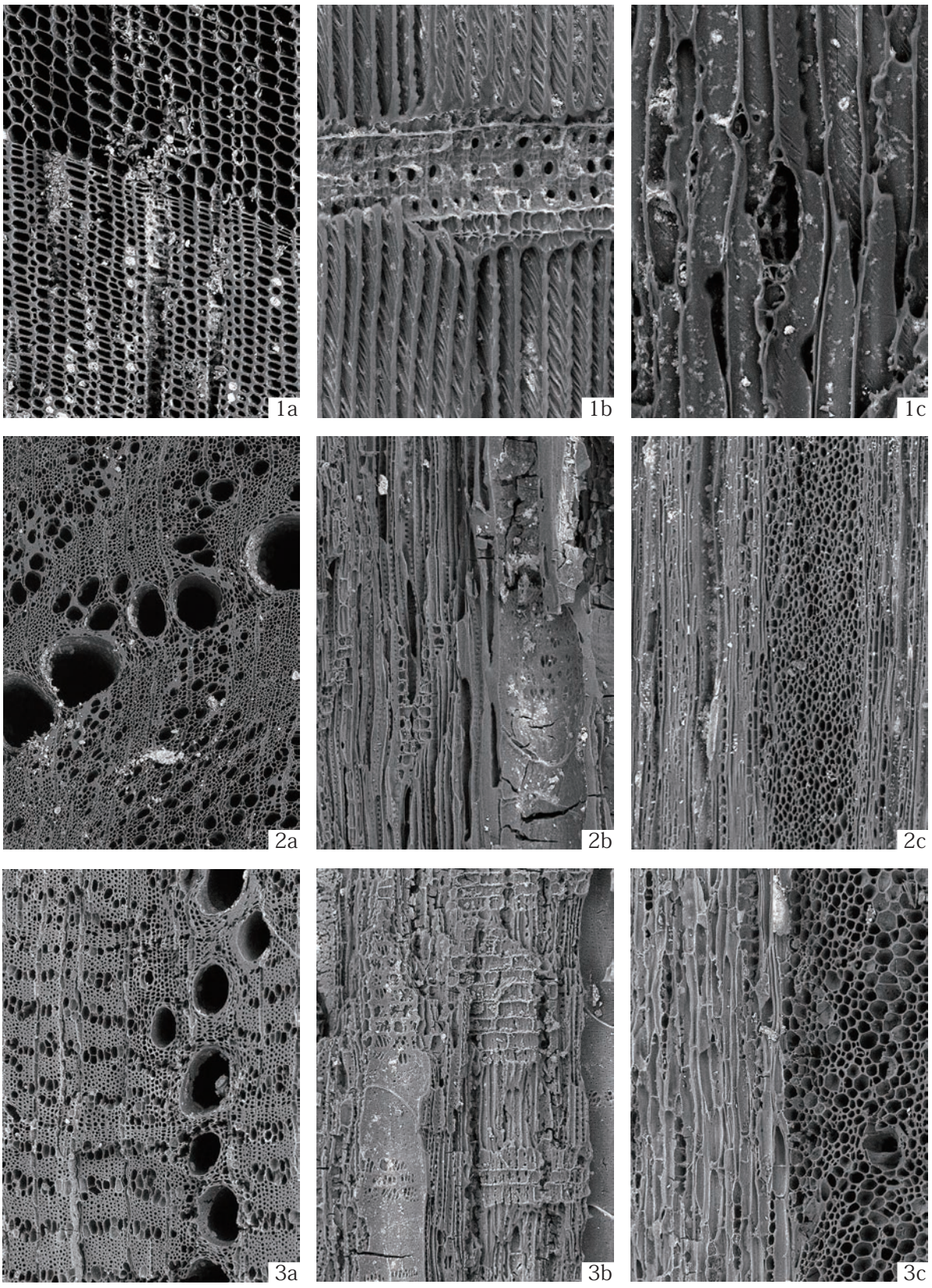
５．考察

５区で検出された8世紀末から9世紀初頭の須恵器窯および周辺付属遺構から出土した炭化材は、針葉樹のマツ属複維管束亜属、落葉広葉樹のコナラ節、カエデ属に同定された。遺構別に種類構成をみると、須恵器窯の窯体内や東側方盛土内の試料にマツ属複維管束亜属を中心にカエデ属が混じる組成、462灰原の試料が全てマツ属複維管束亜属、457土坑の試料がマツ属複維管束亜属とコナラ節が確認されている。

各樹種の生態性および材質をみると、マツ属複維管束亜属は、いわゆるニヨウマツ類で、現在はアカマツとクロマツとその交雑種であるアイグロマツが認められる。アカマツは湿地から乾燥地、痩せ地にも生育可能な適応能力の高く、二次林の代表的な樹種でもある。クロマツは潮風に強く、海岸沿いを中心に広く自生ないし植栽されている。これらの木材は、いずれも軽軟で松脂を多く含み、燃焼性が高い材質を有している。コナラ節は、萌芽再生能力が高く、薪炭林の主要樹種であるコナラ、冷温帯の代表的な落葉高木のミズナラ、風に対する抵抗性が強く、沿岸から山地までの広範囲に生育するカシワ、山地に生育するナラガシワが含まれる。これらの木材は重硬で強度が高く、薪炭材としては火付きが悪いが火持ちは良い材質を有する。カエデ属には多く種が含まれるが、谷筋などに生育する種類が多く、木材の材質は、概して重硬で強度が高く、薪炭材としては火付きが悪いが火持ちは良い材質を有している。

本窯跡は地上式の窖窯で天井材などが確認されていることから、今回出土した炭化材全てが燃料材として利用されていたものではなく、建築材として利用されていたものが混じっている可能性がある。したがって、須恵器窯の燃料材には、燃焼性が高く、高温が得られるマツ属複維管束亜属を主体とし、火持ちの良い広葉樹も混ぜて利用されていた可能性と、窯の建築部材としてカエデ属・コナラ節が利用されており、燃料材はマツ属複維管束亜属を利用していた可能性が推定される。

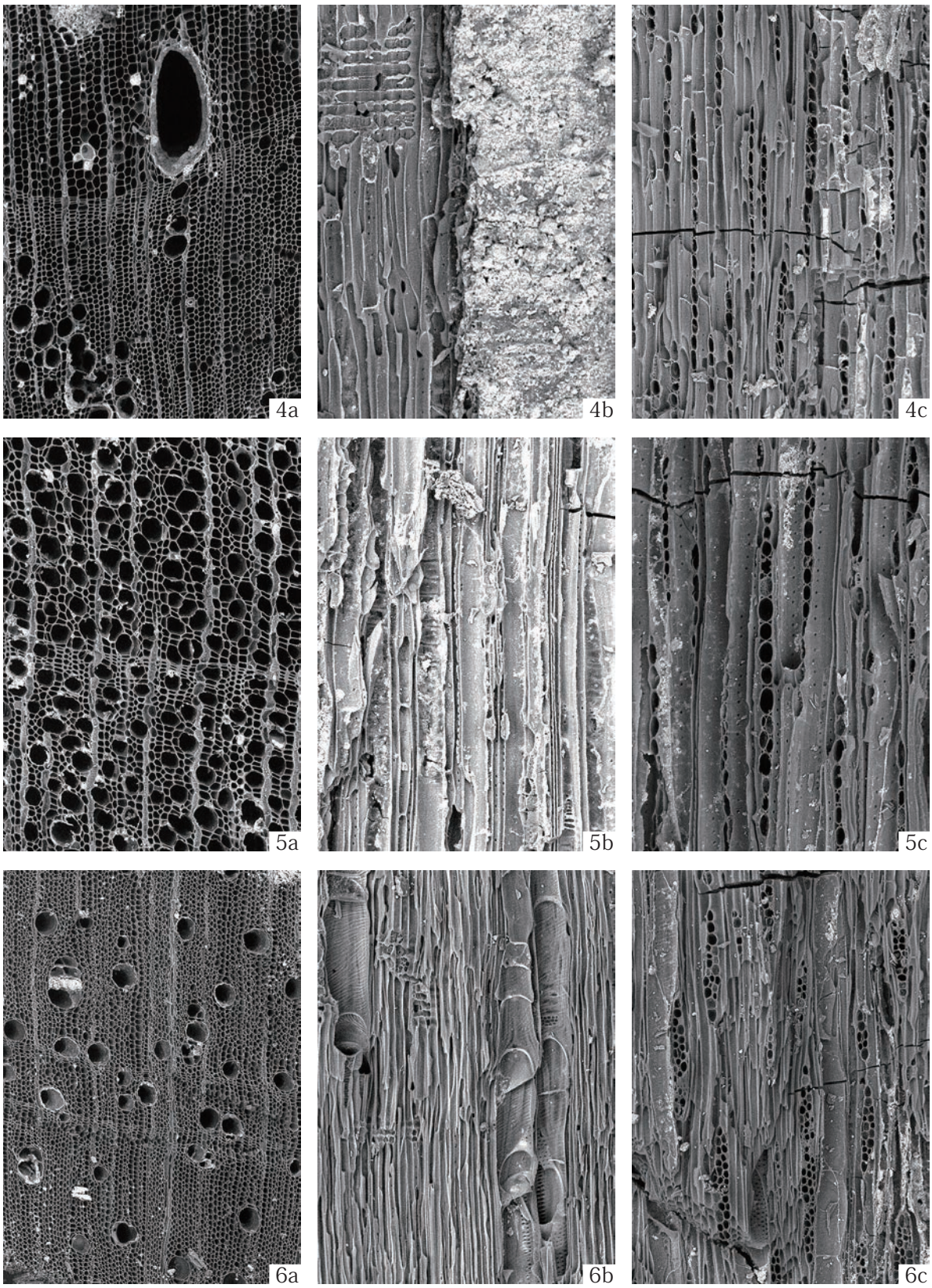
本地域では、9世紀代の須恵器窯の燃料材の樹種に関する調査事例は存在しないが、伊東・山田（2012）[6]のデータベースをみると、時期や地域が異なるが、和泉陶邑では、古墳時代中期から後期や古墳時代末期から平安時代初期の須恵器窯出土炭化材にアカマツや常緑広葉樹のアカガシ亜属が確認されている。



1.マツ属複維管束亜属(試料番号1-N;454土坑)
2.コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号1-E;457土坑)
3.コナラ属アカガシ亜属(試料番号2-A;竪穴建物3)
a:木口,b:柾目,c:板目

100μm:2-3a
100μm:1a,2-3b,c
100μm:1b,c

写真6　炭化材（1）



4.スダジイ（試料番号2-B;竪穴建物3）
5.サカキ（試料番号2-G;竪穴建物3）
6.カエデ属（試料番号1-B;449須恵器窯）
a:木口,b:柾目,c:板目

100 μ m:a
100 μ m:b,c

写真７　炭化材（２）

一方、京都府の丹波周山窯址では、古墳時代末から奈良時代とされる須恵器窯出土の炭化材に落葉広葉樹のコナラ亜属を中心にクリ、ケヤキ、種類不明の針葉樹などが混じる組成が報告されている。このように窯後から出土する炭化材の樹種が時代・地点によって異なっているが、その原因として窯周辺の植生との関連性が考えられる。本遺跡周辺では新池遺跡において花粉分析がおこなわれており、７～８世紀頃に植生破壊が進行し、アカマツやコナラ亜属の多い二次林へ移行していったことが推定されている。[7)] 今回の樹種同定結果から推定される植生も同様な植生の存在が推定される。

２区の弥生時代の竪穴建物３は、床面形が長径 6.8 m、短径 5.9 mのやや歪んだ円形を呈し、主柱は７本、中央には排水溝を持つ炉があり、遺物および焼土や炭化材の出土状況から、放棄後に焼失した建物と考えられている。また、住居の北側や南東の壁際から出土する炭化材は、住居中央から外側に向かって放射状に等間隔で並んでおり、垂木に由来すると考えられている。これらの炭化材の樹種は全て常緑広葉樹で、アカガシ亜属、スダジイ、サカキの３種類が同定された。このうちアカガシ亜属・スダジイは暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成種であるが、スダジイやアカガシ亜属のアラカシなどは萌芽更新能力が高く、二次林を形成する場合もある。いずれの木材も比較的重硬で強度が高い材質を有している。また、上記した新池遺跡の花粉分析では、４世紀頃にアカガシ亜属とシイノキ属・マテバシイ属の多い照葉樹林からアカガシ亜属とコナラ亜属の多い二次林へ植生が変化していることが推定されている。これらのことから、弥生時代の遺跡周辺にはスダジイやカシ類などの常緑広葉樹林がみられ、その中から強度の高い木材を選択して建築部材に利用していたことが推定される。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

【註】

1）西田正親 1973「和泉陶邑と木炭分析」『陶邑Ⅰ』大阪府文化財調査報告書第 28 集 大阪府教育委員会、西田正親 1978「須恵器生産の燃料について」『陶邑Ⅰ』大阪府文化財調査報告書第 30 集 大阪府教育委員会、山口慶一・千野裕道 1990「マツ林の形成および窯業へのマツ材の導入について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅷ 東京都埋蔵文化財センター

2）中村剛彰 1995「奈良時代末期における一地方窯の様相～成合琴堂窯跡の調査報告にかえて～」『高槻市文化財年報 平成５年度』高槻市教育委員会

3）宮崎康雄編 1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市発掘調査報告書第 20 冊 高槻市教育委員会、森田克行 1996「Ⅷ 摂津の弥生時代遺跡」『弥生時代の大阪湾沿岸』大阪経済法科大学出版部など

4）島地　謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社、Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）1998『広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）海青社［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］、Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）2006『針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）海青社［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］

5）林　昭三 1991『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所、伊東隆夫 1995 ～ 1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ . 木材研究・資料 31 ～ 35』京都大学木質科学研究所

6）伊東隆夫・山田昌久 (編)2012『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社

7）松江実千代 1993「新池遺跡周辺における古植生とその変遷」『新池　新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書』高槻市発掘調査報告書第 17 冊 高槻市教育委員会

第３節　須恵器の胎土分析（蛍光Ｘ線分析）

１．分析の目的と試料の概要

５区で検出された須恵器窯（成合西王寺山窯跡）で生産された須恵器の、供給先や流通過程を検討するため、波長分散型蛍光Ｘ線分析装置をもちいて須恵器の胎土の元素分析をおこなった。分析対象の試料は須恵器を中心に、生産地（窯跡）の試料として、成合遺跡の５区須恵器窯出土の９点（本報告：分析番号１～９）、成合琴堂窯跡出土の２点[1)]（高槻市教育委員会蔵：分析番号 17・18）を、消費地遺跡の試料として、成合遺跡２区出土の４点（本報告：分析番号 10 ～ 13）、金龍寺旧境内跡出土の３点[2)]（当センター蔵・分析番号 14 ～ 16）を選定し、元素組成からみる材料的特徴を比較・検討した。分析試料数は計 18 点である（表５、図 193、写真８）。

本窯の分析試料については、器種ごとに胎土を選別している可能性も想定されることから、代表的な器種を中心に、さまざまな器種を偏りなく選定した（分析番号１～６）。分析番号７～９については、いずれも特殊な製品や窯壁であるため、一般的な須恵器とは異なる胎土を用いている可能性がより高いものである。特に、土師器の器形、技術によって製作された甕（分析番号７）は、胎土中に長石類を多く含んでいることが肉眼観察によっても容易に確認できる。九輪（分析番号８）については、軟質の仕上がりで、胎土も精良であるといった点で他の須恵器とは異なる特徴をもつ。窯壁（分析番号９）については、スサなどの混和剤が含まれている可能性が高い。そのため、これらの試料については、分析値が一般的な須恵器と大きく異なることも十分想定でき、器種ごとの粘土の選別の有無についても検討することができる。

また、生産地の比較試料として、同じ成合地区内に所在する成合琴堂窯跡出土の須恵器（分析番号 17・18）を併せて分析した。成合琴堂窯跡では、供膳具が９割以上を占めるといった点において本窯とは特徴が異なるが、出土須恵器はほぼ同時期のもので、厚手のつくりで重量感があるといった製品の特長から、ふたつの窯の製品は同じ工人集団によって生産された可能性が高いことが想定される。さらに、肉眼観察による胎土の特徴や焼き上がりの色調なども極めてよく似ており、同じ採取地の粘土を用いて製作された可能性も考えられる。以上の点から、ふたつの窯跡で生産された須恵器胎土の比較分析は、成合地区の須恵器生産の動向をより具体的に知る手がかりになりうる。

本窯で生産された須恵器は、地域内での消費を目的としていた可能性が当然高いとは考えられるが、製品の器種組成などから、一般集落よりもむしろ都城や官衙、寺院などが供給先の候補としてふさわしいことは既に報告でも述べた通りである。このため消費地遺跡については、同時期の都城である長岡京や平安京、嶋上郡内の嶋上郡衙跡や郡家今城遺跡などの試料も併せて分析することが望ましいが、資料の選別も困難であることから、今回は同じ成合地区内の遺跡出土の試料に限定した。この中で分析対象とした試料は、今回報告をおこなった成合遺跡２区出土の須恵器と（分析番号 10 ～ 13）、金龍寺旧境内跡出土の須恵器（分析番号 14 ～ 16）を選定した。

成合遺跡の２区では、８世紀後半から９世紀中頃を中心とした建物跡や火葬痕跡と想定される焼土坑などとともに、梶原瓦窯と同笵関係をもつ軒丸瓦や緑釉陶器の唾壺、鉄鉢形の黒色土器などといった、やや特殊な遺物の出土が目立つ。金龍寺旧境内跡は、2012 年に当センターが実施した金龍寺に向かう参道の山裾部分の調査で、８世紀後半を中心とした時期の遺構とともに、円面硯や石製巡方、土馬などが出土している。ふたつの遺跡は、仏教系遺物や硯など一般的な集落で普遍的にみられないような遺物

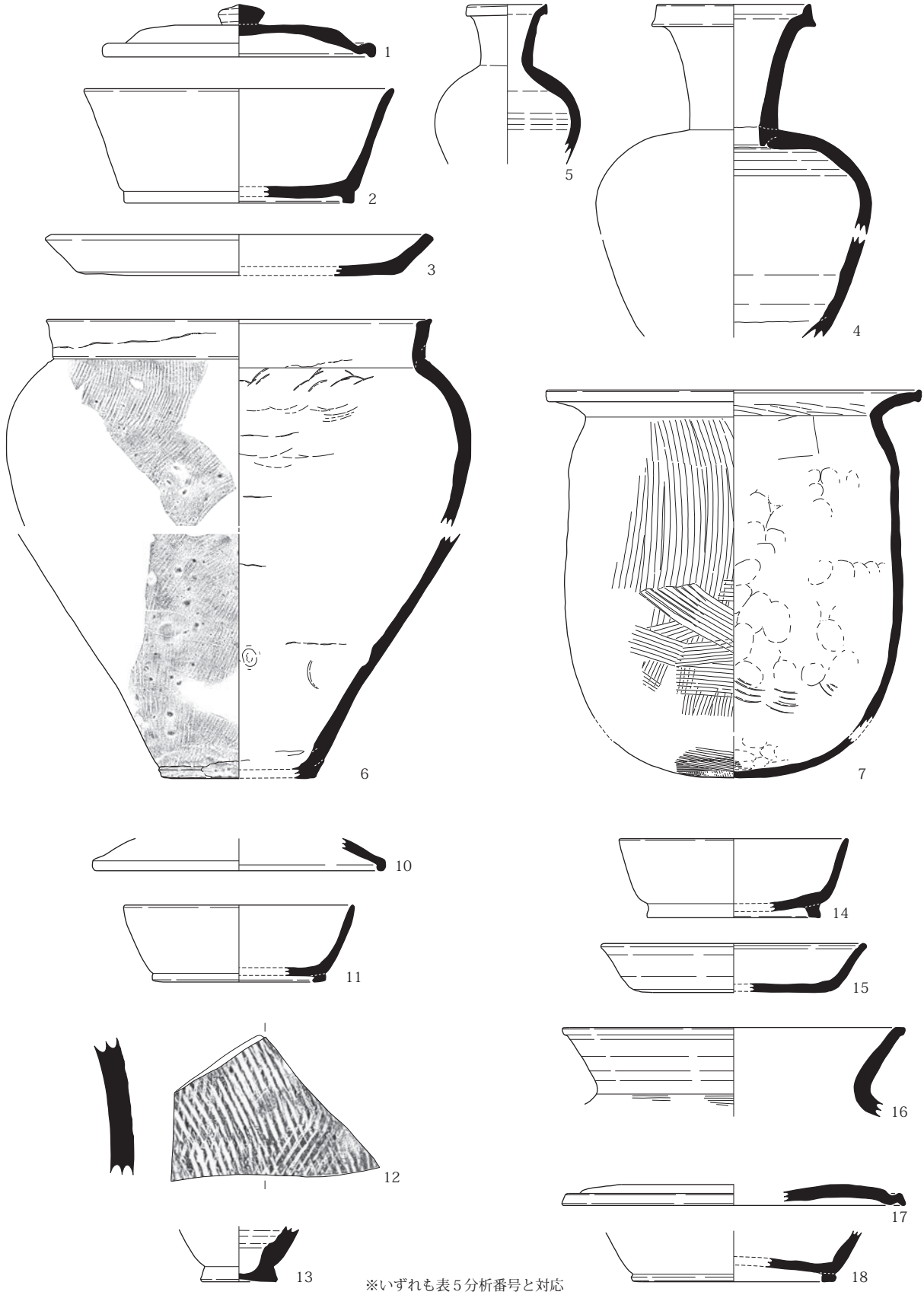


図 193　蛍光 X 線分析遺物

表５　分析対象一覧

分析番号	遺物番号	遺跡・遺構	出土位置・層位・遺構	器種	時期	備考
1	593	成合遺跡（須恵器窯）	灰原	杯蓋	９世紀初頭	
2	384	成合遺跡（須恵器窯）	窯体内・最終床面置台	杯B	９世紀初頭	
3	425	成合遺跡（須恵器窯）	窯体内・最終床面直上	皿C	９世紀初頭	
4	642	成合遺跡（須恵器窯）	灰原	壺L	９世紀初頭	未図化の同一個体の破片を分析
5	661	成合遺跡（須恵器窯）	灰原	壺M	９世紀初頭	未図化の同一個体の破片を分析
6	718	成合遺跡（須恵器窯）	灰原	甕	９世紀初頭	未図化の同一個体の破片を分析
7	721	成合遺跡（須恵器窯）	灰原	甕（土師器系）	９世紀初頭	未図化の同一個体の破片を分析
8	－	成合遺跡（須恵器窯）	窯体内・最終床面直上	九輪	９世紀初頭	442もしくは443と同一個体の破片
9	－	成合遺跡（須恵器窯）	窯体内	（窯壁）	９世紀初頭	
10	79	成合遺跡	２区・中央谷部上層	杯蓋	８世紀	
11	68	成合遺跡	２区・１層	杯B	９世紀初頭～前半	
12	125	成合遺跡	２区・21土坑	甕	９世紀初頭～前半	須恵器窯出土甕（716・717）と胎土・タタキ調整酷似
13	52	成合遺跡	２区・１層（斜面裾）	壺M	９世紀前半か	
14	－	金龍寺旧境内跡	２区・包含層	杯B	８世紀中頃	当センター蔵、金光2012
15	－	金龍寺旧境内跡	２区・包含層	皿A	８世紀中頃	当センター蔵、金光2012
16	－	金龍寺旧境内跡	２区・包含層	甕	８世紀中頃	当センター蔵、金光2012
17	－	成合琴堂窯跡	灰原	杯蓋	８世紀末～９世紀初頭	高槻市教委蔵、中村1995未掲載資料
18	－	成合琴堂窯跡	灰原	杯B	８世紀末～９世紀初頭	高槻市教委蔵、中村1995未掲載資料

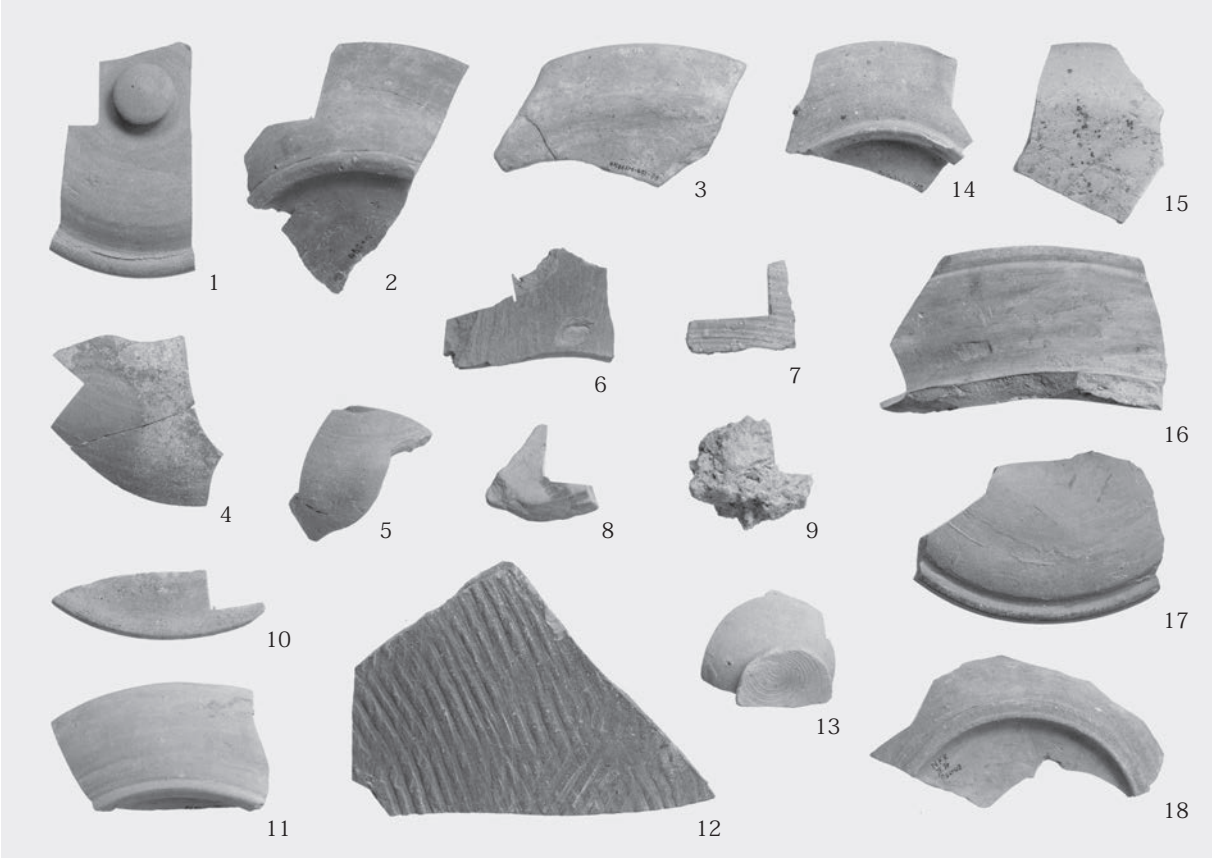


写真８　蛍光Ｘ線分析遺物

※いずれも表５分析番号と対応
分析終了後に撮影

の出土が目立つことから、寺院の可能性や高位階層の存在を示しており、成合遺跡の須恵器窯の供給先としてふさわしい内容となっている。その一方で、これらの消費地遺跡は、須恵器窯が操業した８世紀末から９世紀初頭の遺物はやや希薄で、今回の分析で対象とした試料についても前後する時期のものが多いといった難点もある。

今回、分析対象とした試料についても、分析番号 12 甕が、調整や胎土、焼成などから本窯で生産された製品の可能性があるものの、その他の試料はいずれも、８世紀代もしくは９世紀中頃の試料となる。ただし、成合地区には複数の窯跡が存在しており、出土炭化材分析（第２節）から、須恵器窯の操業時には周辺部の森林の開発が進んでいた状況を示すデータを得られていることから、前後する時期も含めた未発見の窯跡の存在も十分に想定される。特に成合琴堂窯跡周辺では、過去に７世紀中頃と８世紀代の須恵器が採取されており[3)]、この成合の地では継続的に須恵器生産がおこなわれていた可能性も考慮する必要がある。このような点を勘案すると、消費地遺跡の試料との比較分析から得られるデータは、本窯の供給先を直接的に示すデータとはならないが、近似するデータが得られれば、成合地区内の生産遺跡と消費地遺跡の須恵器の供給と流通の関係を検討するための手がかりとなり、成合地区の須恵器生産の背景を地区内に展開する古代の遺跡と結びつけて考えることも可能となってくるため、非常に有意義なデータとなりうる。（笹栗）

２．分析方法

蛍光 X 線分析には、土器よりガラスビードを作製し、それを分析試料とするガラスビード法を用いた。まず採取した土器破片を、表面の汚れ等の影響を排除するため、岩石カッターで表面を削った後、さらに精製水で超音波洗浄をおこなった。試料をセラミック乳鉢で粉末にして、るつぼに入れ、電気炉で 750℃、６時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000g 秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム Li2B4O7 と、メタホウ酸リチウム LiBO2 を 8:2 の割合で調製した融剤 3.6000g と十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約 750℃で 250 秒間予備加熱、約 1100℃で 150 秒間溶融させ、約 1100℃で 450 秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光 X 線分析装置 MagiX（PW2424 型）にて、検量線法による定量分析をおこなった。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計 15 種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム（Na2O）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化アルミニウム（Al2O3）、二酸化ケイ素（SiO2）、五酸化二リン（P2O5）、酸化カリウム（K2O）、酸化カルシウム（CaO）、酸化チタン（TiO2）、酸化マンガン（MnO）、酸化鉄（Fe2O3）の主成分 10 元素と、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の微量成分４元素の計 14 元素である。

３．分析結果

表６に、蛍光 X 線分析の測定結果を示す。

分析の結果、成合遺跡５区須恵器窯の須恵器は、Na2O が 0.80 ～ 1.39%、MgO が 0.94 ～ 1.52%、Al2O3 が 16.8 ～ 23.3%、SiO2 が 70.9 ～ 74.3%、P2O5 が 0.026 ～ 0.071%、K2O が 2.34 ～ 3.04%、CaO が 0.13 ～ 0.65%、TiO2 が 0.85 ～ 1.24%、MnO が 0.024 ～ 0.098%、Fe2O3 が 4.59 ～ 7.01%、Rb が 82 ～ 154ppm、Sr が 51 ～ 118ppm、Y が 31 ～ 48ppm、Zr が 158 ～ 296ppm であった。また、窯壁は、Na2O が 0.92%、MgO が 0.74%、Al2O3 が 12.1%、SiO2 が 79.1%、P2O5 が 0.029%、K2O が 1.73%、CaO が 0.11%、TiO2 が 0.68%、MnO が 0.035%、Fe2O3 が 3.85%、Rb が 89ppm、Sr が 89ppm、Y

表６　蛍光 X 線分析結果（mass%）

分析番号	遺跡・遺構名	Na_2O (%)	MgO (%)	Al_2O_3 (%)	SiO_2 (%)	P_2O_5 (%)	K_2O (%)	CaO (%)	TiO_2 (%)	MnO (%)	Fe_2O_3 (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)
1	成合遺跡（須恵器窯）	1.39	1.29	16.8	72.7	0.032	2.37	0.25	0.89	0.057	4.87	100.6	108	106	31	254
2	成合遺跡（須恵器窯）	1.06	1.20	19.2	74.3	0.026	2.77	0.17	1.02	0.035	4.91	104.7	146	82	37	263
3	成合遺跡（須恵器窯）	1.10	0.95	20.2	72.2	0.027	2.96	0.14	1.07	0.032	6.41	105.1	131	80	42	286
4	成合遺跡（須恵器窯）	1.22	1.52	19.7	72.6	0.048	3.04	0.25	1.24	0.098	7.01	106.7	150	103	44	296
5	成合遺跡（須恵器窯）	1.37	1.23	16.9	71.6	0.034	2.34	0.23	0.85	0.064	4.59	99.2	82	118	34	228
6	成合遺跡（須恵器窯）	1.21	1.51	19.6	70.9	0.036	2.73	0.21	1.03	0.040	6.06	103.3	154	90	35	286
7	成合遺跡（須恵器窯）	0.80	1.00	23.3	71.1	0.071	2.60	0.65	0.85	0.024	5.03	105.4	152	108	48	158
8	成合遺跡（須恵器窯）	1.16	0.94	20.0	72.6	0.042	2.79	0.13	1.10	0.026	5.21	104.0	110	51	39	260
9	成合遺跡（須恵器窯）	0.92	0.74	12.1	79.1	0.029	1.73	0.11	0.68	0.035	3.85	99.3	89	89	21	247
10	成合遺跡	0.95	0.92	17.2	73.0	0.022	1.57	0.17	1.09	0.041	4.02	99.0	79	98	28	244
11	成合遺跡	1.10	1.27	17.6	69.8	0.038	2.46	0.27	1.04	0.036	5.31	98.9	111	87	37	273
12	成合遺跡	1.19	1.41	18.5	71.0	0.036	2.78	0.24	1.03	0.053	5.19	101.4	151	93	27	279
13	成合遺跡	0.75	0.91	19.6	71.4	0.029	2.60	0.13	0.89	0.030	3.64	100.0	131	74	19	266
14	金龍寺旧境内跡	1.12	1.11	18.3	74.1	0.034	2.20	0.08	0.92	0.017	3.59	101.5	106	75	47	231
15	金龍寺旧境内跡	0.99	0.96	16.6	74.6	0.074	1.90	0.28	1.00	0.033	3.45	99.9	94	134	35	234
16	金龍寺旧境内跡	0.86	0.71	23.1	65.3	0.042	2.06	0.36	0.81	0.023	6.25	99.5	112	82	42	238
17	成合琴堂窯跡	1.18	1.47	18.3	68.9	0.037	2.90	0.24	1.06	0.042	5.21	99.3	122	93	38	249
18	成合琴堂窯跡	1.00	1.19	18.3	70.9	0.026	2.66	0.23	0.95	0.029	3.76	99.0	137	81	38	237
最小値		0.75	0.71	12.1	65.3	0.022	1.57	0.08	0.68	0.017	3.45	98.9	79	51	19	158
最大値		1.39	1.52	23.3	79.1	0.074	3.04	0.65	1.24	0.098	7.01	106.7	154	134	48	296

が 21ppm、Zr が 247ppm であった。

成合遺跡２区の須恵器は、Na2O が 0.75 ～ 1.19%、MgO が 0.91 ～ 1.41%、Al2O3 が 17.2 ～ 19.6%、SiO2 が 69.8 ～ 73.0%、P2O5 が 0.022 ～ 0.038%、K2O が 1.57 ～ 2.78%、CaO が 0.13 ～ 0.27%、TiO2 が 0.89 ～ 1.09%、MnO が 0.030 ～ 0.053%、Fe2O3 が 3.64 ～ 5.31%、Rb が 79 ～ 151ppm、Sr が 74 ～ 98ppm、Y が 19 ～ 37ppm、Zr が 244 ～ 279ppm であった。

金龍寺境内跡の須恵器は、Na2O が 0.86 ～ 1.12%、MgO が 0.71 ～ 1.11%、Al2O3 が 16.6 ～ 23.1%、SiO2 が 65.3 ～ 74.6%、P2O5 が 0.034 ～ 0.074%、K2O が 1.90 ～ 2.20%、CaO が 0.08 ～ 0.36%、TiO2 が 0.81 ～ 1.00%、MnO が 0.017 ～ 0.033%、Fe2O3 が 3.45 ～ 6.25%、Rb が 94 ～ 112ppm、Sr が 75 ～ 134ppm、Y が 35 ～ 47ppm、Zr が 231 ～ 238ppm であった。

成合琴堂窯跡の須恵器は、Na2O が 1.18% と 1.00%、MgO が 1.47% と 1.19%、Al2O3 が 18.3%、SiO2 が 68.9% と 70.9%、P2O5 が 0.037% と 0.026%、K2O が 2.90% と 2.66%、CaO が 0.24% と 0.23%、TiO2 が 1.06% と 0.95%、MnO が 0.042% と 0.029%、Fe2O3 が 5.21% と 3.76%、Rb が 122ppm と 137ppm、Sr が 93 ppm と 81ppm、Y が 38ppm、Zr が 249 ppm と 237ppm であった。

図２に各元素の分布図を遺跡別に示す。

４．考察

まず、成合遺跡５区須恵器窯（成合西王寺山窯）の須恵器間（分析番号１～８）を比較すると、土師器系の甕（分析番号７）は、Na2O や P2O5、CaO、Zr において他試料の分布とは異なる値であり、材料的に異なると考えられる。その他の７試料は一部元素において他試料の分布からやや外れた値を示す試料もみられたが、おおよそ似たような化学組成であったと考えられる。窯壁（分析番号９）は、SiO2 が多く、窯壁は須恵器に比べて砂粒成分が多かったと考えられる[4)]。他に、K2O、TiO2、Fe2O3、Y においても、須恵器窯の須恵器とは組成が異なっており、材料的に異なると考えられる。

また、同じく生産地である成合琴堂窯跡の須恵器（分析番号 17、18）を成合西王寺山窯跡の須恵器

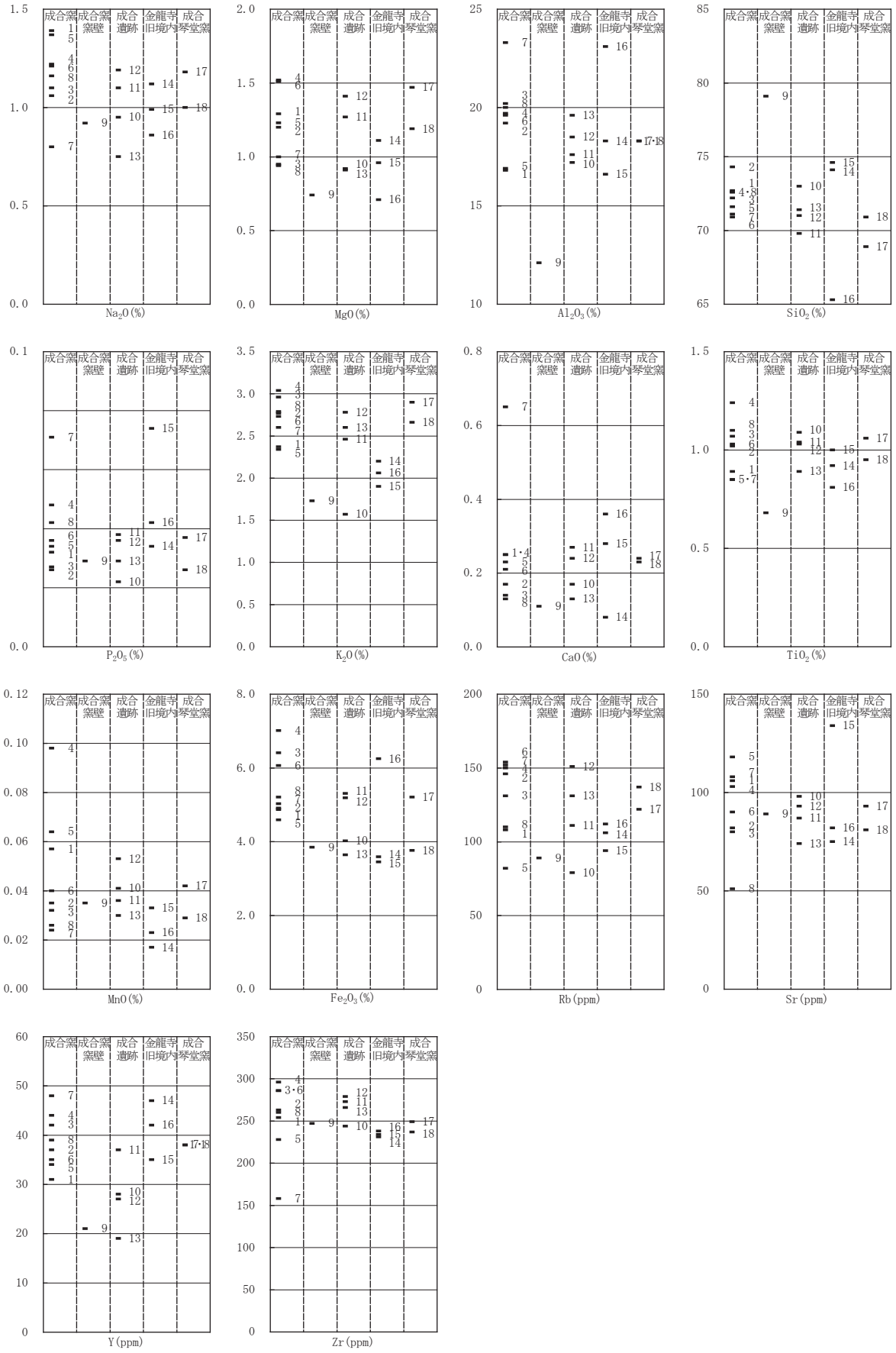

成合窯
窯壁
成合遺跡
金龍寺旧境内
成合琴堂窯
Na2O(%)
MgO(%)
Al2O3(%)
SiO2(%)
P2O5(%)
K2O(%)
CaO(%)
TiO2(%)
MnO(%)
Fe2O3(%)
Rb(ppm)
Sr(ppm)
Y(ppm)
Zr(ppm)

図 194　元素分布図

と比較すると、いずれの元素においても分布がほぼ重複しており、材料的に似ていると考えられる。

一方、成合遺跡２区（分析番号 10 ～ 13）や金龍寺旧境内跡（分析番号 14 ～ 16）の須恵器を窯跡の須恵器と比較すると、金龍寺旧境内跡の須恵器はいずれも K2O が少ない傾向がみられた。成合遺跡２区の分析番号 10 も同様に K2O が少ない傾向にあり、これらはいずれも８世紀の須恵器であることから、時期的な差異である可能性がある。他に、Al2O3、SiO2 において分析番号 16 が、P2O5 において分析番号 15 が、Y において分析番号 13 が窯跡の分布から外れた組成を示した。

今回分析した須恵器の出土した遺跡の所在する高槻市の丘陵地から、北摂山地を挟んで反対の亀岡盆地側の丘陵地には篠窯跡群があり、出土須恵器の胎土分析が白石（2012）によっておこなわれている。[5)] 定量方法について触れられていないため、比較するためには検討の余地が残るが、篠窯跡群の K2O、CaO、TiO2 といった元素の分析結果について今回の分析結果と比較すると、化学組成の分布がおおよそ重複しており、化学組成上の大きな差異はなかった。一方で、Rb は篠窯跡群の値は今回の分析結果より全体的に少なく、今回分析した成合地区との差異である可能性がある。

（パレオ・ラボ：竹原弘展）

【註】

1）中村剛彰 1995「奈良時代末期における一地方窯の様相～成合琴堂窯跡の調査報告にかえて～」『高槻市文化財年報 平成５年度』高槻市教育委員会

2）金光正裕 2012『金龍寺旧境内跡』大阪府文化財センター報告書 224 集

3）原口正三ほか 1973『高槻市史』第６巻考古編 高槻市役所、前掲１）中村 1995

4）小村美代子・藤根 久 2002「山茶碗胎土の化学的評価」『日本文化財科学会第 19 回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会

5）白石 純 2012「大谷３号窯ならびに周辺諸窯出土土器の胎土分析」『篠窯跡群大谷３号窯の研究』大阪大学考古学研究室篠窯調査団 真陽社

第４節　放射性炭素年代測定（加速器質量分析法（ＡＭＳ法）

１．分析の目的と試料の概要

今回の調査で検出された遺構の年代を明らかにするために、遺構より出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定をおこなった。分析試料は、２区の竪穴建物３（試料１・２：弥生時代後半)、古代の火葬墓と考えられる３－１区の 123 土坑（試料３）および８区の 371 土坑（試料４)、５区の須恵器窯（試料５：８世紀末から９世紀初頭）を対象とした。竪穴建物３は、遺存状態が良好に検出された焼失建物で、弥生時代中期後半のものと推測されるが、出土遺物は細片のものが多く、詳細な時期比定をおこなうために分析をおこなった。古代の火葬墓と考えられる 123 土坑と 371 土坑は、鉄釘の出土がみられるものの、年代をおさえることのできる土器が出土していないことから、遺構の年代をおさえるために分析をおこなった。須恵器窯は、灰原を中心に須恵器が豊富に出土しており、出土遺物から８世紀末から９世紀初頭に位置づけられるが、科学的な年代測定により出土遺物の年代の定点をおさえる目的のため、今回の分析をおこなっている。（笹栗）

２．試料と分析方法

測定試料の情報、調製データは表７のとおりである。図 191・192 に、試料採取地点を示す。

試料１（PLD-24727）と試料２（PLD-24728）は、２区の竪穴建物３より出土した炭化材である。測定試料は、いずれも最終形成年輪が確認された。

試料３（PLD-24729）は、３－１区の 123 土坑より出土した部位不明の炭化材である。

試料４（PLD-24730）は、８区の 371 土坑より出土した炭化材である。測定試料は、最終形成年輪が確認された。

試料５（PLD-24731）は、５区の須恵器窯の窯体内より出土した炭化材である。測定試料は、最終

表７　測定試料と処理方法

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-24727	試料１ 調査区：２区 遺構：竪穴建物３-A	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） サルフィックス処理
PLD-24728	試料２ 調査区：２区 遺構：竪穴建物３-F	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） サルフィックス処理
PLD-24729	試料３ 調査区：３－１区 遺構：123土坑	種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） サルフィックス処理
PLD-24730	試料４ 調査区：８区 遺構：371土坑	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） サルフィックス処理
PLD-24731	試料５ 調査区：５区 遺構：須恵器窯・窯体内	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） サルフィックス処理

※試料１および資料２の採取位置については図192と対応する

表８　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP± 1 σ)	^{14}C年代 (yrBP± 1 σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-24727 試料１ 竪穴建物３	-26.14±0.14	2047±18	2045±20	92BC(55.5%)37BC 30BC(5.7%)21BC 11BC(7.0%)2BC	156BC(3.0%)138BC 113BC(92.4%)5AD
PLD-24728 試料２ 竪穴建物３	-26.84±0.23	2060±21	2060±20	109BC(68.2%)41BC	164BC(13.5%)128BC 121BC(78.5%)19BC 12BC(3.4%)1BC
PLD-24729 試料３ 123土坑	-25.75±0.16	1153±17	1155±15	779AD(6.9%)789AD 869AD(32.2%)900AD 921AD(29.1%)950AD	776AD(8.5%)793AD 802AD(51.4%)905AD 916AD(35.5%)967AD
PLD-24730 試料４ 371土坑	-26.67±0.15	1205±18	1205±20	774AD(4.0%)778AD 790AD(38.1%)829AD 839AD(26.1%)866AD	769AD(95.4%)885AD
PLD-24731 試料５ 須恵器窯 窯体内	-27.12±0.12	1223±17	1225±15	725AD(11.4%)739AD 767AD(11.6%)779AD 791AD(26.9%)828AD 839AD(18.4%)864AD	714AD(17.7%)744AD 765AD(77.7%)882AD

形成年輪が確認された。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正をおこなった後、14C 年代、暦年代を算出した

３．結果

表８に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ13C)、同位体分別効果の補正をおこなって暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代を、図 195 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正をおこなうために記載した。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代（yrBP）の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、１σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重

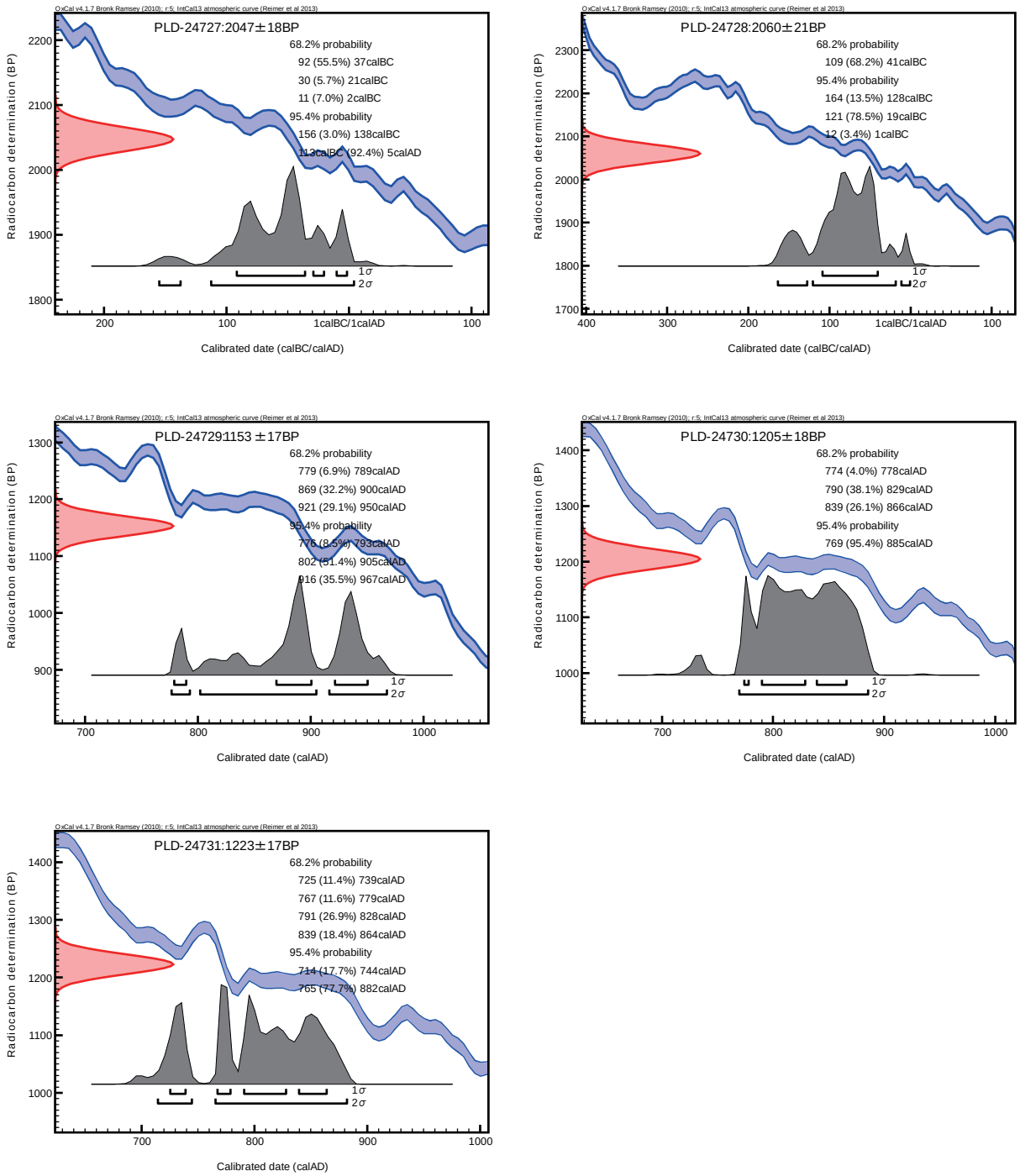


図 195　暦年較正結果

曲線は暦年較正曲線を示す。

4．考察

以下、２σ暦年代範囲（確率 95.4%）を基に結果を整理する。

竪穴建物３から出土した試料１（PLD-24727）は、156-138 cal BC（3.0%）および 113 cal BC-5 cal AD（92.4%）となり、紀元前２世紀中頃から後１世紀初頭の範囲を示した。試料２（PLD-24728）は、164-128 cal BC（13.5%）、121-19 cal BC（78.5%）および 12-1 cal BC（3.4%）となり、紀元前２世紀前半から紀元前１世紀末の範囲を示した。これらは、小林（2009）によると弥生時代中期後半に相当する。

123 土坑から出土した試料３（PLD-24729）は、776-793 cal AD（8.5%）、802-905 cal AD（51.4%）および 916-967 cal AD（35.5%）となり、８世紀後半から 10 世紀後半の範囲を示した。なお、試料３は部位不明であるため、最終形成年輪からの年輪分に応じて枯死・伐採年代より古い年代となる古木効果の影響を考慮する必要がある。

371 土坑から出土した試料４（PLD-24730）は、769-885 cal AD（95.4%）となり、８世紀後半から９世紀後半の範囲を示した。

須恵器窯の窯体内から出土した試料５（PLD-24731）は、714-744 cal AD（17.7%）および 765-882 cal AD（77.7%）となり、８世紀前半から９世紀後半の範囲を示した。

（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ　伊藤　茂・安　昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・小林克也・竹原弘展）

【参考文献】

Bronk Ramsey, C.2009「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」『Radiocarbon51（1）』pp337-360

小林謙一 2009「近畿地方以東の地域への拡散」西本豊弘編『新弥生時代のはじまり 第４巻 弥生農耕のはじまりとその年代』雄山閣 pp55-82

中村俊夫 2000「放射性炭素年代測定法の基礎『日本先史時代の 14C 年代』」日本先史時代の 14C 年代編集委員会編 日本第四紀学会 pp3-20

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.2013「 IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP.」『Radiocarbon55（4）』pp1869-1887

第７章　総括

今回の発掘調査は成合遺跡ではじめておこなわれた調査であり、隣接する金龍寺旧境内跡と合わせて調査面積が 19,508 ㎡におよんだ。このうち成合遺跡では、これまでの断片的な情報から発見が予想された弥生時代中期後半の集落とともに、新たに７世紀中頃の横穴式石室墳３基、８世紀末から９世紀初頭頃の須恵器窯、８・９世紀代の掘立柱建物や焼土坑をはじめとした遺構と遺物などが検出されており、数多くの知見が新たに得られ、遺跡の内容も大きく刷新された。また隣接する金龍寺旧境内跡の調査においては、遺構･遺物の密度は少ないものの、古代の焼土坑の広がりが確認され、弥生時代と古代（８・９世紀）の遺物が出土している。このように検出された遺構・遺物の内容は多岐に渡っており、以下では時期ごとに調査の成果をまとめていきたい。

第１節　古代の遺構と遺物

古代の遺構と遺物は、５区の須恵器窯に関連する遺構・遺物を除くと、主に成合遺跡の南側の丘陵上の２区・３－１区・３－２区と、谷の開口部にあたる東檜尾川に隣接する 10 区で検出された。この他には金龍寺旧境内跡も含めた調査地のほぼ全域で、古代に属するとみられる焼土坑が計 79 基検出されているが、これについては調査地内に散在して分布するといった特徴がある。

１．出土遺物の検討

出土遺物の時期　成合遺跡の古代の遺物は、主に丘陵上の２区・３－１区・３－２区の一部に偏在している。この他に調査地内では、古代の火葬痕跡と関連する焼土坑群が散在しており、これらとの関わりが推定される古代の遺物が僅かに出土しているが、出土量も少なく断片的なものにすぎない。

２区・３－１区・３－２区から出土した古代の遺物については、土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器、軒丸瓦、鉄器類など多彩で、出土遺物は９世紀前半から中頃を中心とした時期（平安京Ⅰ期中）のものが多数を占める。土師器は皿や甕の出土量が多く、皿については外面ヘラケズリによるｃ手法（22、26、66）とナデによるｅ手法（23、25、135、136）が混在することから、平安京Ⅰ期新～Ⅱ期古段階、９世紀前半から中頃を中心とした時期に位置づけられる。須恵器については、扁平な杯蓋が多く（41、42、43、82）、杯Ｂは高台が底部外端付近に付けられるもの（11、45、68、115）が多い。この他に出土量が目立ち時期の比定に有効な器種として壺Ｍがあるが、肩があまり張らない縦長の形状で、糸切による無高台の平底で断面形が台形状のもので占められ（50、51、52、69、70、116、229）、このような形状は、窯跡資料では篠窯跡群の小柳１号窯跡以降の特徴を示し、９世紀前半から中頃以降に位置づけられる。黒色土器は全て内黒のＡ類で、小型の甕もみられるが、高台が付かない杯Ａが多く（36、126）、内外面の調整や形態的な特徴から、いずれも９世紀前半から中頃に位置づけられる。施釉陶器は出土数が少ないが年代をおさえやすく、灰釉陶器の 86 段皿はＫ 14 窯式期で９世紀前半に、緑釉陶器の 141・142 唾壺は、貼付の蛇の目高台で９世紀中頃から後半に位置づけられる。

一方で、出土した遺物には８世紀中頃を中心とした時期に位置づけられる遺物も少なからずみられる。土師器では内面に暗文を施す杯Ａ（84、107）や、98 高杯などがその時期のものとして認識できる。須恵器は、つまみが扁平で平坦気味の天井部から口縁端部が折れ曲がる形状の杯蓋（79、80、

81、100）や 161 壺Ｋが８世紀前半から中頃に、胴部に丸身をもつ 13 壺Ｌと 108 壺Ｍなどが８世紀後半頃に位置づけられる。また詳しくは後述するが、梶原瓦窯跡と同笵関係をもつ平城宮系の 16 軒丸瓦については、８世紀前半代に位置づけられる。

このように出土遺物は８世紀中頃から９世紀後半までのものがみられ、特に９世紀前半から中頃を中心とした時期のものが多いことから、この時期に遺跡のピークをむかえていたことがわかる。その一方で、５区で須恵器窯が営まれた８世紀末から９世紀初頭頃に位置づけられる遺物は少なく、丘陵上の消費地と生産遺構（窯跡）との関わりが問題となる。須恵器の供膳具類については、器形の変化がやや緩やかで、須恵器窯と同時期の遺物の存在も十分に想定できるが、胎土や焼成で須恵器窯の製品と特徴が一致するものが少なく、確実にこの時期に限定することのできる遺物は非常に少ない。

９世紀末以降の様相については、丘陵上では 24 土師器皿など一部にその可能性を示す遺物がみられるが、遺物は極端に少なくなる。その一方で調査地内北端の丘陵裾部にあたる 10 区の第３面では、９世紀末から 10 世紀前半頃の遺物がややまとまって出土しており、丘陵上で遺物の出土が極端に減少する９世紀末以降の遺物が出土する点が特徴的である。

施釉陶器と仏教関連遺物　また今回の調査では施釉陶器が出土し、その中に類例が少ない特殊な製品が含まれる点と、寺院に関連する仏教関連遺物が出土している点が特筆される（図 196）。

施釉陶器については、緑釉陶器と灰釉陶器が合わせて４点分出土しているが、この中でも特に緑釉陶器の唾壺（141・142）が注目される。漏斗状に開く口縁部から頸部までの破片と、底部の破片が残存するのみで、外面の釉の剥離もみられるなど遺存状態はそれほど良好ではないが、内面が赤く変色しており火を受けたことがわかる。貼付の蛇の目の高台で、底部には三又トチンの痕跡が残り、丁寧なつくりであることから東海産の可能性が高い。唾壺は都城を中心に出土例が知られているが[1)]、高槻市内では初めての出土で、嶋上郡衙である郡家川西遺跡や近隣の郡家今城遺跡などでも今のところ出土が報告されていない。また、この緑釉陶器の唾壺が出土した地点からは、灰釉陶器の皿が２点（86・140）出土しており、付近に存在する 360 石列と関連が想定される。灰釉陶器は、86 段皿が K14 窯式期に位置づけられ、140 無高台の皿は非常に珍しい器形であるがほぼ同時期のものとみてよく、これらの施釉陶器はいずれも９世紀中頃を前後した時期のものである。

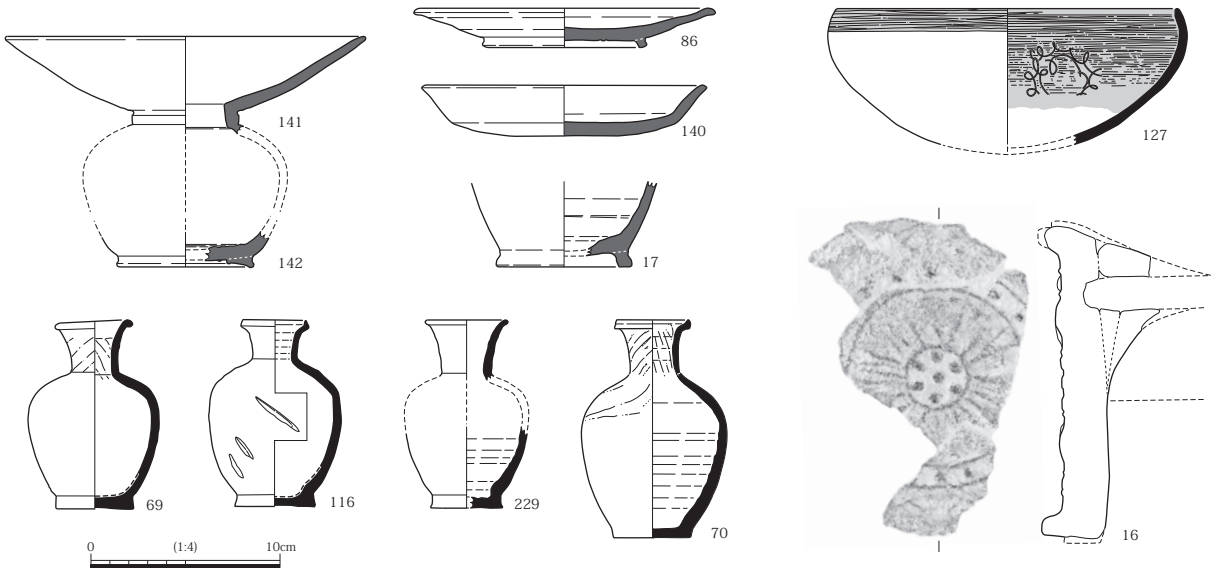


図 196　施釉陶器・仏教関連遺物・壺Ｍ

さらに寺院との関連を示唆する仏教系遺物が、少量ながらもみられる点も注目される。このうち22土坑からは、黒色土器の鉄鉢形の鉢Aが出土しており、遺跡内に僧侶がいたことを示す遺物として認識できる。外面は剥離・磨滅が著しいが、内面には横方向の非常に細かなミガキを施した丁寧なつくりで、内面には螺旋暗文がみられる。同じ土坑内から他に出土した遺物はないが、並列する21・23土坑は同時期の遺構と想定され、そこから出土した土器類は9世紀中頃を中心とした時期のものである。瓦については、平城宮系の軒丸瓦が1点（16）出土しているが、これについては報文でも述べたように、梶原瓦窯跡で同笵瓦が出土しており[2)]、製作技法からも梶原瓦窯跡で生産された製品とみてよく、8世紀前半頃に生産されたと考えられる。ただし瓦はこの1点のみの出土で、丸瓦・平瓦などは一切出土していないため、総瓦葺きの建物の存在した可能性は極めて低く、建物の屋根の飾りとして象徴的に用いられたと推測される。この他には、取り立てて珍しい器種ではないが、須恵器の壺Mがまとまって出土しており、遺跡の性格を何らかの形で反映している可能性もある。

このように成合遺跡から出土する古代の遺物の中に、鉢Aや軒丸瓦など仏教関連の遺物が含まれることは、遺跡内に寺院か、もしくは小規模な堂が存在したことを直接的に示す証拠となる。さらに施釉陶器の出土は寺院の存在を補強する材料となり、その中に緑釉陶器の唾壺が含まれる点は、この遺跡の格式の高さを物語っている。また出土した軒丸瓦は、同笵関係をもつ梶原瓦窯跡で生産された製品であることから、梶原寺跡との結びつきを示す点で極めて重要である。（笹栗）

２．遺構の検討

一方で検出された古代の遺構は、遺物が多く出土した丘陵上の小谷の北側にあたる２区と３－１区・３－２区の一部と、丘陵裾の10区で主に検出された。この他には調査区内で焼土坑が多数検出されたが、散在しているのが特徴で、これについては後で詳しく述べることとする。

丘陵上では斜面部分に人為的な切土による平坦面が造成されており、この段造成された範囲には傾斜を平坦にするための盛土（２層：暗褐色シルト）の広がりが確認された。古代の遺構は主にこの造成面で検出されており、掘立柱建物２棟と段造成に伴う溝や土坑、石列、焼土坑などがある。

このうち建物跡については、掘立柱建物１が10×4.3ｍの２間×４間、掘立柱建物２がやや小型で4.0×3.7ｍの２間×３間の建物で、方位はややずれるがいずれも南北方向で、掘立柱建物１の南妻側と掘立柱建物２の北妻側がほぼ揃うなど、計画的に建てられた可能性がある。造成段のラインは、これと並行する南北方向にのびており、北側の３－２区では東西方向に屈曲するが、地形にあわせてやや北側に広がる。またこの段の裾には、７・８・11土坑、29溝とした一連と考えられる細長い溝が走っており、この付近からは遺物がまとまって出土している。

造成面の最も北側では、南北4.0ｍ×東西4.2ｍの360石列が検出された。ただし南側が流出し、西側の未調査地にも遺構が広がる可能性があるため、平面形や規模については検討の余地が残る。南東端と北西端に礎石風の大型石材がみられるが、四隅に大型石材が揃っておらず、また石列自体も整然としていないため石列を伴う礎石建物となるかは判然としないが、周囲には350溝がめぐっており、この遺構が建物であった場合には、雨落ち溝となるだろう。また、買地券が出土したことで知られる福岡県大宰府市宮ノ本遺跡の火葬墓にみられる土壇周囲の列石とも類似する構造で[3)]、調査された範囲では墓壙が検出されていないため同一の性格であるかは慎重な検討を要するが、葬送儀礼に関わるような何らかの施設であった可能性を想定する必要はある。このように遺構の性格を断定することはやや困難であるが、いずれにせよやや特殊な性格の遺構であったと推測される。

さらにこの段の南端付近では、段の裾側に開口する３基の焼土坑（21・22・23 土坑）が検出されており、位置関係から掘立柱建物１との関係性が窺われる。いずれも壁面と底面の一部が被熱しており、縦に長い平面形で短辺側の低い方が開口し、開口部付近には焼土や灰の広がりがみられることから、何らかの焼成行為がおこなわれたことがわかる。21・22 土坑は床面と壁面が著しく被熱し赤褐色に変色しているものの、底面から壁面の変換点部分はやや被熱が弱いといった特徴を示し、開口部と反対側の短辺には小さな突出部がみられ、23 土坑からは土師器皿がまとまって出土している。遺構の特徴や土師器の出土状況から、土師器焼成土坑の可能性が推測される。[4)] なお 21・22 土坑の埋土からは、土師器以外の須恵器や黒色土器、石材などが出土していることから、土師器焼成土坑とするのにはやや躊躇を覚えるが、これら土器類はいずれも被熱していないため、土師器焼成土坑としての機能を終えた後に廃棄されたものと判断することができ、必ずしも土師器焼成土坑を否定する要素にはなりえない。このような土師器焼成土坑は、近畿地方では伊勢の斎宮跡の周辺で７・８世紀代のものを中心に 400 基以上が確認されているものの、[5)] 畿内では古代の土師器生産に関わる遺構の実態はほとんどつかめておらず、時期の近い例としては堺市深井畷池遺跡（８世紀）[6)] の事例が挙げられる程度である。やや時期の下る 10 ～ 11 世紀代の事例としては、高槻市ツゲノ遺跡[7)]や箕面市粟生間谷遺跡[8)]などが挙げられ、特に後２者の事例は遺構の形態や規模等が今回の調査で検出された土坑と極めてよく類似しており、今後の類例の増加をまって改めて遺構の性格を検証する必要がある。また、８区 368 土坑と９区 561 土坑についても、上述した３基の焼土坑と共通した特徴を備えているため、同様の性格の遺構と考えられる。

これらの丘陵上の遺構のうち、掘立柱建物１・２は埋土から出土する土器類が８世紀代のものであるため、この時期に帰属する可能性があるが、遺物の出土量は９世紀中頃を前後する時期のものが圧倒的に多く、21・22・23 土坑や 360 石列については９世紀代の遺構とみて間違いない。また、造成段の裾や溝から出土した遺物は９世紀代ものが大半を占めており、段造成が８世紀代におこなわれた可能性は否定できないが、遺物の分布や出土傾向からは、大規模に造成がなされたのは９世紀代と推測される。また、造成面は西側の未調査地にも広がることが確実で、その範囲は現地形から東西幅 80 m × 南北 40 m程度におよぶと推定され、今回の調査区は８・９世紀代の遺構・遺物が広がる造成面の東端の一部にすぎない。一方でこの造成面の南には、西から東にむかって小谷が入り込み、そのさらに南側では遺構・遺物が極端に希薄になるため、南側に遺構が広がる可能性は低く、遺構の広がりはこの一画に限定される（図 198）。先に述べたように、この造成面では仏教系遺物や施釉陶器が出土しているため、未調査地には寺院に関連する遺構・遺物の検出が想定されるとともに、今回の調査では実態がはっきりしなかった須恵器窯に併行する時期の遺構・遺物の検出も期待される。

この他に、丘陵裾部の東檜尾川に隣接する 10 区では５面の遺構面が確認され、そのうち第５面～第２面までが古代に帰属する。８世紀から９世紀中頃にあたる第４・５面では、東檜尾川の流路は現在の流路とは異なって 10 区内の段の裾と並行していたことが確認され（296 流路）、この旧流路の北側に集落域が存在したことが推定される。９世紀中頃から後半にかけてこの旧流路は埋没したのちには、現在の流路と同じ北側に移動したことが判明しており、９世紀後半から 10 世紀前半にあたる第３面では遺構や遺物がまとまって確認されている。ここでは明確な建物等は検出されなかったが、土坑や溝、ピット、焼土坑が認められ、その中でも大型の 281 土坑では埋土下層の炭層からは土師器や須恵器、黒色土器とともに鉄器がまとまって出土している。鉄器は大型の釘（855・856）や刀子（861）などもみられるが、多くは用途不明の棒状の鉄製品で、土器とともに不要な鉄器を廃棄したものと考えられる。

丘陵上の遺構群との関係ははっきりしないが、丘陵裾部の 10 区では丘陵上で遺構・遺物が希薄となる９世紀末から 10 世紀前半にも、人為的な活動痕跡が認められることが特徴である。　　（笹栗・伊藤）

３．焼土坑の機能と性格

調査地内で検出された焼土坑については 78 基にのぼり、丘陵上・谷部など立地条件にも関わらず散在して分布しているため遺構の立地に規則性は見出し難く（図 197、表９）、その機能や性格が問題となる。丘陵上に弥生時代の集落が展開しているため、当初は弥生時代の狼煙とする案[9)]なども想定しながら調査を進めたが、埋土からは少量ながらも古代の土師器や須恵器、鉄釘などが出土し、また２区の一部や４－２区など複数の遺構面が確認できる調査区では、いずれも弥生時代の遺構面より上面の古代の

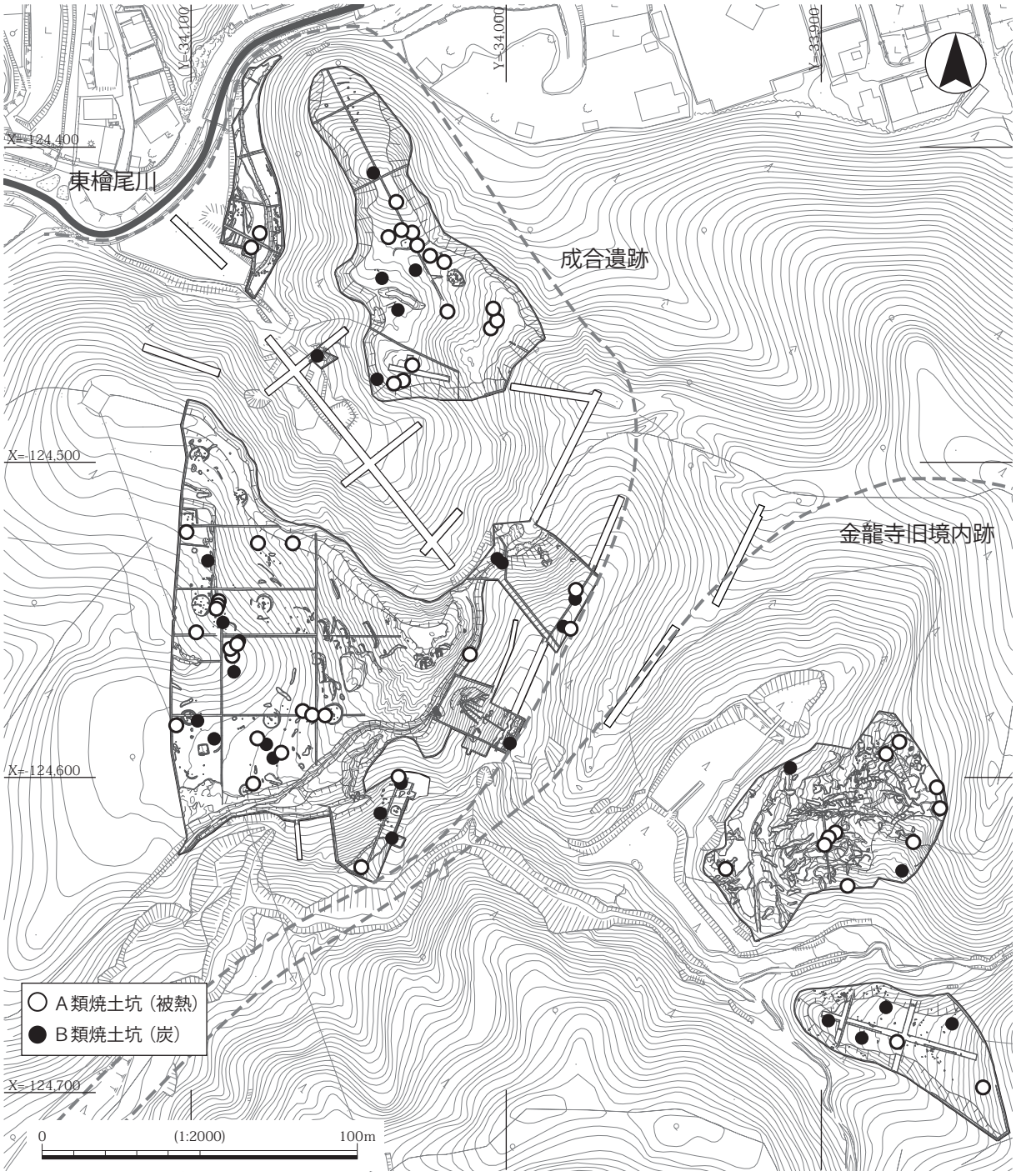


図 197　焼土坑分布図

表9　焼土坑一覧

成合遺跡

遺構名	調査区	分類	形状	規模(m)	深さ(m)	出土遺物(No.)	備考
35土坑	1区	Ab	隅丸方形	1.14×0.88	0.24		埋土に炭が溜まる
36土坑	1区	B	楕円形	2.00×1.05	0.10		35土坑に隣接
104土坑	1区	Ab	円形	0.92×0.95	0.18		埋土に炭が溜まる
105土坑	1区	B	楕円形	3.45×1.05	0.10		104土坑に隣接
102土坑	1区	B	楕円形	0.60×0.30	－		炭の広がりのみ
103土坑	1区	B	楕円形	0.66×0.43	0.05		炭の広がりのみ
11土坑	2区	B	楕円形	0.72×0.43	0.10		埋土上層に標石あり
21土坑	2区	A*	楕円形	1.00×0.45	0.14	土師器(121～123)、須恵器(126)、黒色土器(125) 灰釉陶器(124)	煙道部らしき小突出部あり 埋土上層に標石あり
22土坑	2区	A*	楕円形	0.77×0.56	0.20	黒色土器(127)	煙道部らしき小突出部あり
23土坑	2区	A*	楕円形	0.74×0.52	0.18	土師器(128・130～136) 須恵器(129)	周辺から鉄製品(137)出土
31土坑	2区	Ab	隅丸方形	0.86×0.43	0.14	土師器(103) 須恵器(104・105)	埋土に炭が溜まる
32土坑	2区	B	隅丸方形	0.88×0.82	0.14		
33土坑	2区	B	隅丸方形	0.74×0.69	0.11	土師器、鉄釘(106)	
37土坑	2区	Ab	円形	0.70×0.74	0.13		底に炭が溜まる
79土坑	2区	A	隅丸方形	0.83×0.64	0.18		
115土坑	3－1区	B	円形	0.70×0.70	0.10		
116土坑	3－1区	A	隅丸方形	0.80×0.80	0.18		
117土坑	3－1区	A	隅丸方形	0.50×0.46	0.15		
122土坑	3－1区	B	楕円形	0.50×0.40	0.14	土師器	一部削平受ける 赤色焼土ブロック含
123土坑	3－1区	B*	楕円形	2.05×0.75	0.28	土師器、須恵器 鉄釘(177～191)	124土坑を削平 116・117土坑に近接
124土坑	3－1区	A	隅丸方形か	0.50×0.50	0.10		123土坑によって削平を受ける
135土坑	3－1区	A	隅丸三角形	1.40×1.03	0.30		
139土坑	3－1区	B	円形	0.55×0.55	0.10		
140土坑	3－1区	Ab	隅丸方形	0.76×0.66	0.12		底に炭が溜まる
141土坑	3－1区	Ab	隅丸方形	1.06×0.70	0.20	土師器	埋土中に標石あり 底に炭が溜まる
142土坑	3－1区	B	楕円形	0.78×0.44	0.40	土師器(174) 弥生土器(175)	周囲にピット4あり、覆屋か 埋土上面に標石あり
179土坑	3－1区	A	隅丸方形	1.20×1.20	0.30	土師器、須恵器(176)	8世紀代
195土坑	3－1区	A	楕円形	2.40×1.10	0.26		弥生時代の遺構の可能性あり
343土坑	3－2区	A	隅丸方形	0.75×0.45	0.20		
390土坑	3－2区	A	隅丸方形	1.00×0.68	0.18		
394土坑	4－1区	A	楕円形	1.17×0.90	0.05		
396土坑	4－1区	A	隅丸方形	1.05×0.50	0.15		
85土坑	4－2区	B	円形	0.67×0.72	0.12		
88土坑	4－2区	B	楕円形	0.95×0.14	0.14		
470土坑	4－2区	Ab	隅丸方形	1.19×0.95	0.33		底に炭が溜まる
471土坑	4－2区	B	円形	0.58×0.46	0.09	弥生土器	
473土坑	4－2区	Ab	円形	1.14×1.02	0.30		底に炭が溜まる
372土坑	5区	B	円形	0.90×0.90	0.24		
1土坑	6区	Ab	隅丸方形	0.80×0.50	0.20	土師器	底に炭が溜まる
2土坑	6区	Ab	楕円形	1.00×0.72	0.14		底に炭が溜まる
3土坑	6区	Ab	楕円形	1.00×0.76	0.22		底に炭が溜まる
4土坑	6区	B	円形	0.30×0.30	0.50		

遺構名	調査区	分類	形状	規模(m)	深さ(m)	出土遺物(図面番号)	備考
101土坑	7区	Bか	楕円形	1.93×0.95	－		2枚の炭層がややずれる ようにして広がっている
361土坑	8区	Ab	隅丸方形	0.98×0.63	0.10		底に炭が溜まる
362土坑	8区	Ab	隅丸方形	1.10×0.90	0.16		底に炭が溜まる
363土坑	8区	Ab	隅丸方形	1.08×0.68	0.10		底に炭が溜まる
364土坑	8区	A	隅丸方形	1.50×1.10	0.10		
365土坑	8区	A	隅丸方形	1.00×0.80	0.10		
366土坑	8区	Ab	隅丸方形	1.04×0.86	0.15		埋土に炭が溜まる
367土坑	8区	A	隅丸方形	0.80×0.56	0.16	須恵器(819～823)	
368土坑	8区	A*	楕円形	0.74×0.30	0.10		埋土炭が溜まる、開口部側に炭・焼土が溜まる(568土坑)
369土坑	8区	B	隅丸方形	1.20×0.98	0.22		
370土坑	8区	B	隅丸方形	0.90×0.75	0.10		
371土坑	8区	B*	長方形	2.31×1.06	0.35	鉄釘(824～832)	木炭槨木棺墓、底に炭敷き 木棺規模：195×0.36
374土坑	8区	B	隅丸方形	0.45×0.45	0.26		
552土坑	9区	A	隅丸方形	0.80×0.65	0.10		
557土坑	9区	B	円形	0.50×0.50	0.10		
561土坑	9区	A*	楕円形	0.40×0.20	0.10		底に炭が溜まる
562土坑	9区	Ab	隅丸方形	1.05×0.75	0.25		底に炭が溜まる
200土坑	10区	Ab	円形	1.10×1.10	0.24	須恵器、土師器	底と上層に炭が溜まる
264土坑	10区	Ab	円形	0.70×0.70	0.17		底に炭が溜まる

金龍寺旧境内跡

遺構名	調査区	分類	形状	規模(m)	深さ(m)	出土遺物(図面番号)	備考
9土坑	1区	Ab	隅丸方形	0.82×0.74	0.25		埋土に炭が溜まる
10土坑	1区	Ab	隅丸方形	1.15×0.92	0.25		埋土に炭が溜まる
11土坑	1区	A	隅丸方形	1.15×0.92	0.20		
13土坑	1区	A	隅丸方形	0.90×0.63	0.25		
20土坑	1区	A	隅丸方形	0.94×0.97	0.23	弥生土器(890)	弥生時代の谷内に位置する
24土坑	1区	A	隅丸方形	1.32×0.60	0.20		
31土坑	1区	Ab	隅丸方形	1.50×1.34	0.15		炭が溜まる
36土坑	1区	B	楕円形	1.65×1.18	0.16		一部が張り出し
50土坑	1区	B	隅丸方形	1.85×1.55	0.18		
26土坑	1区	A	－	－	－		記録なし
27土坑	1区	A	－	－	－		記録なし
51土坑	1区	A	－	－	－		記録なし
1土坑	2区	A	隅丸方形	1.10×0.96	0.18		
2土坑	2区	B	隅丸方形	1.00×0.90	0.10		
4土坑	2区	Ab	不整形	1.20×1.16	0.25	須恵器(上面、908)	2つの遺構が重複していた 可能性あり、埋土に炭が溜まる
5土坑	2区	B	隅丸方形	1.04×0.90	0.10		
6土坑	2区	B	隅丸方形	0.74×0.66	0.10		

※ A ＝ 被熱を受け赤褐色に変色したタイプ、 B ＝ 埋土に炭が多く含まれるタイプ
※ A*は短辺の片側が開口するもの、土師器焼成坑の可能性あり
※ Ab ＝ 底部および埋土に炭が溜まるタイプの被熱した土坑
※ B*は縦長の特殊土坑

遺構面で検出されていることから、基本的には古代に属する遺構と判断している。

焼土坑の分類と性格　これらの焼土坑は、壁面が被熱して赤褐色に変色する（A類）と、壁面は被熱していないが埋土に顕著な炭や焼土の堆積がみられる（B類）の2種に大別できる。

この中で後者の灰や炭が顕著にみられるB類土坑は、基本的には0.5～1.0 m程度の規模で、円形または隅丸方形を呈する。このうちの3－1区123土坑と8区371土坑については、長さが2 m、幅1 m程度の縦に長い形状の土坑で、埋土から鉄釘がまとまって出土するなど、やや特異なあり方を示す。中でも371土坑は、報告でも述べたように、検出面と断面から木棺痕跡が明瞭に観察されており、木棺を木炭で囲んだ木炭槨木棺墓と推測される。一方で123土坑は縦に長い形状の土坑で、鉄釘がまとまって出土していることから埋葬に関わる遺構と想定できるものの、検出状況から木棺の痕跡は明確ではなく、鉄釘も土坑の底部に敷き詰められた炭層から出土しているため、木棺が直接安置されていた可能性は想定しがたい。さらに出土した鉄釘を観察すると、いずれも錆膨れが著しく遺存状態が悪く、二次的に被熱したと判断することができる。このような遺構の検出状況と鉄釘の状態を踏まえると、釘で緊結された木棺ないしは木櫃が、一度火にかけられた後に、棺釘ごと残った灰と一緒に埋められた土坑であると推測することができる。

その他の多くの土坑は、123土坑や371土坑のように火葬に関係する遺構として断定するまでの根拠は見出せないが、2区33土坑からも鉄釘が出土しているように、やはりこれらの遺構についても火葬に関わる遺構であったと推測される。このように考えると、今回の調査で多数検出された埋土に炭を納めたB類土坑については、小林義孝が“火葬灰埋納土壙”と命名した、火葬によって生じた炭や灰を拾骨後に移して埋納した土坑[10]と、同一の性格を有すると考えられる。今回の調査では骨片が全く検出されていないため､状況証拠や鉄釘の存在以外に火葬に関わる積極的な根拠を見出しがたい側面もあるが、遺骨を直接納めた土坑ではないために骨片が残存しないという理由であれば、合点がいくものとなる。

その一方で前者の被熱したA類土坑は、壁面が赤褐色に変色し硬化している状況から、この遺構が何かを高温で焼いたものであることは容易に察しがつく。これらの遺構は、調査地内で散在して数多く検出されており、一見するとまとまりがないようにもみえるが、例えば2区の37土坑（A類）と32土坑（B類）、3－1区の116・117・124土坑（A類）と115・123土坑（B類）、4－2区の470土坑（A類）と85土坑（B類）の関係のように、被熱したA類焼土坑に近接した位置で灰・焼土の詰まったB類焼土坑が検出されている例が多々みられる。そのためこの両者が有機的な関係をもつことが想定でき、A類焼土坑については遺体を荼毘に付すための火葬遺構であったとする仮説が成り立つ[11]。こうした場合、A類焼土坑の大きさが基本的には0.5～1.0 m程度のものが多数を占めることから、一見すると人体を火葬する上で小さく感じるかもしれないが、例えば江戸時代の墓の調査例などを参照すると、江戸では一辺0.5 m程度の方形の木棺が検出される事例は多くみられ[12]、また大坂城の調査では、0.6 × 0.4 mの大きさの竹行李や、0.7 × 0.3 mの規模のムシロに巻かれた老齢の女性が特に関節を外された様子もなく発見されている事例[13]などから、棺を納める土坑として規模が小さすぎるということはなく、火葬を十分おこなうことのできる規模であったことがわかる。また、4－1区の丘陵の頂部付近からは、被熱した浅いピット状の遺構（398～402、424～434）が16基検出されているが、これについては立地が丘陵頂部であるため上面が流出している可能性もあり、A類焼土坑と同様の性格であったと推測される。

なお、このふたつのタイプの土坑について両者の検出数を比較すると、A類が50基であるのに対し、B類が29基でやや少ない。ただしA類とした土坑の中には、埋土の底を中心に炭や焼土が溜まったタ

イプの土坑（Ａｂ類）が 22 基みられることから、このＡｂ類土坑を荼毘に付して拾骨した後に、灰を別の土坑に移さなかったものと考えることもでき、火葬の際に灰を納め直す行為が必ずしもおこなわれていたわけではなかったことを示しているだろう。また、検出されたＡ類・Ｂ類をあわせた焼土坑のうち、21 土坑・141 土坑（Ａ類）、11 土坑・142 土坑（Ｂ類）では、埋土上層から人頭大から拳大程度の大きさの石材が出土しており、土坑のありかを示す標石と考えられる。その場合、荼毘を付した場所（Ａ類土坑）、灰を納めた場所（Ｂ類土坑）がともに、重要視されていたことを示す。この他には、３－１区で検出された 142 土坑（Ｂ類）では、四周から一辺 1.0 ～ 1.2 ｍ間隔で４基のピットが検出されており、焼土坑に簡素な覆屋が伴っていたと判断することができる。これについては、福島県相馬市武井Ｅ遺跡[14]などに類例があり、古代火葬墓の葬送儀礼に関わる遺構として注目される。

火葬遺構としての評価と課題　今回の調査では火葬の際の火化遺構と想定されるＡ類土坑と、拾骨したのちに残った灰を納めたＢ類土坑が多数検出されている一方で、実際に遺骨を納めた納骨遺構、具体的には蔵骨器を伴うような典型的な火葬墓が検出されていない点は、これらの焼土坑を火葬関連遺構として扱う上で大きな問題となる。今回の調査で唯一納骨遺構と推定が可能な遺構としては、４－２区で検出された 472 土坑を挙げることができる。この 472 土坑は上面が削平を受けていたものの、1.4×0.62 ｍの縦長の土坑に土師器甕が胴部を底にして据えられた状態で検出されており、中に火葬骨が納められた可能性も想定する必要があるだろう。ただしこの 472 土坑の他には納骨遺構が検出されていないため、焼土坑を火葬関連遺構とみなすならば、①.納骨遺構が主に今回の調査地外に営まれているか、②.灰を納めたＢ類土坑が浅いものが多いため削平されてしまったか、③.明確な蔵骨器をもつ火葬墓が不在であるか、などといった仮説を想定するほかにない。

この中で①.納骨遺構が調査地外に営まれているといった仮説については、今後の調査の進展を待つ必要があるが、例えば近隣の梶原古墳群[15]や古曽部・芝谷遺跡[16]などの調査では、古代の納骨遺構（火葬墓）や土器棺墓が検出されているように、群集するかどうかは別にして、周辺一帯の山中が墓域となっていた可能性もある。また、今回の調査地周辺では新名神高速道路建設に関連する調査が進行しており、隣接する成合地獄谷遺跡では古代の墓地に関する調査成果も挙がっていることから、それらの成果をふまえた上で改めて検討する必要がある。②.灰が納められたＢ類土坑は浅いものが多いために削平されてしまった、という仮説については検証の余地がなく、現在のところ確実に蔵骨器と認定できるような壺Ａなどの器種の出土数は極めて少ないため、積極的な根拠はやや見出しがたい。ただし 123 土坑の北西数十ｍの位置にあたる２区の包含層中からは、壺Ａと推測される底部片（54・55）も出土しており、削平されたＢ類焼土坑の上面か、もしくは周辺に別の蔵骨器を伴うような納骨遺構（火葬墓）の存在を想定しておく必要はある。また 360 石列は、先にも述べたように大宰府市宮ノ本遺跡の火葬墳墓の土壇周囲の列石と類似しており、これについては現状では墓壙がみつかっていないものの、西側の未調査地にまで遺構が広がることが想定されるため、納骨遺構の可能性は残される。一方で、③.明確な蔵骨器をもつ火葬墓が不在という仮説については、拾骨しないまま灰を納めたＢ類土坑にそのまま埋葬したことも考慮する必要があるが、今回の調査ではＢ類土坑からは骨片が出土した例がなく、やや根拠に欠ける。ただし蔵骨器の納骨された典型的な火葬墓自体が普遍的な存在とは評価しがたい側面もあり、一般的には高位階層の所産と推測することができるため、明確な納骨遺構に埋葬されない火葬の存在も考慮する必要があり、今回の調査事例を念頭に古代の火葬遺構については、改めて検討をおこなう余地があるだろう。（伊藤・笹栗）

4．成合遺跡と周辺の古代の景観復元

これまでの検討から、成合遺跡の古代の遺構・遺物は８世紀から９世紀後半にかけて存続し、特に９世紀前半から中頃（平安京Ⅰ期新からⅡ期古）にかけてピークをむかえたことが明らかとなった。また古代の遺構・遺物の広がりは丘陵上の一部（２区・３－１区・３－２区）に偏るが、調査地内では火葬に関連する焼土坑が散在して多数認められ、周辺一帯が墓域であったことも判明しつつある。

さらに遺跡内からは仏教関連遺物も出土したことから、遺跡内に寺院が存在した蓋然性が高まってきたが、ここで気になるのは古代の遺構・遺物が検出された２区から真西ちょうど 200 mの地点に位置する春日神社と、そこに隣接してあったとされる悉檀寺の存在である。悉檀寺については、『日本三代実録』の貞観一六年（874 年）十二月二五日条に登場し、貞観五年に天台別院となり、同一六年に官寺に列せられたと記されており、記事からは国家安泰を祈祷するための官寺であったことがわかり、中世には春日神社の神宮寺となっていたことが窺える。ただし悉檀寺の位置については、春日神社に悉檀寺什物とされる大般若経が伝蔵し、社殿の周辺から平安時代後期の軒瓦が数点採集されていることから、現在は春日神社の一帯の区域が悉檀寺跡として包蔵地に指定されているものの[17]、これまでに高槻市教育委員会によっておこなわれた調査では緑釉陶器等を含めた平安時代の遺物も出土しているが、明確な遺構は検出されておらず、悉檀寺の実態に迫るような成果は十分に挙がっていなかった[18]。そのため今回の成合遺跡の調査で検出された遺構・遺物は、『日本三代実録』に悉檀寺が記載された貞観年間をやや遡る９世紀中頃を中心とした時期のものであることからも、長らく実態が不明であった悉檀寺に関連する遺構・遺物の可能性が高まったと言えるだろう（図 198）。悉檀寺自体は官寺として列せられたと記されたように、当時は隆盛を極めた寺院であったことが推察されるが、出土した緑釉陶器の唾壺の存在は、まさにその記事を裏付けるような資料となりうる。

また、９世紀中頃を中心とした時期の遺物の出土が多い一方で、８世紀代の遺物も少なからずみられることから、その時期に寺院の創建が遡る可能性がある。この時期の遺物の中で特に注目されるのが平城宮系の 16 軒丸瓦で、これについては繰り返しになるが、同笵瓦の存在と製作技法の特徴から梶原瓦窯跡で生産されたことが確実で、隣接する梶原寺と成合遺跡との間に強い結びつきがあったことを示している。梶原寺は成合遺跡から南東 2.5km の旧山陽道に面した交通の要所に位置し、出土瓦の様相から官や摂津職などの公権力との結びつきが指摘される[19]のに対し、成合遺跡は旧山陽道からやや奥まった山間部に位置し、丘陵上に立地することからも山林寺院であることが窺われ、ふたつの遺跡の性格は異なっていたことがわかる。このような山林寺院については、平地寺院との結びつきの中で８世紀代には各地に出現したと考えられており[20]、今回の調査で出土した 16 軒丸瓦は、平地寺院である梶原寺と成合遺跡の山林寺院との間の、寺院間のネットワークを具体的に示す資料として重要である。ただし８世紀代の遺構・遺物は９世紀代に比べると希薄で、大規模な平坦面の造成が９世紀代に下る可能性が極めて高いことを踏まえると、初期の規模は小さく、はじめは簡素な山林修行の場であったものが、後に発展したと考えることができる。

その後の８世紀末から９世紀初頭頃の様相については、遺物の出土がごく僅かであるため実態がはっきりしないが、５区では須恵器窯が操業しており、また西側の未調査地にその時期の遺構・遺物が広がる可能性が想定されることからも、須恵器窯との関係については当然考慮しておく必要がある。そして９世紀前半から中頃には大規模な平坦面の造成がおこなわれ、遺物の出土量も多いことから、この時期に成合遺跡の寺院が大きく発展したと考えることができ、この点は『日本三代実録』の悉檀寺の記事と

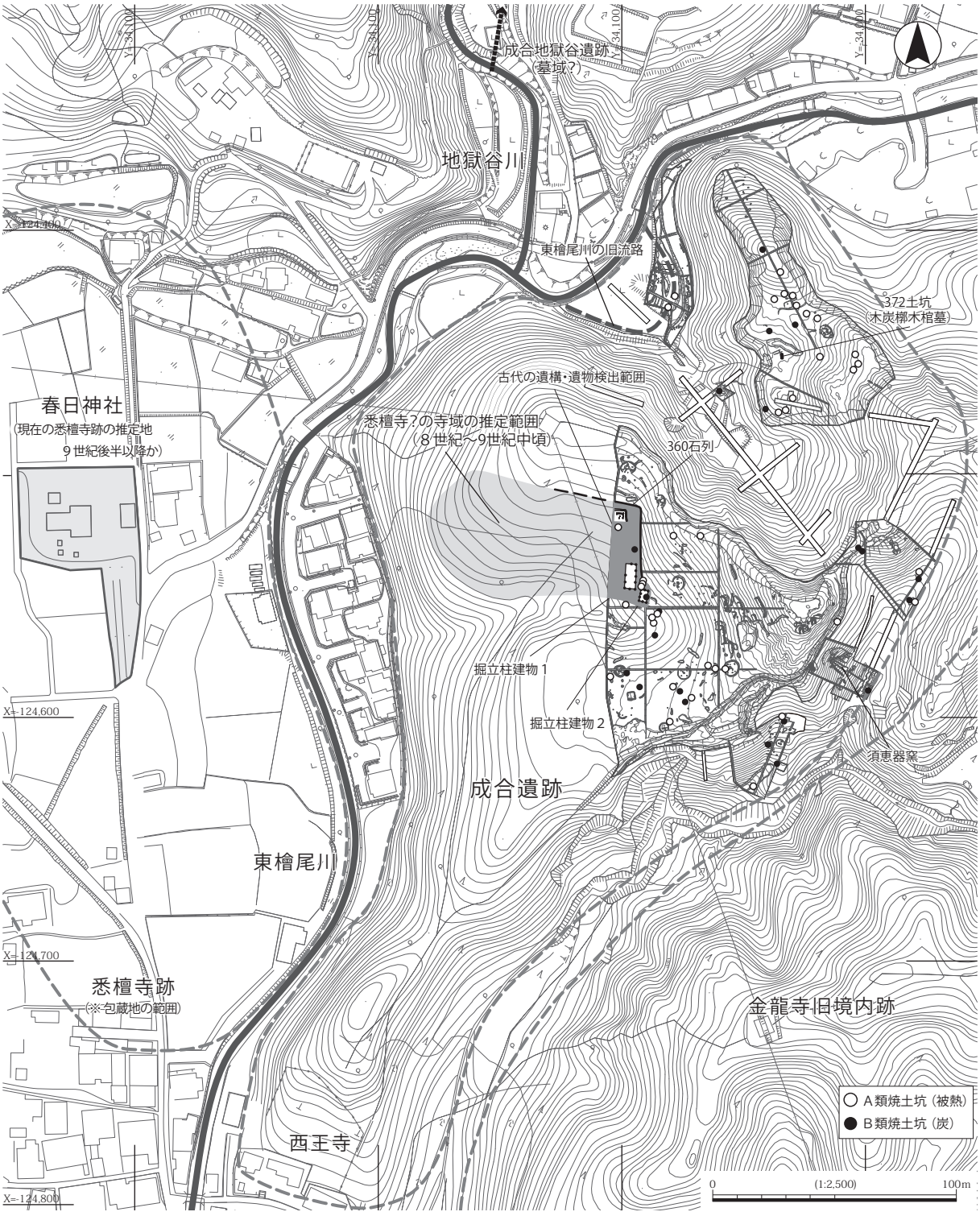


図 198　成合遺跡と周辺の古代（8・9世紀）の景観

もよく整合する。ただしその一方で、記事に悉檀寺が登場する9世紀後半以降には、遺物の出土量が極端に少なくなるため、この時期に丘陵部から平野部に寺域を移動させた可能性を想定する必要がある。[21)]

その他の遺構のうち、調査地内で多数検出された焼土坑については、時期を具体的に示す遺物の出土は少ないが、ほぼ同時期のものとして差し支えなく、先の検討から火葬に関連する遺構と判断できる。このような焼土坑は調査地内で散在することから、成合遺跡の寺院関連遺構周辺の山中一帯に火葬関連の遺構が広がっていたことがわかる。さらに当遺跡の北側に位置する成合地獄谷遺跡でも、当センター

が現在おこなっている調査で火葬関連遺構が多数検出されていることから、墓域がさらに拡大することが確実で、火葬関連遺構の実態の解明も期待される。また成合遺跡の東 0.8km の山中に位置する金龍寺は、延暦九年（790 年）に参議安部是雄によって安満寺として創建されたものが前身とされているが、当センターによる寺院が所在する山裾の調査で 8 世紀代を中心とした時期の遺物が豊富に出土しており、それとの関連も注目される。調査では、この時期の遺構としてはっきり認識できるものは少なかったが、出土遺物の中には円面硯や石製巡方などが含まれるなど、公的な性格や高位階層の存在も推定されている[22]。このような当遺跡の周辺域を含めた調査の成果からも、山陽道からやや奥まった山間部に位置するこの成合地区に、8 世紀から 9 世紀にかけて寺院に関連する遺構や遺物とそれに付随する火葬墓群の存在が近年の調査で徐々に明らかとなってきており、『日本三大実録』の記事や出土遺物の内容などからも、山林修行の場としてのこの地区全体が特殊な位置を占めていたことが窺え、このような基盤の上に成合地区の開発が進んでいくことが想定できる。（笹栗）

第 2 節　須恵器窯（成合西王寺山窯跡）の検討

今回の調査では新たに 8 世紀末から 9 世紀初頭頃の須恵器窯が 1 基確認された。この窯跡は調査の前には全くその存在が知られていなかったため、新たに成合西王寺山窯跡と命名されている。

1．窯体と付属遺構の検討

窯体の構造　須恵器窯は地上式構造の単室の窖窯で、全長は水平距離で 6.65 m、斜距離で 7.5 mをそれぞれ測る。窯尻から前庭部にむかって徐々に幅が広がり、焚口部分ではハの字形に広がる形状で、幅は窯尻付近で 0.8 m、中央付近で 1.05 m、焚口で 1.65 mを測る。焚口から排煙口までの高さが 3.5 mあり、焚口前端から奥にむかって 2.4 mまでは緩やかな傾斜で徐々に立ち上がるが、その奥は 30° 前後の角度で急激に立ち上がる。奥壁は明確には認められないが、窯尻の末端は傾斜が変わりきつく立ち上がっており、排煙口は上向きに取り付いていたことがわかる。須恵器窯としては小型の部類に入るが、窯体の傾斜がきついことから火の引きが強く、高温で一気に製品を焼成することに長けた構造であるが、一方で蓄熱性が低く大型品の焼成にむかない。これについては、出土遺物の中で半数以上を供膳具が占めるなど、器種組成からも構造の特徴が追認できる結果が得られている。

天井は崩落して窯体内に落ち込んでいたが、落ち込んだ天井の断面の観察からアーチ状の天井が復元でき（図版 34 － 3）、落ち込んだ天井の上層には被熱したシルト層がくまなく堆積していたため、天井は保護土で被覆されていたことが判明している。さらにこの天井の落ち込みがみられた範囲から、排煙口の大きさが 0.65 m、天井の長さが水平距離で 4.35 mに復元できる。床面は精良な粘土による貼床で、側壁にかけて U 字状に立ち上がる。さらにこの内側にはスサや礫混じりの粗い粘土が貼りつけられており、側壁と天井が一体的に構築されていることがわかるが、窯体の内外で天井の架構痕跡は検出されていないため、木組を用いない工法で天井が架構された可能性が高い。また灰原からは、分炎柱を想起させる円柱状の 759 窯壁が出土している。棒状の空洞部分に本来は木芯が存在し、この木芯に粗い粘土が巻き付けられていたようであるが、床面には支柱の痕跡がみられないため、仮設の支柱であったと考えられる。ただし、分炎柱は灰釉陶器に特有の構造で[23]、畿内の須恵器窯では類例がこれまで知られていないため、分炎柱の有無については検討の余地がある。

窯体の床面と窯側部の断ち割りからは、まず窯体の形状に沿って斜面が掘り込まれ、窯体が構築され

たことがわかる。この掘り込みは中央付近が最も深くなるが、焚口にむかって徐々に浅くなり、焚口や前庭部が盛土によって整えられていたことが判明した。また、掘り込みの浅い窯尻付近や焚口付近の窯側部は盛土によって窯体が保護されるなど地上化が進行しており、全体的にも窯体が盛り上がる形状であることなどから、本窯の構造を地上式とみなすことができる。

窯ごとの形態や構造、規模の違いについては、窯構造の技術系譜や生産品目の違いによっていくつかの系統が存在するが、大まかな変化の流れとしては地下式構造から半地下式、地上式へと変化し、時期が新しくなるにつれて小型になる傾向がある。陶邑窯を除いた近畿の、主に淀川以北の地域の８世紀以降の須恵器窯は、全長６～９m程度の小型の窯が一般的で、窯尻から開口部にむかって徐々に開く形態のものが多く、中には焚口がハの字形に開く構造もみられるようになり、播磨を中心とした地域では８世紀後半以降に窯体の地上化も進行する[24]。陶邑窯については８世紀後半以降に窯数が極端に減少するが、この時期以降は大型の窯がみられなくなり、小型窯が一般化するなど[25]、近畿各地の諸窯と同調する傾向がみられる。このようにみると、規模や平面形態、構造など、いずれの面においても、本窯はこの時期の近畿地方で通有の形態であることがわかる。なお焚口部の石組側壁については、全国で 160 例以上が知られ、６世紀末以降に北部九州から東北までの範囲に分布し、９世紀以降は信濃以東の東山道の諸国に多くみられる構造である[26]。近畿地方では今のところ陶邑古窯址群で検出例がなく、播磨や摂津、丹後の７・８世紀代の窯跡に類例があるため[27]、窯構造の系譜を示す可能性があるが、石組みが側壁の片側のみのものは本窯以外に類例がない。

操業回数　灰原は前庭部の斜面下方に広がるため堆積が薄く、操業回数を示す間層は認められなかったが、窯体や周辺の付属遺構の埋土の堆積状況から、操業回数を推測するための痕跡をいくつか見出すことができる。まず窯体の焚口部分では、床面に広がる遺物の直下で整地層（図 103・104 －埋土 33）が確認され、そのさらに下の面は黒褐色に酸化した貼床面であったため、操業が複数回に渡っていたことが判明した。また燃焼部付近（図 104 －Ｄ－Ｄ’、Ｅ－Ｅ’）の貼床面の断ち割りでは、還元面が２面分確認されており、ここでも複数回の操業を認めることができる。

窯体の周囲の付属遺構のうち、450 溝の窯尻の埋土では、間層を挟んで炭や酸化した赤色の焼土が堆積した２層の焼土層が確認でき（図 103 －埋土 10・14）、これは排煙口からの炎の吹き出しによって形成された層であると推測される。さらにこの焼土層と間層を挟んださらに上層（図 103 －埋土６）には、酸化した焼土は含まないが、炭とともに焼成不良のものも含めた須恵器が多数出土することから、この層も操業に関わる可能性が高く、埋土の堆積からは３回以上の操業を見込むことができる。また、窯側部側の溝の堆積も大きく３層に分ける事が可能で、窯尻の埋土の堆積と対応する可能性が高く、いずれの層からも炭や焼土とともに焼成不良の須恵器や窯壁片が出土している。この 450 溝と窯体を挟んで反対に位置する 452 平坦面では、各層に須恵器や焼土が含まれ、平坦面が徐々に堆積が進んで埋没していく様相を呈していたため、操業が複数回に渡っていたと考えることができる。このように窯体や窯体周囲の付属遺構の埋土の堆積状況からは、少なくも３回以上の操業を見込むことが可能である。

窯体の補修と改変　窯体の補修や改変については、焚口付近の天井や側壁にその痕跡が残る。天井は窯体内に落ちこんだ状態で検出されたことを先に述べたが、焚口前端から 1.8 mまでは天井の落ち込みがみられなかったものの、この部分の奥側 0.5 m分は床面が還元して青灰色に変色していたため、操業時にはこの部分にも天井が架かっていた可能性が高い。窯体内の温度をあげるためには酸素を遮断する必要があり、窯焚きの際には開口部を絞っていたことが想定されるが、逆に窯出しの際に製品を取り出す

のには狭くなってしまうため、操業の度に天井を破壊していたことが推測できる。

天井や側壁はスサ入りの粗い粘土で構築されているが、何度も窯焚きがおこなわれることで粘土が収縮して痛むことが予想されるが、これについては窯体の側壁内面に指による粘土のナデつけ痕跡がみられる箇所もあるため（図版 36 － 3）、痛みの激しい部分を中心に補修がなされていたことがよくわかる。その一方で、貼床面については大がかりな貼直しの痕跡がみられないことから、基本的には同一の床面で操業を続けられたと考えられるが、先にも述べたように燃焼部付近では還元面が 2 面分認められるなど部分的な補修の痕跡はみられる。また、左側壁の焚口前端の石組側壁についても、石組の背後に細かな窯体片がみられることから補修時に付加されたものであることがわかり、燃焼部から焚口の開口部付近については窯の操業に伴って破壊と補修が繰り返されていたことが窺われる。

窯詰めの方法　最終操業時の床面上では、中央付近から焚口にかけて須恵器がまとまって出土した。破片が散乱した状態で検出されており、最終操業後の失敗品が焚口前面に掻き出されたまま窯が廃棄されたことがわかる。ここから出土した須恵器のうち、杯 B やその他の壺類や甕類は焼成が良いものが多数を占めるのに対し、杯 A や皿は焼成が悪いものが 80％以上の割合を占める（表 10）。出土した須恵器全体の中でも平底の供膳具の焼成が悪い比率が高いことから、窯体内の遺物の出土状況から製品の配置の方法を復元することは難しいが、平底の供膳具が火の回りの悪い位置に置かれていた可能性が極めて高い。

ところで、450 溝の埋土からはまとまって須恵器が出土しているが、その中でも特に窯背部には焼成不良の須恵器が集中しており（図版 39 － 3）、これは排煙口から製品の窯出しをおこない、失敗品をそのまま窯背部に破棄したことを示している。ここから出土した須恵器は杯 A や皿など平底の供膳具が全体の 40％以上を占めており、これらの大半は焼成不良であることから、平底の供膳具が窯尻付近で焼成されたことを裏付ける根拠となる。その他の器種については焼成が良好なものも多いが、破片が多く、熔着痕跡や破面に 2 次焼成を受けたものも多いため、焼台として転用されたかませ片などが多かったことが窺える。なお、9 世紀末頃の篠窯の大谷 3 号窯でも、焼成不良の杯 A の出土量比と床面の須恵器の出土状態から、本窯と同様に杯 A が窯尻付近で焼成されたことが推測されている[28)]。

また、窯尻付近の床面では半裁状態の杯 B が逆さ向きに床面に据えられていたが、（図版 36 － 1）これらの破面はいずれも 2 次的な焼成を受けており、失敗品を巧みに利用しながら窯詰めをおこなっていたことがよくわかる。床面には凹凸がみられるものの、製品を据えるための恒久的な段がないため、窯体内から出土する床面と同質の粘土ブロックや須恵器の失敗品を操業の度に利用しながら製品を配置していたものと思われる。

出土した熔着資料の中には、供膳具については重ね焼きの方法を具体的に示す資料がいくつかある。このうち杯蓋と杯 B はセットで焼成され、杯 B の上に蓋を逆位で積み重ね、その上にこの杯蓋・杯 B のセットを天地逆転させて重ね焼きされ（746 ～ 749）、これが柱状に積み上げられていたと考えられる。一方で杯 A や皿に関しては、正位で積み上げられており（750 ～ 753・755）、少なくとも 6 枚以上が積み重ねられたことがわかる（751）。このような供膳具の重ね焼きの方法は、ほぼ同時期の成合琴堂窯跡[29)]や、やや後出する時期の篠窯のマル山 1 号窯跡[30)]との共通性を示す。その一方で、確認できた資料が少なく主体的なあり方ではないが、本窯では杯 B や杯蓋の中にも単一器種で正位に積み重ねられた熔着資料（754）も一部でみられる。供膳具に比べると他の器種では具体的に焼成方法を示す熔着資料が少なく、756 壺などがその一端を示すに過ぎないが、壺類や鉢類等に小破片が熔着している個体は多数

表 10　成合西王寺山窯跡出土須恵器の器種ごとの焼成比率

1．窯全体出土須恵器の焼成

器種		総計	焼成				
			良	やや良	普通	やや不良	不良
杯A	破片数	1304	547 (41.9%)	179 (13.7%)	18 (1.4%)	285 (21.9%)	275 (21.1%)
	重量(g)	34725	19125 (55.1%)	4835 (13.9%)	470 (1.4%)	6150 (17.7%)	4145 (11.9%)
杯蓋	破片数	8544	6009 (79.7%)	600 (8.0%)	15 (0.2%)	357 (4.7%)	563 (7.5%)
	重量(g)	282205	240505 (85.2%)	22595 (8.0%)	475 (0.2%)	11250 (4.0%)	7380 (2.6%)
杯B	破片数	3274	2504 (76.5%)	213 (6.5%)	3 (0.1%)	187 (5.7%)	367 (11.2%)
	重量(g)	181525	158235 (87.2%)	11025 (6.1%)	130 (0.1%)	5955 (3.3%)	6180 (3.4%)
杯身･口縁部（杯Aor杯B）	破片数	4228	2747 (65.0%)	278 (6.6%)	7 (0.2%)	510 (12.1%)	686 (16.2%)
	重量(g)	43540	33755 (77.5%)	2365 (5.4%)	85 (0.2%)	3560 (8.2%)	3775 (8.7%)
皿	破片数	1750	554 (31.7%)	197 (11.3%)	7 (0.4%)	263 (15.0%)	729 (41.7%)
	重量(g)	37340	18645 (49.9%)	5900 (15.8%)	200 (0.5%)	5325 (14.3%)	7270 (19.5%)
平底･底部（杯Aor皿）	破片数	2894	650 (22.5%)	212 (7.3%)	7 (0.2%)	370 (12.8%)	1655 (57.2%)
	重量(g)	44095	14000 (31.7%)	4260 (9.7%)	100 (0.2%)	6155 (14.0%)	19580 (44.4%)
その他	破片数	12428	7112 (57.2%)	386 (3.1%)	14 (0.1%)	345 (2.8%)	4571 (36.8%)
	重量(g)	360345	319825 (88.8%)	11470 (3.2%)	125 (0.0%)	6180 (1.7%)	22745 (6.3%)

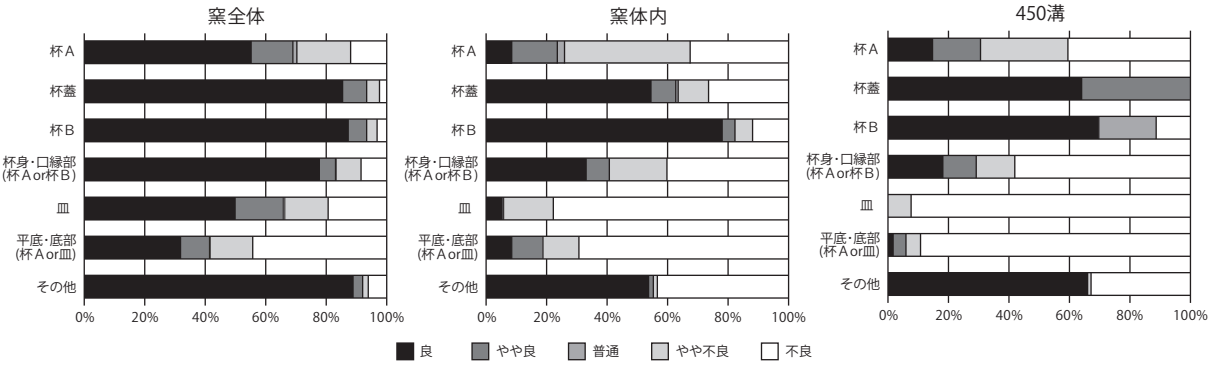
2．窯体内床面直上出土須恵器の焼成

器種		総計	焼成				
			良	やや良	普通	やや不良	不良
杯A	破片数	167	8 (4.8%)	18 (10.8%)	1 (0.6%)	71 (42.5%)	69 (41.3%)
	重量(g)	2250	190 (8.4%)	340 (15.1%)	50 (2.2%)	940 (41.8%)	730 (32.4%)
杯蓋	破片数	462	111 (24.0%)	25 (5.4%)	1 (0.2%)	53 (11.5%)	272 (58.9%)
	重量(g)	8640	4710 (54.5%)	720 (8.3%)	70 (0.8%)	865 (10.0%)	2275 (26.3%)
杯B	破片数	397	134 (33.8%)	18 (4.5%)		58 (14.6%)	187 (47.1%)
	重量(g)	18040	14075 (78.0%)	790 (4.4%)		1065 (5.9%)	2110 (11.7%)
杯身･口縁部（杯Aor杯B）	破片数	359	61 (17.0%)	26 (7.2%)		74 (20.6%)	198 (55.2%)
	重量(g)	2245	745 (33.2%)	170 (7.6%)		430 (19.2%)	900 (40.1%)
皿	破片数	587	3 (0.5%)	2 (0.3%)		99 (16.9%)	483 (82.3%)
	重量(g)	4190	220 (5.3%)	20 (0.5%)		690 (16.5%)	3260 (77.8%)
平底･底部（杯Aor皿）	破片数	272	11 (4.0%)	19 (7.0%)		18 (6.6%)	224 (82.4%)
	重量(g)	2630	220 (8.4%)	270 (10.3%)		320 (12.2%)	1820 (69.2%)
その他	破片数	1778	180 (10.1%)	17 (1.0%)		20 (1.1%)	1561 (87.8%)
	重量(g)	10000	5370 (53.7%)	150 (1.5%)		145 (1.5%)	4335 (43.4%)

3．450溝出土須恵器の焼成

器種		総計	焼成				
			良	やや良	普通	やや不良	不良
杯A	破片数	82	9 (11.0%)	10 (12.2%)		29 (35.4%)	34 (41.5%)
	重量(g)	1280	190 (14.8%)	200 (15.6%)		370 (28.9%)	520 (40.6%)
杯蓋	破片数	16	12 (75.0%)	4 (25.0%)			
	重量(g)	1420	910 (64.1%)	510 (35.9%)			
杯B	破片数	11	4 (36.4%)		2 (18.2%)		5 (45.5%)
	重量(g)	530	370 (69.8%)		100 (18.9%)		60 (11.3%)
杯身･口縁部（杯Aor杯B）	破片数	42	6 (14.3%)	2 (4.8%)		5 (11.9%)	29 (69.0%)
	重量(g)	275	50 (18.2%)	30 (10.9%)		35 (12.7%)	160 (58.2%)
皿	破片数	26				1 (3.8%)	25 (96.2%)
	重量(g)	130				10 (7.7%)	120 (92.3%)
平底･底部（杯Aor皿）	破片数	95	1 (1.1%)	1 (1.1%)		4 (4.2%)	89 (93.7%)
	重量(g)	1195	20 (1.7%)	50 (4.2%)		60 (5.0%)	1065 (89.1%)
その他	破片数	187	15 (8.0%)			1 (0.5%)	171 (91.4%)
	重量(g)	1650	1090 (66.1%)			20 (1.2%)	540 (32.7%)

4．須恵器の焼成状況の比較（重量）



ある。また、窯体内から出土した破片は、杯Ｂに限らず破面に２次的な焼成を受けた資料も多く、製品の間に挟むかませ片として失敗品が再利用されていたことが窺える。

付属遺構の特徴と機能　本窯は窯体が斜面の中ほどに立地していたため、それに伴って溝や平坦面、土坑などの付属遺構が検出されている。灰原については窯体斜面の下方に、東西９ｍ×南北８ｍの範囲で形成されていたが、傾斜がきついため全体的に堆積が薄く、操業の停止期間を示す間層は認められなかった。平面的な遺物の出土傾向としては、谷裾部からは遺物の出土量が多く、特に重量のある壺類や甕類などが多く出土する傾向があったが、この他に顕著な偏りは見出せなかった。また、遺物の取り上げの際には灰原の上層と下層で大きく分けて取り上げをおこなったが、時期的に大差はなく、また上層と下層の遺物の接合関係も多くみられた。

周辺部の遺構のうち、450溝は窯側部から窯背部にかけて窯体をめぐるように掘り込まれているため、窯体への雨水の侵入を防ぐ機能を備えていたことは容易に察しがつく。それとともに、窯背部では窯出しや排煙調整などの作業をおこなう必要があるため、窯背部へむかう通路としての機能も備えていた可能性が高い。窯体の左右に造成された 452・453 平坦面は、窯詰め・窯出しの際に製品や薪などの仮置き場としての機能が想定される。窯体の前庭部の直下で検出された 454 土坑については、上方側を垂直気味に深く掘り込み、埋土には炭・焼土が充満するといった特徴がある。さらに出土した須恵器片は細片が多く、灰原出土の須恵器片と接合するものもあるため、須恵器窯と同時期に機能したことは確実であるが、機能や性格ははっきりしない。この他に窯体周辺からは柱穴がいくつか検出されているが、列状の並び等はみられないため、窯体に覆屋が存在した可能性は低い。また窯体にむかうための通路については、面的な調査をおこなったものの検出はされなかった。

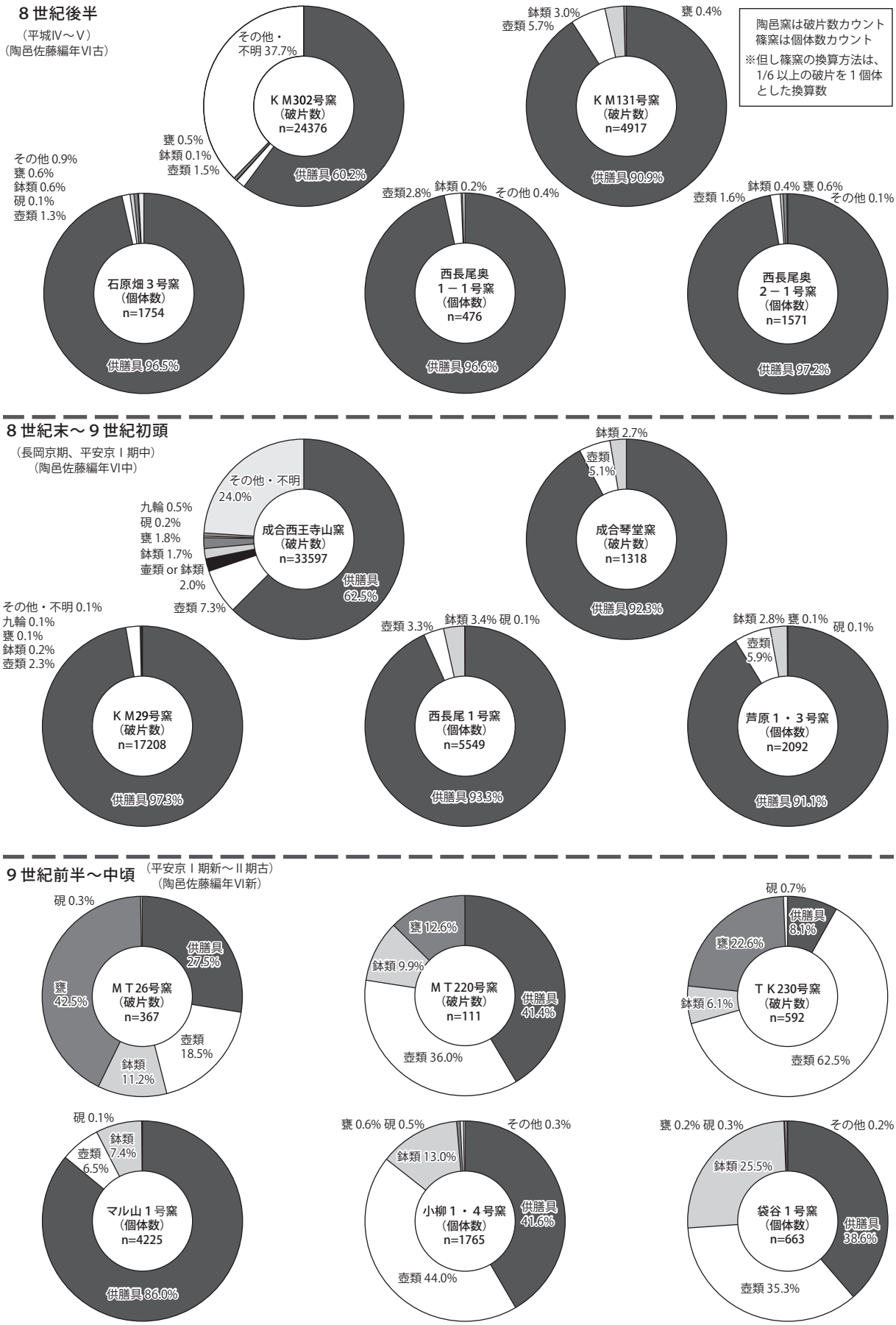
２．出土須恵器の検討

器種組成とその特徴　出土した須恵器は、窯体内と灰原、付属遺構を含めて、破片点数が３万点以上、重量が約１ｔにのぼる。器種については、供膳具が杯Ａ、杯蓋、杯Ｂ、皿Ｃが主力な生産品目で、この他に皿Ｅ（灯明皿）や高杯などがある。貯蔵具のうち、壺類は壺Ｌと壺Ｍが大半を占め、この他に短頸壺（壺Ａ）と壺蓋、広口壺（壺Ｅ、壺Ｈ、壺Ｑ）、壺Ｎ、平瓶があり、鉢類は鉢Ｄ，鉢Ｆ（すり鉢）、盤がある。甕は丸底と平底のどちらもみられ、口縁部は外反する甕Ａと短く直立する甕Ｃがあり、この他に土師器の器形と技術で製作された甕もみられる。硯は円面硯と風字硯があり、他に鉢Ａ（鉄鉢形）や花瓶などといった仏具とともに相輪の九輪部分も出土している（図 116）。

出土した須恵器のうち、供膳具の占める割合が破片数と重量で全体の 60％程度、個体数で 90％を占めるなど、供膳具が主力な生産品目であることがわかる。本窯は小型品の生産を主体とするような熱効率の良い窯構造であり、窯構造と生産された器種組成のあり方がよく一致する結果が得られている。その一方で、長頸の壺Ｌ、壺Ｍだけで 150 個体以上の出土数が確認できるなど、壺類をはじめとしたその他の器種が、破片や重量の比率で４割近くの割合を占める点は、前後する時期の周辺諸窯と比べると比率的には多いことがわかる（表 11）[31]。このように本窯は器種の種類や量が豊富で、奈良時代後半から平安時代初頭頃にみられるほぼ全ての器種を網羅している点が大きな特色であり、生産品目に円面硯と風字硯が合わせて 12 点以上あり、鉢Ａや花瓶、九輪などの仏具も含まれることから、一般的な集落というよりはむしろ都城や官衙、寺院などが製品の供給先の候補として浮かび上がる。

遺構ごとの遺物の出土傾向　出土した遺物は、全体の約 85％を灰原からの出土品で占めるが、灰原が急傾斜の斜面に広がっており、間層もみられないため、出土遺物の前後関係は把握できなかった。一方

表 11　８世紀後半から９世紀中頃の各須恵器窯の器種組成



で、窯体内をはじめとし各付属遺構の埋土からもある程度まとまって須恵器が出土しており、その中では遺構ごとに器種の偏りや、層位ごとに前後関係が明らかな資料が含まれる。

まず窯体内については、床面直上から最終操業時の失敗品が廃棄された状態で出土しており、これらについては、基本的には最終操業時に伴うものとして捉えることができる。ただしやや注意が必要で、この中で焼成が良好なものの中には転用されて焼台やかませ片を用いられたものも含まれるため、確実に最終操業に伴うものは焼成不良のものに限られ（396 ～ 408、411 ～ 429）、一方で焼台として転用されたものについては最終操業以前の失敗品となる（380 ～ 395）。また、焚口の最終床面下の整地層（埋土 33）からも少数ながら須恵器が出土しており、これについても最終操業以前の遺物とみなすことができる。最終操業時とそれ以前の須恵器を比べると、床面下整地層の 447 杯蓋をやや古く位置づけることも可能ではあるが、大半は最終床面出土の須恵器と大差がなく、本窯の操業期間を長く見積もることは困難である。また最終操業時に伴うものの中で、体部が開き気味の 402 杯Ａや高台が底部外端に取り付く 412 杯Ｂは形態的にやや新しいが、全体的にはこれをもって確実に時期が下るとは言い難いため、最終操業以前の須恵器とは明らかな型式差はないと判断することができる（図 199）。

なお口縁部内面に沈線をもつ皿ＣⅡ（419 ～ 422）は、最終床面のみから出土しており、いずれも焼成が悪いため、最終操業時に限って生産されたことがわかる。全体的な報告数は多くないが、時期的には本窯より古い８世紀中頃の篠窯の石原畑３号窯跡でまとまってみられるように[32]、長岡京期以前にやや多い傾向がある。また九輪は大サイズ（442）の最も大きな破片が灰原から出土しているが、他は全て窯体内から出土しており、出土状況から焼台として転用されていたことが判明している。

その他にも周辺付属遺構から土器がまとまって出土しており、この中で 450 溝や 452 平坦面からの出土遺物は、先に述べたように、排煙口から窯出しされたものが溝に投棄されて流れたもので、このうち焼成不良のものは投棄された失敗品である。また 450 溝は埋土を大きくは３層に峻別でき、452 平坦面についても上層と中・下層で遺物の取り分けが可能であるが、明確な遺物の時期差は見出しがたいが、杯Ａの中で底部がやや尖り気味の個体が中・下層に多い傾向を指摘できる可能性はある（462、463、470、471、498 ～ 501）。また 454 土坑の出土遺物は細片が多く、灰原の出土品とも接合関係があるが、これについては遺構の機能や性格と関わることが想定されるが、理由ははっきりしない。

出土須恵器の時期　出土した須恵器については、大きくは８世紀後半から９世紀前半の中で位置づけることができるが、この時期は平城京から長岡京・平安京へと遷都し、須恵器生産地のあり方も大きく変化するため、出土土器の編年的な位置づけについては、平城京[33]・長岡京[34]・平安京[35]の各都城の土器編年と、陶邑窯[36]・篠窯[37]などの生産地の編年を参照にしながら、本窯の製品の時期的な検討をおこなう必要がある。

まず供膳具について８世紀後半から９世紀前半にかけての変化傾向を述べると、杯Ａは底部に丸みをもつものから平底化が進み、杯Ｂは高台が底部のやや内寄りのものから徐々に外端付近に取り付くように変化し、杯Ａ・杯Ｂともに体部の開きが強くなる傾向がみられる。これに対し本窯の杯Ａについては、口径が小さいものを中心に底部に丸みをもつものもみられるが、平底化が進み、また器高は最も高いものでも４cm 以下と浅いものが多くなる。杯Ｂは底部の高台が外端から僅かに内よりに付けられるものが多い。杯蓋は口縁端部がまっすぐ下方に折れ曲がるものから、扁平で端部がＳ字状に屈曲するものへと変化し、古い時期を中心に笠形の形態のものもみられるが新しい段階にはなくなる。またつまみは扁平なものから宝珠形に変化し、最終的にはつまみが消失する。本窯の杯蓋は、杯蓋Ⅱとした扁平で口縁端部がＳ字状に屈曲する形態が大半を占め、一部に杯蓋Ⅰとした笠形の形態も含まれるといった特徴を

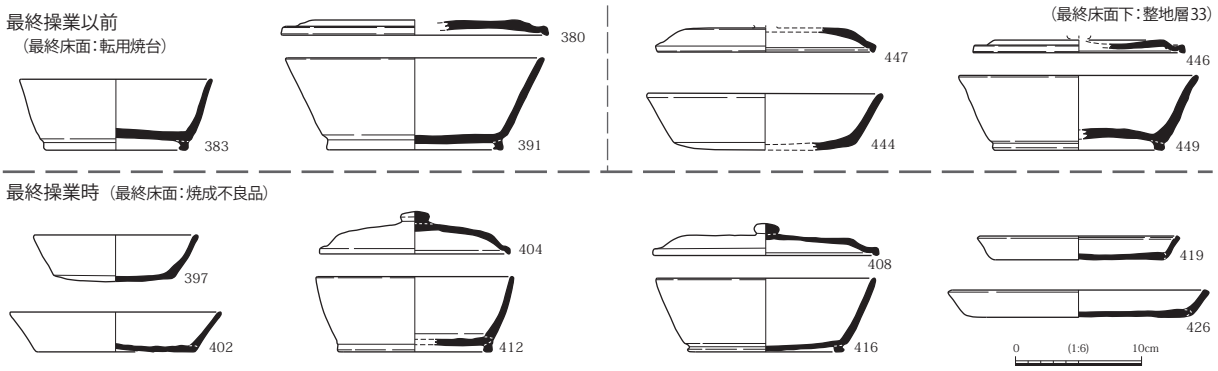


図 199　窯体内出土須恵器の新古関係

もち、つまみはいずれも宝珠形で消失したものはない。以上のような供膳具の形態的な特徴からは、本窯の製品は、長岡京の出土品や平安京Ⅰ期中と併行し、窯跡では篠窯の西長尾１号窯跡とほぼ同時期の、８世紀末から９世紀初頭を中心とした時期に位置づけることができる。

壺類のうち生産量の最も多い長頸壺（壺Ｌ・壺Ｍ）は、時期的な変化を表しやすい器種である[38]。体部の中央付近に最大径があり丸みをもった形態から、最大径の位置が上半に移り縦長の形態へと変化しており、本窯の出土品は８世紀末から９世紀初頭頃に位置づけられる。ただし本窯と長岡京の出土品を比較すると、本窯の出土品は最大径が体部中央よりもやや上半寄りにあり、やや縦に長い形態のものが多いため、長岡京の出土品よりも後出する可能性もある。また底部は、有高台のものから無高台で底部台形状に変化するが、壺Ｍの方が壺Ｌに比べると高台がなくなるのが早い。本窯出土の壺Ｍは有高台のものが多数を占め、無高台のものが少ないといった特徴があるが、無高台のものはいずれも底部の高台が単純に省略された平底のみで、底部が台形状のものは１点も出土していない。この点については、篠窯の芦原１・３号窯跡が有高台と台形状の底部のものが混在し、過渡期的な様相を示すが、管見の限り単純な平底のものは出土していないため[39]、本窯の出土品の方が古いと考えられる。長岡京出土資料の中にも、本窯と同様の平底の壺Ｍが出土していることから、８世紀末から９世紀初頭頃を中心とした時期に本窯の製品が位置づけられる。壺Ｌについては、高台がなくなる時期が平安京Ⅱ期古、マル山１号窯跡と併行する９世紀前半以降と考えられるが、本窯では無高台の壺Ｌは出土していない。また８世紀後半から９世紀初頭にかけて頸部の接合方法が、円盤閉塞による３段構成のものから回転絞り閉塞による２段構成のものに変化するが、本窯の場合は３段構成のものが多く、やや古い要素が強いが、２段構成で絞り痕が明瞭に観察できる個体もあるため（633、634）、過渡期的な様相を示す。なお、壺類のうち中・小型品では、高台の貼り付けの際にナデ消されたものもあって判然としない部分もあるが、糸切がほぼ全面的に採用されていた可能性が高く、この糸切の採用頻度が高い点については新しい要素であり、８世紀末以降に位置づけられるだろう。

この他に、全体の器種組成やそれぞれの器種の特徴については、高杯や鉢Ｆが奈良時代的な器種であり、長岡京期以降には激減する傾向があるため、生産品目の中に古手の器種が残る傾向がある。平瓶は８世紀の後半から末にかけて、把手が取り付き平底から高台が付く形態に変化するが、本窯の出土品はいずれも把手と高台が付く形態であるため、８世紀末以降に位置づけられる。また硯については、現在のところ長岡京期になって出現すると考えられており、本窯が８世紀末以前に遡ることはない[40]。風字硯は硯面を除いた脚部や底面はケズリで整形されており、篠窯の９世紀中頃以前の資料と共通性を示すが、最も古い西長尾１号窯跡の資料は底部、脚部ともに丁寧なナデ調整であるため、資料は少なく確証は得

られないが、粗雑化が始まった段階の可能性もある。

このように出土した須恵器は、杯や壺などの形態や、中・小型の壺に糸切が採用されている点、壺の製作技術などから総合的に判断すると、都城では長岡京の出土資料や平安京Ⅰ期中とほぼ併行し、窯跡では篠窯の西長尾1号窯跡とほぼ同時期と考えられ、8世紀末から9世紀初頭を中心とした時期に位置づけることができる。この中でも、器種組成や壺Lの接合方法が3段接合のものが半数以上占める点などで古い時期の要素もみられるが、窯ごとの個性もあるため一概に古く位置づけることは難しく、逆に言うと供膳具や壺類の微細な形態的特徴や、糸切の採用頻度、風字硯の存在などの存在からは、8世紀末から9世紀初頭の時期幅の中でもやや新しい時期の要素が強いと考えることもできる。ただしこの点については、窯ごとの特徴や操業期間の幅の問題とも大きく絡むため今後も十分な検討が必要となる。

3．成合地区における須恵器生産の背景と供給先

これまでにも述べたように、本窯は8世紀末から9世紀初頭を中心とした時期の須恵器窯で、供膳具が主体を占めるものの、壺類や鉢類の種類と量が豊富で、文房具や仏具も生産されているといった特色がある。この時期の畿内の通有の須恵器窯では供膳具が生産の主体で、壺類や鉢類をはじめとした他の器種の生産量が1割以下の窯も多く、本窯での器種組成を鑑みると、製品の供給先としては一般的な集落よりはむしろ都城や官衙、寺院などが想定される。

なお同じ成合地区内には成合琴堂窯跡の存在が知られており、今回の調査でみつかった成合西王寺山窯跡の関係性が大いに注目される。高槻市教育委員会によっておこなわれた成合琴堂窯跡の調査は、灰原の一部に限られるため、窯体構造をはじめとした遺構の比較検討はできないが、出土した須恵器は本窯とほぼ同時期のもので、厚手のつくりで重量感があるといった製品の特徴や、暗灰色のものが多いといった点で共通点がみられる。さらにこのふたつの窯跡から出土した須恵器の胎土についても蛍光X線分析法で元素の化学組成を分析したところ、ほぼ両者が一致する結果が得られたため（第6章第3節参照）、このふたつの窯跡で生産された須恵器の粘土が同じ地点で採取されていた可能性が極めて高い。成合琴堂窯跡の調査は灰原の一部に留まるため、窯跡全体の器種組成は不明な部分もあるが、供膳具の占める割合が9割近くを占め、他の器種の生産量が少ない点で、本窯とは性格や供給先が異なる可能性もある。また、この他にも7世紀中頃と8世紀前半から中頃の資料も採取されていることから、他にも複数の窯跡の存在が推定されており、今後も同じ地区内で新たな須恵器窯が発見される可能性は十分に想定できる。このように、成合地区の須恵器生産の実態については多くの課題を残すが、今後の窯跡の発見によっては生産地の評価が大きく変わる可能性を秘めている。

さらに8世紀以降の畿内の須恵器生産の動向について詳しくみてみると、千里窯が8世紀前半の早い段階に終焉を迎えた後は、山背の一部を除いて陶邑窯にほぼ一元化するが、8世紀後半になると平城京や恭仁京の近辺に新たに生駒や木津・加茂・奈良山の諸窯が出現するなど、生産地のあり方に大きな変化がみられるようになる（図200）[41)]。この時期には都城での土師器の占める割合が増す一方で須恵器の割合が低下しており、このようなコスト削減の方向性を示すような土器の消費のあり方の変化が須恵器生産地の動向にも影響を与え、一大消費地の近郊での生産にシフトしていった様子がよくわかる。さらに、8世紀末に平城京から長岡京・平安京へ遷都するほぼ同時期には松井・交野ヶ原窯が出現し、9世紀以降には丹波の篠窯跡群が規模を拡大するなど、長岡京・平安京近郊の生産地が須恵器や緑釉陶器の供給を担っていく。このように8世紀後半以降は、陶邑窯跡群の衰退とともに、都城近郊型の須恵器窯が出現するのが特徴で、成合地区のふたつの須恵器窯と長岡京・平安京は、直線距離でそれぞれ10・

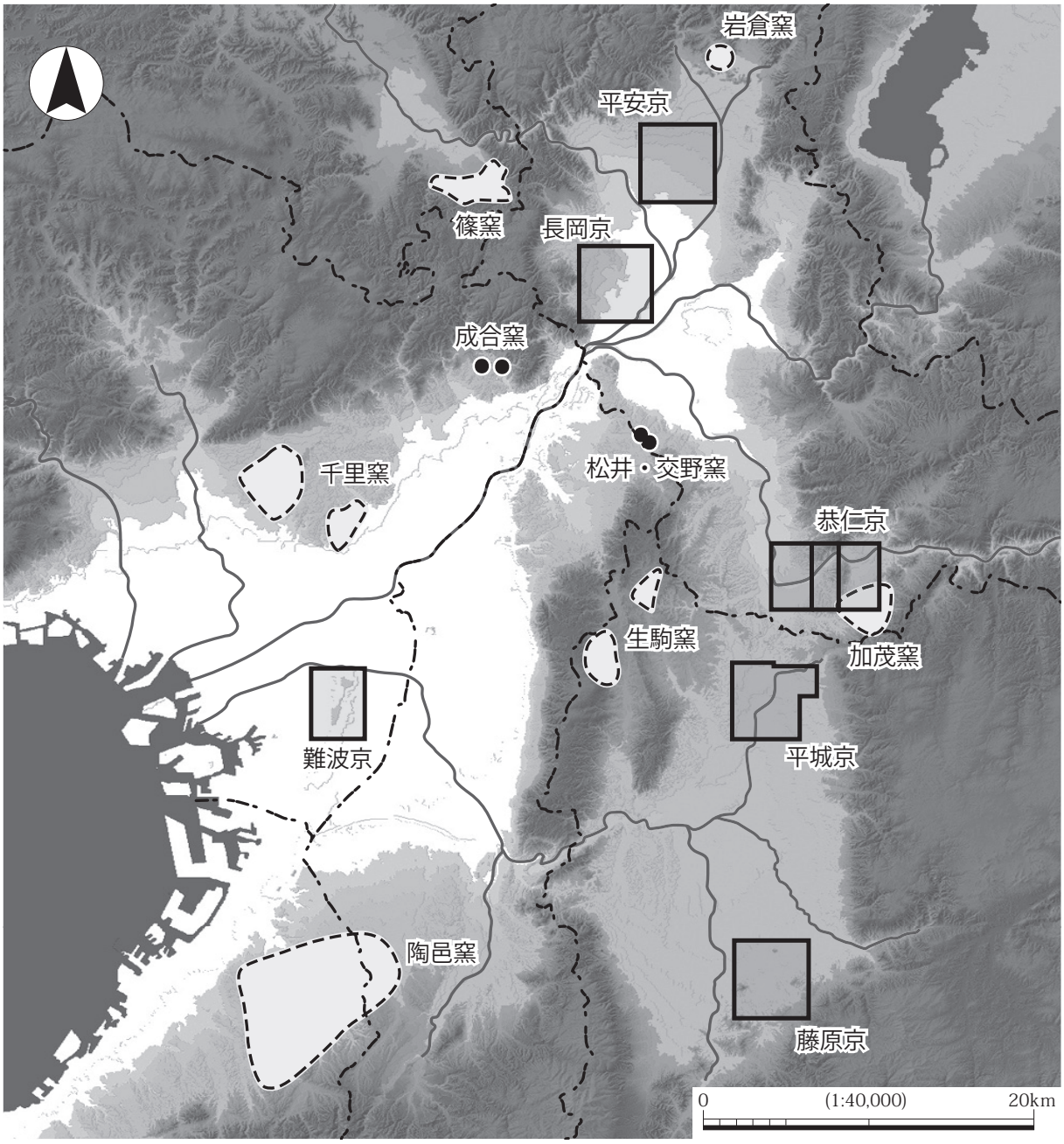


図 200　畿内における８世紀後半から９世紀前半の主な須恵器窯

20km の比較的近い位置に所在することから、都城近郊型の須恵器窯のひとつとして捉えることができる可能性がある。特に本窯で生産された須恵器の器種組成は、都城での使用にふさわしく、供給先の有力な候補として浮かび上がる。

この他に供給先を探る手がかりとしては、「刀」という文字が刻印・刻書された須恵器がある。この刻印・刻書の須恵器は、「刀」という文字が丸囲された刻印が３点と刻書が４点出土しており、前者が供膳具の内面の見込みに押印され、後者は壺類や鉢類の外面にヘラ描きされている。この「刀」の意味するところは不明であるが、工人名や窯記などを示す記号や、納入先に関する名称等が想定される。また、「刀」が刻印・刻書された須恵器が他の消費地遺跡で出土すれば本窯の供給先の有力な候補となるが、「刀」と刻印された須恵器自体は平城京で１点報告例があるものの、本窯のような丸囲いのものではないため[42]、本窯の製品が平城京に供給されていた可能性は低いと推測される。一方で人名等を記した

ものと想定した場合に、「刀」という文字で想起されるのには、主に富豪層の女性名称や女性の下級官職を表す“刀自”などが想起される。周辺で「刀」に関連する地名等については、本窯から南西 3.3km に位置する延喜式内社の阿久刀神社がある。この阿久刀神社の半径 500 m圏内には嶋上郡衙跡が所在するため、両者の関連が深いことが想定でき、本窯の供給先のもうひとつの有力な候補として嶋上郡の中枢地域を挙げることも可能である。

また先にも述べたように、今回の成合遺跡の２区・３－１区の調査や当センターが実施した金龍寺旧境内跡の調査において、悉檀寺や金龍寺などの地区内の山林寺院との関連が想定される８・９世紀代の遺跡の実態が徐々に明らかとなってきており、本窯との関係を注目する必要がある。このふたつの遺跡からの出土遺物には、鉢Ａや瓦、円面硯、石製巡方、施釉陶器、土馬など、寺院や官衙、祭祀との関連性が高いものが含まれるため、これらの山林寺院と須恵器窯が深く関わる可能性は十分に想定が可能である。その一方で、両遺跡ともに須恵器窯が操業した８世紀末から９世紀初頭頃の出土遺物が少なく、これらの消費地のやや時期の異なる須恵器と本窯および成合琴堂窯跡の須恵器の胎土分析からは両者の確実な一致をみないため（第６章第３節参照）、成合地区で生産された製品が成合遺跡や金龍寺旧境内跡へ流通していたことを確実視することができない点で、多くの課題が残るが、付近には未調査地もまだ残されているため、今後の調査の進展を待つ必要がある。なお、成合遺跡２区出土の 16 軒丸瓦は梶原瓦窯跡の同笵瓦であり、山林寺院の悉檀寺と平地寺院の梶原寺のネットワークを示す可能性があると先に述べたが、このような関係性が存在する場合、窯跡の経営に梶原寺の関与を想定する必要もある。同じ成合地区の山林寺院や梶原寺と本窯との関係については、時期的な問題など検討すべき課題も多く残るが、遺跡の位置関係や生産品目と遺跡の性格を踏まえれば、最も有力な供給先の候補として捉えることができる。

以上のように、本窯の製品の器種組成や特徴、この時期の須恵器生産の動向、周辺遺跡との位置関係から、同じ成合地区内の悉檀寺や金龍寺などの山林寺院と平地寺院の梶原寺、嶋上郡衙周辺地域、長岡京や平安京などの都城、などが本窯の製品の供給先の候補として挙げることができる。現状では供給先の候補を絞り込むことができないが、本窯の操業時期が平城京から長岡京・平安京へ遷都する時期と重なっており、製品の供給先と詳細な時期については重要な問題であり、今後の調査の進展を待つとともに、他の生産地と消費地の資料との比較を通して今後も十分な検証をおこなう必要があるだろう。

（笹栗）

第３節　古墳（成合西王寺山１・２・３号墳）の位置づけ

古墳の構造と時期　成合遺跡の丘陵頂部から南斜面にやや下った位置で、横穴式石室を埋葬施設とする３基の古墳（古墳１・２・３／成合西王寺山１・２・３号墳）が検出された。このうち古墳２と古墳３は丘陵頂部からやや下がった位置に開口方向を揃えて並列するのに対し、古墳１はそこから約５m下方にやや東に開口方向をむける。いずれも墳丘は流出して盛土もほとんど認められないが、古墳２・３は周溝と考える溝が円形にめぐるため、ともに径６m程度の円墳であったことがわかる。古墳１は周溝が確認されていないが、東側では僅かに盛土がみられるため、５m程度の規模に復元できる。

埋葬施設は全て小型の横穴式石室と考えられるが、古墳２・３に関しては掘方が検出されたのみで、石材は全て抜きとられていた。古墳１についても石室の大部分は撹乱を受けていたが、右奥のコーナー

付近と左側壁の一部が残存しており、残存長 3.1 m、奥壁幅 0.8 m、開口部幅 1.2 mの無袖式石室であったことが判明した。また撹乱を受けていたにもかかわらず、床面の遺存状態は良好で、棺台と考えられる石材が床面で検出され、須恵器や土師器、鉄釘がほぼ原位置で出土した。棺台と鉄釘の出土位置から、2.0 × 0.6 mの釘結合式木棺が一基安置されていたと考えられ、石室内での片づけ行為がみられないことから追葬はなかったことがわかる。また古墳２・３については、掘方の規模や石材の抜き取り痕跡から、古墳１とほぼ同規模の無袖式石室であったと考えられる。

古墳１については、床面からまとまって須恵器（769 ～ 782）が出土しているため、詳細な時期比定が可能である。杯Ｇと杯Ｈが共伴し、杯Ｇの口径が最も縮小化した９cm 前後で、調整や形態的な特徴などからも、飛鳥Ⅱに併行する７世紀第３四半期頃に位置づけられる。古墳２・３については、これらに確実に伴う須恵器がないため確証は得られないが、古墳３の周溝と考えられる 387 溝からは古墳１とほぼ同時期の須恵器（263・264）が出土しており、３基の古墳にはほとんど時期差はないと考えられるが、ただし須恵器窯の灰原からはやや径の大きな 761 杯蓋も出土しているため、古墳２・３のどちらかの時期がやや遡る可能性も残される。

なお、斜面下方の須恵器窯の付属遺構から古墳に伴う時期の遺物が出土しているため、８世紀末から９世紀初頭頃に古墳が撹乱されたことがわかる。ただし、斜面途中や谷裾部からは石室石材と考えられる人頭大以上の石材が多数検出されているが、この石材は基本的には須恵器窯の廃絶後に上方から流れ込んでおり、また谷部では１火輪とともに石材が検出されたため、より新しい時期、恐らくは遺跡内を縦断する金龍寺にむかう里道の造成等に伴って、古墳が大きく破壊された可能性が想定される。

周辺部の古墳との関係　檜尾川流域の後・終末期古墳の動向については、６世紀前半から中頃にかけて前方後円墳である昼神車塚古墳[43)]が築造された後は、この地域では中・小型の横穴式石室墳が多数築造される。その中でも安満山古墳群（約 40 基）[44)]や梶原古墳群（約 20 基）[45)]はこの流域では比較的規模の大きな典型的な群集墳で、平野部に面した尾根上や山裾に立地し、６世紀後半から７世紀にかけて盛行したことが判明している。さらにこれらの群集墳中には、梶原Ｄ１号墳のように卓越した規模と内容をもつ古墳がみられるなど、群集墳の中に族長クラスの首長墓も含まれる点は特徴である。

その一方で、この他には６世紀後半から７世紀前半の築造で中規模の有袖式石室をもつ成合１号墳[46)]や紅茸山Ｃ１号墳[47)]、７世紀中頃以降の築造で単次葬の横穴式石室をもつ古曽部古墳[48)]と奥坂Ａ５号墳[49)]がこれまでに調査されており、これに加えて今回調査をおこなった成合西王寺山１～３号墳と、当センターが調査・整理をおこなっている成合地獄谷遺跡でも新たに終末期の小型の横穴式石室や箱式石棺が確認されている。この中で奥坂古墳群と紅茸山古墳群については、数基の古墳の存在が確認されているものの、前・中期のものも含んでおり、確実な横穴式石室墳はそれぞれ１基・２基ずつであり、先に挙げた事例はいずれも単独か２・３基程度の集まりで、安満山古墳群や梶原古墳群とは対照的なあり方をなす。今後の調査の進展によっては状況が大きく変化する可能性は残されるが、安満山古墳群や梶原古墳群が平野部の集落域を含めて設定された墓域であったのに対し、成合や高槻丘陵の単独立地傾向の古墳は、ごく周辺の小集落を基盤とする古墳として捉えることができる[50)]。そのためこれらの古墳の存在から、成合１号墳が築造された６世紀後半には既に檜尾川上流域の成合地区の開発が進んで集落が成立していた蓋然性が高く、また周辺部での埴輪片等の出土から[51)]、周辺に時期の遡る古墳の存在が推定されるため、開発の時期が遡ることを想定しておく必要がある。　（笹栗）

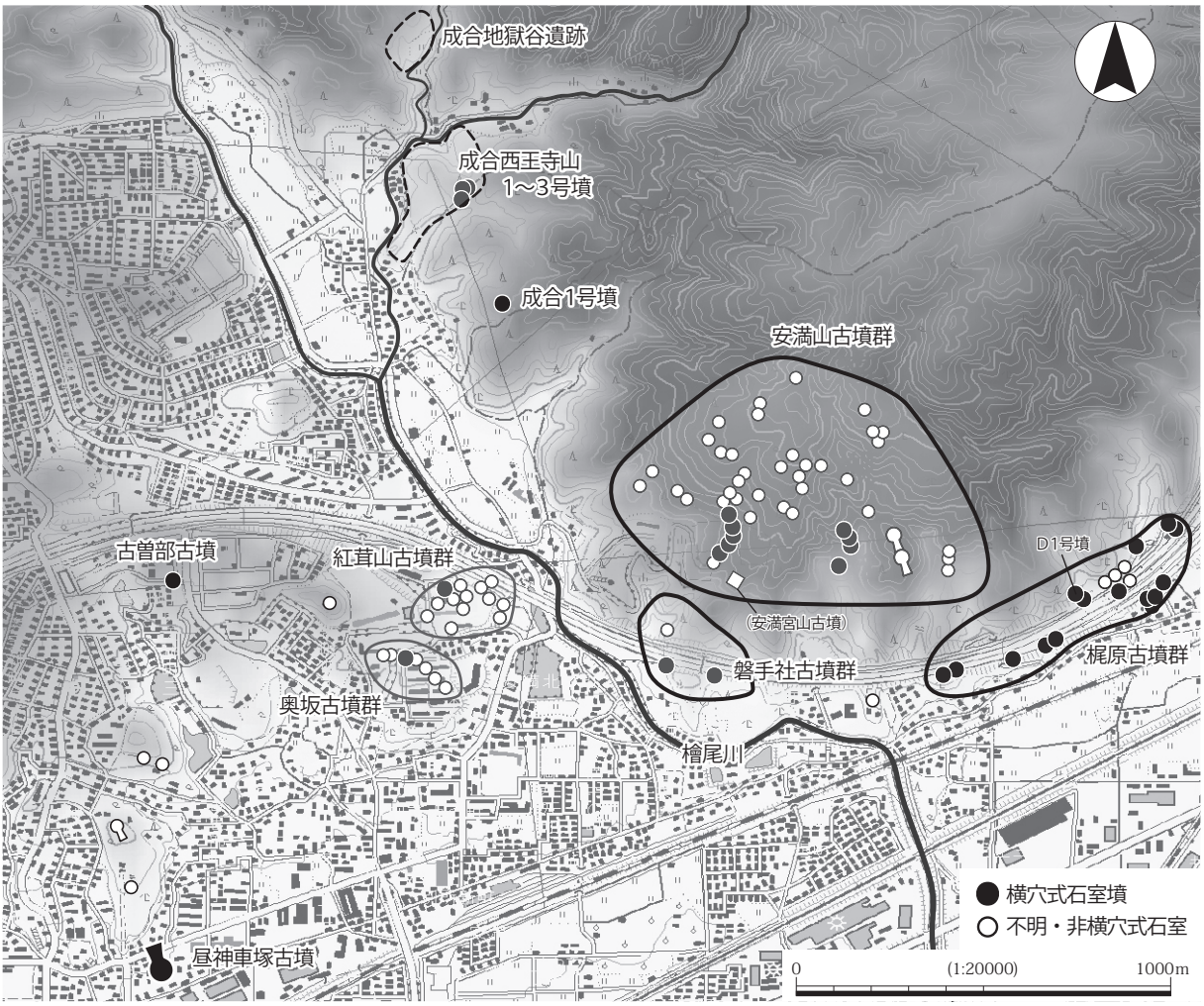


図 201　成合周辺の後・終末期古墳の分布

第 4 節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構・遺物は、南側の丘陵上の２区・３－１区・３－２区・４－１区と、４－２区とした丘陵の南側斜面裾のわずかな平坦地で主に検出された。他には、成合遺跡の北側の丘陵からは弥生時代の遺物の散布はみられるが出土量はごく僅かで、弥生時代の遺構は確認されていない。また金龍寺旧境内跡では、１区の丘陵先端付近の 21・22 谷から弥生時代の遺物がまとまって出土しているが、明確な遺構はみられない。

１．出土遺物の検討

弥生時代の遺物の出土量はコンテナ約 25 箱で、調査面積が 19,508 ㎡におよぶ割には非常に少ない。出土遺物の大半は弥生土器で、石器と玉類がごく僅かに出土している。

弥生土器の時期と特徴　成合遺跡から出土した弥生土器は、全てⅣ様式の範疇におさまるが、金龍寺旧境内跡から出土した土器については、やや古いⅢ様式末からⅣ様式初頭頃に位置づけられる。

金龍寺旧境内跡では、１区の 21・22 谷の埋土から土器が出土しており、このうち 891 広口壺は口縁部端部に波状文、内縁部に列点文を施し、頸部には直線文がみられる。また、892 脚部の円盤充填は丸みをもっており、成合遺跡のものとは様相を異にする。このように金龍寺旧境内跡の調査区から出土した土器は、成合遺跡出土の土器よりは明らかに古く、森田編年のⅢ－２～Ⅳ－１様式頃に位置づけ

られる。

成合遺跡から出土した土器は、壺が最も多く、甕や鉢、高杯などがそれに続き、器台は確実なものはない。図化したもののうち、壺が全体の 26％、甕が 18％を占める。また底部をはじめとして壺か甕か判断がつかない個体も多く、それらを含めると壺と甕の比率は全体の 75％程度を占めることがわかる。鉢については脚部をもつものも多かったことが想定され、鉢と高杯の比率はほぼ同数程度であったと考えられる。

壺の中でも広口壺は細片が多く全体的な出土量が少ない。その一方で、有段口縁の大型壺は形態を復元できる個体が多く、頸部の形態や施文等から時期的な変化を捉えやすいため、この形式を基軸に出土土器を古相と新相に大きく分けることができる。出土した有段口縁壺のうち、頸部から口縁部にかけてなだらかに移行して口縁部に２・３条程度の凹線文を施した個体（268、315）が古相と考えられ、これらは中には凹線文が退化して単純にヨコナデのみが施される個体（360）もある。一方で全形が判明するものはないが、頸部から強く外反して口縁部が明瞭に屈曲し、円形浮文や斜格子文を配するやや装飾性の高い一群（164、165、200）がある。これらは口縁部の屈曲度合などからやや古く位置づけることも可能であるが、出土数が少なく、やや装飾性が高いという点で異質であるため、ひとまずは古相の中に含めておく。新相は、頸部が直口して口縁部が僅かに屈曲する形態に変化する個体で、口縁部の凹線文が形骸化したヨコナデとなり、頸部の突帯がやや突出気味の台形となる（301、302）。いずれも黄色味がかったやや淡い胎土で、古相の土器の多くが橙色の胎土であるのとは対照的である。なお古相・新相に関わらず、全て頸部に貼付突帯があり、いずれも工具による刻みが施されており、指頭圧痕のものはない。これについては時期的な特徴を示している可能性もあるが、成合遺跡の特徴の可能性もある。この他に、胴部最大径付近には、刻みや刺突によって文様を施す個体（301、302、360）もみられるが、確認できたものについてはいずれも全周しない。これらは既往の森田編年と照らし合わせると、古相がⅣ－３様式、新相がⅣ－４様式を中心とした時期に位置づけられ、古相の中でもやや装飾性の高い一群は、時期的にやや遡る可能性もある。

広口壺は口縁部が垂下する形式（72）や、頸部が短く外反する形式（288）などが僅かにみられるが、出土数が極めて少ない。口縁部の破片が僅かにみられるのみで、全形は全く復元できないが、一部に胴部と考えられる櫛描文を施す破片もある。確認されているものは、直線文と波状文を交互に施す破片（166、257）で、細片が数点出土するに過ぎない。短頸壺については、口縁部に櫛描列点文と多重の凹線文を施す古手の個体（307・308）がある。一方で有段口縁の大型壺と同様の頸部突帯をもつものは、口縁部がやや屈曲している（144、334）。他には把手が付く個体もみられ、口縁部に凹線文を施す個体（275）や無文化した個体（155）があり、いずれも新相に位置づけられる。無頸壺は口縁部から胴部の破片が多く、凹線文を多重に施す個体（335、372）が古く、後期になると凹線文の条数が減少して無文化していく傾向があるため、口縁部や胴部に２・３条程度を施す個体（274）は、新相に位置づけることができる。

甕のうち、中・大型品の多くは口縁がくの字形の形式で、口縁端部に凹線文を施す個体が基本的には多い（280、286）。これらは外面ハケ調整が基本であるが、タタキの個体（287）も僅かにあり、内面についてはナデやハケの個体が多いが、ヘラケズリの個体（226、358）もみられる。この他には、口縁部から体部になだらかに屈曲し、端部に凹線文を施さない形式（156、157）も一部ある。こうした後期的な特徴を備えるものはいずれも新相に位置づけることができる。小型品については、胴部に丸み

をもたず、頸部が強く屈曲し、端部が丸くおさめられる形式（221、276、277）が一定数みられる。

鉢と高杯は、合わせて全体の25％程度の割合を占める。鉢のうち、全形が判明するものはいずれも小型品で、口縁部から胴部にかけて丸みをもつ椀形（150）や逆円錐台形（272）などがみられるが、いずれも後期になって増加する形式である。このうち椀形のもの（150）については、やや厚手であるためこの形式の中でも古く、新相に位置づけることはできる。一方で段状遺構２から出土した逆円錐台形の小型鉢（272）は、基本的には中期にはみられない形式であるが、共伴する土器はいずれも新相の中期末のものであるため、その位置づけがやや難しい。これについては底面が摩滅して残っていないため、天地が逆転して高杯もしくは鉢の脚部になる可能性も考慮する必要がある。高杯・鉢の脚部については、やや出土量が多く、脚部に多数の円孔を施す個体（311、376）が多くみられる。

他地域の影響を受けた土器や搬入土器については、出土量は多くない。暗褐色の胎土で角閃石を含む生駒西麓産の土器は、胴部に櫛描簾状文を施す大型鉢（352）など、数点が確認されている。この他には器形的に北近畿（206）や、東播磨もしくは淡路（228）の影響を受けたと推測される土器もみられ、これらは胎土もこの地域で通有のものとは異なる。東部瀬戸内の影響を受けたと考えられる内面ヘラケズリの甕（226、358）は少なからず認められ、有段口縁大型壺の胴部の刺突文（301、302、360）もこの地域からの影響と考えられる。一方で、近接する古曽部・芝谷遺跡で出土が目立つ近江系の土器は、確認されていないため、この地域で東の地域からの影響が強まるのは後期以降になることがわかる。

成合遺跡から出土した土器の全体的な傾向としては、櫛描文の施文の頻度が極めて低く、壺や甕を中心に凹線文が多用される（古相）が、それとともに凹線文が退化している様子もみられる（新相）。また壺は、広口壺が少なく大型の有段口縁壺が多い点も特徴的である。搬入土器はそれほど多くないが、内面ヘラケズリ技法などの東部瀬戸内系の土器などがみられるなど、西の地域からの影響が強い傾向がある。

出土土器の年代的な位置づけは、金龍寺旧境内跡１区の21・22谷出土の土器が、森田編年のⅢ－２～Ⅳ－１様式頃のもので、成合遺跡出土の土器とはやや断絶がある。成合遺跡出土の弥生土器は小型の鉢など一部の器種や器形、技法・調整等に、後期的な様相を見出せるものの、いずれも後期初頭の基準資料とされる古曽部・芝谷遺跡の環濠K1aや住居S12出土土器[52]よりも古く位置づけられ、古相が森田編年のⅣ－３様式、新相がⅣ－４様式にほぼ対応すると考えられる（図202）。ただし、大きくは古相と新相に分けることができるが、全ての土器をこの新旧の段階に峻別することは難しく、甕など壺以外の器種の多くは、新しい時期の要素が目立ったため全体的に新相に偏っている。このように土器の様相としては大きくは新古に分けられるものの、古い要素と新しい要素が混在していることも想定でき、時間幅自体もかなり短いものであったことが推測される。

その他の遺物の特徴　石器については、調査区全体を合わせても出土量が極めて少ない。金龍寺旧境内跡は出土土器から成合遺跡とは時期的な隔たりがあると先に述べたが、１区の21・22谷からは弥生土器とともに900扁平片刃石斧や901太型蛤刃石斧などの伐採具とサヌカイトの剥片（902～905）がまとまって出土しており、後述する成合遺跡とは対照的なあり方を示す。

一方で成合遺跡から出土した石器は、調査区全体で石鏃７点（うち打製石鏃６点、磨製石鏃１点）、磨製石剣１点、石包丁１点、凹石１点に留まり、この他にサヌカイトの剥片と粘板岩も数点みられる。石鏃は７点のうち、６点が段状遺構４からまとまって出土している（293～298）。打製石鏃はいずれもサヌカイト製で、長さ４cm、重さ２～３ｇ前後の凸基式４点と、有茎式は長さ6.5ｃｍ、4.5ｇの

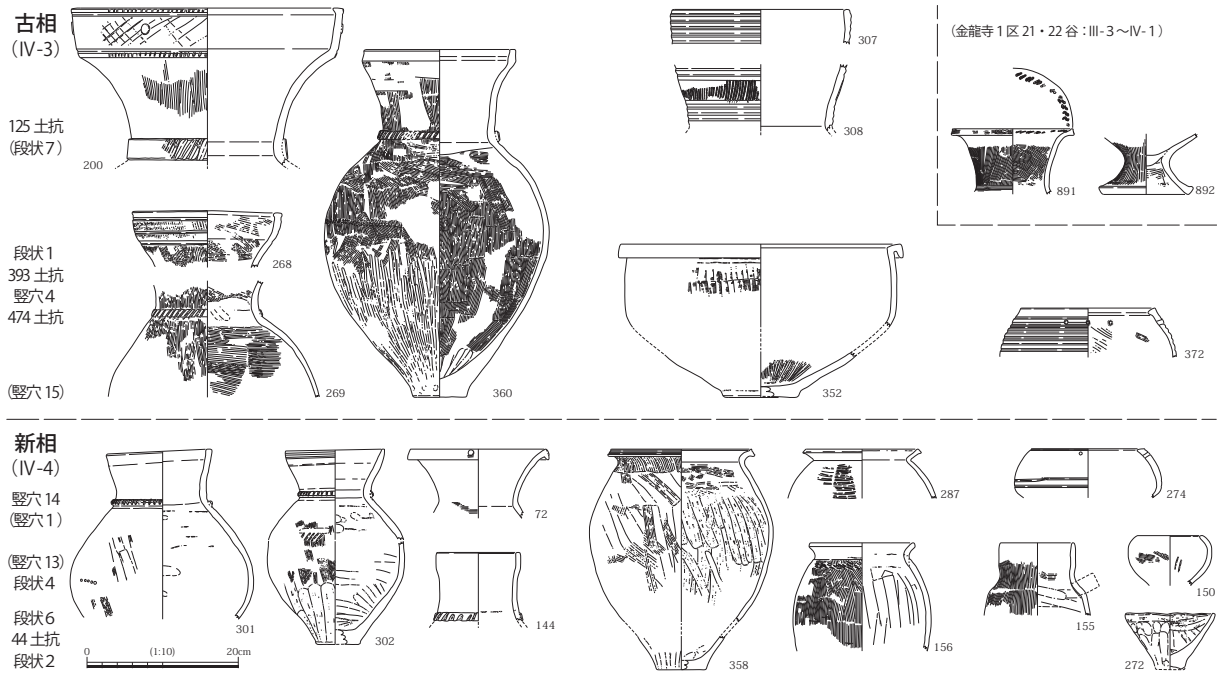


図 202　成合遺跡出土の弥生土器の新古

大型品と、長さ 2.7cm、1.9 ｇの小型品がそれぞれ 1 点出土ずつ出土している。残りの 1 点は粘板岩製の磨製石鏃で、金属器の模倣と考えられる扁平な大型品である[53]。形式や重量、特に大型化した打製石鏃や金属器模倣の磨製石鏃の存在から、中期後半から後期初頭のあり方としてふさわしいものといえる。粘板岩製の磨製石剣（145）は破片が 1 点出土しており、破面が二次的に研磨されていることから転用品である。また、石包丁と考えられる粘板岩は 1 点のみ（198）が出土している。この他には、台石が５点出土しており、このうち３点が竪穴建物および段状遺構の床面から、１点が竪穴建物上面から出土している。金龍寺旧境内跡・成合遺跡ともに、出土した石器については、安満遺跡をはじめとした石材等がこの地域通有のもので、大規模に石器生産をおこなっていたとされる安満遺跡からの製品の流通が想定される。なお、鉄器は 1 点も出土していないが、石器の出土量が極めて少なく、金属器模倣の磨製石鏃の出土などから、状況証拠にすぎないものの、鉄器化が進行していた可能性を想定する必要もある。

さらに特筆すべき遺物として、小型の２ヒスイ製半玦状勾玉が、集落域に隣接する谷部から 1 点出土している。長さ 1.9cm、重さ 3.8g をはかり、半玦状勾玉の中ではやや大きい部類に入る。色調は、やや淡い緑色に乳白色の縞がうっすらと入る。表裏両面・背面にはっきりとした面をもっており、形態的には北陸で生産された可能性が高いと考えられる。大阪府下における前期・中期の半玦状勾玉は、安満遺跡、太秦遺跡、鬼虎川遺跡（２点）、池上曽根遺跡で出土例があり、近隣では他に川西市加茂遺跡や尼崎市田能遺跡や久御山町市田斉当坊遺跡などがある（図 203）[54]。成合遺跡の例を除けば大規模な集落での出土例が多い傾向があり、当遺跡が三島の平野部からやや奥まった山あいに位置し、搬入土器の出土も少ないことなどを踏まえれば、安満遺跡などを介して間接的に入手した可能性が想定される。

２．遺構の検討

弥生時代の遺構が検出された南側の丘陵上（２区・３－１区・３－２区・４－１区）と、この丘陵の南斜面裾の平坦地（４－２区）では、竪穴建物 13 棟と段状遺構 7 基をはじめとし、この他に土坑や溝、ピット等が検出されている。

図 203　前・中期の半玦状勾玉

竪穴建物の規模と構造　竪穴建物は円形 11 棟、隅丸方形 1 棟、方形 1 棟がそれぞれ確認されている（表 12）。このうち円形の竪穴建物について、規模は径 3 mから 7 mのものまでバラエティがあるが、径 5 m前後のものが多い。主柱穴は 4 本構造の建物が 5 棟と最も多く、主柱穴の数が多いものは 6 ・ 7 本程度の構造の建物があり、2 本構造の建物も 1 棟存在する。主柱穴の数と規模の関係は、主柱穴が多いものほど規模が大きい傾向はあるが、必ずしも比例するわけではない。これらの円形の竪穴建物に伴う遺構は、柱穴の他に周壁溝と中央土坑が伴う場合がほとんどで、中央土坑から斜面下方側にのびる溝をもつものも多い。このうち中央土坑については直径 0.7 〜 0.9 mの規模で、浅いものもあるが深手で 2 段掘り状の構造のものもあり、深さは 0.6 〜 0.8 mを測る。これらは壁面や底面に明確な被熱を受けた痕跡はみられなかったが、埋土にはいずれも焼土や炭が混じる。このような遺構の特徴は、都出比呂志の言う「灰穴炉」[55]の特徴を備えている。この中央土坑から斜面下方側にむかってのびる溝は、円形建物の半数以上の 7 棟で確認されている。いずれも幅 0.2 m、深さ 0.1 m前後の浅い溝であるが機能や性格ははっきりしない。また竪穴建物 11 についても中央土坑に接続する溝があるが、これについては斜面上方側にむかってのびるため、他の竪穴建物の溝と同じ性格であるかどうかははっきりしない。なお遺構の多くが斜面地に築かれているため、雨水の流入を防ぐために斜面の上方側を中心に周堤等を築いていたと推測されるが、竪穴建物の周囲からはそれを明確に示すような痕跡は見出すことはできなかった。ただし竪穴建物 5 付近からは、建物の輪郭と並行する 2 本の溝（173・377 溝）が検出されており、これについては周堤の外側の溝と想定することも可能で、その場合は周堤の幅が 1.5 m前後に復元される。

方形のものは竪穴建物 1 の 1 棟のみで、一辺 3.3 mとやや小ぶりである。これには周壁溝が伴うものの、主柱穴や中央土坑がみられない点で円形の竪穴建物とは様相を異にする。埋土から出土した土器の時期は、その他の遺構と異なることがないため、建物の機能や性格が異なる可能性が高い。

この他に竪穴建物の全体的な傾向として、埋土からの遺物の出土量が少なく、まとまって土器が出土するのは竪穴建物 14 のみで、他では小片や細片が多い。一方で、出土した台石の全 5 点のうち、3 点が建物の床面からの出土で、さらにもう 1 点は建物の上面からの出土であり、建物が廃絶する際に土器をはじめとする道具類等は全て持ち去られたものの、重量のある台石はそのまま建物に残された可能性も想定できる。またこれらの竪穴建物は、南側斜面裾の竪穴建物 13・14・15 を除くと、重複関係がみられない点も大きな特徴である。このうち竪穴建物 2 には周壁溝が 2 重にめぐっているため、建て替えの可能性を想定する必要もあるが、検出状況から溝は同時に機能していた可能性が高く、建て替えを想定するのはやや困難である。竪穴建物の重複がほとんどみられない点は、集落の存続期間が短かったことを示しており、これについては出土土器の様相からも裏付けることができる。

表 12　竪穴建物・段状遺構一覧

遺構名	調査区	形態	規模(m)	主柱穴	遺構	時期	出土遺物	備考
竪穴建物1	2区	方形	3.3×3.3	なし	周壁溝	新相	土器	
竪穴建物2	2区	円形	5.2×4.9	6本	二重の溝、中央土坑	古相？	土器(細片)、磨製石剣	
竪穴建物3	2区	円形	6.8×5.9	7本か	周壁溝、中央土坑、*溝	－	土器	焼失建物(垂木の痕跡と焼けた壁土痕跡を確認)
竪穴建物4	4-2区	円形	3.6×2.9	3本か	中央土坑	古相	土器	
竪穴建物5	3-1区	円形	5.3	4本	周壁溝、中央土坑、*溝、焼土面	－	土器(細片)	
竪穴建物6	3-1区	円形	5.2	4本	周壁溝、中央土坑、*溝	－	土器(細片)、台石	
竪穴建物7	3-1区	円形	4	2本	周壁溝、中央土坑、*溝	－	土器、石包丁	
竪穴建物9	3-2区	円形	4.2	4本	周壁溝、中央土坑、*溝か	－	土器(細片)	焼失建物
竪穴建物10	3-2区	円形	5.8×5.2	4本	周壁溝、中央土坑か、*溝か	古相？	土器	焼失建物
竪穴建物11	4-1区	円形	7.0×6.2	4本	周壁溝、中央土坑、溝	古相？	土器(細片)、台石2	中央土坑からのびる溝は斜面上方側にむかう
竪穴建物13	4-2区	円形	5.6	不明	周壁溝、中央土坑	新相	土器	竪穴14・15と重複、3棟の中で最も新しい
竪穴建物14	4-2区	隅丸方形	3.6×2.4	4 or 6本	周壁溝、中央土坑、焼土面	新相	土器、剥片	竪穴15を切る
竪穴建物15	4-2区	円形	7.0×2.8	不明	周壁溝、中央土坑、*溝	古相？	土器(細片)、粘板岩	竪穴14に切られる、主柱穴の数が多い
段状遺構1	4-1区	方形	6.6×0.5	－	周壁溝	古相	土器(Ⅳ様式後半)	
段状遺構2	4-1区	方形	9.0×1.0	－	周壁溝、ピット	新相	土器(Ⅳ様式末)	炭(材を確認)や焼土あり、上屋が存在するか 土器の出土量が多い
段状遺構3	4-1区	方形	(2.7)×1.6	－	－	－	－	削平受ける
段状遺構4	4-1区	方形	(11.0)×2.3	－	周壁溝か・ピット	新相	土器、石鏃6	削平受ける
段状遺構5	4-1区	方形	7.0×1.0	－	周壁溝、ピット	－	土器(細片)	
段状遺構6	4-1区	方形	7.8×1.5	－	周壁溝、ピット	新相	土器、台石	土器の出土量が多い
段状遺構7	4-1区	方形	6.6×1.0	－	周壁溝、ピット	古相？	土器	

※ 竪穴建物8・12は欠番　※ *溝については中央土坑から斜面下方にのびる溝である

段状遺構の構造と性格　竪穴建物が丘陵上の平坦地や緩斜面に築かれるのに対して、斜面の傾斜がややきつい場所では、段状遺構が7基確認されている。斜面を等高線に沿ってL字状にカットした細長い平坦面で、平面形は方形を基調とする。規模は幅6～7m程度のものが多く、一部で10mに近い規模のものがあり、平坦面の奥行きは1～2m程度である。掘り込みに沿ってコの字状に溝がめぐらされる場合が多く、段状遺構1・3を除いた5基ではこの溝内もしくは溝際にピットが並ぶ。この段状遺構については、さまざまな機能や性格が推定されており見解の一致をみないが、建物跡の他に、土砂の流出を防ぐしがらみとする案や、竪穴建物に隣接された事例から付帯施設とする案もみられる。[56)] 成合遺跡では、段状遺構1で建築部材と考えられる炭化材や焼土が検出されており、これについては上屋が存在したことがわかる。またこの段状遺構1を含めて、周壁溝内からまとまって土器が出土する例が多いことから、生活空間が存在していたことがわかり、段状遺構が建物であった可能性を強める根拠となる。一方で緩斜面地や平坦地でみられたような竪穴建物と比較すると、段状遺構には中央土坑が伴っておらず、周壁溝にピットが並ぶものの明確な主柱穴がないといった相違点もあることから、段状遺構が建物跡であったとしても円形の竪穴建物とは上屋の構造が大きく異なっていたと考えられる。また、中央の小谷の奥にあたるやや急な斜面地の狭い範囲にまとまって築かれているように立地も異なっており、遺構の重複がみられる点も特徴的で、機能や性格も大きく異なっていたと考えられる。

成合遺跡の建物の特徴　以上、成合遺跡から検出された竪穴建物と段状遺構の規模や構造について概観した。そこで後続する時期で、成合谷を挟んだ西の高槻丘陵に位置する古曽部・芝谷遺跡の建物構造との比較から、成合遺跡の建物の特徴を抽出したい。

古曽部・芝谷遺跡の竪穴建物の構造については報告書の中でまとめられており、平面形は円形が22棟であるのに対し方形が60棟で、方形が多数を占める。この中でも最も古い1期には円形建物の占める割合が圧倒的に多く、最終の3期になると方形のみとなるため、円形が古く方形が新しい傾向がある。ちなみに中期末の成合遺跡では円形が多く、後期末の紅茸山遺跡では円形が1棟に対し方形が17棟と圧倒的多数を占めていることから、この地域では後期初頭から前半の間に建物の竪穴建物の平面形が円形から方形に変化することがよくわかる。

このように竪穴建物の平面形の違いには、時期的な違いが関係していることが明らかであるが、建物の立地との関係も重要になってくる。古曽部・芝谷遺跡の場合、円形の建物は丘陵頂部や尾根上、緩斜

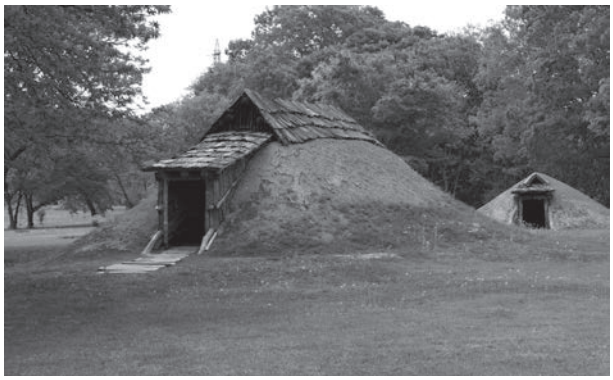


写真９　岩手県御所野遺跡土屋根住居（伊藤撮影）

面地に散在する傾向があり、建物同士が重複していないのに対し、方形の建物については丘陵頂部から斜面裾まで各所に密集して立地し、特に斜面の急な場所では重複が多いといった特徴が挙げられている。このように古曽部・芝谷遺跡における平面形と立地の違いについては、成合遺跡の円形と段状遺構の立地の違いと非常によく似ており、平面形の違いは建物の立地と大きく関係していることが窺われる。成合遺跡の段状遺構と古曽部・芝谷遺跡の方形の竪穴建物が、同一の遺構であるかどうかについては十分に検討する必要があるが、構造的によく似たものも多数あるため、やはり平面形の違いと立地の違いに大きな関係があることがわかる。また円形と方形では、中央土坑の有無や柱穴の並び方などといったような建物の構造も大きく異なっており、平面形、立地、構造の違いから両者に機能や性格の違いを見出すことができそうである。

また竪穴建物の規模については、古曽部・芝谷遺跡では円形・方形ともに大型・中型・小型の３つのサイズのまとまりがみられることが指摘されており、この中でも円形の建物は中型の 7.0 ～ 7.5 mの大きさが最も多いとされる。成合遺跡の円形の竪穴建物の場合、５m前後のものが多く、７mを超えるものは２棟にすぎない点で様相が異なっている。一般的には時期が下るにつれて建物が小さくなる傾向があるが、古曽部・芝谷遺跡よりも古い成合遺跡で小型の竪穴建物が多い点は、この遺跡の性格を何らかの形で反映している可能性がある。（笹栗）

焼失建物の検出状況と上部構造の復元　検出された竪穴建物の中には、いくつか火災に遭ったと考えられる焼失住居があり、特に竪穴建物３についてはその痕跡が顕著にみられた。埋土には焼土や炭が多く堆積しており、床面近くは炭化した材が多く、赤褐色に焼けた土はそれらの部材を覆うような堆積を示していた。垂木が焼けて内側に倒れた様子が窺え、赤褐色によく焼けた焼土が面的に広がっていたことは特に注目される。

ところで一般的に復元されているような茅葺の竪穴建物が火災にあった場合、これほどの焼土が埋土に混入するのだろうか、という１つの疑問が湧く。というのは、近隣では古曽部・芝谷遺跡のＳ 12 住居や萩之庄遺跡[57]でも同様の焼失建物が検出されており、古曽部・芝谷遺跡のＳ 12 住居については、検出された焼土は火災の消化のために投げ入れられた土であると解釈されている。ただし成合遺跡の竪穴建物３の場合、埋土からの遺物の出土がほとんどなく既に廃屋となっていた可能性も高く、わざわざ燃え盛る建物の傍らで即座に土を掘り起こすという行為をおこなったとは考え難く、自然鎮火を待つ方が合理的とも思われる。また、仮に消火のために土が投げ入れられた場合であっても、同じような検出状況になる可能性は否定できないが、その場合に投入された土がこれほどまでに焼けて赤変するとは考え難く、竪穴建物３で検出された焼土と炭化材の上下の関係は、建物の構造がそのままあらわれていると考える方が妥当と思われる。このように成合遺跡の竪穴建物３は、一般的によく知られるような茅葺建物ではなく、屋根に土が塗られた土屋根構造の建物であった可能性が想定できるだろう（写真９）。竪穴建物の構造を解明することは、当遺跡周辺の弥生時代のムラの景観を復元する上でも重要な作業であり、今後焼失建物の類例の検討を通して明らかにしていく必要があるだろう。（伊藤）

図 204　成合遺跡の竪穴建物と段状遺構の配置

３．成合遺跡の弥生時代集落の特質

集落の構造と景観　弥生時代の遺構は、平野部との比高差が 25 ～ 40 mの丘陵上で検出されており、丘陵頂部から北東方向にむかってやせ尾根が接続するものの、丘陵の北側と南側には深い谷が入り込んでいることから、独立した丘陵上に遺跡が立地していることがよくわかる。丘陵の中央には、丘陵裾の東から西にむかって浅い谷が入り込み、その南北の尾根・平坦地で竪穴建物がそれぞれ４棟ずつと、東西方向の谷の奥で段状遺構が７基検出されている。竪穴建物は 15 ～ 40 mの間隔で直線的に並んでおり、谷を挟んだ南北方向では建物同士の間隔が広いものの、東西方向は概ね 20 m程度の間隔で並ぶ様子が窺える。これらの竪穴建物は、先にも述べたように遺物の出土量が少ないため詳細な時期決定が難しいが、遺跡全体での出土遺物の時期は限定的で、近接した時期に建てられたことが確実視できる。さらにこれらの竪穴建物は、南側丘陵裾の竪穴建物 13・14・15 や段状遺構を除くと切り合いも少なく、全てが同時併存していたとまでは当然言い切れないものの、建物が計画的に配置されていた可能性が高い。また、南北の尾根・平坦地は西側の未調査地にも広がっており、ここにも弥生時代の竪穴建物が存在していた可能性が極めて高いため、この未調査地には南北それぞれ６・７棟前後の建物の存在が推定されることから、南北の尾根・平坦地には合わせて 20 棟程度の竪穴建物が存在したと考えられる。段状遺構は竪穴建物と異なり、遺構同士が近接しているものもみられるが、大きくは２基ごとにまとまりがみられるため、同時期に３・４棟程度が併存していた可能性がある。この段状遺構と南側斜面裾の竪穴建物を合わせれば、遺跡全体の建物数は 25 棟程度になることが想定でき、今回の成合遺跡の調査は集落景観を復元する上でも好例となる（図 204）。

集落の立地条件と性格　成合遺跡のような丘陵上の集落の場合、集落の性格を考える上でその立地条件と防御性の有無が大きな問題となる[58)]。成合遺跡は独立丘陵上に集落域が営まれているものの、集落を画する環濠や溝などは全く検出されておらず、さらに伐採具や収穫具も含めた石器全体の出土数が少なく、明確な軍事性も見出しがたいため、後出する古曽部・芝谷遺跡とは明らかに異なる側面がある。古曽部・芝谷遺跡の場合、淀川流域を見下ろす丘陵上に遺跡が立地するのに対し、成合遺跡は平野部からやや奥まった地点に遺跡が立地しており、対面する古曽部・芝谷遺跡は視認できるものの、平野部の安満遺跡さえ見通すことができないなど、両者の立地は大きく異なっている。さらに古曽部・芝谷遺跡では、環濠をめぐらすような軍事性・防御性を備えているなど、典型的な「高地性集落」としての要素を備えているのに対して、先に述べたように成合遺跡では、検出遺構から軍事的な要素を見出すことはできない。遺跡の立地が平野部と 20 ～ 30 m程度の比高差がある点で沖積地の集落遺跡とは異なっているが、それ以外の要素で他の小規模な集落と何ら変わるところはなく、いわゆる山住み集落、広義の高地性集落として認識される類型の一集落として捉えることができる。

また、居住域が確認されている一方で、生産域と墓域ははっきりしていないため、この点は今後に課題を残す。生産域については、石包丁と考えられる粘板岩が遺跡内から数点出土しており、丘陵裾部で谷水田を経営していた可能性を想定できるものの、その評価は分かれるところである。一方で墓域については、474 土坑が唯一その可能性として推定できる遺構であるが、他には全く発見されていないため実態がはっきりしない。生産域と墓域が明確でないといった点については、古曽部・芝谷遺跡と共通するものの、先にも述べたように防御性がないといった点で遺跡の性格が大きく異なっており、これには立地や規模、時期、存続期間などに要因があると思われ、この地域の弥生時代遺跡の動態を考える上で重要な問題となるだろう。

４．檜尾川流域における弥生時代集落の動態

このように成合遺跡では、中期後半から末を中心とした時期の集落域を良好な形で検出することができた。出土遺物の量が少なく時期的にも限定できることや、遺構の切り合いがあまりみられないことなどから、集落の存続期間が短期間であったと推測することができる。また、平野部からやや奥まった山あいの丘陵上に遺跡が位置している点が本遺跡の最大の特徴であり、このような集落の立地もふまえて周辺遺跡との関係を検討していく必要がある。檜尾川の扇状地部分に位置する安満遺跡は、弥生時代の全期間を通して営まれた大規模な集落であることはよく知られており、前期から中期まで集落は拡大を続けていくものの、後期初頭には衰退することが知られている[59]。この安満遺跡の衰退と同時に北西の丘陵上に出現したのが古曽部・芝谷遺跡で、成合遺跡はこのふたつの遺跡が衰退・出現する直前の時期に一時的に営まれた集落と言えるが、このふたつの遺跡と比べると集落規模が小さく、石器・鉄器などの利器の生産の痕跡などはみられない。この頃安満遺跡では、中期以降に集落が拡大していった結果、中期後半から末には居住域が飽和状態であったとされており、かつて森田克行が想定したように、成合遺跡は安満遺跡を補完するような位置を占めていた可能性がある[60]。このような意味において、遠隔地からもたらされたヒスイ製勾玉には、集落間の繋がりを具現化するような象徴的な意味合いを有していたかもしれない。

また、檜尾川を遡った山間部にまで開発が進んだ理由については定かではないが、焼失建物である竪穴建物３の炭化材同定分析から、建築部材にはアカガシ亜属やスダジイが使用されており、成合遺跡の周辺部の当時の植生環境は常緑広葉樹林（照葉樹林）が広がっていたことが判明している（第６章第２節参照）。このことは人為的な開発がほとんどおよんでいなかった山あいに集落が切り開かれたことを示しており、成合遺跡は平野部の集落を補完するような役割を有していた可能性を裏付ける根拠となりうるだろう。なお、金龍寺旧境内跡の調査地で出土した土器や石器は、成合遺跡よりも古いⅢ様式末からⅣ様式初頭頃に位置づけられるため、成合地区の山中の開発が遡る可能性もあるが、遺物の出土量が少なく明確な遺構も認められないため、この時期に大規模な開発がおこなわれた可能性は想定しがたい。僅かではあるが時期的な隔たりもみられることから、両者の繋がり自体も不明確で、この時期に檜尾川上流域の低地部にまで遺跡が進出した可能性は否定できないが、丘陵上が開発されて集落が営まれるのは成合遺跡で集落が出現する中期末の段階に限定されるだろう。成合遺跡が衰退した後も、安満遺跡の衰退と古曽部・芝谷遺跡の出現に象徴されるように、この檜尾川流域では大きく集落が動くことを踏まえれば、中期末から後期前半にかけての時期に、社会や環境の大きな変化があったことが想定される。

このように成合遺跡の今回の調査成果は、安満遺跡や古曽部・芝谷遺跡を中心とした檜尾川流域の弥生時代集落の動態を探る上で重要であり、弥生時代の集落動態の初期のモデルとなった地域として考古学的にも極めて重要なものとなる[61]。また萩之庄南遺跡[61]や梶原西遺跡、井尻遺跡など檜尾川の扇状地や周辺域では、近年の当センターの調査によって弥生時代に関する成果が挙がっているところであり、このような周辺遺跡との比較検討を積み重ねることによって、この地域の弥生集落の動態については改めて検討する必要があろう。（笹栗）

第５節　まとめ

最後に今回の調査成果を基に、周辺遺跡の動向も加味しながら成合地区の歴史的展開についてまとめ、結びとしたい。この成合地区で人間活動の痕跡がはじめてみられるのは、金龍寺旧境内跡１・２区で出土した土器や石器から弥生時代中期中頃から後半にかけての時期であるが、これとやや時期を隔てた中期末頃になって成合遺跡で本格的に集落が営まれたことが判明した。出土した炭化材の分析から当時の周辺の植生は常緑照葉樹の生い茂る環境下にあり、これまで開発が進行していなかったこの地区に突如として集落が営まれことが推測できる。集落が山間部にまで進出した背景には、安満遺跡をはじめとして周辺の集落との関係や当時の社会・環境の変化があったことが想定される。ただしこの成合遺跡で成立した集落は、出土遺物の量や時期幅、遺構の切り合い関係から存続期間が中期末の一時期に限定でき、当遺跡の集落を営んだ集団はすぐに近隣の遺跡に移動したと考えられる。

その後の展開については、弥生時代後期末に檜尾川の扇状地付近の丘陵上に紅茸山遺跡が出現するが、成合遺跡周辺の山間部までは人間の活動痕跡が見出せない時期が長く続くようで、この地区の開発が進行するのは６世紀後半以降と考えられる。今回の成合遺跡の調査でみつかった３基の横穴式石室や成合１号墳はこの地区を基盤とする集団の墳墓と想定することができ、この時期の成合地区の開発を裏付ける存在として重要である。また成合遺跡８区で５世紀代の須恵器が出土している点や、金龍寺旧境内跡の調査で埴輪が出土している点も踏まえれば、開発の時期が遡ることも想定する必要があるだろう。

８世紀に入ると成合遺跡では出土遺物の量が徐々に増え始め、近接する金龍寺旧境内跡の調査では円面硯や石帯など高位階層の存在を示す遺物の出土もみられるようになるなど、この成合地区が徐々に変貌を遂げはじめる様子が明らかとなってきた。さらに成合遺跡では９世紀代の出土遺物の量や質が豊富になり、仏具や施釉陶器の出土などは山間部の成合地区が山林寺院として発展していった様子を示すものと言えるだろう。成合遺跡ではこの時期の大規模な平坦面の造成痕跡が明らかとなったが、今後は良好な遺構の検出が望まれるところである。また今回の調査で数多くみつかった焼土坑は火葬に関連する遺構である可能性が高く、周辺一帯の山中が墓域として機能していた可能性も高まってきた。これらの存在は寺院との関係を裏付ける根拠ともなり、今後は当センターが現在調査をおこなっている成合地獄谷遺跡の成果等も加味して、その位置づけを検証する必要がある。

さらに今回の調査で新たにみつかった須恵器窯は、出土遺物の内容から都城や官衙、寺院などへの供給を目的としたものと想定でき、製品の流通先や窯の経営主体などが課題となる。近在する成合琴堂窯跡の存在や、その付近でさらに古い時期の須恵器が採取されている点などを踏まえると、この他に窯跡が存在する可能性は高い。成合地区全体の窯の基数や操業期間も重要な問題で、先に述べた古代の遺跡の展開との関連についても明らかにしていく必要があるだろう。

今回の調査においては平安時代中頃以降の遺構・遺物が希薄であったため、その後の展開を発掘調査の成果から追認することができないが、この地区は中世には荘園化が進行していったことが判明しており、今回の成果で明らかとなったような８・９世紀の遺跡の動向を基盤として、この成合地区が発展したことが推測される。弥生時代の集落の実態や古代の遺構・遺物の存在が明らかとなった点が、今回の調査における大きな成果であったが、今後は周辺遺跡との比較検討をさらに積み重ねることによって、成合地区や北摂地域全体の歴史復元をおこなっていくことが肝要で、このような作業を通して今回の調査成果を有効に活用されていくことが望まれるところである。　（笹栗）

【註】

1）石尾政信 1987「長岡宮出土の緑釉唾壺について－唾壺集成－」『京都府埋蔵文化財論集 第 1 集 －創立五周年記念誌－』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

2）鎌田博子 1997『梶原瓦窯跡』名神高速道路内遺跡調査会調査報告 第 3 輯　名神高速道路内遺跡調査会

3）山本信夫編 1980『宮ノ本遺跡』大宰府町の文化財 第 3 集 大宰府町教育委員会

4）土師器焼成土坑の特徴については、下記に詳しい。
窯跡研究会編 1997『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社

5）上村安生 1997「東海 －三重県を中心として－」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社

6）嶋谷和彦編 1992『堺市文化財調査概要』第 31 冊 堺市教育委員会

7）大阪府教育委員会 1988『ツゲノ遺跡発掘調査概報・Ⅱ』

8）信田真美世編 2003『粟生間谷遺跡 古代・中世編』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第 85 集（財）大阪府文化財センター

9）都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

10）小林義孝 1992「灰を納めた土壙」『究班』埋蔵文化財研究会 15 周年記念論文集、小林義孝 1999「古代墳墓研究の分析視覚」『古代文化』第 51 巻 第 12 号 古代学協会

11）先に土師器焼成土坑とした焼土坑についても、壁面と底面が被熱するといった特徴が共通するため、ひとまずはこのＡ類の範疇に含めており、必ずしもＡ類土坑の全てが火葬遺構になるとは限らない。

12）栩木真編 1991『發昌寺跡』新宿区南元町遺跡調査会など

13）江浦洋編 2006『大坂城址 Ⅲ』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第 144 集（財）大阪府文化財センター

14）安田稔・長島雄一・吉田秀享 1989「武井Ｅ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター

15）川端博明 1998『梶原古墳群』名神高速道路内遺跡調査会調査報告 第 4 輯 名神高速道路内遺跡調査会

16）宮崎康雄編 1996『古曽部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書 第 20 冊　高槻市教育委員会

17）原口正三ほか 1973『高槻市史』第 6 巻考古編 高槻市役所、高槻市史編さん委員会編 1977『高槻市史』第 1 巻本編Ⅰ 高槻市役所、西本幸嗣 2010『シリーズ「高槻の村と町」Ⅱ 成合 春日神社と金龍寺』高槻市立しろあと歴史館

18）高槻市教育委員会 1988・1989・2000・2001・2007『嶋上遺跡群』12・13・24・25・31

19）高橋公一「平城宮系軒瓦」『文化財学論集』文化財学論集刊行会

20）上原真人 2002「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術』265 号 毎日新聞社

21）高槻市教育委員会による春日神社周辺の調査では、現在のところ古代の明確な遺構は検出されていないが、平安時代中頃の遺物の出土量が相対的に多く、緑釉陶器片の出土量が他の遺跡と比べて多い傾向があると述べられている。前掲 19）高槻市教委 1988

22）金光正裕 2012『金龍寺旧境内跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 224 集（公財）大阪府文化財センター

23）望月精司 2010「窖窯構造をもつ須恵器窯跡の各部位構造とその理解」窯跡研究会編『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜－』真陽社

24）牛谷好信・浜中有紀 2010「第 5 章 関西」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜』真陽社

25）白石耕治 2010「第 6 章 陶邑窯－大阪府南部須恵器窯跡群の地域性－」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜』真陽社、畠井浩 2006「須恵器の窯の移り変わり」『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館

26）山田真一 2010「第 13 章 石組側壁窯の分布と系譜」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜』真陽社

27）前掲 24）牛谷・浜中 2010

28）高橋照彦・中久保辰夫編 2012『篠窯跡群大谷 5 号窯の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告 第 5 冊 大阪大学考古学研究室篠窯調査団

29）中村剛彰 1995「奈良時代末頃における一地方窯の様相～成合琴堂窯跡群発掘調査報告にかえて～」『高槻市文化財年報』平成 5 年度 高槻市教育委員会

30）石井清司・野々口陽子 1995「１．篠・マル山１号窯跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 74 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

31）表 11 については、各窯跡の報告書を基に作成した。
篠窯：杉原和雄・石井清司・引原茂治・田中彰・土橋誠 1984『篠窯跡群Ⅰ』京都府遺跡調査報告書 第２冊（財）京都府埋蔵文化財センター、土橋誠編 1989『篠窯跡群Ⅱ』京都府遺跡調査報告書 第 11 冊（財）京都府埋蔵文化財センター、前掲 28）石井・野々口 1995 ／陶邑窯：野上丈助ほか 1982『陶邑Ⅴ』大阪府文化財調査報告書第三三輯 大阪府教育委員会、宮崎泰史編 1994『泉州における遺跡の調査Ⅰ 陶邑Ⅷ』大阪府文化財調査報告書 第 46 輯 大阪府教育委員会、乾哲也 1998『ＫＭ 302 号窯発掘調査報告書』和泉市埋蔵文化財調査報告 第５集 和泉市教育委員会／成合琴堂窯跡：前掲 29）中村 1995

32）前掲 31）杉原・石井・引原・田中・土橋 1984
なお石原畑３号窯跡を含め、関連する時期の篠窯の資料については、未公表資料も含めて実見させて頂いた。

33）西弘海 1986『土器様式の成立とその背景』真陽社、巽淳一郎 1991「第Ⅵ章考察 ２土器」『平城宮発掘調査報告書ⅩⅢ』奈良文化財研究所学報 第 40 冊 奈良国立文化財研究所、神野恵 2005「第３章出土遺物 ３－１－３土器類」『平城宮発掘調査報告ⅩⅥ 兵部省地区調査』奈良文化財研究所学報 第 70 冊 独立行政法人奈良文化財研究所

34）國下多美樹 2005「長岡京出土土器の基礎的研究」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 65 集 向日市教育委員会

35）上村憲章「第２章 土器と陶磁器 3 須恵器」(財) 古代学協会編『平安京提要』角川書店

36）佐藤隆 2004「８世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係－陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その２－」『大阪歴史博物館 研究紀要』第３号（財）大阪市文化財協会

37）石井清司 1995「篠窯須恵器」中世土器研究会編『概説　中世土器・陶磁器』真陽社

38）木村理恵 2012「壺・鉢からみる篠窯の須恵器の生産と供給」『篠窯跡群大谷５号窯の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告 第５冊 大阪大学考古学研究室篠窯調査団

39）前掲 31）土橋編 1989

40）伊藤純 1992「風字硯をめぐるいくつかの問題－考古資料と伝世品－」『ヒストリア』第 135 号 大阪歴史学会

41）図 197 については、以下の文献を基に作図。
北野博司 2007「律令国家転換期の須恵器窯業」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 134 集 国立歴史民俗博物館、千葉太朗 2010「第４章 陶邑窯と畿内諸窯の検討」『古代窯業の基礎研究－須恵器窯の技術と系譜』真陽社

42）臼杵勲編 1996『1995 年度 平城宮跡発掘調査部 発掘調査概報』奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

43）前掲 17）原口ほか 1973 ほか

44）前掲 17）原口ほか 1973、宮崎康雄・冨成哲也 2001「安満山古墳群萩之庄支群の調査」『高槻市文化財年報 平成 11 年度』高槻市教育委員会、西村恵祥・高橋公一・宮崎康雄 2003「安満山古墳群の調査（３）」『高槻市文化財年報 平成 13・14 年度』高槻市教育委員会

45）前掲 15）川端 1998

46）廣瀬時習 2013『成合１号墳』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 234 集（公財）大阪府文化財センター

47）前掲 17）原口ほか 1973

48）前掲 16）宮崎編 1996

49）橋本久和 1976『奥坂古墳群発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書 第９冊 高槻市教育委員会

50）笹栗拓 2009「地域社会と群集墳論に関する一考察」『京都府の群集墳』京都府埋蔵文化財研究会、菱田哲郎 2013「７世紀における地域社会の変容 古墳研究と集落研究の接続をめざして」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 179 集 国立歴史民俗博物館

51）成合１号墳に隣接する南側の尾根上や、さらに南側の山裾の調査では埴輪片や須恵器片が出土している。
前掲 22）金光 2012、前掲 46）廣瀬 2013

52）前掲 16）宮崎編 1996

53）寺前直人 1999「近畿地方の磨製石鏃にみる地域間交流とその背景」『国家形成期の考古学 －大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集－』大阪大学考古学研究室

54）図 202 については、勾玉の掲載された以下の文献を再トレースした。
加茂遺跡・安満遺跡・鬼虎川遺跡：木下尚子 1987「弥生定形勾玉考」『東アジアの歴史と考古学 岡崎敬先生退官記念論集』／市田斉東坊遺跡：野島永編 2004『市田斉東坊遺跡』京都府遺跡調査報告書 第 36 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター／池上曽根遺跡：池上曽根遺跡史跡指定 20 周年記念事業実行委員会編 1996『弥生の環濠都市と巨大神殿』／太秦遺跡：市本芳三 2006『太秦遺跡・太秦古墳群 2』財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 143 集（財）大阪府文化財センター

55）前掲 9）都出 1989

56）段状遺構の機能と性格についてはさまざまな見解があり、下記によく整理されている。
森岡秀人 1987「高地性集落」『弥生文化の研究』 7 雄山閣、合田茂伸 1990「平地の住居と斜面の住居－弥生時代における竪穴式住居の地形立地と携帯－」『今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論集』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会

57）前掲 17）原口ほか 1973

58）丘陵上の集落や高地性集落の問題については、以下の文献が参考になる。
柴田昌児 2004「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観』第 10 巻 小学館

59）森田克行 1989「大阪府 安満遺跡 ≪三島平野東半地域の弥生社会≫」『探訪 弥生の遺跡 畿内・東日本編』有斐閣、森田克行 1995「Ⅷ 摂津の弥生時代と遺跡」『弥生時代の大阪湾沿岸』大阪経済法科大学出版部

60）前掲 58）森田 1995

61）原口正三 1977「Ⅱ 考古学から見た原始・古代の高槻」『高槻市史』第一巻 本編Ⅰ高槻市史編さん委員会、前掲 9）都出 1989 など

62）黒須亜希子 2013『萩之庄南遺跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 237 集（公財）大阪府文化財センター

遺 物 観 察 表

成合遺跡　出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
3	16	49	1区	20A-9f		1層	須恵器	杯B	14.0	14.8	12.0	5.4	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ ひずみ大、5区須恵器窯産か 拡張区近辺より出土
4	16	49	1区	20A-9・10e		2層	須恵器	平瓶か	—	(18.5)	12.2	(6.5)	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：にぶい橙 5YR6/3	5区須恵器窯産か
5	16	—	1区	20A-10e		2層	土師器	皿	7.0	7.2	6.0	0.8	5以下	良好	密	外：橙 7.5YR6/6 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：灰褐 5YR6/2	内外面 摩滅、外面 ナデ 3層直上より出土
6	16	49	1区	20A-9・10e		2層	弥生土器	(底部)	—	(11.4)	6.7	(2.5)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：黄灰 2.5Y5/1 断面：明褐 7.5YR5/6	壺か、内外面 摩滅
7	16	49	1区			3層	弥生土器	高杯	—	(8.7)	(4.2)	(1.1)	5以下	やや不良	やや粗	外：橙 7.5YR6/8 内：橙 7.5YR6/8 断面：橙 7.5YR6/8	尾根上より出土 内外面 摩滅、外面底部 剥離痕あり
8	20	49	2区	1A-10e		1層(上面)	土師器	甕	24.2	(25.2)	—	(4.2)	10	良好	密	外：浅黄橙 10YR8/4 内：明黄褐 10YR7/6 断面：明黄褐 10YR7/6	内面 摩滅、内外面 ナデ
9	20	49	2区	1A-10c		1層(上面)	須恵器	杯A	8.6	9.0	6.7	3.4	40	良好	密	外：灰白 N7/ 内：灰白 N7/ 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ、外面底部 ヘラ切り未調整 内面強く凹む 8〜9世紀
10	20	—	2区	2A-1f		1層(上面)	須恵器	杯A	—	(12.0)	8.6	(1.6)	10	良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 N6/ 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 回転ナデ、外面降灰あり 7世紀代か
11	20	49	2区	1A-10c		1層(上面)	須恵器	杯B	12.4	12.6	8.8	4.3	40	良好	密	外：灰 7.5Y4/1 内：褐灰 10YR5/1 断面：にぶい褐 7.5YR5/3	内外面 回転ナデ、外面底部 ヘラ切り未調整 9世紀前半〜中頃
12	20	49	2区	1A-10c		1層(上面)	須恵器	壺M	3.8	(4.8)	—	(3.6)	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 7.5Y6/1 断面：褐灰 7.5YR6/1	内外面 回転ナデ 内面 絞り痕あり・水挽き成形 9世紀中頃
13	20	49	2区	1A-10c		1層(上面)	須恵器	壺L	9.8	(14,0)	—	(10.5)	20	良好	密	外：褐灰 10YR5/1 内：灰 5Y6/1 断面：にぶい褐 7.5YR6/3	内外面 回転ナデ 体部外面 回転ヘラケズリ、頸部二段接合 8世紀後半か
14	20	49	2区	1A-10c		1層(上面)	須恵器	壺Lか	—	(12.4)	(9.2)	(6.9)	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 回転ナデ 外面底部 不明不定方向ナデ 9世紀中頃
15	20	—	2区	2A-1c		1層(上面)	須恵器	(底部)	—	(10.4)	5.8	(3.3)	5	良好	密	外：灰オリ―ブ 5Y6/2 内：灰白 5Y7/2 断面：灰白 5Y7/2	壺or鉢の底部 内外面 回転ナデ、外面 回転ヘラケズリ 9世紀前半〜中頃
17	20	49	2区	1A-10d		1層(上面)	灰釉陶器	壺	—	(9.8)	7.1	(4.5)	底部20	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰白 5Y7/1 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ、外面 灰釉 9世紀前半以降
18	20	—	2区	2A-1f		1層(上面)	弥生土器	(底部)	—	(9.5)	7.6	(2.5)	底部20	良好	密	外：灰黄褐色 10YR6/2 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：にぶい黄橙 10YR7/3	外面 タテハケのちナデか 内面 粗いハケか
19	20	49	2区	2A-1f		1層(上面)	弥生土器	(底部)	—	(12.6)	9.2	(2.5)	20	良好	やや粗	外：浅黄橙 10YR8/4 内：浅黄橙 10YR8/3 断面：灰白 10YR8/2	内外面 摩滅、ナデか
20	20	49	2区	2A-1d		1層(上面)	弥生土器	高杯 or 鉢	27.6	28.0	—	(4.3)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：浅黄橙 7.5YR8/6 断面：淡橙 5YR8/3	内外面 摩滅、外面 凹線文
21	21	50	2区	2A-1e		1層	土師器	杯Bか	—	—	—	(2.2)	5	やや不良	密	外：橙 7.5YR7/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：明黄褐 10YR7/6	9世紀か
22	21	50	2区	1A-10c		1層	土師器	皿	14.6	14.8	7.4	2.1	20	良好	密	外：橙 7.5YR7/6 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：橙 5YR7/6	外面 ヘラケズリｃ手法 8世紀後半〜9世紀前半
23	21	50	2区	1A-10c		1層	土師器	皿	13.8	14.0	10.2	1.5	口縁15	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅、外面 ナデｅ手法か 9世紀中頃
24	21	50	2区	1A-10e		1層	土師器	皿	14.8	15.0	10.6	1.1	口縁10	良好	密	外：灰白 5Y8/1 内：灰白 5Y8/1 断面：灰白 5Y8/1	内外面 ナデ 10世紀後半か
25	21	50	2区	1A-10d		1層	土師器	皿	14.6	15.0	11.8	1.3	10	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：浅黄橙 7.5YR8/6 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	内外面 摩滅、外面 ナデｅ手法か 9世紀中頃
26	21	50	2区	1A-10e		1層	土師器	皿	15.6	16.0	10.6	1.6	口縁10	良好	密	外：明赤褐 5YR5/6 内：明赤褐 5YR5/6 断面：明赤褐 5YR5/6	内外面 摩滅、外面 ヘラケズリｃ手法か 9世紀前頃
27	21	50	2区	1A-10e		1層	土師器	皿	18.9	19.0	16.0	1.6	口縁10	良好	密	外：橙 7.5YR7/6 内：橙 7.5YR7/6 断面：橙 7.5YR7/6	内外面 摩滅、口縁部 ヨコナデ 外面 調整不明 9世紀前半〜中頃
28	21	50	2区	1A-10e		1層	土師器	皿	18.8	19.0	13.8	1.4	口縁10	良好	密	外：橙 7.5YR6/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：橙 7.5YR6/6	内外面 摩滅、外面 ヘラケズリか 9世紀前半
29	21	50	2区	1A-10e		1層	土師器	甕	14.6	(15.2)	—	(5.7)	5	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 ナデ、ユビオサエ
30	21	50	2区	1A-10c		1層	土師器	甕	16.4	(17.0)	—	(5.0)	口縁30	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	体部外面 タタキか、頸部 接合痕あり 口縁内面 ヨコハケ 体部内面 ナデ・ユビオサエ
31	21	50	2区	1A-10e		1層	土師器	甕	17.4	(17.6)	—	(8.4)	口縁10	良好	密	外：橙 5YR7/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	外面 摩滅、体部外面 タタキか 体部内面 ナデ・ユビオサエ
32	21	50	2区	2A-1c		1層	土師器	甕	18.8	(20.0)	—	(5.0)	5	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	体部外面 タテハケのちナデ
33	21	50	2区	1A-10d		1層	土師器	甕	20.4	(21.6)	—	(4.8)	5以下	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅、体部外面 タタキか 口縁部内面 ヨコハケのちナデ
34	21	50	2区	1A-10d		1層	土師器	甕	22.2	(23.2)	—	(7.5)	口縁10	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅、ナデか
35	21	49	2区	1A-10e		1層	土師器	甕	26.2	26.8	—	(5.7)	口縁25	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 ナデ、体部内面 ユビオサエ
36	21	50	2区	1A-10e		1層	黒色土器A類	杯	13.4	13.6	5.8	3.5	20	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：褐灰 10YR4/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁部外面 ヘラミガキ(黒色化) 体部外面 ナデ 内面 ヘラミガキ、9世紀前半〜中頃
37	21	50	2区	1A-10e		1層	黒色土器A類	杯か	15.2	15.4	—	(3.7)	全体10 口縁10	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：褐灰 10YR4/1 断面：浅黄橙 10YR8/3	内外面 摩滅 口縁部外面 ヘラミガキ(黒色化) 底部 ヘラケズリ、内面 ヘラミガキ 9世紀前半〜中頃
38	21	50	2区	1A-10c		1層	黒色土器A類	甕	11.8	(12.9)	—	(3.5)	全体5以下 口縁10弱	良好	密	外：にぶい褐 7.5YR5/4 灰黄褐 10YR4/2 内：暗灰黄 2.5Y4/2 断面：浅黄 2.5Y7/3	口縁部外面 ヨコナデ、ユビオサエ(黒色化)、 体部外面 摩滅・剥離 口縁部内面 ヘラミガキ、内面 ナデ

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
39	21	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	黒色土器A類	甕	—	(15.8)	—	(5.0)	10	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：黒褐 2.5Y3/1 断面：黒褐 2.5Y3/1	外面 ヘラミガキか 内面 板ナデのちヘラミガキ
40	22	49	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	須恵器	杯A	12.1	12.3	8.7	3.9	50	やや良	密	外：灰 10Y6/1 内：青灰 10BG6/1 断面：灰赤 2.5YR5/2	内外面 回転ナデ 外面底部 ヘラ切りのちナデ消し ×字形の火襷き 8世紀後半～9世紀前半
41	22	50	2区	1A-10d		1層	須恵器	杯蓋	13.2	13.2	—	(1.9)	25	良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 回転ナデ、外面天井部 ヘラ切り 9世紀前半～中頃
42	22	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	須恵器	杯蓋	13.4	13.8	—	(1.2)	20	良好	密	外：灰白 5Y8/1 内：灰白 5Y8/1 断面：灰白 5Y7/2	内外面 回転ナデ、外面天井部 ヘラ切り 9世紀前半～中頃
43	22	50	2区	2A-1f		1層	須恵器	杯蓋	15.8	16.0	—	(1.7)	全体10 口縁5	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：赤灰 2.5YR6/1	内外面 回転ナデ 外面天井部 ヘラ切りのち回転ナデ 口縁部外面 降釉・剥離痕あり 9世紀前半～中頃
44	22	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	須恵器	杯	14.4	14.4	—	(4.5)	10	良好	密	外：灰 10Y6/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ
45	22	50	2区	1A-10c		1層	須恵器	杯B	—	(12.2)	9.2	(3.5)	30	良好	密	外：灰 7.5Y5/1 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 9世紀前半～中頃
46	22	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	須恵器	壺	—	9.4	—	(5.6)	30	良好	密	外：灰白 7.5Y7/1 灰 7.5Y5/1 内：灰 N6/ 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ、頸部内面 絞り痕あり
47	22	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	須恵器	壺M	5.0	(5.2)	—	(3.6)	10	良好	密	外：黄褐 2.5Y5/3 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ、外面 自然釉付着 黄色がかった胎土、灰釉の可能性あり
48	22	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	須恵器	壺M	4.0	(4.2)	—	(3.1)	15	良好	密	外：灰 N5/ 内：オリ―ブ灰 2.5GY6/1 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、頸部内面 絞り痕あり 口縁部陶邑タイプ、9世紀前半～中頃
49	22	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	須恵器	壺	—	(9.8)	6.4	(4.0)	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ 削出し高台
50	22	50	2区	1A-10c		1層	須恵器	壺M	—	(7.6)	3.8	(5.2)	40	良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰白 N7/ 断面：にぶい黄橙 10YR7/2	内外面 回転ナデ、底部 糸切り 9世紀前半～中頃
51	22	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	須恵器	壺M	—	(5.8)	4.0	(2.7)	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰褐 7.5YR6/2	内外面 回転ナデ、底部 糸切り 9世紀前半～中頃
52	22	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	須恵器	壺M	—	(6.2)	3.8	(2.9)	15	普通	密	外：灰白 5Y7/1 内：灰白 7.5Y7/1 断面：灰白 5Y7/2	内外面 回転ナデ、底部 糸切り 9世紀前半～中頃
53	22	—	2区	1A-10e		1層	須恵器	壺N	—	—	—	(3.5)	5	良好	密	外：灰 5Y6/1 内：灰 5Y6/1 断面：灰 5Y6/1	把手のみ
54	22	50	2区	1A-10d		1層	須恵器	壺	—	(17.6)	13.8	(4.9)	5	良好	密	外：灰 5Y6/1 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、外面底部 回転ヘラケズリ 短頸壺か
55	22	49	2区	1A-10c		1層	須恵器	壺	—	(26.2)	13.6	(16.3)	30	良好	密	外：灰 7.5Y5/1 内：灰白 7.5Y7/1 断面：灰白 7.5Y7/1	内外面 回転ナデ 短頸壺か
56	22	50	2区	1A-10e		1層(斜面褐)	弥生土器	壺	—	—	—	(6.7)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：浅黄橙 10YR8/4	有段口縁大型壺か、頸部 貼付突帯・刻目文 内外面剥離著しい、外面 タテハケ 内面 ヨコ・ナナメハケ Ⅳ様式後半か
57	22	50	2区	1A-10f		1層	弥生土器	(底部)	—	(9.4)	5.5	(3.0)	底部20	やや不良	やや粗	外：浅黄橙 7.5YR8/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/3	壺か、内外面 摩滅
58	22	50	2区	2A-1e		1層	弥生土器	(底部)	—	(7.6)	5.8	(2.0)	50	やや不良	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：褐灰 7.5YR6/1 断面：浅黄 10YR8/3	外面 板状工具によるタテナデ
63	22	50	2区	2A-1e		1層(下面)	弥生土器	広口壺	15.8	(18.0)	—	(6.1)	20	良好	密	外：橙 5YR6/6 内：橙 5YR6/6 断面：橙 5YR6/6	外面 粗いタテハケ、内面 ユビオサエ
64	22	50	2区	1A-10d		1層(下面)	須恵器	壺	—	14.9	13.4	(3.2)	全体20 底部100	良好	密	外：灰白 5Y7/1 ～ 2 内：灰白 5Y7/1 ～ 2 断面：灰白 5Y7/1 ～ 2	内外面 回転ナデ、底部 ナデ消し 内面 自然釉付着、高台に熔着あり 8世紀
65	22	—	2区	2A-1i		1層(下面)	弥生土器	鉢か	20.8	(22.2)	—	(3.8)	10	良好	密	外：橙 7.5YR6/8 内：橙 7.5YR6/6 断面：橙 7.5YR6/6	内外面 摩滅、外面 凹線文 天地逆で器台・壺・鉢・高杯等の脚部の可能性あり
66	23	51	2区	1A-10d	土器の集中部(グリット中央付近)	1層(2層直上)	土師器	皿	17.6	18.0	14.6	2.2	50	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	外面 ヘラケズリc手法 9世紀前半
67	23	—	2区	1A-10d	土器の集中部(グリット中央付近)	1層(2層直上)	土師器	杯A	13.8	14.0	—	(2.7)	口縁20	良好	密	外：橙 7.5YR7/6 内：橙 7.5YR7/6 断面：橙 7.5YR7/6	内外面 摩滅、外面 ナデか 9世紀前半～中頃
68	23	51	2区	10A-1d	土器の集中部(グリット中央付近)	1層(2層直上)	須恵器	杯B	11.8	12.0	8.6	4.0	10	良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 回転ナデ
69	23	50	2区	1A-10d	土器の集中部(グリット中央付近)	1層(2層直上)	須恵器	壺M	3.6	6.9	4.0	10.0	100	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、頸部 絞り痕 底部 糸切り痕、口縁折り曲げ成形
70	23	50	2区	1A-10d	土器の集中部(グリット中央付近)	1層(2層直上)	須恵器	壺M	3.8	7.7	4.0	11.5	80	不良	密	外：淡黄 2.5Y8/3 内：浅黄 2.5Y7/3 断面：灰白 2.5Y8/1	内外面 回転ナデ、肩部～頸部 絞り痕
72	23	51	2区	1A-10c		2層	弥生土器	広口壺	17.8	(18.6)	—	(9.1)	10	不良	密	外：橙 7.5YR7/6 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：橙 7.5YR7/6	内外面 摩滅、頸部 ナデor直線文か 口縁部外面 波状文or直線文か ＋円形浮文1ヵ所残存 Ⅳ様式末か
73	23	51	2区	1A-10c		2層	弥生土器	甕	15.7	(15.9)	—	(3.0)	5以下	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：明黄褐 10YR7/6	口縁端部 凹線文、外面 タテハケ(下→上) 内面 摩滅、ナデか
74	23	—	2区	2A-1c		2層	弥生土器	(頸部)	—	(13.1)	—	(3.5)	5以下	良好	密	外：明黄褐 10YR7/6 内：にぶい黄橙 10YR6/3 断面：褐灰 10YR4/1	甕か 外面 タテハケ、内面 摩滅、ヨコハケか
75	23	51	2区	2A-1c		2層	弥生土器	(底部)	—	(5.5)	3.6	(2.7)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅
76	23	51	2区	2A-1c		2層	弥生土器	(底部)	—	(9.4)	6.9	(5.1)	5以下	良好	やや粗	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい黄橙 10YR6/3	内外面 摩滅
77	23	51	2区	2A-1d		3層(上面)	土師器	甕	15.4	(15.8)	—	(4.4)	5以下	良好	密	外：にぶい褐 7.5YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR6/3 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 摩滅 外面 不定方向ハケ、口縁部内面 ヨコハケ
78	23	51	2区	2A-1d		3層(上面)	弥生土器	壺	16.0	(16.6)	—	(3.2)	5以下	良好	密	外：にぶい橙 5YR6/4 内：橙 7.5YR7/6 断面：橙 7.5YR6/6	内外面 摩滅
79	23	—	2区	1A-10g～2A-1g	中央谷筋	上層	須恵器	杯蓋	15.0	15.3	—	(1.7)	10	やや不良	密	外：灰 5Y5/1 内：灰 5Y5/1 断面：灰 5Y5/1	内外面 回転ナデ 8世紀

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
80	23	51	2区	1A-10g ～2A-1g	中央谷筋	上層	須恵器	杯蓋	(16.7)	(16.8)	—	(1.6)	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：赤灰 5R5/1	内外面 回転ナデ 8世紀
81	23	51	2区	1A10g ～2A-1g	中央谷筋	上層	須恵器	杯蓋	—	16.4	—	(2.1)	10	普通	密	外：灰黄 2.5Y6/2 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ 8世紀
82	23	51	2区	1A-10g ～2A-1g	中央谷筋	上層	須恵器	杯蓋	14.4	14.6	—	(1.1)	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：赤灰 5R6/1	内外面 回転ナデ 9世紀前半～中頃
83	23	51	2区	1A-10g ～2A-1g	中央谷筋	上層	弥生土器	高杯	—	(10.8)	10.0	(7.5)	20	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/3	内外面 摩滅
84	23	—	2区	1A10g ～2A-1g	中央谷筋	下層	土師器	杯A	17.8	(18.0)	—	(3.5)	5以下	良好	密	外：橙 5YR6/6 内：明赤褐 5YR5/6 断面：灰褐 5YR6/2	内外面 摩滅、口縁部 ヨコナデ 内面 暗文か 平城Ⅲ、8世紀中頃
85	23	51	2区	1A-10g ～2A-1g	中央谷筋	下層	弥生土器	(底部)	—	(8.2)	6.2	(4.2)	5以下	良好	密	外：橙 7.5YR6/6 内：褐灰 10YR4/1 断面：橙 7.5YR6/6	外面 ナデ、内面 タテ方向工具痕あり
86	23	51	2区	1A-10c		北側溝	灰釉陶器	段皿	15.2	16.0	8.4	2.1	30	良好	密	外：灰白 5Y7/1 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：浅黄 2.5Y7/3	内外面 回転ナデ、底部 ヘラケズリ 内面 施釉 K14窯式期、9世紀前半
87	24	52	2区	1A-10d･e	29溝		土師器	甕	—	24.4	—	(12.9)	50	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/3 黒褐 10YR3/1 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：褐灰 10YR6/1	外面 ハケのちユビオサエ 内面 ユビナデ・ユビオサエ 外面 煤付着
88	24	—	2区	1A-10d･e	29溝		須恵器	杯	15.6	15.8	—	(4.1)	10	良好	密	外：灰白 2.5Y8/2 内：灰白 2.5Y8/2 断面：灰白 2.5Y8/2	内外面 回転ナデ 9世紀
90	24	—	2区	1A-10d	29溝 周辺	1層	土師器	皿	19.8	20.0	16.0	1.3	15	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 ナデe手法、内面底部 ユビオサエ 9世紀前半～中頃
91	24	51	2区	1A-10d	29溝 周辺	1層	須恵器	杯蓋	16.7	17.1	—	2.7	50	普通	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰 10Y6/1 断面：灰 5Y6/1	内外面 回転ナデ 平城Ⅲ、8世紀中頃
92	24	52	2区	1A-10e	29溝 周辺	1層	須恵器	壺L	—	11.4	—	(6.0)	20	良好	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰白 7.5Y7/1 断面：灰白 7.5Y7/1	内外面 回転ナデ 9世紀前半～中頃
93	24	51	2区	1A-10d	29溝 周辺	1層	黒色土器 A類	杯	(23.0)	23.2	12.0	6.0	40	良好	密	外：明黄褐 10YR6/6 内：黄灰 2.5Y4/1 断面：明褐 7.5YR5/6	外面 風化著しい 外面口縁が部分的に黒色化 内面 ヘラミガキ １層出土破片と接合関係あり 9世紀前半～中頃
94	24	—	2区	1A-10c	8土坑		土師器	皿	9.9	10.0	7.6	(1.4)	口縁5	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：にぶい黄橙 10YR7/3	内外面 ナデe手法 9世紀前半～中頃
95	24	52	2区	1A-10c	8土坑		須恵器	壺M	—	(6.2)	3.6	(5.5)	15	不良	密	外：淡黄 2.5Y8/3 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：灰白 10YR7/1	外面 摩滅、内外面 回転ナデか 9世紀中頃以降
96	24	52	2区	1A-10c	8土坑		黒色土器 A類	杯 か	19.2	19.4	—	(4.0)	10	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 黄灰 2.5Y5/1(口縁) 内：黒色 5Y2/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	外面 ミガキ 口縁部外面 ミガキのちヨコナデ(黒色化) 内面 ミガキ 9世紀前半以降
98	26	51	2区	1A-10e	掘立柱建物１ (17ピット)		土師器	高杯	—	(13.6)	—	(2.6)	5以下	良好	密	外：明赤褐 5YR5/6 内：橙 5YR6/6 断面：橙 5YR6/6	内外面 摩滅 外面脚部～杯部にかけてタテナデ 内面 不定方向ナデのち螺旋暗文 8世紀か
99	26	51	2区	1A-10d	掘立柱建物１ (81ピット)		須恵器	杯B	—	(11.1)	10.2	(1.4)	全体50 底部100	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 外面底部 ヘラ切りのち不定方向のナデ 8～9世紀
100	26	—	2区	1A-9e	掘立柱建物２ (120ピット)		須恵器	杯蓋	20.8	20.9	—	(1.3)	5以下	普通	密	外：灰白 2.5Y7/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰 5Y6/1	内外面 回転ナデ 8世紀
101	26	51	2区	1A-9ｅ	掘立柱建物２ (120ピット)		須恵器	壺	—	(11.8)	9.0	(3.4)	10	良好	密	外：黄灰 2.5Y5/1 内：灰 N5/ 断面：灰黄 2.5Y6/2	内外面 回転ナデ、自然釉付着 8世紀
102	28	—	2区	1A-10f	31土坑		土師器	杯A	16.2	16.4	—	(3.4)	全体10 口縁10	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	内外面 ナデe手法 9世紀中頃
103	28	—	2区	1A-10f	31土坑		土師器	甕	23.8	(25.0)	—	(5.8)	全体5 頸部10 口縁5	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	内外面 ナデ、ユビオサエのちナデ
104	28	—	2区	1A-10f	31土坑		須恵器	壺か	—	(14.0)	12.4	(2.3)	全体 5以下 高台20	良好	粗	外：灰 5Y5/1 内：黄灰 2.5Y5/1 断面：灰黄褐 10YR6/2	内外面 回転ナデ 内面 接合痕あり
105	28	52	2区	1A-10f	31土坑		須恵器	壺M	3.6	(3.8)	—	(2.9)	全体20 口縁100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰褐 7.5YR5/2	内外面 回転ナデ、内外面 絞り痕 9世紀前半～中頃
107	28	52	2区	2A-1i～j	39土坑		土師器	杯A	13.6	13.8	8.0	2.4	10	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：橙 5Y6/6	内外面 剥離著しい、内面 螺旋暗文か 8世紀
108	28	52	2区	1A-10c ～2A-1c	9溝		須恵器	壺M	—	7.1	3.5	(7.2)	80	良好	密	外：黄灰 2.5Y6/1 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ、頸部内面 絞り痕 8世紀末～9世紀初頭
109	29	—	2区	1A-10c	62土坑		土師器	皿	16.6	16.8	11.0	1.8	15	良好	密	外：黄橙 10YR8/6 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 剥離著しい、ナデか 9世紀後半～10世紀前半か
110	29	52	2区	1A-10c	62土坑		土師器	杯B	18.4	18.8	7.4	5.9	30	良好	密	外：橙 2.5YR6/6 内：橙 2.5YR6/6 断面：明赤褐 5YR5/6	外面 ケズリ、内面 ナデ、口縁部 ナデ 9世紀中頃
111	29	—	2区	1A-10c	62土坑		土師器	甕	17.2	(18.0)	—	(2.2)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：橙 5YR6/6	口縁部外面 ナデ、口縁部内面 ヨコハケ
112	29	—	2区	1A-10c	62土坑		土師器	甕	24.4	(25.0)	—	(3.2)	5以下	良好	密	外：橙 7.5YR7/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	内面 やや摩滅 口縁部外面 ナデ、口縁部内面 ヨコハケ
113	29	51	2区	1A-10c	62土坑 ＋8土坑		土師器	甕	25.0	26.0	—	(13.0)	20	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁部内外面 ナデ 外面 ユビナデ・ユビオサエ、内面 板状工具によるナデ
114	29	51	2区	1A-10c	62土坑	(1層)	土師器	甕	22.8	25.0	—	(18.8)	30	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁部外面 ナデ、口縁部内面 粗いハケ 外面 タタキのちナデか 内面 ユビナデ・ユビオサエ １層出土破片と接合関係あり
115	29	—	2区	1A-10c	62土坑		須恵器	杯B	—	(15.2)	(11.2)	(4.4)	10	不良	密	外：灰白 10YR8/2 内：灰白 10YR8/2 断面：灰白 2.5Y8/1	内外面 回転ナデ 9世紀
116	29	52	2区	1A-10c	62土坑		須恵器	壺M	3.3	7.0	4.2	9.9	100	良好	密	外：灰 N6/ 内：青灰 5PB6/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 糸切り痕 9世紀前半～中頃
117	29	52	2区	1A-10c	62土坑		須恵器	壺	—	(14.8)	8.0	(8.7)	20	良好	密	外：オリ―ブ灰 5GY5/1 内：灰 N5/ 断面：褐灰 7.5YR6/1	体部外面下半 回転ヘラケズリ 体部上半および内面 回転ナデ 底部 糸切り痕、内面 粘土紐接合痕 9世紀中頃

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
118	29	52	2区	1A-10c	62土坑		須恵器	甕 or 鉢	39.2	(42.0)	—	(6.1)	5以下	やや不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：灰白 2.5Y7/1 断面：灰白 2.5Y7/1	外面 摩滅、口縁部 ナデ 内面 ヨコナデorヨコハケ(条痕あり) 9世紀中頃以降
119	29	52	2区	1A-10c	62土坑		黒色土器A類	椀か	15.4	15.6	—	(5.4)	全体10 口縁10弱	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：黄灰 2.5Y4/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	体部外面 摩滅、ケズリか 口縁部外面 ナデのちミガキ(黒色化) 内面 ヘラミガキ、9世紀後半以降
120	29	—	2区	1A-10c	62土坑		黒色土器A類	杯か	16.6	16.8	—	(4.5)	10	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：黄灰 2.5Y5/1 断面：橙 7.5YR7/6	体部外面 摩滅 口縁部外面 ヨコナデ(黒色化) 内面 ヘラミガキ 9世紀中頃以降
121	31	53	2区	1A-10e	21土坑		土師器	皿	15.0	15.2	(8.8)	1.8	25	良好	密	外：明黄褐 10YR7/6 内：明黄褐 10YR6/6 断面：にぶい黄褐 10YR5/4	内外面 剥離・摩滅
122	31	53	2区	1A-10e	21土坑		土師器	甕	25.6	(26.6)	—	(7.6)	5	良好	密	外：浅黄橙 10YR8/4 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：浅黄橙 7.5YR8/4	外面 ナデ、口縁部内面 ヨコハケ 体部内面 ユビナデ・ユビオサエ
123	31	53	2区	1A-10e	21土坑		土師器	甕	25.2	(31.6)	—	(3.7 +8.9)	全体 5以下 口縁10	良好	密	外：明黄褐 10YR7/6 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 ヨコナデ、体部外面 タタキのちナデ 体部内面 ハケのちナデ
124	31	52	2区	1A-10e	21土坑		須恵器	壺K	—	16.8	—	(9.1)	20	良好	密	外：黄灰 2.5Y6/1 暗オリーブ 5Y4/3(釉) 内：灰白 2.5Y7/1 断面：にぶい黄橙 10YR7/3	体部外面 回転ヘラケズリ、肩部 自然釉付着 内面 回転ナデ 8世紀後半～9世紀中頃、湖西窯産か
125	31	—	2区	1A-10e	21土坑		須恵器	甕	—	—	—	(9.5)	5未満	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 5Y5/1 断面：褐灰 5YR5/1	外面 平行タタキ、内面 あて具痕 5区須恵器窯産か 蛍光X線分析資料12
126	31	53	2区	1A-10e	21土坑		黒色土器A類	杯	19.6	19.6	(8.0)	4.8	25	良好	密	外：明褐 7.5YR5/6 内：褐灰 10YR4/1 断面：明褐 7.5YR5/6 黒褐 10YR3/2	内外面 摩滅 口縁部外面 ミガキか(黒色化) 内面 ミガキ 9世紀中頃
127	31	52	2区	1A-10e	22土坑		黒色土器A類	鉢A	17.8	19.0	—	(7.2)	20	良好	密	外：黄灰 2.5Y4/1 にぶい赤褐 2.5YR5/4 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい赤褐 2.5YR4/4	体部外面 剥離・摩滅 口縁部外面 ミガキ(黒色化) 内面 ミガキ、内面 螺旋暗文あり 9世紀
128	31	53	2区	1A-10e	23土坑		土師器	甕	—	—	—	(5.7)	5	良好	密	外：橙 5YR6/6 内：橙 5YR6/6 にぶい黄橙 10YR7/4 断面：橙 5YR6/6 にぶい黄橙 10YR7/4	外面 横・右斜め上がり方向タタキ 内面 ユビオサエ・ユビナデ
129	31	—	2区	1A-10e	23土坑		須恵器	壺L	—	—	—	(1.9)	5以下	普通	密	外：灰オリーブ 5Y6/2 内：灰オリーブ 5Y6/2 断面：灰オリーブ 5Y6/2	内外面 ナデ
130	31	—	2区	1A-10e	23土坑		土師器	皿	—	—	—	1.0	5以下	良好	密	外：橙 5YR6/6 内：橙 5YR6/6 断面：橙 5YR6/6	内外面 摩滅、ナデか
131	31	53	2区	1A-10e	23土坑		土師器	椀A	12.4	12.4	6.0	3.5	25	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅 9世紀前半～中頃
132	31	—	2区	1A-10e	23土坑		土師器	皿	13.7	13.8	9.7	1.9	口縁5	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：橙 7.5YR6/6 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	体部外面 摩滅、ナデか 内面・口縁部外面 ナデ 口縁部内面に沈線 9世紀中頃
133	31	53	2区	1A-10e	23土坑		土師器	皿	14.5	14.7	11,0	1.9	25	良好	密	外：明褐 7.5YR5/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：橙 7.5YR7/6	内外面 摩滅・剥離 9世紀中頃
134	31	53	2区	1A-10e	23土坑		土師器	皿	15.8	16.0	14.0	1.6	25	良好	密	外：橙 7.5YR6/6 内：橙 7.5YR6/6 断面：橙 7.5YR6/6	内外面 摩滅・剥離 9世紀中頃
135	31	52	2区	1A-10e	23土坑		土師器	皿	16.2	16.4	12.6	2.2	70	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 ナデe手法 9世紀中頃
136	31	—	2区	1A-10e	23土坑		土師器	皿	16.0	16.2	10.4	2.1	20	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：橙 5YR6/6 断面：にぶい黄橙 10YR7/4 橙 5YR6/6	内外面 ナデe手法 9世紀中頃
138	32	53	2区	1A-10c	土器集中部 6土坑（上面）		須恵器	壺M	4.6	7.2	—	(6.3)	40	普通	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰白 N7/ 断面：灰 5Y6/1	内外面 回転ナデ、頸部 絞り痕 9世紀後半以降
139	32	53	2区	1A-10c	土器集中部 6土坑（上面）		須恵器	壺	—	(13.8)	9.2	(3.9)	5以下	良好	密	外：灰 7.5Y5/1 内：灰オリーブ 5Y6/2 断面：褐灰 7.5YR5/1	内外面 回転ナデ、内面 降灰 短頸壺か
140	32	53	2区	1A-10c	土器集中部 6土坑（上面）		灰釉陶器か	皿	14.6	15.0	12.0	2.7	25	良好	密 (非常に精良)	外：浅黄 2.5Y7/4 内：浅黄 2.5Y7/3 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 施釉、回転ナデ 底部外面 三叉トチンの痕跡 無高台の皿は類例少ない K14窯式期か、9世紀前半～中頃
141	32	53	2区	1A-10c	土器集中部 6土坑（上面）		緑釉陶器	唾壺	18.8	(19.0)	—	(5.1)	20	良好 (やや軟質気味)	密	外：灰黄 2.5Y7/2 浅黄 7.5Y7/3(釉) 内：にぶい黄橙 10YR7/4 極暗赤褐 5YR2/3 (被熱部分) 断面：浅黄橙 10YR8/4	142と同一個体 内外面 回転ナデ、施釉あり 内面 赤色化(被熱) 9世紀中頃～後半、東海産か
142	32	53	2区	1A-10c	土器集中部 6土坑（上面）		緑釉陶器	唾壺	—	(8.8)	(7.0)	(1.9)	15	良好	密	外：灰黄 2.5Y7/2 内：灰 5Y5/1 断面：灰黄 2.5Y7/3	141と同一個体、内外面 回転ナデ 施釉あり、貼付蛇の目高台 底部外面 三叉トチンの痕跡
143	32	53	2区	1A-10c	土器集中部 6土坑（上面）		土師器	高杯	31.6	32.0	—	(3.1 +14.0)	15	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：橙 5YR7/6 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 ナデ 脚柱部 面取り８面もしくは７面
144	38	53	2区	1A-10g ～10i	竪穴建物1		弥生土器	短頸壺	11.0	(12.0)	—	(9.1)	口縁20	やや不良	密	外：橙 5YR6/6 内：にぶい橙 2.5YR6/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 摩滅、口縁部 ナデか 頸部 貼付突帯・刻目文 Ⅳ様式後半～末
146	38	53	2区	2A-1i	竪穴建物２ (55土坑)		弥生土器	甕	10.0	10.4	4.8	(6.9 +1.4)	全体10 口縁 5以下 底部40	良好	粗	外：灰黄褐 10YR6/2 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：にぶい黄橙 10YR7/3	内外面 摩滅・剥離、口縁部 ヨコナデ 外面 ハケのちナデか 内面 ヘラケズリのちナデか
147	38	—	2区	2A-1i	竪穴建物２ (59ピット)		弥生土器	(底部)	—	(8.6)	3.2	(3.5)	5以下	やや不良	密	外：にぶい黄褐 10YR5/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：褐灰 7.5YR4/1	内外面 摩滅
148	38	—	2区	1A-10i	42土坑		弥生土器	鉢	10.0	(10.6)	—	(2.5)	5	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい橙 7.5YR7/4	外面 タテハケ、内面 ヨコハケ
149	38	—	2区	1A-10e	竪穴建物３ (床面直上)		弥生土器	甕	16.8	(20.2)	—	(4.4)	5以下	やや不良	やや粗	外：明褐 7.5YR5/6 内：にぶい橙 2.5YR6/4 断面：明褐 7.5YR5/6 にぶい橙 2.5YR6/4	内外面 摩滅
150	38	53	2区	2A-1e	66土坑		弥生土器	無頸壺	8.6	11.0	—	(6.6)	全体15 口縁10	良好	密	外：橙 5YR6/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：灰黄褐 10YR4/2	内外面 ナデ、外面 ヨコハケ 内面 工具痕あり Ⅳ様式末～Ⅴ様式初頭
151	38	53	2区	2A-1e	66土坑		弥生土器	台付鉢か	—	(14.7)	12.8	(10.9)	20	良好	やや密	外：橙 2.5YR6/6 内：橙 7.5YR7/6 断面：橙 7.5YR7/6	脚部外面 タテハケ 脚部内面 絞り痕、下半 ヨコナデか
152	38	53	2区	2A-1e	66土坑		弥生土器	(底部)	—	(25.8)	8.8	(8.9)	全体 5以下 底部20	良好	粗	外：浅黄橙 10YR8/4 内：橙 7.5YR7/6 断面：橙 7.5YR7/6	壺か 内外面 摩滅・剥離

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
153	38	—	2区	1A-10c	78土坑		弥生土器	甕	—	(19.2)	—	(3.4)	5以下	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい褐 7.5YR6/3 断面：橙 2.5YR6/6	外面 摩滅、内面 ナデか 体部内面 ヨコ・ナナメハケ
154	38	—	2区	2A-1h	44土坑		弥生土器	甕	10.0	(10.4)	—	(2.2)	10	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 灰 N4/ 断面：橙 5YR6/6	外面 ヨコナデ、口縁部内面 ハケのちナデ
155	38	53	2区	2A-1h	44土坑		弥生土器	短頸壺	9.6	(14.0)	—	(9.6)	口縁70	良好	密	外：橙 7.5YR7/6 内：褐灰 10YR5/1 断面：浅黄 2.5Y7/4	口縁部 ヨコナデ、外面 タテハケ 内面 ヨコ・ナナメナデ 把手あり(孔と剥離痕あり) Ⅳ様式末～Ⅴ様式初頭
156	38	53	2区	2A-1h	44土坑		弥生土器	甕	13.4	18.2	—	(14.3)	10	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：褐灰 10YR5/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁部内外面 ナデ、外面 タテハケ 内面 板ナデ 頸部外面 刻目文、接合痕あり Ⅳ様式末～Ⅴ様式初頭
157	38	53	2区	2A-1h	44土坑		弥生土器	甕	—	18.6	—	(12.8)	25	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部内外面 ナデ、外面 タテハケ 内面 摩滅、ヨコ・ナナメナデか
158	38	53	2区	2A-1h	44土坑		弥生土器	甕	15.8	(15.9)	3.4	(5.1 +4.4)	口縁40 底部50	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 摩滅・剥離著しい、調整不明
159	38	—	2区	2A-1h	44土坑		弥生土器	(底部)	—	(8.8)	4.4	(3.2)	底部20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N5/	154・156・157甕と同一個体の底部の可能性あり 内外面 ナデ
160	41	54	3-1区	1A-7i		1層	須恵器	杯B	—	(14.2)	10.8	(3.2)	10	不良	やや粗	外：灰白 2.5Y7/1 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：灰 5Y6/1	内外面 摩滅、回転ナデか 8世紀
161	41	54	3-1区	1A-9e		1層	須恵器	壺K	—	16.0	—	(11.4 +2.1 +8.0)	5	普通	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰 N5/、暗オリ―ブ 5Y4/4(釉) 断面：灰白 7.5Y7/1・灰黄 2.5Y7/2	体部外面 回転ヘラケズリ 肩部～頸部外面 回転ナデ 内外面 回転ナデ、頸部内面 自然釉付着 頸部接合痕あり 8世紀
162	41	54	3-1区	1A-8f		1層	須恵器	壺Lか	—	(16.4)	8.6	(9.4)	25	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：褐灰 5YR6/1	内外面 回転ナデ 外面 ヘラケズリのち回転ナデ 5区須恵器窯産か
163	41	54	3-1区	1A-8h		1層	須恵器	壺Lか	—	(17.2)	9.3	(9.2)	10	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：赤灰 2.5YR5/1	内外面 回転ナデ 5区須恵器窯産か
164	41	54	3-1区	1A-7g		1層	弥生土器	有段口縁壺	36.6	(37.0)	—	(11.5)	5	良好	密	外：橙 7.5YR7/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄 2.5Y7/4	200と同一個体の可能性あり 内外面 摩滅 口縁部外面 上下端 凹線文のち刻目文 内面 ナデ、頸部外面 タテハケか Ⅳ様式後半か
165	41	54	3-1区	1A-9g		1層	弥生土器	壺 頸部	—	(32.4)	—	(8.0)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄 2.5Y7/3	200と同一個体の可能性あり 内外面 摩滅、頸部 貼付突帯・刻目文 Ⅳ様式後半か
166	41	54	3-1区	1A-9e		1層	弥生土器	壺 体部	—	—	—	(4.9)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：黒褐 10YR3/1	外面 タテハケの施文 波状文＋直線文＋波状文 内面 細かいハケ・ナデ、接合痕あり Ⅳ様式後半以前
167	41	54	3-1区	1B-8A		1層 (下面)	弥生土器	無頸壺	9.6	(11.3)	—	(3.5)	5以下	やや不良	やや粗	外：明黄褐 10YR7/6 内：明黄褐 10YR7/6 断面：灰黄褐 10YR5/2	内外面 摩滅、ナデ 口縁部外面 凹線文(3条)
168	41	54	3-1区	1A-7i		1層 (下面)	弥生土器	(底部)	—	(18.7)	9.6	(6.8)	5以下	良好	密	外：灰黄褐 10YR5/2 内：褐灰 10YR4/1 断面：にぶい黄橙 10YR7/3	壺か 外面 ヘラケズリ(上→下) 内面 ヘラケズリ (下→上)
169	41	54	3-1区	1A-9h		1層	弥生土器	高杯	—	(9.1)	—	(12.5)	30	不良	やや粗	外：橙 2.5YR7/6 浅黄橙 10YR8/3 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	円盤充填 外面 摩滅・剥離、内面 絞り痕
170	41	54	3-1区	1A-7f		1層	弥生土器	高杯	—	(10.0)	—	(10.2)	25	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：橙 7.5YR7/6	外面 摩滅・剥離 内面 絞り痕、内面下半 ヨコナデ
171	41	54	3-1区	1A-8i		1層	弥生土器	高杯	—	(8.7)	8.7	(2.5)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：黒 2.5Y2/1	外面 摩滅、口縁黒斑 内面 ヨコナデorヘラケズリ 搬入土器か
172	41	—	3-1区	1A-7i		1層	弥生土器	高杯	—	(13.2)	11.6	(2.6)	底部10	良好	やや粗	外：橙 5YR7/6 内：橙 2.5YR7/8 断面：橙 2.5YR7/8	内外面 摩滅、円孔
173	41	54	3-1区	1A-7i		1層 (下面)	弥生土器	鉢か	22.8	(23.0)	—	(3.6)	5以下	良好	やや粗	外：灰黄褐 10YR6/2 内：橙 5YR6/6 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 ナデ、外面 ヨコハケか
174	43	54	3-1区	1A-8i・j	142土坑		土師器	甕	(14.0)	(14.5)	—	(1.5)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：灰白 2.5Y7/1	口縁端部・内外面 摩滅 口縁部 ナデか、外面 煤付着
175	43	54	3-1区	1A-8i・j	142土坑		土師器	壺	—	(15.8)	—	(3.3)	5以下 頸部10	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR5/4 断面：黒 5Y2/1	胎土が他と異なる、別の時期の可能性あり 外面 摩滅、タテハケか 頸部 ナデ、内面 タテナデ
176	43	54	3-1区	1A-8j	179土坑		須恵器	壺Kか	—	17.2	—	(4.1)	5以下	良好	密	外：褐灰 7.5YR5/1 内：灰白 5Y7/1 断面：褐灰 7.5YR6/1	体部外面 回転ヘラケズリ 外面肩部 自然釉付着 内面 回転ナデ 8世紀
192	47	54	3-1区	1A-8e	竪穴建物５		弥生土器	(把手)	—	—	—	—	—	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	摩滅、ナデ成形か
193	47	54	3-1区	1A-8e	竪穴建物５		弥生土器	(底部)	—	(6.6)	4.8	(1.7)	全体 5以下 底部40	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：黄灰 2.5Y4/1 にぶい黄橙 10YR6/3 断面：にぶ黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅
195	47	54	3-1区	1A-8j	竪穴建物６		弥生土器	蓋	—	(4.0)	—	(3.0)	全体20	やや不良	やや粗	外：橙 5YR6/8 内：橙 5YR7/8 断面：淡黄 2.5Y8/3	ユビナデ・ユビオサエ
196	47	54	3-1区	1B-9A	竪穴建物７		弥生土器	広口壺	12.8	(13.4)	—	(1.7)	全体 5以下 口縁10	やや不良	やや祖	外：明黄褐 10YR7/6 内：にぶい黄褐 10YR7/4 断面：にぶい黄褐 10YR7/3	内外面 摩滅
197	47	54	3-1区	1B-9A	竪穴建物８		弥生土器	壺	—	(12.8)	—	(3.1)	全体 5以下 頸部20	密	やや不良	外：橙 5YR6/6 内：橙 5YR6/6 断面：橙 5YR6/6	内外面 摩滅
199	47	54	3-1区	1B-9A	竪穴建物７ (189溝)		弥生土器	無頸壺	14.1	(15.8)	—	(3.2)	5以下	やや不良	粗	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/3	内外面 摩滅　口縁部外面 ナデ、剥離痕? 横方向突帯状浮文 縦方向棒状浮文
200	51	54	3-1区	1A-7g	125土坑		弥生土器	有段口縁壺	36.0	(36.0)	—	(20.8)	口縁(25)	良好	密	外：橙 5YR8/1 内：黄橙 7.5YR7/8 断面：浅黄橙 7.5YR8/6	164・165と同一個体の可能性あり 内外面 摩滅 口縁部外面 上下端 凹線文のち刻目文 間に斜格子文に円形浮文、外面 タテハケ 頸部 幅広の貼付突帯・刻目文 Ⅳ様式後半か
201	51	55	3-1区	1A-9i	133土坑		弥生土器	高杯	—	(9.7)	—	(5.3)	5	良好	密	外：灰白 7.5YR8/2 内：灰白 10YR8/2 断面：灰白 10YR8/2	杯部内面・円盤剥離、内面 絞り痕
202	51	55	3-1区	1A-9i	133土坑		弥生土器	(底部)	—	(2.0)	5.1	(2.0)	10	良好	やや粗	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：浅黄 2.5Y7/4 断面：明黄褐 2.5Y7/6	摩滅

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
203	51	55	3-1区	1A-8e	134土坑		弥生土器	(底部)	—	(11.6)	6.2	(5.0)	5以下	良好	密	外：黒褐 5YR2/1 内：灰褐 5YR5/2 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	外面 ヘラケズリ(下→上)、内面 摩滅
204	51	55	3-1区	1A-8 e	134土坑		弥生土器	(底部)	—	(11.9)	7.4	(3.1)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 ナデ
205	51	55	3-1区	1A-8e	134土坑		弥生土器	甕	—	(11.7)	—	(5.2)	10	良好	密	外：にぶい橙 5YR6/3 内：にぶい赤褐 5YR5/3 断面：橙 5YR6/6	体部外面 タテ・ナナメハケ 内面 ナナメナデ 頸部 ヨコナデ
206	51	55	3-1区	1A-8e	134土坑		弥生土器	甕	14.6	(15.6)	—	(3.6)	5以下	良好	密	外：褐灰 10YR5/1 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい褐 7.5YR5/3	口縁端部外面 凹線文、口縁部内面 ナデ 内外面 タテ方向工具痕 搬入土器(北近畿)か
207	51	55	3-1区	1A-8h	136土坑		弥生土器	鉢か	14.3	14.5	—	(3.8)	15	やや不良	密	外：にぶい橙 7.5YR7/3 内：にぶい黄橙 10YR7/2 断面：浅黄 2.5Y7/4	内外面 ヨコナデ・ユビオサエ
208	51	55	3-1区	1A-8h	136土坑		弥生土器	(底部)	—	(10.8)	6.7	(2.4)	5以下	良好	やや粗	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：黄灰 2.5Y4/1	内外面 摩滅
209	51	—	3-1区	1A-8h	136土坑		弥生土器	(底部)	—	(5.3)	3.4	(3.6)	全体10以下 底部40	良好	やや粗	外：にぶい橙 5Y6/3 内：黄灰 2.5Y5/1 断面：橙 5YR7/6	外面 板ナデ、内面 ユビナデ
210	51	55	3-1区	1A-8h	136土坑		弥生土器	(底部)	—	(5.4)	2.8	(1.8)	全体10以下 底部90	やや不良	密	外：褐灰 5YR5/1 内：褐灰 5YR5/1 断面：灰褐 5YR6/2	内外面 ユビナデ・ユビオサエ
211	51	55	3-1区	1A-8h	136土坑		弥生土器	高杯 or 鉢	—	(5.2)	—	(3.9)	脚部70	やや不良	密	外：浅黄橙 10YR8/3 内：浅黄橙 7.5YR8/6 断面：浅黄橙 10YR8/4	外面 ヘラミガキ、内面 ユビオサエ、煤付着 蓋の可能性あり
212	52	55	3-1区	1A-7j	164土坑		弥生土器	甕	18.3	(23.9)	—	(8.3)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい黄 2.5Y6/4 断面：黒褐 10YR3/1	内外面 摩滅、ナデ、外面 ヨコハケ
213	52	55	3-1区	1A-7j	164土坑		弥生土器	(底部)	—	(9.2)	7.0	(2.4)	20	良好	密	外：黄灰 2.5Y5/1 内：灰 N4/ 断面：灰白 N7/	内外面 ナデ
214	52	55	3-1区	1A-7j	164土坑		弥生土器	(底部)	—	(5.8)	2.8	(2.4)	5以下	良好	やや祖	外：橙 10YR6/6 橙 7.5YR6/6 内：浅黄橙 7.5YR8/3 浅黄橙･橙 2.5YR6/6 断面：黒 10YR2/1	内外面 摩滅
215	52	55	3-1区	1A-7j	164土坑		弥生土器	蓋	10.8	10.8	—	3.2	30	良好	密	外：浅黄橙 10YR8/3 内：浅黄橙 10YR8/3 断面：浅黄橙 10YR8/3	内外面 ナデ、端部 ユビオサエ
216	52	55	3-1区	1A-7j	164土坑		弥生土器	(脚台)	—	(5.8)	5.2	(2.5)	全体60 底部40	やや不良	密	外：灰褐 7.5YR5/2 内：灰褐 7.5YR6/2 断面：橙 5YR7/6	外面 タテナデorハケ
217	52	55	3-1区	1A-7j	164土坑		弥生土器	高杯	—	(6.4)	—	(5.6)	25	良好	密	外：にぶい橙 5YR6/4 内：淡橙 5YR8/4 断面：橙 5YR7/6	外面 ヘラミガキ、内面 絞り痕か
218	52	—	3-1区	1A-7j	165土坑		弥生土器	壺か	9.2	(9.4)	—	(2.5)	5以下	やや不良	やや粗	外：灰褐 7.5YR6/2 橙 5YR7/6 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい橙 5YR6/4	内外面 摩滅
219	52	55	3-1区	1A-7j	165土坑		弥生土器	甕か	9.2	(10.2)	—	(2.7)	5以下	良好	密	外：浅黄橙 7.5YR8/4 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：浅黄橙 10YR8/3	鉢の可能性あり 口縁部 ナデ、体部外面 ナナメハケ 体部内面 ナデ、接合痕あり
220	52	55	3-1区	1A-7j	165土坑		弥生土器	甕	15.1	17.3	—	(11.0)	40	良好	密	外：橙 7.5YR6/6 内：橙 7.5YR6/6 断面：黒 2.5Y2/1	内外面 摩滅、口縁部 ナデ、外面 ハケ
221	52	55	3-1区	1A-7j	165土坑		弥生土器	甕	16.0	(16.4)	(5.3)	(3.8 +6.0)	口縁15 底部80	やや不良	密	外：灰 5Y5/1 内：褐灰 7.5YR5/1 断面：にぶい橙 5YR7/4	内外面 ナデ 内面 板状工具によるナデ、接合痕?あり
222	52	—	3-1区	1A-8j	166土坑		弥生土器	壺か	9.3	(10.0)	—	(2.9)	5以下	良好	密	外：橙 5YR6/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR5/4	内外面 摩滅、ナデ
223	52	—	3-1区	1A-8j	166土坑		弥生土器	甕	11.4	(12.2)	—	(2.4)	5以下	良好	密	外：明褐 7.5YR5/6 内：明褐 7.5YR5/6 断面：黒褐 7.5YR3/1	内外面 摩滅、ナデ
224	52	55	3-1区	1A-8j	166土坑		弥生土器	(底部～ 体部)	—	(16.6)	6.4	(8.5)	全体20 底部100	良好	やや粗	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰白 N7/	内外面 摩滅 外面 ナデ・ユビオサエ 内面 ナデ
225	52	55	3-1区	1A-8j	166土坑		弥生土器	(底部)	—	(7.8)	3.8	(4.3)	5以下	良好	やや粗	外：灰黄褐 10YR4/2、橙 5YR6/6 内：にぶい黄 2.5Y6/3 断面：黄灰 2.5Y4/1	内外面 摩滅　内面 ユビオサエ
226	52	55	3-1区	1A-8j	166土坑		弥生土器	甕か	—	22.0	5.0	(18.1)	25	良好	密	外：橙 5YR7/6 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：浅黄橙 10YR8/6	内外面 摩滅 外面 タテハケ or 板状工具によるナデ、ユビオサエ、黒斑あり 内面 縦方向の条線?　底部 ヘラケズリ
227	52	55	3-1区	1A-9i	180土坑		弥生土器	壺	16.7	(17.2)	—	(1.8)	5以下	やや不良	やや粗	外：明黄褐 10YR6/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR6/3	内外面 摩滅、口縁部 凹線文
228	52	55	3-1区	1A-7h･i	195土坑周辺		弥生土器	甕	12.8	(15.0)	—	(4.3)	5	良好	密	外：橙 5YR6/6 内：橙 7.5YR7/6 断面：明赤褐 5YR5/6	内外面 摩滅、体部内面 ユビオサエ 胎土・色調から搬入土器(東播磨・淡路)の可能性あり
229	53	55	3-2区	2O-1j		1層	須恵器	壺M	4.2	(6.4)	3.8	(3.2 +4.3)	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰白 N7/ 断面：灰 N6/	外面 回転ナデ、底部 糸切り痕あり 口縁端部を丸くおさめた陶邑タイプ 9世紀前半～中頃
230	53	55	3-2区	2A-1A・b		1層	弥生土器	甕	12.3	13.1	—	(5.6)	30	やや不良	密	外：赤褐 2.5YR5/6 内：にぶい褐 7.5YR5/3 断面：灰褐 5YR4/2	外面 剥離・摩滅、内面 ナデ 口縁部 ヨコナデ
231	53	55	3-2区	2O-1j		1層	弥生土器	(底部)	—	(11.2)	7.8	(2.5)	10	良好	密	外：黄灰 2.5Y5/1 内：灰 N4/ 断面：灰 N6/	壺か 外面 タテハケ、内面ハケ
232	53	55	3-2区	2A-1A		1層	弥生土器	高杯か	—	(9.4)	—	(7.6)	5以下	やや不良	粗	外：明赤褐 2.5YR5/8 内：橙 5YR6/8 断面：橙 5YR6/6	内外面 摩滅、外面 凹線文(6条)
233	53	55	3-2区	1A-7d		1層	弥生土器	蓋	—	(5.0)	—	(2.8)	20	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/3	内外面 ユビナデ・ユビオサエ
234	56	55	3-2区	2A-1b	360石列 (地山直上)		土師器	甕	—	(11.2)	—	(3.0)	5以下	良好	密	外：橙 5YR6/6 内：橙 5YR6/6 断面：橙 5YR6/6	口縁端部 摩滅復元 内外面 摩滅、ナデ 内面 口縁ハケorナデ、工具痕?あり
237	61	56	3-2区	1A-9A･b	竪穴建物９ (床面直上)		弥生土器	(底部)	—	(7.6)	5.2	(2.0)	25	やや不良	粗	外：黄灰 2.5Y6/1 内：灰黄 2.5Y6/2 断面：黄灰 2.5Y4/1	内外面 摩滅
238	61	56	3-2区	1A-9A･b	竪穴建物９ (床面直上)		弥生土器	(底部)	—	(7.0)	4.8	(2.2)	50	やや不良	密	外：にぶい橙 5YR6/4 内：褐灰 7.5YR4/1 断面：橙 2.5YR6/6	内外面 ユビナデ・ユビオサエ
239	61	56	3-2区	1O-10i	竪穴建物10		弥生土器	(底部)	—	(10.0)	6.1	(2.4)	25	やや良	密	外：褐灰 7.5YR5/1 内：橙 2.5YR6/6 断面：橙 2.5YR6/6	外面 摩滅、内面 ナデ、 外面 スス付着、接合痕あり
240	61	56	3-2区	1O-10j	竪穴建物10		弥生土器	高杯か	—	(12.8)	12.0	(3.9 +2.6)	10	良好	やや粗	外：橙 2.5YR6/6 内：橙 2.5YR7/6 断面：橙 2.5YR6/6	脚部外面 凹線文、内面 絞り痕 円孔あり、鉢の脚部の可能性もあり

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
241	61	55	3-2区	1A-10A 2A-1A	337溝		弥生土器	(底部)	—	(15.2)	6.0	(7.5)	60	良好	やや粗	外：浅黄橙 10YR8/4 内：灰白 2.5Y7/1 断面：淡黄 2.5Y8/4	甕か 外面 タテハケ、煤付着 内面 摩滅、ヘラケズリorタテハケ
242	61	—	3-2区	1A-10A	327土坑		弥生土器	(底部)	—	(5.9)	5.1	(1.0)	5以下	良好	密	外：黒 2.5Y2/1、にぶい褐 7.5YR6/3 内：褐灰 10YR4/1 断面：褐灰 10YR6/1	内外面 ナデ　底部 不定方向ナデ
244	61	56	3-2区	1A-8d	328土坑		弥生土器	(底部)	—	(8.0)	5.8	(2.5)	5	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい褐 7.5YR5/3 内：黄灰 2.5Y5/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 摩滅
245	61	56	3-2区	1A-10A・b	336土坑		弥生土器	高杯	—	(6.6)	—	(7.2)	50	良好	やや粗	外：橙 5YR7/6 内：浅黄橙 10YR8/3 断面：浅黄橙 10YR8/4	外面 ヘラミガキ、内面 ヨコナデ 円盤充填が剥離
246	61	56	3-2区	1A-8d	339土坑 (周辺、遺構面直上)		弥生土器	壺か	—	(19.2)	—	(4.5)	5以下	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：暗灰 N3/ 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	外面 タテハケ、内面 ナデ
247	61	—	3-2区	1A-10A	344土坑		弥生土器	壺か	—	(19.0)	—	(5.8)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：黄灰 2.5Y4/1 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	外面 板ナデ、内面ナデ、接合痕あり
248	61	56	3-2区	1A-10A	344土坑		弥生土器	甕	15.4	(16.8)	—	(3.8)	15	やや不良	密	外：浅黄橙 7.5YR8/6 内：黄橙 10YR8/6 断面：黄橙 10YR8/6	頸部外面 タテハケのちヨコナデ 外面 板ナデか(工具による静止痕が頸部にあり) 口縁部内面 ヨコハケ、内面 ハケ
249	61	56	3-2区	1A-10A	344土坑		弥生土器	甕	—	(17.4)	6.0	(9.8)	50	良好	やや粗	外：にぶい赤褐 2.5YR5/3 内：にぶい橙 5YR7/4 断面：橙 5YR7/6	内外面 僅かに煤が付着 外面 タテハケ、内面 タテハケのちナデ
250	61	56	3-2区	1A-10A	344土坑		弥生土器	(底部)	—	(10.6)	5.9	(4.0)	底部90	やや良	やや粗	外：黄橙 7.5YR7/8 内：黄灰 2.5Y5/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 摩滅、底部 ユビオサエ
251	61	55	3-2区	1A-10A	344土坑		弥生土器	(底部)	—	(12.0)	7.0	(6.3)	30	良好	密	外：浅黄橙 10YR8/4 内：褐灰 10YR6/1 断面：黄橙 10YR8/6	内外面 煤付着 外面 ケズリ、内面 ナデ
252	61	56	3-2区	1A-10A	344土坑		弥生土器	蓋	—	(4.8)	—	(1.9)	10%	良好	密	外：浅黄橙 10YR8/4 褐灰 10YR4/1 内：褐灰 10YR5/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	ユビナデ・ユビオサエ
253	61	—	3-2区	1A-10A	344土坑		弥生土器	(把手)	—	—	—	—	—	良好	密	外：明黄褐 10YR7/6 内：明黄褐 10YR7/6 断面：灰 5Y5/1	
254	62	56	4-1区	1A-5h		1層	須恵器	杯蓋	14.8	15.0	—	(1.0)	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラ切りのちナデ 焼けひずみ大、449須恵器窯産か 9世紀代
255	62	56	4-1区	1A-5h		1層	須恵器	杯H蓋	11.6	12.0	5.8	3.6	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラ切り未調整 飛鳥Ⅰ、7世紀前半
256	62	56	4-1区	1A-5h		1層	弥生土器	広口壺	—	(13.5)	—	(4.3)	25	やや不良	密	外：明黄褐 10YR7/6 内：浅黄橙 10YR8/3 断面：褐灰 10YR5/1	頸部外面 櫛描直線文、外面 タテハケ 内面 ユビナデ・ユビオサエ Ⅳ様式後半
257	62	56	4-1区	1A-6i		1層	弥生土器	壺	—	—	—	(4.0)	—	やや不良	やや粗	外：浅黄橙 10YR8/4 内：灰 5Y6/1 断面：灰白 10YR8/2	外面 櫛描波状文＋直線文 内面 摩滅 Ⅳ様式後半
258	62	56	4-1区	1A-5g		1層	弥生土器	無頸壺か	15.0	(21.4)	—	(6.6)	10弱	良好	やや粗	外：浅黄橙 10YR8/4 内：浅黄橙 7.5YR8/3 断面：浅黄橙 10YR8/3	口縁部外面 凹線文(1条)、外面 摩滅 内外面 ナデ・ユビオサエか
259	62	56	4-1区	1A-5g		1層	弥生土器	(底部)	—	(10.5)	5.4	(3.0)	底部80	良好	やや粗	外：浅黄橙 10YR8/4 内：浅黄橙 10YR8/4 褐灰 10YR6/1 断面：褐灰 10YR4/1	壺か 外面 タテハケ、内面 ハケ
260	62	56	4-1区	1A-5h		1層	弥生土器	甕	13.0	(13.5)	—	(2.8)	10	やや不良	密	外：浅黄橙 10YR8/4 内：褐灰 10YR5/1 断面：黄橙 10YR8/6	内外面 ナデ
261	62	56	4-1区	1A-5h		1層	弥生土器	(底部)	—	(7.9)	5.6	(2.5)	40	良好	やや粗	外：淡黄 2.5Y8/4 内：浅黄橙 7.5YR8/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 摩滅
262	62	56	4-1区	1A-5g		1層	弥生土器	鉢か	29.6	29.9	—	(3.8)	口縁5	やや不良	密	外：にぶい黄橙 7.5YR7/4 内：にぶい黄橙 7.5YR7/4 断面：灰褐 7.5YR5/2	口縁部 ナデ、外面 ハケ、内面 ミガキか
263	69	56	4-1区	1A-2・3f	古墳３ (387溝)		須恵器	蓋	10.4	10.6	—	2.4	90	良好	密	外：灰 5Y6/1 内：灰 N6/ 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ、天井部 回転ヘラケズリ 宝珠つまみ 飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
264	69	56	4-1区	1A-2・3f	古墳３ (387溝)		須恵器	壺	—	(14.0)	9.4	(4.5)	5	良好	密	外：黄灰 2.5Y6/1 内：灰白 10YR7/1 断面：オリ―ブ灰 2.5GY5/1	内外面 回転ナデ、長頸壺か 陶邑TK217号窯に類例あり 7世紀前半～中頃
265	69	56	4-1区	1A-3g	古墳２ (382・384溝)		須恵器	盤	28.6	28.7	14.2	9.8	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：にぶい赤褐 2.5YR5/3	外面 回転ヘラケズリ、内面 回転ナデ 焼けひずみあり 5区 須恵器窯産か
268	72	56	4-1区	1A-6d・e	段状遺構１ (392溝 西肩部)		弥生土器	有段口縁壺	19.5	19.8	—	(7.5)	口縁90	良好	やや粗	外：橙 2.5YR7/6 内：橙 2.5YR7/8 断面：浅黄橙 7.5YR8/4	268・269・270が同一個体 外面 タテハケのち口縁部ヨコナデ＋凹線文
269	72	56	4-1区	1A-6d・e	段状遺構１ (392溝 西肩部)		弥生土器	有段口縁壺	—	(28.0)	—	(15.5)	頸部～体部50程度	良好	密	外：橙 2.5YR7/6 内：橙 2.5YR7/8 断面：浅黄橙 7.5YR8/4	頸部 貼付突帯・刻目文 Ⅳ様式後半
270	72	—	4-1区	1A-6d・e	段状遺構１ (392溝 西肩部)		弥生土器	(底部)	—	(8.2)	5.5	(2.6)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：にぶい橙 7.5YR7/4	268・269と同一個体の壺底部 外面 タテハケ、内面 摩滅
271	72	—	4-1区	1A-6d・e	段状遺構１ (392溝 埋土上層)		弥生土器	(底部)	—	(14.6)	9.0	(5.2)	25	やや不良	やや粗	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：淡黄 2.5Y8/3	壺か 外面 ナデ、内面 ヨコハケ
272	74	56	4-1区	1A-5f	段状遺構２ (壁溝)		弥生土器	小型鉢	11.6	11.8	—	(7.4)	80	良好	密	外：浅黄橙 7.5YR8/6 内：橙 7.5YR7/6 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 ユビナデ・ユビオサエ 口縁部 煤付着・黒斑あり、接合痕あり 天地逆で脚部の可能性あり Ⅳ様式末～Ⅴ様式前半
273	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２ (壁溝)		弥生土器	無頸壺	16.4	19.0	—	(4.3)	10	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁部外面 凹線文(1条) 内面 板状工具によるナデか Ⅳ様式末
274	74	56	4-1区	1A-5f	段状遺構２		弥生土器	無頸壺	14.5	19.5	—	(6.5)	30	良好	密	外：黒褐 2.5Y3/1 にぶい黄橙 10YR7/4 内：灰黄褐 10YR5/2 にぶい黄褐 10YR6/4 断面：黒褐 10YR3/1	内外面 摩滅、ナデか、 口縁部外面 凹線文(1条)＋円孔 体部 凹線文(2条) Ⅳ様式末
275	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２ (壁溝・447ピット)		弥生土器	短頸壺	11.0	(23.2)	—	(12.2)	全体30 頸部～体部 40	良好	密	外：明黄褐 10YR6/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅、口縁部 凹線文 把手あり、接合痕あり Ⅳ様式末
276	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２		弥生土器	甕	—	12.2	5.8	(2.3 +12.0)	胴部50	良好	密	外：淡黄 2.5Y8/3 内：黒褐 2.5Y3/1 断面：浅黄橙 7.5YR8/3	内外面 ユビナデ・ユビオサエ 体部外面下半 ヘラケズリ 外面 煤付着
277	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２		弥生土器	甕	—	13.8	4.0	(11.5)	80	良好	密	外：にぶい橙 5YR6/3 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい橙 5YR6/3	体部外面 タテハケ、内面 ヨコハケ・ナデ
278	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２		弥生土器	甕	13.9	(17.4)	—	(5.3)	10	良好	密	外：褐灰 10YR4/1 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい橙 5YR6/4	282と同一個体の可能性あり 内外面 摩滅、外面 煤付着

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
279	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２(壁溝)		弥生土器	甕	—	(20.6)	—	(5.3)	5以下	良好	密	外：明褐灰 7.5YR7/2 内：褐灰 7.5YR6/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 摩滅、外面 ハケ、内面 ナデか
280	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２(壁溝)		弥生土器	甕	15.0	21.4	—	(13.7)	全体45 口縁75	やや不良	やや粗	外：褐灰 7.5YR5/1 内：にぶい黄橙 10YR7/2 断面：浅黄橙 10YR8/3	281と同一個体か 口縁部外面 凹線文、外面 タテハケ 内面 ナデ・ユビオサエ Ⅳ様式後半
281	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２(447ピット)		弥生土器	甕	—	(19.6)	5.0	(9.0)	全体20 底部30	やや不良	やや粗	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：灰白 10YR8/2 断面：灰白 10YR8/2	280と同一個体か 外面 タテハケ、煤付着、内面 摩滅
282	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２		弥生土器	(底部)	—	(7.8)	4.5	(3.0)	10	良好	密	外：褐灰 10YR4/1 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい赤褐 5Y5/3	278と同一個体か 外面 タテナデ、内面 摩滅
283	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２(壁溝)		弥生土器	(底部)	—	(9.2)	5.6	(3.6)	80	やや不良	粗	外：淡橙 5Y8/4 内：灰白 10YR7/1 断面：明褐灰 7.5YR7/1	外面 ハケか、内面 ユビナデ・ユビオサエ
284	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２(壁溝)		弥生土器	(底部)	—	(9.8)	7.0	(2.6)	5以下	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：黄灰 2.5Y4/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 ユビナデ・ユビオサエ
285	74	57	4-1区	1A-5f	段状遺構２(壁溝)		弥生土器	(底部)	—	(13.8)	7.0	(5.3)	底部15	やや不良	やや粗	外：にぶい黄橙 10YR7/2 褐灰 10YR6/1 内：褐灰 10YR6/1 断面：褐灰 10YR4/1	外面 タテハケ、内面 ナデ
286	76	57	4-1区	1A-5・6f	段状遺構４		弥生土器	甕	21.0	(22.0)	—	(2.3)	全体10 口縁10強	良好	密	外：黄橙 7.5YR7/8 内：黄橙 7.5YR7/8 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 ナデ、口縁部外面 凹線文 Ⅳ様式後半～末
287	76	57	4-1区	1A-5・6f	段状遺構４		弥生土器	甕	14.8	(19.6)	—	(6.5)	15	不良	粗	外：褐灰 10YR5/1 内：浅黄橙 10YR8/3 断面：褐灰 10YR6/1	口縁部 ナデ、外面 タタキ(横方向) 内面 摩滅 Ⅳ様式末
288	76	58	4-1区	1A-5・6f	段状遺構４		弥生土器	広口壺	17.4	(18.3)	—	(7.4)	40	良好	密	外：橙 7.5YR7/6 内：浅黄橙 7.5YR8/6 断面：黄橙 7.5YR8/8	内外面 摩滅　口縁部外面 凹線文 内面 ハケ Ⅳ様式後半～末
289	76	57	4-1区	1A-5・6f	段状遺構４		弥生土器	(脚部)	—	(11.4)	10.2	(3.0)	脚部90	やや不良	密	外：浅黄橙 10YR8/3 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：黒褐 10YR3/1	外面 ナデ 内面 ヘラケズリのちナデ
290	76	57	4-1区	1A-5・6f	段状遺構４		弥生土器	鉢か	—	(14.0)	12.6	(2.0)	10	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	脚台部 外面 凹線文、内面 ナデか
291	76	57	4-1区	1A-5・6f	段状遺構４		弥生土器	(底部)	—	(11.8)	8.4	(3.1)	40	良好	やや粗	外：浅黄橙 10YR8/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：黄橙 10YR8/6	外面 タテハケ、内面 不定方向ハケ
292	76	57	4-1区	1A-5・6f	段状遺構４		弥生土器	(底部)	—	(11.0)	7.8	(3.4)	25	良好	密	外：橙 7.5YR7/6 内：橙 7.5YR7/6 断面：にぶい黄 2.5Y6/3	外面 摩滅、内面 ナデ
299	77	58	4-1区	1A-6f	段状遺構５(周壁溝)		弥生土器	(底部)	—	(9.5)	4.4	(4.2)	10	良好	密	外：褐灰 10YR5/1 内：褐灰 10YR5/1 断面：黄灰 2.5Y4/1	内外面 摩滅
300	77	58	4-1区	1A-6f	段状遺構５		弥生土器	(底部)	—	(13.2)	5.6	(4.2)	5	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：灰黄褐 10YR6/2 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	外面 タテハケのちナデ、内面 ナデ
301	80	58	4-1区	1A-6g	段状遺構６(周壁溝南半)		弥生土器	短頸壺	18.1	32.3	—	(30.1)	口縁95	良好	やや粗	外：橙 2.5YR7/6 赤灰 2.5YR4/1 内：褐灰 10YR4/1 黄 2.5Y8/6 断面：橙 7.5YR7/6	口縁部 ヨコナデ 頸部 突出した台形状突帯・刻目文 外面 タテハケ、内面 ナデ 体部外面 円形刺突(全周しない) Ⅳ様式末
302	80	58	4-1区	1A-6g	段状遺構６(周壁溝南半)		弥生土器	短頸壺	17.4	24.3	7.4	(34.2) (16.0)	口縁80 底部50 全体60	良好	密	外：浅黄橙 7.5YR8/4 内：浅黄橙 7.5YR8/3 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁部 ヨコナデ 体部外面上半 タテハケ、下半 ヘラケズリ 体部外面 刺突(全周しない) 内面 ユビナデ・ユビオサエ Ⅳ様式末
303	80	58	4-1区	1A-6g	段状遺構６		弥生土器	壺	13.6	23.0	—	(16.7)	35	やや不良	やや粗	外：橙 5YR6/8 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：浅黄橙 10YR8/3	内外面 摩滅
304	80	—	4-1区	1A-6g	段状遺構６(周壁溝南半)		弥生土器	甕	—	—	—	(3.2)	5以下	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	外面 タテハケ、内面 ヨコハケ
305	80	—	4-1区	1A-6g	段状遺構６(周壁溝南半)		弥生土器	広口壺	15.8	(16.0)	—	(1.8)	5以下	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：浅黄橙 10YR8/4 黄灰 2.5Y4/1 断面：淡黄 2.5Y8/3	内外面 摩滅
307	80	58	4-1区	1A-6g・h	段状遺構７(408溝) ＋407土坑 (周辺遺構面直上)		弥生土器	短頸壺	23.0	(24.0)	—	(4.5)	20	やや不良	やや粗	外：橙 5YR6/8 内：橙 5YR6/6 断面：浅黄橙 10YR8/4	308と同一個体の可能性が高い 口縁部外面 凹線文、内面 摩滅、ナデか Ⅳ様式後半以前
308	80	58	4-1区・3区	1A-9i	段状遺構７(408溝) ＋竪穴建物11		弥生土器	短頸壺	—	(22.8)	—	(8.9)	50	やや不良	やや粗	外：橙 2.5YR7/8 内：橙 2.5YR7/6 断面：黄灰 2.5Y5/1	307と同一個体の可能性が高い 外面 櫛描刺突文・刻目列点文(右→左)のち上下に凹線文 内面 摩滅、天地及び器種は要検討、器台の可能性もあり Ⅳ様式後半以前
309	80	58	4-1区	1A-6g・h	段状遺構７(408溝)		弥生土器	(脚台部)	—	(6.0)	5.2	(4.2)	5以下	良好	密	外：浅黄 2.5Y7/3 内：黄橙 10YR8/6・灰 N4/ 断面：浅黄橙 10YR8/4	外面 ヘラケズリ 内面 板状工具によるナデ
310	80	—	4-1区	1A-6g	段状遺構６周辺(遺構面直上)		弥生土器	(底部)	—	(8.2)	5.4	(2.8)	5以下	良好	密	外：浅黄橙 10YR8/4 内：淡黄 2.5Y8/4 断面：黄灰 2.5Y6/1	外面 ナデ 内面 ユビオサエのちハケ
311	80	58	4-1区	1A-6g	段状遺構６周辺(遺構面直上)		弥生土器	高杯か	—	(14.0)	13.0	(5.0)	25	やや不良	やや粗	外：黄橙 10YR8/6 内：浅黄橙 7.5YR8/4 断面：黒褐 10YR3/1	内外面 摩滅、 外面 円形の小刺突多数あり(深さ2.5～5mm) Ⅳ様式後半～末
312	80	58	4-1区	1A-6f	段状遺構６周辺(遺構面直上)		弥生土器	(把手)	—	—	—	—	—	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：黄灰 2.5Y4/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 摩滅・剥離
313	80	58	4-1区	1A-6g・h	407土坑周辺(遺構面直上)		弥生土器	(底部)	—	(15.6)	8.6	(7.4)	25	良好	密	外：明黄褐 10YR7/6 内：浅黄橙 10YR8/3 断面：にぶい黄橙 10YR7/3	外面 ヘラケズリor工具ナデ 内面 ユビナデ・ユビオサエ
314	81	59	4-1区	1A-2f	393土坑		弥生土器	台付鉢	—	13.4	6.0	(8.0)	30	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：にぶい黄橙 10YR7/3 褐灰 10YR4/1	体部外面 刻目文か(二段) 体部外面下半 剥離痕あり 底部外面 粗いヘラミガキ、内面 ナデ 脚部 ナデ
315	81	59	4-1区	1A-2f	393土坑		弥生土器	有段口縁壺	18.0	(18.6)	—	(13.9)	15	良好	密	外：橙 2.5YR7/6 内：浅黄橙 7.5YR8/6 断面：浅黄橙 7.5YR8/6	口縁部 ヨコナデのち外面 凹線文(3条) 頸部外面 タテハケ、頸部 貼付突帯・刻目文 内面 ユビナデ Ⅳ様式後半
316	81	59	4-1区	1A-2f	393土坑		弥生土器	(底部)	—	(22.0)	9.0	(8.0)	5	良好	密	外：橙 5YR7/6 内：橙 7.5YR7/6 断面：橙 5YR7/8	内外面 剥離・摩滅 外面 タテハケ、内面 ナデか
317	84	59	4-2区	1B-4b		1層	須恵器	杯A	11.9	12.0	8.0	4.1	60	良好	密	外：灰 5Y5/1 内：灰 5Y6/1 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 外面 自然釉付着、ひずみ大 8世紀
318	84	59	4-2区	1B-4・5c		1層	須恵器	杯A	10.8	11.1	7.8	3.5	10	良好	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰白 N7/ 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラケズリ 8世紀

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
319	84	59	4-2区	1B-4・5c		1層	須恵器	杯A	12.2	12.4	8.7	3.5	20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰白 7.5Y7/1	内外面　回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ ひずみ大、口縁部付近外面に熔着片あり 8世紀
320	84	59	4-2区	1B-4・5c		1層	須恵器	杯蓋	16.0	16.6	—	2.2	25	良好	密	外：青灰 5B6/1 内：青灰 5B6/1 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、天井部 回転ヘラケズリ 8世紀
321	84	59	4-2区	1B-4・5c		1層	須恵器	杯蓋	16.3	16.7	—	3.1	60	良好	密	外：オリ―ブ黒 5Y3/1 内：灰白 N7/ 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ 口縁部外面 降灰のため黒化 天井部 ヘラ切りorヘラケズリのちナデ 8世紀
322	84	—	4-2区	1B-6A		1層	須恵器	杯蓋	16.3	16.4	—	(1.8)	20	普通 (やや軟)	密	外：灰白 5Y8/1 内：灰白 5Y8/1 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ 天井部 回転ヘラケズリのちナデ つまみ欠損、8世紀
323	84	59	4-2区	1B-4・5c		1層	須恵器	杯B	—	(15.6)	10.1	(1.8)	5以下	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、ひずみ大、変形あり 5区須恵器窯産か
324	84	59	4-2区	-		1層か (排土)	須恵器	壺M	—	8.4	4.3	(8.0)	70	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	内外面 回転ナデ、底部高台あり、糸切り痕 5区須恵器窯産か
325	84	59	4-2区	-		1層か (排土)	須恵器	壺	—	(12.5)	9.3	(3.7)	5以下	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：赤褐 10R5/3	底部のみ、内外面 回転ナデ 5区須恵器窯産か
326	84	59	4-2区	1B-4・5b		3層	須恵器	杯A	11.8	12.0	(7.6)	4.0	20	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ ひずみあり 5区須恵器窯産か
327	84	—	4-2区	1B-4・5b	(西壁中央部)	3層 (上層)	須恵器	杯A	14.6	14.8	11.0	(3.2)	10	普通	密	外：灰白 5Y7/2 内：灰白 2.5Y8/2 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ 西側トレンチ内中央付近出土 8世紀
328	84	—	4-2区	1B-5b		3層 (第2面精査中)	須恵器	杯A	19.8	20.0	15.8	(3.7)	口縁10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰白 N7/ 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、底部 回転ヘラケズリ 内面 接合痕あり 8世紀
329	84	59	4-2区	1B-4・5b		3層 (上層)	須恵器	杯蓋	—	(10.2)	—	(1.8)	5	普通	密	外：黄灰 2.5Y6/1 灰黄 2.5Y7/2 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：黄灰 2.5Y6/1 灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ、天井部 回転ヘラケズリ 8世紀
330	84	—	4-2区	1B-4・5b		3層 (上層)	須恵器	杯蓋	14.4	14.8	—	(1.7)	5以下	良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 8世紀
331	84	59	4-2区	1B-4・5b		3層 (上層)	須恵器	壺	7.6	(8.0)	—	(2.4)	口縁25	良好	密	外：灰 7.5Y5/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰 7.5Y5/1	口縁部、内外面 回転ナデ 5区 須恵器窯産か
332	84	59	4-2区	1B-3A		3層	須恵器	壺L	—	11.6	6.0	(7.7)	底部30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 5区 須恵器窯産か
334	84	59	4-2区	1B-4A		3層+ 4層or 5層	弥生土器	短頸壺	14.6	(14.9)	—	(10.7)	10	やや不良	やや祖	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：にぶい褐 7.5YR6/3 褐灰 7.5YR4/1 断面 :7.5YR5/2 灰褐	内外面 摩滅、口縁部外面 凹線文 頸部 貼付突帯・刻目文、外面 タテハケ
335	84	59	4-2区	1B-4A･b		3層	弥生土器	無頸壺	21.0	23.0	—	(4.4)	5以下	良好	密	外：浅黄橙 7.5YR8/4 内：浅黄橙 7.5YR8/6 断面：浅黄橙 10YR8/4	外面 凹線文、口縁部 円孔 内面 ナデか Ⅳ様式後半～末
336	84	59	4-2区	1B-4A・b		3層	弥生土器	(底部)	—	(10.0)	6.4	(4.0)	底部30	やや不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：明黄褐 10YR7/6 断面：灰 7.5Y5/1	内外面 摩滅
337	84	59	4-2区	1B-3A		4層 (5層直上)	弥生土器	短頸壺	11.4	(12.2)	—	(7.2)	口縁20	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：褐灰 10YR5/ にぶい黄橙 10YR7/3 断面：橙 7.5YR7/6	外面 タテハケ 内面 ヨコハケ
338	84	59	4-2区	1A-4j 1B-4A		4層or 5層	弥生土器	壺	—	(13.2)	—	(6.0)	10	やや不良	密	外：橙 7.5YR7/6 内：黄灰 2.5Y4/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	頸部 突帯剥離痕あり、刻目文あり 外面 タテハケ Ⅳ様式末か
339	84	59	4-2区	1B-3A		4層 (5層直上)	弥生土器	(底部)	—	(18.4)	6.8	(8.2)	底部20	良好	密	外：浅黄 2.5Y7/4 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	外面 ナデorハケ 内面 ナデ
340	84	59	4-2区	1B-4A		4層 (5層直上)	弥生土器	(底部)	—	(19.4)	—	(11.5)	5	良好	密	外：浅黄 2.5Y7/3 内：黄灰 2.5Y5/1 断面：浅黄 2.5Y7/3	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ・ユビオサエ
341	84	59	4-2区	1B-3A		4層 (5層直上)	弥生土器	(脚台部)	—	(9.0)	8.4	(4.4)	脚部80	不良	密	外：浅黄 2.5Y7/4 内：浅黄 2.5Y8/3 断面：浅黄 2.5Y7/4	内外面 摩滅、脚部外面 凹線文 Ⅳ様式
342	84	59	4-2区	1B-3A		4層 (5層直上)	弥生土器	(脚台部)	—	(11.1)	10.8	(3.1)	20	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 ユビナデ・ユビオサエ
343	88	59	4-2区	1B-4A	472土坑	第2面	土師器	甕	27.6	27.8	—	(31.0)	40	良好	密	外：浅黄橙 10YR8/4 内：橙 2.5YR7/6 断面：浅黄橙 10YR8/4	器厚0.5～0.8㎝ 口縁部 ヨコナデ、口縁部内面 ヨコハケ 外面 タテハケ、煤付着、内面 ユビオサエ 口縁部E形態、8世紀か
344	88	59	4-2区	1B-4A	472土坑	第2面	須恵器	蓋	21.9	22.4	—	(3.3)	5以下	良好	密	外：オリ―ブ黄 5Y6/3 内：灰 N6/ 断面：紫灰 5RP6/1	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラケズリ 外面に不明記号？あり 8世紀
345	88	59	4-2区	1B-4b	472土坑 (周辺)	第2面	弥生土器	鉢か	23.6	25.6	—	(4.9)	全体10 口縁10	やや不良	粗	外：明黄褐 10YR7/6 内：黄橙 7.5YR8/8 断面：褐灰 7.5YR5/1	外面 凹線文 Ⅳ様式後半～末
347	90	60	4-2区	1B-4A・b	竪穴建物４	第3面	弥生土器	無頸壺	—	—	—	(3.9)	5以下	やや不良	やや粗	外：明黄褐 10YR7/6 内：橙 5YR7/6 断面：灰褐 7.5YR6/2	内外面 剥離・摩滅 外面 凹線文(3条)、円孔 Ⅳ様式後半～末
348	90	60	4-2区	1B-4A・b	竪穴建物４ (埋土4)	第3面	弥生土器	蓋	—	(3.8)	—	(2.0)	10	やや不良	粗	外：橙 5YR7/8 内：浅黄橙 7.5YR8/6 断面：褐 7.5YR4/4	内外面 摩滅
349	90	60	4-2区	1B-4A・b	竪穴建物４周辺 (北～西)	第3面	弥生土器	鉢か	14.0	14.3	—	(1.7)	5以下	良好	やや粗	外：褐灰 7.5YR4/1 内：にぶい黄橙 10YR6/3 断面：褐灰 7.5YR4/1	内外面 摩滅
350	90	60	4-2区	1B-4A・b	竪穴建物４ (上面)	第3面	弥生土器	(底部)	—	(9.7)	5.8	(2.7)	5以下	やや不良	粗	外：にぶい橙 5YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR6/3 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅
351	90	60	4-2区	1B-4b	竪穴建物４周辺 (西側肩部)	第3面	弥生土器	(底部)	—	(19.0)	8.4	(5.3)	5	良好	密	外：浅黄橙 10YR8/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 剥離・摩滅、外面 ハケ
352	90	60	4-2区	1B-4A・b	竪穴建物４ ＋472土坑周辺 ＋474土坑上面	第3面	弥生土器	鉢	38.0	(38.6)	9.4	(11.0＋6.1)	15	やや不良	密	外：褐 10YR4/4 内：にぶい黄褐 10YR5/3 断面：黒褐 10YR3/2	内外面 摩滅、外面 櫛描簾状文 底部内面 ヘラミガキ、生駒西麓産 河内:濱田編年Ⅳ古段階、森井寺澤編年Ⅳ-3
353	93	60	4-2区	1B-3･4A	竪穴建物13 or 14 (上面)	第3面	弥生土器	(頸部～肩部)	—	(16.6)	—	(4.0)	肩部20	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい赤橙 10YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい赤橙 10YR6/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/2 黄灰 2.5Y4/1	内外面 摩滅 内面 粗いハケ
354	93	60	4-2区	1B-4A	竪穴建物13 (炭層)	第3面	弥生土器	長頸壺か	9.2	(10.0)	—	(8.0)	口縁25	良好	密	外：橙 7.5YR6/6 内：橙 7.5YR6/6 断面：浅黄 2.5Y8/3	口縁部 ヨコナデ、凹線文、外面 タテハケ 内面 ユビオサエ、胴部破片もあり Ⅳ様式末

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
355	93	60	4-2区	1B-4A	竪穴建物13	第3面	弥生土器	(底部)	—	(9.0)	5.4	(2.4)	底部80	良好	密	外：橙 2.5YR6/6 内：橙 5YR6/6 断面：橙 2.5YR6/6	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ
356	93	60	4-2区	1B-3A	竪穴建物14	第3面	弥生土器	(底部)	—	(24.2)	8.0	(6.8 +2.6)	65	良好	密	外：黄灰 2.5Y6/1 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：灰白 2.5Y7/1	外面 ヘラミガキ、底部 ユビオサエ 内面 タテハケ
358	93	60	4-2区	1B-3A	竪穴建物14 (埋土＋541溝)	第3面	弥生土器	甕	18.6	24.4	6.4	(22.8 +4.5)	50	良好	やや粗	外：淡黄 2.5Y8/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：褐灰 10YR4/1	口縁部外面 凹線文、頸部外面 タテハケ 体部外面 ハケ・ナデ、煤付着 体部内面上半 ヨコナデ、下半 ヘラケズリ Ⅳ様式末～Ⅴ様式初頭
360	94	60	4-2区	1B-4A	474土坑 (埋土2・3)	第3面	弥生土器	有段口縁壺	19.5	29.8	6.8	46.0	全体70 口縁100	良好	密	外：橙 5YR7/6 内：黄橙 10YR8/6 断面：橙 5YR7/6	口縁部 ヨコナデ、頸部外面 タテハケ 内面 ヨコナデ 頸部 貼付・突帯刻目文 体部内面 ヨコハケ・タテハケ 体部上半 タテ・ナナメハケ 下半 ヘラミガキ 体部最大径に刻目文(全周しない) Ⅳ様式後半～末
361	94	—	4-2区	1B-4A	474土坑 (埋土1)	第3面	弥生土器	甕	11.2	(11.6)	—	(2.3)	20	やや不良	密	外：にぶい赤褐 5YR5/3 内：褐灰 5YR4/1 断面：黄橙 10YR8/6	口縁部 ナデ、内面 ユビオサエ
362	94	60	4-2区	1B-4A･b	474土坑 (埋土3)	第3面	弥生土器	甕	17.2	(21.4)	—	(6.4)	口縁25	やや不良	密	外：橙 5YR7/6 内：橙 5YR6/6 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁部外面 ヨコナデ、内面 ヨコハケ 体部外面 タテハケ 体部内面 ユビナデ・ユビオサエ
363	94	60	4-2区	1B-4b	474土坑 (埋土3)	第3面	弥生土器	甕	—	(12.4)	5.2	(7.7)	全体20 底部40	良好	密	外：淡赤橙 2.5YR7/4 内：明褐灰 7.5YR7/1 断面：浅黄橙 7.5YR8/3	外面 ハケ? ユビオサエ、摩滅、底部 ナデ
364	94	60	4-2区	1B-4A･b	474土坑 (埋土4)	第3面	弥生土器	(脚部)	—	12.8	11.8	(2.2)	20	良好	やや粗	外：褐 10YR4/6 内：黄褐 10YR5/8 断面：褐 10YR4/4	内外面 摩滅 生駒西麓産
365	95	—	4-2区	1B-5c	99・485落ち込み (上面)	第3面	弥生土器	壺	—	(21.6)	—	(5.0)	頸部10	良好	密	外：橙 5YR6/6 内：橙 5YR7/6 断面：浅黄橙 10YR8/4	外面 ハケ 内面 ヨコ・ナナメハケ
366	95	61	4-2区	1B-5c	99・485落ち込み (上面)	第3面	土師器	甕	12.8	(13.0)	—	(4.1)	口縁20	良好	密	外：橙 5YR7/6 内：浅黄橙 7.5YR8/6 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁部外面 ヨコナデ、内面 ヨコナデ 体部外面 タテハケ、内面 ナデ
367	95	61	4-2区	1B-4・5c	99・485落ち込み	第3面	弥生土器	広口壺	18.6	(19.3)	—	(3.1)	全体 5以下 口縁10	良好	密	外：橙 5YR7/6 内：橙 5YR7/6 断面：橙 7.5YR6/6	内外面 剥離・摩滅、外面 ヨコナデ
368	95	61	4-2区	1B-4・5c	99・485落ち込み (上層)	第3面	弥生土器	広口壺	21.8	(22.5)	—	(4.8)	全体5 口縁10	良好	やや粗	外：浅黄橙 10YR8/4 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	内外面 摩滅、ヨコナデか
369	95	61	4-2区	1B-5c	99・485落ち込み	第3面	弥生土器	壺	—	(14.0)	—	(8.1)	頸部20	良好	密	外：明赤褐 2.5YR5/6 内：赤灰 2.5YR4/1 断面：橙 2.5YR6/6	外面 タテハケか 内面 ユビナデ・ユビオサエ 頸部 貼付突帯・刻目文 Ⅳ様式後半
370	95	61	4-2区	1B-4・5c	99・485落ち込み	第3面	弥生土器	(底部)	—	(15.8)	12.6	(5.8)	全体10 底部30	良好	やや粗	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：橙 5YR7/6 断面：にぶい黄橙 10YR6/3	内外面 摩滅、外面 ナデ
371	95	—	4-2区	1B-5c	99・485落ち込み (下層)	第3面	弥生土器	(底部)	—	(8.0)	6.0	(2.1)	5以下	不良	粗	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：明黄褐 10YR7/6	内外面 摩滅
372	95	61	4-2区	1B-5c	99・485落ち込み	第3面	弥生土器	無頸壺	17.6	23.4	—	(6.5)	全体20 口縁20	良好	やや粗	外：橙 7.5YR7/6 内：橙 5YR7/8 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁部 ヨコナデ、外面 凹線文 内面 ナデ・ハケ 口縁部 円孔複数あり Ⅳ様式後半
373	95	61	4-2区	1B-5c	99・485落ち込み	第3面	弥生土器	甕	16.0	16.0	—	(7.5)	全体 10以下 口縁20	良好	やや粗	外：明赤褐 5YR5/6 内：明赤褐 5YR5/6 断面：明赤褐 5YR5/6	内外面 摩滅、口縁部 ヨコナデ 外面 タテハケか、煤付着
374	95	61	4-2区	1B-4・5c	99・485落ち込み	第3面	弥生土器	鉢or 高杯	16.2	16.4	—	(3.9)	5以下	やや不良	粗	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅、外面 凹線文
375	95	—	4-2区	1B-4・5c	99・485落ち込み (上層)	第3面	弥生土器	(脚台部)	—	(7.7)	—	(5.9)	5以下	やや不良	粗	外：橙 7.5YR7/6 内：橙 5YR6/6 断面：橙 7.5YR7/6	外面 摩滅 内面 ナデ
376	95	61	4-2区	1B-4・5c	99・485落ち込み (上層)	第3面	弥生土器	(脚台部)	—	(10.2)	10.0	(4.1)	5	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：浅黄橙 10YR8/4	円孔複数あり、(3ヶ所確認) Ⅳ様式後半～末
377	95	61	4-2区	1B-6c	99・485落ち込み	第3面	弥生土器	(脚台部)	—	(8.8)	—	(6.6)	50	良好	密	外：橙 5YR7/6 内：橙 7.5YR7/6 断面：浅黄橙 7.5YR8/6	内外面 摩滅、外面 ヘラミガキか 内面 絞り痕、接合痕あり
378	95	61	4-2区	1B-4・5c	99・485落ち込み	第3面	弥生土器	(脚台部)	—	(15.6)	14.4	(3.1)	全体5 口縁10	良好	やや密	外：橙 7.5YR7/6 内：橙 5YR7/6 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅、内面 ヘラケズリか
379	95	61	4-2区	1B-4・5c	99・485落ち込み (下層)	第3面	弥生土器	(脚台部)	—	(12.0)	12.0	(4.2)	10	やや不良	密	外：灰黄褐 10YR6/2 内：灰黄褐 10YR6/2 断面：浅黄橙 10YR8/4	脚端部 ヨコナデ 外面 タテハケのちヘラミガキ 内面 ヨコナデ
380	117	61	5区	窯体内 Y2.4～3.1	449須恵器窯 窯体内	最終床面転用焼台	須恵器	杯蓋	21.0	21.2	—	(1.2)	全体30 口縁20	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	口縁部外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りorヘラケズリのちナデ 内面 不定方向ナデ 破面焼成、転用焼台(かませ片)
381	117	61	5区	窯体内 Y1.7～2.4	449須恵器窯 窯体内	最終床面転用焼台	須恵器	杯B	13.2	13.4	10.5	5.5	全体50 口縁40 底部60	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 内面 6条の条痕あり、意図的かどうかは不明 破面焼成、半裁、転用焼台
382	117	61	5区	窯体内 Y1.7～2.4	449須恵器窯 窯体内	最終床面転用焼台	須恵器	杯B	14.0	14.2	10.8	5.0	全体45 口縁30 底部50	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 口縁ひずみあり 破面焼成、半裁、転用焼台
383	117	61	5区	窯体内 Y2.4～3.1	449須恵器窯 窯体内	最終床面転用焼台	須恵器	杯B	15.0	15.2	11.0	5.6	全体40 口縁30 底部60	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 破面焼成、半裁、転用焼台
384	117	61	5区	窯体内 Y1.7～2.4	449須恵器窯 窯体内	最終床面転用焼台	須恵器	杯B	15.9	16.2	11.9	5.9	20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：褐灰 5YR5/1	内外面 回転ナデ、底部 未調整 破面焼成、転用焼台 蛍光X線分析試料2
385	117	61	5区	窯体内 Y1.7～2.4	449須恵器窯 窯体内	最終床面転用焼台	須恵器	杯B	16.0	16.2	11.0	5.6	口縁20 底部40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 破面焼成、半裁、転用焼台
386	117	61	5区	窯体内 Y2.4～3.1	449須恵器窯 窯体内	最終床面転用焼台	須恵器	杯B	16.4	16.6	12.0	6.2	全体40 口縁20 底部50	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 口縁ややひずみあり 破面焼成、半裁、転用焼台
388	117	61	5区	窯体内 Y1.7～2.4	449須恵器窯 窯体内	最終床面転用焼台	須恵器	杯B	16.6	17.0	12.0	5.7	全体30 口縁20 底部30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 口縁部 剥離痕あり 破面焼成、半裁、転用焼台
389	117	61	5区	窯体内 Y1.7～2.4	449須恵器窯 窯体内	最終床面転用焼台	須恵器	杯B	18.0	18.5	13.0	6.8	全体50 口縁10 底部60	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 口縁ひずみあり 破面焼成、半裁、転用焼台

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
390	117	61	5区	窯体内 Y2.4～3.1	449須恵器窯 窯体内	最終床面 転用焼台	須恵器	杯B	19.5	19.9	14.5	8.0	口縁5 底部40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 口縁ややひずみあり 破面焼成、半裁、転用焼台
391	117	61	5区	窯体内 Y1.7～2.4	449須恵器窯 窯体内	最終床面 転用焼台	須恵器	杯B	20.1	20.5	13.8	7.3	口縁10 底部40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 破面焼成　半裁、転用焼台
392	117	61	5区	窯体内 Y1.7～2.4	449須恵器窯 窯体内	最終床面 転用焼台	須恵器	杯B	21.2	21.6	13.8	7.3	全体35 口縁10 底部50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 破面焼成、半裁、転用焼台
393	117	61	5区	窯体内 Y2.4～3.1	449須恵器窯 窯体内	最終床面 転用焼台	須恵器	壺Lか	—	17.0	—	(9.1)	30	良好	密	外：暗灰 N3/ 内：暗灰 N3/ 断面：暗灰 N3/	内外面 回転ナデ、外面 カキメ 降灰(肩部)
394	117	61	5区	窯体内 Y1.7～2.4	449須恵器窯 窯体内	最終床面 転用焼台	須恵器	平瓶か	—	(21.5)	13.6	(8.2)	底部50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ
395	117	—	5区	窯体内 Y2.4～3.1	449須恵器窯 窯体内	最終床面 転用焼台	須恵器	甕	—	—	—	(5.0)	—	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N5/	外面 タタキ、内面 ナデ
396	118	62	5区	窯体内西側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯A	12.6	12.8	8.2	3.7	全体45 口縁35 底部50	普通	密	外：灰 N6/ 内：灰白 2.5Y7/1 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
397	118	62	5区	窯体内西側 Y7.0～7.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯A	12.8	13.0	9.6	3.7	口縁60 底部70	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 剥離・摩滅、回転ナデか
398	118	63	5区	窯体内西側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯A	15.2	15.4	12.6	3.0	全体40 口縁20 底部30	やや不良	密	外：灰 N4/・浅黄 2.5Y7/3 内：灰 N4/・浅黄 2.5Y7/3 断面：浅黄 2.5Y7/3	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 8区367土坑出土焼成不良杯Aと同形の製品
400	118	63	5区	窯体内東側 Y6.0～6.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯A	15.6	15.8	12.4	3.6	口縁20 底部20	不良	密	外：浅黄 2.5Y7/3 内：灰白 5Y7/1 断面：灰白 5Y7/1	内外面 剥離・摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切りのちナデか
401	118	63	5区	窯体内西側 Y7.0～7.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯A	15.9	16.1	13.6	3.7	全体70 口縁20 底部90	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 剥離・摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
402	118	63	5区	窯体内西側 Y7.0～7.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯A	16.6	16.8	12.6	3.2	全体40 口縁10 底部40	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 剥離・摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切り痕あり
403	118	63	5区	窯体内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯蓋Ⅰ	14.7	15.0	—	3.2	全体45 口縁50	やや不良	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR6/3 断面：にぶい黄橙 10YR6/3	内外面 回転ナデ 口縁部外面 黒斑あり
404	118	63	5区	窯体内西側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯蓋Ⅰ	14.9	15.0	—	3.4	全体40 口縁30	不良	密	外：橙 7.5YR6/6 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 剥離・摩滅著しい 調整不明
405	118	63	5区	窯体内西側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯蓋Ⅱ	15.5	15.7	—	2.8	口縁25	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	内外面 剥離・摩滅、回転ナデか
406	118	62	5区	窯体内西側 Y7.0～7.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯蓋Ⅱ	17.2	17.3	—	2.4	90	やや不良	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	内外面 回転ナデ
407	118	62	5区	窯体内東側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯蓋Ⅱ	17.6	17.8	—	1.6	全体60 口縁60	やや良	密	外：灰 5Y6/1 内：灰 5Y6/1 断面：灰 5Y6/1	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのちナデ
408	118	62	5区	窯体内中央 Y7.0～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯蓋Ⅱ	17.6	17.9	—	2.5	100	不良	密	外：にぶい黄 2.5Y6/4 内：淡黄 2.5Y8/3 断面：—	内外面 剥離・摩滅著しい 調整不明
409	118	62	5区	窯体内東側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯蓋Ⅱ	13.2	13.3	—	1.5	口縁90	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラ切りのちナデ ひずみ大
410	118	62	5区	窯内東側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯蓋Ⅰ	17.1	17.2	—	3.2	全体80 口縁90	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラ切りのちナデ 降灰あり
411	118	62	5区	窯内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯B	15.2	15.4	10.9	4.9	全体60 口縁50 底部80	普通	密	外：にぶい赤褐 2.5YR5/4 灰白 2.5Y7/1 内：灰白 2.5Y7/1 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
412	118	62	5区	窯内東側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯B	15.3	15.7	12.0	6.0	口縁40 底部40	やや良～やや不良	密	外：灰 N6/ 内：灰 5Y6/1 断面：灰 5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのちナデか 焼成が均質でない
413	118	62	5区	窯内西側 Y7.0～7.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯B	(15.6)	15.9	11.1	5.7	全体70 口縁40 底部80	不良	密	外：灰白 2.5Y8/2 内：橙 7.5Y7/6 断面：灰白 2.5Y8/2	内外面 剥離・摩滅、口縁端部 摩滅 底部 ヘラ切りのちナデか
414	118	63	5区	窯内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯B	16.6	16.8	11.7	5.8	口縁40 底部50	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 剥離・摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切りのちナデか
415	118	63	5区	窯内西側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯B	16.9	17.1	13.1	6.0	口縁20 底部20	やや不良	密	外：灰白 5Y7/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのちナデ
416	118	63	5区	窯内西側 Y7.0～7.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯B	17.2	17.4	12.1	5.8	全体40 口径20 底部100	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい橙 7.5YR7/4	内外面 剥離・摩滅著しい 調整不明
417	118	63	5区	窯内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	杯B	17.4	17.6	11.8	5.8	全体40 口縁30 底部60	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	外面 剥離・摩滅、内面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのちナデか
418	118	—	5区	窯内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	鉢D	19.4	21.2	—	(4.0)	口縁10	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	外面・口縁部 剥離・摩滅 内面 回転ナデ
419	119	63	5区	窯内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	皿CⅡ	15.6	16.0	13.4	1.9	口縁10 底部60	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい橙 7.5YR7/4	内外面 剥離・摩滅、回転ナデ 底部 ヘラ切りのちナデか 口縁部内面 沈線
420	119	63	5区	窯内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	皿CⅡ	15.4	15.8	13.4	1.8	口縁20 底部30	不良	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい橙 7.5YR7/4	内外面 剥離・摩滅、調整不明 口縁部内面 沈線
421	119	62	5区	窯内西側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	皿CⅡ	15.8	16.4	14.2	1.9	口縁50 底部50	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：橙 7.5YR6/6	内外面 剥離・摩滅、調整不明 口縁部内面 沈線
422	119	63	5区	窯体内中央 Y7.0～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	皿CⅡ	19.6	20.2	16.6	1.9	口縁20 底部30	不良	密	外：灰白 5Y8/1 内：灰白 5Y8/1 断面：橙 7.5YR7/6	内外面 剥離・摩滅、調整不明 ひずみあり、口縁部内面 沈線
423	119	63	5区	窯体内 Y4.7～5.6	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	皿C	14.7	15.4	12.7	2.0	口縁20 底部40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのちナデ
424	119	63	5区	窯内西側 Y6.0～6.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面 直上	須恵器	皿C	19.4	20.0	16.7	1.8	全体30 口縁20 底部35	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR6/3 断面：にぶい黄橙 10YR6/3	内面 やや摩滅、内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのちナデ

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
425	119	63	5区	窯体内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	皿C	19.4	20.2	16.9	2.2	20	やや不良	密	外：にぶい褐 7.5YR5/4 内：にぶい褐 7.5YR5/4 断面：にぶい褐 7.5YR5/4	内外面 摩滅、回転ナデか 蛍光X線分析試料3
426	119	63	5区	窯体内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	皿C	20.0	20.6	18.2	2.2	口縁30 底部30	不良	密	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	内外面 摩滅、回転ナデか
427	119	63	5区	窯体内西側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	皿C	19.9	20.6	18.0	2.2	口縁30 底部40	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	内外面 回転ナデ 底部 摩滅、ヘラ切りのちナデか
428	119	62	5区	窯内東側 Y6.5～7.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	皿C	20.4	21.0	18.8	2.2	口縁35 底部40	不良	密	外：浅黄 2.5Y7/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：橙 5YR6/6	内外面 摩滅、調整不明
429	119	62	5区	窯体内 Y4.7～5.6	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	皿C	21.0	21.8	18.9	2.3	口縁40 底部45	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：橙 7.5YR7/6	内外面 摩滅、回転ナデか
430	119	63	5区	窯体内中央 Y7.0～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	皿C	18.0	18.6	15.6	1.8	全体35 口縁10 底部20	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 外面部分的に降灰あり 破面焼成、かませ片の可能性大
431	119	62	5区	窯体内東側 Y7.0～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	壺L	7.2	13.7	—	(12.2)	全体45 口縁50	普通	密	外：やや橙 内：やや橙 断面：にぶい赤橙 2.5YR5/4	内外面 回転ナデ 頸部外面 天井片or置台片が付着 焼台に転用か 頸部三段接合
432	119	—	5区	窯体内東側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	壺Lか	—	15.3	—	(7.9)	30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 外面 降灰あり、置台片・砂が付着 焼台に転用か 頸部三段接合
433	119	62	5区	窯体内東側 Y7.0～7.5 西側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	壺L	—	15.4	8.0	(13.3)	全体40 底部30	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	内外面 回転ナデ、外面下半 回転ケズリ 外面・破面 降灰あり、焼台転用か 頸部三段接合
434	119	63	5区	窯体内東側 Y7.0～7.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	壺・底部	—	(10.1)	7.6	(3.1)	全体25 底部100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	外面 ヘラケズリ、内面 回転ナデ 底部 糸切か
435	119	63	5区	窯内西側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	壺・底部	—	(13.0)	8.0	(5.6)	全体25 底部30	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	外面 ヘラケズリ、内面 回転ナデ 底部 糸切か
436	119	63	5区	窯体内 Y5～6	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	壺Lか	—	(16.7)	11.0	(5.7)	底部60	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N6/	外面 ヘラケズリのち回転ナデか 内面 回転ナデ 底部 ナデ消し
437	119	63	5区	窯体内 Y5.0～6.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	平瓶	—	(23.8)	18.0	(6.4)	底部20	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	外面 ヘラケズリのち回転ナデか 内面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
438	119	63	5区	窯内西側 Y7.5～8.0	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	鉢	16.0	16.3	—	(5.1)	口縁20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 自然釉付着・降灰、回転ナデか 破面も自然釉付着・降灰、ひずみあり かませ片か
439	119	—	5区	窯内西側 Y7.0～7.5	449須恵器窯 窯体内	最終床面直上	須恵器	鉢A	21.9	23.4	—	(6.4)	口縁10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	外面 回転ナデのちヘラミガキ 口縁部・内面 回転ナデ
440	119	63	5区	窯体内 Y4.7～5.6 ＋灰原南東裾	449須恵器窯 窯体内 ＋462灰原	最終床面直上 ＋灰原	須恵器	鉢A	—	(21.0)	—	(8.4)	25	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	外面 回転ヘラケズリのちヘラミガキ 内面 回転ナデ 尖り底
441	119	62	5区	窯体内西側 Y6.5～7.0 ＋灰原南東裾 ＋(灰原東・西)	449須恵器窯 窯体内 ＋462灰原 +(2層)	最終床面直上 ＋灰原 ＋2層	須恵器	円面硯	15.5 (外堤径)	23.0	22.9	11.6	60	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：赤灰 2.5YR4/2	内外面 回転ナデ、外面・硯面など 降灰 砂付着している破片あり 破片の一部はかませ片か 方形スカシ、硯面径 10.2㎝
444	120	63	5区	窯体内 南東	449須恵器窯 窯体内	最終床面下整地層(33)	須恵器	杯A	13.8	14.0	—	3.4	全体20 口縁10 底部30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
445	120	63	5区	窯体内 南東	449須恵器窯 窯体内	最終床面下整地層(33)	須恵器	杯蓋 II	16.0	16.2	—	(1.2)	20	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切り未調整
446	120	63	5区	窯体内 南東	449須恵器窯 窯体内	最終床面下整地層(33)	須恵器	杯蓋 II	16.7	16.8	—	(1.0)	50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：紫灰 5RP6/1	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラ切りのちナデ 口縁部内面 自然釉付着・熔着痕あり
447	120	63	5区	窯体内 南東・南西	449須恵器窯 窯体内	最終床面下整地層(33)	須恵器	杯蓋	17.0	17.4	—	(1.9)	全体30 口縁25	やや良	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラ切りのちナデ やや古手の形態
448	120	63	5区	窯体内 南東	449須恵器窯 窯体内	最終床面下整地層(33)	須恵器	杯B	16.3	16.4	11.1	4.5	40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整、爪型状圧痕あり ひずみ大
449	120	63	5区	窯体内 南東	449須恵器窯 窯体内	最終床面下整地層(33)	須恵器	杯B	18.7	19.0	13.2	5.9	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 内面 置台付着 破面焼成、半裁、転用焼台か ひずみ大
450	120	—	5区	窯体内 南東	449須恵器窯 窯体内 (466ピット 上面)	最終床面下整地層(33)	須恵器	杯B	—	(13.8)	11.2	(2.5)	5以下	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N4/	内外面 回転ナデ
451	121	64	5区	窯側北西	450溝	窯背部上層	須恵器	杯A	12.4	12.5	8.3	4.0	全体90 口径90	やや良	密	外：灰 N6/ 内：灰 7.5Y6/1 にぶい赤褐 5YR5/3 断面：—	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 焼成が均質でない
452	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部上層	須恵器	杯蓋 I	15.2	15.4	—	(2.3)	全体40 口径20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのち回転ナデ 熔着痕あり
453	121	64	5区	窯上方溝内	450溝	窯背部上層	須恵器	杯蓋 II	15.6	15.9	—	2.5	100	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：	内外面 回転ナデ 口縁部 自然釉付着、熔着痕あり
454	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部上層	須恵器	杯蓋 II	18.4	18.8	—	(1.7)	全体30 口径30	良好	密	外：青灰 5B5/1 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/、青灰 5B5/1 灰赤 2.5YR5/2	内外面 回転ナデ、天井部 ナデ ひずみ大
455	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部上層	須恵器	杯蓋 I	18.8	19.4	—	(3.1)	全体50 口径50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのち未調整 ひずみ大
456	121	64	5区	窯側北西	450溝	窯背部上層	須恵器	杯蓋 II	23.8	24.0	—	(1.8)	全体75 口径70	やや不良	密	外：にぶい赤褐 5YR5/3 灰 5Y6/ 内：にぶい赤褐 5YR5/3 灰 5Y6/ 断面：にぶい赤褐 5YR5/3 灰 5Y6/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのち不定方向ナデ
457	121	64	5区	窯側北西	450溝	窯背部上層	須恵器	杯B	18.3	18.5	13.1	7.8	全体40 口径55	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 回転ナデのち不定方向ナデか ひずみ大

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
458	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部上層	須恵器	杯B	—	(14.2)	11.4	(2.0)	全体5以下口径10	不良	密	外：灰黄 2.5Y6/2 内：灰黄 2.5Y6/2 断面：灰黄 2.5Y6/2	内外面 摩滅、調整不明
459	121	64	5区	窯側北	450溝	窯背部上層	須恵器	皿A	15.1	15.2	13.4	1.6	全体80口径90	不良	密	外：灰白 5Y7/2 内：灰白 5Y7/2 断面：灰白 5Y7/2	内外面 摩滅、回転ナデか
460	121	64	5区	窯側北	450溝	窯背部上層	須恵器	壺	—	(14.4)	7.5	(8.1)	30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：褐灰 7.5YR5/1	内外面 回転ナデ、高台底面 布目痕あり 壺Lか
461	121	64	5区	窯側北	450溝	窯背部上層	須恵器	壺	—	(18.1)	13.6	(6.1)	30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/、褐灰 5YR5/1	内外面 回転ナデ 底部・高台に小円孔あり(外から中へ穿孔)
462	121	64	5区	窯側北西	450溝	窯背部中層＋上層	須恵器	杯A	12.0	12.2	8.2	4.2	80	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：—	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
463	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部中層	須恵器	杯A	—	(12.2)	9.3	(2.6)	30	不良	密	外：明黄褐 10YR6/6 内：明黄褐 10YR7/6 断面：浅黄 2.5Y7/3	内外面 摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切り未調整か
464	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部中層	須恵器	杯A	12.9	13.0	7.6	3.6	全体5以下口縁10	不良	密	外：灰白 5Y7/2 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：浅黄 2.5Y7/3	内外面 摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切り未調整か
465	121	64	5区	窯側北西	450溝	窯背部中層	須恵器	杯A	13.7	13.9	9.7	4.2	全体70口縁50	やや不良	密	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：明黄褐 10YR7/6	内面 回転ナデ、外面 摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切りか 器厚が不均一
466	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部中層	須恵器	杯A	13.9	14.2	8.8	3.8	全体10口縁10	やや不良	密	外：明黄褐 10YR7/6 内：明黄褐 10YR7/6 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りか
467	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部下層	須恵器	杯A	13.7	13.8	8.8	3.2	全体5以下口縁10	不良	密	外：灰 5Y6/1 内：灰 5Y5/1 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りか
468	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部下層	須恵器	杯A	13.3	13.4	8.6	4.1	全体40口縁25	やや良	密	外：灰 N6/、褐灰 7.5YR5/2 内：灰 N6/、褐灰 7.5YR5/2 断面：褐灰 7.5YR5/2	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
469	121	—	5区	窯側北西	450溝	窯背部下層	須恵器	杯A	13.1	13.3	8.9	4.3	全体50口縁50	普通	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰白 7.5Y7/1 断面：灰白 7.5Y7/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りか ひずみ大
470	121	—	5区	窯側西側(C-C′アゼ)	450溝	西側中層	須恵器	杯A	—	(11.0)	8.8	(1.7)	全体10底部50	不良	粗	外：浅黄 2.5Y7/4 内：明黄褐 10YR7/6 断面：浅黄 2.5Y6/2	内外面 摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切り
471	121	64	5区	窯側西側(C-C′アゼ)	450溝	西側中層	須恵器	杯A	—	(13.2)	9.0	(3.6)	全体40口縁20	不良	密	外：灰白 5Y7/1 内：浅黄 2.5Y7/3 断面：灰白 2.5Y7/1	外面 回転ナデ、内面 摩滅、回転ナデ 底部 ヘラ切りか
472	121	64	5区	窯側中北西	450溝	西側中層	須恵器	杯蓋II	13.7	14.1	—	2.9	口縁10	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/、赤灰 10R5/1	内外面 回転ナデ、砂付着、降灰あり 口縁端部 熔着痕あり、かませ片か
473	121	64	5区	窯側中北西	450溝	西側中層	須恵器	杯蓋	—	(7.5)	—	(1.6)	20	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/ 、灰 N5/	外面 回転ナデか、降灰あり
474	121	64	5区	窯側中北西	450溝	西側中層	須恵器	杯蓋II	20.8	21.0	—	(0.9)	全体10口縁10	良好	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰白 7.5Y7/1	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのちナデ
475	121	64	5区	窯側中北西	450溝	西側中層	須恵器	杯B	12.8	13.0	9.0	4.2	全体25口縁10	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、外面 砂付着 底部内面 熔着痕あり 転用焼台もしくはかませ片か
476	121	—	5区	窯側中北西(B-B′アゼ)	450溝	西側下層	須恵器	杯A	—	(11.1)	8.9	(3.2)	40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
477	121	64	5区	窯側南西	450溝	西側下層	須恵器	杯蓋II	15.8	16.0	—	(0.7)	全体30口縁10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 口縁部内面 剥離痕あり
478	121	64	5区	窯側南西	450溝	西側下層	須恵器	杯B	14.4	14.6	10.9	5.1	全体40口縁40	普通	密	外：灰オリーブ 5Y6/2 内：灰オリーブ 5Y6/2 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整か
479	121	64	5区	窯側南西	450溝	西側下層	須恵器	杯B	15.3	15.4	11.2	5.2	全体20口縁10	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：赤灰 2.5YR5/1	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整か 外面 自然釉付着・降灰あり
480	121	64	5区	窯側中南西	450溝	西側方下層	須恵器	円面硯	17.5(外堤径)	23.6	23.6	7.6	5以下	良好	密	外：褐灰 10YR5/1 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 方形スカシ、硯面径13.6㎝
481	122	—	5区	窯側北東	451くぼみ～450溝付近	(溝下層)	須恵器	杯A	—	(10.7)	8.4	(2.2)	20	やや不良	密	外：明黄褐 10YR7/6 内：にぶい橙 7.5YR6/4 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り
482	122	65	5区	窯側北東	451くぼみ	上層	須恵器	杯蓋II	14.7	14.9	—	1.8	全体60口縁50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 口縁部 熔着あり・自然釉付着、ひずみ大
483	122	65	5区	窯側北東	451くぼみ	上層	須恵器	杯蓋II	13.8	14.0	—	(1.9)	全体70口径65	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：青灰 5PB5/1	内外面 回転ナデ 口縁部 熔着あり・自然釉付着、ひずみ大
484	122	—	5区	窯側北東	451くぼみ	上層	須恵器	鉢A	19.6	22.4	—	(6.7)	全体5以下口縁10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰褐 5YR6/2	口縁端部 ナデ 外面 ヘラケズリのちヘラミガキ 内面 回転ナデ
485	123	65	5区	窯側中南東	452平坦面	(上面)	須恵器	杯蓋II	18.0	18.2	—	1.9	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ
486	123	65	5区	窯側中南東	452平坦面	(上面)	須恵器	杯蓋II	21.5	21.6	—	2.1	40	やや良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ
487	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	(上面)	須恵器	杯B	12.0	12.2	8.0	4.4	30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ ひずみ大
488	123	65	5区	窯側中北東	452平坦面	(上面)	須恵器	皿C	17.9	18.4	16.0	2.5	40	やや不良	密	外：浅黄 2.5Y7/3 内：浅黄 2.5Y7/3 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 摩滅、ヘラ切りのちナデか
489	123	65	5区	窯側中北東	452平坦面	上層	須恵器	杯A	11.6	11.8	8.6	3.3	40	普通	密	外：灰 N6/・灰黄 2.5Y7/6 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 摩滅、ヘラ切りのち不定方向ナデ 熔着痕あり
490	123	—	5区	窯側中南東	452平坦面	上層	須恵器	杯B	—	(13.2)	10.2	(2.6)	20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ ひずみあり
491	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	上層	須恵器	杯B	16.8	17.3	12.8	7.7	5以下	良好	密	外：灰白 7.5Y7/1・灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 外面 降灰、ひずみ大、転用焼台か
492	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	上層	須恵器	杯B	14.5	14.7	9.6	5.1	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 外面 降灰、剥離痕あり、ひずみ大 転用焼台か
493	123	65	5区	窯側中南東	452平坦面	上層	須恵器	壺M	—	7.9	4.6	(8.7)	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ
494	123	65	5区	窯側中北東～中南東	452平坦面	上～下層	須恵器	杯A	15.2	15.3	10.8	4.1	40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰白 N7/・灰白 5Y7/2 断面：灰白 7.5Y7/1	内外 面回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデか

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
495	123	65	5区	窯側中北東～中南東	452平坦面	上～下層	須恵器	杯蓋Ⅱ	16.2	16.3	—	1.7	全体40 口径40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ
496	123	65	5区	窯側中南東	452平坦面	上～下層	須恵器	杯B	19.2	19.4	12.5	7.1	40	良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 N6/1 断面：にぶい赤褐 5YR5/3	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
497	123	65	5区	窯側中北東～中南東	452平坦面	上～下層	須恵器	杯B	19.3	19.5	14.4	7.5	全体40 口径30	良好～やや良好	密	外：灰 5Y6/1 内：灰 5Y6/1 断面：橙 2.5YR6/6	内外面　回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
498	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯Aか	—	(9.5)	8.8	(1.1)	10	不良	やや粗	外：にぶい黄褐 10YR5/3 内：にぶい黄橙 10YR6/3 断面：明黄褐 10YR6/6	内外面 摩滅、調整不明
499	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯A	—	(11.2)	8.9	(2.8)	50	不良	密	外：にぶい黄 2.5Y6/3 内：暗灰黄 2.5Y5/2 断面：暗灰黄 2.5Y5/2	内外面 摩滅、調整不明
500	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯A	—	(13.4)	9.9	(3.9)	60	やや不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/3 断面：灰黄褐 10YR6/2	外面 回転ナデ 内面 摩滅、ヘラ切り未調整か 底部 ヘラ切り未調整
501	123	65	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯A	13.3	13.5	9.9	4.6	70	やや不良	密	外：にぶい黄橙 10YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断面：明黄褐 10YR6/6	外面 回転ナデ 内面 摩滅、ヘラ切り未調整か 底部 ヘラ切り未調整
502	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯A	12.4	13.2	9.8	4.2	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 口縁端部 面取り
503	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯A	13.8	14.0	10.4	4.0	50	やや不良	密	外：灰オリ―ブ 2.5Y6/2 内：灰白 5Y7/2 断面：灰 5Y6/1	内外面 摩滅、回転ナデか
504	123	65	5区	窯側中南東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯A	14.7	14.8	10.8	3.2	70	普通	密	外：黄灰 2.5Y6/1 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：灰 5Y5/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラケズリ
505	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯A	14.8	15.1	11.8	3.4	30	不良	密	外：灰黄 2.5Y7/2 内：灰黄 2.5Y6/2 断面：灰黄褐 10YR5/2	内外面 摩滅、回転ナデか
506	123	65	5区	窯側中南東 窯側北西	452平坦面 ＋450 溝	中～下層 ＋下層	須恵器	杯B	16.2	16.4	11.2	6.1	80	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
507	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯B	14.9	15.1	10.6	4.6	40	良好	密	外：灰 7.5Y5/1 内：灰 N6/ 断面：赤灰 2.5YR4/1	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 外面 自然釉付着、高台剥離痕あり 転用焼台か
508	123	65	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯B	21.7	22.0	13.7	8.6	70	やや良好	密	外：灰 N6/ 内：灰褐 7.5YR5/2 断面：にぶい褐 7.5YR5/4	内外面 回転ナデ、 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ ひずみ大
509	123	65	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯B	16.4	16.6	11.8	6.0	80	やや不良	密	外：灰白 5Y7/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰 5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
510	123	—	5区	窯側中北東	452平坦面	中～下層	須恵器	杯B	16.7	17.0	12.0	5.4	25	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：暗赤灰 10YR4/1	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 外面 自然釉付着、降灰あり 高台剥離痕あり、転用焼台か、ひずみ大
511	123	65	5区	窯側中南東	452平坦面	中～下層	須恵器	壺M	—	8.2	—	(8.5)	50	良好	密	外：灰白 N7/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 高台欠損、底部 糸切りのちナデか
512	123	—	5区	窯側中南東 ＋窯側北東	452平坦面 ＋451くぼみ	平坦面:中～下層	須恵器	盤	36.6	38.0	—	(8.5)	全体10 口径20	良好	密	外：灰 N5/ 内：オリ―ブ灰 2.5GY6/1 断面：褐灰 7.5YR6/1	口縁部・内面 回転ナデ 外面 ヘラケズリのちナデ
513	124	—	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	杯A	—	(12.3)	9.1	(2.1)	10	不良	密	外：にぶい黄 2.5Y6/3 内：灰黄 2.5Y6/2 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 摩滅・調整不明
514	124	—	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	杯A	—	(14.4)	10.1	(3.0)	5以下	不良	密	外：灰白 5Y7/2 内：灰白 5Y7/2 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 摩滅、回転ナデか
515	124	65	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	杯A	15.4	15.8	11.6	3.3	60	不良	密	外：灰オリ―ブ 5Y6/2 内：灰オリ―ブ 5Y6/2 断面：灰黄 2.5Y6/2	内外面摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切り未調整か
516	124	65	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	杯蓋Ⅱ	15.2	15.4	—	2.6	50	良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰白 7.5Y7/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、ひずみあり 口縁端外面 剥離痕あり (※正置で置かれて、上に杯Bが倒置で載せられていた可能性が高い)
517	124	65	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	杯蓋Ⅱ	16.7	16.9	—	1.7	50	良好	密	外：青灰 5PB5/1 内：灰 N6/ 断面：暗紫灰 5P4/1	内外面 回転ナデ、口縁部 自然釉付着、降灰あり、天井部 剥離痕あり、内面 砂付着 ひずみ大、転用焼台か (※正置で置かれて、上に壺などが置かれた可能性が高い)
518	124	—	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	杯蓋Ⅰ	15.6	16.0	—	(2.1)	5以下	やや不良	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰白 7.5Y7/1 断面：灰白 7.5Y7/1	内外面 回転ナデ
519	124	—	5区	窯側南西	453平坦面	中層礫混じり黄褐色	須恵器	杯蓋Ⅱ	18.8	19.0	—	(2.0)	20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：にぶい赤褐 2.5YR5/3	内外面 回転ナデ
520	124	—	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	杯蓋Ⅱ	20.2	20.4	—	(1.6)	40	不良	密	外：灰黄 2.5Y7/2 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 摩滅、回転ナデか
521	124	65	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	杯B	12.2	12.5	8.9	4.5	100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：—	内外面 回転ナデ ひずみ大、倒置で焼成か(底がつぶれているため)
522	124	65	5区	窯側南西	453平坦面	中層礫混じり黄褐色	須恵器	杯B	14.1	14.2	10.1	4.9	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：暗赤灰 2.5YR3/1	内外面 回転ナデ 外面 自然釉付着 底部 剥離痕あり、倒置で焼成か
523	124	—	5区	窯側南西	453平坦面		須恵器	杯B	14.7	15.0	11.9	4.9	30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
524	124	—	5区	窯側南西	453平坦面	中層礫混じり黄褐色	須恵器	杯B	—	(14.4)	11.7	(2.6)	10	良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 5Y6/1 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
525	124	—	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	壺L	—	11.6	—	(4.0)	10	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：紫灰 5RP5/1	内外面 回転ナデ
526	124	—	5区	窯側南西	453平坦面		須恵器	壺M	4.1	(4.6)	—	(3.5)	10	良好	密	外：青灰 5P6/1 内：紫灰 5RP6/1 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ、自然釉付着 ひずみ大
527	124	—	5区	窯側南西	453平坦面		須恵器	鉢F	22.4	22.7	—	(4.4)	5以下	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰赤 2.5YR5/2	内外面 回転ナデ
528	124	—	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	鉢 or 盤	—	(19.8)	11.2	(8.8)	5以下	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ
529	124	66	5区	灰原北西	454土抗上面 (463灰原)		須恵器	鉢D	20.5	20.6	—	(4.7)	5以下	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：紫灰 5RP5/1	内外面 回転ナデ

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
530	124	—	5区	灰原北西	454土坑上面(463灰原)		須恵器	盤	—	(19.6)	16.6	(2.8)	5以下	良好	密	外：黄灰 2.5Y6/1 内：紫灰 5P5/1 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 内面 自然釉付着
531	124	—	5区	灰原北西	454土坑上面(463灰原)		須恵器	壺M	3.7	3.8	—	(2.8)	5以下	良好	密	外：青灰 5PB6/1 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ (内面 ナデが強い)
532	124	66	5区	灰原北西	454土坑上面(463灰原)		須恵器	壺	—	(14.2)	6.5	(10.7)	20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：褐灰 5YR5/1	内外面 回転ナデ
533	124	—	5区	灰原北西	454土坑上面(463灰原)		須恵器	壺Nか	—	(14.2)	12.4	(4.6)	5以下	良好	密	外：灰 N4/ 内：紫灰 5P5/1 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、底部 未調整 内面 降灰
534	125	—	5区		454土坑		須恵器	杯A	14.0)	14.1	9.4	2.8	30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 ナデ 口縁端部 黒化
535	125	66	5区		454土坑		須恵器	杯A	17.0	17.2	13.6	2.3	全体30 口縁25	良好	密	外：灰 N4/ 内：暗灰 N3/ 断面：暗灰 N3/	内外面 回転ナデ 内面 降灰
536	125	—	5区		454土坑		須恵器	杯蓋 I	13.0	14.0	—	(2.8)	40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデか 内面 接合痕か
537	125	66	5区		454土坑		須恵器	杯蓋 II	14.4	14.6	—	1.7	80	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 口縁部外面 降灰、剥離痕あり、ひずみ大 正置か(天井部が凹んでいるため)
538	125	66	5区		454土坑		須恵器	杯蓋 II	16.4	16.6	—	2.5	35	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ
539	125	—	5区		454土坑		須恵器	杯B	14.2	14.5	11.2	5.1	全体30 口縁5 底部20	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ナデ
540	125	—	5区		454土坑		須恵器	杯B	16.6	16.8	11.2	5.0	口縁10 底部30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰白 5Y7/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整 内面焼成に焼きムラあり
541	125	66	5区		454土坑		須恵器	杯B	20.1	20.6	13.8	6.8	底部20	良好	密	外：灰 5Y6/1 内：灰 5Y6/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ ひずみ大
542	125	66	5区		454土坑		須恵器	皿C	17.2	18.0	15.2	2.1	30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ ひずみあり
543	125	—	5区		454土坑		須恵器	壺L	—	(12.3)	8.5	(4.9)	30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ
544	125	66	5区		454土坑		須恵器	壺M	4.6	7.2	—	(3.3 +4.1)	40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、頸部内面 絞り痕あり
545	125	—	5区		454土坑		須恵器	壺A蓋	15.0	15.7	—	(2.4)	口縁15	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、外面 降灰
546	125	66	5区		454土坑		須恵器	壺A or Q	—	(18.2)	15.4	(3.3)	20	やや良	密	外：灰黄 2.5Y6/2 内：灰 N5/ 灰 断面：灰 N5/ 灰	内外面 ヨコナデ
547	125	66	5区		454土坑		須恵器	鉢D	22.8	25.5	—	(5.0)	20	良好	密	外：黄灰 2.5Y5/1 内：黄灰 2.5Y4/1 断面：褐灰 10YR4/1	内面 回転ナデ 外面・口縁部内面 自然釉付着、降灰
548	125	—	5区		454土坑		須恵器	鉢F or E	21.8	22.5	—	(7.5)	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：黄灰 2.5Y5/1 断面：赤灰 5R5/1	内外面 回転ナデ 外面 降灰、転用焼台もしくはかませ片か
549	125	66	5区		454土坑		須恵器	鉢か	18.0	18.2	—	(6.0)	30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 類例少ない器形、類例として篠・意泉院裏山窯など(※ひずみゆがみによる器形の変化の可能性もあり)
550	125	—	5区		454土坑		須恵器	盤	—	—	—	8.3	口縁5	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：褐灰 7.5YR6/1	内外面 回転ナデ、外面下半 回転ヘラケズリ 内面 植物状の繊維・置台粘土が付着 ひずみあり
551	125	—	5区		454土坑		須恵器	盤	—	(23.6)	18.0	(3.9)	全体30 底部15	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	内面 回転ナデ、降灰あり 外面 回転ヘラケズリのちナデ、下半 回転ヘラケズリのみ
552	125	—	5区		454土坑		須恵器	円面硯	—	(19.2)	19.0	(2.2)	底部10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 方形スカシ
553	125	66	5区		454土坑 ＋462灰原		須恵器	円面硯	14.1 (外堤径)	20.9	20.4	10.3	70	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：褐灰 5YR5/1	灰原出土分と接合、内外面 回転ナデ 方形スカシ、スカシ下端部に断続的な沈線あり 硯面径10.2㎝
554	125	66	5区		454土坑 ＋462灰原		須恵器	円面硯	14.7 (外堤径)	22.4	22.3	10.6	80	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：にぶい赤褐 2.5YR4/3	灰原出土分と接合、内外面 回転ナデ 方形スカシ、スカシ下端部に断続的な沈線あり 硯面径10.2㎝
555	126	66	5区		455・456土坑上面 ＋(464灰原)		須恵器	鉢D	22.8	23.0	—	(7.0)	5以下	やや不良	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰 N6/	外面 摩滅、回転ナデか 内面 回転ナデ
556	126	66	5区		455・456土坑上面 ＋(464灰原)		須恵器	壺M	—	7.7	4.2	(6.4)	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 外面 自然釉付着
557	126	—	5区		455土坑		須恵器	杯蓋	16.9	17.0	—	(0.7)	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ
558	126	—	5区		455土坑		須恵器	杯蓋	23.1	23.2	—	(1.8)	5以下	普通	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：：灰 N6/	内外面 回転ナデ 内面 剥離痕あり
559	126	—	5区		455土坑		須恵器	杯A	—	(13.0)	9.9	(2.3)	30	不良	密	外：橙 7.5YR6/6 にぶい黄褐 10YR6/3 内：橙 7.5YR6/6 断面：橙 7.5YR6/6	内外面 摩滅、調整不明
560	126	—	5区		455土坑		須恵器	杯B	—	(9.9)	9.8	(2.1)	5以下	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ ひずみ大
561	126	—	5区		455土坑		須恵器	皿C	14.9	15.4	11.8	1.9	5以下	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ
562	126	—	5区		455土坑		須恵器	皿C	18.7	19.3	15.4	1.8	5以下	良好	密	外：灰 5Y6/1 内：灰 N6/ 断面：赤灰 5R6/1	内外面 回転ナデ ひずみあり
563	126	66	5区		456土坑		須恵器	杯蓋	14.4	14.6	—	(1.6)	50	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：赤灰 5R6/1	内外面 回転ナデ、外面 自然釉付着 口縁部内外面 剥離痕あり、正置で焼成か
564	126	66	5区		456土坑		須恵器	杯蓋	15.9	16.2	—	2.9	20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：青灰 5PB5/1	内外面 回転ナデ、外面 自然釉付着 口縁部外面 剥離痕あり、正置で焼成か
565	126	66	5区		456土坑		須恵器	杯B	14.6	14.8	10.3	5.4	30	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：紫灰 5P5/1	内外面 回転ナデ 外面 降灰あり、倒置で焼成か

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
566	126	66	5区		456土坑		須恵器	皿C	18.8	19.3	16.0	1.4	5以下	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰白 N7/ 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ ひずみ大
567	126	66	5区		456土坑		須恵器	壺M	—	8.5	4.4	(7.2)	40	良好	密	外：褐灰 7.5YR5/1 内：褐灰 7.5YR6/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 外面肩部・内面 自然釉付着、降灰あり 底部 糸切りのちナデ消しか 高台 剥離痕あり
568	127	67	5区	灰原南東	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯A	9.4	9.5	6.5	3.2	70	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：褐灰 5YR4/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
569	127	67	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯A	10.5	10.6	7.6	3.8	全体60 口縁40 底部85	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
570	127	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯A	12.4	12.7	8.8	3.9	全体40 口縁30 底部40	やや不良	密	外：灰黄 2.5Y6/2 内：灰黄 2.5Y6/2 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 底部に接合痕あり
571	127	—	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯A	12.8	12.9	8.6	3.9	全体30 口縁20 底部40	普通	密	外：灰 5Y6/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
572	127	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面～5cm	須恵器	杯A	12.8	12.9	9.3	3.6	全体40 口縁25 底部60	やや不良	密	外：灰 5Y6/1 内：にぶい黄橙 10YR6/3 断面：にぶい黄橙 10YR6/3	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整 底部に接合痕あり
573	127	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯A	14.0	14.1	11.7	3.4	50	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：褐灰 5YR5/1	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 外面～底部 自然釉付着 ひずみあり
574	127	67	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯A	13.6	14.0	8.8	3.3	全体50 口縁30 底部70	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 体部やや丸みを帯びる形態、器形的にやや新しい
575	127	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面～5cm	須恵器	杯A	14.6	14.8	10.4	3.6	50	普通	密	外：灰 5Y6/1 内：灰黄 2.5Y6/2 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 底部に接合痕あり
576	127	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面～5cm	須恵器	杯A	15.2	15.4	11.6	3.7	全体40 口縁35 底部40	やや不良	やや軟	外：灰黄 2.5Y7/2 内：灰黄 2.5Y6/2 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整 底部に接合痕あり
577	127	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯A	15.3	15.5	12.3	2.8	全体70 口縁35 底部100	普通	やや硬	外：灰白 2.5Y7/1 内：灰白 2.5Y7/1 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 器高が低く皿に近い形態
578	127	—	5区	灰原北西(アゼ部分)	462灰原		須恵器	杯A	15.3	15.5	12.0	4.1	全体40 口縁30 底部50	やや不良	やや軟	外：灰 5Y6/1 内：灰 5Y6/1 にぶい橙 5YR6/3 断面：灰 5Y6/1 にぶい橙 5YR6/3	内外面 回転ナデ、内面 摩滅 底部 ヘラ切り未調整
579	127	—	5区	灰原南東	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯A	15.4	15.6	11.6	3.4	70	不良	軟	外：灰黄 2.5Y7/2 橙 7.5YR6/6 内：灰黄 2.5Y7/2 橙 7.5YR6/6 断面：灰黄 2.5Y7/2 橙 7.5YR6/6	内外面 摩滅、回転ナデか 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
580	127	67	5区	窯下北東	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯A	15.6	15.8	12.1	3.5	全体60 口縁75 底部60	やや良	硬	外：灰 N6/ にぶい赤褐 5YR5/3 内：灰 N6/ にぶい赤褐 5YR5/3 断面：灰 N6/ にぶい赤褐 5YR5/3	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 器高が低く皿に近い形態
581	127	—	5区	灰原北西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯A	15.6	16.1	11.2	4.0	全体10 口縁15 底部10	やや良	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り、ひずみあり 口縁端部が四角に収められる
582	128	67	5区	灰原南東裾(旧11-1tr)	462灰原		須恵器	杯蓋 I	12.6	13.1	—	3.1	90	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラ切りのちナデ 口縁部外面 剥離痕あり、正置か
583	128	67	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯蓋 I	14.3	14.8	—	4.1	全体90 口縁90	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ
584	128	—	5区	灰原南東・南西裾	462灰原	下層黒褐色土	須恵器	杯蓋 I	14.8	15.3	—	4.3	50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ 内面 剥離痕あり、その外側に降灰あり 倒置で焼成か、ひずみあり
585	128	66	5区	灰原南西＋(灰原東)	462灰原＋(462灰原上面)	検出面より5～10cm＋(2層)	須恵器	杯蓋 I	15.2	15.8	—	3.9	全体85 口縁85	良好	密	外：灰 N5/ 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのち回転ナデ 内面 剥離痕あり、その外側に降灰あり 倒置で焼成か
586	128	66	5区	灰原南西(トレンチ部分)	462灰原	下層	須恵器	杯蓋 I	15.4	15.8	—	3.4	100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラケズリのち回転ナデ 口縁部内外面 剥離痕あり、その内面外側に降灰あり、外面黒化、倒置か
587	128	66	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯蓋 I	16.3	16.4	—	3.5	全体90 口縁75	やや不良	密	外：にぶい赤褐 5YR5/3 黄灰 2.5Y6/1 内：にぶい赤褐 5YR5/3 断面：にぶい赤褐 5YR5/3 黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのちナデ
588	128	67	5区	灰原北西(アゼ部分)	462灰原		須恵器	杯蓋 I	16.3	16.5	—	4.0	全体95 口縁80	やや不良	密	外：にぶい褐 7.5YR5/4 黄灰 2.5Y6/1 内：にぶい褐 7.5YR5/4 黄灰 2.5Y6/1 断面：にぶい褐 7.5YR5/4 黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのち回転ナデ
589	128	66	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯蓋 II	11.1	11.2	—	2.3	50	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのち回転ナデ
590	128	67	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯蓋 II	11.4	11.7	—	2.3	90	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのち回転ナデ
591	128	—	5区	(灰原西)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯蓋 II	11.9	12.1	—	1.8	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ
592	128	66	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯蓋 II	13.4	14.0	—	2.9	85	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ 口縁部内外面 剥離痕あり、その外側降灰・自然釉付着
593	128	—	5区	窯下灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯蓋 II	13.9	14.3	—	2.7	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ 口縁部外面 剥離痕あり 蛍光X線分析試料1
594	128	66	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯蓋 II	15.5	15.8	—	3.0	全体95 口縁85	良好	密	外：灰 N4/、灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N4/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ、全面に白色の付着物あり
595	128	67	5区	灰原南東裾(旧11-1tr)	462灰原		須恵器	杯蓋 II	16.3	16.4	—	2.0	90	やや良	密	外：灰 5Y5/1、灰白 5Y7/1 内：灰 5Y5/1、灰白 5Y7/1 断面：灰 5Y5/1 灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのちナデ

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
596	128	67	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯蓋Ⅱ	16.3	16.6	—	2.2	90	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのちナデ
597	128	66	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯蓋Ⅱ	16.7	16.8	—	2.4	90	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ
598	128	67	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯蓋Ⅱ	18.0	18.1	—	3.4	90	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N4/	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラ切りのちナデ 口縁部内外面 熔着物・剥離痕あり、その外側自然釉付着 ひずみあり
599	128	—	5区	(灰原西)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯蓋Ⅱ	19.9	20.1	—	2.6	50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ
600	128	66	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯蓋Ⅱ	20.6	20.8	—	2.8	70	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのち回転ナデ 外面 降灰
601	128	67	5区	灰原北西	462灰原		須恵器	杯蓋Ⅱ	21.1	21.4	—	3.6	全体80 口縁40	やや良	密	外：にぶい赤褐 2.5YR5/3 内：灰赤 2.5YR5/2 断面：灰 N6/	453・454土坑上面付近出土 内外面 回転ナデ 天井部 ヘラ切りのち回転ナデ
602	128	—	5区	灰原北東	462灰原	検出面～5cm	須恵器	杯蓋Ⅱ	22.6	23.0	—	3.5	45	良好	密	外：褐灰 5YR4/1 内：灰褐 5YR5/2 断面：灰褐 5YR5/2	内外面 回転ナデ 天井部 ヘラケズリのち回転ナデ
603	128	—	5区	灰原南東	462灰原	検出面～5cm	須恵器	杯B	9.8	10.0	7.0	4.1	全体80 底部100 口縁70	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ ひずみあり
604	128	68	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯B	10.7	10.8	7.7	3.8	全体60 口縁50 底部70	やや良	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
605	128	68	5区	灰原南東裾(旧11-1tr)	462灰原		須恵器	杯B	11.6	11.8	8.6	4.3	100	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ ひずみ大
606	128	—	5区	灰原南西裾	462灰原		須恵器	杯B	11.9	12.2	8.7	4.8	全体70 口縁50 底部100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：暗赤灰 10R4/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
607	128	68	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯B	12.2	12.4	9.3	4.3	80	やや不良	やや粗	外：灰 5Y6/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰白 5Y8/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのちナデ
608	128	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯B	12.8	13.0	9.3	4.4	底部85 口縁15	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整 外面～高台 降灰あり、高台 剥離痕あり 倒置で焼成か
609	128	68	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯B	13.5	13.7	9.0	5.0	50	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
610	128	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯B	13.6	13.8	9.6	4.8	55	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整 厚手で重厚な個体
611	128	68	5区	灰原南東裾(旧11-1tr)	462灰原	下層	須恵器	杯B	14.3	14.4	10.0	4.8	50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 剥離痕あり その外側から外面 降灰あり 口縁端部 剥離痕あり、倒置で焼成か
612	128	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯B	14.8	15.0	10.0	4.7	50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのちナデ
613	128	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯B	15.8	16.0	12.0	5.1	30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
614	128	68	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯B	17.6	17.8	11.8	5.6	全体45 口縁50 底部50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：10R5/2 灰赤	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 口縁端部 剥離痕あり 口縁部外面 わずかに降灰、正置で焼成か
615	128	68	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯B	18.1	18.2	11.7	7.2	全体40 口縁35 底部50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：赤灰 5R5/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 口縁端部 剥離痕あり、ひずみあり
616	128	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯B	18.2	18.3	12.6	7.0	全体40 口縁15 底部50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 底部～外面 降灰、高台 剥離痕あり 破断面被熱あり、転用焼台か
617	129	617	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯B	12.2	12.6	8.6	4.3	全体60 口縁25 底部100	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 底部・口縁端部 剥離痕あり 外面 降灰・自然釉付着 破断面被熱あり、転用焼台か 底部 爪形状圧痕あり
618	129	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	皿C	14.3	15.0	13.2	2.0	全体20 口縁25 底部30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 外面底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 口縁端部 自然釉付着 正置で皿Cの重ね焼きか
619	129	—	5区	窯下南西	462灰原	検出面～5cm	須恵器	皿C	17.6	18.1	15.9	2.4	全体60 口縁40 底部40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：暗赤灰 5R4/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
620	129	620	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	皿C	17.4	18.2	15.8	2.0	全体45 口縁50 底部50	やや良	硬	外：黄灰 2.5Y6/1 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
621	129	—	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	皿C	18.4	19.1	16.2	1.3	全体12 口縁10 底部15	やや良	密	外：灰 N5/、灰褐 5YR5/2 内：灰 N5/、灰褐 5YR5/2 断面：灰 N5/、灰褐 5YR4/2	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 内面 剥離痕あり、正置で皿Cの重ね焼きか
622	129	622	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	皿C	18.6	19.4	16.6	2.2	全体40 口縁40 底部45	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 底部外面に接合痕あり
623	129	—	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	皿C	18.8	19.6	17.1	2.0	全体25 口縁30 底部30	やや良	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面　回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
624	129	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面～5cm	須恵器	皿C	18.7	19,6	15.8	2.5	全体20 口縁20 底部20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 2.5YR5/4 にぶい赤褐 断面：灰 N5/ 2.5YR5/4 にぶい赤褐	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整
625	129	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	皿C	19.0	19.7	17.2	2.6	全体25 口縁～底部 40	やや良	硬	外：灰 5Y6/1、にぶい褐 7.5YR5/3 内：灰 5Y6/1 にぶい褐 7.5YR5/3 断面：にぶい褐 7.5YR5/3	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 底部外面に接合痕あり
626	129	67	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	皿C	19.2	19.9	17.0	2.1	全体40 口縁35 底部50	やや良	硬	外：灰 N5/ にぶい赤褐 5YR5/3 内：灰 N5/ にぶい赤褐 5YR5/3 断面：灰 N5/ にぶい赤褐 5YR5/3	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 底部外面に接合痕あり
627	129	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	皿C	19.1	20.0	17.7	2.4	全体40 口縁35 底部40	やや良	硬	外：黄灰 2.5Y6/1 にぶい橙 2.5YR6/4 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：灰 5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
628	129	—	5区	灰原南東裾	462灰原	東側黄褐色土	須恵器	皿A	14.0	14.1	11.5	2.0	全体30 口縁20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ 底部～外面 降灰あり、ひずみあり 端部が丸い形態の皿Aはこの1点のみ
629	129	67	5区	(灰原西)	(462灰原上面)	2層	須恵器	皿E	9.8	10.0	7.4	2.4	50	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面 :N3/1	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 外面・内面 降灰あり、正置で焼成か
630	129	—	5区	灰原北東	462灰原	検出面～10cm	須恵器	皿E	9.8	10.0	7.4	2.5	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデか 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
631	129	67	5区	灰原北西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	高杯	—	(6.5)	—	(12.4)	30	やや不良	密	外：灰 5Y5/1 内：灰 5Y6/1 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 摩滅、回転ナデか 外面 沈線(2条)
632	129	67	5区	灰原南西裾	462灰原		須恵器	高杯	—	(4.5)	—	(7.9)	20	不良	密	外：灰N 6/ 内：灰N 6/ 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 摩滅、調整不明 外面 沈線(2条)
633	130	70	5区	灰原南東裾 ・南西・北東	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	壺L (小サイズ)	5.9	11.4	—	(13.4)	全体40 口縁～ 頸部100 体部55	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰褐 5YR5/2	内外面 回転ナデ、 頸部内面 ナナメ方向のしわあり 回転絞り閉塞
634	130	69	5区	灰原南東裾 ・南西裾	462灰原		須恵器	壺L (小サイズ)	6.1	(10.8)	—	(10.3)	全体40 口縁100 頸部80 肩部45	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：赤灰 2.5YR4/1	内外面 回転ナデ、口縁部外面 降灰 頸部内面 回転絞り痕あり、回転絞り閉塞
635	130	68	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	壺L (小サイズ)	6.6	12.2	6.4	15.4	全体40 口縁30 体部40 底部50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、頸部内面 回転絞り痕あり 頸部二段接合 外面肩部まで降灰あり、底部 糸切り痕
636	130	69	5区	灰原南東 ・南東裾	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	壺L (小サイズ)	6.2	11.7	6.8	15.9	70	良好	密	外：灰 N5/、灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：褐灰 5YR4/1	内外面 回転ナデ 頸部二段接合
637	130	69	5区	灰原南東 ・南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	壺L (小サイズ)	7.3	11.9	6.7	17.3	全体60 口縁70 頸部100 胴部50 底部100	良好	密	外：灰 N4/ 内：黄灰 2.5Y6/ 断面：褐灰 5YR5/1	内外面 回転ナデ 底部～外面 自然釉付着、降灰あり 底部 天井片・置台片熔着あり 口縁部 ひずみあり 倒置で焼成か、頸部三段接合
638	130	—	5区	灰原南西裾 ＋(灰原西)	462灰原 ＋(灰原上面)	(2層)	須恵器	壺L (小サイズ)	5.9	13.6	—	(12.6)	30 口縁75	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 体部 ひずみ大、頸部三段接合
639	130	—	5区	灰原南西裾	462灰原		須恵器	壺L (小サイズ)	6.3	12.7	—	(9.3)	全体40 口縁～頸部100 肩部40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：暗赤灰 2.5YR3/1	内外面 回転ナデ 頸部内面 ナナメ方向しわ、回転絞り痕か 頸部三段接合 (但し頸部に斜め方向のしわあり)
640	130	68	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	壺L (中サイズ)	7.6	15.0	7.7	20.1	50	普通	密	外：オリ―ブ灰 2.5GY6/1 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 頸部二段接合 焼成が均質でない
641	130	69	5区	灰原南西 ・南西裾	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	壺L (中サイズ)	7.5	14.6	—	(17.3)	全体45 口縁～ 肩部100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰褐 5YR4/2	内外面 回転ナデ 頸部二段接合
642	130	—	5区	灰原南東裾 ・南西裾	462灰原	下層	須恵器	壺L (中サイズ)	8.0	14.4	—	(12.0 +5.3)	全体30 口縁～ 頸部100 体部20	良好	密	外：紫灰 5P5/1 内：暗紫灰 5P4/1 断面：紫灰 5P6/1	内外面 回転ナデ、外面 降灰 頸部三段接合　ひずみ大 蛍光X線分析試料4
643	130	69	5区	灰原南東裾 ・南西裾	462灰原		須恵器	壺L (中サイズ)	7.4	(14.4)	—	(11.2)	30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 6/ 断面：暗紫灰 5RP4/1	内外面 回転ナデ 外面 自然釉付着、降灰あり 頸部三段接合
644	130	—	5区	灰原南東裾 ＋(灰原東)	462灰原 ＋(462灰原上面)	(2層)	須恵器	壺L (中サイズ)	7.4	(14.7)	—	(11.7)	30	やや良	密	外：灰 N7/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 頸部三段接合
645	131	—	5区	灰原南東裾 ＋(灰原西)	462灰原 ＋(462灰原上面)	(2層)	須恵器	壺L (中サイズ)	—	15.0	8.2	(14.7)	全体40 体部50 底部90	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：灰 7.5Y5/1	内外面 回転ナデ 肩部外面 自然釉付着、降灰あり 頸部三段接合
646	131	—	5区	灰原南東 ・南西 ・南西裾	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	壺L (中サイズ)	—	15.2	8.6	(14.5)	全体40 体部40 底部100	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、外面下半 沈線あり 頸部三段接合
647	131	—	5区	灰原南東裾 ・斜面裾	462灰原		須恵器	壺L (中サイズ)	—	14.8	7.1	(11.7)	全体40 胴部35 底部100	良好	密	外：灰 5/ 内：灰 5/ 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、肩部外面 降灰あり ひずみ大、頸部三段接合
648	131	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	壺L (中サイズ)	—	13.8	7.2	(12.7)	40	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/ 灰赤 2.5YR4/2	内外面 回転ナデ、外面 降灰あり 底部 糸切り痕あり、ひずみ大
649	131	70	5区	灰原南東 ＋(灰原西)	462灰原 ＋(灰原上面)	(2層)	須恵器	壺L (大サイズ)	8.0	(18.6)	—	(14.5)	全体40 口縁～ 頸部90 肩～体部40	良好	密	外：黄灰 2.5Y5/1 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 口縁部～肩部外面 自然釉付着、降灰あり 頸部三段接合
650	131	—	5区	灰原南東 ・北西 ＋(灰原東)	462灰原 ＋(灰原上面)	検出面より5～10cm ＋(2層)	須恵器	壺L (大サイズ)	—	18.2	8.3	(17.5)	全体40 底部50 胴部40	良好	密	外：灰 N4/、灰白 N7/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 頸部接合方法不明(三段or二段)
651	131	—	5区	灰原南東裾 ・斜面裾	462灰原	下層ほか	須恵器	壺L (大サイズ)	—	19.8	(11.2)	(17.7)	全体20 底部20	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N6/ 断面：暗赤褐 10R3/2	内外面 回転ナデ 外面下半 ヘラケズリのち回転ナデ 外面 降灰あり
652	131	—	5区	灰原南西裾	462灰原		須恵器	壺 (平底)	—	(10.1)	5.7	(3.6)	全体10 底部100	やや良	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ、外面下半 回転ヘラケズリ 底部 やや摩滅、糸切り痕か
653	131	—	5区	灰原北東 ・南東	462灰原	検出面～5cm ＋検出面より5～10cm	須恵器	壺 (平底)	—	(9.7)	7.1	(2.5)	全体10 底部100	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	外面 タテナデか、内面ナデ 底部 剥離痕あり、内外面・破面 降灰あり かませ片か
654	131	—	5区	灰原斜面裾	462灰原		須恵器	壺 (平底)	—	(16.8)	10.0	(8.1)	底部50	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、外面下半 回転ヘラケズリ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ
655	132	70	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	壺M	3.1	7.9	3.8	10.9	80	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：明紫灰 5RP7/1	内外面 回転ナデ 底部 糸切り痕わずかにあり 側面・底部が部分的に降灰、横置きか ひずみあり、口縁部形態:陶邑タイプ
656	132	70	5区	灰原南東	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	壺M	3.0	(7.6)	—	(6.0)	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：赤灰 5R5/1	内外面 回転ナデ、外面 降灰・熔着あり 頸部内面 絞り痕あり 口縁部形態:陶邑タイプ
657	132	70	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	壺M	3.9	8.0	4.8	10.5	90	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：赤灰 7.5R5/1	内外面 回転ナデ 側面・底部が部分的に降灰、横置きか
658	132	70	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	壺M	2.5	7.4	3.9	10.5	100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 糸切り痕わずかにあり 底部～外面 降灰あり、口縁部ひずみ大
659	132	70	5区	灰原南東	462灰原	検出面～5cm ＋検出面より5～10cm	須恵器	壺M	4.4	7.6	3.8	10.9	95	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 頸部内面 絞り痕あり、ひずみ大

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
660	132	70	5区	灰原北東・南西	462灰原	検出面より5～10㎝＋地山直上	須恵器	壺M	3.6	7.7	3.8	11.9	ほぼ100	良好	密	外：紫灰 5RP6/1 内：紫灰 5P6/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 側面・底部が部分的に降灰、横置きか ひずみ大
661	132	70	5区	灰原南東・南東裾	462灰原	検出面より5～10㎝	須恵器	壺M	4.1	7.6	—	(8.3)	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 蛍光X線分析試料5
662	132	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	壺M	—	7.5	4.6	(7.1)	全体60 胴部60	良好	密	外：紫灰 5P5/1 内：灰 N6/ 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 回転ナデ、底部 糸切り痕あり 外面および破片の一部に内面にも降灰あり 破片の一部が焼台転用か
663	132	—	5区	灰原南西裾	462灰原		須恵器	壺M	—	8.1	4.1	(7.6)	全体40 胴部40 底部100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ
664	132	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	壺M	—	7.6	4.3	(7.9)	全体40 胴部40 底部100	良好	密	外：紫灰 5P5/1 内：紫灰 5P6/1 断面：暗赤灰 5R4/1	内外面 回転ナデ、外面～底部 降灰 内面底部も部分的に降灰
665	132	70	5区	灰原南東	462灰原	地山直上	須恵器	壺M	4.3	8.3	4.8	10.2	ほぼ100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部 糸切り痕あり
666	132	70	5区	灰原南東	462灰原	検出面より5～10㎝＋地山直上	須恵器	壺M	4.5	7.8	4.4	10.6	85	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、外面 降灰 無高台、底部 糸切り痕あり ひずみ大
667	132	70	5区	灰原南東	462灰原	地山直上	須恵器	壺M	4.4	7.6	4.1	11.1	100	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面回転ナデ 無高台、底部 糸切り痕あり
668	132	—	5区	灰原南東	462灰原	検出面～5㎝	須恵器	壺M	—	7.5	4.3	(7.6)	全体40 底部～胴部55	良好	密	外：褐灰 10YR4/1 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	内外面 回転ナデ、外面 降灰・自然釉付着 無高台、底部 糸切り痕あり、ひずみ大
669	132	—	5区	灰原南東	462灰原	検出面より5～10㎝	須恵器	壺M	—	6.8	3.5	(6.8)	全体40 底部～胴部50	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	内外面 回転ナデ 無高台、底部 糸切り痕あり
670	133	71	5区	灰原南西・南東裾＋(灰原西)	462灰原＋(灰原上面)	検出面より5～10㎝＋(2層)	須恵器	壺Nか	9.4	(18.8)	—	(14.1)	全体40 口縁70 肩～体部40	良好	密	外：灰 N4/、灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 内外面 降灰あり、破片の一部は焼台転用か ひずみ大
671	133	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	壺Nか	—	23.0	12.4	(27.6)	20	良好	密	外：灰 N4/ 内：紫灰 5RP5/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、肩部 沈線(1条)あり 把手の有無は不明、接合痕あり 外面 自然釉付着・降灰あり、熔着あり 破面に被熱を受けた個体あり 破片の一部が焼台転用
672	133	71	5区	灰原南東・南東裾・南西裾・灰原斜面裾	462灰原		須恵器	壺N	—	21.8	—	(15.9)	肩部40	良好	密	外：暗灰 N3/ 内：灰 N6/ 断面：灰白 N7/ 褐灰 5YR4/1	内外面 回転ナデ 肩部～体部外面 降灰あり
673	133	71	5区	灰原南東裾＋(灰原東)	462灰原＋(灰原上面)	下層＋(2層)	須恵器	壺N	—	21.5	12.8	(29.2)	40	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：暗赤灰 10R4/1	内外面 回転ナデ 外面下半 回転ヘラケズリのちナデ 肩部外面 自然釉付着
674	133	71	5区	灰原南西・南東裾＋(灰原東)	462灰原＋(灰原上面)	検出面より5～10㎝＋(2層)	須恵器	(壺)	10.0	(16.8)	—	(6.4)	全体30 口縁75 頸部50	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：褐灰 5YR4/1、灰 N6/	内外面 回転ナデ、外面 降灰 頸部三段接合 破面被熱あり、焼台転用
675	133	—	5区	窯体検出面直上	(462灰原上面)		須恵器	(壺)	—	(21.9)	—	(9.4)	30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 6/ 断面：暗赤灰 10R4/1	内外面 回転ナデ 底部・高台に小円孔あり(外から中へ穿孔)
676	134	71	5区	灰原北西・南西	462灰原	検出面より5～10㎝	須恵器	壺蓋	5.3	5.8	—	1.5	50	やや不良	密	外：灰白 5Y7/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰白 7.5Y7/1	内面・口縁部 回転ナデ 外面 摩滅
677	134	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	壺A蓋	7.9	8.5	—	2.9	口縁30	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内面・口縁部 回転ナデ 天井部 自然釉付着・降灰あり
678	134	71	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	壺蓋	9.9	10.5	—	2.7	60	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 5Y6/1	内面・口縁部 回転ナデ 天井部 回転ヘラケズリ、降灰
679	134	71	5区	灰原南西	462灰原	検出面より5～10㎝	須恵器	壺蓋	10.6	11.2	—	3.0	100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内面 回転ナデ 天井部 回転ヘラケズリ
680	134	—	5区	灰原南西	462灰原	検出面～5㎝	須恵器	壺蓋	13.6	14.3	—	3.2	85	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰白 5Y7/1	内面・口縁部 回転ナデ 天井部 回転ヘラケズリ、降灰あり 口縁端部に段あり、ひずみ大
681	134	71	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	壺蓋	13.8	14.4	—	4.8	全体60 口縁50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内面・口縁部 回転ナデ 天井部 降灰、ひずみあり
682	134	71	5区	灰原南東	462灰原	検出面より5～10㎝	須恵器	壺蓋	13.5	14.9	—	5.8	100	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内面・口縁部 回転ナデ、天井部 降灰 宝珠形のつまみ 内面 剥離痕あり、その外側が降灰 焼台転用
683	134	71	5区	(灰原西)	(462灰原上面)	2層	須恵器	壺A	12.4	26.8	—	(9.8)	全体20 口縁40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：暗紫灰 5RP4/1	内面 回転ナデ、外面 降灰著しい・熔着あり 断面にあり、焼台転用 肩部に焼成時の蓋痕跡・剥離痕あり
684	134	—	5区	(灰原西)	(462灰原上面)	2層	須恵器	壺A	13.2	26.9	—	(10.7)	全体20 口縁20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内面 回転ナデ、外面 自然釉付着・降灰あり 肩部に焼成時の蓋痕跡・剥離痕あり
685	134	72	5区	灰原南東裾＋(灰原東)	462灰原＋(灰原上面)	(2層)	須恵器	壺A	8.5	14.6	—	(7.7)	全体30 口縁85	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ、外面 降灰あり 肩部に焼成時の剥離痕あり
686	134	—	5区	灰原南西＋(灰原東)	462灰原＋(灰原上面)	検出面より5～10㎝＋(2層)ほか	須恵器	壺E	11.2	12.6	6.6	(4.2 +2.6)	全体25 口縁～肩部25 底部30	良好	密	外：灰 N5/・灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ
687	134	—	5区	灰原南西裾	462灰原		須恵器	(小型壺)	10.2	13.4	—	(4.9)	口縁20	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、外面 降灰あり
688	134	72	5区	灰原北東・南西・南東裾・南西裾＋(灰原東)	462灰原＋(灰原上面)	検出面より5～10㎝＋(2層)	須恵器	壺H	16.2	16.8	—	(8.7)	全体35 口縁40 ＋10 胴部40	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N6/ 断面：明紫灰 5P7/1	内外面 回転ナデ、口縁部 降灰 頸部内面の中ほどに植物繊維状の付着痕跡あり 内面の焼き締りが悪い
689	134	71	5区	灰原南西・南東裾・南西裾・斜面裾＋(灰原東)	462灰原＋(灰原上面)	検出面より5～10㎝＋(2層)	須恵器	壺H	18.0	18.5	—	(8.8)	40	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N6/、灰白 N7/ 断面：赤灰 2.5YR4/1	内外面 回転ナデ、口縁部～外面肩部まで自然釉付着・降灰あり 頸部内面の中ほどに植物繊維状の付着痕跡あり 内面の焼き締りが悪い
690	134	71	5区	灰原南西裾	462灰原		須恵器	壺H	24.4	25.0	—	(9.7)	全体10 口縁25 頸部20	やや良	密	外：灰 N5/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 頸部内面の中ほどに植物繊維状の付着痕跡あり 内面の焼き締りが悪い
691	134	—	5区	灰原南東・南西＋(灰原東)	462灰原＋(灰原上面)	検出面～5㎝ 検出面より5～10㎝＋(2層)	須恵器	壺Qか	—	17.0	—	(4.0 +7.9)	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
692	134	—	5区	灰原南東裾+(灰原東)	462灰原+(灰原上面)	+(2層)	須恵器	壺Qか	—	19.2	9.6	(8.8)	10	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/ 暗赤灰 10R4/1	内外面 回転ナデ 外面下半 回転ヘラケズリのち回転ナデ 内面の焼き締りが悪い
693	135	72	5区	灰原南東 ・南東裾 ・斜面裾 +(灰原東)	462灰原+(灰原上面)	検出面～5cm 検出面より5～10cm +(2層)	須恵器	平瓶	8.2	23.0	15.0	14.7	75	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N6/	内面・口縁部 回転ナデ 体部外面 回転ヘラケズリ 天井部 降灰、把手 ケズリ成形 円盤充填、穿孔ののち頸部接合
694	135	72	5区	灰原北東 ・南東 ・南西 ・南東裾 +(灰原西)	462灰原+(灰原上面)	検出面～5cm 検出面より5～10cm +(2層)	須恵器	平瓶	10.0	26.5	17.0	20.4	全体60 天井部70	良好	密	外：灰 N6/、灰 N5/ 内：灰 N6/、灰 N5/ 断面：灰 N5/	内面・口縁部 回転ナデ 体部外面 回転ヘラケズリ 天井部 降灰 円盤充填、穿孔ののち頸部接合
695	135	72	5区	灰原北西 ・南西 ・南東裾 ・南西裾 +(灰原東・西)	462灰原+(灰原上面)	検出面～5cm 検出面より5～10cm +(2層)	須恵器	平瓶	—	27.8	15.8	(16.5)	40	良好	密	外：灰白 N7/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/ 赤灰 2.5YR4/1	内面・口縁部 回転ナデ 体部外面 回転ヘラケズリ 天井部 降灰、把手 ケズリ成形 体部接合痕あり 円盤充填、穿孔ののち頸部接合
696	135	72	5区	灰原北東 ・北東 ・南東 +(灰原東・西)	462灰原+(灰原上面)	検出面～5cm 地山直上 +(2層)	須恵器	平瓶	8.3	24.0	14.4	15.5	70	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内面・口縁部 回転ナデ 体部外面 回転ヘラケズリのちミガキ 天井部 降灰、把手 ケズリ成形 円盤充填、穿孔ののち頸部接合
697	135	—	5区	灰原北西 ・南東 ・南西 ・南西裾 +(灰原東)	462灰原+(灰原上面)	検出面～5cm 検出面より5～10cm +(2層)	須恵器	平瓶	—	(27.3)	16.7	(13.8)	70	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内面 回転ナデ、体部外面 回転ヘラケズリ 天井部 降灰、把手 ケズリ成形 円盤充填、肩部 空気抜き小孔あり
698	135	72	5区	灰原南東 ・南西 +(灰原西)	462灰原+(灰原上面)	検出面より5～10cm +(2層)	須恵器	平瓶	—	(27.8)	—	(6.1)	頂部40	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	内面 回転ナデ、天井部 降灰 把手 ケズリ成形、 回転絞り切り成形
699	136	73	5区	灰原南東裾 +(灰原東)	462灰原+(灰原上面)	+(2層)	須恵器	鉢D	16.6	17.2	—	(10.2)	全体30 口縁45	良好	密	外：青灰 5PB6/1 内：灰 N5/ 断面：赤灰 2.5YR5/1	内外面 回転ナデ ひずみ大
700	136	73	5区	灰原南西	462灰原	下層	須恵器	鉢D	17.9	20.6	—	(8.0)	全体15 口縁15 肩部30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰赤 10R5/2	内外面 回転ナデ
701	136	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	鉢D	18.7	20.6	—	(7.9)	20	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ
702	136	73	5区	(灰原東・西)	(462灰原上面)	2層	須恵器	鉢D	(25.8)	(28.6)	—	(8.8)	全体20 口縁20 頸部25	良好	密	外：灰 5Y4/1 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰 5Y4/1	内外面 回転ナデ
703	136	73	5区	灰原南西	462灰原	検出面～5cm 検出面より5～10cm	須恵器	鉢D	(23.8)	(29.0)	—	(7.4)	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：黄灰 2.5Y6/1 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ
704	136	73	5区	灰原南西 +(灰原東・西)	462灰原+(灰原上面)	検出面～5cm +(2層)	須恵器	鉢F	12.4	13.2	—	(11.2)	80	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 回転ナデ 体部外面下半 回転ナデのちタテヘラケズリ、接合痕あり
705	136	—	5区	灰原南西 ・南西裾	462灰原	検出面～5cm 検出面より5～10cm	須恵器	鉢F	18.4	18.8	—	(11.4)	20	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ
706	136	73	5区	灰原南東裾 ・南西裾	462灰原		須恵器	鉢F	19.3	19.8	9.7	14.9	75	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/、赤灰 5R6/1	内外面 回転ナデ、底部 ナデ調整 底部～外面 降灰あり、倒置で焼成か 破面 降灰あり、焼台転用、ひずみあり 接合痕あり
707	136	73	5区	灰原北東 (アゼ部分)	462灰原		須恵器	鉢F	—	(15.3)	10.6	(7.6)	30	良好	密	外：灰 N6/、灰 N4/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 底部底面・外面 多数の穿孔あり
708	136	73	5区	灰原南東 ・南西 +(灰原東・西)	462灰原+(灰原上面)	検出面～5cm 検出面より5～10cm +(2層)	須恵器	盤	29.4	31.0	18.0	10.1	全体60 口縁60	良好	密	外：灰 N5/、灰 5Y6/1 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	内面・外面上半 回転ナデ 外面下半・底部 回転ヘラケズリ ひずみ大
709	136	73	5区	灰原北東 ・北西 ・南西 +(灰原東・西)	462灰原+(灰原上面) +表土	検出面より5～10cm 地山直上 +(2層) +表土	須恵器	盤	32.6	34.0	15.8	11.8	20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N4/	外面上半 回転ナデ 外面下半 回転ヘラケズリ 内面 窯壁or置台の粘土付着、ナデつけ痕跡あり 底部 砂付着、焼台転用、倒置か 外表に付着物あり(灰黄～にぶい黄2.5Y6/2～4)
710	136	73	5区	灰原南西裾 ・斜面裾	462灰原	下層	須恵器	盤	37.3	38.6	18.0	10.7	10	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/・灰 N4/ 断面：灰 N4/	内面・外面上半 回転ナデ 外面下半・底部 回転ヘラケズリ
711	136	73	5区	灰原北東 ・北西 ・南東 ・南西 +(灰原西)	462灰原+(灰原上面)	検出面～5cm 検出面より5～10cm +(2層)	須恵器	盤	40.0	42.0	21.0	13.9	50	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	内面・外面上半 回転ナデ 外面下半・底部 回転ヘラケズリ
712	136	—	5区	灰原南東	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	盤か	—	—	—	(5.6)	口縁10	良好	密	外：褐灰 10YR4/1 内：褐灰 10YR4/1 灰黄 2.5Y6/2 断面：灰 5Y6/1	内外面 回転ナデ、外面 回転ヘラケズリ 接合痕あり 口縁形態が異なるが盤の可能性が高い
713	137	74	5区		462灰原+(灰原上面) +表土		須恵器	甕(丸底)	34.1	—	—	(20.0+15.2)	口縁20 底部10	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰赤 2.5Y4/2	口縁部 回転ナデ、体部外面 格子タタキ 体部内面 同心円状の当て具痕 底部 接合痕あり、ユビオサエ 口縁部 降灰あり、体部器厚0.7～1.2cm
714	137	74	5区		462灰原+(灰原上面) +454土坑		須恵器	甕(丸底)	32.4	(54.3)	—	(18.3+10.5)	25	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：にぶい赤褐 7.5R4/3 暗褐 7.5YR3/4	口縁部 回転ナデ、体部外面 平行タタキ 体部内面 円形の当て具痕、接合痕あり 降灰あり、一部の破片は焼台転用 体部器厚1.5～2.2cm
715	137	74	5区		462灰原+(灰原上面)		須恵器	甕(丸底か)	32.0	44.0	—	(34.0)	30	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/、褐灰 5YR4/1 断面：灰 N6/、褐灰 5YR4/1	口縁部 回転ナデ、体部外面 平行タタキ 体部内面 円形の当て具痕、接合痕あり 体部器厚1.3～1.7cm
716	138	74	5区		462灰原+(灰原上面)		須恵器	甕	39.0	47.6	(22.5)	(21.7)	25	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N6/ 断面：灰赤 10R4/2	口縁部 回転ナデ、体部外面 平行タタキ 体部内面 円形の当て具痕、接合痕あり ひずみ大 体部器厚1.1～1.4cm
717	138	74	5区		462灰原+(灰原上面)		須恵器	甕(平底)	(24.5)	(36.4)	—	(9.9+14.8)	口縁～体部30 口縁25	良好	密	外：灰 N4/、灰 N5/ 内：灰 N4/、灰 N5/ 断面：褐灰 5YR5/1、灰赤 10R4/2	口縁部 回転ナデ、体部外面 平行タタキ 体部内面 円形の当て具痕、接合痕あり ひずみ大、変形著しい 体部器厚0.7～1.7cm
718	138	74	5区		462灰原+(灰原上面) +454土坑		須恵器	甕(短頸・平底)	40.0	(48.4)	15.8	(21.8+25.5)	30	良好	密	外：灰白 N7/、灰 N6/ 内：灰 N5/、灰 N4/ 断面：灰 N5/、灰 N4/	口縁部 回転ナデ、体部外面 平行タタキ 体部内面 円形の当て具痕、接合痕あり ひずみ大、体部器厚1.0～1.6cm
719	139	74	5区		462灰原+(灰原上面)		須恵器	甕(土師器系)	18.6	19.5	—	(10.0)	全体10 口縁20	良好	密	外：黄灰 2.5Y5/1 内：灰 7.5Y4/1 断面：灰 5Y6/1	口縁部 ヨコナデ(内面 ハケのちヨコナデ) 体部外面 タテ・ナナメハケ、体部内面 ヨコ・ナナメハケ 破面に被熱を受けた個体あり、焼台転用

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
720	139	75	5区		462灰原＋(灰原上面)		須恵器	甕(土師器系)	23.0	25.6	—	(12.3)	30	良好	密	外：黄灰 2.5Y6/1 内：灰黄 2.5Y6/2 断面：黄灰 2.5 Y 5/1	口縁部 ヨコナデ(内面 ハケのちヨコナデ) 体部内面 ユビオサエ 体部外面上半 タテハケ 体部外面下半 ヨコ・ナナメハケ 底部内面 同心円状の当て具痕、ひずみあり
721	139	75	5区		462灰原＋(灰原上面)		須恵器	甕(土師器系)	25.8	26.0	—	(24.1+3.0)	50	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	口縁部 ヨコナデ(内面 ハケのちヨコナデ) 体部内面 ユビオサエ 体部外面上半 タテハケ 体部外面下半 ヨコ・ナナメハケ 底部内面 同心円状の当て具痕、ひずみあり 蛍光X線分析試料7
722	139	74	5区	灰原南西・南東裾・南西裾＋(灰原東)	462灰原＋(灰原上面)	検出面～5cm＋(2層)	須恵器	不明(底部か)	—	(33.6)	31.5	(4.7)	底部20	良好	密	外：灰 5Y5/1 内：灰 5Y5/1 断面：灰 5Y5/1	内外面 回転ナデ 降灰あり、焼台転用
723	139	74	5区	窯下南西	462灰原	検出面～5cm	須恵器	不明(底部か)	—	(27.7)	27.4	(2.2)	底部25	良好	密	外：灰 N5/、灰 5Y6/1 内： 断面：灰 N6/	別づくりの底部、底面・側面 回転ナデ成形 上面は剥離、剥離面に降灰、焼台転用 大型の鉢・甕の底部か
724	140	75	5区	灰原南西・南東裾	462灰原	検出面～5cm 検出面より5～10cm	須恵器	鉢A	21.6	23.9	—	13.7	40	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内面 回転ナデ、外面 回転ナデのちミガキ 外面下半 ヘラ描き暗文
725	140	75	5区	灰原南東・南西・南東裾・南西裾	462灰原	検出面より5～10cm 地山直上	須恵器	鉢A	20.7	23.4	—	(7.6+5.5)	全体60 口縁45＋20 底部70	やや不良	密	外：灰 N7/ 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：灰 N7/、にぶい橙 7.5YR7/4	内面 回転ナデ 外面 回転ナデのちミガキ
726	140	—	5区	灰原南東裾・斜面裾	462灰原		須恵器	鉢A	25.0	27.6	—	(4.6)	全体5 口縁12	やや良	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内面 回転ナデ 外面 回転ナデのちミガキ
727	140	75	5区	灰原南東・南西・南東裾	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	鉢A	21.9	24.0	—	(9.4)	全体30 口縁30＋10	良好	密	外：オリ―ブ灰 2.5GY5/1 内：オリ―ブ灰 2.5GY6/1 断面：オリ―ブ灰 2.5GY5/1	内面 回転ナデ 外面 回転ナデのちミガキ
728	140	—	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	鉢A	—	(17.0)	—	(5.2)	5以下	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内面 回転ナデ 外面 回転ナデのちミガキ
729	140	—	5区	灰原南東	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	花瓶か(胴部)	—	(22.2)	—	(7.4)	20	良好	密	外：灰N 6/ 内：灰N 6/ 断面：灰N 6/	外面 回転ヘラケズリ、内面 回転ナデ 接合痕あり、底部接合面剥離 内外面・破面に降灰ある個体あり 焼台転用
730	140	—	5区	灰原南東裾・南西裾・斜面裾＋(灰原西)	462灰原＋(灰原上面)	＋(2層)	須恵器	花瓶か(脚部)	—	(24.6)	22.2	(6.4)	30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 接合面剥離
731	140	75	5区	灰原南西・南東裾・斜面裾	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	花瓶か(脚部)	—	(24.8)	23.6	(7.3)	脚台部 45＋10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：にぶい褐 7.5YR5/4	内外面 回転ナデ 接合面剥離 内外面・破面に降灰ある個体あり 焼台転用
732	141	75	5区		462灰原＋(灰原上面)		須恵器	円面硯	14.4(外堤径)	20.8	20.6	8.3	全体85 底部75	良好	密	外：暗灰 N3/ 内：暗灰 N3/ 断面：灰赤 2.5YR4/2	内外面 回転ナデ、自然釉付着・降灰あり 破面に被熱を受けた個体あり 破片の一部が焼台転用 方形スカシ、ひずみあり、硯面径10.5cm
733	141	75	5区		462灰原＋(灰原上面)		須恵器	円面硯	14.6(外堤径)	21.9	21.8	7.4	30	良好	密	外：灰 N4/ 内：暗灰 N3/ 断面：灰褐 5YR4/2	内外面 回転ナデ、自然釉付着・降灰あり 破面に被熱を受けた個体あり、破片の一部が焼台転用 硯面と海の段が明瞭でない、方形スカシひずみあり、硯面径10.6cm
734	141	75	5区		461灰原		須恵器	円面硯	18.1(外堤径)	24.0	23.8	12.8	50	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N4/ 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、自然釉付着・降灰あり 方形スカシ、スカシ下端部に沈線あり割り付け線か 硯面径11.7cm
735	141	76	5区		462灰原		須恵器	円面硯	16.4(外堤径)	25.0	24.9	12.5	全体40 硯面付近50 底部20	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、自然釉付着・降灰あり 破面に被熱を受けた個体あり、破片の一部が焼台転用 方形スカシ、スカシ下端部に沈線あり、割り付け線か 硯面径9.8cm
736	141	76	5区		462灰原		須恵器	円面硯	16.8(外堤径)	23.7	23.5	10.5	全体80 底部約90 硯面10 脚部70	良好	密	外：灰 N4/ 内：暗灰 N3/ 断面：灰赤 2.5Y4/2	内外面 回転ナ、自然釉付着・熔着あり 破面に被熱を受けた個体、自然釉付着個体あり 破片の一部が焼台転用 円形スカシ、外面下部に断続的な沈線あり ひずみ大、硯面11.3cm
737	141	75	5区		462灰原		須恵器	円面硯	17.2(外堤径)	28.0	27.8	9.9	全体25 突帯部30 底部20	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：赤褐 10R4/3	内外面 回転ナデ 円形スカシ
738	141	76	5区	灰原南東裾・南西裾	462灰原		須恵器	風字硯	—	—	—	—	60	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：灰 N4/	硯面・内面 平滑に仕上げられている 底面・外面・脚部 ヘラケズリ
739	142	76	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯B	—	(174)	13.8	(4.2)	15	良好	密	外：褐灰 10YR4/1 内：灰褐 7.5YR5/2 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 「刀」刻印:内面の見込み部分
740	142	76	5区	灰原北西	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯B	—	—	—	(0.8)	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ 「刀」刻印:内面の見込み部分
741	142	76	5区	灰原南西(トレンチ内)	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	皿	20.6	21.0	18.2	2.0	20	やや良	密	外：灰 5Y6/1 内：灰オリ―ブ 5Y6/2 断面：黄灰 2.5Y5/1	内外面 回転ナデ 底部　ヘラ切りのち不定方向ナデ 「刀」刻印:内面の見込み部分
742	142	76	5区	灰原南東・南西・南西裾	462灰原	検出面～5cm 検出面より5～10cm	須恵器	壺A	16.4	21.2	10.4	15.8	70	良好	密	外：灰 N6/・灰 N5/ 内：オリ―ブ灰 2.5GY6/1 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ 「刀」刻書:体部外面下半部分
743	142	76	5区	灰原南東	462灰原		須恵器	壺か	—	—	—	(6.3)	5以下	良好	密	外：灰白 2.5Y7/1 内：灰 N6/ 断面：灰白 N 7/	内外面 回転ナデ 「刀」刻書:体部外面
744	142	76	5区	灰原南西	462灰原	検出面～5cm	須恵器	壺 or 鉢	—	(21.2)	—	(9.8)	10	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 7.5Y6/1 断面：灰 N 6/	内外面 回転ナデ 「刀」刻書:体部外面
745	142	76	5区	灰原南西	462灰原	検出面～5cm	須恵器	壺か	—	25.5	—	(10.9)	20	良好	密	外：灰 5Y5/1 内：灰 5Y5/1 断面：灰 5Y5/1	内外面 回転ナデ 「刀」刻書:体部外面
746	143	77	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯B・杯蓋(熔着)	(―)14.6	14.0 14.8	9.0(―)	5.0 2.7	50	良好	密	外：灰 N5/ (杯 B)　紫灰 5RP5/1 (杯蓋) 断面：杯蓋 灰 N6/	杯蓋2個体と杯B2個体分の重ね焼きが推測される資料 北野分類Ⅱ‐b類(北野1988)
747	143	77	5区	灰原南西裾	462灰原		須恵器	杯B・杯蓋(熔着)	(―)18.2	16.8 18.4	11.3(―)	5.5 1.5	50	良好	密	外：灰 N5/ (杯 B・杯蓋) 内：灰 N5/ (杯 B・杯蓋) 断面：灰 N6/ (杯蓋)	杯蓋2個体と杯B2個体分の重ね焼きが推測される資料 底部に置台付着 北野分類Ⅱ‐b類(北野1988)
748	143	77	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯蓋(熔着)	15.0	15.2	—	1.8	30	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	杯蓋2個体分の重ね焼き試料 天井部の屈曲部分にそれぞれ杯身の熔着痕跡あり 北野分類Ⅱ‐b類(北野1988)

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
749	143	77	5区	灰原南東	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	杯蓋(熔着)	21.0	21.1	—	3.6	30	良好	密	外：灰 N4 内：灰 N4 断面：灰 N6/	杯蓋2個体分の重ね焼き試料 天井部の屈曲部分にそれぞれ杯身の熔着痕跡あり 北野分類Ⅱ－b類(北野1988)
750	143	77	5区	灰原南西裾	462灰原		須恵器	杯A(熔着)	10.1	10.2	7.2	4.0	40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：紫灰 5RP5/1	杯A４個体重ね焼き 内面に熔着痕跡があり (※５個体以上が積み重ねられていたと考えられる) 北野分類Ⅲ類(北野1988)
751	143	77	5区	灰原南東	462灰原	検出面～5cm	須恵器	杯A(熔着)	(10.3)	(10.5)	7.4	(3.8)	40	良好	密	外：灰 5Y5/1 内：灰 5Y5/1 断面：暗赤灰 2.5YR3/1	杯A４個体重ね焼き 内面と外面に熔着痕跡があり (※６個体以上が積み重ねられていたと考えられる) 北野分類Ⅲ類(北野1988)
752	143	77	5区	(灰原西)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯A(熔着)	(10.8)	(10.9)	7.3	(3.2)	40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	杯A４個体重ね焼き 内面に熔着痕跡があり (※５個体以上が積み重ねられていたと考えられる) 北野分類Ⅲ類(北野1988)
753	143	77	5区	灰原南東裾	462灰原		須恵器	杯A(熔着)	(12.9)	(13.0)	8.4	4.0	70	良好	密	外：灰 N4 内：灰 N4 断面：紫灰 5P5/1	杯A３個体重ね焼き 北野分類Ⅲ類(北野1988)
754	143	77	5区	(灰原西)	(462灰原上面)	2層	須恵器	杯B(熔着)	14.9	15.0	10.8	5.2	40	良好	密	外：灰 N5/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N5/	杯A２個体重ね焼き 北野分類Ⅲ類(北野1988)
755	143	77	5区	灰原北東	462灰原	検出面より5～10cm	須恵器	皿C(熔着)	17.6	18.2	14.8	2.0	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	皿Ｃ２個体重ね焼き 底部に転用焼台と考えられる杯蓋の破片やかまぜ片が熔着 北野分類Ⅲ類(北野1988)
756	143	—	5区	(灰原東)	(462灰原上面)	2層	須恵器	壺(熔着)	—	(4.9)	7.4	(6.5)	10	良好	密	外：灰 N4 内：灰 N5/ 断面：灰 N4	壺Ｌの底部の破片は器種不明 転用焼台と推測される
760	144	78	5区	灰原南東裾	462灰原	下層	須恵器	杯H・蓋	9.0	9.2	—	2.8	80	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N5/	内外面 回転ナデ、天井部 回転ヘラケズリ 飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
761	144	—	5区	灰原南東	462灰原	東側黄褐色土	須恵器	杯H・蓋	14.2	14.9	—	(2.3)	全体10 口縁20	良好	密	外：暗オリ―ブ灰 2.5GY4/1 内：灰 N6/ 断面：灰白 2.5GY8/1	内外面 回転ナデ、外面降灰あり TK209型式、6世紀末～7世紀初頭
762	144	78	5区	窯側中北東	452平坦面	中層 黒褐色層	須恵器	杯G・蓋	—	(9.4)	—	(2.2)	20	良好	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰 N6/ 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ 天井部 回転ヘラケズリのち回転ナデ 宝珠つまみ 飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
763	144	—	5区	窯側南西	453平坦面	下層 黒色～黄褐色土	須恵器	杯G・蓋	9.8	10.0	—	(1.4)	5以下	良好	密	外：灰白 N7/ 内：明青灰 5PB7/1 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、外面 自然釉付着 飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
764	144	—	5区	窯側北東	459ピット(窯上方ピット1)		土師器	甕	23.8	(24.3)	—	(5.0)	全体5以下 口縁10	良好	密	外：橙 7.5YR6/6 内：橙 7.5YR6/6 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 ナデ、外面 タテハケ 内面 ユビオサエか
765	145	—	5区	20A-10i	372土坑	黒褐色土壌層(2)	須恵器	杯蓋	13.6	13.8	—	(1.0)	口縁10	良好	密	外：灰白 N7/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 5区須恵器窯産か
766	145	—	5区	20A-10i	372土坑	黒褐色土壌層(2)	須恵器	杯蓋	19.6	20.0	—	(1.2)	口縁15	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N4/ 断面：紫灰 5RP5/1	内外面 回転ナデ 5区須恵器窯産か
767	151	78	5区	1A-3h･i	古墳１(石室床面)		土師器	皿か	—	(9.2)	3.6	(1.6)	60	良好	密	外：橙 7.5YR6/6 内：橙 7.5YR6/6 断面：橙 7.5YR6/6	外面 ユビナデ・ユビオサエ
768	151	78	5区	1A-3h･i	古墳１(石室床面)		土師器	杯	12.8	13.0	8.0	3.9	35	良好	密	外：橙 5YR6/6 浅黄 2.5Y7/4 内：橙 5YR6/6 浅黄 2.5Y7/4 断面：橙 5YR6/6 浅黄 2.5Y7/4	内外面 ヨコナデ、内面 摩滅 底部 ユビオサエ
769	151	78	5区	1A-3h･i	古墳１(石室床面)		須恵器	杯H・蓋	8.8	8.9	—	2.8	100	良好	密	外：灰 N4/ 内：灰 N5/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、外面 自然釉降灰 天井部 ヘラ切り未調整 内面 回転ナデのち２回のユビナデ 770杯Hとセット、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
770	151	78	5区	1A-3h･i	古墳１(石室床面)		須恵器	杯H	7.8	9.8	6.1	2.9	95	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 内面 回転ナデのち２回のユビナデ 769杯蓋とセット、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
771	151	78	5区	1A-3h･i	古墳１(石室床面)		須恵器	杯H	7.9	9.4	5.3	2.6	100	良好	密	外：灰 N5/ 内：オリ―ブ灰 2.5GY6/1	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 内面 回転ナデのち２回のユビナデ 飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
772	151	78	5区	1A-3h･i	古墳１(石室床面)		須恵器	杯G・蓋	9.7	9.8	—	2.8	100	良好	密	外：淡黄 2.5Y8/3 内：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラケズリ 外面 自然釉付着 773杯Gとセットか、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
773	151	78	5区	1A-3h･i	古墳１(石室床面)		須恵器	杯G	8.8	9.1	6.1	2.7	100	良好	密	外：灰白 10YR7/1 内：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整(ナデ消し) 772杯蓋とセットか、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
774	151	78	5区	1A-2i-Ⅱ		2層	須恵器	杯G・蓋	7.4	9.2	—	2.7	40	良好	密	外：灰白 2.5Y7/1 内：灰白 2.5Y8/1 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラケズリ 外面 自然釉付着、古墳関連遺物か 775杯Gとセットか、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
775	151	78	5区	1A-3h･i	古墳１(石室床面)		須恵器	杯G	8.5	8.7	7.6	3.5	100	良好	密	外：灰白 N8/ 内：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 774杯蓋とセットか、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
776	151	78	5区	1A-3i-Ⅰ	古墳１(開口部付近)	2層	須恵器	杯G・蓋	9.9	10.1	—	3.0	100	良好	密	外：淡黄 2.5Y8/4 内：灰白 2.5Y7/1 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラケズリ 外面 自然釉付着 777杯Gとセットか、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
777	151	78	5区	1A-3h･i	古墳１(石室床面)		須恵器	杯G	8.7	9.0	7.5	3.3	100	良好	密	外：オリ―ブ灰 2.5GY6/1 内：青灰 10BG6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切り未調整(ナデ消し) 776杯蓋とセットか、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
778	151	78	5区	1A-2h-Ⅳ	古墳１(石室床面＋周辺東)		須恵器	杯G・蓋	9.9	10.1	—	3.2	80	良好	密	外：灰白 2.5Y7/1 内：灰白 2.5Y8/1 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ、天井部 回転ヘラケズリ 外面 一部自然釉付着 779杯Gとセットか、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
779	151	78	5区	1A-3i-Ⅰ	古墳１(石室内)		須恵器	杯G	9.3	9.5	6.4	3.6	95	良好	密	外：黄灰 2.5Y6/1 内：灰白 5Y7/1 断面：黄灰 2.5Y5/1	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 778杯蓋とセットか、飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
780	151	78	5区	1A-2i-Ⅱ		2層	須恵器	杯G・蓋	9.8	10.0	—	2.9	75	良好	密	外：灰白 5Y7/1 内：灰白 N7/ 断面：淡黄 2.5Y8/3	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラケズリ 外面 降灰、古墳関連遺物か 飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
781	151	78	5区	1A-1i-Ⅰ		表土	須恵器	杯G・蓋	9.4	9.6	—	2.8	30	良好	密	外：灰オリ―ブ 5Y6/2 内：灰白 2.5Y7/1 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ、天井部 ヘラケズリ 外面 降灰、古墳関連遺物か 飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
782	151	—	5区	1A-2h-Ⅲ	古墳１(周辺東)	2層	須恵器	杯G	—	(8.3)	5.9	(1.3)	底部80	良好	密	外：灰白 2.5Y7/1 内：灰白 2.5Y7/1 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 飛鳥Ⅱ、7世紀中頃
783	151	—	5区	1A-2h-Ⅲ	古墳１(周辺東)	2層	須恵器	杯蓋	—	—	—	(1.4)	5以下	やや良	密	外：灰 7.5YR6/1 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ 古墳と関係しない、8世紀
800	153	79	6区	1O-4g		1層	弥生土器	高杯	16.6	(18.6)	—	(3.4)	口縁15	良好	密	外：橙 7.5YR7/6 内：黄橙 7.5YR7/8 断面：黄橙 7.5YR7/8	内外面 摩滅
801	153	79	6区	1O-4h	(12－6ｔｒ)	1～2層	須恵器	壺 or 平瓶	—	(5.8)	—	(3.8)	10	良好	密	外：灰 5Y5/1 内：灰 5Y5/1 断面：灰 5Y5/1	内外面 回転ナデ

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
802	158	—	8区	1O-4d		1層	土師器	甕	—	(21.5)	—	(3.1)	10	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断面：にぶい黄橙 10YR6/4	内外面 ナデ
803	158	79	8区	1O-4d		1層	弥生土器	(底部)	—	(9.4)	5.3	(4.1)	20	良好	密	外：橙 2.5YR7/8 内：にぶい橙 2.5YR6/4 断面：橙 2.5YR6/6	内外面 摩滅
804	158	79	8区	1O-3・4e		1層	須恵器	壺K	7.6	(7.7)	—	(5.5)	10	良好	良好	外：灰 5Y6/1 内：灰 5Y6/1 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ、内面 自然釉付着 8世紀
805	158	79	8区	1O-4e		1層	須恵器	壺	—	(10.5)	—	(1.9)	5以下	良好	良好	外：灰 7.5Y6/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰 5Y6/1	内外面 回転ナデ、外面 自然釉付着 頸部 三段接合
806	158	79	8区	1O-3・4d		(礫層)	土師器	杯C	17.0	17.2	10.0	(1.0 +2.0)	5以下	良好	良好	外：明赤褐 2.5YR5/6 内：明赤褐 5YR5/6 断面：明赤褐 5YR5/6	口縁部 ヨコナデ、底部 ヘラケズリ 内面 放射暗文 平城Ⅲ、8世紀中頃
807	158	79	8区	1O-4e		(礫層)	須恵器	蓋	12.3	12.6	—	(1.7)	10	良好	密	外：灰 5Y5/1 内：灰 5Y5/1 断面：にぶい赤褐 5YR5/3	内外面 回転ナデ、天井部 回転ヘラケズリ 環状つまみか 8世紀
808	158	79	8区	1O-3・4d		(礫層)	須恵器	杯A	—	(8.0)	6.2	(1.5)	5以下	普通	密	外：灰黄 2.5Y7/2 内：灰白 5Y7/2 断面：灰白 5Y7/2	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整
809	158	79	8区	1O-3・4d		(礫層)	須恵器	杯A	—	(10.4)	8.0	(2.3)	全体 5以下 底部10	普通	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整
810	158	79	8区	1O-4e		(礫層)	須恵器	壺K or Q	—	12.8	6.6	(4.0)	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ
811	158	79	8区	1O-4e		(礫層)	須恵器	瓶類	—	(12.2)	6.6	(7.7)	30	良好	密	外：黄灰 2.5Y5/1 内：浅黄 2.5Y7/3 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ、自然釉付着 外面下半 回転ヘラケズリのち回転ナデ 底部小皿状のものを張り付ける 水瓶もしくは浄瓶か
812	158	79	8区	1O-4e		(礫層)	須恵器	提瓶	—	(14.2)	—	(5.1)	5以下	良好	密	外：灰 5Y6/1 内：灰 N6/ 断面：灰 7.5Y6/1	内外面 ナデ、体部外面 カキメ 肩部ボタン付 ＴＫ43～209型式、6世紀後半～末
813	158	79	8区	1O-3e		(礫層) (側溝部分)	須恵器	有蓋高杯蓋	14.6	14.7	—	6.3	40	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	内外面 回転ナデ、天井部 回転ヘラケズリ TK47型式、5世紀末
814	158	79	8区	1O-3e		(礫層) (側溝部分)	弥生土器	甕 (底部)	—	(8.6)	5.8	(2.5)	25	良好	密	外：明赤褐 2.5YR5/8 内：にぶい橙 2.5YR6/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	外面 タテハケ、内面 ユビオサエ
819	160	—	8区	1O-3c	367土坑		須恵器	杯A	—	(7.8)	6.8	(1.0)	10	不良	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：明黄褐 10YR7/6	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ 8世紀末～9世紀
820	160	79	8区	1O-4c	367土坑		須恵器	杯A	9.6	9.8	6.8	2.7	50	不良	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切未調整 8世紀末～9世紀
821	160	79	8区	1O-4c	367土坑		須恵器	杯A	10.2	10.4	7.6	2.3	20	不良	密	外：浅黄橙 10YR8/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/3	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切未調整 接合痕あり、体部 粘土紐積みor輪積み 8世紀末～9世紀
822	160	79	8区	1O-3c	367土坑		須恵器	杯A	11.5	11.7	8.6	2.8	60	不良	密	外：橙 7.5YR6/6 内：橙 7.5YR6/6 断面：にぶい橙 7.5YR6/4	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切未調整 8世紀末～9世紀
823	160	79	8区	1O-4c	367土坑		須恵器	壺Kか	—	(14.2)	—	(2.8)	10	不良	密	外：灰白 2.5Y7/1 内：灰黄 2.5Y 7/2 断面：灰黄 2.5Y 7/2	内外面 回転ナデ、外面 自然釉付着 8世紀か
833	168	80	10区	1O-9c		1層	土師器	皿	15.2	15.4	11.4	2.2	30	良好	密	外：灰白 10YR8/2 内：灰白 10YR8/2 断面：橙 5YR6/6	内外面 剥離・摩滅、底部 ケズリか c手法か、
834	168	80	10区	1O-10c		1層 (下段造成土)	土師器	甕	15.0	(15.7)	—	(3.7)	10	良好	やや粗	外：橙 5YR7/6 内：橙 5YR6/8 断面：橙 5YR6/8	口縁部 ヨコナデ、外面 タテハケ 内面 ナデ
835	168	80	10区	1O-9A・b		1層 (耕作土)	須恵器	甕	—	—	—	(5.1)	10	やや不良	密	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰白 7.5Y7/1 断面：にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 ナデ、自然釉付着
836	168	80	10区	1O-8d		2層 (2-2)	須恵器	壺K	12.0	(12.7)	—	(6.7)	20	良好	密	外：灰白 N7/ 内：灰 N6/ 断面：灰白 N7/	内外面 回転ナデ、内面 自然釉付着 8世紀
837	168	80	10区	1O-8d		2層 (2-2)	須恵器	壺Kか	—	(4.8)	—	(5.0)	35	良好	密	外：灰白 2.5Y7/1 内：灰白 7.5Y7/1 断面：灰白 7.5Y8/1	内外面 回転ナデ、外面 自然釉付着 内面 同心円しわ・加圧痕あり、頸部 接合痕
838	168	80	10区	1O-9c		3層＋2層 (2-2)	須恵器	壺K	—	16.2	—	(7.0)	10	良好	密	外：灰白 5Y7/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰白 2.5Y7/1	外面 回転ヘラケズリ、内面 回転ナデ 底部 高台剥離 8世紀
839	168	80	10区	1O-8d		4-2層	須恵器	杯A	—	(7.7)	5.1	(1.8)	5以下	良好	密	外：灰白 2.5Y7/1 内：浅黄 2.5Y7/3 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ 9世紀中頃以降
840	168	80	10区	1O-8c		4-2層	須恵器	壺	—	(15.2)	11.0	(3.7)	5以下	良好	密	外：灰白 10Y7/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰白 2.5Y8/1、 黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ 8世紀
841	168	80	10区	1O-9c		5層	須恵器	杯A	9.8	9.9	6.4	2.5	5以下	良好	密	外：灰白 2.5Y8/1 内：灰白 2.5Y8/1 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切り未調整 842近辺で出土 9世紀中頃以降
842	168	80	10区	1O-9c		5層	須恵器	杯A or 椀	11.8	12.1	8.3	3.5	70	良好	密	外：灰黄 2.5Y7/2 内：灰白 2.5Y7/1 断面：黄灰 2.5Y6/1	内外面 回転ナデ 底部 ヘラ切りのち不定方向ナデ ひずみあり、熔着あり、841近辺で出土 8世紀か
843	171	80	10区	1O-8c・d	281土坑	第3面 (埋土4～6)	土師器	杯A	12.6	12.8	5.8	2.6	25	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 一段ナデ 外面 ユビナデ・ユビオサエ、内面 ハケか 9世紀後半～10世紀初頭
844	171	80	10区	1O-8d	281土坑	第3面 (埋土4～6)	土師器	杯B	18.7	(18.8)	5.6	(2.7 +0.7)	50	良好	密	外：にぶい橙 5YR6/4 内：橙 5YR6/6 断面：橙 5YR6/6	内外面 摩滅、口縁部 一段ナデ 底部内面 不定方向ハケ 9世紀末～10世紀前半
845	171	80	10区	1O-8d	281土坑	第3面 (埋土4～6)	土師器	甕	17.6	17.8	—	(6.9)	15	良好	密	外：褐灰 5YR5/1 にぶい赤褐 5YR5/4 内：灰黄褐 10YR5/2 断面：橙 7.5YR6/6	口縁部 ヨコナデ、外面 ケズリのちナデか 内面 ナデ
846	171	80	10区	1O-8d	281土坑	第3面 (埋土4～6)	須恵器	杯Aか	8.0	8.2	5.2	2.6	30	不良	密	外：灰白 2.5Y8/1 内：灰白 2.5Y8/1 ～ 8/2 断面：灰白 2.5Y8/1	口縁部・内面 回転ナデ 底部 工具ナデか(擦痕あり) 類例少ない器形
847	171	80	10区	1O-8d	281土坑	第3面 (埋土4～6)	須恵器	杯A or 椀	14.4	14.8	—	(2.2)	15	不良	密	外：灰白 7.5Y7/1、 黄灰 2.5Y6/1 内：灰白 2.5Y7/1 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ 9世紀末～10世紀初頭か
848	171	—	10区	1O-9d	281土坑	第3面 (埋土4～6)	須恵器	杯A	—	(8.4)	7.6	(1.3)	5以下	良好	密	外：灰白 5Y7/1 内：灰白 5Y7/1 断面：灰白 5Y7/1	内外面 回転ナデ、底部 ヘラ切りのちナデ
849	171	80	10区	1O-9d	281土坑	第3面 (埋土4～6)	須恵器	壺	—	(12.8)	—	(5.9)	10	良好	密	外：灰 N5/・灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰赤 10R5/2	内外面 回転ナデ、外面 沈線あり
850	171	80	10区	1O-8c・d	281土坑	第3面 (埋土4～6)	須恵器	甕	—	(22.2)	—	(10.5)	10	やや良	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰白 7.5Y7/1 断面：灰白 5Y7/1	外面 格子タタキ 内面 回転ナデのちナデ消し

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
851	171	80	10区	1O-8c・d	281土坑	第3面(埋土4〜6)	黒色土器A類	椀か	15.6	15.8	—	(4.1)	20	良好	密	外：黒褐 2.5Y3/1 にぶい褐 7.5YR5/3 内：灰 7.5Y4/1 断面：暗灰黄 2.5Y4/2	口縁部外面 一段ナデのちヘラミガキ(黒色化) 外面下半 ナデか 内面 ヘラミガキ
852	171	80	10区	1O-8d	281土坑	第3面(埋土4〜6)	黒色土器A類	椀か	16.8	17.0	—	(3.4)	20	良好	密	外：黒 2.5Y2/1 内：黒 10YR2/1 断面：黒 10YR2/1	口縁部外面 一段ナデのちヘラミガキ(黒色化) 体部外面 ケズリ 内面 ヘラミガキ、螺旋暗文あり 9世紀後半〜10世紀前半
853	171	80	10区	1O-8c・d	281土坑	第3面(埋土4〜6)	黒色土器A類	椀	17.0	17.2	8.3	4.3	80	良好	密	外：黒 N2/ にぶい橙 2.5YR6/4 内：黒 N2/ 断面：暗灰 N3/	口縁部外面 一段ナデのち(黒色化) 体部外面 ケズリ 内面 ヘラミガキ 9世紀後半〜10世紀前半
854	171	80	10区	1O-8d	281土坑	第3面(埋土4〜6)	黒色土器A類	椀	19.0	19.2	8.2	(3.0 + 1.3)	10	良好	密	外：灰黄褐 10YR4/2 橙 5YR6/6 内：黒 2.5Y2/1 断面：にぶい黄褐 10YR5/4 にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 ヨコナデ(部分的に黒色化) 外面 ヨコナデ 内面 ヘラミガキ 9世紀後半〜10世紀前半
877	173	80	10区	1O-9c	270ピット	第3面	土師器	皿	11.4	11.6	7.6	1.9	80	良好	密	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 ヨコナデ 底部 ユビナデ・ユビオサエ 11世紀
878	173	81	10区	1O-8c	279溝	第3面	須恵器	長頸壺	—	(8.6)	—	(11.2)	30	良好	密	外：黄灰 2.5Y 5/1 内：灰黄褐 10YR5/2 断面：灰 N4/	内外面 回転ナデ、頸部内面 接合痕
879	173	81	10区	1O-8d	279溝	第3面	須恵器	甕(耳付)	15.2	35.4	—	(27.5)	50	良好	密	外：灰 5Y6/1 内：灰白 N7/ 断面：灰褐 5YR6/2	口縁部 ナデ 外面 格子タタキのちカキメ(6本/1.2cm) 外面 自然釉付着、内面 ナデ 下半 同心円当て具痕が残る
880	176	81	10区	1O-9c	280流路	第4面	土師器	甕	20.4	20.6	—	(5.8)	10	やや不良	密	外：橙 5YR7/6 内：橙 5YR6/6 断面：明褐 7.5YR5/6	内外面 摩滅、口縁部 ヨコナデ 外面 タテハケ、内面 ナデか内外面ナデ
881	176	81	10区	1O-9c	280流路	第4面	須恵器	壺蓋	12.0	12.2	—	(1.6)	60	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/2 内：灰 N6/ 断面：灰白 2.5Y7/1	内外面 回転ナデ、外面 自然釉付着
882	176	81	10区	1O-8・9d	296流路	第4面	土師器	甕	19.2	19.8	—	(8.5)	10	良好	密	外：褐灰 7.5YR4/1 内：明黄褐 10YR7/6 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内外面 摩滅、口縁部 ヨコナデ 外面 タテハケ
883	176	81	10区	1O-8・9d	296流路	第4面	土師器	高杯か	26.4	(26.6)	—	(1.5)	5以下	良好	密	外：にぶい橙 5YR6/4 内：にぶい橙 5YR6/4 断面：にぶい橙 5YR6/4	内外面 摩滅、口縁部 ヨコナデ
884	176	81	10区	1O-9d	280流路 ＋296流路 ＋(5層)	第4面	土師器	甕	29.5	30.4	—	(27.3)	口縁90	良好	密	外：橙 7.5YR6/8 内：橙 5YR6/8 断面：浅黄橙 7.5YR8/4	口縁部 ヨコナデ、口縁部内面 ヨコハケ 体部外面 タテハケ、煤付着 内面 ユビナデ 下半 同心円当て具痕後が残る
885	176	81	10区	1O-8・9d	296流路	第4面	須恵器	壺M	—	7.0	4.2	(4.3 +3.0)	30	やや不良	密	外：にぶい黄橙 10YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR6/3 断面：灰黄褐 10YR5/2	内外面 摩滅、内外面 回転ナデ 水挽き成形か 9世紀中頃以降
886	176	81	10区	1O-8b・9b	296流路	第4面	須恵器	杯Bか	—	(14.4)	11.8	(4.4)	10	良好	密	外：灰 7.5Y6/1 内：灰白 5Y7/1 断面：浅黄 2.5Y7/3	内外面 回転ナデ 9世紀
888	176	81	10区	1O-9d	300溝	第5面	土師器	杯A	10.3	10.6	6.8	2.5	5以下	良好	密	外：橙 2.5YR6/6 内：橙 5YR6/6 断面：橙 5YR6/6	9世紀中頃

金龍寺旧境内跡２　出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
889	890	89	1区	20B-3・4c	20土坑		弥生土器	広口壺	(11.4)	(11.8)	—	(1.0)	5以下	密	やや不良	外：にぶい黄褐 10YR5/4 内：にぶい黄褐 10YR6/4 断面：にぶい黄褐 10YR6/4	内外面摩滅
890	889	89	1区	19B-7A	14土坑		弥生土器	(脚台部)	—	(7.8)	(5.5)	(6.4)	10%	密	やや不良	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：褐灰 10YR5/1 断面：黒褐 10YR3/1	円盤充填、内外面やや摩滅 外面タテナデ、内面ヨコナデ
891	891	89	1区	20B-3d	21谷筋(上層)		弥生土器	広口壺	(15.8)	(16.2)	—	(8.6)	10%	密	良好	外：浅黄橙 10YR8/4 内：にぶい橙 7.5YR7/4 断面：浅黄橙 10YR8/4	口縁端部 波状文、内縁 列点文 頸部直線文、外面タテハケ 内面ナナメハケ Ⅲ様式末〜Ⅳ様式前半
892	892	89	1区	20B-3d	21谷筋(上層)		弥生土器	(脚台部)	—	(12.4)	11.2	(8.0)	60%	密	良好	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：橙 2.5Y6/6 にぶい黄橙 10YR7/4	内外面摩滅著しい、杯部内面 ナデ 脚部外面 タテハケ 内面 板状工具によるナデ Ⅲ様式末〜Ⅳ様式前半
893	893	89	1区	20B-3c・d	21谷筋		弥生土器	壺	—	(15.3)	—	(2.5)	5%以下		やや不良	外：7.5YR6/4 にぶい橙 内：10YR7/6 明黄褐 断面：10YR5/3 にぶい褐	内外面摩滅
894	894	89	1区	20B-3c・d	21谷筋		弥生土器	(底部)	—	(12.2)	(5.1)	(4.8)	10%	密	良好	外：10YR4/1 褐灰 内：7.5YR5/2 灰褐 断面：7.5YR 6/3 にぶい褐	外面 タテハケ 内面 ヨコナデのちハケ
895	895	89	1区	20B-3c・d	21谷筋		弥生土器	(把手)	—	—	—	—	5%以下	密	良好	外：10YR5/1 褐灰 断面：10YR6/4 にぶい黄橙	水差、ナデ成形
896	896	89	1区	20B-4c・d	22谷筋(西斜面部)		弥生土器	広口壺	(32.2)	(32.8)	—	(5.4)	5%以下	密	良好	外：浅黄橙 10YR8/4 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	口縁端部 波状文 内外面摩滅、ナデか Ⅲ様式末〜Ⅳ様式前半
897	897	89	1区	20B-3・4c	22谷筋		弥生土器	甕	—	(13.0)	(5.2)	(9.4)	20%	密	良好	外：にぶい橙 7.5YR6/4 内：にぶい黄橙 10YR7/4 断面：にぶい橙 7.5YR7/4	内外面剥離著しい 外面 タテハケ、内面 ナデ、底部 指ナデか
898	898	89	1区	20B-3・4c	22谷筋		弥生土器	(底部)	—	(8.0)	(5.8)	(3.1)	5%以下	密	良好	外：にぶい橙 7.5YR7/4 浅黄橙 10YR8/4 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：浅黄橙 7.5YR8/4	内外面摩滅、ナデか
899	899	89	1区	20B-3・4c	22谷筋		弥生土器	(底部)	—	(6.0)	(4.8)	(2.4)	5%以下	密	良好	外：にぶい橙 7.5YR7/4 内：浅黄橙 10YR8/4 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	外面底部剥離著しい、内外面 ナデか
908	908	89	2区	19B-8i	4土坑(上面)		須恵器	杯B底部	—	(12.8)	—	(1.6)	5%	密	普通	外：灰白 7.5Y7/1 内：灰黄 2.5Y7/2 断面：灰黄 2.5Y7/2	内外面 回転ナデ　外面底部 回転ヘラケズリ

※ 746 〜 755 の備考に記載された (北野 1988) は下記の文献である
北野博司 1988「重ね焼きの観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター

成合遺跡　出土瓦・土製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	種別	器形	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	焼成	胎土	色調	調整・備考
16	20	49	2区	1A-10e		1層（上面）	瓦	軒丸瓦	—	—	—	—	瓦当部50	良好	密	外：にぶい黄橙 10YR7/4 内：にぶい黄橙 10YR6/4 断面：にぶい橙 7.5YR7/4	16.3 × 6.5 × 3.2 ㎝、瓦当厚 2.3 ㎝ 平城宮系軒丸瓦、中房蓮子 1 ＋ 6 内区凸線蓮弁、外区内縁珠文 外区外縁凸線鋸歯文、外縁に平縁あり 梶原寺・梶原瓦窯に同笵あり、8 世紀
442	120	64	5区		449 須恵器窯 窯体内 ＋462 灰原	最終床面直上＋灰原	土製品（軟質）	九輪か	67.8（外輪径）	—	26.5（内輪径）	6.7	50	軟質	密	外：灰 5Y6/1、灰白 5Y7/1 内：灰 5Y6/1、灰白 5Y7/1 黄灰 .2.5Y5/1 断面：灰 5Y6/1 灰白 5Y7/1	内面および外面と底面の一部に布目痕あり
443	120	64	5区		449 須恵器窯 窯体内	最終床面直上	土製品（軟質）	九輪か	—	—	13.1（内輪径）	4.8	20	やや良	密	外：灰黄 2.5Y6/2 断面：にぶい黄橙 10YR7/4	内面に布目痕あり 復元径が 30 ～ 35 ㎝程度か
757	144	—	5区	（灰原西）	（462 灰原上面）	2層	土製品（須恵質）	不明	—	20.0	19.3	(1.6)	10	良好	密	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：灰 N6/	側面 ヨコナデ、下面 未調整 上面 不明（剥離面の可能性もあり） 性格不明（※ただし壺類や鉢類などの大型品の底部粘土板の可能性あり）
758	144	77	5区	（灰原東）	（462 灰原上面）	2層	土製品（須恵質）	不明	—	6.0	—	1.3	80	—	—	外：灰 N6/ 内：灰 N6/ 断面：にぶい褐 7.5YR5/4	厚さ 1.0 ㎝、手づくね成形 辺縁部 ヨコナデ
759	144	77	5区	灰原南東裾	462 灰原		窯体	窯壁片（分炎柱か）	—	—	—	—	—	—	—	外：オリ―ブ黄 5Y6/3 断面：オリ―ブ黄 5Y6/3・灰 5Y5/1	18.8 × 21.0 × 20.0 ㎝ 自然釉付着 木芯に粘土巻きつけによる仮設の支柱か

成合遺跡　出土土石器・石製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	遺物名	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	色調	備考
1	7	49	11-1tr	トレンチ南端		2層	五輪塔（火輪）	13.5	10.0 ～ 22.0	—	1100	花崗岩製	浅黄 2.5YY7/3	
2	10	49	12-4tr	1A-5a		—	勾玉	1.9	1.4	0.8	3.8	ヒスイ	緑色～乳白色	半玦状勾玉 北陸産か
62	22	51	2区	2O-1j		1層	台石	19.6	24.5	7.7	560	玢岩	灰黄 2.5Y6/2	図面の表面が擦り面、磨滅あり
145	38	53	2区	2A-1 ～ 1A-10i	竪穴建物 2（床面直上）		磨製石剣	(5.2)	(3.1)	(0.7)	10.3	粘板岩	オリーブ灰 2.5GY6/1	２次的な加工研磨痕あり 石包丁に転用か
194	47	54	3-1区	1A-8e	竪穴建物 5		台石	19.5	22.0	7.1	480	玢岩か	灰黄 2.5Y6/2	図面の表面が擦り面、磨滅あり
198	47	54	3-1区	1B-9a	竪穴建物 7		石包丁か	(4.2)	(5.9)	(0.4)	13.1	粘板岩	オリーブ灰 2.5GY5/1	研磨痕あり
243	61	55	3-2区	1A-10a	327 土坑		打製石鏃	2.6	1.6	0.5	1.1	サヌカイト	黄灰 2.5Y6/1	凹基式
266	71	56	4-1区		竪穴建物 11（埋土上面）		台石	26.0	23.7	11.0	1140	玢岩か	浅黄 2.5Y7/3	図面の表面が擦り面、磨滅あり
267	71	56	4-1区		竪穴建物 11（床面直上）		台石	32.2	23.6	15.4	184	玢岩か	灰黄 2.5Y7/2	図面の表面が擦り面、磨滅あり
293	76	58	4-1区	1A-6f	段状遺構 4		打製石鏃	4.3	1.3	0.5	2.6	サヌカイト	灰白 5Y7/1	凸基式
294	76	58	4-1区	1A-6f	段状遺構 4		打製石鏃	4.2	1.3	0.7	2.9	サヌカイト	灰白 5Y7/1	凸基式
295	76	58	4-1区	1A-6f	段状遺構 4（411 土坑）		打製石鏃	3.8	1.1	0.5	1.9	サヌカイト	灰 N6/ オリーブ灰 2.5GY6/1	凸基式
296	76	58	4-1区	1A-6f	段状遺構 4		打製石鏃	6.5	1.2	0.7	4.1	サヌカイト	灰白 10Y7/1	大型・有茎式茎部長 1.1 ㎝
297	76	58	4-1区	1A-6f	段状遺構 4		打製石鏃	2.7	1.7	0.5	1.9	サヌカイト	灰白 2.5GY8/1	有茎式
298	76	58	4-1区	1A-6f	段状遺構 4		磨製石鏃	(5.6)	3.2	0.4	6.8	粘板岩	灰 7.5Y6/1	鉄鏃模倣の大型磨製石鏃 奈カリ与や古曾部・芝谷に類例あり
306	80	58	4-1区		段状遺構 6（周壁溝）		台石	26.1	19.6	9.5	640	玢岩か	にぶい赤褐 2.5 Y Y4/4 黄灰 2.5Y6/1	上面の被熱、剥離が著しい
357	93	60	4-2区	1B-4a	竪穴建物 14	第 3 面	剥片	3.4	3.1	0.5	4.0	サヌカイト	灰 10Y6/1	
359	93	60	4-2区	1B-4a	竪穴建物 15（542 溝）	第 3 面	剥片	10.3	3.7	0.8	22.7	粘板岩	灰 N4/	
816	158	79	8区	1O-4d		1層	剥片	4.9	3.8	0.6	11.0	サヌカイト	灰 N5/	
817	158	79	8区	1O-ef3		1層	剥片	7.4	5.8	1.2	61.4	サヌカイト	灰 N6/	
818	158	79	8区	1O-1g		1層	凹石	10.6	11.2	5.1	873.3	玢岩か	灰白 2.5Y7/1	両面くぼみ部分あり

金龍寺旧境内跡２　出土土石器・石製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	器形	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	色調	備考
900	186	87	1区	20B-3・4c	22 谷筋		扁平片刃石斧	5.7	4.0	1.0	47.5	玢岩か	オリーブ灰 2.5GY6/2	刃部擦痕あり
901	186	87	1区	20B-4c・d	22 谷筋（西斜面部）		太型蛤刃石斧	(10.6)	6.7	4.4	471.5	玢岩か	黄灰 2.5Y6/1	刃部のみ残存、基端部欠損
902	186	87	1区	20B-3c	22 谷筋（上層）		石鏃未製品か	5.0	2.8	1.1	10.3	サヌカイト	灰 7 .5Y5/1	
903	186	87	1区	20B-3c	22 谷筋（上層）		剥片	3.9	1.9	0.7	4.1	サヌカイト	灰 7 .5Y5/1	
904	186	87	1区	20B-3・4c	22 谷筋		剥片	2.2	2.6	0.3	1.2	サヌカイト	灰 7 .5Y6/1	

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	遺物名	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	色調	備考
905	186	87	1 区	20B-3・4c	22 谷筋		剥片	3.0	1.7	0.5	2.2	サヌカイト	灰 7 .5Y5/1	
906	187	87	2 区	19B-7i		1 層下面	太型蛤刃石斧	(7.9)	10.1	4.8	531.8	珪石か	にぶい黄橙 10RY6/3	基端部のみ残存、刃部欠損 側面が磨滅、擂石の可能性あり
907	187	87	2 区	19B-9h		1 層下面	剥片	5.7	5.3	1.6	42.3	サヌカイト	灰 N5/0	

成合遺跡　出土土鉄製品観察表

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	遺物名	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
59	22	52・83	2 区	1A-10d		1 層	鉄釘	7.9	0.8	0.7	14.3	頭部～先端まで残存 頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ
60	22	52・83	2 区	1A-10d		1 層	棒状鉄製品	(3.7)	0.7	0.6	4.0	
61	22	52・83	2 区	1A-10e		1 層	不明鉄製品	4.6	2.0	0.5	19.8	
71	23	52・83	2 区	1A-10d	土器集中部 （グリッド中央付近）	1 層 (2 層直上)	棒状鉄製品	(14.6)	1.1	1.0 × 0.8	39.2	先端が緩くカーブ
89	24	52・83	2 区	1A-10d・e	29 溝		鉄釘か	(5.3)	0.8	0.7	4.8	先端部付近
97	24	52・83	2 区	1A-10c	8 土坑		鉄釘	(3.5)	0.7	0.8	5.7	頭部が残存、頭部 折曲Ｌ字形
106	28	52・83	2 区	1A-10i	33 土坑		鉄釘	9.3	0.6	0.7	11.4	頭部～先端まで完存、頭部 折曲Ｌ字形 状態が非常に悪い、剥離著しい
137	31	52・83	2 区	1A-10e	23 土坑周辺 (排土中)		棒状鉄製品 （鉄釘か）	(4.9)	0.6	0.6	5.3	
177	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(6.4)	0.5	0.6	6.3	頭部～先端まで残存 頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ 頭部に炭付着
178	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	6.0	0.6	0.6	8.1	頭部～先端まで完存 頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ （※図版 82 のＸ線写真については撮影向きが異なる）
179	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(6.0)	0.4	0.5	6.2	頭部が残存 頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ
180	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(4.7)	0.5	0.5	5.4	頭部が残存 頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ
181	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(3.9)	0.7	0.7	4.3	頭部が残存 頭部 折曲Ｌ字形
182	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(3.4)	0.6	0.5	3.3	頭部が残存 頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ
183	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(3.1)	0.5	0.4	2.2	頭部が残存 頭部 折曲Ｌ字形か
184	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(4.3)	0.4	0.3	5.5	頭部が残存 頭部 折曲Ｌ字形か
185	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(2.8)	0.7	0.5	5.3	頭部が残存 頭部 折曲Ｌ字形か
186	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(2.2)	0.5	0.6	2.0	頭部が残存 頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ
187	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(1.4)	0.8	0.5	1.6	頭部が残存 頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ
188	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘か	(2.2)	(0.3)	(0.3)	1.1	割れ・裂けによって表面が剥落
189	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(3.0)	0.5	0.5	1.7	先端部が残存
190	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(5.0)	0.4	0.4	3.9	先端部が残存
191	43	54・82	3-1 区	1A-9f	123 土坑		鉄釘	(4.9)	0.3	0.4	3.2	割れ・裂けによって表面が剥落 錆び膨れで石が付着
235	56	55・83	3-2 区	2A-1b	360石列 （地山直上）		鉄釘	8.6	0.7	0.8	15.6	頭部～先端まで完存 頭部 折曲Ｌ字形
236	56	55・83	3-2 区	1A-10b	360 石列 （350 溝）		鉄釘か	(5.4)	0.6	0.6	6.4	断面形態が 235 と酷似
333	84	60・83	4-2 区	1B-5b		3 層 (第2面精査中)	不明板状鉄製品	3.6	9.8	0.3	27.7	半月形、用途不明
346	84	60・83	4-2 区	1B-4b	472 土坑 （周辺）	3 層	鉄釘	(4.0)	0.5	0.4	4.2	頭部が残存 頭部Ｌ字形抉り込みタイプ
784	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(7.5)	0.8	0.5	6.8	頭部・先端部とも欠損 正面・背面 横方向木目の木質付着
785	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	7.9	0.5	0.4	5.7	頭部～先端まで完存 頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ
786	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(5.7)	0.5	0.4	4.7	頭部・先端部とも欠損 正面 横方向木目の木質付着、側面 木質付着
787	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(7.0)	0.6	0.5	8.4	頭部・先端部とも欠損 正面・側面 横方向木目の木質付着
788	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	9.1	0.6	0.5	7.4	頭部～先端まで残存 正面・側面・背面 横方向木目の木質付着
789	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(7.3)	0.7	0.6	9.4	頭部・先端部とも欠損 正面・背面 横方向木目の木質付着
790	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(4.9)	0.5	0.3	3.5	先端部が残存
791	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(6.5)	0.7	0.5	6.6	先端部が残存 正面・背面 横方向木目の木質付着
792	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(4.1)	0.5	0.6	5.0	頭部・先端部とも欠損 側面 横方向木目の木質付着
793	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(2.8)	0.5	0.4	1.1	頭部・先端部とも欠損
794	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(6.2)	0.6	0.3	3.6	頭部が残存頭部 折曲Ｌ字形抉り込みタイプ
795	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(5.7)	0.5	0.3	3.5	先端部が残存
796	151	78・82	5 区	1A-3h-i	465 古墳 1 （石室床面）		鉄釘	(6.0)	0.7	0.5	4.8	先端部が残存

遺物番号	挿図番号	図版番号	調査区	地区割	遺構名	層位・面	遺物名	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
797	151	78・82	5区	1A-3h-i	465 古墳1（石室床面）		鉄釘	(8.1)	0.4	0.3	4.1	先端部が残存
798	151	78・82	5区	1A-3h-i	465 古墳1（石室床面）		鉄釘	(8.1)	0.5	0.4	6.0	先端部が残存
799	151	78・82	5区	1A-3h-i	465 古墳1（石室床面）		鉄釘	8.2	0.5	0.4	6.1	頭部～先端まで完存 頭部 折曲L字形抉り込みタイプか 正面 横方向木目の木質付着
815	158	79・83	8区	1O-4d		1層（表土層）直下	不明板状鉄製品	(4.6)	3.1	0.8	25.6	小孔2ヶ所あり
824	161	79・82	8区	1O-4f	371 土坑	炭層	鉄釘	7.6	0.6	0.6	9.7	頭部～先端部まで完存、頭部 折曲L字形 正面・背面・側面に木質付着 （※頭部側横方向、先端部側縦方向の木目） 棺材厚さ 2.3～2.7ｃｍ
825	161	79・82	8区	1O-4f	371 土坑	炭層	鉄釘	(6.8)	0.4	0.6	5.9	頭部～先端部までほぼ完存、頭部 折曲L字形 正面・背面・側面に木質付着 （※頭部側横方向の木目）
826	161	79・82	8区	1O-4f	371 土坑	炭層	鉄釘	(7.3)	0.4	0.4	8,3	頭部が残存、頭部 折曲L字形 正面・背面・側面に木質付着 （※頭部側横方向、先端部側縦方向の木目） 棺材厚さ 2.7 ｃｍ以上
827	161	79・82	8区	1O-4f	371 土坑	炭層	鉄釘	9.3	0.8	0.7	14.2	頭部～先端部まで完存、頭部 折曲L字形 正面・背面・側面に木質付着 （※頭部側横方向、先端部側縦方向の木目） 棺材厚さ 2.5～2.6 ｃｍ
828	161	79・82	8区	1O-4f	371 土坑	炭層	鉄釘	(8.2)	0.8	0.7	9,1	頭部・先端部ともに欠損 正面・背面・側面に木質付着 （※頭部側横方向、先端部側縦方向の木目） 棺材厚さ 3.1cm 以上
829	161	79・82	8区	1O-4f	371 土坑	炭層	鉄釘	(5.7)	0.4	0.4	5.7	頭部・先端部ともに欠損 正面・背面・側面に木質付着 （※頭部側・先端部側ともに縦方向の木目） 棺材厚さ 1.3cm 以上
830	161	79・82	8区	1O-4f	371 土坑	炭層	鉄釘	(4.0)	0.6	0.6	4.6	頭部が残存、頭部 折曲L字形 正面・背面・側面に木質付着 （※先端部側横方向の木目） 棺材厚さ 2.2～2.4cm
831	161	79・82	8区	1O-4f	371 土坑	炭層	鉄釘	(4.1)	0.5	0.6	3.5	頭部が残存、頭部 折曲L字形
832	161	79・82	8区	1O-4f	371 土坑	炭層	鉄釘	(4.5)	0.5	0.4	3.7	頭部が残存、頭部 折曲L字形 正面・背面・側面に木質付着 （※先端部側横方向の木目） 棺材厚さ 2.5cm
855	172	81・83	10区	1O-8c・8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	鉄釘	(19.1)	1.5	1.1	102.9	大型鉄釘 頭部が残存、頭部 方形・鍛接か
856	172	81・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	鉄釘？	(15.2)	1.2	1.0	117.4	大型鉄釘 先端部が残存
857	172	80・83	10区	1O-8c・d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	鉄釘	上半 (5.6) 下半 (4.1)	0.4	0.6	14.7	
858	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	鉄釘か	(6.2)	0.8	0.5	18.3	断面形態から鉄釘の可能性あり
859	172	80・83	10区	1O-9d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明鉄製品（鉄釘か）	(5.5)	0.8	0.7	22.2	
860	172	80	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明鉄製品	(3.3)	0.9	0.8	13.0	木炭付着
861	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	刀子	(8.7)	1.0	0.4 × 0.6	11.8	刀身長 4.8 ㎝ 両関
862	172	80・83	10区	1O-8c・d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明鉄製品	(8.3)	1.1	0.2	9.4	上・下が別固体
863	172	80・83	10区	1O-8c・8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明鉄製品	(4.1)	1.2	0.3	3.1	
864	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明鉄製品	(3.2)	1.2	0.5	3.7	
865	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明鉄製品	(2.9)	1.0	0.5	5.3	
866	172	80・83	10区	1O-9d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明棒状鉄製品	(2.9)	0.3	0.7	1.2	
867	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土1・2）	第3面	不明鉄製品	(5.7)	0.4	0.3	5.8	
868	172	80・83	10区	1O-9d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明棒状鉄製品	(4.3)	0.6	0.5	3.4	
869	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土3）	第3面	不明鉄製品	(2.3)	0.3	0.4	1.7	
870	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明棒状鉄製品	(2.2)	0.3	0.2	0.3	
871	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明棒状鉄製品	(5.7)	0.5	0.6	3.0	
872	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明棒状鉄製品	(3.8)	0.3	0.4	2.8	
873	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明棒状鉄製品	(4.1)	0.4	0.2	1.2	
874	172	80・83	10区	1O-8d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明棒状鉄製品	(4.8)	0.4	0.2	6.7	
875	172	80・83	10区	1O-8c・d	281 土坑（埋土1・2）	第3面	不明棒状鉄製品	(2.6)	0.6	0.4	1.4	
876	172	80・83	10区	1O-8c・d	281 土坑（埋土4～6）	第3面	不明棒状鉄製品	(4.9)	0.4	0.4	3.1	
887	75	81・83	10区	1O-9d	296 流路	第4面	不明棒状鉄製品	(4.7)	0.6	0.5	5.8	

※ 石器・石製品および鉄製品の重量については、台石（62・194・266・267・306）を除いて電子天秤を使用して計測した。

写 真 図 版

５区から出土した熔着した須恵器

1．調査地上空より大阪方面を望む

2．成合の集落側から遺跡が立地する丘陵を望む〔平成 23 年夏〕

1．調査前状況（2 区南半・3 － 1 区）〔4 － 1 区頂部から〕

2．調査前状況（2 区・3 － 1 区・4 － 1 区）〔3 － 2 区から〕

1．調査前状況（３－２区・４－１区）〔４－１区頂部から〕

2．調査前状況（11 － 1 トレンチを設定した遺跡南東側の谷筋部）〔５区裾部から〕

写真図版４　調査前状況

1．調査前状況（須恵器窯を検出した遺跡南東側斜面）〔東から〕

2．調査前状況（４－２区）〔北東から〕

1．調査前状況（6区）〔3－2区から〕

2．調査前状況（8区・9区）〔8区から〕

成合遺跡 11 － 1

1．11 － 1 トレンチ北半〔南西から〕

2．11 － 1 トレンチ 遺構（35 土坑）検出状況

3．11 － 1 トレンチ南半〔北東から〕

4．11 － 1 トレンチ南端部 石材・五輪塔検出状況

5．11 － 2 トレンチ〔南東から〕

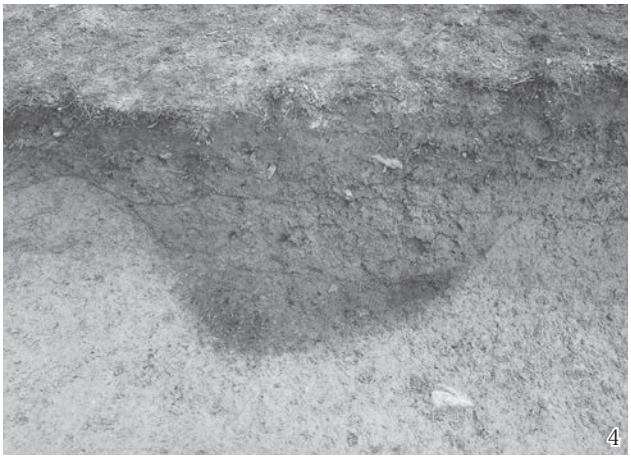
1. 11 － 4 トレンチ〔北東から〕
2. 11 － 4 トレンチ 炭・焼土検出状況
3. 11 － 5 トレンチ〔南東から〕
4. 11 － 6 トレンチ〔西から〕

5. 11 － 7 トレンチ〔南西から〕

1．12 － 4 トレンチ〔南東から〕

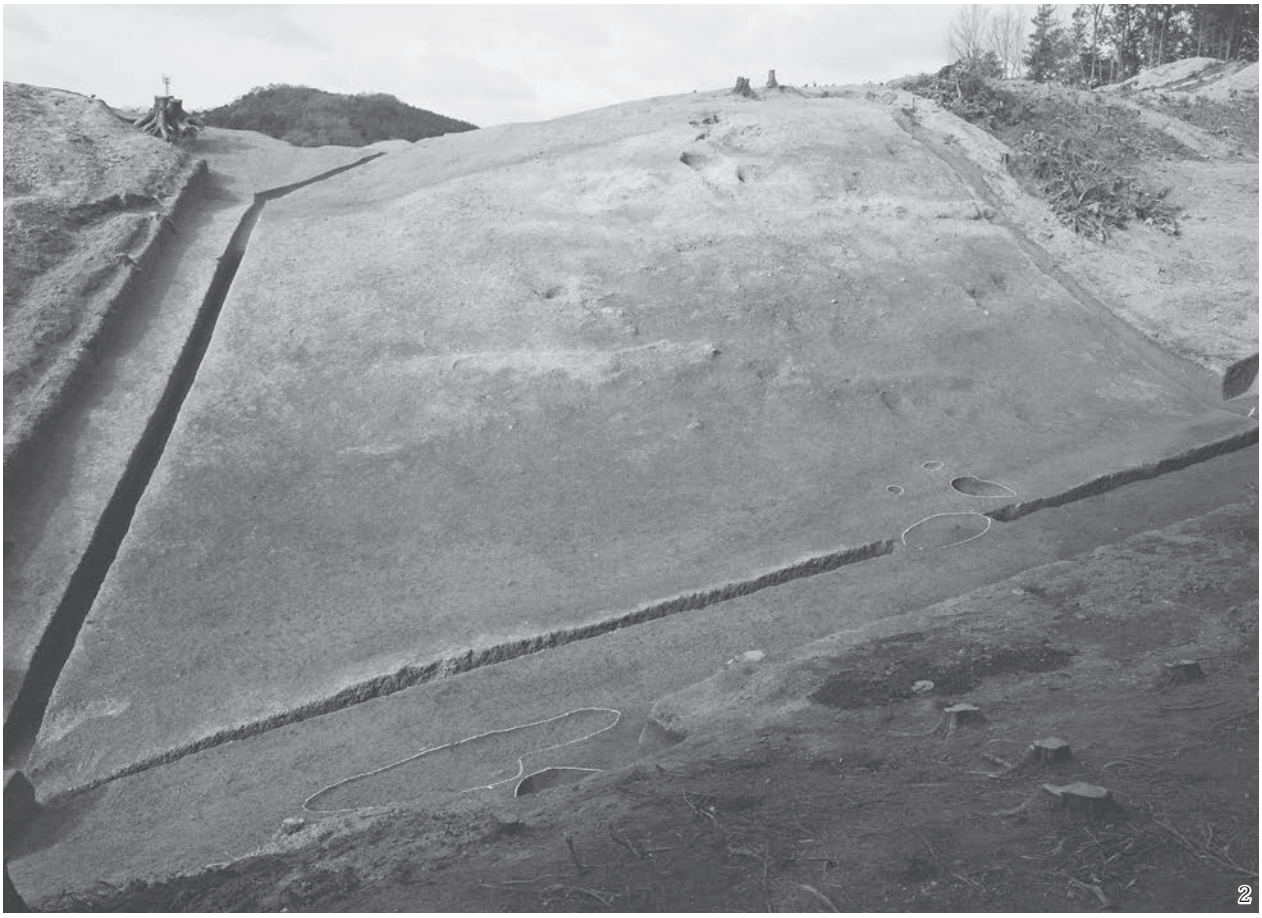
2．12 － 1 トレンチ〔南西から〕
3．12 － 1 トレンチ 遺構（101 土坑）検出状況
4．12 － 2 トレンチ〔北東から〕
5．12 － 3 トレンチ〔南西から〕

1．12 － 6 トレンチ〔東から〕

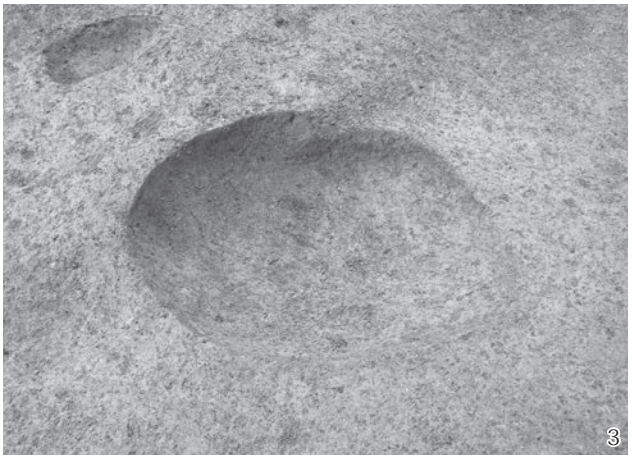


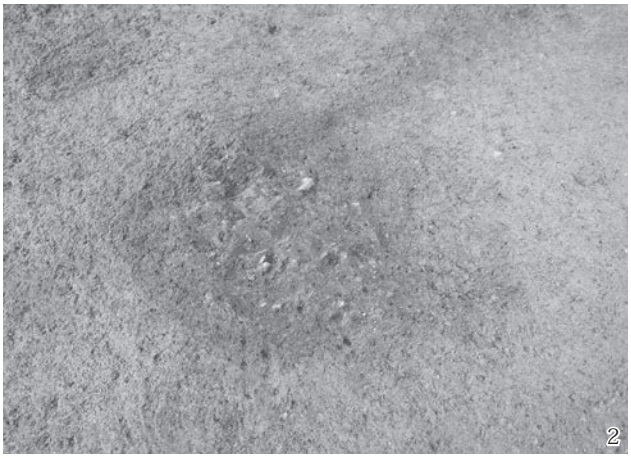
2．12 － 5・12 － 6 トレンチ 調査前状況
3．12 － 5 トレンチ〔北から〕
4．12 － 5 トレンチ 遺構（1 土坑）検出状況
5．12 － 7 トレンチ〔西から〕

1.　1 区 全景（奥にのびる調査区は 11 － 7 トレンチ）〔南西から〕

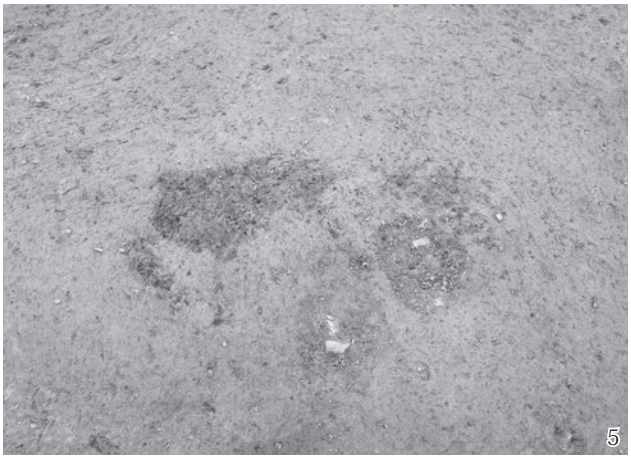


2.　1 区 全景〔南東から〕





1. 1 区 頂部先行調査箇所〔南西から〕
2. 35 土坑 検出状況
3. 35 土坑（奥は 106 ピット）
4. 36 土坑（奥は 35 土坑）



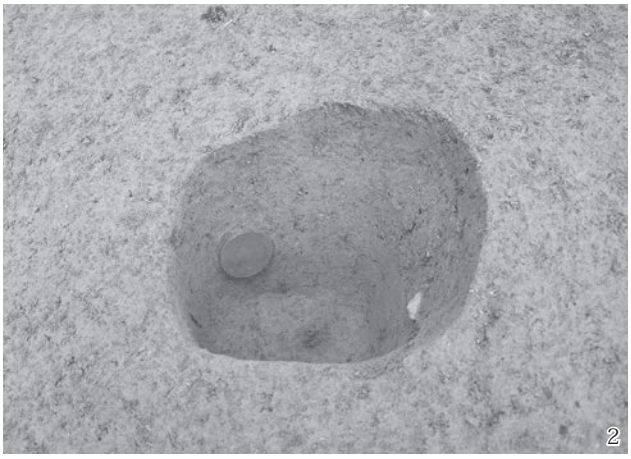
5. 102 土坑
6. 103 土坑
7. 104 土坑
8. 105 土坑（奥は 104 土坑）

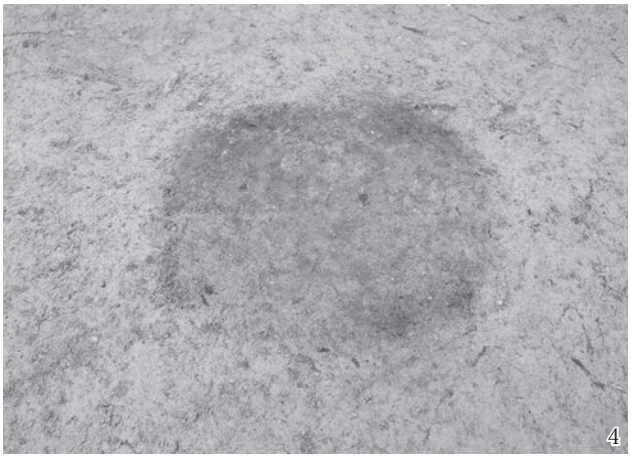
1. 2区 全景〔北から〕

2. 2区 南半部全景（竪穴建物1・2）〔東から〕

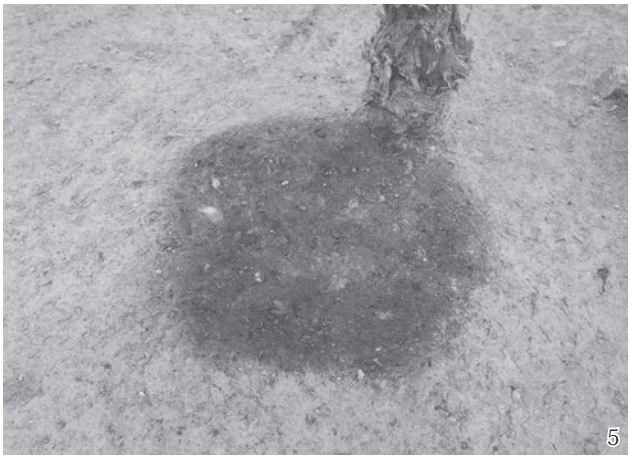
1．掘立柱建物１（手前円形の遺構は竪穴建物３）〔南から〕

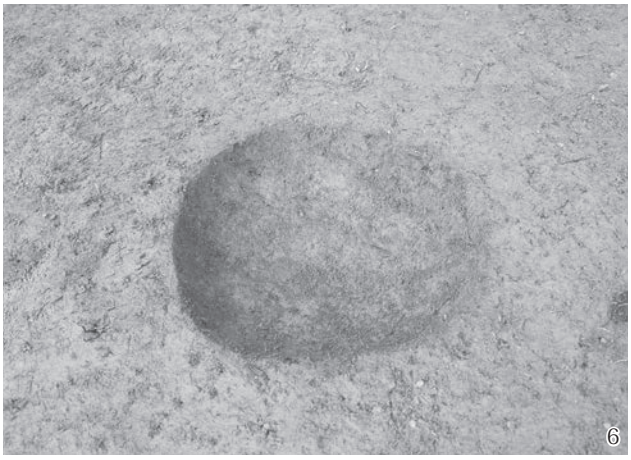
2．21・22・23 土坑〔西から〕

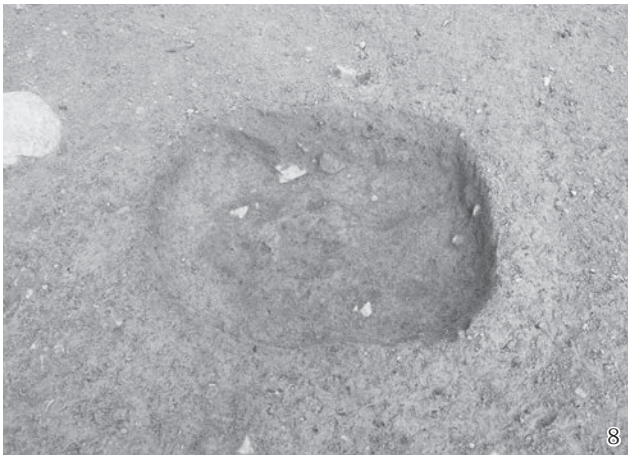




1. 掘立柱建物２
2. 81 ピット（掘立柱建物１）土器出土状況
3. 31 土坑
4. 32 土坑 検出状況







5. 33 土坑 検出状況
6. 37 土坑
7. 39 土坑
8. 79 土坑

1．竪穴建物１〔南から〕

2．竪穴建物２〔東から〕

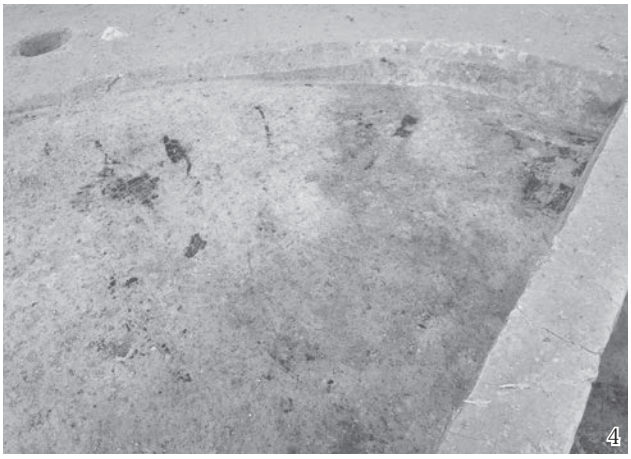
1．竪穴建物３〔南西から〕

2．竪穴建物１ 炭化材検出状況

1. 55 土坑（竪穴建物２の中央土坑）

2. 44 土坑

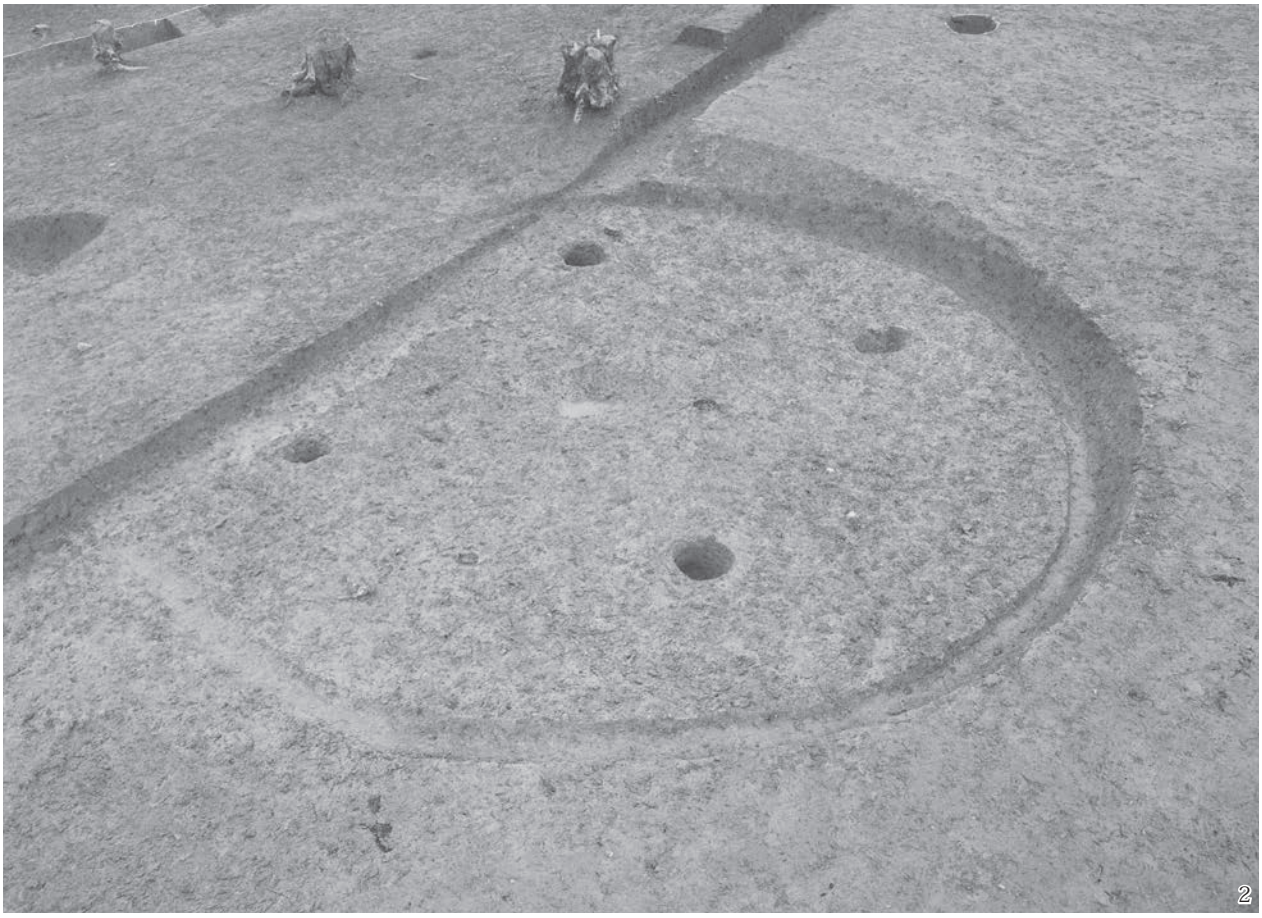
3. 66 土坑



4. 竪穴建物３ 焼土・炭化材検出状況

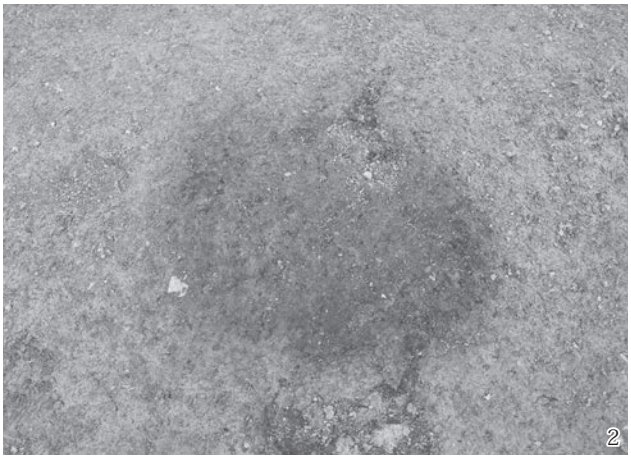
5. ３－１区 全景〔北から〕

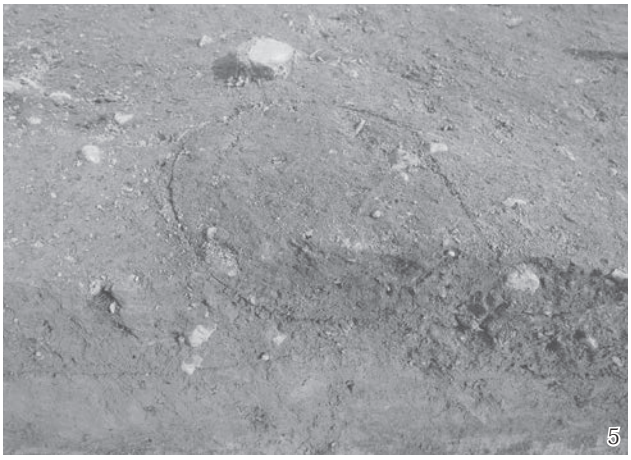
1. 竪穴建物５〔南から〕



2. 竪穴建物６〔南西から〕

1. 竪穴建物 7 〔東から〕

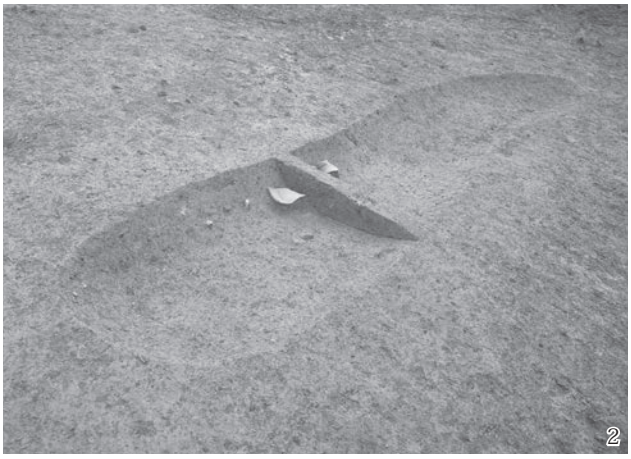




2. 115 土坑 検出状況
3. 116 土坑
4. 117 土坑
5. 122 土坑 検出状況

成合遺跡 11 － 1

1. 123・124 土坑



2. 125 土坑

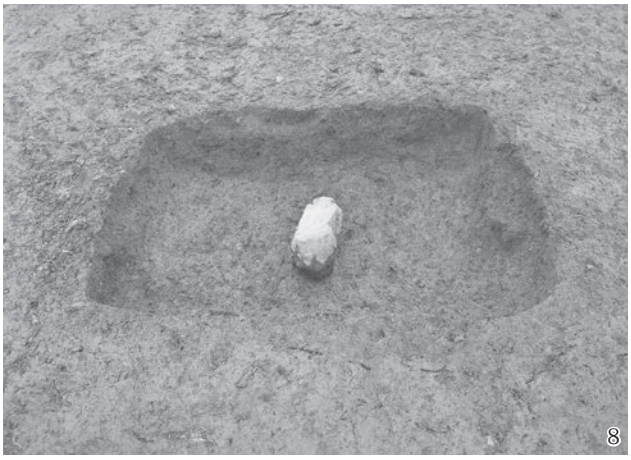
3. 125 土坑 土器出土状況

4. 134 土坑

5. 135 土坑

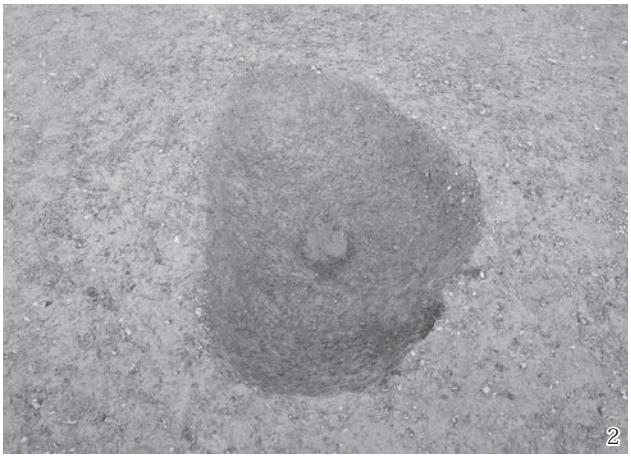
6. 139 土坑 検出状況

7. 140 土坑



8. 141 土坑

1. 142 土坑



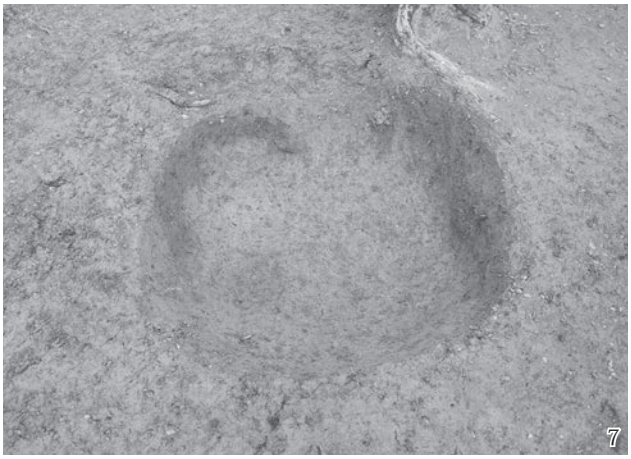
2. 165 土坑

3. 166 土坑

4. 166 土坑 土器出土状況

5. 175 土坑（竪穴建物 5 中央土坑）

6. 178 土坑



7. 179 土坑

8. 195 土坑 焼土検出状況

1．３－２区 全景〔南東から〕

2．360 石列および 350 溝〔北東から〕

1．竪穴建物９〔北西から〕

2．竪穴建物 10〔南東から〕

1. 327 土坑

2. 327 土坑 石鏃出土状況

3. 328・329 土坑

4. 336 土坑

5. 343 土坑

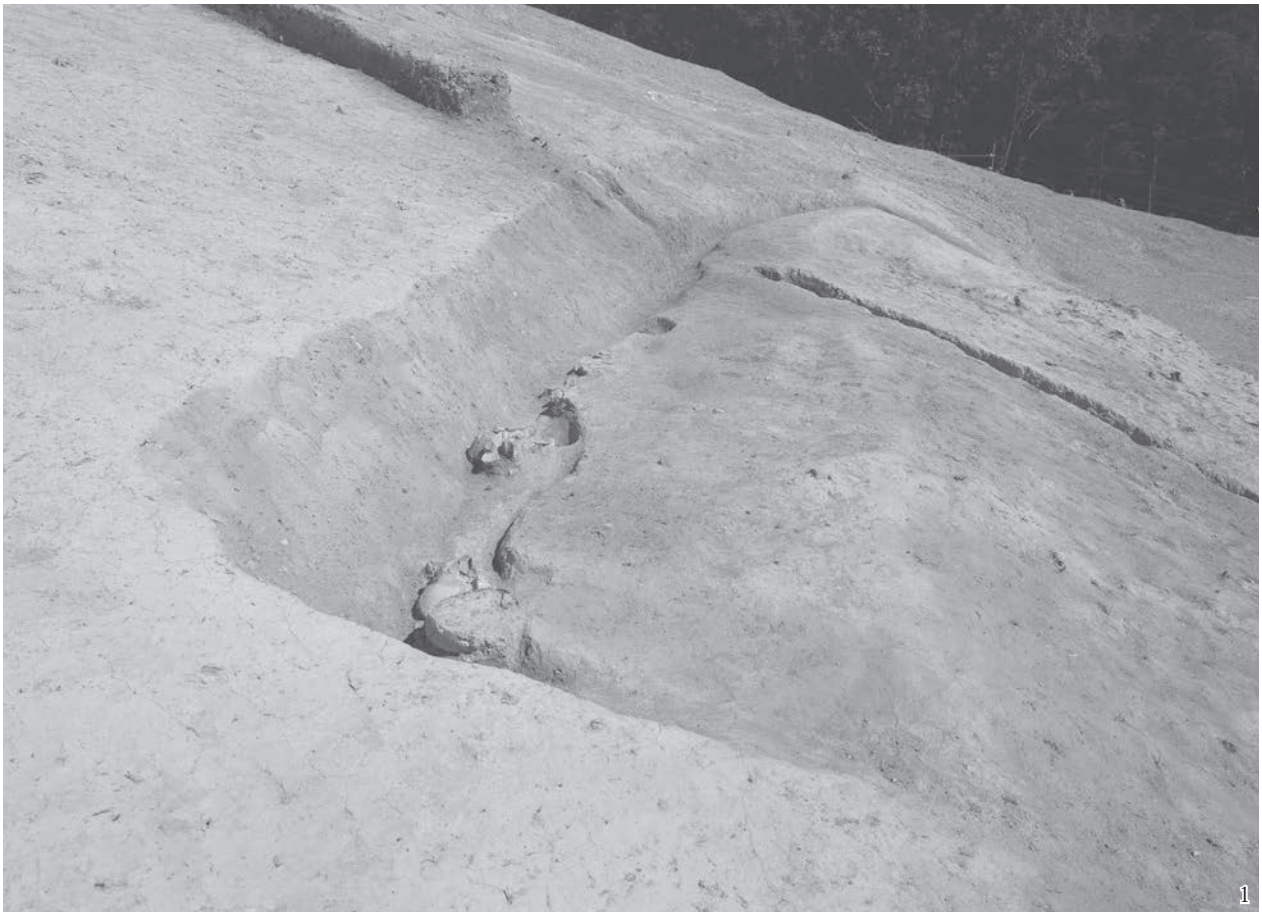
6. 345 土坑

7. 346 土坑 土器出土状況

8. 390 土坑

1．4－1区 全景〔南西から〕

2．4－1区 全景（頂部背後の森は古曽部・芝谷遺跡）〔北東から〕



1．段状遺構２〔北西から〕

2．竪穴建物 11〔南西から〕

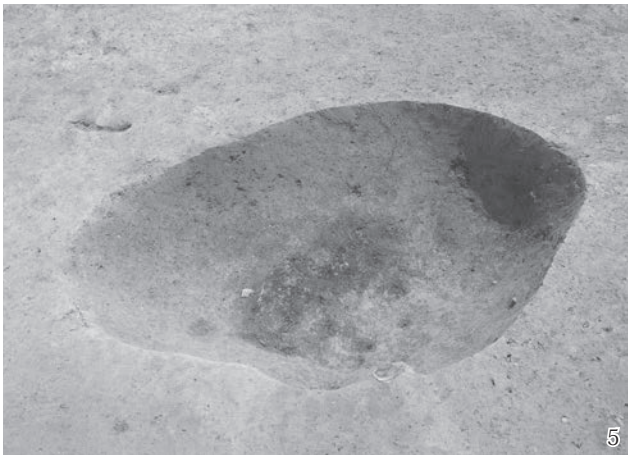
1. 439 土坑（竪穴建物 11 の中央土坑）
2. 段状遺構 1
3. 段状遺構 2 土器出土状況
4. 段状遺構 3

5. 段状遺構 4
6. 段状遺構 4 石器出土状況
7. 段状遺構 4 石器出土状況
8. 段状遺構 4 石器出土状況

成合遺跡 11 － 1

1. 段状遺構 5
2. 段状遺構 6

3. 段状遺構 6 土器出土状況
4. 段状遺構 7 ・407 土坑



5. 403 土坑
6. 404 土坑

7. 388 溝・389 土坑
8. 393 土坑 土器出土状況

1．古墳２（奥は古墳３）〔南西から〕

2．古墳３
3．394 土坑 検出状況
4．396 土坑 検出状況
5．428 ～ 434 ピット 検出状況

1. 4 － 2区（11 － 3トレンチ）第1面全景〔北北東から〕
2. 4 － 2区 第1面全景〔北東から〕
3. 85 土坑
4. 88 土坑 検出状況

5. 89 土坑
6. 470 土坑
7. 471 土坑
8. 473 土坑

1. 4 － 2 区 第 2 ・ 3 面全景〔北東から〕

2. 4 － 2 区（11 － 3 トレンチ）第 2 ・ 3 面全景〔北東から〕
3. 472 土坑 土器出土状況
4. ピット検出状況
5. 479 土坑

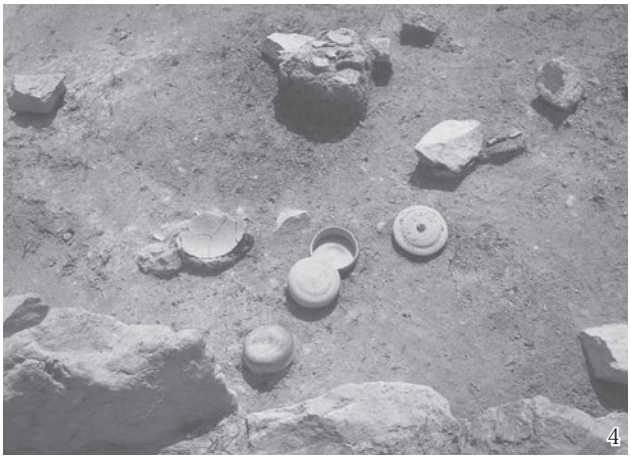
1. 竪穴建物 13・14・15〔北東から〕

2. 竪穴建物 14 土器出土状況
3. 竪穴建物 4
4. 474 土坑 土器出土状況
5. 99・485 落ち込み

1. 古墳 1 石室全景〔南から〕

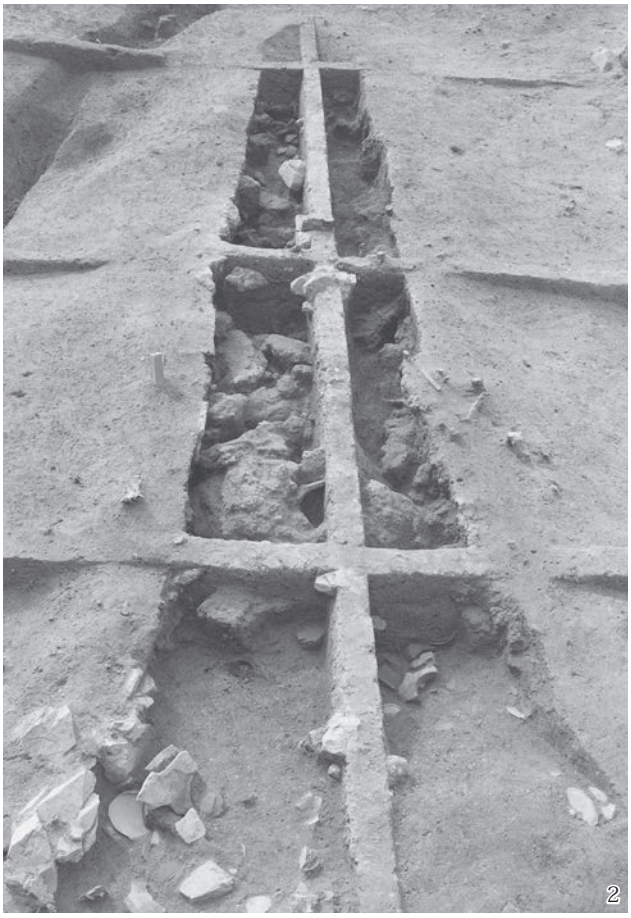
2. 古墳 1 石室全景〔奥壁側から〕

3. 古墳 1 遺物出土状況（奥壁側）

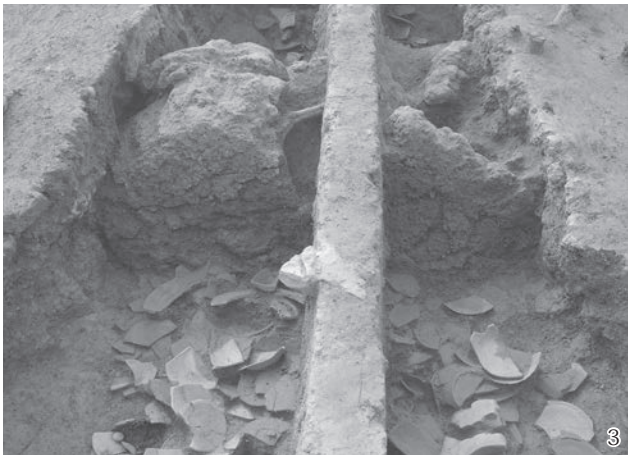


4. 古墳 1 遺物出土状況（開口部側）

1．須恵器窯 検出状況〔南東から〕



2．須恵器窯 天井部崩落状況



3．須恵器窯 天井部崩落状況（横断面）

4．須恵器窯 天井部崩落状況（縦断面）

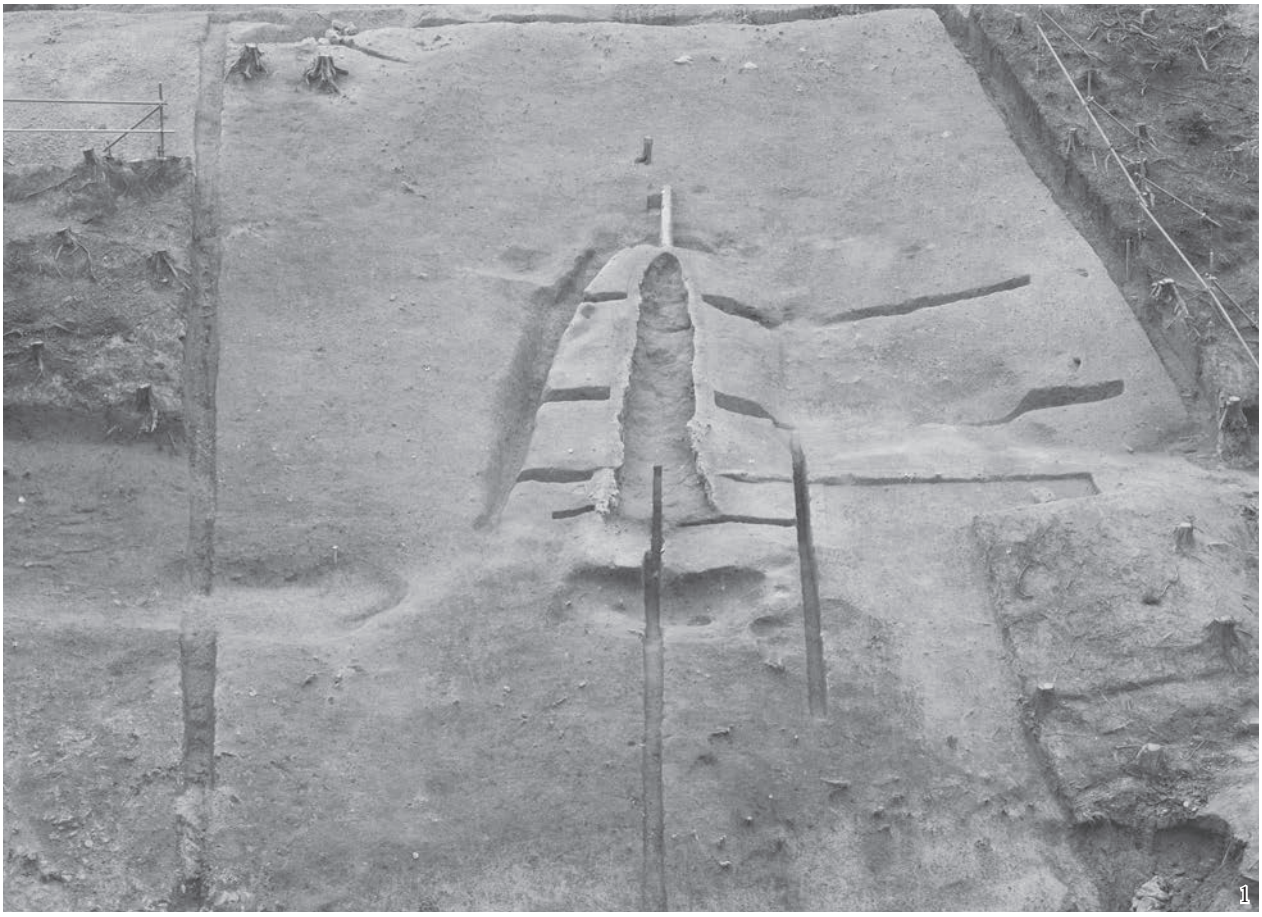
1．須恵器窯 最終床面遺物出土状況〔南東から〕

1．須恵器転用焼台検出状況（排煙口付近）

2．須恵器窯 最終床面検出状況〔南東から〕

3．窯壁に残るナデ付け痕跡（焼成部左側壁）

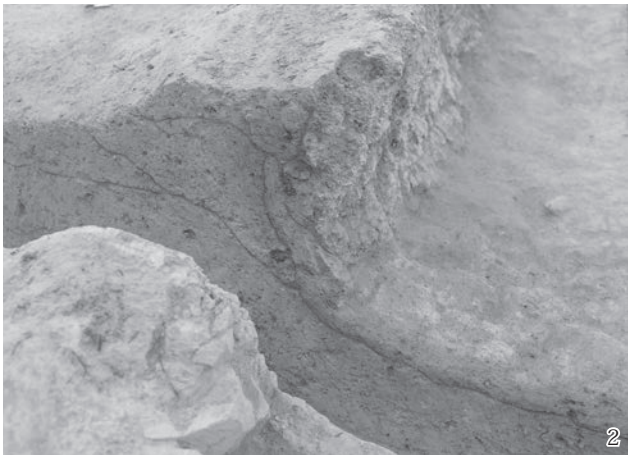
4．石組側壁（焚口部左側壁）



1．須恵器窯および周辺付属遺構 完掘状況〔南東から〕

2．須恵器窯および周辺付属遺構 完掘状況〔東から〕

1．窯体 断ち割り横断面（D-D' 断面）



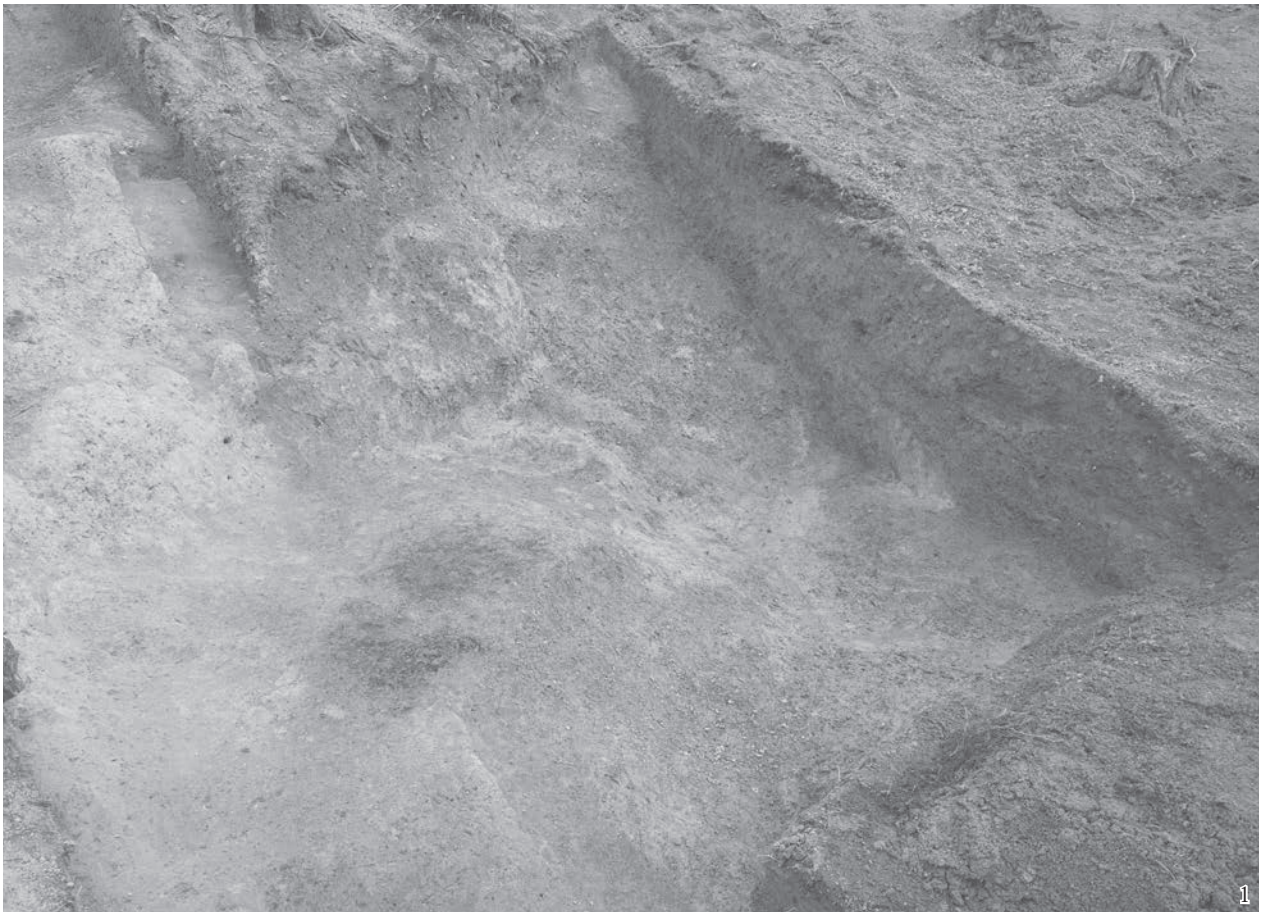
2．窯体 断ち割り横断面（E-E' 断面）
3．前庭部 断ち割り横断面（F-F' 断面）
4．前庭部 断ち割り縦断面
5．須恵器窯 掘方検出状況

1. 462 灰原
2. 450 溝（窯体西側）断面
3. 450 溝（排煙口上方）上層遺物出土状況
4. 450 溝（排煙口上方）断面

5. 452 土坑平坦面
6. 454 土坑
7. 455・456 土坑
8. 372 土坑

1．6区 全景〔東から〕

2．1土坑
3．2土坑
4．3土坑
5．4土坑



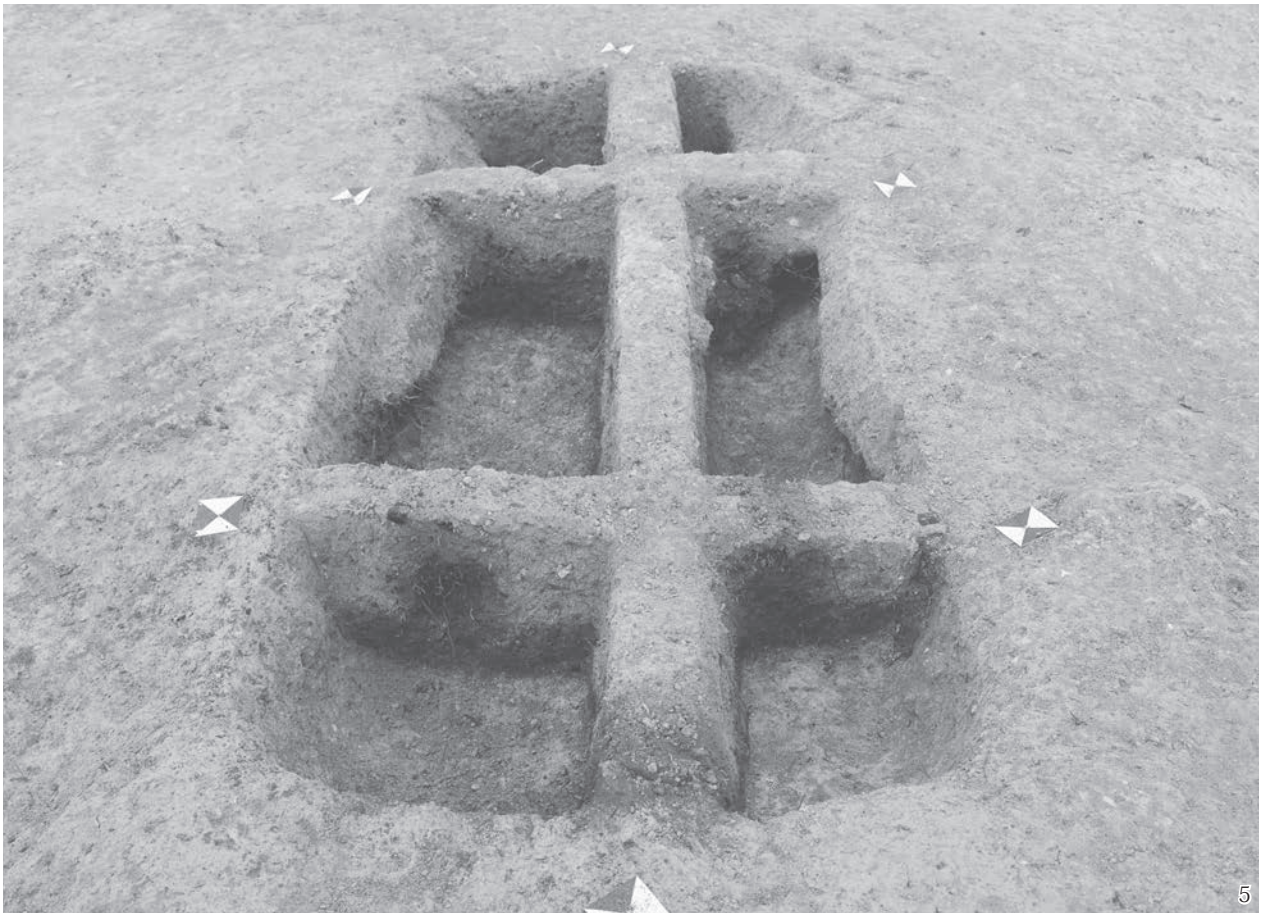
1. 7区 全景〔西から〕

2. 8区 全景〔北西から〕

1．8区 全景〔南東から〕

2．361 土坑
3．362 土坑 検出状況
4．363 土坑 検出状況
5．364 土坑 検出状況

1. 365 土坑 検出状況
2. 366 土坑 検出状況
3. 368 土坑
4. 369 土坑 検出状況



5. 371 土坑〔北から〕

写真図版44　8区・9区遺構

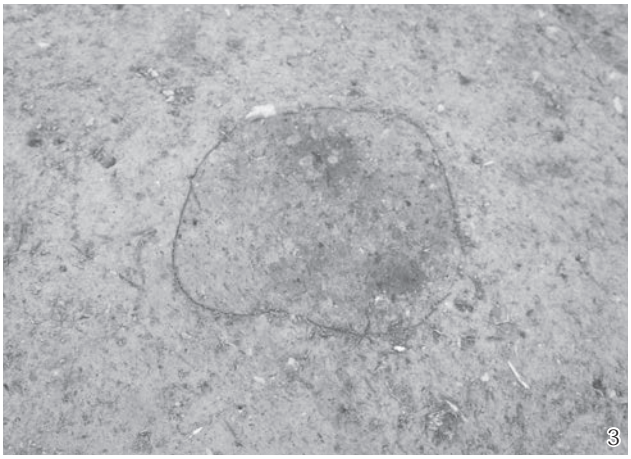
1. 370 土坑 検出状況

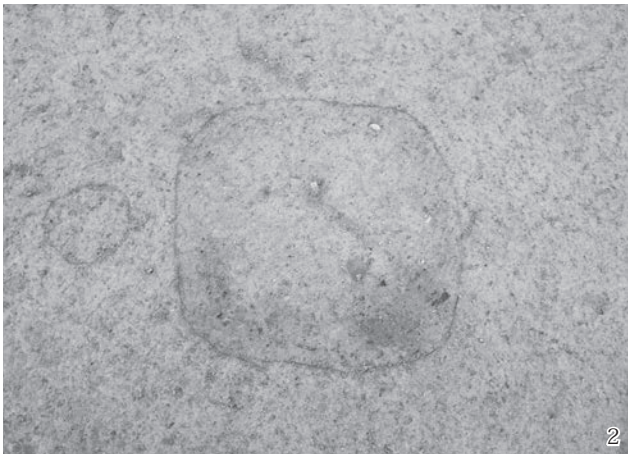
2. 373 土坑

3. 374 土坑

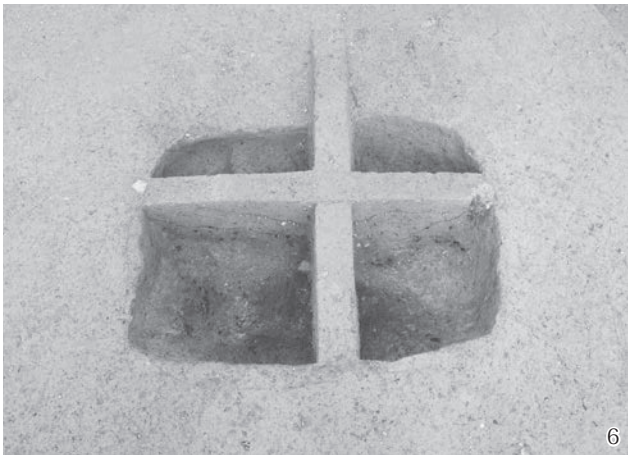
4. 石製品出土状況

5. 9区 全景〔南から〕





2．9区 北側斜面全景〔北西から〕
3．552 土坑 検出状況
4．557 土坑 検出状況
5．558 溝 検出状況

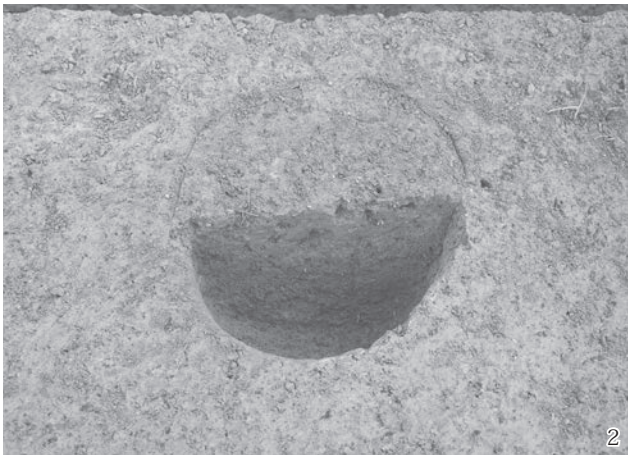


6．561 土坑
7．562 土坑
8．566 土坑
9．570 ピット

1．10 区 第２・３面検出遺構〔東から〕

2．10 区 第 1 面全景〔南から〕
3．200 土坑
4．281 土坑
5．281 土坑 鉄釘出土状況

1．10 区 第 4 面全景（斜面裾のピットは第 3 面検出）〔南から〕



2．201 ピット

3．204 ピット

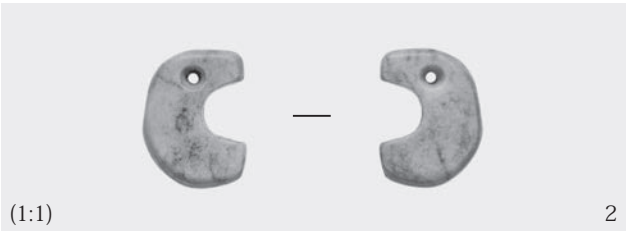
4．264 土坑

5．271 ピット

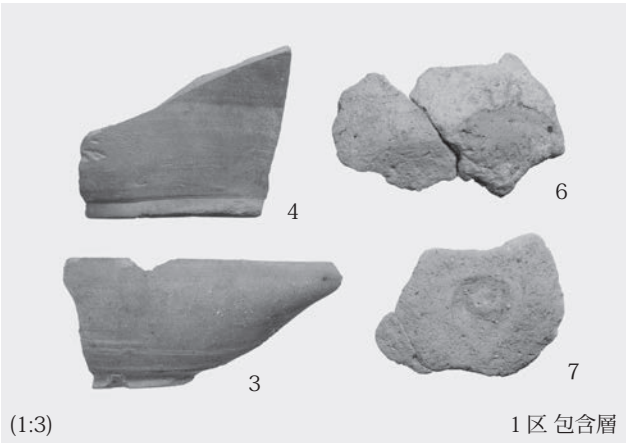
1．316 ピット
2．322 ピット
3．298 溝 断面
4．砂礫堆積状況（A-A' 断面）

5．10 区 第 5 面全景〔南から〕

1

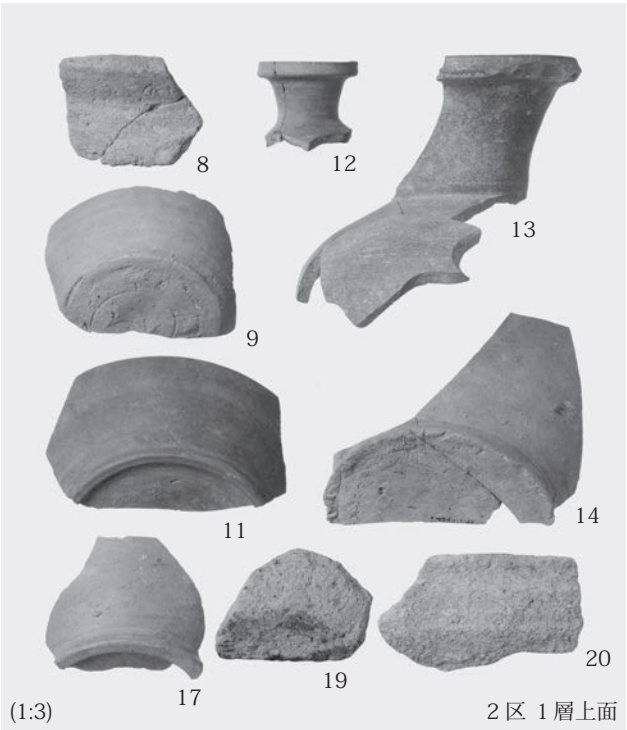


(1:1)　2



4　6　3　7

(1:3)　1区 包含層

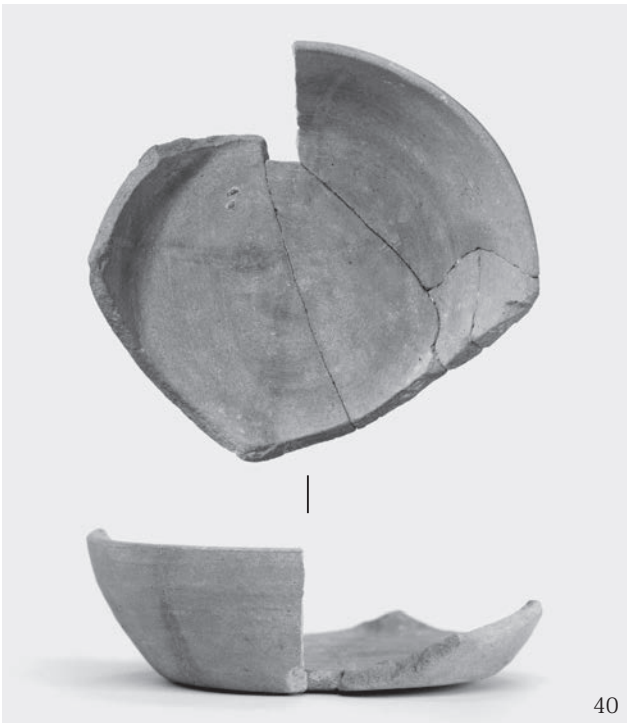


8　12　13　9　11　14　17　19　20

(1:3)　2区 1層上面

(1:3)　16

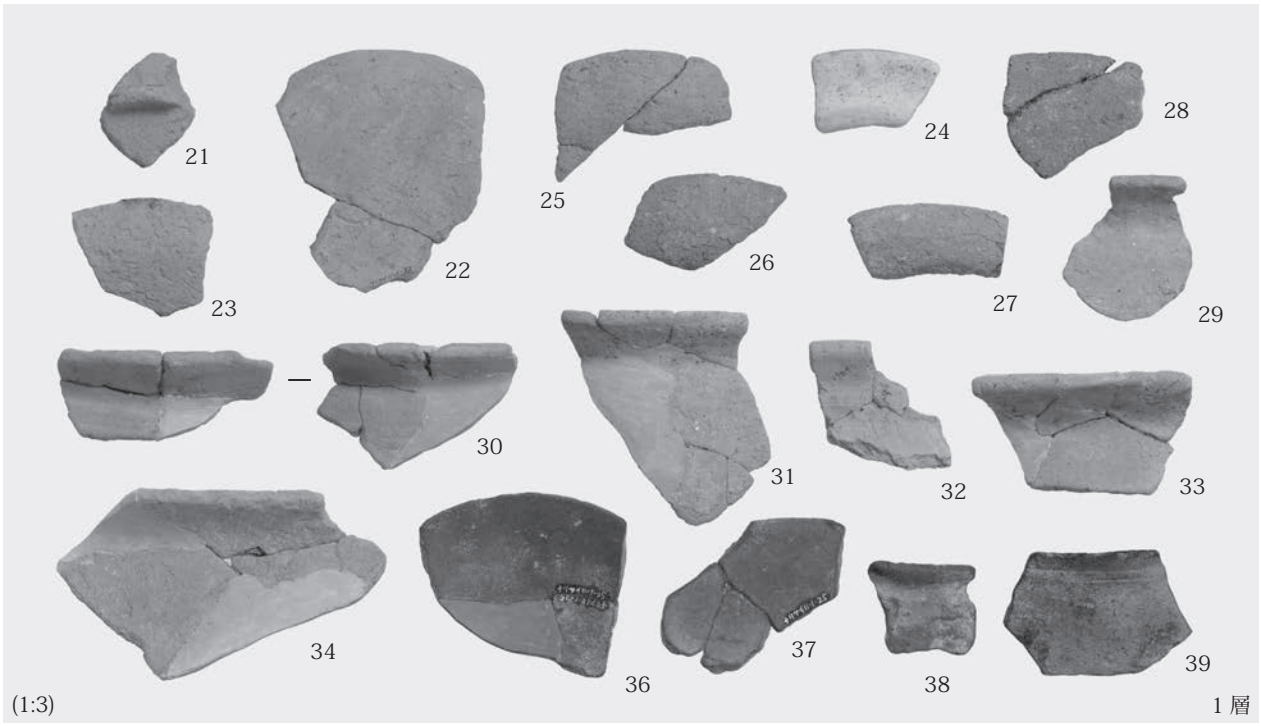
35

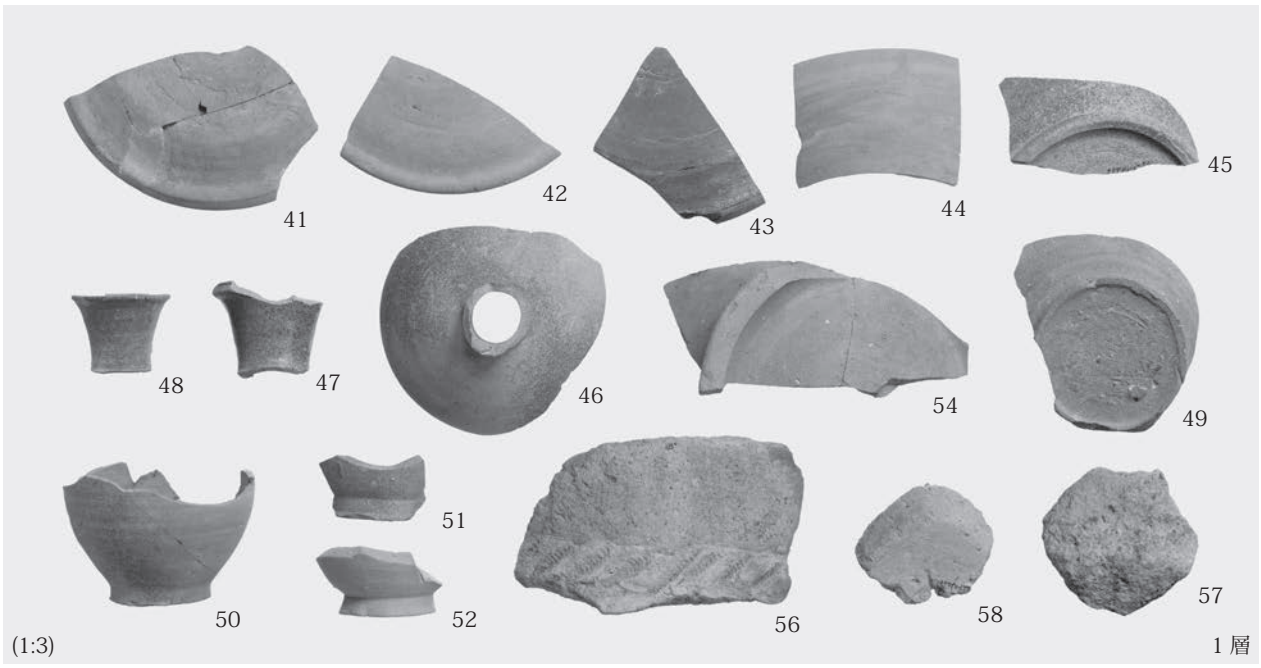


40

55

成合遺跡 11 － 1

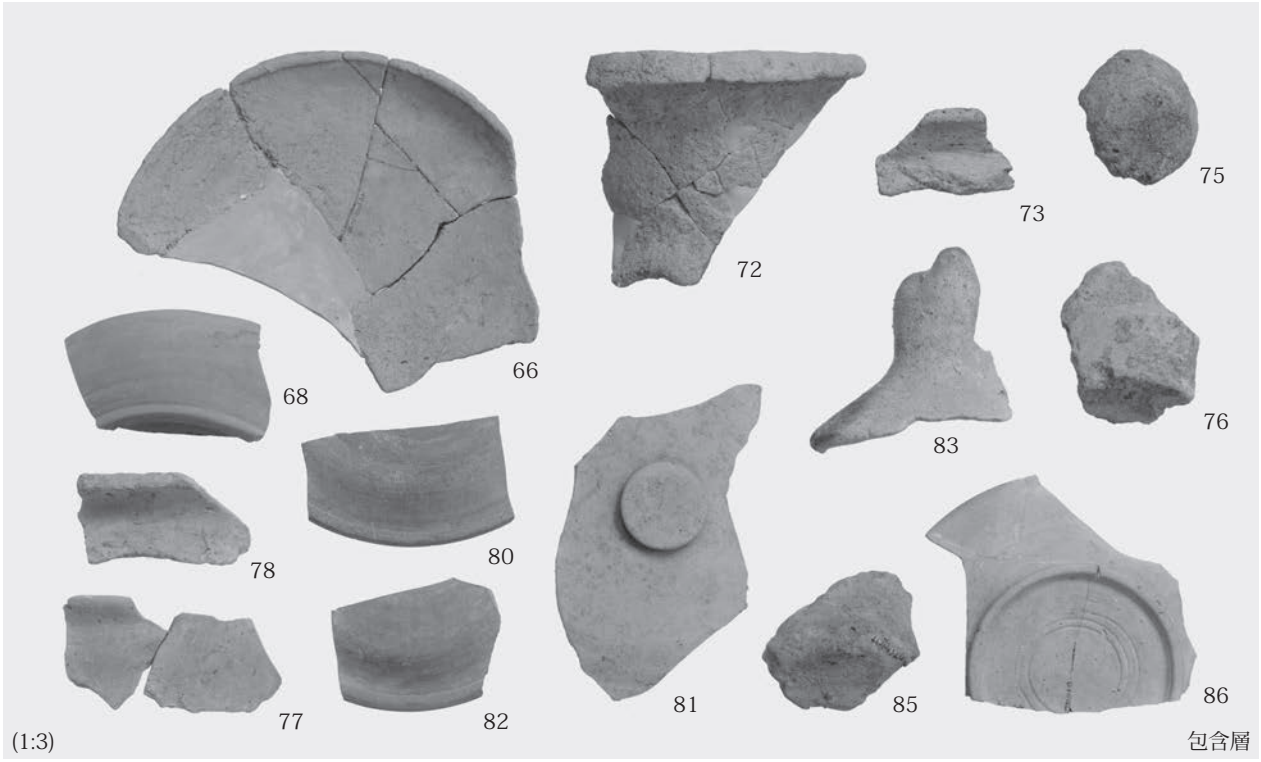

21
22
23
25
24
28
26
27
29
30
31
32
33
34
36
37
38
39
(1:3)
1 層


41
42
43
44
45
48
47
46
54
49
50
51
52
56
58
57
(1:3)
1 層

63

64

69
70



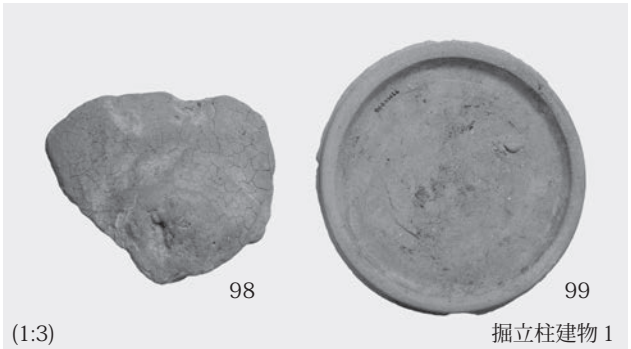
(1:3)　包含層

62

91

93

113

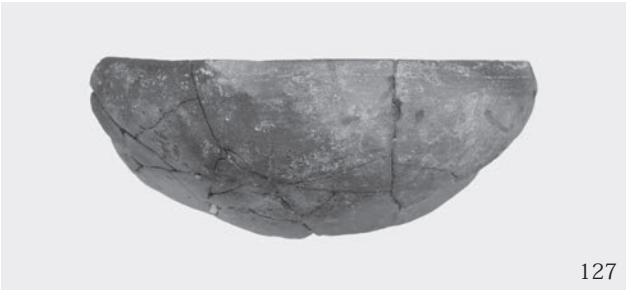


(1:3)　掘立柱建物 1

114

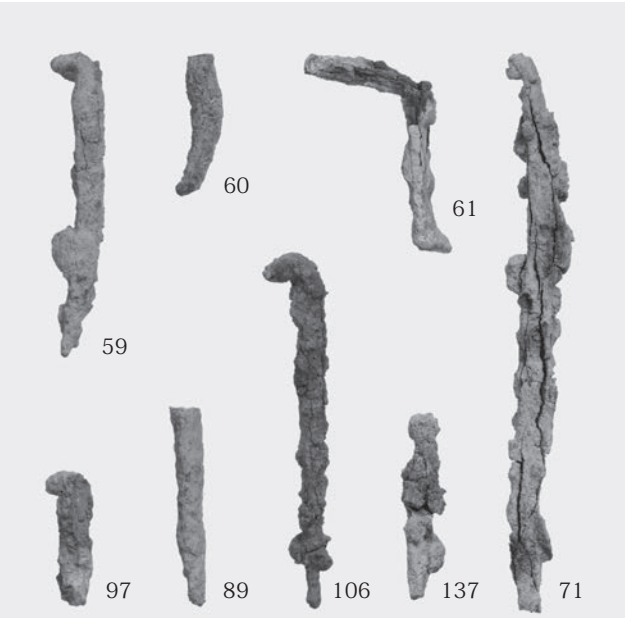
101

124

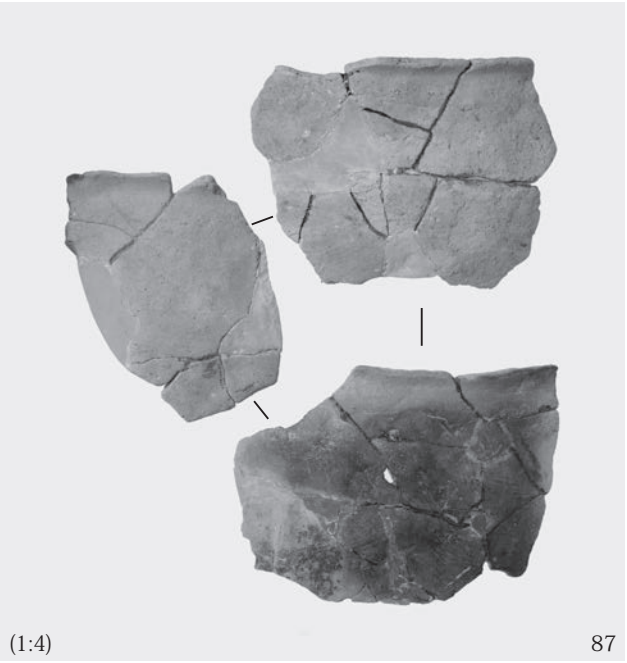

127

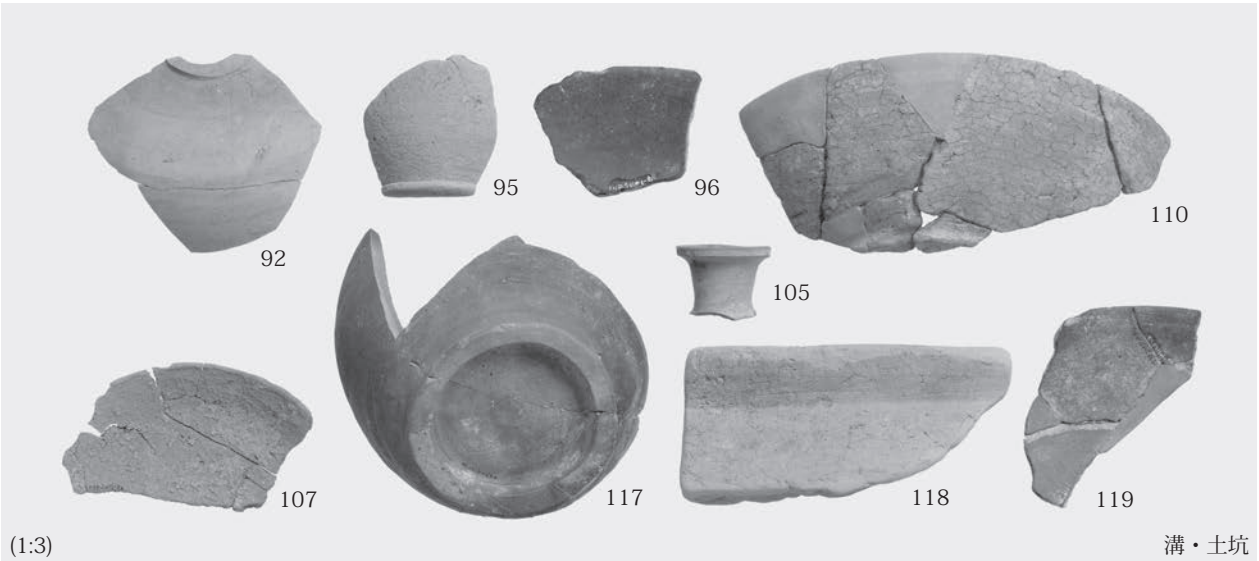
135

108　116

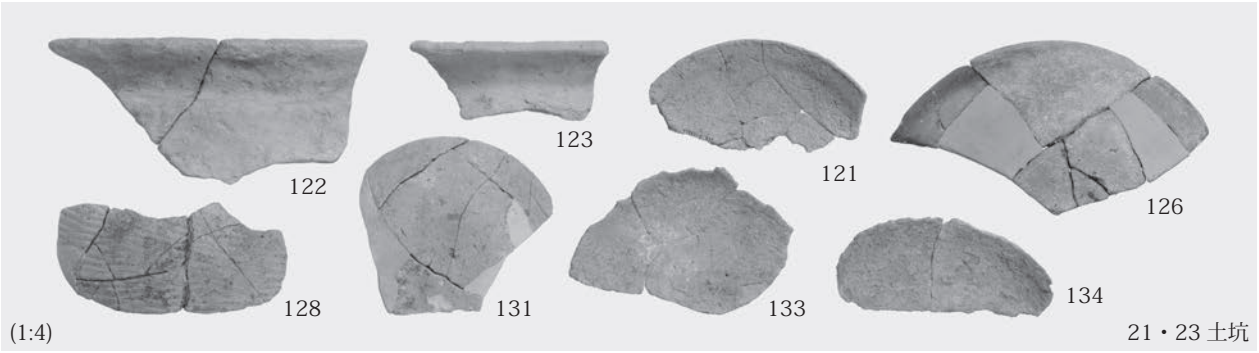

59　60　61　97　89　106　137　71

(1:2)　鉄製品

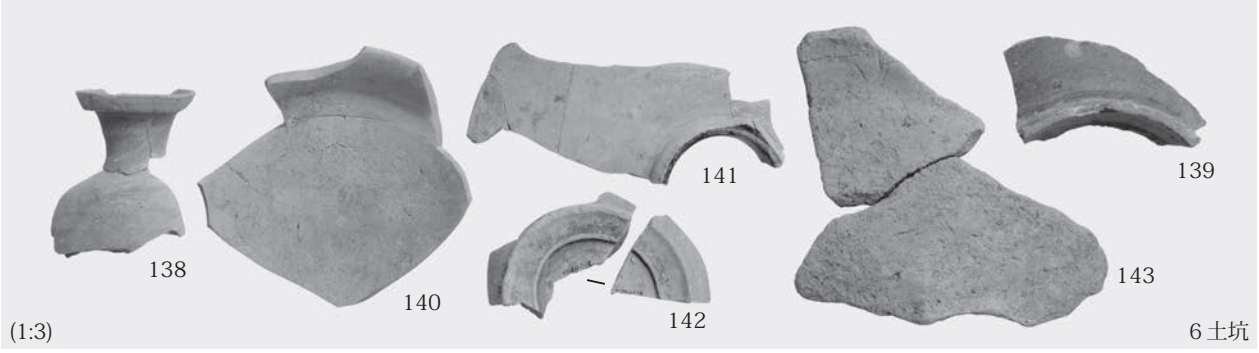

(1:4)　87


92　95　96　110　105　107　117　118　119

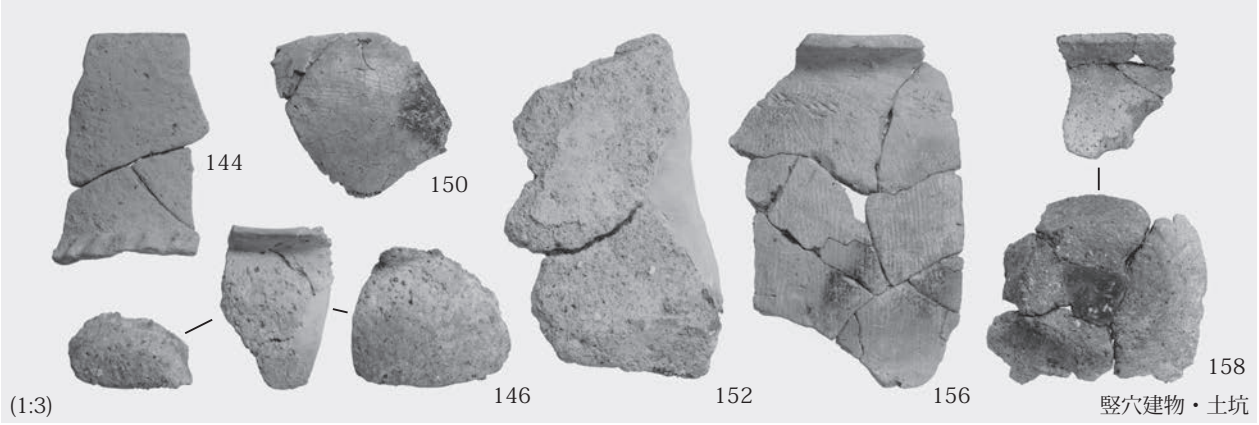
(1:3)　溝・土坑



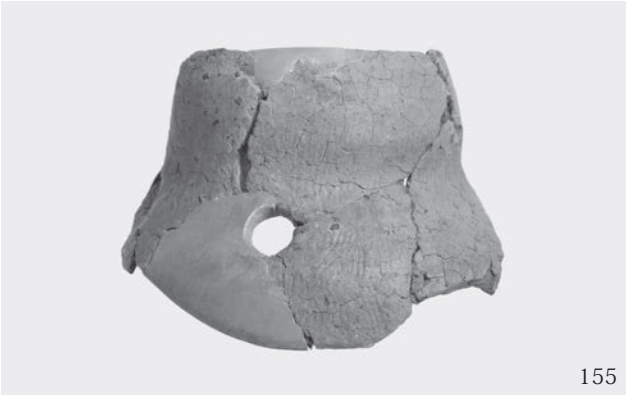
(1:4)　21・23 土坑



(1:3)　6 土坑

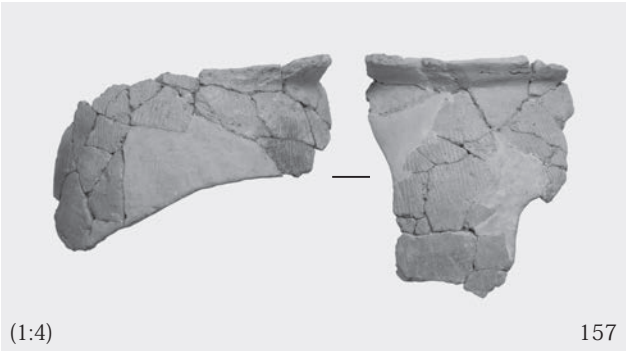


(1:3)　竪穴建物・土坑



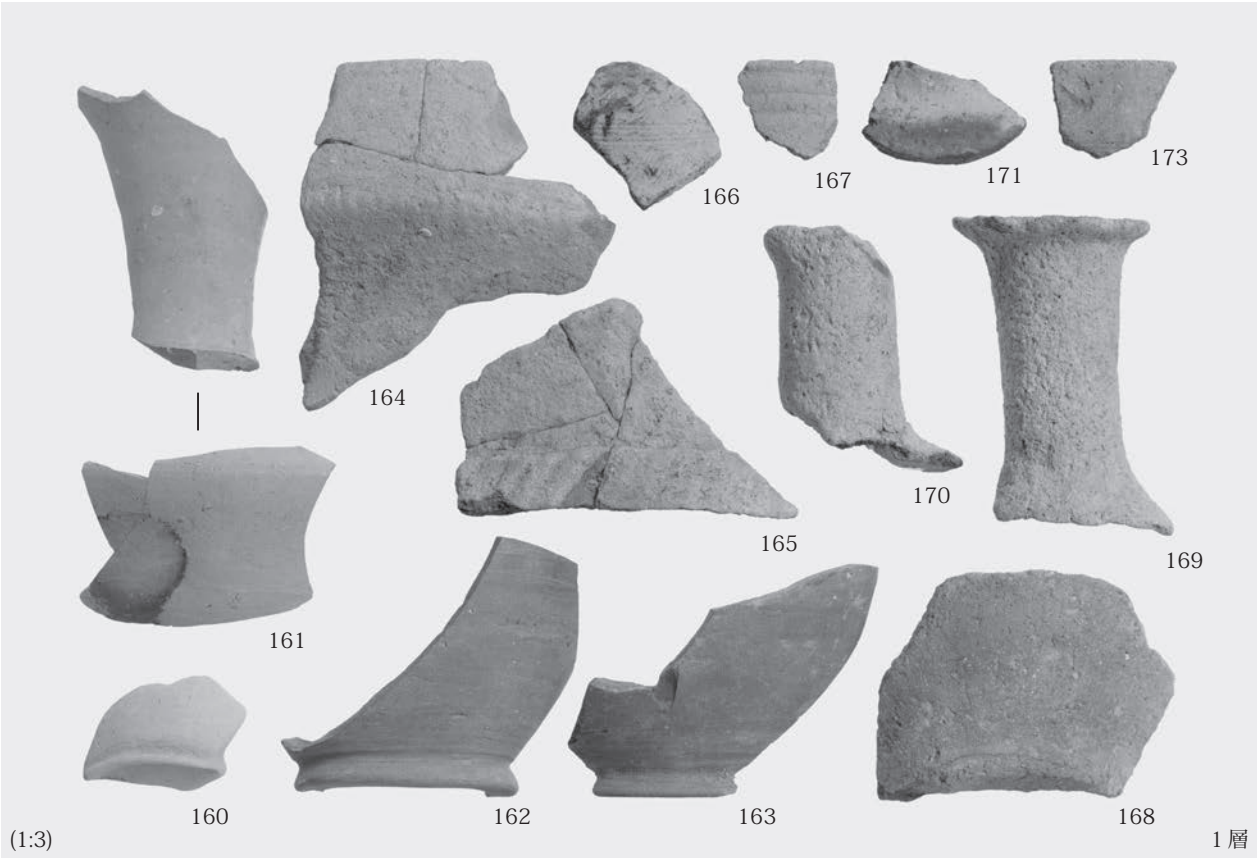
155

151



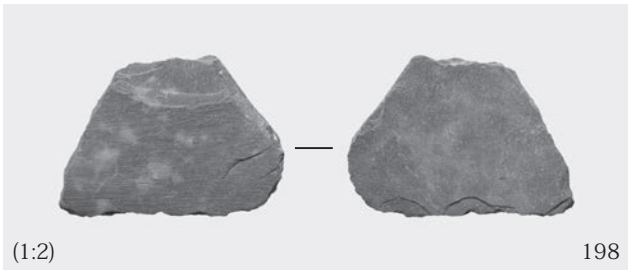
(1:4)　157

(2:3)　145

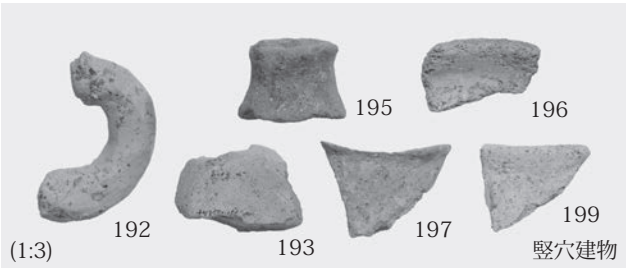


(1:3)　1層

(1:3)　土坑

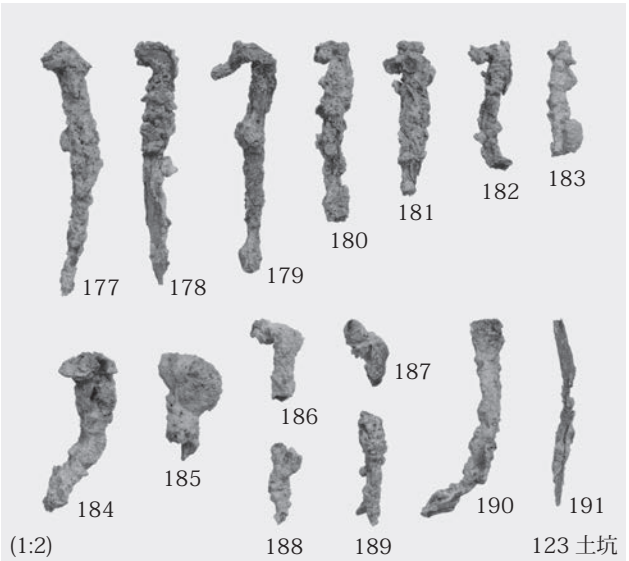


(1:2)　198



(1:3)　竪穴建物

194



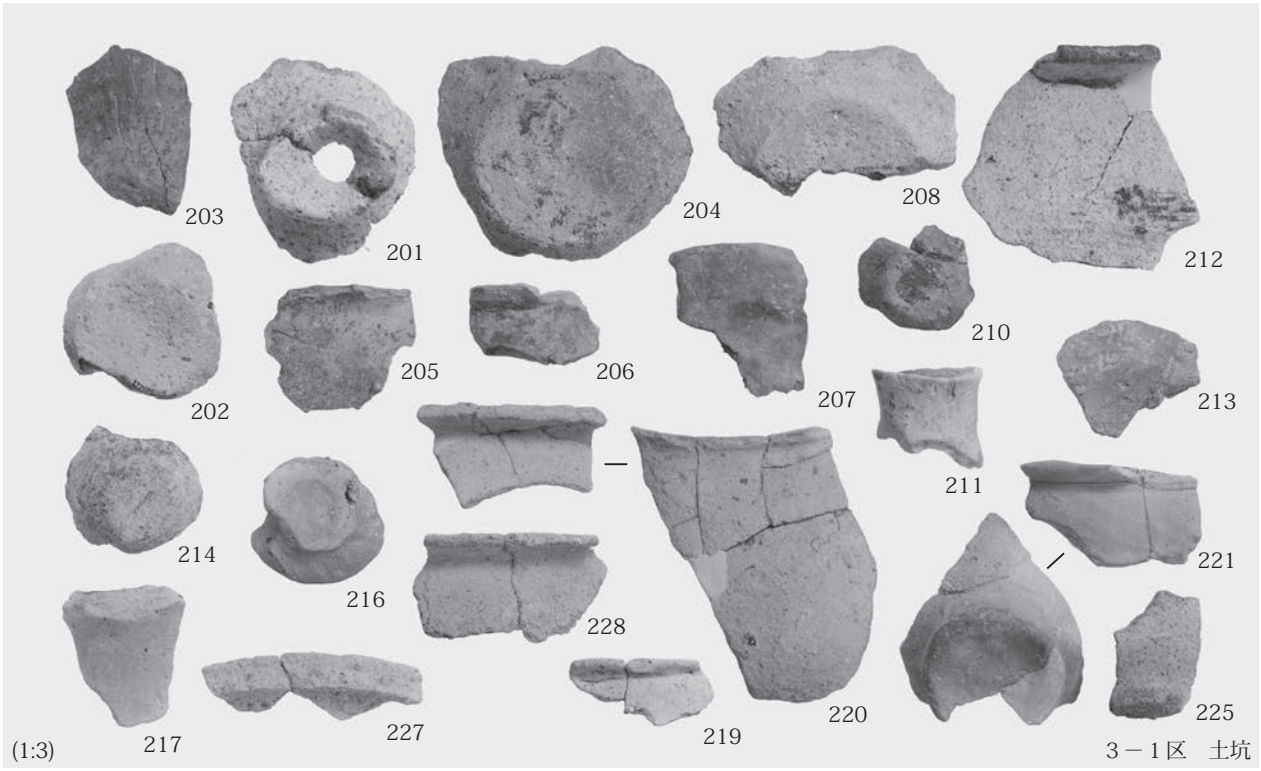
(1:2)　123 土坑

200

215

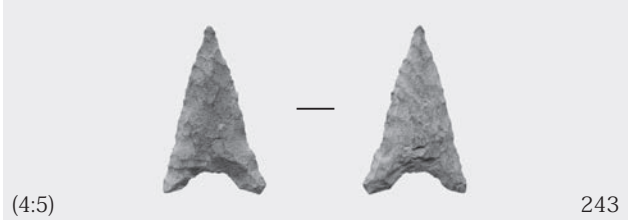
224

226



(1:3)　3－1区　土坑

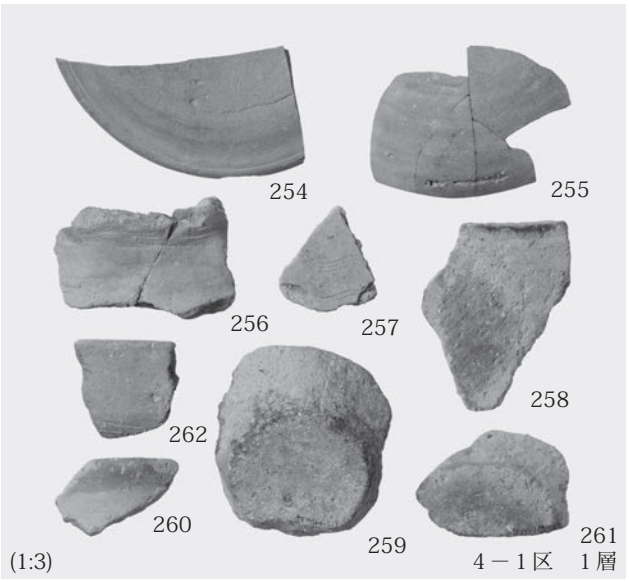
(1:3)　3－2区　1層・360石列

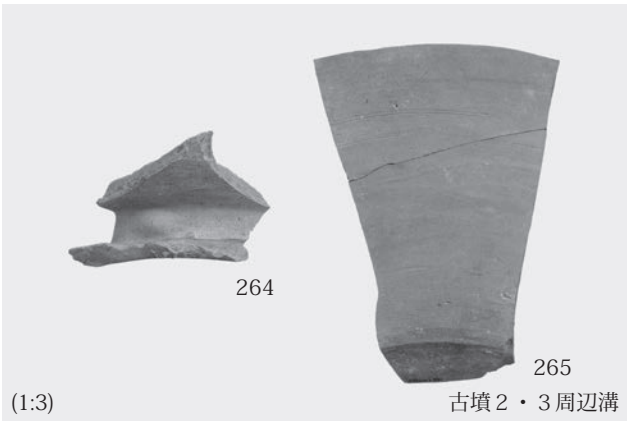

(4:5)　243

(1:4)　溝・土坑

成合遺跡 11 － 1

237
238
245
248
252
239
240
244
246
249
250
(1:3)
3－2区　竪穴建物・土坑


254
255
256
257
258
262
260
259
261
(1:3)
4－1区　1層

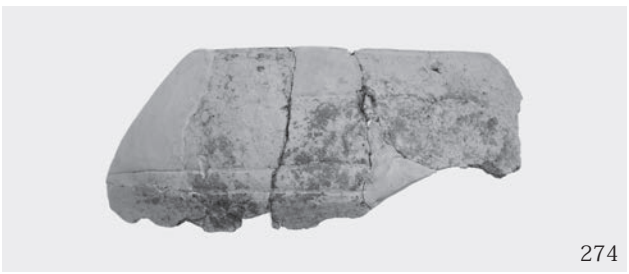

264
265
(1:3)
古墳2・3周辺溝

263

267
266
竪穴建物 11

268
269
段状遺構 1

272

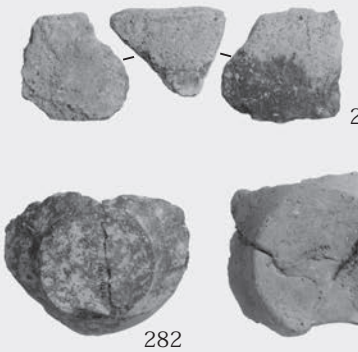

274

275

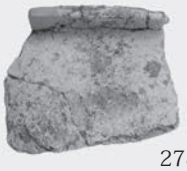
280

276

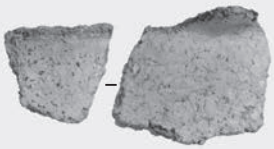
277



273



278



279

282

283

284

285

281

(1:3)

段状遺構 2

286

287

289

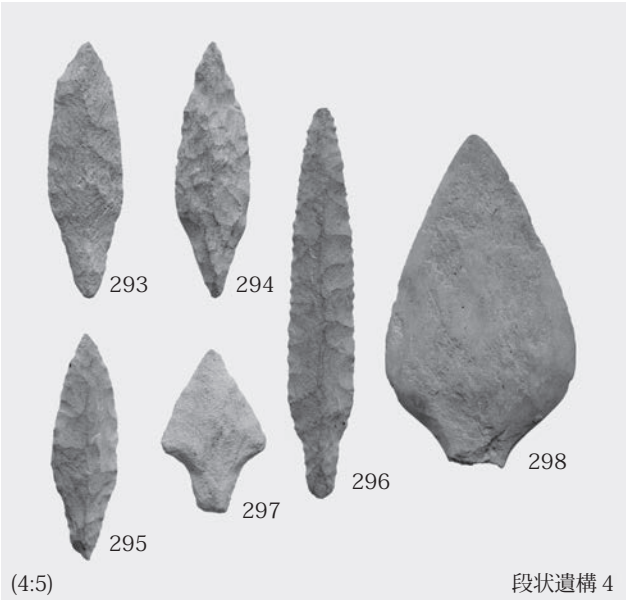
290

292

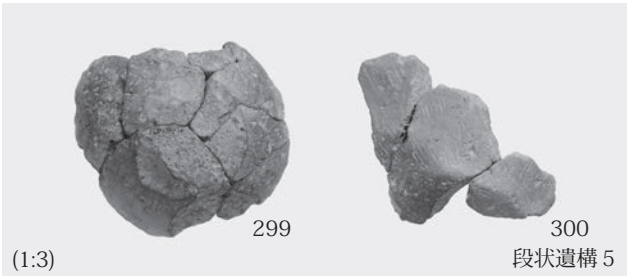
291

(1:3)

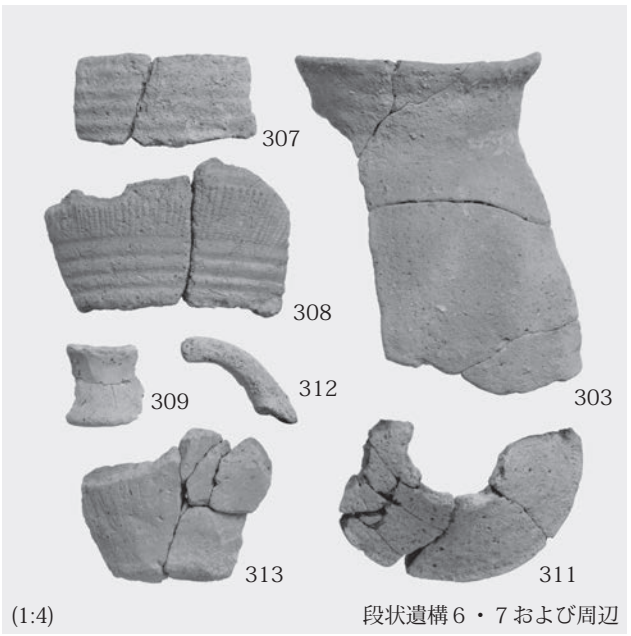
段状遺構 4



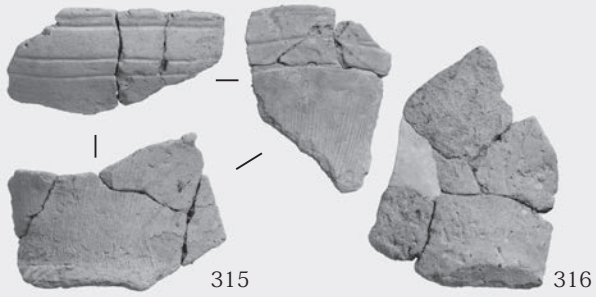
(4:5)　段状遺構 4



(1:3)　段状遺構 5



(1:4)　段状遺構 6 ・ 7 および周辺

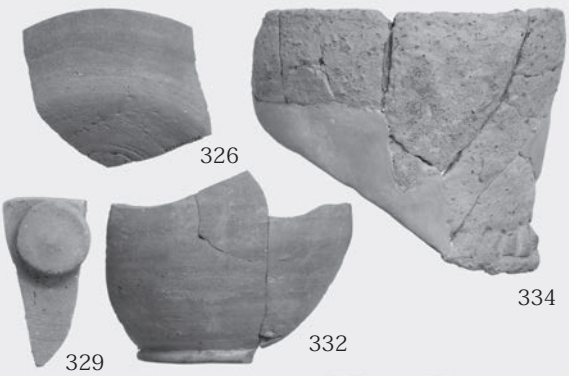


(1:4)　4 － 1 区　393 土坑

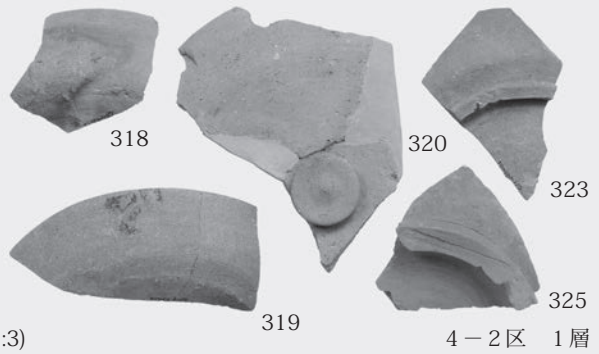
314

317

321

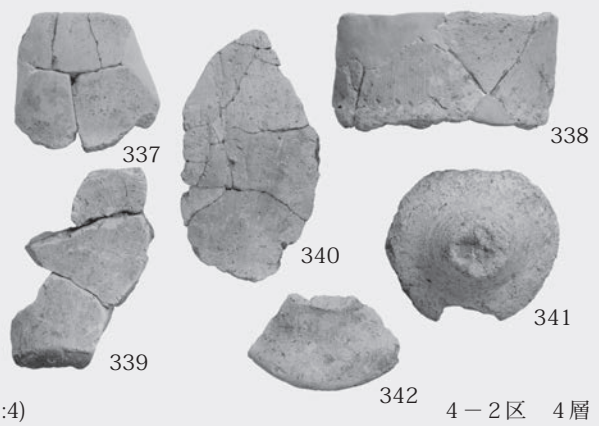


(1:3)　4 － 2 区　3 層



(1:3)　4 － 2 区　1 層

(1:3)　472 土坑



(1:4)　4 － 2 区　4 層

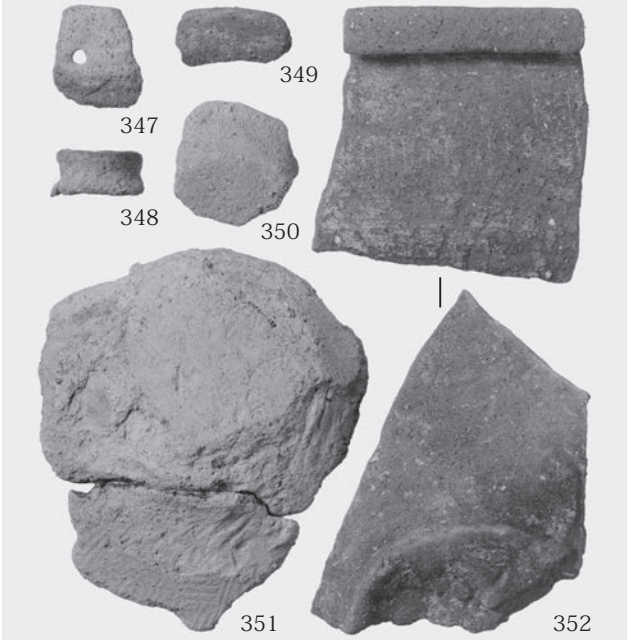
343

346　333

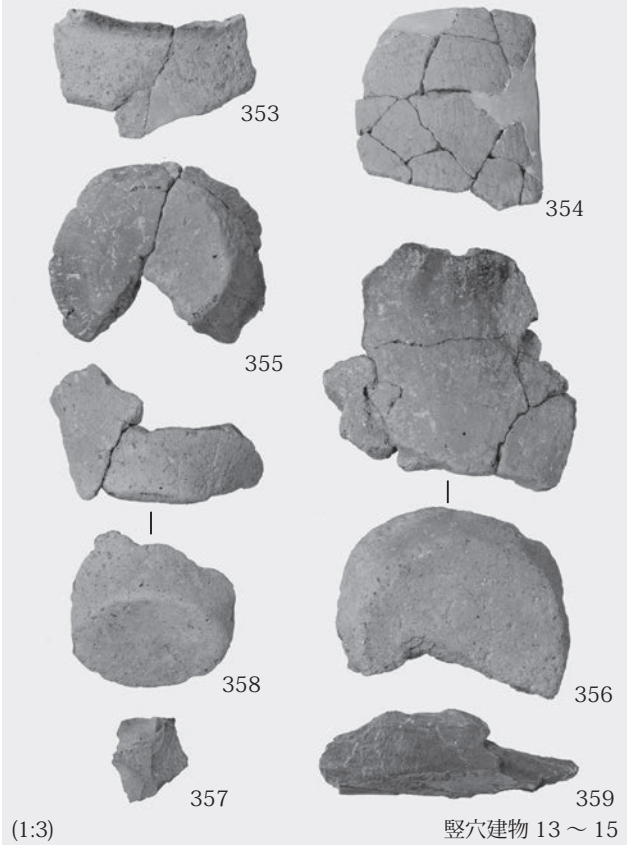
(1:2)　鉄製品

358

360


347　349　348　350　351　352

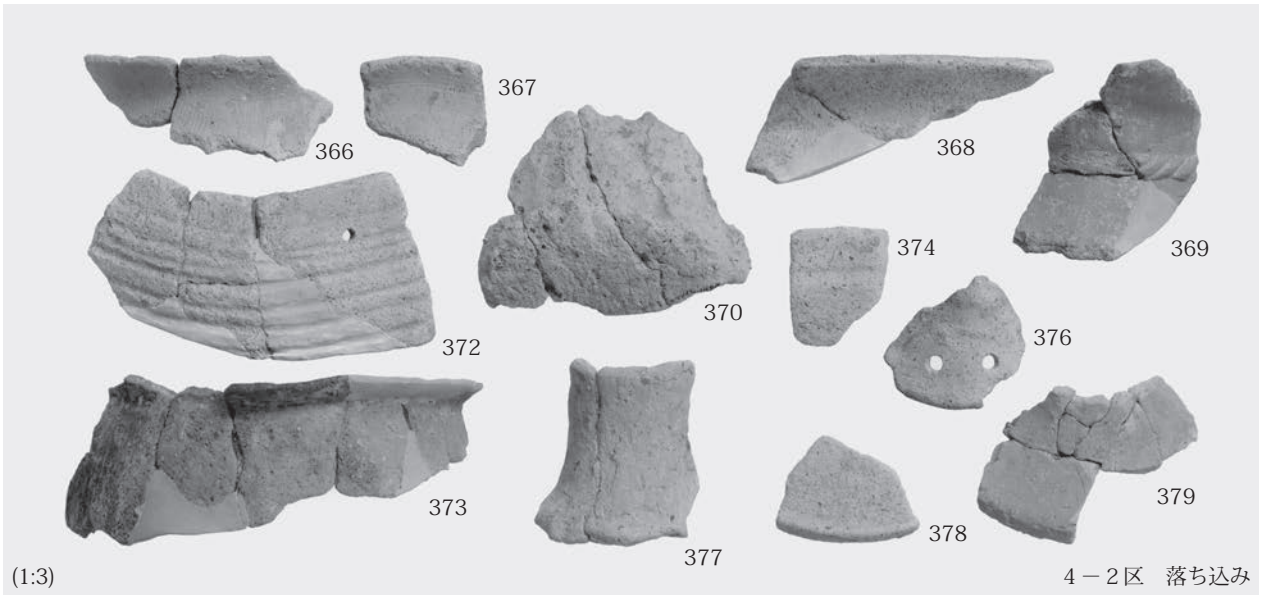
(1:3)　竪穴建物 4 関連


353　354　355　358　356　357　359

(1:3)　竪穴建物 13 ～ 15

363　364　362

(1:4)　474 土坑


366
367
368
369
370
372
374
376
373
377
378
379

(1:3)　4 － 2区　落ち込み

380
381
382
383
384

385
386
387
388
389

390
391
392
393
394

396

397

411

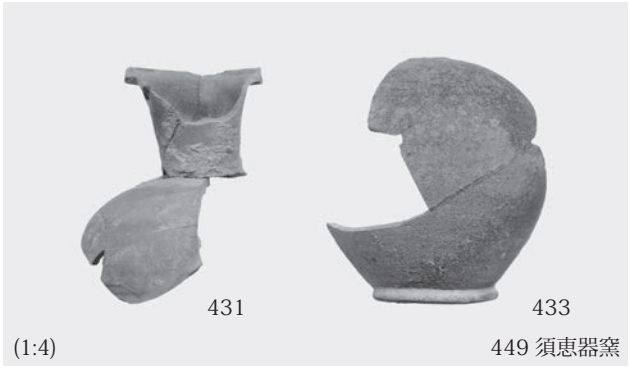
412

413

421

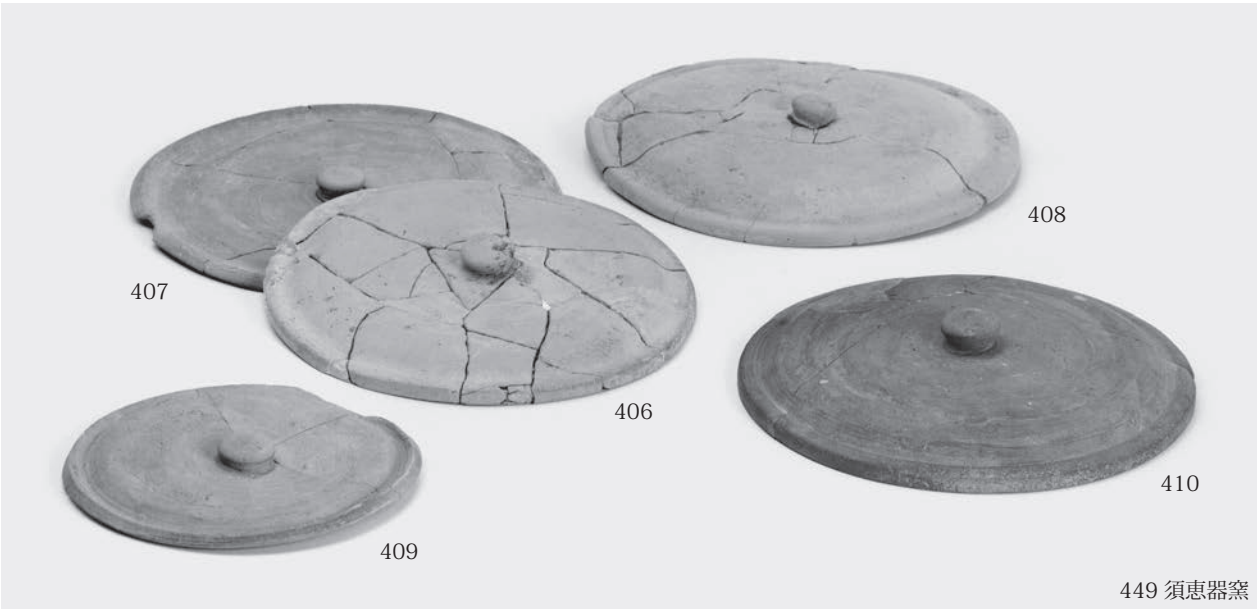
428

429

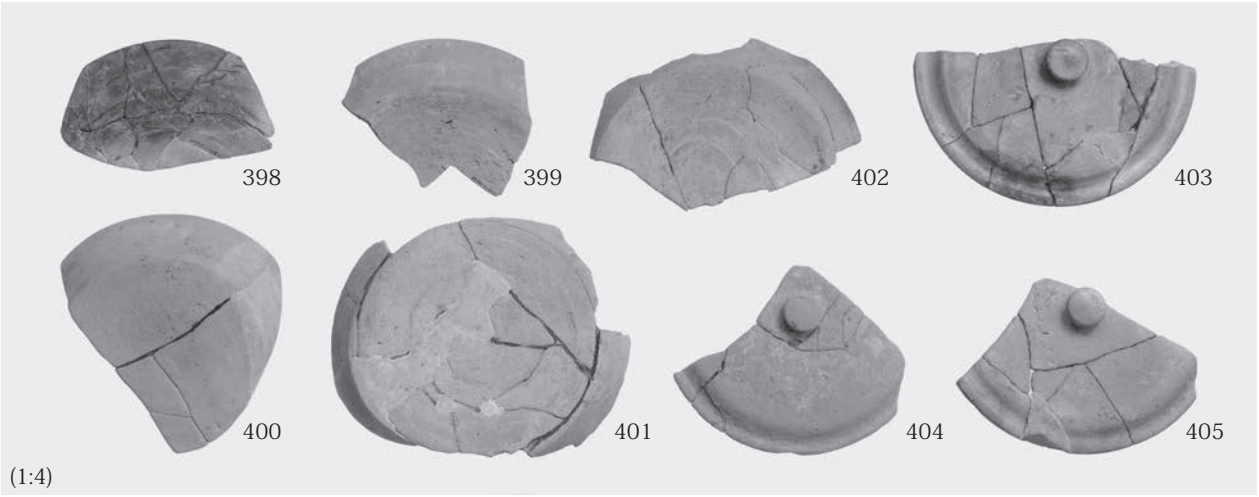

431　433

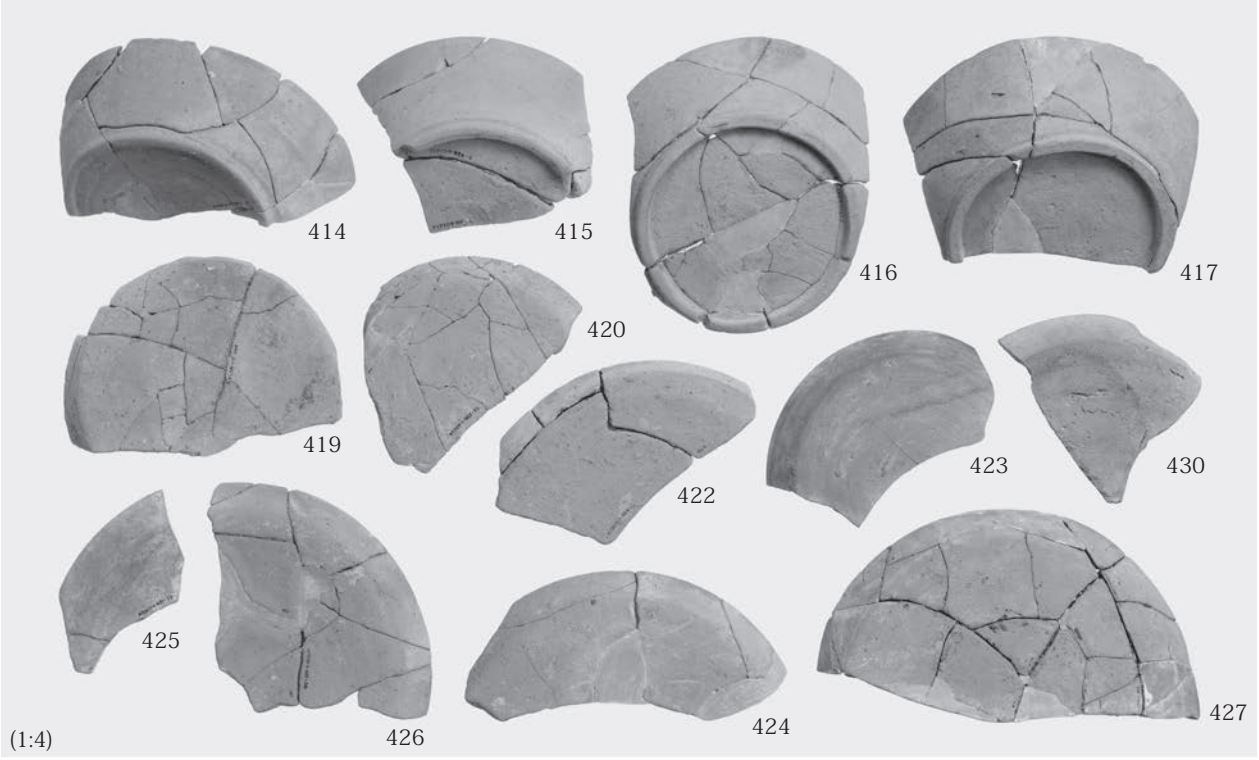
(1:4)　449 須恵器窯

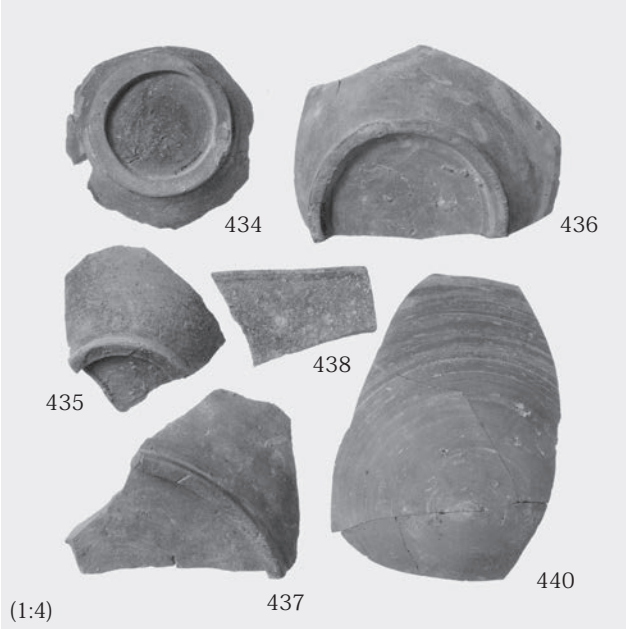
441

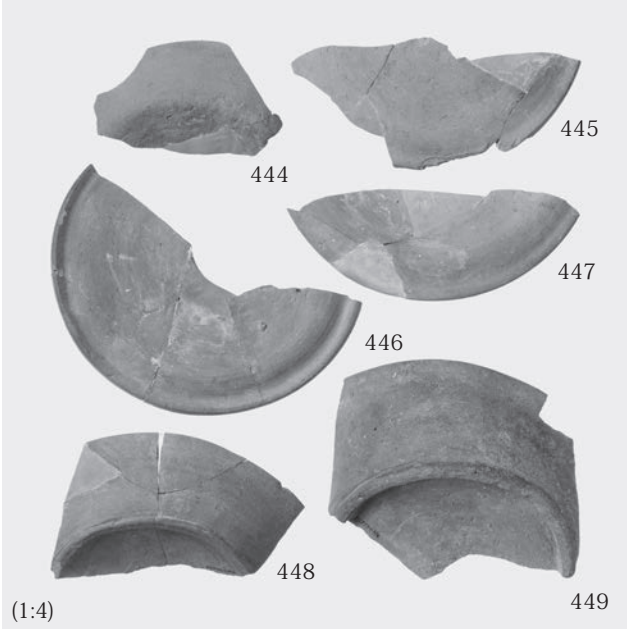

407　406　409　408　410

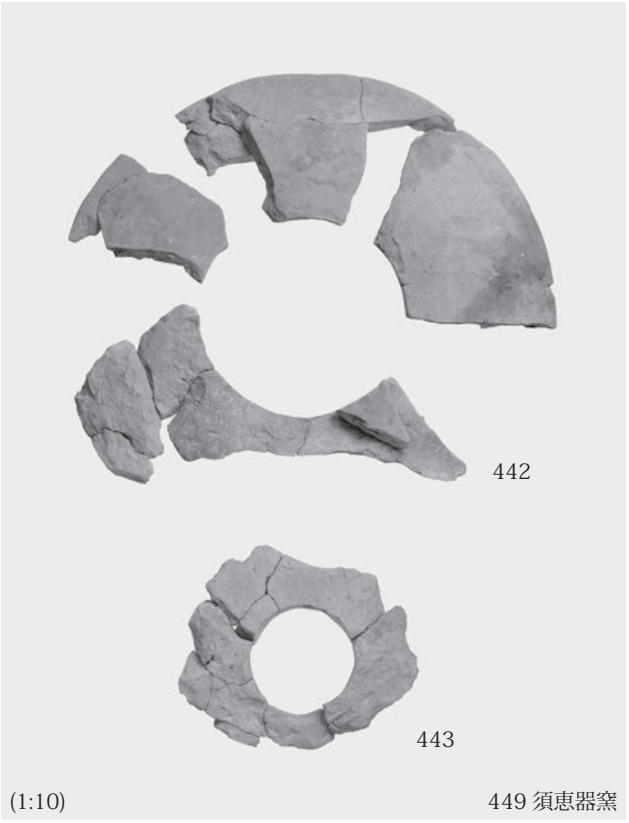
449 須恵器窯


398
399
402
403
400
401
404
405
(1:4)

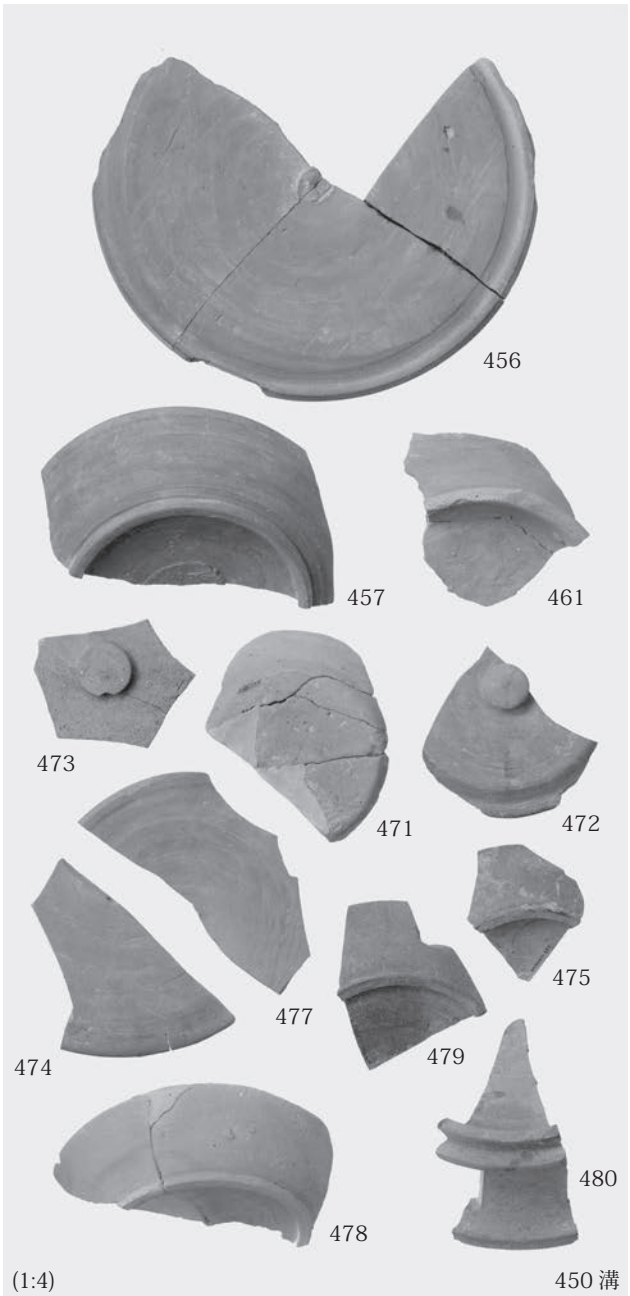

414
415
416
417
419
420
422
423
430
425
426
424
427
(1:4)


434
436
435
438
437
440
(1:4)

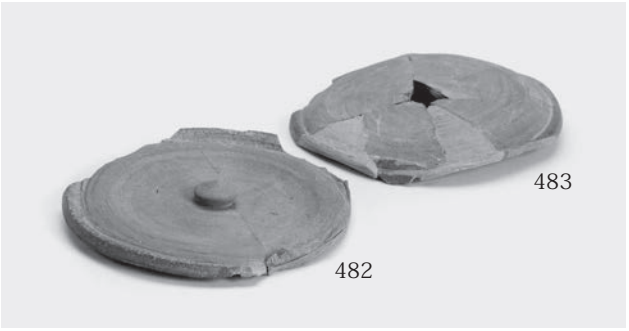

444
445
447
446
448
449
(1:4)



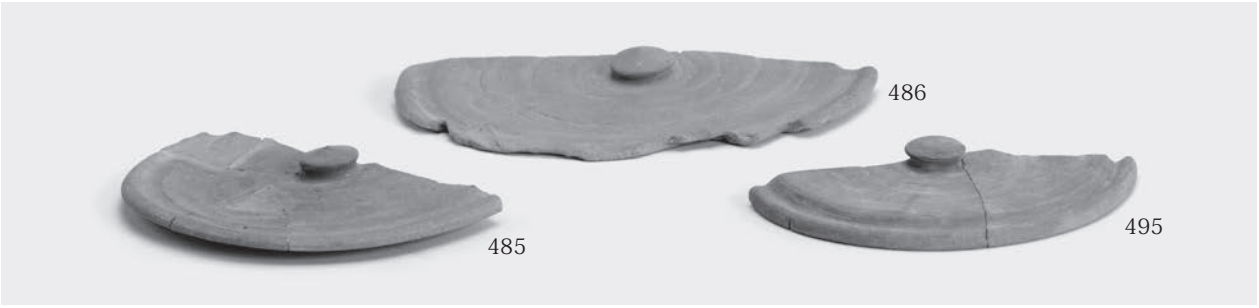
(1:10)　449 須恵器窯



(1:4)　450 溝


483
482

511
493


486
485
495

488
494
501
489
504

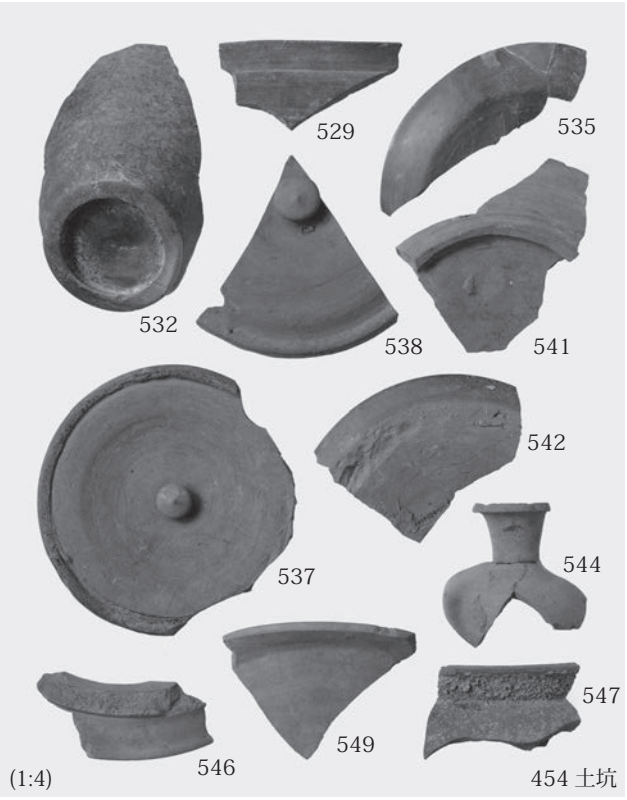
496
508
509
497
506

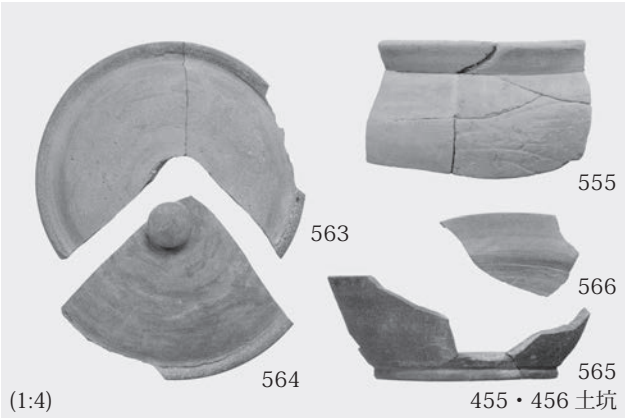
515
521
522
516
517

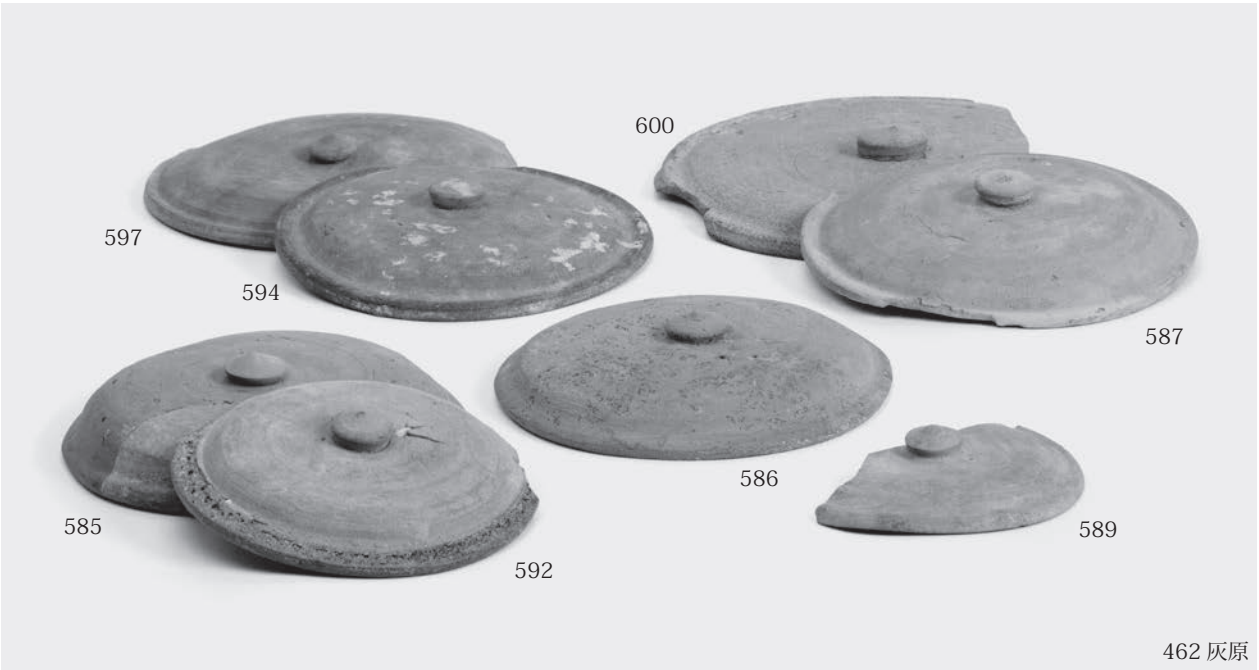
553

554

556
567


529
535
532
538
541
542
537
544
547
546
549
(1:4)
454 土坑


555
563
566
564
565
(1:4)
455・456 土坑


600
597
594
587
586
585
592
589
462 灰原

590

582

583

588

568

569

574

580

595

596

598

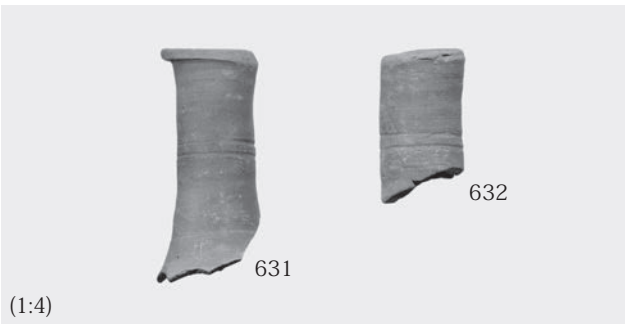
601

629

620

622

626


631

632

(1:4)

604

605

607

609

611

614

615

617 底面に残る爪跡

635

640

634

内面

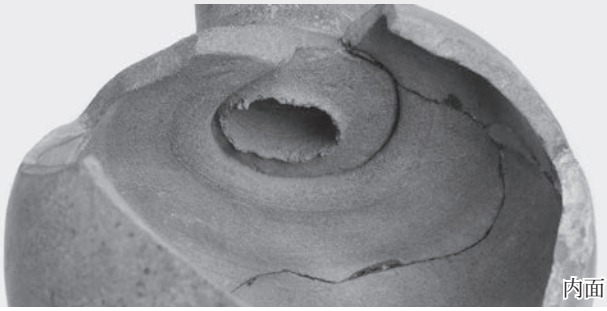
641

643

636

内面

637



内面

633

649

655　657

658　659

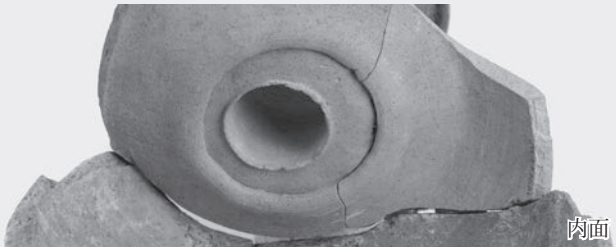
660　665

666　667

656　661

666 底面

670



内面

672

673

674

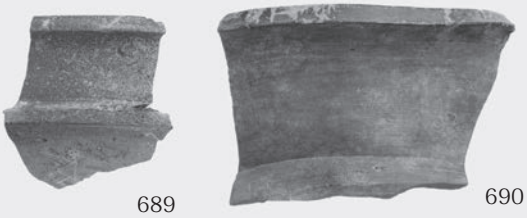
676　678

679

681

682

683



689　690

(1:4)

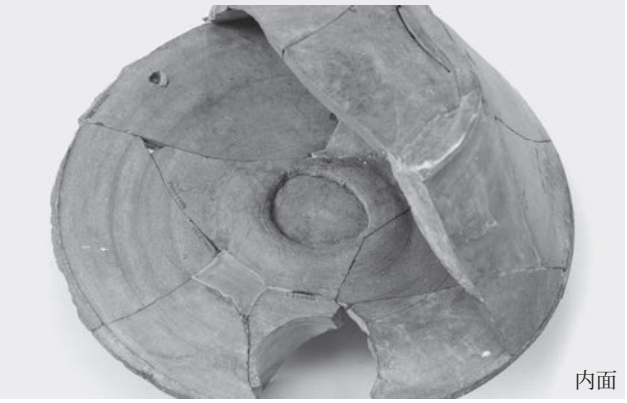
685

688

693

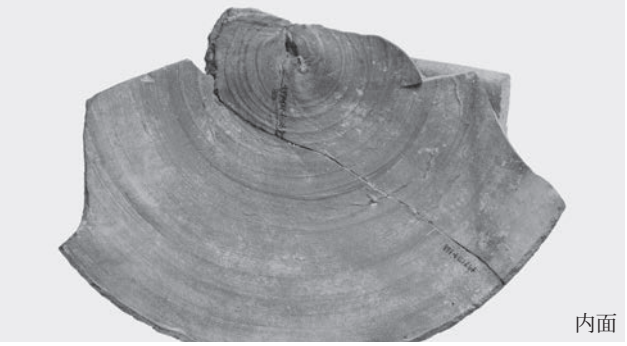
695

694


内面

696

698


内面

699

700

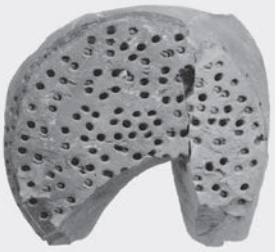
702

(1:4)

703

704

706


707

708

710

(1:5)

709

711

713

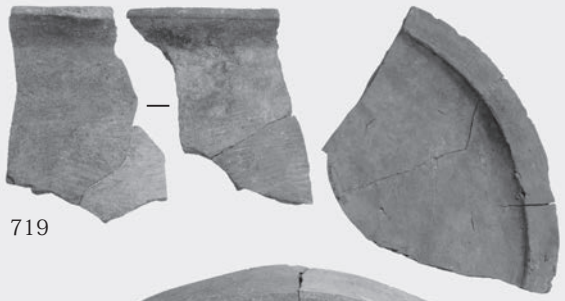
(1:6)　714

715

716

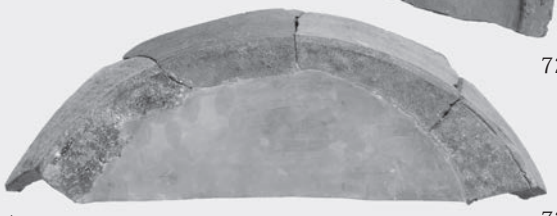
717

718

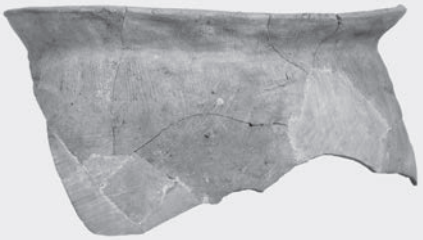


719

723



(1:4)　722



720

724

725

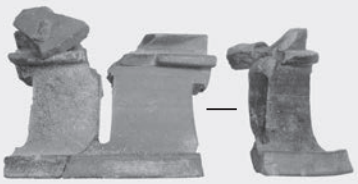
727

731

721

732

734



733

737

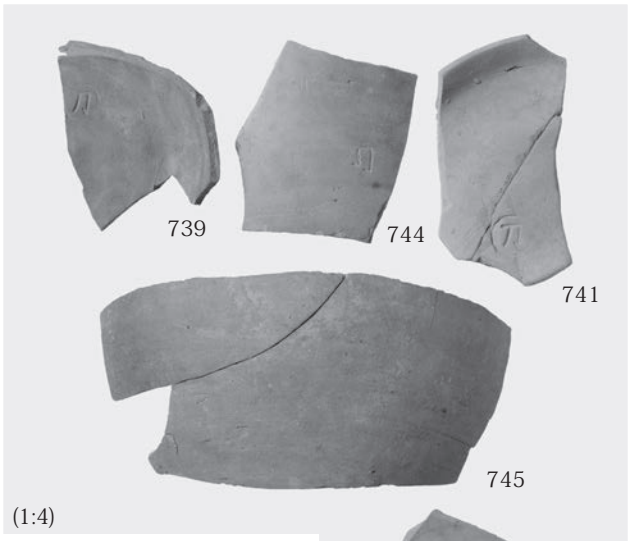
(1:4)

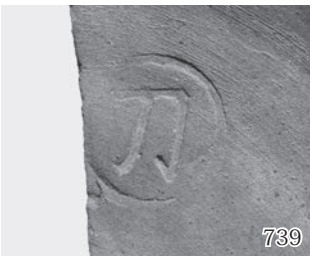
735

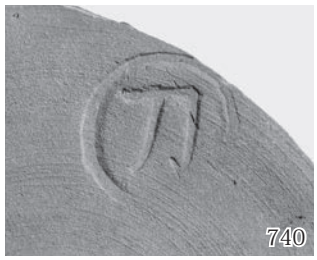
736

738

742

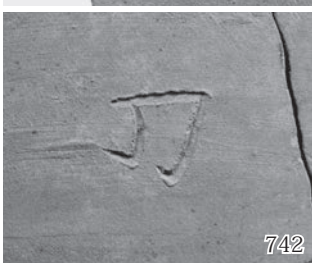

739
744
741
745
(1:4)


739

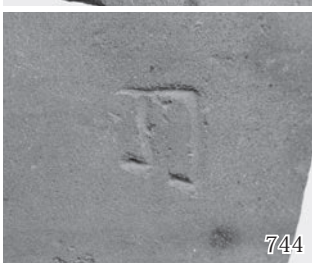

740

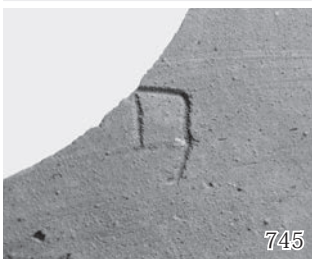
741

740
743
「刀」の文字が刻まれた土器


742

743


744

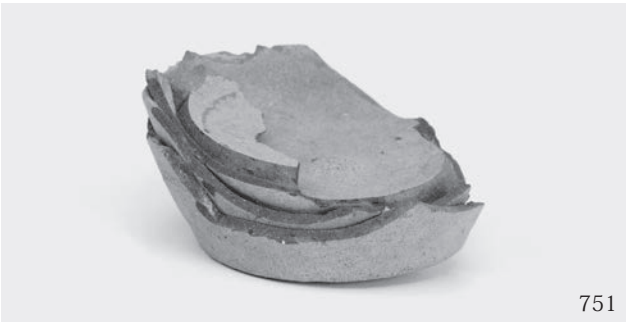

745

「刀」は全て原寸

746

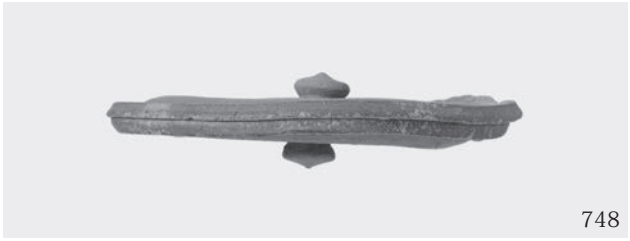
747

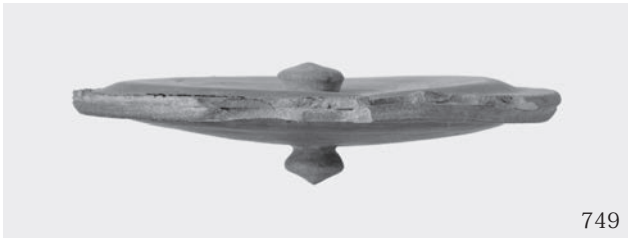
750


751

752

753


748

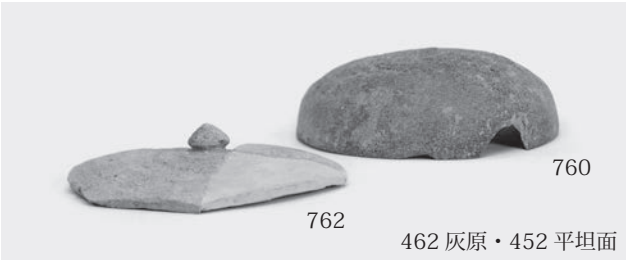

749

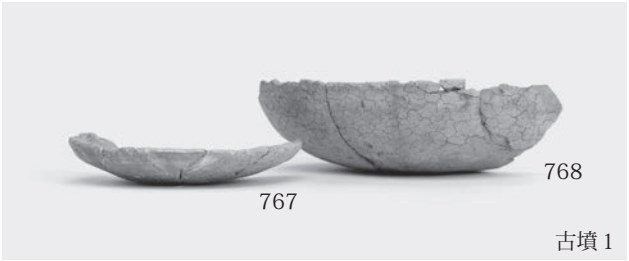
754

755

758

759


760
762
462 灰原・452 平坦面


768
767
古墳 1

769
770
古墳 1

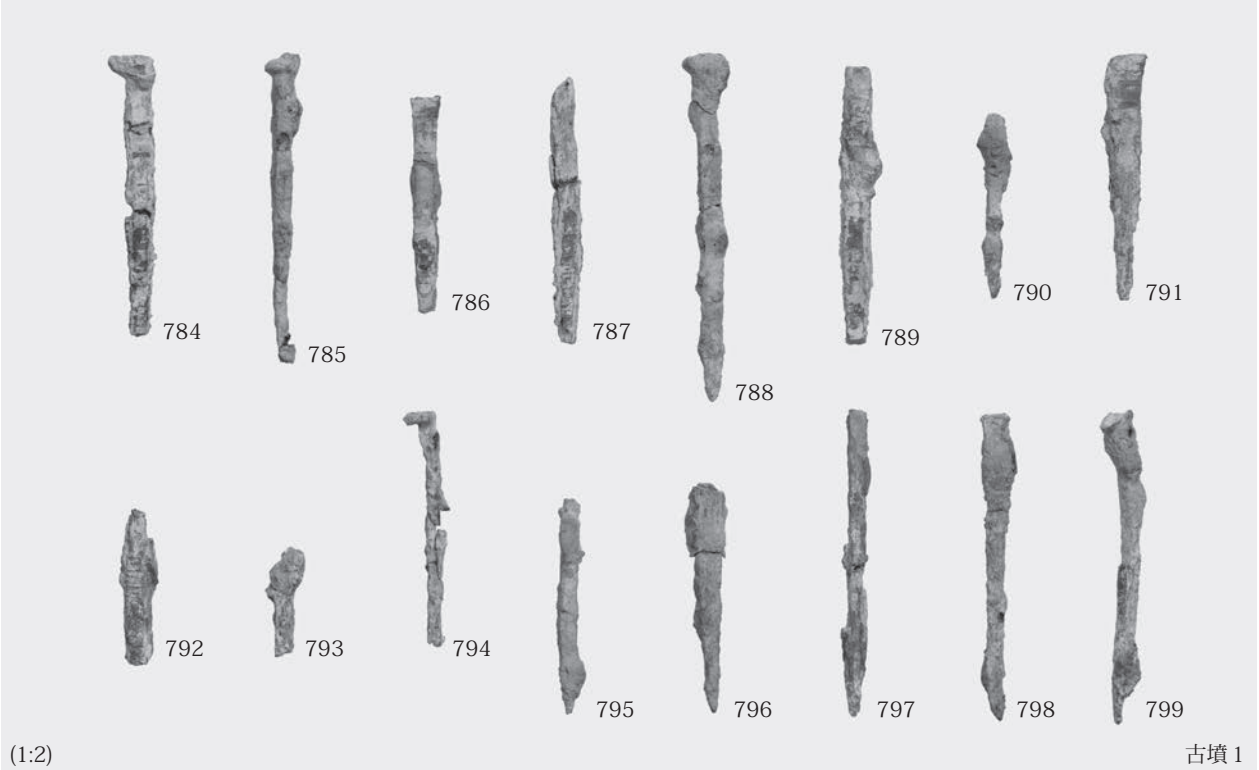
777
776
古墳 1

772
773
古墳 1

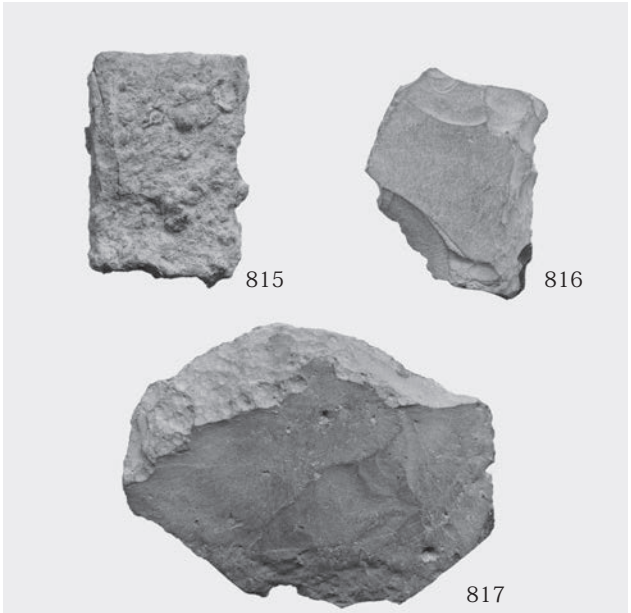
778
779
古墳 1

774
775
古墳 1

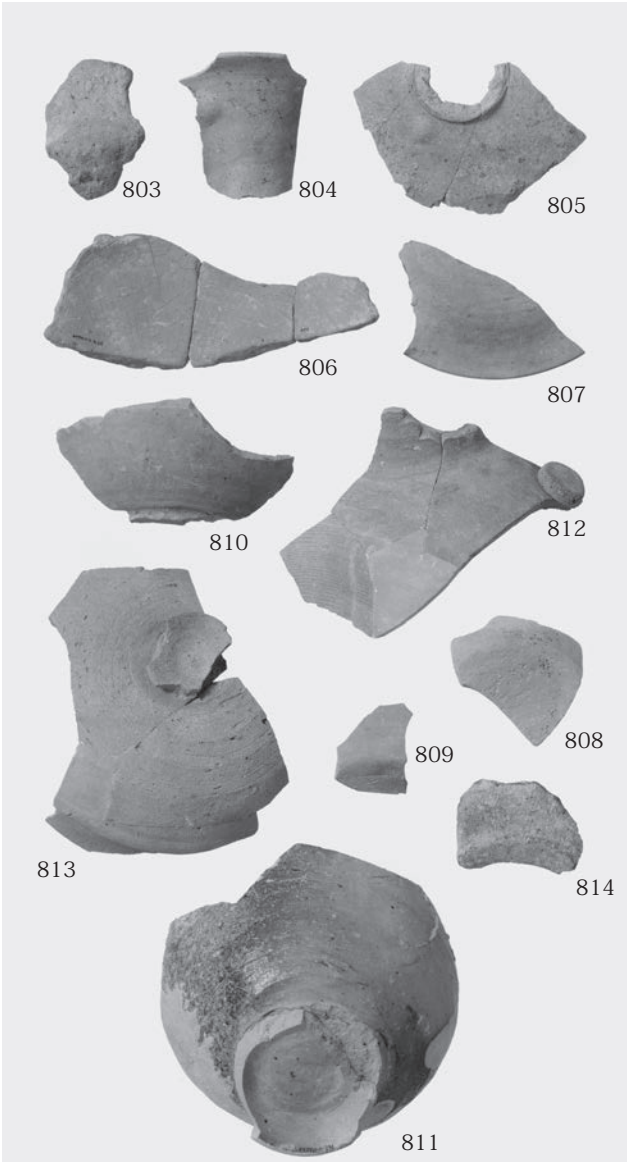
771
780
781
古墳 1


784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
(1:2)
古墳 1

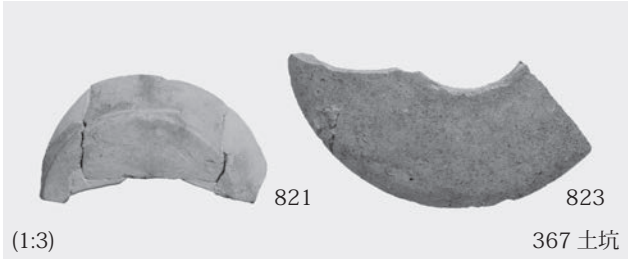
(1:3)　6区　包含層



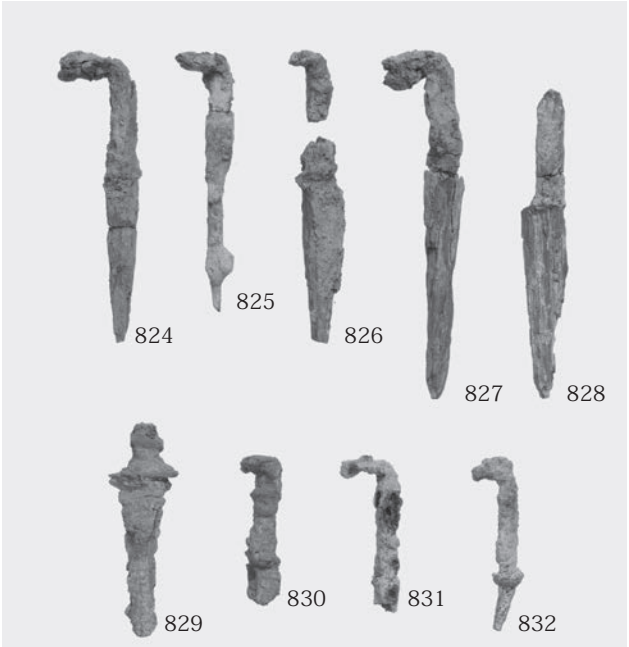
(2:3)　8区　1層



(1:3)　8区　包含層



(1:3)　367 土坑

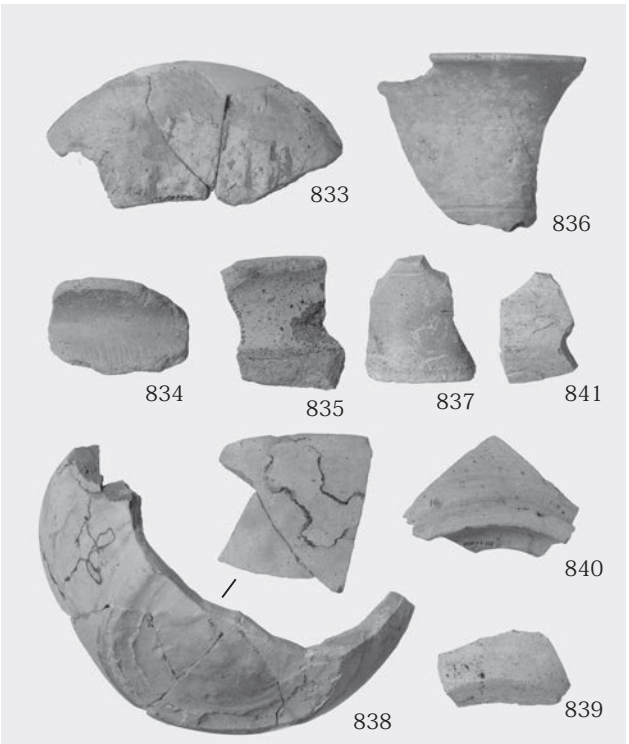


(1:2)　371 土坑

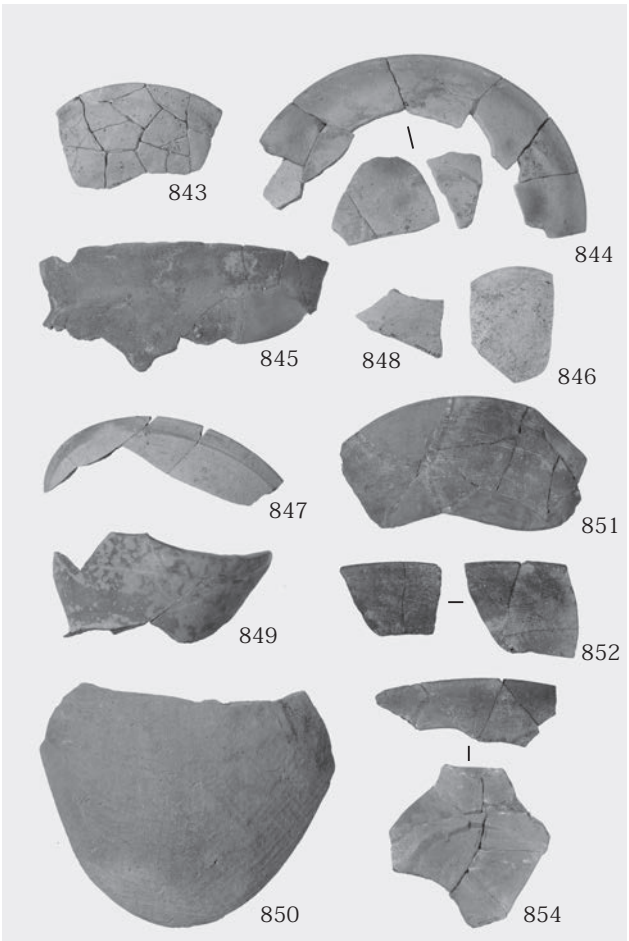
842

853

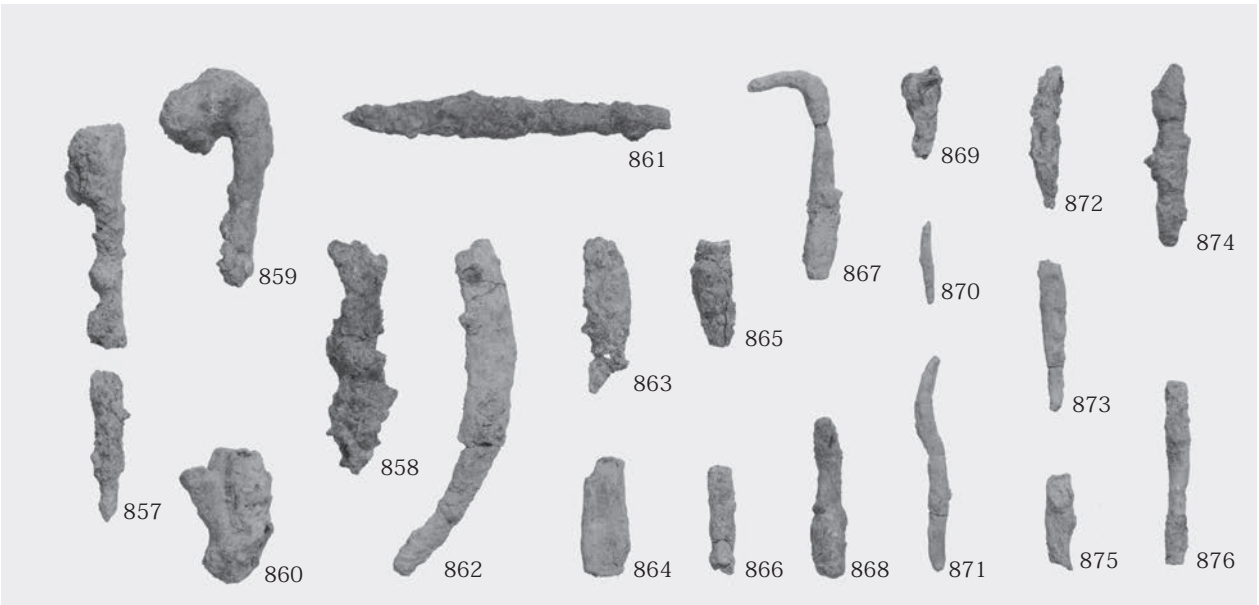
877


833
836
834
835
837
841
840
838
839

(1:3)　包含層


843
844
845
848
846
847
851
849
852
850
854

(1:4)　281 土坑


861
859
869
872
874
867
870
865
863
873
858
857
862
860
864
866
868
871
875
876

(1:2)　281 土坑

(1:3)　第 3 ～ 5 面検出遺構

855

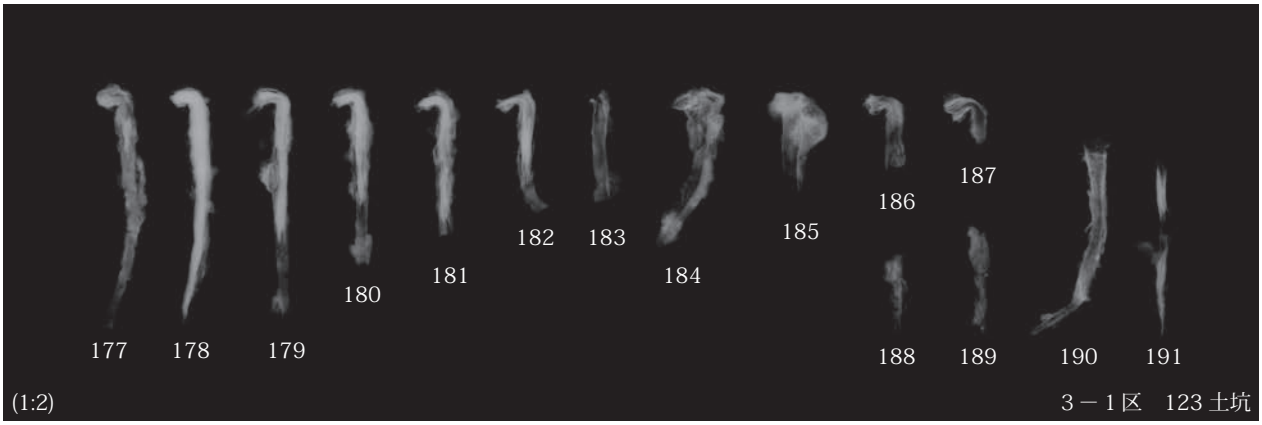
856

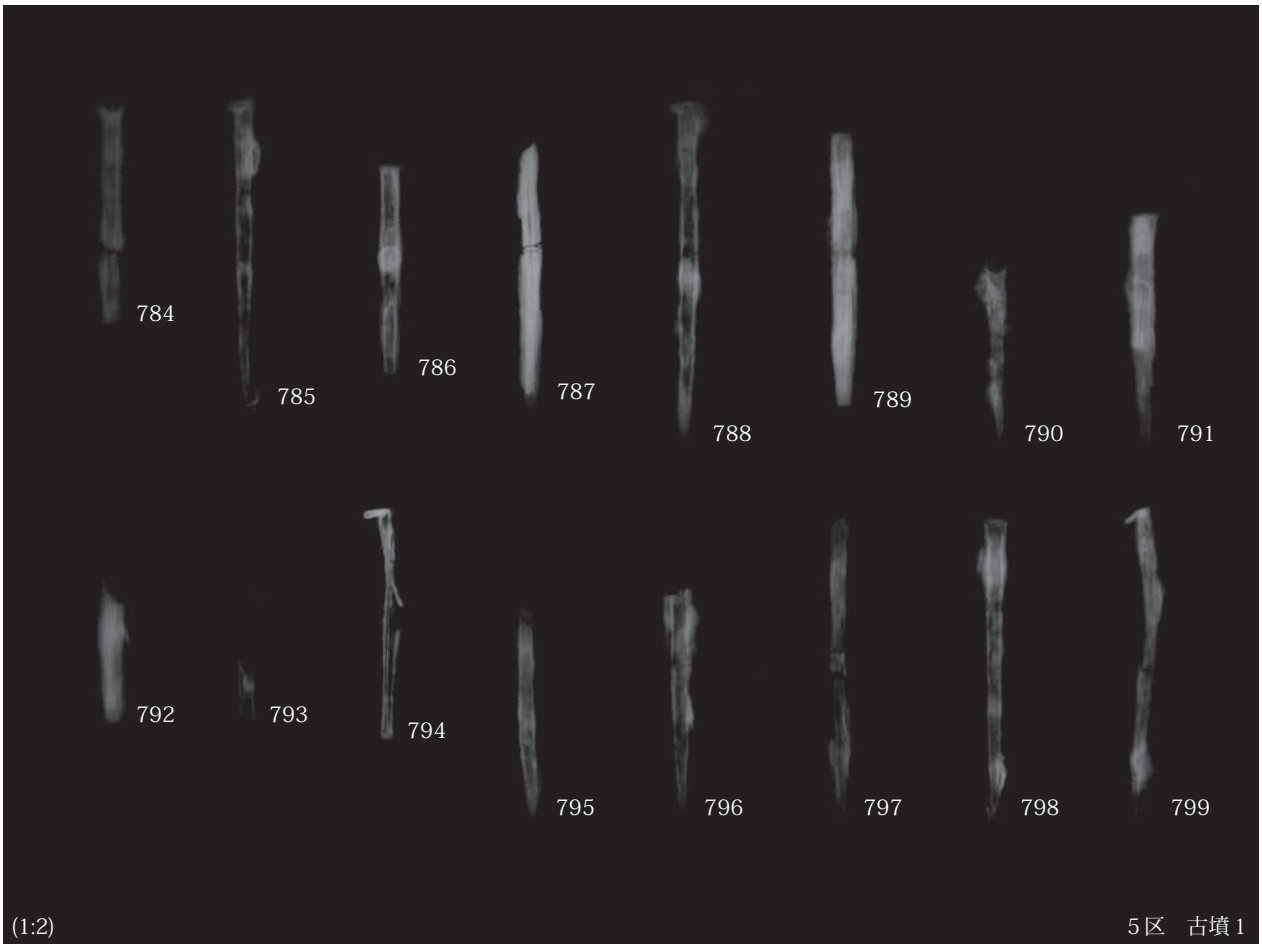
(1:2)　281 土坑

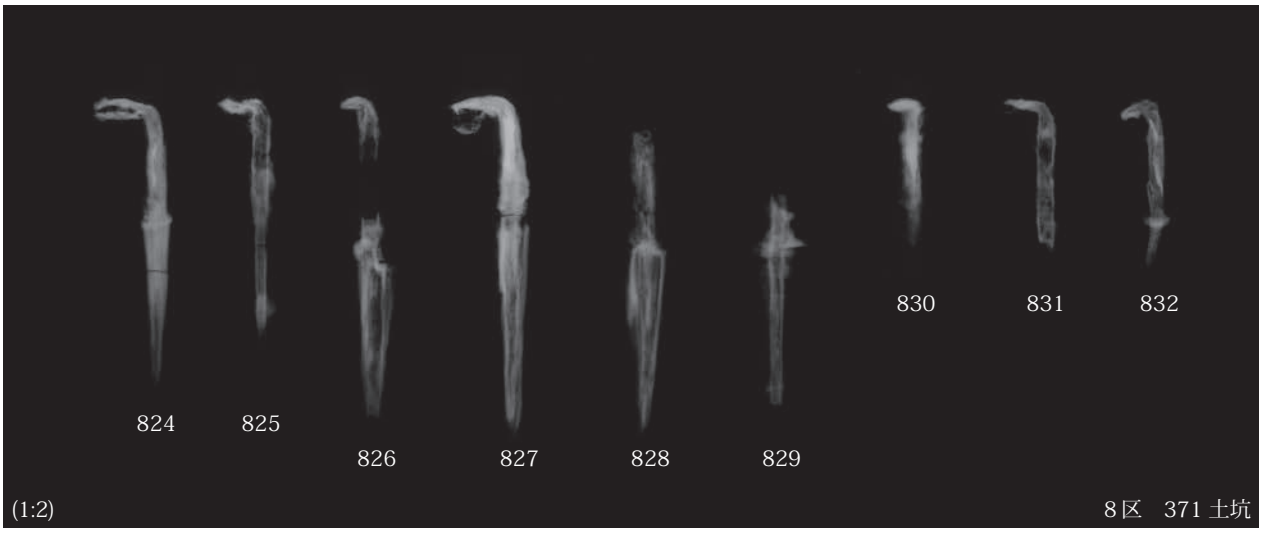
884

879

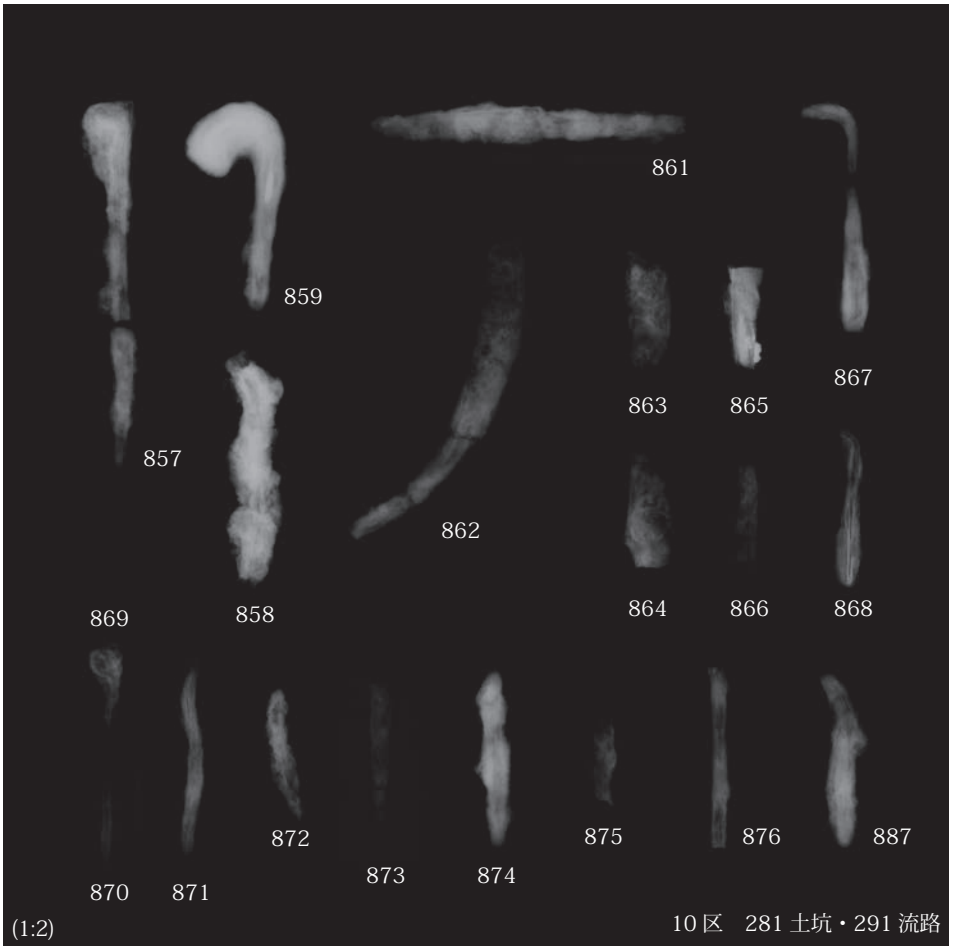
写真図版82　鉄製品X線写真

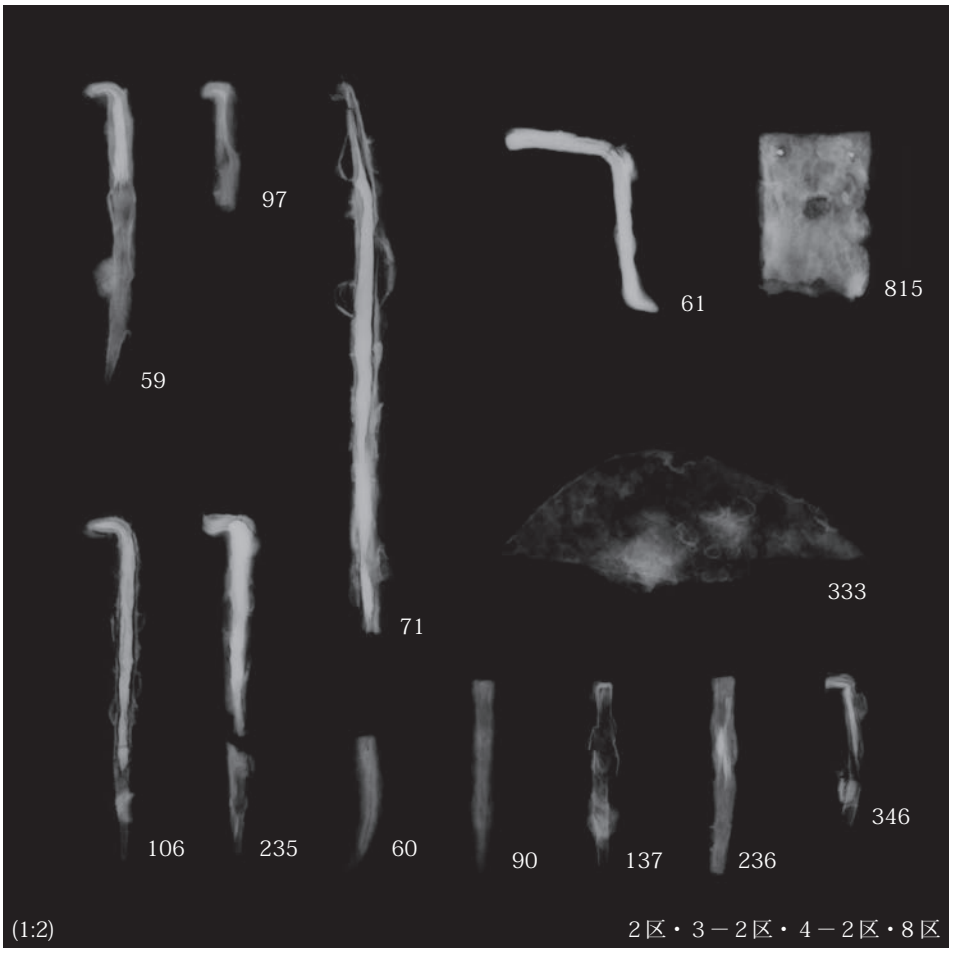




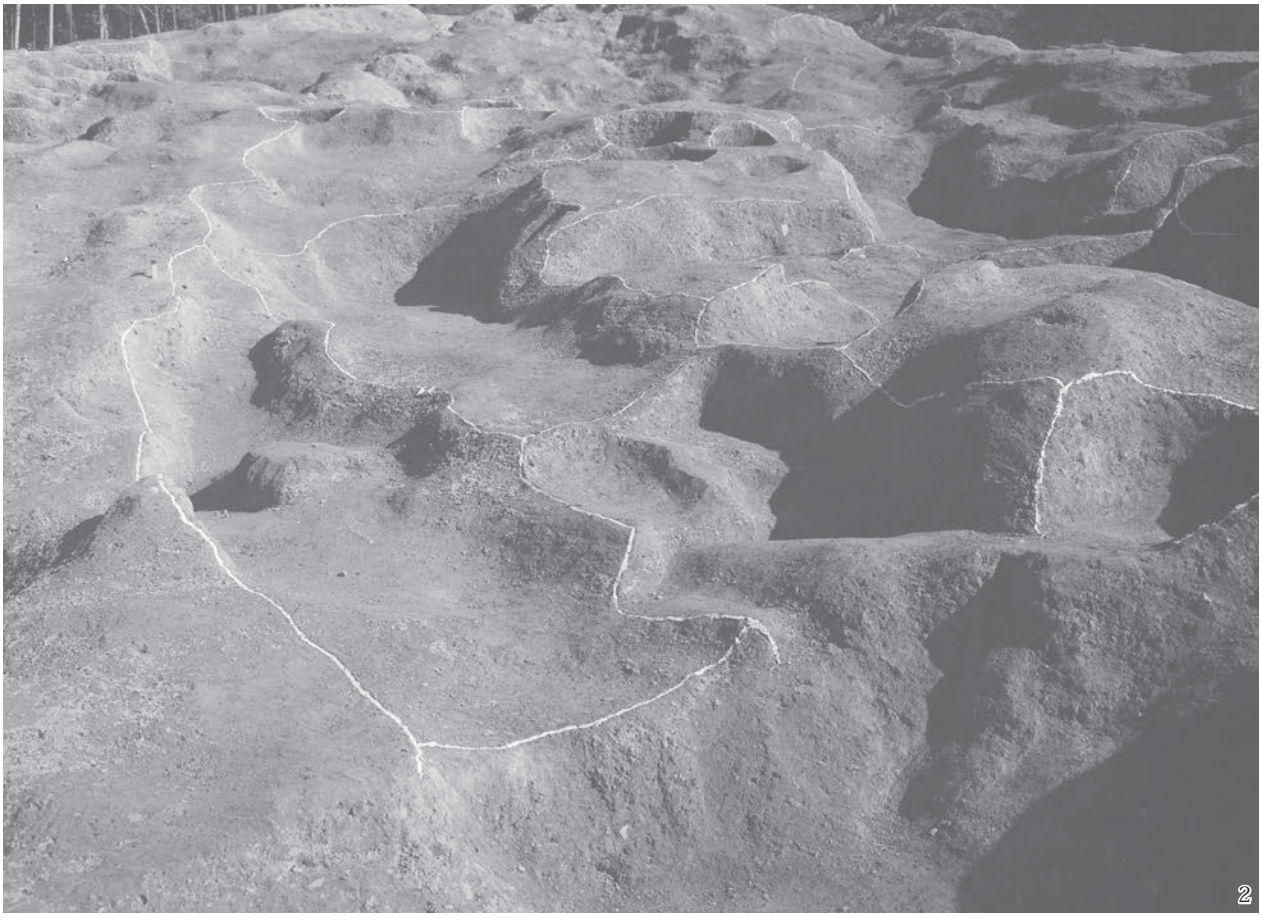


855
856
(1:2)
10 区　281 土坑


861
859
857
863
865
867
862
869
858
864
866
868
870
871
872
873
874
875
876
887
(1:2)
10 区　281 土坑・291 流路


97
59
61
815
71
333
106
235
60
90
137
236
346
(1:2)
2 区・3 － 2 区・4 － 2 区・8 区

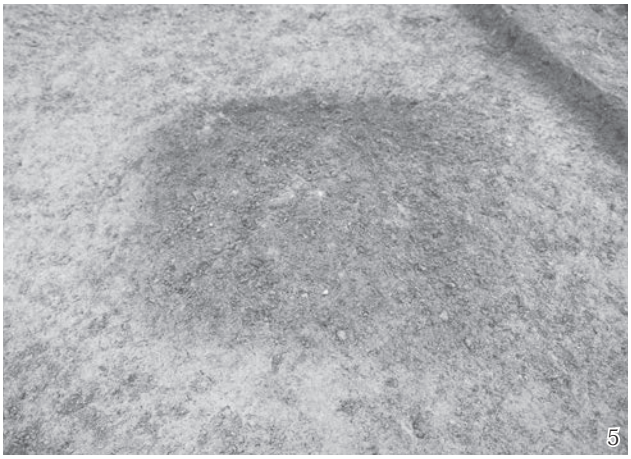
1．1区 全景〔西から〕



2．42 溝周辺遺構

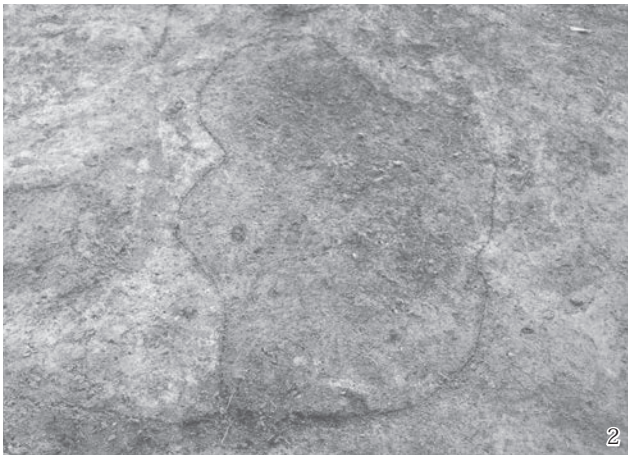
1. 9 土坑
2. 10 土坑 検出状況

3. 11 土坑
4. 13 土坑



5. 20 土坑 検出状況
6. 24 土坑

7. 26 土坑 検出状況
8. 27 土坑 検出状況



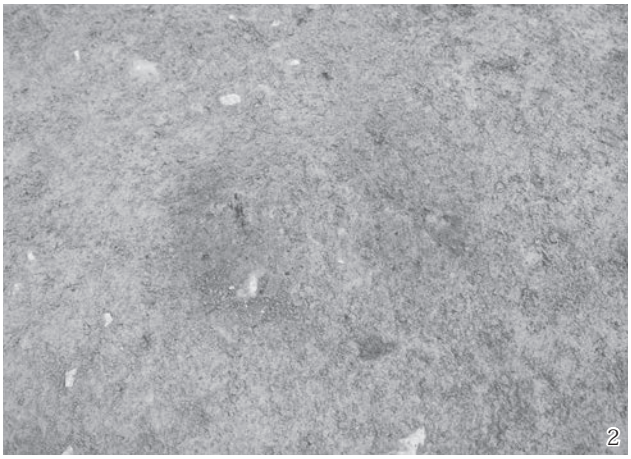
1．31 土坑
2．36 土坑 検出状況
3．12 溝 断面
4．45 溝 断面

5．17・18・19 土坑
6．21・22 谷
7．21 谷上層 土器出土状況
8．22 谷 石斧出土状況

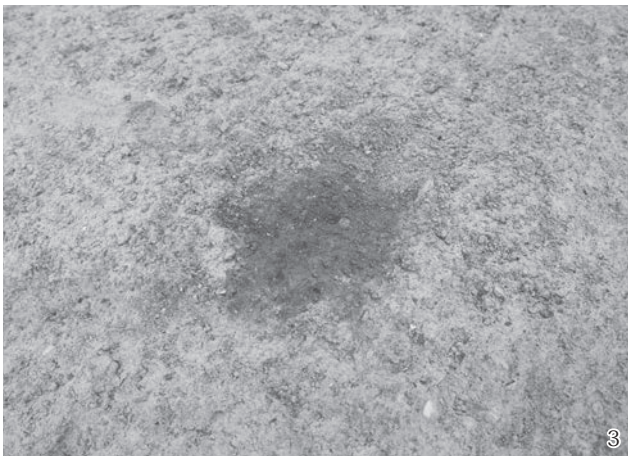
1．1区・2区 全景〔北西から〕

2．2区 全景〔北西から〕

1. 1土坑

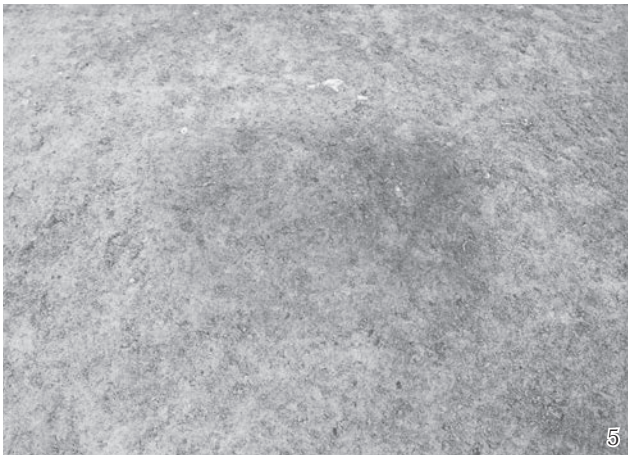


2. 2土坑 検出状況



3. 3ピット 検出状況

4. 4土坑



5. 5土坑 検出状況

6. 6土坑 検出状況

7. 7土坑 検出状況

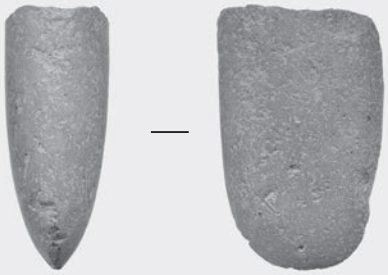
8. 8土坑

891

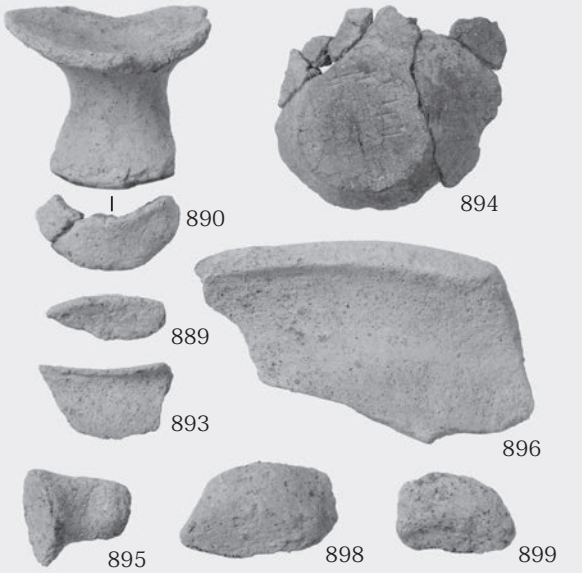
892

897

(1:2)　900



(1:3)　901

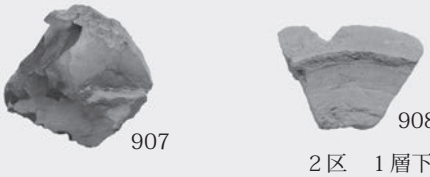


(1:3)　1区　土坑・谷

(2:3)　902

(2:3)　1区　22谷

(1:3)　906



(1:3)　2区　1層下面・土坑

報　告　書　抄　録

ふりがな	なりあいいせき・こんりゅうじきゅうけいだいあと
書名	成合遺跡・金龍寺旧境内跡２
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次数	
シリーズ名	公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 251 集
編著者名	笹栗拓 (編) 、伊藤武 (編) 、金光正裕
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒 590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁 21 番４号　℡ 072 - 299 - 8791
発行年月日	2014 年 10月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	緯度・経度	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
なりあいいせき 成合遺跡	おおさかふたかつきし 大阪府高槻市 なりあい　ちない 成合　地内	27027	23	北緯 34 度 52 分 36秒 東経 135 度 37 分39秒	20110706 ～ 20130111	14,755 ㎡	高速自動車国道 近畿自動車道 名古屋神戸線 建設事業
こんりゅうじきゅういけいだいあと 金龍寺旧境内跡			141			4,753 ㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
成合遺跡	集落 墓 生産	弥生時代 中期後半	竪穴建物 段状遺構 土坑、溝、柱穴	弥生土器 石器（石鏃、台石ほか） 勾玉	竪穴建物 13 棟、段状遺構７基 短期間の集落 ヒスイ製勾玉
		古墳時代 終末期	古墳（横穴式石室）	須恵器・土師器・鉄釘	小型の無袖式石室３基
		奈良時代 ～ 平安時代 前半	掘立柱建物 石列、流路 土坑、溝、柱穴 焼土坑（火葬墓） 須恵器窯	土師器、須恵器 黒色土器、施釉陶器 瓦、鉄製品	掘立柱建物２棟 木炭槨木棺墓ほか、火葬遺構 緑釉陶器唾壺、軒丸瓦、仏具など 地上式窖窯１基 出土遺物に仏具、硯などを含む
金龍寺旧境内跡	集落 墓	弥生時代中期 古代	谷、土坑、溝、 焼土坑（火葬墓）	弥生土器、石器 土師器、須恵器	焼土坑ほか

要　約

成合遺跡における初めての調査である。調査では竪穴建物 13 棟と段状遺構７基を含む弥生時代中期後半の集落跡が良好な形で検出され、弥生土器や石器とともに類例の少ないヒスイ製の半玦状勾玉が出土している。出土遺物の内容や遺構の重複があまりみられないことから、集落の存続期間が短かったことが窺われる。

この他に７世紀中頃の横穴式石室墳を３基、８・９世紀代の掘立柱建物や焼土坑、８世紀末～９世紀初頭頃の須恵器窯１基などが新たに検出され、遺跡の内容が大きく刷新された。特に丘陵上で検出された８・９世紀代の遺構・遺物は、『日本三代実録』に記載された悉檀寺との関連が想定される。また須恵器窯は、地上式構造の窖窯が１基確認され、仏具や硯を含む供膳具以外の遺物も多数出土したことから、製品の供給先として都城や官衙、寺院等などが候補として考えられる。

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 251 集

成合遺跡・金龍寺旧境内跡２

―高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書―

発行年月日／2014年 10月31日発行

編集・発行／公益財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台３丁 21 番４号

印刷・製本／株式会社　明新社
奈良県奈良市南京終町３丁目 464 番地